

芳賀東部団地遺跡

- 縄文時代以降編 -

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2013.1

国 土 交 通 省

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

芳賀東部団地遺跡

- 縄文時代以降編 -

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2013.1

国 土 交 通 省

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 H区全景 西上空から東を望む

上武道路の路線はまっすぐに延び、赤城山南麓の台地上を東西に横切っている。中央に古墳時代の竪穴住居群が分布する。中央下未調査区域は墓地跡、左手は芳賀住宅団地と工業団地。右手は畠と住宅があり、旧地形が残る。



2 C区4住居出土 袋形土器

口縁部は内湾気味に開き、体部の一端に注口部がある。古墳時代前期。



3 H区8住居出土土器一括

須恵器高杯の右側は全体が遺存しない土器で、左側は略完形の土器。古墳時代後期。

序

上武道路は埼玉県と群馬県を結ぶ高規格道路として計画され、これに伴う発掘調査が群馬県内では昭和49年に開始されました。南から順に部分区間が開通し、現在は国道17号に合流するまでの最終区間の調査が急ピッチで進められています。

当事業団では、前橋市教育委員会の調査した隣接地を含めた芳賀東部団地遺跡の一部である上武道路用地にかかる区域の発掘調査を、平成19年度から20年度にかけて実施しました。

上武道路用地内の本遺跡では、旧石器時代から中近世に至る遺構・遺物を発見し、旧石器時代については、すでに当事業団発掘調査報告書第535集として刊行しました。

本書は縄文時代以降の遺構・遺物を掲載したものです。縄文時代では、前期の竪穴住居や袋状土坑を調査し、赤城山南麓における縄文集落の分布で新たな資料を加えました。古墳時代前期とみられる住居跡からは、袋形土器と呼ばれる全国的にも珍しい特殊な土器が出土しました。また古墳時代後期の住居では、斜路を出入口とする希少例があり、平安時代の住居から出土した鉄滓は、近隣の遺跡で発見された製鉄関連遺構との関連性で注目されることになりました。

赤城山南麓に展開された原始・古代史を明らかにする上で、芳賀東部団地遺跡の発掘成果がかなり大きな貢献をするであろうことは間違いありません。この度、めでたく本報告書を上梓するにあたって、発掘調査の着手以来、幾多の御指導・御協力を賜った地元の皆様、国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会の関係各位に厚く感謝申し上げるとともに、本書が活用されることを願って序とします。

平成25年1月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 榮 一

例 言

- 1 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による、芳賀東部団地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に掲載した芳賀東部団地(はがとうぶだんち)遺跡は、群馬県前橋市の次の番地に所在する。
五代町643-3、649-1、673-7、674-1、675-1、681-2・6・7番地
鳥取町711-2、717-1・5、719-1・3、720-1・2、721-1・2、722、723-1・2、735、736-1、737-1、740、741-3、840-1・4、883-1、884-1、885-1・2、886-1・2、871-1・3、872-1番地4
調査対象面積は28,946.43㎡で、遺跡略称は「JK56」である。
当事業団『年報27-平成19年度事業概要-』及び『年報28-平成20年度事業概要-』に掲載された「芳賀東部工業団地遺跡群」は、名称変更されて本書の「芳賀東部団地遺跡」となった。
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)
- 5 調査期間 平成19年度 調査期間 平成19年5月22日から平成20年3月31日
履行期間 平成19年4月1日から平成20年3月31日
平成20年度 調査期間 平成20年4月1日から平成20年8月31日(鳥取松合下遺跡と並行)
履行期間 平成20年4月1日から平成21年3月31日
- 6 調査体制は次のとおりである。
平成19年度 調査担当 新井 仁(主任調査研究員) 菊池 実(主席専門員) 関 晴彦(上席専門員)
遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社
委託 地上測量 アコン測量設計株式会社、航空写真撮影 技研測量設計株式会社
平成20年度 調査担当 並木勝洋(主任調査研究員) 関 晴彦(上席専門員)
遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社
委託 地上測量、航空写真撮影 技研測量設計株式会社
- 7 整理事業の体制・期間は次のとおりである。
平成22年度 整理期間 平成22年10月1日から平成23年3月31日
整理担当 関 晴彦(上席専門員)
平成24年度 整理期間 平成24年4月1日から平成24年9月30日
整理担当 関 晴彦(上席専門員)
- 8 本書作成の担当は次のとおりである。
編集 関 晴彦(上席専門員) デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
執筆 第4章縄文時代遺物観察表 縄文土器 橋本 淳(主任調査研究員) 石器・石製品 岩崎泰一(上席専門員)
第4章古墳時代以降遺物観察表 神谷佳明(上席専門員資料2課長) 桜岡正信(整理統括)
金属製品 大西雅広(上席専門員) 鉄滓 笹澤泰史(主任調査研究員)
遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐(総括)) 保存処理・樹種同定 関 邦一(補佐(総括)) ほかは関 晴彦
- 9 石器・石製品の石材同定は、飯島静男氏(群馬地質研究会会員)にお願いした。成果は遺物観察表に掲載した。
- 10 テフラの分析は火山灰考古学研究所 早田 勉氏に依頼し、第5章に成果を掲載した。
- 11 人骨の鑑定は生物考古学研究所 檜崎修一郎氏に依頼し、第5章に成果を掲載した。
- 12 出土遺物及び発掘調査に係わる資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 13 発掘調査並びに整理作業にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。
(敬称略) 国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会 前原豊

凡 例

- 1 グリッドの設定、座標値の表記は国家座標第XI系(世界測地系)を用いた。図中の数値はX座標-Y座標の値を示し、一部では下3桁で表記したものがあある。
- 2 遺構断面図、等高線図に表記した数値は標高を示し、単位はmである。方位は座標北である。真北方向角はD区南西隅地点で+0度25分47秒である。
- 3 挿図の縮尺及び掲載内容は以下のとおりである。

遺構 1/80、1/40を基本とし、挿図中に縮尺を示した。土層断面図の太線は、生活面(使用面)を表している。

遺物 分布図の番号は掲載遺物を表し、遺物観察表・写真図版とも一致する。

接合関係は線で示した。

遺物の選択は遺構の時期を特定できるものを優先した。掲載は1/4を基本とし、小型品は1/2または1/1、大型品は1/8を基本とした。挿図中に基本の1/4以外は縮尺を表記した。

石器に用いた縦位定規線は摩耗範囲を、斜位定規線は線条痕の方向を示す。礫石器は必要に応じ拓本を用いた。縄文土器の断面にある●は繊維の含有を表す。

古墳～平安時代遺物の年代観は、当事業団 大木紳一郎・坂口 一・桜岡正信の協力を得た。

念仏銭等に関して、当事業団 唐澤至朗・新倉明彦の助言を得た。

- 4 遺構図・遺物図とも4章末に一括掲載した。遺物観察表は図の直前に掲載し、遺構番号を優先して掲載している。
- 5 本書で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』(平成9年版)に準拠した。
- 6 本書で使用した地図は、下記のものを使用した。

第1図 上武道路と遺跡の位置 国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用。

第2図 上武道路8工区の遺跡 国土地理院1/50,000地形図「前橋」平成10年発行を使用。

第4図 旧地形図上の遺跡 明治18年「迅速図」に芳賀東部(上武道路)を加筆(網点は谷地形)。

第8図 近傍の遺跡分布図 国土地理院1/25,000地形図「前橋」平成22年発行、「渋川」平成14年発行、「鼻毛石」平成14年発行、「大胡」平成22年発行を使用。

第9図 調査区の設定 国土交通省1/500丈量図 平成19年に加筆。

第10図 芳賀東部団地遺跡調査区位置図(1) 前橋市1/2500現形図 昭和43年を使用。

第11図 芳賀東部団地遺跡調査区位置図(2) 前橋市1/2500現形図 平成21年を使用。

第12図 上武道路調査測量グリッド設定図 国土地理院1/25,000地形図「前橋」「大胡」平成22年発行、「渋川」平成14年発行、「鼻毛石」昭和56年発行を使用。

- 7 テフラの呼称として、次の略語を使用する。

榛名FA 略称 Hr-FA 6世紀初頭

榛名FP 略称 Hr-FP 6世紀中葉

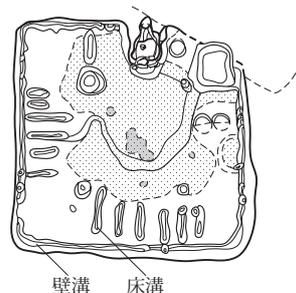
浅間A軽石 略称 As-A 1783年(天明3年)

浅間B軽石 略称 As-B 1108年(天仁元年)

浅間C軽石 略称 As-C 4世紀初頭

- 8 遺構の部分名称は、右図のように表した。

- 9 住居の計測値等については、「住居一覧表」に掲載した。



I区5住居の床面図に加筆した

目次

序・例言・凡例

第1章 調査に至る経過	1	第5章 自然科学分析	343
第1節 上武道路について	1	第1節 分析の目的	343
第2節 上武道路と埋蔵文化財	3	第2節 テフラ分析	346
第3節 調査に至る経過	4	第3節 芳賀東部団地遺跡出土人骨	354
第2章 立地と環境	5	第4節 芳賀東部団地遺跡出土炭化物について	365
第1節 地理的環境	5	第5節 鉄滓について	367
第2節 歴史的環境	9	第6章 成果とまとめ	369
第3章 調査の方法と経過	13	第1節 科学分析の成果	369
第1節 調査の方法	13	第2節 遺物の特徴	370
第2節 基本土層	17	1 縄文土器	370
第3節 調査の経過	17	2 袋形土器	373
第4章 検出された遺構と遺物	21	3 滑石のチップ	374
第1節 概要	21	4 丸軋と鉤尾	375
第2節 A区	25	5 墓の副葬品	376
第3節 B区	26	第3節 地形・遺構の特徴	380
第4節 C区	27	1 A区の旧地形復元	380
第5節 D区	36	2 出入口施設	380
第6節 E区	37	3 鉄滓と製鉄関連遺構	383
第7節 F区	40	写真図版	
第8節 G区	46	報告書抄録	
第9節 H区	55		
第10節 I区	66	付図 芳賀東部団地遺跡 全体図 1：400	
第11節 遺構外出土の遺物	75		
住居一覧表	77		
遺物観察表	79		
遺構図	117		
遺物図	276		

挿 図 目 次

第1図	上武道路と遺跡の位置	1	第64図	E区6住居(1)	167
第2図	上武道路8工区の遺跡	2	第65図	E区6住居(2)	168
第3図	芳賀東部団地遺跡周辺の地質	5	第66図	E区1掘立柱建物	169
第4図	旧地形図上の遺跡	6	第67図	E区東部土坑・ピット位置図、土坑断面図	170
第5図	昭和21年(1946年)米軍による空中写真	7	第68図	E区中央部土坑・ピット位置図、土坑断面図	171
第6図	芳賀東部団地遺跡(上武道路)の位置と小河川	8	第69図	E区ピット断面図	172
第7図	芳賀東部団地遺跡の谷筋 前橋市教育委員会『芳賀東部団地遺跡』第2巻の図(318頁)に加筆	8	第70図	F区民家跡地トレンチ	173
第8図	近傍の遺跡分布図	10	第71図	F区全体図、1住居	174
第9図	調査区の設定	13	第72図	F区2住居(1)	175
第10図	芳賀東部団地遺跡調査区位置図(1)	14	第73図	F区2住居(2)	176
第11図	芳賀東部団地遺跡調査区位置図(2)	15	第74図	F区3住居	177
第12図	上武道路調査測量グリッド設定図	16	第75図	F区4・7住居	178
第13図	基本土層図 C区南北ベルト、I区3堅穴土層1/40	17	第76図	F区5住居	179
第14図	A区全体図、A区1・2号トレンチ	117	第77図	F区6住居(1)	180
第15図	A区旧地形の推定復元	118	第78図	F区6住居(2)	181
第16図	A区1住居	119	第79図	F区8住居(1)	182
第17図	B区全体図、1炉	120	第80図	F区8住居(2)	183
第18図	B区北壁土層断面	121	第81図	F区8住居(3)	184
第19図	B区1・2溝	122	第82図	F区1掘立柱建物	185
第20図	B区土坑・ピット(1)	123	第83図	F区2掘立柱建物	186
第21図	B区土坑・ピット(2)	124	第84図	F区東半部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図	187
第22図	B区土坑・ピット(3)	125	第85図	F区西半部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図	188
第23図	B区土坑・ピット(4)	126	第86図	F区ピット断面図	189
第24図	B区1～42ピット断面図	127	第87図	G区全体図、1住居(1)	190
第25図	B区43～83ピット断面図	128	第88図	G区1住居(2)	191
第26図	B区84～125ピット断面図	129	第89図	G区2住居	192
第27図	B区126～164ピット断面図	130	第90図	G区3住居	193
第28図	B区165～214ピット断面図	131	第91図	G区4・5住居	194
第29図	C区全体図	132	第92図	G区6住居	195
第30図	C区1住居(1)	133	第93図	G区7住居	196
第31図	C区1住居(2)	134	第94図	G区8住居	197
第32図	C区2住居・3住居外ピット土層	135	第95図	G区9・10住居	198
第33図	C区3住居	136	第96図	G区11住居	199
第34図	C区4住居	137	第97図	G区12住居	200
第35図	C区5・7住居	138	第98図	G区13住居	201
第36図	C区6住居(1)	139	第99図	G区14住居	202
第37図	C区6住居(2)	140	第100図	G区15住居	203
第38図	C区1掘立柱建物	141	第101図	G区1掘立柱建物	204
第39図	C区2掘立柱建物	142	第102図	G区2掘立柱建物	205
第40図	C区3・5掘立柱建物	143	第103図	G区3掘立柱建物	206
第41図	C区4掘立柱建物	144	第104図	G区1・2溝、4・5・9・14土坑	207
第42図	C区溝	145	第105図	G区3溝	208
第43図	C区1面土坑・ピット位置図(1)	146	第106図	G区中央部土坑・ピット位置図、1～3・6土坑断面図	209
第44図	C区1面土坑・ピット位置図(2)	147	第107図	G区7・8・10～13土坑、1～14ピット断面図	210
第45図	C区1面土坑断面図	148	第108図	H区全体図、H区1住居(1)	211
第46図	C区2面土坑・ピット位置図(1)	149	第109図	H区1住居(2)	212
第47図	C区2面土坑・ピット位置図(2)	150	第110図	H区2住居	213
第48図	C区2面土坑断面図(1)	151	第111図	H区3住居	214
第49図	C区2面土坑断面図(2)	152	第112図	H区4住居(1)	215
第50図	C区2面土坑断面図(3)	153	第113図	H区4住居(2)	216
第51図	C区2面土坑断面図(4)	154	第114図	H区6住居	217
第52図	C区2面土坑断面図(5)	155	第115図	H区7住居	218
第53図	C区2面土坑断面図(6)	156	第116図	H区8住居	219
第54図	C区東西・南北ベルト	157	第117図	H区9住居	220
第55図	D区全体図、トレンチ位置図	158	第118図	H区10住居(1)	221
第56図	D区トレンチ土層断面図	159	第119図	H区10住居(2)	222
第57図	D区1溝・ピット	160	第120図	H区11住居(1)	223
第58図	E区全体図、1住居(1)	161	第121図	H区11住居(2)	224
第59図	E区1住居(2)	162	第122図	H区12住居(1)	225
第60図	E区2住居	163	第123図	H区12住居(2)	226
第61図	E区3住居	164	第124図	H区13住居	227
第62図	E区4住居(1)	165	第125図	H区14住居	228
第63図	E区4住居(2)、5住居	166	第126図	H区15住居	229
			第127図	H区16住居	230

第128図	H区1掘立柱建物	231	第192図	H区8住居(2)、9住居出土遺物	295
第129図	H区東半部溝・土坑・ピット位置図	232	第193図	H区10住居出土遺物	296
第130図	H区東半部溝・土坑断面図	233	第194図	H区11住居、12住居(1)出土遺物	297
第131図	H区西半部土坑・ピット位置図	234	第195図	H区12住居(2)、13住居、14住居(1)出土遺物	298
第132図	H区西半部土坑断面図(1)	235	第196図	H区14住居(2)、15住居出土遺物	299
第133図	H区西半部土坑断面図(2)	236	第197図	H区16住居、1掘立柱建物、1・4・15～18・21～24土坑、32土坑(1)出土遺物	300
第134図	H区1～35ピット断面図	237	第198図	H区32土坑(2)、33・34・36・41～43・45土坑出土遺物	301
第135図	H区37～67ピット断面図	238	第199図	H区48・49・53・54・67土坑出土遺物	302
第136図	H区70～100ピット断面図	239	第200図	H区68～70土坑出土遺物	303
第137図	I区全体図、1井戸(1)	240	第201図	H区71～73土坑出土遺物	304
第138図	I区1井戸(2)	241	第202図	H区74・77土坑、墓地跡、2トレンチ、I区1井戸・2住居(1)出土遺物	305
第139図	I区2住居(1)	242	第203図	I区2住居(2)出土遺物	306
第140図	I区2住居(2)	243	第204図	I区3住居出土遺物	307
第141図	I区2住居(3)、3住居(1)	244	第205図	I区4・5住居出土遺物	308
第142図	I区3住居(2)	245	第206図	I区6～8住居、9住居(1)出土遺物	309
第143図	I区4住居	246	第207図	I区9住居(2)、1竪穴(1)出土遺物	310
第144図	I区5住居(1)	247	第208図	I区1竪穴(2)出土遺物	311
第145図	I区5住居(2)	248	第209図	I区1竪穴(3)出土遺物	312
第146図	I区6住居(1)	249	第210図	I区1竪穴(4)出土遺物	313
第147図	I区6住居(2)	250	第211図	I区1竪穴(5)出土遺物	314
第148図	I区7住居	251	第212図	I区1竪穴(6)出土遺物	315
第149図	I区8住居	252	第213図	I区2竪穴(1)出土遺物	316
第150図	I区9住居(1)	253	第214図	I区2竪穴(2)出土遺物	317
第151図	I区9住居(2)	254	第215図	I区2竪穴(3)出土遺物	318
第152図	I区9住居(3)	255	第216図	I区3竪穴(1)出土遺物	319
第153図	I区1竪穴(1)	256	第217図	I区3竪穴(2)出土遺物	320
第154図	I区1竪穴(2)	257	第218図	I区3竪穴(3)出土遺物	321
第155図	I区2竪穴(1)	258	第219図	I区3竪穴(4)、1集石、15・17・26・28土坑出土遺物	322
第156図	I区2竪穴(2)	259	第220図	I区37・40～42・44・45・51・56・58土坑出土遺物	323
第157図	I区3竪穴	260	第221図	I区60・61・72～75・78土坑、79土坑(1)出土遺物	324
第158図	I区東半部1面土坑・ピット位置図	261	第222図	I区79土坑(2)、81・82・84土坑、85土坑(1)出土遺物	325
第159図	I区東半部1面土坑断面図(1)	262	第223図	I区85土坑(2)、87・89土坑出土遺物	326
第160図	I区東半部1面土坑断面図(2)	263	第224図	I区91・94・95・99・100・103・106・109・110土坑出土遺物	327
第161図	I区西半部1面土坑・ピット位置図	264	第225図	I区112・114・115・119～121・123・126土坑、127土坑(1)出土遺物	328
第162図	I区西半部1面土坑断面図	265	第226図	I区127土坑(2)、128・130～135土坑出土遺物	329
第163図	I区東半部2面土坑・ピット位置図	266	第227図	I区136～138・140・147・149・151・152・154土坑出土遺物	330
第164図	I区東半部2面土坑断面図(1)	267	第228図	I区158・162・163・165～172土坑出土遺物	331
第165図	I区東半部2面土坑断面図(2)	268	第229図	A・B区遺構外、C区遺構外(1)出土縄文土器	332
第166図	I区西半部2面土坑・ピット位置図、集石	269	第230図	C区遺構外(2)、D遺構外、E区遺構外(1)出土縄文土器	333
第167図	I区西半部2面土坑断面図(1)	270	第231図	E区遺構外(2)、F区遺構外、G区遺構外(1)出土縄文土器	334
第168図	I区西半部2面土坑断面図(2)	271	第232図	G区遺構外(2)、H区遺構外(1)出土縄文土器	335
第169図	I区2面61・79・82・85・89土坑	272	第233図	H区遺構外(2)出土縄文土器	336
第170図	I区2面99・109・127・140・170・171土坑	273	第234図	I区遺構外(1)出土縄文土器	337
第171図	I区1面ピット断面図	274	第235図	I区遺構外(2)出土縄文土器	338
第172図	I区1・2面ピット断面図	275	第236図	I区遺構外(3)出土縄文土器、遺構外出土石器(1)	339
第173図	A区1住居、B区炉・55ピット、C区1～4住居(1)出土遺物	276	第237図	遺構外出土石器(2)	340
第174図	C区4住居(2)、6住居、201土坑出土遺物	277	第238図	遺構外出土石器(3)	341
第175図	E区1・2住居出土遺物	278	第239図	遺構外出土石器(4)、遺構外出土土器	342
第176図	E区3住居、4住居(1)出土遺物	279	第240図	H区人骨出土土坑位置図	343
第177図	E区4住居(2)、5住居、6住居(1)出土遺物	280	第241図	テフラ分析試料採取位置	344
第178図	E区6住居(2)、F区1住居、2住居(1)出土遺物	281	第242図	住居内炭化材出土状況と試料採取位置	345
第179図	F区2住居(2)、3住居出土遺物	282	第243図	鉄滓出土住居	345
第180図	F区4～6住居、7住居(1)出土遺物	283	第244図	B区1トレンチの土層柱状図	352
第181図	F区7住居(2)、7・8住居、8住居(1)出土遺物	284	第245図	B区2トレンチの土層柱状図	352
第182図	F区8住居(2)、1～3溝、G区1住居(1)出土遺物	285	第246図	B区7トレンチの土層柱状図	352
第183図	G区1住居(2)、2住居出土遺物	286	第247図	C区南北ベルトの土層柱状図	352
第184図	G区3住居、5住居(1)出土遺物	287	第248図	C区2トレンチ南壁の土層柱状図	352
第185図	G区5住居(2)、6住居、7住居(1)出土遺物	288	第249図	C区17トレンチ南壁の土層柱状図	352
第186図	G区7住居(2)、8住居出土遺物	289	第250図	D区2トレンチ東壁の土層柱状図	352
第187図	G区9～11住居出土遺物	290	第251図	D区2トレンチ東壁南部の土層柱状図	352
第188図	G区12・13住居、14住居(1)出土遺物	291			
第189図	G区14住居(2)、15住居、H区1住居、2住居(1)出土遺物	292			
第190図	H区2住居(2)出土遺物	293			
第191図	H区2住居(3)、3・7住居、8住居(1)出土遺物	294			

第252図	C区17トレンチの火山ガラス比ダイヤグラム	353
第253図	D区2トレンチ東壁試料1(Hg-9)の火山ガラス比ダイヤグラム(重鉱物組成を含む)	353
第254図	H区人骨出土土坑全体図	354
第255図	H区48土坑人骨出土状態	354
第256図	H区48土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)	354
第257図	H区48土坑出土人骨頭蓋骨前頭縫合(上面観)	355
第258図	H区48土坑出土人骨上顎骨生前脱落(咬合面観)	355
第259図	H区49土坑人骨出土状態	355
第260図	H区49土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)	355
第261図	H区51土坑人骨出土状態	356
第262図	H区53土坑人骨出土状態	356
第263図	H区53土坑出土人骨下顎骨(左M1の生前脱落)	357
第264図	H区67土坑人骨出土状態	357
第265図	H区67土坑出土人骨下顎骨(異常摩耗)	357
第266図	H区67土坑出土人骨左側頭骨(鼓室骨裂孔)	358
第267図	H区68土坑人骨出土状態	358
第268図	H区69土坑人骨出土状態	358
第269図	H区69土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)	359

第270図	H区70土坑人骨出土状態	359
第271図	H区70土坑出土人骨頭蓋骨(左側面観)	359
第272図	H区70土坑出土人骨下顎骨(左M3の遠心捻転)	359
第273図	H区71・72土坑人骨出土状態	360
第274図	H区71土坑出土人骨1頭蓋骨(左側面観)	360
第275図	H区71土坑出土人骨2頭蓋骨(右側面観)	361
第276図	H区73土坑人骨出土状態	361
第277図	H区74土坑人骨出土状態	361
第278図	芳賀東部団地遺跡製鉄関連遺物一覧	367
第279図	芳賀東部団地遺跡縄文土器型式別点数	370
第280図	C区4住居袋形土器出土状態	373
第281図	滑石製白玉破片の分類	374
第282図	丸鞆・鉈尾・石製巡方	375
第283図	H区墓坑群 北から	376
第284図	念仏銭・大黒銭・大福銭・題目銭(拓影1/1)	378
第285図	I区9住居斜路土層図	381
第286図	近傍遺跡住居の出入口施設	382
第287図	近傍の製鉄関連遺構	384

表 目 次

第1表	上武道路8工区調査遺跡一覧表	2
第2表	近傍の遺跡一覧表	11
第3表	出土遺構数量表	22
第4表	出土遺物数量表	24
第5表	住居一覧表	77
第6表	遺物観察表	79
第7表	C区1掘立柱建物計測表	141
第8表	C区2掘立柱建物計測表	142
第9表	C区3掘立柱建物計測表	143
第10表	C区5掘立柱建物計測表	143
第11表	C区4掘立柱建物計測表	144
第12表	C区1面土坑計測表	148
第13表	C区2面土坑計測表(1)	151
第14表	C区2面土坑計測表(2)	152
第15表	C区2面土坑計測表(3)	153
第16表	C区2面土坑計測表(4)	154
第17表	C区2面土坑計測表(5)	155
第18表	C区2面土坑計測表(6)	156
第19表	E区1掘立柱建物計測表	169
第20表	F区1掘立柱建物計測表	185
第21表	F区2掘立柱建物計測表	186
第22表	F区土坑計測表	188
第23表	F区ピット計測表	189
第24表	G区1掘立柱建物計測表	204
第25表	G区2掘立柱建物計測表	205
第26表	G区3掘立柱建物計測表	206
第27表	G区溝計測表	207
第28表	G区土坑計測表	210
第29表	G区ピット計測表	210
第30表	H区1掘立柱建物計測表	231

第31表	H区土坑計測表(1)	233
第32表	H区溝計測表	233
第33表	H区土坑計測表(2)	235
第34表	H区土坑計測表(3)	236
第35表	H区1～35ピット計測表	237
第36表	H区37～67ピット計測表	238
第37表	H区68～100ピット計測表	239
第38表	I区1面土坑計測表(1)	262
第39表	I区1面土坑計測表(2)	263
第40表	I区1面土坑計測表(3)	265
第41表	I区2面土坑計測表(1)	267
第42表	I区2面土坑計測表(2)	268
第43表	I区2面土坑計測表(3)	270
第44表	I区2面土坑計測表(4)	271
第45表	I区2面土坑計測表(5)	273
第46表	I区1面ピット計測表	274
第47表	I区1・2面ピット計測表	275
第48表	火山ガラス比分析結果	351
第49表	重鉱物組成分析結果	351
第50表	テフラ検出分析結果	351
第51表	屈折率測定結果	351
第52表	芳賀東部団地遺跡出土人骨まとめ	363
第53表	芳賀東部団地遺跡出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表	364
第54表	住居出土木材樹種構成表	365
第55表	出土炭化物一覧表	366
第56表	芳賀東部団地遺跡縄文土器型式別数量表	370
第57表	H区墓坑出土遺物一覧表	377
第58表	出入口施設を伴う住居	380
第59表	近傍の製鉄関連遺構・遺物	385

写真目次

トピラ	I区全景 南上空から		C区5住居遺物出土状態 北から
PL. 1	A区1トレンチ・1住居遺物全景 東から		C区5住居土層断面 c-d 南から
PL. 2	A区2トレンチ全景 東から		C区5住居南西部遺物出土状態 西から
PL. 3	A区1トレンチ・1住居全景 西から		C区5住居掘り方全景 北から
	A区1トレンチ・1住居遺物出土状態 北から	PL.20	C区6住居床面全景 南西から
PL. 4	A区道状遺構 西から		C区6住居遺物出土状態 西から
	A区道状遺構 北から		C区6住居南西隅遺物出土状態 西から
PL. 5	B区1面全景 東上空から		C区6住居カマド全景 南西から
PL. 6	B区1溝全景 南から		C区6住居掘り方全景 西から
	B区2溝全景 南から	PL.21	C区7住居全景 東から
	B区1溝土層断面 南から		C区7住居掘り方全景 東から
	B区2溝重複土坑群 南から	PL.22	C区1掘立柱建物全景 北から
	B区2溝土層断面 南から		C区2掘立柱建物全景 南から
	B区2溝重複土坑群 南から	PL.23	C区3・4掘立柱建物全景 北から
PL. 7	B区1炉周辺ピット群 東から		C区5掘立柱建物全景 北から
	B区1炉全景 北西から	PL.24	C区1溝土層断面 東から
PL. 8	B区3土坑全景 北西から		C区南北ベルト 3溝土層断面 西から
	B区4・24土坑全景 東から		C区南北ベルト ワイヤー敷設溝土層断面 西から
	B区16土坑全景 北から		C区5溝土層断面 南から
	B区18土坑全景 南東から		C区6～9溝全景 南から
	B区20土坑全景 南東から	PL.25	C区12・13溝鉄塔北側 東から
	B区22土坑全景 北西から		C区土坑・ピット群 南から
	B区38土坑全景 西から	PL.26	C区8土坑全景 西から
	B区43土坑全景 東から		C区32土坑全景 西から
PL. 9	B区46・47土坑全景 西から		C区38土坑全景 西から
	B区59・60土坑全景 東から		C区46土坑全景 西から
	B区64土坑全景 北から		C区70土坑全景 南から
	B区65土坑全景 北から		C区106土坑全景 西から
	B区1ピット全景 南東から		C区107土坑遺物出土状態 西から
	B区27ピット全景 南西から		C区115土坑遺物出土状態 東から
	B区186ピット遺物出土状態 北から	PL.27	C区121土坑全景 東から
	B区203ピット全景 北から		C区125土坑全景 東から
PL.10	C区全景 西上空から		C区139土坑全景 北から
PL.11	C区全景 南上空から		C区149土坑全景 南から
PL.12	C区南北ベルト南半部 西から		C区201土坑全景 南から
	C区東西ベルト東半部 南から		C区205土坑全景 南から
PL.13	C区1住居遺物出土状態 東から		C区213土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 高杯(C4)		C区214土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 勾玉(C9)	PL.28	C区216土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 袋状鉄斧(C11)		C区225土坑全景 南から
	C区1住居遺物出土状態 有孔円盤(C8)		C区230土坑全景 北から
PL.14	C区1住居床面全景 東から		C区235土坑土層断面 南から
	C区1住居P5全景 南から		C区旧道路西側土坑・ピット全景 西から
	C区1住居内溝・ピット 北から	PL.29	C区鉄塔北側土坑、105ピット全景 東から
	C区1住居掘り方全景 東から		C区鉄塔北側土坑、113ピット全景 北東から
	C区1住居南部掘り方 東から		C区鉄塔北側土坑全景 北から
PL.15	C区2住居床面全景 西から		C区下層確認東西トレンチ1全景 西から
	C区2住居遺物出土状態 西から	PL.30	C区下層確認トレンチ3 南から
	C区2住居北西部遺物出土状態 西から		C区下層確認トレンチ4 南から
	C区2住居炉焼土出土状態 西から	PL.31	C区下層確認トレンチ5-1 南から
	C区2住居掘り方全景 西から		C区下層確認トレンチ5-2 南から
PL.16	C区3住居床面全景 西から	PL.32	C区下層確認トレンチ6 南から
	C区3住居遺物出土状態 北から		C区下層確認トレンチ7 南から
	C区3住居炉全景 北から	PL.33	C区下層確認トレンチ8 北から
	C区3住居粘土出土状態 西から		C区下層確認トレンチ9 北から
	C区3住居掘り方全景 西から	PL.34	C区下層確認トレンチ10 北から
PL.17	C区4住居炭化材・焼土出土状態 東から		C区下層確認トレンチ11 南から
	C区4住居北東部炭化材・焼土出土状態 南から	PL.35	D区全景 南東から
	C区4住居遺物出土状態 東から	PL.36	D区1溝全景 北から
	C区4住居北壁焼土出土状態 南から		D区1溝北壁土層断面 南から
	C区4住居袋形土器(C25)出土状態 東から	PL.37	D区1土坑全景 南から
PL.18	C区4住居床面全景 東から		D区2土坑全景 東から
	C区4住居掘り方全景 東から		D区1ピット全景 南から
PL.19	C区5住居床面全景 北から		D区2ピット全景 南から

	D区3ピット全景 南から		F区7住居カマド遺物出土状態 西から
	D区4ピット全景 南東から		F区7住居カマド支脚 西から
	D区7ピット全景 南東から		F区7住居掘り方全景 北西から
	D区8・9ピット全景 北西から	PL.56	F区8住居床面全景 西から
PL.38	D区1トレンチ南壁西端土層断面 北東から		F区8住居遺物出土状態 西から
	D区1トレンチ南壁土層断面 北西から		F区8住居カマド左遺物出土状態 西から
	D区2トレンチ南壁東端土層断面 北西から		F区8住居掘り方全景 西から
	D区3トレンチ南壁土層断面 北から		F区8住居カマド掘り方全景 北西から
PL.39	E区全景 西上空から	PL.57	F区1掘立柱建物全景 南から
PL.40	E区1・5住居遺物出土状態 北西から		F区2掘立柱建物全景 東から
	E区1住居遺物出土状態 土師器甕(E7)	PL.58	F区1溝全景 東から
PL.41	E区2住居全景 西から		F区2溝全景 北から
	E区2住居カマド全景 西から		F区1土坑全景 南から
PL.42	E区3住居遺物出土状態全景 西から		F区2・3土坑全景 南から
	E区3住居南東隅遺物出土状態 西から		F区4土坑全景 南から
	E区3住居西部遺物出土状態 西から		F区5土坑全景 南から
	E区3住居作業風景 西から	PL.59	F区6土坑全景 南から
	E区3住居掘り方全景 西から		F区8土坑全景 東から
PL.43	E区4住居遺物出土状態全景 西から		F区9土坑全景 南から
	E区4住居カマド前遺物出土状態 北西から		F区10土坑全景 東から
	E区4住居カマド全景 西から		F区11土坑、9～11ピット全景 南から
	E区4住居掘り方全景 西から		F区12土坑、12～16・20ピット全景 南から
	E区4住居カマド掘り方全景 西から	PL.60	G区全景 西上空から
PL.44	E区6住居床面全景 西から	PL.61	G区1住居床面全景 北から
	E区6住居As-B分布状態 西から		G区1住居遺物出土状態 北から
	E区6住居遺物出土状態 西から		G区1住居南東隅遺物出土状態 北西から
	E区6住居カマド全景 西から		G区1住居カマド遺物出土状態 西から
	E区6住居掘り方全景 西から		G区1住居掘り方全景 北から
PL.45	E区1掘立柱建物全景 西から	PL.62	G区2住居遺物出土状態全景 西から
PL.46	E区1土坑全景 西から		G区2住居カマド遺物出土状態 西から
	E区2土坑全景 西から	PL.63	G区3住居床面全景 西から
	E区3土坑全景 西から		G区3住居遺物出土状態 北から
	E区5土坑、8・9ピット全景 西から		G区3住居炭化材出土状態 北から
	E区6土坑全景 西から		G区3住居遺物出土状態 北から
	E区8土坑全景 西から		G区3住居掘り方全景 西から
	E区9土坑全景 西から	PL.64	G区4住居床面全景 西から
	E区10土坑全景 西から		G区4住居掘り方全景 西から
PL.47	E区1～7ピット全景 東から	PL.65	G区5住居遺物出土状態全景 西から
	E区10～12ピット全景 西から		G区5住居掘り方全景 西から
	E区14ピット全景 北から	PL.66	G区6住居遺物出土状態全景 西から
	E区16・17ピット全景 北西から		G区6住居掘り方全景 北から
	E区18～20ピット全景 北東から	PL.67	G区7住居床面全景 西から
	E区21ピット全景 北西から		G区7住居遺物出土状態 西から
	E区23ピット全景 西から		G区7住居カマド付近遺物出土状態 西から
	E区27ピット全景 東から		G区7住居カマド遺物出土状態 西から
PL.48	F区全景 西上空から		G区7住居掘り方全景 西から
PL.49	F区1住居全景 西から	PL.68	G区8住居遺物出土状態全景 西から
	F区1住居掘り方全景 西から		G区8住居掘り方全景 西から
PL.50	F区2住居床面全景 北から	PL.69	G区9住居床面全景 北から
	F区2住居遺物出土状態 北から		G区9住居遺物出土状態 北から
	F区2住居土師器甕(F15)出土状態 西から		G区9住居カマド遺物出土状態(1) 西から
	F区2住居南壁際遺物出土状態 北から		G区9住居カマド遺物出土状態(2) 西から
	F区2住居掘り方全景 北から		G区9住居掘り方全景 北から
PL.51	F区3住居遺物出土状態全景 西から	PL.70	G区10住居床面全景 西から
	F区3住居遺物出土状態 西から		G区10住居掘り方全景 西から
	F区3住居カマド全景 西から	PL.71	G区11住居遺物出土状態全景 西から
	F区3住居カマド遺物出土状態 西から		G区11住居掘り方全景 西から
	F区3住居掘り方全景 西から	PL.72	G区12住居遺物出土状態全景 西から
PL.52	F区4住居遺物出土状態全景 西から		G区12住居カマド周辺遺物出土状態 西から
	F区4住居遺物出土状態 西から	PL.73	G区13住居遺物出土状態全景 西から
PL.53	F区5住居全景 西から		G区13住居カマド石出土状態 西から
	F区5住居掘り方全景 西から	PL.74	G区14住居床面全景 西から
PL.54	F区6住居全景 西から		G区14住居遺物出土状態 北から
	F区6住居カマド全景 西から		G区14住居南部遺物出土状態 北から
PL.55	F区7住居全景 西から		G区14住居掘り方全景 北から
	F区7住居遺物出土状態 西から	PL.75	G区15住居床面全景 西から

	G区15住居遺物出土状態 北から		H区10住居滑石片出土状態(3) 西から
	G区15住居カマド遺物出土状態 西から		H区10住居滑石片出土状態(4) 西から
PL.76	G区15住居掘り方全景 西から	PL.91	H区10住居床面全景 西から
	G区1掘立柱建物全景 南から		H区10住居遺物出土状態 西から
PL.77	G区2掘立柱建物全景 東から		H区10住居カマド土層断面 西から
	G区3掘立柱建物全景 東から		H区10住居カマド石出土状態 西から
	G区1・2溝 南から		H区10住居掘り方全景 西から
PL.78	G区1土坑全景 東から	PL.92	H区11住居遺物出土状態全景 西から
	G区2土坑全景 北東から		H区11住居北部遺物出土状態 西から
	G区3土坑全景 北から		H区11住居カマド石組 東から
	G区7・8土坑、7・8ピット全景 南から		H区11住居カマド石組 西から
	G区9・14土坑全景 南から		H区11住居カマド石組 北から
	G区10・13土坑全景 北東から	PL.93	H区11住居床面全景 南西から
	G区11土坑全景 北から		H区11住居カマド全景 南から
PL.79	G区12土坑全景 北東から		H区11住居貯蔵穴全景 東から
	G区1～5・9ピット全景 南から		H区11住居掘り方全景 南西から
	G区6土坑、10～12ピット全景 南から		H区11住居カマド掘り方全景 南から
PL.80	H区全景 東上空から	PL.94	H区12住居遺物出土状態全景 西から
PL.81	H区1住居床面全景 北から		H区12住居カマド周辺遺物出土状態 西から
	H区1住居遺物出土状態 北から		H区12住居鉢(H126)・壺(H128)出土状態 西から
	H区1住居カマド全景 南西から		H区12住居カマド遺物 甕(H130・131)出土状態 北から
	H区1住居貯蔵穴遺物出土状態 西から		H区12住居カマド遺物 甕(H130)出土状態 西から
	H区1住居掘り方全景 北から	PL.95	H区12住居床面全景 西から
PL.82	H区2住居遺物出土状態全景 北から		H区12住居掘り方全景 西から
	H区2住居西半部遺物出土状態 北西から		H区12住居カマド掘り方全景 西から
	H区2住居カマド周辺遺物出土状態 西から	PL.96	H区13住居床面全景 南から
	H区2住居貯蔵穴遺物出土状態 西から		H区13住居遺物出土状態 南から
	H区2住居掘り方全景 北から		H区13住居カマド周辺遺物出土状態 西から
PL.83	H区3住居床面全景 南から		H区13住居掘り方全景 南から
	H区3住居遺物出土状態 東から		H区13住居カマド全景 西から
	H区3住居南東隅遺物出土状態 須恵器蓋(H28)	PL.97	H区14住居西半部床面 北から
	H区3住居カマド全景 南から		H区14住居西半部遺物出土状態 北から
	H区3住居掘り方全景 南から		H区14住居内土坑1・2全景 北から
PL.84	H区4住居全景 西から		H区14住居内土坑3全景 南東から
	H区4住居遺物出土状態 西から		H区14住居西半部掘り方全景 北から
	H区4住居カマド周辺遺物出土状態 西から	PL.98	H区15住居床面全景 北から
	H区4住居カマド全景 西から		H区15住居遺物出土状態 北から
	H区4住居掘り方全景 西から		H区15住居遺物出土状態 西から
PL.85	H区6住居床面全景 北から		H区15住居掘り方全景 北から
	H区6住居遺物出土状態 西から		H区15住居カマド周辺 西から
	H区6住居カマド周辺 西から	PL.99	H区16住居床面全景 西から
	H区6住居カマド土層横断面 西から		H区16住居遺物出土状態 西から
	H区6住居掘り方全景 北から		H区16住居東部遺物出土状態 西から
PL.86	H区7住居床面全景 西から		H区16住居貯蔵穴 南から
	H区7住居遺物出土状態 西から		H区16住居掘り方全景 西から
	H区7住居北西隅遺物出土状態 西から	PL.100	H区住居群西部掘り方全景 北西から
	H区7住居掘り方全景 西から		H区住居群東部掘り方全景 北西から
	H区7住居カマド掘り方全景 西から	PL.101	H区1溝全景 東から
PL.87	H区8住居遺物出土状態全景 北から	PL.102	H区8土坑全景 西から
	H区8住居西部遺物出土状態 北から		H区9土坑全景 西から
	H区8住居南西隅遺物出土状態 西から		H区13土坑全景 西から
	H区8住居中央部遺物出土状態 北西から		H区15土坑全景 南から
	H区8住居北西部遺物出土状態 西から		H区16・17土坑全景 西から
PL.88	H区8住居床面全景 北から		H区18・19土坑全景 西から
	H区8住居高杯(H37)・甕(H42)出土状態 北東から		H区22～24・26土坑全景 西から
	H区8住居カマド全景 北西から		H区81土坑全景 北から
	H区8住居カマド遺物出土状態 北西から	PL.103	H区墓地跡土坑群・1掘立柱建物全景 北から
	H区8住居掘り方全景 北から	PL.104	H区48土坑人骨出土状態 東から
PL.89	H区9住居床面全景 西から		H区49土坑人骨出土状態 南から
	H区9住居遺物出土状態 西から	PL.105	H区51土坑人骨出土状態 西から
	H区9住居カマド周辺遺物出土状態 西から		H区52土坑人骨出土状態 南から
	H区9住居南部遺物出土状態 西から	PL.106	H区53土坑人骨出土状態 南から
	H区9住居掘り方全景 西から		H区67土坑人骨出土状態 西から
PL.90	H区10住居遺物出土状態全景 西から	PL.107	H区68土坑人骨出土状態 東から
	H区10住居滑石片出土状態(1) 西から		H区69土坑人骨出土状態 南から
	H区10住居滑石片出土状態(2) 西から	PL.108	H区70土坑人骨出土状態 東から

PL.109	H区70・71・72土坑人骨出土状態 西から H区73土坑人骨出土状態 東から H区74土坑人骨出土状態 西から	I区9住居出入口斜路土層断面 東から I区9住居出入口 東から I区9住居掘り方出入口1 東から	
PL.110	H区1トレンチ縄文遺構確認 北から H区2トレンチ縄文遺構確認 西から	I区9住居掘り方出入口2 東から I区1井戸全景 東から	
PL.111	H区3トレンチ縄文遺物出土状態 東から H区4トレンチ縄文遺構確認 北から	I区1井戸遺物出土状態 東から I区1井戸周辺全景 北西から	
PL.112	H区27土坑遺物出土状態 西から H区32土坑全景 東から H区33土坑全景 東から H区34土坑全景 東から H区36土坑全景 東から H区39土坑全景 東から H区40土坑全景 北から H区41土坑全景 東から	I区1井戸周辺全景 南から I区1井戸底面全景 西から I区1竪穴上位遺物出土状態 南から I区1竪穴南西部上位遺物出土状態 I区1竪穴遺物出土状態全景 南から I区1竪穴遺物出土状態	
PL.113	H区42土坑全景 南東から H区43土坑全景 東から H区45土坑遺物出土状態 東から H区54土坑全景 西から H区77土坑全景 南から	I区1竪穴掘り方全景 南から I区2竪穴上位遺物出土状態 南から I区2竪穴上位遺物出土状態 I区2竪穴床面全景 北から I区2竪穴 炉2遺物出土状態 南から I区2竪穴掘り方全景 北から	
PL.114	I区全景 東上空から	PL.127	I区3竪穴上位遺物出土状態 南から I区3竪穴遺物出土状態 東から I区3竪穴北西部遺物出土状態 南東から I区3竪穴床面全景 南から I区3竪穴掘り方全景 南から
PL.115	I区2面北東部全景 南西から I区全景 南東から	PL.128	I区3竪穴上位遺物出土状態 南から I区2竪穴上位遺物出土状態 I区2竪穴床面全景 北から I区2竪穴 炉2遺物出土状態 南から I区2竪穴掘り方全景 北から
PL.116	I区2住居遺物全景 西から I区2住居カマド周辺遺物出土状態 西から I区2住居北東部遺物出土状態 西から I区2住居遺物出土状態 石製巡方(121) I区2住居南西部遺物出土状態 北から	PL.129	I区3竪穴上位遺物出土状態 南から I区3竪穴遺物出土状態 東から I区3竪穴北西部遺物出土状態 南東から I区3竪穴床面全景 南から I区3竪穴掘り方全景 南から
PL.117	I区2住居床面全景 西から I区2住居掘り方全景 西から	PL.130	I区1集石全景 南から I区7土坑全景 南東から I区10土坑全景 南東から I区17土坑全景 西から I区20土坑全景 西から
PL.118	I区3住居床面全景 西から I区3住居遺物出土状態 西から I区3住居下層遺物出土状態 西から I区3住居東壁柱穴全景 西から I区3住居掘り方全景 西から	PL.131	I区24土坑全景 南西から I区28土坑全景 南東から I区29土坑全景 東から I区37土坑全景 南東から I区37土坑遺物出土状態 東から I区40土坑全景 東から I区41土坑全景 北西から I区42土坑全景 南東から
PL.119	I区4住居床面全景 西から I区4住居遺物出土状態 西から I区4住居カマド周辺遺物出土状態 西から I区4住居カマド全景 西から I区4住居掘り方全景 西から	PL.132	I区44土坑全景 北西から I区45土坑全景 北東から I区50土坑全景 西から I区50土坑土層断面 東から I区51土坑全景 南から I区54土坑全景 北東から I区55土坑全景 北東から I区56土坑全景 北東から
PL.120	I区5住居床面全景 北から I区5住居遺物出土状態 西から I区5住居酸化鉄出土状態 I区5住居カマド全景 西から I区5住居掘り方全景 北から	PL.133	I区57土坑全景 南から I区58土坑全景 南西から I区61土坑全景 南西から I区67土坑全景 北東から I区72土坑全景 東から I区73土坑全景 西から I区74土坑全景 南から I区75土坑全景 東から
PL.121	I区6住居床面全景 西から I区6住居遺物出土状態 西から I区6住居カマド遺物出土状態 北西から I区6住居貯蔵穴全景 東から I区6住居掘り方全景 西から	PL.134	I区78土坑全景 南西から I区79土坑全景 東から I区79土坑遺物出土状態 東から I区81土坑全景 南から I区81土坑遺物出土状態 南から I区82土坑全景 西から I区84土坑全景 南から I区85土坑全景 北から
PL.122	I区7住居床面全景 北から I区7住居遺物出土状態 北から I区7住居カマド全景 北西から I区7住居南東部遺物出土状態 北から I区7住居掘り方全景 北から	PL.135	I区87土坑全景 北東から I区87土坑遺物出土状態 北東から I区89土坑遺物出土状態 北から I区89土坑天井部除去遺物出土状態 北東から I区89土坑遺物出土状態 北から
PL.123	I区8住居床面全景 西から I区8住居遺物出土状態 西から I区8住居カマド周辺遺物出土状態 西から I区8住居カマド全景 西から I区8住居掘り方全景 西から		
PL.124	I区9住居遺物出土状態全景 西から I区9住居カマド周辺遺物出土状態 南から I区9住居カマド遺物出土状態 西から I区9住居カマド全景 西から I区9住居掘り方全景 西から		
PL.125	I区9住居床面全景 西から		

	I区89土坑全景	北東から	PL.142	C区1・4・6住居出土遺物
	I区90土坑全景	南東から		E区1～4住居出土遺物
	I区91土坑全景	東から	PL.143	E区5・6住居出土遺物
PL.136	I区92土坑全景	南から		F区1～4・6・7住居出土遺物
	I区95土坑全景	北から	PL.144	F区8住居出土遺物
	I区99土坑全景	南から		F区3溝出土遺物
	I区99土坑遺物出土状態	南西から		G区1・2住居出土遺物
	I区100土坑全景	北東から	PL.145	G区2・3・5・6住居出土遺物
	I区108土坑全景	北西から	PL.146	G区7～11住居出土遺物
	I区109土坑全景	北東から	PL.147	G区12～15住居出土遺物
	I区110土坑全景	北から		G区1溝出土遺物
PL.137	I区114土坑遺物出土状態	南西から		H区1～3・7住居出土遺物
	I区114土坑全景	南西から	PL.148	H区8～10住居出土遺物
	I区121土坑全景	東から	PL.149	H区10～12住居出土遺物
	I区121土坑遺物出土状態	南東から	PL.150	H区12～16住居出土遺物
	I区127土坑遺物出土状態	南西から	PL.151	H区1掘立柱建物出土遺物
	I区127土坑全景	西から		H区16・18・21～24・32～34・36・41～43・45・48土坑出土遺物
	I区127土坑遺物出土状態	北西から	PL.152	H区49・53・67～72土坑出土遺物
	I区130土坑全景	東から	PL.153	H区73・74・77土坑出土遺物
PL.138	I区132土坑全景	南西から		H区墓地跡出土遺物
	I区132土坑遺物出土状態	南東から		I区1井戸出土遺物
	I区133土坑全景	南西から		I区2住居出土遺物
	I区134土坑遺物出土状態	北から	PL.154	I区3～5住居出土遺物
	I区135土坑全景	南から	PL.155	I区6～9住居出土遺物
	I区136土坑全景	北東から	PL.156	I区1竪穴出土遺物
	I区136土坑遺物出土状態	北東から	PL.157	I区1竪穴出土遺物
	I区137土坑遺物出土状態	北西から	PL.158	I区1竪穴出土遺物
PL.139	I区137土坑全景	西から		I区2竪穴出土遺物
	I区138土坑遺物出土状態	南西から	PL.159	I区2竪穴出土遺物
	I区140土坑遺物出土状態	東から	PL.160	I区3竪穴出土遺物
	I区140土坑遺物出土状態	南東から	PL.161	I区3竪穴出土遺物
	I区146土坑全景	北西から		I区1集石出土遺物
	I区147土坑全景	北東から		I区15・17・26・28・37・40～42土坑出土遺物
	I区147土坑遺物出土状態	北東から	PL.162	I区44・45・51・56・58・60・61・72～75・78土坑出土遺物
	I区151土坑全景	南から	PL.163	I区79・81・82・84・87・89土坑出土遺物
PL.140	I区152土坑遺物出土状態	南東から	PL.164	I区85・89土坑出土遺物
	I区152土坑全景	南東から	PL.165	I区91・94・95・99・100・103・106・109・110・112・114・115・119・120・121・123・126土坑出土遺物
	I区152土坑遺物出土状態	南東から		I区127・128・130～138土坑出土遺物
	I区154土坑全景	南東から	PL.166	I区140・147・149・151・152・154・158・162・163・165～172土坑出土遺物
	I区162土坑全景	北東から	PL.167	遺構外出土石器
	I区162土坑遺物出土状態	北東から		石仏
	I区165土坑全景	東から	PL.168	石仏
	I区166土坑全景	北から	PL.169	石仏・遺構外出土石器
PL.141	I区167土坑全景	北東から	PL.170	
	I区167土坑遺物出土状態	北東から		
	I区167土坑遺物出土状態	北東から		
	I区169土坑全景	北東から		
	I区171土坑全景	北西から		
	I区171土坑遺物出土状態	北西から		

第1章 調査に至る経過

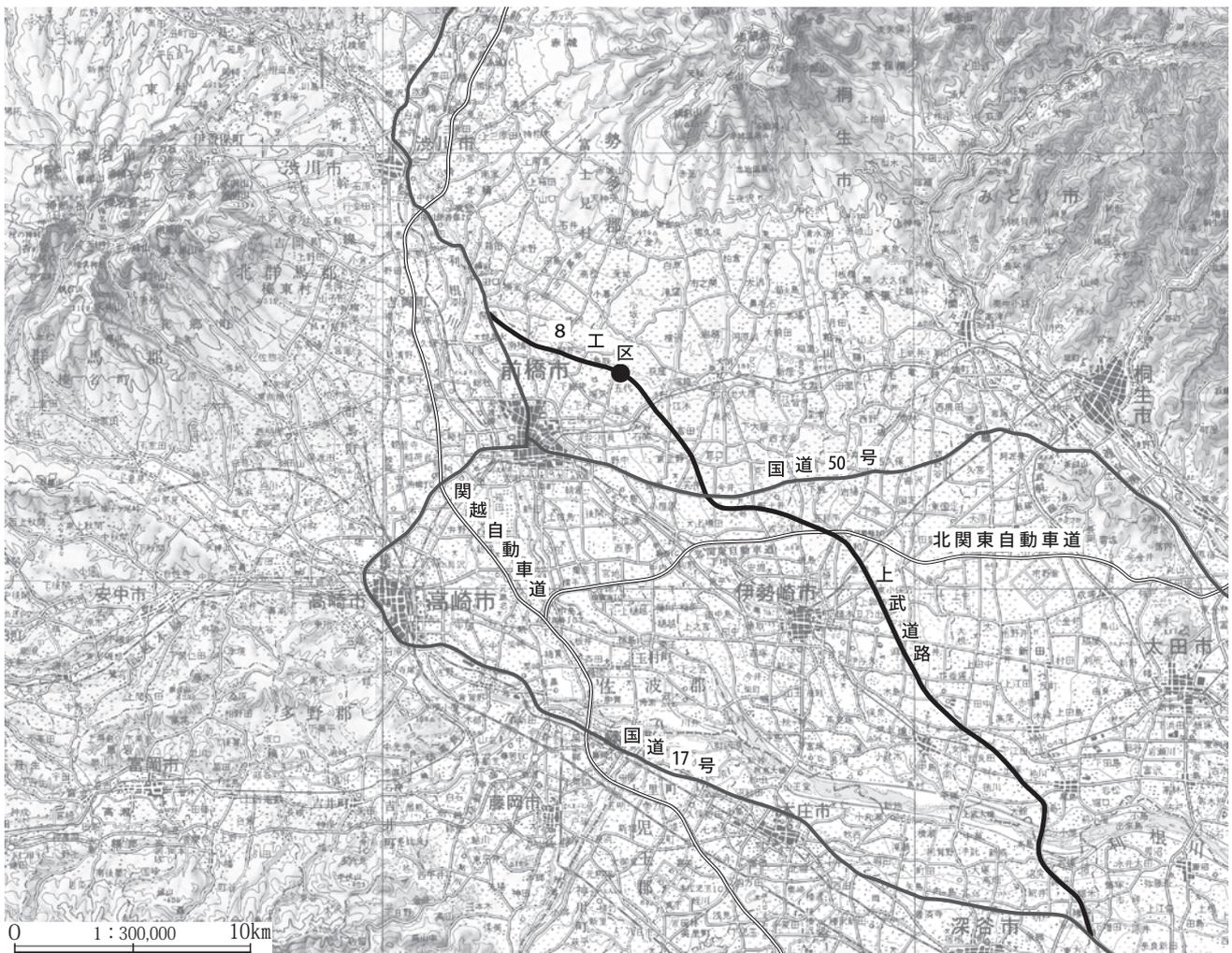
第1節 上武道路について

上武道路は一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5kmの道路である。現道の西には、前橋渋川バイパス、その先には鯉沢バイパス、また計画では上信自動車道が続いて、県北西部の新たな交通幹線網整備事業として期待されている。平成10年には、前橋渋川バイパスを含めて地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」として計画路線の指定を受け、群馬県では『幹線交通乗り入れ30分構想』の中で主要幹線のひとつに位置づけられている。

上武道路の建設事業は、昭和45年度から着手され、平

成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用された。現在供用が残されているのは、終点までの8.2km区間となる8工区である。

8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間の暫定開通を果たし、全線開通までの最終工区の発掘調査と工事が進められている。

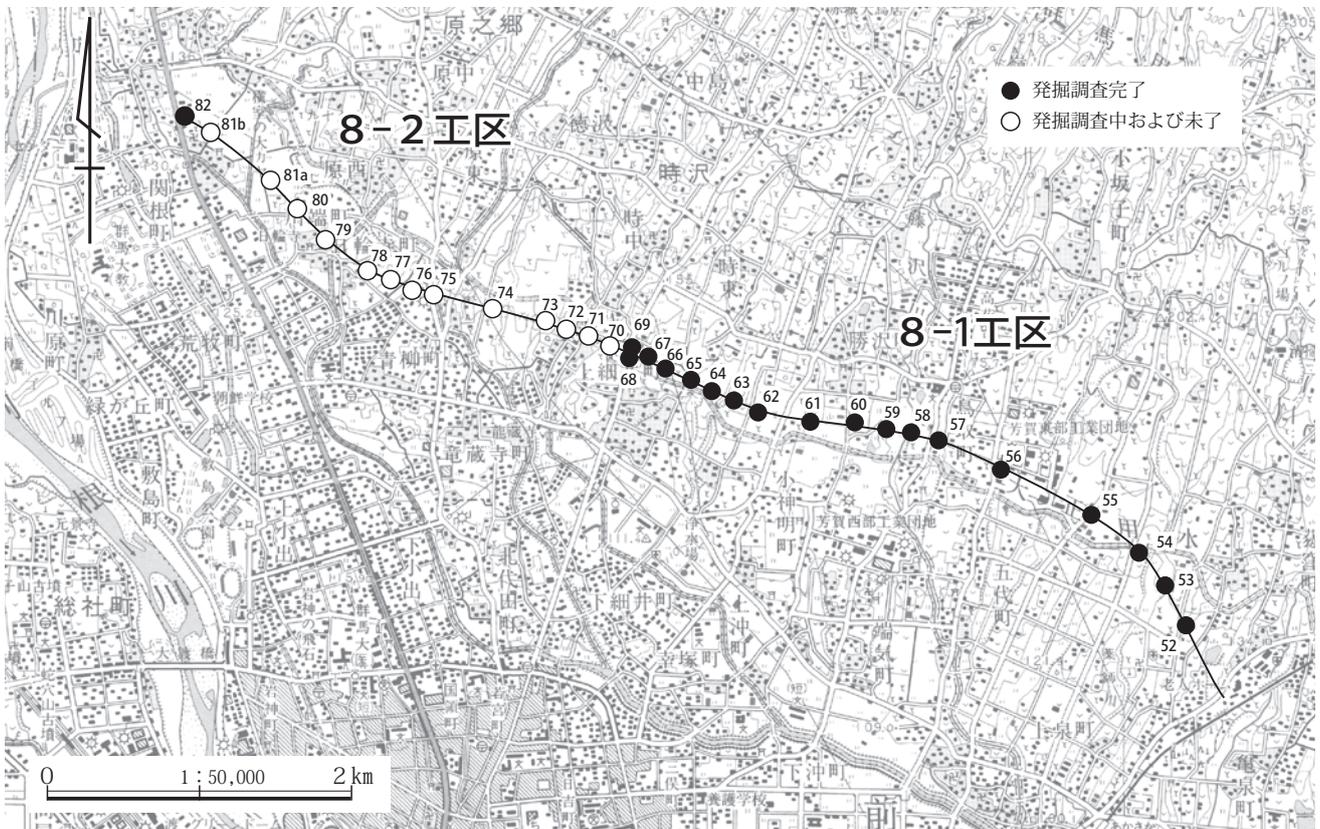


第1図 上武道路と遺跡の位置 国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用

第1章 調査に至る経過

第1表 上武道路8工区調査遺跡一覧表

J K No.	遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	調査年度	報告書 刊行年度
52 b	上泉唐ノ堀遺跡	前橋市 上泉町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚遺跡群	前橋市 上泉町	00775	平成18・19・20年度	
54	上泉武田遺跡	前橋市 上泉町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留遺跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東部団地遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成19・20年度	平成24年度予定
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	
58	胴城遺跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	平成23年度
59	鳥取塚田遺跡	前橋市 勝沢町		調査除外	
60	堤遺跡	前橋市 勝沢町	00034	平成20年度	平成24年度予定
61	小神明勝沢境遺跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	
62	小神明富士塚遺跡	前橋市 小神明町・上細井町	00403	平成20・21年度	平成23年度
63	東田之口遺跡	前橋市 上細井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	丑子遺跡	前橋市 上細井町	00134	平成20年度	平成24年度予定
65	上細井五十嵐遺跡	前橋市 上細井町	00777	平成20・21年度	平成24年度予定
66	天王・東紺屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00131	平成20・21年度	
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68	上町・時沢西紺屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00798	平成21年度	
69		前橋市 富士見町	90097	平成21年度	平成24年度予定
70	王久保遺跡	前橋市 上細井町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度予定
71	新田上遺跡	前橋市 上細井町	00128	平成24年度	
72	上細井中島遺跡	前橋市 上細井町	00787	平成21・24年度	
73	上細井蟬山遺跡	前橋市 上細井町	00786	平成21・24年度	平成24年度予定
74	山王・柴遺跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・24年度	
75	引切塚遺跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	
76	青柳宿土遺跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	
77	日輪寺諏訪前遺跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	
78	諏訪遺跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	
79	川端根岸遺跡	前橋市 川端町	00807	平成24年度	
80	川端山下(道東)遺跡	前橋市 川端町	00808	平成24年度	
81a	関根細ヶ沢遺跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	
81b	関根赤城遺跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	
82	田口下田尻遺跡	前橋市 田口町	00804	平成23年度	



第2図 上武道路8工区の遺跡 国土地理院1/50,000地形図「前橋」平成10年発行を使用

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地の多い地域である。群馬県は、昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの3つの区間に分けることができ、現在は②の北端まで供用が開始されている。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35箇所(35箇所)の遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行されている。この区間の事業が完了した平成7年には、埋蔵文化財調査の成果をより広く公開するため、冊子総集編『地域をつなぐ 未来へつなぐ—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—』が刊行された。この総集編では、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発掘調査や「芳郷」の墨書土器出土で話題となった古代勢多郡の芳賀郷、東山道駅路のひとつにも推定されていた「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上泉町までは7工区にあたる。ここでは17箇所(17箇所)の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊(16冊)の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女堀の調査では浅間粕川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手掛かりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

前橋市上泉町から現国道17号までは8工区にあたり、31箇所(31箇所)の遺跡、約40万㎡(40万㎡)が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8

1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは8-2工区の西端である終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が続々と明らかになっている。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれていることが判明している。特に最西端の田口下田尻遺跡では、縦穴住居280棟が検出された大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の理解を見直す資料が得られている。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、J Kを冠した遺跡略号が付されている。Jが上武、Kが国道を指しており、南側の起点から順次算用数字を1から付している。8工区も、7工区の最終番号J K52に続けて、この略号を記録類作成に際して使用している。J K52だけは、上泉唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、8工区分の上泉唐ノ堀遺跡にはJ K52bをつけて7工区と区別している。また、J K59鳥取塚田遺跡は、水田遺構の存在が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番とせず、そのままとした。(第1表)また、当初関根遺跡群で一括されていた遺跡が田口下田尻遺跡、関根細ケ谷遺跡、関根赤城遺跡に細分されたこと、平成23年度に開始された田口下田尻遺跡を先行して82としたことから、関根細ケ谷遺跡は81a、関根赤城遺跡は81bとした。

第3節 調査に至る経過

上武道路7工区の発掘調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。その後の工事は順調で、県道前橋赤城線までの供用が間近に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の現道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、8工区は、開通部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声が一段と強まった。

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が起点側から始まった。これまでの調査状況からみて、埋蔵文化財が用地内にあることは明確であったことから、埋蔵文化財の発掘調査を実施するための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお、「協定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間の開始を3ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。この「変更協定書」に基づいて、平成18年7月から東端の上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群の発掘調査が開始された。

また、各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課(以下、「県文化財保護課」と略記する)により、平成18年4月25・26日、同年5月17・18日、同年8月11日、同年12月5～7日、平成19年8月16～27日、同年12月10～14日、平成21年1月6日～8日、同年4月20日～5月7日、同年9月25～29日、平成22

年12月6～20日、平成23年5月12日、同年8月22日～24日、同年10月18日、の13回(23年度末現在)にわたって、8工区の試掘調査が実施された。

芳賀東部団地遺跡周辺の試掘調査は、平成18年12月5日～7日の間に県文化財保護課によって実施され、荻窪川以西～上信五代工業団地以東までの区間は「本格的な発掘調査が必要」とされた。上信五代工業団地付近は低地のため、今後試掘・確認調査が必要だが、芳賀東部工業団地付近は、「過去の調査結果から、本調査が必要」とされ、この旨平成18年12月20日付けで当事業団に通知された。この試掘調査結果の通知の「過去の調査結果」とは、前橋市教育委員会(芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団)による昭和51～55年度の調査で、上武道路用地の南北にある対象面積32.78haの区域である。それらの調査結果は発掘調査報告書として第1巻(昭和59年度)、第2巻(昭和63年度)、第3巻(平成2年度)が刊行されている。

上述の試掘調査結果を受け、本遺跡の調査は平成18年度末に国土交通省関東地方整備局長、群馬県教育委員会教育長、当事業団理事長の三者の協議を経て、平成19年4月2日付けで5月から着手することとなった。また、本遺跡の一部は平成19年度に終了しなかったため、平成20年4月1日から鳥取松合下遺跡の調査と併行して実施し、平成20年8月に終了した。

第2章 立地と環境

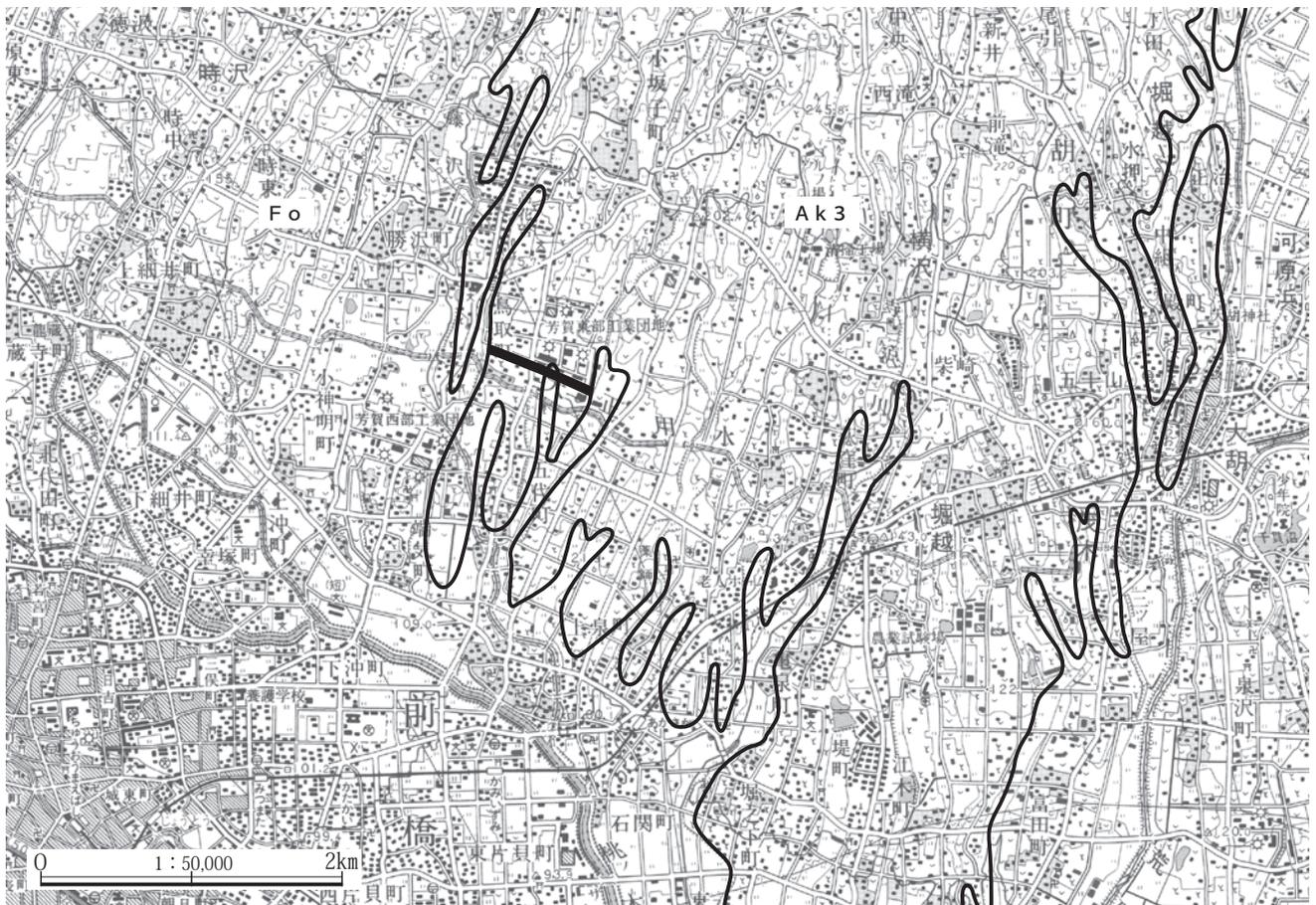
第1節 地理的環境

本遺跡は上武道路用地内という制約もあって、幅約40m・長さ約790mの「トレンチ」状の調査である。面的に調査を実施した前橋市教育委員会による「芳賀東部団地遺跡」（以下、「芳賀東部(市教委)」と略記する)の広がりと比較すると、遺構の分布や地形的特徴を把握するには限界がある。そこで、芳賀東部(市教委)の発掘調査報告書に導かれつつ、本遺跡(以下、「芳賀東部(上武道路)」と略記する)の位置を記すこととする。

芳賀東部(上武道路)は赤城山の南麓にあり、現代の標高では142.0mから147.7mの間にある。第3図は『群馬県10万分の1地質図』の一部と、『国土地理院5万分1地形図』の一部とを重ねたものである。芳賀東部団地遺跡周辺は、地質的には赤城火山第3期噴出物(Ak3溶結凝灰

岩・軽石及び火山灰)と、第四紀山麓堆積物(Fo礫・砂及びローム)が堆積する。赤城南麓は、中小河川が下刻して谷地形を作り、その間に残された尾根筋が赤城山山頂部を中心にして放射状に残っている。遺跡近傍の中小河川は広瀬川低地帯に至って桃ノ木川に合流し、南東に向かう。上武道路の路線沿いに実施された旧石器調査では、厚さを異にしつつローム層が堆積している。A区東端の国土交通省によるボーリング調査結果では、下位に「黒～黒褐色砂質シルト」が約2m堆積し、その下位には1m弱の「暗灰色礫混じり火山灰」、その下5mまでが「暗灰色玉石混じり火山灰礫」である(P.118 第15図-上)。

昭和40年代以前の地形で水田が営まれているのは、谷地形のなかのみで、尾根筋は山林または畠である。第4



第3図 芳賀東部団地遺跡周辺の地質

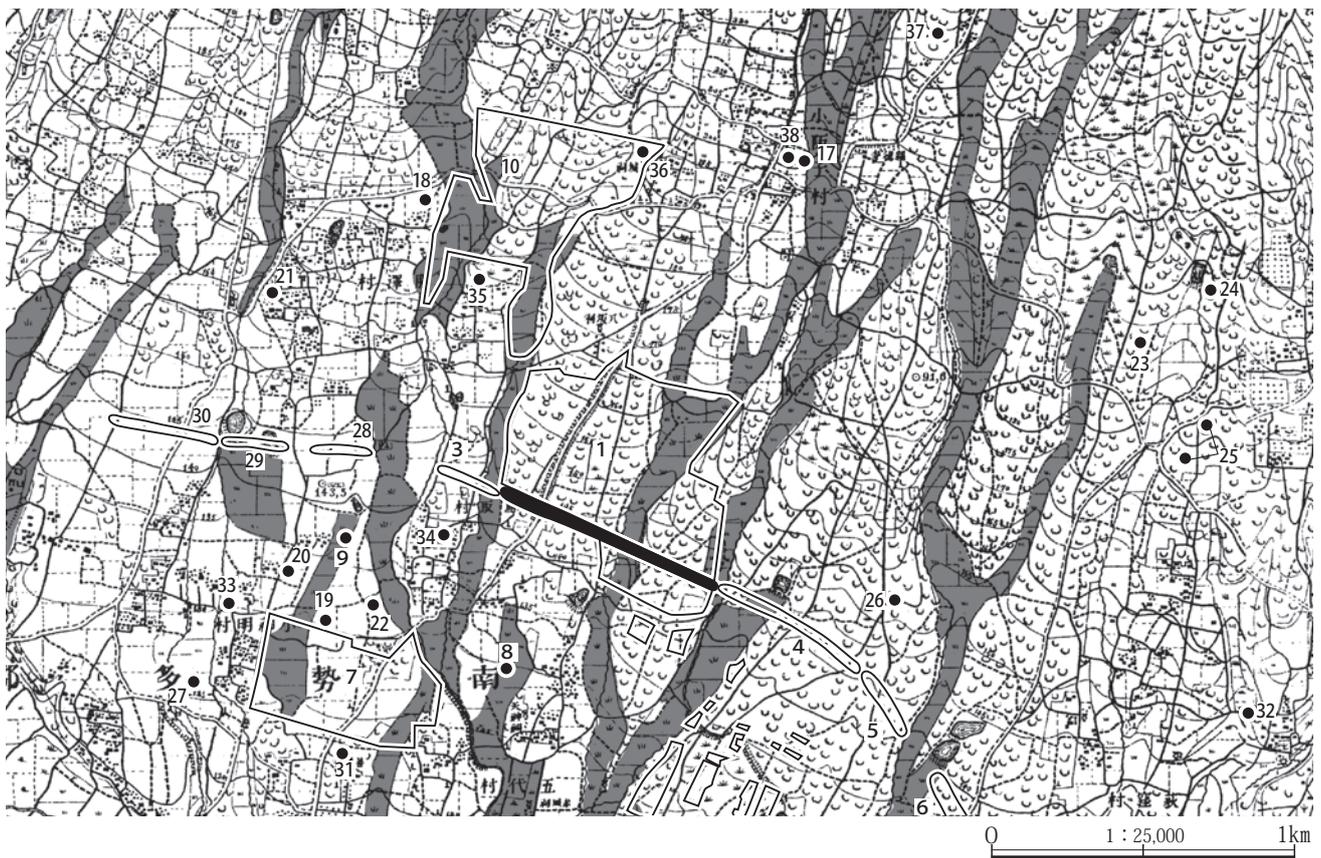
図は明治時代に測量された「迅速図」(1/2万)を1/2.5万に縮小し、道路・溜池・神社等を目安に、上武道路用地と近傍の遺跡を重ねたものである。谷筋に網かけを加筆している。谷地形を上流にたどると、小規模な溜池の存在に気付く。芳賀東部(上武道路)のA区(東端)は谷筋の上であり、C区西端は低地(天神川の谷)を臨む位置にある。さらに、西端のI区は金丸川の低地(鳥取松合下遺跡)に接していることが読み取れ、現地での微地形観察・推定と一致していることが解った。

第5図は米軍による第二次大戦後の航空写真の一部である。記録によると昭和21年の撮影で、現地を特定するのが難しいが、芳賀東部(上武道路)調査区域のほぼ中央部に相当するD区西端と推定できる地点に●を示した。図中下部の白い帯は大正用水である。大正用水は大正7年12月に群馬県会で決議され、昭和18年着工、昭和27年

竣工という(『勢多郡誌』1958)。空中写真撮影時は工事中と推定される。

大規模な発掘調査が行われる以前の地形としては、昭和43年の前橋市現形図があり、狭い範囲では比較的起伏に富んだ地形であったと考えられる。第6図は前橋市の1/2500現形図を1/1万に縮小し、芳賀東部(上武道路)区域を加筆したものである。A区東端の五代川、C区とD区の境界とした天神川、鳥取松合下遺跡の金丸川の位置も加筆した。この図と迅速図とを比較してみると、昭和43年図では大正用水が設置されたほか、道路が直線的になったり、住宅が増加しているなどの変化はあっても、芳賀東部団地遺跡全体としては、地形的に大きな変化がないと考えられる。

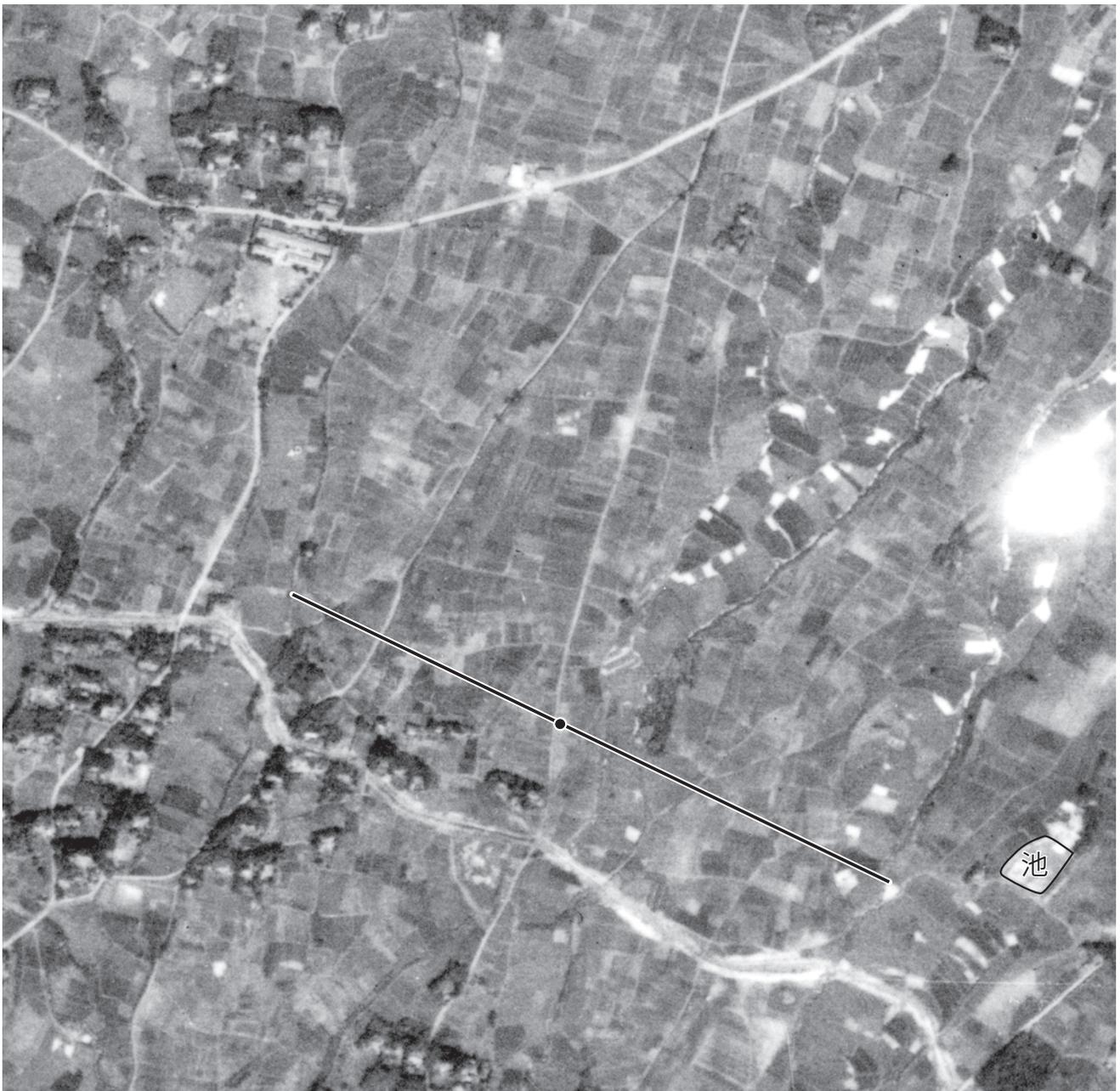
当事業団の調査担当が現地入りした平成19年5月の時点では、東半部の様相が一変していた。芳賀東部団地遺



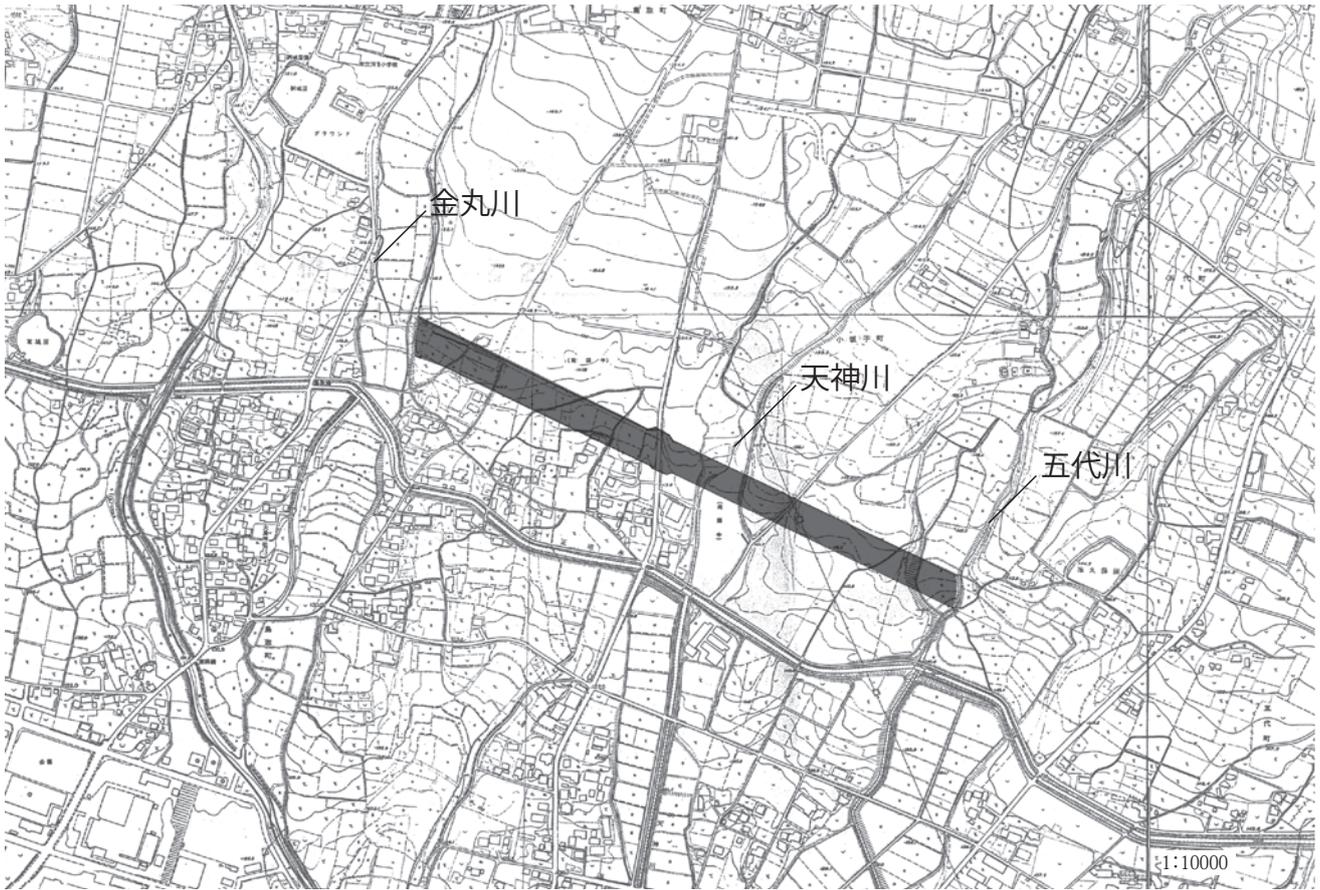
第4図 旧地形図上の遺跡 明治18年「迅速図」に芳賀東部(上武道路)を加筆(網点は谷地形)

跡(上武道路)は、調査着手時点で、すでに上武道路用地南北の両側に工業団地や住宅団地が営まれており、東側のA B C D区では団地造成前の微地形を見ることはできなかった。それを補うのが市教委調査の記録である。第7図は市教委報告書第2巻(318頁)に掲載された図に、芳賀東部(上武道路)のA区からI区の位置を加筆したものである。この図によると、上武道路A区の東側に谷地形があり、「A谷」と呼ばれる。A谷は東側に所在する砂留遺跡との間に南流する五代川の谷筋である。「B谷」は上武道路用地に含まれず、大正用水に谷頭がかかっていて、芳賀東部(市教委)の南東部に相当する。「C谷」は芳

賀東部(上武道路)のC区-D区境界とした天神川の谷筋に相当し、「東側台地」と「西側台地」とを分けてさらに上流に遡り、「中央台地」の東西に分岐する。「D谷」は芳賀東部(上武道路)のE区-F区の境界とした浅い谷地形に相当する。「E谷」は芳賀東部(上武道路)西端のI区の西側の低地に相当し、金丸川東側の鳥取松合下遺跡A B C区の谷筋に相当する。以上のように、芳賀東部(上武道路)区域で観察・推定された微地形が、市教委報告書に掲載された谷と台地との微地形分析に概ね一致することが理解できた。



第5図 昭和21年(1946年)米軍による空中写真(コース158-A-5の一部を拡大)



第6図 芳賀東部団地遺跡(上武道路)の位置と小河川(S.43前橋市現形図に加筆)



第7図 芳賀東部団地遺跡の谷筋 前橋市教育委員会「芳賀東部団地遺跡」第2巻の図(318頁)に加筆

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、近年の大規模開発に伴う発掘調査によって明らかにされた、旧石器時代から中近世に至る時代の遺跡が多数あり、それらの遺跡の発掘調査報告書も多数刊行されている。東側では五代砂留遺跡群(当事業団)、北側と南東側は芳賀東部団地遺跡(市教委)・五代南部工業団地住宅団地、北西部では芳賀北部団地遺跡(市教委)、西側では鳥取松合下遺跡・胴城遺跡(当事業団)の調査があり、南西部では芳賀西部団地遺跡(市教委)がある。

周辺の遺跡をあげて歴史的環境を考察する方法がもっとも一般的な手法であるが、ここでは比較的近い距離にあって本遺跡の一部または密接な関係をもつと考えられる遺跡を取り上げ、本遺跡の内容を考える一助としたい。芳賀東部団地遺跡(上武道路)がその一部をなす「芳賀東部団地遺跡(市教委)」が鍵になる。

旧石器時代

平成23年度末に『上武道路・旧石器時代遺跡群(3)』(2012, 当事業団)が刊行され、上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群(近傍遺跡6)・上泉武田遺跡(5)・五代砂留遺跡群(4)・芳賀東部団地遺跡(2)・胴城遺跡(3)の6遺跡出土の旧石器について、報告されている。詳細はそちらに譲るが、「群馬編年」のⅠ期からⅣ期までの旧石器が出土し、環状ブロック群や礫群の存在が明らかにされた。そのほか、鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡(8)では、群馬編年Ⅴ期に相当する細石器が350点以上出土し、「同様の時期の遺跡がこの周辺にさらに存在する可能性は高い」と予想されている。

縄文時代

芳賀東部団地(1, 市教委)をはじめとして、芳賀北部団地(10)・川白田(17)・五代伊勢宮Ⅵ(16)の各遺跡で縄文時代住居等が発見されている。手元の集計では、近傍の遺跡地図に示した遺跡で263軒の縄文時代住居を数える。前期から竪穴住居を構えるようで、川白田遺跡で早期、湯気遺跡で草創期の土器片が確認されている。

弥生時代

倉本遺跡(近傍遺跡19)で弥生中期の住居2軒、湯気遺

跡(20)で後期の住居1軒、小神明勝沢境遺跡(29)で後期の住居2軒が検出されているが、縄文時代に比較して発見例が少ない。

古墳時代

この時代以降、集落の発見例が多くなり、埋没した古墳も発見されている。昭和13年刊行の『上毛古墳綜覧』では、芳賀村の古墳は64基(前方後円墳4、円墳55、他5)が集計されている。近傍遺跡であげた胴城遺跡、芳賀東部団地(市教委)、芳賀西部団地、芳賀北曲輪、西田、オブ塚古墳他の各遺跡検出古墳数は49基となり、これらを加えると100基を越える古墳が存在していたと推定されている。古墳時代の古い段階として五代中原Ⅱ遺跡・Ⅲ遺跡(11)の集落がある。芳賀東部団地(1)の南東区域にも前期のH420号住居他があり、いわゆる「石田川期」の集落がこの付近を中心に分布する。五代川東側の低地に、五代砂留遺跡群(4)の45地区があり、ここにも「古墳時代前期中葉の集落の可能性が高い」住居群が発見されている。近傍の古い時期の古墳として、端気着帳遺跡(芳賀西部団地の南約500m)の方形周溝墓2基が弥生時代末～古墳時代初め(As-C降下以前)、五代江戸屋敷遺跡(五代伊勢宮遺跡の南約100m)の方形周溝墓2基(周溝埋没土はAs-C混土)が4世紀中頃とされる。

奈良平安時代

近傍の遺跡では、やはり芳賀東部団地(1)が最大の軒数で413軒、次が芳賀北部団地遺跡の237軒である。その他、近傍遺跡地図に掲載した遺跡の住居数を足し合わせると、一部に古墳時代を含むが1129軒にもなる。芳賀東部団地(1)が、この付近の中心的・拠点集落と考えられる。

中近世以降

戦国時代には比較的小規模な城址・砦が造られ、大胡氏の勢力圏に含まれていたとされる。五代伊勢宮遺跡の南方約1.3kmにある上泉城は、上泉伊勢守の居城という。明治22年4月には、嶺・小坂子・五代・鳥取・勝沢・端気・小神明の7カ村が合併して「南勢多郡芳賀村」が成立し、当時の戸数516戸・人口3107人との記録が残っている。第8図の町名境は、現代の境界線を加筆したもので、当

時の境界とは一致しないが、大雑把な位置関係はつかめるであろう。

[参考文献]

『端気遺跡群 I』前橋市教育委員会,昭和57年,1983

前橋市史編さん委員会『前橋市史』第一巻,前橋市,1971

前橋市史編さん委員会『前橋市史』第四巻,前橋市,1978

『上毛古墳綜覧』群馬県,1938

『群馬県史 通史編7 近現代1』付表,群馬県史編さん委員会,1991

『上野国郡村誌1 勢多郡(1)』群馬県文化事業振興会,1977



第8図 近傍の遺跡分布図 国土地理院1/25,000地形図「前橋」平成22年発行、「渋川」平成14年発行、「鼻毛石」平成14年発行、「大胡」平成22年発行を使用

第2表 近傍の遺跡一覧表 ●=遺物主体,○=遺構伴う 「飛鳥」は古墳に含まれる場合がある。

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生		古墳			飛鳥		奈良 ～ 平安	中世	近世	備考(その他の遺構)	文献	
			草	早	前	中	後	晩	中	後	住	墓	生	住						墓
1	芳賀東部団地遺跡市教委				○	○	○			○	○				○	○	○	○	鍛冶址,製鉄跡	
1	芳賀東部団地遺跡1998														○			出入口のある住居		
1	芳賀東部団地遺跡2005														○			8c初頭以降		
2	芳賀東部団地遺跡群埋文	●	●	○	○	○			○			○			○		○		本遺跡	
3	鳥取松合下遺跡・胴城遺跡	●		○	●	●			○	○					○		○	銅椀破片,鉄斧,古墳1基,前期住居1,題目銭	G534	
4	五代砂留遺跡群	●		○					○						○	○	○	鍛冶遺構,道路状遺構	G530	
5	上泉 武田遺跡	●		●	●				○						○		○		年報27	
6	上泉 新田塚遺跡群	●		○	○				○	○					○			7c代円墳	G522	
7	芳賀西部団地			○	●	●			○								○	○	古墳31基(5c後半～6c初頭)	
8	鳥取福蔵寺・福蔵寺Ⅱ遺跡	●		○	○	○			○					○	○		○	9c中頃精錬鍛冶炉,中世掘立柱建物		
9	九料遺跡			●	●	○			○						○		○	硬玉大珠,張り出しピット		
10	芳賀北部団地遺跡			○	○				○						○	○	○	神功開宝,製鉄跡,勝沢城一部		
11	五代中原Ⅰ～Ⅲ遺跡			○	○				○						○			4c代ベッド状遺構のある住居		
12	五代山街道Ⅰ遺跡			○	○				○						○		○			
13	五代深堀Ⅱ遺跡				○				○						○					
14	五代木福Ⅰ遺跡・木福Ⅲ遺跡			○	●	●			○						○		○	9c中鍛冶工房跡		
15	五代竹花・竹花Ⅱ遺跡			●	○	●			○						○		○	H7住=和銅開造2,神功開宝3,銅鈴2		
16	五代伊勢宮Ⅰ～Ⅳ遺跡・伊勢宮遺跡(1)(2)			○	○				○	○					○		○	鍛冶工房跡8c後～9c前葉		
17	川白田遺跡		●	○	●	●	○										○	軽石製石製品,近世井戸覆屋		
18	芳賀北曲輪遺跡			○	○		●						○					古墳6基7c中頃		
19	倉本遺跡							○									○	○	弥生中期～後期住居2軒,縄文土器	
20	湯気遺跡	●	●						○	○					○					
21	オブ塚古墳									○								全長35m前方後円墳,6c後半		
22	西田遺跡			○					○	○								関山式期3軒,和泉期4軒		
23	萩窪 鱒塚遺跡										○	○						「林」墨書土器,布掘り掘立柱		
24	萩窪 東爪遺跡			○																
25	萩窪倉兼・倉兼Ⅱ遺跡														○					
26	松峯遺跡・五代松峯Ⅱ遺跡								○						○			奈良三彩小壺,出入口ピットのある住居		
27	大明神遺跡								○											
28	堤遺跡	○	●	○	●	○									○	○		柄鏡形敷石住居,中世火葬墓	年報28	
29	小神明勝沢境遺跡				○				○	○					○	○	○	弥生後期2軒,古墳前期4軒	G524	
30	小神明富士塚遺跡			●					○						○	○	○	中世屋敷跡	G524	
31	天台宗善勝寺															○		鉄鑄造阿彌陀如来座像,仁治4年(1243年)銘		
32	萩窪城跡																○	16世紀		
33	小神明の寄居・砦																○	16世紀		
34	鳥取城																○	15～16世紀		
35	勝沢城																○	16世紀		
36	小坂子城跡																○	16世紀		
37	小坂子要害城																○	16世紀		
38	川白田の砦																○	16世紀		

第2章 立地と環境

[文献] 番号は第8図番号、近傍の遺跡表番号と一致

- 1 『芳賀東部団地遺跡I』前橋市教育委員会,芳賀団地遺跡群第1巻,1984
- 1 『芳賀東部団地遺跡II』前橋市教育委員会,芳賀団地遺跡群第2巻,1988
- 1 『芳賀東部団地遺跡III』前橋市教育委員会,芳賀団地遺跡群第3巻,1990
- 1 『芳賀東部団地遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998
- 1 『芳賀東部団地遺跡III』,前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2005
- 2 本遺跡
- 3 『鳥取松合下遺跡・胴城遺跡』群埋文,534集,2012
- 4 『五代砂留遺跡群』群埋文,530集,2012
- 5 『年報』27,群埋文,2008
- 6 『上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群』群埋文,522集,2011
- 7 『芳賀西部団地遺跡』前橋市教育委員会,芳賀団地遺跡群第4巻,1991
- 8 『鳥取福蔵寺遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1997
- 8 『鳥取福蔵寺II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998
- 9 『小神明遺跡群II』前橋市教育委員会,1984
- 9 『小神明遺跡群IV』前橋市教育委員会,1986
- 9 『小神明遺跡群V』前橋市教育委員会,1987
- 10 『芳賀北部団地遺跡I』前橋市教育委員会,芳賀団地遺跡群第5巻,1994
- 11 『五代伊勢宮III遺跡・五代深堀II遺跡・五代中原I遺跡・五代伊勢宮IV遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002
- 11 『五代伊勢宮VI遺跡・五代中原II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2003
- 11 『五代中原III遺跡・五代山街道I遺跡・五代山街道II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2004
- 12 『五代中原III遺跡・五代山街道I遺跡・五代山街道II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2004
- 13 『五代伊勢宮III遺跡・五代深堀II遺跡・五代中原I遺跡・五代伊勢宮IV遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002
- 14 『五代竹花遺跡・五代木福遺跡・五代伊勢宮I遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2001
- 14 『五代竹花II遺跡・五代木福III遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2004
- 15 『五代竹花遺跡・五代木福遺跡・五代伊勢宮I遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2001
- 15 『五代竹花II遺跡・五代木福III遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2004
- 16 『五代竹花遺跡・五代木福遺跡・五代伊勢宮I遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2001
- 16 『五代伊勢宮II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002
- 16 『五代伊勢宮III遺跡・五代深堀II遺跡・五代中原I遺跡・五代伊勢宮IV遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002
- 16 『五代伊勢宮VI遺跡・五代中原II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2003
- 16 『五代伊勢宮遺跡(1)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2007
- 16 『五代伊勢宮遺跡(2)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2009
- 17 『川白田遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998
- 18 『芳賀北曲輪遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1990
- 19 『小神明遺跡群II』前橋市教育委員会,1984
- 20 『小神明遺跡群IV』前橋市教育委員会,1986
- 21 『前橋市史』第一巻,前橋市,1971
- 22 『小神明遺跡群II』前橋市教育委員会,1984
- 23 『荻窪鰯塚遺跡・荻窪東爪遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002
- 24 『荻窪鰯塚遺跡・荻窪東爪遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002
- 25 『荻窪倉兼遺跡・荻窪倉兼II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2003
- 26 『松峯遺跡』前橋市教育委員会,1982
- 26 『五代松峯II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998
- 27 『小神明遺跡群II』前橋市教育委員会,1984
- 28 『年報』28,群埋文,2009
- 29 『小神明勝沢境遺跡・小神明富士塚遺跡』群埋文,524集,2012
- 30 『小神明勝沢境遺跡・小神明富士塚遺跡』群埋文,524集,2012
- 31 『増補前橋の文化財』前橋市教育委員会,1999
- 『前橋市史』第一巻,前橋市,1971
- 32-38 『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会,1989

第3章 調査の方法と経過

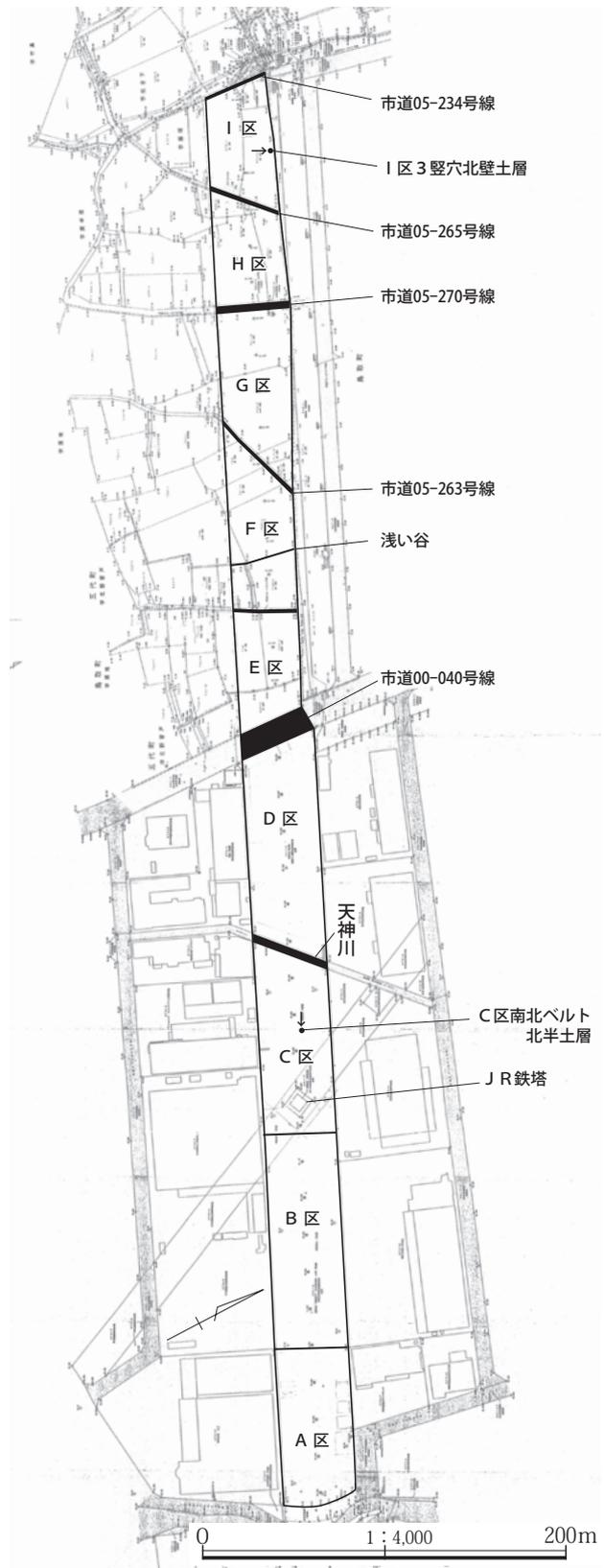
第1節 調査の方法

1 試掘調査

本遺跡周辺の試掘調査は平成18年12月に群馬県教育委員会文化財保護課によって実施されたが、本遺跡隣接地ですでに前橋市教育委員会による発掘調査が昭和51～55年に行なわれており、遺跡・遺構のあることが明らかであることから、上武道路用地内の試掘調査は実施されず、直接本調査を実施することになった。

2 調査区・グリッドの設定

芳賀東部団地遺跡は、東端の五代川の低地と西端の金丸川の低地に挟まれた区域で、東西約790m、幅約40mの区域である。調査区は市道00-040号線を境界として、東側のA B C D区と、西側のE F G H I区に大きく分けられる。東側は用地の南北に工業団地が営まれ、すでに活動中であり、南北の断面では上幅約30m・下幅40m（路線幅に等しい）の台形を呈する。西側のEからI区は、用地北側に芳賀住宅団地の擁壁があり、南側は畠と宅地で、もとの地形を残している。調査対象区域東側のなかにJRの鉄塔が存在し、この周辺を先行して調査することが求められたことから、地形と鉄塔とを含めて勘案し、天神川を境としてその東側から鉄塔までをC区、鉄塔から東側の高い区域をB区、B区の東側に位置する一段低い区域をA区とした。D区は天神川から市道00-040号線までの区域、E区は市道00-040号線から西側の浅い谷地形まで、F区はこの谷地形から西側の細い市道05-263号線までである。G区は市道05-263号線から西側の市道05-270号線まで、H区は市道05-270号線から市道05-265号線まで、I区は市道05-265号線から市道05-234号線までの区域である。国土交通省による土地番号は118～159までで、A区=118の一部(120除外)、B区=118の中央部、C区=118の西部(121除外)、D区=123、E区=126～129(130～132除外)、F区=134～138、G区=141～147、H区=149～152、I区=155～156(148・153・154・157・



第9図 調査区の設定 国土交通省1/500丈量図 平成19年に加筆



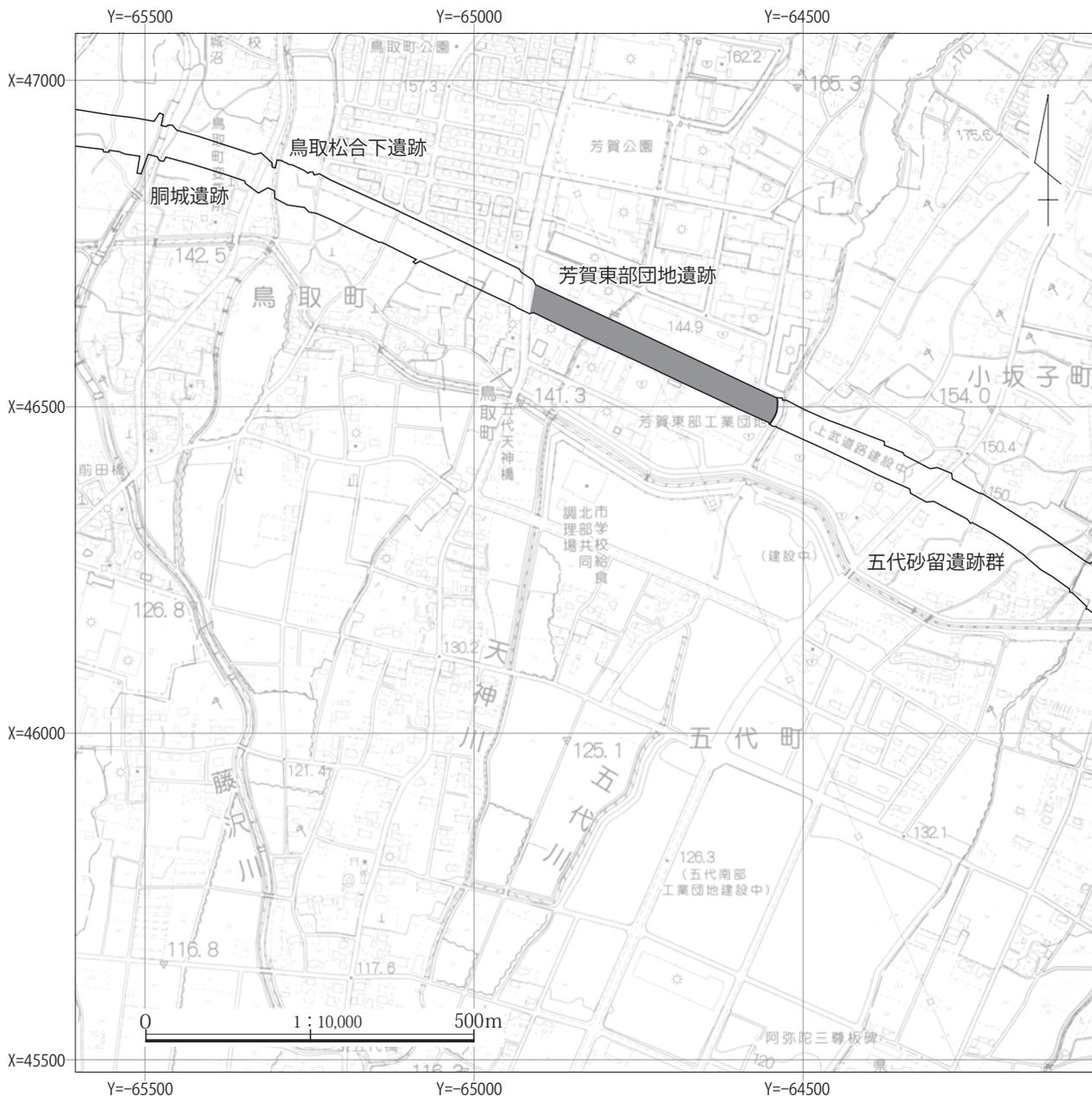
第10図 芳賀東部団地遺跡調査区位置図(1) 前橋市1/2500現形図 昭和43年を使用

158・159除外)である。

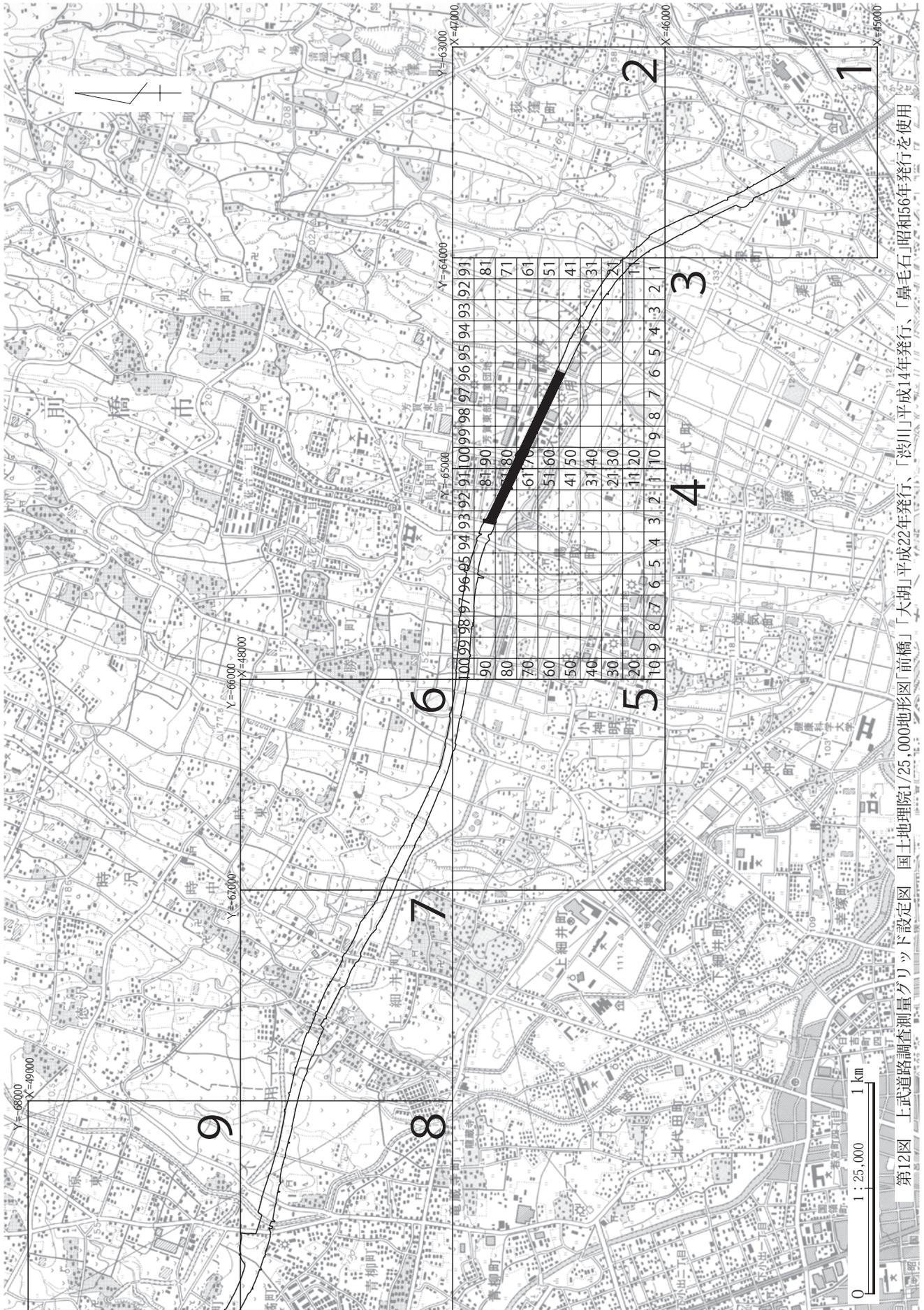
グリッドは、8工区の起点である国家座標第IX系(世界測地系) X=45,000、Y=-63,000を基準に設定した。上武道路調査区域の統一仕様では、1km四方が地区、その中の100m四方を区とし、さらに区の南東隅を基点に5mごとにX軸が南から1～20、Y軸が東からA～Tをつけて小区画に細分した。この表記は遺構の位置を示したり、遺物の取上げ、遺物注記などの作業で使われてい

る場合がある。本遺跡は3区と4区とにまたがる区域である。

本遺跡も上武道路7工区までの仕様にあわせ、遺跡略称「JK」を使用した。本遺跡はJK56である。また、遺構等の位置・範囲をX-Y座標値の下3桁で表記する場合がある。



第11図 芳賀東部団地遺跡調査区位置図(2) 前橋市1/2500現形図 平成21年版を使用



第12図 上武道路調査測量グリッド設定図 国土地理院1/25,000地形図「前橋」「大胡」平成22年発行、「渋川」「鼻毛石」昭和56年発行を使用

第2節 基本土層

東半部の代表としてC区南北ベルトの土層、西半部の代表としてI区3 豎穴の北壁土層を示す。土層採取地点は、第9図の調査区設定図に●で示した。→は土層を見た向きである。

1 C区南北ベルト

C区は本遺跡調査の第1着手地区である。C区の路線用地外の南北の区域は工業団地として造成されて深く平坦に掘り下げられており、周囲の地形から旧地形を想定することは困難であった。着手時には調査区域全体が平坦化されており、わずかに西端の天神川に面する範囲が斜面をなしていた。北端に沿って掘削を始めたところ、表面から数十cmのローム層は造成盛り土であることが判明した。土層観察のため、東西・南北のベルトを残して遺構確認面まで掘削したところ、北端付近では表面から約1mで遺構確認面に達し、南端近くでは約2.5mの盛り土のあることが判明した。

第13図は土層観察用の東西ベルトと南北ベルトとの交点付近で、南北ベルトの北半部である。4層上面が工業団地造成以前の旧地表と推定する。5層は黒色土で白色軽石を多く含み、近世以前の表土と考えられる。

2 I区3 豎穴北壁土層

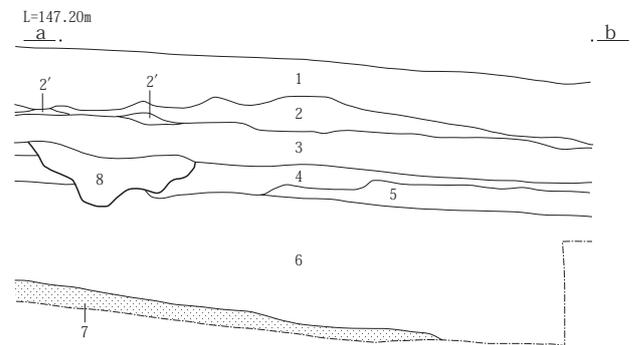
I区は本遺跡西端の調査区である。3 豎穴はI区北辺の中央部にある豎穴で、縄文時代前期の所産と推定され、豎穴の北半部は調査区外にある。第13図下は3 豎穴土層の一部で、1が現在の表土、2は黒褐色系の土で白色軽石・黄白色軽石を含む。3～6層は豎穴の埋没土である。豎穴の北側には、住宅団地南端のコンクリート擁壁があり、1層・2層とも土木工事で動いている可能性がある。

第3節 調査の経過

以下、日誌から調査の経過を追う。

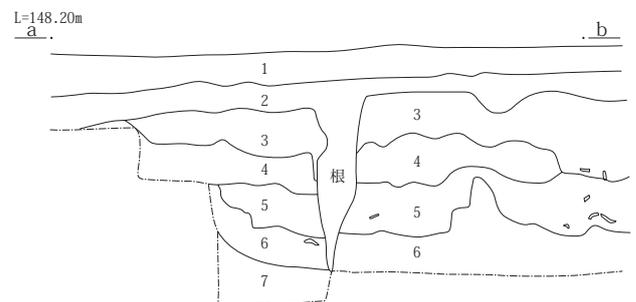
平成19年度の調査経過

5月 22日、現地入り。5月中は現地の状況を確認し、事務所の設置場所や着手順などの打合せを行なう。調査



C区 南北ベルト土層の部分図

- 1 黄褐10YR5/6 崩れたロームの埋土。黒褐色土ブロック・礫が一部に混じる。粘性・しまりやや強。工場建設後の駐車場造成土。昭和55年以降。
- 2 暗褐10YR3/3 細砂粒・黒褐色土・褐色土を層状に混入する。粘性・しまり弱い。前橋市教委調査開始から駐車場造成前までの土。発掘調査の廃土か。昭和51年以降。
- 2' 細砂層。2層の一部。
- 3 黒褐10YR3/2 白色軽石・細砂粒少量、ローム粒子微量混じる。団地造成前の堆積土。ワイヤーロープ埋設溝(4溝)より新しい。
- 4 黒褐10YR2/2 白色軽石・細砂粒・黒色土(5層)ブロック(1～3cm大)少量混。粘性弱。しまりやや弱。4溝より古い。
- 5 黒10YR2/1 白色軽石多量混。粘性・しまりやや強。近世以前(古墳～平安か)の表土。
- 6 灰黄褐10YR4/2 古墳～平安時代の遺構覆土。
- 7 明黄褐10YR7/6 地山ローム層。
- 8 1溝 黒褐10YR2/3 細砂粒・粗砂粒多。粘性弱、しまり強。



I区 3 豎穴土層の部分図

- 1 暗褐色土 表土。
- 2 黒褐色土 白色軽石・黄白色軽石を含む。締まりなし。
- 3 黒褐色土 2より白色軽石少ない。土の粒子細かい。
- 4 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。
- 5 灰黄褐色土 白色軽石を含む。4より赤味あり。
- 6 にぶい黄褐色土 白色軽石・ローム粒子・ロームブロックを含む。締まっている。
- 7 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。締まっている。

第13図 基本土層図 C区南北ベルト, I区3 豎穴土層 1/40

を始めるための事務処理を行なう。

6月 4日、旧杭を撤去し、除草等を行なう。7日、C区の表土掘削を開始する。遺構確認を平行して実施する。鉄塔から10m空けて周囲の掘削を行なう。20日、C

第3章 調査の方法と経過

区住居・溝の掘り下げ開始。基準点・水準点の測量を始める。25日、1～3住居、1～6土坑、1～3溝の掘り下げ及び図・写真記録をとる。26日、C区の遺構概念図の作成を開始する。28日、4・5住居の掘り下げを開始する。

7月 3日、C区1～5住居掘り下げ及び記録を続ける。6日、C区南北ベルト・東西ベルト土層掘り下げを進め、記録をとる。12日、C区6～7住居掘り下げ・記録を開始する。土坑・ピットの調査を開始する。

8月 1日、C区6～7住居記録を終了する。掘立柱建物掘り下げ・記録を開始する。2日、D区幅杭確認開始。3日、C区1面の空撮を実施する。7日、C区2面掘り下げを開始する。20日、D区1トレンチの掘削を開始する。22日、D区2・3トレンチの掘削を開始する。24日、C区2面の空撮を実施する。D区1～3トレンチを埋め戻す。27日、C区2面縄文確認トレンチの掘り下げを開始する。28日、D区西半部の表土掘削を開始する。

9月 3日、C区縄文遺構確認トレンチと土坑の掘り下げを続行する。D区遺構確認と土坑等を掘り下げる。4日、C区旧石器トレンチ12・13の掘り下げを開始する。D区の旧石器トレンチの掘り下げを開始する。6～7日、台風9号接近のため作業休止。10日、C区旧石器トレンチ掘り下げに全面移行する。14日、D区旧石器トレンチ2で礫群出土を確認する。25日、E区草刈りを開始する。26日、C区記録作業終了し、埋め戻しを開始する。B区東端から表土掘削を開始し、ローム層まで削平されていることを確認する。D区集石遺構の平面図を作成し、記録を終了する。27日、D区埋め戻しを開始する。28日、B区東寄り焼土1カ所を検出する。

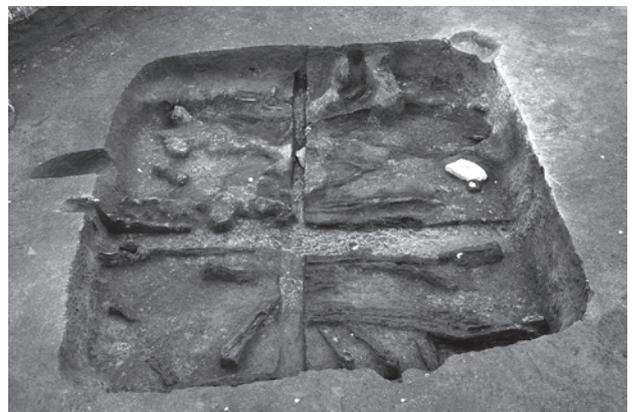
10月 1日、B区ピット・土坑の掘り下げを開始する。4日、C区埋め戻しを終了する。D区埋め戻し終了し、整地を開始する。11日、D区事務所配置の縄張りをする。B区ピット・土坑を掘り下げ、記録をとる。F～I区の草刈りを進める。12日、B区の空撮を実施する。16日、B区の旧石器トレンチの掘り下げを開始する。E～I区の柵囲いを開始する。17日、B区旧石器トレンチから剥片が出土し始め、トレンチを拡張する。D区新事務所建物の設置を開始する。23日、F・G区にトレンチを設定し、遺構の確認を開始する。24日、E区表土掘削を開始する。B区旧石器トレンチの拡張が続く。25日、E区の遺構確認を開始する。31日、事務所をA区からD区に移転する。



▲A区1トレンチ北壁土層



▲B区旧石器トレンチ拡張全景



▲C区4住居 炭化物出土状況



▲D区旧石器時代の集石

11月 1日、E区の住居の掘り下げを開始する。12日、E区住居の掘り下げ・写真撮影と土坑等の掘り下げを進める。A区の北側1トレンチの掘削を開始する。15日、A区南側2トレンチの掘削を開始する。E区空撮を実施し、旧石器トレンチの掘り下げを開始する。19日、A区1トレンチの住居掘り下げを開始する。20日、B区旧石器135点に達する。26日、A区全景写真を撮影する。B区旧石器出土地点のラップ巻き保存を開始する。27日、B区9トレンチの土層剥ぎ取りを実施する。30日、A区の埋め戻しを開始する。

12月 3日、A区埋め戻しが完了し、調査終了。5日、B区旧石器149点に達する。E区旧石器80点出土する。12日、B区旧石器164点、E区旧石器191点出土する。F区表土掘削を開始する。14日、B区旧石器168点、E区200点以上出土する。18日、B区旧石器177点、E区旧石器215点出土する。F区遺構確認を進める。21日、B区旧石器182点、E区300点以上出土。G区遺構確認トレンチを掘り下げる。25日、E区トレンチの埋め戻し終了。26日、年末年始休止に備えて現地養生を実施する。

1月 8日、調査再開する。B区旧石器185点出土する。F区住居の掘り下げを開始する。H・I区安全柵を設置する。11日、B区高所作業車で全景写真を撮影する。H区の表土掘削を開始する。15日、B区旧石器204点に達する。F区遺構掘り下げを続行し、記録を進める。16日、B区の調査を終了する。H区の遺構確認を進める。17日、H区の遺構掘り下げを開始する。18日、B区の埋め戻しを開始する。23日、雪のため作業を休止する。25日、B区の埋め戻しを終了する。F区・H区の掘り下げを続行し、記録を進める。29日、F区空撮を実施し、旧石器トレンチの掘り下げを開始する。H区縄文遺構確認トレンチを拡張する。

2月 7日、H区住居の空撮を実施し、掘り方調査を開始する。F区旧石器トレンチの掘り下げを続行する。12日、F区調査が終了する。G区の表土掘削を開始し、遺構確認を進める。13日、G区の住居の掘り下げを開始する。H区一部で旧石器トレンチの掘り下げを開始する。18日、H区墓地跡の改修に立ち会う。22日、H区墓地跡の表土掘削を開始する。25日、H区墓地跡から元禄12年銘墓石、享保17年銘墓石が出土する。28日、H区墓地跡から人骨が出土する。



▲E区6住居浅間山As-Bの堆積土層



▲G区2住居カマド遺物出土状況



▲H区住居の調査



▲I区2竖穴の調査

第3章 調査の方法と経過

3月 4日、G区空撮を実施し、住居の掘り方調査を開始する。H区墓地跡の人骨を13体確認する。5日、H区の人骨13体を取り上げる。住居の掘り方調査を開始する。7日、H区墓地跡土坑群の全景写真を撮影する。13日、G区の調査が終了する。H区の埋め戻しを終了する。14日、I区の表土掘削を開始する。19日、I区の遺構確認で住居9軒を検出し、配置図を作成する。25日、残土運搬車を返却する。26日、年度末の事務処理。

平成20年度の調査経過

4月 調査休止。調査手順の打合せ、発掘準備、新任担当者の研修等を行う。

5月 12日、鳥取松合下(以下、松合下と略称)の草刈りをして杭を確認し、丈量図と調査区域現地の照合を行う。調査区域を現地の地形を勘案し、松合下A区～D区を設定する。A～C区は金丸川の東側、D区は金丸川の西側とする。A～C区の低地部の調査を先行する。13日、芳賀東部G区旧石器トレンチの掘り下げを開始する。15日、県文化財保護課による松合下試掘調査トレンチを復元し、浅間山As-B軽石下の水田(平安時代)がないことを推定する。松合下B区トレンチの北寄り、西側にある胴城遺跡ののる台地の裾部を検出する。20日、松合下A区の埋め戻しを開始する。27日、松合下B区埋め戻しを開始する。28日、松合下C区の全景写真を撮影し、埋め戻しを開始する。30日、松合下D区の表土掘削を開始する(松合下D区の調査は別班が担当したので、以下、D区の日誌は割愛する)。

6月 2日、松合下C区の埋め戻しを終了する。9日、芳賀東部H・I区境界の市道05-265号線の舗装を撤去し、表土を掘削して遺構を確認する。10日、芳賀東部H区のゴミ穴からゴミを除去し、住居の掘り下げを開始する。11日、G区の旧石器トレンチの埋め戻しを開始する。16日、H区2住居から石製巡方が出土する。19日、H区9住居で出入口を検出する。25日、H区1住居の掘り下げが進行し、井戸であることが判明する。

7月 1日、H区北西部で縄文土器が多数出土する。3日、事務局長視察。7日、H区空撮を実施し、カマドの断ち割り調査、住居の掘り方調査を進める。14日、降雨により、H区の遺構が水没する。F区の低地に降雨が集中し、南側民家に溢れたため、堤防を築いて水止めを

する。17日、前日の雨により堤防が決壊したため、再び堤防を築く。22日、H区1面の調査が終了し、2面の縄文時代遺構の調査を全面に展開する。23日、ゴミ穴出土のゴミを集めて産廃処理を進める。

8月 5日、H区縄文時代土坑の調査をほぼ終了し、竪穴の調査を進める。8日、H区旧石器トレンチの調査を開始する。20日、H区南寄りの旧石器6トレンチで剥片が出土する。

9月 1日、H区旧石器6トレンチで原石・台石が出土する。4日、H区旧石器6トレンチの全景写真を撮影する。5日、H区の調査を終了する。8日、H区埋め戻しを開始する。9日、埋め戻しが終了して、本遺跡の調査を終了する。

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

1 各区の概要

本遺跡では東側から現地形や道路等を境界として、A区B区・・・I区の9区域の調査区を設定して調査を進めた。B区とC区との境界は、鉄塔の存在するC区の調査が優先されたことから、鉄塔から安全距離10mをとった地点を境界とした。

A区

調査区東端に位置する。B区C区への進入路となったため、C区→B区→A区の順に調査した。東西約60m・南北約30mの範囲が調査対象である。調査着手時には南北の用地沿いに工業団地が造成されていた。用地の北側・南側は斜めに削られており、調査区域の断面は上面30m・下面40m・高さ1～5mの台形を呈する。

A区は調査着手前まで駐車場への進入口となっていたため、盛り土が厚く施されていた。中央部の舗装された範囲を除外して、北側に1トレンチ、南側に2トレンチを設定して調査を行なった。1トレンチの西寄りの緩い斜面で、1住居を発見した。古墳時代前期の所産と思われる。

B区

A区低地の西側に隣接し、調査着手時には削平されて駐車場として利用されていた区域である。雑草を含む薄い表土と碎石を除去したところ、直下にローム層が現れ、ローム層よりも高い水準の遺構は、失われていた。調査区北側の土層断面を観察した結果、B区東寄りではより深く掘削が及び、西寄りでは比較的浅いことが判明した。駐車場造成前の旧地形は、東寄りに南北走行の尾根が存在し、西に向かって緩やかに低くなる地形だったと推定される。東側はA区の谷地形に向かって急に低くなる地形だったと復元される。古代の住居跡等は検出されず、縄文時代と推定される炉状の土坑1基のほか、道路跡の

可能性のある溝2本を調査した。なお、ローム層中の旧石器調査を実施した。

C区

JR鉄塔を含む区域で、主として鉄塔の西側に住居等の遺構が存在した。鉄塔付近はB区から緩やかに低くなる地形の西端に相当し、鉄塔の西側で浅い谷地形となり、さらに西端は天神川の谷地形に急斜面で落ち込むことが判明した。C区北側では表面から0.5mほどの現代の盛り土が施され、深さ約1mで遺構確認面に達したが、南側では約2.5mの現代の盛り土が認められた。B区を削平した土を盛って、平坦な駐車場を造成したと推定される。全体に北側が高く、急な傾斜で南側が低くなる。

C区では5軒がカマドの設置されない時期の住居で、古墳時代前期(4世紀ころ)の所産とみられる。4住居は火災に遭っていて、炭化木材が多量に出土し、貯蔵穴から皮袋形土器と呼ばれる特殊な土器が出土した。

D区

D区は天神川から市道00-040号線までの区域で、調査着手前まで駐車場として利用されており、厚い盛り土で平坦化されていた。トレンチを設定して造成前の地形を調査した結果、中央部西寄りに南北走行の尾根があり、西側は緩く西に向かって低くなる地形で、東側の天神川までは東西約60mの谷地形であったと復元される。西側はローム層に達するまで削平されていた。ローム層中で発見した旧石器は、前掲報告書に掲載されている。

E区

E区は市道00-040号線の西側にあり、北側は芳賀住宅団地のコンクリート擁壁が築かれ、南側には民家と畠が存在する。中央部西寄りに南北走行の低い尾根があり、東側の市道に向かって緩やかに低くなる。西端はF区との境界となる谷地形である。

第4章 検出された遺構と遺物

第3表 出土遺構数量表

	遺構種	時代								小計	備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世	不詳			
A区	住居跡				1					1	
	土坑									0	
	溝状遺構									0	
	道跡						1			1	
	その他									0	
B区	住居跡									0	
	土坑							71		71	ビット214
	溝状遺構						2			2	
	道跡									0	
	その他		炉1							0	
C区	住居跡				5	1			1	7	
	土坑							244		244	ビット356
	溝状遺構						13			13	
	道跡									0	現代1
	その他					住居痕跡1		掘立柱5		0	
D区	住居跡									0	
	土坑							2		2	ビット9
	溝状遺構							1		1	
	道跡									0	
	その他	集石1								0	
E区	住居跡					6				6	
	土坑							10		10	ビット28
	溝状遺構									0	
	道跡									0	
	その他							掘立柱1		0	
F区	住居跡				2	6				8	
	土坑							11		11	ビット19
	溝状遺構							4		4	
	道跡									0	
	その他							掘立柱2		0	
G区	住居跡				4	11				15	
	土坑							14		14	ビット14
	溝状遺構							3		3	
	道跡									0	
	その他							掘立柱3		0	
H区	住居跡				11	4				15	
	土坑		3				12	57		72	ビット91
	溝状遺構							1		1	
	道跡									0	
	その他							掘立柱1		0	
I区	住居跡		3		6	2				11	8軒+竪穴3
	土坑		96			75				171	ビット49
	溝状遺構									0	
	道跡									0	
	その他		集石1			井戸1				2	集石1+井戸1
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世	不詳			備考
計	住居跡		3	0	29	30	0	0		62	
	土坑		99	0	0	75	12	409		595	ビット755
	溝状遺構		0	0	0	0	15	9		24	
	道跡		0	0	0	0	1	0		1	
	その他	集石1	集石1			井戸1		掘立柱11		0	

E区6住居はAs-Bが堆積し、住居のプランと火山灰の分布範囲がずれていることが判明し、As-Bが堆積した後も凹みが残っていたと考えられる。As-Bの上位にあった青灰色のテフラは、浅間粕川テフラ(As-Kk)の可能性が指摘されている。

F区

F区は北西端がもっとも高く、南東部に向かって低くなる地形である。南東端の谷地形を東側のE区との境界とした。1住居は南北に長い形状を呈し、ほかの住居に比して異質である。これとほぼ平行する辺をもつ2住居からは、鉄滓がやや多く出土した。

検出した8軒の住居のうち、5軒が平安時代と推定され、いずれも長軸方位が似ている。

G区

農道を境界として東側がF区、西側をG区とした。北西端がもっとも高く、南東に向かって低くなる地形である。北側はコンクリート擁壁、南側は畠である。

住居は15軒を検出したが、掘立柱建物を含めて重複する住居がない。1・3・8・14住居が比較的規模が大きい。土器等の出土が多い住居と少ない住居とが存在する。

H区

市道を挟んでG区の西側にあり、南西部に向かって低くなる地形である。調査区北側のやや西寄りがもっとも高く、南東端がもっとも低い。北側は住宅団地のコンクリート擁壁、南側は畠と宅地である。

住居は15軒調査したが、重複する住居はない。5住居は欠番である。8住居は遺物の遺存が良好であり、完形に近いものが多い。南東隅にカマドを設置する。10住居では埋没土や床面水準から多数の滑石小片(チップ)が出土し、滑石工房の可能性はある。11住居は北辺にカマドを設置し、石を多用して粘土で固めるといった特異な構造である。

H区南西部に墓地跡の区域があり、12基の土坑から人骨が出土した。副葬品等から、江戸時代の墓と推定される。68土坑のなかから「南無阿弥陀仏」と铸造された念仏銭が出土した。

I区

I区は調査対象区域の西端にあり、東側H区との境界は墓地跡への参道であり、西側は急な斜面を経て鳥取松合下遺跡の低地になる。I区は全体に南に向かって低くなる地形で、東側のH区の地形につながる。

当初1住居とした遺構は、調査の進展によって井戸であることが判明し、番号を引き継いで1井戸とした。このため、1住居は欠番とした。1井戸では、確認面よりやや下がった深さで4本の柱穴とみられるピットを検出し、「覆屋」のあったことが推定される。2住居はやや大型で一辺6.5m前後あり、床面付近から石製巡方が出土したが、住居自体の推定年代は5世紀代とみられ、石製巡方とは時代が合致しない。9住居は南西辺中央部の住居内に斜路があり、外側の幅1m以内の範囲が踏み固められ、ピットが並んで検出されたことから、出入口を検出したと考えられる。

I区の北西部区域では縄文土器片が集中して出土し、竪穴状の遺構となった。焼土・炉・床面を検出した時点で「住居」と認定したが、当初の名称「竪穴状遺構」を継承し、1・2・3竪穴とした。また、周辺を含めて数十cmを掘削し、第2面の縄文時代の土坑を確認した。85・89・140土坑はフラスコ状の断面をもち、比較的多くのまとまった土器が出土した。

2 時代別概要

各区を通して、以下時代別に概要を記す。

旧石器時代

A区を除き、各区でトレンチを設定して、旧石器の有無を確認した。B区・E区・I区では、いくつかのブロックが認められ、接合した剥片がある。D区では集石が発見され、炭化物と焼土を伴う土坑が認められた。これらの調査成果は当事業団報告書535集『上武道路・旧石器時代遺跡群(3)』2012.3に詳細に掲載されているので、本書では割愛する。

縄文時代

B区では削平が深かったため、明確に縄文時代の遺構とするには難があるが、炉状の土坑1基を検出した。こ

第2節 A区

A区の概要

A区は調査区東端に位置し、当初の事務所を設置した区域である。B区C区への進入路となったため、C区→B区→A区の順に調査した。東西約60m・南北約30mの範囲が調査対象である。B区C区と同じく、南北の用地沿いに工業団地が造成され、すでに活動中であった。用地側面は斜めに削られており、調査区域の断面は上面30m・下面40m・高さ1～5mの台形を呈する。

A区は調査着手前まで駐車場への進入口となっていたため、盛り土が厚く施されていた。中央部の舗装された範囲を除外して、北側に1トレンチ、南側に2トレンチを設定し、古代の水田跡の有無確認を目標として調査をおこなった。結果的には、水田を確認する以前に、湧水のため掘り下げを断念した。

1トレンチの西寄りの緩い斜面で、1住居を発見した。古墳時代前期の所産と思われる。

A区トレンチ（第14図、PL. 1～3）

A区は調査着手前まで、周辺の工業団地内各社の駐車場として利用されていて、中央部にアスファルト舗装がされていた。調査着手当初は事務所を設置していたことと、調査区B・Cへの唯一の進入可能な区域であったため全面的な掘り下げができないこと、盛り土が厚いことが予想されたことなどから、トレンチ調査を行なうこととした。

略東西方向の用地中央部に舗装された進入路があり、その南北が露地であったことから、北側に1トレンチを、南側に2トレンチを設定して、重機による階段状掘削を行なった。

1トレンチは地表面で東西約45m、南北10mとした。2トレンチは同じく東西約50m、南北10mに設定した。1トレンチ西半部の底面精査によって1住居を発見し、その南北の壁面を観察するとともに、低地と予想される底面を追求したが、掘削途中で水が湧き出して危険なため、底面到達前に断念した。

1トレンチ北壁では、確認できた最深部で厚さ約4mの盛り土があり、汚れたロームの中に黒色土や黒褐色土などのブロックが混在していた。A区よりも先に調査を

着手したC区・B区・D区の地山の観察結果から推定すると、B区C区D区の凸部の土を削平してA区とC区の窪地を埋め、ABC区D区を平坦な駐車場として造成したものと考えられる。土層3は駐車場造成前の表土と推定されるが、土層8もその可能性が高い(土層8は南壁でビニールを含んでいることを確認した)。土層9は砂質土でAs-AまたはAs-Bを含んでいて、旧表土直下の土と考えられる。土層7は1住居埋没土と同じで、住居西壁の立上りを確認できた。最深部の土層1・2は草の根を含む泥炭質の黒褐色系の粘質土で、土層2の底部に小礫を含む地山があり、ここから湧水した。前橋市の昭和43年地形図でみると、五代川の西約500mの位置に、北側上流の水田につながる無名の水路があり、これを検出したと推定される。

1トレンチ南壁では、西寄りの地点で強くしまった黒褐色系の土層21を確認した。土層断面は1道路を横切っていると考えられる。土層8のなかにビニールが含まれていて、表土の一部と考えられる。

2トレンチは北壁のみ記録した。2トレンチでは、最深部で4.7mもの盛り土があり、1トレンチの湧水した土層1・2を確認した深さで掘削を中止した。土層の堆積状況は1トレンチに似るが、最深部に近い急斜面がやや南東寄りに曲り始めていることが判明した。

なお、図中「G-3 ボーリング」とある○は、国土交通省が実施したボーリング調査地点で、その結果は別途掲載し、A区の旧地形復元の資料としたい。

A区1住居(第16・173図、PL. 1・3)

検出位置 525-595付近。A区北西部で検出した。B区の尾根がA区低地に下がる斜面に位置し、B区よりも一段下がった緩い斜面の山側を削って作られている。東寄り(谷側)は住居壁の立ち上がりが検出されず、傾斜を強めて谷地形に至る。A区北寄りに、東西方向で設定した1トレンチで確認した。

重複関係 不明。

覆土 黒色土に白色軽石を多く含み、ザクザクしている。
壁 北西辺で25cmを測るが、南東辺は立ち上がりを確認できない。

第4章 検出された遺構と遺物

床面 北西寄りで不整形の硬化した床面を検出した。

支柱穴 不明。P 1 : 73×51・深さ14cm、P 2 : 51×45・深さ17cm、P 3 : 41×35・深さ30cm、P 4 : 31×26・深さ26cm、P 5 : 33×29・深さ9cm。

壁溝 不明。硬化面の残る壁際では確認できなかった。

カマド なし。

炉 北寄りのトレンチ壁際に近いところで、焼土ブロックの入る掘り込みを検出した。住居プランからみて、北寄り中央部に相当する。

貯蔵穴 不明。P 1か。

掘り方 トレンチの壁寄りで長さ44・幅21cm・深さ7cmの溝を検出した。南東寄りの楕円形ピットは42×32・深さ18cmである。

その他 1トレンチ北壁の土層で、北西辺の壁立上りとみられる土層を検出した。

遺物 硬化した床面が遺存していた範囲に、土器破片・砥石が分布する。土器は小片が多い。

時代・時期 出土した遺物から、古墳時代前期の4世紀

前半の所産と考えられる。

A区1道路(第14図、PL. 4)

検出位置 525-600付近のA区B区境界で検出した。本道路を境として、東側が急傾斜で一段下がり、段下の緩やかな傾斜面に1住居を発見している。

重複関係 なし。

覆土 埋没土の下位にAs-B・灰を含む層があり、上位には黒褐色系の土が堆積する。

底面 径10~20cm大の穴が多く、凹凸著しい。トレンチ底面は踏み固めた状態ではないが、トレンチ南壁に堅い層が認められた。

その他 前橋市の1/2500地形図に、この付近を通る南北走行の小道が掲載されており、より古い時代に形成された傾斜変換点沿いの道と考えられる。

遺物 なし。

時代・時期 中近世まで遡る可能性があるが、確証がない。As-Bの堆積は二次的なものと推定される。

第3節 B区

B区の概要 (第17図、PL. 5)

B区は東から二つ目の調査区に位置し、JRの鉄塔よりも東側の区域で、A区の低地に隣接する。調査着手前には駐車場が造成され、松杭が東西方向に打設されて、雑草の繁茂する区域であった。調査はまず、松杭と雑草を除去し、C区への進入路を確保することから始まった。

表土を除去したところ、全体に南に向かって低く、東西方向はほぼ平坦であった。南寄りの幅約5mの範囲には碎石が敷き詰められ、その直下はローム層であった。また、北側の工業団地に面する側面はローム層が露出し、削平が深く及んでいると推定された。調査区北側に幅約50cmの未掘削部分を帯状に残し、土層を観察したところ、B区東寄り区域ではより深く削平が及び、西寄りでは比較的浅いことが判明した。B区全体の高さを平坦に造成するため、東寄りを深く削ったとみられる。造成前の旧地形は、東寄りに南北走行の尾根が存在し、西に向かって低くなる地形だったと復元される。

遺構の分布は削平の及んだ深さに依存し、東寄り(Y=-64660より東)では時期不確定の縄文時代土坑・ピットを多く発見し、焼土の詰まった土坑を1箇所検出した。範囲を確定できないが、縄文時代の住居の痕跡とみられる。

西寄りでは1溝の底面で固結したAs-Bを確認した。溝としたが、2溝も含め、道路跡の可能性はある。

B区1面 1溝(第19図、PL. 6)

検出位置 546~569-674~677で検出。長さ22m、幅0.8~1.3mを確認した。

重複関係 小ピットに接する。

覆土 中位から下位に純に近いAs-Bを含む。

壁 両脇に段差あり。

底面 底面は固結している。

その他 土層断面では、固結した面を二つ有する。溝というよりも、道路跡の可能性はある。

遺物 なし。

時代・時期 As-Bが中位以下にあることから、平安時代～中世の所産と推定される。

B区1面 2溝(第19図、PL. 6)

検出位置 565～590—715～718で検出。長さ24.3m、幅0.7～1.4mを確認した。

重複関係 35・36・37・41・42土坑と重複し、いずれも土坑が新しい。

覆土 黒色土に黄白色軽石を含む。

壁 中央部付近が幅広くなっている。

底面 一部は平坦な面をもつ。

その他 1溝のような固結面を持たないが、道路の可能性はある。土層断面から、掘り直しされた可能性がある。

遺物 須恵器杯片1、甕片2が出土した。

時代・時期 黄白色軽石の由来不明。平安時代か。

B区1面の土坑・ピット(第20～28・173図、PL. 8・9)

B区では、薄く柔らかい表土直下から土坑・ピットを検出した。北壁の土層断面を検討したほか、土坑・溝等の埋没土を検討した結果、駐車場造成に伴ってローム層の最上位が削平されていることが判明した。

調査区北壁土層を観察したところ、B区の東寄り区域で削平が深く及んでおり、西寄りの区域では比較的浅いことが解った。すなわち、削平前の地形は、東寄りやや高く、南北走行の尾根筋が推定復元され、西寄りで低くなる地形とみられた。

土坑・ピットの検出状況は、この削平前地形と密接に関連し、B区西寄りではAs-Bを含む溝等が確認でき、かつ検出された土坑・ピットは中近世とみられるものが多く分布する。B区東寄りでは、検出された土坑・ピットの多くは地山のローム層とわずかに異なる色調や混入物(ロームブロック・炭化物等)の範囲を精査することによって認定できたものが多く、ローム層に貼り付いた縄文土器や、土坑中から小破片で発見された縄文土器が若干存在する。東寄りの区域では、古墳時代から中近世に

いたる時代の地層は、調査着手時点で削平されていたと考えられる。

B区北壁断面(第18図)

第18図はB区の調査区北側の壁断面を採取したもので、上位からの掘り込みが見られる等の特徴ある断面のみ採取した。B区は調査着手時点で平坦な地形を示し、北寄りがやや高く、表土を盛り上げているように見えた。しかし、南寄りの幅5mほどの区域はローム層の直上に碎石が散布され、駐車場進入路となっていた。雑草の繁茂する土を除去したところ、北寄りの幅数mの範囲に表土がみられたが、遺構の分布及び土層観察の結果、ローム層に至るまでの旧表土以下の土層は、調査前に削平されていたことが判明した。わずかに遺存していた北寄りの土層を採取したのが第18図であるが、攪乱が著しく、移動された土が多い。遺存していたローム層の上面を西から東へ向かって追求したところ、東側のローム層がやや高く、西側が低いことが解り、このことから東寄りに尾根筋があったと推定される。断面5から東へ15mほどで、A区への斜面となる。

B区1面 1炉(第17・173図、PL. 7)

検出位置 548—639付近。

重複関係 60土坑の上で確認した。炉跡と認定したのち、さらに広がることを確認したが、1炉が60土坑と同一遺構かどうか、判定困難。

覆土 上位は堅くしまった焼土。

その他 周辺から縄文土器破片が出土し、付近の土坑・ピットも縄文土器片を出土していることから、1炉を火処とする縄文時代住居が削平された可能性が高い。

遺物 周辺からいくつかの破片が出土しているが、炉に直接伴うものはない。

時代・時期 周辺から出土した土器片は、縄文時代中期堀之内1・2期のものである。

第4節 C区

C区の概要(第29図、PL.10・11)

C区は第一着手の調査区域である。JR鉄塔が存在し、

この付近の調査を優先的に終了するよう委託者からの要請があり、それに対応して東側のA区B区に先行して着

手した。

鉄塔の周囲10m以内での掘り下げを禁じられたことから、鉄塔周囲の東側10m地点を境としてC区とB区との境界とした。鉄塔の北側では10m以上の余裕があり、幅約6mを調査可能であった。南側では余裕がなく、碎石を敷き詰めていて、その下位が削平されていると予想されたことと、重機等の進入路確保のため、調査を割愛した。

C区の南北の区域は工業団地として造成され、深く平らに掘り下げられていて、周囲の地形から旧地形を予想することは困難であった。また、C区は盛り土が厚く施され、駐車に適するように平坦化されていた。少しずつ注意しながら掘り下げたところ、表面から数十cmのローム土は造成盛り土であることが判明し、土層観察のため、東西・南北の土層観察用ベルトを残して遺構確認面まで掘り下げた。その結果、北寄りでは表面から約1mで遺構確認面に達したが、南寄りでは約2.5mの盛り土が存在した。

C区の旧地形は、北から南へ低くなる地形で、鉄塔西側に造成前道路が北東・南西走行し、西端は天神川の水路に急斜面で落ち込むことが判明した。また、西寄りに北東・南西走行の尾根があり、その東に浅い谷地形があったことも判明した。造成前道路は、この谷地形の東寄りに走る。

C区1面では7軒の住居を調査した。そのうち1～4住居はカマドが設置されない時期のものと思われ、古墳時代前期の所産とみられる。4住居は火災に遭っていて、炭化した木材が多量に出土し、貯蔵穴から特殊な注口土器が出土した。5住居は火処がなく、住居かどうか確認がない。6住居はカマドが東壁に設置されていて、風倒木痕と重複し、奈良時代の所産とみられる。7住居はプランが不確定で痕跡のみであり、時代判定は困難である。

1～4住居に囲まれるような位置で、1～4掘立柱建物を検出した。概ね同じ方向の柱通りをもち、住居と同時存在可能なものもある。

2面では多数の土坑・ピットを検出したが、住居と認定できる遺構は見当たらなかった。縄文時代前期の土坑・ピットと見られるが、出土遺物が少ない。

なお、C区のピット土層断面図は割愛した。

C区土層観察用ベルト（第54図、PL.12）

C区は発掘調査の第一着手区域で、駐車場として利用するため平坦化されていた。ただし、西端部は水路に面することから、人の身長程度の段差が残っていた。地表には碎石が敷き詰められ、松杭の間に雑草が繁茂していた。

駐車場造成前の旧地形を把握するため、表面の碎石等を除去した後、東西・南北方向の土層観察用ベルトを保存して、重機による表土掘削を進めた。

南北ベルト

約25mの長さで、目安となるローム層上面の北端での標高は146.3mほどである。これに対して、南端でのローム層上面の標高は143m前後であり、南北の比高は3.3mになる。すなわち、北端に比して南端は3m前後低い地形だった区域を、南北差0.5mほどの南傾斜になるように埋めたと推定される。北端から南へ15mほどの位置で、風倒木痕と6住居が重複していることが判明した。風倒木痕→6住居の順に新しい。

東西ベルト

着手前地形で最も高くみえる場所を起点として、東西約44mの長さで設定した。東端はJR鉄塔に近付ける限界とした。西端付近の表土を除去すると住居のプランが確認され、1住居とした。ベルトの西半部では、風倒木痕、柱穴、土坑等を確認した。東半部では、ロームや黒色土など掘削された土が混在する東西長さ約8mの範囲が認められ、その範囲の底面は凹んでいることが判明した。凹みの範囲を南北に追求したところ、調査区北端・南端でも同様な堆積状態を示し、前橋市の地形図と比較した結果、造成前の北東-南西走行の道路であることが判明した。

旧地形

以上の観察結果からC区の駐車場造成前(工業団地造成前)の旧地形は、1住居(X=46615, Y=-64790)付近を突端とした尾根があり、西側は小河川(天神川)に面し、全体として南に低くなる地形である。東側はなだらかな谷地形となり、さらに東側へ向かうとB区の尾根に至る地形となる。鉄塔との間に認められた道路は、浅い谷地形を呈する。

C区1面 1住居(第30・31・173図、PL.13・14・142)

検出位置 615—790付近。C区のなかではもっとも高所に位置し、尾根筋の突端に相当する。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の埋没土で、白色軽石を多量に含む。

壁 斜めに直線的に立ち上がる。高さ31～52cm。北東側で遺存が良い。

床面 北辺下中央部やや西と南辺中央部のやや西の対面する位置で、硬化面を検出した。また、北西-南東走行の長さ1.5m・幅20～25cmの溝6本を、東辺に並ぶように検出した。住居外の周辺には耕作痕に似た極く細い溝が存在するが、方向が異なることから、床面の溝は現代の耕作痕ではない。

支柱穴 P1～P4が支柱穴とみられる。P1：75×74・深さ83cm、P2：71×64・深さ92cm、P3：51×50・深さ90cm、P4：61×49・深さ83cmである。各ピット間の距離は芯々で、P1～P2：278cm、P2～P3：279cm、P3～P4：264cm、P4～P1：279cmと計測され、P3～P4がやや短い。

壁溝 南辺中央部・北西隅・北辺西寄りのP5付近を除き、幅8～11cm、深さ1～8cmである。南辺東寄り・南西隅付近は、幅が23cmほどになる。

炉 支柱穴に囲まれた範囲の北西寄りで炉を発見した。東西51・南北59cm・深さ7cmの不整形で、焼土ブロック・粒子を含む暗褐色系の土が詰まっていた。底面は充分焼けていない。

貯蔵穴 北西隅でP19、北辺東寄りの壁で斜めに掘り込むP5を検出している。P19の上面は100×82cmの楕円形で、中段は59×54cmの略方形を呈し、底面も33×35cmの方形を呈する。深さは44cmである。P5は間口55cmの楕円形で、北側住居壁外へ向かって斜めに約40cm掘り込まれている。底面は63×55cmを測る。

掘り方 支柱穴4本と東辺・南辺・西辺に囲まれた範囲で、不整形の帯状の掘り込みを検出した。幅1m前後で北東隅付近から連続的に南辺沿いから西辺沿いへ続く。P2の内側に小ピット、P3の外側にP15が検出され、P4は北側にずれた掘り込みを持つことから、柱穴の掘り直し、建て替えの可能性はある。

床溝 住居の各辺が概ね東西南北に平行するのに対して、北西-南東走行を示す溝を床面で検出した。東辺沿

いはほぼ等間隔に並び、西辺沿いではP3から西辺に延びる1本のみである。深さは北東隅寄りから17・17・27・14・11・12cmで、西側の溝が17cmであり、一律ではない。丸太状の枝を並べ、上に板や敷物を載せた施設の可能性はある。

その他 南辺中央部で壁溝が途切れることや小ピットを検出していること、硬化面があること、北辺寄りに貯蔵穴があることなどから、南辺に出入口が推定できる。

遺物 南辺沿いで鉄製斧、北西部で土器片が集中して出土している。

時代・時期 土器の様相とカマドがないこと等から、古墳時代前期の4世紀後半と推定する。

C区1面 2住居(第32・173図、PL.15)

検出位置 611—795付近。1住居よりも尾根をやや南に下がった位置にある。

重複関係 なし。1住居との最短距離は2.8mほどである。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を多量に含み、炭化物も含む。

壁 4～17cmの高さで、北側がやや深いが、南辺は輪郭を確認できる程度である。南東隅が斜めにカットされたような形状で、北辺3.25m、東辺2.35m、南東辺0.67m、南辺2.76m、西辺2.70mを測る。東西3.49×南北2.83mで、東西に長い長方形プランである。

床面 比較的平坦だが、しっかりした硬化面は確認できなかった。

支柱穴 P1・P2・P5・P6の4本とみられるが、やや浅い。P4はP5より深い。P1：41×40・深さ13cm、P2：41×41・深さ9cm、P5：37×39・深さ8cm、P6：33×36・深さ8cmである。ピット間の距離は芯々で、P1～P2：1.36m、P2～P5：1.86m、P5～P6：1.21m、P6～P1：2.25mである。

壁溝 なし。

炉 住居中央部で3箇所の焼土が分布していた。50cm大のもの、25cm大のもの、15cm大のもので、大・中の焼土はよく焼けており、下には深さ数cmの浅い掘り込みが認められた。

貯蔵穴 P3：46×53・深さ29cm（二段掘り込み）の可能性が高い。掘り方で検出した西辺中央部の不整形掘り

第4章 検出された遺構と遺物

込み(60×42・深さ11cm)の可能性もある。

掘り方 底面に細かい凹凸があり、西寄りで行くつかの小ピットを検出した。北辺沿いのピットは深さ5～7cmと浅く、中央部は深さ13～19cm、南辺に近いP19は深さ26cmともっとも深い。

その他 南東隅が斜めにカットされたような形状は、P3の存在によるものか。

遺物 床面から浮いた状態で、北辺寄りに炭化物が出土した。そのほか、概ね北寄りの住居内で、土器小片が出土している。

時代・時期 出土土器片の型式やカマドを持たないこと等から、古墳時代前期の4世紀後半の所産と推定する。

C区1面 3住居(第32・33・173図、PL.16)

検出位置 605-778付近で検出した。1住居よりも南東部に7mほど離れ、一段下がった位置にある。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を多量に含む。

壁 高さ12～49cmで、斜めに立ち上がる。北西隅から西辺にかけて、西辺の外側50cmのところ10cm前後の段が認められた。住居内壁と屋根裾部との境界の可能性もある。掘り込みの東西4.76m、南北3.92mで東西に長く、全体に隅丸長方形のプランをもつ。

床面 全体に平坦で、中央部から西辺にかけて硬化面を確認した。中央部に2箇所がよく焼けた焼土があり、炉とみられる。北辺中央部付近にも焼土が分布する。南西部のP5付近で、粘土塊が出土している。

支柱穴 不明確。P3：深さ7cm、P4：深さ12cmで浅く、柱穴と想定しにくい。P5：深さ41cm、P6：深さ71cm、P9：深さ7cm、P10：深さ15cm、P11：深さ49cmである。配列から考慮すると、P5とP11が支柱穴と見られるが、不足気味である。住居掘り込みの近隣を精査したところ、外1P～外12Pを検出した。P2・P3・P4、P5・P6、P7・P8・P9・P10を住居の柱穴の一部とみることができる。計測値は次の通り。

掘り込み内 単位cm

P1：44×33・深さ17 P2：66×52・深さ14

P3：62×52・深さ7 P4：68×64・深さ12

P5：64×47・深さ41 P6：51×53・深さ71

P7：25×26・深さ7 P8：28×24・深さ7

P9：36×35・深さ7 P10：44×35・深さ15

P11：41×32・深さ49

掘り込み外 単位cm

P1：67×56・深さ61 P2：46×60・深さ34

P3：42×50・深さ7 P4：40×46・深さ15

P5：44×37・深さ23 P6：42×32・深さ30

P7：40×39・深さ15 P8：33×37・深さ11

P9：46×37・深さ25 P10：45×39・深さ17

P11：41×43・深さ52 P12：46×45・深さ20

壁溝 南西隅付近を除き、ほぼ全周する。幅13～22cm、深さ4～12cmである。

炉 床面中央部の2箇所で見出した。東側が1炉、西側が2炉である。いずれも底面がよく焼けており、直下から浅い掘り込みを検出した。使用時期の前後関係は、確認できない。北辺中央部の焼土は小範囲で、壁にかかるような出土状態で、下位には掘り込みがなかった。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に細かい凹凸がある。北東隅付近、南半部が5～10cm低くなる。

遺物 床面からやや浮いた状態を含めると、ほぼ全体から土器破片が出土している。

時代・時期 カマドを持たないこと、出土土器型式等から、古墳時代前期の4世紀後半と推定する。

C区1面 4住居(第34・173・174図、PL.17・18・142)

検出位置 599-791付近。3住居よりもさらに低い区域に位置する。

重複関係 7～10土坑と重複し、いずれも土坑が新しい。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石・炭化物を含む。

壁 直に近く立ち上がる。高さ39～80cmで、北西側がやや高い。南西辺がやや短く、北東辺が長い長方形～台形のプランで、隅が丸みをもつ。中央部での計測値は、南北369cm・東西413cmである。

床面 壁から床面やや上にかけて多量の炭化物が出土し、一部は棒状を呈する。北西辺から南隅にかけて焼土が分布し、北西辺の壁は焼けて焼土化していた。炭化物出土状態を記録したのち炭化物・焼土を除去すると、住居中央部を中心として硬化面が露出した。北西辺中央や

や西寄りの床面も硬化していた。炭化物の分布はほぼ住居全体に及んでいる。

支柱穴 P 6・P 8の可能性が高い。ほかの小ピットは浅い。各ピットの計測値は次の通り。P 3：25×26・深さ20cm、P 4：17×16・深さ17cm、P 5：28×26・深さ4cm、P 6：26×27・深さ43cm、P 7：21×24・深さ20cm、P 8：32×32・深さ78cm。P 6～P 8：292cm。

壁溝 北西辺中央から南辺につながる。幅25～39cm、深さ3～9cmである。南西辺南寄りの壁は二段になっている。

炉 中央部南西寄りの床面で、炉を検出した。掘り込みは浅く、6cm程度である。

貯蔵穴 P 1及びP 2とみられる。P 1：70×54・深さ62cm、P 2：53×54・深さ46cmで、P 1は中段をもつ。

掘り方 中央部の北東辺寄り、南西辺寄りに、それぞれ不整形の浅い掘り込みがみられる。

その他 棒状の炭化物の分布、焼土の分布、壁が焼けていることなどから、本住居は火災を受けていると考えられ、屋根の構造材が遺存中に炎上したと推定される。また、焼土が掘り込み内に広く分布することから、屋根に土を載せていた可能性がある。炭化材の分布と推定支柱穴の位置を勘案すれば、東西に桁行をもつ上屋構造が推定される。出入口は東または南が想定されるが、貯蔵穴の位置と硬化面の分布、床面出土の土器・石製品等の分布を総合すれば、東入口の可能性が高い。

遺物 炭化材等を除去したのち、床面を精査したところ、大きめの石2個と、土器片が出土した。また、貯蔵穴内から、袋形土器(C 25)が略完形で出土した。この土器は長さ10.6cm・高さ5.9cmで上に開く口縁部をもち、体部の両端が細く尖る器で、一端には孔があき、注ぎ口の形状を呈している。

時代・時期 出土土器の型式とカマドを持たないことから、古墳時代前期の4世紀中頃と考えられる。

C区1面 5住居(第35図、PL.19)

検出位置 604—788付近にあり、3住居と4住居との間に位置する。

重複関係 25ピットと接するが、5住居→25Pの順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 17～47cmで、北側が高い。東西2.61m、南北3.21mの長方形プランをもつ。各隅は丸みがある。

床面 平坦だが、硬化面がない。

支柱穴 P 1・P 3か。各ピットの計測値は次のとおり。P 1：18×13・深さ20cm、P 2：21×15・深さ7cm、P 3：14×10・深さ24cm、P 4：18×17・深さ8cm。P 1～P 3：183cm、P 3～P 4：184cm、P 4～P 1：213cm。

壁溝 なし。

カマド・炉 火処が検出されなかった。

貯蔵穴 不明。

掘り方 30～50cm大のピットがいくつか検出された。底面は細かい凹凸がある。

その他 本住居は火処がなく、人の住む住居として利用されたか不明であるが、掘り込み自体はしっかりしており、掘り方も検出された。埋没の状態も人為的な様子が見られない。建設途中の建物か、ごく一時的な利用、または火を使わない納屋的な建物など、通常の竪穴住居とは別の機能をもった建物等が想定される。

遺物 中央部から南西隅にかけて、土器の小片が床面から浮いた状態で出土した。

時代・時期 わずかな出土土器片の型式から、古墳時代前期の4世紀前半の所産と推定する。

C区1面 6住居(第36・37・174図、PL.20・142)

検出位置 600—771付近で検出した。3住居から5mほど東に位置し、南北ベルトに一部がかかり、風倒木痕と重複していたため、プランの確認に時間を要した。

重複関係 風倒木痕→6住居の順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 35～61cmで、斜めに立ち上がる。東西2.78m、南北3.94mで南北に長い長方形プランをもつ。南東隅が1×0.5mほど突出し、東辺中央部にも住居外へ向かう三角形の掘り込みがある。この三角形掘り込みはカマドの作り替え痕跡の可能性はある。

床面 中央部から西辺にかけて、堅い床面が破碎されたような状態を確認した。底面が水分を含んで変色し、その両側がローム層の色調を示すのに対し、この部分のみ茶褐色～黄褐色系の土である。掘り方の調査面では、さらにこの傾向が顕著であった。

第4章 検出された遺構と遺物

主柱穴 不明。P 1 : 63×65・深さ15cm、P 2 : 60×55・深さ4cm、P 3 : 41×54・深さ16cm、P 2 南西ピット : 51×45・深さ14cmで、いずれも柱穴の様相とはみられない。

壁溝 北東隅～東辺～南東隅を除き、幅13～20cm、深さ3～7cmの壁溝が巡る。西辺南寄りの途切れる箇所は風倒木痕の位置と一致しているため、本来壁溝が切れていたかどうか、確証がない。西辺の壁溝内に、5個の小ピットが認められた。

カマド 遺存状態良好で、煙道部煙出しがあり、燃焼部奥側の内部が良く焼けた状態であった。燃焼部左寄りに支脚にしたと見られる石があり、これより手前の焚き口天井部は欠損していた。また、右袖部の粘土は遺存していたが、左袖部粘土は検出できなかった。北側に隣接する掘り込みは、作り替えられたカマドの痕跡の可能性はある。

貯蔵穴 張出しをもつ南東隅のP 3とみられる。二段に掘り込まれている。内部からの出土遺物はない。

掘り方 南東隅のP 3の下から、壁溝状の細い掘り込みが検出された。張出し部を作る前の形状とみられる。南西隅付近、北辺西寄りの壁溝下からも小ピットを検出した。東辺カマド北側の風倒木痕と、住居掘り方底面に広がる軟弱・変色した地山の存在を勘案すると、南西辺に向かって斜めに横断する変色部は、風倒木の倒れた痕跡と推定される。木の幹が南西に向かって倒れたと想定すれば、根とともに地山のローム層が持ち上げられ、東寄りにロームが分布している現象と符合する。

その他 C区検出住居でカマドをもつのは、本住居のみである。

遺物 中央北寄りで石が出土し、中央部では土器小片が出土した。南辺西寄りの壁に貼り付くように土師器杯(C 29)が出土している。

時代・時期 カマドの存在と出土土器から、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

C区1面 7住居(第35図、PL.21)

検出位置 595-774付近で、住居床面に似た硬化面を確認した。焼土を含む範囲が認められたことから、周辺を精査したが、明確な掘り込みを検出するには至らなかった。ただ、柱穴とみられるピット3本を硬化面の周囲に

検出したため、規模不明確な住居として7号をとらえた。概ね東西4m、南北3.5mほどの規模と推定される。6号住居の南側に位置し、調査区域のなかでは低地に相当し、水分を含んだ土の範囲での認定である。

重複関係 不明。

覆土 硬化面上の土は黒褐色系の土で、白色軽石・焼土を含む。

壁 不明。プランはP 1・P 2・P 3等の配置から推定した。

床面 2×1.5mほどの不整形の範囲で硬化した面を検出した。

主柱穴 P 1～P 3と考えられるが、P 16は位置が不均衡である。各ピットの計測値は次の通り。P 1 : 44×39・深さ58cm、P 2 : 48×38・深さ63cm、P 3 : 37×33・深さ30cm、P 16 : 30×25・深さ24cm、P 15 : 36×37・深さ34cm、P 17 : 29×24・深さ40cm、P 19 : 25×23・深さ45cm、P 20 : 38×40・深さ61cm。P 1～P 2 : 212cm、P 2～P 3 : 162cm。

壁溝 なし。

カマド 不明。

貯蔵穴 不明。

掘方 硬化面を中心として、3～8cmほどの不整形掘り込みが認められた。

その他 いくつかの土器片が近隣で出土しているが、住居に伴うか不明である。

遺物 小片のみ。

時代・時期 不明。

C区1面 1掘立柱建物(第38図、PL.22)

検出位置 608-785付近で確認した。1住居・2住居・3住居・5住居に囲まれた場所にある。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P 1～P 8で2間×2間だが、南北に長い。深さは23～69cmだが、概ね50cm前後で揃っている。

その他 28ピットは単独で番号を付けた掘り込みだが、建物内部に位置するため、ここに掲載した。28P : 32×27・深さ30cm。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や1・2住居と概ね平行な位置にあ

ることから、古墳時代と推定する。

C区1面 2掘立柱建物(第39図、PL.22)

検出位置 605—784付近で確認した。南端のP3・P4は3住居の中で発見されており、3住居とは同時存在できない。

重複関係 3住居のプラン確認時にP3・P4を検出していないので、2掘立柱建物→3住居の順に新しいと考えられる。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P8で2間×2間だが、南北に長い。深さは10～94cmであるが、3住居内検出のP3～5を除外すると、概ね50cm以上あり、掘り込みはしっかりしている。

その他 32ピットは単独で番号を付けた掘り込みだが、建物内部に位置するため、ここに掲載した。32P:20×14・深さ10cm。1掘立柱建物とほぼ平行しており、関連ある建物と推定される。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や重複する3住居との前後関係から、古墳時代前期と推定する。

C区1面 3掘立柱建物(第40図、PL.23)

検出位置 605—774付近で確認した。2掘立柱建物の東側に位置し、2掘立柱建物のピットとほぼ同じ並び方を示す。4掘立柱建物と重複し、同時存在できない。

重複関係 4掘立柱建物と重複するが、前後関係は確定できない。3掘立のP7と4掘立のP8が重なるが、P8の方が深い。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P7で2間×2間だが、P1・P2の間には柱穴が発見できなかった。P2～P4間が10cmほど長いので、東西棟とした。深さは15～39cmで、概ね30cm前後である。

その他 2掘立柱建物とほぼ平行した柱穴の並びを示し、関連ある建物と推定される。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や2掘立柱建物と平行する柱並びから、古墳時代と推定され、前期に遡る可能性がある。

C区1面 4掘立柱建物(第41図、PL.23)

検出位置 608—764付近で確認した。2掘立柱建物の東側に位置する。3掘立柱建物と重複し、同時存在できない。

重複関係 3掘立柱建物と重複するが、前後関係は確定できない。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P10で3間×2間、東西棟である。深さは12～48cmで、P5のみ48cm、その他は概ね20cm前後である。

その他 2掘立柱建物よりも一回り規模が小さく、東西棟であり、異なる様相を示す。しかし、概ね直交方向をもつことから、2掘立柱建物と関連ある建物と推定される。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や2掘立柱建物とほぼ直交する柱並びから古墳時代とみられ、前期に遡る可能性がある。

C区1面 5掘立柱建物(第40図、PL.23)

検出位置 595—785付近で確認した。4住居と7住居との間に位置する。この付近はピットを多数検出し、それらのなかで組合せを勘案したもので、1～4掘立柱建物のように、当初から明確に存在を認識できなかった建物である。

重複関係 建物の内側に87～90Pが存在するが、5掘立柱建物に伴うか、確証がない。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P8の組合せで、南辺は2間、北辺は3間が想定される。西辺のP5・P6間には、P2に相当する掘り込みが検出できなかった。ここでは、2間×2間の東西棟としておく。ピットの深さは25～60cmで、比較的しっかりしている。

その他 1～4掘立柱建物に比べ、長軸の方位が異なり、時代が異なる可能性があるが、埋没土はよく似ている。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 不明。

C区1面 1溝(第42図、PL.24)

検出位置 602～616-763～782付近で東西に延びる細い溝である。2溝・3溝と概ね同じ走行を示す。

重複関係 なし。

覆土 細砂粒を多量に含む灰褐色～黒褐色系の土。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 南北ベルトで観察すると、駐車場造成前の表土よりも下位にあり、かつ地山の軽石を含む黒褐色系の土を掘り込んでいるので、古墳時代以降～中世の時期が推定される。覆土の特徴からは、新しいものと見られるが、確証がない。

C区1面 2溝(第42図)

検出位置 613～615-780～783付近で東西に延びる短い溝である。1溝と概ね同じ走行を示す。

重複関係 なし。

覆土 細砂粒を多量に含む灰褐色～黒褐色系の土。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 1溝に似た様相を示す。

C区1面 3溝(第42図、PL.24)

検出位置 595～605-766～775付近で東西に延びる浅い溝である。1溝と似た走行を示す。

重複関係 なし。

覆土 砂粒を多量に含む灰褐色～黒褐色系の土。

壁 1溝よりも深く、斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 南北ベルトでみると、1溝に似た様相を示す。

C区1面 4溝(第42図)

検出位置 593～601-768～784付近で東西に延びる深い溝である。

重複関係 6土坑・5溝を切る。現代の溝。

覆土 灰褐色系の土で、黒色土ブロックを含む。駐車場造成時の盛り土よりも下位にある。

壁 深く直線的で、機械による掘削とみられる。

その他 底面近くから、ワイヤーロープが出土し、アース線埋設の溝と判明した。鉄塔の設置年代から、昭和14年頃とみられる。

C区1面 5溝(第42図、PL.24)

検出位置 597-774付近にあり、6住居の風倒木痕に続く溝状の落ち込みである。

重複関係 5溝→6住居の順に新しい。4溝に切られる。

覆土 黒色土で白色軽石を含む。

壁・断面形 半截の楕円形を呈する。

底面 丸みあり。

その他 6住居中央部の風倒木痕続きとすれば、木の幹部が腐植したのち、土が堆積した可能性がある。4溝以南では検出されなかった。

遺物 なし。

時代・時期 奈良時代以前。

C区1面 6～9溝(第42図、PL.24)

検出位置 601～605-793付近に平行する浅い溝。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。

壁・断面形 箱形。

底面 平坦。

その他 5住居の西側に平行して4本検出した。土の様相を観察すると、新しいもののように見えるが、確証がない。中近世の耕作痕の可能性はある。

遺物 なし。

時代・時期 不明。

C区1面 10溝(第42図)

検出位置 598-798付近で検出した短く浅い溝。1面の南西端に位置する。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。

壁・断面形 三角形。

その他 溝状を呈するが、細長い土坑の可能性もある。
遺物 なし。
時代・時期 不明。

C区1面 11溝(第42図)

検出位置 597-795付近で検出した短く浅い溝。1面の南西端に位置する。
重複関係 なし。
覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。
壁・断面形 丸みあり。
その他 耕作痕の可能性はある。
遺物 なし。
時代・時期 不明。

C区1面 12溝(第42図、PL.25)

検出位置 594～603-726～746付近で検出した。J R 鉄塔北側の北壁に沿って東西に延びる。1溝よりも直線的である。
重複関係 中央部を幅1.2mの現代攪乱により破壊されている。
覆土 暗褐色系の土で黄色土ブロックを含む。
壁 斜めに立ち上がる。
底面 平坦。
その他 1溝と比較して、埋没土が異なる。
遺物 なし。
時代・時期 近世～現代の可能性が高い。

C区1面 13溝(第42図、PL.25)

検出位置 595～596-742付近で検出した。J R 鉄塔の北側に位置し、南北走行の短い溝。土坑状を呈する。
重複関係 118ピットと重複する。
覆土 黒褐色系の土で白色軽石を含む。
壁 斜めに立ち上がる。
底面 丸みあり。
その他 表土直下で切り込まれている。
遺物 なし。
時代・時期 近世～現代の可能性が高い。

C区1面 土坑(第43～45図、PL.25・26)

C区は2面が認められ、1面では古墳時代以降、近世

までの土坑や現代の攪乱を検出した。住居に重複する土坑の多くは、住居よりも新しくなる傾向がある。個々の土坑の大きさや埋没土などは一覧表にまとめた。

C区1面 ピット(第43・44図、PL.25・29)

C区1面のピットは南寄りに多い。北寄りのピットは掘立柱建物として組合せが考えられ、単独のピットは少ない。J R 鉄塔の北側では、いくつかのピットが発見されているが、近世～現代の掘り込みとみられる。個々のピットの大きさや埋没土等は一覧表にまとめた。

C区2面 土坑・ピット(第46～53・174図、PL.25～28)

C区の2面は、1面で縄文時代の土器片が採集され、一部の土坑で縄文土器が出土したことから、当初はトレンチを設定して下層の確認を行なったことに始まる。トレンチを拡張して、C区全体に広げたところ、土坑・ピットを多数検出したが、J R 鉄塔西側の旧道路付近では検出されていない。これらの中で、住居と認定できるものはなかった。ピットはC区西寄りの尾根上に集中する傾向があり、西端の小さな谷地形に面する斜面にはない。

個々の土坑の大きさ等は一覧表にまとめた。ピットは土層断面が多数に及ぶことから割愛した。

第5節 D区

D区の概要 (第55図、PL.35)

D区はC区との境とした天神川の西側に位置し、市道00-040号線までの区域である。調査着手前まで駐車場として利用されていたため、盛り土されて平坦な現況であった。D区の北側・南側とも平坦に造成され、路線の南北には工業団地が営まれており、旧地形を想像することは困難であった。そこで、天神川に面する谷地形の広がりを確認するため、トレンチを3本設定した。

D区の旧地形は、1トレンチ g-h 断面、3トレンチ k-1 断面にあるとおり、D区中央部付近に天神川の谷地形の西岸斜面がみられる。これに対応する東岸斜面はC区西端の急傾斜であろう。天神川西岸は検出できたが、ここより西側の市道に至る範囲は、ローム層に達する深さまで削平されていることが判明した。1トレンチ南西部の南壁断面では、標高144.60mの深さまで重機等によって攪拌されていることも判明した。

市道00-040号線までの現地形と以上のことから、D区は中央部西寄りに南北走行の尾根があり、西側は緩く西に低くなる地形で、東側の天神川までは東西約60mの谷地形と復元される。

D区は1～3トレンチを設定して掘り下げ、1トレンチと3トレンチを拡張したところ、D区中央部付近で南北走行の1溝を検出した。1溝は平安時代に遡る可能性がある。西半部は削平が著しく、土坑・ピットをいくつか検出したのみで、縄文時代以降の確かな遺構はなかった。

D区 トレンチ土層(第55・56図、PL.38)

1トレンチ a-b, c-d, e-f, g-h

D区の南寄りに東西方向で長さ約60mを設置した。盛り土が厚く施されており、現地表から1.8～2mまでは駐車場造成時の盛り土であった。盛り土の下には造成前の旧地表が確認できた。さらにその下位の厚さ1m前後の土は、改変前の自然地形を平坦化するための埋土とみられる。土層番号7～10、同17～22、同32～35の土層は谷地形を埋めた土で、本来の位置から動いている。時期は確定できないが、近代以降の埋め土であろう。

西端の地点では、動いていない地山ロームを検出して

いる。

2トレンチ i-j

D区の北東部に東西方向で、長さ約15mを設置した。1トレンチの東端と平行する。ここも1トレンチ東端に類似した堆積を示し、大半は動いている土である。

3トレンチ k-1

D区の中央部北寄り、2トレンチの西側に長さ約20mを設置した。1・2トレンチと同様に、上位には駐車場造成時の盛り土があり、中位に自然地形を埋めた土、下位に自然地形に沿った自然埋没土が認められた。k-1断面の土層番号1～3は造成時盛り土、同4は自然地形を埋めた土、5～10は自然埋没土と考えられる。12・13は地山のローム層で、ここから西側に動いていないローム層が想定された。

南壁 m-n

1トレンチを拡張した南西部の南壁を記録した土層断面で、表面に碎石が載り、中位は重機等による攪拌された土。下位の地山相当のローム表面も攪乱されていた。

D区 1溝・土坑・ピット(第57図、PL.36・37)

1溝

1トレンチと3トレンチにかかった溝で、概ね南北走行である。東へ向かって低くなる斜面に切り込まれ、幅0.6m前後で、D区中央部のみ確認した。底面から土器片が出土しており、平安時代の所産と推定する。

土坑

1トレンチを拡張した西寄り、3トレンチを拡張した西寄り、2土坑を検出した。不整形な形状で、遺物の出土はなかった。

ピット

1トレンチ・3トレンチの拡張部で1～9ピットを検出した。いずれも小さく・浅いもので、遺物の出土はない。

第6節 E区

E区の概要 (第58図、PL.39)

E区は市道00-040号線の西側に接し、北側にコンクリートの擁壁が築かれ、南側は民家の並ぶ住宅に囲まれた区域である。コンクリート擁壁の北側は芳賀住宅団地として新しく開発された住宅街で、階段状に削平されている。このような周囲の状況のなかで、E区からI区にかけての区域は、近年の改変が比較的すくなく、自然地形の残った区域とみられる。A区からD区が大きく改変されたのとは異なる状況である。

D区の調査結果と併せて推定すると、D区とE区の間を通る市道00-040号線付近は浅い谷地形があったとみられ、E区東端の歩道脇から4住居の乗る低い尾根まで、緩く東に低くなる地形が復元される。

住居は確実なもの5軒が検出され、いずれも奈良～平安時代のものと考えられる。また、掘立柱建物1棟が南東隅で検出された。土坑・ピットは2住居から3住居にかけて分布するが、ほとんど遺物が出土しないため、時期等は不明である。調査区東寄りでは検出された細長い土坑は、埋没土の様子から、近世～現代のものと考えられる。

調査区への出入口とした東端開口部の西側7m付近に、6号住居が検出された。表土掘削時からカマド構築材とみられる大きめの石が露出し、周囲にAs-Bらしきものが不整形に広がっていたことから、その詳細が期待された住居である。土層観察用ベルトを残して火山灰堆積範囲を中心に掘り下げたところ、住居のプランと火山灰の分布範囲がずれていることが判明した。浅く落ち込む範囲の中央部に火山灰が堆積し、住居のプランは北側に寄っていた。また、堆積していた火山灰はAs-Bだけではなく、科学分析を依頼した火山灰考古学研究所によると、As-Bの上位にある青灰色テフラは、浅間粕川テフラ(As-Kk)の可能性がきわめて高いという所見を得た。

E区 1住居(第58・59・175図、PL.40・142)

検出位置 663-950付近で検出した。D区西半部から西へ向かって低くなる浅い谷地形の西側に位置する。北側の6住居との距離は6m弱、西側の2住居との距離は約4m、東側の1掘立柱建物との距離は最短で6mである。

重複関係 北側に5住居とした台形を呈する浅い掘り込みがあり、調査所見では5住居→1住居の順に新しい。覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ41～60cmで、斜めに直線的に立ち上がる。東辺に比べて西辺がやや短く、全体として台形を呈する。床面 概ね平坦である。

支柱穴 不明。

壁溝 幅20～42cm、深さ1～7cmで、南東隅を除き、ほぼ全周する。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。カマド燃焼部は住居の東辺にかかり、外側に広がる。袖部は不明であるが、燃焼部の掘り込みは深い。

貯蔵穴 掘り方で検出した南東隅の掘り込みか。二段に掘り込まれ、103×83・深さ27cmである。

掘り方 細かい凹凸をもち、やや盛り上がる範囲が中央部にあり、北東・北西・南西の各隅付近に不整形な浅い掘り込みがある。南辺中央部付近に二段掘り込みのピットがあり、56×46・深さ26cmである。

その他 5住居は本住居に比べて1/3ほどの深さが遺存し、底面は平坦であることから、本住居の拡張部分の可能性がある。

遺物 床面北西部で鉄鎌(E9)が、カマド左脇付近の床面からやや浮いた状態で小型甕(E7)が、北西隅壁際で土師器杯(E1)が出土している。カマド前の床面から破片が出土した。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、奈良時代の8世紀後半の所産と推定する。

E区 2住居(第60・175図、PL.41・142)

検出位置 670-958付近で検出した。1住居の西側にあり、北側の3住居との間は15m弱離れていて、その間に土坑・ピットが分布する。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ34～46cmで、斜めに直線的に立ち上がる。本住居も東辺に比べて西辺がやや短い、全体として長方形を呈する。

床面 細かい凹凸がある。

主柱穴 不明。

壁溝 南東隅付近を除き、ほぼ全周する。幅36～50cm、深さ4～8cmである。北辺と南辺は凹みの連続のように見え、明確ではない。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。カマド燃焼部は住居の東辺にかかる。袖部は不明であるが、燃焼部の焼土がよく遺存していた。

貯蔵穴 南東部の二段掘り込みのピットで、59×48・深さ35cmである。中から略完形の須恵器杯(E16)と土師器杯の破片が出土した。

掘り方 全体に凹凸が著しい。各隅に不整形の掘り込みがあり、中央部にも楕円形の掘り込みがある。カマド掘り方の底面には、小ピットが4個検出された。

その他 E区内では、南端に位置しており、調査区南壁ギリギリでプランを検出した。

遺物 カマド内から土師器甕の破片がまとまって出土し、貯蔵穴内からは略完形の須恵器杯(E16)が、カマド左脇の床面近くから土師器杯(E10)が出土している。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、奈良時代の8世紀後半～末の所産と推定する。

E区 3住居(第61・176図、PL.42・142)

検出位置 684—955付近で検出した。調査区中央部付近にあり、東に向かって低くなる緩い傾斜面にある。周囲に土坑・ピットが分布するが、住居との関係は不明である。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ41～61cmで、直に近く立ち上がる。南北に長い平行四辺形のようなプランであるが、基本形は長方形であろう。

床面 平坦で、踏み固められている。

主柱穴 不明。

壁溝 カマド左脇から南東隅を欠くが、その他の辺は全周する。幅30～55cm、底面幅3～11cm、深さ1～11cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。カマド燃焼部は住居の東辺にかかる。カマド構築材とみられる30cm大・40cm大・60cm大の石がカマド前の床面から出土し、そのほかの割れた石は、中央部付近に散乱していた。袖部は

不明であるが、燃焼部の焼土がよく遺存していた。

貯蔵穴 南東部の略楕円形のピットで、64×50・深さ15cmである。上面から須恵器甕体部片(E27)が蓋のような状態で出土した。南壁との間からも完形に近い杯(E23)が出土している。

掘り方 全体に凹凸が著しい。北辺-西辺-南辺にかけて、幅50～90cmの不整形で帯状の掘り込みがある。

カマド掘り方の底面には、中央部に細長い58×20・深さ2～8cmの掘り込みがあり、その両脇に小ピットが2個ずつ計4個検出された。

その他 カマド構築材とみられる石が床面から発見されている状況から、意図的なカマド破壊の可能性がある。

遺物 中央部西寄りの床面から甕(E25)が出土し、中央部には10～15cm大の細長い石が10個ほど出土している。時代・時期 出土遺物、住居構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

E区 4住居(第62・63・176・177図、PL.43・142)

検出位置 692—970付近で検出した。E区中央のやや北西寄りに、南北走行の低い尾根があり、4住居はそのまま高い位置にある。西側はF区との境をなす浅い谷地形があり、本住居はE区の西端に位置する。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ11～20cmで、他の住居に比較して浅い。南北に細長く、隅が丸みをもつが、基本形は長方形である。西辺5.78mに対し南辺は2.97mで、縦横比は約2倍となって、特異なプランである。

床面 平坦で、踏み固められている。

主柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶ。カマド構築材とみられる大きめの石が、カマド付近から割れた状態で出土した。左袖石下部を除き、もとの位置から動いているように見える。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に凹凸が著しい。南辺沿いに不整形の掘り込みがあり、中央部にはやや大きめの掘り込みがある。カマド内では小ピットがほぼ円形に5個並ぶ。北寄りにやや深いピットがあるが、その他のピットは深さ10cm前

後で浅い。

その他 カマド焚き口天井部とみられる石が割れた状態で出土し、その他の割れた石もカマド前の床中央部から出土しているなどの状況から、意図的なカマド破壊の可能性はある。

遺物 大半の土器片がカマド前から出土し、それらは細かく割れており、1カ所に集中して出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

E区 5住居(第63・177図、PL.40・143)

検出位置 669-950付近で検出した。1住居の北側に突出した状態で検出した。

重複関係 南側で1住居と重複しており、調査所見では5住居→1住居の順に新しいが、土器片が混じっている可能性がある。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を多く含む。

壁 深さ12～21cmで浅く、西辺0.77m、北辺2.32m、東辺1.22mの台形状を呈する。

床面 概ね平坦である。

支柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 不明。

貯蔵穴 不明。

掘り方 細かい凹凸があり、概ね平坦である。北西部に25×16・深さ13cmの不整形のピットがある。

その他 1住居の深さに比べて1/3程度であることと、掘り方底面が平坦であることなどから、単独住居というよりも、1住居の拡張(張出し)部の可能性がある。

遺物 北部底面から鉄鎌(E40)が、東辺沿いで細い石と土器片が出土している。

時代・時期 土器片から、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

E区 6住居(第64・65・177・178図、PL.44・143)

検出位置 677-945付近で検出した。E区東端にあり、道路にもっとも近く、E区のなかでは東側の低地に寄っている。

重複関係 なし。

覆土 当初の遺構検出作業では、不整形の方形プランの

内側にAs-Bが不整形に堆積しているとみられた。検出面で土器片や大きめの石の出土位置を記録し、土層断面観察用ベルトを設定して掘り下げたところ、As-Bの堆積する凹みは、住居プランに対して南寄りに広がることが判明した。この凹み遺構は住居周りの構造と密接に関連しているとみられる。遺物の分布状態を記録した図が、第64図の下である。住居の覆土は黒色土～暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ32～61cmで、他の住居に比較して深い。凹みの外側からの深さは70cm以上となる。南北に長く、長方形を呈する。

床面 平坦で、中央部は踏み固められ、硬化面が認められた。支柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶ。カマド構築材とみられる大きめの石が、カマド付近の上位から割れた状態で出土した。左右の袖石はもとの位置にあると見られる。奥壁には落差17cmの段差がある。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に凹凸が著しい。北辺沿いと南辺沿いに不整形の掘り込みがある。カマド焚き口に65×54・深さ22cmの楕円形の掘り込みがあり、燃烧部には小ピットが二つ検出された。

その他 As-Bが降下した後も、住居は完全に埋没しておらず、凹みが残っていたと推定する。As-Bに伴う灰が確認されていて、As-B直下の土は黒色土で、当時の表土であろう。埋没土の様相は自然堆積を示すが、As-Bよりも上位の層が降下テフラで直接埋没したかは確定的ではない。

遺物 大半の土器片がカマド内～カマド前と中央部から出土している。甕の破片が多い。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代9世紀中頃の所産と推定する。

E区1面 1掘立柱建物(第66図、PL.45)

検出位置 664-940付近で確認した。調査区の南東隅に位置している。1住居との最短距離は約6m、6住居とは約8m離れている。

重複関係 なし。北西隅のP1が現代の掘り込みで一部

破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P9で2間×2間だが、南北に長い。深さは23～57cmだが、概ね40cm前後で揃っている。

その他 東西の柱間が短く、南北が長い。柱並びの内側にはピット等が検出されなかった。

遺物 各ピットから遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

第7節 F区

F区の概要 (第71図、PL.48)

F区はE区の西側に位置し、南東部に向かって低くなる地形である。北西端がもっとも高く、南東端がもっとも低い。E区と同じく、北側にコンクリート擁壁が築かれ、南側は畝である。

住居は8軒が検出され、1住居はとくに南北に長い形状で、他の住居に比して異質である。4住居は火処がない。1～4住居と1掘立柱建物・2掘立柱建物はほぼ平行した位置関係にあり、なんらかの関係が想定できるが、同時存在かどうか、判定しにくい。5住居・7住居と併せて、平安時代の所産と推定する。

6住居・8住居は大型で、8住居はF区中最大の規模である。6住居は竪穴の周囲に斜めの掘り込みがあり、屋根の葺きおろしが斜面の外にあれば、規模が大きくなる。6・8住居は奈良時代の所産と推定する。

溝は近世以降の新しい所産と推定されるが、中から出土する遺物や埋没土を勘察すると、平安時代に遡るものが存在するようである。

F区トレンチ

民家跡地トレンチ(第70図)

F区はE区西端の谷地形から続く、西へ向かって高くなる地形の区域で、東端部は引き渡し未了区域を含む浅い谷地形であるため、北寄りの区域は遺構の存否を確認するトレンチ調査とした。その後、平成20年2月段階で南端区域の調査が可能になったことから、重機による東西トレンチを設定して、遺構の有無・埋没土層の堆積状

E区 土坑・ピット(第67～69図、PL.46・47)

E区は1面のみで、平安時代以降近世までの土坑や現代の攪乱を検出した。土坑・ピットは2住居・3住居の間に多く分布し、3住居の東側にもいくつか分布する。2～4土坑・8土坑の細長い掘り込みは、近世以降の新しいものに見える。個々の土坑の大きさや埋没土などは一覧表にまとめた。

態を確認した。遺構は認められなかった。

表土直下の土層2にはAs-Bを含み、土層4はAs-B軽石純層で、その直上の3はAs-Bに伴う灰層である。4の直下はAs-Bが堆積する直前の地表とみられ、谷地形はまだ、浅い凹みとして残っていた。4が降下して堆積したか、上流からの流れ込みの堆積かは断定できない。

土層5・6・7は黒褐色～暗褐色系の土で、白色軽石を含んでいる。土層8・9・10・12・13・14は黒褐色～暗褐色系の土で、白色軽石を含まない。このことから推定すると、土層5・6・7は古墳時代から平安時代に堆積した土層で、白色軽石はAs-CまたはHr-PPで、この時期には谷地形として大きく凹んでいたと考えられる。

F区 1住居(第71・178図、PL.49・143)

検出位置 726-043付近で検出した。F区中央部の北寄りに位置する。東側の2掘立柱建物との最短距離は0.6mたらずなので、同時存在は困難とみられる。

重複関係 3溝と重複し、1住居→3溝の順に新しい。3溝の掘り込みが浅く、1住居床面まで届いていない。

覆土 暗褐色系の土で、軽石を含む。

壁 深さ4～16cmで浅く、東側がやや深い。南北に長い長方形で、南辺に2.15×1.20mの10cmほど高い「張出部」がある。「張出部」には8土坑が重複し、拡張部→8土坑の順に新しい。この張出部が住居の一部ならば、1住居→8土坑の順に新しい。張出部を含めると、カマドの位置は東辺の中央になるが、除外すると南寄りとなる。ここでは、東西がほぼ同寸であることから、住居の一部

としておく。

床面 カマド前付近の中央部のみ、概ね平坦である。北側は攪乱により乱されている。

支柱穴 不明。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央に設置する。突出部に焼土が遺存していたが、全体として遺存不良で、詳細は不明である。

貯蔵穴 掘り方で検出された南東部の掘り込みか。不整形で二段に掘り込まれ、66×40・深さ29cmである。

掘り方 カマド左脇に不整形で深さ10cm前後の掘り込みがあり、低い南辺の掘り込みは大きく広がる。

その他 一段低い南辺中央に59×38・深さ11cmの掘り込みがある。ほかの住居に比較して規模が小さく、南北に細長いプランで、用途や機能が異なる竪穴の可能性はある。

遺物 カマド左脇の床面近くから杯の破片が出土し、低い南辺沿いからも小片が出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴から、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

F区 2住居(第72・73・178・179図、PL.50・143)

検出位置 731-050付近で検出した。F区中央部の西端に位置し、隣接するG区との境界にある。隣りあう3住居との間隔は0.5m以下で平行している。同時存在の場合は、軒が重なるというよりも、柱・桁・梁など構造材の一部を共有するようなケースを考える必要があろう。

重複関係 なし。東辺外側のカマド両脇部は、攪乱されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 東辺の攪乱部分を除くと、深さ48～76cmで、北側がやや深く、また他の住居に比較して深い。南北に長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。カマド前床面には、灰と焼土が分布する。

支柱穴 掘り方で検出したP1・P2・P3・P6の4本とみられる。P5・P8は南辺から約0.8mの距離で平行しており、出入口施設に関連するか、3住居との接続にかかわる可能性がある。各ピットの計測値は次の通り。P1：31×27・深さ60cm、P2：26×20・深さ57cm、P3：25×18・深さ49cm、P6：31×28・深さ

20cm(カマド前から26cm)、P1～P2：2.28m、P2～P3：2.41m、P3～P6：2.46m。P4：27×25・深さ29cm、P5：34×33・深さ61cm、P7：29×27・深さ32cm(カマド前から45cm)、P8：37×28・深さ13cm、P5～P8：0.99m。

壁溝 カマド右脇～南東隅を除き、全周する。幅26～50cm(底面幅5～16cm)、深さ2～8cmである。

カマド 東辺中央に設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶが、粘土の袖部が住居内側に延びる。カマド構築材とみられる石が、カマド付近の上位から出土した。現代の攪乱による破壊が及んでいるとみられる。

貯蔵穴 南東隅の略円形を呈する掘り込みで、二段に掘り込まれ、63×59・深さ58cmである。

掘り方 全体に細かい凹凸はあるが、中央部は比較的平坦である。四隅に深さ10cm前後の不整形掘り込みがあり、南辺中央部付近(P8周囲)も1×1.2m・深さ15cm程度に掘り込まれている。カマド前は不整形に掘り込まれている。

その他 他の住居に比べて遺存状態が良好で、1住居・3住居・4住居・掘立柱建物とほぼ平行しており、1・3・4住居よりも規模が大きい。

遺物 住居全体から遺物が出土しているが、床面から高い位置のものもある。カマド左脇の四角形の石、南西隅付近の50cm大の石は台石の可能性もある。カマド右脇の床面からは土師器甕(F15)口縁部が、南辺壁際では破片がまとまって出土している。本住居は鉄製品の出土がやや多く、刀子のような棒状の鉄製品、滓らしきもののほか、東辺北寄りの壁際の床面から鉄製品2個体(鉄鏃F24・鋤先F25)が出土した。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、鉄製品の製作工房の可能性があり、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

F区 3住居(第74・179図、PL.51・143)

検出位置 725-051付近で検出した。2住居の南側に接するように平行しており、南側の4住居との最短距離は約3.4mである。3住居と4住居の間には、近世以降の攪乱が入っている。

重複関係 南東隅からカマド前付近を攪乱で破壊されている。

第4章 検出された遺構と遺物

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 南東隅が破壊されているが、ここを除くと深さ63～89cmで北側がやや深く、また他の住居に比較して深い。南北にやや長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。カマド前床面には、灰が分布する。

主柱穴 不明。掘り方から検出したピットは3本で、計測値は次の通り。P1：26×23・深さ6cm、P2：38×32・深さ17cm、P3：20×18・深さ22cm。

壁溝 カマド右脇～南東隅を除き、全周する。幅13～47cm（底面幅3～8cm）、深さ3～8cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。袖石が住居の壁ラインに並ぶが、粘土の袖部が住居内側に延びていた可能性が高い。深い攪乱により破壊されている。左右の袖石は本来の位置にあるとみられ、焼き口天井部らしき石が割れて落ち込んでいた。カマド奥壁は落差70cmほどの斜めの立上りになる。

貯蔵穴 南東隅の掘り方で検出した略楕円形の掘り込みとみられ、44×32・深さ49cmである。

掘り方 全体に細かい凹凸はあるが、中央部は比較的平坦である。掘り方でP1～3を検出した。カマド焼き口付近は15cm前後の浅い掘り込みとなる。奥壁は落差30cmほどの段差が認められた。

その他 2住居に隣接して平行しており、1住居・4住居とも平行している。カマド前は攪乱が深いためか、遺物の遺存が不良である。

遺物 住居中央部に大きめの石が出土している。台石またはカマド構築材とみられる。土器等は床面近くから出土し、床面から浮いた状態で炭化物が西辺寄りから出土している。

時代・時期 出土遺物、住居構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

F区 4住居(第75・180図、PL.52・143)

検出位置 720-056付近で検出した。3住居の南側に概ね平行しており、北側の3住居との最短距離は約3.4mである。4住居の北東部に近世以降の攪乱が入っている。重複関係 北東隅から北辺にかけて、攪乱で破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を多量に含む。

壁 北東部が破壊されているが、深さ14～32cmで東側がやや深く、全体に20cm前後である。南北にやや長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。

主柱穴 不明。掘り方で検出した南西隅の掘り込みは深さ3cmほど、北東隅の掘り込みは6cm程度で、柱穴とは考えにくい。

壁溝 掘り方で北西隅～西辺にかけて検出した。幅21～46cm（底面幅3～14cm）、深さ2～7cmである。

カマド 不明。他の住居が東辺に設置するのが通例であることを勘案すれば、北東部の攪乱により破壊されたと推定するよりも、もともと設置されていなかった可能性が高い。しかし、火処がなくなり、本住居は別の機能・用途を考えなければならない。

貯蔵穴 南東隅の掘り方で検出した略楕円形の掘り込みとみられ、73×43・深さ14cmである。

掘り方 全体に小ピット状の掘り込みが広がる。

その他 1～3住居とほぼ平行している。火処はないが、遺物の出土があり、ごく一時的な住居か、火を使わない建物(物置、納屋のような)が推定される。

遺物 北西隅付近の床面から土師器甕(F36)が出土したほか、小片と10cm大の石がいくつか出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴から、奈良時代の8世紀後半の所産と推定する。

F区 5住居(第76・180図、PL.53)

検出位置 701-035付近で検出した。F区南東部にあり、南に向かって低くなる地形の裾部にある。カマドを含む南寄りの範囲を近世以降の攪乱により破壊されている。

重複関係 8住居と重複し、8住居→5住居の順に新しく、出土土器の所見とも矛盾しない。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 東辺南半部・西辺南半部が破壊されているが、深さ20～65cmで北側がやや深い。南北にやや長い長方形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。

主柱穴 不明。掘り方で検出したP1～3の計測値は次の通りである。P1：40×22・深さ15cm、P2：30×24・深さ18cm、P3：100×94・深さ16cm。

壁溝 東辺のカマド左袖部から南辺までほぼ全周する。

幅23～43cm（底面幅2～11cm）、深さ2～9cmである。カマド 東辺中央南寄りに設置する。南半部は攪乱により破壊されている。カマド燃焼部上位から、土器片や10cm未満の石が出土した。

貯蔵穴 南東隅の掘り方で検出した隅丸長方形の掘り込みとみられ、36×29・深さ20cmである。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。北東隅・西辺南寄り・南東部に不整形の掘り込みがある。その他 攪乱の掘り込みが深く、カマド付近～中央部の破壊が著しい。

遺物 カマド付近の土器片出土がもっとも多い。

時代・時期 出土遺物の特徴から、平安時代の9世紀代の所産と推定する。

F区 6住居(第77・78・180図、PL.54・143)

検出位置 710-030付近で検出した。F区のほぼ中央部にあり、7住居・8住居にきわめて近い。両者との最短距離は1m未満で、同時存在は想定しにくい。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色～黒褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 住居本体の壁の周囲に、緩い傾斜の掘り込みをもつ。この掘り込みはカマド煙道の先端部を除き、幅30～126cmで全周する。西辺中央部が凸になり、この箇所幅が126cmである。南辺は40cm前後でやや幅が狭く、北辺では80～90cmの幅がある。カマドの左手で幅123cm、右手で48cmである。この斜めの掘り込みは、住居の外側の構造にかかわる遺構とするよりも、煙道部との位置関係から、住居の屋根葺きおろしの内側と考えたい。直に近い壁の高さは30～54cm、斜めの掘り込み外からの深さは57～83cmで、北寄りがやや深い。プランは南北に長い、東辺が西辺に比べて短く、全体として台形を呈する。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。

支柱穴 P1～4の4本。各ピットの計測値は次の通り。P1：66×63・深さ74cm・二段(脇に径39・深さ9cmピット)、P2：58×58・深さ53cm・二段、P3：58×56・深さ78cm・二段、P4：64×52・深さ66cm・二段(下バ2個)。P1～P2：3.39m、P2～P3：2.23m、P3～P4：3.48m、P4～P1：2.20m。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。右袖部に石が据え

られ、脇から粘土が出土した。燃焼部中央から20cm大の石が出土し、支脚の可能性はある。燃焼部には焼土が分布し、カマド前には灰と焼土の混じりが1.2×1.5mほどの範囲に散布していた。燃焼部奥壁には落差14cmの壁があり、煙道につながる。燃焼部から出土した石は、カマド構築材の一部とみられる。

貯蔵穴 南東隅の深さ4cmの掘り込みか。不整形で、プランが判然としないため、半掘とした。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。カマド左脇から北辺・西辺・南辺中央付近まで、壁際が不整形に掘り込まれている。中央部は比較的平坦な不整形部分が残る。また、P1の南側にP6、P2南側にP7、P3南側にP8、P4南東側にP5を検出した。建替えしたか、補助柱の可能性はある。それぞれの計測値は次の通り。P6：56×49・深さ26cm、P7：58×51・深さ63cm、P8：77×38・深さ73cm、P5：62×62・深さ58cm。P6～P7：3.41m、P7～P8：1.94m、P8～P5：3.96m、P5～P6：1.86m。その他 住居外周に連続する斜めの掘り込みは、西辺中央部が突出し、南辺での幅がもっとも狭いことから、出入口は西辺または南辺に推定される。

遺物 カマド燃焼部とカマド前から土器片が、西辺の壁際から10～16cm大の細長い石が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

F区 7住居(第75・180・181図、PL.55・143)

検出位置 710-027付近で検出した。6住居の東側に位置し、最短距離は1m未満である。8住居と重複する。6住居・8住居に比べて規模が小さい。

重複関係 8住居と重複し、8住居→7住居の順に新しく、出土土器の所見とも矛盾しない。6住居を含めて、これら3軒の同時存在は困難と考えられる。

覆土 暗褐色系の土で、ロームブロックを含む。

壁 壁の高さは24～45cmで、概ね40cmであり、南北にやや長い長方形である。南辺の位置は、貼床の南限界で捉えた。東辺北半部と北辺につながって、6住居に似た斜めの掘り込みがある。幅7～16cmで狭い。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。8住居と重なる範囲は、貼床がやや柔らかい。

支柱穴 不明。

壁溝 南辺を除き、ほぼ全周する。幅22～41cm（底面幅7～15cm）、深さ5～8cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部中央付近から長さ28cmの細長い石が立てた状態で出土し、支脚として利用したものと考えられる。ほかにカマド構築材らしき石の出土がなく、粘土で構築したと推定される。支脚石の近くの燃焼部内から土師器甕1個体分が出土している。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。8住居と重なる範囲は、下位に8住居の貼床が存在し、7住居との間はロームブロックを含む暗褐色系の土が認められた。7住居床面を形成するため、人為的に埋められたと推定される。

その他 カマドの遺存が不良にもかかわらず、出土遺物の残りが良い。投げ込まれた可能性もある。

遺物 カマド燃焼部～カマド前、床面中央部、南辺沿いから、完形に近い土器が出土し、中央部床面から完形の刀子(F60、布状圧痕あり)が略完形で出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴から、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

F区 8住居(第79～81・181・182図、PL.56・144)

検出位置 706-025付近で検出した。6住居の南東部に位置し、最短距離は1m未満である。F区の東端にあり、南西部の5住居、北西部の7住居に切られている。規模が大きい。

重複関係 5住居・7住居と重複し、8住居→5住居、8住居→7住居の順に新しい。6住居との同時存在は困難と考えられる。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・焼土粒子を含む。

壁 壁の高さは49～83cmで、北西部がやや高く、南北にやや長い長方形である。

床面 平坦で、全体に貼床が認められた。5住居の床面と高さがほぼ同じであるが、壁溝で南西隅を検出できた。北側で重複する7住居は、床面の高さが8住居よりも約40cm高い。

支柱穴 P1・P9・P3・P8の4本と考えられる。P5とP7は深さが20cm以上あるが、その他は10cm前後である。各ピットの計測値は次の通り。

P1：68×58・深さ58cm・二段、P9：42×41・深さ40cm、P3：66×53・深さ98cm・二段、P8：40×34・深さ19cm、P1～P9：2.96m、P9～P3：2.34m、P3～P8：2.72m、P8～P1：2.14m。P2：39×34・深さ4cm、P4：28×22・深さ13cm、P5：48×45・深さ24cm・二段、P6：34×23・深さ9cm、P7：52×40・深さ35cm。

壁溝 東辺北半部を除き、ほぼ全周する。幅25～45cm（底面幅4～13cm）、深さ1～6cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインよりも内側にある。カマド前～袖部両脇にかけて灰が分布し、燃焼部では灰に焼土が混じる。煙道部に割れた状態の石が3個出土しているが、両袖部から石は出土していない。住居内からはほかにも割れた状態の石がいくつか出土しているので、組み合わせで天井部を構築した可能性もあるが、ベースは粘土とみられる。

貯蔵穴 南東隅の二段に掘り込まれた土坑とみられる。69×64・深さ39cmで、中から土器片が出土した。

掘り方 全体に小ピット状の小さな掘り込みが広がる。カマド前及び壁に沿って不整形の掘り込みがあり、結果として、中央部が盛り上がった状態である。

その他 他の住居に比べて規模が大きく、深かったため、カマド袖部の粘土が遺存しており、貼床がしっかりしている。

遺物 遺物は破片ながら全体から出土した。西辺寄りの床面から25cm大の扁平な石、中央部付近で鉄器2点(刀子F93・F94)が、カマド左袖脇から土師器杯(F71)が出土している。

時代・時期 出土遺物の特徴、カマド構造等から、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

F区1面 1掘立柱建物(第82図、PL.57)

検出位置 728-030付近で確認した。F区の中央部北寄りに位置する。2掘立柱建物とほぼ同じ規模・方位で、1～4住居とも方位が近い。6住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 1溝・5土坑と範囲が重なる。1溝・5土坑からは奈良平安時代の土師器・須恵器の破片が出土している。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P9で1間×3間だが、全体に南北に長く、南北の柱間よりも東西の柱間の方が長い。深さは50cm前後で、P7のみ86cmである。

その他 柱並びの内側にいくつかのピットがあり、東列の柱並びに5土坑がかかる。

遺物 1～4・3・7の各ピットから、奈良平安時代の土器片が出土しているが、小片のため割愛した。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係、及び小片ながらピットから土師器・須恵器が出土していることから、平安時代と推定する。

F区1面 2掘立柱建物(第83図、PL.57)

検出位置 729-040付近で確認した。F区の中央部北寄りに位置する。1掘立柱建物とほぼ同じ規模・方位で、1～4住居とも方位が近い。6住居との最短距離は5.1m、1掘立柱建物とは5.9m、1住居との最短距離は0.6mである。

重複関係 南西隅の柱穴を近世以降の攪乱で破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～10(P6欠)で3間×2間、全体に南北に長い。中央部のP2～P3・P7～P8の柱間がやや短い。ピットの深さは40～50cmで、P7・P10がやや浅い。その他 柱並びの内側にはピット等がなく、東列中央部に9土坑が認められ、中から奈良平安時代の土器片が出土しているが、底面の凹凸が著しく、木の根の可能性がある。

遺物 P6相当の攪乱から奈良平安時代の土器片が出土しているが、混入である。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

F区1溝(第84・182図、PL.58)

検出位置 720～734-009～040にあり、東西に延びる溝と、南北に延びる溝の両者である。東西走行の部分は1掘立柱建物と重複する。南北走行の部分は1掘立柱建物と2掘立柱建物の間にある。

重複関係 1掘立柱建物の南端部ピットと重なるが、前後関係を判定できなかった。調査所見では、4土坑→1溝→5土坑の順に新しい。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 奈良平安時代の土師器・須恵器の破片が1,030g出土している。

時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、平安時代の所産と推定されるが、時期を限定できない。

F区2溝(第84・182図、PL.58)

検出位置 700～724-009～015にあり、調査区東端部を南北に走行する。同じ走行で掘り直しされたらしく、西側の2a溝が新しい。

重複関係 1溝と重複する位置にあるが、攪乱により破壊されている。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。上位に砂層があり、水流があったことを示す。

壁 23～48cmの深さがあり、斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 平安時代の土師器・須恵器の破片が350g以上出土している。

時代・時期 埋没土、出土遺物から、平安時代の所産と推定されるが、時期を限定できない。

F区3溝(第85・182図、PL.144)

検出位置 715～726-044・045にあり、1住居の南端から南に向かって走行し、浅く細くなって検出できなくなる。

重複関係 1住居南端から発するため、前後関係は判定できない。

覆土 灰褐色系の土。

壁 浅い。

底面 凹凸あり。

その他 1住居がやや細長く、特異な形状を呈していることから、3溝が1住居の一部であった可能性あるが、確証がない。

遺物 奈良平安時代の土器が21点出土している。

時代・時期 埋没土、出土遺物から、平安時代の所産と推定されるが、時期を限定できない。

F区 4溝(第85図)

検出位置 721～727-060付近で検出した。3住居の西側にあり、ほぼ南北の走行である。3溝の走行や形状に似るが、長さは半分程度である。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く、斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 3溝とほぼ平行し、かつ1～4住居とも平行しており、同時期との確証はないが、関係ある溝と推定される。

遺物 なし。

時代・時期 埋没土、走行から平安時代と推定するが、時期を限定できない。

F区 土坑(第84・85図、PL.58・59)

検出位置 概ねF区の北西部にあり、1～7土坑はほぼ円形で、規模が近い。8土坑は1住居の南端、9土坑は2掘立柱建物の東列にかかり、10土坑は4住居の南東部に、11土坑はF区の西端部にある。

重複関係 重複関係で判定できたのは、4土坑→1溝→5土坑、1住居→8土坑の順に新しいという前後関係のみである。

覆土 暗褐色～黄褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 1～5土坑は概ね同じ規模で、東西に並んでいる。9土坑は2掘立柱建物の一部の可能性がある。

遺物 2～5土坑・9土坑・12土坑から奈良平安時代の土師器・須恵器の破片が出土しているが、小片のため割愛した。

時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、平安時代の所産と推定する。

F区 ピット(第84～86図、PL.59)

F区のピットは土坑の分布とほぼ同じ傾向を示し、北西部で検出している。遺物の出土はない。各ピットの概要は、計測値表で示した。

第8節 G区

G区の概要 (第87図、PL.60)

G区はF区の西側に位置し、南東部に向かって低くなる地形である。北西端がもっとも高くして標高147m付近、南東端がもっとも低くて144.60mほどである。E・F区と同じく、北側にコンクリート擁壁が築かれ、南側は畝である。

竪穴住居は15軒が検出され、1・3・8・14住居は比較的規模が大きい。長方形の住居は北北東・南南西に対象軸をもつものが多い。中央部の1土坑を囲んで8・7・9・10・11・12住居があり、2掘立柱建物を11・12・13・14住居が囲む。また、5住居の北東側は何もない空間である。なんらかの関係が想定できるが、住居すべてが同時存在ではない。

G区の竪穴住居と掘立柱建物は重複がまったく見られない。規制があったかの如くである。より新しい時代の住居を建設するとき、古い住居が凹みを残して、そ

れらを利用して建設した可能性がある。

土器等の出土が多い住居と、少ない住居とが存在する。時代・時期によるものか、にわかに判定できない。カマドの焼き口天井石や袖石の遺存は不良である。竪穴内部に焼けた状態の数十cm大の石がいくつか見られる。意図的な破壊かもしれないが、埋没過程で散乱した可能性も残る。

1・2溝は平安時代に遡る可能性があるが、3溝は近世以降の耕作痕である。

G区 1住居(第87・88・182・183図、PL.61・144)

検出位置 779-116付近で検出した。G区の北西隅に位置する。南側の2住居・3住居とは、10mほど離れている。重複関係 なし。

覆土 暗褐色～黄褐色系の土で、白色軽石・ロームブロックを含む。

壁 深さ56～79cmで深く、北西部がやや深い。北辺に沿って斜めの掘り込みがあり、この部分を含めると南北4.31mだが、除外すると3.97mとなる。これに対して、東西は4.28mを測り、斜めの掘り込み部を除外した場合は、東西に長い長方形となる。

床面 平坦で、全体に踏み固められている。地山ローム層が堅くしまっている状態に近い。

支柱穴 不明。床面・掘り方とも、検出したのはP1・P2のみである。P1:26×24・深さ15cm、P2:16×15・深さ33cm。

壁溝 北東隅～北辺東半、西辺南半～南辺西辺で検出した。幅22～38cm（底面幅4～7cm）、深さ1～6cmである。南東部を除き、全周していた可能性が高い。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃焼部の2/3は住居壁ラインの内側にあり、カマドを構築する粘土が焼土化して遺存していた。また、袖石・焚き口天井部の石らしき構築材料が、カマド前から焼けた状態で出土している。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込み。81×72・深さ57cmで、しっかりしている。

掘り方 西半部の底面は小ピット状の細かい凹凸があり、カマド前付近は、堅くしまっている状態であった。

その他 北辺沿いの斜めの掘り込みが、この住居でも確認された。幅30～40cmで、テラス状である。

遺物 カマド前から土師器甕破片・略完形の杯(G1)が、南東隅付近から土師器甕(G10)・杯(G2)・甑(G4)が出土している。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

G区 2住居(第89・183図、PL.62・144・145)

検出位置 765-125付近で検出した。G区の西端で、路線のほぼ中央部に位置する。東側の3住居との最短距離は3.5mほどである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・ロームブロックを含む。

壁 深さ41～66cmで深く、北西部がやや深い。東西4.25m、南北4.10mで東西にやや長い長方形である。

床面 平坦で、全体に踏み固められている。地山ローム層が堅くしまっている状態に近い。

支柱穴 北辺に沿ってP1・P2を検出したが、南辺沿いは検出されなかった。P1:52×53・深さ48cm、P2:35×32・深さ50cmで、いずれも深く掘り込まれている。P1～P2の芯々距離は1.78mである。

壁溝 東辺のカマド付近から南東隅を除いて、ほぼ全周する。幅21～30cm（底面幅2～8cm）、深さ5～9cmである。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、カマドを構築する粘土が焼土化して遺存していた。また、袖石・焚き口天井部の石らしき構築材料が、カマド前から焼けた状態で出土している。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込み。78×77・深さ56cmで、二段に掘り込まれ、しっかりしている。

掘り方 全体に細かい凹凸があり、西辺から南辺にかけてL字状に一段低くなる。掘方調査で南辺沿いの柱穴が2本発見された。南西側は径29×32cm、南東側は略三角形で径68×37cm。

その他 カマド焚き口天井部の大きめの石が、住居内側に落ち、焼けた面を上にして出土している。

遺物 カマド燃焼部から略完形の土師器甕(G28)、右袖付近から杯2個体、左袖付近から潰れた状態の甑(G26)、杯(G16)・鉢(G18)が出土した。南壁下の床面近くからも、甕破片が出土している。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

G区 3住居(第90・184図、PL.63・145)

検出位置 765-115付近で検出した。G区の西寄りで、路線のほぼ中央部に位置する。西側の2住居との最短距離は3.5mほど、東側の8住居との最短距離は11.5m、南側の5住居とは11m離れている。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・ロームブロックを含む。中位に黄褐色系の層がある。

壁 深さ36～67cmで深く、南西部がやや浅い。東西4.38m、南北4.58mで南北にやや長く、北辺4.27・東辺4.23・西辺4.14mであるのに対し、南辺のみ3.81mで台形を呈する。

床面 中央部のP1・P2・P3・カマドに囲まれた不整形の範囲が特に硬化していた。南辺中央部に接して

第4章 検出された遺構と遺物

1.57×1.07mの範囲が深さ7cm前後で浅く凹み、内側の西寄りにはさらに深く0.42×0.73m・深さ14cmで掘り込まれていた。その他の部分は平坦で、全体に踏み固められている。地山ローム層が堅くしまっている状態に近い。P1とP2の間、P3からカマドにかけて、焼土の分布が認められた。棒状の炭化物が住居西半部の床面近くから出土している。炭化物は屋根材の可能性はある。

支柱穴 P1・P2・P3を床面で検出した。P1:32×30・深さ61cm、P2:30×31・深さ56cm、P3:33×32・深さ55cm。それぞれの柱穴を結ぶ芯々距離は、P1～P2:1.93m、P2～P3:2.05mである。南東隅の支柱穴P4は掘り方で確認し、36×42cm・深さ記録なしであった。また、柱穴底部の芯々距離は、P1～P4:2.14m、P4～P3:1.89mである。

壁溝 なし。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃烧部は住居壁ラインの内側にあり、カマド袖部の遺存は良好である。焼土は燃烧部の西寄りで検出されている。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込みで、50×51・深さ81cmである。内部から15cm大の石が出土している。

掘り方 全体に細かい凹凸があり、壁際付近の凹凸が著しい。中央部は比較的平坦である。

その他 南辺中央部の壁際で検出された浅い掘り込みは、出入口施設の一部であった可能性がある。

遺物 カマド焚き口付近の床面から甑(G31)、貯蔵穴上面から甕口縁部(G33)、カマド右脇の床面から杯(G29)が出土している。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

G区 4住居(第91図、PL.64)

検出位置 750-130付近で検出した。G区の南西端に位置する。北側の2住居との最短距離は9.5mほど、東側の5住居との最短距離は6mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石・ローム粒子を含む。中位に黒褐色系の層がある。

壁 深さ42～55cmで概ね50cm前後、南辺がやや浅い。東西3.23m、南北3.90mで南北に長く、北辺2.75・南辺2.74m、東辺3.31・西辺3.48mとほぼ長方形を呈する。

各隅は丸みをもつ。

床面 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

支柱穴 不明。床面・掘り方とも検出されなかった。

壁溝 カマド前を除き、全周する。幅19～29cm、深さ4～6cmで、底面幅は4～6cmである。

カマド 東辺中央やや南に設置する。燃烧部は住居壁ライン上にあり、平面形は細長い三角形を呈する。袖部は左側の方がより大きく遺存し、灰白色で固める。燃烧部両壁にも灰白色粘土を貼り付けている。左袖部の上位は焼土化している。

貯蔵穴 楕円形の南東部の掘り込みで、二段に掘り込まれ、66×77・深さ25cmである。

掘り方 全体に細かい凹凸があり、各隅近くが浅く略円形に掘り込まれている。北西隅付近は東西1.65×南北1.40m・深さ10cm前後の掘り込みである。

その他 床面はしっかりしているが、支柱穴が見当たらない。

遺物 小片のみ。持ち去られた可能性がある。

時代・時期 東側の5住居に規模が似ていること及びカマド構造などから、奈良時代の所産と推定する。

G区 5住居(第91・184・185図、PL.65・145)

検出位置 750-120付近で検出した。G区の西寄りに位置する。北側の3住居との最短距離は11mほど、西側の4住居との最短距離は6mである。東側の6住居との最短距離は10.5mで、5住居・6住居・7住居・8住居・3住居に囲まれた範囲には、遺構がない。

重複関係 なし。

覆土 大半は暗褐色系の土で埋没し、床直上10cmほどは黄褐色土が堆積する。

壁 深さ32～56cmで深く、北辺が深い。東西2.80、南北3.23mで南北に長く、南辺2.65・東辺2.83・西辺2.85mであるのに対し、北辺2.45mとやや短い。隅に丸みがあり、全体としては長方形を呈する。西辺中央部が外側にやや湾曲し、この部分のみ壁溝がない。

床面 中央部が堅くしめる。北辺の壁際東寄り壁溝内に10～25cm大の小穴があり、深さは3～10cmである。

支柱穴 不明。

壁溝 カマドの両脇、南西隅、西辺中央部を除き巡る。幅20～38cm、深さ1～6cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインに半ばかかり、カマド袖部の遺存は不良である。燃烧部は浅い皿状を呈する。カマド内・付近からの土器片出土は少ない。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込みで、55×55・深さ11cmである。

掘り方 全体に著しい凹凸がある。

その他 西辺中央部の壁溝が途切れていることと、西側に凸に湾曲していることから、西辺に出入口が推定される。

遺物 北辺沿いの東寄り倒立状態の長甕(G46)・小型甕(G42)・杯3個(G38・39・41)が出土し、西寄りでは床面からやや浮いた状態で杯(G40)が出土している。また、カマド右脇の貯蔵穴上位から倒立状態の甕(G44)が出土している。倒立状態の出土が多いことと、カマドの遺存不良及び土器片が少ないことと関連性があるか、類例調査が必要であろう。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

G区 6住居(第92・185図、PL.66・145)

検出位置 742-108付近で検出した。G区のほぼ中央部だが、南寄りに位置する。西側の5住居とは10.5m離れるが、北東側の7住居との最短距離は3.7mである。屋根の葺き降しは接してしまう可能性が高い。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系と黒褐色系の土で埋没し、床直上5～10cmは茶褐色土が堆積する。壁際では、茶褐色土が断面三角形の堆積を示す。

壁 深さ38～50cmで深く、北辺が深い。東西2.63m、南北3.23mで南北に長く、南辺2.35・北辺2.32m、東辺2.91・西辺2.81mである。隅に丸みがあり、全体としては長方形を呈する。

床面 中央部が堅くしまる。

主柱穴 不明。掘り方では北東隅・北西隅・南東部に不整形の掘り込みが認められるが、柱穴として十分な深さが無い。

壁溝 カマド前から南東隅を除き全周する。幅21～35cm、深さ2～6cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインに半ばかかり、カマド袖部に30cm大の石と粘土を用いて

構築されていたが、天井部はなかった。床面中央部の床上5cmの高さと、南辺中央部のやや浮いた状態で、カマド材料になっていたと見られる石片が出土している。

貯蔵穴 不整形の南東部の掘り込みで、50×53・深さ25cmである。二段に掘り込まれていた。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、かつカマド前と北東・北西・南西の各隅付近に不整形の掘り込みが認められた。

その他 カマドは意図的に破壊された可能性がある。

遺物 西辺中央部の壁際で、床上5cm程度の高さから、鉄製鋤先(G53)が出土している。また、南辺の石の下からも土器片が出土している。

時代・時期 出土遺物は古墳時代のものを含むが、その他の遺物を勘案すると、カマド構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

G区 7住居(第93・185・186図、PL.67・146)

検出位置 745-102付近で検出した。G区のほぼ中央部の南寄りに位置する。北側の8住居とは5.5m離れるが、南西側の6住居との最短距離は3.7mである。

重複関係 なし。

覆土 最上位に浅間山As-Bを含む暗褐色土が堆積し、掘り込み内は暗褐色系の土で埋没する。床直上5～10cmは茶褐色土が堆積する。

壁 深さ53～71cmで深く、北寄りがとくに深い。東西3.72m、南北3.66mで東西がわずかに長く、南辺3.66・北辺3.65m、東辺3.58・西辺2.88mである。隅に丸みがあり、全体としては台形を呈する。

床面 貯蔵穴とP1の中央部に不整形の硬化した面が認められた。

主柱穴 不明。掘り方ではカマド左脇で深さ22cmの掘り込みと、南辺に接して深さ13cmの掘り込みが認められたが、柱穴不足である。

壁溝 北辺西半部の壁際に幅27～42cm、深さ1～3cmの溝が認められた。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインに半ばかかり、カマド焚き口に長さ57・幅20cmの細長い天井石が両袖石に架かった状態で出土した。天井石・左袖石は動いている可能性がある。焚き口と奥壁・煙道部に焼土が分布する。燃烧部から奥壁にかけて、土師器甕破片が重なって出土している。道具にされた(本来の器

ではない)土器の可能性がある。

貯蔵穴 楕円形の南東部の掘り込みで、116×98・深さ24cmである。掘り込み範囲はカマド前に及び、火を焚くには不都合な大きさである。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、北東隅・南西隅付近に不整形の掘り込みが認められた。

その他 東辺のカマド北側から北辺にかけて、住居壁の外側にテラス状の平坦面が認められたが、浅間山As-Bを多量に含む土で埋没しており、本住居とは別の遺構と考えられる。

遺物 カマド燃焼部から奥壁にかけて2個体分の甕破片(G68・69)が上位で出土し、カマド左脇で底部を上にした甕(G67・70)2個体、焚き口手前で横倒し状態の甕(G59)1個体、南辺壁近くでも甕破片がそれぞれ出土している。杯は完形に近いものが焚き口左脇から2個体(G54・55)、中央部のやや高い水準から小片が出土している。比較的遺物量が多い。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

G区 8住居(第94・186図、PL.68・146)

検出位置 755-102付近で検出した。G区のほぼ中央部に位置する。南側の7住居とは5.5m離れ、西側の3住居とは11.5m離れている。本住居の東側にはピット群があり、東へ24m離れて1掘立柱建物がある。

重複関係 カマド煙道部東端が13土坑と接している状態だが、8住居→13土坑の順に新しい。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。中位に黒褐色系の層がある。床面はロームと暗褐色土の混土で形成する。

壁 深さ63～77cmで深く、北寄りごとくに深い。東西4.75m、南北4.45mで東西がやや長く、南辺4.25・北辺3.90m、東辺3.95・西辺4.02mである。隅に丸みがあり、全体としては長方形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。掘り方では貯蔵穴西側で深さ20cmの掘り込み、北西隅で深さ28cmの掘り込み、北辺で深さ36cmの掘り込みがあった。

壁溝 カマド付近を除き、全周する。幅30～50cm、深さ2～8cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ライン

に半ばかかり、奥壁が斜めに立ち上がる。

貯蔵穴 略円形の南東部の掘り込みで、84×74・深さ20cmである。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、東辺北半部壁下の掘り込みはギザギザの形である。北西隅・南西隅に不整形の掘り込みが認められた。

遺物 住居内の壁際近くに土師器小片が散乱する。十数cmの細長い石が10個ほど出土している。貯蔵穴内からも小片が出土している。

時代・時期 出土遺物が少ないので判然としないが、カマド構造、土器小片などから、飛鳥時代～奈良時代の7世紀末～8世紀初めの所産と推定する。

G区 9住居(第95・187図、PL.69・146)

検出位置 733-102付近で検出した。G区のほぼ中央部南端に位置し、南半部は調査区外にある。北東部の6住居とは7.5m離れ、東側の10住居との最短距離は7.5mである。重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。上位を白色軽石を多量に含む黒色土が覆う。

壁 深さ35～37cmで一定である。東西3.37m、南北は中央部で2.86m遺存する。東辺はカマドを除外すると2.30mで、カマドを含めると3.21mとなる。北辺2.97m、西辺は調査区内で2.00mまで確認した。調査区内の住居プランで推定すると、南北に長い長方形になると考えられる。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。北東隅付近に径60cm前後・深さ17cmのP1があるが、柱穴になるか不明である。また、掘り方では北東部に深さ20cm前後の不整形ピット、西辺寄りで径30cm、深さ63cmのピットがある。

壁溝 カマド左脇を除き、検出範囲内で全周する。幅25～33cm、深さ2～11cm、底面幅6～11cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半ばかかり、奥壁が斜めに立ち上がる。住居確認面の直下の深さで、カマド燃焼部の周りに土師器甕の破片が多数検出され、記録を取った後、破片を取上げると、口縁部を斜め上にした状態の土師器甕が燃焼部奥で検出された。焚き口付近には須恵器椀が正立に近い状態で出土している。燃焼部の壁には割れた面を残す20～30cm大

の石を埋め込み、カマドの構築材としていた。

貯蔵穴 不明。P 1の可能性もあるが、他の住居の例を勘案すると、南側の調査区外にあると推定される。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、不整形の掘り込みが北寄りに集中する。

その他 カマドの遺存が比較的良好である。南西部で出土した40×25cm大の石は、カマド焚き口天井部の石であった可能性がある。

遺物 住居内に小振りの石(割れた状態)と土器片が散布する。カマド内の焚き口付近から須恵器椀(G 83)が、燃烧部から口縁部を上にした土師器甕(G 84)が出土している(架けた状態に近い)。燃烧部上位の周囲に甕破片が密集する。カマド外の土器片はやや浮いた状態である。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

G区 10住居(第95・187図、PL.70・146)

検出位置 730-090付近で検出した。G区のほぼ中央部南端付近に位置する。北東部の11住居とは3.5m離れ、西側の9住居との最短距離は7.5mである。標高144.60mの線にのり、G区内では最も低い位置にある。重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。床面直上に茶褐色土が5cm程度堆積する。

壁 深さ18～30cmで一定である。東西3.07m、南北3.82mで、南北に長い長方形を呈する。南東隅と南西隅は隅切りしたように二つの角をもち、北東隅・北西隅も丸みがある。南辺2.50・北辺2.65m、東辺3.61・西辺3.29mである。

床面 細かい凹凸と10cm前後の小穴はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。掘り方で検出したピットは、深さ5cmで浅い。

壁溝 なし。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインの外側にある。奥壁が斜めに立ち上がる。奥壁の手前に15cm大の石が出土しているが、支脚になるか、燃烧部の構築材なのか不明。

貯蔵穴 不明。

掘り方 全体に著しい凹凸があり、中央部東寄りに径60

×80cm前後の浅いピットがある。

その他 全体に遺存状態は不良である。

遺物 南辺の床面近くから土器片が4個まとまって出土し、南西隅付近からも土器小片(G 88)が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀代の所産と推定する。

G区 11住居(第96・187図、PL.71・146)

検出位置 735-085付近で検出した。G区のほぼ中央部南寄りに位置する。南西部の10住居とは3.5m離れ、北側の12住居との最短距離は5.8m、東側の2掘立柱建物との最短距離は4.5mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ34～60cmで、北寄りが多い。東西3.52m、南北5.11mで、南北に長い長方形を呈する。南辺3.11・北辺3.00m、東辺4.82・西辺4.70mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部が硬化している。

支柱穴 不明。P 1・P 2は柱穴の可能性はある。P 1:58×63・深さ57cm二段、P 2:57×81・深さ37cm・南隣接ピット深さ26cmで、P 1～P 2の芯々距離は2.89mである。カマド前のピットは41×43、深さ6cmで、柱穴ではないと推定される。

壁溝 なし。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインに半部ほどかかり、奥壁が斜めに立ち上がる。カマド内からのまとまった遺物出土はない。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みで、57×75・深さ32cmである。中から土器小片と杯類が出土している。

掘り方 カマド前1mと東辺北寄りに、径1.2mほどの不整形掘り込みがある。いずれも50cm前後の深さがある。西辺北半沿いには幅0.7×長さ2.1m・深さ20cmほどの幅広の掘り込みが認められた。中央部は平坦なままで、ローム上面が堅く締まった状態である。

遺物 カマド左脇の攪乱中から出土した土器(G 97)は、ほぼ床面水準である。同じく、カマド左脇から出土した土師器甕破片や、中央部から出土した小片は、床面から10cmほど浮いている。カマド前から南東隅にかけて出土した杯などの小片は、床下土坑と貯蔵穴からの出土であ

る。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

G区 12住居(第97・188図、PL.72・147)

検出位置 745—082付近で検出した。G区のほぼ中央部に位置する。北東部の1掘立柱建物とは8.5m離れ、南側の11住居との最短距離は5.8m、南東側の2掘立柱建物との最短距離は4.5mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ17～32cmで、北寄りが深い。東西2.71m、南北3.55mで、南北に長い長方形を呈する。南辺2.44・北辺2.37m、東辺3.56・西辺3.46mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、北半部が硬化している。

主柱穴 不明。床面中央部のピットは深さ5cmと浅い。P1は43×47・深さ29cmで主柱穴の可能性はあるが単独であり、掘り方でも柱穴に想定できるピットが見当たらない。

壁溝 カマド前と北辺東寄りを除き、全周する。幅26～37cm、深さ2～6cm、底面幅6～13cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインよりも外側にあり、奥壁が斜めに立ち上がる。袖部の遺存は不良である。カマド内からのまとまった遺物出土はない。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みで、63×59・深さ25cmである。南東の壁際から杯類が出土している。

掘り方 全体に凹凸が著しく、南東部と北東部は不整形に深さ10～20cm程度掘り下げられていた。

その他 カマドの遺存は不良だが、比較的遺物が多い。

遺物 カマド前から中央部にかけて出土した土器は、10～20cmほど床面から浮いた状態であった。南東部の壁際や北辺壁際で出土した杯類はほぼ床面水準である。カマド左脇出土の土師器杯(G106)は赤味が強い。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

G区 13住居(第98・188図、PL.73・147)

検出位置 742—072付近で検出した。G区の東寄りに位

置する。南側の2掘立柱建物との最短距離は1mほどで、とくに近接している。西側の12住居とは6.1m離れ、東側の14住居とは4m離れている。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。床面直上には茶褐色土が5～10cm堆積する。

壁 深さ23～48cmで、北寄りが深い。東西3.36m、南北4.00mで、南北に長い長方形を呈する。南辺3.15・北辺3.11m、東辺3.85・西辺3.82mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、北半部が硬化している。

主柱穴 不明。掘り方調査でも柱穴に想定可能なピットは検出されなかった。

壁溝 カマド前を除き、全周する。幅20～38cm、深さ1～7cm、底面幅1～7cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。作り替えがあったとみられ、南側の方が新しい。燃烧部は住居壁ラインよりも外側にあり、南カマドでは奥壁が斜めに立ち上がる。袖部の遺存は不良であり、南カマドから土器片が出土している。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みで、59×75・深さ27cmの卵形を呈する。

掘り方 細かい凹凸はあるが、全体に平坦である。

その他 北カマドの材料とみられる大きめの石が遺存していた。

遺物 カマド前から中央部にかけて出土した土器は、5～10cmほど床面から浮いた状態であった。南辺中央の壁際の杯(G121)・北西隅の土器は床面出土である。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

G区 14住居(第99・188・189図、PL.74・147)

検出位置 740—063付近で検出した。G区の東寄りに位置する。東側の3掘立柱建物との最短距離は1.2mほどで、近接している。西側の13住居とは4m離れている。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ30～60cmで、北寄りが深い。東西3.80m、南北4.99mで南北に長い。南辺3.66・北辺3.21m、東辺4.68・西辺4.76mと北辺よりも南辺の方が長く、全体と

して台形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部が硬化している。

支柱穴 不明。掘り方調査では、南辺中央部付近の壁から1m離れた位置で、65×50・深さ20cmのピットが検出されたが、その他掘り込みは10cmたらずで、柱穴に想定可能なピットは検出されなかった。

壁溝 カマド前～南東隅を除き、全周する。幅27～49cm、深さ5～12cm、底面幅4～15cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインよりも外側にあり、奥壁近くに石が据えられ、奥壁にも石が埋め込まれていた。煙道部に焼土が分布する。袖部の遺存は不良であった。

貯蔵穴 南東隅の不整形掘り込みで、58×53・深さ20cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。北西部・南西隅はやや深く掘り込まれる。

その他 カマド燃烧部の奥に据えられた扁平な石は、支脚の可能性はある。

遺物 カマド前から南辺にかけて土器片の出土が多い。カマド右脇から土師器杯(G125・128)が2点、南辺沿いの壁際で須恵器杯(G135～137)が3点出土し、西辺沿いの壁際から鉄滓が出土した。中央部北西寄りの床面から25cm大の大きめの石が出土した。作業台の可能性はある。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

G区 15住居(第100・189図、PL.75・147)

検出位置 737-047付近で検出した。G区の東端に位置する。西側の3掘立柱建物との最短距離は6mほどである。標高144.80mと145.00mとの間にあり、G区のなかでは10住居に次いで低い位置にある。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で埋没する。

壁 深さ28～51cmで、北寄りが多い。東西2.51m、南北3.28mで南北に長く、北東隅付近が攪乱により破壊されている。南辺2.30・北辺1.12m以上(推定2.39)、東辺3.01以上(推定3.25)・西辺3.10mである。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、北半部は硬化している。

支柱穴 不明。掘り方調査では、住居中央部に浅い不整形の掘り込みを検出したのみで、柱穴に想定可能なピットは見当たらなかった。

壁溝 北東隅を攪乱で破壊されているが、カマド前～南東隅を除き、全周するとみられる。幅19～33cm、深さ2～9cm、底面幅4～14cmである。

カマド 東辺南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインに半分程度かかる。燃烧部の左壁近くに扁平な石が斜めに立ち、右袖部相当の位置でも扁平な石が斜めに立っていた。カマド左脇の床面からカマド構築材とみられる20cm大の石が出土し、カマド前50cmの位置からは、床面からやや浮いた状態で25cm大の石が出土した。作業台の可能性もある。袖部の遺存は不良であった。

貯蔵穴 南東隅の略楕円形の掘り込みで、住居と壁を共有する。80×56・深さ9cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。南辺沿い～西辺沿いではやや深く掘り込まれる。

その他 掘り方調査では、西辺の北半部が外側から不整形に掘り込まれ、攪乱とみられる。

遺物 全体に散布するが、カマド前から南辺にかけて土器片の出土がやや多い。南辺西寄りの壁際から土師器杯(G140)が出土している。北東寄りの床面から浮いた状態で、鉄滓が3個出土した。カマド前の20cm大の石は、カマド材料または台石とみられる。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀前半の所産と推定する。

G区1面 1掘立柱建物(第101図、PL.76)

検出位置 755-073付近で確認した。G区の中央部北端に位置する。北東部は調査区外にあるため、全体の規模は不明だが、南北2間分・東西2間分を確認している。西側の8住居との間にピット群があり、南西部の12住居との最短距離は8.7mである。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P5で2間×2間分が調査区内にある。柱間は206～213cmで揃っている。

深さは40cm前後で、P4のみ28cmである。P1・P2・P3・P5は二段に掘り込まれている。

その他 全体の規模が不明だが、2掘立・3掘立と方位

に近い。

遺物 遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

G区1面 2掘立柱建物(第102図、PL.76)

検出位置 735-075付近で確認した。G区の東寄りに位置する。11・12・13・14住居に囲まれている。西側2mに2土坑、南側1.5mに3土坑がある。北東側3mには、やや大きめの5土坑がある。

重複関係 なし。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P8で、2間×2間となる。中央部には柱穴がない。柱間は237～266cmである。P2～P6が500cm、P8～P4が530cmで、南北棟とみられる。深さは40cm前後が多く、P1:28cm、P2:24cmである。P4・P6・P7・P8は二段に掘り込まれている。

その他 13住居との最短距離は1mほどであるが、長軸方位に近い。

遺物 遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

G区1面 3掘立柱建物(第103図、PL.77)

検出位置 740-057付近で確認した。G区の東寄りに位置し、14住居と15住居との間にある。14住居との最短距離は1.4mほどである。

重複関係 1溝・2溝と重複し、溝の方が新しい。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

柱穴 P1～P11で、2間×3間となる。北辺のP9・10・11がP7・8・1と平行し、P9はP5・6・7列の延長線からずれる。P8は他のピットに比較して小振りて浅く、P10が本来の柱穴と考えられる。柱間は204～233cmである。深さはP8を除き、40cm以上を測る。二段に掘り込まれるものが多い。

その他 北辺のP9・10・11を除くと、2掘立の規模に近い。

遺物 遺物は出土しなかった。

時代・時期 埋没土や周囲の住居との位置関係から、平安時代と推定する。

G区 1溝(第104図、PL.77)

検出位置 742～750-049～061にあり、ほぼ直角に曲る東西に延びる溝と、南北に延びる溝の両者である。曲がり角から東西走行の部分は3掘立柱建物と重複する。曲がり角付近から南へ延びる溝は2溝である。

重複関係 3掘立柱建物の北辺部ピットと重なり、3掘立柱建物→1溝の順に新しい。1溝と2溝との前後関係は判定できなかった。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 平安時代の土師器7点、須恵器4点が出土した。時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、平安時代の所産と推定するが、時期を限定できない。

G区 2溝(第104図、PL.77)

検出位置 733～745-059～061にあり、南北走行の溝である。1溝の曲がり角につながるように検出され、G区南端では検出できなかった。

重複関係 1溝と接する位置にあるが、両者の前後関係は判定できなかった。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 平安時代の土師器5点、須恵器1点が出土したが、小片のため割愛した。

時代・時期 埋没土、出土遺物から、平安時代の所産と推定するが、時期を限定できない。

G区 3溝(第105図)

検出位置 744～766-090～127にあり、G区の西半部のなかで断続的に検出した。断面形状や幅、埋没土が同様であったことから、すべて3溝とした。

重複関係 他の遺構との重複はない。

覆土 新しい埋没土で、柔らかい。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 不明。

その他 軽石を含む黒褐色の地山を切り込んでいる。

遺物 なし。

時代・時期 規模、埋没土の状況等から、近世以降の耕作痕と推定する。

G区 土坑(第104・106・107図、PL.78・79)

検出位置 概ねG区中央部に分布する。1土坑は9・7・8・10・11・12住居に囲まれた緩やかな斜面上に単独で検出され、2m大の規模である。これに似た形状は5土坑が示す。6・7・8・10・13土坑は8住居の東側～ピット群の南西部に分布する。

重複関係 8住居→13土坑の順に新しい。1溝と14土坑との重複関係は判定できなかった。

覆土 暗褐色系の土で、白色軽石を含む。

壁 浅く斜めに立ち上がる。

底面 凹凸あり。

その他 1土坑・5土坑が2m大の規模で、その他は1m前後または1m以下の規模である。

遺物 1土坑から土師器2点・須恵器2点、13土坑から土師器6点が出土した。その他の土坑からの遺物出土はない。

時代・時期 埋没土、出土遺物・重複関係から、1土坑は平安時代の所産と推定するが、時期を限定できない。13土坑の土器片は、8住居のものが流れ込んだ可能性がある。

G区 ピット(第106・107図、PL.79)

G区のピットは中央部北寄りに集中して検出された。掘立柱建物としての組合せはできないが、比較的狭い範囲に集中していることから、この付近になんらかの施設があったと推定される。3・4・5ピットは直線的に並ぶ。各ピットの概要は、計測値表に示した。なお、15ピットは3掘立柱建物の北東隅になり、土師器片3点が出土した。

第9節 H区

H区の概要 (第108図、PL.80・110・111)

H区は市道を挟んでG区の西側に位置し、南西部に向かって低くなる地形である。上武道路の路線からみると、概ね南に向かって低くなる。調査区域の北側やや西寄りをもっとも高くして標高147.70m付近、南東端がもっとも低くて146.20mほどである。G区と同じく、北側にコンクリート擁壁が築かれ、南側は畠と宅地である。

南東端を調査区への出入口としたが、調査工程の都合で調査区東辺と北辺を西側I区への進入路としたため、進入路下の遺構調査を後回しとした。また、南西部の墓地跡は、年度末近くになって用地が明渡しとなり、14住居西半部の調査は次年度送りとなった。

竪穴住居は15軒が検出され、5号は欠番である。1・4・10・11・12・15・16住居は比較的規模が大きく、古墳時代の所産とみられる。8住居は遺物の遺存が良好で、完形に近い遺物が多い。ほかの住居と異なり、南東隅にカマドを設置する。11住居は北辺にカマドを設置し、カマド袖部・天井部に石を組み合わせ粘土で固めるという

特異な構造をもつ。

H区西寄りに墓地跡の区域がある。改葬後に調査着手したところ、12基の土坑から人骨が出土した。副葬品等から、江戸時代の墓と推定される。墓坑とみられる60土坑を切って、1掘立柱建物があり、墓地への進入路が南西に延びていた。1掘立柱建物が2間×2間の総柱建物であることと併せると、1掘立柱建物は墓地内に建てられた堂宇と推定される。

調査区内から縄文土器の破片が表土掘削の時点で出土していることから、下層の縄文時代遺構の存否を確認するため、確認トレンチ1～4を設定して掘り下げたところ、縄文時代の土坑を検出した。1トレンチでは27土坑、3トレンチで32・33・34・36・42土坑、4トレンチで41土坑が縄文時代の所産とみられる。このほか縄文土器を出土した土坑は16・18・21・23・24・43・45・54・55・62・73土坑があり、このうち54・55・62・73は墓地内なので、後世の流入と考えられる。

H区 1住居(第108・109・189図、PL.81・147)

検出位置 760-155付近で検出した。H区の東南端付近に位置する。東側の15住居との最短距離は3.4mである。北東から北西に向かって緩やかに傾斜する地形の最も低い場所にあり、標高146.40mの等高線よりも低い。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ22～67cmで、北寄りが深い。東辺北半部は攪乱により破壊されている。南北4.64m、東西4.44mで竪穴は南北がやや長い。南西隅は調査区外にある。南辺1.47(推定4.4)・北辺4.32m、東辺4.30・西辺1.01m(推定4.5m)である。支柱穴の柱間寸法から、東西棟と考えられる。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部のローム層が硬く踏み固められていた。

支柱穴 P1・P2・P3が支柱穴とみられ、いずれも二段に掘り込まれている。南西支柱穴は調査区外に想定される。P1:38×46・深さ48cm、P2:49×54・深さ74cm、P3:33×35・深さ76cmである。柱間は芯々距離でP1～P2:1.80m、P2～P3:2.09mである。

壁溝 カマド部分を除き、調査区内では全周する。幅21～47cm、深さ3～10cm、底面幅4～33cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインの内側にある。袖部の粘土と左右の焚き口袖石が遺存していた。袖石の間の底面は強く焼けて硬化していた。袖石の手前には浅い20cm大の掘り込みが認められた。燃焼部中央やや左寄りに方柱状の焼けた石が立てた状態で出土し、カマド支脚と考えられる。カマド前と右袖部外の壁際に焼けた20cm大の石が出土し、カマド構築材の一部と推定される。

貯蔵穴 南東隅の略方形の掘り込みで、二段に掘り込まれている。91×94・深さ87cmである。一段目は床面から数cm下に相当し、二段目は底面まで下がる。蓋状の施設が想定される。中から土師器杯(H1)の完形に近いもの、土師器甕(H6)破片が出土した。

掘り方 カマド前で60cm大の浅い掘り込みが検出されたほか、小振りのピットが検出された。P8:20×20・深さ14cm。

その他 北辺沿いの床面でP5・P6・P7が検出された。出入口施設の可能性がある。P5:27×31・深さ6cm、

P6:18×19・深さ3cm、P7:28×22・深さ13cm。

遺物 カマド付近と北西部の床面から土器小片が出土した。南東隅の貯蔵穴内からは完形に近い土師器杯(H1)、甕(H6)破片が出土した。カマド付近の床面近くから出土した20cm前後の石は、カマドの構築材とみられる。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

H区 2住居(第110・189～191図、PL.82・147)

検出位置 780-140付近で検出した。H区の北東端付近に位置する。調査区進入路造成の都合で、二回に分けて調査を実施した住居である。西側の3住居とは4.8m離れている。

重複関係 1溝と重複し、2住居→1溝の順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ18～45cmで、北寄りが深い。二回に分けて調査したためか、南辺の東半部の角度が不正確である。また、北西隅が攪乱で破壊されているため、南辺・西辺の長さが推定値となる。南北4.21m、東西3.22mで南北に長い長方形である。長軸の方位が座標北、カマドの対象軸がこれと直交する東西方向の90度となった。北辺3.10・南辺2.88m(推定3.1m)、東辺3.77・西辺3.66m(推定4.0m)である。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、中央部のローム層が硬く踏み固められていた。

支柱穴 不明。P2は柱穴の可能性がある。P1:南北40cm・深さ11cm、P2:39×42・深さ22cm、西辺中央壁際のピット:15×20・深さ17cm。掘り方調査で、カマド左脇に38×51・深さ13cmの掘り込みが検出されているが、柱穴かどうか不明である。

壁溝 北辺と西辺北半部にあり、その他の範囲は床面で検出していない。幅24～46cm、深さ2～5cm、底面幅2～8cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃焼部は住居壁ラインに半分かかる。壁ラインにかかる位置の左右の壁に、40cm大の扁平な石が立てた状態で据えられていた。左袖部の石は内側へ傾いた状態で遺存していたが、右袖部の石は抜かれた状態であった。奥壁のやや上位に、トンネル状の煙道が一部遺存し、上面よりも外側へ10cmほどが延びていた。その外側は攪乱により破壊されたとき

られる。燃烧部は赤く焼けて硬化していた。掘り方調査では、燃烧部周囲に不整形の掘り込みが6個検出されている。石を据えた掘り方とみられるが、石が遺存していない掘り込みもあり、確証がない。

貯蔵穴 南東隅のP3の掘り込みで、内部にもピット状の掘り込みがあり、不整形である。全体としてP2を除外した範囲を貯蔵穴とすれば、121×95・深さ35cmで、東端は住居の壁の外へ向かって掘り込まれている。中から須恵器杯や土師器甕破片が出土した。

掘り方 カマド前～中央部にかけて不整形の150cm大・深さ24cmの掘り込みが検出された。東辺北半部の壁際では、床面でみられなかった壁溝が認められた。深さ5cm前後である。西辺中央部から南へ向かって溝状の遺構が認められたが、長さ約70cmを検出したのみで、南寄りの範囲は攪乱により破壊されていた。

遺物 カマド左袖前と南東部の貯蔵穴付近から土器片が出土した。貯蔵穴内からは須恵器杯(H13)が出土した。北西隅の床から浮いた状態で、25cm大の扁平な石が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

H区 3住居(第111・191図、PL.83・147)

検出位置 783-148付近で検出した。H区の北東端付近に位置する。東側の2住居とは4.8m離れ、南西側の4住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ35～46cmで、東辺側がやや深い。南辺が直線的ではなく、東寄り外へ三角形に突出している。南辺1.65・北辺1.85m、西辺2.64・東辺2.59mで、やや歪んだ長方形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、南に向かってやや低くなる。カマド前の床面中央部に、50～60cmの不整形の範囲で焼土が分布していた。

支柱穴 P2は柱穴の可能性ある。P2:27×40・深さ27cmである。P1は浅く、25×33・深さ16cmである。掘り方調査では、これらに対応するピットが検出されていない。

壁溝 北東隅から北西隅、西辺中央部、南辺の西半部の

壁直下に、それぞれ巡る。北東隅はやや幅広く、南東部の三角形突出部付近では内側の溝立上りが消滅する。掘り方調査では壁溝を検出していない。幅20～44cm、深さ3～16cm、底面幅2～18cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインに半分かかる。燃烧部の奥側に煙出しの孔が遺存しており、燃烧部と煙出しをつなぐ天井部が残っていた。天井部は灰黄褐色系の粘土で築かれていた。左右袖部の基部も、同様の粘土で形成されていた。燃烧部は赤く焼けている。煙出しの孔の周囲は、赤く焼けて焼土が分布する。

貯蔵穴 不明。本遺跡では通常カマド右脇に存在するが、3住居ではその位置に掘り込みが認められない。P1であった可能性がある。

掘り方 全体に著しい凹凸がある。北東隅、北西隅に深い掘り込みがあったほか、住居中央部にP3:40×50・深さ17cmの掘り込みが認められた。北西隅のP1は不整形で、60×73・深さ5～23cmである。

その他 本住居はH区内では最も小規模であるが、遺物も比較的多く、カマドの遺存が良好であった。特別な用途があったか、1～2人の住まいが想定される。また、南辺の三角形に突出する部分は、出入口施設の可能性がある。

遺物 カマド右袖部脇からは土師器杯(H26・27)、南西隅付近から土師器甕(H30)・杯(H25)土器片と須恵器蓋(H28)が出土し、東辺北寄りの床面から砥石(H31)と薦編み石のような小振りの石が出土した。北西部壁際出土の土師器甕(H29)は、床面から浮いた状態であるが、竪穴外側かつ屋根の内側にあったとみなせば、住居に所属すると思われる。

時代・時期 古墳時代の遺物もあるが、他の遺物やカマド構造などから、飛鳥時代～奈良時代の7世紀末～8世紀前半の所産と推定する。

H区 4住居(第112・113図、PL.84)

検出位置 777-154付近で検出した。H区の中央東寄りに位置する。北東側の3住居とは3.8m離れ、北西側の7住居との最短距離は0.7mである。

重複関係 なし。北東隅から東辺にかけて攪乱により破壊されている。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。床面直上に締まりのないにぶい黄褐色土が堆積する。

壁 深さ39～51cmで、北辺側がやや深い。北東隅付近は攪乱により破壊されている。東辺が西辺に比較してやや短く、北辺は南辺よりも短い。南辺3.68・北辺3.46m、西辺4.03・東辺3.80mで、台形を呈する。

床面 細かい凹凸はあるが概ね平坦で、南に向かってやや低くなる。貯蔵穴の北側・西側が数cmほど帯状に盛り上がる。カマド袖部の手前に径20cmほどの不整形の範囲に焼土が分布し、床面中央部のP3にも焼土が分布していた。

支柱穴 不明。P3は49×44・深さ8cmで、柱穴と想定するには浅い。南辺中央部寄りの掘り込みは、95×68・深さ4cmで、こちらも柱穴とは想定しにくい。

壁溝 北東隅から南辺西寄りまでつながるが、南西隅はP2があり、途切れる。幅17～32cm、深さ1～5cmである。掘り方では、カマド両脇の北側へ長さ50cmほど、南側へ80cmほど検出した。

カマド 東辺中央部に設置する。燃烧部は住居壁ラインの内側にあり、煙出しの孔が壁ラインにかかる。左袖部よりも右袖部の遺存が良好で、燃烧部奥の天井部が遺存し、燃烧部の両袖部内側と天井部下側が良く焼けていた。煙出しは径30cmほどの不整形を呈し、孔の底面は燃烧部奥壁につながり、良く焼けていた。燃烧部中央やや左寄りに、長さ16cm・一辺6cm前後の角柱状の石を据えて、支脚としていた。石は良く焼けていて、使い込まれたものとみられる。燃烧部の底面幅35cm、奥行き90cmで、奥壁付近はやや細くなる。煙出しと支脚の位置、燃烧部の形状を勘案すると、カマドは住居壁に対して直角にならず、対象軸は壁に対して約20度傾いている。焚き口付近の底面には焼土が分布していた。カマドを構築する粘土は、地山のロームを利用している。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みP1とみられる。中央部床面に比較して数cmの高まりが、掘り込みを略方形に囲む。深さは89cmあり、上面径60cm前後に比較して深い。遺物は出土しなかった。南西隅に底面楕円形の掘り込みP2があり、住居壁を横穴状に掘り込み、全体として不整形を呈する。110×142・床面からの深さ46cmで、こちらも貯蔵穴の可能性はある。

掘り方 細かい凹凸はあるが、全体に平坦である。南辺

中央部壁際の掘り込みは浅い。住居壁の外側に不整形の土坑状掘り込みがあり、攪乱または出入口施設の可能性がある。

その他 南辺中央部屋内の土坑状掘り込みは、南辺外の不整形掘り込みの一部であった可能性も残る。南西隅の横穴状不整形の掘り込みP2は、貯蔵穴の項で若干記述したが、ほかの住居でも似た状態の掘り込みがあり、この住居固有の遺構ではない。「室」のような機能であったか。北東隅から北西隅にかけて、壁溝のなかに径15cm前後の不整形の小穴が5個認められた。深さ2～10cmである。住居内壁に関連する施設の一部とみられるが、不明遺構である。

遺物 カマド前から中央部にかけて、床面からやや浮いた状態で土器片が少量出土した。南東隅の貯蔵穴南寄りの壁際から15cm大の石が出土した。カマドの遺存は良好だが、遺物量が少ない。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀代の所産と推定する。

H区 6住居(第114図、PL.85)

検出位置 791-153付近で検出した。H区の中央北寄りに位置する。西側の9住居との最短距離は2.2mである。北東隅から住居中央部にかけて攪乱が入り、深く破壊されている。調査区北辺沿いの幅3m×長さ22.5mの範囲は、現代のゴミ穴が深く届いており、調査から除外した。重複関係 6住居の南辺は1溝と接するような状態であるが、1溝の上バは6住居の掘り込みを破壊しており、6住居→1溝の順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ11～20cmで、東辺側がやや深い。北東隅付近は攪乱により破壊されている。全体の形状は不明だが、遺存分から推定すると東辺がやや長く、南辺が短い台形とみられる。南辺1.97・北辺0.45m(推定2.4m)、西辺2.93・東辺2.06m(推定3.3m)である。

床面 細かい凹凸があり、北西部の床面は比較的平坦であるが、カマドから南東隅にかけては、凹凸が多い。中央部が破壊されているので、全体状況の復元は困難である。

支柱穴 不明。P1は位置を勘案すると貯蔵穴とみられる。北西隅付近の掘り込みは、断面が三角形を呈し、深

さ15cm程度で、柱穴らしくない。北西部ピット:29×34・深さ15cm。南東部の不整形掘り込み:76×84・深さ7cm。壁溝 北西隅から西辺につながるが、南西隅にはない。幅17～25cm、深さ4～9cm、底面幅3～7cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。左右の袖石が住居壁ラインにかかり、燃烧部の大半は壁ラインの外側にある。燃烧部壁・袖石とも良く焼けており、奥壁は二段に作られていた。遺物は土師器小片のみである。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みP1とみられる。29×30・深さ29cmで、やや小振りである。遺物は出土しなかった。掘り方 底面の凹凸が著しい。掘り方では南東部の不整形掘り込み中から、やや深いピットが検出された。P2:44×34・深さ189cm、P3:28×37・深さ33cmである。カマド燃烧部は深さ14cmほどの不整形の掘り込みとなった。

遺物 北西部の床面から土器小片が出土したほか、南西部の浅い掘り込みの底面から浮いた状態で土器片が出土した。遺物はごく少なく、掲載できるものがない。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の所産と推定する。

H区 7住居(第115・191図、PL.86・147)

検出位置 780—157付近で検出した。H区の中央やや東寄りに位置する。東側の4住居との最短距離は0.7m、北側の8住居との最短距離は3.5mである。北東隅から住居中央部にかけて現代ゴミ穴の攪乱が入り、深く破壊されている。

重複関係 なし。

覆土 白色軽石を含む褐色系の土で埋没する。重機による破壊が深いため、もとの埋没土が移動している可能性がある。

壁 深さ21～32cmで、概ね一定である。北東隅から中央部にかけて攪乱により破壊されている。全体の形状は不確定だが、遺存分から推定すると東辺がやや長く、南辺が短い台形と考えられる。南辺2.49・北辺0.65m(推定2.3m)、西辺3.11・東辺3.09m(推定3.7m)である。

床面 遺存範囲が狭いので不確定だが、カマド前から南東部にかけて貼床されており、おそらく全体も同様だったと推定される。

主柱穴 不明。P2は南北47・深さ9cmで、浅い。P1

は位置を勘案すると貯蔵穴と推定される。

壁溝 東辺のカマドよりも北側に検出された。幅38～46cm、深さ7～8cm、底面幅3～7cmである。

カマド 東辺中央南寄りに設置する。燃烧部中央の左右が遺存し、それと対の位置で略楕円形の小ピット(28×17・深さ16cm)を検出した。左右は焼けており、元の位置にあるとみられる。粘土で築かれた左右の袖部の基部が遺存し、貼床の床面との間に炭化物・焼土粒子を含む黒褐色土が存在し、その上に明黄褐色の袖部構築粘土を載せていることが判明した。この土層の観察から、カマドは作り替えされていると考えられる。

貯蔵穴 南東隅の掘り込みP1とみられる。44×56・深さ20cmで、東に凸の略三角形を呈する。

掘り方 遺存していた範囲で底面の凹凸が著しい。とくに南辺寄りには顕著である。

遺物 北西部の床上20cmほどから土師器片が出土したほか、カマド左脇から砥石(H33)が出土した。カマド内とその付近からの出土遺物は少なく、土器小片のみである。中央部が大きく深く破壊されていることを除外しても、もともと遺物は少なかったと推定される。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀後半の所産と推定する。

H区 8住居(第116・191・192図、PL.87・88・148)

検出位置 786—160付近で検出した。H区の中央やや北寄りに位置する。北側の9住居との最短距離は0.8m、西側の10住居との最短距離は0.3mである。隣接する住居との同時期存在は、連結される場合を除き、困難であろう。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ19～33cmで、北東辺がやや深い。各辺とも長さが異なり、全体として台形である。南東辺2.27・北西辺2.59m、南西辺2.92・北東辺3.38mである。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、中央部がやや凹む。床面は硬く踏み固められており、中央部は赤く焼けている。棒状の炭化物が北隅付近で出土したと併せ、焼失家屋の可能性はあるが、遺物は顕著な焼けた痕跡が見られない。

主柱穴 不明。P1:29×23・深さ21cmで、柱穴の可能

性があるが、ほかに組み合うピットがない。掘り方では北寄りで3個のピットが並んで検出されたが、いずれも深さ4～7cmで、柱穴の想定がしにくい。

壁溝 南隅とカマドを設置する東隅を除き全周する。幅12～27cm、深さ1～9cm、底面幅2～5cmである。

カマド 本住居はほかの住居と異なり、東隅に設置する。対象軸は辺に直角または平行ではなく、東隅と西隅を結ぶ対角線方位に近い。左右の袖石が遺存し、左袖石は板状を呈し立てた状態で、右袖石は外側へ倒れた状態で、それぞれ出土した。両石とも内側が良く焼けていた。燃焼部はすべて住居壁の内側にあり、奥壁は住居隅の壁に一致する。燃焼部やや奥の右に、角柱状の石が据えられおり、支脚と考えられる。袖石よりも奥側は粘土で築かれていた。住居内西隅付近で、30cm大の焼けた細長い石が出土しており、焚き口天井部の石であったとみられる。西側の石は20cmほど浮いた状態であったが、東側の石は床面水準出土である。

貯蔵穴 床面では確認できなかった。掘り方調査で、南隅付近に78×63・深さ33cmの略楕円形の掘り込みP2を検出しており、貯蔵穴の可能性が高い。

掘り方 カマドの袖石と粘土を除去すると、80×130・深さ9cm前後の不整形掘り込みとなった。北隅付近に3個のピットが東西方向に並んで検出されたが、いずれも浅い。

その他 遺物の遺存が良好でありながら、カマド構築材の焼けた石が対角線方向の西隅から出土していることから、単純に使用停止—放置—廃棄された住居とは想定できない。遺物出土状況を勘案すると、北東辺に出入口が推定される。

遺物 出土遺物がとくに多い。カマド付近から南東辺にかけての遺物は床面出土が多く、北隅付近も同様である。中央やや北寄りの須恵器高杯(H37)は完形に近く床面から約5cm上、隣接の土師器甕(H42)も同じ程度である。西隅付近で出土した大きめの石のうち、南西部の二つは焼けており、カマド構築材であった可能性が高い。最大の35cm大の石は壁にかかる状態に近く、一部に平坦面をもっていることから、作業台に使われた可能性がある。主として北隅付近の床面からは棒状の炭化物が出土しており、屋根材であった可能性がある。カマド内と付近から土師器破片が出土しており、カマドに架けてあった土

師器甕か、カマド構築材の破片とみられる。左右の袖石は良く焼けており、左袖の石は立てた状態で出土しており、もとの位置に留まっていると考えられる。須恵器高杯(H37)はほぼ完形に近く、他の土師器とともに時期限定可能な一括土器と言えよう。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

H区 9住居(第117・192図、PL.89・148)

検出位置 793—160付近で検出した。H区の中央北寄りに位置する。南側の8住居との最短距離は0.8m、東側の6住居との最短距離は2.2mである。

重複関係 1溝と重複し、9住居→1溝の順に新しい。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ27～42cmで、北辺がやや深い。各辺とも長さが異なり、全体として台形である。南辺3.21・北辺3.49m、西辺3.79・東辺3.18mである。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、床面は硬く踏み固められていた。北東隅から東辺にかけて攪乱により破壊されていた。

主柱穴 P2及び北寄りの掘り込みか。P2：50×44・深さ28cm、北寄りの掘り込み：117×62・深さ31cmで、北寄りの掘り込みは柱抜き跡の可能性はある。両者の芯々距離は1.85mである。

壁溝 北西隅～南辺中央部まで検出した。幅20～35cm、深さ2～4cm、底面幅4～11cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。大半を攪乱により失っており、燃焼部が壁ラインにかかると推定されるが、詳細は不明である。

貯蔵穴 南東隅の不整形掘り込みP1とみられる。42×37・深さ44cmである。

掘り方 中央部北寄りに略楕円形172×145・深さ28cmの掘り込み、これの南側に接して107×142・深さ20cmの掘り込み、西に接して137×100・深さ12cmの不整形掘り込みがある。南側の掘り込みの底面は凹凸が著しい。

遺物 カマド前から南辺にかけて、土器片が比較的多く出土した。カマド前で土師器甕の破片、南東隅付近で杯・甕破片が出土した。南辺中央部脇・南西部から出土した石は焼けており、カマド構築材の一部と考えられる。北東隅からカマド北半部は、現代ゴミ穴により破壊されて

いた。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、平安時代の9世紀中頃の所産と推定する。

H区 10住居(第118・119・193図、PL.90・91・148・149)

検出位置 785-165付近で検出した。H区の中央北寄りに位置する。西側の11住居とは壁がほとんど接しており、東側の8住居との最短距離は0.3mである。

重複関係 なし。

覆土 上位は黒褐色系の土で、下位はにぶい黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ29～49cmで、北辺がやや深い。各辺とも長さが異なるが、全体として東西にやや長い長方形である。南辺3.98・北辺3.80m、西辺3.63・東辺3.27mである。東隅と南隅が丸味を帯びる。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、床面は硬く踏み固められていた。西辺に直交して床溝が検出された。

支柱穴 配置でみると、床面で検出したP3・P4・P5と、掘り方で検出したP6と考えられる。床面検出のP3とP5は浅く、柱穴らしくないが、掘り方で十分な深さがある。床面検出のP3：15×19・深さ4cm、P4：17×19・深さ29cm、P5：31×25・深さ14cm・二段掘り込みである。P3～P5：1.54m、P3～P4：1.84mで南北の柱間が長いことから、南北棟と推定される。掘り方検出のP3：39×45・深さ33cm・三段掘り込み、P4：36×35・深さ31cm、P5：28×36・深さ22cm、P6：29×26・深さ22cm、P3～P4：1.89m、P4～P6：1.53m、P6～P5：1.82m、P5～P3：1.61mである。そのほかの床面検出ピットの大きさ等は次の通り。P2：56×45・深さ21cm、P7：43×42・深さ12cm、P8：30×28・深さ7cm、P9：19×27・深さ15cm。

壁溝 カマド～貯蔵穴付近と南西隅を除き、全周する。幅15～27cm、深さ1～8cm、底面幅3～8cmである。

カマド 東辺中央やや南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインの内側にあり、左右の焼けた袖石が遺存していた。焚き口天井部の石は、長さに比して薄い石で、二つに折れた状態で焚き口手前に遺存していた。また、燃烧部中央底面のやや右手に角柱状の石が据えられており、

支脚と考えられる。燃烧部の左右の壁は良く焼けており、奥壁は直に近い角度で立上り、壁外との落差は25cmである。カマド付近からは土師器甕破片がいくつか出土した。貯蔵穴 南東隅の略楕円形掘り込みP1とみられる。カマド右袖裾部から直線的に約1.4m西へ向かって床面よりも低くなる段差があり、直角に曲って1mで南辺の壁に至る。貯蔵穴を囲むように、深さ10～25cmの掘り込みが認められた。P1は二段に掘り込まれ、79×62・深さ51cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマドの奥壁は住居壁よりも外へ向かって突出し、略三角形を呈する。

床溝 西辺の約1/3付近の南寄りの床面で検出した。幅9～13cm、深さ5～18cm、長さ95cm、底面幅は3～5cmである。P4との間は11cmを測る。この床溝と南辺に囲まれた範囲に、P7・P8・P9の浅いピットが分布する。

その他 南辺中央部の床面で検出されたP2は50cmほどの大きさで、壁に接するように掘り込まれている。出入口施設にかかわる掘り込みの可能性もある。住居の埋没土と床面から、滑石の小片が多く出土したが、製品とみられるものがほとんど見当たらない。滑石製品を作った工房の可能性が高い。

遺物 カマド前から南辺にかけて、土器片が比較的多く出土した。カマド前で土師器甕の破片、南辺中央部付近で小型甕破片が出土した。住居中央部の床面を中心として、滑石の小片が200カ所以上の集中点から出土し、そのうち7カ所は数mm程度のチップの集中する範囲である。この小片溜まりはカマド前から南辺中央部にかけて分布する。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の5世紀末～6世紀初めの所産と推定する。

H区 11住居(第120・121・194図、PL.92・93・149)

検出位置 783-169付近で検出した。H区の中央部に位置する。東側の10住居とは壁がほとんど接しており、北側の12住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 南側の17土坑と重複しており、11住居→17土坑の順に新しい。56Pとの前後関係は確認できなかった。

覆土 最上位ににぶい黄褐色系の土がレンズ状に堆積

し、その下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ30～45cmで、北側がやや深い。各辺とも長さが異なるが、全体として北東・南西がやや長い長方形である。全体の印象は正方形に近い。南西辺3.61・北西辺3.61m、北東辺3.50・南東辺3.90mである。西隅が丸味を帯びる。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、中央部床面は硬く踏み固められていた。

支柱穴 不明。P1・P2・P3の可能性があり、P2は貯蔵穴の可能性も残る。P1：39×53・深さ14cm、P2：58×72・深さ55cm、P3：36×40・深さ16cmである。掘り方調査では、これらの配置に適合する掘り込みは検出されなかった。

壁溝 カマド左脇と北西辺南部を除き、全周する。幅10～52cm、深さ2～9cm、底面幅2～9cmである。

カマド 本遺跡での通例とは異なり、北東辺中央のやや東寄りに設置する。全体の印象は北側に設置されているように見え、特殊な出土状態である。燃烧部は住居壁ラインの内側にあり、左右壁に扁平に割れた石を5個並べている。右壁の一部は二段に積んでおり、左壁は一段で、それらのすき間には粘土を充填していた。奥に並べた石2個は、煙道側壁になるとみられ、焚き口側の石の外側は粘土で固めていた。焚き口の手前に焼けた面を上にして、長さ40cm大の石と20cm大の石が床面から出土した。焚き口天井部の石とみられる。燃烧部中央のやや奥に、細長い割り石が据えられ、支脚としていた。焚き口から煙出しまで、長さ約1.5mもあり、そのうち燃烧部の浅い掘り込みは0.9mほどである。住居内からはほかにも大きめの石が出土しており、それらは石組みの上部を覆ったものの可能性がある。焚き口天井部石の手前に甕(H124)、左袖部からやや離れて完形に近い甕(H122)、右袖前に甕口縁部、右袖付け根付近から有孔鉢(H121)が伏せた状態でそれぞれ出土した。

貯蔵穴 東隅付近の略楕円形掘り込みP2及び不整形のP4とみられ、両者の前後関係は判定できなかった。同時に利用されていた可能性もある。P4の底面近くから土器片が出土した。P2：58×72・深さ55cm、P4：73×71・深さ51cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマドの煙出し部は燃烧部奥壁よりも一段浅くなって住居壁外に突出する。燃烧

部の両袖部のロームは、地山と区別できなかった。削り残しの可能性が高い。

南西辺に沿って、幅0.9m、長さ2.8mほどの浅い掘り込みを検出した。

その他 北向きカマドであること、カマド袖部に石組みを用いていること、貯蔵穴らしき掘り込みが2個あることなど、他の住居にはみられない特殊な要素がある。

遺物 カマド付近から南東辺にかけて、土器が多く出土した。カマド左脇床面から土師器甕(H122)の完形に近いもの、右袖部脇から有孔鉢(H121)が天地逆の状態で、カマド前の床面から壺・甕、南西辺西寄りの床面から浮いた状態で手捏ね土器(H113)がそれぞれ出土した。西隅の鉢(H116)は床面から15cmほど浮いている。またP4の底面から10cmほど浮いた状態で、杯(H115)破片が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

H区 12住居(第122・123・194・195図、PL.94・95・149・150)

検出位置 792-170付近で検出した。H区の中央部のやや北寄りに位置する。南東側の10住居とは3.2m離れており、南側の11住居との最短距離は3.8mである。

重複関係 なし。北辺から中央部にかけて、攪乱により破壊されている。

覆土 黒褐色系の白色軽石を含む土で埋没する。中位に堆積する黒褐色土中に、榛名山の噴火に伴うテフラHr-FAまたはFPとみられる5～10cm大のブロックが含まれる。

壁 深さ24～37cmで、北側がやや深い。各辺とも長さが異なるが、全体として東西に長い長方形である。南辺4.53・北辺4.44m、西辺3.68・東辺3.60mである。南東隅が丸味を帯びる。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、中央部床面は硬く踏み固められていた。

支柱穴 配置と深さで勘案するとP2・P4・P6とみられる。P2：36×35・深さ55cm、P4：63×51・深さ75cm、P6：53×58・深さ57cmで、いずれも二段に掘り込まれていた。柱穴間の距離は芯々でP2～P4：1.94m、P4～P6：1.81mである。P1：47×48・深

さ35cm、P 7：42×47・深さ38cmで、これらも二段に掘り込まれていた。

壁溝 東辺のカマド右脇を除き、全周する。カマド右脇は幅のない底面を呈し、ここにも存在した可能性がある。幅16～28cm、深さ2～20cm、底面幅3～11cmである。

カマド 東辺中央部に設置する。燃烧部は住居壁ラインの内側にあり、左右の袖石は元の位置に遺存している可能性が高く、焚き口天井部の石は、カマド前床面から焼けた面を上にして出土した。カマド燃烧部から口縁部を焚き口に向けて倒れた状態の完形に近い甕が出土し、その底部の下位には伏せた状態の甕が出土した。カマドに据えられた甕が、焚き口側にゴロンと倒れたような状態である。伏せた状態の甕を除去すると、その内側から周囲の焼けた細長い石が、立てた状態のまま出土した。横倒しの甕と伏せた甕は、両者とも平底である。実験的に横倒し甕の底部を伏せ甕の底部に載せてみたところ、安定した状態になり、さらに焚き口天井石を袖石に載せてみたところ、写真のようになった。



12住カマド石復元

貯蔵穴 南東隅のP 3とみられる。東辺の壁との間に25cmほどの空間があり、ここに底部を置く状態で口縁部を欠く壺(H128)が出土した。体部は貯蔵穴の上空に位置する。中から鉢(H126)が出土した。P 3：74×75・深さ85cmで、二段に掘り込まれていた。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマド付近から中央部にかけて、幅1.2mほどの範囲が帯状に高くなっていた。その他 西寄りの攪乱が深かったためか、4本目の柱穴は検出できなかった。

遺物 カマド内、南東隅、東辺北寄り付近から完形に近い土器が出土した。カマド左側床面の土器は土師器甕

(H127)の完形に近いもの、南東隅では上半部を欠く壺(H128)のなかから土師器鉢(H126)が出土した。カマド燃烧部からは完形の甕(H130)が口縁部を焚き口に向け倒れた状態で出土し、その底部付近では、伏せた状態の甕(H131)が支脚となる石を蓋するような状態で(天地逆で)出土した。南西部の甕(H129)破片は床面から20cmほど浮いた状態である。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

H区 13住居(第124・195図、PL.96・150)

検出位置 780—185付近で検出した。H区の南西部に位置し、現代墓地の敷地に北西隅がかかっていた。周囲に住居がなく、もっとも近い11住居との最短距離は11.6mである。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の白色軽石を含む土で埋没する。

壁 深さ20～50cmで、北側が深い。各辺とも長さが異なるが、全体として東西がわずかに長い方形である。南辺2.80・北辺1.96m(推定2.7m)、西辺0.99(推定2.8)・東辺2.64mである。

床面 細かい凹凸はあるが全体として平坦で、カマド前～中央部の床面は硬く踏み固められていた。

主柱穴 不明。北東隅のP 1は貯蔵穴の可能性はある。南辺寄りのP 2は小さく浅い。P 1：27×23・深さ7cm、P 2：21×12・深さ3cmである。掘り方では中央部に24×33・深さ24cmのピットを検出したが、柱穴かどうか不明。

壁溝 北東隅と南辺中央やや東寄りで検出した。幅19～34cm、深さ4～8cm、底面幅3～7cmである。北辺沿いに壁溝が推定されたが、明確な掘り込みにはならなかった。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置する。燃烧部は住居壁ラインに半分かかる状態で、右袖石は2個、左袖石は1個が遺存していた。位置関係と大きさを勘案すると、北東隅で出土した石は、右袖の焚き口に据えられた石と推定される。燃烧部中央付近の底面に焼土が分布し、奥壁は斜めに立ち上がる。カマド内からは土器小片が出土したのみであった。

貯蔵穴 北東隅のP 1の可能性はある。本遺跡通例の南

東隅では検出されなかった。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマド前から南半部にかけて、不整形の掘り込みがみられた。

その他 北西隅は墓地跡区域の調査では確認できなかった。

遺物 カマド前～中央部、南西部の床面よりやや上で土師器杯(H132～134)や小片が出土した。概ね5～10cmほど浮いた状態であった。北東隅付近から出土した焼けた石は30cm大で、カマドの構築材の一部とみられる。

時代・時期 出土遺物、カマド構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

H区 14住居(第125・195・196図、PL.97・150)

検出位置 780-202付近で検出した。H区の南西端に位置し、現代墓地への通路に北西部がかかっていた。

重複関係 H区85・86土坑と重複し、14住居→85・86土坑の順に新しい。道路下は調査進行の都合で住居を除いてI区に属しており、ここではI区1・2・3土坑と重複し、14住居→1・2・3土坑の順に新しい。

覆土 黒褐色系の白色軽石を含む土で埋没する。

壁 深さ28～59cmで、北側が深い。いくつかの近世以降の土坑によって各辺が破壊されていたが、幸い各隅を確認することができた。各辺とも長さが異なり、東辺が長く西辺が短い台形を呈する。南辺4.59・北辺4.68m、西辺4.24・東辺4.73mである。

床面 東半部は85・86土坑による破壊で一部しか検出できなかったが、西半部ではP4・P5・P6で囲まれた範囲が踏み固められて硬化していた。

支柱穴 P2・P4・P5・P6とみられ、南北に長い棟が推定される。P2：35×42・深さ62cm、P4：35×39・深さ45cm、P5：40×39・深さ57cm、P2～P4：1.81m、P4～P5：2.27m、P5～P6：1.87m、P6～P2：2.28mである。いずれのピットも二段に掘り込まれている。

壁溝 西半部で検出した。幅17～31cm、深さ3～10cm、底面幅1～3cmである。東半部では検出できなかった。

カマド 不明。85土坑により破壊された可能性が高い。

貯蔵穴 南東隅のP3とみられる。不整形の掘り込みで、79×69・深さ72cmである。掘り込みを取り巻くように、北側と西側に十数cmの段が巡る。

掘り方 底面の凹凸が著しい。中央部南寄りに深さ15cm前後の不整形の掘り込みが認められた。

その他 2年度にわたって調査したため、北東と南西に二分されており、記録写真は全体を示すものがない。

遺物 85土坑と86土坑との間から甕破片が出土した。近くに30cm大の石があり、西側の道路下からも15～40cm大の石が出土していることから、カマド構築材の石が床面近くに分布しているとみられる。東半部の床面近くから青緑色の石鏝形をした石製品が出土した。

時代・時期 出土遺物から、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

H区 15住居(第126・196図、PL98・150)

検出位置 760-145付近で検出した。H区の南東端に位置し、1住居との最短距離は3.4mである。H区への出入口付近にあり、北西隅付近は削平されていた。また、東側は現道に面していたため、カマド奥壁よりも東側は切断・破壊されていた。

重複関係 なし。

覆土 上位に白色軽石を含む灰黄褐色土があり、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ24～52cmで、北側が深い。南東隅は現代道路側溝によって、西辺～北西隅は耕作等によって破壊されていた。全長の計測可能な辺はないが、概ね南北に長い台形と推定される。南辺3.57(推定4.2)・北辺2.92m(推定4.1m)、西辺1.6(推定4.5)・東辺2.38m(推定4.3m)である。

床面 細かい凹凸はあるが、カマド前から中央部にかけて、P1・P6・P7・P8に囲まれた範囲が硬く踏み固められていた。

支柱穴 P1・P6・P7・P8とみられ、南北に長い棟が推定される。P1：41×46・深さ46cm、P6：25×28・深さ38cm、P7：25×27・深さ44cm、P8：31×27・深さ53cm、P1～P6：1.93m、P6～P7：2.02m、P7～P8：1.73m、P8～P1：2.11mである。P7を除く3本は二段に掘り込まれている。

壁溝 カマド左脇から北辺、西辺から南辺中央部まで検出した。破壊された北辺～西辺にも存在したと推定される。幅12～33cm、深さ1～5cm、底面幅3～13cmである。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置する。燃烧部は住

居壁ラインの内側にあり、焚き口の左右袖石に天井石が架かった状態で遺存していた。床面中央部に焼けた石が分布しており、カマド構築材の一部と考えられる。

貯蔵穴 南東隅のP3で、隅に丸味のある長方形を呈する。75以上×54・深さ87cmで、内側は方形に近い掘り込みとなる。中から完形に近い杯(H150)が出土した。

掘り方 底面の凹凸が著しい。カマド前・中央部・南西隅に1.3～1.5m大の不整形掘り込みが認められた。

その他 P1の東側、P6の北側、P7の東側、P8の北側に20～27cm、深さ7～15cmの小規模のピットが検出された。補助柱穴の可能性はある。

遺物 カマド焚き口の天井石が、左右の袖石に架かった状態で遺存していた。また、カマド前～中央部で焼けた石が出土し、その一部は接合した。北東部の床面からも30cm大の石が出土しているが、焼けていない。北半部の床面及び5cmほど浮いた状態で、甕破片と杯破片が出土し、南東隅付近の貯蔵穴内から、完形に近い杯(H150)が底面から20cmほど浮いた状態で出土した。

時代・時期 出土遺物から、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

H区 16住居(第127・197図、PL.99・150)

検出位置 803—173付近で検出した。H区の北西部に位置し、12住居との最短距離は6.1mである。I区への進入路下にあったため、調査の着手が後回しとなった。北半部は調査区外にあり、現代ゴミ穴がカマド付近に入っていた。

重複関係 なし。

覆土 黒褐色系の土で埋没する。中位にHr-FAらしい軽石を含む厚さ5cmほどの層が、下に滑らかな凸状をなして堆積する。

壁 深さ19～45cmで、東側が深い。全体の約1/2程度を調査したとみられる。北東部から南辺にかけて、重機によるゴミ穴が掘られ、カマド付近を破壊していた。南辺は4.71mで、西辺2.63・東辺2.14mが遺存していた。やや歪んだ台形と推定される。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 不明。P1は位置・深さから、支柱穴の可能性が高い。P1:31×27・深さ48cmである。

壁溝 南東隅から西辺まで検出した。幅14～29cm、深

さ2～8cm、底面幅4～9cmである。

カマド 東辺中央部南寄りに設置されていたと推定される。ゴミ穴の東側の土層では、カマド粘土らしきものと焼土が認められた。住居床面水準で27×33cmほどの不整形の範囲に焼土が分布していたことから、この付近がカマド燃焼部と考えられる。住居の壁外に浅く掘り込まれた部分があり、カマド煙道の残りともみられ、これらを勘案すると、カマド燃焼部は住居壁ラインの内側にあったと推定される。

貯蔵穴 南東隅のP2と考えられる。略円形の掘り込みで、70×71・深さ75cm、底面径は上バ径の1/3程度である。壁から20cm以上離れた位置にあり、壁直下には壁溝が巡る。

掘り方 底面の凹凸が著しい。西辺寄りに、70cm大・100cm大の不整形の掘り込みが認められた。

その他 全体の調査ができず、カマド付近も攪乱により破壊されていたため、詳細な内容は不明である。

遺物 カマド燃焼部相当の位置から甕(H164)・杯(H162)が接した状態で出土し、南辺東寄りの壁際から、土師器杯(H157・158)と高杯脚部(H163)が出土した。中央部の破片は床面から5cmほど浮いている。

時代・時期 出土遺物と推定カマドから、古墳時代5世紀末の所産と推定する。埋没土中位に含まれるテフラがHr-FPならば、より新しい時期のものと考えられる。

H区 1掘立柱建物(第128・197図、PL.103・151)

検出位置 790～795—189～194の間にあり、概ねH区の西端中央部に位置する。平成19年の年度末直前に明渡しになり、調査を実施した元墓地内にある。

重複関係 59・60土坑と重複し、いずれも1掘立柱建物の方が新しい。

覆土 黒褐色系の土で埋没し、白色軽石を含む。上位に灰黄褐色土が入るピットもある。

規模 2間×2間の規模で、中央部にもピットがあり、総柱の建物である。全体の寸法から推定すると、東西方向に棟を持つとみられる。

その他 墓地への進入路である舗装された道が南西から北東の方向に延び、舗装の途切れた先に本建物が位置することを勘案すると、墓地の一角に建てられた簡易な「お堂」のような建物が推定される。

遺物 なし。

時代・時期 埋没土・重複関係から、1掘立柱建物は江戸時代以降の所産と推定されるが、時期を限定できない。

H区1溝 (第129・130図、PL.101)

検出位置 776～792-138～165にあり、概ねH区の北東部を東西に蛇行して走行する。

重複関係 2住居・9住居と重複し、いずれも1溝の方が新しい。

覆土 灰黄褐色土系の土で、軽石を含まない。

壁 U字状に立ち上がる。

底面 凹凸あり。底面幅20～50cmで、東西端は丸く収まる。

遺物 なし。

時代・時期 埋没土・重複関係から、1溝は平安時代以降の所産と推定されるが、時期を限定できない。

H区土坑(第129～133・197～202図、PL.102～109・112・113・151～153)

大半の土坑は平安時代以降とみられるが、27・32・33・34土坑は縄文時代前期に属する土器片が出土している。また、H区西寄りの48～74土坑は墓地跡であり、中から人骨等が出土し、副葬品とみられる古銭等が出土したことから、江戸時代の墓と推定される。人骨については自然科学分析の章で記述し、副葬品と併せた調査成果は、まとめの章で考察したい。

H区ピット(第129・131・134～136図)

H区のピットは全体に分布する。番号を付して掘り下げを実施したが、底面状況の観察から樹木の根跡とみられるものは欠番扱いとした。12住居の周辺で検出されたピット群は、埋没土が12住居に類似し、検出位置が12住居の各辺に沿っているようにみられ、27P～33P、38P、40P～44Pは住居に伴うものと推定される。

第10節 I区

I区の概要 (第137図、PL.114・115)

I区は、H区の元墓地への参道を挟んだ西側に位置し、本遺跡調査区域の西端である。西側は急な崖となつて、鳥取松合下遺跡^{とっとりまつあいた}の低地となる。I区は全体に南へ向かって低くなる地形で、東側のH区の地形に連なる。北辺のやや東寄りをもっとも高い147.60m、南辺の中央部で146.20mである。H区同様、北側にコンクリート擁壁があり、南側は畠と宅地である。

I区南東端では、H区で検出した14住居の西半部を検出し、ほぼ全体を調査することができた。

古墳時代以降の住居は2～9住居の8軒である。1住居は当初、プラン確認の時点で「1住居」としたが、調査を進めたところ、井戸であることが判明し、そのまま番号を引き継いだ。したがって、I区の1住居は欠番である。2住居はやや大型で、出土土器の所見は5世紀代を示すが、住居床面水準から石製巡方が出土した。5住居はカマドの遺存が良好で、焚き口から煙出しまで調査することができ、床面には壁と直交する方向に床溝が認められた。9住居は南西辺中央部の住居内に斜路が遺存し、

南西辺外側にもピットが並んで検出され、出入口を検出したと考えられる。

1井戸は漏斗状の断面をもち、確認面よりやや下がった水準で4本の柱穴と考えられるピットを検出した。覆屋の存在が推定される。また、上位の浅い範囲に小穴が多数検出でき、何度か作り替えていた可能性がある。

I区では表土掘削の時点から縄文土器の出土が多く、遺構の存在を予測していたところ、いくつかの土坑の中から縄文土器が出土し、北西部では集中して出土する地点が認められた。1竪穴状遺構は、縄文土器が多数出土したことから遺構と想定されたが、「住居」と判断するに至らず、焼土・炉・床面とプランを確認できた時点で住居としたため、遺構名称の「竪穴」を引き継いだ。2竪穴も同様で、3竪穴は炉を確認できなかった。1竪穴が住居と認定できたことを勘案し、I区全体のロームへの漸移層を掘削して2面の調査を行なった。I区全体で大小の土坑を検出し、中から縄文土器を出土した土坑も多い。とりわけ、61・79・82・85・89・99・109・127・140・171土坑はまとまった量の土器が出土した。85・140土坑はフ

ラスコ状の断面を示し、上面の確認プランより底面が広がっており、比較的多くの土器が出土した。

I区 1井戸(もと1住居) (第137・138・202図、PL.126・153)

検出位置 800—235付近で検出した。I区の南西部に位置し、2住居との最短距離は2.5mである。遺構確認時にはほぼ方形のプランが読み取れたことから、1住居と名前を付けた。掘り下げてみたところ、住居とは様相が異なり、「床面」が確認できず、さらに深くなることが分かり、底面に至って井戸であることが判明した。

重複関係 65・68土坑と重複し、65土坑→1井戸・68土坑の順に新しい。1井戸と68土坑との前後関係は不明である。北辺で12土坑と接した状態で、新旧関係は判定できなかった。南辺の一部は重機による攪乱が入り、破壊されていた。

覆土 上位は黒褐色系の土で埋没するが、中位に炭化物を多く含む層があり、これを境として下位はにぶい黄褐色系の土で埋没する。最下層は黒色土ブロックを含む水分の多い層で、砂質土である。このことから、かつては井戸であったことが推定されるが、調査時には湧水しなかった。

壁 断面が漏斗状を呈し、最下端は下に凸の狭い掘り込みとなる。壁の傾斜は上位ほど急で、中位以下では45～60度ほどである。確認面からの深さは2.7mである。中央部の特に深い掘り込みは、98×84cmの規模である。

柱穴 土層観察用のベルトを残して中位まで掘り下げたところ、斜面中位に4個の穴(P1・P2・P3・P4)が認められた。遺存の良好なP4では確認面から33cm下位、P1は85cm下位、P2は72cm下位、P3は58cm下位であった。これらを結ぶ線は台形を呈し、規模が概ね揃っていることから、井戸の覆屋のようなものの存在が推定される。P1:35×28・深さ85cm、P2:20×21・深さ40cm、P3:14×22・深さ58cm、P4:32×22・深さ146cm、P4～P1:2.69m、P1～P2:1.76m、P2～P3:1.97m、P3～P4:2.02m、P5:27×29・深さ14cmである。ベルトを除去したのち、さらに精査したところ、地山ローム面に多数の小穴が検出された。小穴の分布は上位の浅い範囲に多く、大きさは15～30cm前後が主で、40cm大は少ない。何度か覆屋を造

り替えた可能性が考えられる。

遺物 まとまった形状の遺物は少なく、破片が多い。墨書された土師器杯(I1)が出土した。

時代・時期 出土遺物から、平安時代の10世紀後半の所産と推定する。

I区 2住居(第139～141・202・203図、PL.116・117・153)

検出位置 800—225付近で検出した。I区中央部の南寄りに位置し、3住居との最短距離は6.5mである。一辺が7m前後で、I区のなかで最大の規模をもつ。西辺中央部付近から南西へむかう幅40cmほどの現代耕作痕が、床面を掘り込んで住居中央部まで破壊していた。

重複関係 カマド左脇の床面で輪郭が確認できた75土坑が認められ、縄文土器や石片が出土していることから、本住居以前の遺構である。

覆土 中央部の上位に浅間山As-B軽石を含む灰黄褐色系の土がレンズ状に堆積し、中位以下は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ23～49cmで、東側が深い。西辺中央部付近から直線的に現代耕作痕が住居中央部に延び、床面を破壊していた。南辺6.43・北辺6.63m、西辺6.64・東辺6.36mで、東辺がやや短い台形であるが、全体として方形に近い。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦である。

支柱穴 位置・深さからP1・P2・P3・P4と考えられる。P1:43×52・深さ87cm、P2:48×53・深さ91cm、P3:54×61・深さ99cm、P4:45×40・深さ107cm、P1～P2:3.78m、P2～P3:3.75m、P3～P4:3.62m、P4～P1:3.90mである。なお、P5はP1～P4に比較して一回り大きく(79×77cm)、深さ22cmと浅い。

壁溝 東辺南寄りを除き、ほぼ全周するが、北辺中央やや東寄りで途切れた箇所がある。幅22～41cm、深さ2～9cm、底面幅2～6cmである。南辺の壁際から25cmほど離れた位置でも、直線的な溝(幅15～32cm、深さ7～13cm)を3.65mの長さで検出した。南辺をより南側へ広げた可能性がある。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置されていた。燃焼部の奥壁は住居壁ラインとほぼ並んでおり、煙道が短く外へ延びる。カマド前から中央部にかけて、割れた状態

の石がいくつか出土し、その一部は焼けた状態を示していたが、遺存していたカマド袖部には石が残っていなかった。

貯蔵穴 不明。カマド右脇の掘り込みの可能性はあるが、69×40（推定72）・深さ12cmとやや浅い。南東隅に近い掘り込みは深さ9cmである。

掘り方 細かい凹凸のほか、中央部がやや盛り上がり、四隅に向かって低くなる。

その他 南辺から西辺にかけての壁溝中に、径20～40cm、深さ10cm前後の小穴が並ぶ。

遺物 カマド前～中央部にかけて、破片状態の土器と割れた状態の石が多く出土し、南東部の壁際及び、西辺南寄りの壁から20cmほど離れた位置で、土師器甕（I 19）破片が出土した。西辺寄りの土器片は床面のものと、5cmほど浮いた状態のものがある。中央部やや北寄りの床面水準から、完形に近い石製巡方（I 21）が取り付け孔を上にして1点出土した。巡方の外観は黒色を呈する。

時代・時期 10世紀前半とみられる土器も出土しているが、他の多数の土器や住居の構造等から、古墳時代の5世紀中頃の所産と推定する。石製巡方は住居の年代観と一致せず、流入したものと考えられる。

I 区 3住居(第141・142・204図、PL.118・154)

検出位置 808—218付近で検出した。I 区中央部に位置し、2住居との最短距離は6.5mである。覆土からの土器片等の出土が異様に多く、規模が小さいという特徴をもつ。

重複関係 なし。北辺の一部は攪乱によって破壊されていた。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土で、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ57～71cmで、北側がやや深い。壁は4辺とも床面から15～20cmまでは直に近く立ち上がるが、上位2/3程度は斜めに開くように立上り、最上部は不整形のプランとなる。最上位の各辺は、南辺2.73(2.38)・北辺2.50m(2.28m)、西辺2.84(2.53)・東辺3.21m(2.74m)である(括弧内は直に立ち上がる辺の長さ)。最上位では南北に長い不整形、中位では南北に長い長方形となる。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、中央部に96×111・深さ15cmの掘り込みP 2がある。

支柱穴 不明。P 2の西側にある掘り込みは、20×18・深さ16cmである。

壁溝 北西隅付近を除き、ほぼ全周するが、溝状を呈するのは南辺～南西隅付近で、その他の部分は小ピットの連続である。幅16～32cm、深さ3～7cmで、底面幅は3～10cmである。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置されていた。燃焼部の奥壁は住居東辺の直に立ち上がる壁と同じであり、そのまま斜めに立ち上がる壁に沿って、幅20cm前後で上位に延びる煙道になる。住居覆土から出土した割れた状態の石が、カマド構築材になるか不明である。

貯蔵穴 カマド右脇のP 1と考えられる。二段に掘り込まれた不整形のピットで、48×41・深さ65cmである。

掘り方 底面の凹凸が著しく、不整形の掘り込みがある。北東・北西・南西の各隅に、小ピットが認められたが、規模が小さく、深さ9～17cmである。

その他 埋没土の断面観察では格別のことはなく、壁際から徐々に埋没し、中央部が最後に埋まっていることから、壁の断面形状は廃棄された時点で、上位が斜めになっていたと推定される。

遺物 浅い深さから土器片や割れた石が出土した。一回で記録が取れず、上位の遺物を取上げてから、下位の遺物の出土状態を記録した。上位では中央部から鉄製の鎌（I 36）が出土した。下位でも遺物の出土水準が高く、床面近くでの出土品は少ない。平面的な位置はいずれも中央部付近からの出土で、壁際やカマド内からの出土は小片のみである。中央部の凹みに流れ込んだもの、または投げ込んだ可能性がある。

時代・時期 出土遺物の特徴から、飛鳥時代の7世紀後半の所産と推定する。

I 区 4住居(第143・205図、PL119・154)

検出位置 819—213付近で検出した。I 区中央部の北端に位置し、3住居との最短距離は7.3mである。縄文時代3竪穴状遺構が東側に、土坑が西側にある。

重複関係 なし。調査区域の北限界まで広げて、範囲を確認した。

覆土 白色軽石を含む黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ20～47cmで、北側がやや深い。各辺とも長さが異なるが、東辺がやや短く、全体として台形を呈する。

南辺2.90・北辺2.79m、西辺3.21・東辺2.19mである。南北方向がやや長い。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前を中心とした南半部は硬化していた。

支柱穴 不確定。配置で勘案すると、P1・P2・P3・P5の組み合わせで良いが、P1はごく浅い。P2・P3・P4・P5の組み合わせは、規模・深さともほぼ同じだが、配置が住居プランと比較して整合性がない。P1：40×35・深さ1cm、P2：36×35・深さ39cm、P3：37×39・深さ32cm、P4：33×32・深さ36cm、P5：30×35・深さ32cm、P1～P2：1.81m、P2～P3：1.18m、P3～P5：1.93m、P5～P1：1.28mである。

壁溝 北辺の東西端に途切れる箇所があるが、ほぼ全周する。幅27～49cm、深さ2～8cm、底面幅3～12cmで、最大の底面幅は西辺の凸部下にある29cmで、底面は東に凸である。

カマド 東辺中央部南寄りに設置されていた。燃烧部は住居壁ラインに半分ほどかかる。焼き口天井部の一部が、凹んだ状態ながら一部遺存しており、よく焼けた状態であった。燃烧部奥側の天井部相当を慎重に精査したところ、軟質部分が概ね丸く抜け、東側の煙道に連なることが判明した。この丸い形状の孔は、甕等を据えたときの抜き痕跡と考えられる。左右の袖部は粘土のみが遺存しており、袖石が据えてあったか不明である。住居内に散布する割れた状態の石が、カマド構築材であった可能性がある。

貯蔵穴 不明。本遺跡の通例では、南東隅付近の掘り込みが想定されるが、その位置にあるP2が支柱穴であった可能性が残る。P1・P2・P3・P5が支柱穴ならばP4が貯蔵穴の可能性、P2・P3・P4・P5が支柱穴ならばP1が貯蔵穴の可能性がある。

掘り方 底面の凹凸が著しい。中央部南寄り、北辺沿いに不整形の掘り込みがある。カマド焼き口の左右に30～40cm大の掘り込みが認められ、袖石掘り方の可能性がある。その他 西辺の北寄りでは、最上端で長さ165×33cmの湾曲部があり、西へ向かって凸である。この湾曲する部分は階段状を呈しており、出入口の可能性はある。

遺物 中央部から南東部にかけて、床面から浮いた状態の遺物が出土した。南辺沿いの杯(I37・40)は、壁際近

くから出土し、斜めに傾いた状態である。カマド前で出土した鉄鍬(I46)は30cmほど床面から浮いていた。割れた状態の石は、カマド前から中央部にかけて分布し、概ね床面から浮いた状態であった。南西部出土の杯(I42・43)は、10cmほど浮いた状態である。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、奈良時代の8世紀中頃の所産と推定する。

I区 5住居(第144・145・205図、PL.120・154)

検出位置 787-210付近で検出した。I区南東部に位置し、7住居との最短距離は2.1mである。南西隅を現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 白色軽石を含む灰黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ41～62cmで、北側がやや深い。南東隅をゴミ穴による攪乱で破壊されていた。中央部付近で計測すると、南北がわずかに長くなるが、支柱穴間では東西方向が長い。南辺3.68(推定4.75)・北辺4.51m、西辺4.79・東辺3.15m(推定4.75m)である。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前から支柱穴に囲まれた範囲がとくに硬化していた。また、南辺中央部の壁際に、直径60cm前後で半円形の硬化した範囲が認められ、中央部が凹んだ状態であった。出入口と考えられる。

支柱穴 配置と深さから、P1・P2・P3・P4と考えられる。P1・P3・P4は二段に掘り込まれており、とくにP4は顕著である。P1：30×19・深さ52cm、P2：23×24・深さ51cm、P3：34×39・深さ39cm、P4：60×61・深さ49cm、P1～P2：2.26m、P2～P3：2.12m、P3～P4：2.25m、P4～P1：1.97mである。

壁溝 北東隅付近と破壊された南東隅を除き、ほぼ全周する。小ピットの連続のように並ぶ部分もある。幅18～34cm、深さ2～10cm、底面幅1～8cmである。

カマド 東辺中央部に設置されていた。燃烧部は住居壁ラインの内側にあり煙出し部が壁ラインにかかる。左右の袖石と焼き口天井部の石が遺存し、天井石は割れていたが袖部に架かった状態であった。燃烧部中央のやや左寄りに細長い石が立てた状態で据えられ、その石を伏せた土師器甕(I53)で覆っており支脚と考えられる。伏せ

た甕の周囲の土を慎重に除去したところ、伏せ甕上位の粘土にほぼ円形の孔があり、平面三角形の良く焼けた粘土天井部が遺存していた。甕の右側から正立状態の完形に近い杯(I 47)が出土した。遺存していた天井部粘土の形状から二つ架けカマドが推定復元される。この天井部粘土はよく焼けた状態で遺存し煙出しまでつながっていた。奥壁の底面幅は燃焼部中央の約半分であった。

貯蔵穴 南東隅に近い略長方形の掘り込みと考えられる。周囲の床面よりも一段(10数cm)低く掘り込んだ内側に、87×67・深さ76cmの掘り込みがあり、底面から土器片が出土した。

掘り方 カマド付近から北東隅にかけて、及び北西隅付近で不整形の掘り込みが認められた。

床溝 西辺に直交する方向で6本、北辺に直交して6本、東辺のP 4に接する位置で1本を検出した。長さ45～101cm、幅12～26・深さ2～6cm、溝間隔は4～28cmである。北東・北西の隅には認められなかった。

その他 カマドと貯蔵穴の間に、35×35・深さ29cmの掘り込みがあり、壁に向かって斜めに掘られていた。カマド前から中央部付近がやや低くなっている。中央部付近の床面が焼けて、焼土化していた。

遺物 カマド前から中央部にかけて棒状の炭化物が床面から出土した。北西隅に近い床面から赤色顔料のような粉状物質が出土しており、酸化鉄と推定される。カマド燃焼部からは甕(I 53)が倒立した状態で出土し、内部には細長い石が立てた状態で出土した。支脚の石に甕を伏せて、高さ等を調整したと考えられる。カマド左右の袖石が遺存し、焚き口天井部の50cm大の石が二つに割れた状態で架かったまま出土した。カマド右袖脇から土師器杯(I 47)の完形に近い土器が出土した。また、貯蔵穴内の底面から、土器片がまとまって出土し、南辺中央の壁近くから、土師器甕(I 54)の口縁部片が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

I 区 6住居(第146・147・206図、PL.121・155)

検出位置 800-208付近で検出した。I 区中央部の東寄りに位置し、南側の5住居との最短距離は6.9mである。南西隅・西辺北半部・北辺東寄りを現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ44～66cmで、北側がやや深い。北辺中央・西辺北寄り・南東隅をゴミ穴による攪乱で破壊されていた。中央部付近で計測すると東西が長くなり、主柱穴間でも東西方向が長い。南辺4.22(推定4.65)・北辺4.69m、西辺5.09・東辺4.29m(推定4.8m)である。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前から南辺中央部にかけて硬化していた。また、南辺中央部の壁際の浅いピット(P 2・P 3)に挟まれた47×51cmの範囲が硬化しており、周囲に比較して1～2cmほど高くなっていた。出入口と考えられる。中央部に不整形の浅い掘り込みが認められた。192×142・深さ2～3cmである。

主柱穴 配置と深さから、P 1・P 4・P 6・P 7と考えられる。P 6は二段に掘り込まれている。P 1:34×38・深さ15cm、P 4:35×37・深さ10cm、P 6:37×34・深さ32cm、P 7:38×33・深さ64cm、P 1～P 4:2.76m、P 4～P 6:2.43m、P 6～P 7:2.63m、P 7～P 1:2.58mである。P 5はP 4・P 6の柱通りにあり、P 5:30×33・深さ41cm、P 4～P 5:0.86m、P 5～P 6:1.60mである。

壁溝 南東隅付近を除き、ほぼ全周する。幅18～37cm、深さ2～9cm、底面幅1～13cmである。

カマド 東辺中央部やや南寄りに設置されていた。燃焼部は住居壁ラインの内側にあり、煙出し部が壁ラインにかかる。左右の袖石と焚き口天井部の石が遺存し、天井石は袖部に架かった状態であった。燃焼部中央のやや左寄りに支脚の石が立てた状態で据えられ、その上に土師器甕(I 64)が天井石に寄りかかった正立の状態で出土した。支脚石が燃焼部の左に寄っているためか、甕の口縁部は南西に傾いていた。右袖石は立てた状態であるが、左袖石は焚き口側に傾いて出土した。焚き口前から30cm大の不整形の石が床面で出土し、カマド構築材または台石の可能性はある。袖粘土の内側は良く焼けていた。

貯蔵穴 南東隅に近い略長方形の掘り込みと考えられる。周囲の床面よりも一段(10数cm)低く掘り込んだ内側に、77×79・深さ82cmの掘り込みがあり、カマド側と西側が硬化していた。とくに西側は長さ110・幅20cmほどの帯状を呈し、表面はわずかに凸である。

掘り方 中央部から南西隅にかけて凹凸が著しい。また、北西隅には土坑1とP6を含んだ不整形で、深さ10cm前後の掘り込みが認められた。カマド掘り方は、燃焼部底面から奥壁にかけて断面が緩いV字形を呈し、煙出しの平面形は略三角形で壁外へ凸の形状であった。

床溝 北辺に直交する方向で、1本はP7に向かって伸び、長さ73・幅12・深さ5cmである。もう1本は土坑1の東側で南北に伸び、長さ63・幅15・深さ3cmである。掘り方ではP7に伸びる床溝の存在が一層はっきりするが、幅が太く30cm以上になる。

その他 北西隅付近に101×73・深さ18cmの楕円形を呈する土坑1がある。これに近い北辺壁の中位に、幅47cm、奥行き11cm、天地21cmの略三角形の切り込みが認められた。この付近の壁高は66cmで、床面から切り込みまでの高さは16cmである。切り込み底面と壁外の遺構確認面との比高差は50cmほどになる。階段状を呈しているが、物入れの可能性もある。

遺物 カマド燃焼部から土師器甕(I64)が正立状態で出土した。甕は南西側に傾いた状態であるが、焚き口天井部の石に寄りかかり、甕の下には支脚の石があった。使用時に近い状態と考えられる。焚き口の手前には、30cm大の石があり、カマド構築材または台石と推定される。中央部では土師器杯(I65)、北辺寄りでは甕(I62)、南辺寄りでは杯(I60)が出土した。いずれも床面か、床上5cmほどの水準である。北東隅に近い床面から、底面を上にした状態で甕(I66)の下半部が出土した。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、古墳時代の6世紀前半の所産と推定する。

I区 7住居(第148・206図、PL.122・155)

検出位置 788-204付近で検出した。I区南東部に位置し、西側の5住居との最短距離は2.1m、H区14住居とは2.5m、北東側の8住居とは3.2m離れている。西辺の一部は現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土、下位は黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ51～80cmで、北側がやや深い。西辺南寄りをゴミ穴による攪乱で破壊されていた。中央部付近で計測すると南北が長くなるが、全体に平行四辺形に歪んでお

り、各辺の長さが異なることから、プランは台形としておく。北辺から東辺のカマドまでの間は、住居壁の外側に幅50～60cmの平坦な面があり、土層断面の観察では埋没開始時には段があったと認められた。この空間も住居の内部とすれば、東西4.06(壁立上り3.51)・南北3.84m(壁立上り3.31m)となって、東西に長いプランとなる。南辺3.22・北辺立上り2.76m、西辺3.11・東辺立上り2.90mである。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド前から南辺中央部にかけて硬化していた。

支柱穴 不明。P1は柱穴の可能性はあるが、組み合わせる掘り込みが検出できなかった。P1:22×23・深さ22cmである。

壁溝 南東隅付近を除き、小ピットの連続または長さ50～60cmの溝が断続的に連なる。小ピット・溝の深さは1～11cmで、5cm前後の深さが多い。

カマド 東辺南寄りに設置されていた。燃焼部は住居壁ラインにかかり、燃焼部奥の天井部粘土が遺存し、粘土の内面は良く焼けていた。燃焼部幅25～30cmで、長さ70cmほど東へ伸び、そこから煙道に向かって立ち上がる。煙出しは19×33cmの楕円形を呈し、焚き口付近は45×62cmの浅い掘り込みとなっていた。

貯蔵穴 南東隅の不整形の掘り込みと考えられる。93×55・深さ12cmである。

掘り方 東辺北半部から西辺にかけて、壁沿いに幅15～30cmほどの平坦な面があり、一段下がったその内側は概ね平坦である。南西隅付近のピットは18×33・深さ2cmの規模で、P1と対応する配置であるが、柱穴かどうか不明である。カマド粘土を慎重に除去したところ、左右の粘土の背後に地山ロームを平面的に削った壁が認められた。カマド掘り方底面も住居床面から10数cm高い平坦な面をもち、奥壁は中央部に半円筒状の掘り込みがあつて煙出しにつながり、その左右の壁は直に近い平面であった。カマド掘り方は全体として、地山ロームを箱形に掘り下げた形状を呈する。

その他 左右の袖部粘土の掘り方調査で、不整形の深さ8cm程度の掘り込みが認められた。袖石を据えた痕の可能性はある。

遺物 カマド前の床上15cmほどの高さで土師器甕の体部片が出土したほか、南壁近くの床上15cmほどの高さで完

形の須恵器蓋(I 69)が出土した。外面を壁に向けた状態である。北西隅近くで出土した40cm大の石は、15cmほど浮いていた。台石の可能性はある。中央部で出土した割れた状態の石は床面から20～30cmほど浮いており、カマド構築材の可能性はある。

時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、奈良時代の8世紀前半の所産と推定する。

I区 8住居(第149・206図、PL.123・155)

検出位置 791-196付近で検出した。I区南東部に位置し、路線用地の東端にある。北側の9住居との最短距離は9.2m、南西側の7住居とは3.2m離れている。西辺の一部は現代ゴミ穴の攪乱によって破壊されていた。

重複関係 攪乱破壊のほかなし。

覆土 上位は白色軽石を含む灰黄褐色系の土、下位は黄白色軽石を含む黒褐色系の土で埋没する。

壁 深さ43～56cmで、北側がやや深い。西辺北半部をゴミ穴による攪乱で破壊されており、トレンチと思われる破壊が西辺南半部に認められた。各辺の長さが異なり、中央部付近で計測すると、南北にやや長い台形を呈する。南辺3.85・北辺3.37m(推定3.55m)、西辺2.26(推定3.84)・東辺3.98mである。

床面 細かい凹凸はあるが、概ね平坦で、カマド周辺から南辺中央部にかけて硬化していた。カマド前から北西隅にかけて、床面が部分的に焼土化していた。北東隅の北辺沿いに、151×73・深さ4cmの略長方形の掘り込みが認められた。他の住居では見られない施設である。

支柱穴 不明。P1は柱穴の可能性はあるが、配置・組合せに難点がある。P1:34×42・深さ38cm、P2:30×34・深さ9cm、P1～P2:1.11mである。

壁溝 南東隅付近を除き、小ピットの連続または長さ50～60cmの溝が断続的に連なる。小ピット・溝の深さは1～7cmで、3cm前後の深さが多い。

カマド 東辺南寄りに設置されていた。燃烧部は住居壁ラインの内側にある。焚き口天井部の石が、左右の袖石から内側に外れた状態で出土した。左袖石に接して杯(I 74)が出土したが、袖の一部であった可能性がある。燃烧部中央付近の底面から浮いた状態で、土師器杯(I 73)の完形に近いものが出土した。その下位には、燃烧部の左側に寄せて、細長い石が据えてあり、支脚と考えられ

る。燃烧部の奥壁は住居壁ラインに並び、斜めに立ち上がって平面三角形の煙出しに至る。

貯蔵穴 南東隅の略円形の掘り込みと考えられる。北側と西側に不整形の浅い掘り込みを伴い、これを除外すると73×66・深さ55cmである。

掘り方 南辺沿いと北辺沿いに不整形の掘り込みがあり、結果として中央部が高く、周辺が低い。P3:31×38・深さ27cmである。

遺物 カマド左袖石の左に隣接して土師器杯(I 74)が正立の状態出土した。カマド燃烧部からは底面から10cmほど浮いた状態で土師器杯(I 73)の完形に近いものが、右袖部の付け根付近から甕(I 77)底部片が出土した。南辺寄りの中央部から杯(I 75)、床面から20cm大のやや扁平な石(台石か)、住居中央部付近からは10～15cmの細長い石が床面からやや浮いた状態で出土したほか、カマド前・北西隅付近の床面から棒状の炭化物が出土した。時代・時期 出土遺物、カマドの構造などから、古墳時代の6世紀後半の所産と推定する。

I区 9住居(第150～152・206・207図、PL.124・125・155)

検出位置 805-193付近で検出した。I区北東部に位置し、路線用地の北東端にある。南側の8住居との最短距離は9.2m、南西側の6住居とは10.3m離れている。南西辺に近接してピットが並ぶ。

重複関係 なし。

覆土 黒色～黒褐色系の土で埋没する。上位に榛名山Hr-FAと推定されるブロックを含んだ層が5cmほどの厚さで堆積する。

壁 深さ31～61cmで、北側がやや深い。各辺の長さがわずかに異なり、中央部付近で計測すると、北西～南東がやや長い長方形を呈する。ただし、支柱穴間の寸法は北東～南西が長い。南西辺4.76・北東辺4.89m、北西辺4.48・南東辺4.49mである。

床面 細かい凹凸のほか、北東辺沿いに不整形の浅い範囲がある。その他は概ね平坦で、カマド左脇から南辺中央部にかけて、3.5×3.1mの四角形の範囲が硬化していた。この範囲はP4・P1を結ぶ線と、P4・P3を結ぶ線とに囲まれた範囲に等しい。カマド前に不整形の焼土化した範囲が認められた。P3とP2とを結ぶ線に添って、帯状の硬化した高まりがあり、住居中央部に向

かって低くなる傾斜をもつ。この帯状硬化面は南西辺の「出入口」の斜路の傾斜面に連なる。東隅と西隅には、上面長方形の高まりがあり、東隅と床面との差は9cm、西隅と床面との差は5cmである。この施設は上が凸の状態であり、壁溝の凹とは異なっていて、用途・機能が互いに想定できない。

支柱穴 P1・P2・P3・P4と考えられる。P3・P4は二段に掘り込まれ、P2の下は南西側にずれている。したがって、P2でこの傾斜のまま柱を据えようと、上端はカマド側に傾く。柱抜き跡を示している可能性がある。P1：27×27・深さ69cm、P2：33×32・深さ65cm、P3：33×50・深さ68cm、P4：56×52・深さ85cm、P1～P2：2.17m、P2～P3：1.77m、P3～P4：2.05m、P4～P1：1.71mである。

壁溝 北東辺の東半部のみ検出した。幅30～40cm、深さ1～3cm、底面幅4～6cmである。

カマド 南東辺中央に設置されていた。燃烧部は住居壁ラインの内側にあり、奥壁の下は住居壁の下ラインに一致する。左右の袖石が2個ずつ遺存していたが、焚き口天井部らしい大きめの石は、割れた状態で燃烧部に落ちていた。石の下から、土師器甕(I88)が出土した。住居中央部の北寄り床面で出土した30cm大の石は、カマド構築材の可能性がある。カマド奥壁は斜めに・直線的に壁外へ向かって延び、平面的には略三角形を呈する煙出しとなる。

貯蔵穴 南隅の略円形の掘り込みと考えられる。北西側と南西側では直線的に一段掘り下げられ、全体として長方形の掘り込み内に円形の掘り込みがある形状となる。南西辺の直下には幅10cm前後の帯状の平坦面があり、直線的に一段掘り下げている。長方形掘り込み125×103cm、円形掘り込み101×87・深さ68cmである。

その他 南西辺中央部で「出入口」と考えられる施設を検出した。住居の土層観察用ベルトにかかっていたため、南東側を失ったが、北西側を調査することができた。土層を記録したのち、注意深く上位の土を除去したところ、住居外から内部へ降りる斜路(凹状)が現れ、その上面は何度も踏み固められた層が観察でき、斜路を降りた地点も硬化して床面中央部につながっていた。南西辺中央部を中心として、2×1mの住居内側の範囲が、幅20cmほどの硬い帯状の土で囲まれていた。斜路の

傾斜は住居壁の立上りに直交して横切り、住居外の硬く踏み固められた平坦面につながっていた。斜路を上った平坦面の両側に、40ピット・42ピットが掘り込まれていた。住居の構造とかかわる可能性が高いので、周辺の土坑・ピットの寸法を列記しておく。36P：53×49・深さ25cm、37P：56×66・深さ16cm、38P：33×32・深さ27cm、39P：51×46・深さ33cm、40P：43×41・深さ25cm、41P：36×34・深さ27cm、42P：39×39・深さ29cm、43P：46×43・深さ27cm。31土坑：80×69・深さ23cm、45土坑：82×83・深さ35cm。出入口の掘り方調査では、1.8×1mほどの略長方形の掘り込みとなり、著しい凹凸のある範囲となった。南西辺と対の位置にある北東辺中央部にも、1.3×0.4mほどの半円形を呈する掘り込みが認められた。段の高さは床面から32cm、段から住居外との差は30cmである。遺構確認時点から黒い土があり、掘り込みは認識していたが、本住居と一連の遺構という認識はなかったため、掘り方調査時に掘り下げて範囲を確認した。ここでの住居床面は締まっていたが硬化とはいえず、住居外も格別硬い面を検出していない。出入口のほか、物置的な施設の可能性もある。

遺物 左右のカマド袖裾部からは土器片が出土し、カマド前の中央部からは30cm大のやや扁平な割れた石が出土した。この石はカマド構築材の可能性がある。南西辺の東寄り壁際の床面から5cmほど浮いた状態で甕破片が、西寄りの床面から杯小片が出土した。カマド燃烧部からは土師器甕(I89・91)が出土した。掘り方の北隅付近からは、土師器杯(I80)が押し潰された状態で出土した。時代・時期 10世紀前半とみられる土器もあるが、その他の土器や住居の構造などから、古墳時代の5世紀後半の所産と推定する。

I区 1 竪穴(第153・154・207～212図、PL.127・156～158)

検出位置 820—232付近で検出した。I区北西部に位置し、用地の北西端にある。1層検出であるが、遺構は2層相当で、着手時点では住居跡との確認ができず、「竪穴状遺構」としていた。後にプランと火処が確認できたため、「竪穴」の名称を引き継いだものである。

重複関係 なし。

覆土 比較的締まった黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ13～66cmで、東側がやや深い。中央部付近で計測すると、北西～南東が長い長方形を呈する。南西辺6.50・北東辺5.69m、北西辺4.81・南東辺4.48mで、北隅・東隅が丸味を帯びる。

床面 概ね平坦で、北東辺寄りの床面が硬化していた。

支柱穴 不明。P1～P18まで検出できたが、ピットの大きさと深さ・配置では支柱穴を特定できない。拡張があったとすれば、配置にズレが生じるが、特定は困難であった。各ピットの大きさ・深さを一覽で示す。

周溝 一部三重に巡る。周溝1はP16からはじまり、南東辺沿い～北東辺沿いに延びてP1の手前で止まる。周溝2aはP1からはじまり、北西辺沿い～南西辺沿いに延び、南東辺沿いの1/3程度でとまる。周溝2bは長さ112cmで、周溝2aとの間は119cmである。周溝3は南西辺のやや北寄りからはじまり、南東辺沿い～北東辺沿い～北西辺沿いに延びてほぼ一周するが、西隅から約190cmで途切れる。周溝1：幅15～30・深さ4～10・底面幅5～12cm、周溝2a：幅14～25・深さ6～9・底面幅2～13cm、周溝2b：幅15～19・深さ5～10・底面幅4～7cmである。

炉 P13は焼土粒子を含む埋没土で、炉になると考えられるが、P15の一部であった可能性もある。

その他 南東辺沿いでは周溝が三重を呈しており、拡張された可能性が高い。

遺物 埋没土中から土器片が多く出土し、出土状態の記録を取りながら掘り下げたところ、床面と考えられる平坦な面でまとまった遺物が出土した。中央部北寄りで深鉢(I93)、南寄りでも深鉢(I98)が出土し、10～15cm大の丸石のほか、石破片が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、縄文時代前期の黒浜式・有尾式の所産と推定する。

I区 2 竪穴(第155・156・213～215図、PL.128・158・159)

検出位置 815-222付近で検出した。I区北西部に位置し、1 竪穴との最短距離は6.0m、3 竪穴との距離は10.2mである。

重複関係 なし。

覆土 比較的締まった黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ49～65cmで、北側がやや深い。中央部付近で

計測すると、南北方向が長い台形を呈し、南西隅が突出する。南辺推定4.25・北辺3.03m、西辺4.70・東辺推定4.14mである。

床面 概ね平坦で、南東寄りの2.3×2.5mの範囲の床面が硬化していた。

支柱穴 規模と配置を勘案すると、P3・P5・P6・P9と考えられる。北側へ拡張したときは、P2とP11が追加されたように見える。P3～P5：1.79m、P5～P6：1.85m、P6～P9：1.65m、P9～P3：1.36mである。各ピットの大きさ・深さは、表の通りである。

周溝 北半部では二重に断続して巡る。周溝1aは土坑1の北側から延び、幅16cm、深さ9cm、底面幅6～7cmである。周溝1bは北東隅でL字状に曲り、幅14～17cm、深さ7～10cm、底面幅5～6cmである。周溝1cは北西隅でL字状に曲り、幅13～15cm、深さ4～7cm、底面幅6～7cmである。周溝1dは西辺沿いの短い溝で、幅14～16cm、深さ6～8cm、底面幅6～7cmである。1aと1d、1bと1cはそれぞれ対になる位置にあり、規模が似ている。周溝2aは北東隅に沿っていて、幅13～20cm、深さ5～6cm、底面幅4～13cmである。周溝2bは北辺から南西隅に沿って延び、幅14～28cm、深さ3～8cm、底面幅5～12cmである。周溝2cは南辺中央部沿いにあり、幅16～18cm、深さ4～6cm、底面幅6～9cmである。周溝2dは南東隅から土坑1までで、幅18～19cm、深さ6～8cm、底面幅6～9cmである。

炉 中央部やや東寄りの床面に、64×49cmの略楕円形の範囲が焼土化していた。その北西側に88×54cmの不整形の掘り込みがあり、中央の最深部に焼土が詰まっていた。炉1とする。炉1の北側に接して、炉2がある。炉2は73×50cmの西側中央が凹む平面形で、南側に深鉢(I190)が据えられ、北側には板状の石(I262)が立てた状態で出土し、深鉢には焼土が詰まっていた。

その他 土坑1は東辺中央部にあり、167×146・深さ22cmの規模で、下バの東側は竪穴の壁外へ広がり、中から土器片が出土した。

遺物 埋没土中から土器片等が300点以上出土し、出土状態の記録を取りながら掘り下げたところ、床面と考えられる平坦な面でいくつかのまとまった遺物が出土した。南東寄りで完形に復元できる深鉢(I188)、土坑1

の中からも深鉢(I 189)が出土し、炉2の南寄りからも深鉢が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、縄文時代前期の黒浜式・有尾式～諸磯a式の所産と推定する。

I区 3 竪穴(第157・216～219図、PL.129・160・161)
 検出位置 818—208付近で検出した。I区北辺の中央部に位置し、北半部は調査区外にある。2 竪穴との最短距離は10.2mである。

重複関係 なし。

覆土 灰黄褐色系の土で埋没する。

壁 深さ51～67cmで、ほぼ同じである。調査区域内では東西4.35m、南北2.35mを検出した。やや歪みがある。南辺3.08m、西辺2.23m以上・東辺2.04m以上の規模となる。床面 概ね平坦だが、調査区内では硬化面は検出されなかった。

支柱穴 規模と配置を勘案すると、P 1・P 2は支柱穴の一部と考えられる。P 1：48×44・深さ48cm、

P 2：46×42・深さ42cm、P 1～P 2：1.89mである。周溝 不明。

炉 不明。

遺物 埋没土からの土器片出土は多いが、床面近い水準の出土遺物は少ない。埋没土中から土器片等が200点以上出土し、出土状態の記録を取りながら掘り下げたところ、床面と考えられる平坦な面から浮いた状態で、いくつかのまとまった遺物が出土した。調査範囲の中央部で深鉢が出土し、西辺寄りでも深鉢が出土した。

時代・時期 出土遺物の特徴から、縄文時代前期の諸磯a式が主体で、黒浜式・有尾式・諸磯b式の破片も出土している。

I区 土坑・ピット(第158～172・219～228図、PL.130～141・161～167)

I区の土坑・ピットは1～2面にわたり、多数検出している。それぞれの検出位置を示す図の一部に、計測値等を一覧表として示した。

第11節 遺構外出土の遺物

ここでは遺構に所属しない遺物について、補足説明する。表土掘削中の出土遺物、遺構の所属する時代と大幅に異なる時代の遺物、出土地点不明の遺物、遺構番号が欠番とされた遺物等を含む。

1 縄文土器(第229～236図)

各区ごとに、形式名の判るものを掲載した。I区の破片数をもっとも多い。

A区 条痕文系で1点、称名寺式2点、堀之内2式で3点のほか、後期前葉のもの1点がある。計14点。

B区 撚糸文系2点、黒浜・有尾式1点、諸磯a式1点、加曾利E式1点、称名寺式1点、堀之内1式6点、堀之内2式22点がある。計156点。

C区 撚糸文系3点、田戸下層式14点、黒浜・有尾式15点、諸磯b式爪形1点、諸磯b式浮線8点、諸磯b式沈線1点、諸磯c式4点、称名寺式3点、堀之内1式2点、堀之内2式2点がある。計253点。

D区 黒浜・有尾式1点、諸磯a式1点、諸磯b式爪

形2点、諸磯b式浮線2点、諸磯b式沈線4点がある。計12点。

E区 黒浜・有尾式3点、諸磯a式1点、諸磯b式沈線11点、浮島式1点、加曾利E式2点、称名寺式3点が出土している。計32点。

F区 条痕文系1点、黒浜・有尾式9点、諸磯a式3点、諸磯b式沈線2点、諸磯b式浅鉢1点、加曾利E式16点、堀之内1式1点、堀之内2式17点がある。計56点。

G区 黒浜・有尾式10点、諸磯a式3点、諸磯b式浮線1点、諸磯b式沈線7点、加曾利E式36点、称名寺式7点が出土している。計85点。

H区 花積下層式7点、黒浜・有尾式754点、諸磯a式48点、諸磯b式爪形2点、諸磯b式浮線1点、加曾利E式58点、称名寺式1点、堀之内1式9点、堀之内2式5点が出土している。計955点。

I区 花積下層式2点、黒浜・有尾式1335点、諸磯a式664点、諸磯b式爪形4点、諸磯b式浮線22点、諸磯b式沈線27点、諸磯b式浅鉢1点、諸磯c式1点、加曾

利E式33点、堀之内1式4点が出土している。計2392点。

2 縄文時代石器(第236～239図、PL.168)

器種ごとに代表的なものを掲載した。

石鏃8点 槍先形尖頭器1点

石匙4点 石錐1点

削器2点 打製石斧10点

磨製石斧1点 凹石10点

磨石6点 敲石3点

石皿3点 スタンプ型石器1点

石製研磨具2点 多孔石3点

3 古墳時代以降の土器(第239図)

須恵器蓋1点(外352)は、内外面に付着物があり、口縁部が打ち欠き加工されている。

須恵器椀1点(外353)は、高台が剥離している。

4 その他石製品(第239図、PL169・170)

滑石製紡輪1点(外350) 砥石1点(外351)

石造物 4点(写真のみ掲載)

石仏(外354)紀年銘 享保十七年二月九日(1732年)

石仏(外356)紀年銘 享保四年四月七日(1719年)

石仏(外355)紀年銘 元禄十二年十月廿六日(1699

年)

台座(外357)

第5表 住居一覧表

区	面	番号	時代 時期	およその 年代想定	平面形	規模m	面積㎡		壁高cm	長軸方 位	壁溝		主柱穴	カマド			貯蔵穴			備考	
							計算面積	検出面積			幅cm	深さcm		位置	対称軸 方位	構築材	位置	平面形	大きさ cm		深さcm
A	1	1	古墳 前期	4世紀前 半	方形	5.01以上× 2.28以上	-	5.85	25	不明	なし	-	不明	炬北 壁寄り	-	-	P1か	-	-	-	一部北壁にかかる
C	1	1	古墳 前期	4世紀後 半	台形	5.84×5.57	32.53	19.02	31~52	不明	8~11	1~8	P1~P4	炬中央 北西寄り	-	-	P19	中略 方形	100×82	44	P5北壁外に掘り込む
C	1	2	古墳 前期	4世紀後 半	長方形	3.49×2.83	9.88	7.56	4~17	N83度W	なし	-	P1.P2. P5.P6	炬中央 部	-	-	P3か	不整形	46×53	29	掘り方に小ピット
C	1	3	古墳 前期	4世紀前 半	長方形	4.76×3.92	18.66	11.68	12~49	N70度W	13~22	4~12	不明	炬2箇所	-	-	不明	-	-	-	掘り込み外にピット
C	1	4	古墳 前期	4世紀中 頃	台形	3.69×4.13	15.24	10.66	39~80	N64度E	25~39	3~9	P6.P8	炬中央 南西寄り	-	-	P1	不整形、 中段あり	70×54	62	火災か。
C	1	5	古墳 前期	4世紀前 半	長方形	2.61×3.21	8.38	5.67	17~47	N19度E	なし	-	P1.P3	なし	-	-	不明	火処なし	-	-	-
C	1	6	奈良	8世紀中 頃	長方形	2.78×3.94	10.95	7.18	35~61	N7度W	13~20	3~7	不明	東辺や 南	N82度W	粘土+石	南東隅 P3	楕円形	54×41 二段	16	風倒木痕より新しい
C	1	7	不明		長方形か	推定4.0× 3.5	-	-	-	-	なし	-	P1~P3	不明	-	-	不明	-	-	-	硬化面のみ
E	1	1	奈良	8世紀後 半	台形	3.94×3.88	15.29	10.85	41~60	N71度W	20~42	1~7	不明	東辺中 央やや 南	N70度W	粘土+石 か	南東隅 ピット か	楕円形	103×83 二段	27	5住居は拡張部か
E	1	2	奈良	8世紀後 半から未	長方形	3.17×3.98	12.62	8.50	34~46	N10度E	36~50	4~8	不明	東辺中 央やや 南	N80度W	粘土	南東隅	楕円形	59×48 二段	35	-
E	1	3	平安	9世紀中 頃	長方形	4.78×3.58	17.11	10.74	41~61	N8度W	30~55	1~11	不明	東辺南 寄り	N86度E	石+粘土 か	南東隅	略楕円 形	64×50	15	カマド意図的破壊か
E	1	4	平安	9世紀前 半	長方形	6.34×3.76	23.84	19.74	11~20	N10度E	なし	-	不明	東辺中 央やや 南	N68度W	石+粘土 か	不明	-	-	-	南北に長い
E	1	5	平安	9世紀中 頃	台形	-	-	2.45	12~21	-	なし	-	不明	不明	-	-	不明	-	-	-	1住居の張出部か
E	1	6	平安	9世紀中 頃	長方形	4.44×3.28	14.56	12.14	32~61	N22度E	なし	-	不明	東辺中 央やや 南	N67度W	石粘土 か	不明	-	-	-	上位にAs-B堆積
F	1	1	平安	9世紀前 半	長方形	4.63×2.17	10.05	6.42	4~16	N8度E	なし	-	不明	東辺中 央	N87度E	不明	掘り方 南東隅	不整形	66×40	29	小規模
F	1	2	平安	9世紀前 半	長方形	5.94×4.60	27.32	21.08	48~76	N6度E	26~50	2~8	P1~ P3.P6	東辺中 央	N82度W	石+粘土	南東隅	不整形	63×59	58	鉄製品工房か
F	1	3	平安	9世紀中 頃	長方形	4.04×3.51	14.18	9.18	63~89	N5度E	13~47	3~8	不明	東辺中 央やや 南	N81度W	石+粘土	南東隅	略楕円 形	44×32	49	西辺寄りに炭化物
F	1	4	奈良	8世紀後 半	長方形	3.83×3.31	12.68	10.54	14~32	N6度E	21~46	2~7	不明	不明	-	-	南東隅	略楕円 形	73×43	14	火処なし
F	1	5	平安	9世紀代	長方形	3.81×3.27	12.46	8.32	20~65	N5度E	23~43	2~9	不明	東辺中 央南寄 り	N81度W	粘土か	南東隅	隅丸長 方形	36×29	20	撻乱による破壊
F	1	6	奈良	8世紀中 頃	長方形	6.00×4.83 (7.25× 7.30外周斜 面含む)	28.98 (52.93)	25.45	30~54 (57~ 83)	N11度E	なし	-	P1~P4	東辺中 央やや 南	N84度W	粘土+石	南東隅 か	不明	72×-	4	外周に斜め掘り込み
F	1	7	平安	9世紀前 半	長方形	2.86×2.50 (2.98× 2.66外周斜 面含む)	7.15 (7.93)	5.18	24~45	N22度E	22~41	5~8	不明	東辺南 寄り	N67度W	粘土+石	不明	-	-	-	北辺~北東部に斜め掘り込み
F	1	8	奈良	8世紀前 半	長方形	6.76×5.57	37.65	28.05	49~83	N16度E	25~45	1~6	P1.P9. P3.P8	東辺南 寄り	N65度W	粘土+石	南東隅	不整形 二段	69×64	39	5住居+7住居より古い
G	1	1	古墳	6世紀前 半	長方形	4.28×3.99 (4.28× 4.31北辺斜 面含む)	17.08 (18.45)	13.35	56~79	N14度E	22~38	1~6	不明	東辺中 央やや 南	N73度W	粘土+石 ?	南東隅	略円形	81×72	57	北辺に斜め掘り込み
G	1	2	古墳	6世紀前 半	長方形	4.25×4.10	17.42	13.39	41~66	N77度E	21~30	5~9	P1.P2	東辺中 央やや 南	N78度E	粘土+石	南東隅	略円形	78×77	56	南寄り柱穴は掘り方検出
G	1	3	古墳	6世紀前 半	台形	4.38×4.58	20.06	16.02	36~67	N13度W	なし	-	P1~P4	東辺中 央やや 南	N87度E	粘土	南東隅	略円形	50×51	81	床面中央部硬化.P4は掘り方検出
G	1	4	奈良		長方形	3.23×3.90	12.59	8.77	42~55	N13度W	19~29	4~6	不明	東辺中 央やや 南	N89度W	粘土	南東隅	楕円形	66×77	25	遺物少ない
G	1	5	奈良	8世紀中 頃	長方形	2.80×3.23	9.04	5.92	32~56	N2度W	20~38	1~6	不明	東辺南 寄り	N89度E	粘土	南東隅	略円形	55×55	11	-
G	1	6	奈良	8世紀前 半	長方形	2.63×3.23	8.49	5.48	38~50	N6度E	21~35	2~6	不明	東辺南 寄り	N83度W	石+粘土	南東隅	不整形	50×53	25	鉄鋤先、6世紀後半の土器あり
G	1	7	奈良	8世紀前 半	台形	3.72×3.66	11.82	10.00	53~71	N87度E	27~42	1~3	不明	東辺南 寄り	N89度W	石+粘土	南東隅	楕円形	116×98	24	カマド天井石、遺物やや多い
G	1	8	奈良	7世紀末 ~8世紀 初め	長方形	4.75×4.45	21.13	13.22	63~77	N85度E	30~50	2~8	不明	東辺南 寄り	N89度W	粘土	南東隅	略円形	84×74	20	遺物少ない、細長い石10個
G	1	9	平安	9世紀中 頃	長方形	3.37×2.86 以上	-	6.98	35~37	N3度E	25~33	2~11	不明	(東辺南 寄り)	N89度E	石+粘土	不明	-	-	-	カマド付近土師器多い
G	1	10	平安	9世紀代	長方形	3.07×3.82	11.72	9.90	18~30	N4度E	なし	-	不明	東辺南 寄り	N81度W	石+粘土 か	不明	-	-	-	遺物少ない
G	1	11	平安	9世紀中 頃	長方形	3.52×5.11	17.98	14.19	34~60	N14度E	なし	-	不明	東辺南 寄り	N77度W	粘土か	南東隅	不整形	57×75	32	柱穴不足か
G	1	12	平安	9世紀中 頃	長方形	2.71×3.55	9.62	6.89	17~32	N12度E	26~37	2~6	不明	東辺南 寄り	N74度W	不明	南東隅	略円形	63×59	25	カマド遺存不良
G	1	13	平安	9世紀前 半	長方形	3.36×4.00	13.44	9.84	23~48	N3.度E	20~38	1~7	不明	東辺南 寄り	N87度W	石+粘土	南東隅	卵形	59×75	27	カマド作り替え

第4章 検出された遺構と遺物

区	面	番号	時代 時期	およその 年代想定	平面形	規模m	面積㎡		壁高cm	長軸方 位	壁溝		主柱穴	カマド			貯蔵穴			備考		
							計算面積	検出面積			幅cm	深さcm		位置	対称軸 方位	構築材	位置	平面形	大きさ cm		深さcm	
G	1	14	奈良	8世紀中頃	台形	3.80×4.99	18.96	13.38	30～60	N12度E	27～49	5～12	不明	東辺南寄り	N78度W	石+粘土か	南東隅	不整形	58×53	20	南寄りに遺物多い	
G	1	15	平安	9世紀前半	長方形	2.51×3.28	8.23	5.56	28～51	N13度E	19～33	2～9	不明	東辺南寄り	N78度W	石+粘土か	南東隅	略楕円形	80×56	9	鉄製品	
H	1	1	古墳	6世紀前半	長方形	4.64×4.44	20.60	11.85	22～67	N67度E	21～47	3～10	P1～P3	東辺中央やや南	N66度E	石+粘土	南東隅	略方形	91×94	87	床面硬化	
H	1	2	平安	9世紀中頃	長方形	4.21×3.22	13.55	9.62	18～45	N0度	24～46	2～5	不明	東辺中央やや南寄り	N90度	石+粘土	南東隅P3	不整形	121×95	35	鉄製品、貯蔵穴外へ延びる	
H	1	3	奈良	7世紀末～8世紀前半	長方形	2.15×2.82	6.06	3.35	35～46	N28度W	20～44	3～16	不明、P1、P2か	東辺中央やや南寄り	N79度E	粘土	不明	-	-	-	-	カマド煙道天井部遺存、6世紀前半の土器あり
H	1	4	古墳	6世紀代	台形	3.80×4.06	15.42	11.91	39～51	N3度E	17～32	1～5	不明	東辺中央	N72度W	粘土	南東隅P1	不整形	64×61	89	カマド煙道天井部遺存	
H	1	5	欠番																			
H	1	6	平安		台形か	2.55×3.12	7.95	3.44	11～20	N6度W	17～25	4～9	不明	東辺中央南寄り	N87度W	粘土+石	南東隅P1	略円形	29×30	29	北東隅～中央部攪乱により破壊	
H	1	7	平安	9世紀後半	台形か	3.00×3.53	10.59	2.34	21～32	N88度W	38～46	7～8	不明	東辺中央南寄り	N88度W	粘土+石	南東隅P1	略三角形	44×56	20	北東隅～中央部攪乱により破壊	
H	1	8	古墳	5世紀後半	台形	2.75×3.40	9.35	6.59	19～33	N27度W	12～27	1～9	不明	東隅	N71度W	粘土+石	南隅付近掘り方	楕円形	78×63	33	遺物多い	
H	1	9	平安	9世紀中頃	台形	3.53×3.57	12.60	9.83	27×42	N0度	20～35	2～4	P2及び北寄りビット	東辺中央やや南寄り	不明	不明	南東隅P1	不整形	42×37	44	北東隅～カマド攪乱による破壊	
H	1	10	古墳	5世紀末～6世紀初め	長方形	4.24×4.04	17.12	13.09	29～49	N66度W	15～27	1～8	P3、P4、P5、P6	東辺中央やや南寄り	N65度W	粘土+石	南東隅	略楕円形	79×62	51	滑石工房か	
H	1	11	古墳	5世紀後半	長方形	3.90×3.99	15.56	11.09	30～45	N30度E	10～52	2～9	P1～P3か	北東辺中央やや東寄り	N30度E	粘土+石多い	東隅P2、P4	略楕円形	P2:58×72、P4:73×71	55,51	石組の北カマド	
H	1	12	古墳	6世紀前半	長方形	4.81×3.98	19.14	11.20	24～37	N78度W	16～28	2～20	P2、P4、P6	東辺中央	N75度W	粘土+石	南東隅P3	不整形	74×75	85	カマド土器遺存	
H	1	13	奈良	8世紀前半	方形	3.03×2.99	9.05	6.20	20～50	N88度W	19～34	4～8	不明	東辺中央やや南寄り	N89度W	粘土+石	P1か	不整形	27×23	7	北西隅欠	
H	1	14	古墳	5世紀後半	台形	4.77×4.84	23.08	6.08	28～59	N23度E	17～31	3～10	P2、P4、P5、P6	不明	-	-	南東隅P3	不整形	79×69	72	カマド不明、85土坑が破壊か	
H	1	15	古墳	6世紀前半	台形	4.31×4.61	19.86	14.12	24～52	N1度W	12～33	1～5	P1、P6～P8	東辺中央やや南寄り	N87度W	石+粘土	南東隅P3	長方形	75以上×54	87	南東部・北西隅を欠く	
H	1	16	古墳	5世紀末	台形か	4.98×2.56以上	12.74以上	7.46	19～45	-	14～29	2～8	1P	東辺南寄り	-	粘土か	南東隅P2	略円形	70×71	75	北半部は調査区外	
I	1	1	1井戸	平安	10世紀後半			20.22													もと1住居	
I	1	2	古墳	5世紀中頃	方形	7.10×6.81	48.35	38.97	23～49	N75度W	22～41	2～9	P1～P4	東辺中央やや南寄り	N79度W	石?+粘土	カマド右脇か	不整形	69×40以上	12	石製巡方出土、10世紀前半の土器あり	
I	1	3	飛鳥	7世紀後半	長方形	3.19×3.61	11.51	5.40	57～71	N75度E	16～32	3～7	不明	東辺中央やや南寄り	N73度W	粘土	南東隅P1	不整形	48×41	65	覆土遺物多い	
I	1	4	奈良	8世紀中頃	台形	3.24×3.49	11.30	6.80	20～47	N2度E	27～49	2～8	P1～P3、P5か	東辺中央部南寄り	N89度W	粘土	不明	-	-	-	カマド天井部一部残	
I	1	5	古墳	6世紀前半	方形	5.01×4.91	24.59	18.98	41～62	N90度	18～34	2～10	P1～P4	東辺中央	N90度	石+粘土	南東隅	略長方形	87×67	76	カマド遺存良好、床溝あり	
I	1	6	古墳	6世紀前半	長方形	4.92×4.58	22.53	19.55	44～66	N84度E	18～37	2～9	P1、P4、P6、P7	東辺中央やや南寄り	N85度E	石+粘土	南東隅	略長方形	77×79	82	北壁にステップ遺構、貯蔵穴脇に高まり、南出入口	
I	1	7	奈良	8世紀前半	台形	3.51×3.31	11.61	8.04	51～80	N8度E	小ビット	1～11	不明	東辺南寄り	N83度W	粘土+石?	南東隅	不整形	93×55	12	北東部壁外に幅50～60cmの平坦面	
I	1	8	古墳	6世紀後半	台形	3.93×4.26	16.74	12.38	43～56	N9度E	小ビット	1～7	不明	東辺南寄り	N81度W	粘土+石	南東隅	略円形	73×66	55	床面一部姓土化	
I	1	9	古墳	5世紀後半	長方形	5.17×4.80	24.81	20.54	31～61	N49度W	30～40	1～3	P1～P4	南東辺中央	N47度W	粘土+石	南隅	略円形	101×87	68	南西辺出入口、10世紀前半の土器あり	
I	2	1	2	縄文前期	黒浜式	長方形	6.73×5.69	38.29	23.92	13～66	N20度W	周溝三	4～10	不明	炉	-	-	-	-	-	-	黒浜式・有尾式
I	2	2	2	縄文前期	黒浜式	台形	5.01×4.71	23.59	12.98	49～65	N5度E	周溝二	4～10	P3、P5、P6、P9	炉2箇所	-	-	-	-	-	-	黒浜式・有尾式～諸磯a式
I	2	3	3	縄文前期	諸磯a式	不整形	4.35×2.35以上	10.22以上	6.39	51～67	-	不明	-	P1、P2	炉不明	-	-	-	-	-	-	諸磯a主体、南半部のみ

#1 計算面積=計測可能な住居中央部付近の上端-上端で縦×横を計測し、その値の小数点第3位を四捨五入した計算値

#2 検出面積=住居床面で検出した範囲の面積を、プランメーター (PLANIX7)で3回計測し、その平均値の小数点第3位を切り捨てた値。

ビット・土坑面積を含むが、カマド面積・壁溝面積を含まない。

第6表 遺物観察表

番号	挿図 P L	種類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
A区1住居							
A 1	173	土師器 台付甕	P1内-7 脚上部	高台径8.4	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	外面はハケ目後、撫で。内面はハケ目(1cmに8本)。脚端部はヘラ削り。 脚部内面に黒斑。	
B区55ピット							
B 1	173	多孔石 楕円盤	炉内-15	長20.5幅15.2 厚12.8重5184.1	粗粒輝石安山岩	表裏面とも平坦な礫面に多数の孔を穿つ。このほか孔は側面にも数カ 所ある。	
B 2	173	瀬戸・美濃 陶器片口鉢	覆土中部 底部	底径8.1	淡黄	高台外面は高いが、内面の扱りは浅い。内面から高台外面に灰釉。底 部内面に目痕1ヶ所残る。	江戸時代
C区1住居							
C 1	173	土師器 高杯	西壁寄り-2 口縁片	口径15.8	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙	内外面に丁寧なヘラ磨き後、赤色塗彩。	
C 2	173	土師器 杯	埋没土 口縁片	口径12.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄褐	内外面に丁寧なヘラ磨き。	
C 3	173	土師器 小型丸底壺	埋没土 底部	—	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙	底部は内外面ヘラ撫で。内外面赤彩。	
C 4	173	土師器 高杯	北東部+14 脚部	脚底10.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐	脚部外面は縦のヘラ磨き。内面は撫で。	
C 5	173	土師器 台付甕	埋没土 口縁片	口径14.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのハケ目(1cmに6本)。内面は横の ヘラ撫で。	
C 6	173	土師器 甕	西壁寄り+6 口縁~胴部	口径14.8	細砂粒・軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面はハケ目(1cmに7本)。内面は撫で。	
C 7	173	石製模造品 有孔円盤	埋没土	長1.8幅1.8 厚0.2重1.6	滑石	表裏面とも研磨され、多方向の線条痕が残る。体部に粗い面取り整形 痕が残る。径1.5mmの孔を片側穿孔。	
C 8	173	石製模造品 有孔円盤	北部-1	長1.8幅1.8 厚0.3重1.7	滑石	表裏面とも研磨され、多方向の線条痕が残る。体部に粗い面取り整形 痕が残る。径1.5mmの孔を片側穿孔。	
C 9	173	石製模造品 勾玉	中央部+39	長1.9幅0.5 厚0.7重1.0	滑石	板状素材を用いる。表裏面とも頭部に穿孔位置を印した痕跡が残る。	
C 10	173 142	砥石 棒状礫	P1際+10	長17.1幅4.7 厚4.6重598.5	変質玄武岩	小口部先端に敲打痕がある。礫面は摩耗して光沢を帯びているが、石 材が細粒で積極的に評価できない。	
C 11	173 142	鉄製品 袋状鉄斧	南壁際+12	長5.9幅3.25 厚2.2重60.0		柄取付部は環状を呈するいわゆる袋状鉄斧である。刃部は両刃で基部 と比して厚くつくられている。	
C区2住居							
C 12	173	土師器 甕	西壁寄り+10 口縁片	口径8.8	細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部外面は縦のハケ目(1cmに6本)。内面は横のハケ目後、撫で。	
C 13	173	土師器 壺	西壁寄り+4 口縁片	—	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部から頸部は横撫で。胴部外面はハケ目(1cmに6本)。内面は丁 寧な撫で。	
C区3住居							
C 14	173	土師器 高杯	北西隅寄り+12 口縁~体部	口径14.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。杯部外面は横のヘラ磨き。内面は斜放射状ヘラ磨き。	
C 15	173	土師器 壺	埋没土 底部片	底径2.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙	底部外面中央に窪み。内外面はヘラ磨き。	
C 16	173	土師器 高杯	南西隅+9 杯底部~脚部	—	細砂粒・粗砂粒・軽石・ 角閃石/良好/にぶい橙	杯部内面はヘラ磨き。脚部外面は縦のヘラ磨き。内面はヘラ撫で。	
C 17	173	土師器 甕	埋没土 口縁部	口径16.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で後、斜めのハケ目(1cmに10本)。頸部内面は横のハケ目。 口縁部外面に煤付着。	
C 18	173	土師器 甕	北壁際+7 口縁片	口径15.7	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。頸部は斜めのハケ目(1cmに7本)。内面は撫で。	
C 19	173	土師器 甕	西部+3 口縁~胴部	口径11.8	細砂粒・軽石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのハケ目(1cmに6本)。頸部内面は 横のヘラ削り。胴部内面は横のハケ目(1cmに10本)。	
C区4住居							
C 20	173 142	土師器 手捏ね土器	P1内+14 口縁欠	底径3.5	細砂粒・粗砂粒/良好 明赤褐	手捏ねで外面に指先の撫で。内面はハケによる撫で、吸炭。	
C 21	173	土師器 埴	埋没土 胴部~底部	—	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部外面は縦のヘラ磨き。底部は手持ちヘラ削り。口縁部内面はハ ケ目(1cmに9本)。内面煤付着。	
C 22	174	土師器 小型丸底壺	北東埋没土 口縁片	口径12.9	細砂粒・角閃石/良好/ 灰オリーブ	口縁部は横撫で。頸部外面は縦の雑なヘラ磨き。体部外面は横のヘラ 磨き。内面は斜めのハケ目(1cmに8本)。	
C 23	174	土師器 甕	P1内+11 胴部~底部	底径3.0	細砂粒・軽石/良好/赤褐	胴部外面はヘラ削り。底部もヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
C 24	174	土師器 甕	P1内+2 口縁~胴部	口径14.8	細砂粒・粗砂粒/良好/赤	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のハケ目(1cmに10本)後、撫で。頸部 内面ヘラ削り。胴部内面は斜めのハケ目(1cmに12本)。	
C 25	174 142	土師器 袋形土器	P1内+17 口縁一部欠	長10.6器高5.9 胴幅3.7径0.4	細砂粒/良好/明黄褐	薄手作りで紡錘形の体部を左右貼り合わせて成形しており、内外面に 接合痕を残す。口縁部は折り返し状で作りは雑。紡錘形の体部の一端 には径4mm程の穿孔がある。	
C 26	174 142	砥石? 礫砥石?	P8際0	長38.1幅13.8 厚13.6重21500.0	粗粒輝石安山岩	表裏が平坦で厚い。背面側エッジに平滑面があり、砥石と捉えた。大 部分が被熱剥落しており、詳細は不明。	
C 27	174 142	砥石 切り砥石	北西一括	長(6.4)幅(0.8) 厚0.9重3.3	珪質頁岩	砥石肩部の破片で、薄型の部類に入る。石材は細粒質で、仕上げ砥と いうことになろう。	
C区6住居							
C 28	174	土師器 杯	南西隅+11 1/2	口径12.9	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
C 29	174 142	土師器 杯	南西隅+8 5/6	口径15.5器高4.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで間に撫での部分を残す。内 面は撫で、ハゼ。外面磨滅。	
C 30	174	須恵器 杯	埋没土 1/2	口径15.2底径10.0 器高4.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。厚手で雑な作り。	
C 31	174	須恵器 高台杯	カマド左外+15 底部	底径10.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。体部下端は回転ヘラ削り。底部回転ヘラ 削り後の付高台。底部に自然釉。	
C 32	174	土師器 甕	カマド内+4 胴部	—	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	
C区20土坑							
C 33	174 142	加工痕ある 剥片 小型剥片	東部+4	長1.8幅1.5厚0.6 重1.3	黒曜石	打点側の両側縁を微細加工する。剥片は打点の振り幅の広い石刃様剥 片を用いる。旧石器遺物の混入か。	
E区1住居							
E 1	175 142	土師器 杯	北西壁際+8 口縁一部欠	口径12.3器高3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで間に撫での部分を残す。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
E 2	175 142	土師器 杯	西壁際+2 完形	口径11.5器高3.4 底径9.0	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内外面に黒褐色の塗膜状付着物。	
E 3	175 142	須恵器 杯	中央部東寄り+7 口縁一部欠	口径12.6底径6.8 器高3.9	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 4	175 142	須恵器 杯	埋没土 1/4	口径12.6底径7.2 器高3.7	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。底部にヒビ割れ。	
E 5	175	須恵器 杯	埋没土 口縁片	口径13.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。	
E 6	175	土師器 台付甕	カマド-2 胴部~底部	高台径9.8	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で。脚部は丁寧な貼付け。	
E 7	175 142	土師器 甕	東壁寄り+3 完形	口径13.8器高14.3 底径6.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で。胴部下位に1ヶ所外側からの穿孔。	
E 8	175 142	鉄製品 釘か?	北東部+2	長3.3幅0.3 厚0.3重1.5		断面四角形で先細りになっている。両端を欠損しているため判然としないが、紡錘車の軸の可能性もある。	
E 9	175 142	鉄製品 鎌	北東部+5	長8.3幅2.5 厚0.3重38.4		先端側半分と基部の一部を欠損する。残存する刃部は湾曲しており研ぎ減りがみられる。	
E区2住居							
E 10	175 142	土師器 杯	東壁寄り+1 口縁一部欠	口径12.6器高3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
E 11	175 142	土師器 杯	南壁寄り+14 口縁一部欠	口径11.5器高3.3	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部も撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
E 12	175	土師器 杯	埋没土 1/2	口径12.8器高3.7	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。内面も撫で。外面の磨滅顕著。	
E 13	175	須恵器 杯	埋没土 胴部~底部片	底径9.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。底部は回転糸切り無調整。	
E 14	175	土師器 杯	北西壁際+25 1/2	口径12.0底径10.2 器高3.1	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は雑な撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
E 15	175 142	土師器 杯	中央部北寄り0 1/2	口径13.6底径9.2 器高4.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部も撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。底部に墨書、文字不明。	
E 16	175 142	須恵器 杯	南東隅寄り+3 口縁一部欠	口径13.1底径8.5 器高3.5	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部外面炭灰。底部周辺の粗れ顕著。	
E 17	175	須恵器 杯	埋没土 底部	底径5.5	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 18	175	土師器 甕	カマド内-8 口縁~胴部	口径19.9	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横、胴部は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
E 19	175	土師器 甕	東壁寄り+12 口縁~胴部片	口径19.9	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横のヘラ削り。胴部外面に煤付着。内面はヘラ撫で。	
E 20	175	土師器 甕	カマド内-4 胴部片	—	細砂粒/良好/赤褐	胴部外面は斜めから縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、接合痕。	
E 21	175	土師器 甕	カマド内+3 胴部~底部	底径5.2	細砂粒/良好/にぶい赤褐	胴部外面は斜めのヘラ削り、煤付着。内面は撫で、接合痕。	
E 22	175 142	敲石 棒状礫	南西壁際0	長15.5幅5.0 厚4.3重495.8	粗粒輝石安山岩	小口部両端に敲打痕、特に上端側小口部の敲打痕が著しい。断面三角形形状を呈する。	
E区3住居							
E 23	176 142	土師器 杯	南東隅寄り+1 口縁一部欠	口径12.8器高4.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を広く残す。内面のハゼ顕著。	
E 24	176 142	土師器 杯	南東隅寄り+1 完形	口径15.6器高5.1	細砂粒・雲母/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
E 25	176 142	土師器 甕	西部-1 胴~底一部欠	口径21.3底径3.3 器高33.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めから縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
E 26	176	須恵器 甕	中央部東寄り+1 胴部片	—	細砂粒/還元焰/灰	叩き整形。外面は平行叩き後、叩き目を撫でて消す。内面の当て具は青海波文。外面わずかに自然釉	
E 27	176	須恵器 甕	南東部+10 胴部~底部	—	細砂粒/還元焰/灰白	叩き整形。外面平行叩き。内面当て具は青海波文。	
E 28	176 142	敲石 礫	中央部-5	長10.7幅5.1 厚2.9重289.0	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が摩耗して光沢を帯びる。石材は緻密質で、線条痕等は見られない。	
E 29	176 142	石製品 不明	中央部南寄り+1	長(13.3)幅(16.9) 6.2重623.8	二ツ岳軽石	破断面が全面を覆い、本来の形状は不明。背面側に研磨・整形した平坦面が残る。	
E区4住居							
E 30	176	土師器 杯	カマド前+12 1/4	口径11.4	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は雑な撫で。内面は撫で。外面粉っぽい胎土。	
E 31	176	土師器 杯	カマド内+20 1/5	口径11.8底径7.9 器高3.0	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は雑な撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
E 32	176	土師器 杯	南東隅寄り+7 2/3	口径13.0底径7.1 器高3.0	細砂粒/酸化焰/明赤褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 33	176	土師器 甕	カマド前0 口縁~胴部	口径19.7	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
E 34	176	土師器 甕	カマド前+9 口縁~胴部	口径21.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で。	
E 35	177	土師器 甕	南西隅寄り+9 口縁~胴部	口径19.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は斜め、胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、煤付着。	
E 36	177	土師器 甕	カマド前+8 口縁~胴部	口径19.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
E 37	177 142	銅製品 丸轆	埋没土	長1.8幅2.3厚0.3 重1.8		鑄造で高さ3.5mmの垂孔が穿孔されている。表面から側面および皮帯の接地面は鍮で整形されており、表面のみ粗い研磨が施されている。内面は鍮肌を残し、2カ所に径1mmの鋳基部が残存している。	
E 38	177 142	鉄製品 刀子	カマド	長3.5厚0.4 幅1.4重4.3		茎部と切先側を欠損する。棟区と刃区は比較的良好に残存している。	
E区5住居							
E 39	177	土師器 甕	北壁寄り+5 口縁~胴部	口径9.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。内外面に輪積み痕。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
E 40	177 143	鉄製品 鎌	北東部0	長19.7幅3.1 厚0.25重75.3		切先と基部の一部が欠損し錆化が進んでいる。基部背面に柄の木質がわずかに残存している。	
E区6住居							
E 41	177	土師器 杯	南壁際+2 2/3	口径11.5底径8.0 器高3.0	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で、歪み顕著。体部は雑な撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
E 42	177 143	土師器 杯	南壁際+3 破片	口径6.4	細砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内面は丁寧なヘラ磨き後、黒色処理。体部外面に「車」の墨書。	
E 43	177	土師器 杯	カマド内+15 2/3	口径14.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は横の手持ちヘラ削り。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、雑な放射状。暗文。	
E 44	177	須恵器 杯	南西隅+3 2/3	口径12.0底径6.0 器高3.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 45	177	須恵器 蓋	南壁寄り+20 2/3	口径16.9摘2.8 器高3.7	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。摘みはボタン状で天井部回転ヘラ削り後の貼付け。	
E 46	177 143	須恵器 碗	カマド内+35 高台欠	口径15.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼付け部から欠損。内面に重ね焼き痕。器面磨減。	
E 47	177	須恵器 杯	埋没土 2/3	口径13.1底径9.0 器高4.0	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
E 48	177 143	須恵器 杯	中央部+2 2/3	口径14.9底径7.8 器高6.7	細砂粒・粗砂粒・石英/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台端部には凹線が巡り、底部回転糸切り後の付高台。	
E 49	177 143	須恵器 杯	中央部+36 口縁一部欠	口径14.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼付け部から剥離。内面に重ね焼き痕。	
E 50	177	土師器 甕	中央部東寄り +9底部片	底径5.0	細砂粒/良好/橙	胴部外面下端はヘラ削り。底部もヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
E 51	177	土師器 甕	南東隅+4 口縁部片	口径19.7	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。	
E 52	177	土師器 甕	カマド内+44 口縁部片	口径17.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は斜めのヘラ削り。	
E 53	177	土師器 甕	カマド内+23 口縁部片	口径19.7	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。	
E 54	177	土師器 甕	中央部+2 口縁部片	口径19.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
E 55	177	土師器 甕	南部+14 口縁部片	口径18.7	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。頸部外面に輪積み痕。	
E 56	178	土師器 甕	カマド内+18 口縁片	口径19.4	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
E 57	178	土師器 甕	カマド左袖-1 口縁～胴部	口径20.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横から斜め、胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
E 58	178	土師器 甕	南東部+17 胴部片	底径4.6	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
E 59	178	土師器 甕	カマド内+17 口縁片	口径19.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部は斜めのヘラ削り。内面は撫で。	
E 60	178	土師器 甕	南部+10 銅下部片	底径3.8	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。底部外面吸炭。	
E 61	178	土師器 杯	中央部東寄り+11 底部片	—	細砂粒/良好/にぶい赤褐	杯底部で手持ちヘラ削り。内面は撫で。内面に墨書、文字不明。	
E 62	178 143	鉄製品 刀子	中央部北寄り+22	長3.7幅1.1厚0.3 重4.6		棟区は残存するが刃区は判然としない。茎と切先側を欠損する。	
F区1住居							
F 1	178 143	須恵器 杯	東壁際+5 1/2	口径12.8底径6.4 器高3.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部内面に「長」の墨書。	
F区2住居							
F 2	178	土師器 杯	南壁寄り+2 3/4	口径12.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。歪みが顕著。	
F 3	178 143	土師器 杯	カマド右袖+13 3/4	口径12.1	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 4	178	土師器 杯	南壁寄り+2 1/4	口径12.0器高3.6	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。体部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 5	178	土師器 杯	中央部東寄り-3 1/3	口径11.9器高2.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は雑な撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 6	178	須恵器 蓋	北部際+9 1/4	口径15.8	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。外面天井部は回転ヘラ削り。外面に環の重ね焼きの変色。	
F 7	178	須恵器 杯	西壁寄り+39 口縁部片	口径11.8底径7.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。底部切り離しは不明。	
F 8	178	須恵器 杯	一括 1/4	口径11.4底径7.6 器高3.4	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F 9	178	須恵器 碗	中央部+36 1/4	口径11.8底径7.2 器高5.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。燻し。	
F 10	178 143	須恵器 杯	北西隅+11 5/6	口径12.8底径6.5 器高4.3	細砂粒・針状鉱物/ 還元焰/にぶい黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内外面に火撃、一部酸化。南比企か。	
F 11	178	須恵器 杯	南西部+38 底部	底径8.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ起こし無調整。	
F 12	178	須恵器 碗	西部+2 高台部	底径7.3	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部静止糸切り後の付高台。	
F 13	178	須恵器 杯	北西隅寄り+36 底部	—	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F 14	178	土師器 甕	南壁寄り+2 口縁～胴部3/4	口径20.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横から斜め、胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で、接合痕。	
F 15	178 143	土師器 甕	南東隅寄り+3 口縁～胴部	口径20.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横、胴部は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
F 16	178	土師器 甕	一括 胴部～底部	底径4.2	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。底部はヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
F 17	178	須恵器 長頸壺	南東西隅寄り+37 肩部～胴部片	—	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。肩部外面に三条の沈線を巡らし、間にクシの刺突文を施文。肩部外面に自然釉。	
F 18	179	須恵器 甕	南部+3 口縁部片	口径24.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。口唇部の剥離が目立つ	
F 19	179	土師器 土錘	南壁寄り+11 完形	長6.2幅2.0 厚2.2	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐	器面に指の整形痕。	
F 20	179 143	紡輪 小判型	南東部-2	長5.0幅4.3 厚1.4重40.8	砥沢石	器面が荒れ不明瞭だが、左側縁の平坦面は砥石再生品としての可能性を感じる。径7mmの孔を両側穿孔。	
F 21	179 143	鉄製品 鎌か	中央部西寄り +39	長2.9幅0.5 厚0.3重3.6		残存する端部の断面形は長方形を呈しており鎌であるとすれば茎部と考えられる。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
F 22	179 143	鉄製品 不明	南西部+35	長4.6幅0.5 厚0.2重3.4		断面は三角形を呈しているが、刀子にしては細い。鏃の可能性もあるが全体形がわからないため不明。	
F 23	179 143	鉄製品 鏃	中央部+42	長5.6幅0.5 厚0.6重7.1		頸と茎部の一部が残存する。刃部形状は不明。	
F 24	179 143	鉄製品 鏃か	東壁寄り+3	長8.6幅0.7 厚0.2重8.6		刃部形状は不明瞭であるが長頸片刃鏃の可能性はある。角閃を有するが茎の長さが短い。	
F 25	179 143	鉄製品 U字 型鋤・鋤先	東壁周溝内+7	長15.6幅3.0 厚0.5重100.0		側面が残存したもので刃部は欠損か、断面はY字状で錆が進んでいる。	
F 26	179 143	砥石 切り砥石	確認面	長(7.4)幅4.0 厚3.6重141.9	砥沢石	四面使用。小口部に整形痕を残す他、よく使い込まれている。概形は糸巻状を呈する。上端側を欠損。	
F区3住居							
F 27	179 143	土師器 杯	南部-5 完形	口径12.0器高3.4	細砂粒・雲母/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は指押え。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 28	179	須恵器 杯	北島隅+47 1/4	口径11.8底径5.2 器高3.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F 29	179	須恵器 杯	西壁寄り+71 底部	底径8.2	細砂粒/還元焰/浅黄	ロクロ整形(左回転)。底部は回転ヘラ削り。底部内外面に酸化部分が残る。	
F 30	179	土師器 甕	南部0 口縁部片	口径20.6	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部は横のヘラ削り。内面はヘラ撫で。頸部外面に輪積み痕。	
F 31	179	須恵器 瓶	中央部北寄り-5 底部片	底径13.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /灰	叩き整形。胴部外面は格子叩き、下端ヘラ削り。内面に素文の当て具痕。底部内外面に自然釉。	
F 32	179	須恵器 瓶	南部+1 頸部~ 底部片	底径14.8	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰	ロクロ整形。頸部内面に指の押さえ痕。底部ヘラ削り。	図上復元
F 33	179 143	紡輪 逆台形状	中央部南寄り+9	長5.0幅5.3 厚2.0重72.3	砥沢石	体部側面を粗く面取り整形する。孔2が重複、穿孔されており、軸孔径は不明。穿孔道具は9mm程度と推定。	
F区4住居							
F 34	180	須恵器 杯	中央部+3 底部~体部	底径7.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F 35	180	須恵器 杯	中央部-1 底部~体部	底径6.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
F 36	180 143	土師器 甕	北壁寄り+3 1/2	口径20.2底径3.6 器高27.4	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横、胴部は斜めのヘラ削り。内面は撫で、接合痕。	
F区5住居							
F 37	180	土師器 甕	北東部+2 口縁~胴部片	口径20.1	細砂粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面は撫で。	
F 38	180	土師器 甕	カマド内+14 口縁~胴部片	口径20.6	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横ヘラ削り後縦の撫で。内面は撫で。	
F区6住居							
F 39	180	土師器 杯	一括 口縁~体部	口径11.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 40	180	土師器 皿	カマド内-2 1/4	口径13.8器高2.8	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。見込み部中央剥離。	
F 41	180	土師器 杯	カマド右袖+10 口縁~体部	口径12.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで指で押さえた痕跡が残る。内面は撫で。	
F 42	180	須恵器 蓋	一括 口縁部片	口径12.9	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。内面のかえりはシャープさを欠く。	
F 43	180 143	須恵器 杯	南壁寄り+10 1/2	口径14.5底径10.2 器高3.5	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(左回転)。体部下端ヘラ削り。底部は手持ちヘラ削り	
F 44	180	須恵器 蓋	埋没土 口縁部片	口径16.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	
F 45	180	土師器 甕	中央部+16 口縁部片	口径19.7	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	
F 46	180	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口径31.1	細砂粒/還元焰/灰 断面セピア色	胴部外面は叩き不明。内面は当て具、青海波文。肩部外面・口縁部内面に自然釉。	
F 47	180 143	銅製品 鉞尾	一括	長2.4幅1.6厚0.2 重1.5		鋳造で上1/3を欠損する。表面の平面及び側面は平滑に研がれ先端部に狭い面取りが見られる。漆の残存は見られない。内面は鋳肌を残し、2カ所に径1mm程の鋸基部が残存している。	
F区7住居							
F 48	180	土師器 杯	カマド内+1 口縁部片	口径11.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。内面に煤付着。体部は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 49	180	土師器 杯	南下外+18 口縁部片	口径12.0	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 50	180 143	須恵器 蓋	南壁際-1 3/4	口径17.2器高3.9	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。摘みは環状摘みで貼付け。厚手の作り。	
F 51	180 143	須恵器 蓋	中央部東寄り+5 7/8	口径17.2器高3.7	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。摘みはボタン状摘みで貼付け。内外面の重ね焼き痕。	
F 52	180 143	須恵器 杯	南壁際+8 口縁一部欠	口径12.8底径6.5 器高3.4	細砂粒/還元焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部外面に「一」の墨書。	
F 53	180 143	須恵器 杯	カマド前+2 口縁一部欠	口径13.0底径7.3 器高3.3	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。見込み部磨滅。	
F 54	180 143	須恵器 杯	カマド前+1 口縁一部欠	口径12.8底径6.5 器高3.2	細砂粒・粗砂粒/還元焰 /灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。口縁部外面に吸炭。	
F 55	180	須恵器 椀	南壁際+3 1/2	口径15.8底径10.0 器高6.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転ヘラ削り後の付高台。体部外面に「田」の墨書。	
F 56	181	土師器 台付甕	南壁際+3 胴部下位~底部	台11.2	細砂粒・雲母/良好/ にぶい赤褐	胴部下半の外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。脚部は貼付け。胴部内面にハゼ。	
F 57	181 143	土師器 台付甕	カマド内+1 口縁~胴部 3/4・底部欠	口径13.8底径4.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。肩部外面は撫で。胴部下半は縦のヘラ削り。内面は撫で。胴部内面下半は剥離顕著。	
F 58	181 143	砥石 切り砥石	中央部-1	長(6.7)幅4.2 厚5.8重239.3	砥沢石	四面使用。両側面の使用頻度は低く、整形痕が残る。下端・小口部は粗い磨き整形。	
F 59	181 143	磨石? 扁平円礫	南部+6	長11.7幅11.1 厚4.1重824.1	粗粒輝石安山岩	表裏面とも部分的に黒く光沢を帯び、弱く摩耗しているように見える。被熱痕跡なし。石材が細粒質。	
F 60	181 143	鉄製品 刀子	中央部+3 茎部一部欠	長14.4幅1.3 厚3.5重15.8		椀区、刃区芝に残存は良好である。刃部は研ぎ減りでやや湾曲ぎみで短くなっている	

番号	挿図 P L	種 類 種 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
F区7・8住居							
F 61	181	土師器 杯	7住南外・8住 一括 1/4	口径12.4底径7.9 器高3.3	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部外面に指の押さえ。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 62	181	土師器 甕	7住南壁際・8住 一括 口縁～胴部	口径13.0	細砂粒・雲母/良好/赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
F区8住居							
F 63	181	土師器 杯	一括 口縁～体部	口径12.0	細砂粒・輝石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 64	181	土師器 杯	北部+7 1/3	口径12.8器高3.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。内外面の一部に吸炭。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 65	181	土師器 杯	南東隅寄り+36 口縁～体部	口径12.0	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
F 66	181	土師器 杯	南壁寄り+1 1/4	口径13.1	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 67	181	土師器 杯	西部+47 口縁～体部	口径12.7	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 68	181	土師器 杯	東部+25 口縁～体部	口径11.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 69	181	土師器 杯	東壁際+49 1/4	口径12.8器高4.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 70	181	土師器 杯	一括 口縁～底部	口径11.6	細砂粒/良好/灰褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 71	181	土師器 皿	東壁際+53 口縁～体部	口径13.9	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に粗い撫での部分を残す。内面は撫で。内外面磨滅。	
F 72	181	土師器 杯	P6内+32 口縁～体部	口径12.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
F 73	181	土師器 皿	北西部+32 口縁～体部	口径14.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、磨滅している。	
F 74	181	土師器 皿	一括 口縁～体部	口径14.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間にわずかに撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 75	181	土師器 杯	一括 1/4	口径12.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、外縁はほとんど見られない。内面は撫で。	
F 76	181	土師器 皿	西部+15 口縁～体部	口径13.8器高3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に粗い撫での部分が見られる。内面は撫で。磨滅顕著。	
F 77	181 144	土師器 皿	一括 2/3	口径16.0器高3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 78	181 144	土師器 皿	一括 2/3	口径15.8	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
F 79	181	土師器 皿	南壁際+5 3/5	口径15.9	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 80	181	土師器 皿	一括 口縁～体部	口径14.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。間に僅かに撫での部分を残す。内面は撫で。	
F 81	181	土師器 杯	西部+50 口縁～体部	口径16.9	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、磨滅。	
F 82	181 144	土師器 杯	東壁際+6 口縁一部欠	口径14.3器高4.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
F 83	181	土師器 杯	中央部北東寄り +50 1/3	口径16.4器高5.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。内外面の器面磨滅。	
F 84	181	土師器 鉢	南壁寄り+20 1/4	口径17.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
F 85	181	須恵器 杯	西部+48 1/4	口径10.6底径4.0 器高3.3	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ起こし後の回転ヘラ削りと考えられる。体部外面の部分的に回転ヘラ削り。	
F 86	181	土師器 浅鉢	西部+4 口縁～胴部片	口径17.6	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、煤付着。	
F 87	181	須恵器 蓋	中央部東寄り+49 摘部～体部	摘径3.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 褐灰	ロクロ整形(左回転か)。摘みは環状摘みで、天井部外面の回転ヘラ削り後の貼付。	
F 88	181	土師器 甕	中央部東寄り+48 口縁～胴部	口径17.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
F 89	181	土師器 甕	北部+6 口縁～胴部片	口径23.6	細砂粒・粗砂粒・軽石・角 閃石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
F 90	181	土師器 甕	北西部+3 口縁～胴部片	口径16.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で。ハゼ顕著。	
F 91	182	土師器 甕	一括 口縁～胴部片	口径23.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、磨滅。	
F 92	182	土師器 甕	北部+3 口縁～胴部片	口径24.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。粗れ顕著。	
F 93	182 144	鉄製品 刀子	中央部+6 茎部	長4.3幅0.6 厚0.2重1.9		茎部だけが残存。	
F 94	182 144	鉄製品 刀子	P3内+38	長7.9幅1.6 厚0.4重9.1		茎部と切先を欠損する。棟区の残存は良好で刃区は判然としない。残存する刃部は湾曲しており研ぎ減りが著しい。	
F区1溝							
F 95	182	須恵器 甕	西部掘立寄り+6 頸部片	—	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形。肩部外面に厚く自然釉。	
F 96	182	須恵器 甕	西部掘立寄り+3 胴部～底部片	—	細砂粒/還元焰/浅黄橙	外面は方向を変えて平行叩きをすることで格子状。内面の当て具は青海波文。	
F区2溝							
F 97	182	須恵器 杯	北部 底部片	底径5.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。内外面にわずかに自然釉。	
F区3溝							
F 98	182 144	鉄製品 釘か	埋没土	長3.5幅0.6 厚5.5重3.1		両端を欠損するが先細りが見られることから先端に近い部位と見られる。	
G区1住							
G 1	182 144	土師器 杯	東部+37 完形	口径12.5器高5.5	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G 2	182 144	土師器 杯	南壁際+38 口縁一部欠	口径12.5器高5.1	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。口唇部に凹線が巡る。底部中央磨減。	
G 3	182	土師器 台付甕	北東部-4 台部	高台径8.6	細砂粒/良好/明赤褐	脚部は丁寧な貼付け。	
G 4	182 144	土師器 甕	貯蔵穴+46 口縁一部欠	口径17.8底径8.0 器高19.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。体部外面は縦のヘラ撫で。内面は斜めのヘラ撫で。	
G 5	182	土師器 甕	南壁寄り+5 胴部～底部	口径5.6	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙	胴部外面は斜めのヘラ削り。底部はヘラ削り。内面は撫で。胴部に褐色の付着物。底部内面のハゼ顕著。	
G 6	182	土師器 甕	南部+3 口縁～胴部	口径17.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で。	
G 7	182	土師器 甕	カマド内+1 頸部～胴部	—	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は撫で、下半は斜めのヘラ削り。黒斑と被熱による変色。内面は斜めのヘラ撫で、輪積み痕。	
G 8	182 144	土師器 甕	カマド内+5 口縁一部欠	口径17.9底径6.8 器高23.1	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面上半は縦、下半は横から斜めのヘラ撫で。内面は撫で、ハゼ顕著。	
G 9	182 144	土師器 甕	カマド内+6 胴部1/2欠	口径17.7底径6.7 器高22.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は縦から斜めのヘラ撫で、下半は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、輪積み痕。底部はヘラ削り。	
G 10	183 144	土師器 甕	南部+1 4/5	口径17.4底径6.0 器高33.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めの撫で。下位に接合痕。	
G 11	183 144	土師器 甕	カマド内+5 胴・底部一部欠	口径18.8底径5.8 器高37.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は縦、下半は斜めのヘラ削り。内面は撫で。下半のハゼ顕著。	

G区2住居

G 12	183 144	土師器 杯	カマド内0 完形	口径13.2器高4.9	細砂粒/良好/赤褐	内斜口縁の杯で口縁部は横撫で。底部は雑な撫で。内面は丁寧な撫で後、斜放射状のシャープなヘラ磨き。細かなハゼ。	
G 13	183 144	土師器 杯	貯蔵穴+9 2/3	口径13.1器高4.8	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で後、ヘラ磨き。内面は撫で。内外面剥離。	
G 14	183 144	土師器 杯	カマド内+1 完形	口径12.4器高5.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙	シャープな作りで口縁部は横撫で、口唇部には凹線が巡る。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 15	183 144	土師器 杯	カマド内+16 完形	口径12.4器高5.1	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。口唇部には凹線が巡る。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 16	183 144	土師器 杯	北部-2 口縁一部欠	口径11.6高5.7	細砂粒・粗砂粒・石英/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で。内面は撫で。口縁部外面から底部の一部漆塗りか。	
G 17	183 144	土師器 杯	中央部西寄り+1 口縁一部欠	口径11.8器高6.2	細砂粒・軽石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。底部は撫で後、ヘラ磨き。外面漆塗りか。内面は撫で、剥離。	
G 18	183 144	土師器 鉢	カマド内-3 口縁一部欠	口径9.3底径7.4 器高6.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は雑な横撫で、体部外面から底部は撫で。煤付着、剥離。内面は撫でで上半はヘラ削り。	
G 19	183 144	土師器 有孔鉢	カマド右袖+11 口縁欠損	口径13.2底径4.9 器高11.4	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面は撫で後、縦のヘラ磨き。下半に黒斑。内面は撫で後、縦の雑なヘラ磨き。灰色付着物。	
G 20	183 144	土師器 鉢	カマド内+9 底部欠損	口径11.8	細砂粒・角閃石・軽石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で後、ヘラ磨き。内面は撫で、ハゼ。	
G 21	183	土師器 甕	南壁際+9 口縁～胴部片	口径11.0	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	厚手でやや雑な作り。口縁部は横撫で。胴部外面は撫で後、ヘラ磨き。内面はヘラ撫で。	
G 22	183	土師器 甕	カマド右袖-2 口縁～胴部片	口径14.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	
G 23	183 144	土師器 甕	カマド右袖-2 口縁一部欠	口径12.0底径6.4 器高14.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/明赤褐	厚手で雑な作り。口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。底部はヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	
G 24	183 144	土師器 甕	カマド前+6 口縁～体部	口径12.0	細砂粒・軽石/良好/褐灰	雑で厚手の作り。口縁部は横撫で。胴部外面は縦の撫で後、ヘラ磨き。内面は縦の撫で後、雑なヘラ磨き。	
G 25	183	土師器 甕	南壁寄り-1 胴部～底部	底径5.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
G 26	183 145	土師器 甕	カマド内-3 口縁一部欠損	口径18.1底径8.1 器高26.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ撫で。内面は雑なヘラ撫で。頸部外面から胴部下端に黒斑。	
G 27	183	土師器 甕	南壁際+9 口縁～胴部上	口径25.0	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。頸部内面に煤付着。	
G 28	183 145	土師器 甕	カマド内+7 口縁一部欠	口径19.0底径6.0 器高34.1	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明黄褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。胴部内面下位に接合痕。	

G区3住居

G 29	184	土師器 杯	南東隅+10 2/3	口径11.2器高5.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、ハゼ。	
G 30	184	土師器 杯	東壁際+10 口縁～底部	口径12.0	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で、口唇部は平坦。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内面は粗れ、外面は剥離顕著。	
G 31	184 145	土師器 甕	カマド前+5 完形	口径24.0孔8.7 器高31.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で後、下半に縦のヘラ撫で。内面に輪積み痕、接合痕。	
G 32	184	土師器 甕	北東隅寄り+2 2/3	口径12.6底径7.1 器高16.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ 黒褐	口縁部は横撫で。胴部外面はヘラ磨き。平面に煤付着。内面は横のヘラ撫で。上位に輪積み痕。	
G 33	184	土師器 甕	南東隅0 口縁部	口径17.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
G 34	184	土師器 甕	南部+2 口縁部片	口径20.1	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。肩部は横のヘラ削り。	
G 35	184	土師器 甕	北部+14 口縁部	口径16.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で、中に段を有する。口唇部磨減。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で、ハゼ顕著。	
G 36	184	土師器 甕	東壁際-1 口縁～胴部	口径15.4	細砂粒・雲母/良好/ にぶい黄橙	口縁部から胴部外面は撫で後、ヘラ磨き。内面は撫で、ハゼ顕著。	
G 37	184 145	底石 扁平垂角礫	一括	長6.7幅6.1 厚2.3重88.4	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面に縦位の浅い刃ならし傷が残る。礫は黒く煤けて、被熱している。	

G区5住居

G 38	184 145	土師器 杯	北東隅寄り+14 完形	口径13.6器高4.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で、褐色付着物。	
G 39	184 145	土師器 杯	北東隅寄り+10 完形	口径13.2器高3.9	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G 40	184 145	土師器 杯	北西隅寄り+9 完形	口径12.5器高3.6	細砂粒・軽石/良好/褐灰	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間にわずかに撫での部分を残す。内面は撫で。	
G 41	184 145	土師器 杯	北東隅寄り+8 体部一部欠	口径12.8器高3.9	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G 42	184 145	土師器 甕?	北部+3 完形	口径14.7底径7.5 器高13.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横、胴部は斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で。	

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G 43	184	土師器 甕	貯蔵穴+5 口縁~胴部片	口径21.7	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
G 44	184	土師器 甕	貯蔵穴+5 胴部下半~底部	底径5.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄褐	胴部外面は斜めのヘラ削り。底部もヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、 接合痕。	
G 45	184	須恵器 長頸壺	南部+18 肩部	—	細砂粒・小礫/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。肩部の粘土板の貼付痕明瞭。	
G 46	185 145	土師器 甕	西部-3 口縁一部欠	口径19.7底径5.4 器高28.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めの撫で。胴部 外面は口縁部から底部まで帯状に吸炭(黒斑か)。口縁部外面及び胴部 内面に輪積み痕。	

G区6住居

G 47	185	土師器 杯	一括 口縁部片	口径13.0	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横撫で。口唇部内面には凹線を巡らす。底部は手持ちヘラ削り。 内面は丁寧な撫で。	
G 48	185	須恵器 杯	一括 底部片	底部10.0	細砂粒/還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ起こし無調整。	
G 49	185	須恵器 瓶	南壁際+7 胴部片	—	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。胴部下半にヘラ削り。	
G 50	185	須恵器 長頸壺	一括 口縁~胴部	口径12.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	
G 51	185	土師器 甕	一括 口縁部片	口径27.0	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部は横のヘラ削り。雑な作り。	
G 52	185 145	鉄製品 刀子	一括 完形	長12.3幅1.1 厚0.6重7.7		完形の刀子で口金が残存しているが柄の木質は茎部端部にわずかに認 められた。棟区は直角、刃区は傾斜しているものと考えられる。刃部 の研ぎ減りはあまり顕著ではない。	
G 53	185 145	鉄製品 鋤先	西壁際	長20.6幅10.8 厚0.6重189.0		側面が残存したもので刃部は欠損する。装着部断面はY字形を呈し、刃 部は鉄板を折り曲げて形成している事がわかる。	

G区7住居

G 54	185 146	土師器 杯	カマド内+2 完形	口径11.2器高4.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
G 55	185 146	土師器 杯	カマド前0 完形	口径12.3器高3.1	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、磨滅。	
G 56	185 146	土師器 杯	北部+11 1/2	口径13.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。 内面は撫で。	
G 57	185	土師器 杯	南西隅寄り+14 口縁~体部	口径13.3	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。下外面に輪積み痕。底部は手持ちヘラ削りで、間に 撫での部分を残す。内面は撫で。	
G 58	185 146	土師器 鉢	南壁寄り+6 口縁~体部	口径19.2底径7.8 器高13.6	細砂粒・軽石・雲母/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部上半は縦・下半は斜めのヘラ削り。底部はヘラ 削り。内面剥離。	
G 59	185 146	土師器 有孔鉢	貯蔵穴+22 口縁一部欠	口径20.2底径4.5 器高13.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面は斜めのヘラ削り。内面は縦のヘラ撫で。	
G 60	185 146	須恵器 蓋	一括 1/3	口径14.8摘5.0 器高3.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。摘みは環状摘みで、 天井部に渦状の切り込みを入れた後の貼付け。	
G 61	185	須恵器 杯	一括 1/2	口径13.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(左回転か)。体部下端及び底部は回転ヘラ削り。体部外面 及び底部に自然釉顕著。	
G 62	186	土師器 甕	南東隅+50 口縁~胴部	口径13.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面はヘラ削り、磨滅。内面は撫で、爪痕。	
G 63	186	土師器 甕	一括 口縁~胴部	口径13.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面はヘラ撫で。外面粗れ。 頸部内面に輪積み痕。	
G 64	186	須恵器 長頸壺	P1内+34 台部	底径8.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。胴部下端は回転ヘラ削り。高台は付高台で、端 部に凹線が巡る。底部内面磨滅。	
G 65	186	須恵器 瓶	中央西寄り+16 頸部~肩部	—	細砂粒/還元焰/灰オリーブ	内外面はロクロの撫で。	
G 66	186	須恵器 瓶	一括 胴部	—	細砂粒/還元焰/灰	内外面はロクロの撫で。胴部下端は回転ヘラ削り。	
G 67	186 146	土師器 甕	東部-2 胴部一部欠	口径20.0底径4.7 器高25.2	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦、下端は横のヘラ削り。内面は横の撫で、 下半に黒色の付着物。	
G 68	186	土師器 甕	カマド内+4 1/2	口径25.6底径3.5 器高41.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は 斜めのヘラ撫で。	
G 69	186 146	土師器 甕	カマド内+4 口縁~胴下部	口径21.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部下半は斜めのヘラ削り。内面は 横のヘラ撫で。口縁部外面、胴部内面に輪積み痕。下位に接合痕。	
G 70	186 146	土師器 甕	東部-4 3/4	口径18.2底径4.6 器高27.9	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横の撫で、ハゼ。 外面磨滅。	
G 71	186	須恵器 甕	カマド一括 胴部	—	細砂粒/還元焰/灰白	外面に平行沈線と5本単位のクシ描き波状文、自然釉。	
G 72	186 146	砥石 切り砥石	東部0	長(10.2)幅4.8 厚3.6重228.3	砥沢石	四面使用。表裏面とも研ぎ減り、糸巻状の断面形状を呈する。右側面 に刃らし傷がある。被熱破損か。	

G区8住居

G 73	186 146	土師器 杯	一括 底部片	—	細砂粒/良好/にぶい赤褐	体部外面は手持ちヘラ削り。墨書、文字不明。	
G 74	186	土師器 杯	東壁寄り+12 口縁~体部	口径11.6器高3.5	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 75	186	土師器 杯	東壁寄り+13 口縁~体部	口径18.8	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
G 76	186	土師器 皿	カマド内+7 口縁~体部	口径16.8	細砂粒・輝石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 77	186	須恵器 杯	一括 底部片	底径11.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転ヘラ削り後の削り出し高台。底 部の切り離しは不明。	
G 78	186	須恵器 長頸壺	一括 肩部片	—	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。肩部の破片で、沈線間に13本単位のクシ状工具の刺突	
G 79	186 146	敲石 棒状礫	東壁寄り-6	長11.7幅5.4 厚3.6重300.9	珪質頁岩	小口部両端および左側面に敲打痕がある。先端が右側に振れる。	

G区9住居

G 80	187	須恵器 蓋	カマド-11 1/2	口径15.6器高2.5	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転糸切り後、周辺を回転ヘラ削り。 摘み添付の痕跡はないが蓋と考えられる。	
G 81	187	須恵器 杯	中央部西寄り+4 底部片	底径6.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G 82	187	須恵器 椀	北部+28 底部	—	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。高台は貼付部から剥離。	
G 83	187 146	須恵器 椀	カマド内-4 口縁一部欠	口径15.8底径8.9 器高6.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転ヘラ起こし後の付高台。	
G 84	187 146	土師器 甗	カマド内+2 口縁~胴部	口径18.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横、胴部は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、下位に接合痕。	
G 85	187	土師器 甗	カマド内+3 口縁~胴部	口径18.8	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
G 86	187	土師器 甗	カマド内+3 口縁~胴部	口径18.8	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で、磨滅。	
G区10住居							
G 87	187	黒色土器 杯	南壁寄り+5 1/2	口径12.0底径5.8 器高3.7	細砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。内面は丁寧なヘラ磨き後、黒色処理。	
G 88	187	須恵器 杯	南西隅+1 1/3	口径12.1底径5.1 器高4.2	細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。内面剥離。内外面燻し。	
G 89	187	黒色土器 椀	南壁寄り+1 底部2/3	—	細砂粒/酸化焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転か)。内面は丁寧なヘラ磨き後、黒色処理。高台は底部回転系切り後の付高台。	
G 90	187	黒色土器 蓋	一括 口縁片	口径16.0	細砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(回転方向不明)。内面は丁寧なヘラ磨き後、黒色処理。口縁部外面に吸炭。	
G 91	187 146	砥石 多面砥石	カマド内-9	長(22.3)幅13.2 厚14.9重4423.2	粗粒輝石安山岩	背面・側面に漏斗状の凹部、裏面に浅い凹部がある。各面とも研ぎ減が著しい。小口部に刃ならし傷。	
G区11住居							
G 92	187	須恵器 杯	一括 底部片	底径8.0	細砂粒/還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	
G 93	187	須恵器 椀	中央部+14 底部~体部片	底径7.5 高台径7.0	細砂粒/還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。高台は三日月高台状で、底部回転系切り後の付高台。	
G 94	187	須恵器 椀	一括 1/3	口径14.4底径7.0 器高5.0	細砂粒・粗砂粒/酸化焰/ 灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。外面吸炭。	
G 95	187 146	須恵器 椀	カマド左袖+9 高台部欠損	口径13.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台で、貼付け部から剥離。	
G 96	187	土師器 台付甗	貯蔵穴-9 脚部	台径8.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。内面はヘラ撫で。脚部は丁寧な貼付け	
G 97	187 146	須恵器 椀	東壁際+11 口縁・高台部欠	—	細砂粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台で、貼付け部から剥離。内外面にハゼ。外面の剥離顕著。	
G 98	187	土師器 甗	中央部南寄り+7 口縁~肩部	口径18.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横のヘラ削り。内面は撫で。	
G 99	187 146	土師器 甗	カマド左袖+9 口縁~胴部	口径19.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
G 100	187	土師器 甗	中央部南寄り-34 口縁部片	口径19.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。肩部は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で	
G 101	187	土師器 甗	貯蔵穴-9 底部	底径4.0	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。底部もヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
G区12住居							
G 102	188	土師器 杯	一括 口縁~体部	口径11.2	細砂粒・雲母/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 103	188 147	土師器 杯	カマド内+1 3/4	口径12.1底径8.4 器高3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。口縁部から体部外面に「丁」の墨書。	
G 104	188	土師器 杯	カマド前+15 口縁~体部片	口径12.8底径6.8 器高3.9	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	
G 105	188 147	土師器 杯	北壁際+10 口縁~体部	口径12.1底径8.7 器高3.2	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。口縁部から体部外面に墨書、文字不明。	
G 106	188 147	土師器 杯	カマド内+17 口縁~体部	口径11.5底径8.2 器高3.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面に指押さえの痕跡。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 107	188 147	土師器 杯	一括 胴部~底部	—	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部外面も撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内面に墨書「十」か。	
G 108	188	須恵器 杯	掘方一括 口縁部片	口径12.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	
G 109	188	須恵器 杯	一括 口縁~体部片	口径12.8	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。	
G 110	188 147	須恵器 杯	一括 口縁一部欠	口径12.2底径6.2 器高3.3	細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	
G 111	188 147	須恵器 杯	カマド内+15 2/3	口径13.2底径6.6 器高3.6	細砂粒・粗砂粒/酸化焰/ 明黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	
G 112	188	須恵器 杯	中央部東寄り+21 2/3	口径12.0底径6.4 器高3.5	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	
G 113	188 147	須恵器 杯	西部+7 口縁2/3欠	口径13.2底径6.6 器高3.7	細砂粒/酸化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。	
G 114	188 147	須恵器 杯	中央部+11 2/3	口径13.0底径7.0 器高3.8	細砂粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。体部外面に墨書、文字不明。	
G 115	188 147	須恵器 杯	貯蔵穴+23 口縁~体部	口径13.0底径6.1 器高4.0	細砂粒・粗砂粒/酸化焰/ にぶい赤褐	ロクロ整形(右回転)。口縁部のみ還元きみ。	
G 116	188	須恵器 椀	中央部+6 1/2	口径15.2底径8.6 器高6.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台。見込み部磨滅。	
G 117	188	灰釉陶器 椀	貯蔵穴+12 1/3	口径17.4底径9.3 器高4.9高台径8.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。体部下端は回転ヘラ削り。高台は角高台で、底部回転ヘラ削り後の付高台。施釉は内面のみハケ掛け。	猿投
G 118	188 147	土師器 甗	中央部北寄り+6 口縁~胴上位	口径19.8	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面上半は横から斜めのヘラ削り。中位に帯状に煤付着。下半は斜めのヘラ削り、粘土付着。内面は斜めのヘラ撫で、接合痕。	
G 119	188	砥石 切り砥石	東壁周溝内+12	長(7.5)幅5.3 厚1.5重73.8	砥沢石	四面使用。表裏面とも研ぎ減る。砥石としては薄く、使用の際の管理は行き届いている。	
G区13住居							
G 120	188	土師器 杯	カマド前+8 口縁~底部	口径12.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部も撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 121	188 147	須恵器 杯	南壁寄り+3 口縁一部欠	口径13.0底径8.3 器高3.8	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り無調整。見込み部磨滅。	
G 122	188	土師器 甗	一括 口縁部	口径18.8	細砂粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面はヘラ撫で	

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
G 123	188	土師器 甕	カマド内+10 口縁部片	口径19.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。肩部は斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
G区14住居							
G 124	188	土師器 杯	南壁際+20 2/3	口径12.8	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
G 125	188 147	土師器 杯	南東隅+23 完形	口径12.6器高3.4	細砂粒・雲母/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G 126	188	土師器 杯	南壁際+29 口縁～体部片	口径12.8	細砂粒・輝石/良好/ にぶい黄褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間は雑な撫で。内面は丁寧な撫で。	
G 127	188	土師器 杯	一括 2/3	口径12.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G 128	188	土師器 杯	南東隅+19 1/5	口径12.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
G 129	188 147	土師器 杯	南東隅+18 1/4	口径13.4底径7.2 器高3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。口縁部外面に「大」の墨書。	
G 130	188	土師器 杯	カマド右袖+4 1/3	口径13.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で、底部との境に沈線を1条巡らせる。底部は手持ちヘラ削りで、口縁部との間に雑な撫での部分を残す。	
G 131	188 147	須恵器 蓋	南壁際+28 口縁一部欠	口径18.5底径4.2 器高3.3	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面に回転ヘラ削り。摘みは環状摘みで貼付け。	
G 132	188 147	須恵器 蓋(転用碗)	南壁際+18 口縁一部欠	口径14.8直径4.7 器高3.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。摘みは環状摘みで貼付け。内面を視面として使用。隅の残存なし。	
G 133	189	須恵器 杯	南壁際+29 2/3	口径13.9底径8.0 器高3.6	細砂粒/還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、周辺を回転ヘラ削り。底部半面黒斑状。	
G 134	189 147	須恵器 杯	中央部+4 口縁一部欠	口径13.7底径7.3 器高4.2	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部下端は回転ヘラ削り。内外面一部酸化。	
G 135	189 147	須恵器 杯	南壁際+21 口縁一部欠	口径12.5底径8.2 器高3.4	細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ起こし無調整。	
G 136	189	須恵器 杯	東壁寄り+27 1/2	口径14.2底径8.5 器高4.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ起こし無調整。	
G 137	189	須恵器 杯	南壁際+24 口縁～底部片	口径12.8器高3.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部及び体部下端は回転ヘラ削り。口唇部内面に自然釉。	
G 138	189 147	砥石 切り砥石	南壁周溝内+14	長12.4幅7.1 厚4.0重380.3	砥沢石	四面使用。背面側と右側面が著しく研ぎ減る。その他、小口部下端が砥面として使用されている。	
G区15住居							
G 139	189	土師器 杯	東壁際+9 1/3	口径11.4器高2.5	細砂粒・輝石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。内外面に煤付着。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で、ハゼ顕著。	
G 140	189	土師器 杯	南西隅+16 2/3	口径11.9器高3.4	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。器面に磨減なし。	
G 141	189 147	須恵器 椀	南東隅+3 口縁1/4	口径14.3底径7.2 器高6.0	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、端部に凹線状窪み。	
G 142	189	土師器 甕	西壁寄り+20 口縁1/3	口径20.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
G区1溝							
G 143	147	砥石	G区北東基準杭 付近	長32.2幅22.0 厚16.2重20500.0	粗粒輝石安山岩	角柱状を呈し、表裏面とも平坦面がある。平坦面は光沢を帯びており、ここでは礫砥石と捉えた。	
H区1住居							
H 1	189	土師器 杯	P 4内+13 1/3	口径13.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
H 2	189	土師器 杯	P 4内+20 口縁部片	口径15.9	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で。内面は撫で。外縁はシャープさを欠く。	
H 3	189 147	土師器 高杯	P 4内-2 坏部	口径11.8	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。体部周辺は手持ちヘラ削り。内面は撫で。坏部側に脚との接合のためのソケット残存。	
H 4	189	土師器 高杯	一括 脚部/2	底径10.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	外面は撫で。内面はヘラ削り。	
H 5	189	土師器 甕	東壁寄り-1 底部片	底径4.2	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	胴部外面は撫で。底部はヘラ削り。内面はヘラ撫で。外面剥離。	
H 6	189	土師器 甕	P 4内+20 口縁部片	口径18.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明黄褐	口縁部は横撫で、内面に煤付着。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は横撫で。	
H区2住居							
H 7	189	土師器 杯	P 3一括 1/4	口径13.0	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
H 8	189 147	土師器 杯	東部+1 4/5	口径11.6器高3.9	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は指の押さえ。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
H 9	189	須恵器 蓋	北西部+22 口縁～体部	口径15.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(左回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。摘みは欠損するが回転糸切り後の貼付。外面に坏の重ね焼き痕。	
H 10	189 147	須恵器 杯	南東隅+7 口縁一部欠	口径12.2底径6.5 器高3.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部内外面とも手ずれによる磨減か。	
H 11	189 147	須恵器 杯	南東隅+11 口縁一部欠	口径12.4底径6.4 器高4.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H 12	189 147	須恵器 杯	東部+3 4/5	口径13.6底径7.0 器高4.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H 13	189 147	須恵器 杯(転用碗)	南東隅+24 高台部欠	口径15.2底径9.8 器高5.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転ヘラ削り後の付高台で、貼付け部から剥離。見込み部を視面として使用。	
H 14	189	須恵器 杯	P 3一括 口縁～底部	口径12.7底径6.6 器高3.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。口唇部内面に凹線状の窪みが巡る。	
H 15	189 147	須恵器 杯	中央西寄り+6 1/2	口径11.8底径5.4 器高3.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	胎土E-48・ H-15と共通
H 16	189 147	須恵器 杯	南東隅0 完形	口径12.7底径7.0 器高3.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H 17	190	土師器 甕	カマド一括 口縁片	口径19.0	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
H 18	190	土師器 甕	東部+7 口縁部片	口径20.0	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。肩部外面は横のヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
H 19	190	土師器 甕	東部+6 口縁～胴部片	口径20.6	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、粘土付着。内面は横のヘラ撫で。	
H 20	190	土師器 甕	カマド一括 口縁～胴部	口径18.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は斜め。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H21	190	土師器 甕	カマド一括 口縁～胴部	口径21.2	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、接合痕。	
H22	190 147	土師器 甕	東部0 2/3	口径20.4底径3.8 器高28.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、煤付着。底部もヘラ削り。内面はヘラ撫で、接合痕。	
H23	190	須恵器 甕	南東隅+7 胴部片	—	細砂粒・粗砂粒/還元焰/ 灰オリーブ	叩き整形。外面は平行叩き。内面の当て具は素文。	
H24	191	須恵器 甕	南東隅+8 胴部片	—	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 還元焰/灰オリーブ	叩き整形。外面は平行叩き。内面の当て具は素文。	
H区3住居							
H25	191	土師器 杯	南西隅寄り+2 口縁～底部	口径12.8	細砂粒・石英/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
H26	191 147	土師器 杯	南東隅寄り0 完形	口径12.6器高4.0	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りに間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
H27	191 147	土師器 杯	南東隅寄り+3 4/5	口径12.6器高3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りに間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
H28	191 147	須恵器 蓋	南西隅寄り+3 一部欠	口径19.7摘7.4 器高4.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰 器高4.4	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は回転ヘラ削り。摘みは環状摘みで貼付け。外面位薄く自然釉。	
H29	191 147	土師器 甕	南西隅寄り-2 2/3	口径11.9底径5.3 器高11.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で、ハゼ。	
H30	191	土師器 甕	南西隅寄り+28 胴部～底部	口径6.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	胴部外面は縦のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で、ハゼ。	
H31	191 147	砥石 切り砥石	東壁際+2	長8.2幅5.3 厚2.2重103.1	砥沢石	四面使用。上端側欠損後孔を穿つ。背面側著しく研ぎ減る。裏面側は整形痕が著しい。	
H区7住居							
H32	191	須恵器 杯	西壁寄り+21 口縁～底部片	口径13.0底径6.8 器高3.0	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
H33	191 147	砥石 切り砥石	東壁寄り+3	長4.1幅3.8 厚1.6重36.6	砥沢石	四面使用。小口部は粗く磨き整形。薄く平坦で、機能部管理は行き届いている。被熱剥落。	
H区8住居							
H34	191 148	土師器 杯	南西隅寄り-2 口縁一部欠	口径12.4器高5.2	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で後手持ちヘラ削り、黒斑。内面は撫で後斜放射状ヘラ磨き。内外面に帯状に煤付着。	
H35	191 148	土師器 杯	北壁際+12 口縁一部欠	口径13.4器高5.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で後手持ちヘラ削り。内面は撫で後斜放射状ヘラ磨き。	
H36	191 148	土師器 杯	南西隅+5 口縁一部欠	口径13.5器高5.2	細砂粒・角閃石/良好/ 赤褐	シャープな作りで、口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で。内面は丁寧な撫で、斜放射状に密なヘラ磨き、黒斑。	
H37	191 148	須恵器 高杯	中央部+5 一部欠	口径17.3底径10.6 器高12.2	細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(左回転)。外稜は二段でシャープな作り。体部にクシ描き波状文と沈線。1カ所に把手を貼付。脚部は四方の1段透かし。内外面に薄く自然釉。内面に発砲したガラス質の塊が融着。	
H38	191 148	土師器 鉢	カマド内+7 1/2	口径13.8底径5.9 器高10.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦の雑な撫で。内面は横の撫で。底部に窪み。	
H39	191 148	土師器 甕	南壁寄り0 2/3	口径18.4底径8.5 器高20.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は縦の撫で、下半は縦のヘラ削り。黒斑。内面は雑な横のヘラ撫で後、下半に雑なヘラ磨き。	
H40	191 148	土師器 甕	西部-1 2/3	口径15.3底径6.0 器高20.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で後、下半に縦のヘラ撫で。胴部内面は撫で。上位に輪積み痕。下位に接合痕明瞭。	
H41	191 148	土師器 甕	南西隅寄り0 完形	口径13.0底径6.6 器高17.1	細砂粒・軽石/良好/ にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は撫で、下半は斜めのヘラ撫で。胴部内面は撫で、下端に接合痕。	
H42	192	土師器 甕	北部+9 口縁～肩部	口径16.2	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦の木口状工具によるヘラ撫で。内面も別工具による横のヘラ撫で、輪積み痕。	
H43	192	土師器 甕	中央部西寄り-2 口縁～胴部	口径18.2	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫でで有段。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
H44	192 148	土師器 甕	南西隅寄り-2 完形	口径17.6底径7.2 器高30.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ撫で。内面は横のヘラ撫で、ハゼ顕著。	
H45	192	土師器 甕	西部0 口縁～胴部	口径17.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部に稜を有する。内外面に共に器面が摩滅し整形不明。胴部内面に輪積み痕。	
H46	192	土師器 鉢	カマド+15 口縁～胴上位	口径16.9	細砂粒・粗砂粒・輝石・ 軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ撫で。内面も横のヘラ撫で、輪積み痕。	
H区9住居							
H47	192 148	土師器 杯	南東隅+4 2/3	口径11.5底径9.0 器高3.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部は雑な撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
H48	192 148	須恵器 杯	南部+1 口縁一部欠	口径12.4底径6.6 器高3.5	細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。見込み部やや磨滅。	
H49	192	須恵器 杯	南東隅+16 口縁～体部	口径15.6	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	
H50	192 148	須恵器 杯	一括 口縁～体部	口径14.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	
H51	192	土師器 甕	一括 胴部～底部	底径3.6	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り、煤付着。内面はヘラ撫で。わずかにハゼ。	
H52	192	土師器 甕	東壁際+2 胴部～底部	底径5.0	細砂粒/良好/にぶい黄褐	胴部外面は縦のヘラ削り、煤付着。内面はヘラ撫で。	
H53	192	土師器 甕	一括 口縁～胴上位	口径18.2	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で。口縁部外面及び頸部内面に輪積み痕。	
H54	192	土師器 甕	東壁寄り+4 口縁部	口径19.2	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。外面に輪積み痕。肩部外面は横のヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	
H55	192	土師器 台付甕	南壁寄り+2 胴下位	—	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り、煤付着。内面はヘラ撫で、接合痕。脚部は接合部から剥離。	
H56	192	土師器 甕	東壁際+3 胴部～底部	底径4.3	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り。底部はヘラ削り、下端側面に炭化物付着。内面は撫で。	
H57	192 148	土師器 甕	中央部+2 口縁～胴部	口径19.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。肩部外面は横、胴部下半は斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で、接合痕。	
H区10住居							
H58	193 148	土師器 杯	カマド内+2 4/5	口径11.2器高5.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で。内面は丁寧な撫で後、斜放射状ヘラ磨き。	
H59	193 148	土師器 杯	南壁寄り+1 2/3	口径13.6器高6.5	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で、口唇部には凹線が巡る。底部はヘラ磨き。内面は撫で。	
H60	193 148	土師器 鉢	南壁寄り+2 完形	口径14.3器高8.3	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。内面にハゼ。	

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H61	193	土師器 壺	南部+11 底部1/2	底径5.2	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面下端は横のへら撫で。底部上げ底状。内面の粗れ顕著。	
H62	193	土師器 壺	カマド内+3 胴部～底部2/3	底径8.4	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	胴部外面上半は斜めのへら削り、下半は斜めのへら撫で。下端に黒斑。内面は横のへら撫で、下半に接合痕。	
H63	193 148	土師器 甕	カマド内+2 口縁～胴部	口径19.1	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横から縦のへら撫で、上位に黒斑。内面は斜めのへら撫で。	
H64	193 148	模造品素材 板状	掘り方一括	長2.1幅1.6 厚0.7重2.77	滑石	背面側は平坦で、粗く磨き整形するのに対し、裏面側は稜があり、稜部のみ摩耗する。	
H65	193 148	模造品素材 板状	掘り方一括	長(2.1)幅(1.1) 厚0.6重1.42	滑石	表裏面とも摩耗する。左辺側エッジは摩耗して丸味を帯びる。右辺側を欠損する。	
H66	193 148	模造品素材 板状	掘り方一括	長(1.8)幅(1.3) 厚0.6重1.20	滑石	断面三角形を呈し、背面側の稜部が摩耗する。裏面側も弱く摩耗しているが、人為的摩耗が不明。	
H67	193 148	模造品素材 板状	南部-2	長4.8幅2.6 厚0.5重6.80	滑石	原石を打ち欠いて得た板状剥片。背面側は部分的に摩耗している。	
H68	193 148	模造品素材 板状	南部+2	長3.5幅1.9 厚0.6重5.98	滑石	側縁に整形痕があるほか、背面側にノミ状の工具痕を残す。表裏面は分割面に覆われている。	
H69	193 148	模造品素材 柱状	P2内+30	長6.8幅1.5 厚0.7重14.55	滑石	各面とも稜が弱い摩耗面が広がる。線条痕は確認されない。形態的特徴から模造品素材と見た。	
H70	193 148	模造品素材 板状	北西部0	長3.0幅3.5 厚0.4重10.44	滑石	表裏面とも刀子状工具による整形痕が広がる。整形面は稜が残り、素材としては初期段階の状態を示す。	
H71	193 148	模造品素材 柱状	北部-1	長2.4幅2.7 厚0.4重6.20	滑石	背面側に研磨痕が残る。裏面側も部分的に研磨されているが、途中研磨を放棄している。	
H72	193 148	模造品素材 柱状	南壁際-2	長1.9幅0.8 厚0.8重2.05	滑石	未製品。体部は整形痕に覆われているが、部分的に未整形の折断面が残る。体部のキズはタガネ状工具痕。	
H73	193 148	模造品素材 柱状	掘り方一括	長1.9幅0.9 厚(0.4)重0.92	滑石	未製品。穿孔時に縦位破損。体部に斜位線条痕が新鮮に残る。破断面を見る限り、両側穿孔が想定可能。	
H74	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	長0.9幅0(0.5) 厚0.4重0.19	滑石	表裏面とも研磨。側面は折り取られたままで、未整形。穿孔時に破損した可能性が高い。孔径は不明。	
H75	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	長(0.8)幅(0.6) 厚0.3重0.12	滑石	背面側・側面を弱く磨き整形する。裏面側は見整形。径2mm弱の孔を穿つ。	
H76	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	長(0.6)幅(0.4) 厚0.2重0.06	滑石	表裏面とも丁寧に研磨。部分的に残る側面の整形も丁寧で、穿孔時に破損した可能性が高い。孔径は不明。	
H77	193 149	石製模造品 白玉	埋没土一括	長0.8幅(0.6) 厚0.4重0.19	滑石	表裏面とも粗く磨き整形する。側面は折り取り後に研磨され、比較的形状は整う。孔径は不明。	
H78	193 149	石製模造品 白玉	埋没土一括	長0.7幅(0.5) 厚0.4重0.13	滑石	表裏面とも磨き整形、側面は比較的丁寧に研磨されている。孔は斜向して穿たれ、孔径は不明。	
H79	193	石製模造品 白玉	南部-3	長0.9幅(0.4) 厚(0.2)重0.06	滑石	背面側に粗い磨き整形痕が残る。裏面側は剥落して形状は不明。側面は折り取り整形。	
H80	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.0幅0.9 厚0.3重0.36	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に磨き整形を行う。径1.5mmの孔を穿つ。	
H81	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長0.8幅0.8 厚0.4重0.29	滑石	表裏面とも粗い磨き整形、側面は折り取り整形。中央に径1.5mmの孔を穿つ。	
H82	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	長0.9幅(0.5) 厚0.3重0.11	滑石	背面側に平坦面が残る他、いずれも破損して形状は不明。径1.5mmの孔を穿つ。	
H83	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	長1.0幅(0.7) 厚0.3重0.26	滑石	表裏面とも研磨されるほか、側面には部分的に面取り整形がある。孔(径2mm)は途中で止まる。穿孔時破損。	
H84	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	長0.6幅0.6 厚0.4重0.16	滑石	完成状態。表裏面とも粗く磨き整形。側面整形は雑で、粗い縦位線条痕が残る。径2mm弱の孔を穿つ。	
H85	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長0.7幅0.7 厚0.4重0.27	滑石	完成状態。表裏面とも磨き整形。側面整形は丁寧で、粗い縦位線条痕は見られない。径1.5mmの孔を穿つ。	
H86	193 148	石製模造品 白玉	南壁際-2	長0.7幅0.7 厚0.3重0.21	滑石	完成状態。表裏面とも粗く磨き整形。側面には粗い縦位線条痕が残る。径2mm弱の孔を穿つ。断面は樽状。	
H87	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	長0.9幅0.8 厚0.4重0.39	滑石	表裏面とも磨き整形されているが、側面は折り取られたままである。穿孔(径1.5mm)は途中放棄されている。	
H88	193 149	石製模造品 白玉	カマド左袖+8	長0.7幅(0.9) 厚0.8重0.39	滑石	表裏面とも磨き整形。背面側は傾斜しており、穿孔位置が分かる程度の浅い孔の痕跡がある。孔径不明。	
H89	193 149	石製模造品 白玉	カマド左脇+3	長1.1幅1.1 厚0.4重0.57	滑石	表裏面とも粗く磨き整形。側面は折り取り後、部分的に研磨されている。	
H90	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	長0.9幅(0.5) 厚0.3重0.20	滑石	背面側のみ弱く摩耗。側面は折り取り整形。穿孔時に破損したもので、孔径は不明。	
H91	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.0幅1.0 厚0.5重0.67	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は折り取り後、刀子状工具による面取り整形。径1.5mmの孔を穿つ。	
H92	193 149	石製模造品 白玉	南部+1	長1.0幅0.9 厚0.7重0.44	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は部分的に整形されているが、折り取り整形が基調。径2mm弱の孔を穿つ。	
H93	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長0.9幅1.0 厚0.4重0.50	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は粗く折り取り整形。残存部に孔は見られない。	
H94	193 149	石製模造品 白玉	カマド左袖際+5	長.0.8幅1.0 厚0.8重0.43	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は粗く折り取り整形。孔(径2mm弱)の穿孔は途中で放棄されている。	
H95	193 149	石製模造品 白玉	南部+2	長1.0幅0.9 厚0.4重0.44	滑石	表裏面とも磨き整形、側面は折り取り整形。径2mm弱の孔を穿つ。	
H96	193 149	石製模造品 白玉	西部-1	長0.9幅0.8 厚0.4重0.45	滑石	表裏面とも研磨。周辺を折り取り概形を作出。側面に平坦な整形痕が残る。径1.5mmの孔を穿つ。	
H97	193 149	石製模造品 白玉	埋没土一括	長1.1幅(0.8) 厚0.5重0.46	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は折り取り後に磨き整形。径1.2mmの孔を穿つ。	
H98	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.0幅0.6 厚0.4重0.26	滑石	背面側には稜部があり、弱く摩耗する。これに対し、裏面側は平坦で研磨整形が明瞭。孔径は2mm弱。	
H99	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.0幅(1.4) 厚0.4重0.37	滑石	表裏面とも粗く磨き整形。側面は折り取り後、磨き整形する。残存部に孔は見られない。	
H100	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.0幅0.7 厚0.4重0.28	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に磨き整形を行う。径1.5mmの孔を穿つ。	
H101	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長0.9幅(0.8) 厚0.4重0.32	滑石	表裏面とも粗い磨き整形。側面は折り取り整形。穿孔時に破損した可能性が高い。孔径不明。	
H102	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長(0.9)幅(0.8) 厚0.4重0.36	滑石	背面側は平坦で、部分的に未整形部が残る。裏面側の稜は高く、稜部のみ弱く研磨。孔径は不明。	
H103	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長0.9幅(0.6) 厚0.4重0.29	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は磨き整形されており、粗い縦位線条痕を残す。孔径は不明。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H104	193 149	石製模造品 白玉	南壁際-2	長1.0幅0.9 厚0.3重0.29	滑石	裏面側は平坦だが、背面側には摩耗した稜が残る。径2mm弱の孔を穿つ。	
H105	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.0幅(0.6) 厚0.4重0.30	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に刀子状工具による面取り整形。孔径不明。	
H106	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.1幅1.1 厚0.5重0.77	滑石	表裏面とも摩耗する。側面整形は面取り整形に近く、刀子状工具によるものと見られる。	
H107	193 149	石製模造品 白玉	掘り方一括	長1.2幅1.2 厚0.4重0.88	滑石	表裏面とも磨き整形。側面は折り取り後、部分的に刀子状工具による面取り整形。径1.5mmの孔を穿つ。	
H108	193 149	石製模造品 白玉	南西部+1	長1.1幅1.0 厚0.4重0.60	滑石	表裏面とも研磨。周辺を折り取り概形を作出。側面に平坦な整形痕が残る。径1.5mmの孔を片側穿孔する。	
H109	193 149	石製模造品 白玉	西壁寄り-1	長1.0幅1.0 厚0.4重0.46	滑石	表裏面とも平坦だが裏面側研磨は不明瞭。周辺を折り取り概形を作出。径1.5mmの孔を片側穿孔する。	
H110	193 149	石製模造品 白玉	南部-3	長1.0幅(0.7) 厚0.4重0.27	滑石	表裏面とも弱く磨き整形。側面は折り取りられたままで未整形。孔(径2mm)は途中で止まる。穿孔時の破損。	
H111	193 149	石製模造品 白玉	南部-1	長0.8幅(0.8) 厚(0.3)重0.16	滑石	背面側のみ弱く磨き整形、側面は折り取り整形。穿孔時に破損したもので、孔径は不明。	
H112	193 149	石製模造品 白玉	中央部東寄り-3	長1.0幅(0.6) 厚(0.2)重0.17	滑石	背面側のみ磨き整形、裏面側は風化して不明瞭だが薄く、剥落した可能性が高い。側面は折り取り整形。	
H区11住居							
H113	194 149	土師器 手捏ね土器	南壁寄り+34 完形	口径5.0底径4.1 器高4.6	細砂粒/良好/明赤褐	外面は指先による雑な撫で。内外面は斜めの強い指撫で。	
H114	150	土師器 杯	カマド内-2 1/2	口径14.2器高5.9	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面に輪積み痕。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、雑な放射状ヘラ磨き。	
H115	194	土師器 杯	P4内+12 2/3	口径12.8	細砂粒・粗砂粒/良好/赤褐	口縁部は横撫で。体部外面に輪積み痕。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、放射状ヘラ磨き。	
H116	194 149	土師器 鉢	南西隅寄り+3 底部一部欠	口径12.1器高8.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部外面は撫で後、ヘラ磨き。内面は撫で後、放射状ヘラ磨き。	
H117	194 149	土師器 鉢	東壁際+26 1/2	口径12.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。体部は雑なヘラ磨き。底部はヘラ撫で後、雑なヘラ磨き。内面は撫で後、放射状ヘラ磨き。	
H118	194	土師器 鉢	カマド内-5 口縁部片	口径14.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は横のヘラ磨き。内面は撫で後、放射状ヘラ磨き。	
H119	194 149	土師器 鉢	東壁寄り+11 1/2	口径14.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。体部は雑な横のヘラ磨き。底部は撫で。内面は撫で後、雑な放射状ヘラ磨き。	
H120	194 149	土師器 鉢	カマド内+2 口縁一部欠	口径13.5	細砂粒・粗砂粒/良好/赤	口縁部は横撫で。体部外面は雑な縦のヘラ撫で。内面は横のヘラ撫で。底部は広く剥離。頸部内面に明瞭な輪積み痕。	
H121	194 149	土師器 有孔鉢	カマド右袖+11 口縁一部欠	口径13.5底径2.7 器高9.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で、下半は縦のヘラ撫で。内面はヘラ撫で灰色付着物。	
H122	194 149	土師器 甗	カマド左袖+1 完形	口径19.7底径9.3 器高23.1	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で後、斜めの撫で。胴部外面は縦の雑なヘラ撫で後、下半はヘラ磨き。内面は斜めのヘラ削り。	
H123	194	土師器 甗	カマド内-4 胴部片	口径6.2	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐	胴部外面は雑な縦の撫で。内面も縦の撫で。	
H124	194 149	土師器 甗	カマド内+1 口縁一部欠	口径14.4底径7.2 器高30.2	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面はハケ目(1cmに4本)後、雑な撫で。内面は横のハケ目、ハゼ。胴部内外面に接合痕顕著。むび割れて歪む。	
H区12住							
H125	194	土師器 杯	一括 1/4	口径12.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は雑なヘラ磨き。内面は撫で後、放射状ヘラ磨き。	
H126	194 149	土師器 鉢	カマド内+1 2/3	口径13.2器高9.3	細砂粒・軽石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は横のヘラ削り、上半部はヘラ撫での痕跡があるが不明瞭。	
H127	194 149	土師器 甗	北東隅寄り-2 完形	口径20.4底径8.9 器高23.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。体部外面上半は縦のヘラ撫で、下半は縦のヘラ磨き。内面は斜めのヘラ撫で下端に接合痕。	
H128	194 149	土師器 壺	南東壁際+1 胴部	—	細砂粒/良好/浅黄橙	胴部外面はヘラ削り後、ヘラ磨き。内面はヘラ撫で、下端に炭化物付着。内外面磨滅。	
H129	195	土師器 甗	南西部+17 口縁部片	口径18.2	細砂粒・粗砂粒・石英/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。肩部外面も撫で。内面は横のヘラ撫で、磨滅。	
H130	195 150	土師器 甗	カマド内+1 完形	口径15.6底径6.9 器高23.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦から斜めのヘラ撫で。内面は横のヘラ撫で、ハゼ。底部はヘラ削り。	
H131	195	土師器 甗	カマド内+1 1/2	口径7.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明黄褐	胴部外面は縦のヘラ撫で。内面は横のヘラ撫で、下位に接合痕。	
H区13住							
H132	195 150	土師器 杯	南西隅寄り+3 4/5	口径12.4器高3.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間にわずかに撫での部分を残す。内面は撫で。	
H133	195 150	土師器 杯	中央部+3 完形	口径13.2器高3.7	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。歪み謙虚。	
H134	195 150	土師器 杯	中央部+7 1/2	口径17.8器高5.2	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	
H区14住居							
H135	195	土師器 杯	西部+1 1/4	口径12.0器高5.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。口縁から底部外面に煤付着。	
H136	195	須恵器 甗	西部+24 口縁片	口径12.0	細砂粒/還元焰/暗灰	ロクロ整形(回転方向不明)。作りはシャープで口唇部に凹線が巡る。頸部外面にクン描き波状文。口縁部内面に自然釉。	
H137	195	土師器 甗	西部0 口縁~胴部	口径12.8	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。外面被熱によるものか粗れが顕著。	
H138	195 150	土師器 甗	西部+1 1/2	口径13.5底径5.5 器高15.3	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は撫で、下半は斜めのヘラ削り。内面は撫で、粗れている。頸部内面に輪積み痕。	
H139	195 150	土師器 甗	一括 1/2	口径12.9底径6.2 器高14.5	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄橙	口縁部横撫で。胴部外面上半は撫で、下半は斜めのヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で、下半は被熱で変色。	I区3土坑
H140	195	土師器 壺	西部+1 1/3	口径6.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐	胴部外面上半は縦の撫で、下半はヘラ磨き。内面は縦のヘラ磨き、ハゼ。	
H141	195	土師器 甗	西部+2 胴下1/3	口径6.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/明赤褐	胴部外面上半は横のヘラ撫で、下半は斜めのヘラ撫で。内面は斜めのヘラ撫で、わずかにハゼ。底部周辺剥離。	H区85土坑 墓地
H142	195	土師器 甗	一括 口縁~胴部片	口径17.6	細砂粒・軽石・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部横撫で。肩部外面は斜めのヘラ撫で、被熱による変色。内面は横のヘラ撫で。	
H143	195 150	土師器 甗	一括 口縁~胴部片	口径17.1	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は雑なヘラ撫で、黒斑。内面は撫で、ハゼ顕著。下位に接合痕。	H区85土坑
H144	196 150	土師器 甗	西部+2 口縁~胴部	口径17.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のハケ後、雑な縦のヘラ撫で。内面ハゼ顕著で輪積み痕を残す。	

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H145	196 150	土師器 甕	一括、54土坑 1/2	口径17.2底径6.6 器高30.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ撫で。内面は撫で。	墓地、I区3土坑、H区85土坑
H146	196 150	石製模造品 剣型	南壁寄り+13	長2.6幅1.1 厚1.7重3.6	よろうろ石	基部側に脈があり、脈が邪魔して形状作出は不充分。刀子状工具による整形痕が残る。緑色石材。	
H147	196 150	石製模造品 剣型	一括	長(2.5)幅(1.5) 厚0.6重2.7	滑石	背面側中央に斜め方向の刀子状工具痕が残る。背面側に比べ裏面側の整形痕は部分的である。	
H148	196 150	砥石 礫砥石	中央部北西寄り +17	長16.8幅(17.9) 厚7.3重3557.6	粗粒輝石安山岩	やや窪んだ背面側礫面の中央付近が摩耗して光沢を帯びる。裏面側礫面にスガが付着。被熱破損。	
H区15住居							
H149	196	土師器 杯	一括 口縁～体部	口径11.6	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横撫で、口唇部には凹線を巡らす。外稜は沈線で強調している。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
H150	196 150	土師器 杯	P3内+21 口縁一部欠	口径11.5器高5.1	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	シャープな作り。口縁部は横撫で、口唇部には凹線が巡る。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
H151	196	土師器 杯	一括 1/3	口径11.8器高4.7	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で、口唇部は平坦。外稜はシャープな作りで底部は手持ちヘラ削り。内面は丁寧な撫で。	
H152	196	土師器 杯	南西隅寄り+5 杯	口径12.3	細砂粒・角閃石/良好/ 赤褐	口縁部は横撫で。外稜はシャープな作りで、底部は手持ちヘラ削り、手ずれによるものか光沢がある。内面は撫で。	
H153	196	土師器 高杯	中央部東寄り0 口縁～環部	口径13.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/橙	口縁部は横撫で。体部はヘラ削り。内面は撫で。	
H154	196	土師器 甕	北東部0 口縁～底部片	口径19.2底径7.8	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で後、雑なヘラ磨き。器面磨滅。	
H155	196	粘土塊	一括	幅4.2厚1.6	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい橙	不整楕円形で一端を欠損する。片面の器面は撫で。	
H156	196 150	砥石 礫砥石	一括	長16.6幅7.5 厚6.1重748.3	粗粒輝石安山岩	板状を呈する平坦な礫面に縦位の粗い刃ならし傷が集中する。	
H267	150	台石 楕円礫	中央部	長(30.5)幅24.4 厚16.2重1742.0	粗粒輝石安山岩	中央付近で破損。被熱して破損部に近い背面側の礫面が大きく剥落するほか、側面にスガが付着する。	
H区16住居							
H157	197 150	土師器 杯	南東隅+15 口縁一部欠	口径12.2器高5.0	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り、黒斑。内面は撫で後、斜放射状及び横のヘラ磨き。	
H158	197 150	土師器 杯	南東隅+7 2/3	口径12.8器高5.5	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部はヘラ撫で。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。	
H159	197 150	土師器 杯	中央部南寄り+5 2/3	口径13.0器高5.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。底部はヘラ磨き。内面は撫で後、雑な放射状ヘラ磨き。内外面剥離。	
H160	197	土師器 杯	南西隅-2 口縁～体部	口径12.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で、口唇部内面に平坦部。外稜はシャープな作りで底部は手持ちヘラ削り後、撫で。内面は撫で。	
H161	197	土師器 杯	一括 1/4	口径13.0	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で、内面に細かなハゼ。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。	
H162	197 150	土師器 杯	南東隅+8 口縁一部欠	口径11.0器高6.6	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、粗れ顕著。	
H163	197	土師器 高杯	南壁際+13 環底部～脚部	脚径8.3	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐	杯部内面に放射状ヘラ磨き。脚部外面は撫で、内面は指先の撫で。	
H164	197	土師器 甕	南東隅+5 口縁～胴部	口径10.7	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り後、横の雑な撫で。内面は横のヘラ撫で。	
H165	197	土師器 甕	南東隅-1 1/4	口径15.4	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦の撫で。内面は撫で、輪積み痕。	
H区1掘立							
H166	197 151	火打石 板状	P3一括	長(2.4)幅(2.0) 厚1.3重4.1	玉髓	背面側エッジ・側面下端側エッジが使用され、敲打痕が集中する。左辺側を欠損する。	
H区1土坑							
H167	197	土師器 杯	1/4	口径13.2	細砂粒・角閃石/良好/ 黒褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。外面に煤付着。	
H168	197	土師器 杯	2/3	口径12.8器高5.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で、細かなハゼ。口唇部には凹線を巡らす。底部は手持ちヘラ削り、中央に黒斑。内面は撫で。	
H169	197	土師器 杯	2/3	口径14.8器高5.9	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で、口唇部には凹線を巡らす。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、煤付着。内外面剥離。	
H170	197	土師器 甕	頸部～肩部片	—	細砂粒・粗砂粒・角閃石 /良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。頸部内面はヘラ削り。肩部内面はヘラ撫で。	
H区4土坑							
H171	197	土師器 埴	口縁部	口径9.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部の一部内外面に吸炭。内外面は雑なヘラ撫で。粉っぽい胎土。	
H区15土坑							
H172	197	土師器 甕	底部	底径6.7	細砂粒・粗砂粒・石英/ 良好/明黄褐	胴部外面は縦のヘラ削り後、雑な撫で。内面の粗れ顕著。	
H区16土坑							
H173	197 151	深鉢	一括 胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、繊維 /ふつう/にぶい黄橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H区17土坑							
H174	197	土師器 杯	口縁～体部	口径11.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ 赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り後、ヘラ磨き。内面は撫で。口縁部と内面手ずれによるものか僅かに光沢あり。	
H区18土坑							
H175	197 151	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、繊維 /ふつう/明赤褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H176	197 151	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/良好/橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
H区21土坑							
H177	197 151	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/良好/にぶい橙	小突起を付す波状口縁。刻みを伴う隆線を2条めぐらし、鎖状隆帯で連結させる。	堀之内2式
H178	197 151	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/ にぶい赤褐	斜行する帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
H区22土坑							
H179	197 151	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
H区23土坑							
H180	197 151	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英、繊維 /ふつう/にぶい黄褐	無節L r、R lを菱形施文する。	黒浜・有尾

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P.L.	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H181	197 151	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒/良好/ 明赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
H区24土坑							
H182	197 151	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H183	197 151	深鉢	胸部破片		粗砂/良好/橙	L Rを横位施文する。	諸磯 a 式
H184	197 151	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒/ふつう/橙	L Rを横位施文する。	諸磯 a 式
H185	197 151	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄橙	横位、縦位の隆帯を施し、L Rを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
H186	197 151	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄	沈線による懸垂文を施し、R Lを充填施文する。	加曾利E 3式
H区32土坑							
H187	197 151	深鉢	口縁部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ 黒褐	波状口縁。斜位の平行沈線を施す。	有尾式
H188	197 151	深鉢	口縁部片		細砂、繊維/ふつう/ 暗赤褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H189	197 151	深鉢	口縁部片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/明赤褐	R Lを横位施文する。H192と同一個体。	黒浜・有尾
H190	197 151	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
H191	198 151	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい褐	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H192	198 151	深鉢	胸部破片		H189と同一	H189と同一個体。	黒浜・有尾
H193	198 151	深鉢	胸部破片		細砂、石英、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
H区33土坑							
H194	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/良好/橙	平行沈線、コンパス文を横位多段にめぐらす。	黒浜式
H区34土坑							
H195	198 151	深鉢	口縁～胴下位	口径33.1 現存器高33.4	細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐	平縁。胴中位が膨らみ、頸部でくびれて口縁が開く器形。0段多条R L、 L Rを羽状施文する。胴中位に接合痕が明瞭に残る。	黒浜式
H196	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	波状口縁で口唇内削ぎ。R L、L R羽状施文を地文とし、平行沈線に よる菱形モチーフを描く。交点に円文を描く。	有尾式
H197	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい褐	R Lを地文とし、横位、斜位、弧状の平行沈線を施す。尖頭状の口唇 に刻みを付す。	黒浜・有尾
H198	198 151	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R L、L R羽状施文を地文とし、C字状押し沈線をめぐらす。	黒浜式
H区36土坑							
H199	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	波状口縁。平行沈線により菱形モチーフを描く。内削ぎの口唇外端 に半截竹管内皮による刻みを施す。	有尾式
H200	198 151	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、繊維/ふつう/ 明赤褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
H区41土坑							
H201	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/ にぶい褐	平行沈線によりうろこ状のモチーフを描く。外121と同一個体。	黒浜式
H202	198 151	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/にぶい黄橙/ ふつう	附加条2種R L+L・Lを横位施文する。	黒浜式
H区42土坑							
H203	198 151	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/暗赤褐	口唇内削ぎ。L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
H区43土坑							
H204	198 151	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
H区45土坑							
H205	198 151	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	2条巻の擦糸文r・rを施す。	黒浜式
H268	151	多孔石 楕円礫		長37.0幅30.3 厚18.4重23300.0	粗粒輝石安山岩	背面に孔5、裏面側に孔2を穿つ。左辺側が大きく破損しているが、 被熱によるものか不明。	
H区48土坑							
H206	199 151	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で6枚鑄着。判読可能な銭貨は新寛永1枚。表裏に布痕 付着。	
H207	199 151	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で5枚鑄着。判読可能な銭貨は古寛永1枚。	
H208	199 151	煙管 雁首	完形	火皿径1.68 小口径1.11 脂返し径0.65		小口から脂返しはなだらかに移行する。脂返しの湾曲は殆どなく、火 皿補強体もない。羅字の一部残存。	
H209	199 151	煙管 吸口	完形	小口径1.14 口付径0.43長5.47		羅字一部残存。小口から口付まではなだらかに移行する。	
H210	199 151	鉄製品 火打金	完形	長6.41幅2.4 厚0.4		中央上部を敲いて薄くし、中央に孔をあける携帯用火打金。玉髓製火 打金が鑄着し、各所に革袋状の痕跡が錆となって残る。火打石は下部 の裏面に明瞭な使用痕がある。	
H211	199 151	火打石	完形	長2.3幅2.1 厚1.0重5.6	玉髓	図面右側面角に明瞭な使用痕。裏面に接鑄が付着し、火打金に接して いたと考えられる。	
H区49土坑							
H212	199 152	瀬戸・美濃 陶器御室碗	完形	口径9.9底径5.0 厚6.4	淡黄	外面に呉須で簡略化した山水文を描く。相対する外面には3条の線を呉 須で描く。内面から高台脇に灰釉。細かい貫入が入る。高台端部は幅狭い。	18世紀前半
H213	199 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で6枚鑄着。判読可能な銭貨は新寛永1枚。	
H214	199	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で5枚鑄着。剥離した1枚は新寛永。	
H区53土坑							
H215	199 152	銭貨	完形	長2.523幅2.538 厚0.091～0.1	寛永通寶	背文。寛文8(1668)年初鑄。	重2.91

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H区54土坑							
H216・217	199	土師器 高杯	杯部	—	細砂粒・軽石/良好/赤	杯部外面はハケ目(1cmに6本)。内面は撫で。内外面赤色塗彩。	
H区67土坑							
H218	199 152	ガラス製品 小玉	完形	径0.523厚0.373 重0.18	無色透明	劣化により表面を細かい筋状の窪みがおおむ。円孔付近は筋状の窪みが円孔を囲むように同心円状を呈する。気泡含む。	
H219	199	鉄製品 釘	頸部付近	—	—	頸部付近のみ残存。断面は方形。端部を薄く延ばした後折り曲げて頭部とする。木質付着。	
H220	199 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で11枚鑄着。判読できる2枚とも新寛永。表裏2枚は文銭ではないであろう。	
H区68土坑							
H221	200 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で3枚鑄着。一部に布残存。剥離した1枚は寛永通寶の背文。	
H222	200 152	銭貨	完形	直径2.261~2.262 厚0.106~0.11	念仏銭	表面に「南無阿弥陀佛」の文字を鑄出す。表裏に紙状の繊維付着。銅銭。	重2.27
H223	200 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で4枚鑄着。銭文が判読できる面を除き、平織りの布で被われる。銭文が見える1枚の直径は25.14mm。	
H224	200 152	ガラス製品 小玉	完形	径0.437厚0.341 重0.11	淡青半透明	本剤は淡青色半透明と考えられるが、表面の劣化により白濁した箇所が多い。表面に1箇所突起が認められ、気泡によると推定される窪みが2箇所認められる。白濁部分より孔を囲むような細い筋状を呈し、製作法を示す可能性が高い。気泡含む。	
H区69土坑							
H225	200 152	煙管 雁首	完形	火皿径0.96 小口径1.62 脂返し径0.64	—	羅字一部残存。小口から脂返しまではなだらかに移行する。脂返しの湾曲は弱く、火皿補強体も認められない。	
H226	200 152	煙管 吸口	完形	小口径1.06 口付径0.34 長6.21	—	羅字一部残存。小口から口付まではなだらかに移行する。	
H227	200 152	鉄製品 火打金	完形	長6.37	—	上部の盛り上がり部分を槌で叩いて薄く延ばし、中央部に円孔をあける。ソフテックス写真によると、使用によると考えられる中央部の挟れが認められる。表裏には革製と推定される火打袋が鑄着する。火打石や火口の鑄着は認められない。	
H228	200 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で11枚鑄着。判読できる1枚は新寛永。直径や厚さにはばらつきがある。	
H229	200 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で6枚鑄着。銭文が判読できる1枚は新寛永。1枚のみ直径が25mmを越える。	
H区70土坑							
H230	200 152	美濃陶器 皿	口縁1/5欠	口径12.5底径5.8 器高3.0	灰黄	外面の口縁部以下は回転削り。削出し高台で、断面三角形状を呈し、やや内傾する。内面から口縁部外面に灰釉。底部内面に高台端部との重焼痕。口縁部内面に溶着の剥がし痕残る。	17世紀中～後半
H231	200 152	煙管 雁首	完形	火皿径0.98 小口径1.62 脂返し径0.52	—	小口から脂返しはなだらかに移行する。脂返しの立ち上がりは低い。低い火皿補強体が付く。火皿は高さがあり、器壁も厚い。羅字の一部残存。肩部から脂返しの上面は凹んで若干平坦となる。下部には植物繊維が付着する。	重7.6
H232	200 152	煙管 吸口	完形	小口径0.97 口付径0.12 長6.15	—	羅字一部残存。肩部の段がなく、小口から口付までなだらかに移行する。	重3.8
H233	200 152	鉄製品 火打金	完形	長6.75幅2.56	—	中央上部がなだらかに盛り上がる山形を呈する。頂上部には円孔を設ける。両端部の反りはなく丸くおさめる。頂上部は薄い。刃部中央は厚く、両端は薄い。	
H234	200 152	銭貨	完形	直径2.515~2.523 厚0.14~0.147	寛永通寶	鑄化やや進行する。古寛永。	重3.08
H235	200 152	銭貨	完形	—	不詳	すべて銅銭。5枚鑄着。平織りの布が残り、布の上に紐が1本残る。	
H236	200 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で5枚鑄着。判読可能な1枚は古寛永。平織りの布で包まれる。楕円と考えられる木片と接して出土。	
H区71土坑							
H237	201 152	煙管 吸口	両端欠損	小口径1.0 口付径0.32	—	小口と口付端部欠損。羅字一部残存。羅字挿入部は円筒形で外面に横線廻る。肩は明瞭で円錐状に細り口付にいたる。	
H238	201 152	鉄製品 火打金	完形	厚2.51	—	いわゆる捻り鎌型。細く延ばした両端を刃部端で折り曲げ上部で左方向にねじる。両端部は頂上部で合わせるように見えるが、ソフテックス写真では接した後に両端を下方に丸めているようである。	
H239	201 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅一文銭で9枚鑄着。銭文の一部のみ確認できるが、古寛永か新寛永かは不明。平織りの布で包まれるが、目は粗く1辺2mmほどの隙間が空く部分がある。	
H240	201 152	銭貨	完形	—	寛永通寶	すべて銅銭でH241~H246の6枚鑄着していたが、永楽通寶が認められたために剥離した。	
H241	201	銭貨	完形	直径2.442~2.481 厚0.104~0.111	永楽通寶	側面の角がなく、縁は丸みを持つ。方形穴の縁もやや歪で不鮮明。銭文もやや異なるか。古い時期の模鑄銭若しくは江戸期までの使用による手擦れか。模鑄銭か。	重2.56
H242	201	銭貨	完形	直径2.321~2.324 厚0.104~0.112	寛永通寶	新寛永。	重2.72
H243	201	銭貨	完形	直径2.292~2.285 厚0.118~0.132	寛永通寶	新寛永。方形穴は大きく、鑄不足で一部変形。	重2.40
H244	201	銭貨	完形	直径2.462~2.453 厚0.098~0.102	寛永通寶	新寛永。	重3.18
H245	201	銭貨	完形	直径2.258~2.268 厚0.098~0.108	寛永通寶	新寛永。高津背「元」銭類。寛保元年(1741)以降鑄造。磁性強い。	重1.82
H246	201 152	銭貨	完形	直径2.332~2.318 厚0.101~0.109	寛永通寶	新寛永。	重2.16
H区72土坑							
H247	201 152	銭貨	完形	—	寛永通寶など	銅銭で2枚鑄着。銭文判読可能な1枚は古寛永。判読不可能な銭貨の直径は23.20mmと小さい。一部に紙状の繊維付着。	
H区73土坑							
H248	201 153	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅銭で6枚鑄着。銭文が判読できる1枚は新寛永。判読できない1枚は直径が24.91mmと大きく、古寛永の可能性が高い。	
H249	201 153	銭貨	完形	—	寛永通寶	H250を剥離した。銭文が判読できる1枚は新寛永。	
H250	201 153	銭貨	完形	—	寛永通寶など	すべて銅銭と推定され、12枚前後鑄着。銭文が判読できる1枚は新寛永。周囲に布付着。中の1枚はやや変形し、周縁が曲がる。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
H251	201 153	鉄製品 火打金か	一部欠	長4.86幅1.87 厚0.3		板状製品で下端に比して上端がやや薄い。右上端部は小さく突き出し、左上端も張り出し部の一部が残存する。短い台付きの火打金の可能性がある。	
H252	201 153	火打石 分割礫		長3.6幅2.5 厚1.6重13.0	玉髄	背面側・側縁のエッジに使用に伴う敲打痕が明瞭に残る。エッジに鉄錆が付着する。	
H区74土坑							
H253	202 153	煙管 吸口	一部欠	小口径1.512 付径0.96長0.78		脂返しの湾曲は弱く、端部が上方に向いた直後に火皿を付ける。脂返しと肩部の直径差は少ない。火皿は碗状を呈するが、補強体は認められない。	
H254	202 153	煙管 吸口	一部欠	小口径0.92 付径0.48長0.68		肩部から口付き部になだらかに移行する。口付き側に蠟継ぎが針状につき出しており、口付き端部が一部欠損している。羅宇竹が一部残存。	
H255	202	銭貨	完形		寛永通寶	取り上げ時にH256から1枚剥離。判読できる1枚は古寛永。	
H256	202 153	銭貨	完形		寛永通寶など	すべて銅銭で11枚鑄着。取り上げ時に1枚剥離。判読できる1枚は古寛永。鑄着している10枚は銭文が判読できないが、煙管の年代と銭径から新寛永と考えられる。両端の銭径は23.26mmと23.45mm。	
H257	202 153	鉄製品 釘	先端欠			基部の一端は5mm。頭部は薄くのぼした端部を折り返したような形状を呈する。頭部から15mm付近以下に直交する木質(年輪界)が残る。	
H258	202	鉄製品 釘	両端欠			釘と直交方向に木質(年輪界)が残る。	
H259	202	鉄製品 釘	両端欠			端部付近片。先端側が曲がる。	
H260	202	鉄製品 釘	両端欠			釘と直交方向に木質(年輪界)が残る。	
H261	202	鉄製品 釘	両端欠			釘と同方向に木質(年輪界)が残る。	
H262	202 153	鉄製品 火打金	完形	長4.9幅2.0 厚3.2		上部中央に角があり、両斜辺は直線的。刃部も直線的だが、使用痕が劣化により一部がやや窪む。一部に革袋状の痕跡が錆となって残る。	
H263	202 153	鉄製品 火打石	完形	長2.0幅2.0 厚0.9重2.8	玉髄	図面下部表側角に明瞭な使用痕。裏面に鉄錆が付着し、火打金に接していたと考えられる。	
H区77土坑							
H264	202 153	鉄製品 火打石	完形	長2.8幅1.8厚0.9 重3.8	玉髄	背面側の稜、エッジに使用に伴う敲打痕が残る。再生後の剥片を再び火打石として使用したものの。	
H区墓地跡							
H265	202 153	銭貨	完形	直径2.526~2.529 厚0.095~0.102	寛永通寶	新寛永。文銭。寛文8年(1668)鑄造開始。	重3.17
2 トレンチ							
H266	202	土製円板	完形	長7.2幅7.6 厚1.3	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい黄褐色	裏の底部周辺を打ち欠いて整形	
I区1 井戸							
I 1	202 153	須恵器 杯	2/3	口径11.7底径6.8 器高4.0	細砂粒/酸化焰/ にぶい黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。体部内面に墨書、文字不明。	
I 2	202	須恵器 甕	口縁~胴部	口径13.4	細砂粒/酸化焰/ にぶい黄褐色	ロクロ整形。口縁部は横撫で。胴部内外面はロクロの撫で。	
I区2 住居							
I 3	202	土師器 杯	カマド内+8 1/2	口径13.4器高8.3	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。内外面磨減。	
I 4	202	土師器 杯	南東隅+17 1/4	口径14.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、斜放射状の二段のヘラ磨き。	
I 5	202	土師器 杯	南東隅+17 口縁片	口径14.0	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、放射状及び斜放射状の二段のヘラ磨き。	
I 6	202	土師器 鉢	一括 口縁~胴部	口径14.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
I 7	202	土師器 鉢	南東隅+8 口縁片	口径15.6	細砂粒・軽石/良好/赤褐色	口縁部は横撫で。体部外面は縦のヘラ撫で。内面は横のヘラ撫で。口縁部と頸部外面に輪積み痕。	
I 8	202	土師器 高杯	一括 脚部片	底径10.6	細砂粒・角閃石/良好/黄褐色	脚部外面は縦の撫で、端部は横撫で。内部はヘラ撫で。	
I 9	202	灰釉陶器 椀	南東隅-6 口縁部片	口径13.8	細砂粒/還元焰/にぶい 黄褐色	ロクロ整形(回転方向不明)。施釉はハケ掛け。	東濃
I 10	202	灰釉陶器 椀	南西一括 口縁部片	口径16.8	細砂粒/還元焰/にぶい 黄褐色	ロクロ整形(回転方向不明)。施釉はハケ掛け。	東濃
I 11	202	灰釉陶器 椀	南東一括 脚部片	底径7.1	細砂粒/還元焰/にぶい 黄褐色	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は三日月高台で底部切り離し後の付高台。	東濃
I 12	203	土師器 甕	カマド前0 1/6	口径26.6底径9.3 器高26.1	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ削り、黒斑。上位に斜めのヘラ撫で。内面も斜めのヘラ撫で。粉っぽい胎土。	
I 13	203	土師器 甕	カマド前0 口縁~胴部上位	口径26.6	細砂粒/良好/黄褐色	口縁部は横撫で。体部上半は横から斜めのヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。粉っぽい胎土。	
I 14	203 153	土師器 甕	北東部+29 口縁一部欠	口径11.5底径5.9 器高12.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めのヘラ削り。底部もヘラ削り。内面は撫で。	
I 15	203 153	土師器 甕	北東部-26 1/2	口径13.1底径6.5 器高13.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、輪積み痕。下半は縦のヘラ削り。下端に黒斑。内面はヘラ撫で。底部はヘラ削り。	
I 16	203 153	土師器 甕	カマド前0 1/2	口径12.8底径6.8 器高11.7	細砂粒・粗砂粒/良好/ 赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で後、下半に斜めの雑なヘラ削り。内面は撫で。内外面剥離。	
I 17	203	土師器 甕	西壁際-2 胴部中~底部	底径6.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/黄褐色	胴部外面上半は縦の雑なヘラ撫で。下半は横から縦の細かなヘラ撫で。内面も横のヘラ撫で、輪積み痕と細かなハゼ。	
I 18	203	土師器 甕	西壁際+1 頸部~底部	底径8.4	細砂粒・粗砂粒・片岩・ 石英/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面も撫で。下半の粗れ顕著。内面は横のヘラ撫で。	
I 19	203 153	土師器 甕	カマド内+3 3/4	口径17.1底径8.0 器高33.5	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のヘラ撫で。内面も横の強いヘラ撫で、ハゼ。	
I 20	203 153	土師器 甕	カマド内0 3/4	口径18.8底径7.0 器高31.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横撫で。胴部外面はヘラ撫で。内面も横のヘラ撫で、ハゼ。	
I 21	203 153	石製品 巡方	中央部北寄り-1	長4.2幅4.5 厚0.8重35.4	珪質頁岩	略方形だが3mmほど幅が広い。背面側は光沢を帯びているが、裏面側は線条痕が残る。潜り孔を縦位穿孔。	
I区3 住居							
I 22	204 154	土師器 杯	P2内+40 3/4	口径11.0器高3.3	細砂粒・角閃石/良好/黄褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間にわずかに撫での部分を残す。内面は撫で。内外面磨減。	

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 23	204 154	土師器 杯	P2内+28 4/5	口径12.6器高4.0	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。外面磨滅。粉っぽい胎土。	
I 24	204 154	土師器 杯	P2内+41 3/4	口径14.6器高4.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間にわずかに撫での部分を残す。	
I 25	204 154	土師器 杯	P2+16 2/3	口径11.9器高3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
I 26	204	土師器 杯	一括 1/4	口径12.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
I 27	204	土師器 皿	P2内+29 口縁～体部	口径15.4	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
I 28	204	土師器 杯	P2内+63 3/4	口径12.3器高4.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
I 29	204	土師器 杯	P2内+44 口縁片	口径11.8器高3.1	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(左回転か)。体部下端及び底部は回転ヘラ削り。	
I 30	204 154	須恵器 はそう	P2内+40 頸部～胴部	—	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。注口部は粘土を貼付した上に穿孔。胴部に平行沈線とクシの刺突を巡らす。肩部に厚く自然釉。	
I 31	204	土師器 鉢	P2内+10 口縁～体部	口径20.6	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内外面磨滅。	
I 32	204	須恵器 長頸壺	P2内+51 口縁～頸部	口径10.7	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。口縁部から頸部内面に自然釉。	
I 33	204 154	土師器 壺	P2内+27 口縁～胴部	口径23.8	細砂粒・角閃石/良好/赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横から斜めヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
I 34	204	土師器 甕	P2内+64 胴部下位～底部	底径6.3	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	胴部外面は撫で。下端に煤付着。内面は撫で、吸炭。底部に木葉痕。	
I 35	204	土師器 甕	P2内+23 胴部～底部	底径7.4	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤褐	胴部外面は斜めのヘラ削り。下端から底部に黒斑。内面は横のヘラ撫で。下位に接合痕。	
I 36	204 154	鉄製品 鎌	P2内+70	長26.3幅5.8 厚0.2重136		大型の製品で中央で折れている。実測側の刃部を研いでいたものと思われるが、錆のため判然としない。基調に柄の木質の残存は見られない。	

I 区4住居

I 37	205 154	土師器 杯	P2内+23 口縁・体部一部欠	口径11.3器高3.7	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
I 38	205 154	土師器 杯	中央部西寄り+1 3/4	口径12.2	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
I 39	205 154	土師器 杯	南西部+9 口縁一部欠	口径11.3器高3.9	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内外面磨滅。	
I 40	205 154	土師器 杯	南壁寄り+15 完形	口径12.2器高3.5	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内面磨滅。	
I 41	205 154	土師器 皿	P2内+28 口縁一部欠	口径14.3器高3.6	細砂粒・角閃石/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
I 42	205 154	土師器 皿	西部+6 4/5	口径14.3器高3.9	細砂粒・角閃石/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
I 43	205 154	須恵器 杯	南西部+17 口縁一部欠	口径12.6底径7.4 器高4.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ起こし無調整。外面から底部の反面に自然釉。	
I 44	205	土師器 甕	一括 口縁～胴部	口径17.6	細砂粒・粗砂粒・軽石/酸化焰/良好/にぶい赤褐	ロクロ整形(右回転)。肩部外面はロクロの撫で。胴部外面は縦から斜めのヘラ撫で。内面は縦の撫で。内面磨滅。	
I 45	205	土師器 甕	一括 口縁～胴部	口径19.6	細砂粒・角閃石/良好/灰褐	口縁部は横撫で、外面に輪積み痕。肩部外面は横のヘラ削り。内面は斜めのヘラ撫で。	
I 46	205 154	鉄製品 鎌	中央部東寄り+30	長5.2幅 3.1 厚0.2重13.2		有茎脇扶折柳葉鎌に分類されるもので刃部先端と茎を欠損している。錆化が進んでおりひび割れが顕著。	

I 区5住居

I 47	205 154	土師器 杯	カマド内+2 完形	口径12.4器高5.1	細砂粒/良好/橙	比較的シャープな作りで、口縁部は横撫で。口唇部は平坦。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。粉っぽい胎土。	
I 48	205	土師器 杯	南壁寄り+32 1/4	口径12.8器高5.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り、磨滅。内面は撫で。	
I 49	205	土師器 杯	カマド内+1 1/3	口径12.6器高5.9	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ撫で。口縁部から底部外面に煤付着。	
I 50	205	土師器 杯	貯蔵穴-2 口 縁部～底部片	口径12.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内外面ハゼ。	
I 51	205 154	土師器 甕	中央部+5 胴部～底部	底径9.0	粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で、下半に接合痕と輪積み痕。	
I 52	205 154	土師器 甕	カマド+8 口縁一部欠	口径10.8器高6.2	細砂粒・角閃石/良好/赤褐	口縁部は横撫で。体部は横のヘラ磨き。底部はヘラ撫で。内面もヘラ撫で。	
I 53	205 154	土師器 甕	貯蔵穴-2 2/3	口径14.3底径5.1 器高12.1	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は雑な撫で、接合痕明瞭。底部はヘラ削り。内面は撫で。内外面剥離。	
I 53	205	土師器 甕	貯蔵穴-2 2/3	口径14.3底径5.1 器高12.1	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は雑な撫で、接合痕明瞭。底部はヘラ削り。内面は撫で。内外面剥離。	
I 54	205	土師器 甕	南壁際+1 口縁部片	口径15.0	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。外面煤付着。胴部外面は縦のヘラ削り。内面は撫で。	
I 55	205	土師器 甕	北部+14 胴部～底部	底径6.2	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙	胴部外面は斜めのヘラ削り。内面のハゼ顕著。下端から底部に黒斑。	
I 56	205	土師器 甕	一括 胴部～底部片	底径6.0	粗砂粒・小礫/良好/にぶい橙	胴部外面及び底部はヘラ削り。内面はヘラ撫で。外面磨滅。	I 39住
I 57	205	土師器 甕	中央部+27 底部片	底径6.3	細砂粒・粗砂粒・石英/良好/にぶい黄橙	胴部外面及び底部はヘラ削り。内面は雑な撫で。	
I 58	205 154	砥石 礫砥石?	南壁際+8	長22.7幅9.1 厚5.5重1971.0	砂岩	四面使用。裏面側に刃ならし傷がある。小口部両端には粗い整形痕が残る。	

I 区6住居

I 59	206	土師器 杯	埋没土 口縁～体部片	口径12.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。	
I 60	206 155	土師器 杯	カマド内-1 口縁一部欠	口径12.1器高5.4	細砂粒・軽石/良好/橙	シャープな作りで口縁部は横撫で、口唇部には凹線を巡らす。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
I 61	206 155	土師器 杯	北西隅寄り+4 口縁一部欠	口径12.2器高5.7	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り後、ヘラ磨き。内面は雑なヘラ撫で、剥離。	
I 62	206 155	土師器 甕	北壁寄り0 完形	口径25.1底径9.2 器高31.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は縦のヘラ削り、上位に黒斑。下半は斜めのヘラ削り。内面は縦の丁寧な撫で、下端に茶色の付着物。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 63	206	土師器 甕	一括 底部片	底径3.9	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい黄橙	胴部外面は斜めのヘラ削り。内面はヘラ撫で。底部に木葉痕。	
I 64	206 155	土師器 甕	カマド内-2 口縁一部欠	口径17.9底径4.5 器高35.4	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦、下端は斜めのヘラ削り。内面は撫で、ハゼ。下半に接合痕。外面磨滅。	
I 65	206	土師器 甕	中央部+1 胴中位～底部	底径5.8	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい赤褐	胴部外面は縦から斜めのヘラ削り。内面は撫で、ハゼ顕著。	
I 66	206	土師器 甕	北壁寄り+1 胴下半～底部	底径4.7	細砂粒・粗砂粒・軽石/ 良好/にぶい黄橙	胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は斜めの撫で、接合痕。	
I 区7住居							
I 67	206 155	土師器 杯	南部+5 口縁一部欠	口径13.3器高4.2	細砂粒・輝石/良好/橙	口縁部は横撫で。外面磨滅。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、ハゼ。	
I 68	206	土師器 皿	一括 口縁～底部片	口径14.9	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りで、間に撫での部分を残す。内面は撫で。使用によるものか弱い光沢あり。	
I 69	206 155	須恵器 蓋	南西隅寄り+15 完形	口径12.2摘5.0 器高3.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ回転(右回転)。天井部外面に回転ヘラ削り。摘みは環状摘みで貼付け。内面に重ね焼き痕。	
I 70	206	須恵器 蓋	南ベルト一括 摘部～体部	—	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ回転(右回転)。天井部外面に回転ヘラ削り。摘みは環状摘みで貼付け。	
I 71	206	須恵器 長頸壺	南部+24 頸部	—	細砂粒/還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形。整形はやや雑。頸部外面の一部に自然釉。	
I 72	206 155	敲石 棒状礫	中央部+11	長14.9幅7.2 厚3.8重632.0	粗粒輝石安山岩	小口部両端・両側縁に敲打痕が残る。小口部には敲打痕と摩耗痕が混在する。	
I 区8住居							
I 73	206 155	土師器 杯	カマド内+11 口縁一部欠	口径12.6器高5.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 軽石/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り後、丁寧なヘラ撫で。内面は丁寧なヘラ撫で後、やや粗い放射状のヘラ磨き。ハゼ顕著。	
I 74	206 155	土師器 杯	カマド内+11 口縁一部欠	口径12.1器高5.1	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で、ハゼ顕著。	
I 75	206	土師器 杯	南壁際+4 1/2	口径12.2器高4.8	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内外面煤付着。	
I 76	206	土師器 甕	一括 底部	底径6.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 灰黄褐	胴部外面は縦のヘラ削り。底部はヘラ削り。内面はヘラ撫で。	
I 77	206	土師器 甕	カマド右袖+9 胴部～底部	底径6.6	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	胴部外面は縦の雑な撫で。内面は横のヘラ撫で、輪積み痕。	
I 区9住居							
I 78	206 155	土師器 杯	カマド内+3 2/3	口径11.2器高4.9	細砂粒・角閃石/良好/ 明赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。	
I 79	206	土師器 杯	北西部-2 1/2	口径14.0器高5.2	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。	
I 80	206 155	土師器 杯	カマド内+3 口縁一部欠	口径13.5器高5.9	細砂粒/良好/橙	外縁は沈線で形成。口縁部は横撫で、外面に輪積み痕。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。内外面磨滅。	
I 81	206	土師器 杯	カマド一括 口縁～体部	口径14.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。外面及び口縁部内面にハゼ。	
I 82	206 155	土師器 杯	カマド内+3 1/2	口径15.8器高7.1	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。底部は雑なヘラ削り。内面は撫で後、斜放射状ヘラ磨き。	
I 83	206	土師器 台付鉢か	カマド内-7 脚部	底径5.3 高台径9.4	細砂粒/良好/にぶい赤褐	胴部外面は斜めのヘラ磨き。内面は撫で、ハゼ。脚部外面上端に煤付着。	
I 84	206 155	土師器 椀	一括 口縁一部欠	口径14.4底径6.5 器高5.1	細砂粒・粗砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。体部は斜めの手持ちヘラ削り。高台は付高台。内面は丁寧なヘラ磨き後の黒色処理。一部焼き戻され変色。	
I 85	206	粘土塊	カマド一括	長3.9幅6.3厚1.2	細砂粒・角閃石/良好/橙	粘土塊を指先でつぶした様な状態で焼成されている。	
I 86	206 155	石製模造品 白玉	南壁際+1	長0.6幅0.6 厚0.3重0.2	滑石	完成状態。両端の折断面は丁寧に研磨され、平坦な仕上がり。体部には縦位の粗い線状痕が残る。	
I 87	207	土師器 甕	カマド内+1 胴部下位～底部	底径8.4	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 軽石/良好/にぶい黄褐	胴部外面は横のヘラ撫で。底部はヘラ削り。内面はハケ目(1cmに12本か)。	
I 88	207	土師器 甕	カマド内+7 口縁～胴部	口径17.5	細砂粒・軽石/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部は斜めのヘラ削り。内面は撫で、ハゼ顕著。	
I 89	207 155	土師器 甕	カマド内+15 口縁～胴部	口径17.3	細砂粒・角閃石/良好/ 黒褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦から斜めのハケ目(1cmに4本)。内面は横のヘラ撫で。	
I 90	207 155	土師器 甕	南西隅+2 口縁～胴部	口径19.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面はハケ状工具による縦の撫で後、斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ削り、輪積み痕。	
I 91	207 155	土師器 甕	カマド内+1 口縁～胴部下半	口径14.8	細砂粒・角閃石/良好/ 灰白	口縁部は横撫で。胴部外面は撫で後、上半は縦のヘラ磨き。下半は不明、粗れ顕著。内面は撫で。	
I 区1 竪穴							
I 92	207 156	深鉢	口縁～胴下位	口径(31.0) 現存器高32.6	細砂、細礫、繊維/ふつう/ 明赤褐	平縁。胴中位が膨らみ、頸部でくびれて口縁が開く器形。屈曲部に横位平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に菱形文を横位に連ねる。内削ぎの口唇外端に半截竹管内皮による刻みを付す。屈曲部下はR L、L Rを羽状施文。	有尾式
I 93	207 156	深鉢	口縁～胴下位	口径29.0 現存器高30.3	細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐	平縁で緩く外屈する器形。屈曲部に横位平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に菱形文を横位に連ねる。口唇外端に刻みを付す。	有尾式
I 94	207 156	深鉢	口縁～胴下位	口径19.6 現存器高24.9	細砂、細礫、繊維/ふつう/ 明赤褐	緩やかな波状口縁で、緩く外屈する器形。口唇内削ぎ。屈曲部に横位平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に菱形文を描く。文様帯下はR L横位施文。	有尾式
I 95	207 156	深鉢	口縁部破片	口径(30.5)	粗砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	緩やかな波状口縁で、緩く外屈する器形。口縁下、屈曲部に横位平行沈線をめぐらして口縁部文様帯を区画、文様帯内に2条の平行沈線による鋸歯状文を施す。口縁外端に刻みを付す。	有尾式
I 96	208 156	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	胴下位がくの字状に張り出し、頸部で外屈する器形。屈曲部に平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に菱形モチーフを描く。地文にR L、L Rを羽状施文。	有尾式
I 97	208 156	深鉢	口縁～胴下位	口径(14.0) 現存器高10.4	細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	小形。緩い波状口縁で、くの字状に外屈する器形。0段多条L R、R L羽状施文を地文とし、口縁下、屈曲部に平行沈線を2条づつめぐらす。	有尾式
I 98	208 156	深鉢	口縁～胴下位	口径(28.0)	細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	平縁。ほぼ直立し、口縁が緩く内湾する。無節L rを横位施文する。	黒浜式
I 99	208 156	深鉢	口縁～胴部	口径(36.0)	粗砂、繊維/ふつう/赤褐	ボウル状の器形。無節L rを横位施文するが、口縁部と胴下位のみで胴中位は無文として施文しない。補修孔あり。	黒浜式
I 100	208 156	深鉢	口縁～胴部		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい橙	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜式
I 101	208 156	深鉢	口縁～胴部	口径(11.4)	細砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/橙	小形。緩い波状口縁。斜行する2条巻の捺系文R・Lを斜位施文する。	黒浜式

遺物観察表

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 102	208 156	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	くの字状に外屈する器形。無節R l、L rを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 103	208 156	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ /橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 104	208 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/ /にぶい橙	無節L r、R lを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 105	208 157	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい赤褐	波状口縁で口唇内削ぎ。連続爪形文により菱形文を描く。	有尾式
I 106	208 157	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐	連続爪形文を横位にめぐらす。	有尾式
I 107	208 157	深鉢	口縁部破片		細砂、片岩、繊維/ふつう/ /黄灰	波状口縁。口縁に沿った斜行する平行沈線を施す。	有尾式
I 108	208 157	深鉢	口縁部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ /灰黄褐	緩い波状口縁。平行沈線により菱形文を描く。	有尾式
I 109	208 157	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつう/ /にぶい黄橙	平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式
I 110	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/良好/ /にぶい黄橙	平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式
I 111	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫、片岩、繊維/ /ふつう/赤褐	波状口縁で口唇内削ぎ。R L、0段多条L R羽状施文を地文とし、口縁に沿った斜行する平行沈線を多段に施す。	有尾式
I 112	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/良好/橙	緩い波状口縁で口唇内削ぎ。無節R l、L r羽状施文を地文とし、連続爪形文を横位にめぐらす。	有尾式
I 113	209 157	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい黄橙	平行沈線により鋸歯状ないし菱形モチーフを描く。I 114と同一個体。	有尾式
I 114	209 157	深鉢	胴部破片		I 113と同一	R Lを地文とし、横位平行沈線をめぐらす。I 113と同一個体。	有尾式
I 115	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/ /黒褐	緩く外反する器形。口縁下に2条の平行沈線をめぐらし、以下、縦位の平行沈線を充填施文する。I 116と同一個体。	黒浜式
I 116	209 157	深鉢	口縁部破片		I 115と同一	I 115と同一個体。	黒浜式
I 117	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐	沈線により斜格子目文を描く。	黒浜式
I 118	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/橙	横位、縦位、斜行する平行沈線を施す。I 119と同一個体。	黒浜式
I 119	209 157	深鉢	胴部破片		I 118と同一	I 118と同一個体。	黒浜式
I 120	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ふつう/ /灰黄褐	口縁が緩く外反。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 121	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/黒褐	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜式
I 122	209 157	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	無節R l、L rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 123	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/橙	無節L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 124	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/ /赤褐	緩い波状口縁で口唇内削ぎ。0段多条L Rを横位施文する。	有尾式
I 125	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい橙	口縁がくの字状に短く外反。R Lを横位施文する。	黒浜式
I 126	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ /灰黄褐	斜行する2条巻の擦糸文R・RとL・Lを横位施文する。	黒浜式
I 127	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/ /黒褐	2条巻の擦糸文R・RとL・Lを横位施文する。口唇部にも施文。	黒浜式
I 128	209 157	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ /にぶい赤褐	結節の無節R lを横位施文する。I 153と同一個体。	黒浜式
I 129	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつう/ /にぶい黄褐	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 130	209 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 131	209 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ /ふつう/明黄褐	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 132	209 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ /ふつう/にぶい赤褐	無節L r、R lを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 133	209 157	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	0段多条R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 134	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい褐	無節L r、R lを羽状施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 135	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐	R L、無節L rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 136	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/褐灰	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 137	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ /黒褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 138	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ /ふつう/灰黄褐	無節R l、L rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 139	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/明赤褐	0段多条R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 140	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 141	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	L Rを横位施文する。I 142と同一個体。	黒浜・有尾
I 142	210 157	深鉢	胴部破片		I 141と同一	I 141と同一個体。	黒浜・有尾
I 143	210 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ /ふつう/にぶい橙	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 144	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ /ふつう/橙	胴下位の膨らむ部位。無節R lを横位施文する。	黒浜・有尾

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 145	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	無節R 1を横位施文する。	黒浜・有尾
I 146	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 147	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	附加条3種軸輻不明+rを横位施文する。	黒浜式
I 148	210 157	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	附加条2種L r+L・L、R l+R・Rを羽状施文する。	黒浜式
I 149	211 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/赤褐	上半に無節R 1、下半に2条巻の擦糸文R・Rを横位施文する。I 150	黒浜式
I 150	211 157	深鉢	胴部破片		I 149・151と同一	I 149・151と同一個体。	黒浜式
I 151	211 157	深鉢	胴部破片		I 149・150と同一	I 149・150と同一個体。	黒浜式
I 152	211 157	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐	2条巻の擦糸文Rを横位施文する。	黒浜式
I 153	211 157	深鉢	胴部破片		I 128と同一	I 128と同一個体。	黒浜式
I 154	211 157	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/橙	無節R 1を斜位施文する。	黒浜・有尾
I 155	211 157	深鉢	底部破片	底径(10.0)	細砂、繊維/ふつう/黒褐	底部際に横位平行沈線をめぐらして区画、区画内は波状平行沈線を横位多段に施す。内面研磨。	黒浜式
I 156	211 157	深鉢	底部破片		細砂、繊維/良好/明赤褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 157	211 157	深鉢	底部破片	底径(11.0)	細砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/良好/橙	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 158	211 157	深鉢	底部破片	底径11.0	細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/良好/橙	無節R 1を横位施文する。	黒浜・有尾
I 159	211 157	深鉢	底部破片	底径9.5	細砂、繊維/ふつう/橙	上げ底気味。R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 160	211 158	深鉢	底部破片	底径6.8	粗砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい橙	残存部は無文。	黒浜・有尾
I 161	211 158	深鉢	底部破片	底径7.5	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい橙	無節R 1を横位施文する。	黒浜・有尾
I 162	211 158	深鉢	底部破片	底径6.4	粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/橙	—	黒浜・有尾
I 163	211	深鉢	底部破片	底径(12.4)	細砂、黒色粒、繊維/ふつう/ 橙	—	黒浜・有尾
I 164	211 158	石鏃 凹基無茎鏃		長1.9幅1.2 厚0.3重0.6	黒色頁岩	完成状態。裏面側の加工が浅く、背面側加工は厚い。断面D次状を呈する。	
I 165	211 158	石鏃 凹基無茎鏃		長(2.0)幅1.2 厚0.4重0.5	珪質頁岩	完成状態?側縁整形は粗く、先端部作出は甘い。断面D字状を呈する。	
I 166	211 158	石鏃 凹基無茎鏃		長(2.7)幅2.0 厚0.4重0.9	チャート	完成状態。概して薄く作出され、完成度は高い。先端部を欠損する。欠損理由は不明。	
I 167	211 158	石匙 縦型		長(5.0)幅(3.2) 厚0.6重9.5	チャート	剥片周辺に浅い剥離を施し、器体を作成する。光沢の強いチョコレート頁岩を用いる。	
I 168	211 158	石匙 縦型		長7.4幅5.7 厚1.6重42.2	黒色頁岩	剥片の打面側に摘み部を作成する。側縁加工は貧弱で、形状を整える程度。	
I 169	211 158	削器 幅広剥片		長8.8幅6.0 厚1.8重66.9	黒色頁岩	石器端部を浅く加工して、弧状の刃部を作成する。石器形状・側縁加工の属性は片刃石斧に近い。	
I 170	211 158	尖頭状石器 厚型剥片		長13.5幅4.0 厚3.6重173.4	黒色頁岩	各面とも粗く加工した後、エッジを細部加工する。先端が弱く摩耗、敲打具的に使用か。断面三角形形状。	
I 171	211 158	磨製石斧 乳房状		長(15.1)幅(5.7) 厚3.1重442.6	変玄武岩	完成状態。頭部・側縁に未研磨部分を残す。節理面で刃部側を欠く。	
I 172	212 158	尖頭状石器 厚型剥片		長(8.3)幅3.2 厚2.7重78.5	黒色頁岩	各面とも粗く加工した後、エッジを細部加工する。先端は両端とも破損している。断面三角形形状。	
I 173	212 158	尖頭状石器 厚型剥片		長10.4幅3.3 厚2.6重81.2	黒色頁岩	断面三角形形状を呈す。背面側を粗く加工した後、裏面側を浅く平坦剥離して石器を作成する。製作意図は不明。	
I 174	212 158	凹石 扁平楕円礫		長11.0幅9.7 厚4.0重664.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、礫中央・両側縁に浅い敲打痕がある。よく使い込まれている。	
I 175	212 158	凹石 扁平楕円礫		長10.8幅7.2 厚4.2重440.1	粗粒輝石安山岩	石材が粗く不明瞭だが、表裏面とも摩耗する。背面側の敲打痕は広く広がる。	
I 176	212 158	凹石 扁平楕円礫		長11.7幅9.5 厚4.3重673.1	粗粒輝石安山岩	石材が粗く不明瞭だが、表裏面とも摩耗する。敲打痕は背面側の中央付近に目立つ。	
I 177	212 158	凹石 扁平楕円礫		長8.2幅7.2厚3.6 重307.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、漏斗状の孔がある。小口部・側縁の打痕は著しい。	
I 178	212 158	磨石 扁平楕円礫		長9.1幅5.8厚2.9 重232.1	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗する。背面側・下端側の小口部に弱い敲打痕がある。	
I 179	212 158	凹石 扁平楕円礫		長11.8幅8.4 厚3.6重444.1	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、漏斗状の孔がある。小口部・側縁の打痕は乏しい。	
I 180	212 158	磨石 扁平円礫		長10.5幅9.6 厚4.5重640.2	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、中央付近に敲打痕がある。磨石として激しく使い込まれ、稜が生じている。	
I 181	212 158	敲石 幅広剥片		長9.1幅7.4 厚2.3重190.0	細粒輝石安山岩	表裏面を打ち欠き削器状の刃部を作成後、エッジを敲打する。エッジは敲打され、部分的に著しく摩耗する。	
I 182	212 158	敲石 磨製石斧神用		長13.5幅7.0 厚4.0重491.3	変質玄武岩	刃部を破損したのち再生を試みたものだが、最終的には敲打具として使用したもの。	
I 183	212 158	多孔石 楕円礫		長25.0幅7.1 厚11.3重2097.3	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面に多数の孔を穿つ。裏面側の孔については不明だが、破壊部の端に漏斗状の孔の痕跡が残る。	
I 184	212 158	多孔石 亜角礫		長12.4幅6.2 厚6.2重340.5	粗粒輝石安山岩	断面三角形形状を呈す各面に漏斗状の孔を穿つ。礫稜線は丸味を帯びる程度で、河床礫とは異なる。	
I 185	212 158	石製品 鉢型		口径5.4器高2.9 重17.0	軽石	体部から口縁にかけて内湾する。底部平底。体部外面は研磨による面取り整形を施す。	
I 186	212 158	砥石 扁平礫		長11.8幅9.3 厚1.8重180.3	牛伏砂岩	石材が粗く、線条痕は確認できないが、砥石周辺部が研ぎ減る他、中央付近が表裏面とも浅く窪む。	

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 187	212 158	石製研磨具? 扁平楕円磔		長6.6幅5.8 厚3.2重187.0	粗粒輝石安山岩	表裏両面とも摩耗する。石製研磨具とするにはやや厚く、磨石とすべきかもしれない。	
I 区 2 壺穴							
I 188	213 158	深鉢	口縁～胴下位	口径18.5 現存器高23.1	粗砂、細礫/ふつう/ 明赤褐	0段多条の複節 L R L と前々段反撚 R L L を羽状施文する。胴下位に接合痕が見られ、下位は R L L のみが施文される。	諸磯 a 式
I 189	213 158	深鉢	口縁～胴部	口径(26.0)	細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/黒褐	無節 R l、L r を羽状施文する。	黒浜式
I 190	213 158	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/明赤褐	くの字状に外屈する器形。R L、L R を羽状施文。部分的に菱形状に施文する。	黒浜式
I 191	213 158	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	緩い波状口縁。口縁に沿った斜行する平行沈線を多段に施す。口唇内削ぎ。	有尾式
I 192	213 158	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐	横位、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
I 193	213 158	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R L 横位施文を地文とし、横位、斜行する平行沈線を施す。口唇内削ぎ。	有尾式
I 194	213 158	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	L R、R L 羽状施文を地文とし、横位、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
I 195	213 158	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐	くの字状に外屈。横位、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
I 196	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	口縁が緩く内湾、小突起を付す。連続爪形文により米字文状モチーフを描き、刺突を施す。	黒浜式
I 197	213 158	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	間隔の空く連続爪形文を横位 2 条めぐらす。内面研磨。	黒浜式
I 198	213 158	深鉢	胴部破片		細砂、石英、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	連続爪形文による縦位区画、楕円状や斜位のモチーフを描く。	黒浜式
I 199	213 158	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	口縁が緩く内湾。横位隆帯をめぐらして幅狭な口縁部文様帯を区画、文様帯内に刺切文を充填施文する。隆帯下は R L 横位施文。	前期前葉
I 200	213 158	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	口縁が緩く内湾。L R を横位施文し、口縁下に間隔の空く連続爪形文を 2 条めぐらす。口唇部、内面研磨。	黒浜式
I 201	213 158	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	口縁が緩く内湾。R L を横位施文し、口縁下に 1 条の平行沈線をめぐらす。	黒浜式
I 202	213 158	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	L R、R L 羽状施文を地文とし、複数条の連続爪形文を横位带状にめぐらす。一部平行沈線も見られる。	黒浜式
I 203	213 158	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい橙	L R、R L 羽状施文を地文とし、連続爪形文を横位、斜位に施す。	有尾式
I 204	213 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/暗赤褐	くの字状に外屈。L R、R L を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 205	213 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/暗赤褐/ふつう	L R、R L 羽状施文を地文とし、横位平行沈線を施す。	黒浜・有尾
I 206	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/暗赤褐	無節 R l、L r を羽状施文する。内面研磨。	黒浜式
I 207	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/褐	口縁が緩く内湾。無節 R l、L r を羽状施文する。	黒浜式
I 208	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	R L、0 段多条 L R を羽状施文する。	黒浜式
I 209	213 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	R L、L R を羽状施文する。	黒浜式
I 210	214 159	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/赤褐/ふつう	L R、R L を羽状施文する。内面研磨。I 215 と同一個体。	黒浜式
I 211	214 159	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/褐	R L、L R を羽状施文する。	黒浜式
I 212	214 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/橙	口縁に小突起を付す。R L、L R を羽状施文する。	黒浜式
I 213	214 159	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい褐	L R、無節 R l を羽状施文する。	黒浜式
I 214	214 159	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい褐	L R を横位施文する。	黒浜式
I 215	214 159	深鉢	口縁部破片		I 210 と同一	R L を横位施文する。内面研磨。I 210 と同一個体。	黒浜式
I 216	214 159	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	R L を横位施文する。	黒浜式
I 217	214 159	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/にぶい黄橙/ふつう	くの字状に外屈。R L、L R を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 218	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/暗赤褐	くの字状に外屈。R L、L R を羽状施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 219	214 159	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄褐	くの字状に外屈。L R、R L を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 220	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/暗赤褐	くの字状に緩く外屈。無節 L r を横位施文する。	黒浜・有尾
I 221	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	無節 L r、R l を羽状施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 222	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	L R、R L を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 223	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/明赤褐	R L、L R を菱形施文する。	黒浜・有尾
I 224	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	無節 L r、R l を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 225	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/明赤褐	無節 L r、R l を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 226	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/良好/明赤褐	無節 R l、L r を菱形施文する。	黒浜・有尾
I 227	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	附加条 1 種 R L+R を横位施文する。	黒浜式
I 228	214 159	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ 暗赤褐	R L を横位施文する。	黒浜・有尾

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 229	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	附加条1種R L+Lを横位施文する。	黒浜式
I 230	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ にぶい橙/ふつう/暗赤褐	R Lを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 231	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/暗赤褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 232	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/黒褐	無節L r、R Lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 233	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐	無節R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 234	214 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 235	214 159	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 236	214 159	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/黒褐	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 237	215 159	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/良好/ 橙	附加条2種L r+L・L、R L+R・Rを羽状施文する。	黒浜式
I 238	215 159	深鉢	底部破片	底径7.7	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/赤褐	無節L rを横位施文する。底面研磨。	黒浜・有尾
I 239	215 159	深鉢	底部破片	底径9.2	細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 240	215 159	深鉢	口縁～胴部	口径(12.0)	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	頸部で外反し、口縁が緩く内湾する器形。口縁下、頸部に2条の連続 爪形文をめぐらして口縁部文様帯を区画、文様帯内に条線による肋骨 文を施す。縦位区画は円形刺突、平行沈線。尖頭状の口唇部に刻みを めぐらす。内面研磨。	諸磯a式
I 241	215 159	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/良好/ 暗赤褐	R L横位施文を地文とし、平行沈線による米字文状のモチーフを描く。 縦位沈線上に円形刺突を施す。	諸磯a式
I 242	215 159	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	口縁下に連続爪形文を2条施し、R Lを横位施文する。	諸磯a式
I 243	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/良好/にぶい橙	R L横位施文を地文とし、連続爪形文を横位にめぐらす。	諸磯a式
I 244	215 159	深鉢	口縁部破片		細砂/良好/にぶい赤褐	口縁が緩く外反。結節の反撓L Lを横位施文する。	諸磯a式
I 245	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐	L Rを横位施文する。	諸磯a式
I 246	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/ にぶい赤褐	反撓L Lを横位施文する。	諸磯a式
I 247	215 159	深鉢	胴部破片		I 246・248～250と同一	I 246・248～250と同一個体。	諸磯a式
I 248	215 159	深鉢	胴部破片		I 246・247・249・250 と同一	I 246・247・249・250と同一個体。	諸磯a式
I 249	215 159	深鉢	胴部破片		I 246～248・250と同一	I 246～248・250と同一個体。	諸磯a式
I 250	215 159	深鉢	胴部破片		I 246～249と同一	I 246～249と同一個体。	諸磯a式
I 251	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/橙	異条R Lを横位施文する。	諸磯a式
I 252	215 159	深鉢	胴部破片		I 251と同一	I 251と同一個体。	諸磯a式
I 253	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/にぶい橙	異段R(L L・L)を横位施文する。I 257と同一個体。	諸磯a式
I 254	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/ふつう/ にぶい赤褐	異段R(L L・L)を横位施文する。	諸磯a式
I 255	215 159	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/ 明赤褐	L Rを横位施文する。	諸磯a式
I 256	215 159	深鉢	底部破片		粗砂/良好/にぶい赤褐	R Lを横位施文する。底面研磨。	諸磯a式
I 257	215 159	深鉢	胴部破片		I 253と同一	I 253と同一個体。	諸磯a式
I 258	215 159	打製石斧 短冊型		長(9.8)幅6.4 厚2.6重157.6	ホルンフェルス	未製品。刃部・側縁のエッジは新鮮。器体上半部を欠損する。ホルンフェ ルスとしては珪化が著しい。	
I 259	215 159	凹石 扁平楕円礫		長9.2幅7.9 厚4.4重464.5	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、背面側中央付近に敲打痕が集中する。	
I 260	215 159	凹石 扁平楕円礫		長10.6幅8.9 厚4.4重630.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、中央付近に敲打痕がある。側縁を部分的に 破損する。	
I 261	215 159	凹石 扁平棒状礫		長(7.4)幅6.0 厚2.6重192.8	ホルンフェルス	小口部に敲打痕が明瞭に残る。器体の上半部のみ残り、以下を大きく 破損する。	
I 262	215 159	石皿 有縁		長(12.7)幅(31.5) 厚8.2重4350.0	粗粒輝石安山岩	背面上縁および裏面側に漏斗状の凹部。機能部は浅く窪む程度で、使 用頻度は低い。被熱破損。	
I 263	215 159	多孔石 楕円礫		長20.0幅14.3 厚10.5重3327.2	粗粒輝石安山岩	全面に孔を穿つ。孔はランダムに穿たれ、特定の場所に集中するはない。 裏面側の中央付近が破損。	
I 区3堅穴							
I 264	216 160	深鉢	口縁部破片	口径(21.5)	粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい赤褐	口縁に小突起を付す。R Lを地文とし、平行沈線を間隔をあけて横位 に複数条、口縁下に波状文を2条めぐらす。	諸磯a式
I 265	216 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	R Lを地文とし、連続爪形文をめぐらして胴上位に文様帯を区画。文 様帯内に連続爪形文による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。	諸磯a式
I 266	216 160	深鉢	口縁～胴部	口径(16.6)	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/淡黄	1条の横位平行沈線をめぐらして口縁部文様帯を区画、文様帯内に横 位、斜行する平行沈線を施す。	諸磯a式
I 267	216 160	浅鉢	口縁～底部	口径(19.7)底径8.1 器高13.1	細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁が水平でないゆがんだボール状を呈す。無節L rを地文とし、胴 上半に平行沈線による木の葉状などの幾何学モチーフを描く。	諸磯a式
I 268	216 160	深鉢	口縁～胴部	口径22.2	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	口縁が緩く開く器形。R Lを横位施文する。	諸磯a式
I 269	216 160	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつう/橙	R Lを横位施文する。部分的に結節が見られる。	諸磯a式
I 270	216 160	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/橙	結節R Lを横位施文する。	諸磯a式

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 271	216 160	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	R L 横位施文を地文とし、横位、斜位の平行沈線を施す。	有尾式
I 272	216 160	深鉢	胸部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	コンパス文(変形爪形文)を横位にめぐらす。	黒浜式
I 273	216 160	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R L を横位施文する。	黒浜式
I 274	216 160	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐	L R を横位施文する。	黒浜式
I 275	216 160	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	附加条 1 種 L R + R を横位施文する。	黒浜式
I 276	216 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐	附加条 1 種 L R + R を横位施文する。	諸磯 a 式
I 277	216 160	深鉢	胸部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	無節 R 1 を横位施文する。	黒浜・有尾
I 278	216 160	深鉢	底部破片	底径(11.0)	粗砂、細礫、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐	台付き。R L を横位施文する。	黒浜式
I 279	216 160	深鉢	底部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	台付き。残存部は無文。	黒浜式
I 280	216 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁に肥厚した小突起を付す。横位、波状の条線をめぐらし、円形刺突を縦位に配す。	諸磯 a 式
I 281	216 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/黒褐	口縁が緩く外反。横位、波状の条線を多段に施す。	諸磯 a 式
I 282	216 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	横位、波状の条線をめぐらし、円形刺突を垂下させる。	諸磯 a 式
I 283	216 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	横位、波状の条線を交互多段に施す。	諸磯 a 式
I 284	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐	横位、波状の条線を交互多段に施し、円形刺突を縦位に配す。下半は R L を横位施文。I 285・286 と同一個体。	諸磯 a 式
I 285	217 160	深鉢	胸部破片		I 284・286 と同一	I 284・286 と同一個体。	諸磯 a 式
I 286	217 160	深鉢	胸部破片		I 284・285 と同一	I 284・285 と同一個体。	諸磯 a 式
I 287	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒 ふつう/明赤褐	横位、波状の条線を交互多段に施し、刺突を縦位に配す。文様帯下は R L 横位施文。	諸磯 a 式
I 288	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐	横位、波状の条線を交互多段に施す。	諸磯 a 式
I 289	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	横位、波状の条線を交互多段に施す。	諸磯 a 式
I 290	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/ にぶい橙	口縁が緩く外反。集合沈線により米字文状モチーフを描く。縦位区画は 1 条の沈線を垂下。	諸磯 a 式
I 291	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐色	条線により米字文状モチーフを描く。縦位区画は円形刺突を垂下。	諸磯 a 式
I 292	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒、片岩/良好/ にぶい褐	多条沈線により米字文状モチーフを描く。文様帯下は R L 横位施文。	諸磯 a 式
I 293	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	山形の波状口縁で口唇肥厚。口縁に沿って連続爪形文を施し、波頂部下に円孔を穿つ。	諸磯 a 式
I 294	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英/良好/ 橙	山形の波状口縁。口縁に沿って連続爪形文を施し、波頂部下に円孔を穿つ。	諸磯 a 式
I 295	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	口縁が緩く外反。口縁下に 3 条の連続爪形文をめぐらし、以下、R L を横位施文する。内面研磨。	諸磯 a 式
I 296	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	口縁が緩く外反。連続爪形文を横位多段に施す。内面研磨。	諸磯 a 式
I 297	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	口縁が緩く外反し、口唇外削ぎ。連続爪形文を横位多段にめぐらし、円形刺突を施す。	諸磯 a 式
I 298	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	口縁が緩く外反。連続爪形文を横位多段に施し、間隙に円形刺突を縦位に配す。	諸磯 a 式
I 299	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫、白色粒、 黒色粒/良好/浅黄橙	口縁が緩く外反。口縁下に隆帯をめぐらして段帯部を作出、頂部に斜位の刻みを付す。横位平行沈線を多段に施す。	諸磯 a 式
I 300	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/明 赤褐	刺突列を横位多段に施す。	諸磯 a 式
I 301	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、黒色粒/良好/赤褐	斜位杵状、横位の連続爪形文を施す。	諸磯 a 式
I 302	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/橙	横位、鋸歯状の連続爪形文を施す。文様帯下は R L 横位施文。	諸磯 a 式
I 303	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/浅黄橙	連続爪形文をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に横位、斜位の平行沈線を施す。文様帯下は R L 横位施文。	諸磯 a 式
I 304	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、片岩/良好/ にぶい橙	波状口縁で口縁外面肥厚。肥厚部に連続爪形文をめぐらし、頂部に斜位の刻みを付す。肥厚部下は R L を地文とし、連続爪形文や平行沈線により木葉文、菱形文など幾何学モチーフを描いて地文を磨り消す。	諸磯 a 式
I 305	217 160	浅鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	地文に R L を施し、1 条の平行沈線をめぐらして口縁部文様帯を区画。文様帯内に平行沈線による木葉文など幾何学モチーフを描き、地文を磨り消す。	諸磯 a 式
I 306	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/ふつう/橙	口縁下に 1 条の連続爪形文をめぐらして口縁部文様帯を区画。R L を地文とし、平行沈線による木葉文を描き、地文を一部磨り消す。	諸磯 a 式
I 307	217 160	浅鉢	胸部破片		粗砂/良好/橙	浮線を 2 条めぐらし、連続爪形文による木葉文を描く。浮線上位に円孔を配す。	諸磯 a 式
I 308	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、細礫/ふつう/ 明赤褐	連続爪形文による幾何学文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
I 309	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	連続爪形文による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R L 横位施文で磨り消し手法。内面研磨。	諸磯 a 式
I 310	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/にぶい橙	平行沈線による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
I 311	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒/良好/ にぶい赤褐	連続爪形文による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文は R L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
I 312	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい赤褐	連続爪形文をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に連続爪形文による木葉文など幾何学モチーフを描く。間隙に円形刺突を施文。地文は R L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 313	217	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	連続爪形文による木葉文を描き、間隙に円形刺突を施す。地文はR L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
I 314	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	連続爪形文による木葉文を描く。地文はR L横位施文で磨り消し手法。 内面研磨。	諸磯 a 式
I 315	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつつ/橙	連続爪形文による木葉文を描く。地文はR L横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
I 316	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	連続爪形文による木葉文を描く。地文はR L横位施文で磨り消し手法。 内面研磨。	諸磯 a 式
I 317	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	連続爪形文による木葉文を描く。地文はR L横位施文で磨り消し手法。 内面研磨。	諸磯 a 式
I 318	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	連続爪形文による木葉文を描く。地文はR L横位施文で磨り消し手法。 内面研磨。	諸磯 a 式
I 319	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	連続爪形文による木葉文を描く。	諸磯 a 式
I 320	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	斜位、弧状の連続爪形文を施す。	諸磯 a 式
I 321	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒/ふつつ/橙	平行沈線による木葉文を描く。	諸磯 a 式
I 322	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒/良好/ にぶい赤褐	平行沈線による木葉文を描く。地文はR L横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
I 323	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒 ふつつ/にぶい橙	R L横位施文を地文とし、横位、斜位の平行沈線を帯状に施して内部 を磨り消す。交点に円形刺突を施文。	諸磯 a 式
I 324	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	連続爪形文を横位にめぐらし、円形刺突を縦位に配す。地文にR L横 位施文。	諸磯 a 式
I 325	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/橙	R L横位施文を地文とし、連続爪形文を横位にめぐらす。	諸磯 b 式
I 326	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	R L横位施文を地文とし、連続爪形文を横位にめぐらす。	諸磯 a 式
I 327	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/橙	斜位に刻みを付した隆帯、連続爪形文を横位にめぐらす。	諸磯 a 式
I 328	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	屈曲する器形。屈曲部に連続爪形文をめぐらし、円形刺突を施す。横 位爪形文下はR L横位施文。	諸磯 a 式
I 329	217 160	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	R L横位施文を地文とし、連続爪形文を横位にめぐらす。	諸磯 a 式
I 330	217 160	深鉢	胸部破片		粗砂/良好/赤褐	屈曲する器形。屈曲部に弧状、横位平行沈線をめぐらす。横位平行沈 線下はR L横位施文。	諸磯 a 式
I 331	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい黄橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 332	217 160	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	口縁が緩く外反。R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 333	217 160	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/ 暗赤褐	口縁が緩く外反。R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 334	218 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/橙	L Rを横位施文する。	諸磯 a 式
I 335	218 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい赤褐	L Rを横位施文する。補修孔あり。	諸磯 a 式
I 336	218 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 337	218 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 338	218 160	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒、片岩/良好/ 橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 339	218 160	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 340	218 161	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	R Lを横位施文する。I 354と同一個体。	諸磯 a 式
I 341	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 342	218 161	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒、片岩/良好/ 橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 343	218 161	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 344	218 161	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 345	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 346	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい黄橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 347	218 161	深鉢	胸部破片		粗砂/良好/橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 348	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、黒色粒/良好/明 赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 349	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 350	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 351	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/にぶい黄橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 352	218 161	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	反摺R Rを横位施文する。	諸磯 a 式
I 353	218 161	浅鉢	胸部破片		粗砂、細礫/ふつつ/ にぶい橙	肩の部位。強く屈曲する器形。	前期後葉
I 354	218 161	深鉢	底部破片	底径(7.7)	I 340と同一	底部付近は器面調整による凹凸顕著。I 340と同一個体。	諸磯 a 式
I 355	218 161	深鉢	底部破片	底径(10.6)	粗砂/良好/暗赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 356	218 161	深鉢	底部破片	底径8.0	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 357	218 161	深鉢	底部破片	底径(4.7)	粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/暗赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 358	218 161	深鉢	底部破片	底径(6.0)	細砂、細礫、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄橙	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 359	218 161	深鉢	底部破片	底径(8.9)	粗砂、黒色粒/良好/暗 赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 360	218 161	深鉢	底部破片	底径6.5	粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/にぶい橙	多載竹管内皮による沈線を縦位、弧状に施す。	諸磯 a 式
I 361	218 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、石英/ふつう/ 明赤褐	浮線による横帯構成。斜位の刻みを付した3条1単位の浮線と、鋸歯状の刻みを付した2条1単位の浮線を交互多段に施すようだ。地文に結節R L横位施文。	諸磯 b 式
I 362	218 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒/ふつう/ 明黄褐	浮線による横帯構成。横帯間に渦巻状、X字状の浮線を施す。地文にR L横位施文。I 363と同一個体。	諸磯 b 式
I 363	218 161	深鉢	胴部破片		I 362と同一	I 362と同一個体。	諸磯 b 式
I 364	218 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/ふつう/ 灰黄褐	浮線による横帯構成。地文に無節L r、R lの結束羽状縄文を横位施文。	諸磯 b 式
I 365	218 161	深鉢	底部破片	底径11.1	粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい橙	浮線による横帯構成。	諸磯 b 式
I 366	219 161	打製石斧 分銅型?		長(6.9)幅6.1 厚2.2重108.5	細粒輝石安山岩	完成状態。左辺エッジは摩耗、右辺エッジは新鮮で、再生の可能性あり。上半部欠損。	
I 367	219 161	打製石斧 短冊型		長(3.2)幅(3.3) 厚1.2重12.7	黒色頁岩	頭部破片で、詳細は不明。側縁のエッジは新鮮であり、製作途上の破損品である可能性が高い。	
I 368	219 161	石鏃 凹基無茎鏃		長(1.8)幅(0.9) 厚0.4重0.3	黒曜石	未製品。剥離途中、先端部・左側縁から基部側の「返し部」を欠損する。	
I 369	219 161	凹石 扁平楕円礫		長17.3幅9.7 厚3.7重1046.9	粗粒輝石安山岩	表裏面とも著しく摩耗するほか、敲打痕がある。側面も敲打され、平坦面が形成されている。	
I 370	219 161	敲石 柱状礫		長13.0幅3.7 厚3.2重213.3	砂岩	やや薄い小口部先端に敲打痕、これに伴う衝撃剥離痕がある。	
I 371	219 161	台石 扁平楕円礫		長(18.3)幅(24.7) 厚5.1重3814.6	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗する。台石というより無緑の石皿として捉えるべきだろうか。	
I 372	219 161	多孔石 楕円礫		長15.0幅11.0 厚8.6重1633.1	粗粒輝石安山岩	礫中央付近に漏斗状の孔1を穿つ。部分的にススが付着しており、表裏面とも礫面は荒れている。	

I 区1集石

I 373 ~ 375	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐	口縁が緩く外反。撚糸文Rを縦位施文する。口唇部にも施文。補修孔あり。I 378と同一個体。I 374、補修孔あり。	井草II式
I 376 ・377	219 161	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/良好/赤褐	口縁が緩く外反。撚糸文Rを縦位施文する。口唇部にも施文。	井草II式
I 378	219 161	深鉢	胴部破片		I 373 ~ 375と同一	I 373 ~ 375と同一個体。	井草II式
I 379	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、石英/良好/ 橙	撚糸文Rを縦位施文する。口縁下に絡条体圧痕を压榨する。I 380と同一個体。	夏島式
I 380	219 161	深鉢	胴部破片		I 379と同一	I 379と同一個体。	夏島式
I 381	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/橙	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜式
I 382	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/褐	R Lを横位施文する。	黒浜式
I 383	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾

I 区15土坑

I 384	219 161	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	無節R lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 385	219 161	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/良好/橙	L Rを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 386	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、石英/ふつう/ にぶい橙	R Lを縦位施文する。	加曾利E 3式

I 区17土坑

I 387	219 161	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	C字状刺突を横位多段に施す。	黒浜・有尾
I 388	219 161	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 389	219 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/橙	横位隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆帯下にL Rを施文する。	加曾利E 4式

I 区26土坑

I 390	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/明赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
-------	------------	----	------	--	-----------	-------------	--------

I 区28土坑

I 391	219 161	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	波状平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式
I 392	219 161	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/暗赤褐	R Lを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 393	219 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	R L、斜行する撚糸文Lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 394	219 161	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾

I 区37土坑

I 395	220 161	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	附加条1種R L+L、L R+Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 396	220 161	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、黒色粒、 繊維/良好/にぶい赤褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾

I 区40土坑

I 397	220 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
-------	------------	----	-------	--	-------------------------	---------------	-------

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 区41土坑							
I 398	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/良好/赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 区42土坑							
I 399	220 161	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつう/褐	波状口縁で口唇内削ぎ。L R、R L羽状施文を地文とし、平行沈線による菱形モチーフを描く。波頂部下と思われる位置に十字文を充填する。	有尾式
I 400	220 161	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	末端還付 L Rを横位施文する。	黒浜式
I 401	220 161	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ふつう/橙	0段多条 L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 402	220 161	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、繊維/ふつう/黒褐	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 区44土坑							
I 403	220 162	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/にぶい黄橙	口唇内削ぎ。R L横位施文を地文とし、平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式
I 404	220 162	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/にぶい黄橙	波状平行沈線を横位多段に施す。一部変形爪形文のように押し込んでいる。	黒浜式
I 405	220 162	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ふつう/黄褐	無節 L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 406	220 162	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	斜行する2条巻の燃糸文 R・Lを横位施文する。	黒浜式
I 407	220	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英/良好/明赤褐	横位多段に条線を施す。以下、R L横位施文。	諸磯 a 式
I 408	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英/ふつう/橙	連続爪形文により弧状モチーフを描く。	諸磯 a 式
I 409	220 162	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	口唇やや肥厚。R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 区45土坑							
I 410	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 区51土坑							
I 411	220 162	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/橙	無節 L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 412	220 162	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/灰黄褐	屈曲する器形。燃糸文 Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 413	220 162	深鉢	底部破片	底径(9.4)	細砂、黒色粒、繊維/ふつう/にぶい黄橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 区56土坑							
I 414	220 162	深鉢	口縁部破片	口径(35.0)	粗砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつう/赤褐	口縁が緩く内湾。R L、L Rを菱形施文する。	黒浜式
I 415	220 162	深鉢	胴部破片		細砂、石英、繊維/ふつう/にぶい赤褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 416	220 162	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/にぶい橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 417	220 162	縦長剥片		長9.2幅5.8厚1.6重105.9	黒色頁岩	平坦打面より剥離。背面側の剥離面構成は稜が並行し、石刃技法によるものに見える。	
I 区58土坑							
I 418	220 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ふつう/橙	隆帯をめぐらしているのか若干の高まりがあり、燃糸側面圧痕を縦位に押捺する。高まりの上位には燃糸側面圧痕を横位多段に押捺し、下位は0段多条 R Lを横位施文するようだ。	前期前葉
I 419	220 162	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、繊維/ふつう/褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区60土坑							
I 420	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 421	221 162	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/橙	0段多条 R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉
I 区61土坑							
I 422	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、繊維/ふつう/橙	胴部でくびれる器形。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 423	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、繊維/ふつう/灰黄褐	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 区72土坑							
I 424	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、繊維/ふつう/にぶい黄褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 425	221 162	磨石 楕円扁平礫		長(5.3)幅(11.8)厚(4.5)重315.8	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、上端側を残して大きく破損する。破損理由は不明。	
I 区73土坑							
I 426	221 162	深鉢	胴部～底部	底径5.8 現存器高12.3	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/橙	小形の深鉢。R L横位施文を地文とし、胴上位に連続爪形文による米字状モチーフを描く。	諸磯 a 式
I 427	221 162	深鉢	胴部～底部	底径6.5	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/暗赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 428	221 162	深鉢	底部破片	底径6.2	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	L Rを横位施文する。	諸磯 a 式
I 区74土坑							
I 429	221 162	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつう/にぶい黄褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 430	221 162	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつう/橙	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 431	221 162	磨製石斧 乳房状		長(7.7)幅(6.2)厚4.1重269.8	変質玄武岩	刃部側体部に接した剥離面のエッジに敲打痕が残る。再生を止め、最終的に廃棄したものと捉えた。	
I 432	221 162	石製研磨具 扁平楕円礫		長7.0幅3.6厚1.8重60.7	珪質頁岩	表裏面とも線条痕があり、特に側縁の光沢が著しい。側縁の線条痕は長軸に直交する。	

番号	挿図 P L	種 器	類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 区75土坑								
I 433	221 162	深鉢		口縁部破片		粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐	無節 R l、L r を菱形施文する。I 434 と同一個体。	黒浜・有尾
I 434	221 162	深鉢		胴部破片		I 433 と同一	I 433 と同一個体。	黒浜・有尾
I 435	221 162	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、 繊維/ふつう/赤褐	R l、無節 L r を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 区78土坑								
I 436	221 162	深鉢		胴部破片		粗砂/良好/橙	R l を横位施文する。	諸磯 a 式
I 区79土坑								
I 437	221 163	深鉢		口縁部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい褐	波状口縁で口唇内削ぎ。1 条の平行沈線、2 条の連続爪形文を口縁に沿わせる。	有尾式
I 438	222 163	深鉢		口縁～底部	口径(34.3)底径8.3 器高(43.7)	細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	波状口縁。胴中位が膨らみ、頸部でくの字状に外屈、口縁は緩やかに内湾する。屈曲部に平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に菱形文を描く。文様帯下は R l、L R を羽状施文。	有尾式
I 区81土坑								
I 439	222 163	深鉢		口縁～底部	口径15.0	細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい橙	R l、L R を菱形施文する。	黒浜式
I 区82土坑								
I 440	222 163	深鉢		口縁～胴部	口径(37.3) 現存器高29.9	細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/暗赤褐	頸部で緩くくの字状に外屈する器形。無節 L r、R l を羽状施文する。	黒浜式
I 区84土坑								
I 441	222 163	深鉢		口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/橙	無節 R l、L r を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 442	222 163	深鉢		胴部破片		細砂、黒色粒、石英、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	無節 L r を横位施文する。	黒浜・有尾
I 443	222 163	深鉢		胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐	無節 R l、L r を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 区85土坑								
I 444	222 164	深鉢		口縁～底部	口径22.5底径 11.1器高18.5	細砂、繊維/ふつう/橙	6 単位波状口縁で球形。胴部に網目状擦糸文 R を横位施文する。屈曲部上位は乱れているが、同様の擦糸文を施文しているようだ。補修孔あり。	大木 2 a 式
I 445	223 164	深鉢		口縁部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	波状口縁で緩く外屈する器形。R l、L R 羽状施文を地文とし、平行沈線による菱形文を描く。口唇部に刻みを付す。	有尾式
I 446	223 164	深鉢		口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/赤褐	波状口縁で口唇内削ぎ。無節 L r を地文とし、平行沈線による菱形状モチーフを描く。	有尾式
I 447	223 164	深鉢		胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ 暗赤褐	L R を横位施文する。	黒浜・有尾
I 448	223 164	深鉢		胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	R l を横位施文する。	黒浜・有尾
I 区87土坑								
I 449	223 163	深鉢		胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	緩く外屈する器形。R l 横位施文を地文とし、横位平行沈線を施す。	有尾式
I 450	223 163	深鉢		胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	R l、L R を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 451	223 163	深鉢		胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	L R を横位施文する。	黒浜・有尾
I 区89土坑								
I 452	223 163	深鉢		口縁～胴部	口径(36.0)	粗砂、細礫、繊維/ふつう/ 橙	波状口縁で口唇内削ぎ。胴部が膨らみ、くの字状に外屈する。屈曲部上位を文様帯とし、平行沈線により菱形文を描く。胴部は R l、L R を菱形施文。口縁外端に刻みを付す。	有尾式
I 453	223 164	深鉢		口縁～胴下位	口径(39.6) 現存器高40.0	粗砂、片岩、繊維/ふつう/ 明赤褐	波状口縁。口縁下に 3 条、頸部に 2 条の平行沈線をめぐらして口縁部文様帯を区画、文様帯内に 2 条の平行沈線による菱形文を描く。地文に無節 R l、L r を羽状施文するが、胴下位は L R を施文。	有尾式
I 454	223 164	深鉢		ほぼ完形	口径28.1底径8.0 器高36.3	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/橙	平縁。胴中位が膨らみ、頸部でややすぼまって口縁が開く器形。R l、O 段多条 L R を羽状施文する。	黒浜式
I 区91土坑								
I 455	224 165	深鉢		胴部破片		細砂、石英、繊維/ふつう/ にぶい橙	R l、L R を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 区94土坑								
I 456	224 165	深鉢		胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R l を横位施文する。	黒浜・有尾
I 区95土坑								
I 457	224 165	深鉢		口縁部破片	口径(37.0)	粗砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい褐	無節 R l を横位、斜位施文する。	黒浜式
I 458	224 165	深鉢		胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/赤褐	R l を横位施文する。	諸磯 a 式
I 459	224 165	深鉢		胴部破片		粗砂/良好/橙	R l を横位施文する。	諸磯 a 式
I 区99土坑								
I 460	224 165	深鉢		口縁部破片	口径(26.9)	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/黒褐	R l を横位施文する。内面研磨。	黒浜式
I 461	224 165	深鉢		口縁部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	直前段多条 L R を横位施文する。内面研磨。	黒浜式
I 462	224 165	深鉢		胴部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい橙	R l、L R を羽状施文する。	黒浜・有尾
I 463	224 165	磨石 扁平円礫			長11.1幅10.9 厚4.7重823.9	粗粒輝石安山岩	表裏面とも激しく使い込まれ著しく摩耗、礫中央付近に敲打痕が残る。側縁の敲打が著しい。	
I 464	224 165	台石 楕円礫			長(18.0)幅(15.7) 厚9.8重3142.4	粗粒輝石安山岩	背面側に敲打痕がある。石材が粗く不明瞭だが裏面側縁面は平坦で、摩耗しているようにも見える。	
I 区100土坑								
I 465	224 165	深鉢		胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/暗赤褐	R l を地文とし、弧状の平行沈線を施す。	黒浜式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I区103土坑							
I 466	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 467	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区106土坑							
I 468	224 165	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ 灰黄褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区109土坑							
I 469	224 165	深鉢	胴部～底部	底径(8.0) 現存器高39.0	細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/橙	R L、L Rを羽状施文する。	有尾式
I区110土坑							
I 470	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/橙	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 471	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/橙	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 472	224 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい褐	緩く外屈する器形で屈曲部に平行沈線をめぐらし、沈線間に刺突を施す。以下、無節L r横位施文。	有尾式
I区112土坑							
I 473	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/灰黄褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I区114土坑							
I 474	225 165	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 475	225 165	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	R L、L Rを菱形施文する。	黒浜・有尾
I 476	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I区115土坑							
I 477	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 478	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/明赤褐	無節L r、R lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区119土坑							
I 479	225 165	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 480	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/橙	R Lを横位施文する。円孔を穿つ。	諸磯a式
I区120土坑							
I 481	225 165	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区121土坑							
I 482	225 165	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	平行沈線、コンパス文を横位多段にめぐらす。	黒浜式
I 483	225 165	深鉢	底部破片	底径7.0	細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/浅黄	横位平行沈線をめぐらす。	黒浜式
I 484	225 165	磨石?		長(12.7)幅(9.1) 厚7.6重1232.6	粗粒輝石安山岩	表裏面とも使い込まれ、摩耗が著しい。被熱して、周辺部が煤けている。	
I区123土坑							
I 485	225 165	深鉢	底部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい橙	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区126土坑							
I 486	225 165	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	無節L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I区127土坑							
I 487	225 166	深鉢	口縁～底部	口径24.2底径11.7 器高28.8	細砂、繊維/ふつう/赤褐	4単位の小突起を付す。頸部でくの字状に緩く外屈、口縁は緩く内湾する。口縁下に2条の平行沈線をめぐらし、端部にC字状刺突を押しつけて閉じている。地文にR L、異条L Rを羽状施文する。	黒浜式
I 488	225 166	深鉢	口縁～胴下位	口径(30.0) 現存器高27.2	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/橙	ほぼ直立する器形で、口縁に4単位の小突起を付す。R L、L Rを菱形施文する。波頂部から垂下する割り付け用の沈線が一部残る。	黒浜式
I 489	225 166	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	口縁が緩く内湾。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式
I 490	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ 暗赤褐	R Lの縄文帯を挟んで上下2帯の文様帯が存在する。上位は横位、U字状のC字状押し文を施し、下位は平行沈線による波状文を描く。	黒浜式
I 491	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	くの字状に外屈する器形。0段多条R L、L Rを羽状施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 492	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	小刻みな波状の条線を施す。	大木2 aか
I 493	226 166	台石 楕円礫		長(21.1)幅(10.9) 厚10.6重3090.8	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が摩耗する。断面形状は三角形を呈し、埋め込んで使用した可能性が高い。	
I区128土坑							
I 494	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/黒褐	口縁が外反。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 495	226 166	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	無節L rを横位施文する。口唇部に指頭押捺状の刻みを付す。	黒浜・有尾
I 496	226 166	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I区130土坑							
I 497	226 166	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	波状平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式
I 498	226 166	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/灰黄褐	R Lを横位施文する。口唇部、内面研磨。	黒浜・有尾
I 499	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/灰黄褐	横位平行沈線をめぐらし、以下、R L、L Rを羽状施文する。	有尾式

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 区131土坑							
I 500	226 166	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ 暗赤褐	附加条1種 R L+Lを横位施文する。口唇部、内面研磨。	黒浜式
I 区132土坑							
I 501	226 166	深鉢	底部破片	底径12.0	粗砂、細礫、白色粒、 繊維/ふつう/明赤褐	やや上げ底。R L、0段多条 L Rを羽状施文する。接合痕か、段が残る。	黒浜・有尾
I 区133土坑							
I 502	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/橙	口唇内面肥厚。波状、横位の条線を多段に施す。	黒浜式
I 503	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石 英、繊維/ふつう/暗赤褐	附加条1種 R l+L、L r+Lを羽状施文する。	黒浜式
I 504	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	0段多条 R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 505	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	R L、L Rを羽状施文する。I 506と同一個体。	黒浜・有尾
I 506	226 166	深鉢	胴部破片		I 505と同一	I 505と同一個体。	黒浜・有尾
I 区134土坑							
I 507	226 166	深鉢	口縁～胴下位	口径(17.1) 器高(22.5)	粗砂、細礫、黒色粒、 繊維/ふつう/赤褐	口縁がくの字状に外反し、長胴甕のような器形を呈す。外反する口縁部は無文帯とし、胴部に無節 R l、L rを羽状施文する。胴下位は R Lを施文。	黒浜・有尾
I 508	226 166	打製石斧 片刃		長8.2幅5.0 厚2.4重91.1	黒色頁岩	刃部再生が著しく、刃部の後退が著しい。側縁加工は裏面側が平坦剥離に近く、背面側加工の角度は厚い。	
I 区135土坑							
I 509	226 166	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	L Rを横位施文し、口縁下にC字状刺突をめぐらす。	黒浜式
I 510	226 166	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/黒褐	無文。内面研磨。	黒浜・有尾
I 511	226 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	附加条1種 L R+Rを横位施文する。内面研磨。	黒浜式
I 区136土坑							
I 512	227 166	深鉢	口縁～胴部	口径(21.9)	粗砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	L R、直前段多条 R(L・L・R)を菱形施文する。	黒浜式
I 区137土坑							
I 513	227 166	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	無節 R L横位施文を地文とし、平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式
I 514	227 166	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつう/ 赤褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区138土坑							
I 515	227 166	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/赤褐	幅広工具による押しき状の文様が見られるが詳細不明。	黒浜・有尾
I 区140土坑							
I 516	227 167	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい褐	くの字状に外屈する器形。無節 R lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 517	227 167	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	L Rを横位施文する。口唇部研磨。	黒浜・有尾
I 518	227 167	打製石斧 短冊型?		長(7.8)幅(6.3) 厚2.4重141.3	細粒輝石安山岩	完成状態?右側縁のエッジが潰れ摩耗しており、再生時に破損したものか。	
I 519	227 167	砥石 扁平礫		長(7.2)幅(5.4) 厚1.3重53.7	凝灰質砂岩	背面側に多方向の浅い溝状の研磨痕が残る。側縁は表裏面ともよく研磨され、エッジはシャープ。	
I 区147土坑							
I 520	227 167	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/暗赤褐	R L、L Rを羽状施文する。I521と同一個体。	黒浜・有尾
I 521	227 167	深鉢	胴部破片		I520と同一	I520と同一個体。	黒浜・有尾
I 522	227 167	深鉢	底部破片	底径 8.1	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/赤褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区149土坑							
I 523	227 167	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 区151土坑							
I 524	227 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、石英、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	平行沈線、コンパス文を横位多段にめぐらす。	黒浜式
I 525	227 167	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	R Lを横位施文し、口縁下に1条の沈線をめぐらす。内面研磨。	黒浜式
I 526	227 167	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区152土坑							
I 527	227 167	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	L R横位施文を地文とし、平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式
I 528	227 167	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	口唇内削ぎで口縁が緩く外反。R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 529	227 167	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ ふつう/橙	2条巻の擦糸文 R・Lを横位施文する。	黒浜式
I 530	227 167	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/黒褐	無節 L rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区154土坑							
I 531	227 167	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	R Lを横位、斜位施文する。	黒浜・有尾
I 532	227 167	石鏃 平基無茎鏃		長(2.0)幅1.6 厚0.4重1.1	チャート	完成状態。加工は丁寧で、基部加工が側縁加工に先行する。先端部を欠損する。	
I 533	227 167	打製石斧 短冊型		長(10.3)幅(5.1) 厚1.8重101.7	黒色頁岩	被熱して剥落部分が多く、製作状態・使用状態についての詳細は不明。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
I 区158土坑							
I 534	228 167	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/ 明赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯 a 式
I 区162土坑							
I 535	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/黒褐	無節 L R、R Lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 536	228 167	深鉢	底部破片	底径(8.0)	細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区163土坑							
I 537	228 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐	無文。	黒浜・有尾
I 区165土坑							
I 538	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 539	228 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	無文。	黒浜・有尾
I 540	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区166土坑							
I 541	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	R L、L Rを羽状施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
I 542	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/赤褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 543	228 167	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/橙	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 544	228 167	深鉢	底部破片	底径(13.0)	細砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい黄橙	R Lを横位施文する。底面研磨。	黒浜・有尾
I 区167土坑							
I 545	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	無節 L R、R Lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 546	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、石英、繊維/ふつう/ 暗赤褐	波状口縁。L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 547	228 167	深鉢	底部破片	底径5.3	細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	無節 L R、R Lを羽状施文する。	黒浜・有尾
I 区168土坑							
I 548	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/明 黄褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区169土坑							
I 549	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、石英、繊維/ふつう/ 暗赤褐	R Lを横位施文する。	黒浜・有尾
I 550	228 167	石皿 有縁		長(13.4)幅(10.1) 5.6重632.8	粗粒輝石安山岩	機能部は摩耗が著しい。裏面側には孔があるほか研磨面があり、砥石として使用されている。	
I 区170土坑							
I 551	228 167	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、石英、繊維/ ふつう/にぶい黄褐	L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
I 区174土坑							
I 552	228 167	深鉢	口縁～胴部	口径(26.2)	粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/黒褐	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式
I 553	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	R L、L R羽状施文を地文とし、横位、斜位の平行沈線を施す。	有尾式
I 区172土坑							
I 554	228 167	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/暗赤褐	口縁に小突起を付す。平行沈線による枠状文やコンパス文など横位多段構成をとる。	黒浜式
I 555	228 167	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、片岩、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	0段多条 L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
A 区遺構外							
外 1	229	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい橙	内外面に条痕を施す。	条痕文系
外 2	229	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄橙	波状口縁で、口縁内外面を肥厚させて段帯部を作出、円孔を穿つ。帯状沈線により三角形モチーフを描き L Rを充填施文する。	堀之内 2 式
B 区遺構外							
外 3	229	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/ 明赤褐	撚糸文 R を斜位施文する。口唇にも施文。	井草 II 式
外 4	229	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐	撚糸文 R を縦位施文する。	井草・夏島
外 5	229	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/明黄褐	R Lを横位施文する。内面研磨。	黒浜・有尾
外 6	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、石英/良好/ 褐灰	結節 L R を横位施文する。	前期末葉
外 7	229	深鉢	底部破片		細砂、黒色粒、繊維/良好/ 明赤褐	横位平行沈線をめぐらして区画、区画内に斜位、弧状の平行沈線を施す。	黒浜式
外 8	229	深鉢	口縁部～胴部	口径(17.5)	粗砂、黒色粒/良好/ 灰黄褐	縁く外反する器形で、口縁に双頂の小突起を付す。口縁外面を肥厚させ、縦位短沈線帯を作出。横位隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画し、波頂部から垂下する隆帯と連結、円状の沈線を対称に配す。文様帯内は沈線による三角形の意匠を配し、余白に斜位沈線を充填施文、三角印刻を施す。文様帯下にも平行沈線をめぐらして幅狭な横帯を区画、同様に斜位沈線を充填し、三角印刻を施す。胴部は結節文を縦位施文するが、平行沈線による懸垂文も見られる。	五領ヶ台式
外 9	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/ 明赤褐	横位平行沈線をめぐらして区画、区画内に L R を縦位帯状施文し、斜位の列点を施す。	五領ヶ台式
外 10	229	深鉢	胴部破片		粗砂、片岩/良好/ にぶい赤褐	横位、蛇行する平行沈線を施す。	五領ヶ台式
外 11	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色 粒、石英/ふつう/橙	横位隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆帯下に L R を縦位充填施文する。	加曾利 E 4 式
外 12	229	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/にぶい黄橙	縦位、斜位の沈線を施す。	堀之内 1 式

番号	挿図 P L	種 器	類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外13	229	深鉢		口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい黄橙	带状沈線により三角形モチーフを描き、LRを充填施文、沈線を重層させる。8の字貼付文を付す。	堀之内2式
外14	229	深鉢		口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、雲母/ふつう/にぶい黄橙	带状沈線により三角形モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
外15	229	深鉢		口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/黒褐	刻みを付した隆線をめぐらす。沈線により三角形モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
外16	229	深鉢		胴部破片		細砂、黒色粒/良好/灰黄褐	带状沈線により円、三角形など幾何学モチーフを描き、LRを充填施文、沈線を重層させる。	堀之内2式
外17	229	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい黄橙	带状沈線により菱形モチーフを描き、LRを充填施文。沈線を重層させ、内部にもLRを充填施文する。	堀之内2式
外18	229	深鉢		胴部破片		粗砂、黒色粒、石英/ふつう/灰黄褐	带状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。余白に斜位の沈線を充填。	堀之内2式
外19	229	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/灰褐	带状沈線により三角形モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
外20	229	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	带状沈線によりV字モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺1式
外21	229	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい黄橙	文様帯下端でくの字状に緩く内屈。带状沈線により楕円状モチーフを描く。	堀之内2式

C区遺構外

外22	229	深鉢		胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/赤褐	口縁が緩く外反。撚糸文Rを縦位施文する。外23・24と同一個体。	夏島式
外23	229	深鉢		胴部破片		外22・24と同一	外22・24と同一個体。	夏島式
外24	229	深鉢		口縁部破片		外22・23と同一	外22・23と同一個体。	夏島式
外25	229	深鉢		口縁部破片		細砂、黒色粒/良好/にぶい褐	口縁下に斜行する沈線を施し、余白に貝殻腹縁文を充填施文、以下、横位沈線を施す。外26～29と同一個体。	田戸下層式
外26	229	深鉢		口縁部破片		外25・27～29と同一	外25・27～29と同一個体。	田戸下層式
外27	229	深鉢		胴部破片		外25・26・28・29と同一	外25・26・28・29と同一個体。	田戸下層式
外28	229	深鉢		胴部破片		外25～27・29と同一	胴下位の太沈線を施す部位。外25～27・29と同一個体。	田戸下層式
外29	229	深鉢		胴部破片		外25～28と同一	外25～28と同一個体。	田戸下層式
外30	229	深鉢		底部破片		細砂、黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	尖底。残存部は無文。	田戸下層式
外31	229	深鉢		口縁部破片		細砂、繊維/良好/明赤褐	無節LRを横位施文する。	黒浜式
外32	229	深鉢		胴部破片		細砂、繊維/ふつう/にぶい黄橙	RL、LRを羽状施文する。	黒浜・有尾
外33	229	深鉢		胴部破片		細砂、繊維/ふつう/にぶい赤褐	LRを横位施文する。	黒浜・有尾
外34	229	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐	口縁が強く内湾する器形。浮線による横帯構成で、横帯間に縦位や弧状の浮線を貼付する。	諸磯b式
外35	229	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/橙	浮線による横帯構成。地文にRL横位施文。	諸磯b式
外36	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒/良好/明黄褐	縦位鋸歯状の集合沈線を施す。	諸磯c式
外37	230	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐	斜位の調整痕により器面の凹凸顕著。	前期後葉か
外38	230	深鉢		口縁部破片		粗砂、片岩/良好/橙	LRを横位施文し、結節浮線を横位にめぐらす。	前期末葉
外39	230	深鉢		口縁部破片		粗砂、片岩/良好/明赤褐	口縁がくの字状に外屈。LRを横位施文し、結節浮線を口唇から垂下させる。	前期末葉
外40	230	深鉢		口縁部破片		粗砂、細礫/良好/赤褐	口縁が緩く外反。結節LRを横位施文する。	前期後葉
外41	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/明赤褐	LRを横位施文する。	前期後葉
外42	230	深鉢		口縁部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/明赤褐	口縁内面肥厚。口縁下に2条の平行沈線をめぐらし、以下、縦位の平行沈線を充填施文する。口唇部に刻みを付す。	五領ヶ台式
外43	230	深鉢		口縁部破片		粗砂/良好/赤褐	口唇尖頭状で、口縁内面肥厚。口縁下に縦位短沈線をめぐらし、結節縄文を縦位施文する。	五領ヶ台式
外44	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫/良好/明赤褐	平行沈線により幾何学モチーフを描き、斜格子目沈線を充填施文。余白に印刻を施す。	五領ヶ台式
外45	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫/良好/明赤褐	平行沈線により幾何学モチーフを描き、格子目沈線を充填施文。余白に印刻を施す。	五領ヶ台式
外46	230	深鉢		胴部破片		細砂、細礫/良好/赤褐	半隆起線をめぐらして横帯区画し、斜格子目沈線を充填施文。部分的に三角形区画を描き、印刻を施す。外47と同一個体。	五領ヶ台式
外47	230	深鉢		胴部破片		外46と同一	外46と同一個体。	五領ヶ台式
外48	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫/良好/明赤褐	半隆起線を垂下させて縦位区画し、縦位鋸歯状の集合沈線を充填施文する。	五領ヶ台式
外49	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、石英/良好/にぶい赤褐	LRを縦位施文し、貼付文を縦位に配す。	五領ヶ台式
外50	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫/良好/明赤褐	結節LRを縦位施文する。	五領ヶ台式
外51	230	深鉢		胴部破片		粗砂/良好/明赤褐	結節の結束縄文を縦位施文する。	五領ヶ台式
外52	230	深鉢		胴部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/暗赤褐	LRを横位带状施文する。	五領ヶ台式
外53	230	深鉢		底部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい橙	底部が張り出す器形。結節LRを縦位施文する。	五領ヶ台式
外54	230	深鉢		胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい黄橙	屈曲部に横位沈線をめぐらして区画、以下、弧状、蛇行する沈線を垂下させ、LRを充填施文する。	堀之内1式
外55	230	深鉢		胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/黄灰	斜行する沈線を施し、LRを充填施文する。	堀之内1式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外56	230	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/黒褐	斜位の帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
外57	230	深鉢	胸部破片		細砂、黒色粒、石英/ふつつ/灰黄	斜位の帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
D区遺構外							
外58	230	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、繊維/良好/明黄褐	組紐を地文とし、コンパス文をめぐらす。	関山II式
外59	230	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/橙	平行沈線による肋骨文を描き、隙間に円形刺突を施す。縦位区画は平行沈線、円形刺突。外60・61と同一個体。	諸磯a式
外60	230	深鉢	胸部破片		外59・61と同一	外59・61と同一個体。	諸磯a式
外61	230	深鉢	胸部破片		外59・60と同一	外59・60と同一個体。	諸磯a式
外62	230	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/暗赤褐	横位集合沈線を施す。	諸磯b式
外63	230	深鉢	胸部破片		粗砂、黒色粒/良好/にぶい橙	浮線による横帯構成。	諸磯b式
外64	230	深鉢	口縁部破片		細砂/良好/にぶい黄橙	斜位の集合沈線を施す。口唇部に斜位の刻みを付す。	浮島式
E区遺構外							
外65	230	深鉢	胸部破片		粗砂、繊維/良好/橙	横位平行沈線、C字状刺突を施す。	黒浜式
外66	230	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英、繊維/ふつつ/明黄褐	口縁が緩く内湾。連続爪形文により米字文状モチーフを描く。縦位区画上位に円形刺突を施す。地文にR L、L R羽状施文。	黒浜式
外67	230	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐	反傾L Lを横位施文する。外68と同一個体。	諸磯a式
外68	230	深鉢	胸部破片		外67と同一	外67と同一個体。	諸磯a式
外69	230	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい橙	靴先状の波状口縁で、波頂部の両脇に副突起を付す。平行沈線により波頂部に風車状入組み文を描き、貼付文を付す。沈線の上から連点状に刺突を重ねる。外71と同一個体。	諸磯b式
外70	230	深鉢	胸部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/明赤褐	集合沈線による横帯構成。横帯間にワラビ手状、弧状の集合沈線を施す。地文にR L横位施文。	諸磯b式
外71	230	深鉢	胸部破片		外69と同一	外69と同一個体。	諸磯b式
外72	230	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	集合沈線による横帯構成。地文にR L横位施文。	諸磯b式
外73	231	深鉢	胸部破片		細砂、細礫/良好/橙	2条の変形爪形文をめぐらして文様帯を区画。文様帯内は平行沈線によるモチーフを描く。文様帯下は結節縄文を横位施文する。	浮島式
外74	231	深鉢	胸部破片		粗砂、細礫/ふつつ/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、複節L R Lを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E 3式
外75	231	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/浅黄	波頂部の山形状突起で環状を呈す。帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺II式
外76	231	深鉢	胸部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐	沈線による斜行、蛇行する懸垂文を施す。	堀之内1式
F区遺構外							
外77	231	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/ふつつ/赤褐	横位、斜位の平行沈線を施す。	有尾式
外78	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつつ/明赤褐	R Lを横位施文する。	黒浜式
外79	231	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯a式
外80	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/暗赤褐	口縁が内湾。横位集合沈線を施す。地文に無節L rを横位施文。	諸磯b式
外81	231	浅鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/にぶい黄橙	肩部下の部位。	前期後葉
外82	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/にぶい橙	結節R Lを横位施文する。	前期後葉
外83	231	深鉢	口縁部破片		粗砂/ふつつ/橙	R Lを地文とし、横位、弧状の沈線を施す。	連弧文系
外84	231	深鉢	胸部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐	2条の沈線による懸垂文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E 3式
外85	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/にぶい黄橙	斜位の隆帯を施し、L Rを充填施文する。	加曾利E 4式
外86	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい赤褐	R Lを縦位、斜位施文する。	後期前葉
外87	231	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/にぶい黄橙	刻みを付した隆線をめぐらす。横位帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。外88・89と同一個体。	堀之内2式
外88	231	深鉢	口縁部破片		外87・89と同一	隆線に8の字貼付文を付す。外87・89と同一個体。	堀之内2式
外89	231	深鉢	胸部破片		外87・88と同一	外87・88と同一個体。	堀之内2式
外90	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつつ/にぶい黄橙	帯状沈線により三角形モチーフを描き、L Rを充填施文する。	堀之内2式
外91	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつつ/にぶい黄橙	横位帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
外92	231	深鉢	底部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/にぶい橙	無文。	堀之内2式
G区遺構外							
外93	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつつ/灰黄褐	2条巻の擦糸文L・Lを横位、斜位施文する。	黒浜式
外94	231	深鉢	胸部破片		細砂、繊維/ふつつ/黄灰	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜・有尾
外95	231	深鉢	胸部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつつ/にぶい橙	0段多条L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
外96	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	連続爪形文により幾何学モチーフを描き、隙間に円形刺突を施文。地文L R横位施文で磨り消し手法。	諸磯a式
外97	231	深鉢	胸部破片		細砂、白色粒/良好/にぶい黄橙	浮線による横帯構成。地文にR L横位施文。	諸磯b式
外98	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐	集合沈線による横帯構成。横帯間に斜位の集合沈線を充填施文する。	諸磯b式
外99	231	深鉢	胸部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐	集合沈線による横帯構成。地文にR L横位施文。	諸磯b式

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残存率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外100	231	深鉢	底部破片	底径(7.0)	粗砂/良好/明赤褐	横位平行沈線を施す。地文にRL横位施文。	諸磯b式
外101	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/赤褐	撚糸文Rを縦位施文する。	中期中葉
外102	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつう/橙	横位沈線を施し、前々段反摺RLを充填施文する。	加曾利E3式
外103	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E4式
外104	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
外105	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/橙	斜位の隆帯を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
外106	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい橙	2条の隆帯により弧状モチーフを施し、LRを充填施文する。	加曾利E3式
外107	231	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄橙	横位隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆帯を垂下させる。	加曾利E4式
外108	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐	1条の隆帯により弧状モチーフを施し、前々段反摺LRを充填施文する。	加曾利E3式
外109	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線により弧状モチーフを描き、RLを充填施文する。	称名寺I式
外110	231	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	縦位帯状沈線を施し、LRを充填施文する。	称名寺I式
外111	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/にぶい黄橙	帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	称名寺II式
外112	232	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい黄褐	幅広の横位帯状沈線を施し、LRを充填施文する。	堀之内2式
外113	232	深鉢	口縁部破片		細砂、細礫、黒色粒、 石英/良好/灰黄褐	緩い波状口縁で頂部を凹ます。口縁下に1条の沈線を沿わせて縄文帯を作出。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
H区遺構外							
外114	232	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	0段多条RLを縦長菱形施文する。外115・116と同一個体。	花積下層式
外115	232	深鉢	胴部破片		外114・116と同一	外114・116と同一個体。	花積下層式
外116	232	深鉢	胴部破片		外114・115と同一	外114・115と同一個体。	花積下層式
外117	232	深鉢	底部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/灰褐	尖底。0段多条RLを縦位施文する。	花積下層式
外118	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	波状口縁で波頂部下に貼付文を付す。斜行する条線を施す。	有尾式
外119	232	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	波状口縁。斜行する条線を施す。	有尾式
外120	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	口唇内削ぎで、くの字状に外屈する器形。連続爪形文を横位多段に施す。	有尾式
外121	232	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい黄褐	口縁が緩く外反。平行沈線によりうろこ状のモチーフを描く。H201と同一個体。	黒浜式
外122	232	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	口縁下に点列を3条めぐらし、コンパス文を施す。	黒浜式
外123	232	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/黒褐	くの字状に外屈。横位、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
外124	232	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄橙	先端のささくれた幅広工具により斜格子目状モチーフを描き、間際にコンパス文を施す。	黒浜式
外125	232	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	横位、斜位の平行沈線、円形刺突を施す。地文に斜行撚糸文Rを横位施文。	黒浜式
外126	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	横位、弧状の条線を施す。	有尾式
外127	232	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にぶい赤褐	緩くくびれる器形。屈曲部上位に文様帯を配し、横位、縦位、鋸歯状の平行沈線を多段に施すようだ。文様帯下は無節RI横位施文。	黒浜式
外128	232	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	コンパス文を横位多段に施す。	黒浜式
外129	232	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/良好/にぶい黄橙	くの字状に外屈。RL、LRを羽状施文し、屈曲部にコンパス文をめぐらす。	黒浜式
外130	232	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、石英、繊維/ ふつう/にぶい黄橙	末端還付LRを横位施文する。	黒浜式
外131	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、繊維/ ふつう/にぶい赤褐	緩い波状口縁で口縁が緩く外反。RL、LRを菱形施文する。	黒浜・有尾
外132	232	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい橙	附加条1種LR+L、RL+rを羽状施文する。口縁下にC字状刺突をめぐらす。内面研磨。	黒浜式
外133	232	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい橙	LR、附加条2種Lr+L・Lを羽状施文する。	黒浜式
外134	232	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、黒色粒、 繊維/ふつう/褐	0段多条LR、無節RIを羽状施文する。	黒浜・有尾
外135	232	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、白色粒、 繊維/ふつう/灰黄褐	RL、LRを菱形施文する。	黒浜・有尾
外136	232	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にぶい黄褐	LR、無節RIを羽状施文する。	黒浜・有尾
外137	232	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい褐	RL、附加条1種LR+Lを羽状施文する。	黒浜式
外138	232	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい褐	緩く外屈する器形。屈曲部に櫛歯状工具による縦位連点状刺突を横位にめぐらし、RLを横位施文する。	有尾式
外139	232	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にぶい赤褐	附加条2種Lr+L・L、Rl+R・Rを羽状施文する。	黒浜式
外140	232	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英、繊維/ふつう/橙	RL、無節Lrを羽状施文する。	黒浜・有尾
外141	233	深鉢	胴～底部	底径(11.6)	細砂、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にぶい橙	無節Lrを横位施文する。	黒浜・有尾
外142	233	深鉢	底部破片	底径(7.8)	粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	0段多条LR、RLを羽状施文する。底面にも施文。	前期前葉
外143	233	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/ふつう/橙	横位、鋸歯状の条線を施す。	諸磯a式
外144	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/橙	条線により肋骨文を描く。縦位区画は円形刺突施文。	諸磯a式

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外145	233	深鉢	胴部破片		粗砂、片岩/良好/明赤褐	集合沈線により米字文状モチーフを描く。縦位区画は1条の沈線を垂下。	諸磯a式
外146	233	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/明赤褐	連続爪形文により幾何学モチーフを描き、R Lを充填施文する。	諸磯a式
外147	233	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/明赤褐	R Lを横位施文する。	諸磯a式
外148	233	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい黄橙	口縁に小突起を付す。R L横位施文を地文とし、連続爪形文を横位、縦位に施す。	諸磯b式
外149	233	深鉢	口縁部破片		粗砂/ふつう/にぶい黄橙	口縁が内湾。波状口縁で副突起を付すと思われる。浮線による構成で、間隙に円形刺突を施す。	諸磯b式
外150	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒/良好/橙	幅広扁平な隆帯によりモチーフを描き、撚糸文Rを施す。	勝坂式
外151	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい黄橙	横位、縦位の隆帯を施す。	加曾利E 3式
外152	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい黄橙	斜行する2条の隆帯を施し、R Lを充填施文する。	加曾利E 3式
外153	233	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい橙	横位、逆U字状の沈線を施し、R Lを充填施文する。	加曾利E 4式
外154	233	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/にぶい黄褐	横位沈線をめぐらし、以下、R Lを充填施文する。	加曾利E 4式
外155	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	隆帯によるU字状モチーフを施し、L Rを充填施文する。	加曾利E 4式
外156	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒/良好/橙	隆帯による懸垂文を施し、L Rを縦位充填施文する。	加曾利E 4式
外157	233	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい橙	口縁が短く内折。R Lを斜位施文し、鎖状隆帯を垂下させる。外158・161・162と同一個体。	堀之内1式
外158	233	深鉢	胴部破片		外157・161・162と同一	円形刺突を伴う鎖状隆帯を垂下させ、横位、弧状の沈線を施す。外157・161・162と同一個体。	堀之内1式
外159	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/ふつう/灰黄褐	口唇部欠損。口縁を肥厚させ、円形刺突を施す。肥厚部下に縦位沈線、列点を施す。	堀之内1式
外160	233	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/ふつう/にぶい橙	多条沈線により逆U字状の懸垂文を施す。	堀之内1式
外161	233	深鉢	胴部破片		外157・158・162と同一	R L斜位施文を地文とし、斜行する多条沈線を施す。外157・158・162と同一個体。	堀之内1式
外162	233	深鉢	胴部破片		外157・158・161と同一	外157・158・161と同一個体。	堀之内1式
外163	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつう/褐灰	多条の沈線による懸垂文を施し、L Rを充填施文する。外165と同一個体。	堀之内1式
外164	233	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、黒色粒、石英/ふつう/にぶい黄橙	斜行する沈線を施す。	堀之内1式
外165	233	深鉢	胴部破片			外163と同一個体。	堀之内1式
外166	233	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/橙	細沈線による斜格子目文を施す。	堀之内1式
外167	233	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/良好/にぶい橙	刻みを伴う隆線、沈線をめぐらす。内折部に8の字貼付文を付す。	堀之内2式
外168	233	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつう/灰黄褐	横位、弧状の沈線を施す。	堀之内2式
外169	233	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、石英/良好/にぶい黄橙	横位帯状沈線を施し、L Rを充填施文する。	堀之内2式
外170	233	深鉢	底部破片	底径(12.8)	粗砂、細礫、石英/良好/明赤褐	底面に網代痕。	堀之内2式
外171	233	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英/ふつう/にぶい橙	波状口縁。斜行する沈線を施す。	—

I 区遺構外

外172	234	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	撚糸文L、絡糸文条痕を縦位施文する。口縁下に絡糸文条痕を押捺する。	夏島式
外173	234	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/明赤褐	撚糸Rを縦位施文する。	井草・夏島
外174	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/明赤褐	撚糸Rを縦位施文する。	井草・夏島
外175	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ふつう/橙	R Lを縦位、斜位施文する。	花積下層式
外176	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、石英、繊維/良好/明赤褐	R Lを斜位施文する。下端はナデ。	花積下層式
外177	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/明赤褐	等間隔幅狭な末端還付縄文を横位多段に施す。	前期前葉
外178	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/橙	組紐を横位施文する。	関山II式
外179	234	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/にぶい黄橙	波状口縁で口唇内削ぎ。口縁に沿った斜行する平行沈線を3条施す。	有尾式
外180	234	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒、繊維/ふつう/にぶい黄褐	波状口縁。口縁に沿った斜行する平行沈線を1条、連続爪形文を2条施す。	有尾式
外181	234	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、繊維/ふつう/にぶい黄橙	横位、斜行する平行沈線を施す。	有尾式
外182	234	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/赤褐	口唇内削ぎで、口縁が緩く外反。口縁下に1条の横位平行沈線をめぐらし、逆V字状の平行沈線を施す。	有尾式
外183	234	深鉢	口縁部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/にぶい黄橙	C字状刺突を横位多段に施す。	黒浜式
外184	234	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつう/にぶい黄橙	口縁が緩く内湾。口縁下から半截竹管によるC字状刺突、押し短沈線、平行沈線をめぐらす。内面研磨。	黒浜式
外185	234	深鉢	口縁部破片		細砂、繊維/ふつう/にぶい橙	口縁が緩く内湾。L R横位施文を地文とし、口縁下に2条の連続爪形文をめぐらす。内面研磨。	黒浜式
外186	234	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫、繊維/ふつう/赤褐	横位平行沈線をめぐらして文様帯を区画、文様帯内に平行沈線による菱形文を重畳するモチーフを描く。	有尾式
外187	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/にぶい褐	連続爪形文により菱形モチーフを描く。	有尾式
外188	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、繊維/ふつう/浅黄	平行沈線により肋骨文状のモチーフを描く。斜位する平行沈線の端部はC字状刺突で閉じ、縦位沈線の上に円形刺突を施す。	黒浜式
外189	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ふつう/にぶい橙	平行沈線を横位多段に施す。	黒浜式

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外190	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/橙	横位、弧状の条線、連点状刺突を施す。	有尾式
外191	234	深鉢	胴部破片		細砂、細礫、繊維/ふつう/ /橙	附加条1種 R L+Lを横位施文し、崩れたコンパス文を横位にめぐらす。	黒浜式
外192	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/良好/ /暗赤褐	横位平行沈線、コンパス文をめぐらす。	黒浜式
外193	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい黄橙	横位平行沈線、コンパス文をめぐらす。	黒浜式
外194	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/良好/橙	文様帯内に斜格子目状沈線を施し、文様帯下に R Lを横位施文する。 文様帯を画す区画文は施されない。	黒浜式
外195	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、石英、 繊維/ふつう/にふい橙	平行沈線を縦位施文する。外196と同一個体。	黒浜式
外196	234	深鉢	胴部破片		外195と同一	外195と同一個体。	黒浜式
外197	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にふい橙	R L横位施文を地文とし、連続爪形文による米字文状モチーフを描く。	黒浜式
外198	234	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/に ふい黄橙	R Lを地文とし、平行沈線による米字文状モチーフを描く。平行沈線 間は磨り消している。	黒浜式
外199	234	深鉢	口縁～胴部		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にふい褐	くの字状に緩く外屈する器形。無節 L r を横位、斜位施文する。	黒浜式
外200	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、石英、繊維/ ふつう/にふい赤褐	附加条1種 L R+R、R L+Lを羽状施文する。	黒浜式
外201	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、繊維/ ふつう/にふい黄褐	附加条1種 L r+r、R l+lを羽状施文する。	黒浜式
外202	234	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にふい赤褐	無節 L r を横位施文する。	黒浜・有尾
外203	234	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/橙	無節 R l を横位施文する。	黒浜・有尾
外204	234	深鉢	胴部破片		粗砂、繊維/ふつう/ にふい黄褐	結節 R l を横位施文する。	黒浜式
外205	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい黄	附加条3種 R L+r を横位施文する。	黒浜式
外206	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい黄褐	2条巻の擦糸文 L・Lと R・Rを羽状施文する。	黒浜式
外207	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ 明赤褐	附加条2種 R l+R・R、2条巻の擦糸文 L・Lを羽状施文する。	黒浜式
外208	234	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/にふい赤褐	2条巻の擦糸文 R・Lを横位、斜位施文する。	黒浜式
外209	234	深鉢	胴部破片		細砂、繊維/ふつう/ にふい赤褐	2条巻の擦糸文 R・Lを横位施文する。	黒浜式
外210	234	深鉢	底部破片		細砂、黒色粒、繊維/ ふつう/明赤褐	底部付近に列点を横位多段に施す。	黒浜式
外211	234	深鉢	底部破片	底径(8.0)	細砂、繊維/ふつう/ にふい黄褐	0段多条 L Rを横位施文する。	黒浜・有尾
外212	234	深鉢	底部破片	底径(10.6)	粗砂、白色粒、黒色粒、石英、 繊維/ふつう/にふい橙	L R、R Lを羽状施文する。	黒浜・有尾
外213	234	深鉢	底部破片	底径(9.0)	細砂、白色粒、黒色粒、 繊維/ふつう/明赤褐色	やや上げ底。無節 L r を横位施文する。底面研磨。	黒浜・有尾
外214	235	深鉢	口縁～胴部	底径(29.7)	粗砂、細礫/ふつう/橙	緩く外反する器形。口縁から胴中位にかけて幅広の文様帯を設け、横位、 波状の条線を交互多段に施して円形刺突を縦位に配す。文様帯下は R L横位施文。	諸磯 a 式
外215	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/橙	口縁が緩く外反。横位、波状の条線を交互多段に施し、円形刺突を施す。	諸磯 a 式
外216	235	深鉢	口縁部破片		細砂、黒色粒/ふつう/ 明赤褐	口縁下に横位1条の条線をめぐらし、以下、多段に波状条線を描く。	諸磯 a 式
外217	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にふい赤褐	横位、波状の条線を交互多段に施す。	諸磯 a 式
外218	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒、石英/ ふつう/明赤褐	斜行する条線を多条に施す。	諸磯 a 式
外219	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	R Lを横位施文し、円形刺突を縦位に配す。	諸磯 a 式
外220	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/赤褐	条線により肋骨文を描く。縦位区画は円形刺突施文。	諸磯 a 式
外221	235	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/ にふい黄橙	条線により肋骨文を描く。縦位区画は円形刺突施文。	諸磯 a 式
外222	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐	R L横位施文を地文とし、平行沈線による肋骨文を描く。縦位区画は 平行沈線、円形刺突。	諸磯 a 式
外223	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつう/橙	横位2条のC字状刺突をめぐらして文様帯を区画、平行沈線による肋 骨文を描く。縦位区画は円形刺突施文。	諸磯 a 式
外224	235	深鉢	胴部破片		粗砂、片岩/良好/明赤褐	R L横位施文を地文とし、平行沈線による肋骨文を描く。縦位区画は 平行沈線、円形刺突。	諸磯 a 式
外225	235	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/赤褐	山形状の波状口縁で口唇やや肥厚。口縁に沿った斜行する連続爪形文 を施し、波頂部下に円孔、円形刺突を施す。	諸磯 a 式
外226	235	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/橙	口縁が緩く外反。口縁下に3条の連続爪形文をめぐらし、円形刺突を 施す。内面研磨。	諸磯 a 式
外227	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	口縁下に3条の連続爪形文をめぐらす。	諸磯 a 式
外228	235	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/明赤褐	口唇肥厚。肥厚部下に3条の連続爪形文をめぐらす。	諸磯 a 式
外229	235	浅鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/橙	口縁下に2条の連続爪形文をめぐらし、以下、R Lを横位施文する。 外241と同一個体。	諸磯 a 式
外230	235	浅鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ 良好/赤褐	緩く内湾する器形で、口唇内面肥厚。連続爪形文により木葉文を描く。 地文 R L横位施文で磨り消し手法。口唇部、内面研磨。	諸磯 a 式
外231	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/明赤褐	連続爪形文による木葉文を描く。地文 R L横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
外232	235	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/ふつう/ にふい黄橙	連続爪形文による木葉文を描く。地文 R L横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式

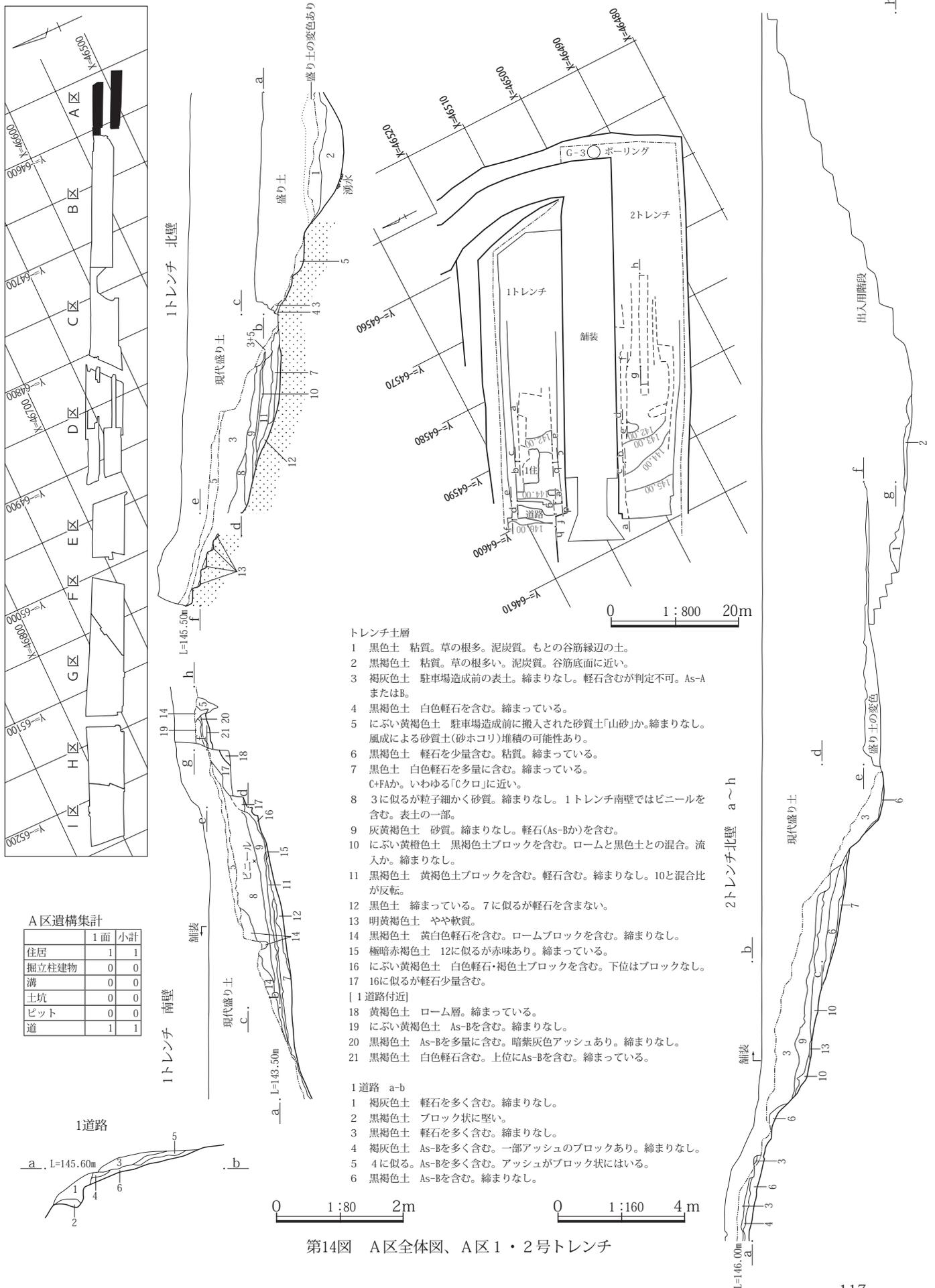
第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外233	235	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/良好/橙	連続爪形文による木葉文を描く。地文 R L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
外234	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/暗赤褐	連続爪形文による木葉文を描き、間隔に円形刺突を施す。地文 R L 横位施文で磨り消し手法。	諸磯 a 式
外235	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/明赤褐	連続爪形文による木葉文を描き、間隔に円形刺突を施す。	諸磯 a 式
外236	235	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/橙	R L 横位施文を地文とし、縦位平行沈線、連続爪形文による木葉文状のモチーフを描く。交点に円形刺突施文。	諸磯 a 式
外237	235	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/橙	横位、鋸歯状の平行沈線を施す。	諸磯 a 式
外238	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/橙	横位連続爪形文をめぐらし、以下、R L を横位施文する。	諸磯 a 式
外239	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐	R L を横位で施文し、連続爪形文を横位にめぐらす。	諸磯 a 式
外240	235	深鉢	胴部破片		細砂/ふつつ/にぶい黄橙	くの字状に内屈する器形。R L を横位施文し、屈曲部に連続爪形文をめぐらす。	諸磯 a 式
外241	235	浅鉢	胴部破片		外229と同一	屈曲する器形。外229と同一個体。	諸磯 a 式
外242	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい赤褐	L R 横位施文を地文とし、2条の連続爪形文を垂下させる。	諸磯 a 式
外243	235	深鉢	胴部破片		細砂/良好/明赤褐	R L 横位施文を地文とし、縦位区画、横位の平行沈線を施す。	諸磯 a 式
外244	235	深鉢	口縁部破片		粗砂/良好/橙	結節 R L を横位施文する。	諸磯 a 式
外245	235	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい赤褐	附加条2種 R L ? + r を横位施文する。	諸磯 a 式
外246	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/赤褐	R L を横位施文し、円形刺突を縦位に配す。	諸磯 a 式
外247	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/良好/橙	結節 R L を横位施文し、円形刺突を縦位、斜位の短沈線を横位に施す。短沈線下の縄文を横位にナデ消す。外250と同一個体。	諸磯 a 式
外248	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい橙	R L を横位施文し、C 字状刺突を縦位に配す。	諸磯 a 式
外249	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	R L を横位施文し、半截竹管内皮による刺突を縦位に配す。	諸磯 a 式
外250	235	深鉢	胴部破片		外247と同一	外247と同一個体。	諸磯 a 式
外251	235	浅鉢	胴部破片		細砂/良好/橙	くの字状に内屈する器形。屈曲部下に L R を横位施文する。器壁 3mm と薄い。	諸磯 b 式
外252	235	深鉢	底部破片	底径7.0	粗砂、白色粒、黒色粒/良好/赤褐	R L を横位施文する。	諸磯 a 式
外253	235	深鉢	底部破片	底径(7.8)	粗砂、黒色粒/良好/にぶい橙	R L を横位施文する。	諸磯 a 式
外254	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい黄橙	口縁がくの字状に屈曲。R L 横位施文を地文とし、横位平行沈線を施す。	諸磯 a 式
外255	235	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、石英/良好/にぶい橙	斜行する集合沈線を施す。	諸磯 b 式
外256	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/にぶい橙	浮線による横帯構成。地文に R L 横位施文。口唇部に刻みを付す。	諸磯 b 式
外257	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/ふつつ/明赤褐	屈曲する器形。浮線による横帯構成で、屈曲部に縦位、X 字状の浮線を貼付する。地文に R L 横位施文。	諸磯 b 式
外258	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒、片岩/ふつつ/明赤褐	浮線による横帯構成。地文に R L 横位施文。	諸磯 b 式
外259	235	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/橙	浮線による横帯構成。横帯間に結節 R L を横位施文。	諸磯 b 式
外260	235	深鉢	胴部破片		細砂/良好/明赤褐	集合沈線による横帯構成。地文に R L 横位施文。	諸磯 b 式
外261	235	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/橙	集合沈線による横帯構成。	諸磯 b 式
外262	235	深鉢	口縁部破片		粗砂、黒色粒/良好/橙	大波状突起。口縁に沿った斜行する集合沈線を施し、対弧状の集合沈線を施す。	諸磯 b 式
外263	235	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/良好/赤褐	浮線による横帯構成。横帯間に浮線による幾何学モチーフを施す。地文に R L 横位施文。	諸磯 b 式
外264	236	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/明赤褐	横位集合沈線を施し、貼付文を付す。	諸磯 c 式
外265	236	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	横位、鋸歯状の集合沈線を施す。間隙に V 字状集合沈線を施文。	前期末葉
外266	236	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/赤褐	横位沈線により区画、区画内に弧状平行沈線、逆 V 字状集合沈線を施す。	前期末葉
外267	236	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/良好/暗赤褐	半隆起線状の集合沈線により対弧状モチーフを描き、三角印刻を沿わせる。	前期末葉
外268	236	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/ふつつ/明赤褐	半隆起線状の平行沈線、半截竹管内皮による刺突を施した隆線を横位にめぐらす。	前期末葉
外269	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒/良好/黒褐	折り返し状の肥厚口縁。肥厚部下に横位、円状の集合沈線を施す。	前期末葉
外270	236	深鉢	胴部破片		粗砂、細礫/良好/赤褐	横位平行沈線をめぐらして区画、区画内に三角刺突を充填する。	前期末葉
外271	236	深鉢	胴部破片		粗砂、黒色粒/良好/明赤褐	横位沈線めぐらして区画、上位は平行沈線による弧状モチーフを描き、斜位の平行沈線を充填施文。下位は R L 横位施文を地文とし、沈線による円状モチーフを描く。区画沈線下に三角印刻を沿わせる。	前期末葉～ 中期初頭
外272	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫/良好/にぶい赤褐	折り返し状の肥厚口縁。肥厚部に原体圧痕を斜位に押捺する。口唇部にも施文。	前期末葉
外273	236	深鉢	胴部破片		細砂/良好/橙	ロッキングを横位施文する。	浮島・興津
外274	236	深鉢	口縁部破片	口径(6.2)	粗砂/良好/明赤褐	小形。口縁内湾。無文。	前期末葉
外275	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ふつつ/にぶい黄橙	L R を斜位施文する。下半は擦痕顕著。	前期末葉
外276	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/良好/にぶい黄橙	結節 R L を横位施文する。	前期末葉
外277	236	深鉢	底部破片		粗砂、細礫、片岩/良好/明赤褐	縦位、弧状の平行沈線を施す。	前期末葉～ 中期初頭
外278	236	深鉢	胴部破片		粗砂/良好/橙	擦糸文 L を縦位施文する。	加曾利 E 1 式
外279	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/良好/橙	横位、逆 U 字状の沈線を施し、R L を充填施文する。	加曾利 E 3 式

番号	挿図 P L	種 器 類 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm, g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外280	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい黄橙	横位沈線をめぐらして口縁部無文帯を区画、沈線下に縦位の沈線を充填施文する。	加曾利 E 3 式
外281	236	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/にぶい黄橙	横位、逆 U 字状の沈線を施し、R L を充填施文する。	加曾利 E 3 式
外282	236	深鉢	口縁部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/にぶい黄橙	R L を縦位、斜位施文する。	加曾利 E 3 式
外283	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつつ/にぶい黄橙	沈線による懸垂文を施し、無節 R 1 を縦位充填施文する。	加曾利 E 3 式
外284	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/にぶい黄橙	隆帯による弧状モチーフを施し、R L を縦位充填施文する。	加曾利 E 3 式
外285	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/にぶい黄橙	隆帯による懸垂文を施し、L R を縦位充填施文する。	加曾利 E 4 式
外286	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒/ 良好/橙	帯状沈線により弧状モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
外287	236	深鉢	口縁部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/橙	口縁外面肥厚。肥厚部に 2 条の沈線をめぐらす。	堀之内 1 式
外288	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/橙	横位沈線をめぐらして区画、弧状の集合沈線を垂下させる。	堀之内 1 式
外289	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/良好/にぶい橙	縦位、弧状の集合沈線を施し、L R を充填施文する。	堀之内 1 式
外290	236	深鉢	胴部破片		粗砂、白色粒、黒色粒、 石英/ふつつ/浅黄	横位、弧状の沈線を施し、L R を充填施文する。	堀之内 1 式
外291	236	深鉢	胴部破片		細砂、黒色粒/ふつつ/ にぶい黄橙	蛇行懸垂文を施す。	堀之内 1 式
外292	236	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/橙	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、L R を充填施文する。	堀之内 2 式
外293	236	深鉢	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/にぶい褐	斜位の帯状沈線を施し、L R を充填施文する。	堀之内 2 式
外294	236	注口土器	胴部破片		細砂、白色粒、黒色粒/ ふつつ/にぶい褐	算盤玉状の器形。屈曲部上位に沈線による同心円文など幾何学モチーフを描く。外295と同一個体。	堀之内 2 式
外295	236	注口土器	胴部破片		外294と同一	外294と同一個体。	堀之内 2 式
外296	236	石鏃 凹基無茎鏃		長1.9幅1.4 厚0.5重0.8	黒曜石	完成状態。右辺側「返し部」を欠く。加工は丁寧で、裏面中央付近に礫面を残す。	
外297	236 168	石鏃 凹基無茎鏃		長(2.2)幅1.6 厚0.3重0.7	チャート	完成状態。基部を深く抉り込み、「返し部」は細い。先端部を欠損する。	
外298	236	石鏃 凸基有茎鏃		長2.2幅1.1 厚0.4重0.6	黒曜石	完成状態。細身の鏃身に小さな茎が付く。小形品だが、やや断面は厚い。	
外299	236 168	石鏃 凸基有茎鏃		長3.0幅1.6 厚0.5重1.6	チャート	完成状態。形状の整う優品で、鏃身に比べ茎は著しく小さい。「返し」は浅く、基部形状は平基鏃に近い。	
外300	236	石鏃 平基無茎鏃		長1.9幅2.2 厚0.4重0.7	チャート	完成状態。小形剥片を浅く周辺加工して形状を整える。加工状態は粗く、遺跡内製作されたものか。	
外301	236	石鏃 凹基無茎鏃		長(2.0)幅(1.6) 厚0.6重1.2	黒曜石	未製品。右辺側「返し部」を欠損する。形態的には完成されているが、断面は厚く未製品と捉えた。	
外302	236	石鏃 凹基無茎鏃		長2.0幅(1.5) 厚1.5重0.6	黒曜石	未製品。表裏両面とも、鏃身の中央付近が研磨され潤る。先端部・基部の加工は研磨後。再加工品か。	
外303	236 168	石鏃 平基無茎鏃		長3.0幅2.1 厚1.0重5.2	チャート	未成品。形態的には石鏃としての属性を備えているが、全体として加工は粗く、断面も厚い。	
外304	236 168	槍先形尖頭 器 柳葉形		長(5.6)幅1.7 厚0.6重6.5	チャート	背面側は全面加工、裏面側は周辺加工。先端に衝撃剥離痕がある。基部欠損。	
外305	237	石匙 斜型		長(2.8)幅1.5 厚0.6重1.2	黒曜石	小形剥片を用いる。形状作出の加工は摘み部の周辺に限られ、刃部は剥片のエッジを加工せずそのまま利用。	
外306	237	石匙 斜型?		長6.6幅(3.8) 厚0.9重20.5	黒色頁岩	背面側に浅い剥離を施し、器体を作成する。剥片内部に打撃痕が残り、加工時に破損した可能性が高い。	
外307	237 168	石匙 縦型		長(4.5)幅2.0 厚0.8重7.3	チャート	裏面側は押圧剥離されているが、背面側側縁の加工は粗く、リダクションされている可能性が高い。	
外308	237 168	石匙 横型		長6.0幅8.8 厚1.7重47.3	黒色頁岩	幅広剥片の打面側に摘み部を作成する。剥片端部を加工せず、そのまま刃部と使用している。	
外309	237 168	石鏃 幅広剥片		長6.9幅6.3 厚1.3重32.4	黒色頁岩	剥片端部側に機能部を作成する。機能部先端は短く、三角形状を呈し、再生されている可能性が高い。	
外310	237	打製石斧? 不明		長4.2幅(4.2) 厚0.8重14.5	細粒輝石安山岩	エッジは著しく摩耗する。器肉が薄く、打製石斧としての分類が妥当か、判断は難しい。	
外311	237	削器 縦長剥片		長11.9幅5.5 厚2.0重95.5	黒色頁岩	背面側剥離面の稜上を敲き剥離した剥片の右側縁を浅く加工して刃部を作成する。下層石器の混入か。	
外312	237 168	打製石斧 分銅型		長12.5幅7.6 厚2.2重229.7	細粒輝石安山岩	完成状態。刃部摩耗・捲縛痕が著しい。上端側刃部は再生され、刃部が直刃様に変形している。	
外313	237	打製石斧 片刃		長11.0幅6.2 厚1.9重129.6	黒色頁岩	完成状態。裏面側を薄く、背面側を厚く剥離する。刃部は弱く摩耗する。	
外314	237	打製石斧? 分銅型?		長(9.5)幅7.3 厚2.8重225.5	細粒輝石安山岩	体部のエッジが著しく摩耗。側縁のノッチを重視して石斧に分類。剥離面の稜は新鮮で、敲打具とすべきか。	
外315	237 168	打製石斧 短冊型		長10.3幅4.2 厚1.9重104.7	珩質変質岩	完成状態。刃部摩耗あり。裏面側刃部を大きく打ち欠き、刃部再生する。	
外316	237 168	打製石斧 撥型		長14.1幅7.6 厚1.8重137.3	黒色頁岩	横長剥片を横位に用い、両側縁を加工して石斧を作成する。刃部は礫面を取り込んだ剥片のエッジを利用。	
外317	237	打製石斧 短冊型		長11.5幅5.7 厚2.8重178.5	黒色頁岩	完成状態。両側縁のエッジが潰れ弱く摩耗するのに対し、刃部再生され、エッジは新鮮である。	
外318	237 168	打製石斧 礫斧		長7.0幅4.7 厚1.4重69.3	珩質頁岩	完成状態。表裏面を浅く剥離して刃部を作成する。刃部は弱く摩耗する。	
外319	237	打製石斧 短冊型		長12.5幅3.8 厚1.7重95.2	砂岩	完成状態。両側縁のエッジが潰れ弱く摩耗するのに対し、刃部再生され、エッジは新鮮。体部中央で破損。	
外320	237	打製石斧 撥型		長9.2幅4.3 厚2.1重85.7	黒色頁岩	完成状態。刃部摩耗等は不明瞭。刃部裏面側の再生加工が失敗して、廃棄されたものか。	
外321	237	打製石斧 分銅型?		長5.2幅6.5 厚2.3重89.6	細粒輝石安山岩	完成状態。右辺側に弱い摩耗が集中する。左辺側は摩耗が見られず、刃部再生されている可能性が高い。	
外322	237 168	磨製石斧 乳房状		長(5.9)幅(5.7) 厚(2.8)重127.0	細粒輝石安山岩	完成状態。表裏面とも研磨痕が良好に残りに残り、稜も明瞭である。使用途中、節理面で破損する。	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	挿図 P L	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm,g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
外323	237 168	凹石 楕円礫		長13.1幅8.4 厚5.2重731.2	粗粒輝石安山岩	表裏面居漏斗状の孔2を穿ち、摩耗が著しい。側縁の敲打が著しく、平坦面化している。	
外324	237	凹石 扁平礫		長8.5幅8.1 厚4.1重378.8	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、礫中央付近に浅い漏斗状の孔がある。側縁・小口部に敲打痕がある。	
外325	238	凹石 扁平楕円礫		長10.4幅8.8 厚4.5重526.6	粗粒輝石安山岩	激しく使い込まれ表裏面とも摩耗は顕著。小口部を除く側縁に敲打痕がある。漏斗状の孔2を表裏面に穿つ。	
外326	238	凹石 扁平楕円礫		長13.3幅9.7 厚3.4重723.5	変質安山岩	表裏面とも摩耗するほか、背面側中央付近に漏斗状の凹部・集合打痕がある。右側縁の摩耗が著しい。	
外327	238 168	凹石 石罅型		長12.0幅7.2 厚3.4重540.7	石英閃緑岩	表裏面とも激しく摩耗している。側縁・小口は敲打・摩耗が激しく、形状が変形。背面側に漏斗状の孔を穿つ。	
外328	238	凹石 扁平楕円礫		長13.4幅9.7 厚4.0重667.6	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、背面側中央付近に漏斗状の凹部・集合打痕がある。右側縁の摩耗が著しい。	
外329	238	凹石 楕円礫		長13.5幅8.2 厚(4.1)重617.6	粗粒輝石安山岩	背面側・両側縁に敲打・摩耗痕があり、特に両側縁の摩耗痕が著しい。裏面側は破損。	
外330	238 168	凹石 扁平楕円礫		長9.9幅8.7 厚4.1重498.0	粗粒輝石安山岩	表裏面の摩耗は、とりわけ背面・右辺側で著しく、使用者の効き手を示唆する。敲打痕は側縁部に著しい。	
外331	238 168	凹石 扁平楕円礫		長9.3幅7.8 厚4.1重399.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、漏斗状の孔2がある。側面・小口部の使用頻度は低い。	
外332	238	凹石 楕円礫		長9.5幅6.2 厚3.7重333.9	石英閃緑岩	背面側の中央付近・小口部両端に敲打痕が集中する。背面側に被熱剥落痕がある。	
外333	238	磨石 楕円礫		長13.2幅6.7 厚6.9重789.0	粗粒輝石安山岩	側面を主体に敲打・摩耗しており、「穀磨石」に似た属性を有する。	
外334	238 168	磨石 扁平楕円礫		長13.8幅10.7 厚3.8重899.5	ひん岩	表裏面とも摩耗するほか、敲打痕が著しい。側縁・小口部の敲打痕は乏しい。	
外335	238	磨石 扁平楕円礫		長12.0幅8.8 厚4.2重630.9	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、下端側小口部・側縁に敲打痕がある。	
外336	238 168	磨石 扁平楕円礫		長12.5幅9.8 厚4.3重898.9	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗痕・敲打痕があるほか、下端側小口部に集中して敲打・摩耗痕がある。	
外337	238 168	磨石 楕円礫		長12.4幅6.7 厚5.2重607.6	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が激しく使い込まれ摩耗するほか、小口部・側縁に敲打痕がある。	
外338	238	磨石 扁平楕円礫		長11.9幅9.2 厚5.1重621.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗するほか、特に両側縁を敲打して激しく使い込んでおり、側縁は平坦化している。	
外339	238	敲石 磨製石斧形用		長(10.9)幅5.8 厚3.7重306.3	変質玄武岩	左辺側の側縁に敲打痕を有する。下端側が大きく剥離されているが、剥離意図は不明確。	
外340	238 168	敲石 棒状礫		長14.8幅5.6 厚4.3重530.6	石英閃緑岩	背面側に弱い稜が通る。この稜部に打痕があるほか、小口部両端・側縁に打痕がある。	
外341	238 168	磨石 楕円礫		長15.0幅8.2 厚6.8重1091.5	粗粒輝石安山岩	右側縁は敲打・摩耗して平坦面が形成されている。左側縁・小口部両端に敲打痕がある。	
外342	238	石皿 有縁		長(13.7)幅(13.8) 厚5.7重1159.4	粗粒輝石安山岩	表裏面に漏斗状の孔がある。使用面の摩耗は弱く、使用可能な状態にある。意図的破損か。	
外343	238	石皿? 盤状礫		長(24.5)幅21.1 厚6.5重3309.1	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が弱く摩耗、裏面側に多数の孔を穿ち、属性的に石皿様に使われたものと捉えた。	
外344	239 168	石皿 楕円礫		長35.1幅33.3 厚10.6重12300.0	粗粒輝石安山岩	背面側周辺・裏面側平坦面に多数の孔を穿つ。機能部は深く窪み、球形の磨石とセットで使われたものだろう。	
外345	239 168	スタンプ型 石器 扁平棒状礫		長8.8幅6.8 厚3.9重381.3	石英閃緑岩	底部分割面に摩耗痕・打痕が残る。機能部に続く体部側面には敲打に伴う剥落痕が著しい。	
外346	239 168	石製研磨具 扁平楕円礫		長4.4幅3.1 厚1.3重24.6	ホルンフェルス	表裏面とも線条痕が礫面を覆う。背面側は膨らみ、礫面は光沢を帯びる。	
外347	239 168	石製研磨具 扁平礫		長7.6幅3.7 厚1.6重63.6	細粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗する。側面は光沢を帯び、器体長軸に直交する線条痕が著しい。	
外348	239 168	多孔石 球形礫		長11.4幅10.5 厚8.7重1440.5	粗粒輝石安山岩	背面側中央に漏斗状の孔1を穿つ。孔周辺の摩耗が著しいほか、側縁に打痕が目立つ。	
外349	239 168	多孔石 楕円礫		長19.9幅13.9 厚12.4重3901.3	粗粒輝石安山岩	背面側の平坦な礫面中央に孔を穿つ他、礫稜部・側面に孔を穿つ。被熱破損。	
外350	239	紡輪 逆台形状		長4.5幅(4.3) 厚2.0重44.2	滑石	体部側面に縦位整形痕が残る。上面の欠損部は摩耗、欠損後の使用は確実。径7mmの孔を両側穿孔する。	
外351	239	砥石 礫砥石		長7.4幅4.2 厚1.1重39.4	凝灰質砂岩	表裏面とも激しく使い込まれ、鋭い側縁のエッジが形成されている。表裏面とも縦位の刃ならし傷がある。	
外352	239	須恵器 蓋	1/2	摘3.7	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。摘みは環状摘みで丁寧な貼付け。内外面に酸化鉄様の付着物。付着物は破片化した時点で付いており付着後に縁辺を割っている。	
外353	239	須恵器 椀	2/3	口径10.8底径6.2 器高4.9	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼付け部から剥離。	
外354	169	観音菩薩立像 舟形光背	墓地跡	高62.8幅36.8 厚17.5重38340.0	粗粒輝石安山岩	像左に「享保十七(1732)年壬子二月九心(日)右に(坂)空淳享禪定尼(靈)」を刻む。裏面は粗く舟形成形。	
外355	169	観音菩薩立像 舟形光背	墓地跡	高(54.3)幅33.1 厚17.2重39380.0	粗粒輝石安山岩	像左に「元禄十二(1699)年□卯十月廿六日」右に「如月眞敬禪定門(靈)」を刻む。像の衣に一部黒色塗彩。	
外356	170	観音菩薩立像 舟形光背	墓地跡	高55.0幅28.0 厚17.3重39460.0	粗粒輝石安山岩	頂部にア種子。像左に「享保四(1719)年四己□□四月七日」右に「法運禪定門(靈)」裏面は粗く舟形成形。	
外357	170	台座	墓地跡	高23.8幅38.2奥 行34.8重52580.0	粗粒輝石安山岩	上面・正面・両側面に粗い面成形。上面中央部を浅く皿状に彫り込む。所々にタガネ状の工具痕を残す。	



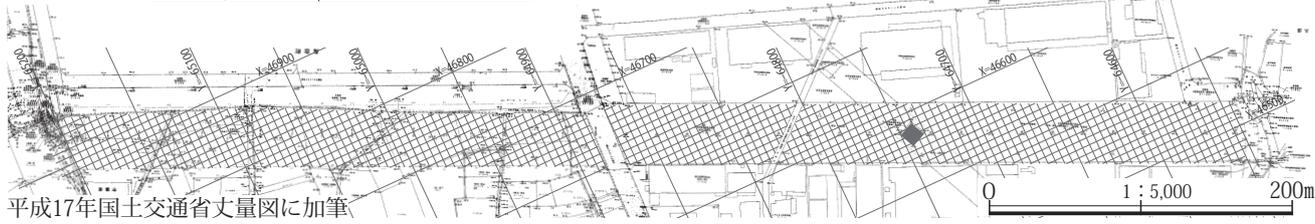
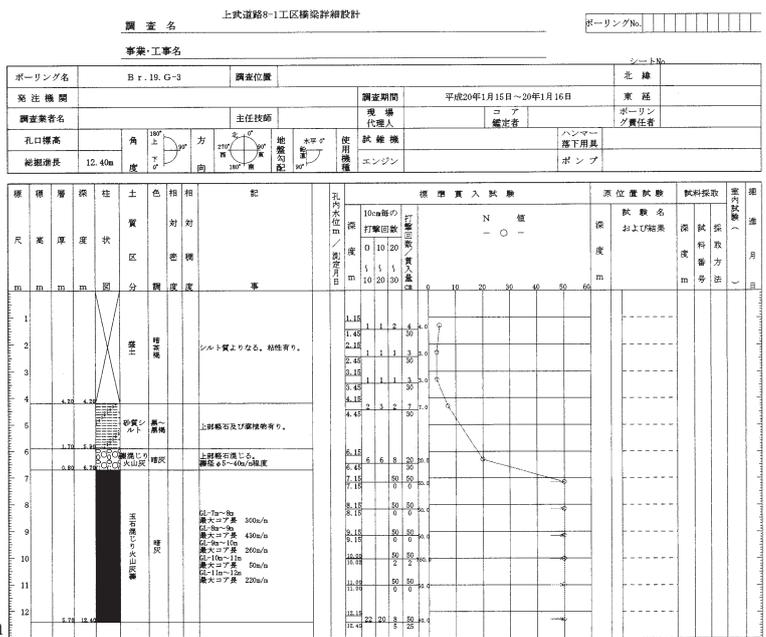
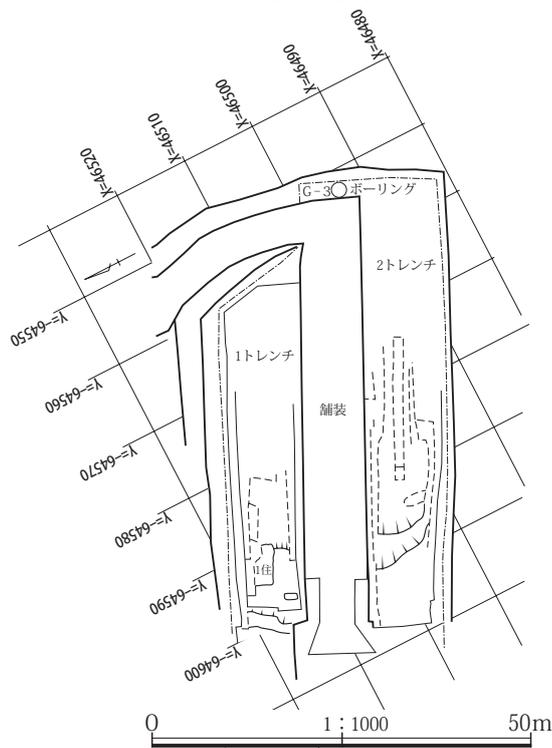
A区遺構集計

	1面	小計
住居	1	1
掘立柱建物	0	0
溝	0	0
土坑	0	0
ピット	0	0
道	1	1

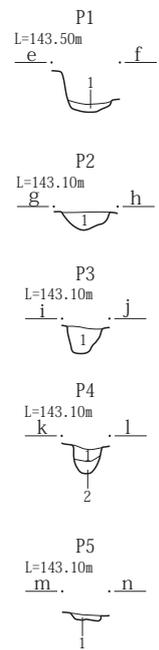
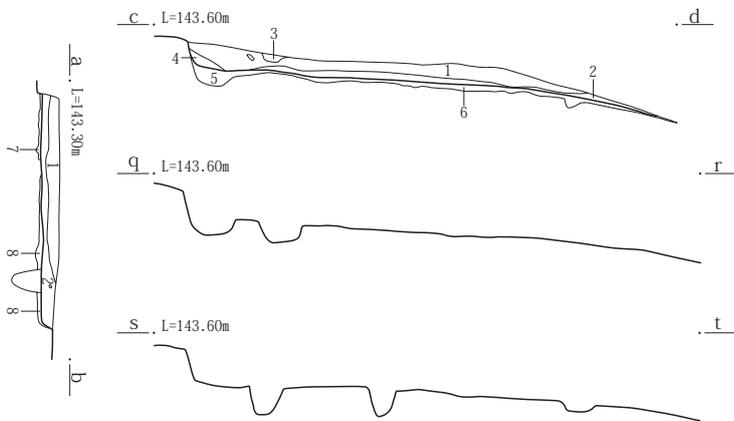
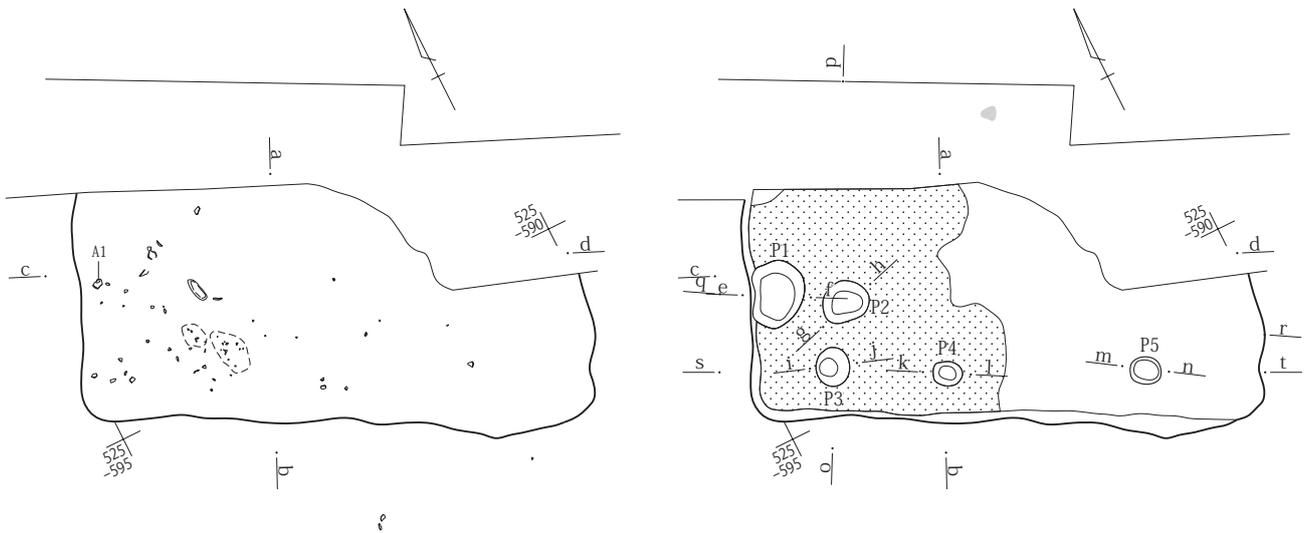
第14図 A区全体図、A区1・2号トレンチ

第4章 検出された遺構と遺物

ボーリング柱状図

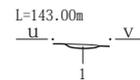
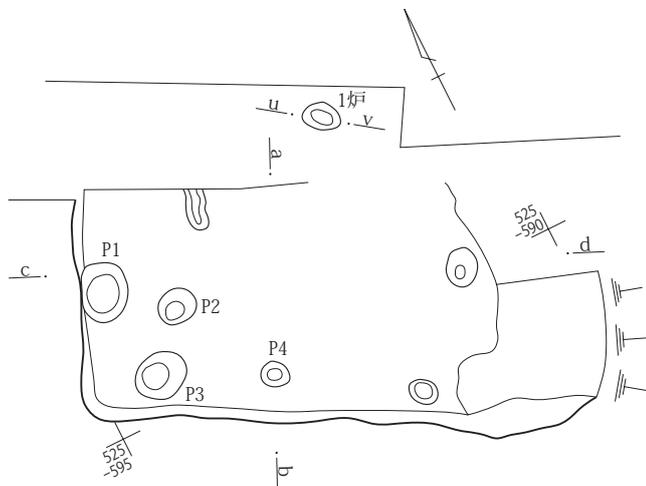


第15図 A区旧地形の推定復元

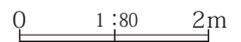


- a-b, c-d
- 1 黒色土 5~10mm大の白色軽石多い。締まっている。
 - 2 黒褐色土 白色軽石を少量含む。締まっている。
 - 3 黒褐色土 にぶい黄褐色土のブロックを含む。上層の土が凹みにある。
 - 4 黒褐色土 白色軽石を少量含む。2より締まりなし。
 - 5 黒色土 白色軽石を少量含む。堅く締まっている。
床面を形成する土。
 - 6 黒色土 5に比べてやや軟。床面の土らしくない。
 - 7 5と同じ。
 - 8 6と同じ。

- P1~5
- 1 黒褐色土 黄白色軽石(C+FAか)を含む。
 - 2 黒色土 1に比べ軽石ごくわずか。

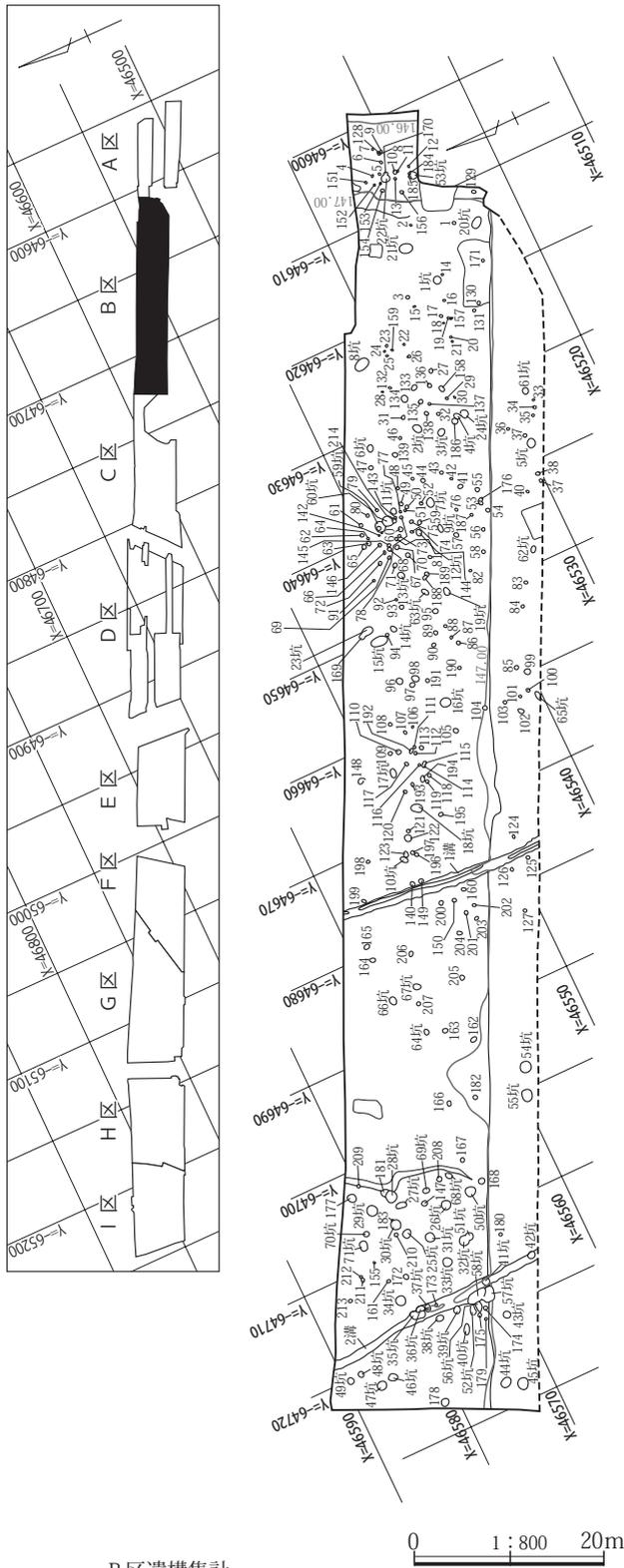


- 1炉
- 1 黒色土 焼土ブロック・白色軽石を少量含む。
炉の痕跡か。締まっている。



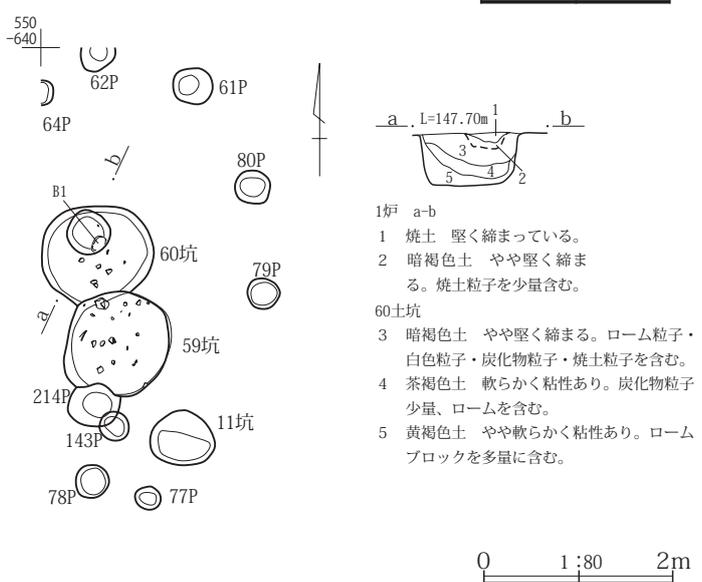
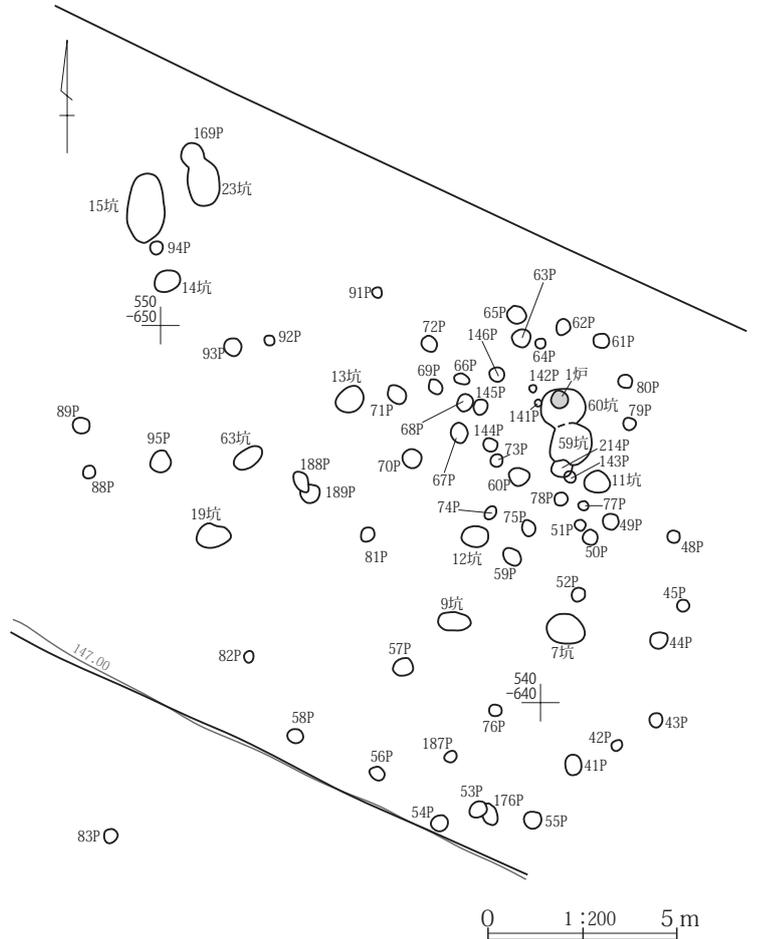
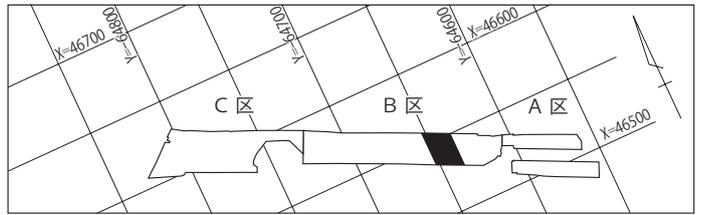
第16図 A区1住居

第4章 検出された遺構と遺物



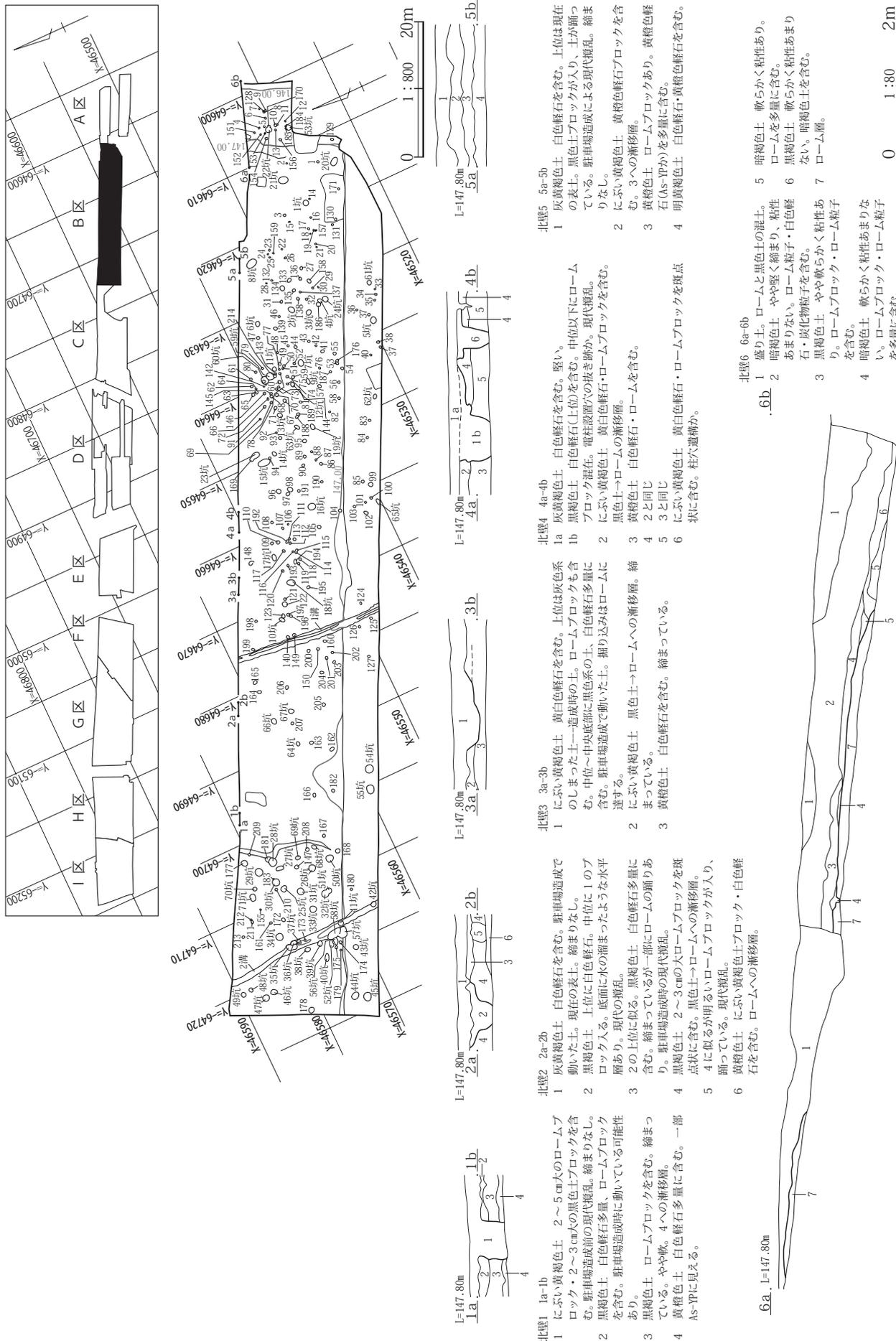
B区遺構集計

	1面	小計
住居	0	0
炉	1	1
掘立柱建物	0	0
溝	2	2
土坑	71	71
ピット	214	214
	No.1 ~ 214	
道	0	0

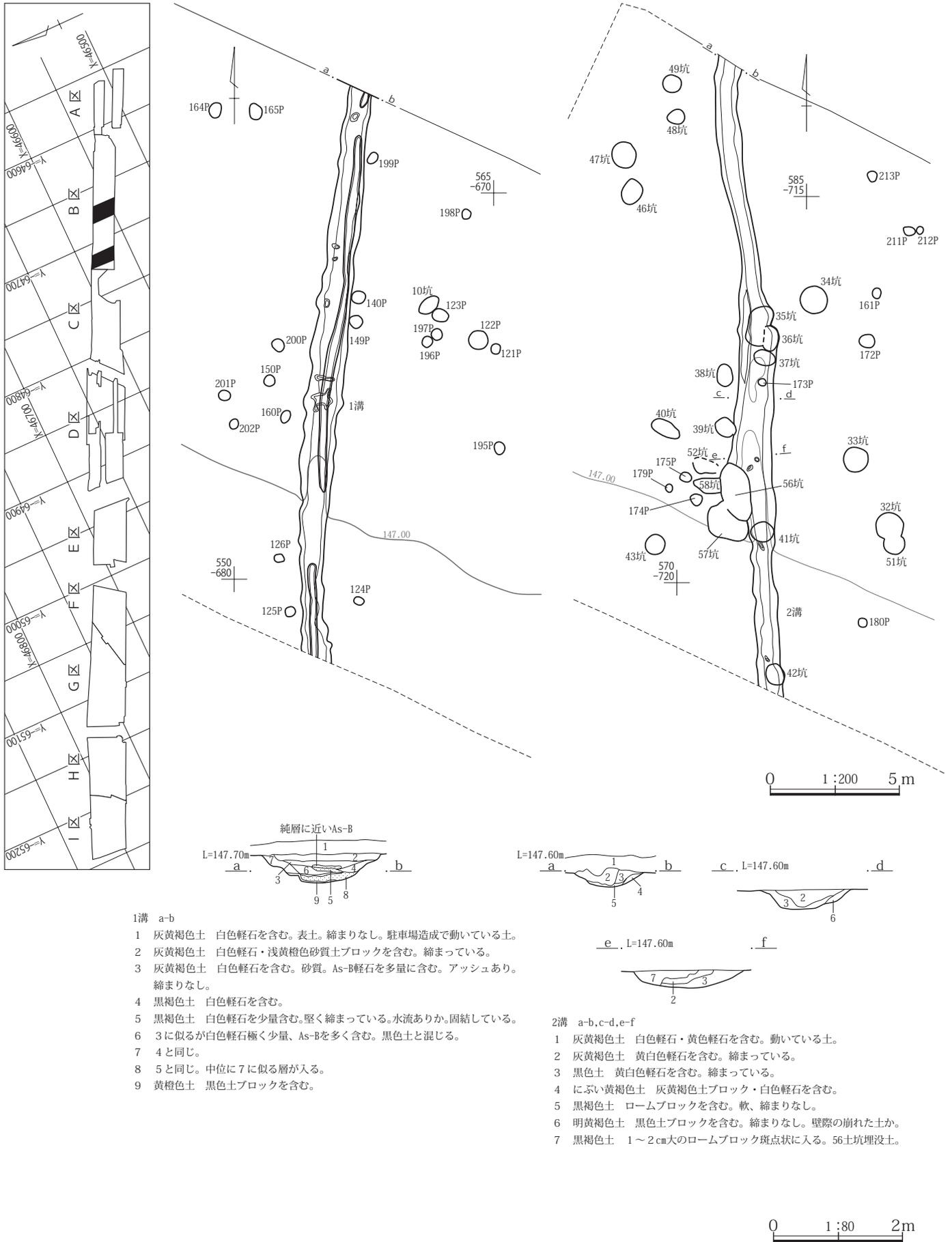


- 1炉 a-b
- 1 焼土 強く締まっている。
 - 2 暗褐色土 やや強く締まる。焼土粒子を少量含む。
- 60土坑
- 3 暗褐色土 やや強く締まる。ローム粒子・白色粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。
 - 4 茶褐色土 軟らかく粘性あり。炭化物粒子少量、ロームを含む。
 - 5 黄褐色土 やや軟らかく粘性あり。ロームブロックを多量を含む。

第17図 B区全体図, 1炉



第4章 検出された遺構と遺物



1溝 a-b

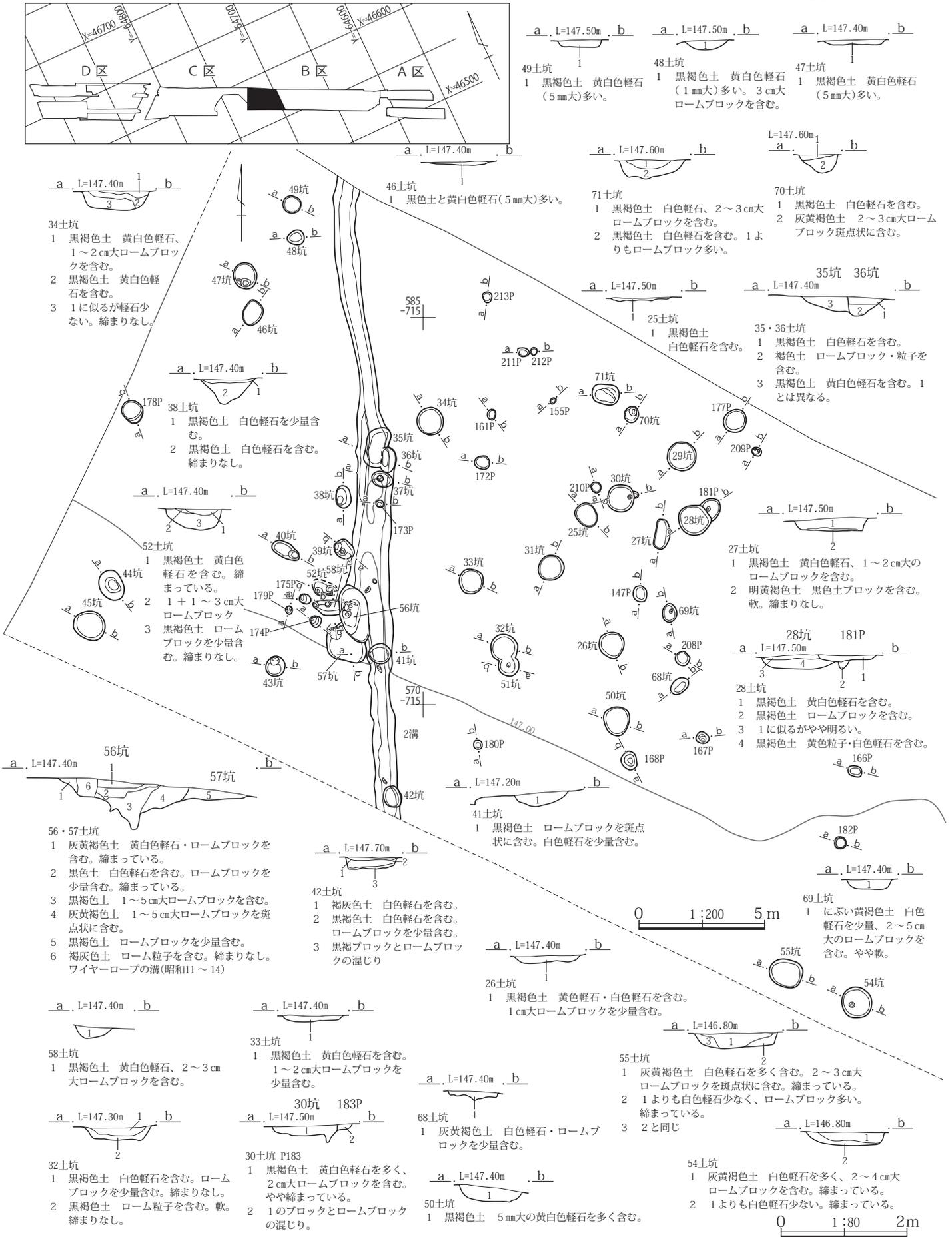
- 1 灰黄褐色土 白色軽石を含む。表土。締まりなし。駐車場造成で動いている土。
- 2 灰黄褐色土 白色軽石・浅黄橙色砂質土ブロックを含む。締まっている。
- 3 灰黄褐色土 白色軽石を含む。砂質。As-B軽石を多量に含む。アッシュあり。締まりなし。
- 4 黒褐色土 白色軽石を含む。
- 5 黒褐色土 白色軽石を少量含む。堅く締まっている。水流ありか。固結している。
- 6 3に似るが白色軽石極く少量、As-Bを多く含む。黒色土と混じる。
- 7 4と同じ。
- 8 5と同じ。中位に7に似る層が入る。
- 9 黄橙色土 黒色土ブロックを含む。

2溝 a-b,c-d,e-f

- 1 灰黄褐色土 白色軽石・黄色軽石を含む。動いている土。
- 2 灰黄褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 3 黒色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 4 にぶい黄褐色土 灰黄褐色土ブロック・白色軽石を含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。軟。締まりなし。
- 6 明黄褐色土 黒色土ブロックを含む。締まりなし。壁際の崩れた土か。
- 7 黒褐色土 1~2cm大のロームブロック斑点状に入る。56土坑埋没土。

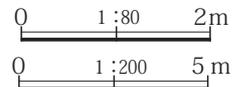
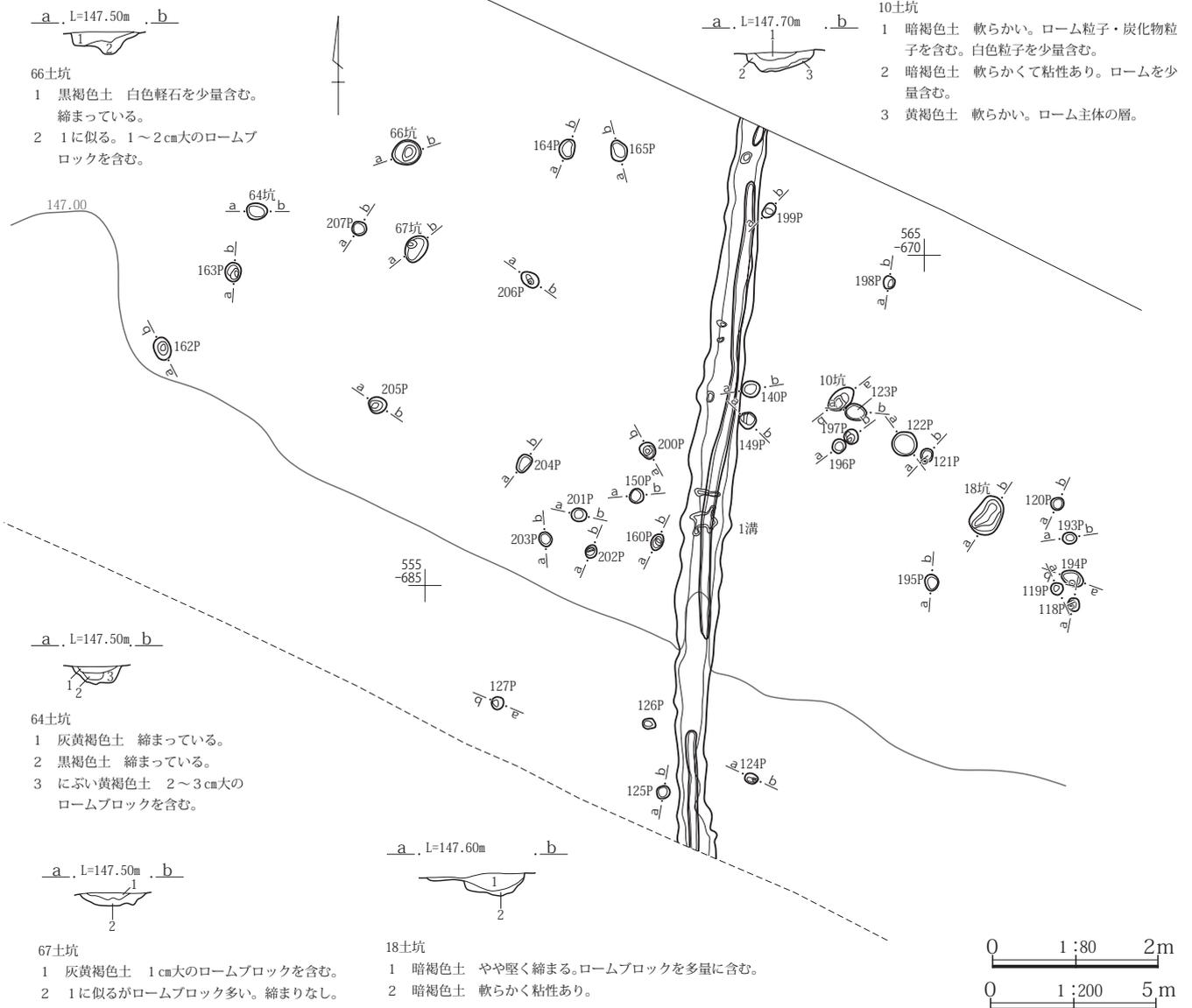
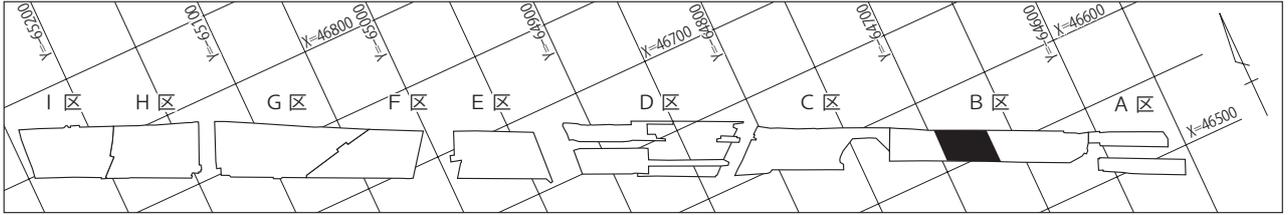
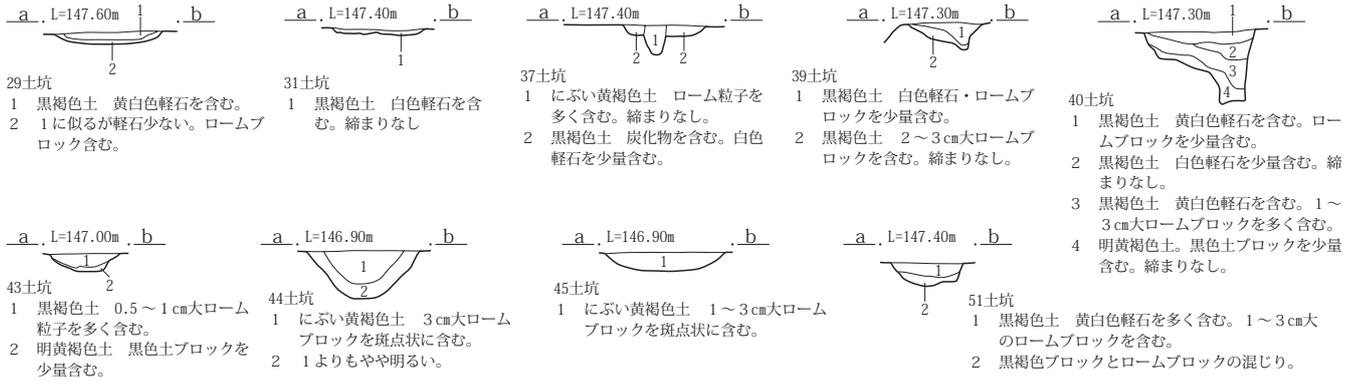
第19図 B区1・2溝

遺構図(B区)

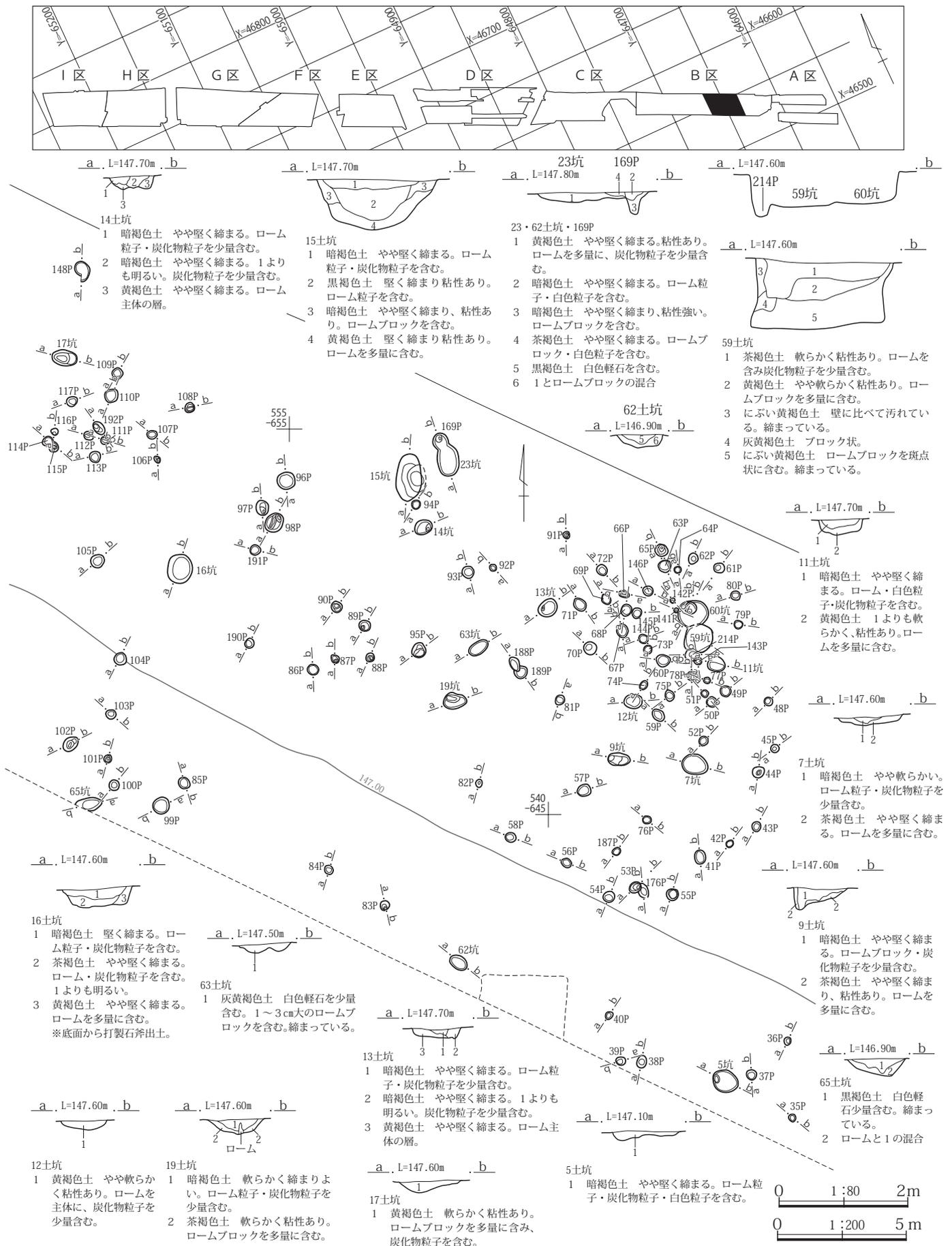


第20図 B区土坑・ピット(1)

第4章 検出された遺構と遺物

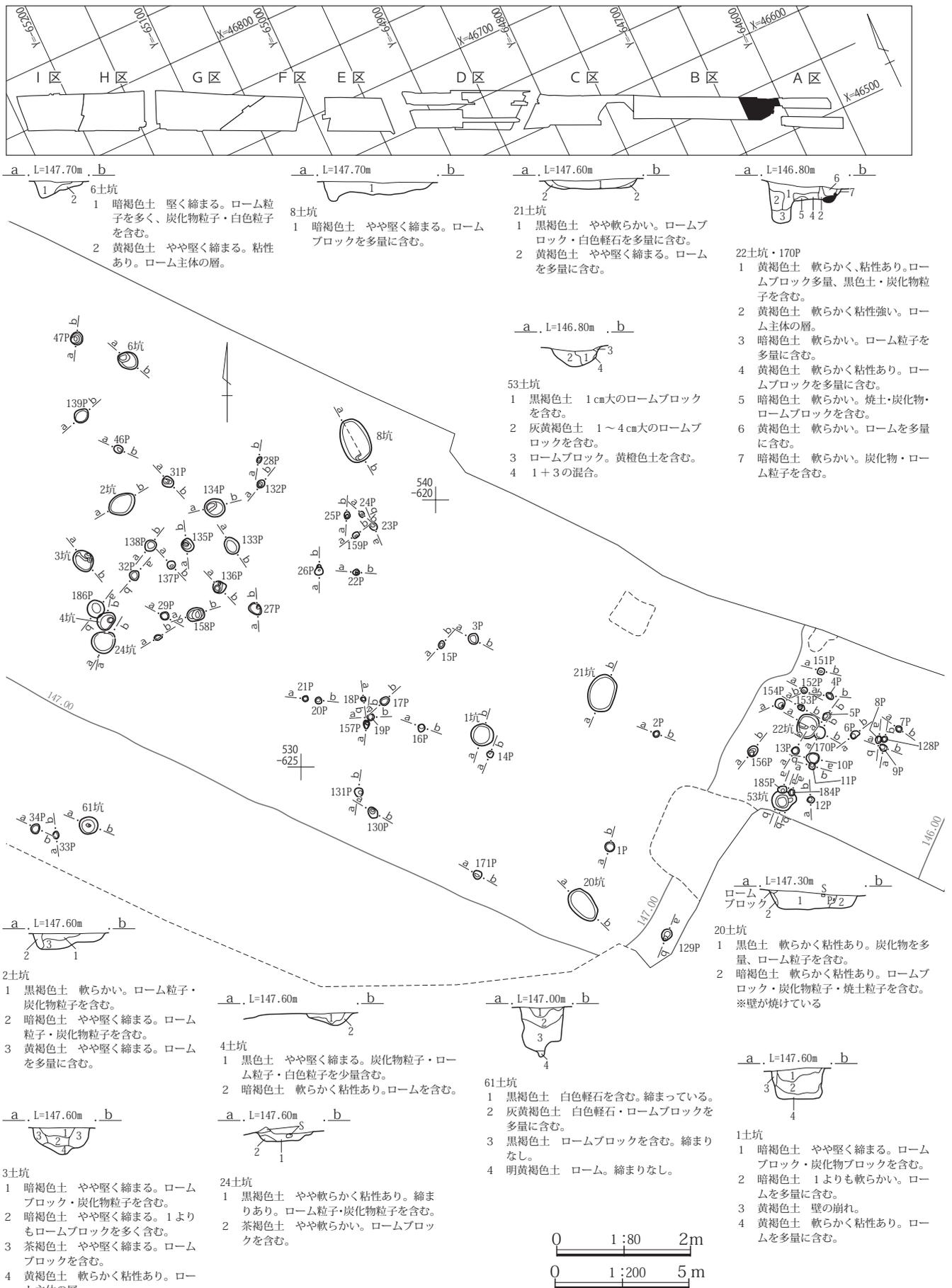


第21図 B区土坑・ピット(2)



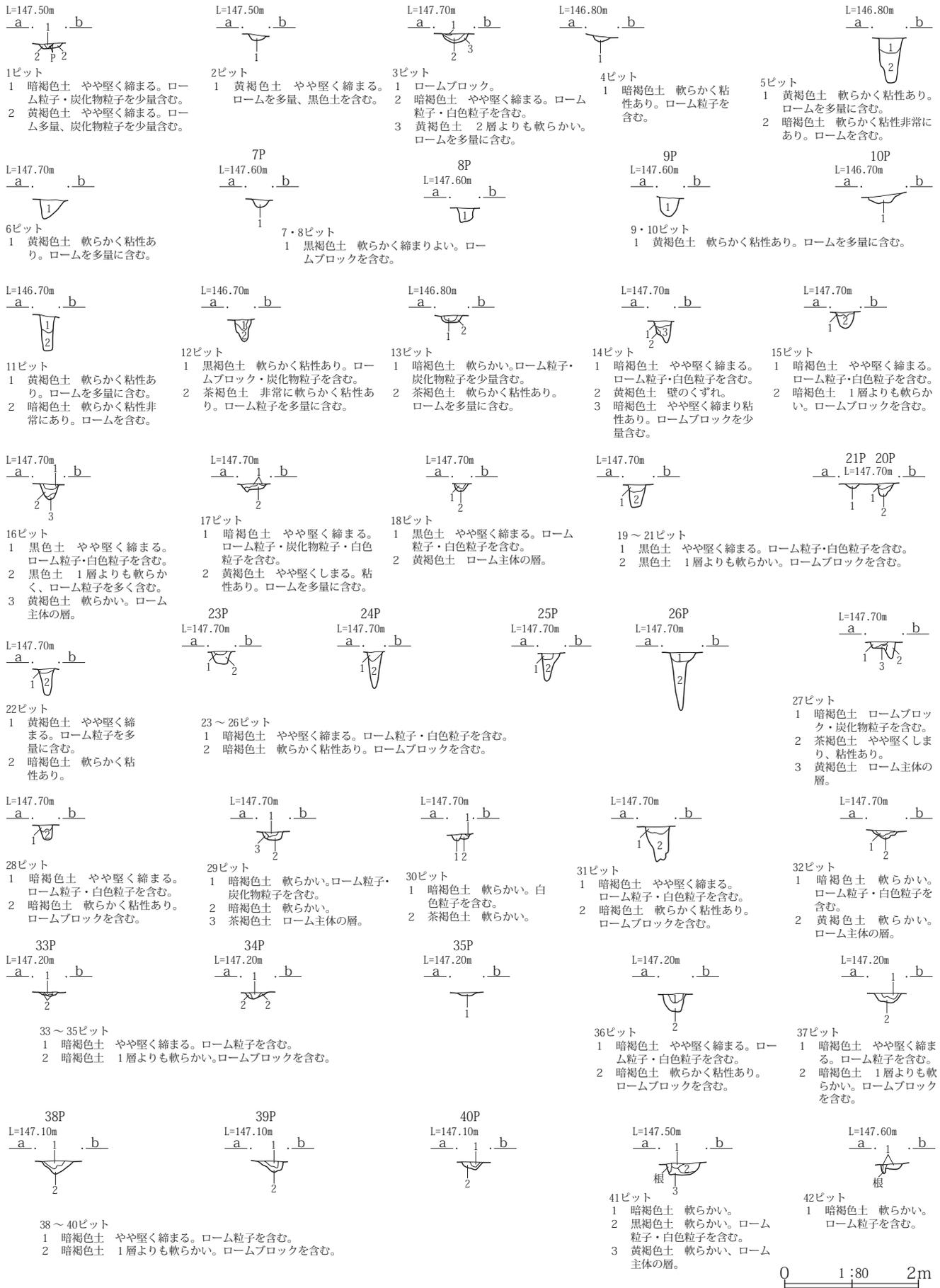
第22図 B区土坑・ピット(3)

第4章 検出された遺構と遺物



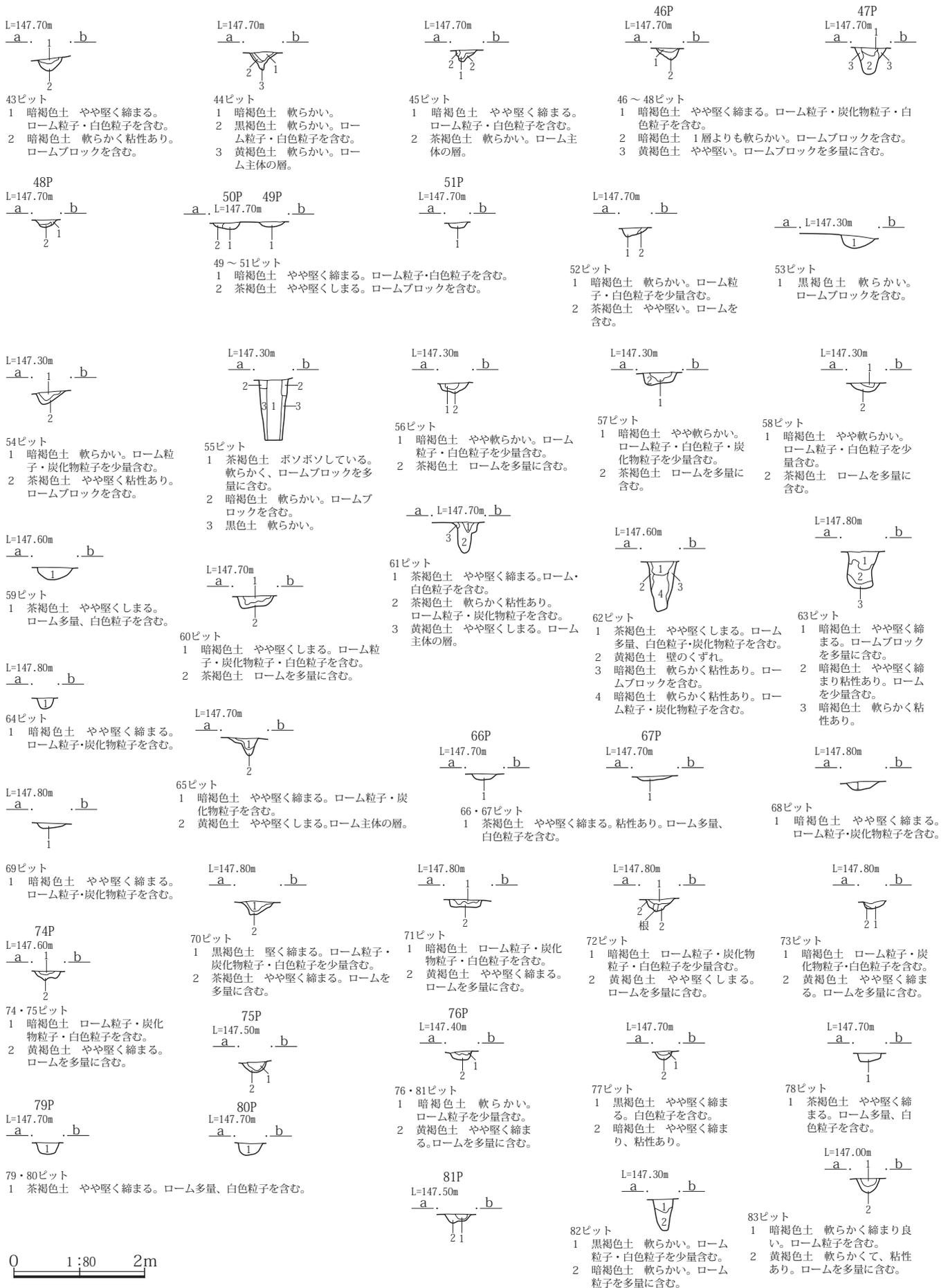
第23図 B区土坑・ピット(4)

遺構図(B区)



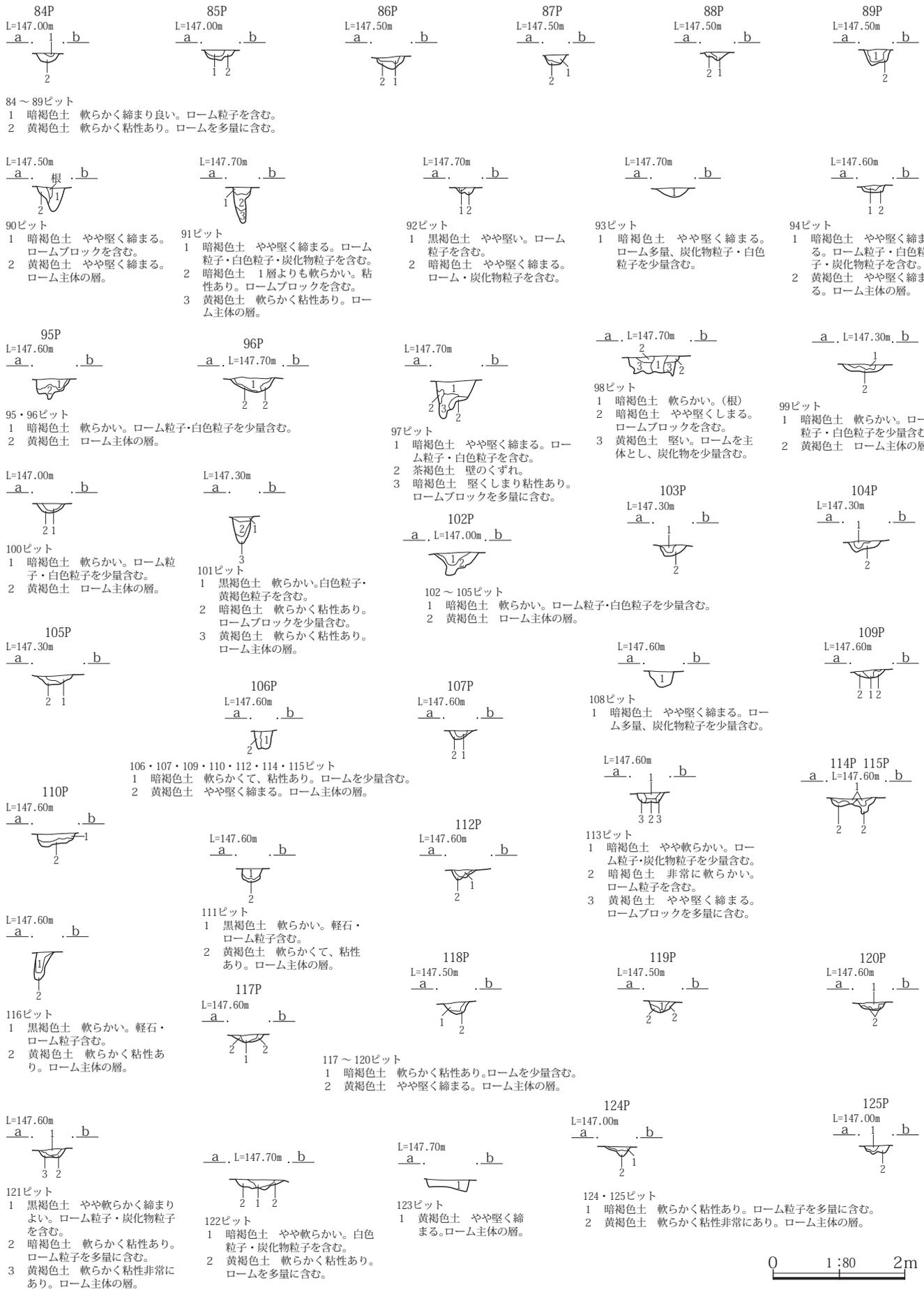
第24図 B区 1～42ピット断面図

第4章 検出された遺構と遺物



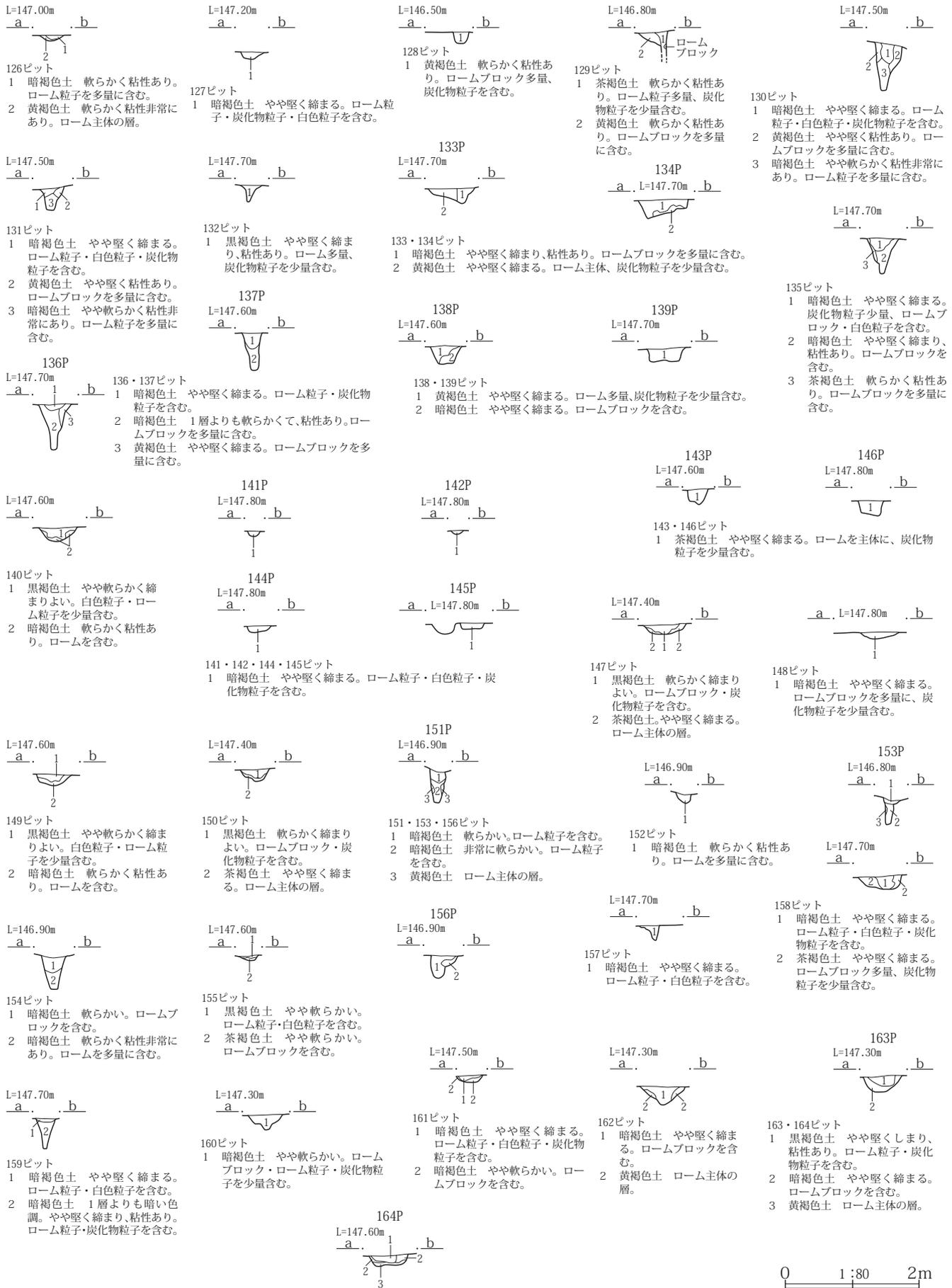
第25図 B区43～83ピット断面図

遺構図(B区)

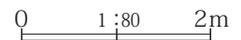


第26図 B区84~125ピット断面図

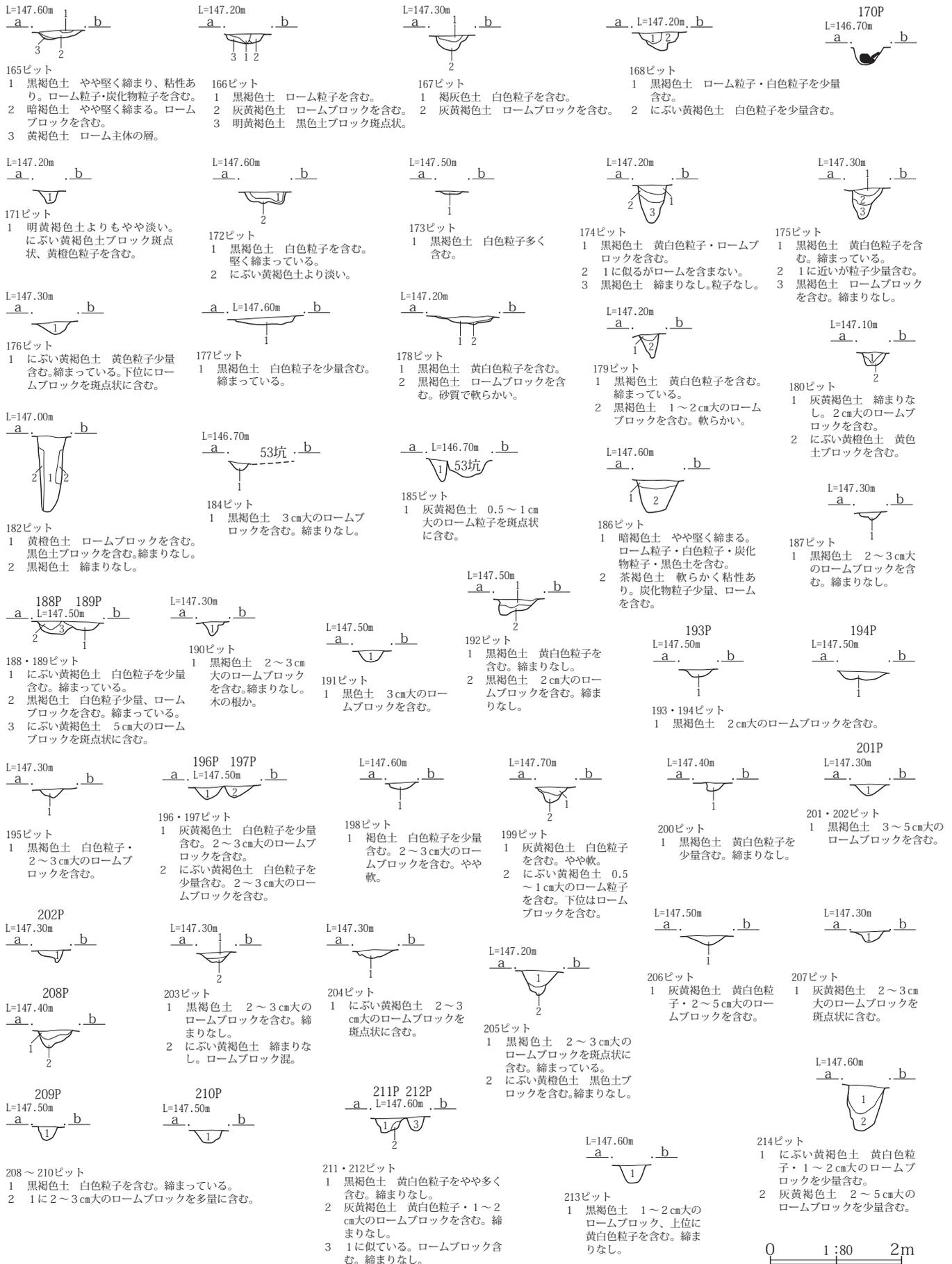
第4章 検出された遺構と遺物



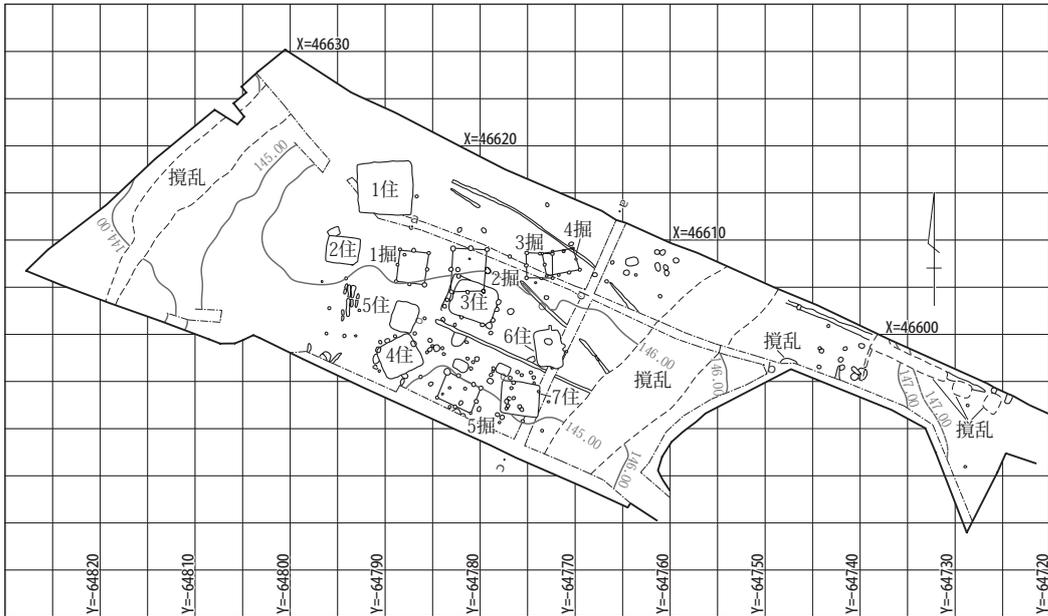
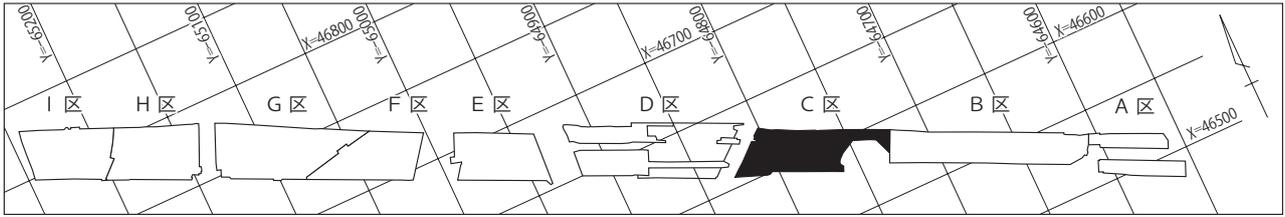
第27図 B区126～164ピット断面図



遺構図(B区)



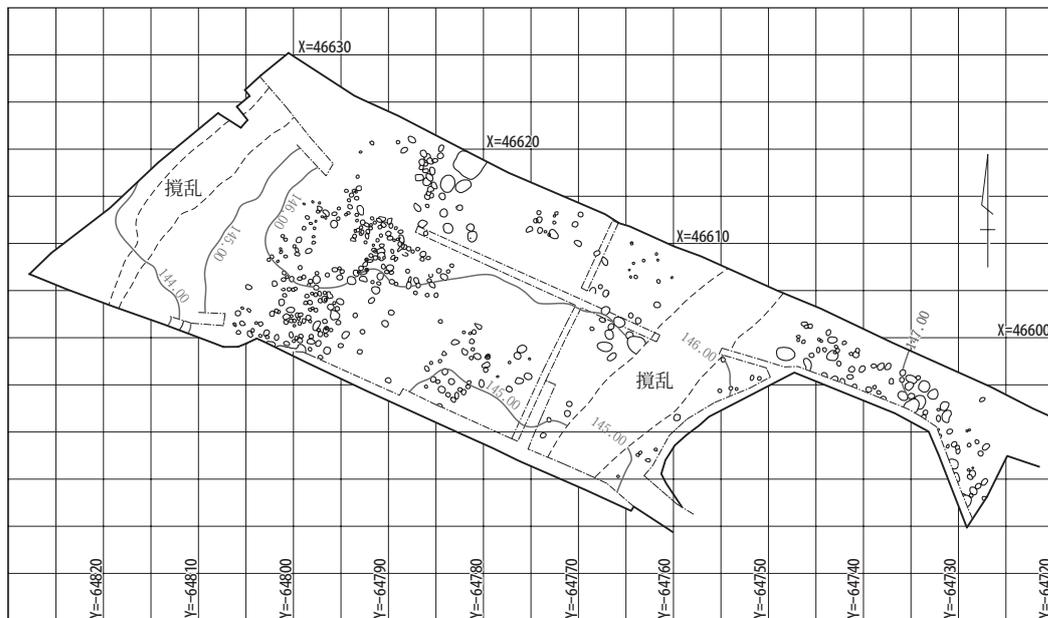
第28図 B区165~214ピット断面図



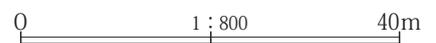
C区1面

C区遺構集計

	1面	2面	小計
住居	7	0	7
掘立柱建物	5	0	5
溝	13	0	13
土坑	19	225	244
ピット	No.1 ~ 20	No.21 ~ 245	238
道	1	No.123 ~ 359	0

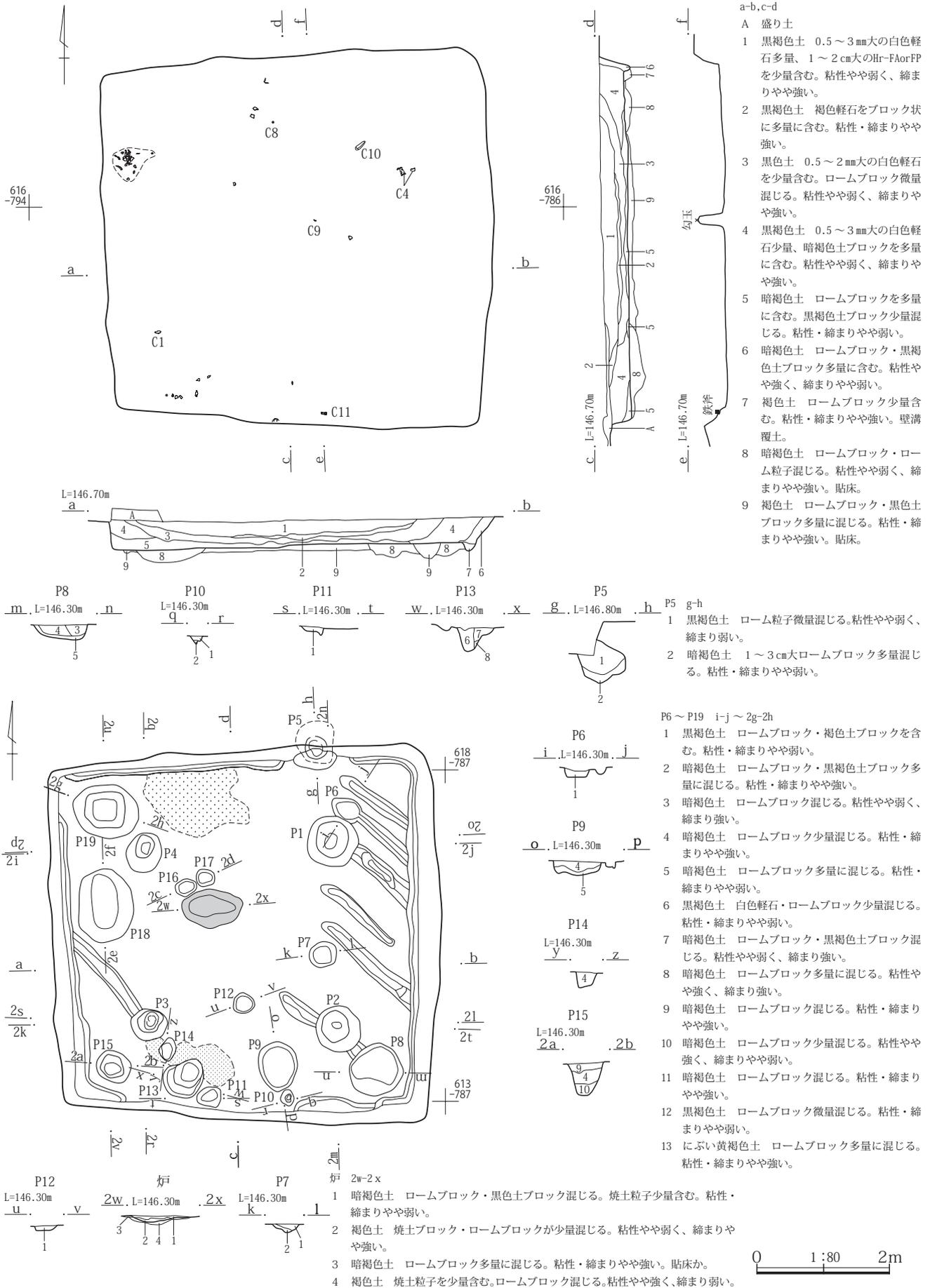


C区2面



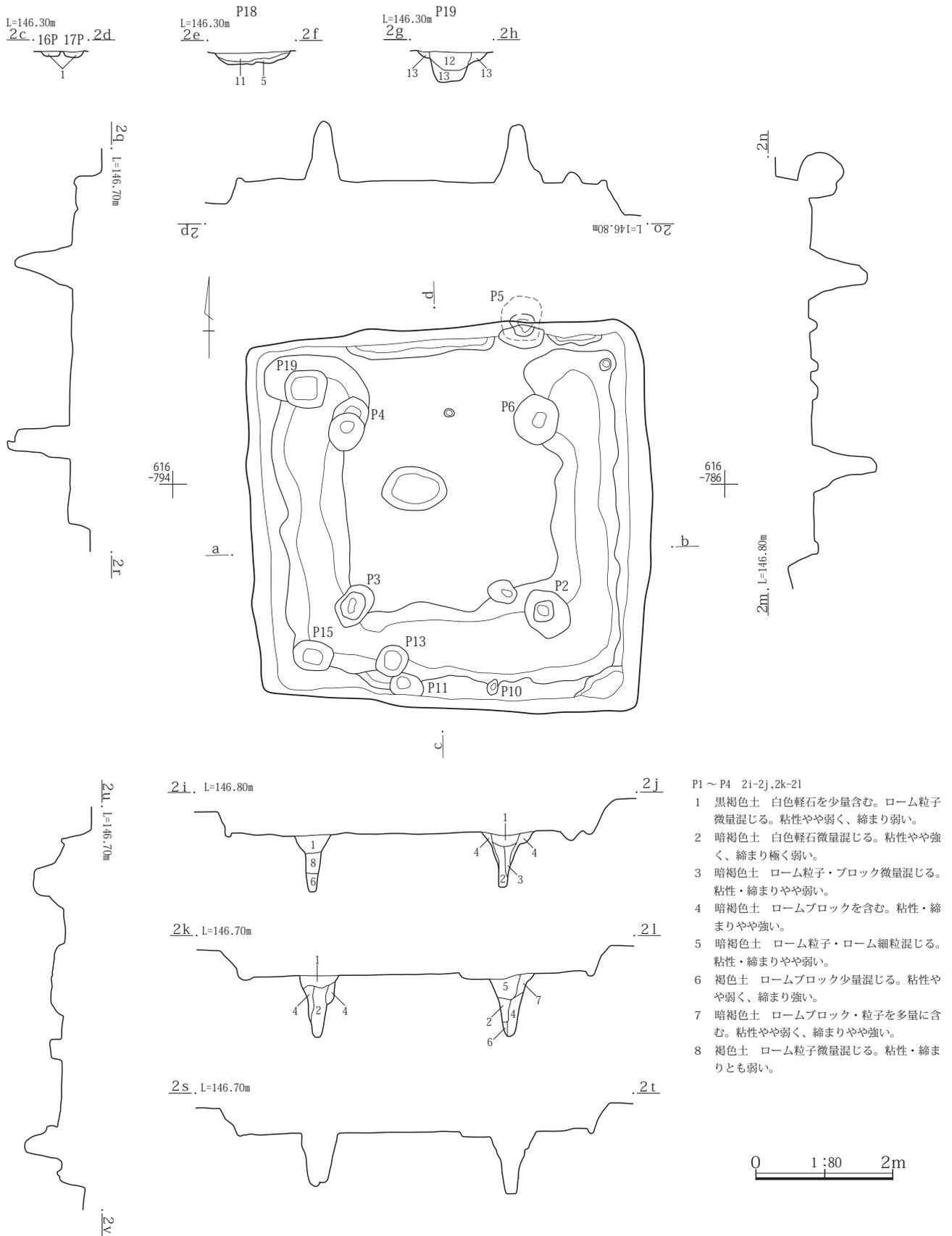
第29図 C区全体図

遺構図 (C区)



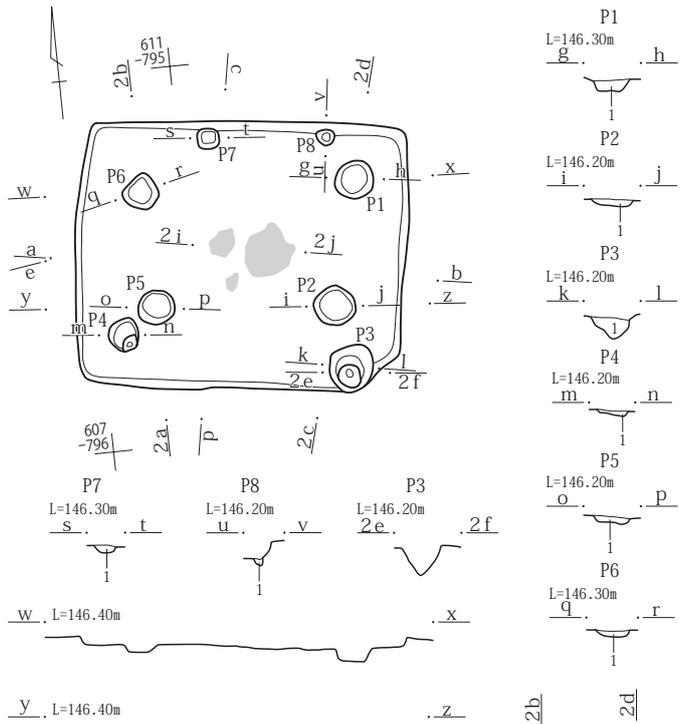
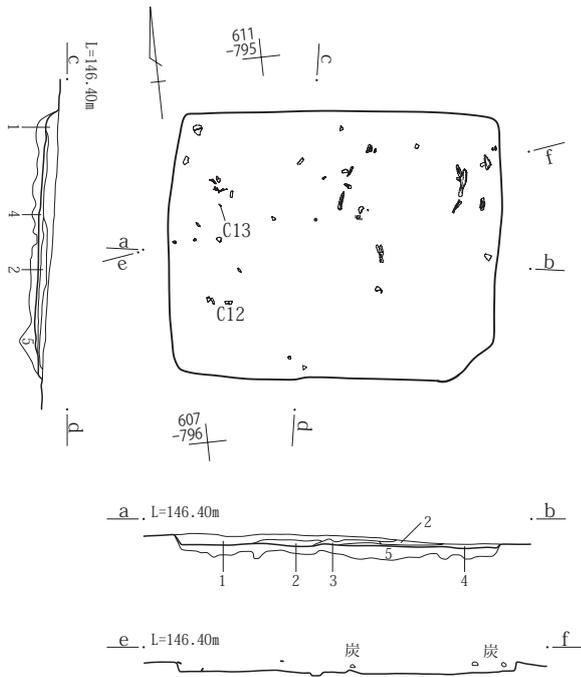
第30図 C区1住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



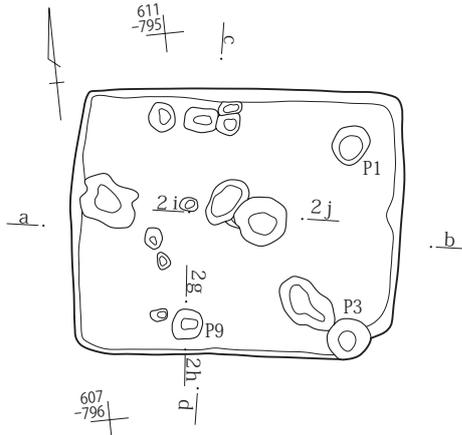
第31図 C区1住居(2)

遺構図 (C区)

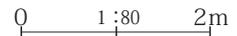


a-b, c-d

- 1 黒褐色土 白色軽石多量、炭化物を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 褐色ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりやや強い。
- 3 褐色土 焼土細粒を多量に含む。粘性弱く、しまりやや強い。
- 4 褐色土 ロームをベースに黒褐色土ブロックを含む。粘性・しまりやや強。貼床。
- 5 黒褐色土 白色軽石・明黄褐色土ブロック混じる。



- P1 g-h
1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。やや軟。
- P2 4~6・8 i-j, m~r, u-v
1 褐色土 軟。
- P3 k-l
1 黒褐色土
- P7 s-t
1 黒色土
- L=146.20m
2g . 2h 2i . L=146.30m 2j
- P9 2g-2h 灰 2i-2j
1 黒褐色土 白色軽石・明黄褐色土ブロック混じる。 1 にぶい赤褐色土 焼土粒子を多量に含む。軟らかい。
2 明赤褐色土 焼土層。よく焼けている。粘性弱、しまりやや強。
3 褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。粘性弱、しまりやや弱。



3住居外IP w-x

- 1 黒褐色土 白色軽石含む。ロームブロックを少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- 2 黒褐色土 白色軽石・ローム粒を少量含む。粘性・しまり弱い。
- 3 黒褐色土 白色軽石・ローム粒極く微量含む。粘性・しまり極く弱い。
- 4 暗褐色土 褐色土ブロック含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 5 黄褐色土 ロームブロックか。粘性・しまりやや強い。

外2P y-z

- 1 黒褐色土 白色軽石微量、褐色土ブロックを少量含む。粘性・しまりやや強い。

外P3 i-j

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- 2 黒褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- A 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性やや強く、しまり強い。壁溝に切られるため、床面より古くなる。
- B 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。粘性・しまりやや弱い。3住居溝。

外P4 k-l

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。粘性・しまりやや弱い。1とは別ビット。住居より古い。

A 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性・しまりやや強い。

外P5 2a-2b

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 2 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。粘性・しまりやや弱い。

3住居外P6 2c-2d

- 1 暗褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 褐色土 粘性やや強く、しまり強い。地山か。
- 3 暗褐色土 粘性・しまりやや強い。地山か。

外7P 2e-2f

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 粘性・しまりやや強い。

外8P 2g-2h

- 1 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性・しまりやや弱い。

外9P 2i-2j

- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 粘性・しまりやや弱い。

外10P 2k-2l

- 1 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性・しまりやや強い。

外11P 2m-2n

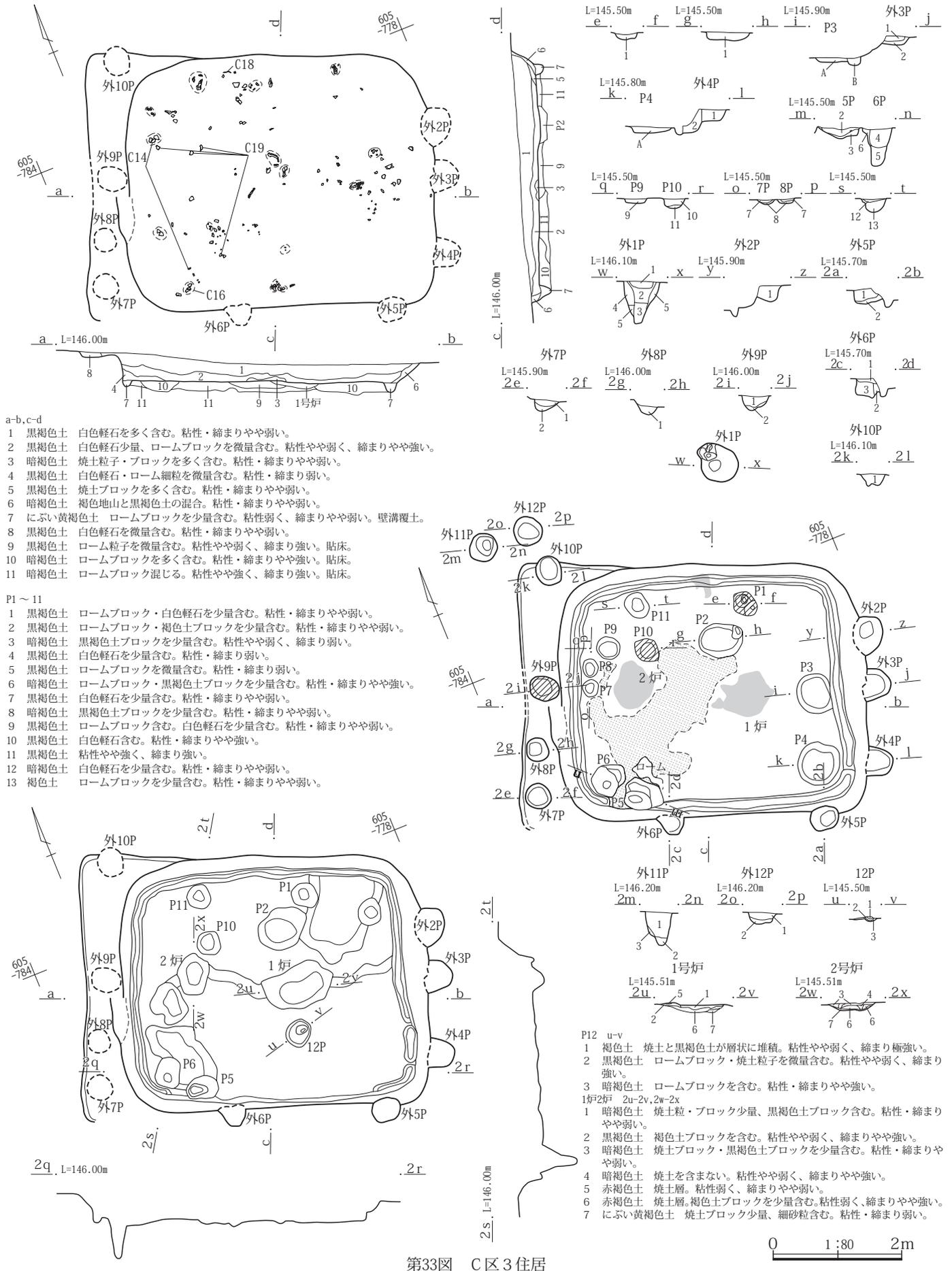
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 粘性・しまりやや弱い。
- 3 暗褐色土 粘性・しまりやや強い。地山に似る。

外12P 2o-2p

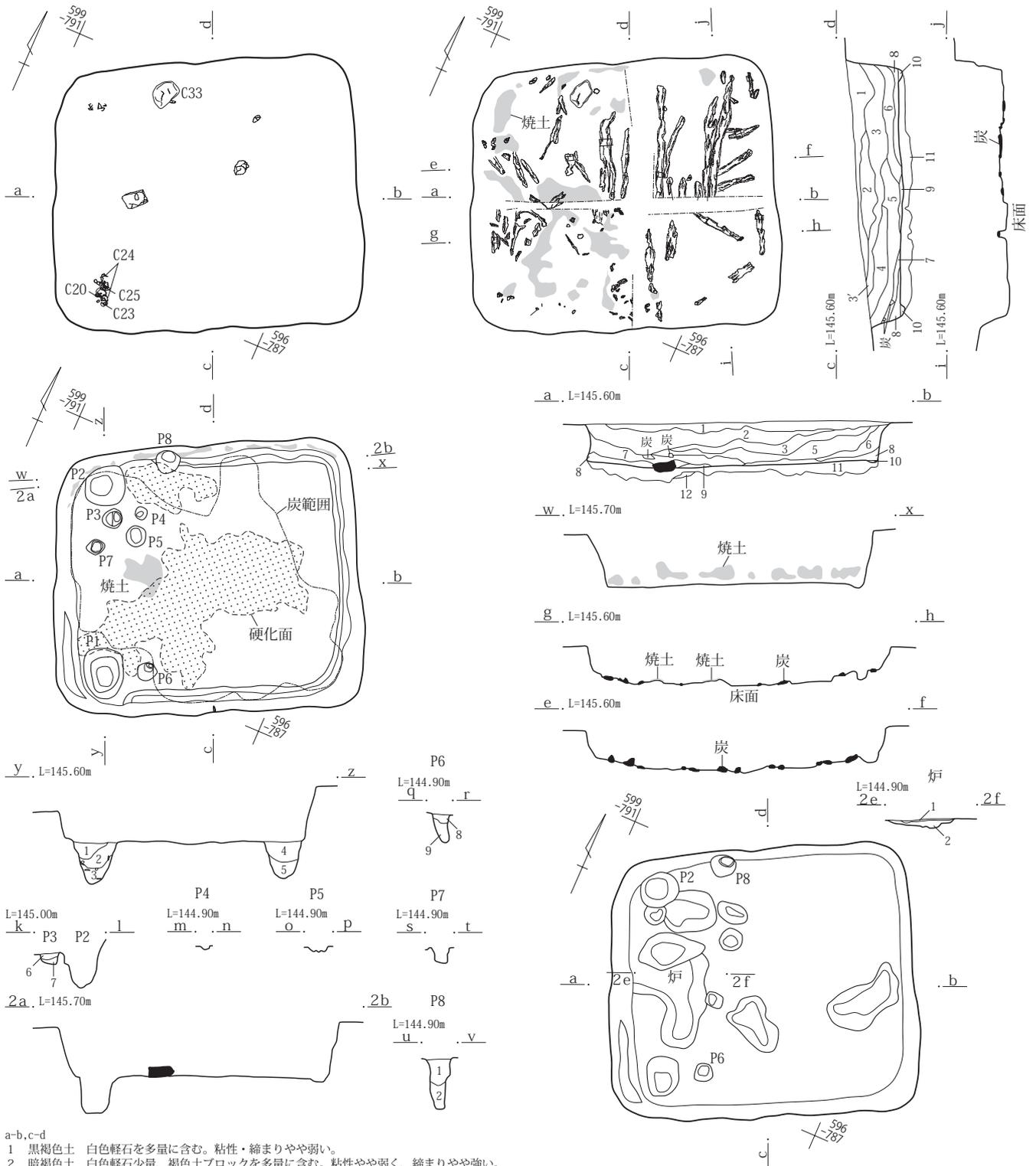
- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
- 2 黒褐色土 暗褐色土ブロックを含む。粘性・しまりやや強い。

第32図 C区2住居、3住居外ピット土層

第4章 検出された遺構と遺物



第33図 C区3住居



a-b, c-d

- 1 黒褐色土 白色軽石を多量に含む。粘性・縮まりやや弱い。
 - 2 暗褐色土 白色軽石少量、褐色土ブロックを多量に含む。粘性やや弱く、縮まりやや強い。
 - 3 黒色土 白色軽石少量、ロームブロックを微量含む。粘性・縮まりやや弱い。
 - 3' 黒色土 白色軽石を多量に含む。粘性・縮まりやや弱い。
 - 4 黒褐色土 白色軽石少量、褐色土ブロックを多量に含む。粘性やや強く、縮まりやや弱い。
 - 5 黒褐色土 白色軽石微量、ロームブロックを少量含む。粘性・縮まり弱い。
 - 6 黒褐色土 白色軽石微量、炭化物少量、ロームブロックを含む。粘性やや弱く、縮まり弱い。
 - 7 黒褐色土 白色軽石微量、焼土ブロック多量、炭化物を含む。粘性弱く、縮まりやや弱い。
 - 8 黒褐色土 白色軽石極く微量、細砂少量、炭化物を含む。粘性・縮まり弱い。
 - 9 黒色土 白色軽石を多量に含む。粘性やや弱く、縮まりやや強い。
 - 10 暗褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロックを含む。粘性・縮まりやや弱い。壁溝覆土。
 - 11 黒褐色土 黄色土ブロックを多量に含む。
 - 12 11に焼土ブロックを含む。炉の断面。
- P1~6 k-l, q-r, y-z
- 1 黒褐色土 焼土ブロック・粒子少量、炭化物を微量含む。粘性弱く、縮まり極く弱い。
 - 2 黒色土 ローム粒子・ブロックを極微量含む。粘性・縮まり弱い。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・粒子を少量含む。粘性弱く、縮まり極弱い。
 - 4 黒褐色土 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロックを微量含む。粘性やや弱く、縮まり弱い。

- 5 黒褐色土 ロームブロック・粒子を微量含む。粘性・縮まり弱い。
- 6 黒色土 炭化物・焼土粒子・ロームブロックを少量含む。粘性やや弱く、縮まり弱い。
- 7 暗褐色土 ロームブロック・粒子を少量含む。粘性・縮まりやや弱い。
- 8 黒褐色土 ローム粒子を微量含む。粘性やや弱く、縮まり弱い。
- 9 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。粘性弱く、縮まり極弱い。

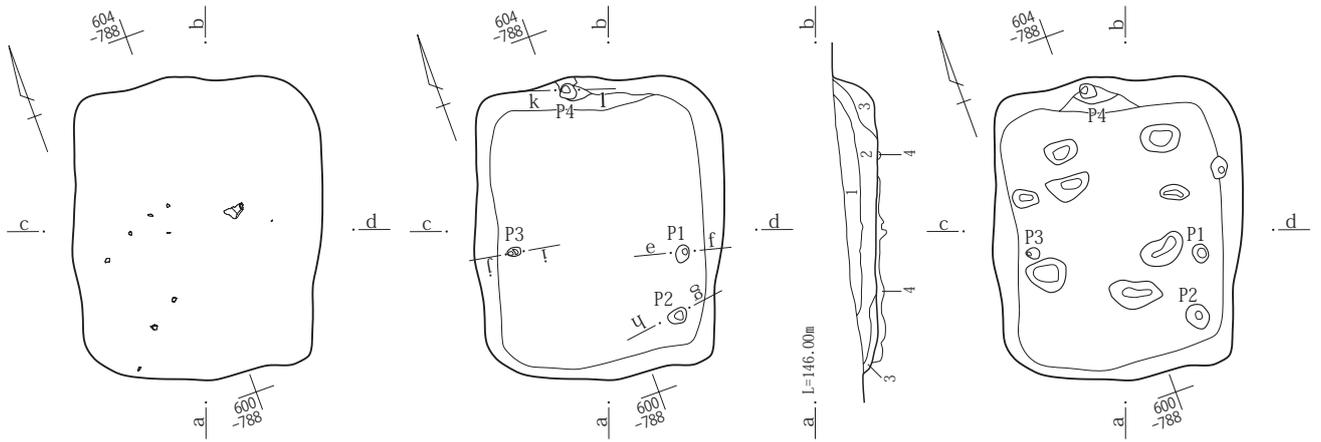
- P8 u-v
- 1 黒褐色土 黄色粒子を多量に含む。
 - 2 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。

- 炉 2e-2f
- 1 黒色土 焼土ブロック・粒子・炭化物を少量含む。粘性・縮まりやや強い。
 - 2 黒褐色土 焼土ブロック・黄色土ブロックを含む。

0 1:80 2m

第34図 C区4住居

第4章 検出された遺構と遺物



5住居 a-b,c,d

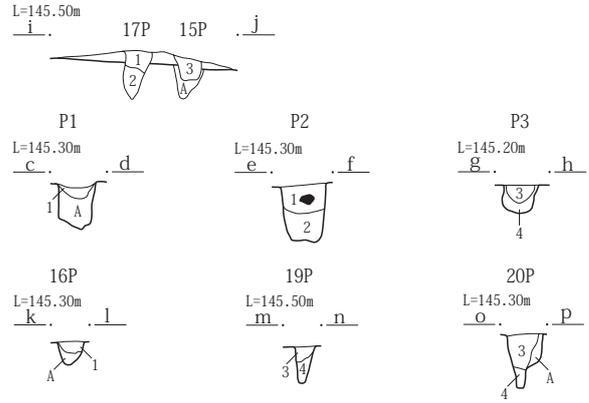
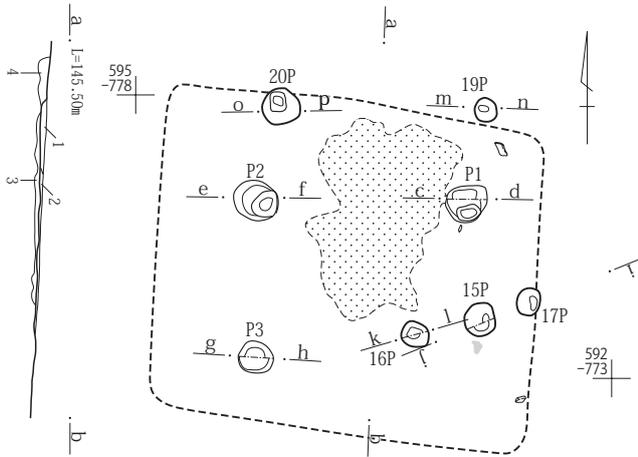
- 1 黒褐色土 白色軽石を多量に含む。
- 2 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
- 3 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 ロームをベースに黒褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや強。

c. L=146.00m

P1~4 e-f,g-h,i-j,k-l

- 1 暗褐色土 褐色土ブロックを少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
- 2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。
- 3 暗褐色土 黒褐色土ブロックを含む。粘性やや強く、しまり弱い。
- 4 黒褐色土 白色軽石を微量含む。褐色土ブロックを少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 5 暗褐色土 黒色土ブロックを多量に含む。粘性・しまりやや強い。

7住居



7住居 a-b

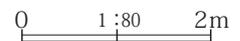
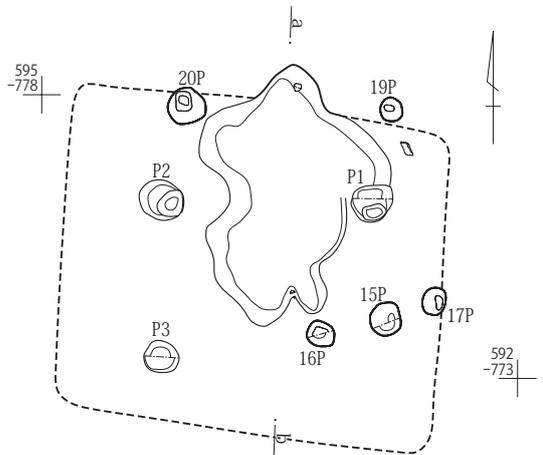
- 1 黒褐色土 白色軽石、焼土粒を微量含む。粘性・締まりやや弱い。
- 2 黒褐色土 白色軽石・焼土ブロックを少量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 3 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。粘性やや強く、締まり強い。貼床。
- 4 黒褐色土 白色軽石微量、焼土粒を少量含む。粘性・締まりやや弱い。別ピットの覆土。

P1・P2 c-d,e-f

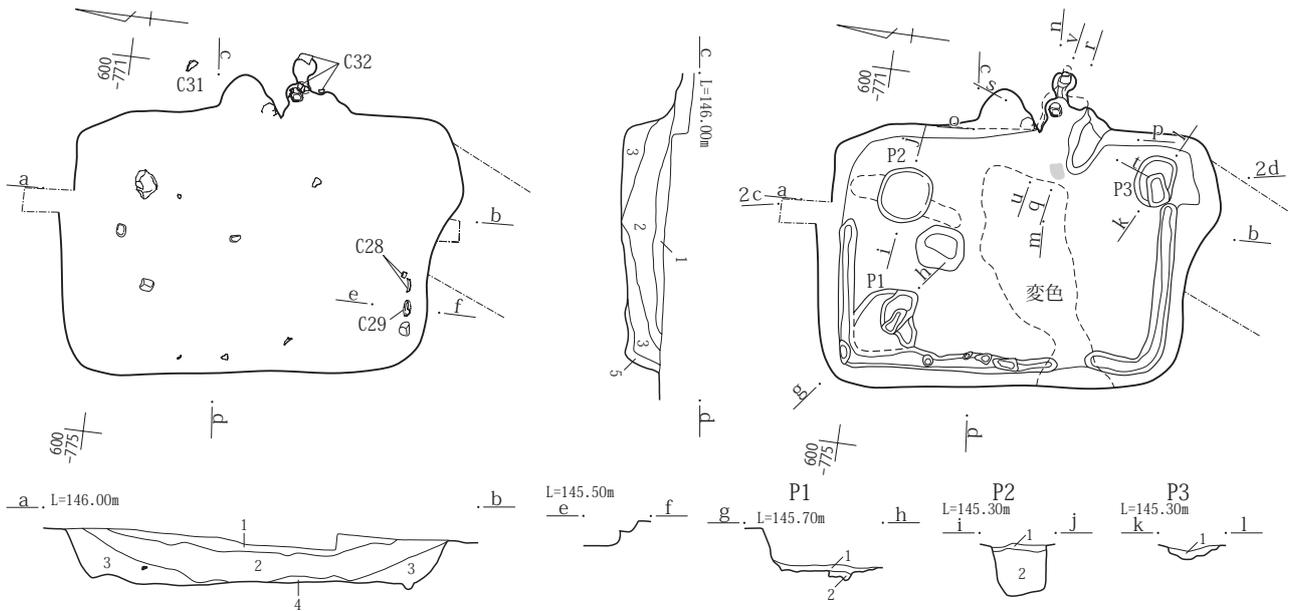
- 1 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性弱く、締まりやや強い。
- A 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。軽石含まない。古い遺構の覆土か。
- 2 黒色土 白色軽石微量に含む。粘性やや弱く、締まり弱い。

P3・P15~P17・P19・P20 g-h,i-j,k-l,m-n,o-p

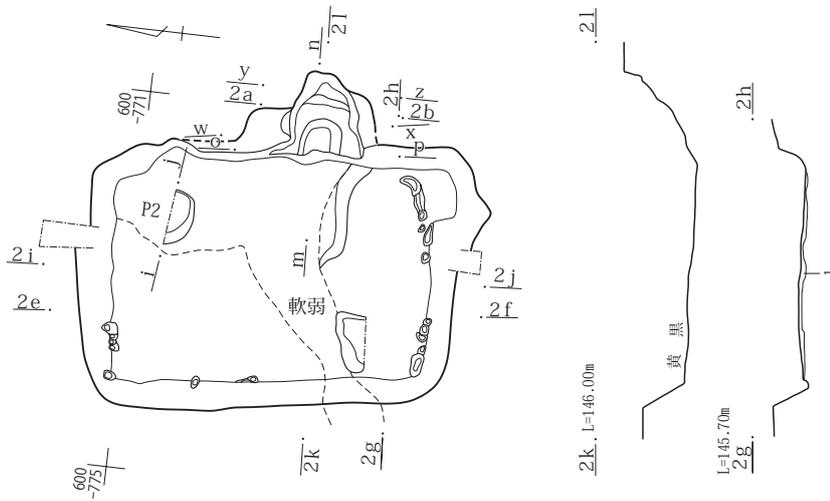
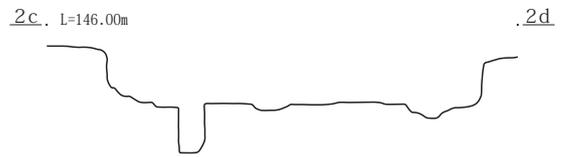
- 1 暗褐色土 白色軽石・焼土粒を少量含む。焼土細粒を全体に含む。
- 2 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性やや強く、締まりやや弱い。
- 3 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- 4 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性やや弱く、締まり弱い。
- A 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや強い。別遺構の覆土か。



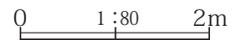
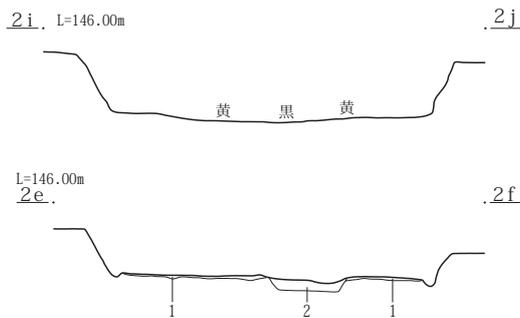
第35図 C区5・7住居



- a-b, c-d
- 1 黒色土 白色軽石を多量に含む。
 - 2 黒褐色土 白色軽石を含む。1に比べ黄色味あり。
 - 3 黒色土 白色軽石を少量含む。
 - 4 黒褐色土 焼土粒を含む。
 - 5 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。
- P1 g-h
- 1 褐色土
 - 2 黄褐色土
- P2 i-j
- 1 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。
 - 2 黒色土 下層の土坑覆土。
- P3 k-l
- 1 褐色土 黄色土ブロックを多量に含む。

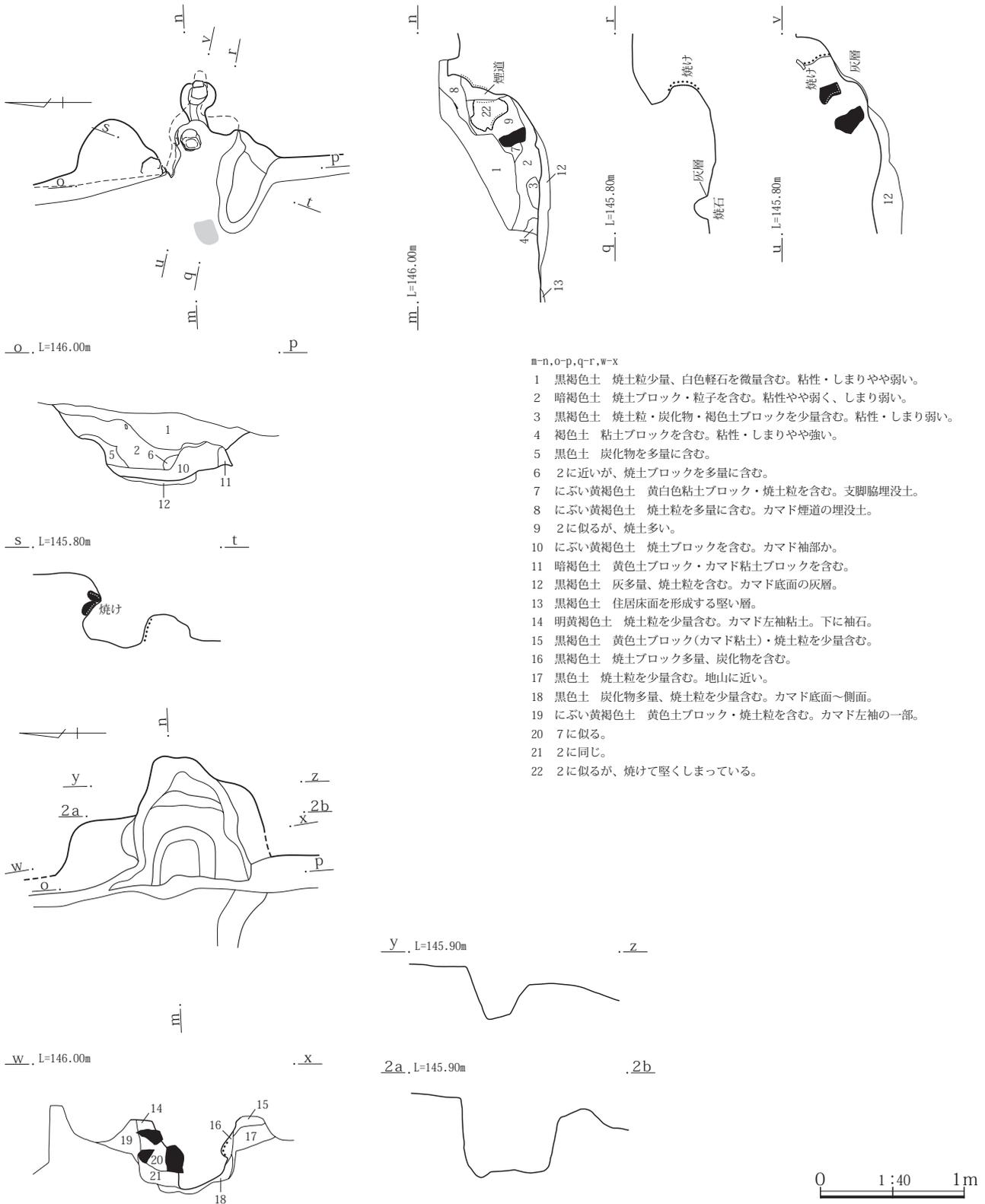


- 掘り方 2g-2h, 2e-2f
- 1 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。表面は強く締まっている。床面を形成する土、貼床。
 - 2 黒色土 軽石を含まない。軟らかい。上面に住居床面の破断した堅い面がある。

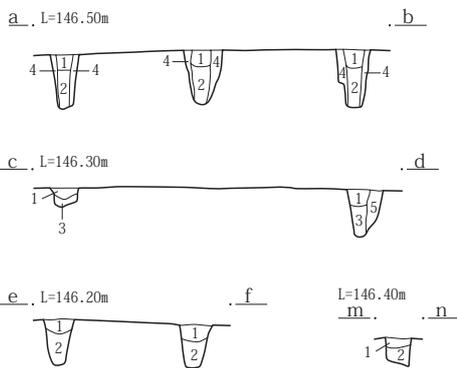
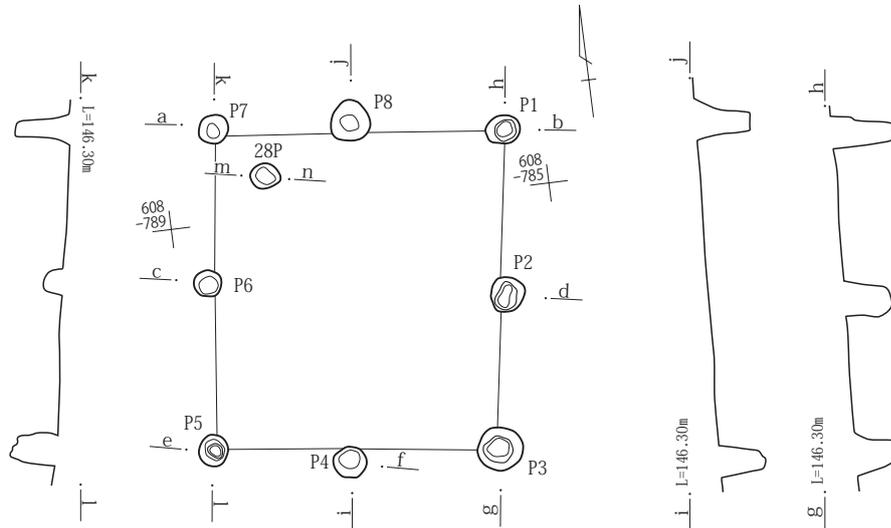
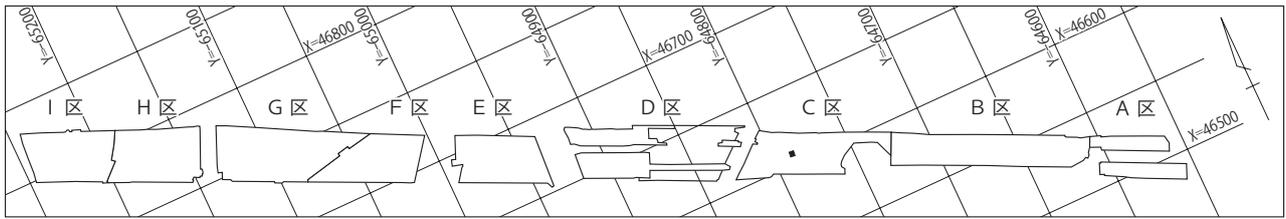


第36図 C区6住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第37図 C区6住居(2)

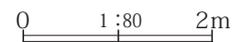


a-b, c-d, e-f

- 1 暗褐色土 白色軽石含む。ローム粒微量。粘性やや弱、締まりやや強。
- 2 黒褐色土 白色軽石微量。粘性やや弱い。締まり弱い。
- 3 黒褐色土 細砂粒微量。粘性・締まりやや強い。
- 4 暗褐色土 白色軽石微量。ローム粒・ブロックを少量含む。粘性・締まりやや強い。
- 5 黒褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。粘性・締まりやや強い。

28ピット m-n

- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。
- 2 黒褐色土 締まっている。



第38図 C区1掘立柱建物

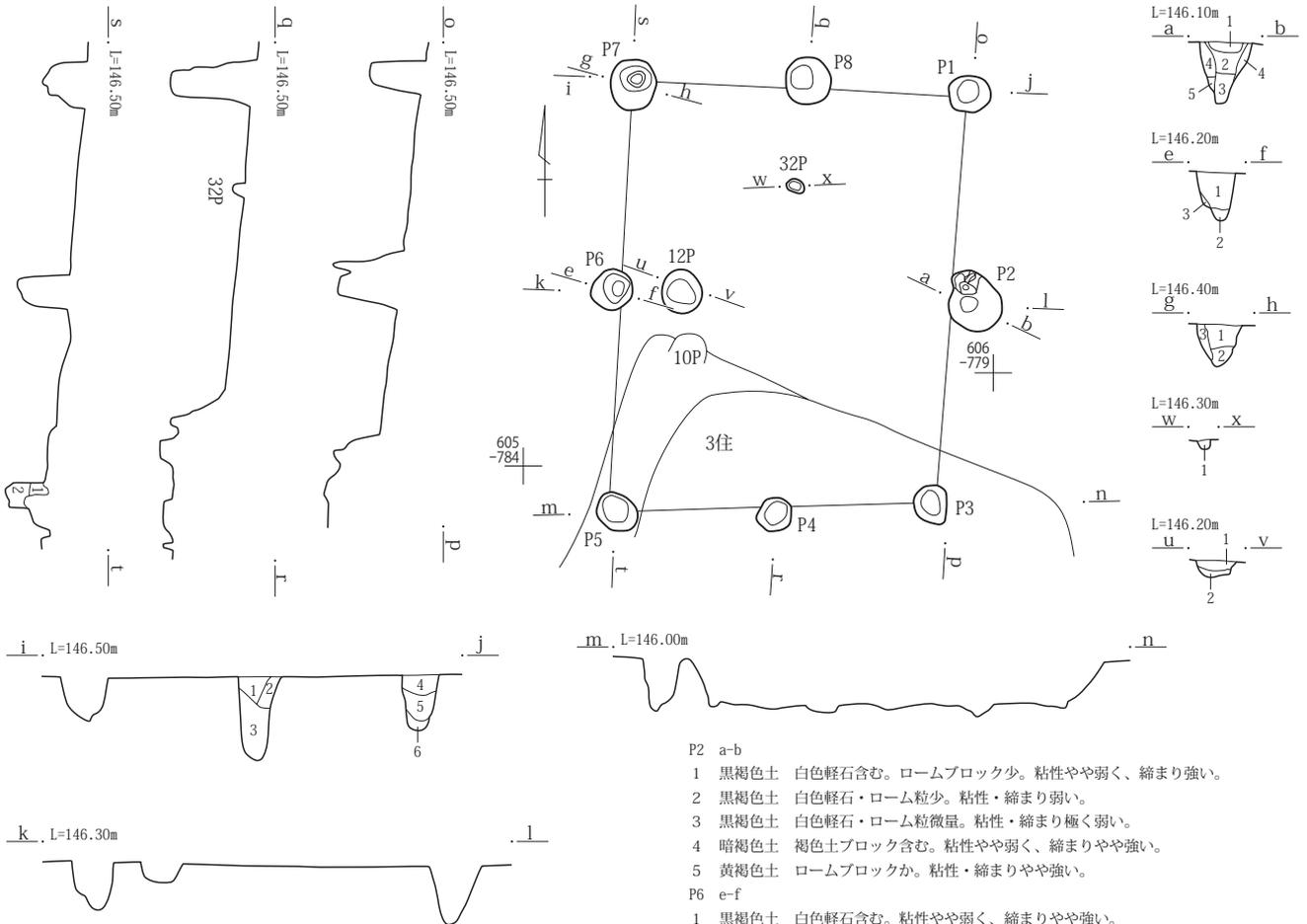
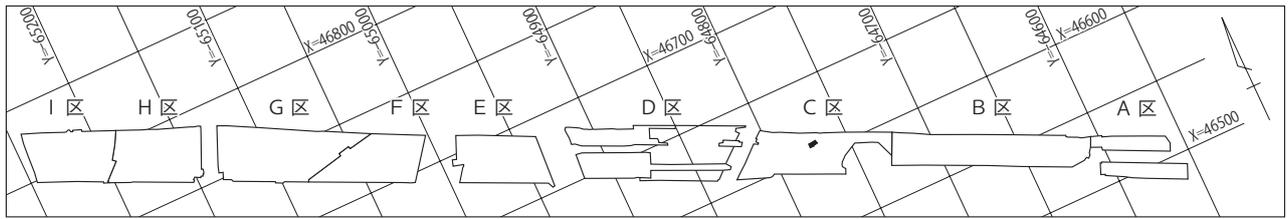
第7表 C区1掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位 N-7°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	規模				
				番号	上ノcm長径×短径	下ノcm長径×短径	深さcm	備考
P1-P3 : 338	P1-P7 : 307	P1-P2 : 177	P1-P8 : 163	1	37×31	17×14	69	
P8-P4 : 356	P2-P6 : 313	P2-P3 : 162	P8-P7 : 144	2	38×35	24×9	52	
P7-P5 : 339	P3-P5 : 298	P7-P6 : 164	P3-P4 : 157	3	47×46	24×20	51	
		P6-P5 : 177	P4-P5 : 142	4	35×32	22×19	50	
				5	33×30	13×10	49	
				6	30×28	20×18	23	
				7	32×30	16×13	58	
				8	44×41	21×17	61	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値

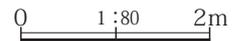
※2 柱穴間の距離は芯々で計測

第4章 検出された遺構と遺物



- P5 s-t
 1 黒褐色土 白色軽石を多く含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 2 黒褐色土 白色軽石を少量含む。粘性・締まり弱い。
- P1・P8・32ピット i-j, w-x
 1 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 3 2に似るがローム粒子多い。
 4 黒褐色土 白色軽石を含む。
 5 黒褐色土
 6 黒褐色土 ローム粒子多い。

- P2 a-b
 1 黒褐色土 白色軽石含む。ロームブロック少。粘性やや弱く、締まり強い。
 2 黒褐色土 白色軽石・ローム粒少。粘性・締まり弱い。
 3 黒褐色土 白色軽石・ローム粒微量。粘性・締まり極く弱い。
 4 暗褐色土 褐色土ブロック含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 5 黄褐色土 ロームブロックか。粘性・締まりやや強い。
- P6 e-f
 1 黒褐色土 白色軽石含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 2 黒褐色土 粘性・締まりやや弱い。
 3 暗褐色土 粘性・締まりやや強い。地山に似る。
- P7 g-h
 1 黒褐色土 白色軽石含む。粘性やや弱く、締まり弱い。
 2 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性弱く、締まり極く弱い。
 3 黒褐色土 ロームブロックを微量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
- P12 u-v
 1 黒褐色土 白色軽石を含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。
 2 黒褐色土 暗褐色土ブロック含む。粘性・締まりやや強い。

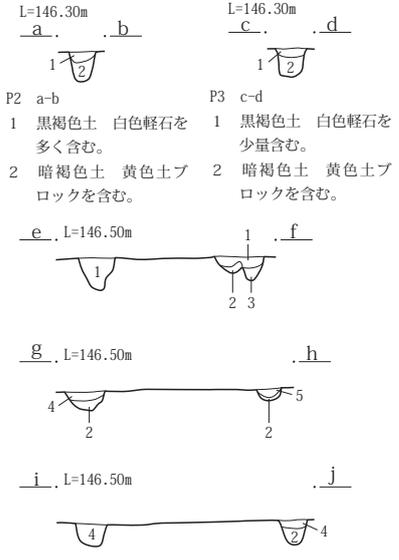
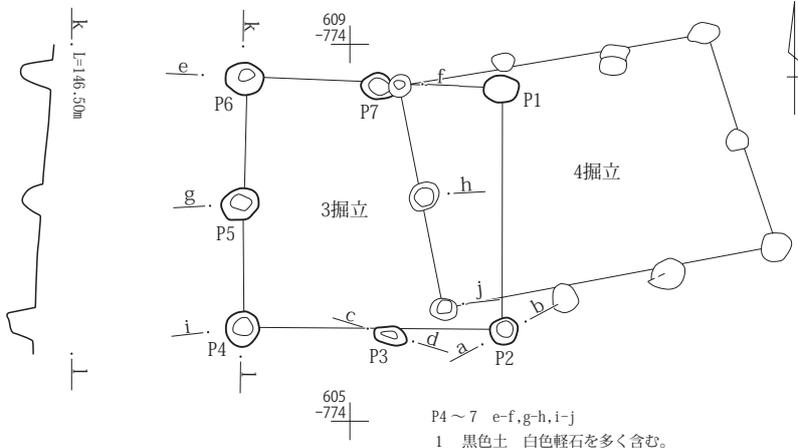
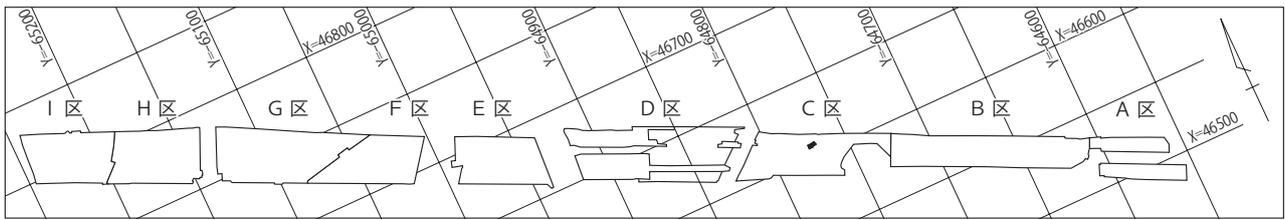


第39図 C区2掘立柱建物

第8表 C区2掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位N-3°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	規模				
				番号	上ノcm長径×短径	下ノcm長径×短径	深さcm	備考
P1-P3: 442	P1-P7: 353	P1-P2: 228	P1-P8: 178	1	46×39	26×22	63	
P8-P4: 468	P2-P6: 373	P2-P3: 217	P8-P7: 176	2	69×55	19×18	70	
P7-P5: 464	P3-P5: 336	P7-P6: 226	P3-P4: 165	3	44×38	28×20	12	3住P1
		P6-P5: 239	P4-P5: 172	4	38×37	27×21	10	3住P10
				5	48×37	32×27	26	もと9P
				6	45×41	16×12	56	もと11P
				7	55×49	13×10	49	もと14P
				8	50×48	25×24	94	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は芯々で計測

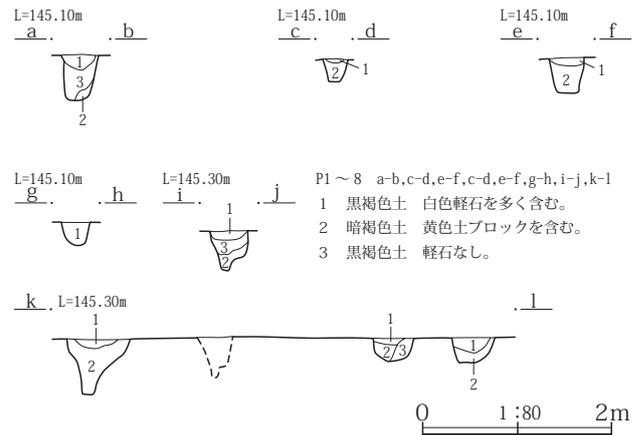
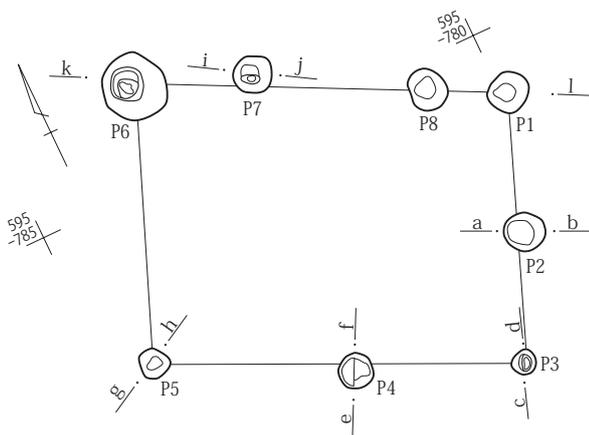


- P4 ~ 7 e-f, g-h, i-j
- 1 黒色土 白色軽石を多く含む。
 - 2 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。軟らかい。
 - 3 2よりも黄色土ブロック多い。
 - 4 黒色土 白色軽石を少量含む。
 - 5 黒褐色土 白色軽石を多く含む。

第9表 C区3掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位N-87°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	規模				
				番号	上バ&cm長径×短径	下バ&cm長径×短径	深さ cm	備考
P1-P6 : 268	P1-P2 : 258	P1-P7 : 129	P6-P5 : 135	1	38×30	23×20	37	
P2-P4 : 277	P7-P3 : 263	P7-P6 : 139	P5-P4 : 132	2	30×28	18×17	35	もと38P
	P6-P4 : 267	P2-P3 : 122		3	36×20	18×7	39	もと39P
		P3-P4 : 155		4	38×35	21×19	27	
				5	40×33	23×16	24	
				6	40×34	16×13	34	
				7	-×29	-×18	15	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は芯々で計測



- P1 ~ 8 a-b, c-d, e-f, c-d, e-f, g-h, i-j, k-l
- 1 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
 - 2 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。
 - 3 黒褐色土 軽石なし。

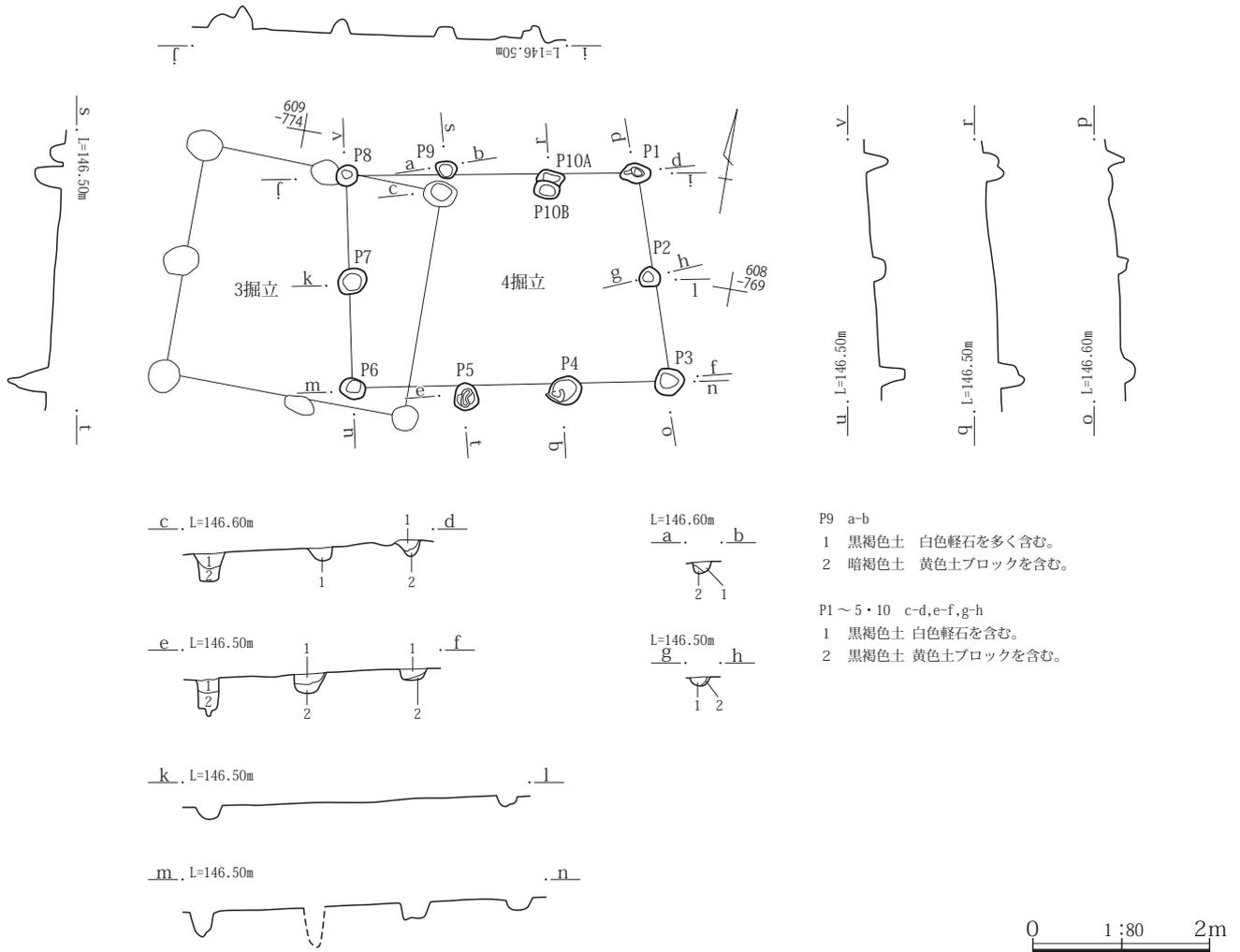
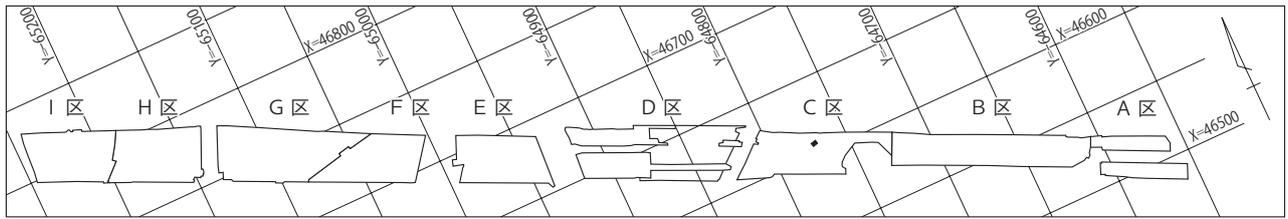
第10表 C区5掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位N-64°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁行梁行 cm	梁行梁行 cm	規模				
				番号	上バ&cm長径×短径	下バ&cm長径×短径	深さ cm	備考
P1-P6 : 400	P1-P3 : 289	P1-P8 : 85	P1-P2 : 150	1	45×43	23×19	30	
P3-P5 : 294	P6-P5 : 294	P8-P7 : 185	P2-P3 : 140	2	44×41	31×26	52	
		P7-P6 : 133		3	27×26	13×6	25	
		P3-P4 : 182		4	38×37	29×25	38	
		P4-P5 : 211		5	33×31	17×12	25	
				6	72×67	18×10	60	
				7	43×41	9×6	53	
				8	45×38	24×22	31	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は芯々で計測

第40図 C区3・5掘立柱建物

第4章 検出された遺構と遺物

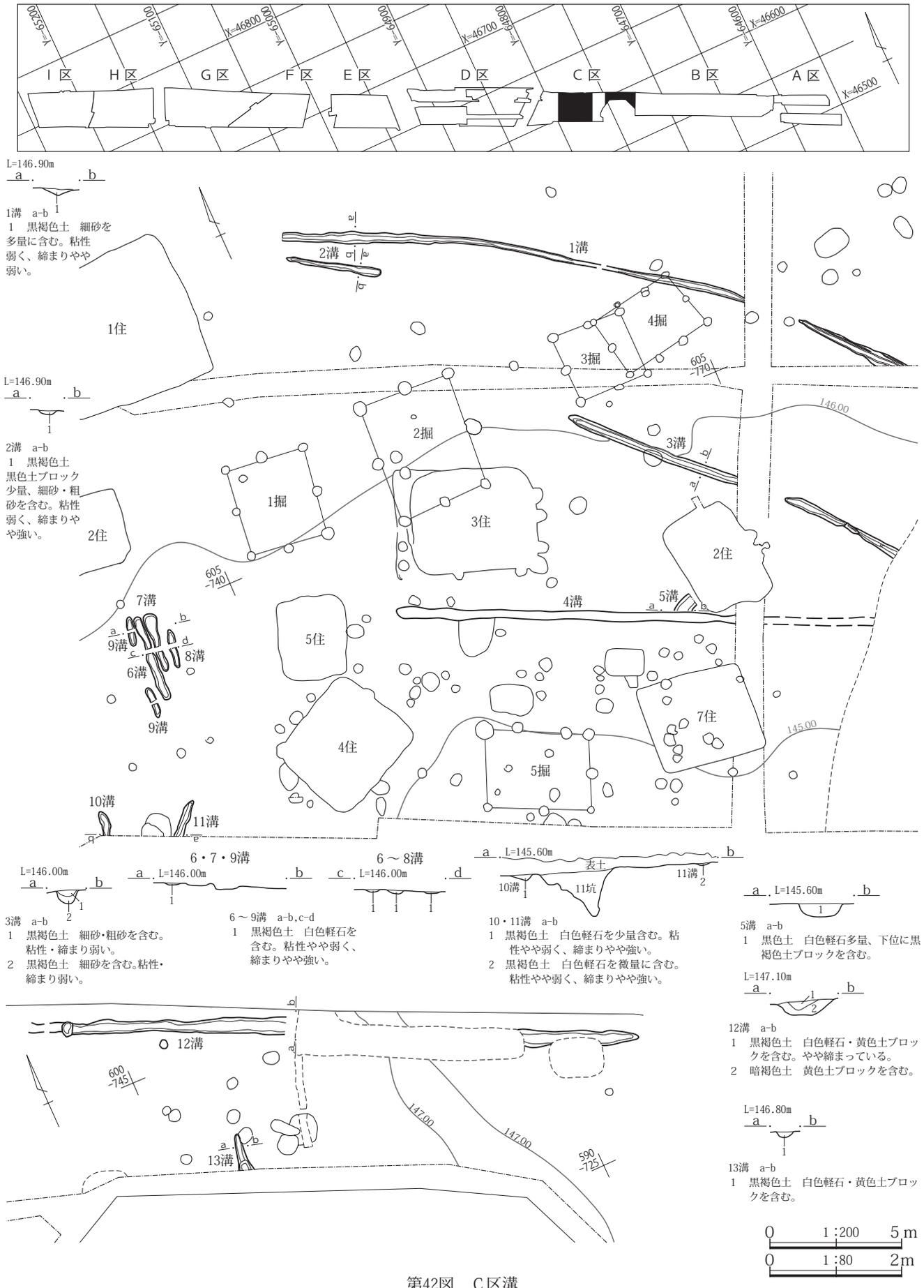


第11表 C区4号掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 3間×2間		長軸方位N-80°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	規模番号	上ノスcm長径×短径	下ノスcm長径×短径	深さcm	備考
P1-P8 : 327	P1-P3 : 239	P1-P10A : 98	P1-P2 : 120	1	35×23	9×8	20	
P2-P7 : 331	P10A-P4 : 239	P1-P10B : 103	P2-P3 : 120	2	24×23	12×12	12	
P3-P6 : 354	P10B-P4 : 226	P10A-P9 : 118	P8-P7 : 121	3	33×30	21×17	15	
	P9-P5 : 259	P10B-P9 : 116	P7-P6 : 120	4	37×31	27×23	23	
	P8-P6 : 240	P9-P8 : 112		5	31×27	16×3	48	
		P3-P4 : 117		6	29×23	18×15	29	
		P4-P5 : 113		7	34×29	20×20	16	
		P5-P6 : 125		8	25×24	12×9	27	
				9	25×20	16×14	16	もと37P
				10A	32×-	19×-	19	
				10B	29×20	18×12	23	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値

※2 柱穴間の距離は芯々で計測

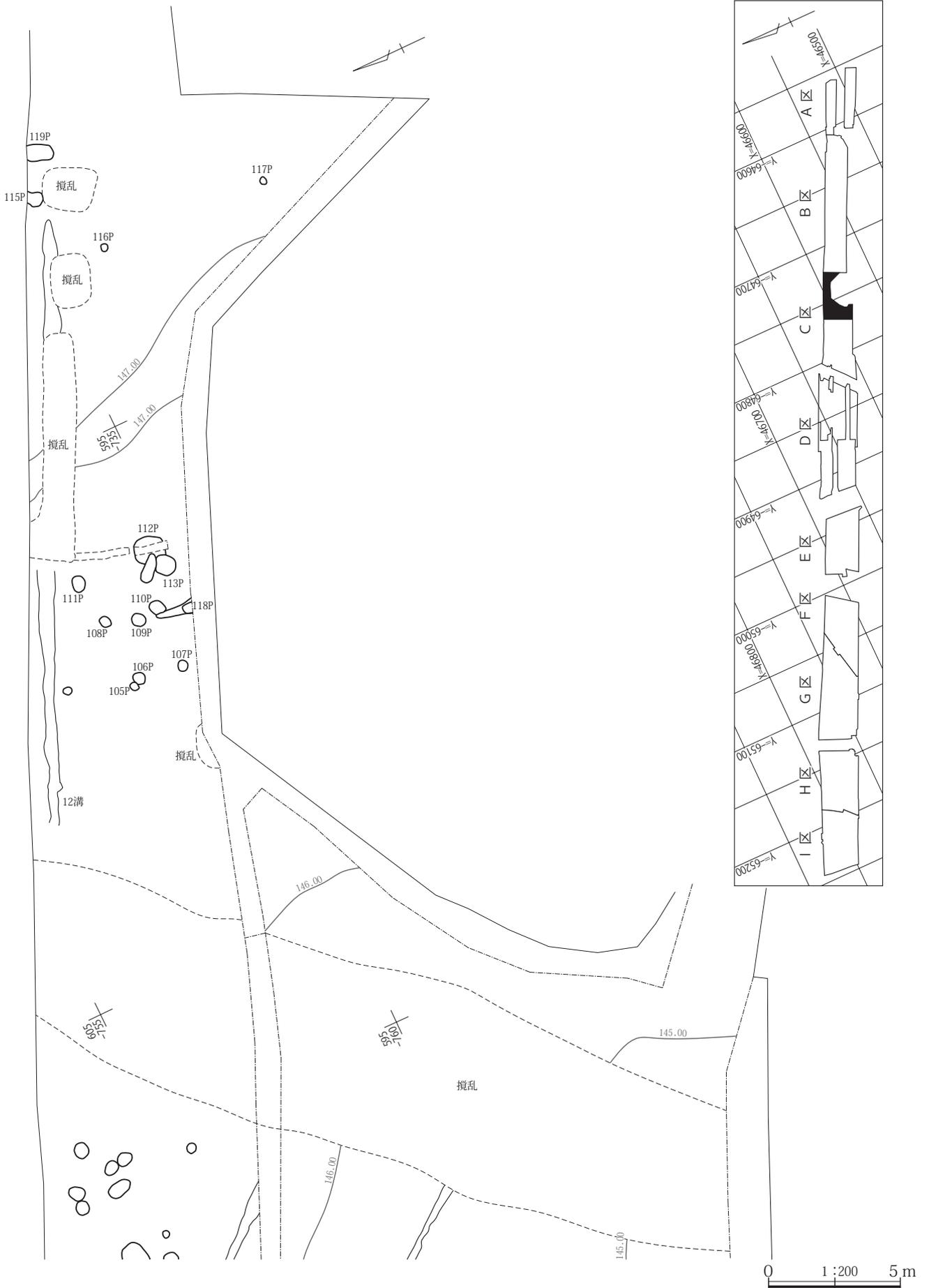


第42図 C区溝

第4章 検出された遺構と遺物

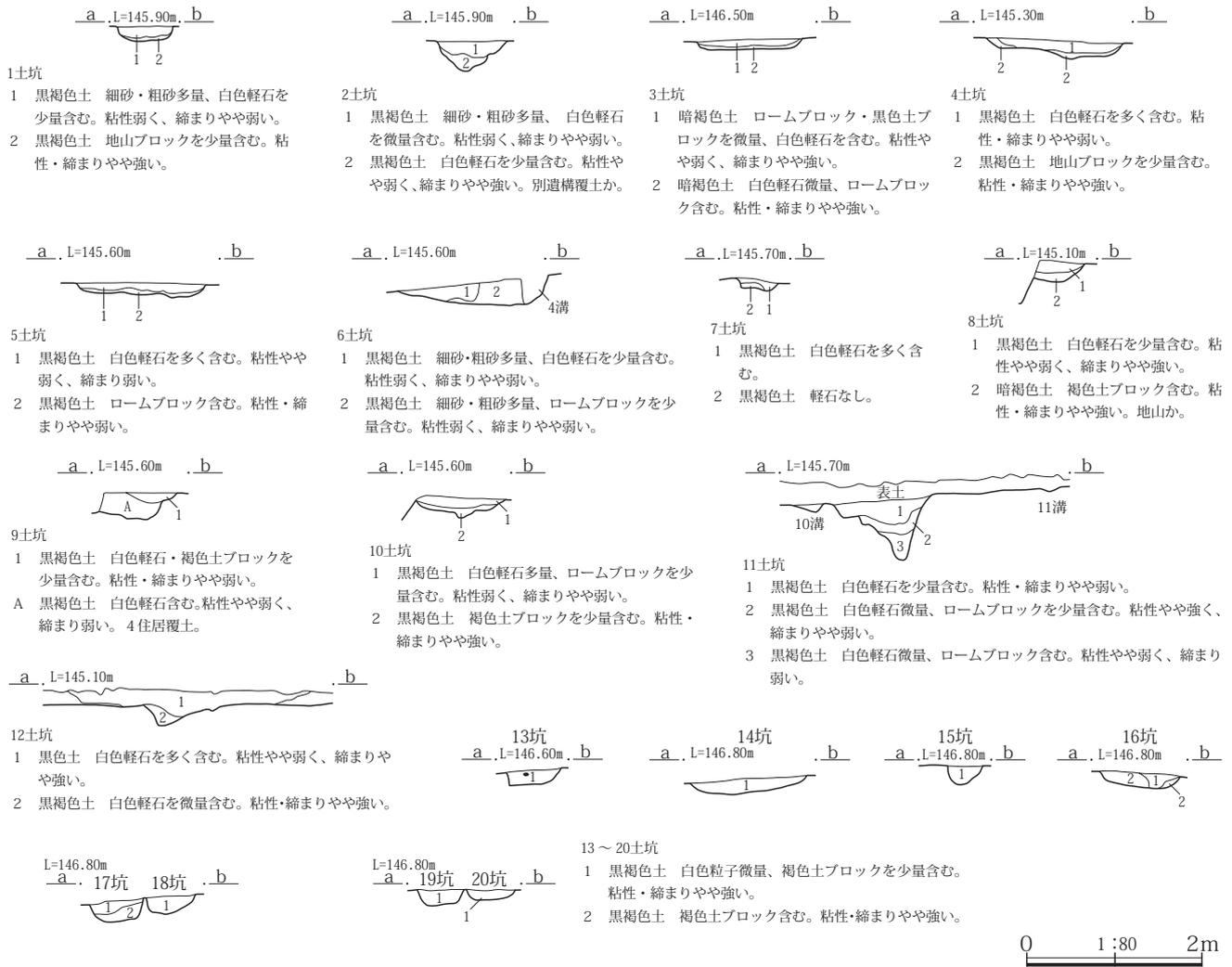


第43図 C区1面土坑・ピット位置図(1)



第44図 C区1面土坑・ピット位置図(2)

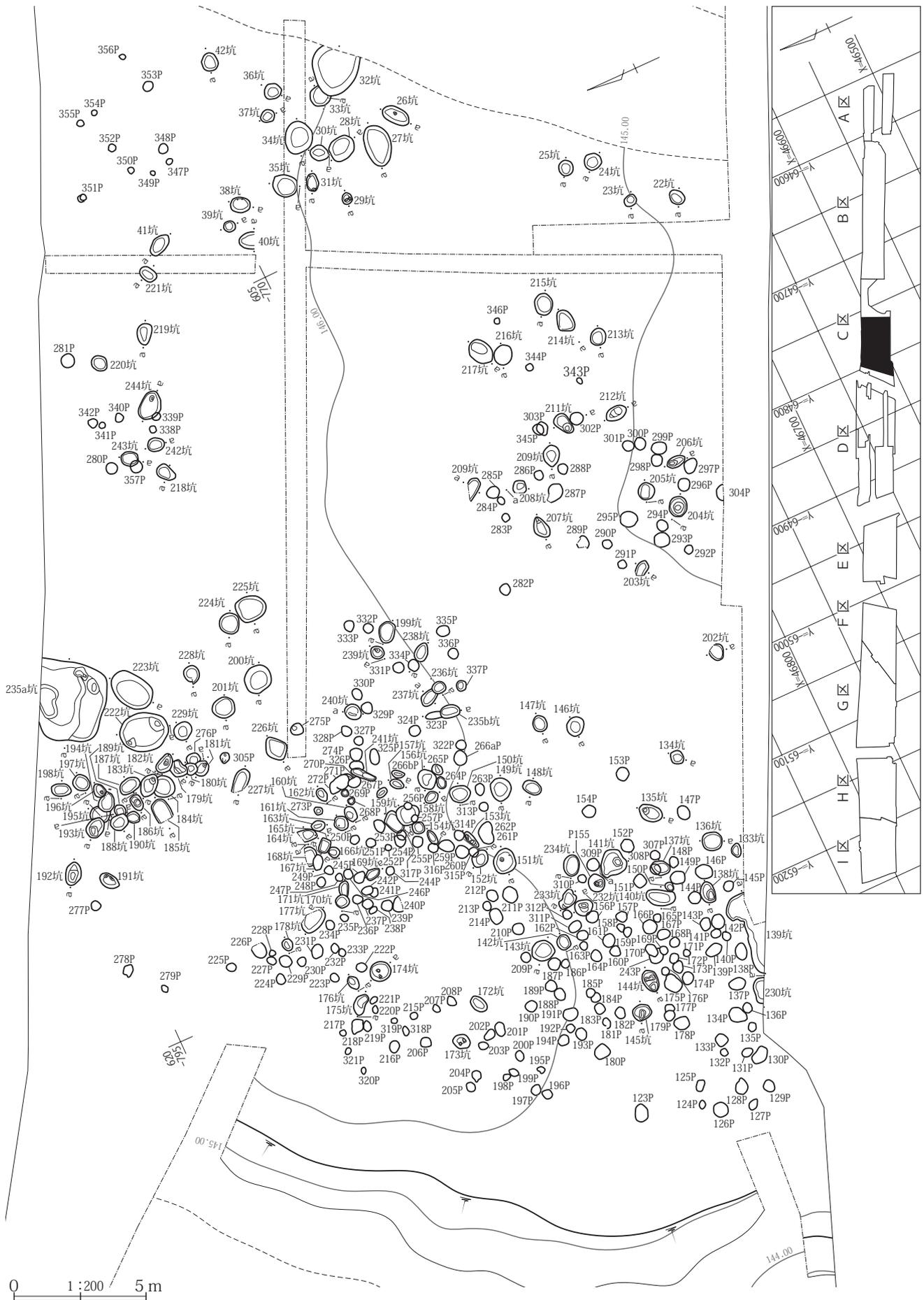
第4章 検出された遺構と遺物



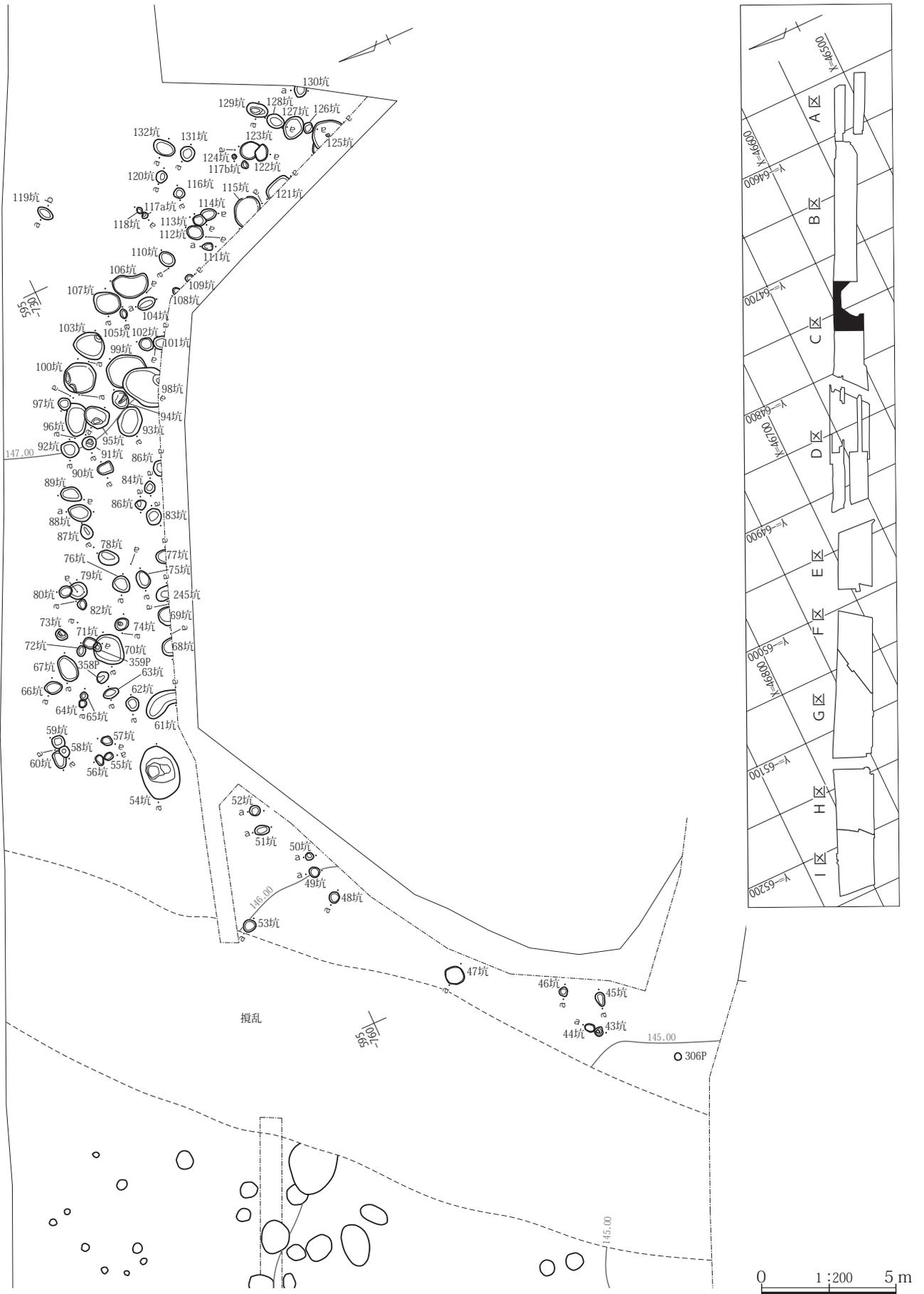
第45図 C区1面土坑断面図

第12表 C区1面土坑計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係	旧→新	長×短×深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	土坑	C	1	602-776				68×62・20		土師器1		
2	土坑	C	1	599-772		2坑→6住		84×65・40				
3	土坑	C	1	610-795		2住と重複		122×90・16				
4	土坑	C	1	596-782				162×113・41		土師器6		
5	土坑	C	1	596-777		66P→5坑		149×103・20		縄文不明1		
6	土坑	C	1	599-782		5溝と重複		132・32				
7	土坑	C	1	598-790		4住→7坑		61×50・16		土師器9		
8	土坑	C	1	595-787		4住と重複		55・33				
9	土坑	C	1	599-787		4住→7坑		62×54・16		土師器1		土師器外面刷毛目
10	土坑	C	1	597-790		4住と重複		110×70・34		土師器1		
11	土坑	C	1	597-796				111・86				
12	土坑	C	1	591-782				88・31				
13	土坑	C	1	606-764				60×56・27		縄文不明1		
14	土坑	C	1	607-764				133×89・21				
15	土坑	C	1	607-759				60×53・26				
16	土坑	C	1	607-761				91×51・21				
17	土坑	C	1	606-760				61×48・27				
18	土坑	C	1	607-760				58×46・22				
19	土坑	C	1	608-761				53×49・21				
20	土坑	C	1	608-760				62×50・16				

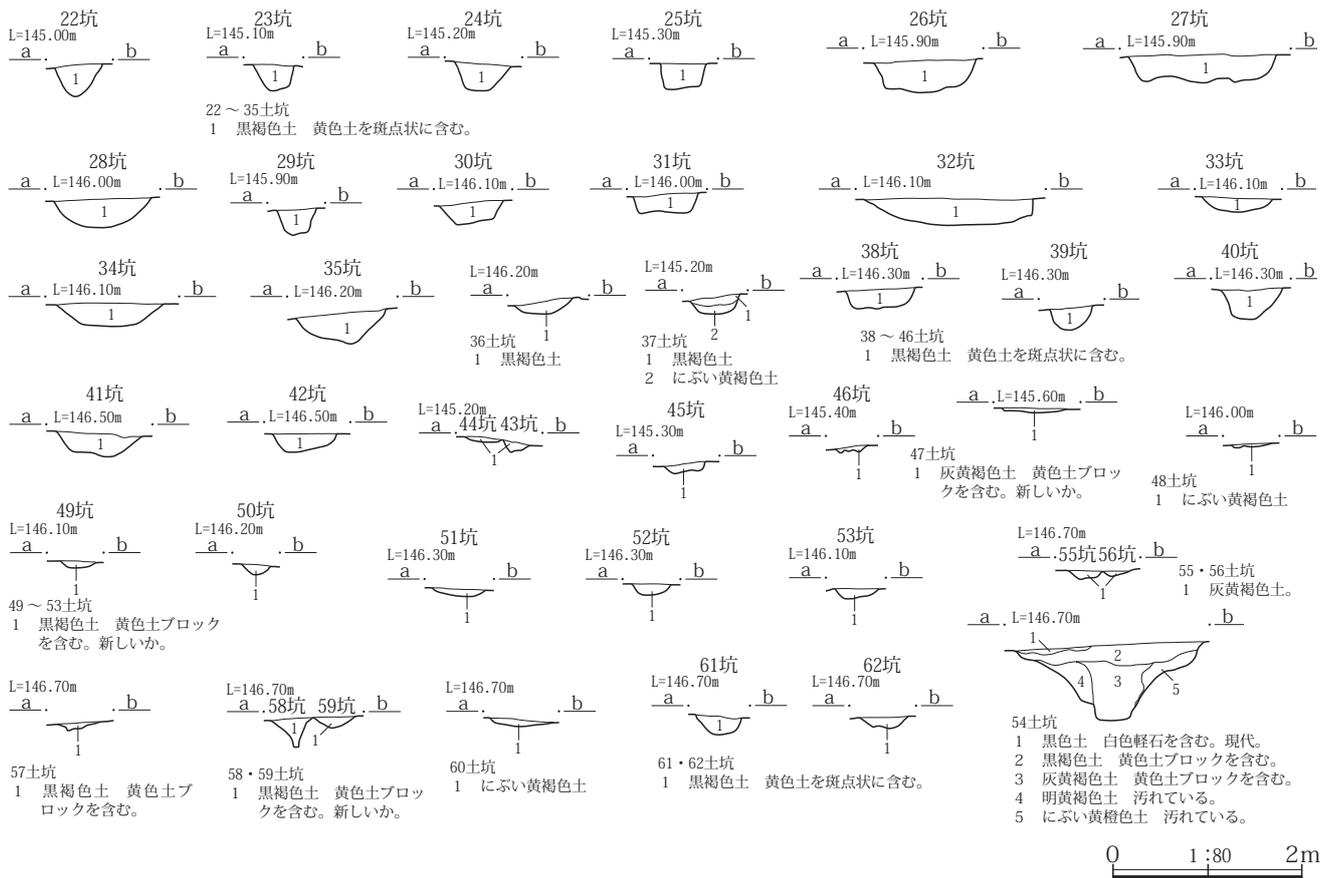


第46図 C区2面土坑・ピット位置図(1)



第47図 C区2面土坑・ピット位置図(2)

遺構図 (C区)

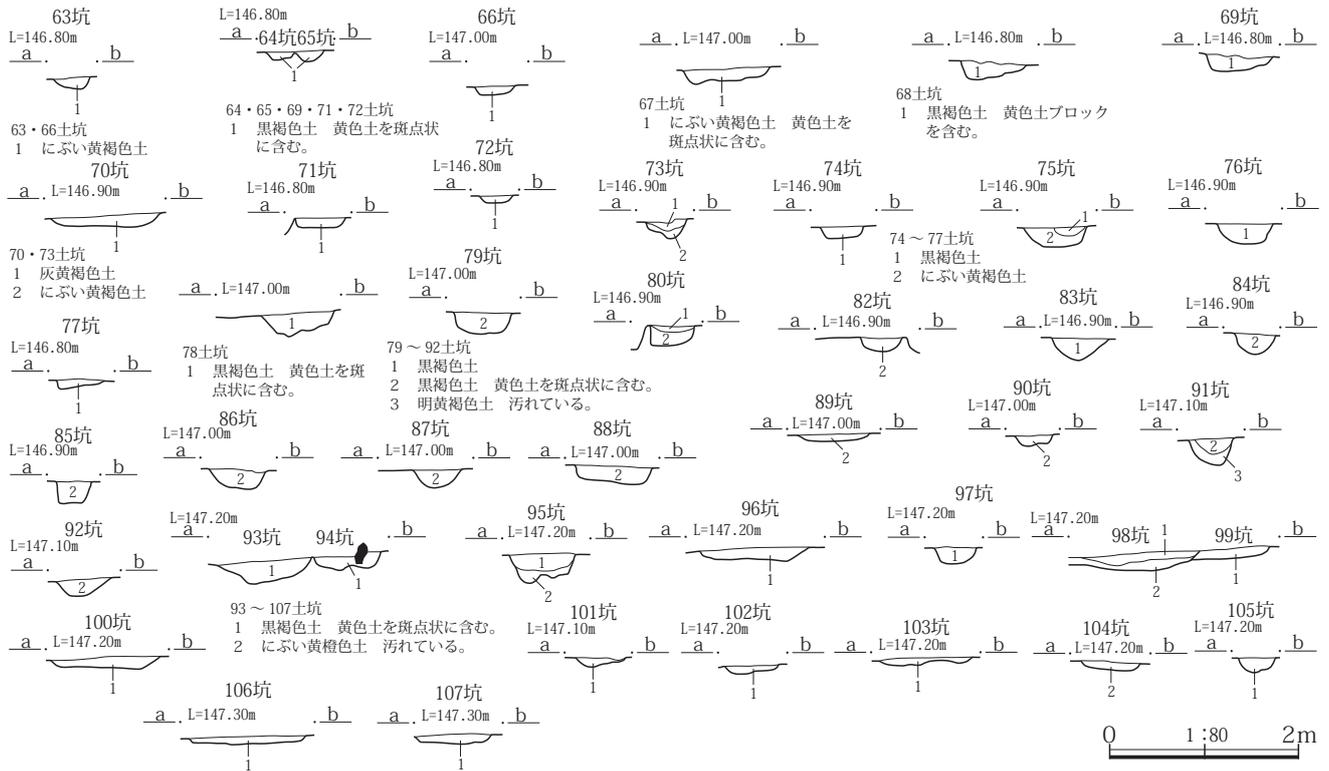


第48図 C区2面土坑断面図(1)

第13表 C区2面土坑計測表(1)

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
21	土坑	C	1	欠番						
22	土坑	C	2	589-773		63×51・40				
23	土坑	C	2	591-773		50×42・34				
24	土坑	C	2	592-771		64×64・47				
25	土坑	C	2	593-771		58×54・33				
26	土坑	C	2	598-766		108×60・47				
27	土坑	C	2	599-767		158×98・31				
28	土坑	C	2	600-766		105×85・32				
29	土坑	C	2	600-768		43×37・42				
30	土坑	C	2	601-766		70×60・28				
31	土坑	C	2	601-767		67×45・21				
32	土坑	C	2	599-763	33坑→32坑	176・18		土師器1, 縄文不明2		
33	土坑	C	2	600-764	33坑→32坑	75・27				
34	土坑	C	2	601-765		123×102・28				
35	土坑	C	2	602-767		96×82・37				
36	土坑	C	2	601-763		65×60・17				
37	土坑	C	2	602-764		54×49・23				
38	土坑	C	2	604-767		72×58・21				
39	土坑	C	2	605-767		44×41・25				
40	土坑	C	2	605-768		65・33				
41	土坑	C	2	608-767		93×54・27				
42	土坑	C	2	603-761		68×60・22				
43	土坑	C	2	587-763		36×33・12				
44	土坑	C	2	587-763		38×30・7				
45	土坑	C	2	587-762		53×34・18				
46	土坑	C	2	588-761		35×31・14		縄文不明1		
47	土坑	C	2	591-759		67×67・9				
48	土坑	C	2	594-755		42×37・7				
49	土坑	C	2	594-754		40×38・10				
50	土坑	C	2	594-753		30×27・13				
51	土坑	C	2	595-751		54×36・12				
52	土坑	C	2	595-750		40×37・15				
53	土坑	C	2	597-754		47×43・10				
54	土坑	C	2	598-747		195×137・98				
55	土坑	C	2	599-746		34×26・9				
56	土坑	C	2	600-746		41×28・9				
57	土坑	C	2	599-746		42×35・8				
58	土坑	C	2	601-746	59・60坑→58坑	43×35・24				
59	土坑	C	2	601-745	59坑→58坑	50×49・13				
60	土坑	C	2	601-746	60坑→58坑	67×45・5				
61	土坑	C	2	597-745		70・15				
62	土坑	C	2	598-745		52×46・14				

第4章 検出された遺構と遺物

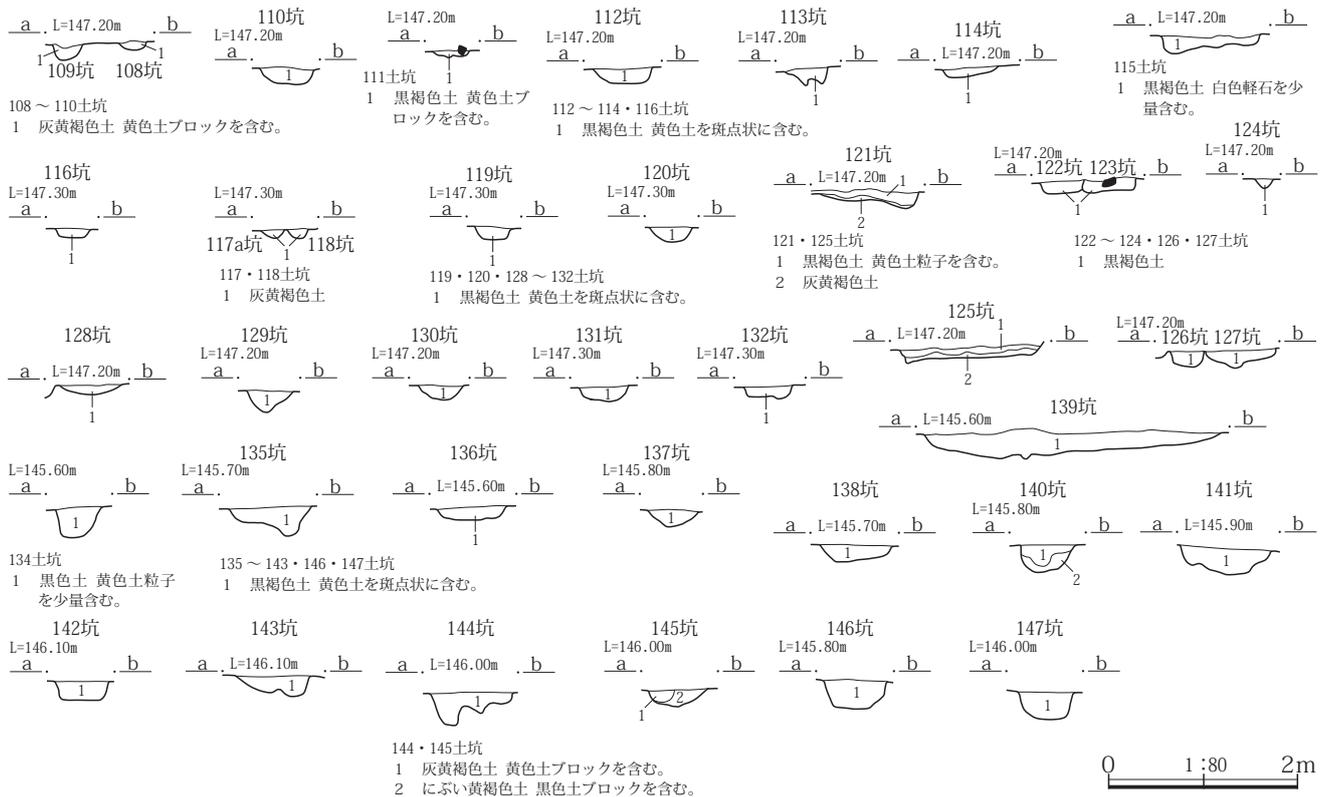


第49図 C区2面土坑断面図(2)

第14表 C区2面土坑計測表(2)

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
63	土坑	C	2	598-744		49×35・14				
64	土坑	C	2	599-744		30×28・9				
65	土坑	C	2	599-744		30×27・13				
66	土坑	C	2	600-743		66×47・10				
67	土坑	C	2	599-743		98×67・21				
68	土坑	C	2	596-744		68・18				
69	土坑	C	2	595-743		70・17				
70	土坑	C	2	598-743	70坑→71坑, 359P→70坑	117×105・24		前期末葉～中期初頭1		
71	土坑	C	2	598-742	70坑→71坑, 359P→71坑	54×41・12				
72	土坑	C	2	599-742		40×31・8				
73	土坑	C	2	597-742		47×37・15				
74	土坑	C	2	597-742		54×43・24				
75	土坑	C	2	595-741		66×48・24				
76	土坑	C	2	596-741		67×57・24				
77	土坑	C	2	594-740		52・18				
78	土坑	C	2	596-740		77×55・24				
79	土坑	C	2	598-740	79坑→80坑	68×62・26				
80	土坑	C	2	598-740	79坑→80坑	49×42・25				
81	土坑	C	欠番							
82	土坑	C	2	598-741		39×34・14				
83	土坑	C	2	594-739		61×57・25				
84	土坑	C	2	594-738		46×38・21				
85	土坑	C	2	594-738		40×37・27				
86	土坑	C	2	593-737		59・11				
87	土坑	C	2	597-739		57×42・21				
88	土坑	C	2	597-738		80×61・23				
89	土坑	C	2	597-737		80×52・10				
90	土坑	C	2	595-737		58×41・13				
91	土坑	C	2	595-736		53×47・29				
92	土坑	C	2	596-735		69×60・18				
93	土坑	C	2	593-735		111×86・26				
94	土坑	C	2	593-735		70×59・27				
95	土坑	C	2	594-735	96坑→95坑	95×75・33				
96	土坑	C	2	595-735	96坑→95・97坑	122×75・19				
97	土坑	C	2	595-734	96坑→97坑	46×45・18				
98	土坑	C	2	592-734	99坑→98坑	146・33		黒浜・有尾1		
99	土坑	C	2	593-734	99坑→98坑	145・14				
100	土坑	C	2	594-733		121×118・113				
101	土坑	C	2	591-733		50・10				
102	土坑	C	2	592-733		54×49・8				
103	土坑	C	2	594-732		115×99・17				
104	土坑	C	2	591-732		69×43・14				
105	土坑	C	2	592-732		36×25・19				
106	土坑	C	2	591-731		132×81・10		前期末葉～中期初頭1, 縄文不明1		
107	土坑	C	2	591-731		105×81・12				

遺構図 (C区)

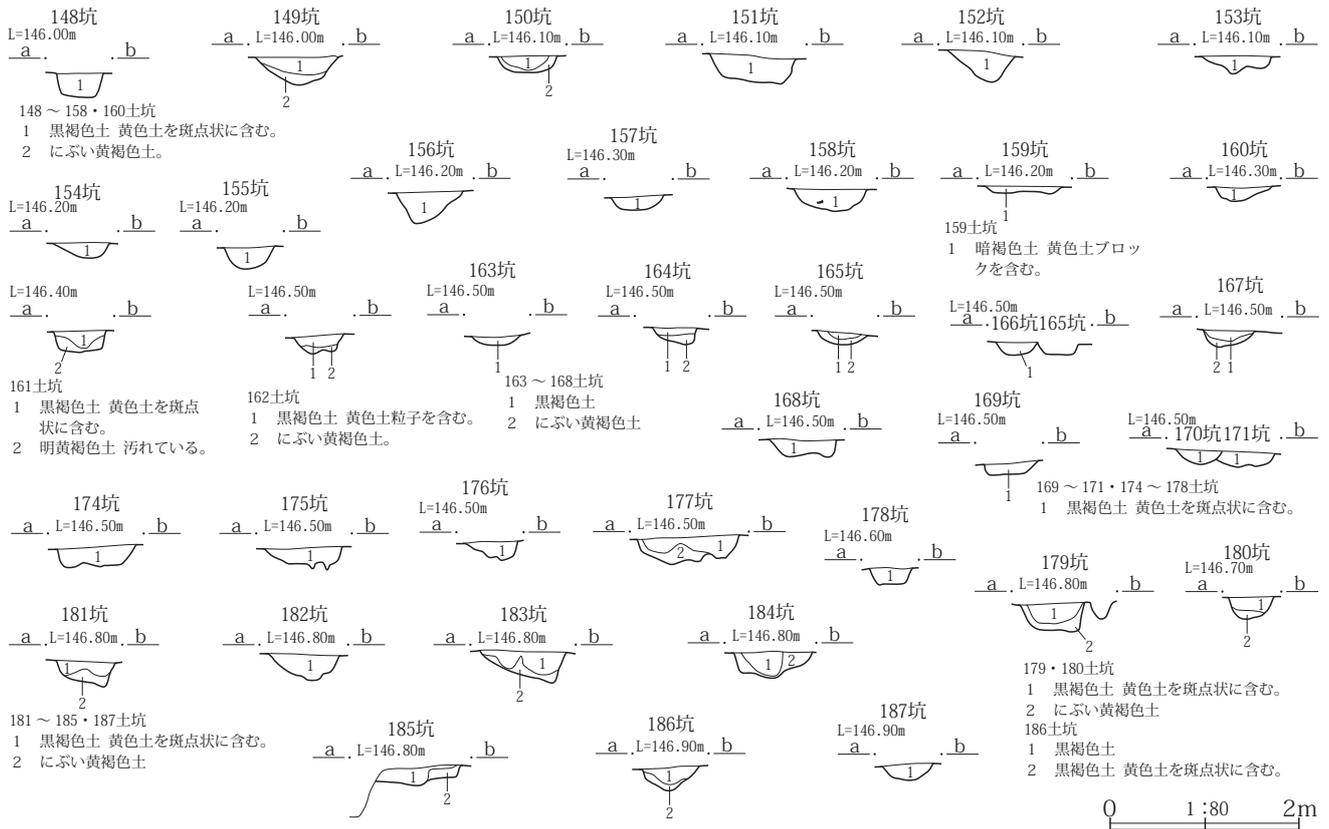


第50図 C区2面土坑断面図(3)

第15表 C区2面土坑計測表(3)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
108	土坑	C	2	590-732			29・7				
109	土坑	C	2	589-731			29・15				
110	土坑	C	2	590-731			62×50・17				
111	土坑	C	2	588-731			40×26・10				
112	土坑	C	2	588-730			63×50・17				
113	土坑	C	2	588-730		114坑→113坑	49×42・18				
114	土坑	C	2	588-730		114坑→113坑	55×44・9				
115	土坑	C	2	586-730			112・11		前期後葉1		
116	土坑	C	2	588-728			41×40・11				
117a	土坑	C	2	590-729			23×20・9				
117b	土坑	C	2	586-729			30×25・18				
118	土坑	C	2	590-728			25×21・9				
119	土坑	C	2	593-727			64×40・14				
120	土坑	C	2	589-728			45×40・17				
121	土坑	C	2	585-730			106・14				
122	土坑	C	2	585-728		123坑→122坑	64×47・13				
123	土坑	C	2	585-728		123坑→122坑	78×64・14				
124	土坑	C	2	586-728			18×17・9				
125	土坑	C	2	583-728			42×35・22				
126	土坑	C	2	582-729			15・26				
127	土坑	C	2	583-728			91×70・20				
128	土坑	C	2	589-728			66×51・13				
129	土坑	C	2	589-727			79×50・19				
130	土坑	C	2	588-727			44・12				
131	土坑	C	2	587-727			56×52・18				
132	土坑	C	2	588-727			82×54・14				
133	土坑	C	2	598-797			52×36・11				
134	土坑	C	2	598-793			56×50・37				
135	土坑	C	2	600-794			91×60・36				
136	土坑	C	2	598-796			75×70・18				
137	土坑	C	2	600-796		308P→137坑	72×55・19				
138	土坑	C	2	599-798			81×55・27				
139	土坑	C	2	598-799			315・25				
140	土坑	C	2	601-797			110×59・30				
141	土坑	C	2	602-795			113×95・37				
142	土坑	C	2	605-797			56×49・28				
143	土坑	C	2	606-797			85×75・24				
144	土坑	C	2	603-800			87×56・39				
145	土坑	C	2	603-801			68×58・25				
146	土坑	C	2	601-790			73×62・34				
147	土坑	C	2	602-789			62×53・32				

第4章 検出された遺構と遺物

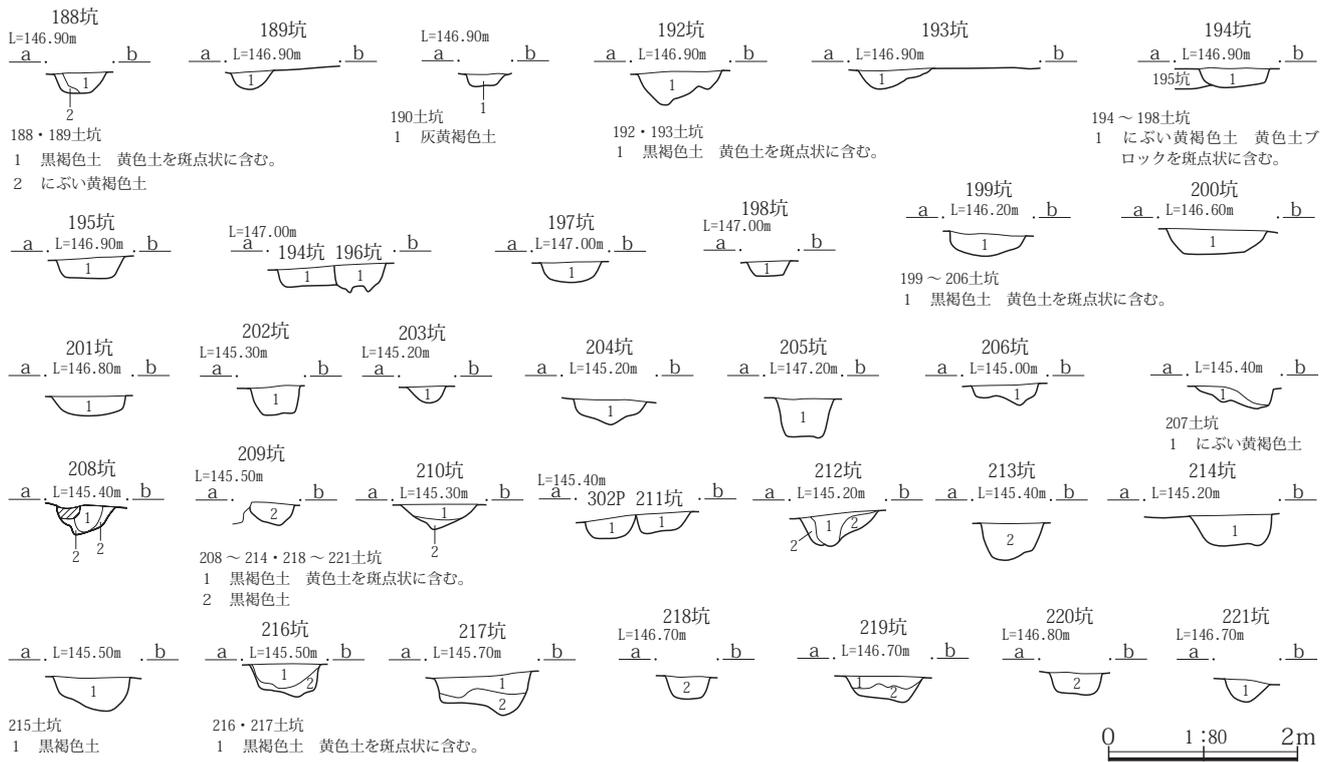


第51図 C区2面土坑断面図(4)

第16表 C区2面土坑計測表(4)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
148	土坑	C	2	604-791			72×50・28				
149	土坑	C	2	605-791			88×77・34		黒浜・有尾1		
150	土坑	C	2	606-791			78×64・25				
151	土坑	C	2	606-794			96×85・46				
152	土坑	C	2	606-793		315P→152坑	70×55・35		縄文不明1		
153	土坑	C	2	606-792			73×28・12				
154	土坑	C	2	608-792			60×29・19				
155	土坑	C	2	607-790			54×43・25				
156	土坑	C	2	607-789			80×66・35				
157	土坑	C	2	608-789			54×34・18				
158	土坑	C	2	608-790		158坑→256・257P	87×77・33				
159	土坑	C	2	609-790			80×56・9				
160	土坑	C	2	610-789			61×42・21				
161	土坑	C	2	611-790			53×52・46				
162	土坑	C	2	611-788			54×35・27				
163	土坑	C	2	611-789			51×40・14				
164	土坑	C	2	612-789			44・17				
165	土坑	C	2	612-790			55×50・16				
166	土坑	C	2	611-791			44×40・17				
167	土坑	C	2	612-791		168P→167P	59×36・25				
168	土坑	C	2	612-790		168P→167P	71・23				
169	土坑	C	2	610-792			57×38・17				
170	土坑	C	2	612-792		171P→170P	50×49・19				
171	土坑	C	2	612-792		171P→170P	35・19				
172	土坑	C	2	609-798			70×48・19				土層不明
173	土坑	C	2	615-799			71×55・25				土層不明
174	土坑	C	2	617-795			80×74・36				
175	土坑	C	2	618-796			82×41・21				
176	土坑	C	2	618-795			56×38・26				
177	土坑	C	2	613-793			106・31				
178	土坑	C	2	614-793			45×38・20				
179	土坑	C	2	615-785		179坑→182坑,180坑→179坑	65・34				
180	土坑	C	2	615-785		180坑→179坑,181坑・276P→180坑	42・25				
181	土坑	C	2	615-785		181坑→180坑,276P→181坑	61×53・29				
182	土坑	C	2	616-785		179坑→182坑	78×51・31				
183	土坑	C	2	617-785		184坑→183坑	92×60・37				
184	土坑	C	2	616-786		184坑→183坑	83×80・27				
185	土坑	C	2	617-786			65・21				
186	土坑	C	2	617-786			62×41・29				
187	土坑	C	2	617-785			82×53・22				

遺構図 (C区)

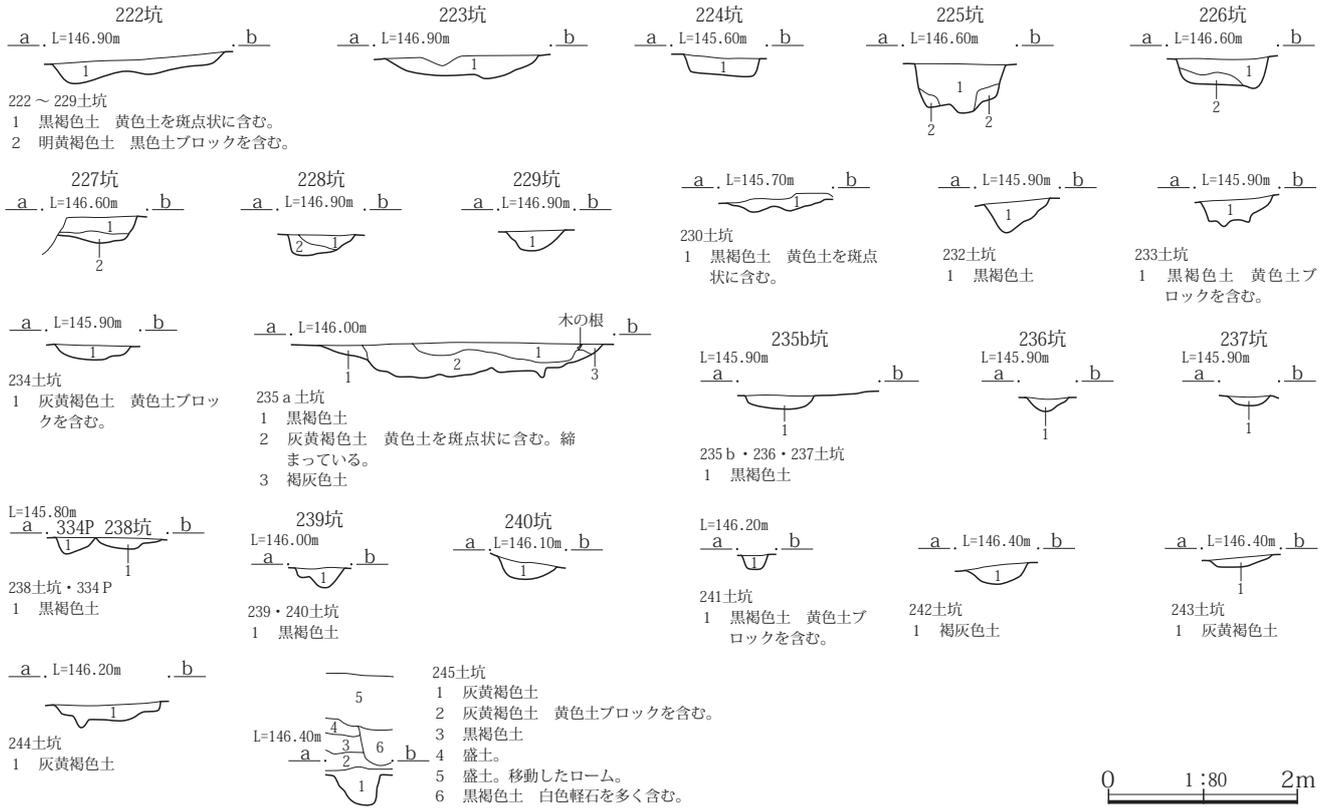


第52図 C区2面土坑断面図(5)

第17表 C区2面土坑計測表(5)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
188	土坑	C	2	618-786		189・190坑→188坑	67×58・25				
189	土坑	C	2	618-786		189坑→188坑	40・20				
190	土坑	C	2	618-786		190坑→188坑	48×45・17				
191	土坑	C	2	619-788			79×50・40				
192	土坑	C	2	621-787			90×58・38				
193	土坑	C	2	619-786		195坑→193坑	80×61・24				
194	土坑	C	2	618-785		195坑→194坑, 194坑→196坑	73×58・23				
195	土坑	C	2	619-785		195坑→193・194坑	72・25				
196	土坑	C	2	618-785		194坑→196坑	56×43・33				
197	土坑	C	2	619-784			65×58・22				
198	土坑	C	2	620-784			72×47・19				
199	土坑	C	2	606-784			81×59・26				
200	土坑	C	2	611-783			110×100・38				
201	土坑	C	2	613-784			86×78・24				
202	土坑	C	2	595-790			55・45				
203	土坑	C	2	596-785			41・21				
204	土坑	C	2	594-784			77×66・29				
205	土坑	C	2	595-783			65×61・42				
206	土坑	C	2	593-782			73×40・25	諸磯b爪形1			
207	土坑	C	2	599-782			86×53・40				
208	土坑	C	2	599-781			53×50・36				
209	土坑	C	2	601-780			45・27				
210	土坑	C	2	598-780			82×60・31				
211	土坑	C	2	597-779			86×55・29				
212	土坑	C	2	595-780			85×51・38				
213	土坑	C	2	594-777			65×60・42				
214	土坑	C	2	595-776			87×64・37	縄文不明1			
215	土坑	C	2	595-775			82×67・44				
216	土坑	C	2	598-775			77×67・34				
217	土坑	C	2	598-776			103×76・47				
218	土坑	C	2	611-775			74×52・29				
219	土坑	C	2	610-770			81×52・29				
220	土坑	C	2	612-770			64×56・26				
221	土坑	C	2	609-768			68×47・25				

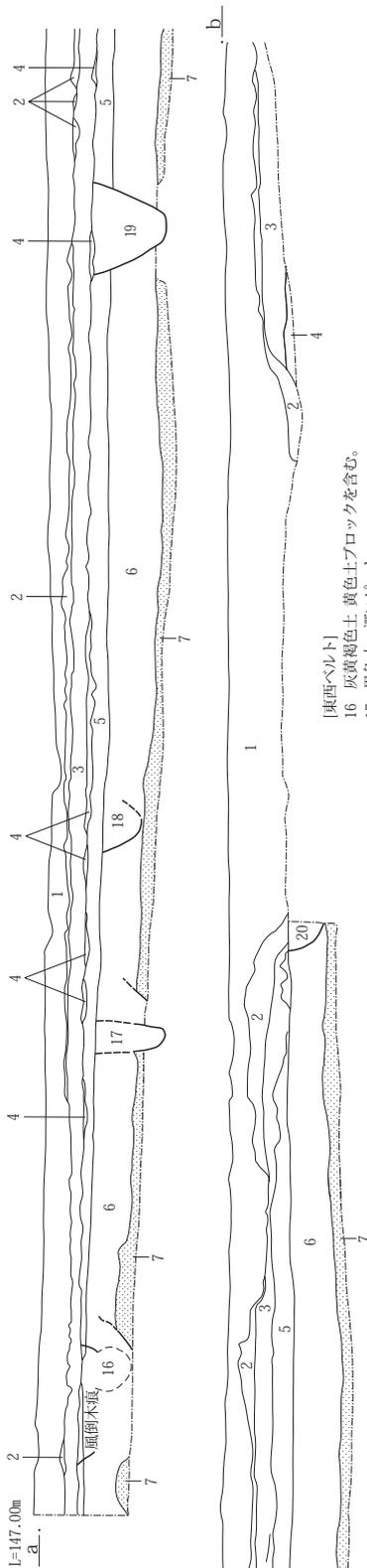
第4章 検出された遺構と遺物



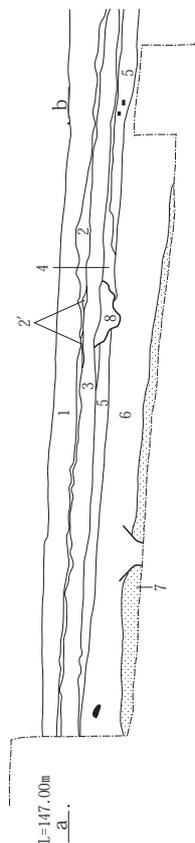
第53図 C区2面土坑断面図(6)

第18表 C区2面土坑計測表(6)

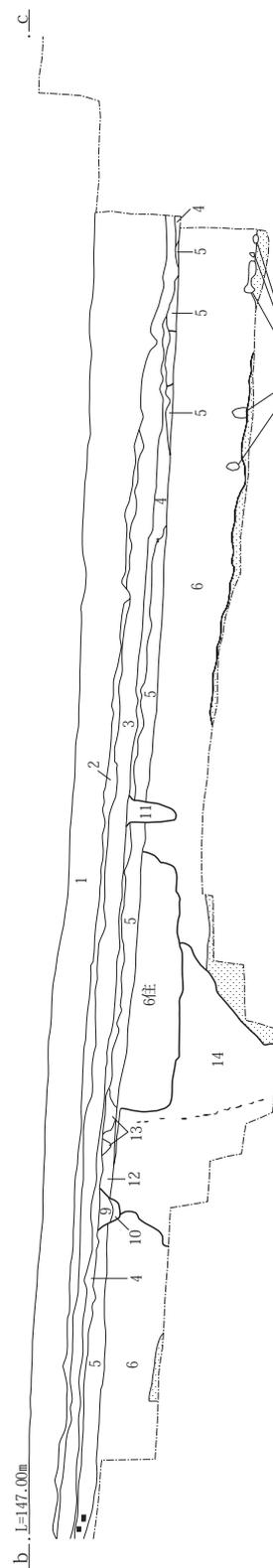
番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
222	土坑	C	2	616-783		184×148・43				
223	土坑	C	2	616-782		171×116・24		縄文不明1		
224	土坑	C	2	611-781		80×77・27				
225	土坑	C	2	610-781		110×95・47				
226	土坑	C	2	612-786		99×80・34				
227	土坑	C	2	613-787		53・30				
228	土坑	C	2	613-782		70×58・25				
229	土坑	C	2	615-784		72×63・21				
230	土坑	C	2	599-802		98・12				
231	土坑	C	2	欠番						平面不明
232	土坑	C	2	604-796	232坑→156P	69×60・38				
233	土坑	C	2	604-796		82×51・32				
234	土坑	C	2	603-795		80×59・18				
235a	土坑	C	2	618-781		300・45		土師器1, 縄文不明4		
235b	土坑	C	2	605-787	323P→235坑	74×49・17				
236	土坑	C	2	605-786	237坑→236坑	50×45・14				
237	土坑	C	2	606-786	237坑→236坑	47・14				
238	土坑	C	2	605-785		72×48・10				
239	土坑	C	2	607-784		53×47・24		前期末葉~中期初頭1		
240	土坑	C	2	608-786		65×57・25				
241	土坑	C	2	609-788	326P→241坑	98×32・15				
242	土坑	C	2	611-774		63×52・23				
243	土坑	C	2	612-774	243坑→357P	64×55・13				
244	土坑	C	2	611-772	339P→244坑	113×77・30				
245	土坑	C	2	595-742		50・32				



- [東西ベルト]
 16 灰黄褐色土 黄色土ブロックを含む。
 17 黒色土 深いヒット。
 18 黒褐色土 土坑の覆土。
 19 黒褐色土 231土坑覆土。
 20 道路の埋土。底面は駐車場造成前の旧地表。



- 東西ベルト・南北ベルト
 1 黄褐色土 崩れたロームの埋土。黒褐色土ブロック・礫が一部に混じる。粘性・縮まりやや強い。工場建設後の駐車場造成土。昭和55以降。
 2 暗褐色土 細砂粒・黒褐色土・褐色土を層状に混入する。粘性・縮まり弱い。前橋市教委調査開始から駐車場造成前までの土。発掘調査の廃土か。昭和51年以降。
 2' 細砂層。2層の一部。
 3 黒褐色土 白色軽石・細砂粒少。ローム粒子微量混入。団地造成前の堆積土。ワイヤロープ埋設溝(4溝)より新しい。
 4 黒褐色土 白色軽石・細砂粒を少量含む。黒色土(5層)ブロック(1~3cm大)が少量混入。粘性弱い。縮まりやや弱い。4溝より古い。
 5 黒色土 白色軽石を多く含む。粘性・縮まりやや強い。近世以前(古墳~平安か)の表土。
 6 灰黄褐色土 古墳~平安時代の遺構覆土。
 7 明黄褐色土 地山ローム層。

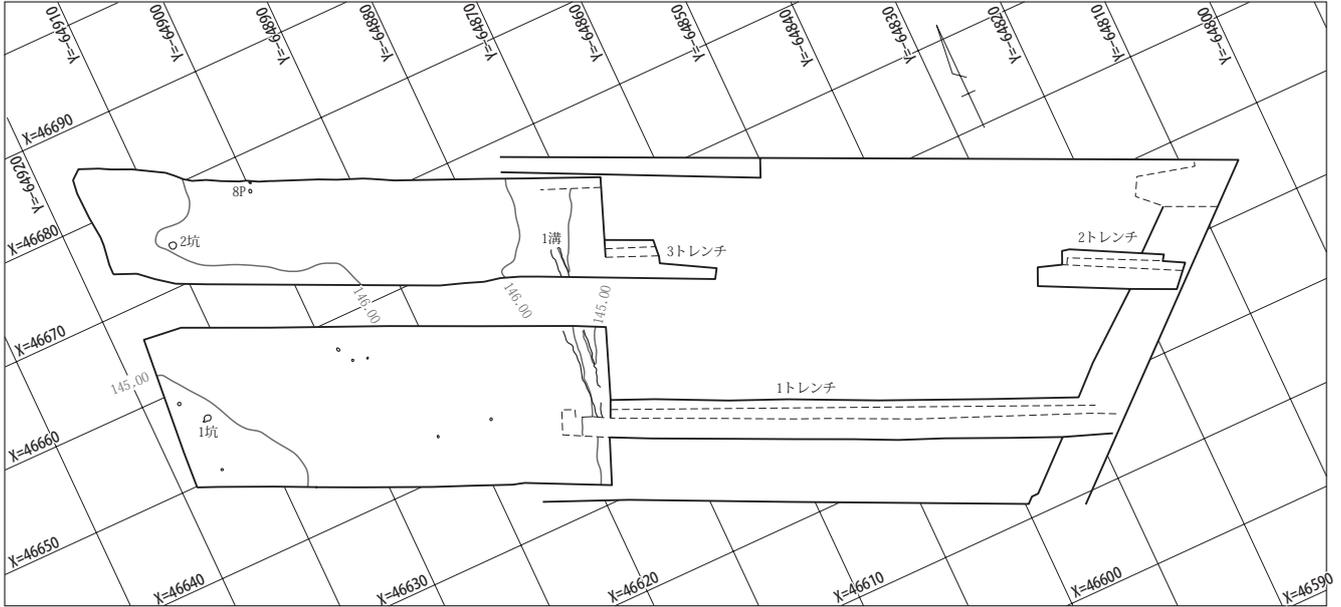
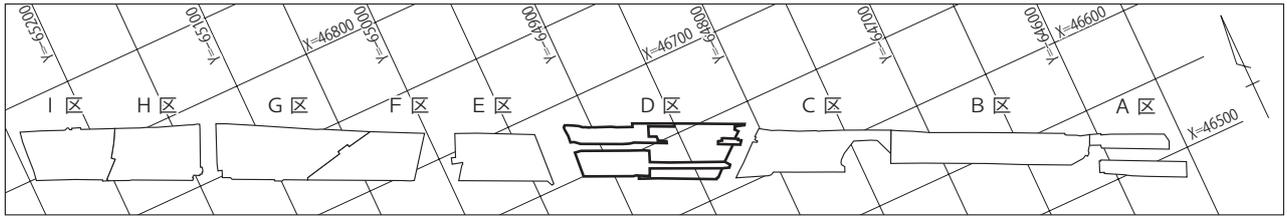


- [南北ベルト]
 ■ テフラ分析試料採取
 8 1溝 黒褐色土 細砂粒・粗砂粒を多く含む。粘性弱く、縮まり強い。
 9 3溝 1 黒褐色土 細砂粒少量、白色軽石を微量含む。粘性弱く、縮まりやや弱い。
 10 3溝 2 暗褐色土 ロームブロック(0.5~2cm大)混入。粘性・縮まり弱い。
 11 4溝 暗褐色土 黒色土ブロック(1~3cm大)混入。粘性弱く、縮まりやや弱い。

- 12 黄褐色土 ロームをベースに黒褐色土ブロック多量に混入。粘性・縮まりやや強い。風倒木底か。
 13 黒褐色土 白色軽石を微量含む。細砂粒・粗砂粒混入。粘性弱く、縮まり強い。
 14 黒色土 風倒木底に落ちた黒色土。
 15 灰黄褐色土 黄色軽石粒(1~3mm大、As-Yか)を含む。

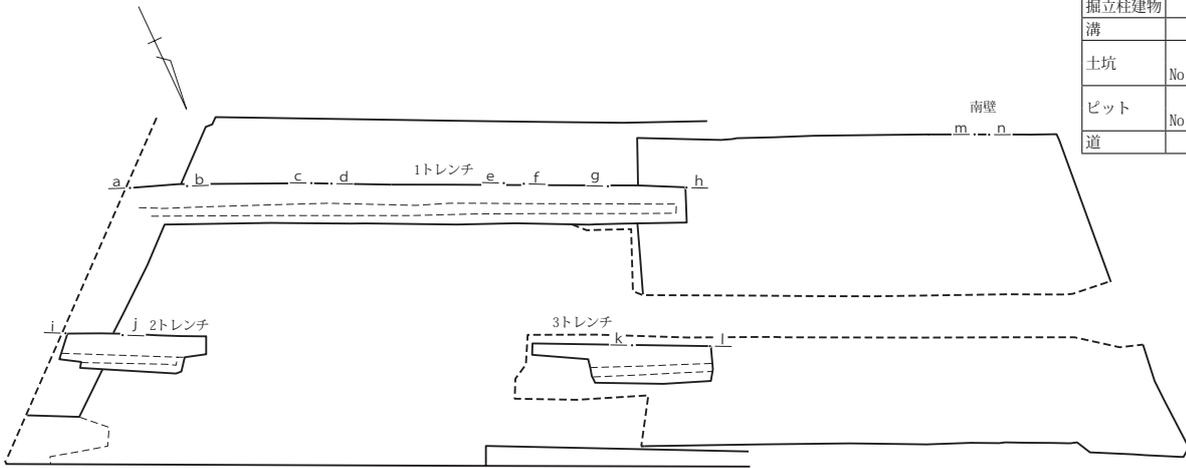
第54図 C区東西・南北ベルト

第4章 検出された遺構と遺物

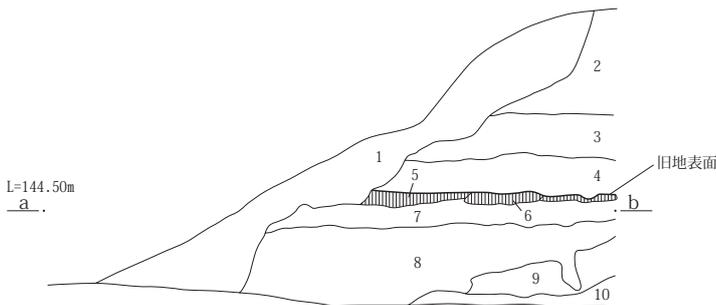


D区遺構集計

	1面	小計
住居	0	0
掘立柱建物	0	0
溝	1	1
土坑	No.1~2	2
ピット	9	9
道	No.1~9	0



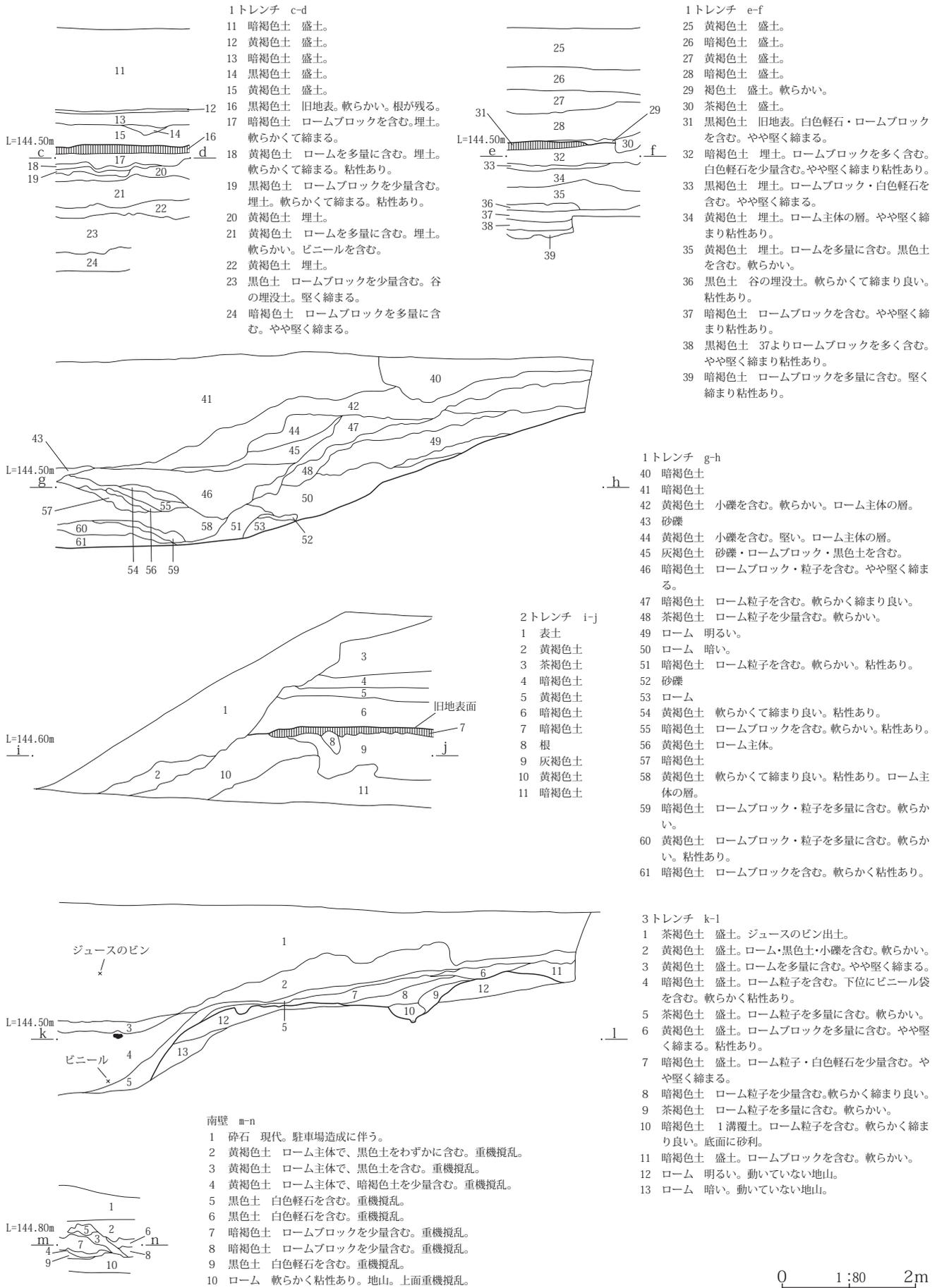
0 1:800 20m



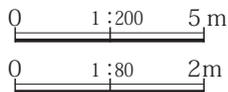
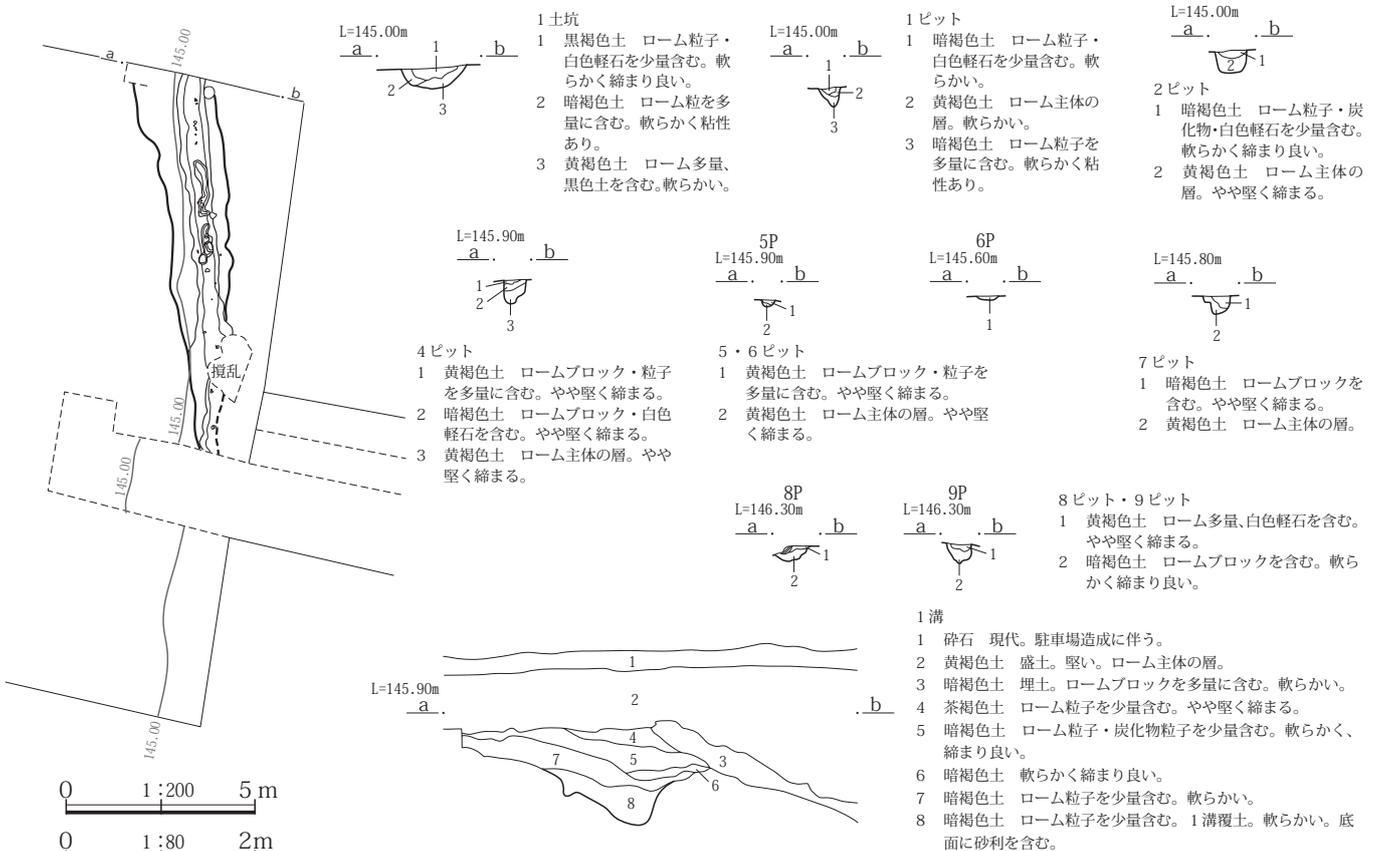
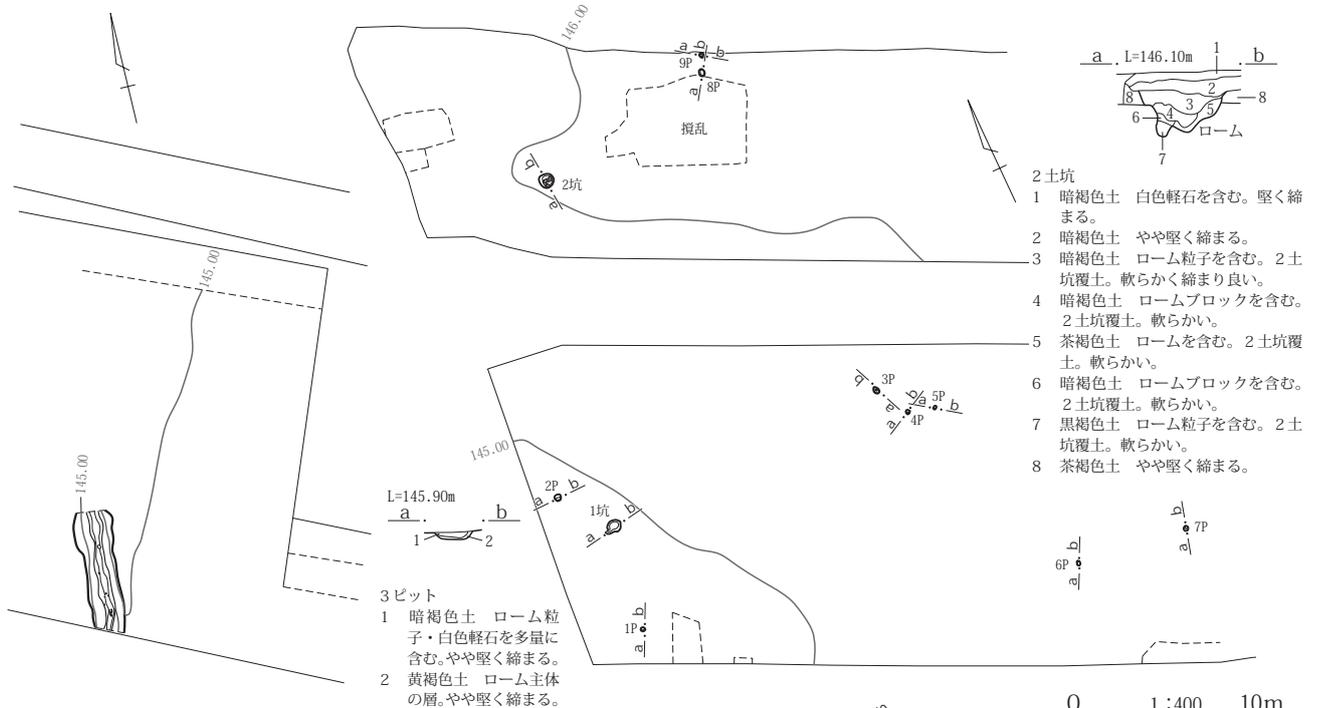
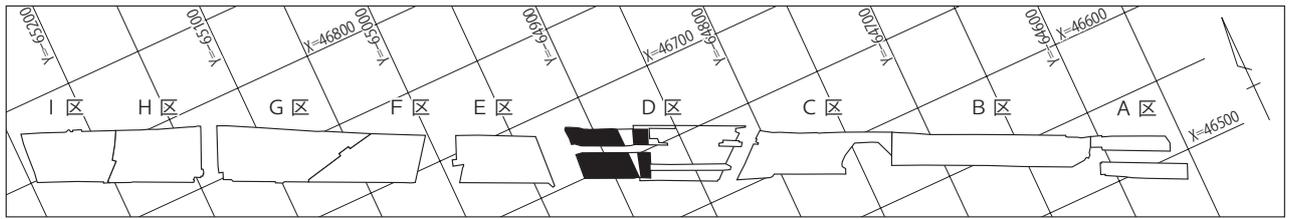
- 1トレンチ a-b
- 1 表土
- 2 茶褐色土 盛土。
- 3 暗褐色土 盛土。
- 4 黄褐色土 盛土。
- 5 暗褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかい。粘性あり。
- 8 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや堅く締まり粘性あり。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。軟らかく粘性あり。
- 10 暗褐色土 やや堅く締まり粘性あり。

0 1:80 2m

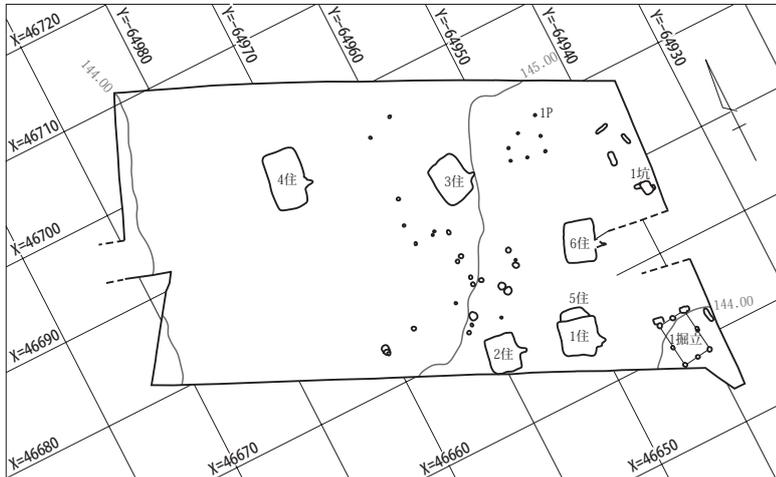
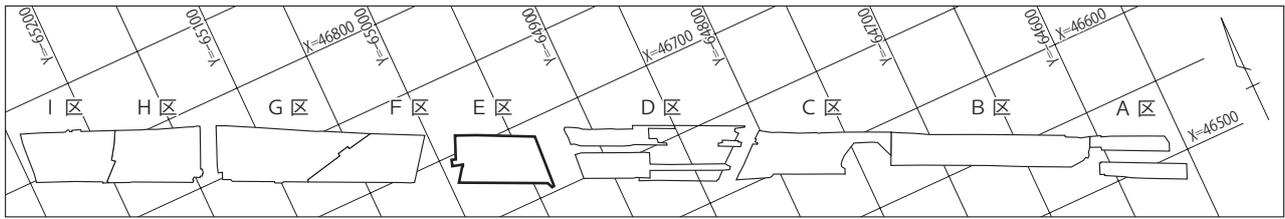
第55図 D区全体図、トレンチ位置図



第56図 D区トレンチ土層断面図



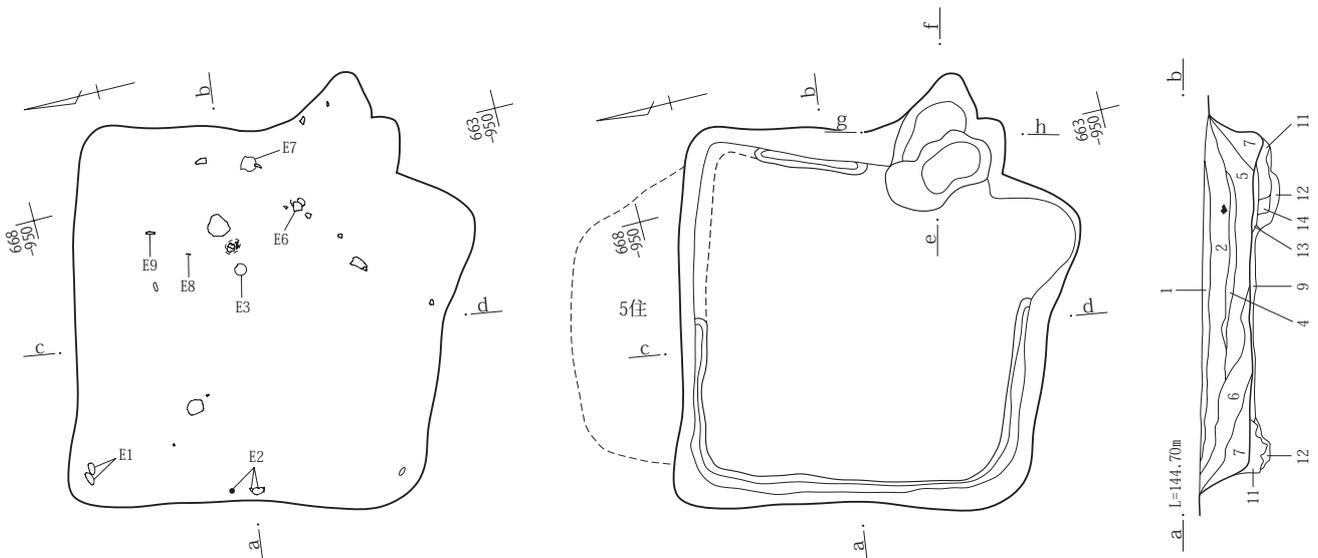
第57図 D区1溝・ピット



E区遺構集計

	1面	小計
住居	6	6
掘立柱建物	1	1
溝	0	0
土坑	10	10
	No.1 ~ 10	
ピット	28	28
	No.1 ~ 28	
道	0	0

0 1:800 20m



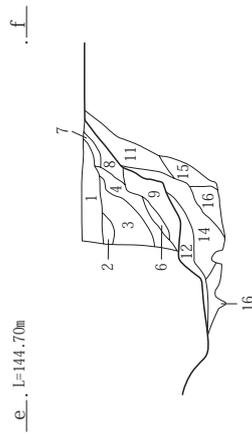
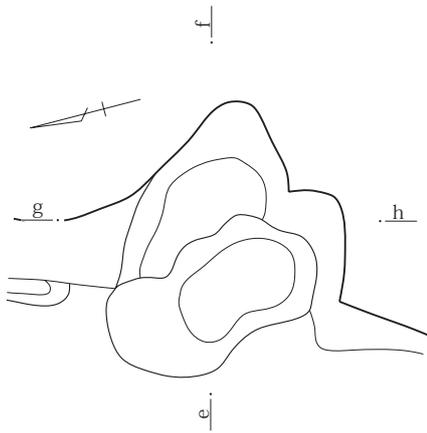
a-b,c-d

- 1 暗褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 茶褐色土 軽石少。軟らかい。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・粒子多量、軽石を少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 6 黒色土 ローム粒子多量、軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 7 茶褐色土 ロームブロック多量、炭化物粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 8 黄褐色土 壁の崩れ。
- 9 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。やや堅く締まる。
- 10 黄褐色土 ロームを多量に含む。やや堅く締まる。
- 11 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。軟らかく締まり良い。
- 12 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。
- 13 暗褐色土 ロームブロック・灰・炭化物を含む。やや堅く締まる。
- 14 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。

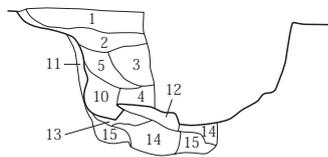
0 1:80 2m

第58図 E区全体図、1住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物

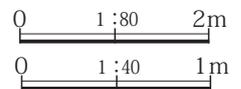
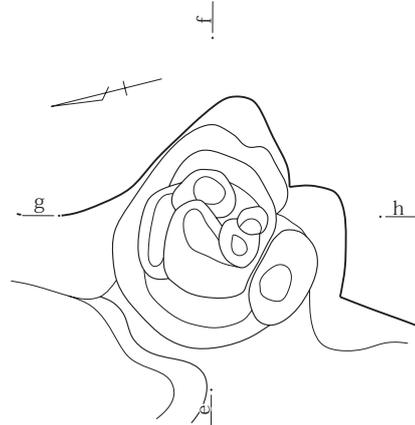
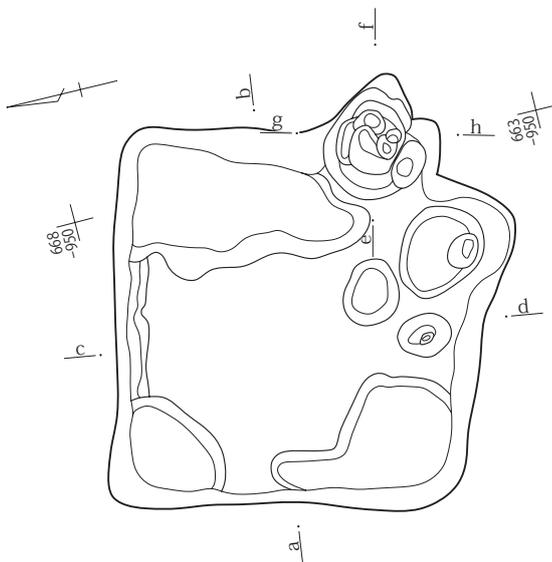


g . L=144.70m . h

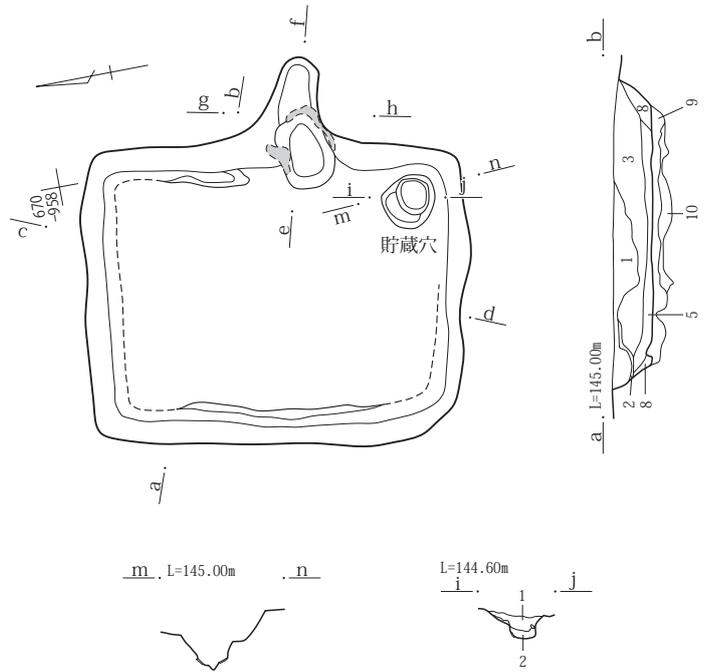
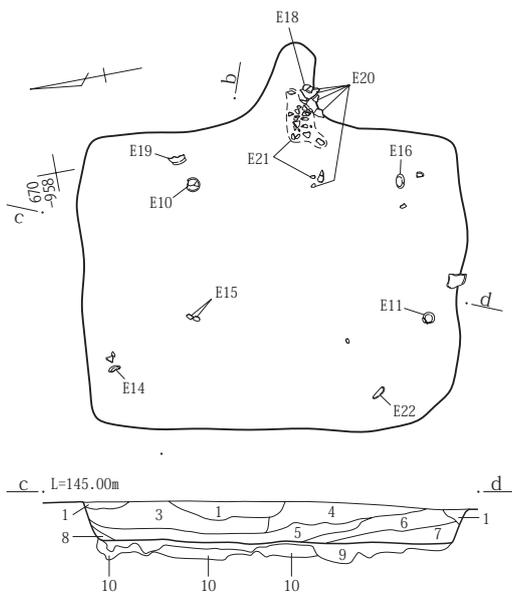


カマド e-f,g-h

- 1 暗褐色土 ロームブロック・軽石を含む。やや堅く締まる。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 4 灰色土 灰を多量、焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 6 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。軟らかい。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 8 暗褐色土 軟らかく締まり良い。
- 9 黒褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 11 茶褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 12 赤褐色土 焼土・灰・ロームを含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 13 暗褐色土 焼土ブロック・灰・ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。上層よりも明るい色調。非常に軟らかく粘性あり。
- 15 黄褐色土 ロームを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 16 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多く含む。非常に軟らかく粘性あり。



第59図 E区1住居(2)



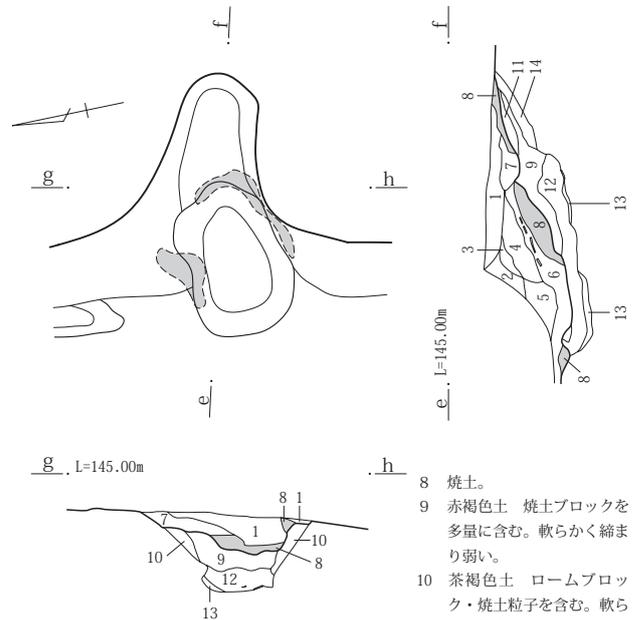
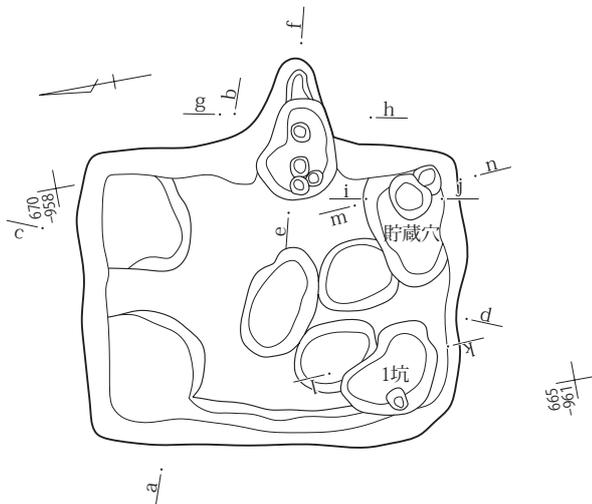
a-b, c-d

- 1 暗褐色土 軽石を含む。軟らかい。現代耕作痕あり。
- 2 暗褐色土 軽石を含む。軟らかい。現代耕作痕あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・軽石を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化物を含む。3よりも明るい。やや堅く締まり、粘性あり。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 6 褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。やや堅く締まり、粘性あり。

- 7 暗褐色土 炭化物粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む。やや堅く締まり、粘性あり。
- 8 茶褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 9 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。軟らかく粘性あり。
- 10 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく強い粘性あり。

貯蔵穴 i-j

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 黄褐色土 ローム多量、焼土粒子を少量含む。非常に軟らかく粘性あり。



k, L=145.00m

1土坑

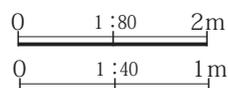
- 1 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。1よりもやや暗い。軟らかく粘性あり。
- 3 黄褐色土 ロームブロック多量、焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。

カマド e-f, g-h

- 1 暗褐色土 焼土ブロックを含む。耕作痕。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 4 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子・白色粘土を含む。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 6 黄褐色土 焼土・ローム・白色粘土を含む。軟らかく強い粘性あり。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかい。

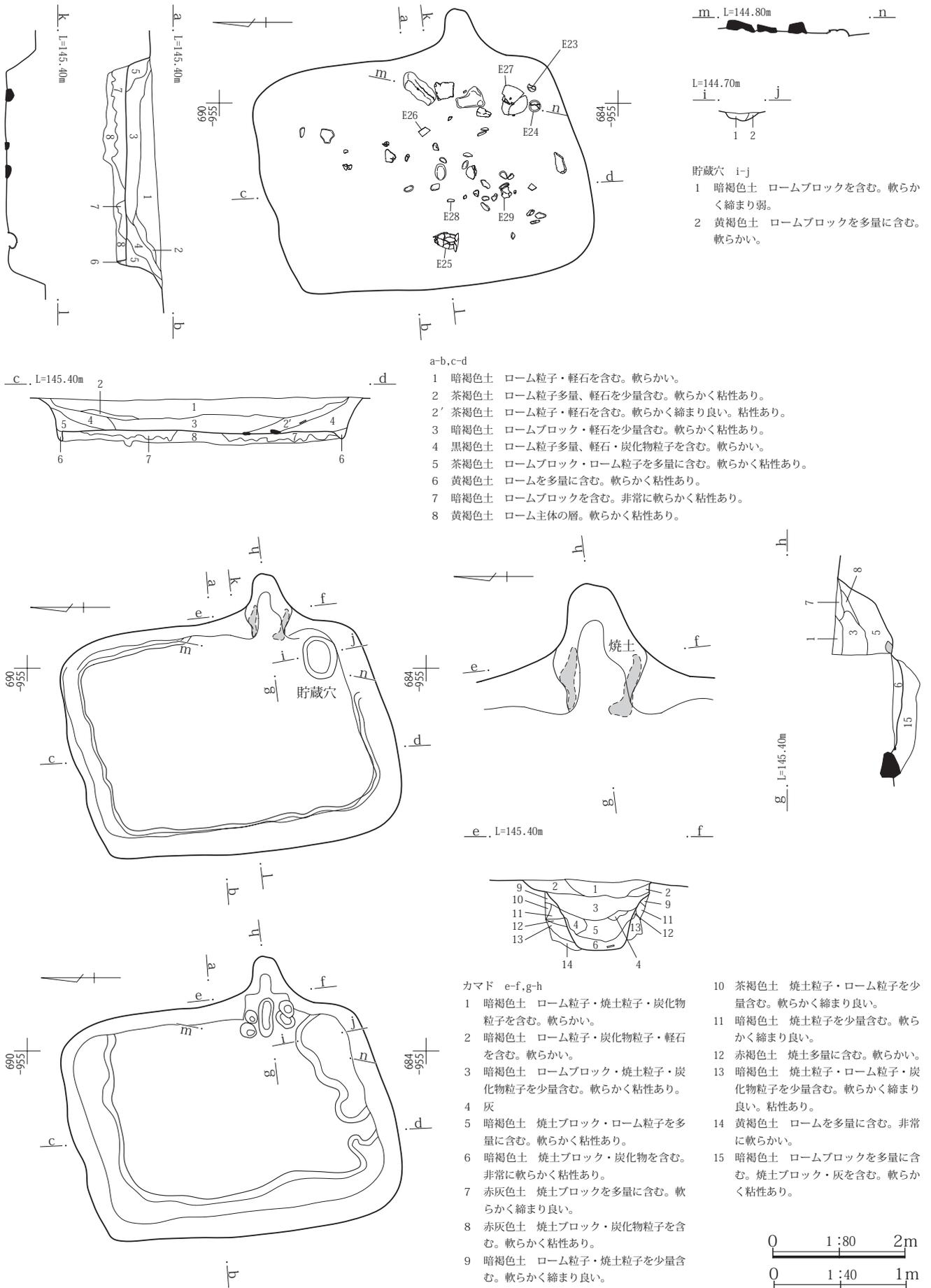
8 焼土。

- 9 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。軟らかく締まり弱い。
- 10 茶褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 11 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 12 暗褐色土 焼土粒子・炭化物・ローム粒子を含む。軟らかく締まり弱い。
- 13 茶褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 14 褐色土 焼土粒子を多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

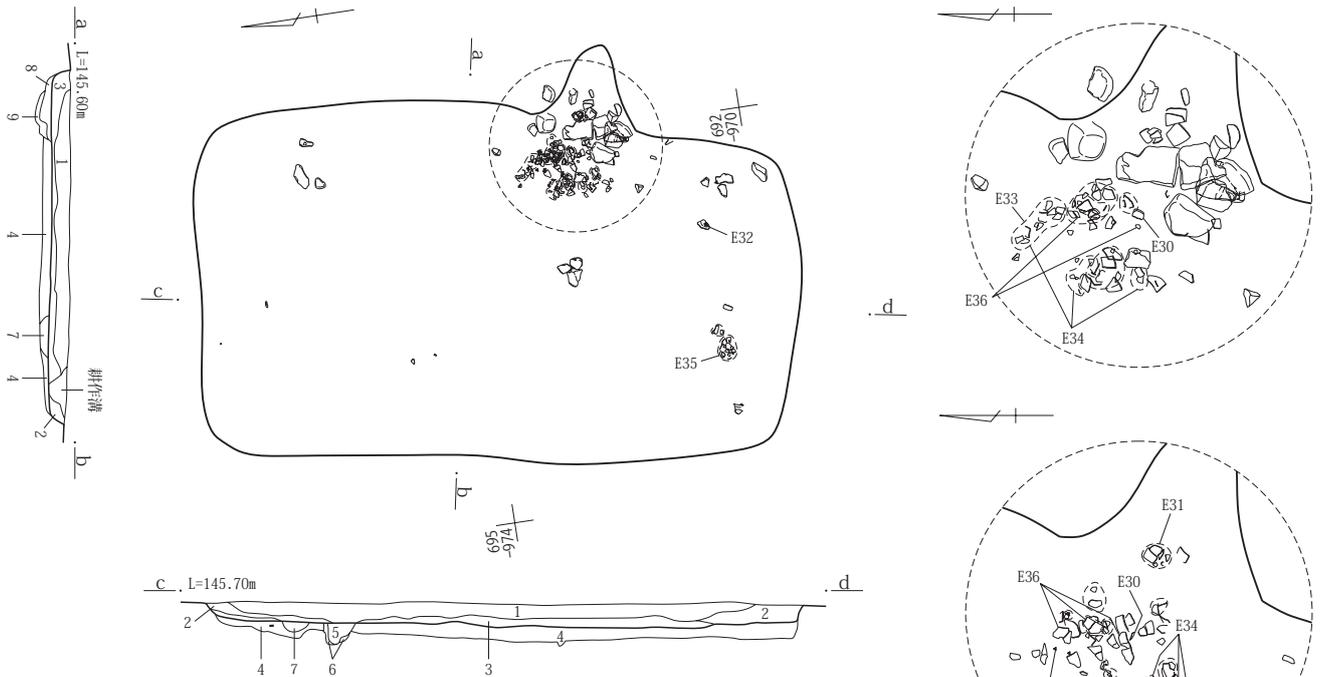


第60図 E区2住居

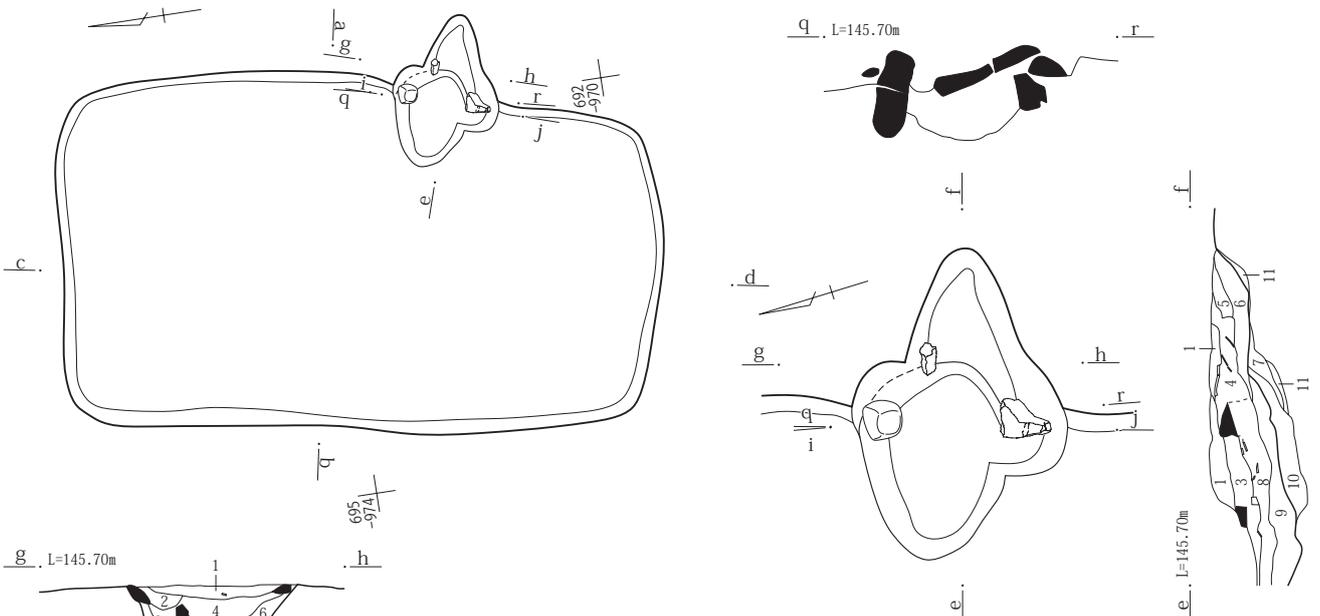
第4章 検出された遺構と遺物



第61図 E区3住居

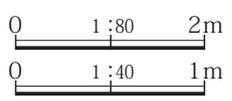


- a-b, c-d
- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色土 ローム粒子・軽石を含む。軟らかく縮まり良い。 | 6 黄褐色土 ロームを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 ロームブロック・軽石を含む。軟らかい。 | 7 暗褐色土 ロームを含む。非常に軟らかい。 |
| 3 茶褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく縮まり良い。 | 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・白色軽石を少量含む。軟らかい。 |
| 4 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。軟らかく粘性あり。 | 9 暗褐色土 ロームブロックを含む。非常に軟らかい。 |
| 5 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。 | |

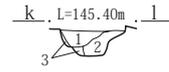
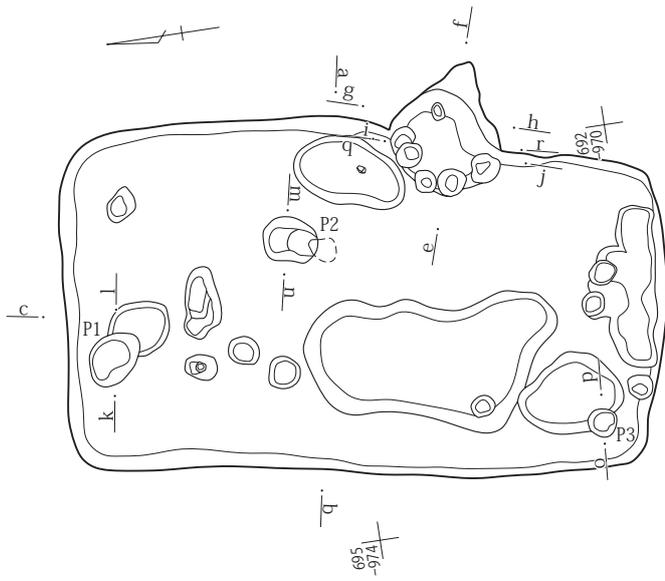


- カマド e-f, g-h.
- | | |
|--|--|
| 1 暗褐色土 軽石含む。軟らかく縮まり良い。 | 6 暗褐色土 ロームを含む。軟らかく縮まり良い。粘性あり。 |
| 2 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。 | 7 暗褐色土 ローム多量、焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく縮まり良い。 | 8 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。 |
| 4 褐色土 焼土多量、ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。 | 9 茶褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく縮まり良い。粘性あり。 |
| 5 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく縮まり良い。 | 10 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。非常に軟らかく縮まり良い。粘性あり。 |
| 6 暗褐色土 ロームを含む。軟らかく縮まり良い。粘性あり。 | 11 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかい。 |
| 7 暗褐色土 ローム多量、焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。 | |
| 8 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。 | |
| 9 茶褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく縮まり良い。粘性あり。 | |
- カマド i-j
- | |
|--|
| 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく縮まり良い。 |
| 2 茶褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかく縮まり良い。粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。軟らかく縮まり良い。粘性あり。 |
| 4 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかい。 |
| 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。 |
| 6 黄褐色土 軟らかい。 |

第62図 E区4住居(1)

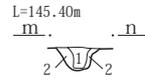


第4章 検出された遺構と遺物



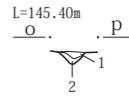
4住居P1 k-l

- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 2 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。
- 3 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく締まり弱い。



P2 m-n

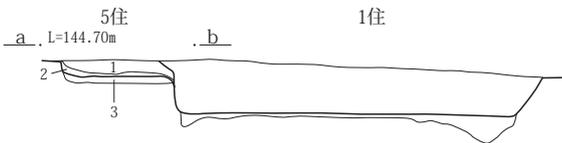
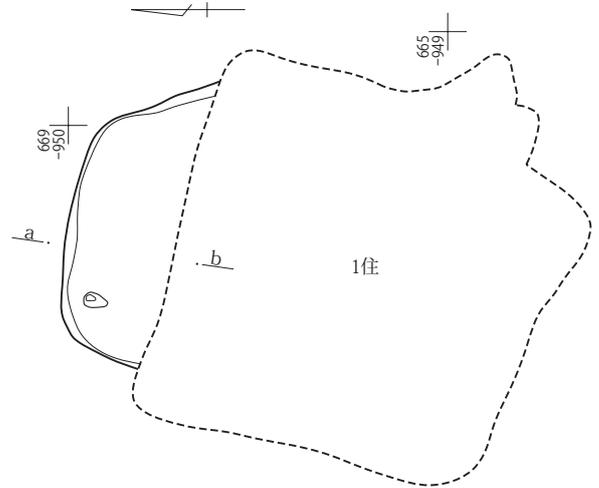
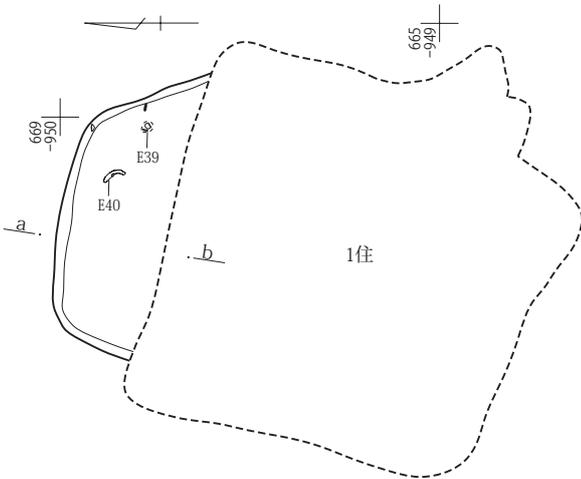
- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。



P3 o-p

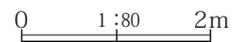
- 1 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかい。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。

5住居

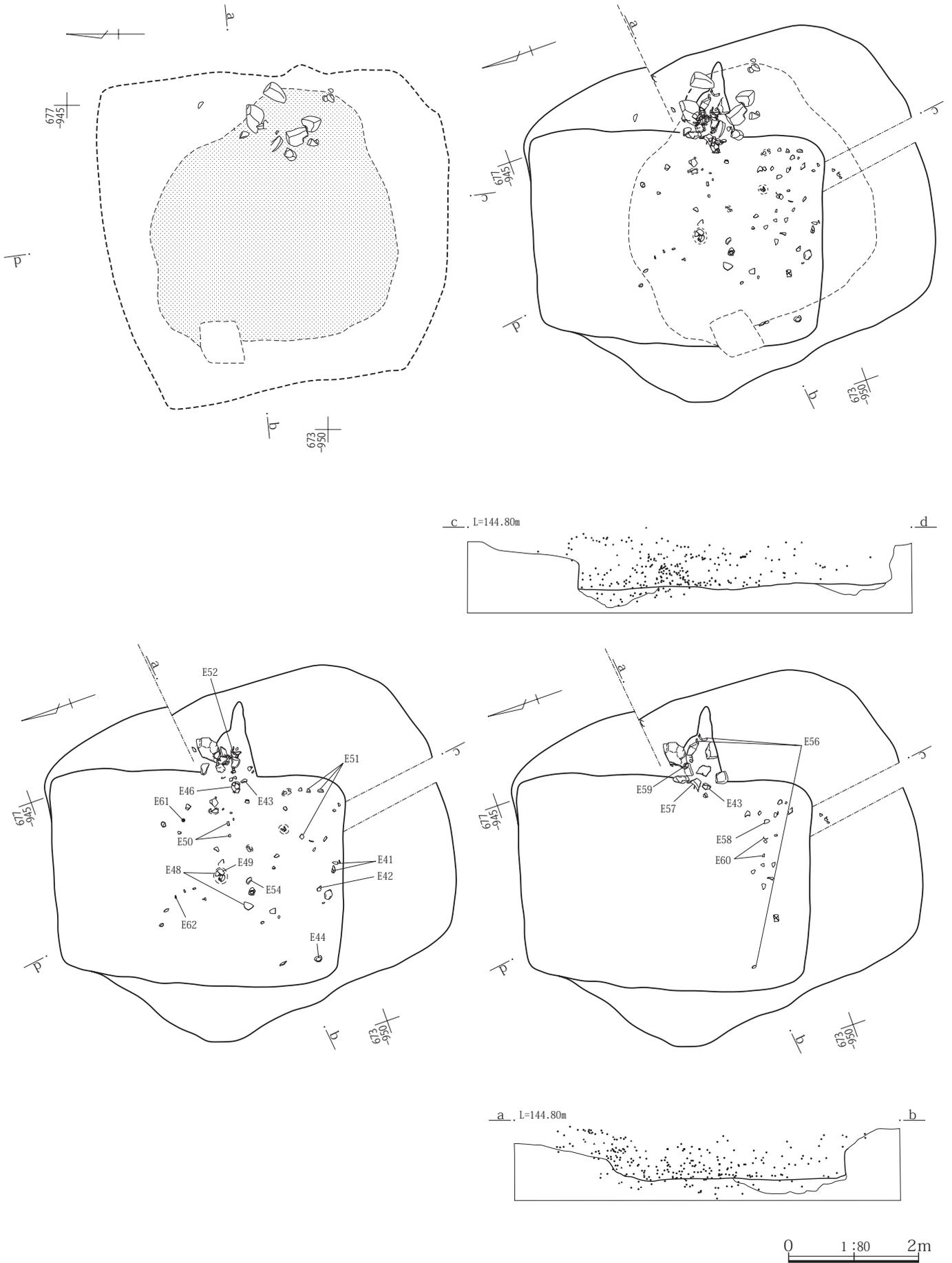


5住居 a-b

- 1 暗褐色土 軽石多い。軟らかく締まり良い。
- 2 茶褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 茶褐色土 ロームと暗褐色土の混土。やや堅い。

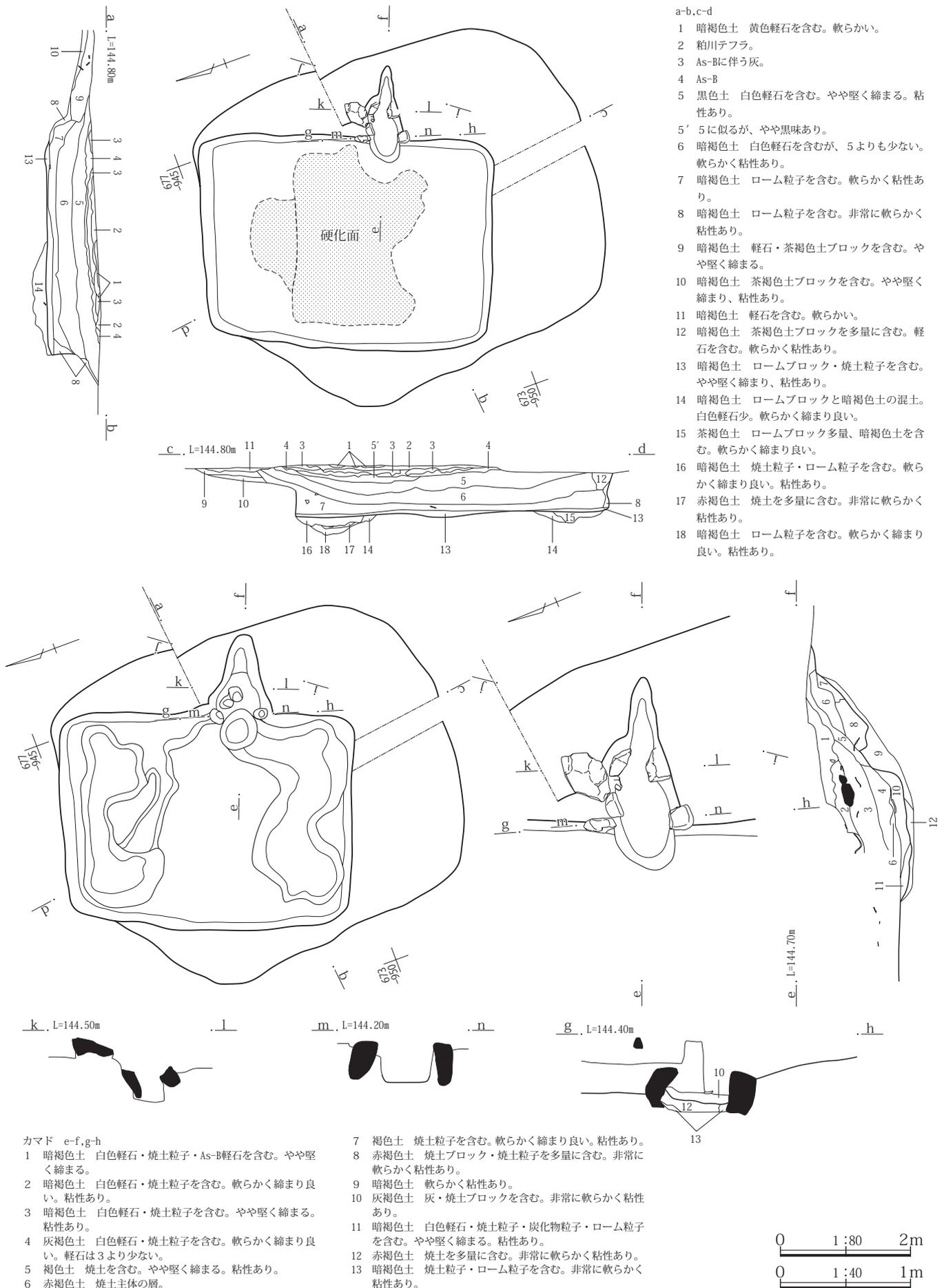


第63図 E区4住居(2)、5住居



第64図 E区6住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物

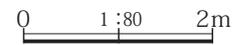
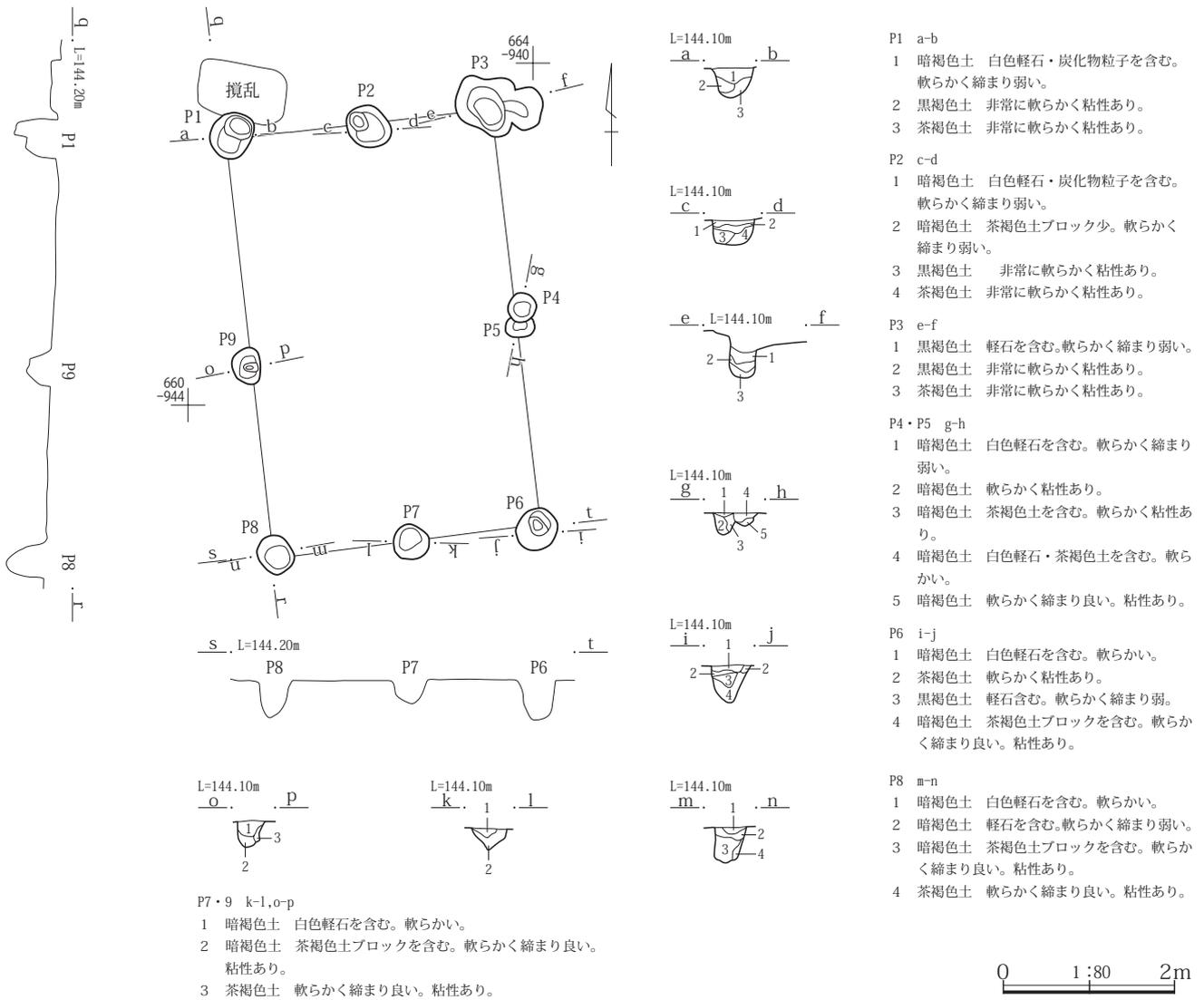
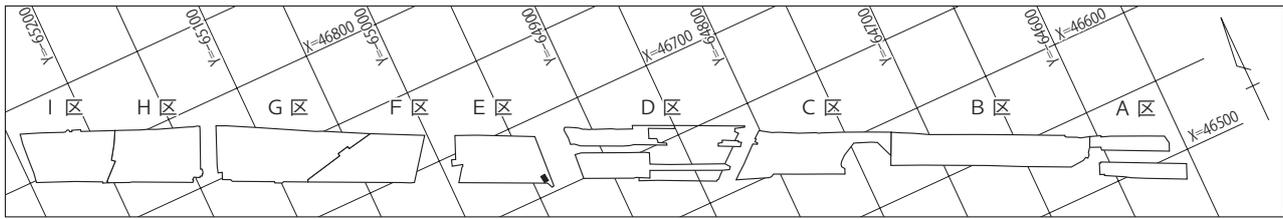


- a-b,c-d
- 1 暗褐色土 黄色軽石を含む。軟らかい。
 - 2 粕川テフラ。
 - 3 As-Bに伴う灰。
 - 4 As-B
 - 5 黒色土 白色軽石を含む。やや堅く締まる。粘性あり。
 - 5' 5に似るが、やや黒味あり。
 - 6 暗褐色土 白色軽石を含むが、5よりも少ない。軟らかく粘性あり。
 - 7 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
 - 9 暗褐色土 軽石・茶褐色土ブロックを含む。やや堅く締まる。
 - 10 暗褐色土 茶褐色土ブロックを含む。やや堅く締まり、粘性あり。
 - 11 暗褐色土 軽石を含む。軟らかい。
 - 12 暗褐色土 茶褐色土ブロックを多量に含む。軽石を含む。軟らかく粘性あり。
 - 13 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。やや堅く締まり、粘性あり。
 - 14 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。白色軽石少。軟らかく締まり良い。
 - 15 茶褐色土 ロームブロック多量、暗褐色土を含む。軟らかく締まり良い。
 - 16 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
 - 17 赤褐色土 焼土を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
 - 18 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

- カマド e-f,g-h
- 1 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子・As-B軽石を含む。やや堅く締まる。
 - 2 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
 - 3 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子を含む。やや堅く締まる。粘性あり。
 - 4 灰褐色土 白色軽石・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。軽石は3より少ない。
 - 5 褐色土 焼土を含む。やや堅く締まる。粘性あり。
 - 6 赤褐色土 焼土主体の層。

- 7 褐色土 焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 8 赤褐色土 焼土ブロック・焼土粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 9 暗褐色土 軟らかく粘性あり。
- 10 灰褐色土 灰・焼土ブロックを含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 11 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を含む。やや堅く締まる。粘性あり。
- 12 赤褐色土 焼土を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 13 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。

第65図 E区6住居(2)



第66図 E区1掘立柱建物

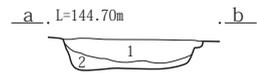
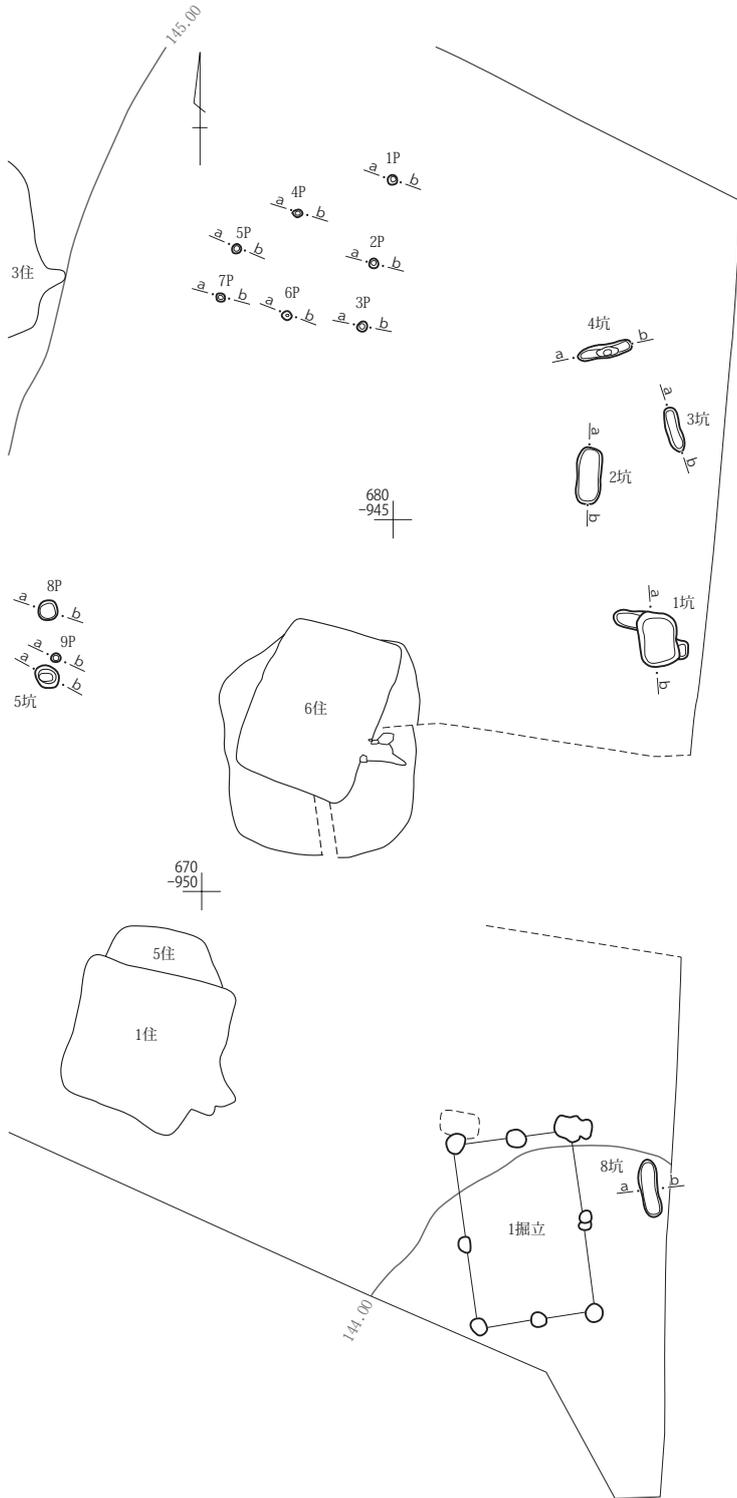
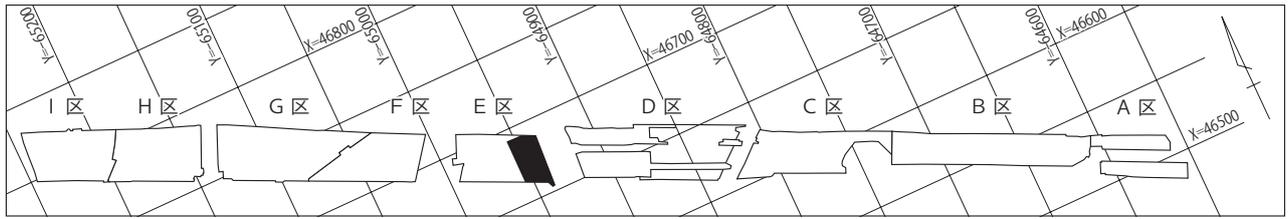
第19表 E区1掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位N-6°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	規模				
				番号	上ノcm長径×短径	下ノcm長径×短径	深さcm	備考
P1-P8 : 505	P1-P3 : 288	P1-P9 : 282	P1-P2 : 137	1	55×47	24×17	47	
P2-P7 : 492	P9-P4 : 323	P9-P8 : 224	P2-P3 : 151	2	55×45	14×10	34	
P3-P6 : 488	P9-P5 : 319	P3-P4 : 234	P8-P7 : 154	3	101×68	34×24	57	
	P8-P6 : 304	P3-P5 : 253	P7-P6 : 150	4	34×33	19×17	40	
		P4-P6 : 254		5	34×-	16×-	23	
		P5-P6 : 236		6	49×48	13×9	47	
				7	42×41	27×23	24	
				8	45×39	29×27	46	
				9	42×32	9×4	40	

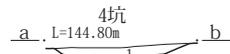
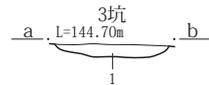
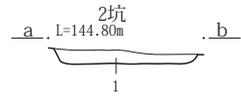
※1 計測値は1/20原図から起こした数値

※2 柱穴間の距離は芯々で計測

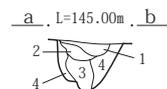
第4章 検出された遺構と遺物



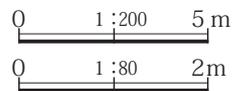
- 1 土坑
 1 暗褐色土 軽石・ローム粒子を含む。
 軟らかく締まり弱い。
 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 軟らかく粘性あり。



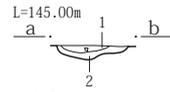
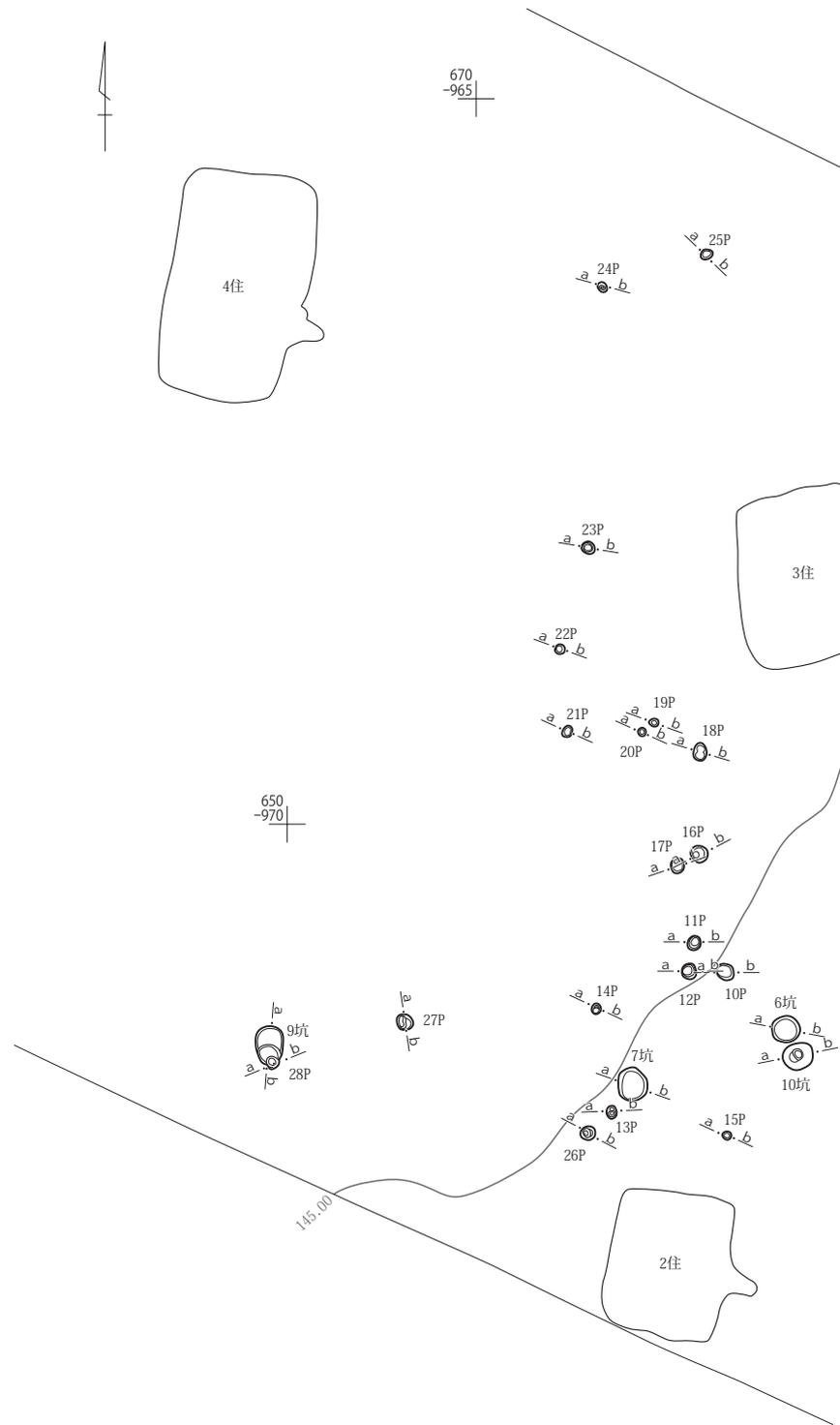
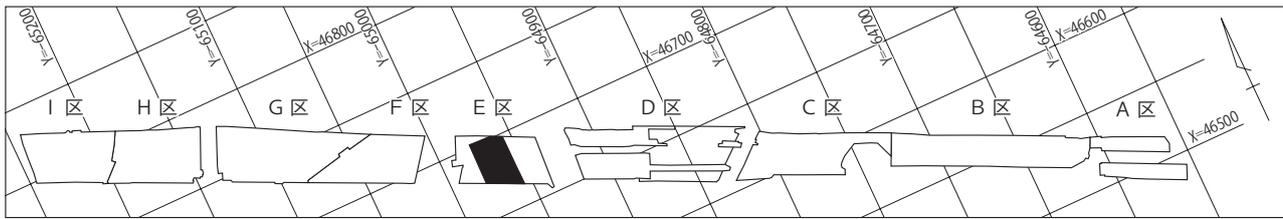
- 2・3・4・8 土坑
 1 暗褐色土 白色軽石を含む。
 軟らかく締まり弱い。



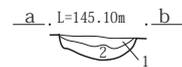
- 5 土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子・軽石含む。軟らかく締まり弱い。
 2 黒褐色土 ローム粒子・軽石含む。軟らかく締まり弱い。
 3 暗褐色土 ロームブロック・粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 4 茶褐色土 茶褐色土を多量に含む。軟らかく粘性あり。



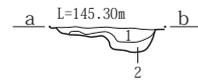
第67図 E区東部土坑・ピット位置図、土坑断面図



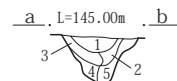
- 6土坑
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかく締まり弱い。
 - 2 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり弱い。



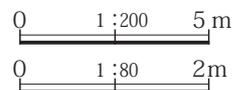
- 7土坑
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかく締まり弱い。
 - 2 茶褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。



- 9土坑
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく締まり良い。

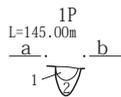


- 10土坑
- 1 暗褐色土 軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
 - 2 黒褐色土 軽石・ローム粒子を含む。非常に軟らかく締まり弱い。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
 - 4 茶褐色土 軟らかく粘性あり。
 - 5 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。

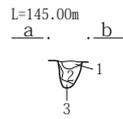


第68図 E区中央部土坑・ピット位置図、土坑断面図

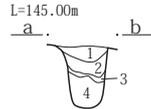
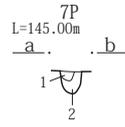
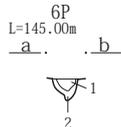
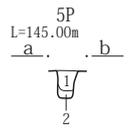
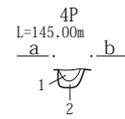
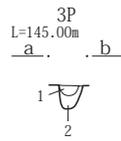
第4章 検出された遺構と遺物



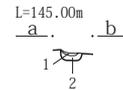
- 1・3～7ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり弱い。
 - 2 茶褐色土 軟らかく粘性あり。



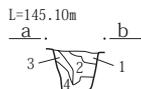
- 2ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり弱い。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 茶褐色土 軟らかく粘性あり。



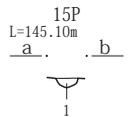
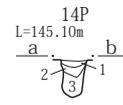
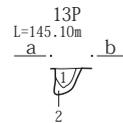
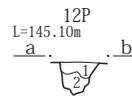
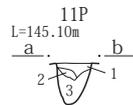
- 8ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかい。
 - 2 黒褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 黄褐色土 ロームを多量含む。軟らかく粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。非常に軟らかく粘性あり。



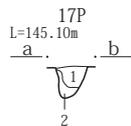
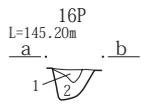
- 9ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり弱い。
 - 2 茶褐色土 軟らかく粘性あり。



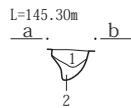
- 10ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まり弱い。
 - 2 暗褐色土 軽石・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 茶褐色土 ロームブロックを含む。非常に軟らかく粘性あり。
 - 4 暗褐色土 ロームを含む。上層に比べ暗い。非常に軟らかく粘性あり。



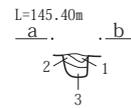
- 11～15ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
 - 3 暗褐色土 茶褐色土を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。



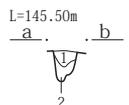
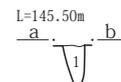
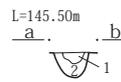
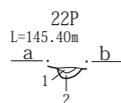
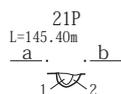
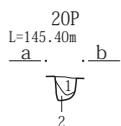
- 16・17ピット
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
 - 2 茶褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。



- 18ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。



- 19ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。

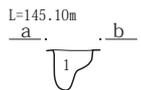


- 20～22ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかい。
 - 2 茶褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。

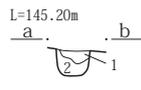
- 23ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。

- 24ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり弱い。

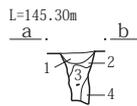
- 25ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかい。
 - 2 茶褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。



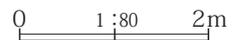
- 26ピット
- 1 暗褐色土 軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり弱い。



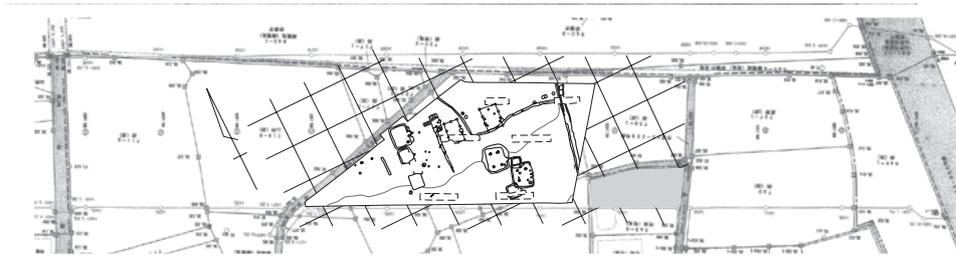
- 27ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
 - 2 黄褐色土 ロームを主体に、黒色土を含む。軟らかく粘性あり。



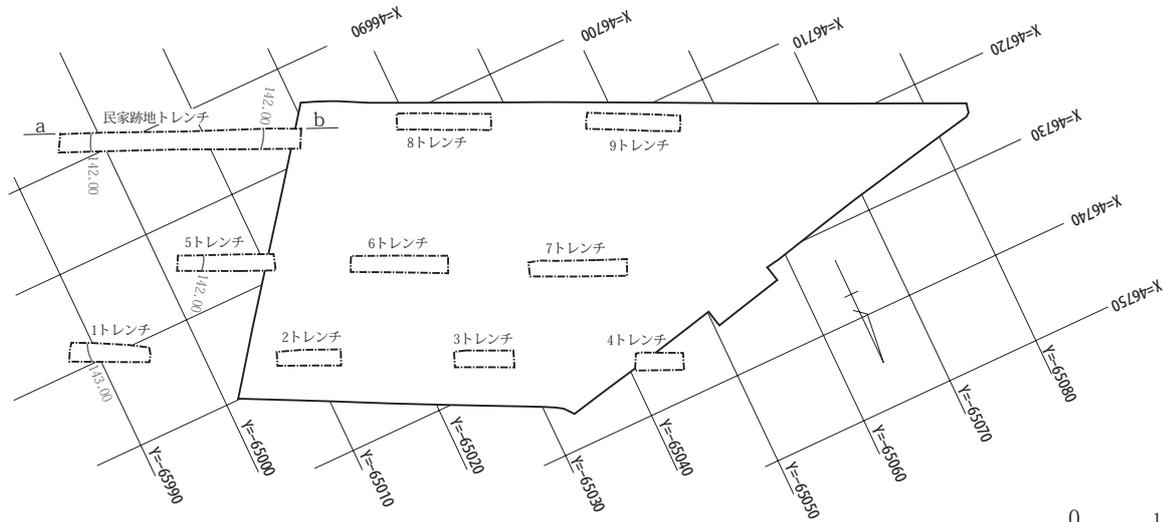
- 28ピット
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
 - 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多、炭化物粒子を少量含む。非常に軟らかく粘性あり。
 - 4 黄褐色土 ロームを多量含む。軟らかく粘性あり。



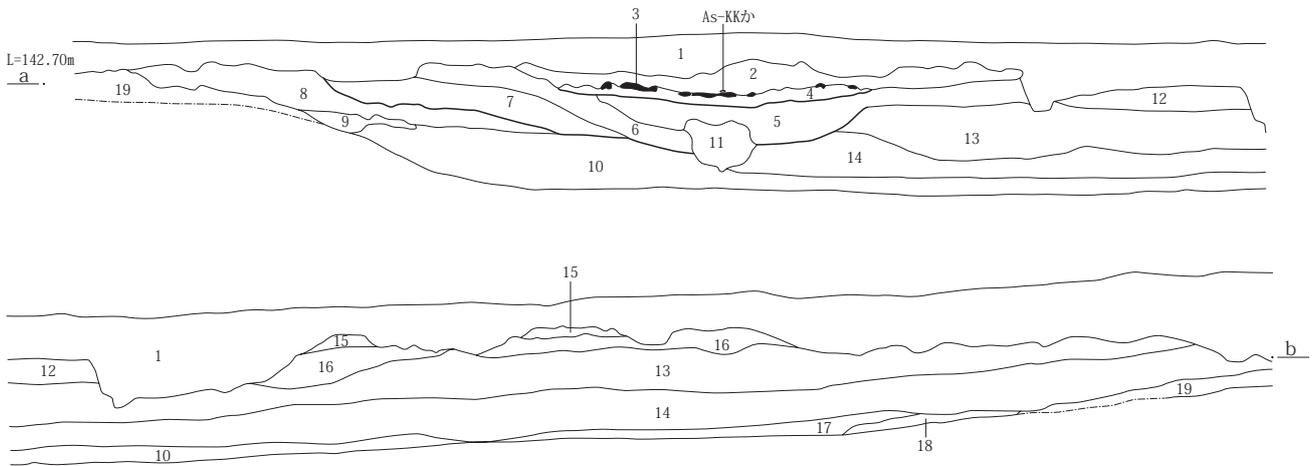
第69図 E区ピット断面図



0 1:2000 50m



0 1:800 20m



民家跡地トレンチ a-b

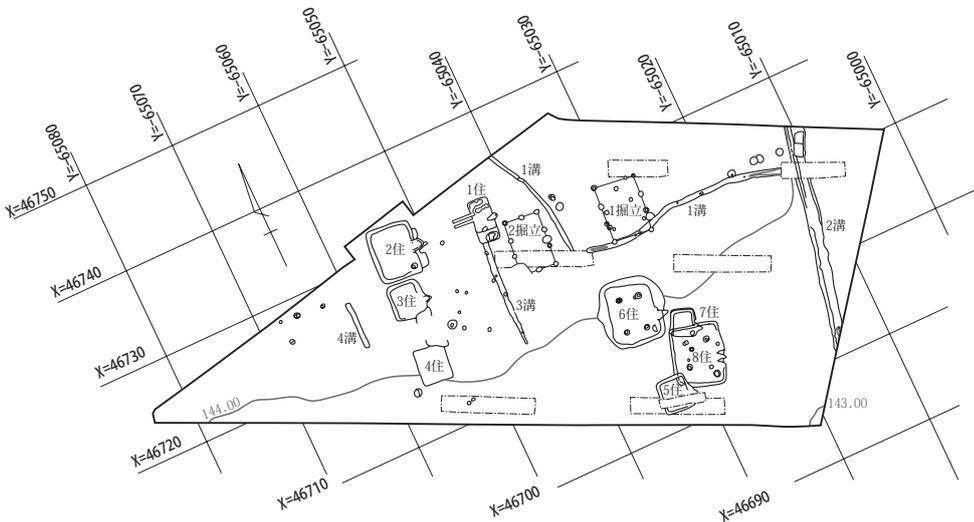
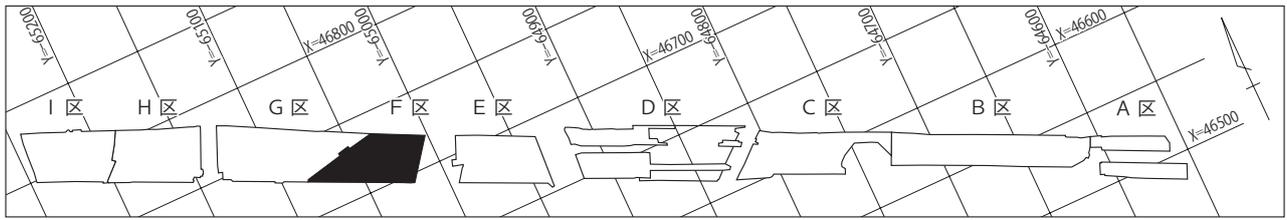
- 1 表土
- 2 暗褐色土 As-B軽石を含む。軟らかくしまり良い。
- 3 灰 As-Bテフラに伴う灰層。小豆色~ピンク。
- 4 As-B軽石
- 5 黒褐色土 白色軽石を含む。やや堅くしまる。
- 6 暗褐色土 白色軽石を含む。やや堅くしまる。粘性あり。
- 7 暗褐色土 白色軽石を少量含む。やや堅くしまる。粘性あり。
- 8 黒褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。
- 9 茶褐色土 茶褐色土ブロックを含む。軟らかい。
- 10 暗褐色土 軟らかく粘性強い。

- 11 攪乱 木の根
- 12 黒褐色土 白色軽石を含む。軟らかくしまり良い。
- 13 暗褐色土 やや堅くしまる。粘性強い。
- 14 暗褐色土 軟らかく粘性強い。
- 15 黒褐色土 白色軽石を多量含む。やや堅くしまる。
- 16 黒色土 白色軽石を少量含む。軟らかくしまり良い。
- 17 暗褐色土 軟らかく粘性強い。
- 18 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性強い。
- 19 ローム層

0 1:80 2m

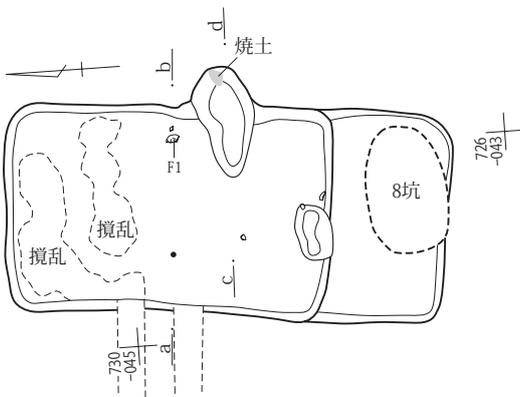
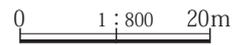
第70図 F区民家跡地トレンチ

第4章 検出された遺構と遺物



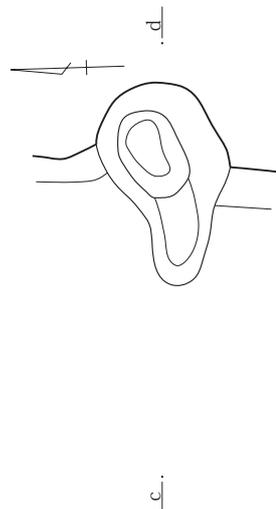
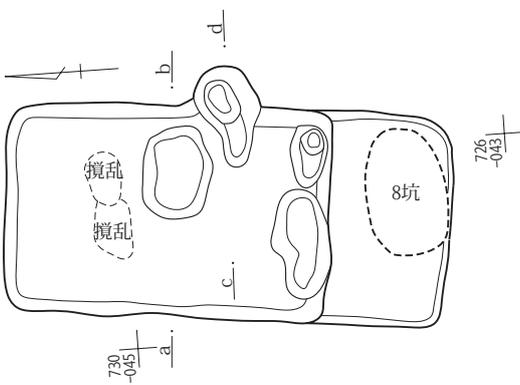
F区遺構集計

	1面	小計
住居	8	8
掘立柱建物	2	2
溝	4	4
土坑	11	11
	No.1 ~ 12,7欠番	
ピット	19	19
	No.1 ~ 20,17欠番	
道	0	0



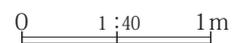
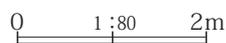
a-b

- 1 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。やや堅く締まる。
- 3 茶褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや堅く締まる。



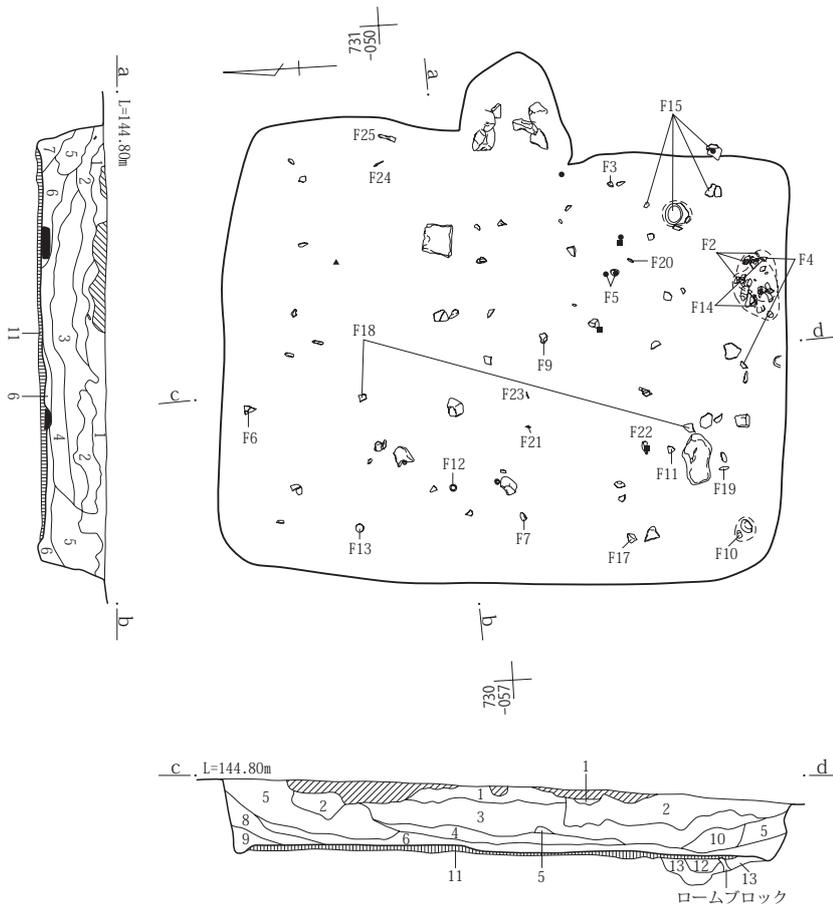
カマド c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 黄褐色土 ローム主体の層で、焼土ブロックを少量含む。やや堅く締まる。粘性あり。
- 3 黄褐色土 2よりもロームの混入少ない。やや堅く締まる。
- 4 暗褐色土 灰を含む。やや堅い。
- 5 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 6 赤褐色土 焼土ブロック多い。軟らかい。
- 7 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。



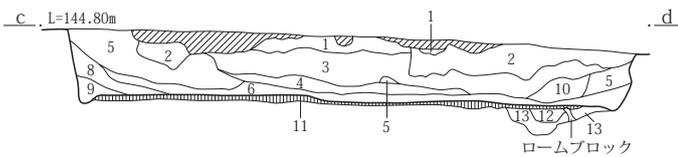
第71図 F区全体図, 1住居

遺構図(F区)



a-b,c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。やや堅く締まる。
- 2 暗褐色土 茶褐色土ブロック多い。白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 焼土粒子多い。白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多い。焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 5 暗褐色土 灰褐色土ブロックを多量、白色軽石・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 7 黒色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 8 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量、白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 9 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 10 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量、焼土ブロック・白色軽石・ローム粒子を含む。5に似る。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 11 暗褐色土 貼床。ロームと暗褐色土の混土。やや堅く締まる。
- 12 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 13 灰褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子を含む。軟らかく粘性強い。



i, j, L=143.70m

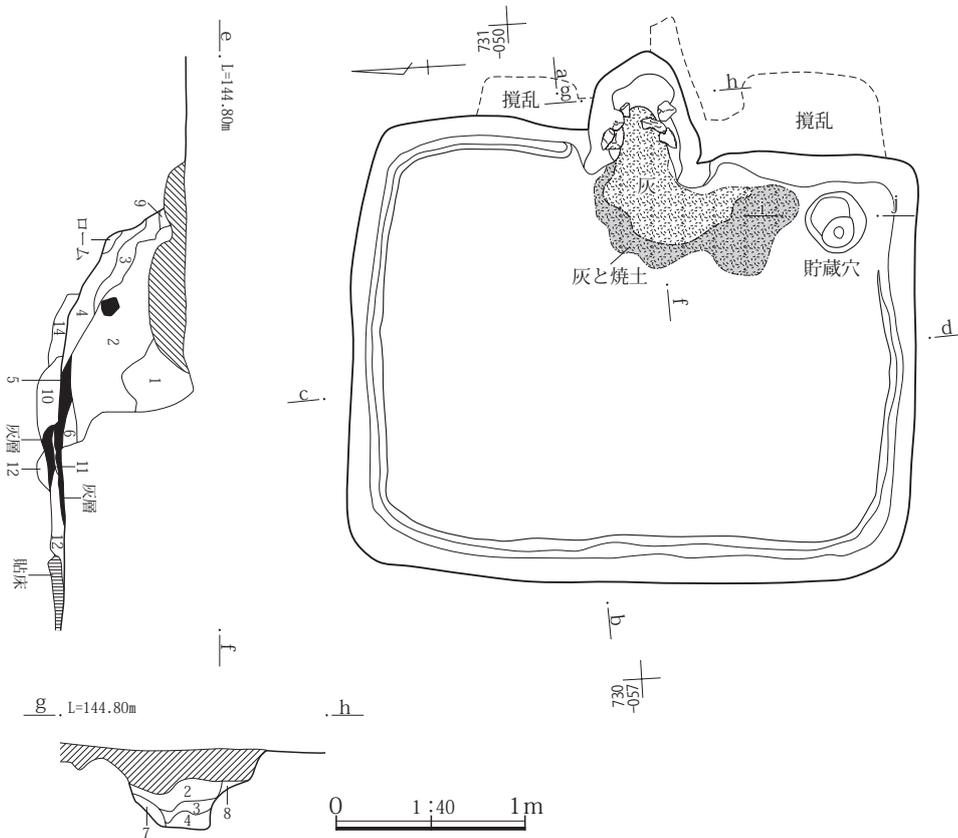


貯蔵穴 i-j

- 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 灰褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

カマド e-f,g-h,

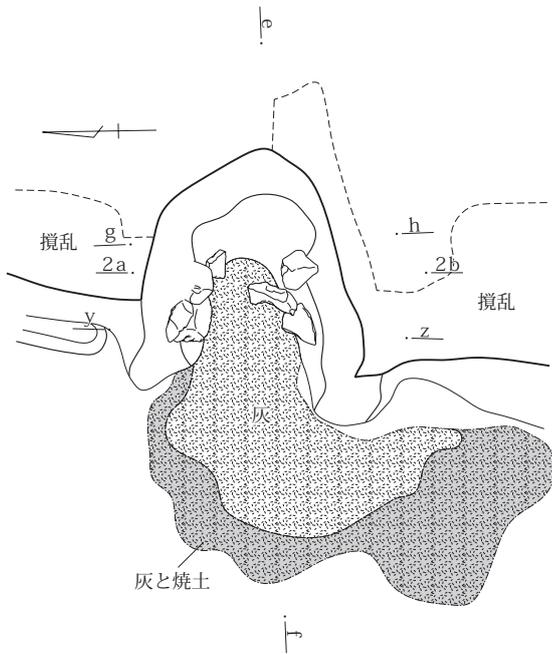
- 1 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量、白色軽石・焼土粒子を含む。やや堅く締まる。
- 2 赤褐色土 茶褐色土ブロック・焼土ブロック・ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 焼土を多量に含む。軟らかい。
- 4 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・灰を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 灰
- 6 赤褐色土 焼土多量、ロームブロックを含む。軟らかい。
- 7 黄褐色土 壁の崩れ。軟らかい。
- 8 灰褐色土 焼土を含む。軟らかく粘性あり。
- 9 黄褐色土 壁の崩れ。軟らかい。
- 10 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 11 灰 灰色粘土・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを含む。やや堅く締まる。



第72図 F区2住居(1)

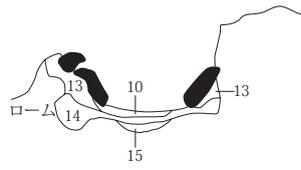
0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物



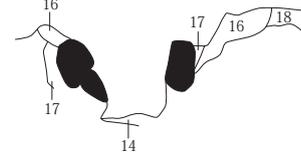
y, L=144.80m

.z



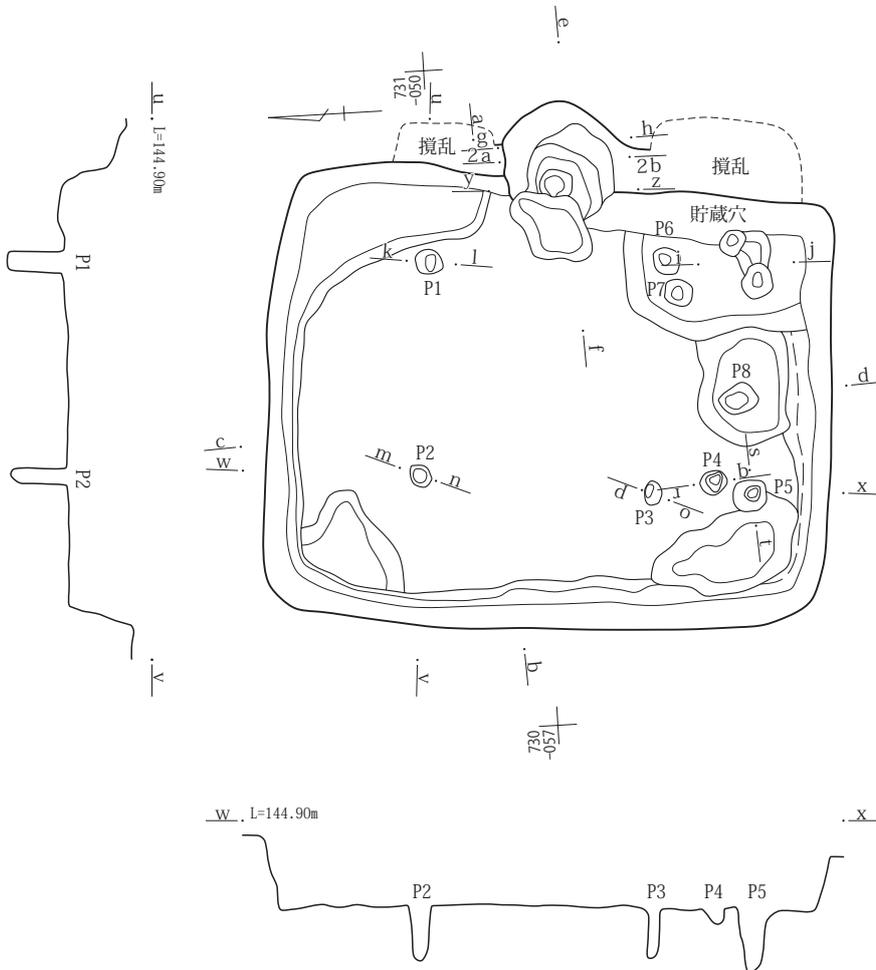
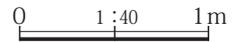
2a, L=144.80m

.2b



カマド y-z, 2a-2b

- 10 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 13 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかい。
- 14 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 15 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・灰白色粘土を含む。軟らかく粘性あり。
- 16 灰褐色土 灰白色粘土を主体に、ロームブロック・焼土ブロックを少量含む。強く締まる。
- 17 灰褐色土 灰白色粘土を含む。軟らかい。
- 18 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・白色軽石を含む。やや強く締まる。



L=144.20m

L=144.20m

k . . l

q . . r



P1・4 k-l, q-r

- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。やや強く締まる。

L=144.20m

L=144.20m

m . . n

o . . p



P2・3 m-n, o-p

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。

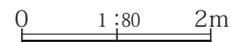
L=144.20m

s . . t

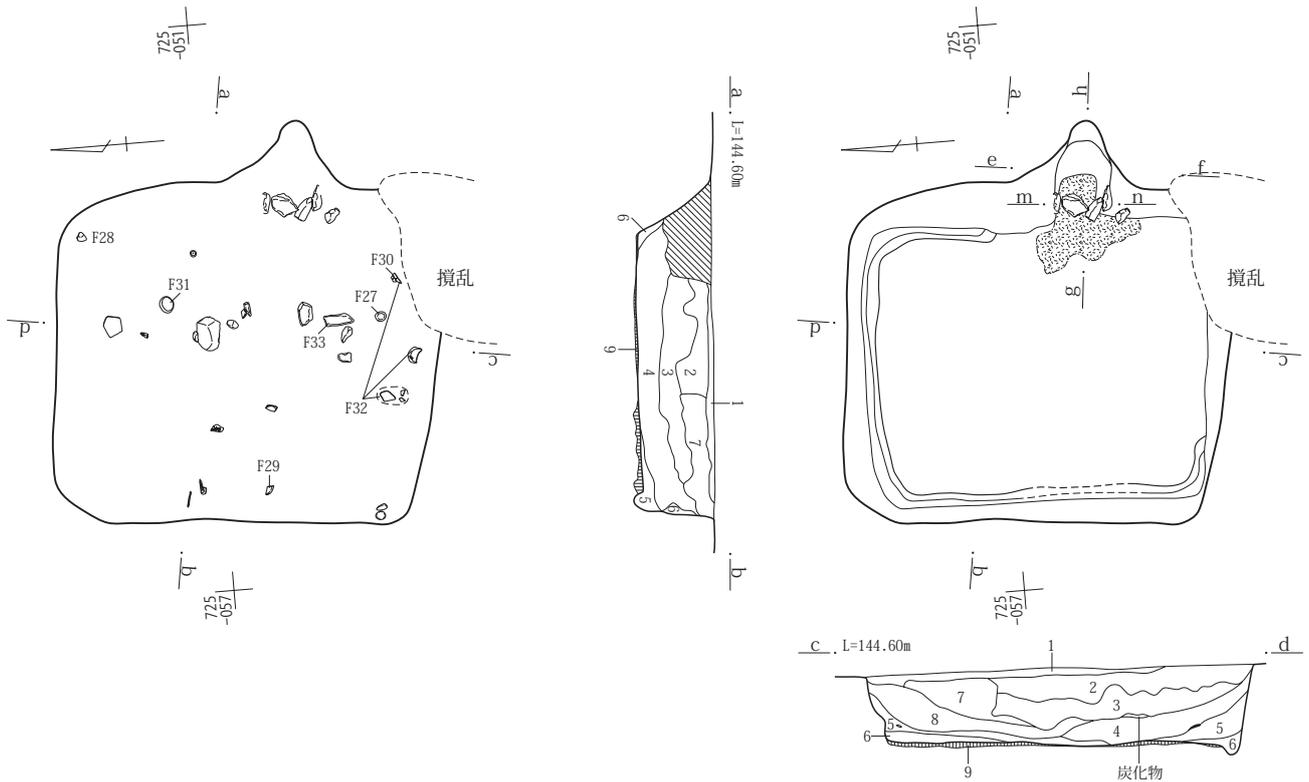


P5 s-t

- 1 暗褐色土 ローム多量、炭化物粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。非常に軟らかい。

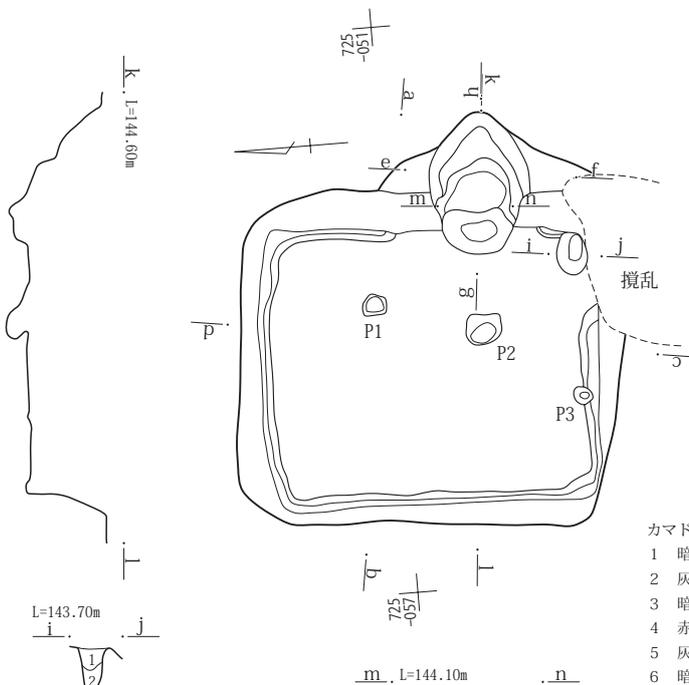


第73図 F区2住居(2)



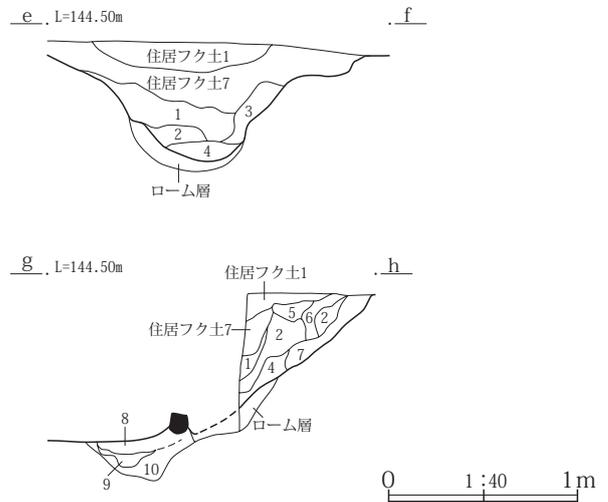
a-b,c-d

- | | |
|---|---|
| <p>1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。</p> <p>2 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量、白色軽石を含む。軟らかい。</p> <p>3 黒褐色土 茶褐色土ブロック・白色軽石・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。</p> <p>4 暗褐色土 茶褐色土ブロック・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。</p> <p>5 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。</p> | <p>6 暗褐色土 ロームを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。</p> <p>7 暗褐色土 茶褐色土ブロックを多量に含む。白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。</p> <p>8 黄褐色土 ローム主体の層。炭化物を含む。軟らかい。</p> <p>9 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土。焼土粒子を含む。貼床。やや堅く締まる。</p> |
|---|---|



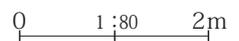
貯蔵穴 i-j

- 1 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。



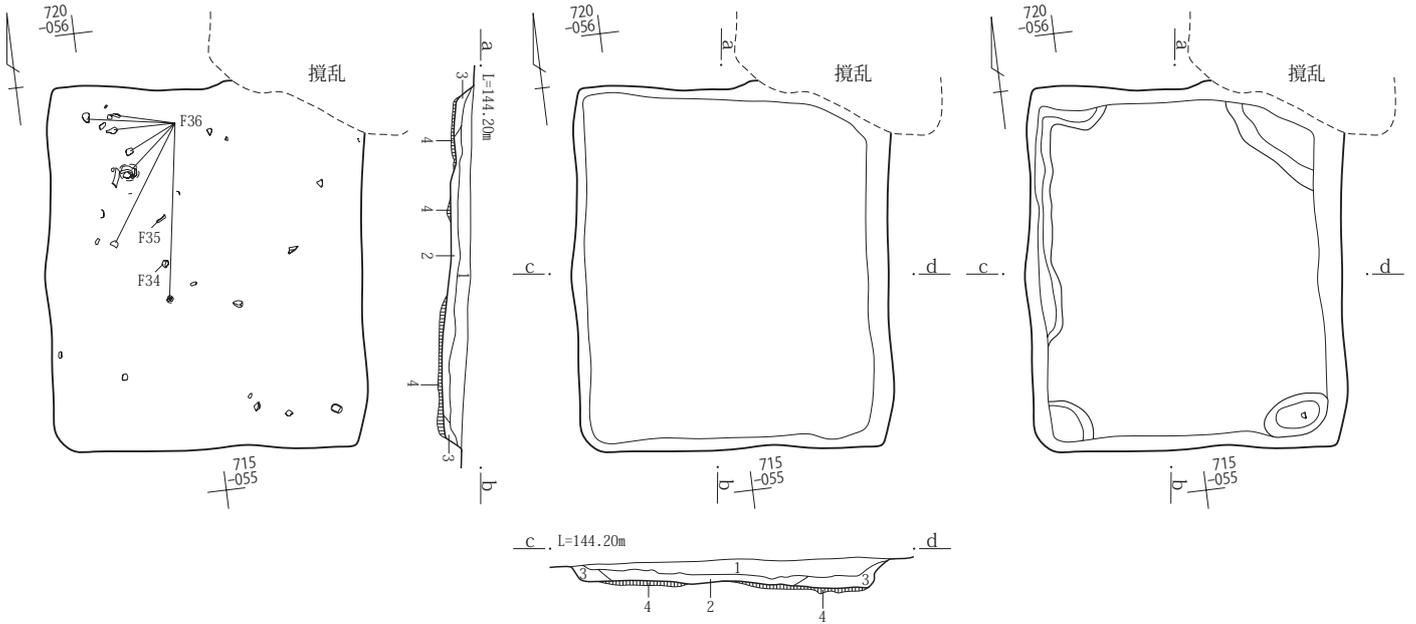
カマド e-f,g-h

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 灰褐色土 灰を主体に、焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性強い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 灰褐色土 灰を多量に含む。焼土ブロックを含む。やや堅く締まる。
- 6 暗褐色土 焼土粒子・ロームブロックを含む。やや堅く締まる。
- 7 暗褐色土 焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 8 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 9 黄褐色土 ロームブロック・粒子多量、焼土粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 10 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。



第74図 F区3住居

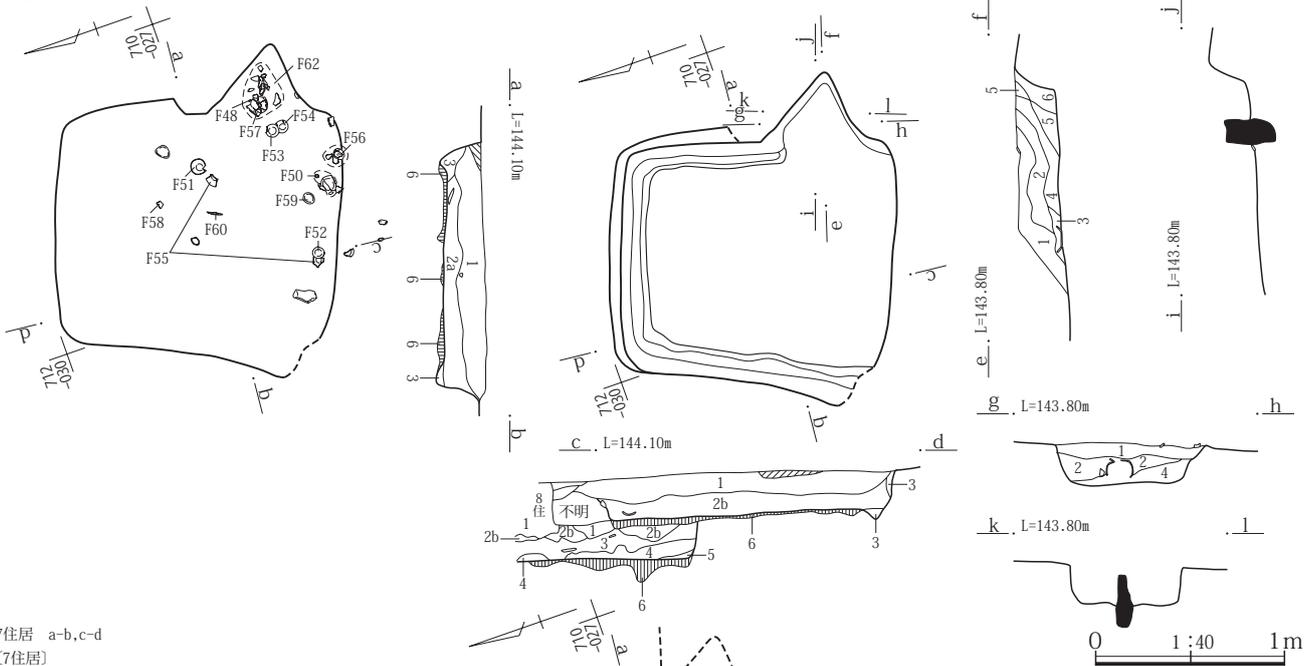
第4章 検出された遺構と遺物



4住居 a-b,c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 白色軽石少量、ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 黒褐色土 白色軽石少量、ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを多量に含む。貼床、やや堅い。

7住居



7住居 a-b,c-d

(7住居)

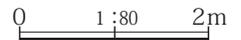
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2a 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2b 黄褐色土 ロームブロック多量、暗褐色土を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

(8住居)

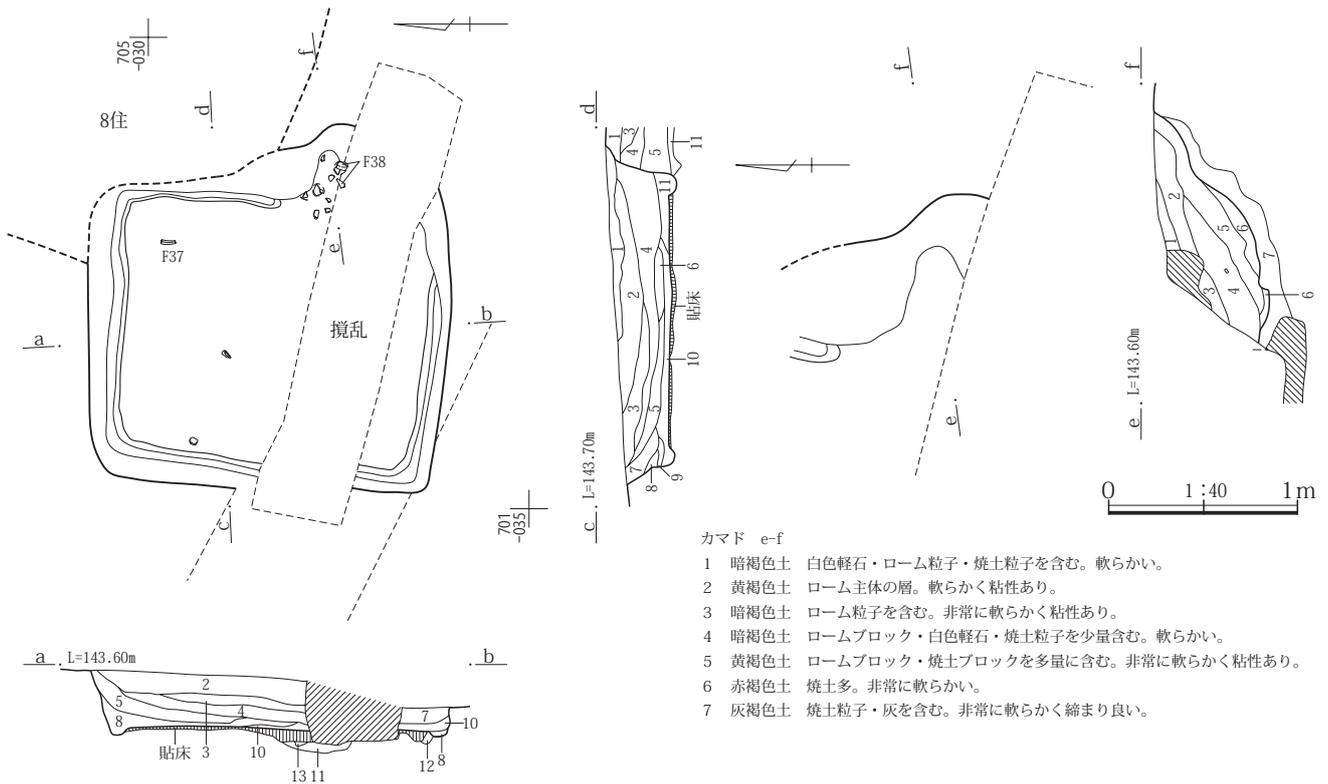
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体の層。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 6 暗褐色土 貼床。ロームと暗褐色土の混土。強く締まる。

カマド e-f,g-h

- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを少量含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 灰色粘土・ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 赤褐色土 焼土多量、ローム粒子・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 5 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 6 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒を少量含む。非常に軟らかく粘性あり。



第75図 F区4・7住居



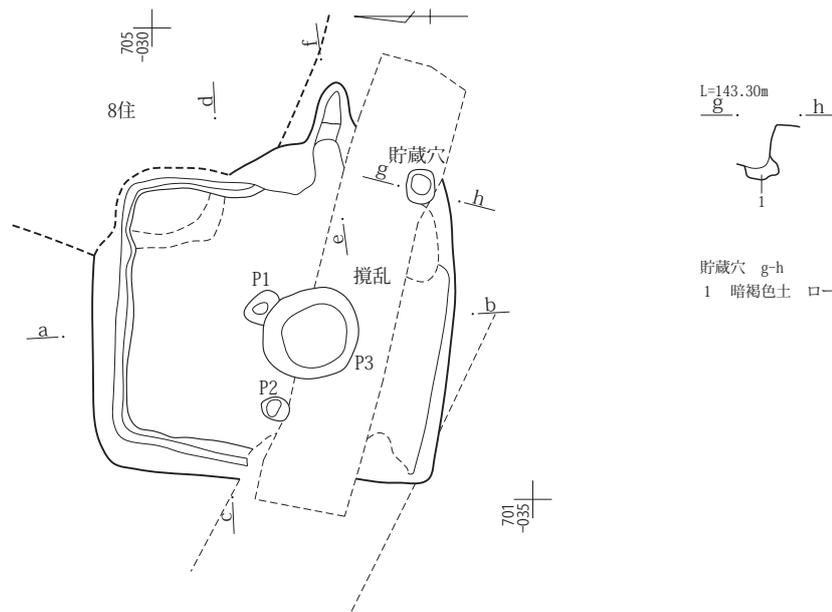
カマド e-f

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかい。
- 2 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 4 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石・焼土粒子を少量含む。軟らかい。
- 5 黄褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 6 赤褐色土 焼土多。非常に軟らかい。
- 7 灰褐色土 焼土粒子・灰を含む。非常に軟らかく締めり良い。

a-b, c-d

- 1 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量、白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む。やや軟らかく締めり良い。
- 3 黒褐色土 白色軽石少量、ローム粒子を含む。やや軟らかく締めり良い。
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物粒子を少量含む。軟らかい。
- 5 黒褐色土 軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかく締めり良い。
- 7 黒褐色土 ローム粒子・白色軽石を少量含む。軟らかく締めり良い。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・軽石を含む。軟らかく締めり良い。粘性あり。
- 9 茶褐色土 壁の崩れ。軟らかく粘性あり。

- 10 暗褐色土 ローム粒子・軽石を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 11 褐色土 焼土ブロック多量、炭化物・ロームブロックを含む。非常に軟らかく、粘性あり。
- 12 暗褐色土 ロームブロック・粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 13 ロームブロック
- 貼床 暗褐色土 ロームと暗褐色土の混土。

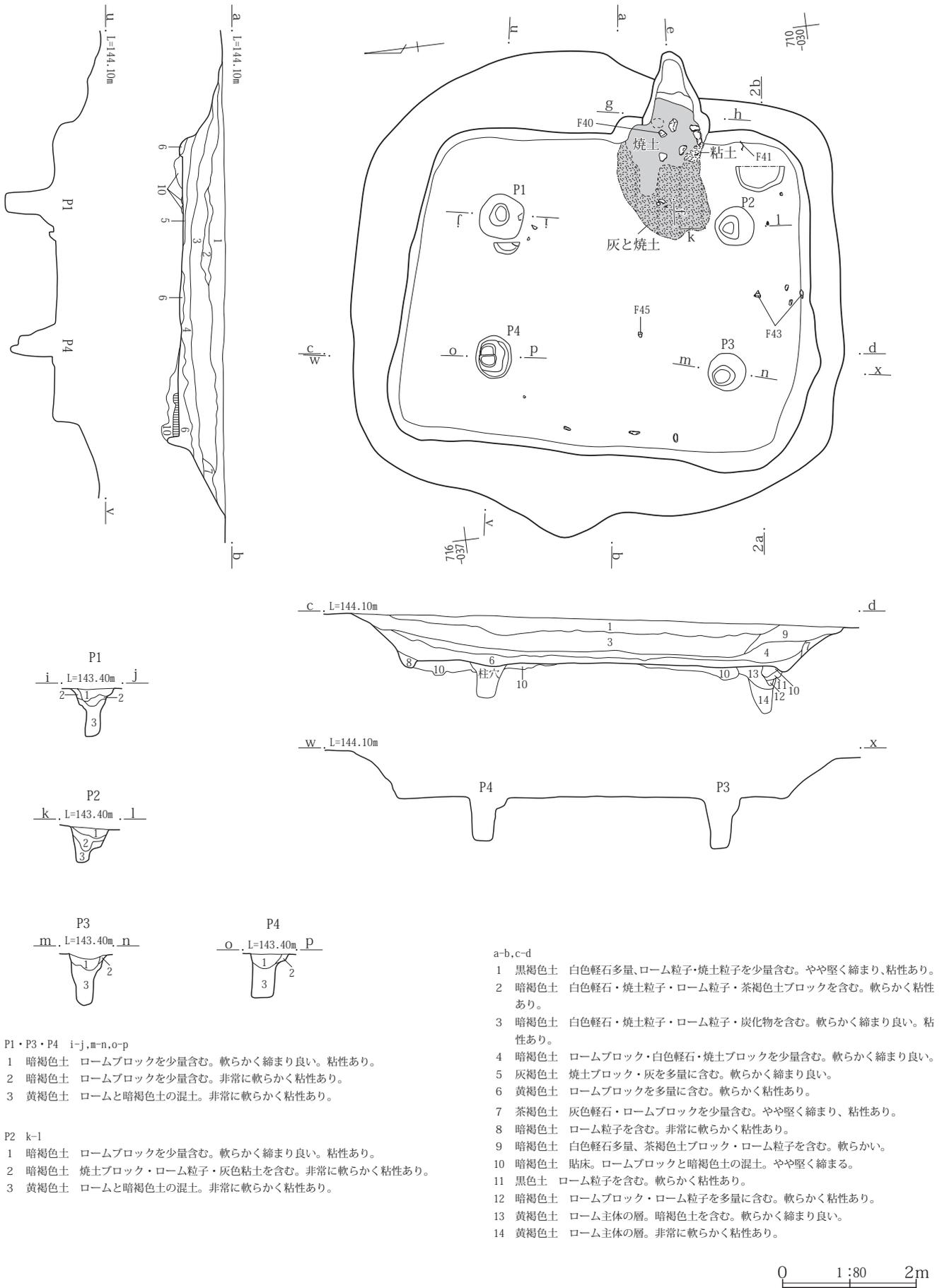


貯蔵穴 g-h

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子を含む。軟らかく締めり良い。

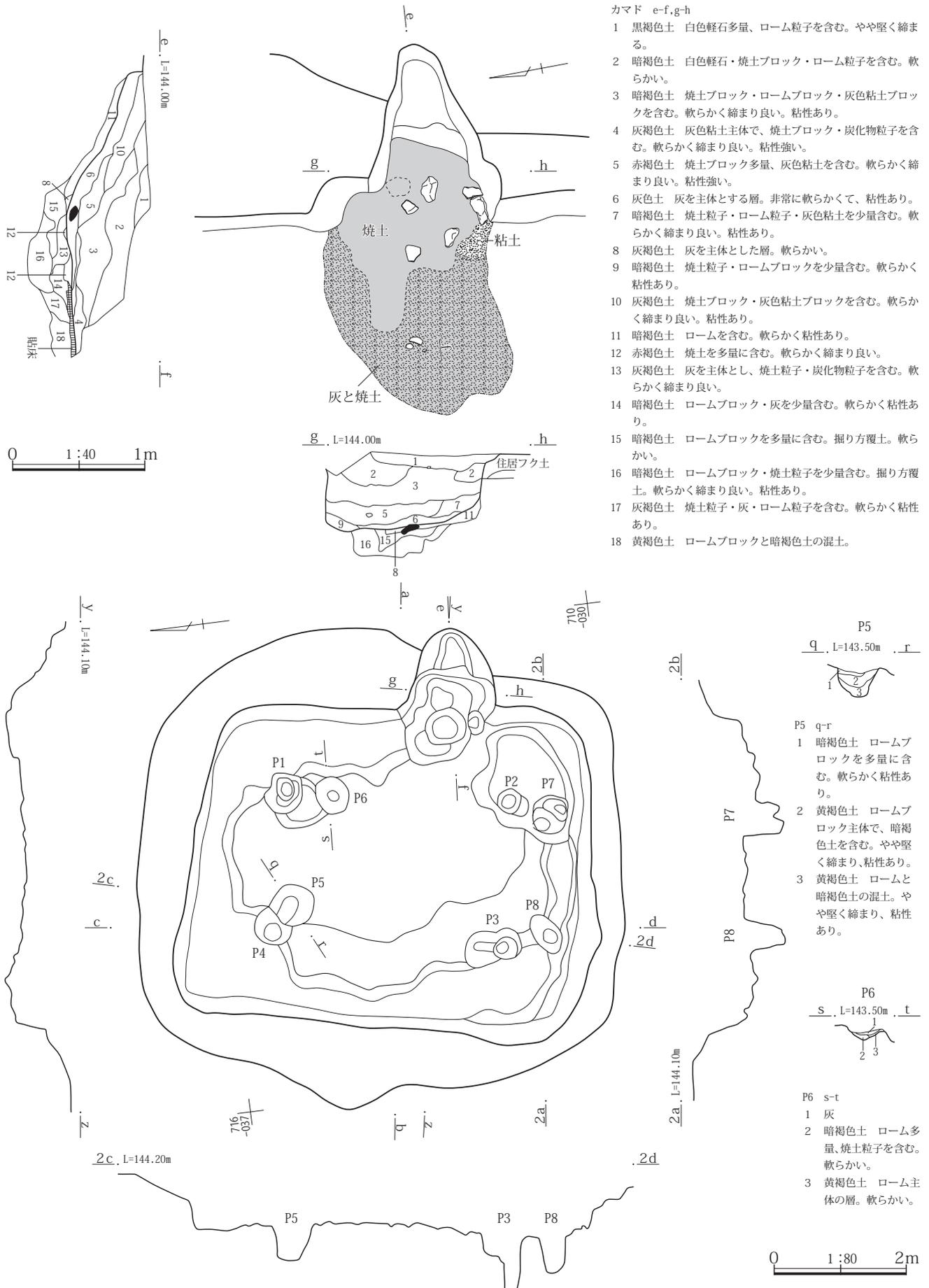
第76図 F区5住居

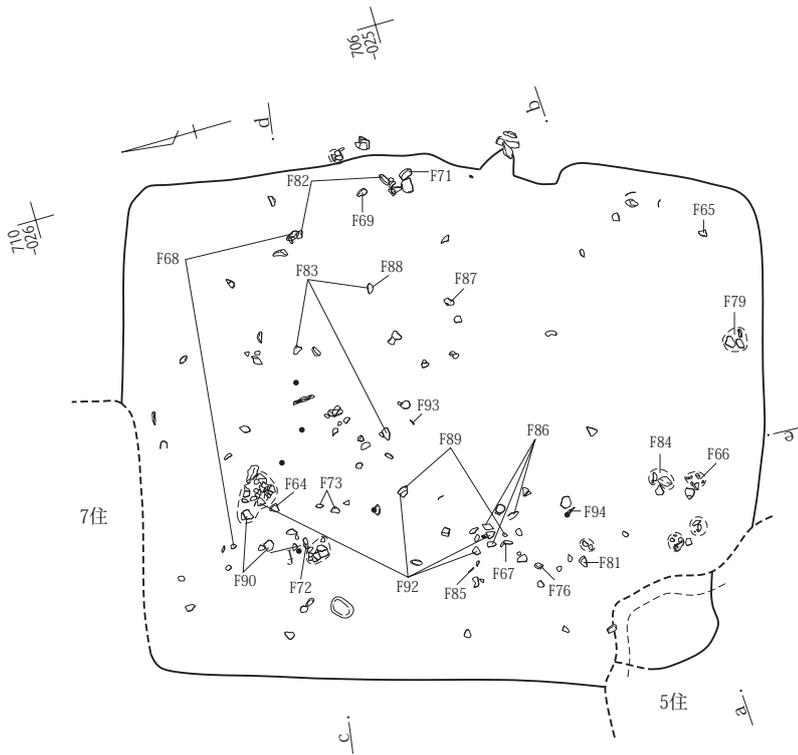
第4章 検出された遺構と遺物



第77図 F区6住居(1)

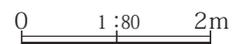
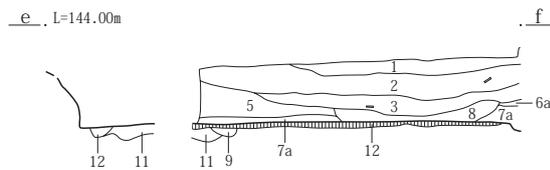
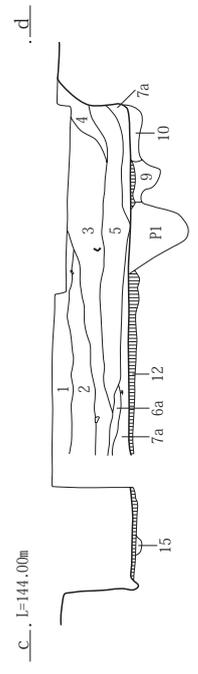
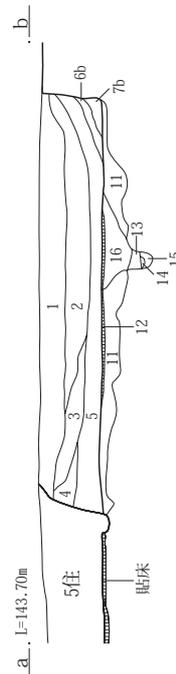
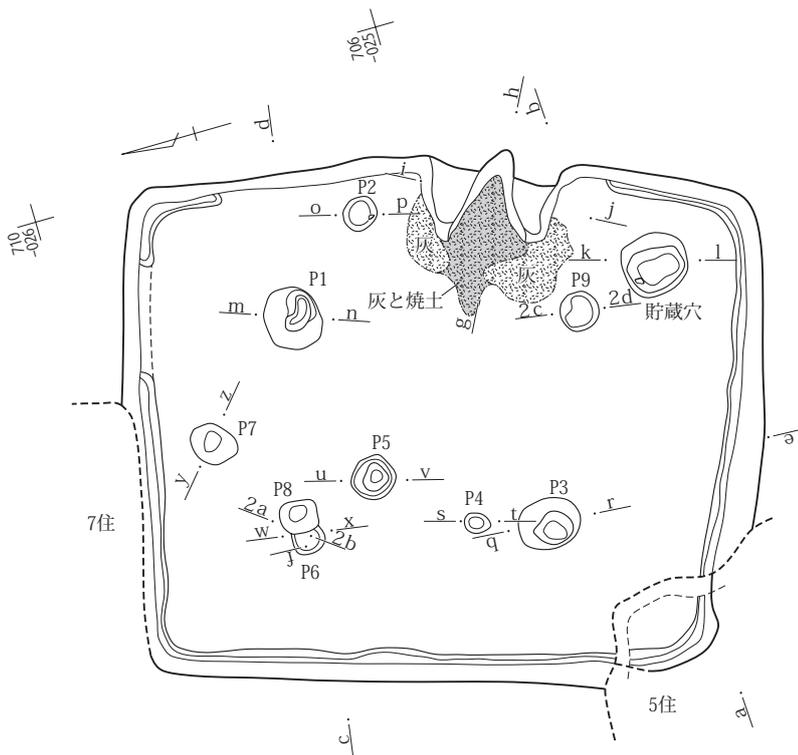
遺構図(F区)



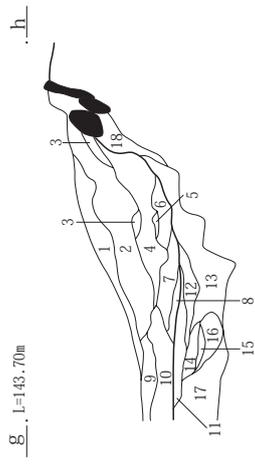
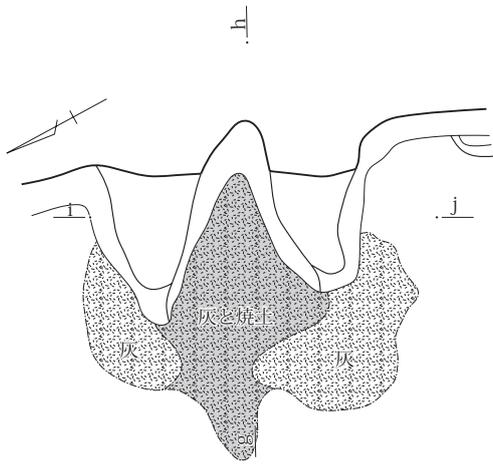


a-b,c-d,e-f

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 白色軽石・焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 4 暗褐色土 茶褐色土ブロック・白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 5 暗褐色土 白色軽石・ロームブロック・灰白色粘土ブロック・炭化物を含む。軟らかい。
- 6a 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 6b 灰褐色土 灰色粘土を多量に含む。ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 7a 暗褐色土 ロームブロック・炭化物を含む。軟らかく粘性あり。
- 7b 茶褐色土 非常に軟らかく粘性あり。壁のくずれ。
- 8 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 9 暗褐色土 ロームブロック・粒子を多量に含む。軟らかい。
- 10 黄褐色土 ローム主体の層。やや堅く締まる。
- 11 黄褐色土 ロームと暗褐色土混土。やや堅く締まる。
- 12 暗褐色土 貼床。ロームと暗褐色土の混土。
- 13 暗褐色土 黒色土・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 14 茶褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 15 黒色土 ローム粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 16 黄褐色土 ロームブロック・茶褐色土ブロック・黒色土の混土。やや堅く締まる。



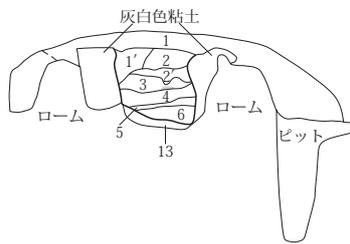
第79図 F区8住居(1)



カマド g-h,i-j

- 1 暗褐色土 灰色粘土・焼土ブロック・ローム粒子・白色軽石を含む。やや堅く締まり、粘性あり。
- 1' 灰褐色土 暗褐色土と灰色粘土の混土。
- 2 灰白色粘土 焼土ブロックを少量含む。カマド天井部の崩落。やや堅く締まり、粘性強い。
- 2' 灰土 焼土ブロックを含む。カマド天井部の崩落。軟らかく締まり良い。
- 3 黒褐色土 炭化物・焼土・灰色粘土を含む。
- 4 灰褐色土 焼土ブロックを少量含む。粘性強い。
- 5 灰
- 6 灰褐色土 4と同じ。
- 7 灰褐色土 焼土ブロック・灰を含む。軟らかく粘性強い。
- 8 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物を含む。軟らかく粘性強い。
- 9 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・灰白色粘土を含む。やや堅く締まり、粘性強い。

i, L=143.70m



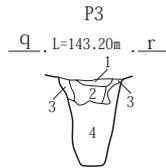
0 1:40 1m

- 10 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子・灰白色粘土を含む。軟らかくて、粘性強い。
- 11 暗褐色土 灰・焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 12 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 13 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 14 灰 焼土ブロックを含む。
- 15 灰 ローム粒子を含む。
- 16 灰 非常に軟らかい。
- 17 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや堅く締まる。
- 18 灰白色土 灰白色粘土を主体に、焼土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。



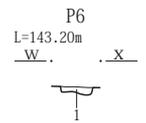
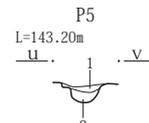
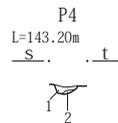
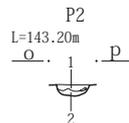
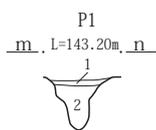
貯蔵穴 k-l

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 黒色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 4 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。やや堅く締まり、粘性あり。



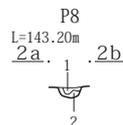
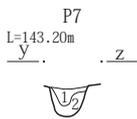
P3 q-r

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 黄褐色土 ローム主体の層。非常に軟らかく粘性あり。
- 4 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。非常に軟らかく粘性あり。



P1・2・4・5・6 m-n,o-p,s-t,u-v,w-x

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 黄褐色土 ローム主体で、暗褐色土を含む。軟らかく粘性あり。

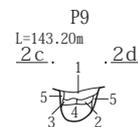


P7 y-z

- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。

P8 2a-2b

- 1 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性強い。

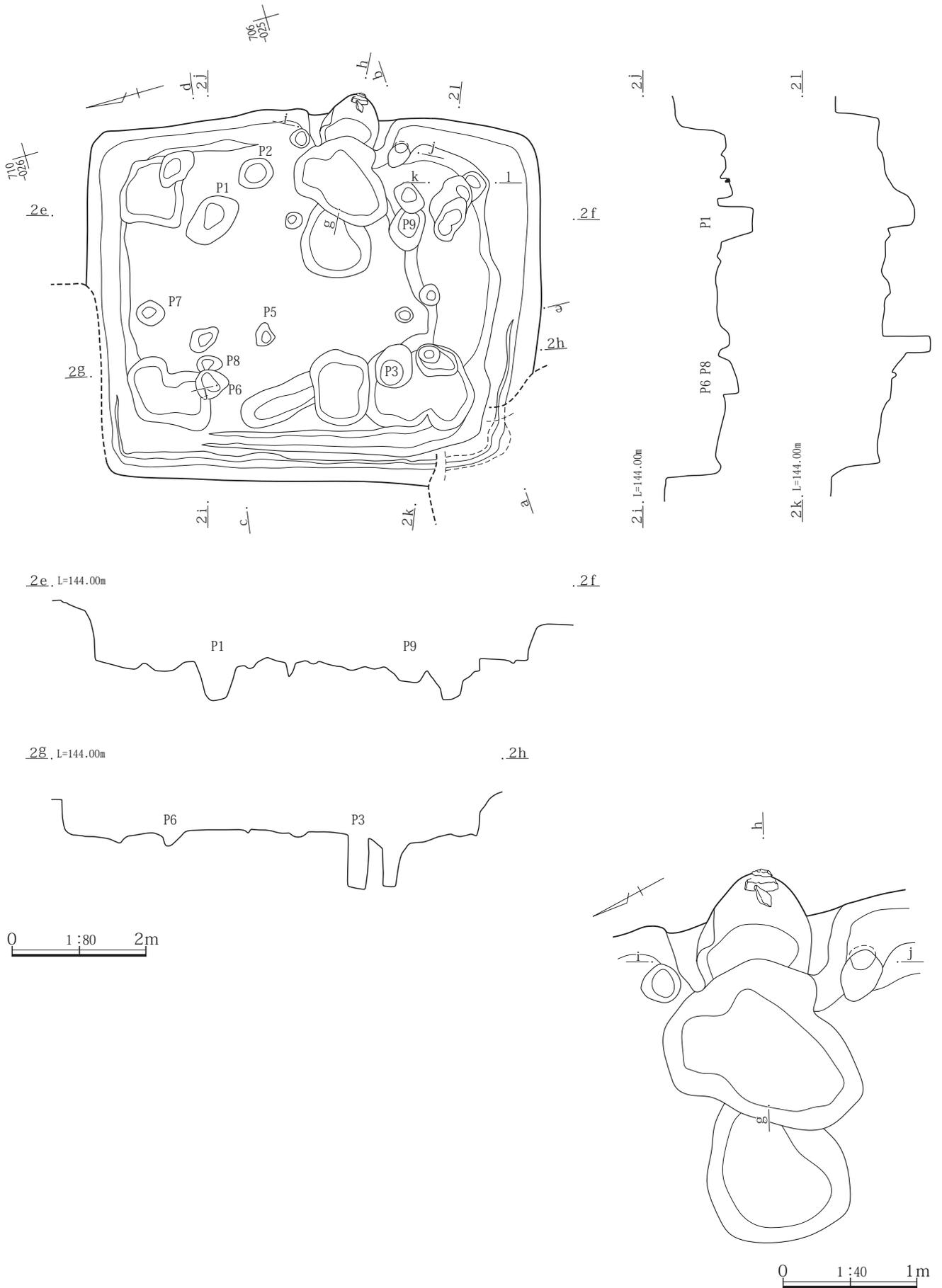


P9 2c-2d

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・白色軽石を少量含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。非常に軟らかい。
- 3 灰褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・灰を含む。軟らかく粘性強い。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。非常に軟らかい。
- 5 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。

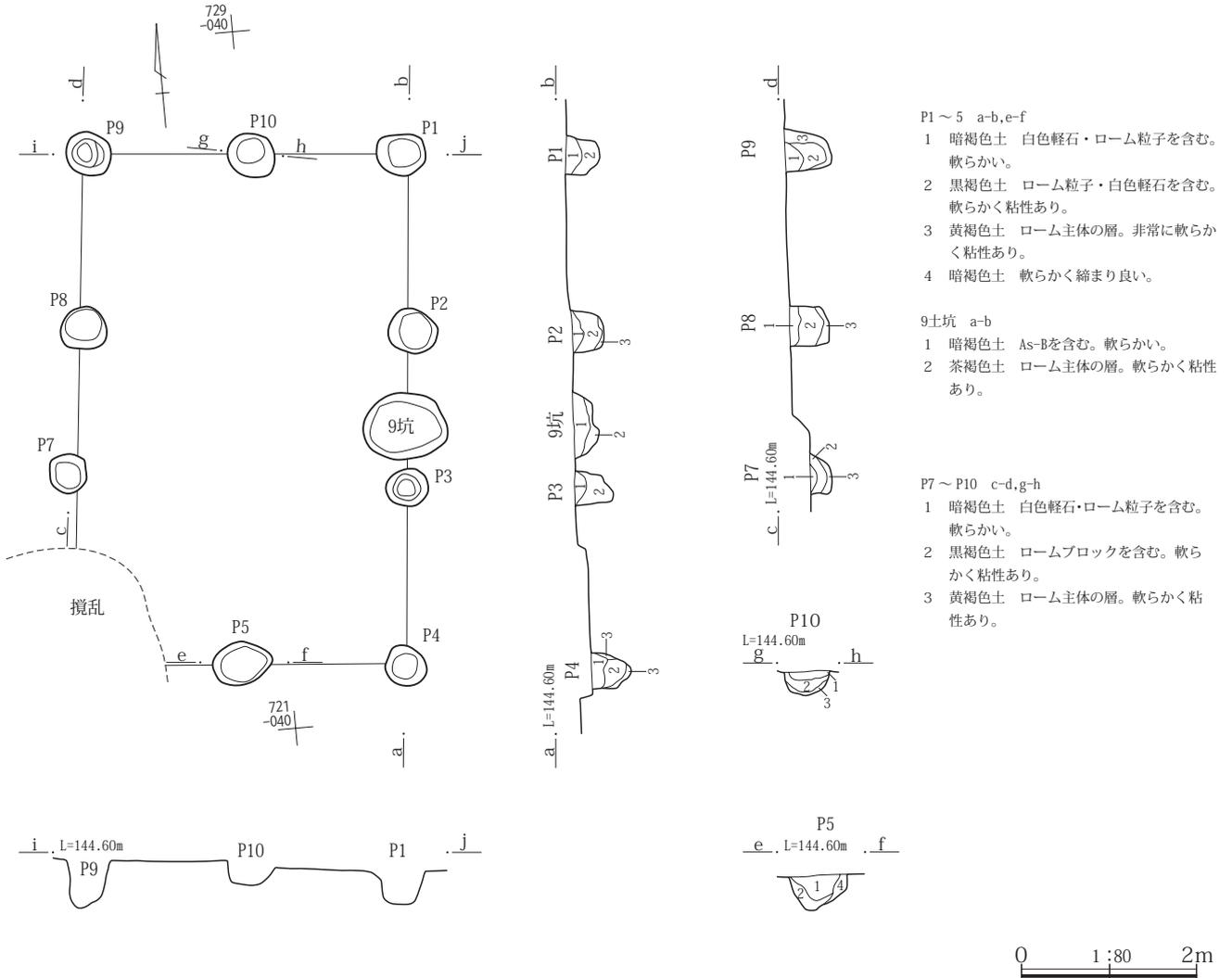
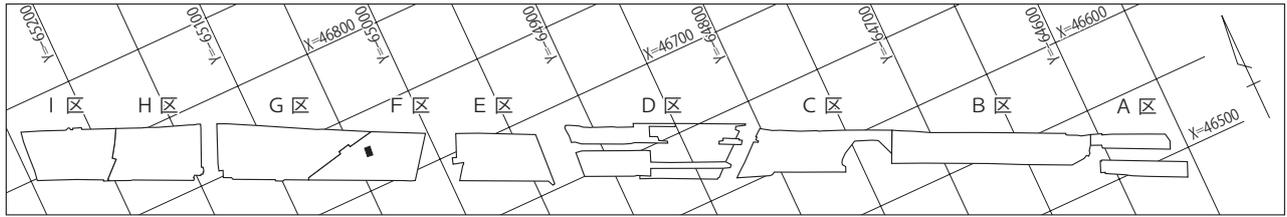
0 1:80 2m

第80図 F区8住居(2)



第81図 F区8住居(3)

第4章 検出された遺構と遺物



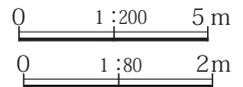
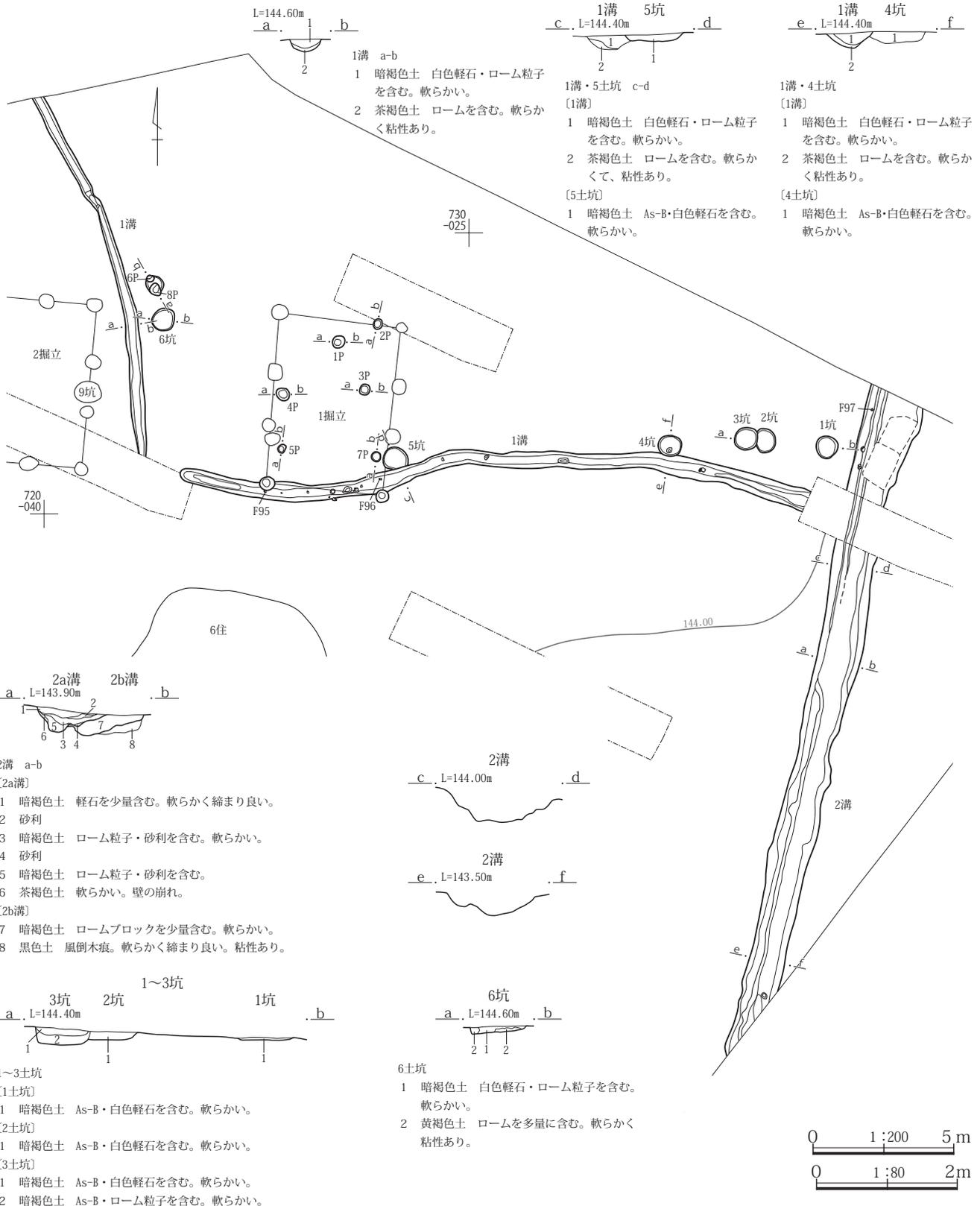
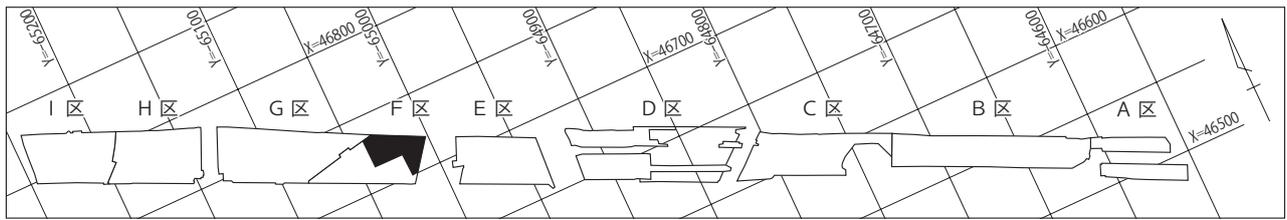
- P1～5 a-b, e-f
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
 - 2 黒褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 黄褐色土 ローム主体の層。非常に軟らかく粘性あり。
 - 4 暗褐色土 軟らかく締まり良い。
- 9土坑 a-b
- 1 暗褐色土 As-Bを含む。軟らかい。
 - 2 茶褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。
- P7～P10 c-d, g-h
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。

第83図 F区2掘立柱建物

第21表 F区2掘立柱建物計測値

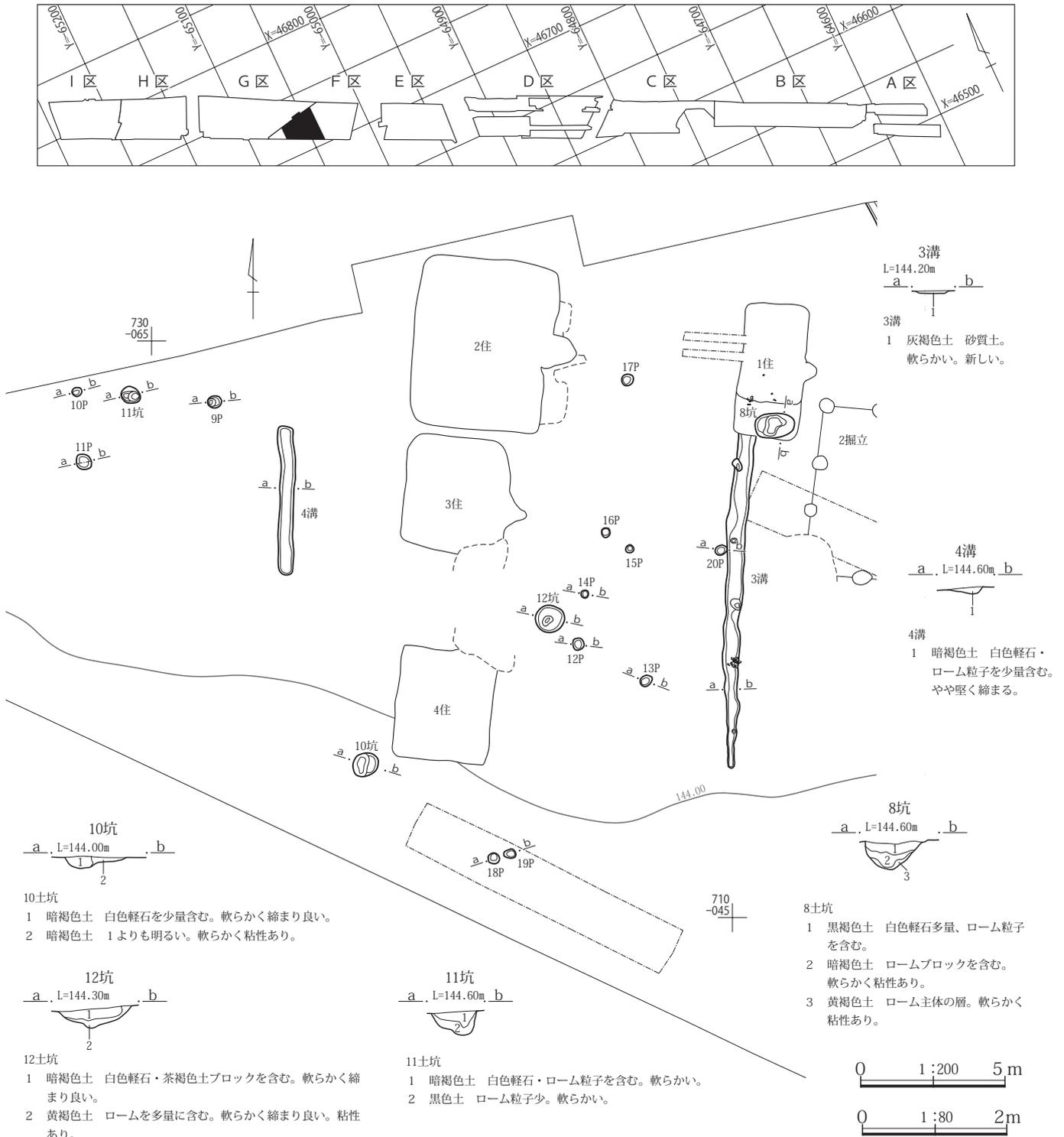
平面形 長方形		規模 3間×2間		長軸方位N-7°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁立柱間 cm	梁立柱間 cm	規模				
				番号	上ノcm長径×短径	下ノcm長径×短径	深さcm	備考
P1-P4 : 589	P1-P9 : 362	P1-P2 : 206	P1-P10 : 175	1	55×48	35×32	48	
P10-P5 : 588	P2-P8 : 378	P2-P3 : 180	P10-P9 : 187	2	56×52	41×37	44	
-	P3-P7 : 385	P3-P4 : 204	P4-P5 : 184	3	49×42	20×18	46	
	-	P9-P8 : 199	-	4	47×45	29×28	50	
		P8-P7 : 172	-	5	69×49	53×41	43	
		-	-	7	45×42	30×28	27	
				8	53×49	41×35	47	
				9	54×51	21×16	58	
				10	57×52	32×28	30	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は芯々で計測



第84図 F区東半部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図

第4章 検出された遺構と遺物

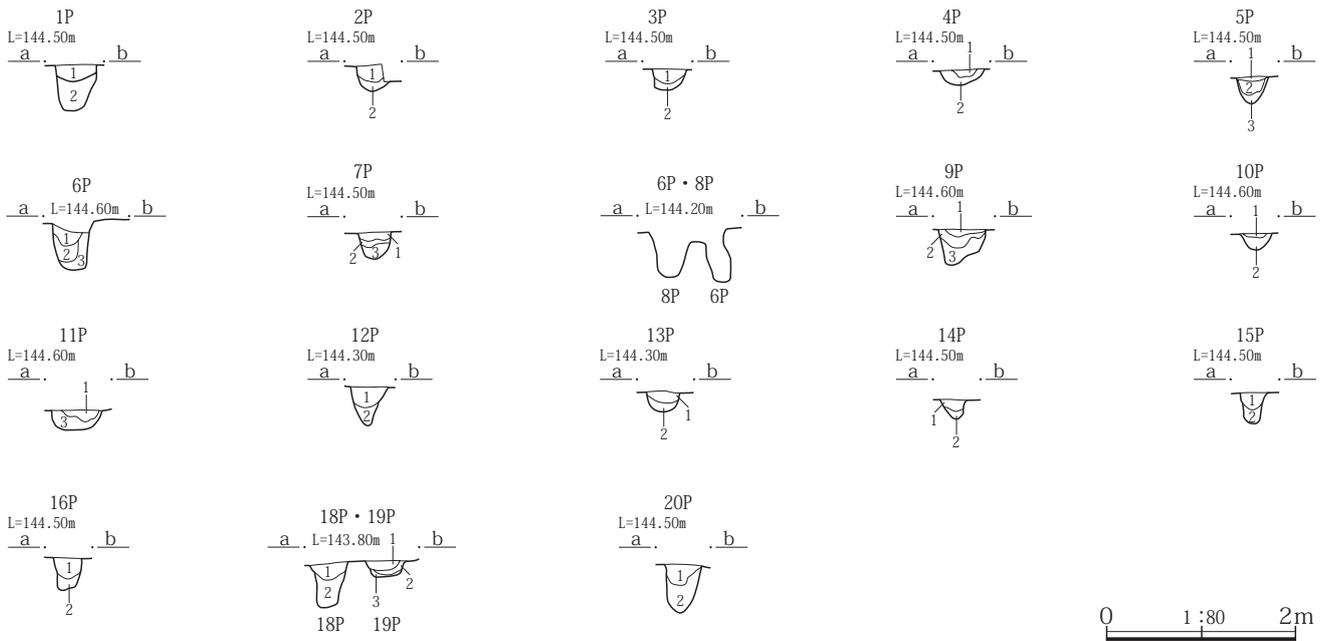


第85図 F区西半部溝・土坑・ピット位置図、溝・土坑断面図

第22表 F区土坑計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	土坑	F	1	722-012		80×78・10				
2	土坑	F	1	722-014	2坑→3坑	88×68・12		土師器4		
3	土坑	F	1	722-015	2坑→3坑	80×78・24		土師器19, 須恵器1	奈良平安	
4	土坑	F	1	722-018	4土坑→1溝→5土坑	83×74・15		土師器18	奈良平安	
5	土坑	F	1	722-027	1掘立・4土坑→1溝→5土坑	90×80・11		土師器13	奈良平安	
6	土坑	F	1	727-035		86×76・14				
7	土坑	F	欠番							
8	土坑	F	1	727-043	1住→8土坑	136×85・60				
9	土坑	F	1	724-038	2掘立と重複	96×76・29		土師器16, 須恵器1	奈良平安?	第83図に掲載
10	土坑	F	1	715-057		93×81・17				
11	土坑	F	1	728-065		68×58・39				
12	土坑	F	1	720-051		100×94・27		土師器18	奈良平安	

遺構図(F区)

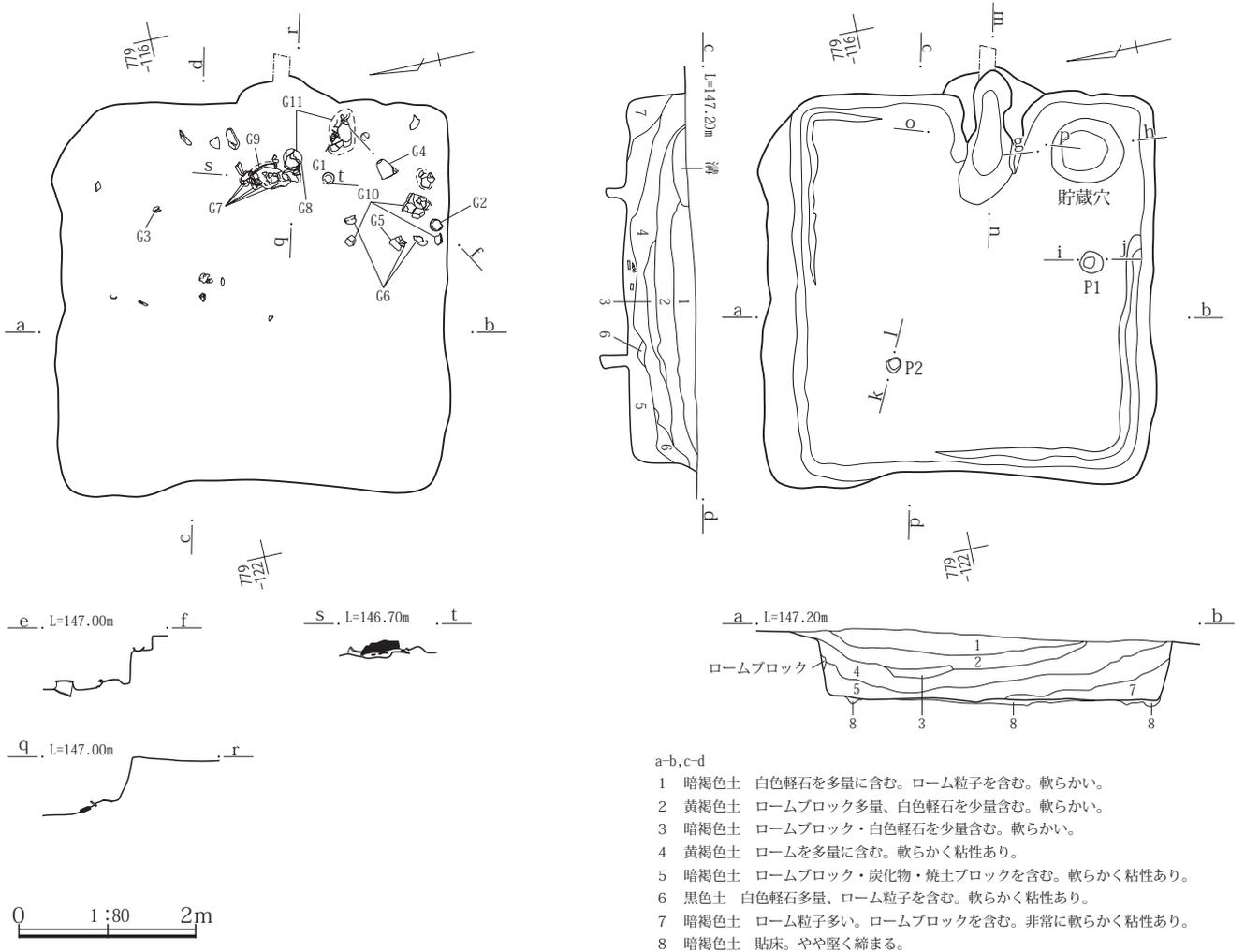
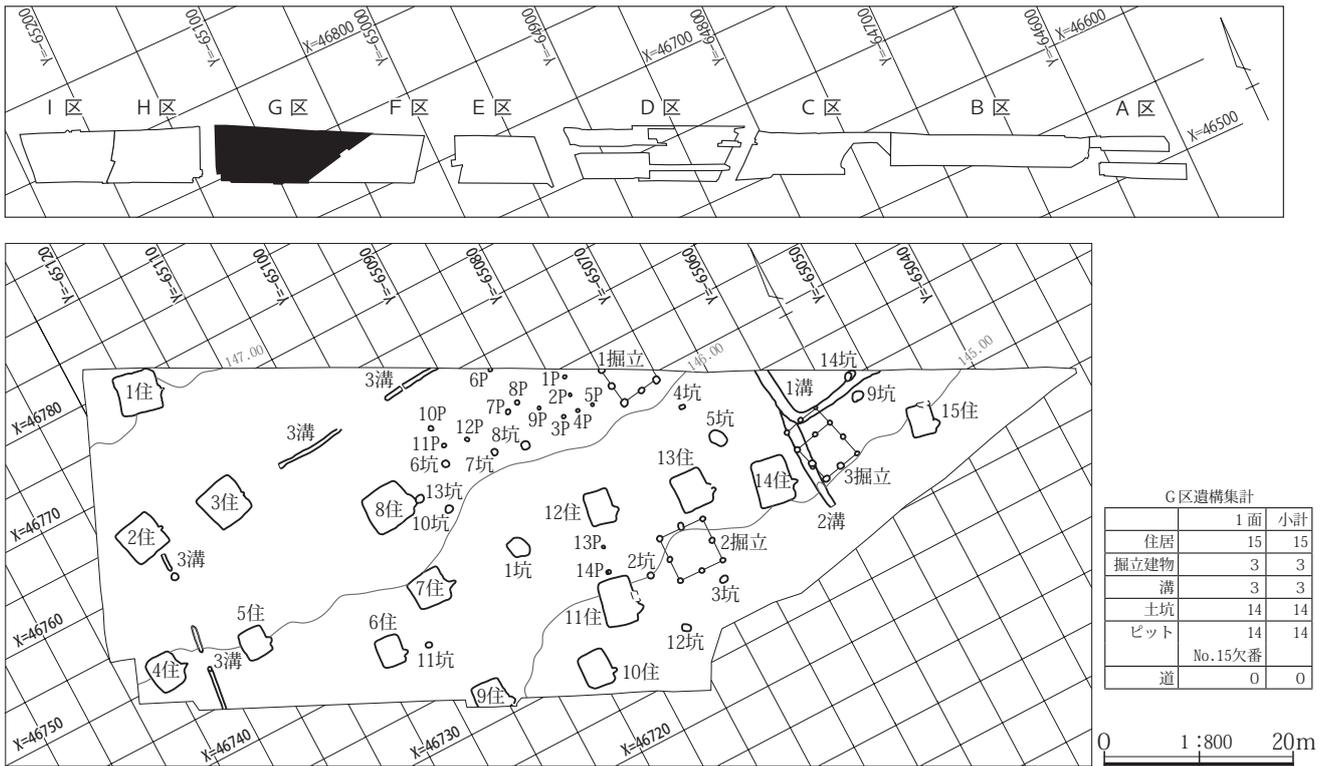


第86図 F区ピット断面図

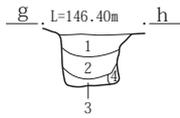
第23表 F区ピット計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	土層説明	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	ピット	F		726-029	1掘立と重複	49×43・54	1 暗褐色土 ロームブロック多。As-B少。軟らかい。2 暗褐色土 ローム粒子多。非常に軟らかく粘性あり。				
2	ピット	F		726-028	1掘立と重複	36×31・30	1 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかい。2 暗褐色土 ローム粒子多。軟らかく粘性あり。				
3	ピット	F		724-028	1掘立と重複	39×35・25	2ピットと同じ。				
4	ピット	F		724-031		51×43・22	1 暗褐色土 白色軽石含む。軟らかくしまり良い。2 茶褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。				
5	ピット	F		722-031		31×25・29	1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。2 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子多。軟らかい。3 茶褐色土 軟らかく粘性あり。				
6	ピット	F		728-036	7坑→6P	27×26・60	1 黒褐色土 ローム粒子・白色軽石少。軟らかくしまり良い。2 暗褐色土 ロームブロック多。軟らかい。3 茶褐色土 ロームブロック多。軟らかく粘性あり。				
7	ピット	F		722-038	1掘立と重複	36×33・29	1 暗褐色土 白色軽石含む。軟らかい。2 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。3 暗褐色土 ローム粒子含む。軟らかく粘性あり。				
8	ピット	F		728-036	7坑→8P	46×37・55					
9	ピット	F		727-062		50×43・41	1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。2 黒色土 ローム粒子少。軟らかい。3 茶褐色土 黒色土を含む。軟らかく粘性あり。				
10	ピット	F		728-067		35×31・21	9ピットと同じ。				
11	ピット	F		725-067		61×52・24	9ピットと同じ。				
12	ピット	F		719-050		41×38・46	1 暗褐色土 白色軽石多。茶褐色土との混土。2 暗褐色土 白色軽石少。非常に軟らかい。				
13	ピット	F		718-048		45×36・23	12ピットと同じ。				
14	ピット	F		721-050		28×25・23	12ピットと同じ。				
15	ピット	F		722-048		28×28・36	12ピットと同じ。				
16	ピット	F		723-049		34×30・38	12ピットと同じ。				
17	ピット	F		728-048		43×40・43					
18	ピット	F		712-053		40×38・49	1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。2 暗褐色土 ローム粒子少。非常に軟らかい。				
19	ピット	F		712-052		42×32・18	1 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石少。軟らかくしまり良い。2 暗褐色土 ロームブロックを含む。非常に軟らかい。3 黄褐色土 軟らかくしまり良い。粘性あり。				
20	ピット	F		722-045		42×33・52	1 暗褐色土 茶褐色土ブロック・白色軽石を含む。軟らかい。2 暗褐色土 ローム粒子を含む。				

第4章 検出された遺構と遺物

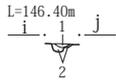


第87図 G区全体図、1住居(1)



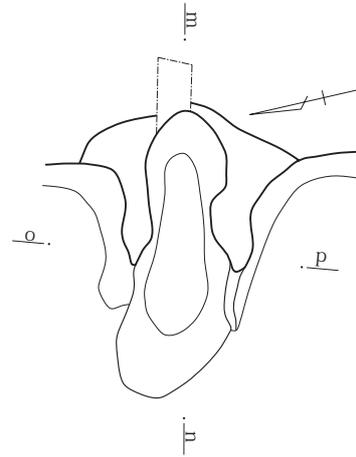
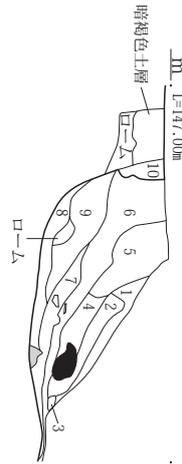
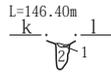
貯蔵穴 g-h

- 1 茶褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 4 黄褐色土 壁の崩れ。

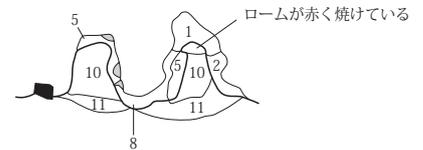


P1・P2 i-j, k-l

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・白色軽石を含む。軟らかく縮まり良い。
- 2 黄褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。

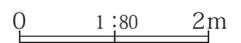
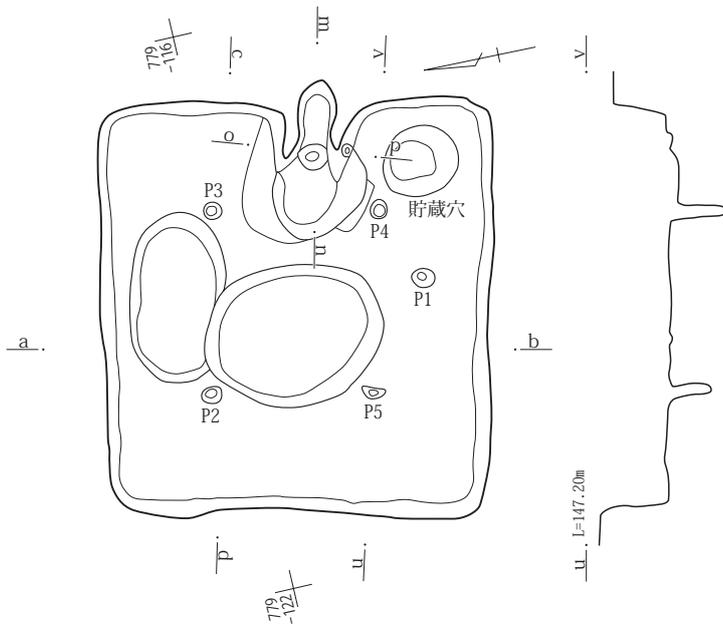
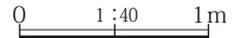


o, L=147.00m



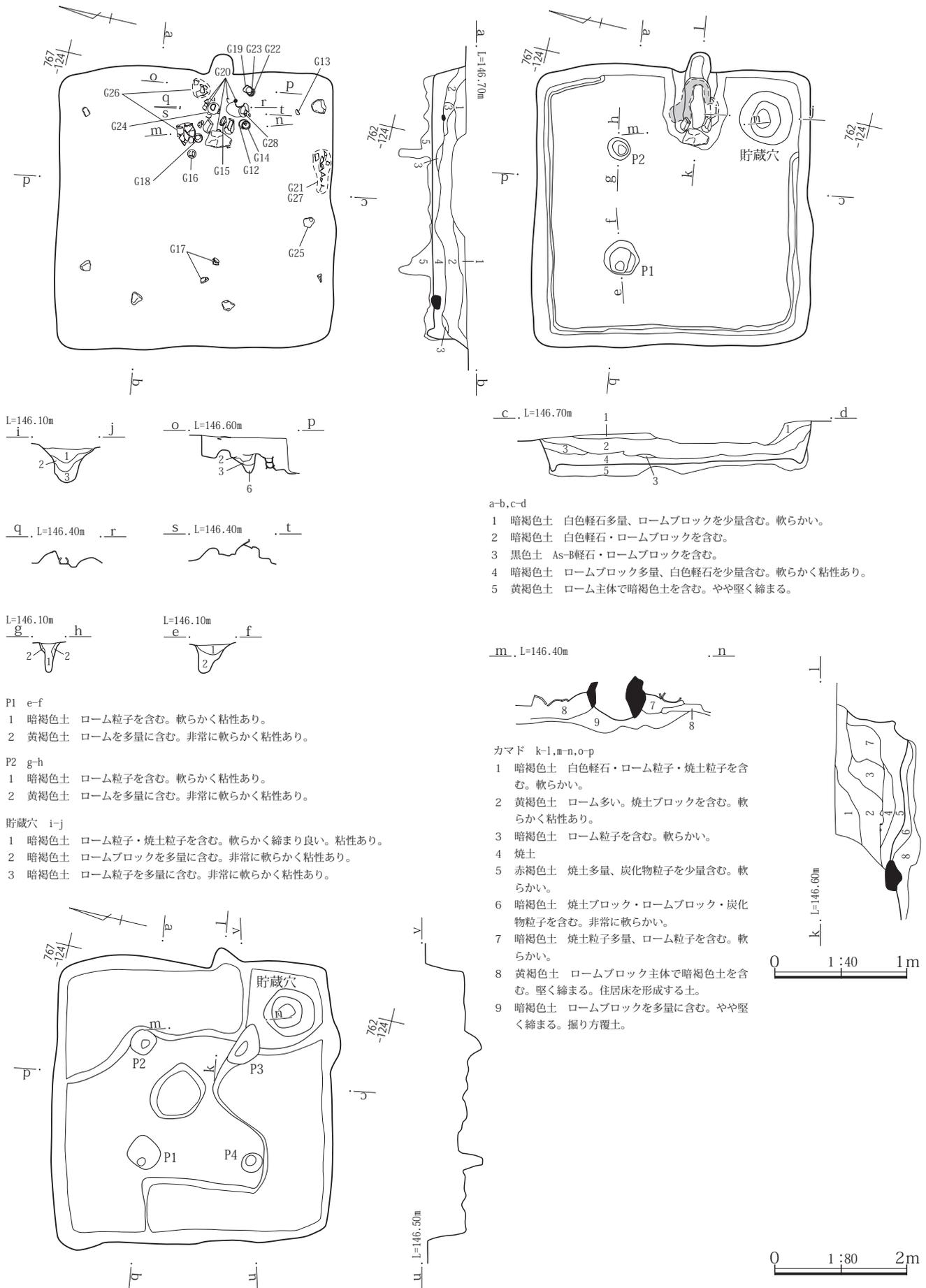
カマド m-n, o-p

- 1 黄褐色土 ローム主体の層。軟らかく粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
- 4 茶褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 5 黄褐色土 ローム主体の層。
- 6 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 7 赤褐色土 焼土多量、ロームブロックを含む。軟らかい。
- 8 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 9 茶褐色土 ロームブロック・粒子を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 10 黄褐色土 ロームを主体として焼けている。やや堅く縮まる。
- 11 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。非常に軟らかく粘性あり。



第88図 G区1住居(2)

第4章 検出された遺構と遺物



- a-b, c-d
- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ロームブロックを少量含む。軟らかい。
 - 2 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。
 - 3 黒色土 As-B軽石・ロームブロックを含む。
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量、白色軽石を少量含む。軟らかく粘性あり。
 - 5 黄褐色土 ローム主体で暗褐色土を含む。やや堅く締まる。

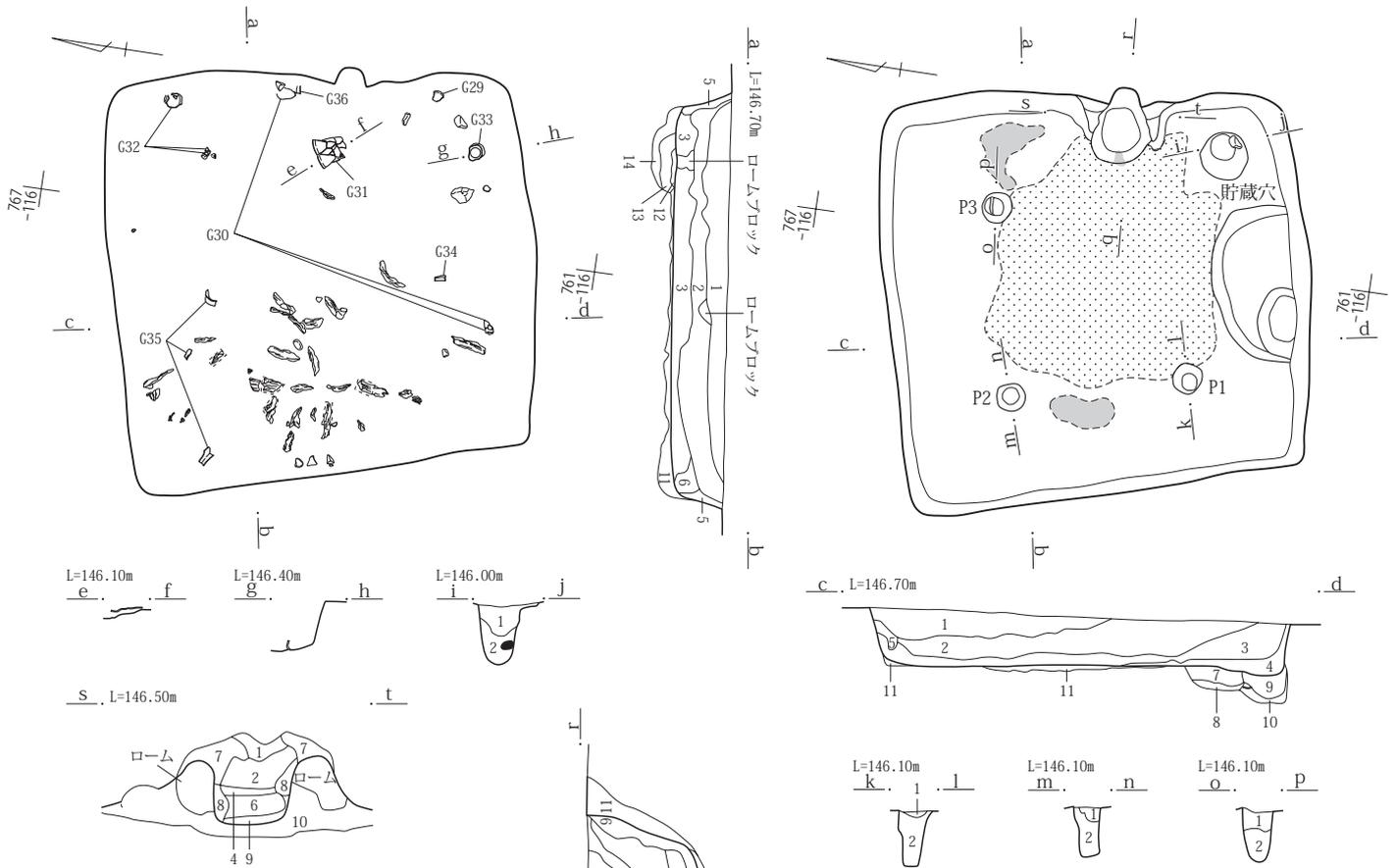
- P1 e-f
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- P2 g-h
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
 - 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 貯蔵穴 i-j
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
 - 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。

- カマド k-l, m-n, o-p
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかい。
 - 2 黄褐色土 ローム多い。焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。
 - 4 焼土
 - 5 赤褐色土 焼土多量、炭化物粒子を少量含む。軟らかい。
 - 6 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。非常に軟らかい。
 - 7 暗褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子を含む。軟らかい。
 - 8 黄褐色土 ロームブロック主体で暗褐色土を含む。堅く締まる。住居床を形成する土。
 - 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや堅く締まる。掘り方覆土。

0 1:40 1m

0 1:80 2m

第89図 G区2住居



カマド q-r, s-t

- 1 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 暗褐色土 炭化物・ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 4 褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 6 褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 7 黄褐色土 ローム主体。軟らかく粘性あり。
- 8 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 9 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。やや堅く締まり粘性あり。
- 11 黄褐色土 ローム主体でやや堅く締まる。

a-b, c-d

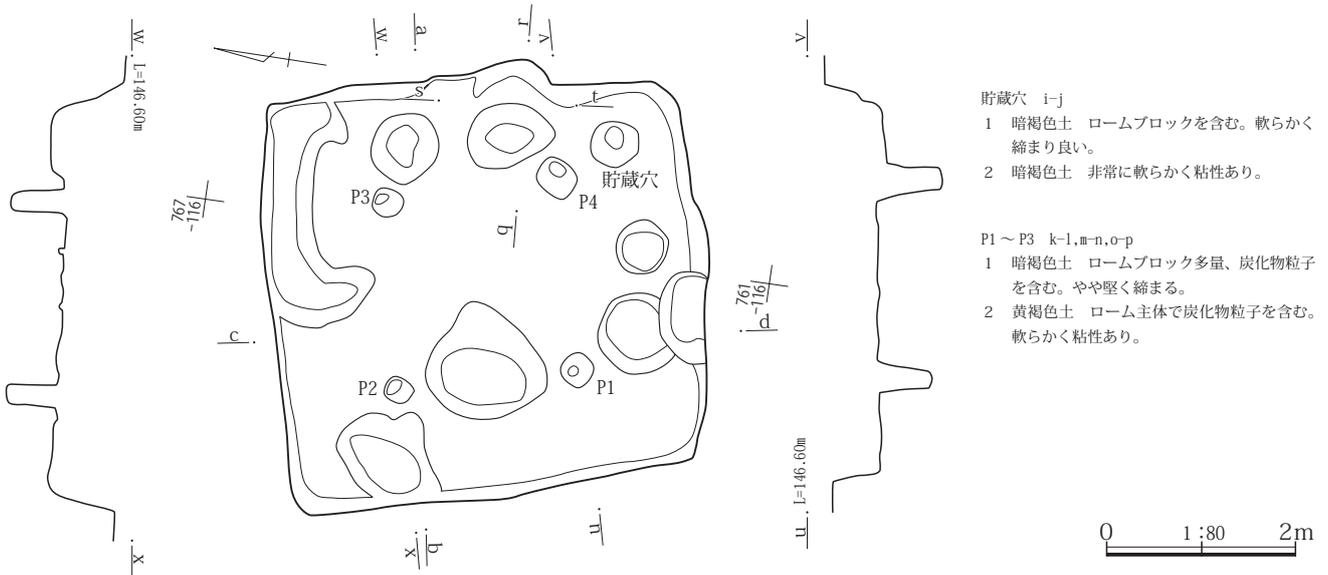
- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ロームブロックを少量含む。やや堅く締まる。
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量、白色軽石を含む。やや堅く締まる。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・炭化物・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 炭化物多量、ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子を含む。軟らかい。
- 7 黄褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子を含む。やや堅く締まり、粘性あり。
- 8 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。
- 9 茶褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 10 茶褐色土 非常に軟らかく粘性あり。
- 11 黄褐色土 床面を形成する土。
- 12 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。やや堅く締まる。
- 13 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。やや堅く締まる。
- 14 茶褐色土 ローム主体で焼土粒子を含む。やや堅く締まる。

貯蔵穴 i-j

- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 非常に軟らかく粘性あり。

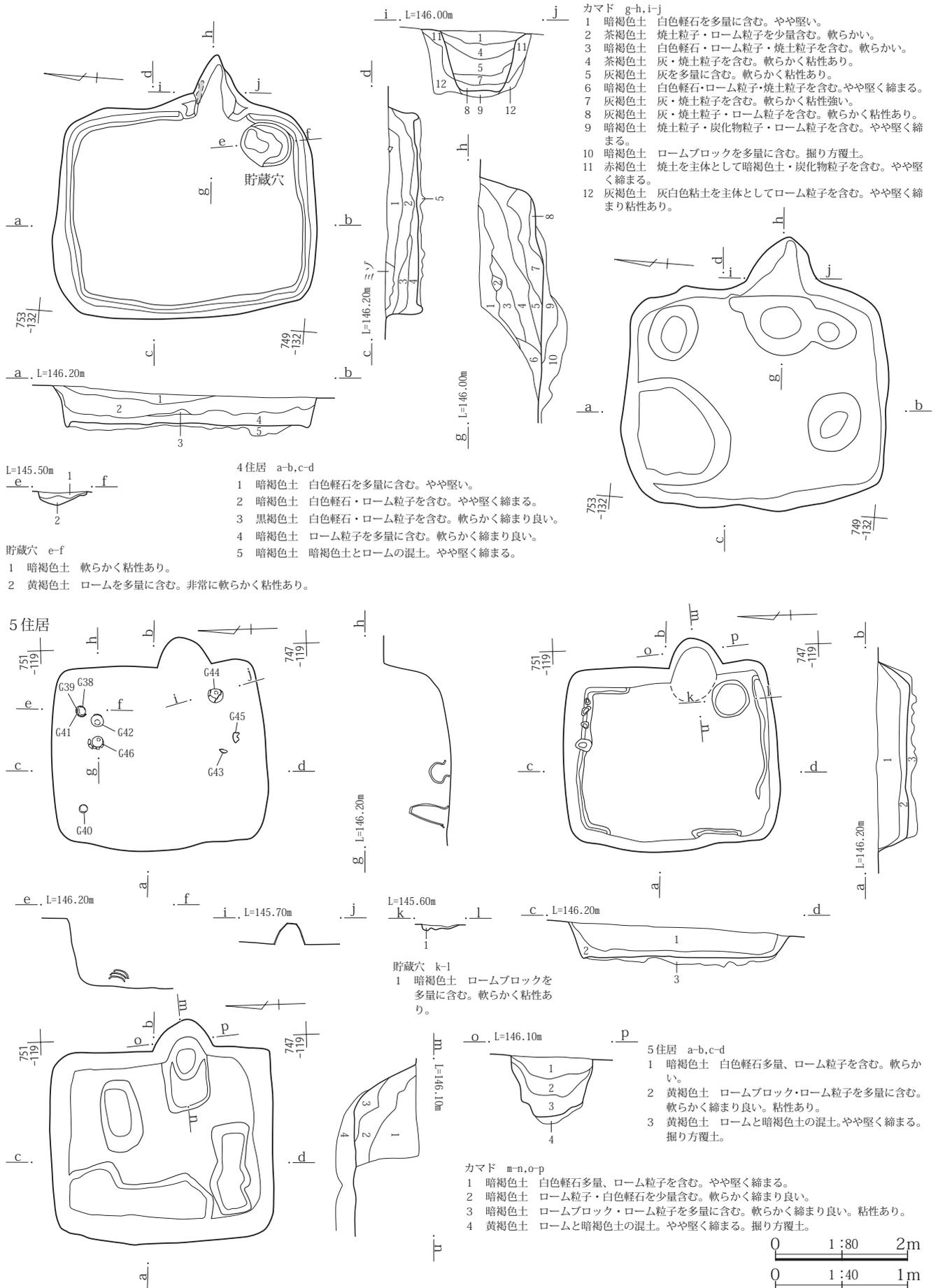
P1 ~ P3 k-l, m-n, o-p

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物粒子を含む。やや堅く締まる。
- 2 黄褐色土 ローム主体で炭化物粒子を含む。軟らかく粘性あり。

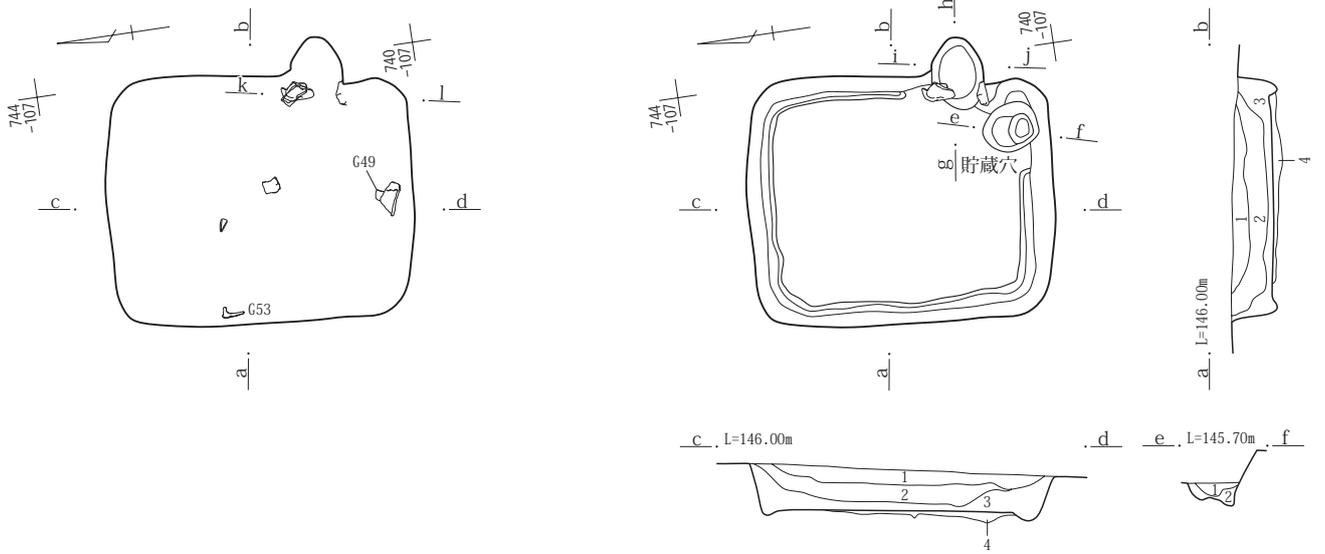


第90図 G区3住居

第4章 検出された遺構と遺物



第91図 G区4・5住居



a-b, c-d

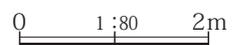
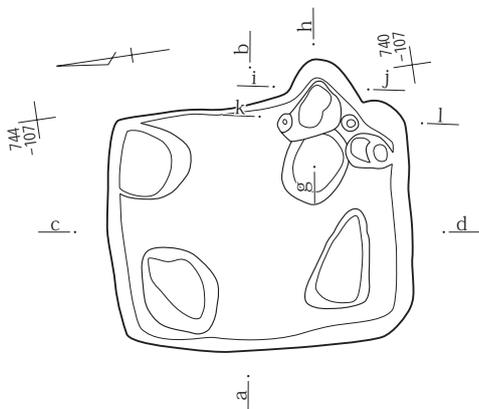
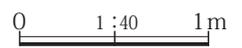
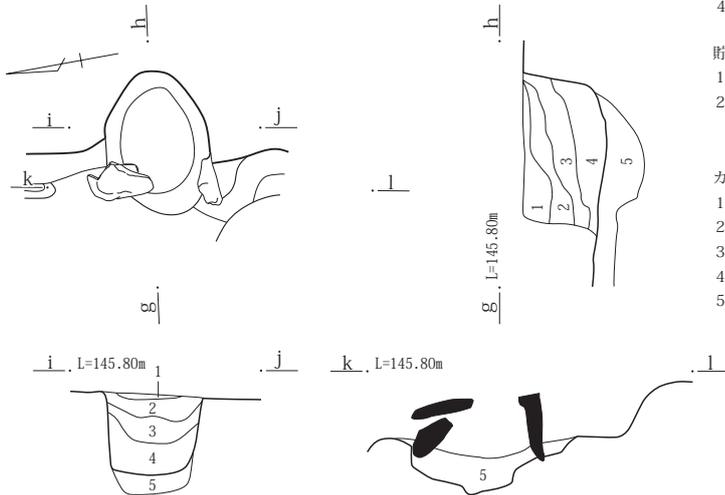
- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む。やや堅い。
- 2 黒褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかい。
- 3 茶褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 4 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。やや堅く締まる。掘り方覆土。

貯蔵穴 e-f

- 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物を含む。非常に軟らかく粘性あり。

カマド g-h, i-j

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・茶褐色土ブロックを含む。やや堅く締まる。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。やや堅く締まる。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土の混土。やや堅く締まる。掘り方覆土。

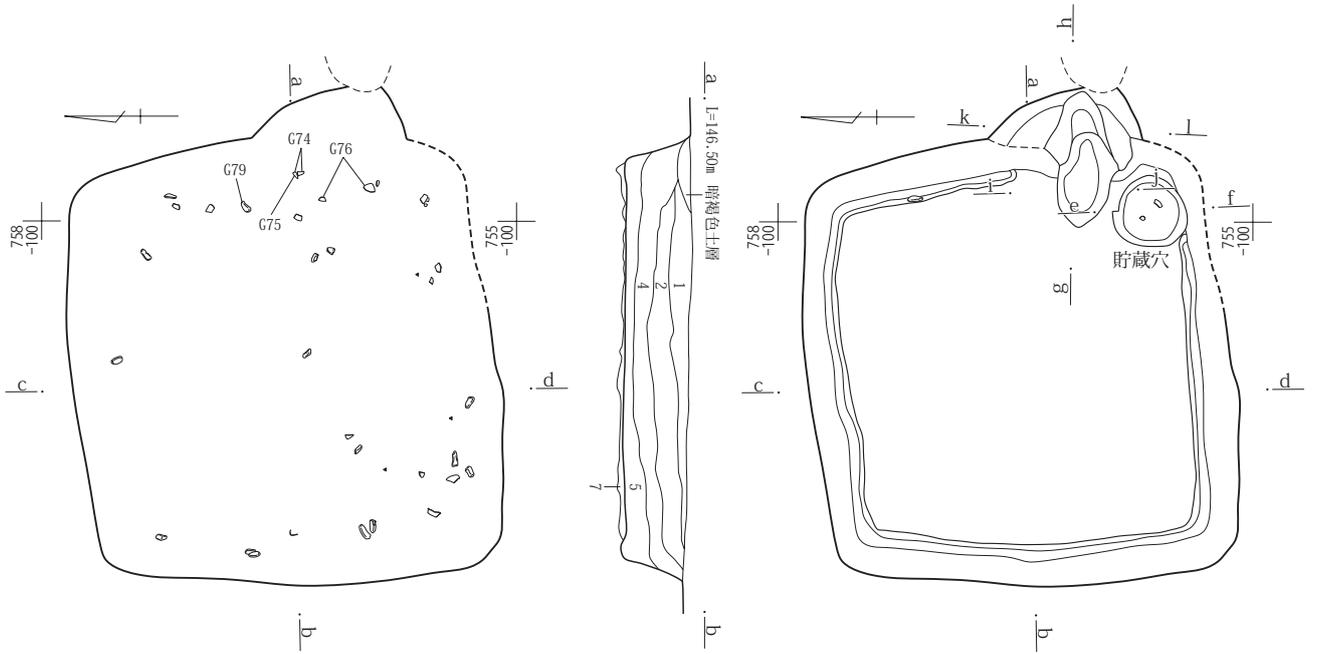


第92図 G区6住居

第4章 検出された遺構と遺物

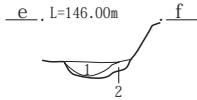


第93図 G区7住居



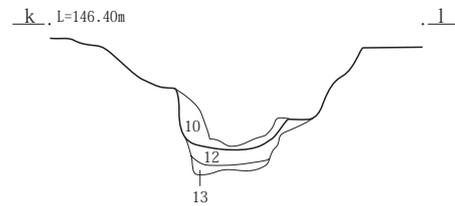
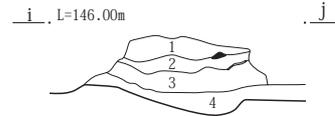
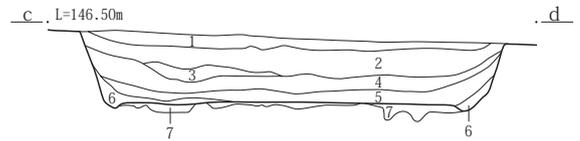
a-b, c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石を多量に含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。軟らかい。
- 4 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 6 黄褐色土 ロームを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 7 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。やや堅く締まる。掘り方覆土。



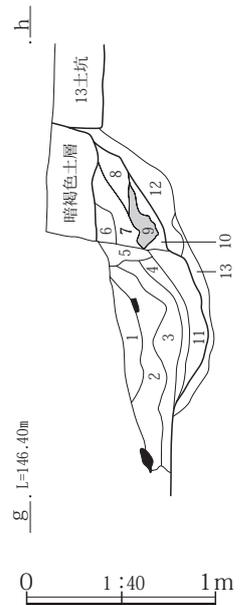
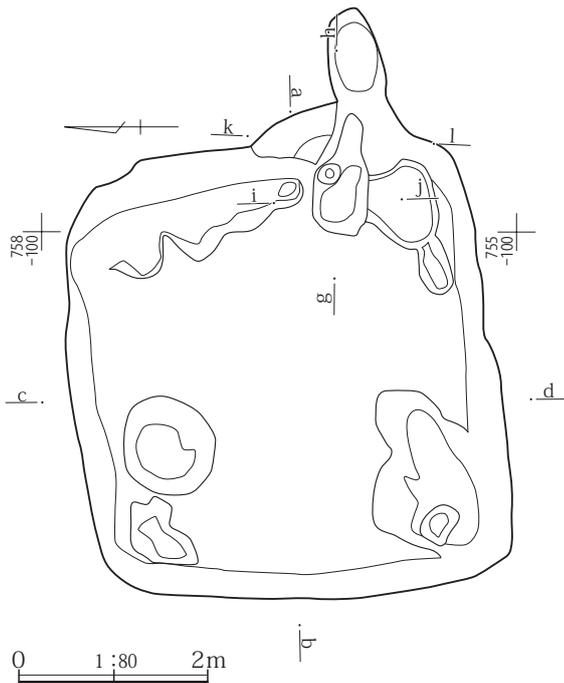
貯蔵穴 e-f

- 1 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 黄褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。



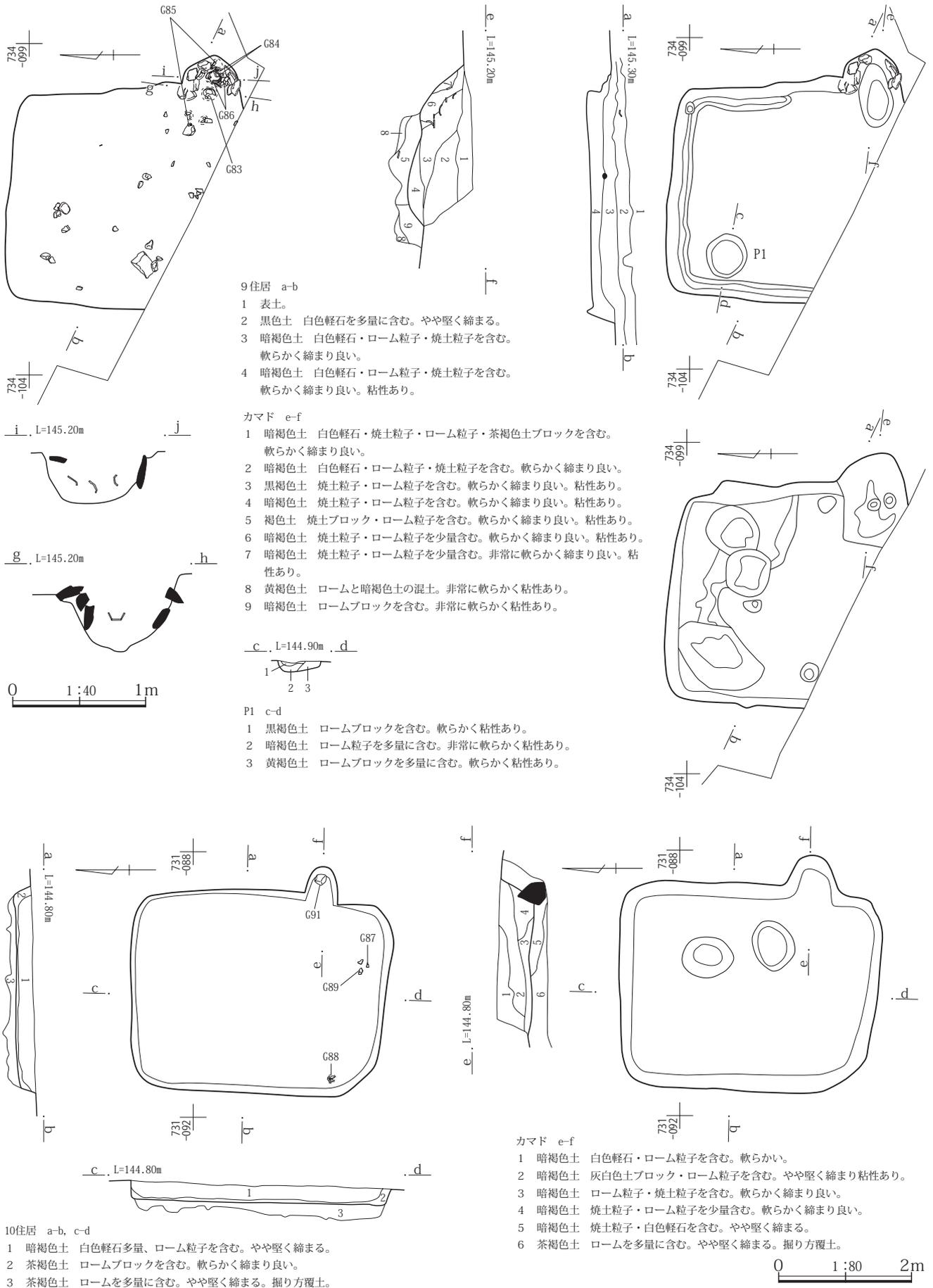
カマド g-h, i-j, k-l

- 1 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 焼土を多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 5 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。非常に軟らかい。
- 6 灰褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。やや堅く締まる。
- 7 褐色土 焼土ブロック多量、白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 8 暗赤褐色土 焼土主体。軟らかく粘性あり。
- 9 焼土
- 10 灰褐色土 灰を主体に焼土を含む。非常に軟らかく粘性あり。
- 11 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 12 灰褐色土 灰・焼土粒子・ローム粒子を含む。非常に軟らかい。
- 13 黄褐色土 ローム主体の層。やや堅く締まる。掘り方覆土。

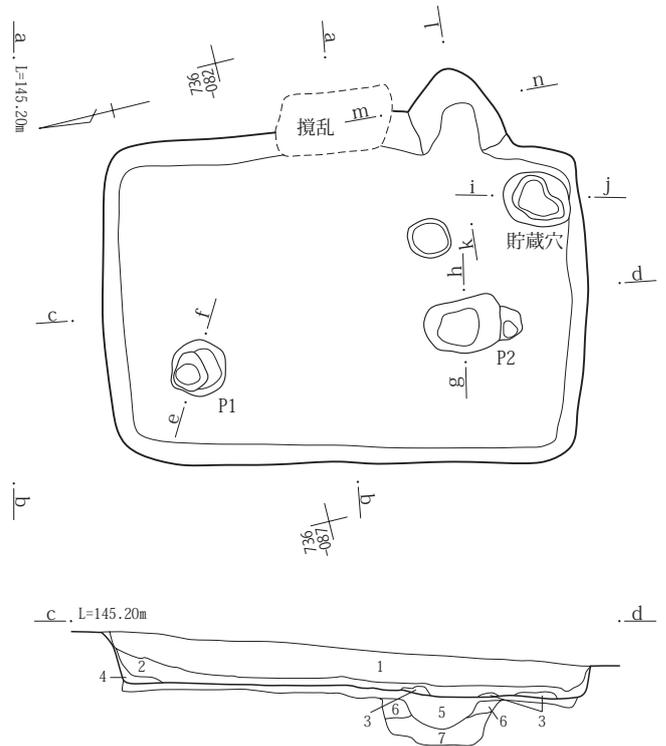
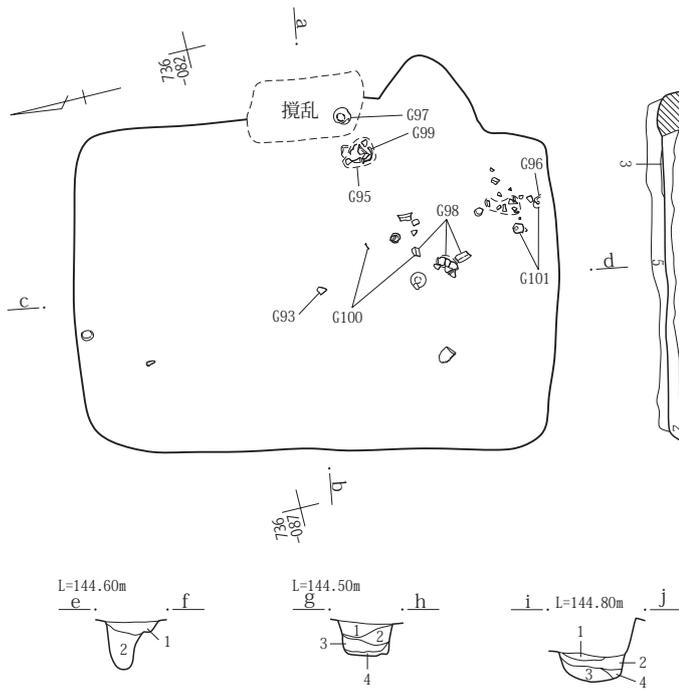


第94図 G区8住居

第4章 検出された遺構と遺物



第95図 G区9・10住居



a-b, c-d

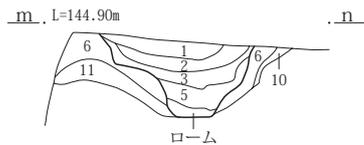
- 1 暗褐色土 白色軽石多量、茶褐色土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 4 茶褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 黄褐色土 ローム主体で暗褐色土を含む。やや堅く締まる。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。やや堅く締まり粘性あり。
- 7 暗褐色土 白色軽石・黒色土を含む。軟らかくて締まり良い。粘性あり。

貯蔵穴 i-j

- 1 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを少量含む。非常に軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかい。
- 3 暗褐色土 軟らかく粘性あり。
- 4 茶褐色土 ロームを含む。軟らかく粘性あり。

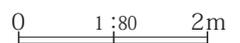
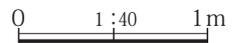
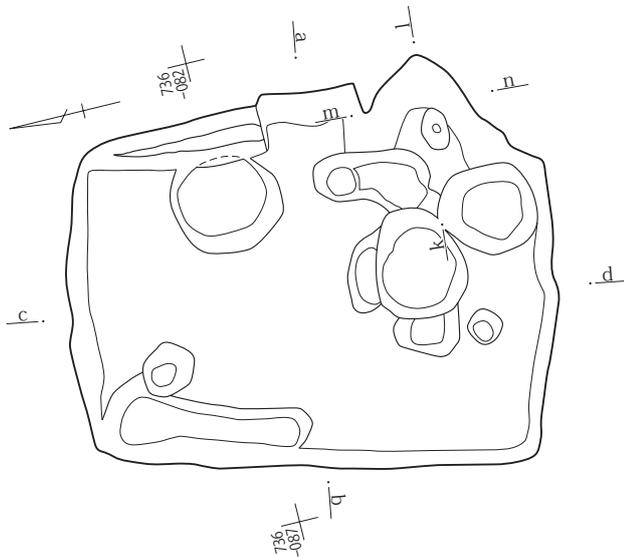
P1・P2 e-f, g-h

- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかい。
- 2 黄褐色土 ローム主体。焼土を少量含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 茶褐色土 非常に軟らかく粘性あり。



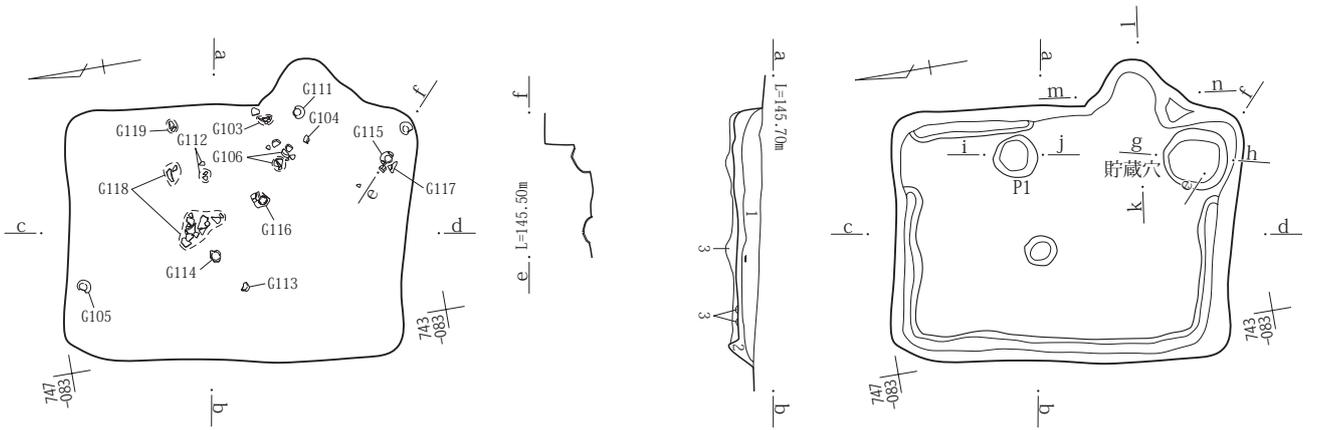
カマド k-1, m-n

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・茶褐色土を含む。
- 2 黄褐色土 ローム多量、焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 4 焼土 わずかにロームを含む。
- 5 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。軟らかい。
- 6 褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。
- 7 焼土
- 8 茶褐色土 焼土粒子を多量に含む。非常に軟らかい。
- 9 黄褐色土 やや堅く締まる。掘り方覆土。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石・焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 11 黄褐色土 ローム層。地山。



第96図 G区11住居

第4章 検出された遺構と遺物



a-b, c-d

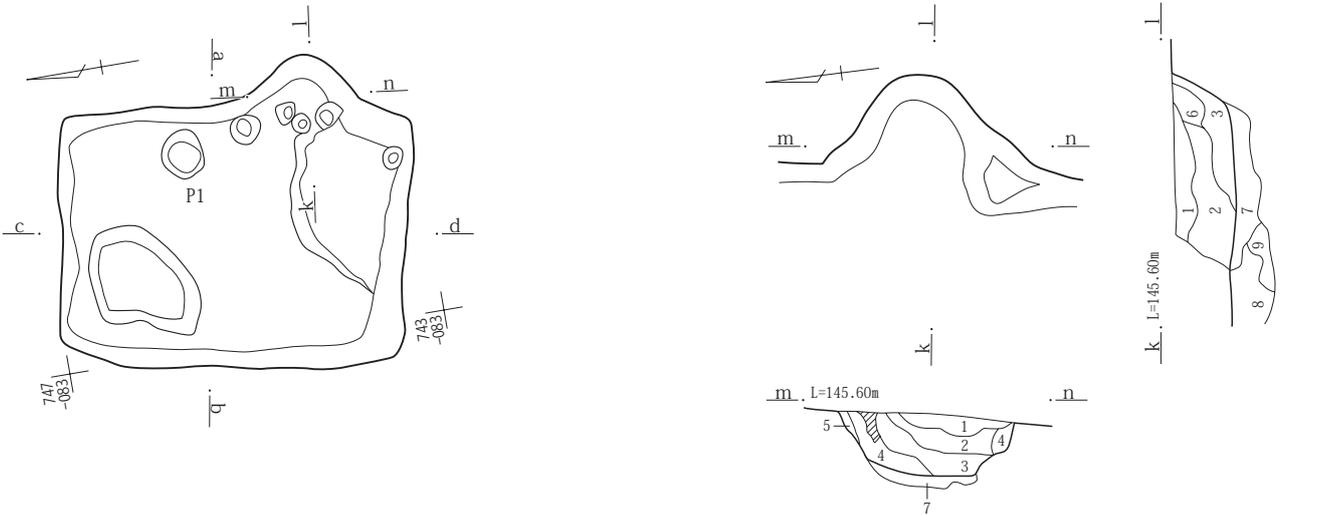
- 1 暗褐色土 白色軽石多量、茶褐色土ブロックを含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・茶褐色土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量、白色軽石を含む。やや堅く締まる。
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体。軟らかく粘性あり。

貯蔵穴 g-h

- 1 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを少量含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく粘性あり。

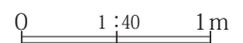
P1 i-j

- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 2 黄褐色土 ロームを多量を含む。軟らかく粘性あり。

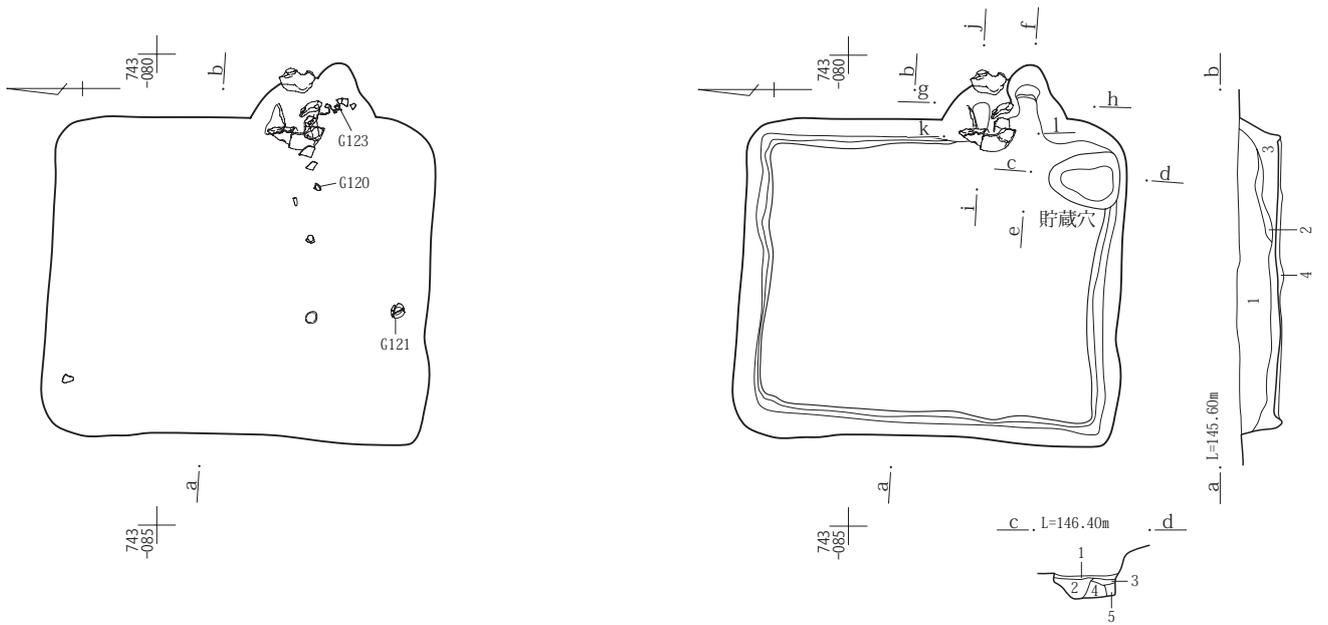


カマド k-l, m-n

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロック・焼土粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 3 茶褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 4 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 6 赤褐色土 焼土多量、ローム粒子を含む。やや堅く締まる。
- 7 褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 8 暗褐色土 ロームブロック多量、白色軽石を含む。やや堅く締まる。掘り方覆土。
- 9 黄褐色土 ロームブロック主体。軟らかく粘性あり。掘り方覆土。



第97図 G区12住居

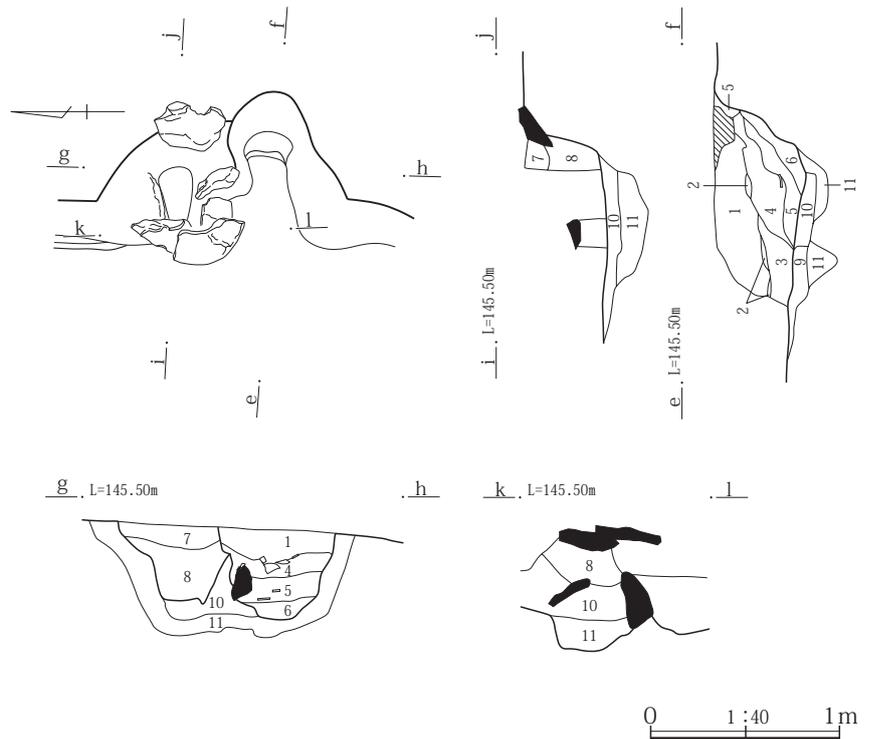


a-b

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、茶褐色土ブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む。やや堅い。
- 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 3 茶褐色土 ローム粒子を多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体。やや堅く締まる。掘り方覆土。

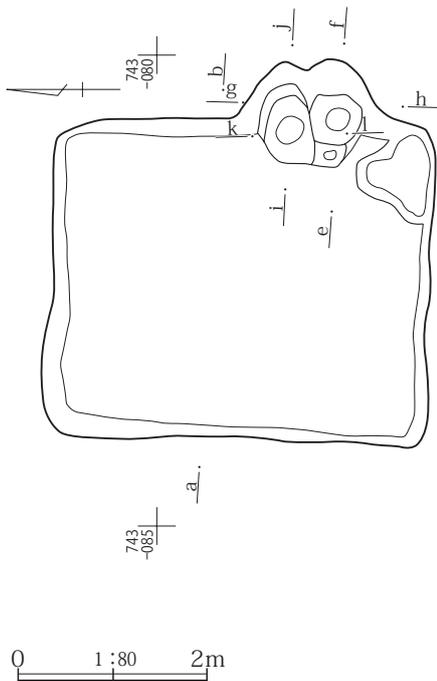
貯蔵穴 c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子を含む。やや堅く締まる。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土ブロックを少量含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 3 黒色土 白色軽石を含む。やや堅く締まる。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。



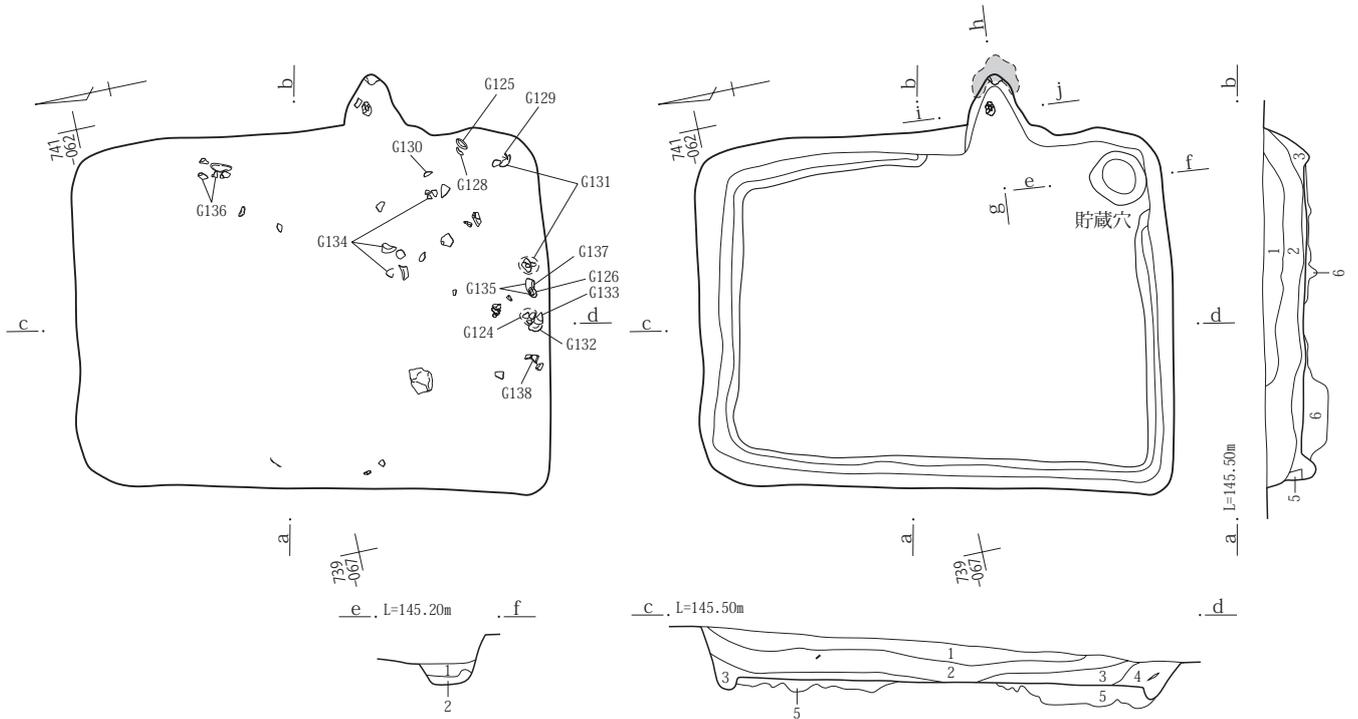
カマド e-f, g-h, i-j, k-l

- 1 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 灰
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少量含む。やや堅く締まる。
- 4 褐色土 焼土ブロック・焼土粒子を多量に含む。やや堅く締まり粘性あり。
- 5 赤褐色土 焼土を多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 6 褐色土 焼土粒子を多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 7 暗褐色土 白色軽石を多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 8 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 9 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。やや堅く締まる。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。非常に軟らかく締まり良い。
- 11 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを含む。軟らかく粘性あり。



第98図 G区13住居

第4章 検出された遺構と遺物

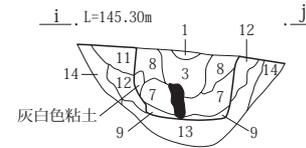
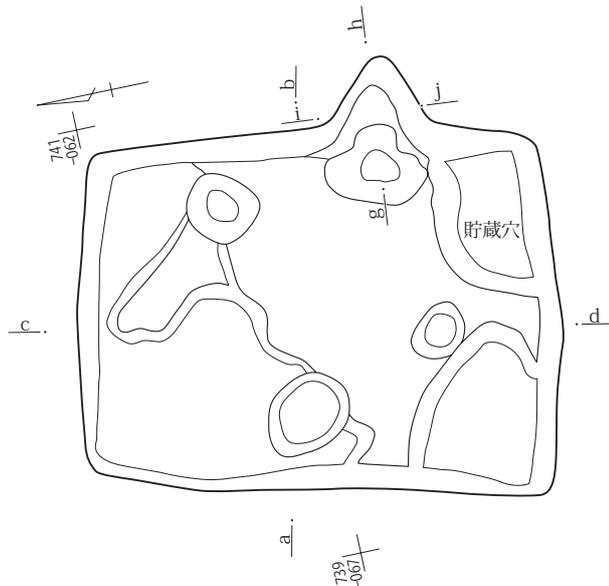
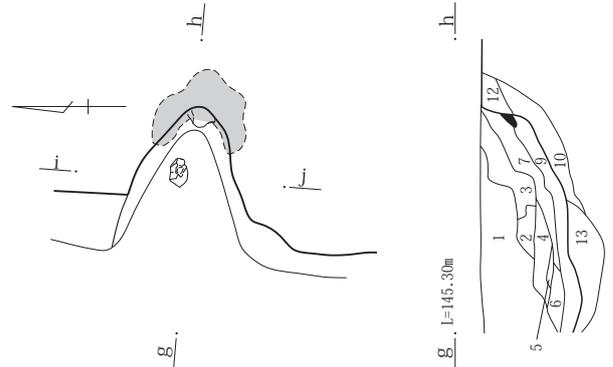


a-b,c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、茶褐色土ブロックを含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 3 暗褐色土 茶褐色土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。やや堅く締まり粘性あり。
- 4 暗褐色土 焼土・炭化物粒子・ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 5 暗褐色土 軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 6 暗褐色土 暗褐色土とロームの混土。やや堅く締まる。

貯蔵穴 e-f

- 1 暗褐色土 焼土粒子・ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ロームを多量に含む。非常に軟らかく粘性あり。



カマド g-h, i-j

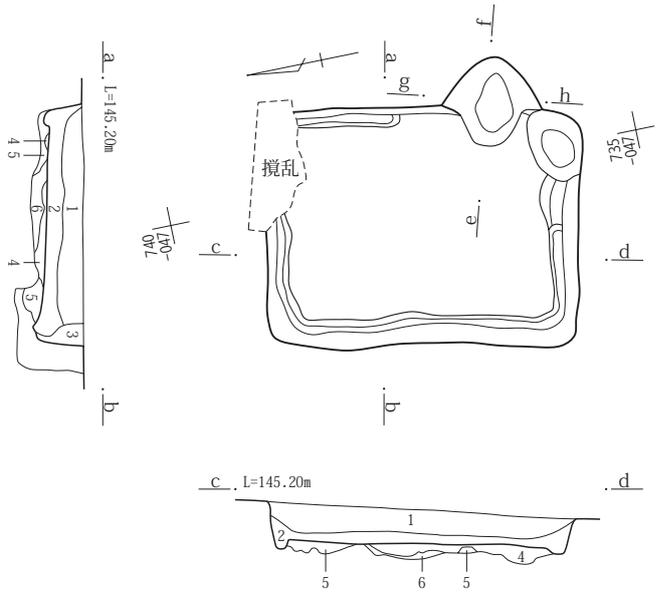
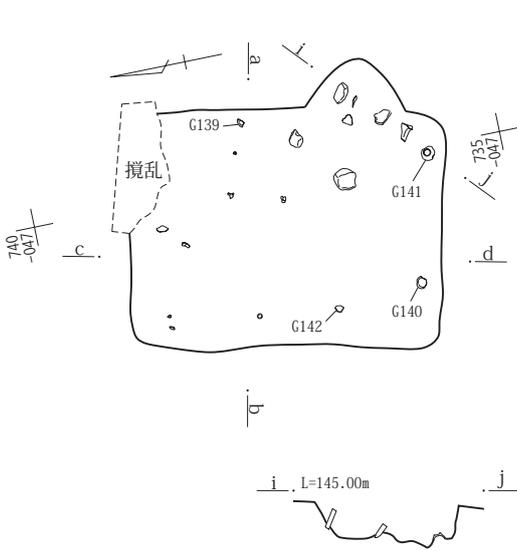
- 1 灰褐色土 白色軽石・ローム粒子・焼土粒子・灰白色土ブロックを含む。やや堅く締まる。
- 2 灰褐色土 灰を含む。やや堅く締まる。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・灰を含む。軟らかい。
- 5 灰 軟らかい。
- 6 暗褐色土 焼土粒子を含む。やや堅く締まり粘性あり。
- 7 赤褐色土 焼土を多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 8 暗褐色土 炭化物・焼土ブロック・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 9 灰白色土 灰白色粘土を主体に焼土粒子を含む。軟らかく粘性あり。
- 10 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 11 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。やや堅く締まる。
- 12 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 13 暗褐色土 灰白色粘土・焼土粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 14 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を少量含む。やや堅く締まる。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

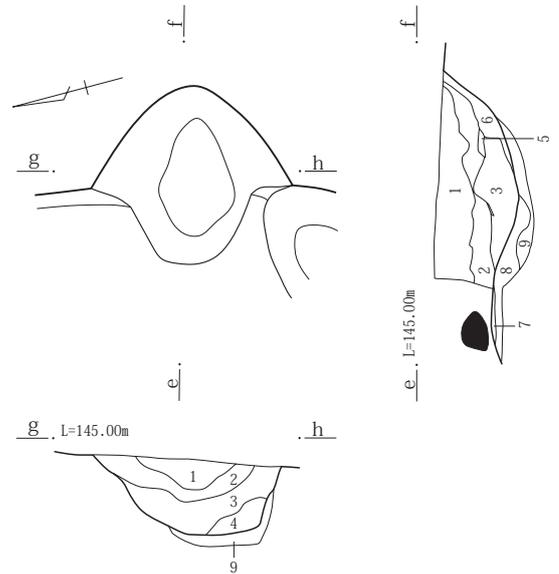
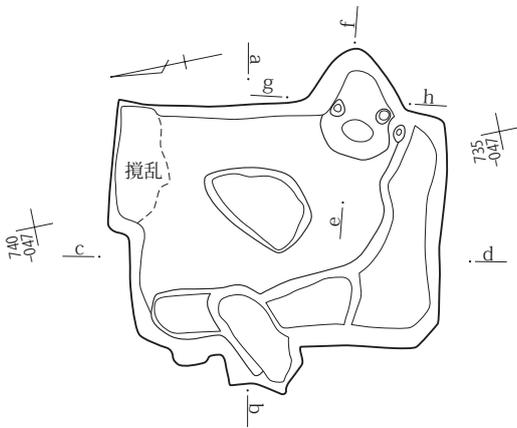
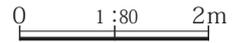
第99図 G区14住居

遺構図 (G区)



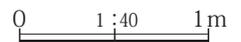
a-b, c-d

- 1 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 2 暗褐色土 茶褐色土ブロック・ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 4 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。やや堅く締まる。
- 5 黄褐色土 暗褐色土とロームの混土。
- 6 黄褐色土 ローム主体。

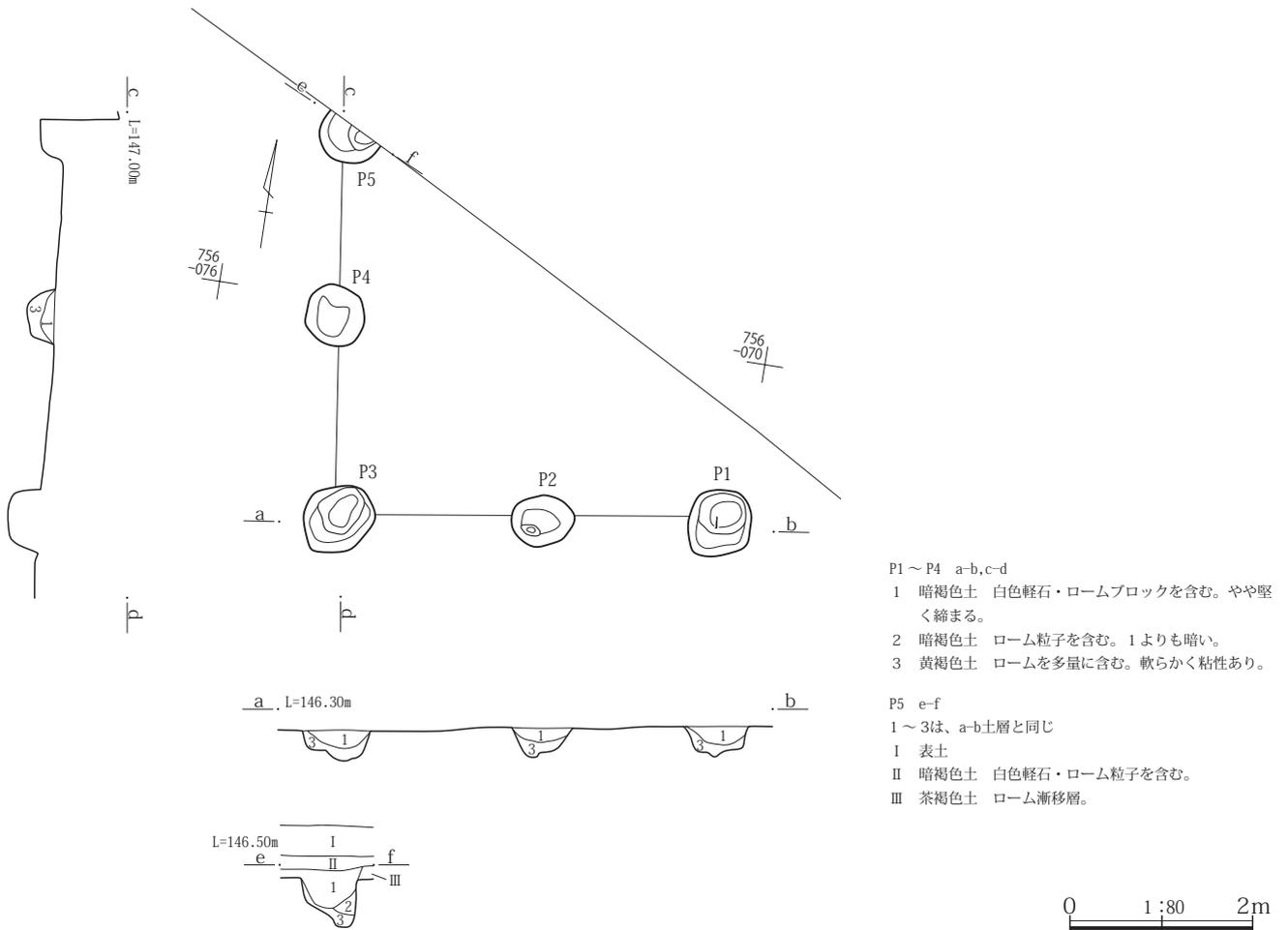
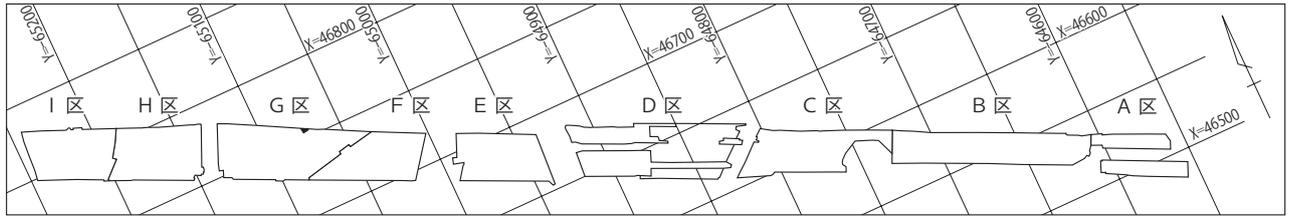


カマド e-f, g-h

- 1 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量、白色軽石・焼土粒子を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を少量含む。軟らかい。
- 3 褐色土 焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 5 灰褐色土 灰を多量に含む。焼土粒子を含む。
- 6 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- 7 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・白色軽石を含む。堅く締まる。
- 8 黄褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
- 9 黄褐色土 ローム主体。やや堅い。



第100図 G区15住居



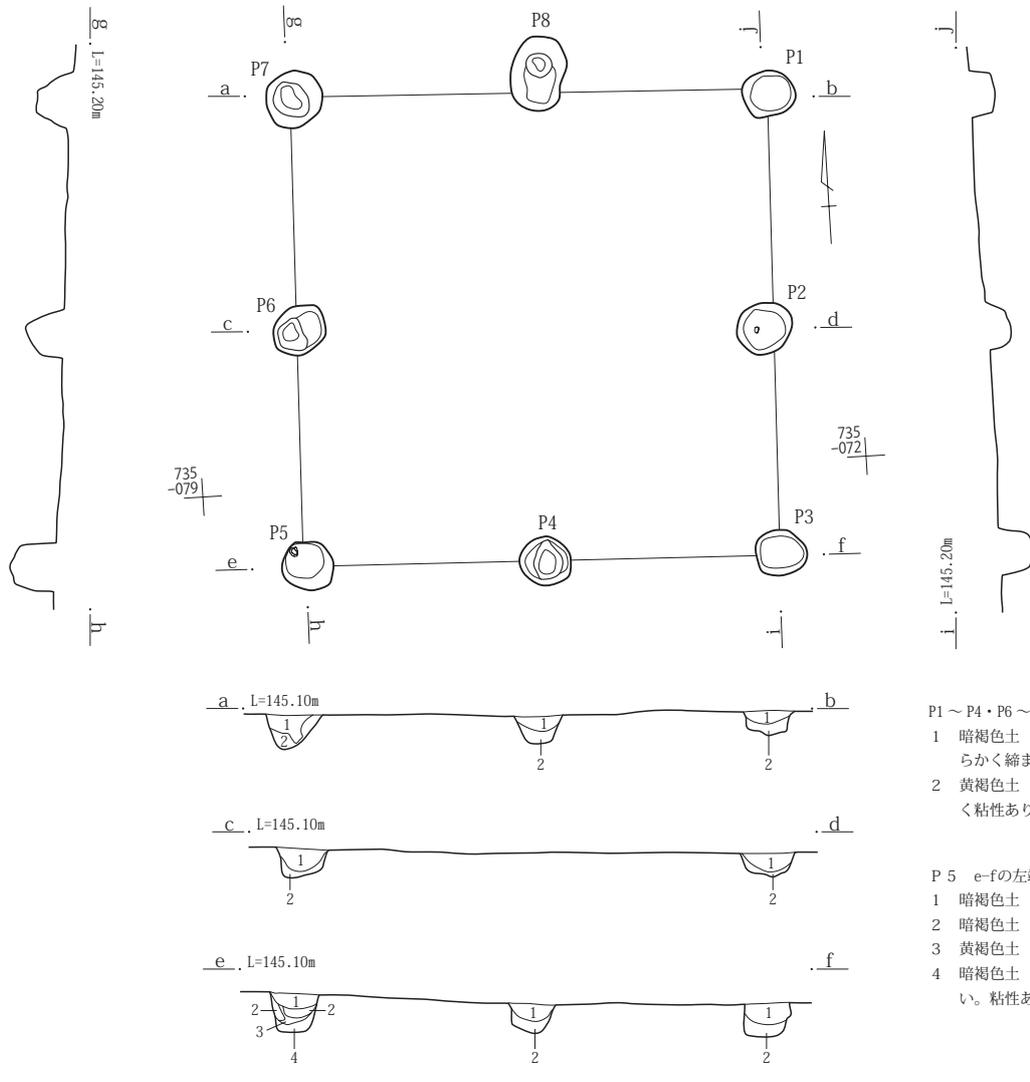
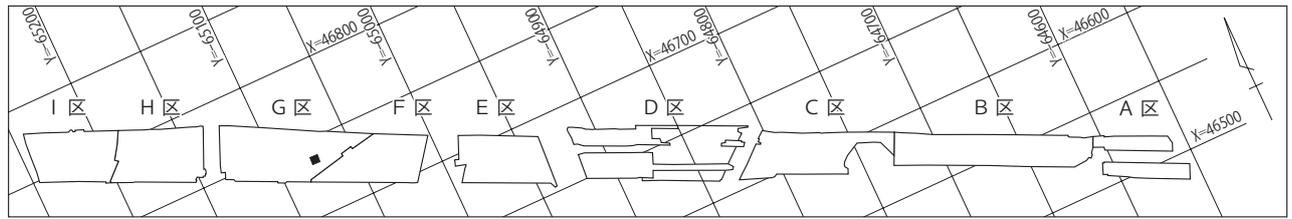
- P1 ~ P4 a-b, c-d
- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。やや堅く締まる。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。1 よりも暗い。
 - 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- P5 e-f
- 1 ~ 3は、a-b土層と同じ
 - I 表土
 - II 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。
 - III 茶褐色土 ローム漸移層。

第101図 G区1掘立柱建物

第24表 G区1掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×一間		長軸方位N-5°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁立柱間 cm	梁立柱間 cm	規模				
				番号	上ノcm長径×短径	下ノcm長径×短径	深さcm	備考
	P1-P3 : 417	P3-P4 : 211	P1-P2 : 213	1	81×74	36×27	43	
				2	69×55	9×6	38	
				3	86×72	40×20	39	
				4	70×65	46×37	28	
				5	—	—	—	
			P2-P3 : 206					

※1 計測値は1/20原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は芯々で計測



- P1 ~ P4・P6 ~ P8 a-b,c-d,e-f
- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。
 - 2 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。軟らかく粘性あり。
- P5 e-fの左端
- 1 暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかい。
 - 3 黄褐色土 ローム主体。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子を含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

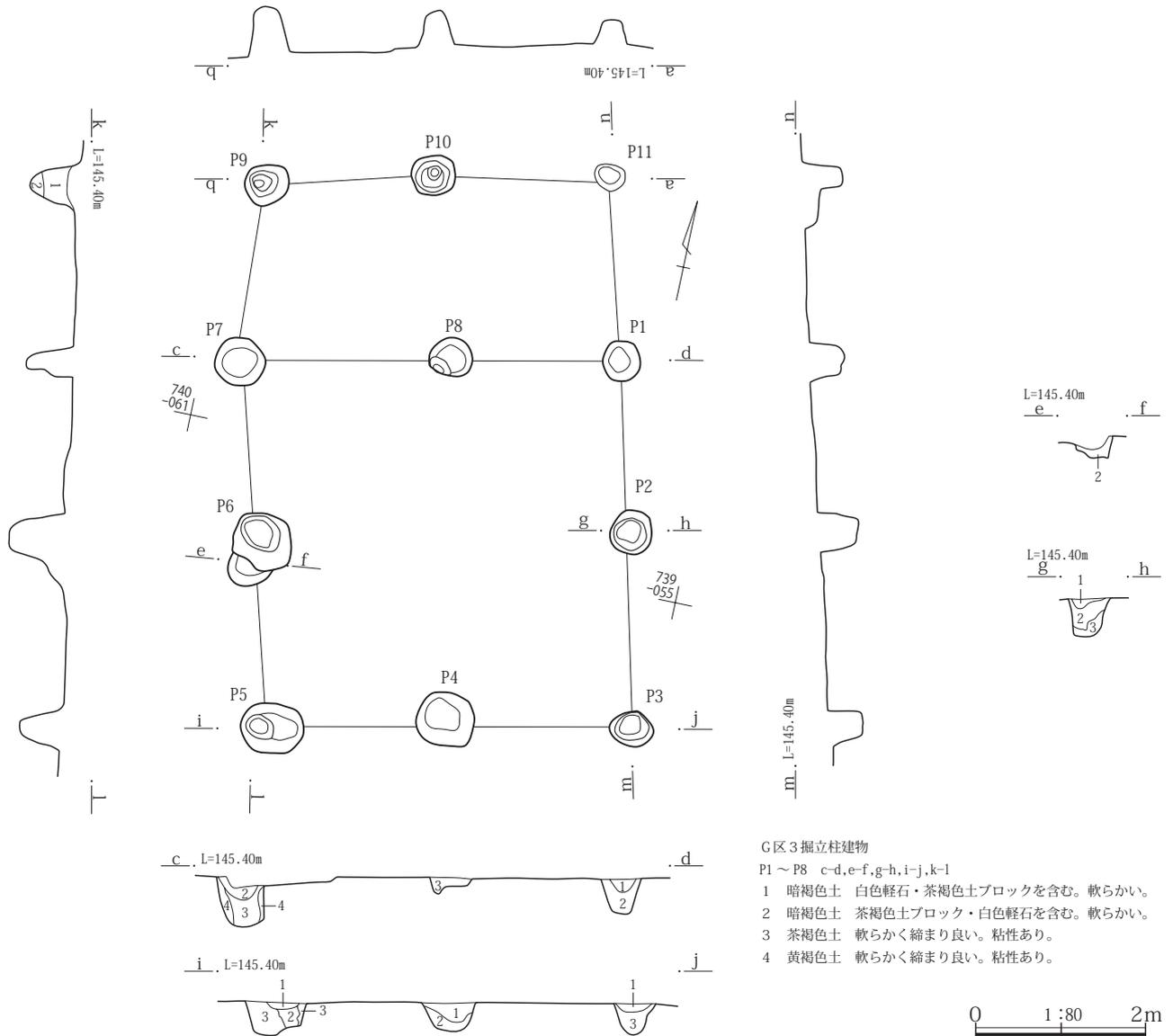
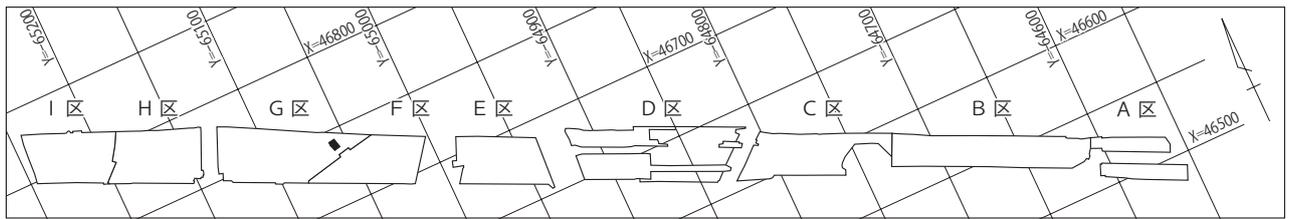


第102図 G区2掘立柱建物

第25表 G区2掘立柱建物計測表

平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位N-3°-E				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	規模				
				番号	上バcm長径×短径	下バcm長径×短径	深さcm	備考
P1-P3 : 488	P1-P7 : 506	P1-P2 : 251	P1-P8 : 245	1	56×53	43×38	28	
P8-P4 : 530	P2-P6 : 500	P2-P3 : 237	P8-P7 : 266	2	60×53	43×42	24	
P7-P5 : 490	P3-P5 : 502	P7-P6 : 249	P3-P4 : 248	3	54×49	46×34	37	
		P6-P5 : 242	P4-P5 : 256	4	55×52	26×17	33	
				5	56×52	40×37	47	
				6	61×49	19×16	37	
				7	61×59	28×15	42	
				8	79×55	15×10	52	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は芯々で計測



G区3掘立柱建物

P1～P8 c-d, e-f, g-h, i-j, k-l

- 1 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロックを含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 茶褐色土ブロック・白色軽石を含む。軟らかい。
- 3 茶褐色土 軟らかく締めり良い。粘性あり。
- 4 黄褐色土 軟らかく締めり良い。粘性あり。

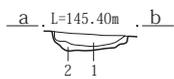
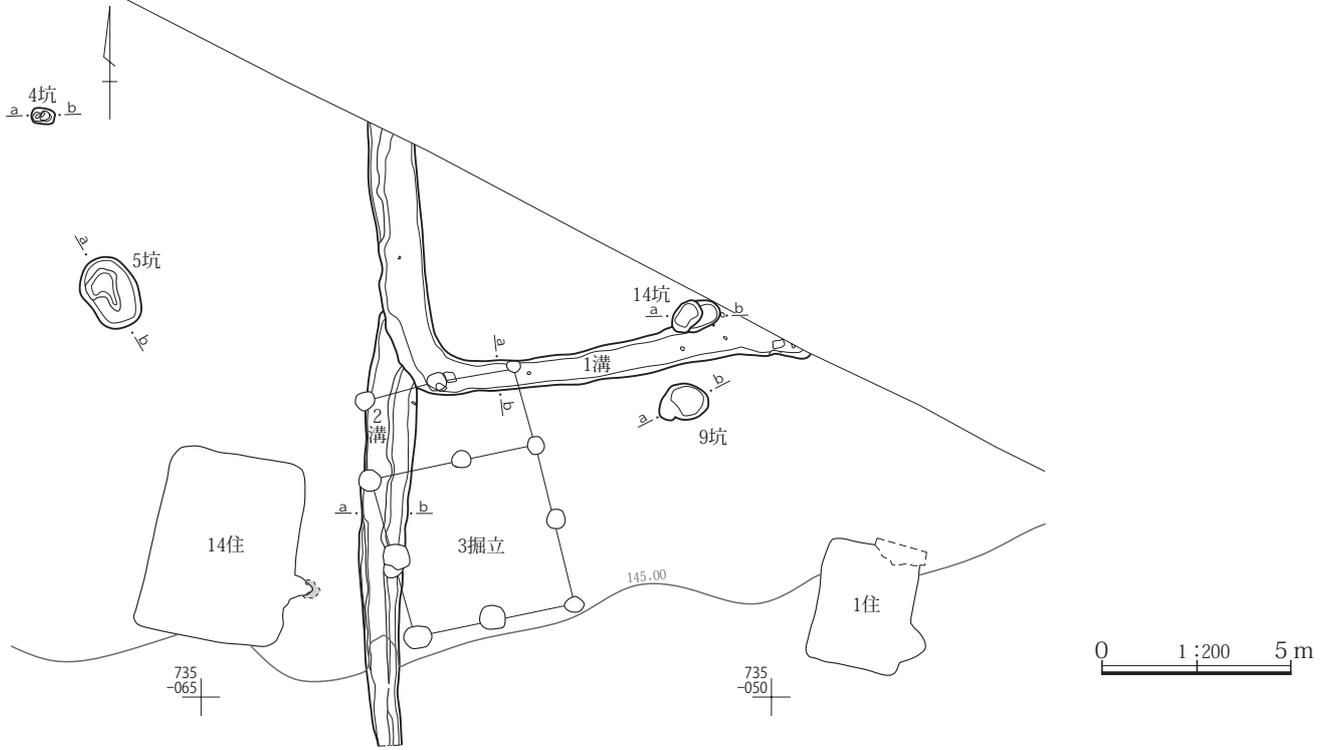
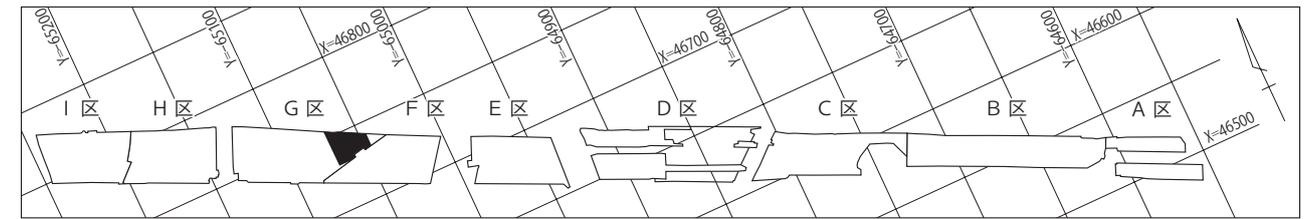
第103図 G区3掘立柱建物

第26表 G区3掘立柱建物計測表

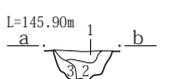
平面形 長方形		規模 3間×2間		長軸方位N-12°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁立柱間 cm	梁立柱間 cm	規模				
				番号	上バcm長径×短径	下バcm長径×短径	深さcm	備考
P11-P3 : 651	P11-P9 : 410	P11-P1 : 220	P11-P10 : 204	1	48×44	30×25	42	
P10-P4 : 642	P1-P7 : 445	P1-P2 : 203	P10-P9 : 206	2	52×49	29×26	47	
P9-P5 : 640	P2-P6 : 433	P2-P3 : 229	P1-P8 : 212	3	52×42	28×24	42	
	P3-P5 : 435	P10-P8 : 233	P8-P7 : 233	4	73×69	44×34	48	
		P8-P4 : 409	P3-P4 : 220	5	75×59	26×17	53	
		P9-P7 : 211	P4-P5 : 215	6	92×74	39×27	74	
		P7-P6 : 204		7	58×56	42×35	64	
		P6-P5 : 229		8	50×48	14×8	29	
				9	53×48	11×9	61	15P
				10	53×52	9×9	45	
				11	37×30	25×18	49	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値

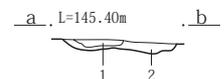
※2 柱穴間の距離は芯々で計測



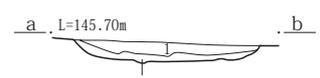
- 1 溝
 1 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかい。
 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。



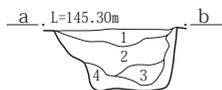
- 4 土坑
 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかい。
 2 暗褐色土 茶褐色土ブロック多量、白色軽石を含む。軟らかい。
 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。やや堅く締まる。



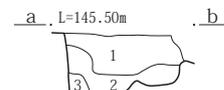
- 2 溝
 1 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を少量含む。軟らかい。
 2 茶褐色土 ローム粒子を含む。軟らかい。



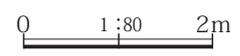
- 5 土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく粘性あり。
 2 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。



- 9 土坑
 1 暗褐色土 白色軽石・茶褐色土ブロックを含む。軟らかく締まり弱い。
 2 黒褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。軟らかい。
 3 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。軟らかく締まり良い。
 4 暗褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。



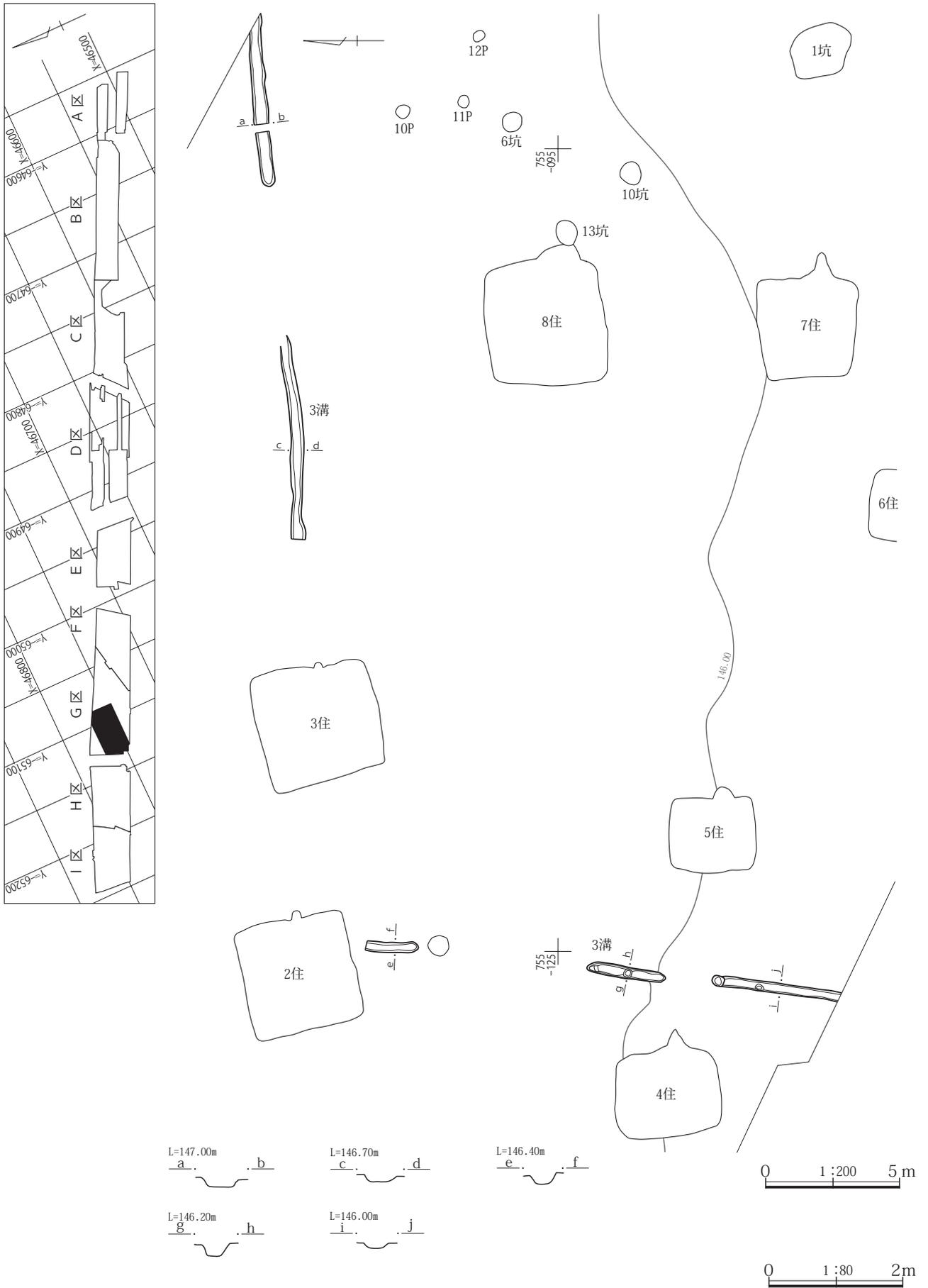
- 14 土坑
 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。やや堅い。
 2 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。軟らかく粘性あり。
 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。やや堅く粘性あり。



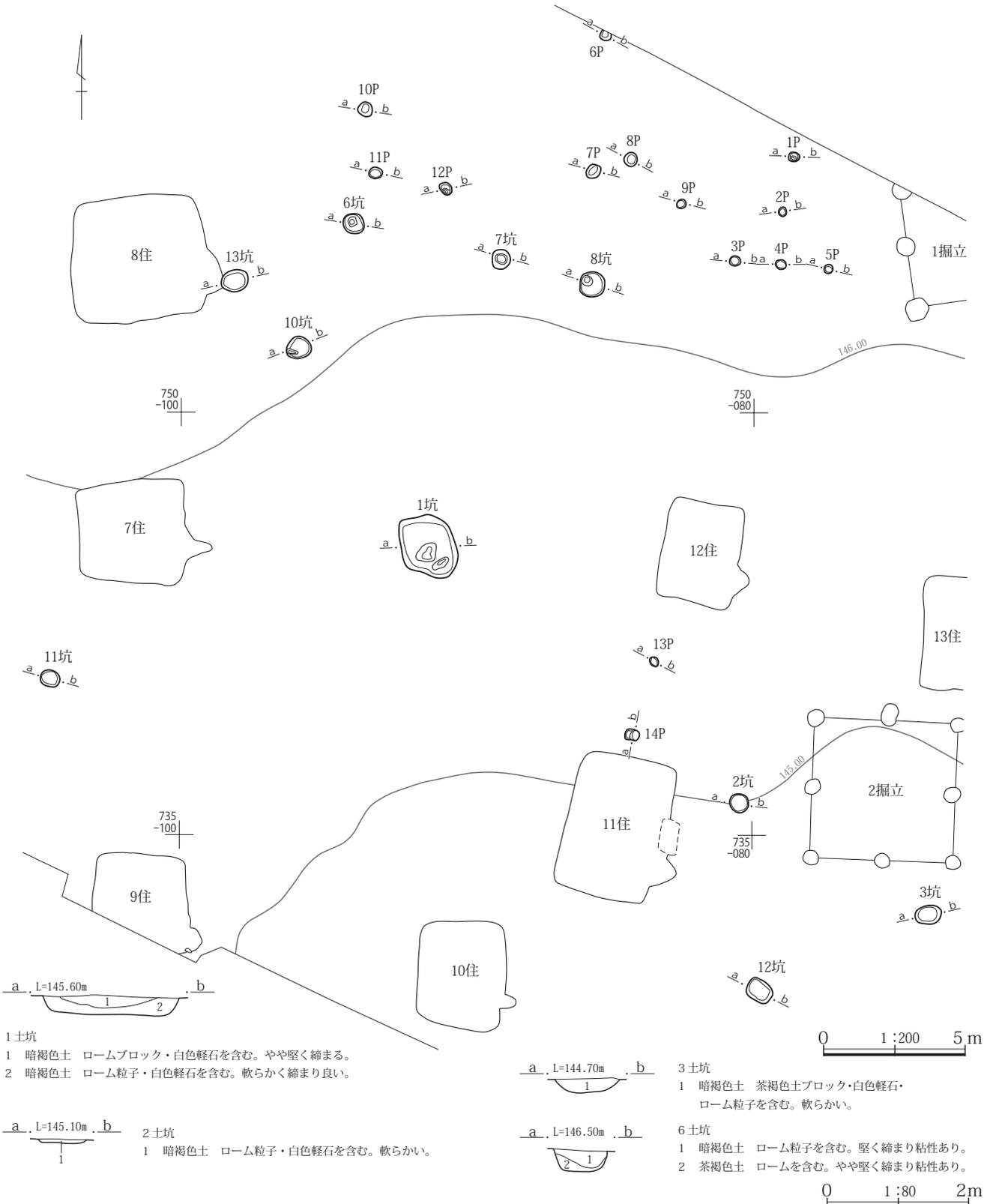
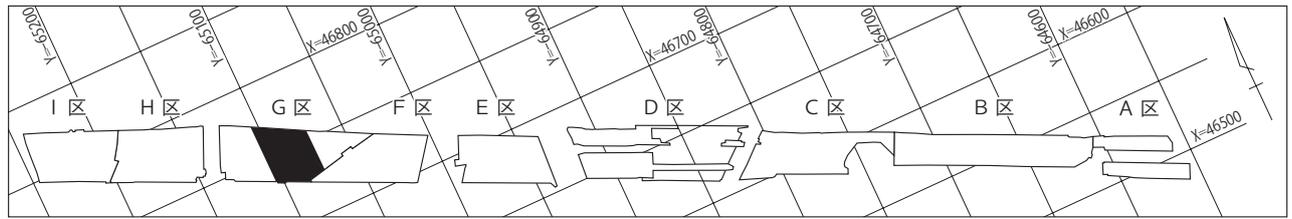
第104図 G区1・2溝、4・5・9・14土坑

第27表 G区溝計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長さ・幅・深さ(m・cm・cm)	遺物登録	覆土	破片	時期・時代	備考
1	溝	G	1	743～750-049～060	1溝→14坑, 3掘立と重複	17.48・36-129・5-27			土師器7, 須恵器4, 須恵器1	平安	須恵器囊体部片1, 須恵器杯底部1, 外底回転糸切り
2	溝	G	1	733～745-059・060	3掘立と重複	11.50・64-134・4-13			土師器5, 須恵器1	奈良平安	
3	溝	G	1	744～766-090～126		23.82・17-54・4-15					



第105図 G区3溝

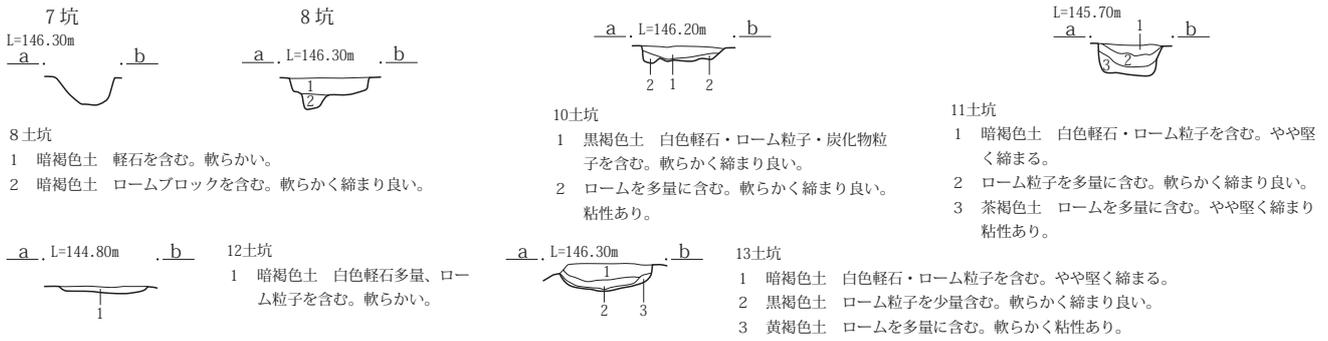


- 1 土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。やや堅く締まる。
 2 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。軟らかい。

- 3 土坑
 1 暗褐色土 茶褐色土ブロック・白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかい。
- 6 土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。強く締まり粘性あり。
 2 茶褐色土 ロームを含む。やや堅く締まり粘性あり。

第106図 G区中央部土坑・ピット位置図、1～3・6土坑断面図

第4章 検出された遺構と遺物



8土坑

- 1 暗褐色土 軽石を含む。軟らかい。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかく締まり良い。

10土坑

- 1 黒褐色土 白色軽石・ローム粒子・炭化物粒子を含む。軟らかく締まり良い。
- 2 ロームを多量に含む。軟らかく締まり良い。粘性あり。

11土坑

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。やや堅く締まる。
- 2 ローム粒子を多量に含む。軟らかく締まり良い。
- 3 茶褐色土 ロームを多量に含む。やや堅く締まり粘性あり。

12土坑

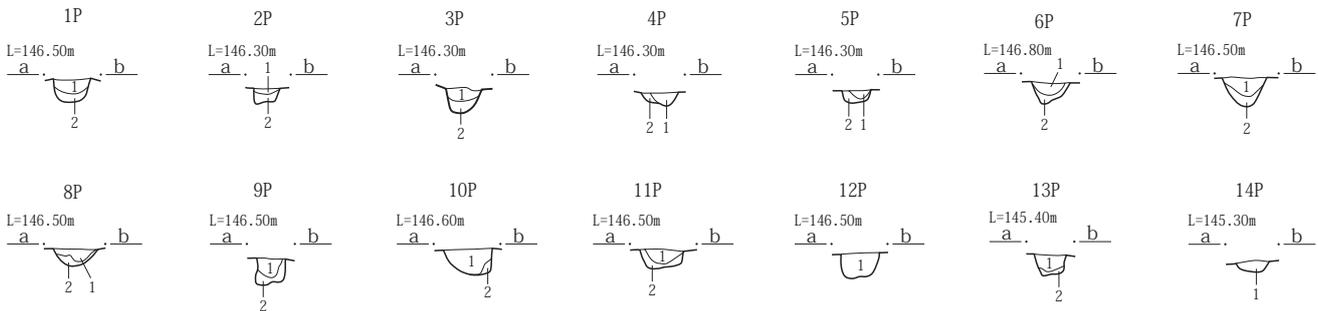
- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む。軟らかい。

13土坑

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。やや堅く締まる。
- 2 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。軟らかく締まり良い。
- 3 黄褐色土 ロームを多量に含む。軟らかく粘性あり。

第28表 G区土坑計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	土坑	G		745-091		235×189・60		土師器2点+70g, 須惠器2	奈良平安	須惠器壺1, 須惠器甕1, 土師器杯2
2	土坑	G		736-080		67×65・10				
3	土坑	G		732-073		93×68・21				
4	土坑	G		750-069		61×41・50				
5	土坑	G		745-067		195×140・31				
6	土坑	G		756-094		79×71・39				
7	土坑	G		755-088		68×63・33				
8	土坑	G		754-085		87×86・73				
9	土坑	G		742-052		133×98・71				
10	土坑	G		752-095		87×80・23				
11	土坑	G		740-104		70×58・37				
12	土坑	G		729-079		96×72・23				
13	土坑	G		754-098		98×78・25		土師器6		
14	土坑	G		745-052		130×83・71				



1～5ピット

- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。軟らかくて締まり良い。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。軟らかくて締まり良い。

13・14ピット

- 1 暗褐色土 白色軽石多量、ローム粒子を含む。軟らかい。
- 2 茶褐色土 ロームを含む。やや堅く締まる。

6～12ピット

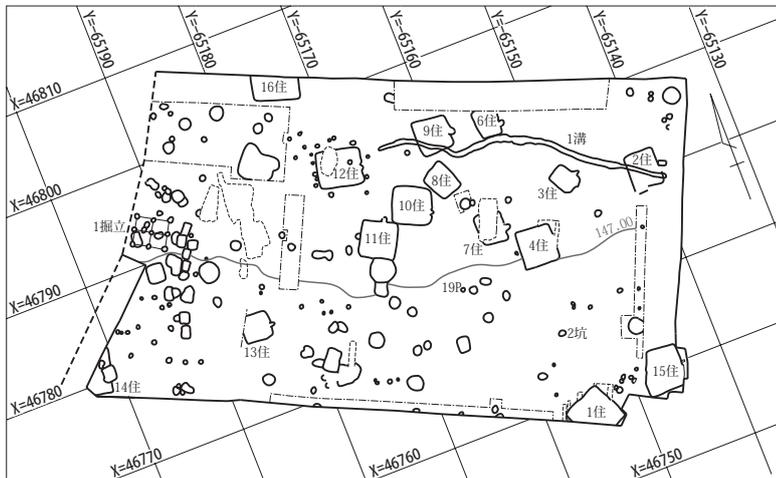
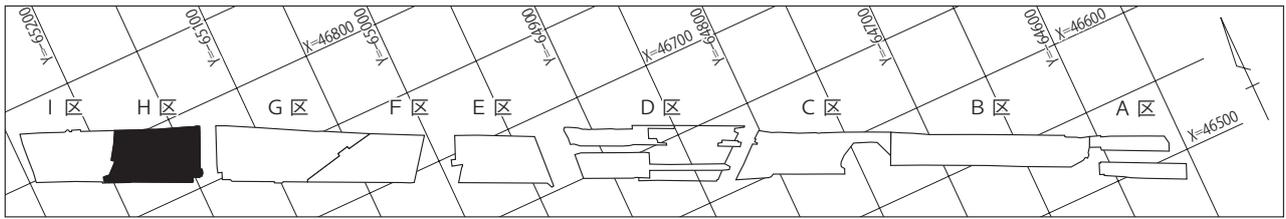
- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。軟らかくて締まり良い。
- 2 茶褐色土 ロームを含む。軟らかくて粘性あり。



第29表 G区ピット計測表

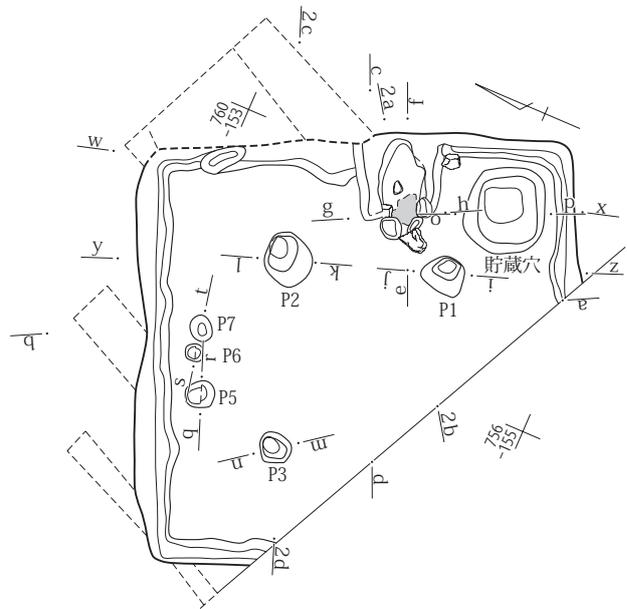
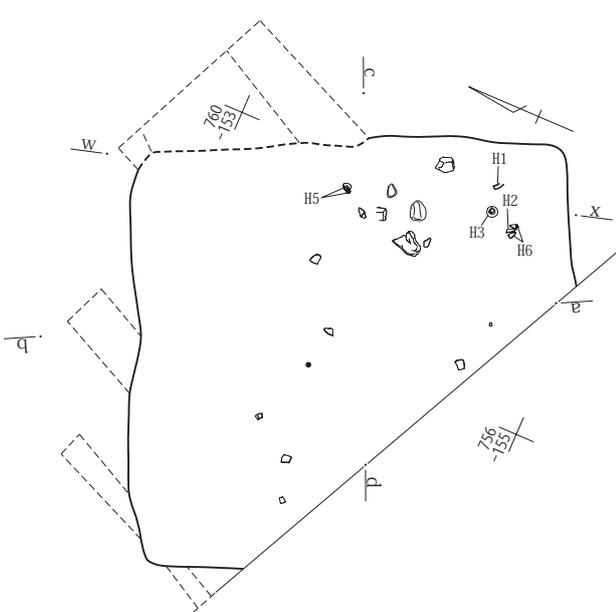
番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	覆土	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	ピット	G		759-078		41×35・32					
2	ピット	G		757-079		34×26・55					
3	ピット	G		755-080		40×37・35					
4	ピット	G		755-079		39×35・28					
5	ピット	G		757-075		32×32・26					
6	ピット	G		763-085		41・28					
7	ピット	G		758-085		56×46・42					
8	ピット	G		758-084		49×47・36					
9	ピット	G		757-082		36×31・32					
10	ピット	G		760-093		55×51・41					
11	ピット	G		758-093		46×40・20					
12	ピット	G		757-090		48×36・38					
13	ピット	G		741-083		37×29・34					
14	ピット	G		738-084		48×38・48					

第107図 G区7・8・10～13土坑、1～14ピット断面図



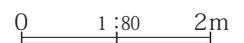
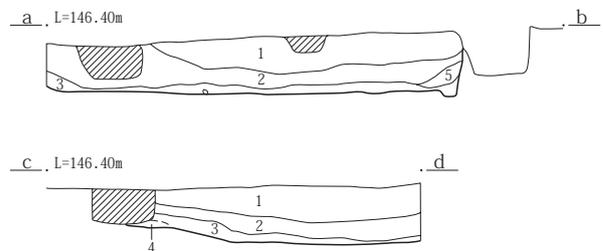
H区遺構集計

	1面	2面	小計
住居	15	0	15
掘立柱建物	1	0	1
溝	1	0	1
土坑	57 14基欠番	15	72
ピット	91 9基欠番	0	91
道	0	0	0



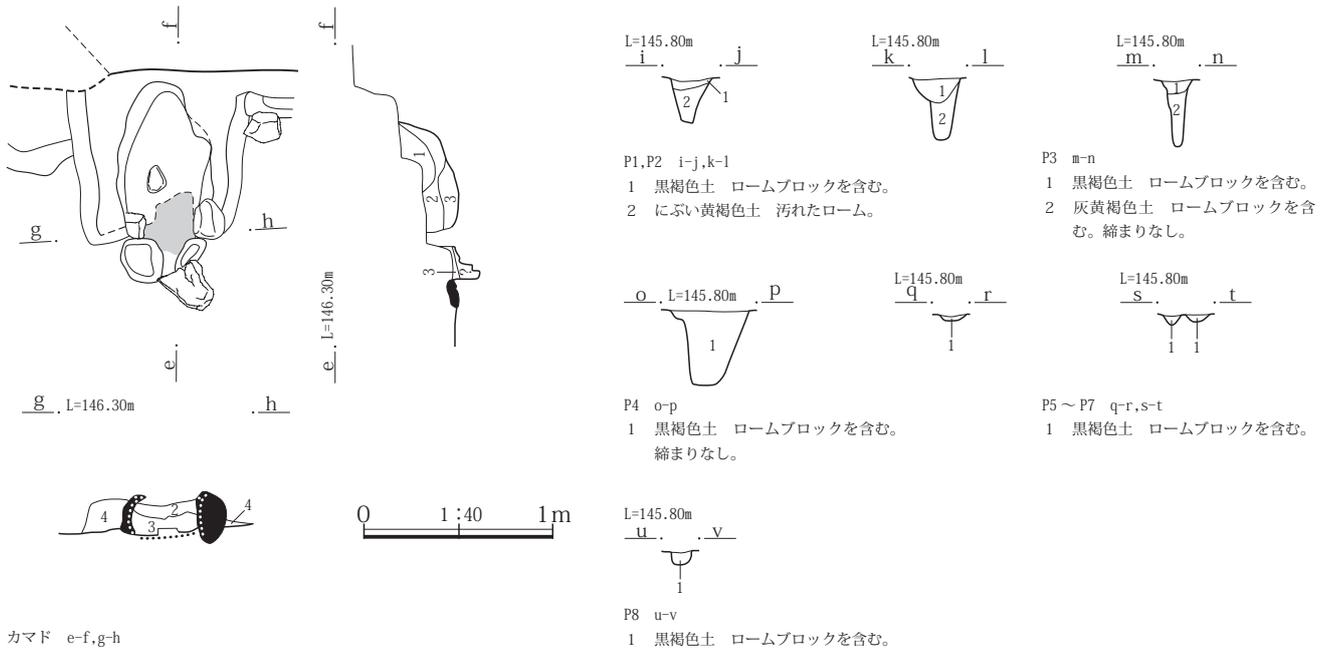
a-b, c-d

- 1 黒褐色土 にぶい黄褐色土を斑点状、白色軽石を多く含む。縮まっている。
- 2 黒褐色土 黄褐色軽石を含む。
- 3 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。縮まりなし。
- 4 黄褐色土 汚れたローム。
- 5 3よりもロームブロック多い。



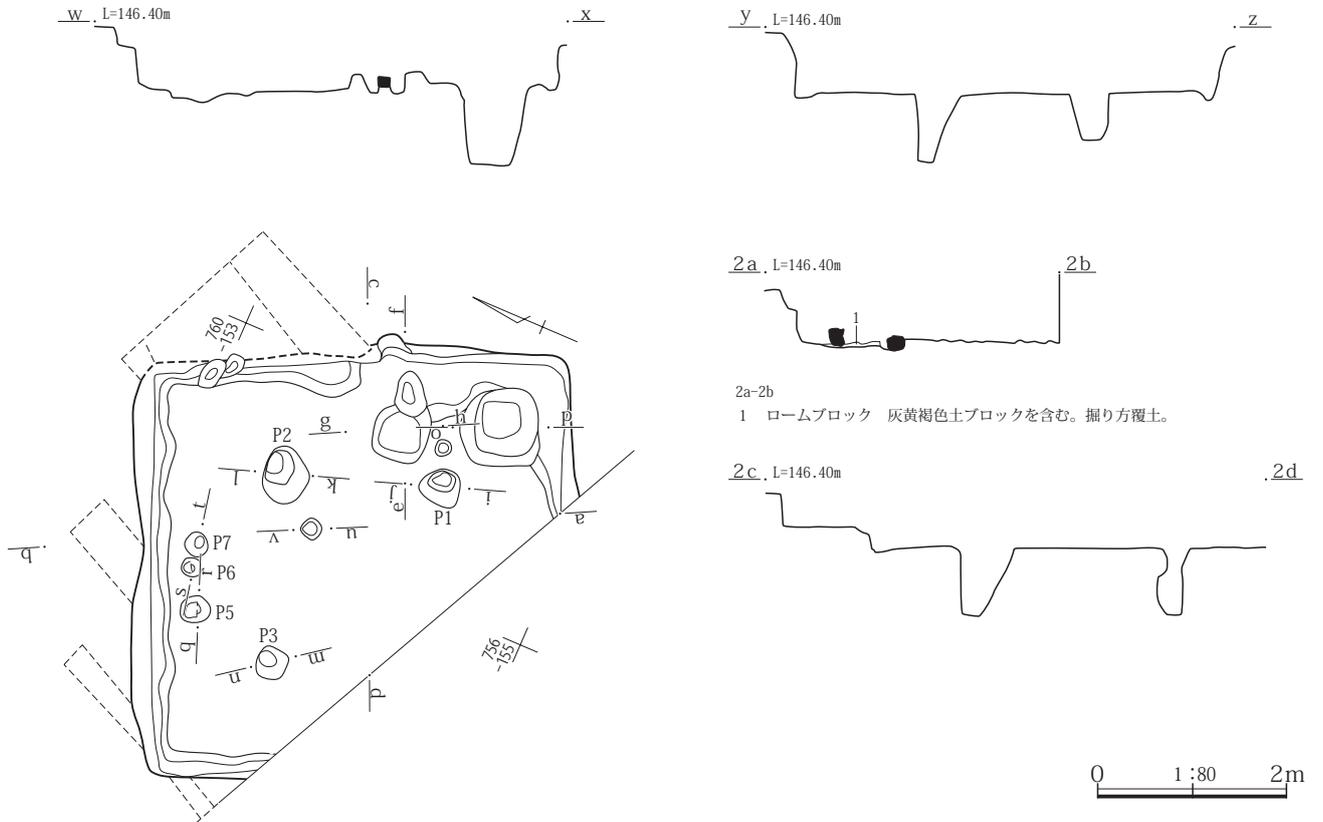
第108図 H区全体図, H区1住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物

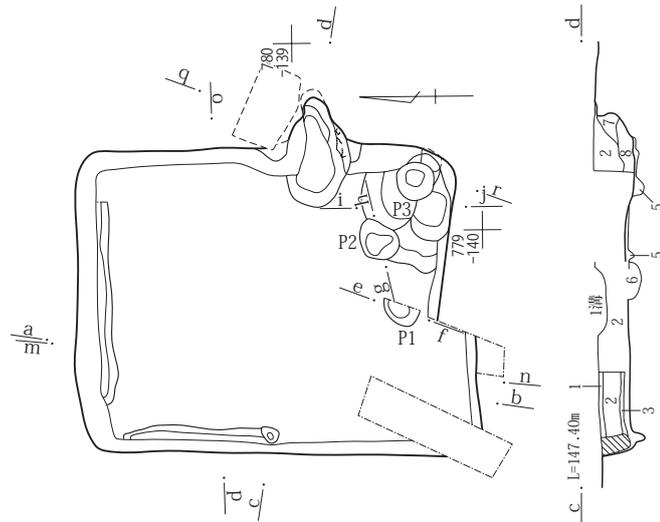
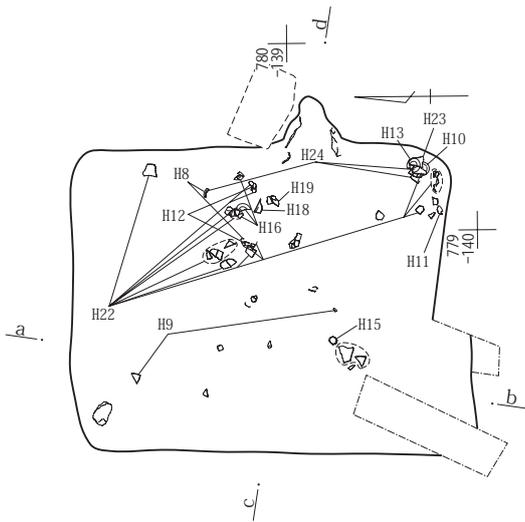


カマド e-f, g-h

- 1 にぶい黄褐色土 焼土ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 4 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。袖の粘土。

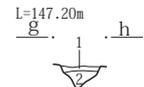
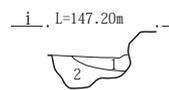
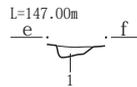
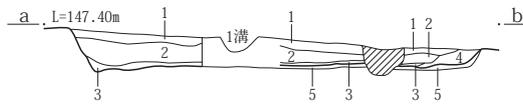


第109図 H区1住居(2)



a-b, c-d

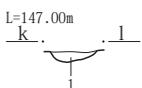
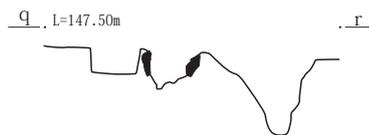
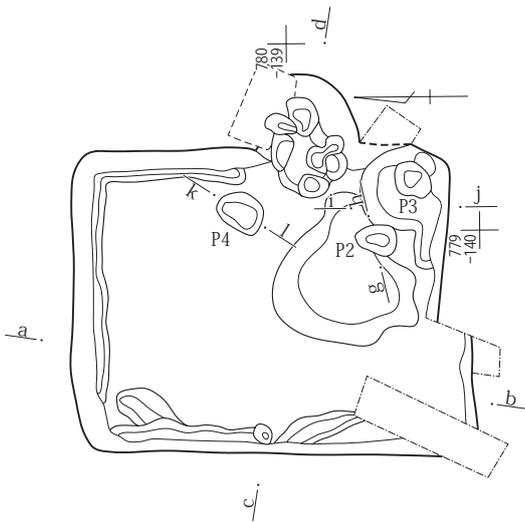
- 1 黒褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
- 2 黒褐色土 灰黄褐色土ブロック(斑点状)・黄白色軽石を含む。締まっている。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 4 ロームブロックとにぶい黄褐色土の混土。ローム多い。
- 5 3に似る。堅い。床を形成する土。
- 6 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。掘り方の土。
- 7 黒褐色土 2にロームブロック・焼土粒子を少量含む。
- 8 黒褐色土 2に焼土粒子・炭化物を含む。



- P1 e-f
- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。締まっている。

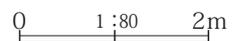
- P3 i-j
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。締まりなし。
 - 2 1に似るがロームブロック多い。締まりなし。

- P2 g-h
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。締まりなし。
 - 2 1よりもローム粒子少ない。締まりなし。



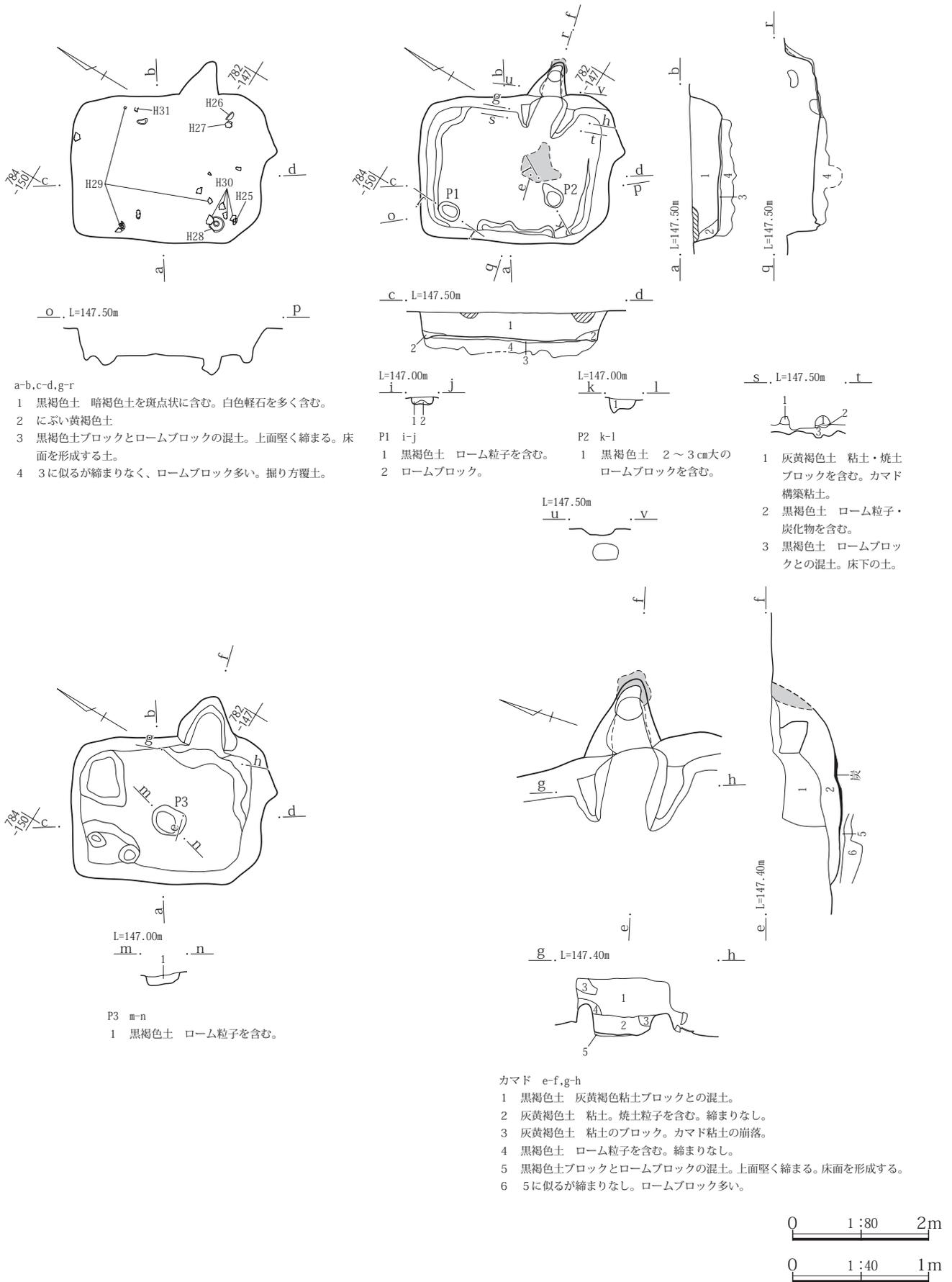
P4 k-l

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。

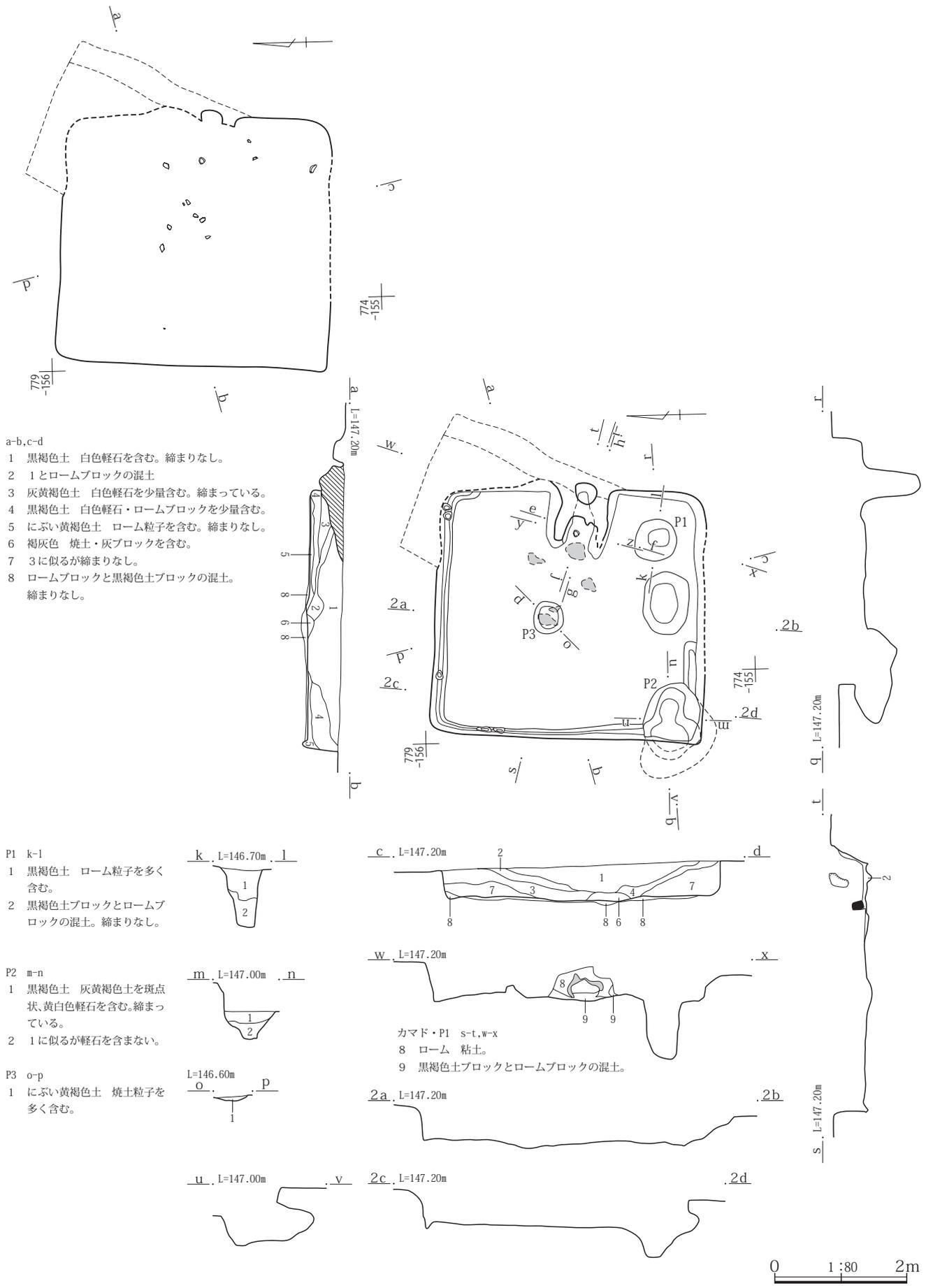


第110図 H区2住居

第4章 検出された遺構と遺物

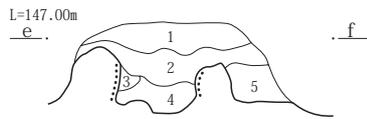
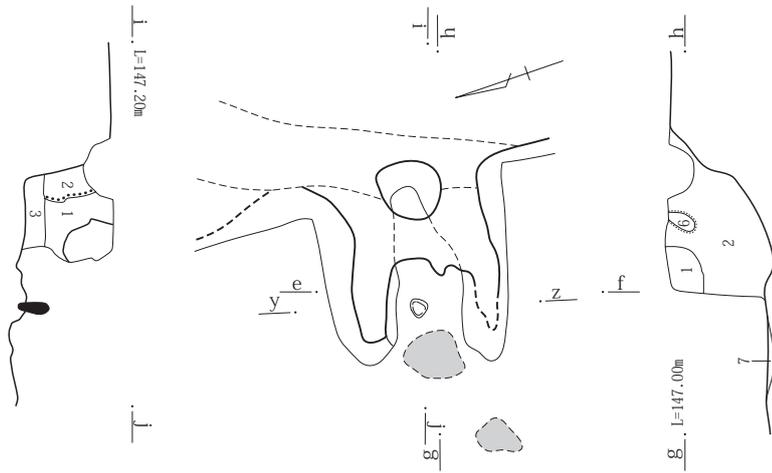


第111図 H区3住居



第112図 H区4住居(1)

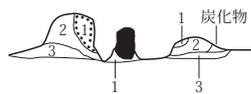
第4章 検出された遺構と遺物



カマド e-f,g-h,i-j

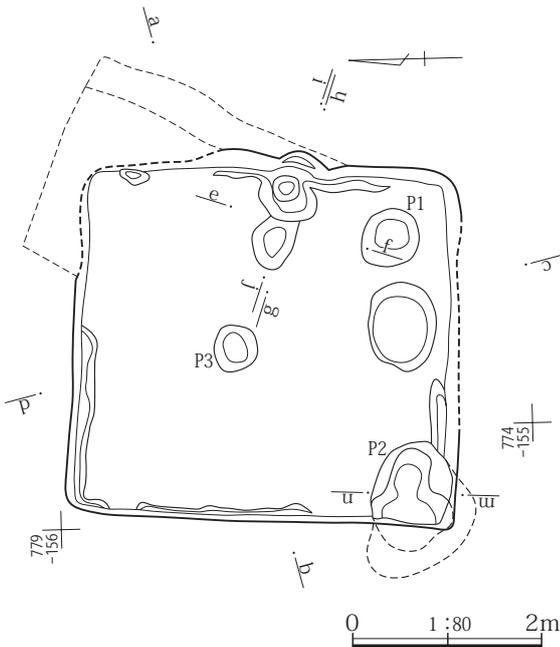
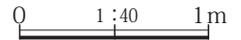
- 1 黒褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。
- 2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 焼土ブロック グズグズになっている。崩落焼土。
- 4 2に焼土粒子を多く含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。住居覆土。
- 6 にぶい黄褐色土 ローム粒子を含む。
- 7 褐色土ブロックとロームブロックの混土。

L=147.20m .z



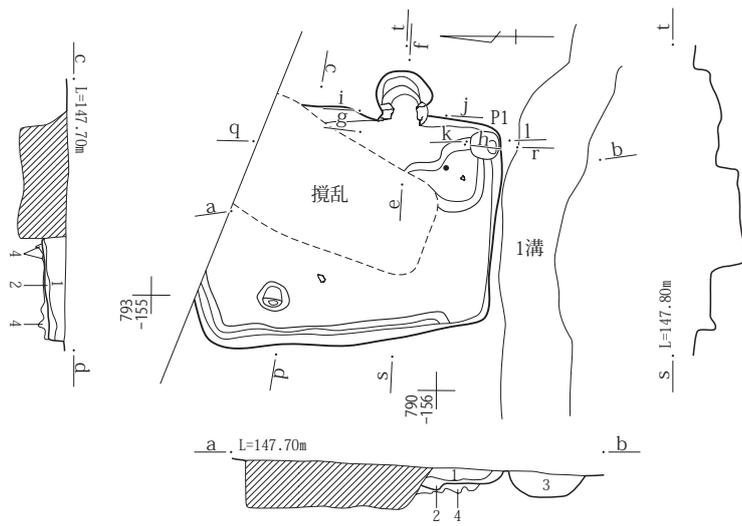
カマド y-z

- 1 明黄褐色土 焼けている。締まっている。
- 2 明黄褐色土 締まっている。カマド構築粘土。
- 3 灰黄褐色土 上位に炭化物を多く含む。

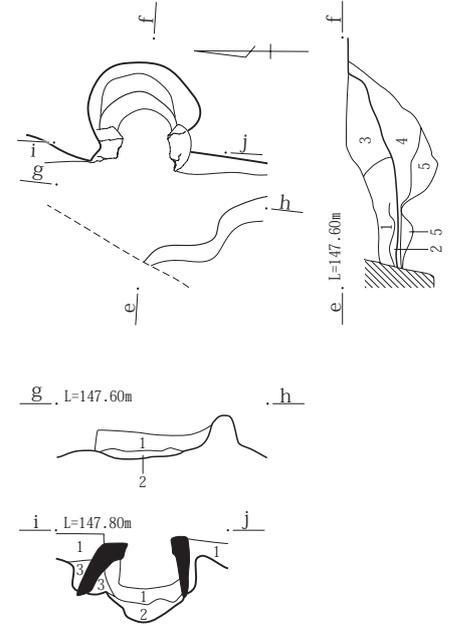


第113図 H区4住居(2)

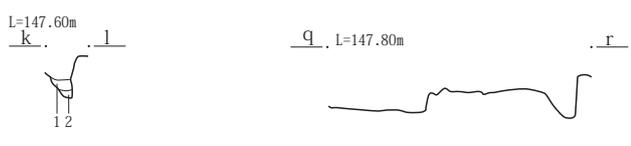
遺構図 (H区)



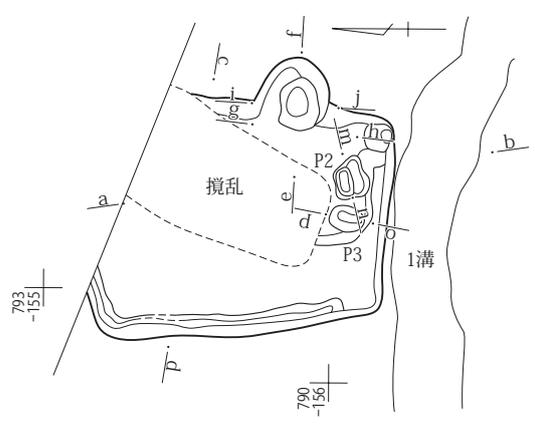
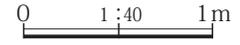
- a-b, c-d
- 1 黒褐色土 黄白色軽石を含む。締まっている。
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
 - 3 にぶい黄褐色土 やや灰色。締まりなし。1溝覆土。
 - 4 2に似るが締まりなし。上面は強く締まる。床下の土。



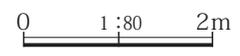
- カマド e-f, g-h, i-j
- 1 黒褐色土 焼土粒子を含む。締まりなし。
 - 2 1にロームブロックを含む。
 - 3 灰黄褐色土 焼土粒子を多く含む。上位にロームブロック含む。
 - 4 灰黄褐色土 焼土粒子を含む。
 - 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。



- P1 k-l
- 1 黒褐色土 炭化物・ローム粒子を含む。締まりなし。
 - 2 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。

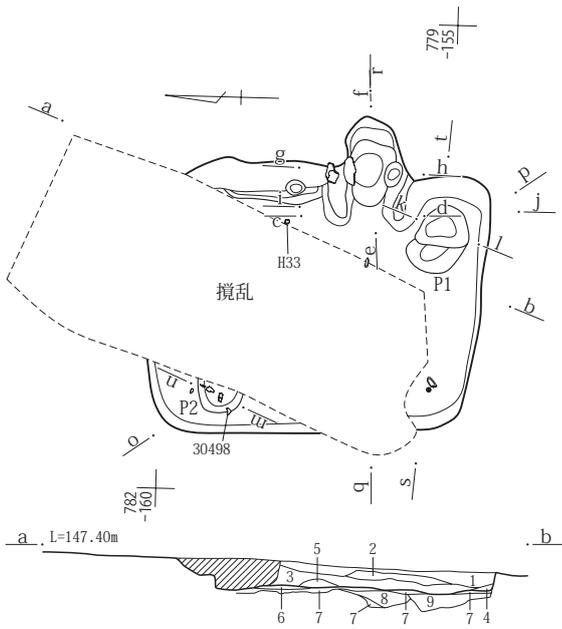


- L=147.40m
m . n
- L=147.40m
o . p
- P2 m-n, o-p
- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

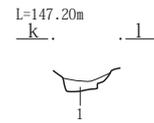
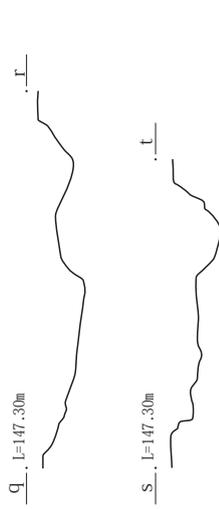


第114図 H区6住居

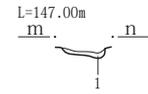
第4章 検出された遺構と遺物



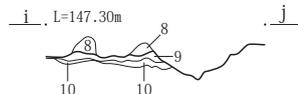
- a-b
- 1 灰黄褐色土 白色軽石を含む。
 - 2 にぶい黄褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。
 - 3 暗褐色土 白色軽石を含む。2よりも暗い。締まっている。
 - 4 3にロームブロックを含む。締まりなし。
 - 5 ロームブロック・暗褐色土ブロック・焼土粒子の混土。
 - 6 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まっている。床面を形成する土。
 - 7 6に似る。
 - 8 にぶい黄褐色土ブロックとロームブロックの混土。床下の土。
 - 9 黒褐色土 白色軽石・焼土粒子を多く含む。



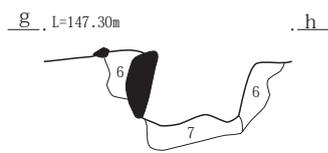
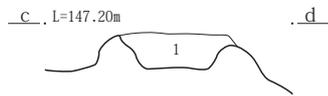
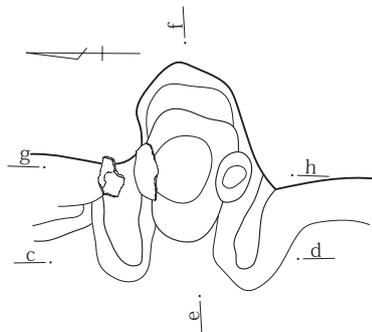
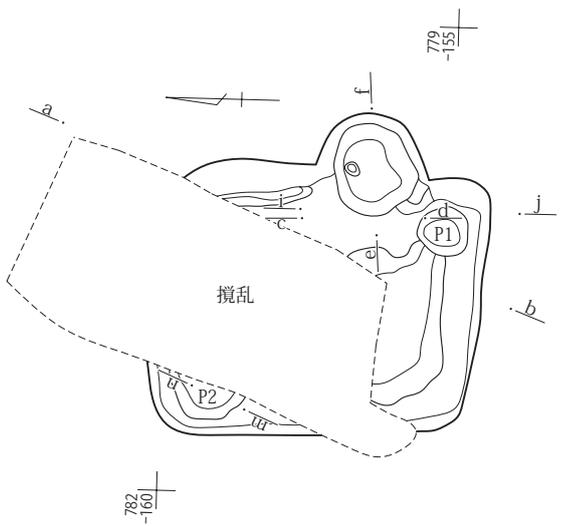
- P1 k-l
- 1 灰黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。



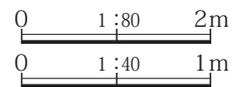
- P2 m-n
- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。



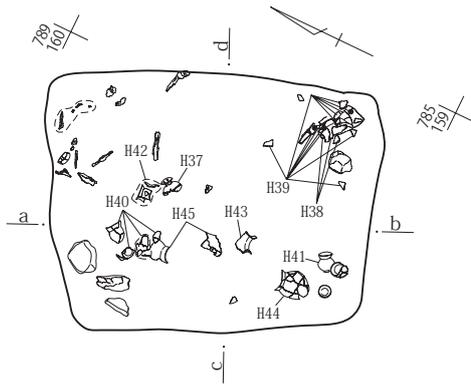
- カマド i-j
- 8 明黄褐色土 焼土粒子を含む。カマド袖部粘土。
 - 9 黒褐色土 炭化物・焼土粒子を含む。
 - 10 明黄褐色土 汚れたローム。



- カマド c-d,e-f,g-h,i-j
- 1 黒褐色土 灰黄褐色土ブロックを斑点状に含む。焼土粒子を少量含む。
 - 2 灰黄褐色土 焼土粒子を少量含む。
 - 3 にぶい黄褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。
 - 4 黒褐色土 炭化物・灰を含む。
 - 5 にぶい黄褐色土 黄褐色土を斑点状に含む。掘り方覆土。
 - 6 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。袖石掘り方の土。
 - 7 1に似るがやや暗い。床下の土。



第115図 H区7住居

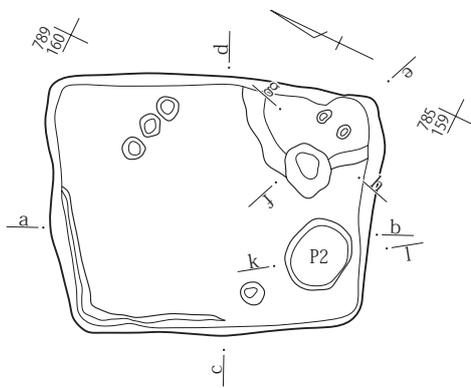
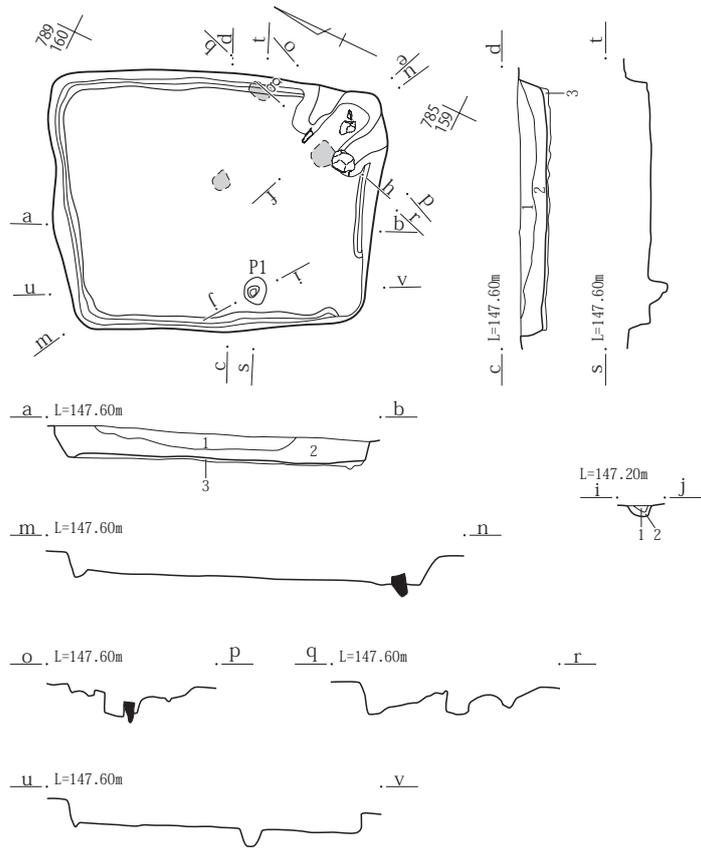


a-b, c-d

- 1 黒褐色土 褐色土を斑点状、黄白色軽石を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック 2~5cm大を含む。
- 3 2に似るが堅く締まっている。床面を形成する土。

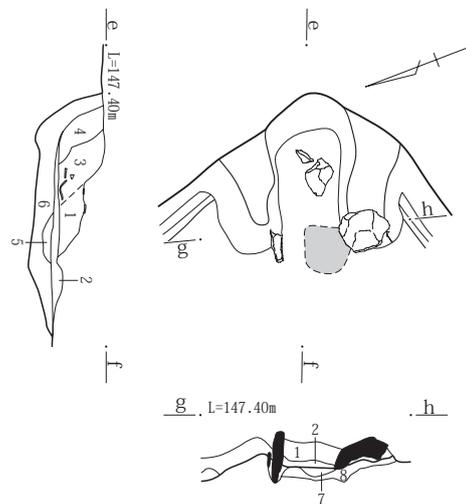
P1 i-j

- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。



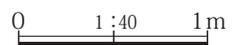
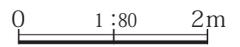
P2 k-l

- 1 黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。



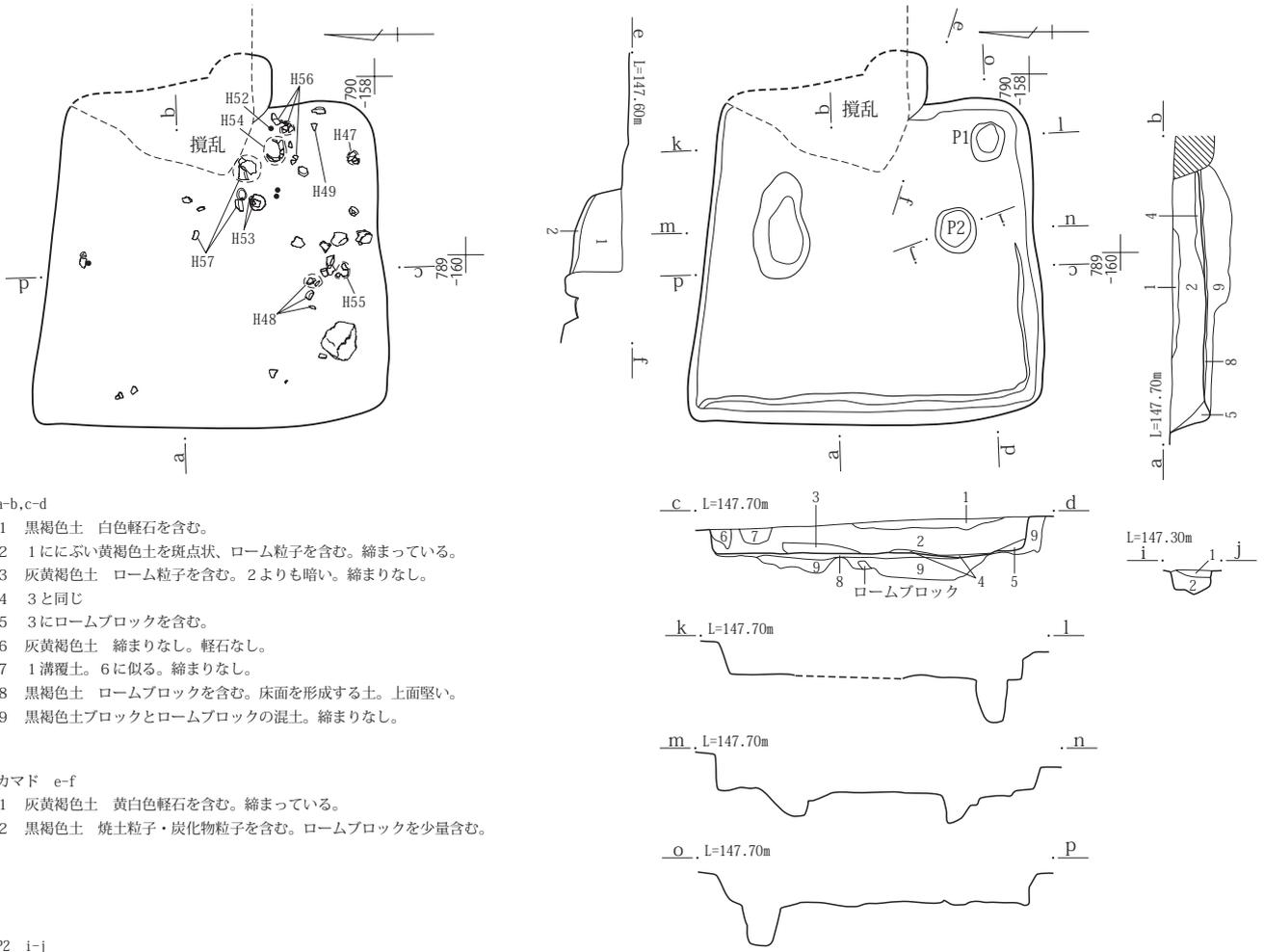
カマド e-f, g-h

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子を含む。締まりなし。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。締まりなし。
- 3 にぶい黄褐色土 焼土粒子を含む。
- 4 3に焼土ブロックを含む。
- 5 焼土
- 6 3にロームブロックを多く含む。
- 7 2に近い。
- 8 ロームブロック 汚れている。



第116図 H区8住居

第4章 検出された遺構と遺物



a-b, c-d

- 1 黒褐色土 白色軽石を含む。
- 2 1にぶい黄褐色土を斑点状、ローム粒子を含む。縮まっている。
- 3 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。2よりも暗い。縮まりなし。
- 4 3と同じ
- 5 3にロームブロックを含む。
- 6 灰黄褐色土 縮まりなし。軽石なし。
- 7 1溝覆土。6に似る。縮まりなし。
- 8 黒褐色土 ロームブロックを含む。床面を形成する土。上面堅い。
- 9 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。縮まりなし。

カマド e-f

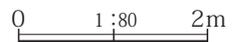
- 1 灰黄褐色土 黄白色軽石を含む。縮まっている。
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を含む。ロームブロックを少量含む。

P2 i-j

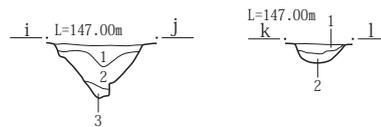
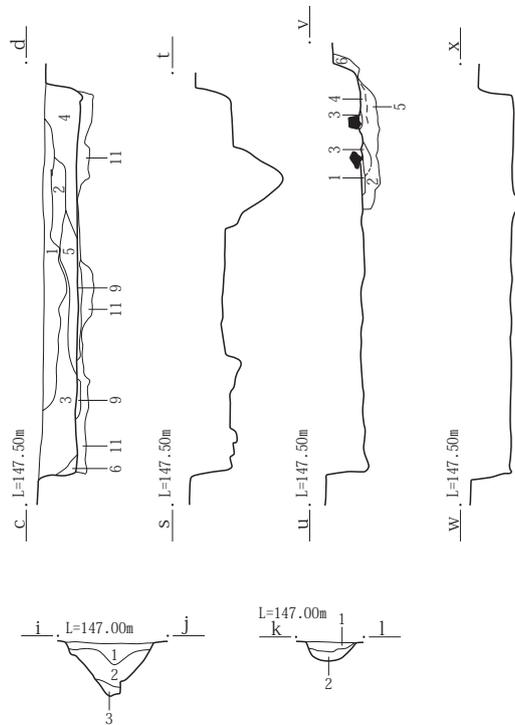
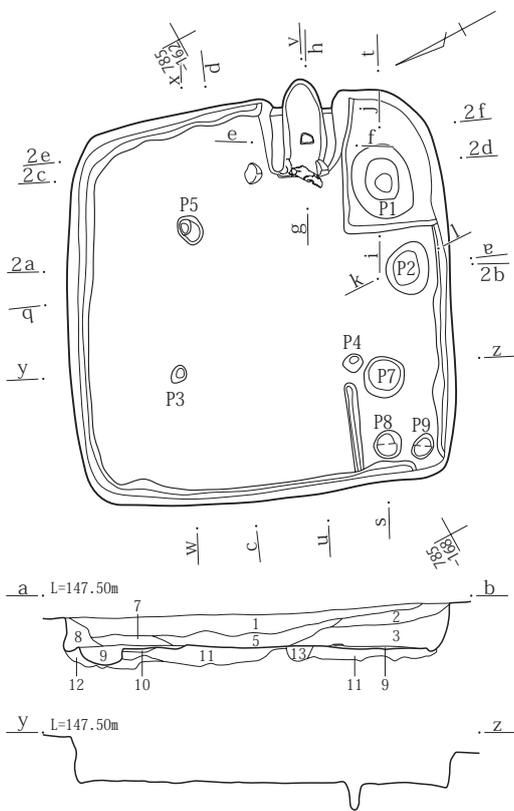
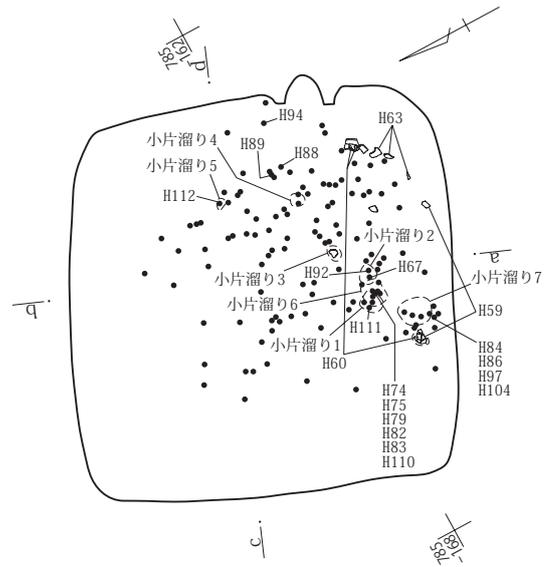
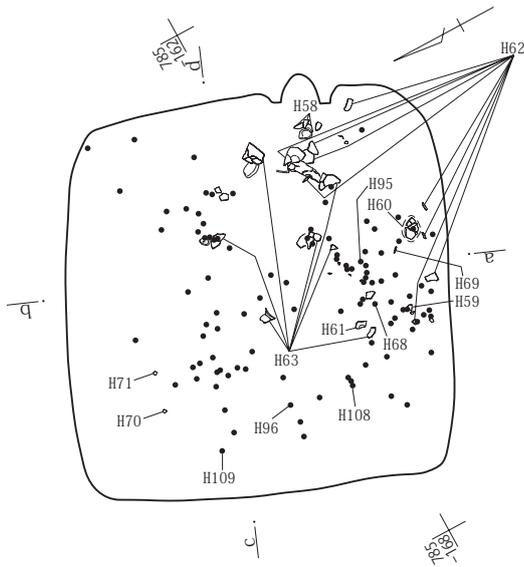
- 1 灰黄褐色土。
- 2 1にロームブロックを多く含む。縮まりなし。

P1 g-h

- 1 黒褐色土 にぶい黄褐色土ブロックを斑点状に含む。縮まっている。
- 2 ロームブロック。
- 3 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。縮まりなし。



第117図 H区9住居

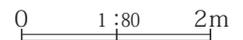


- a-b, c-d
- 1 黒褐色土 白色軽石・ロームブロックを含む。締まっている。
 - 2 1に炭化物ブロックを含む。
 - 3 にぶい黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
 - 4 3に似る。
 - 5 4に炭化物粒子を含む。4よりやや暗い。
 - 6 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含まない。やや軟質。
 - 7 2に似る。
 - 8 黒褐色土 ローム粒子を含む。
 - 9 黒褐色土 ロームブロックを含む。上面は強く締まる。床面を形成する土。
 - 10 9に似るが白色軽石を含む。締まりなし。
 - 11 黒色土とロームブロックの混土。掘り方覆土。締まりなし。
 - 12 11に似るがローム少ない。11より暗い。締まりなし。
 - 13 11に似るが白色軽石を含む。

- P1貯蔵穴 i-j
- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。締まりなし。
 - 2 黒褐色土 ロームブロック1~5cm大を多く含む。締まりなし。
 - 3 にぶい黄褐色土 汚れたローム。

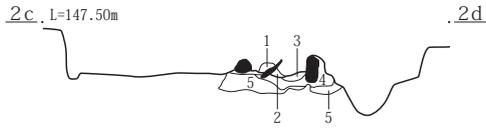
- P2 k-l
- 1 灰黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。掘り方覆土か。

- u-v
- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物を含む。床面の土。
 - 2 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。締まりなし。掘り方覆土。
 - 3 焼土ブロック
 - 4 黒褐色土 焼土粒子を含む。ロームブロックを少量含む。
 - 5 4よりもロームブロックが多い。
 - 6 灰黄褐色土 煙道掘り方の覆土。

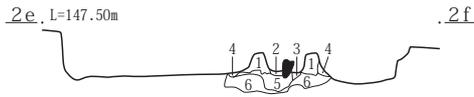


第118図 H区10住居(1)

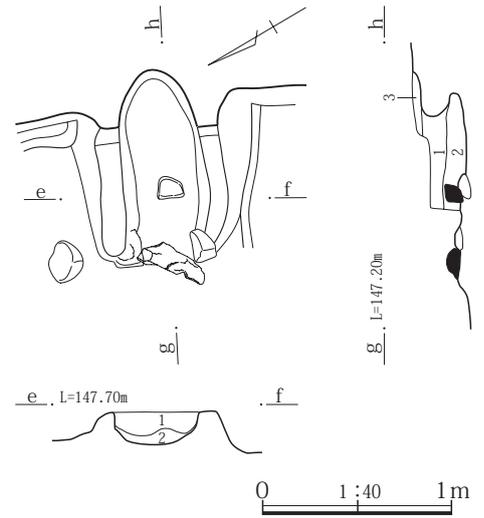
第4章 検出された遺構と遺物



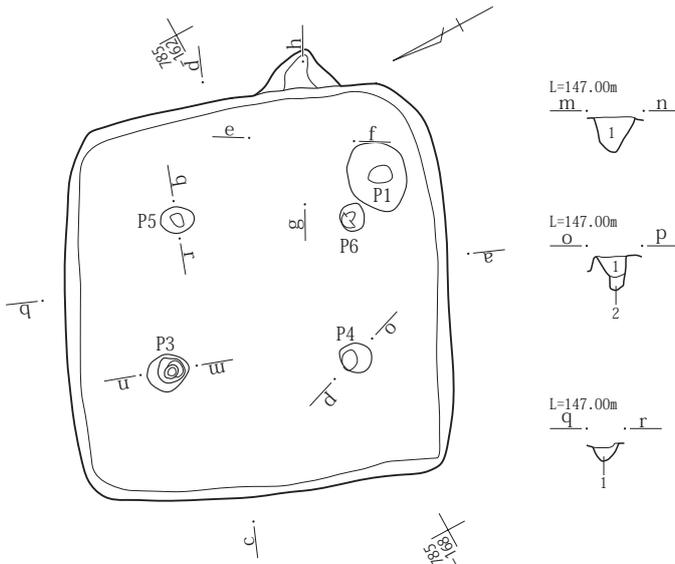
- 2c-2d
- 1 焼土ブロックとロームブロックの混合。カマド上部の崩落。
 - 2 黒褐色土 焼土粒子を含む。
 - 3 焼土ブロック 縮まりなし。カマド底面。
 - 4 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。縮まりなし。掘り方覆土。
 - 5 ロームブロックと褐色土ブロックの混土。掘り方覆土。



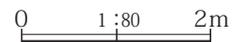
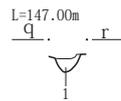
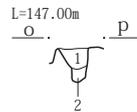
- 2e-2f
- 1 明黄褐色土 焼土ブロックを含む。カマド構築粘土。
 - 2 灰黄褐色土 炭化物・ロームブロックを含む。カマド底面。
 - 3 2に似る。
 - 4 黒褐色土 焼土粒子を含む。
 - 5 黒褐色土 3~5cm大のロームブロックを多く含む。
 - 6 5より明るい。ロームブロック多い。



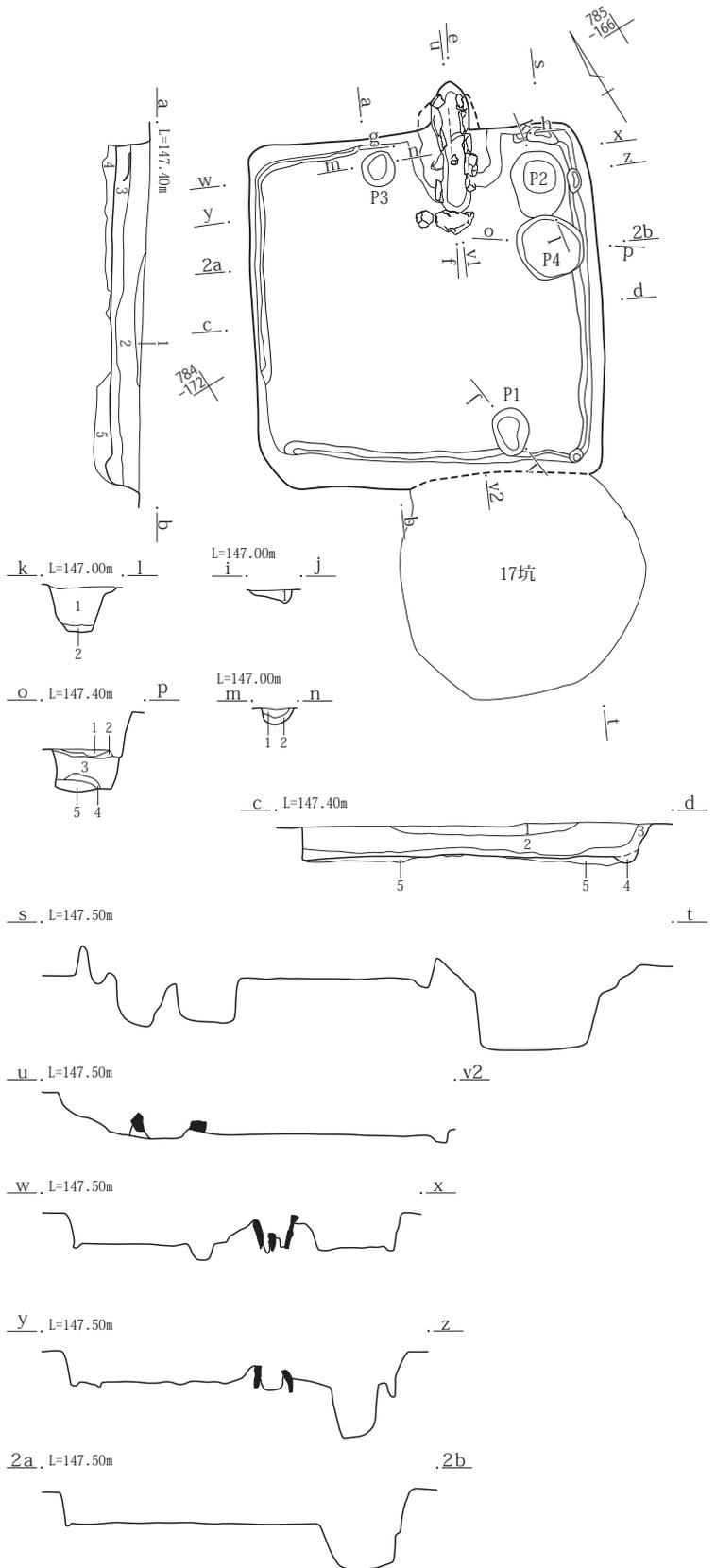
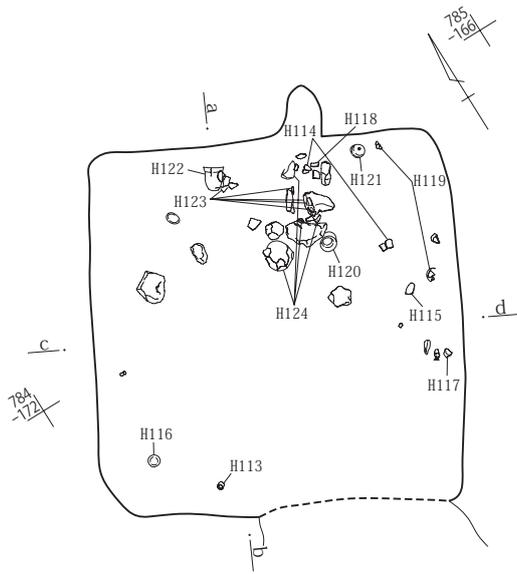
- カマド e-f, g-h
- 1 灰黄褐色土 炭化物粒子・ロームブロックを含む。焼土粒子を少量含む。
 - 2 灰黄褐色土 焼土粒子を含む。
 - 3 黒褐色土 焼土粒子を含む。



- L=147.00m
m . n
1 黒褐色土 ロームブロックを含む。縮まりなし。
2 ロームブロック。



第119図 H区10住居(2)



a-b, c-d

- 1 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。攪乱の土か。締まりなし。
- 2 黒褐色土 白色軽石を含む。ロームブロックを少量含む。締まっている。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。締まっている。やや暗い。
- 4 3よりもロームブロック多い。
- 5 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。上面は床面。

P1 i-j

- 1 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。締まりなし。

P2 k-l

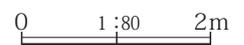
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 1に炭化物を帯状に含む。締まりなし。

P3 m-n

- 1 灰黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 2 灰黄褐色土 焼土粒子を少量含む。締まりなし。

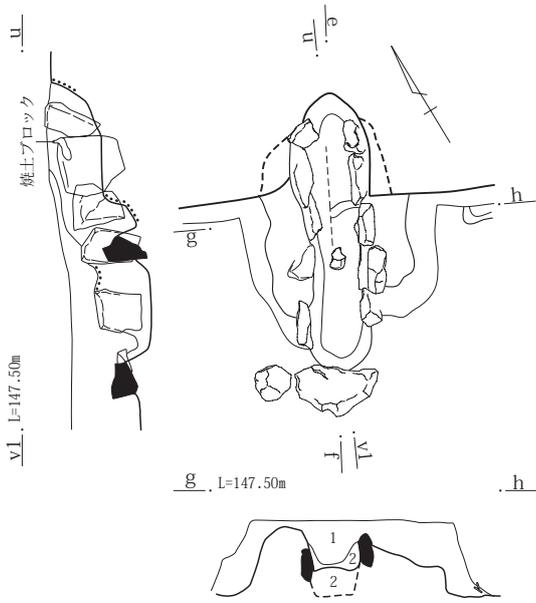
P4 o-p

- 1 黒褐色土 1cm大のロームブロックを少量含む。締まりなし。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 3 2に焼土粒子を含む。
- 4 2に近い。焼土粒子を少量含む。
- 5 3に似る。



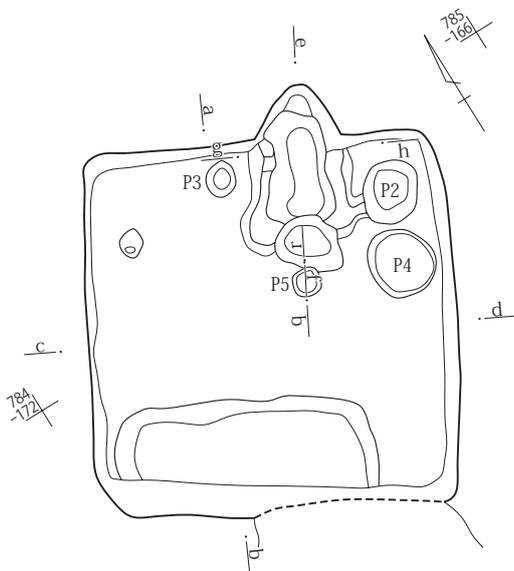
第120図 H区11住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



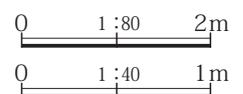
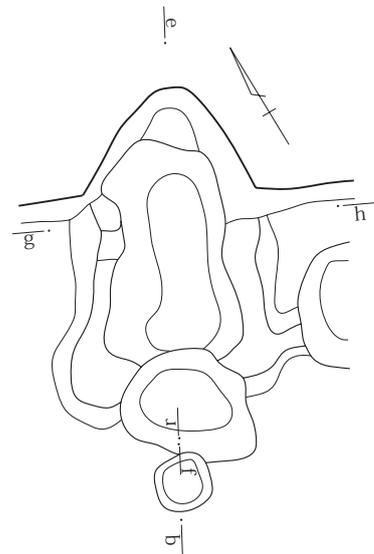
カマド e-f,g-h,u-v

- 1 灰黄褐色土 1cm大ロームブロック・白色軽石を含む。
- 2 にぶい黄褐色土 焼土粒子を含む。縮まりなし。
- 3 にぶい黄褐色土 焼土粒子を含む。縮まりなし。全体に炭化物含む。
- 4 3に似るがやや縮まっている。
- 5 2にロームブロックを含む。

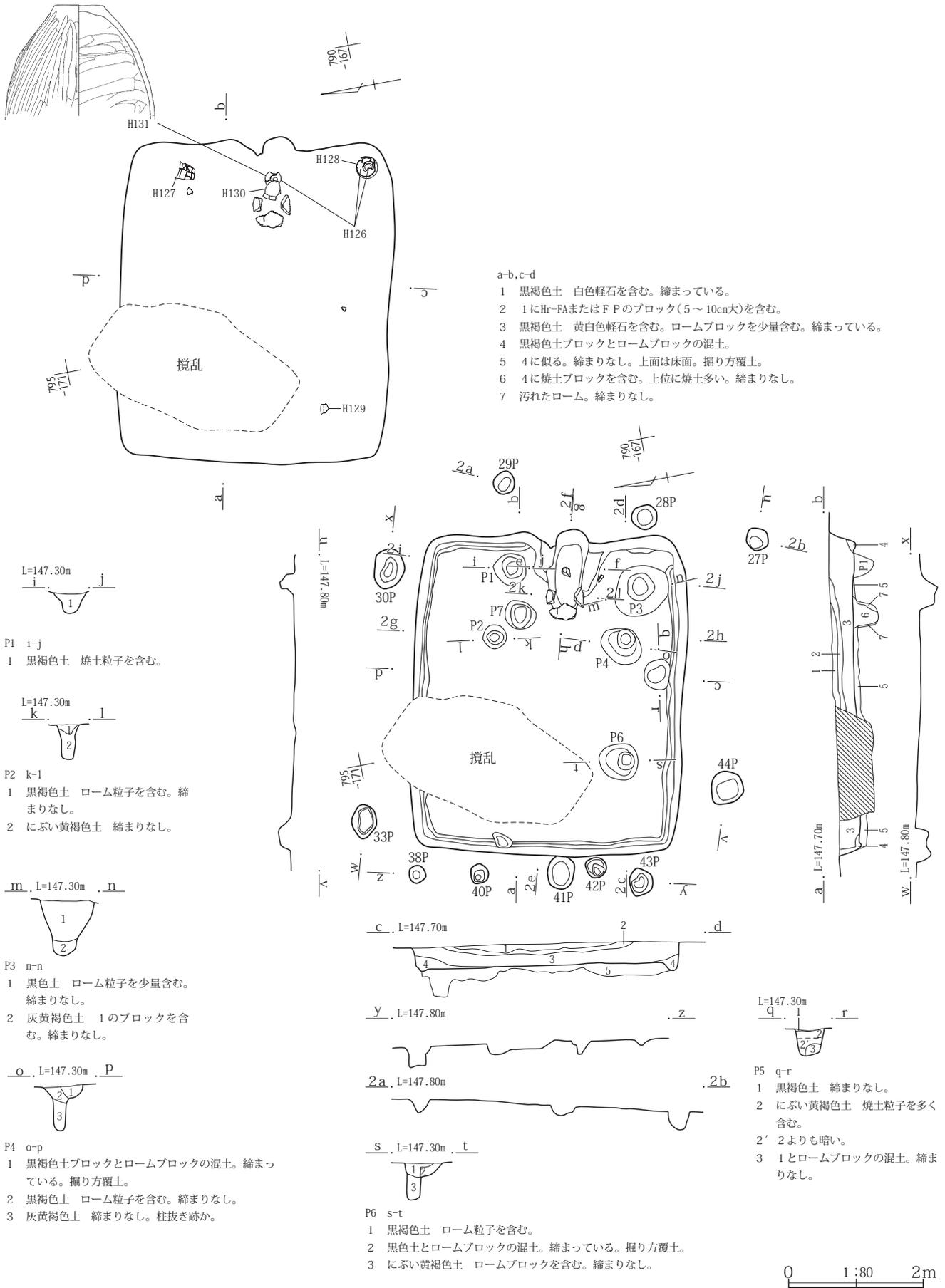


L=146.90m
q r

- P5 q-r
1 灰黄褐色土 焼土粒子を多く含む。

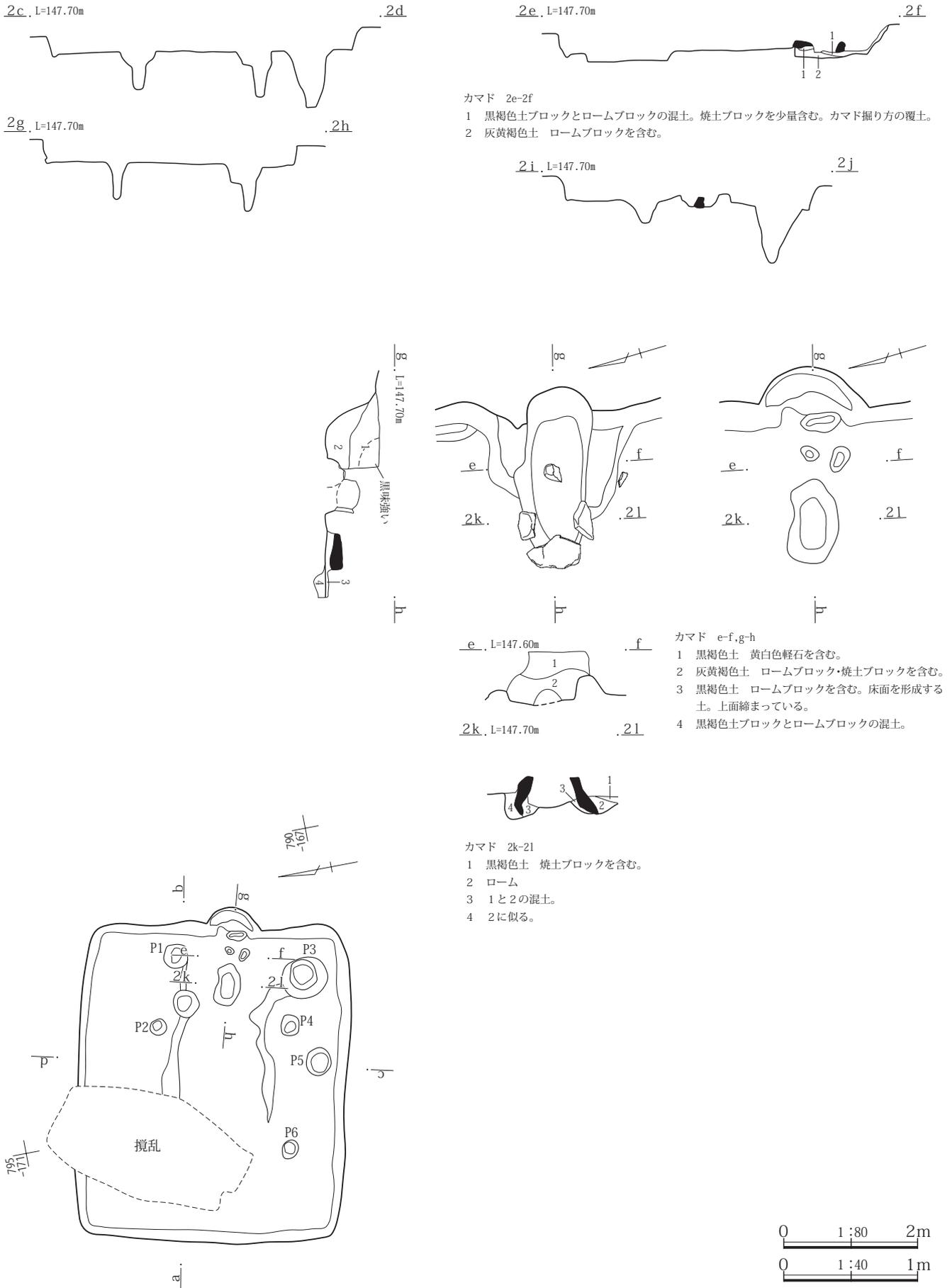


第121図 H区11住居(2)



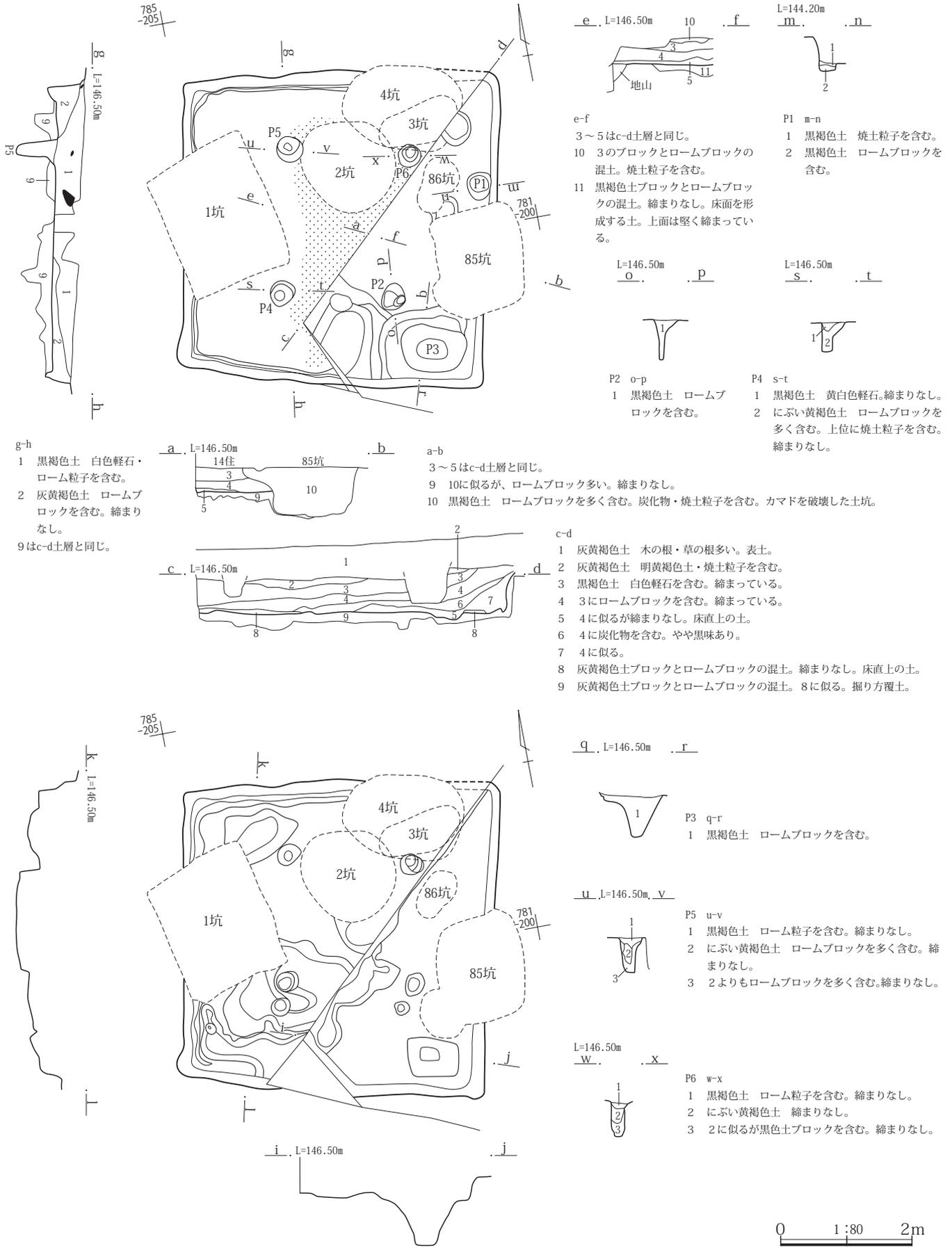
第122図 H区12住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物

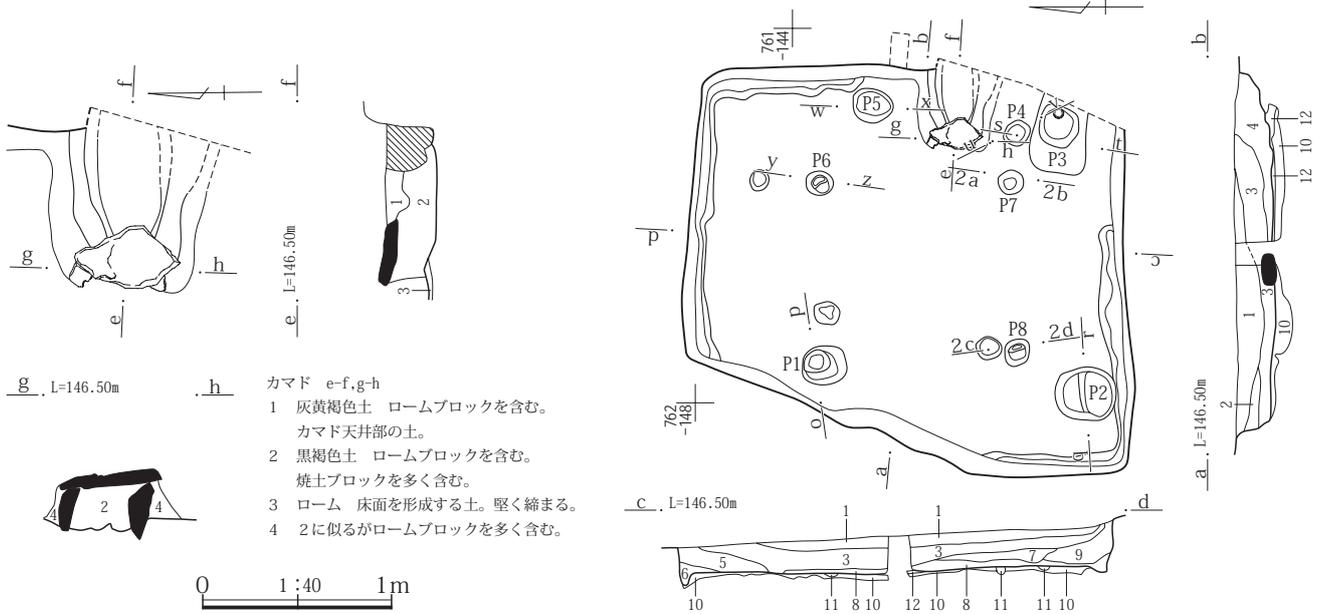


第123図 H区12住居(2)

第4章 検出された遺構と遺物

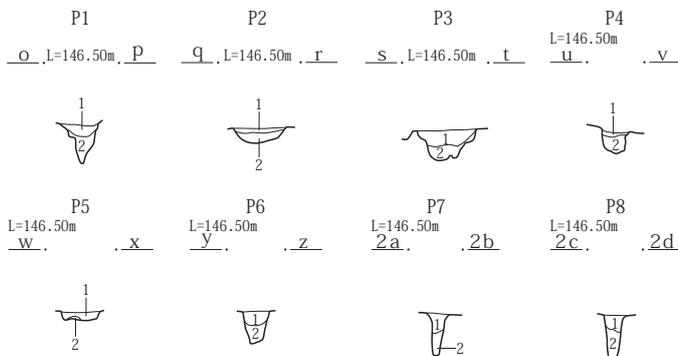


第125図 H区14住居



g. L=146.50m .h. カマド e-f,g-h
 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
 カマド天井部の土。
 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
 焼土ブロックを多く含む。
 3 ローム 床面を形成する土。強く締まる。
 4 2に似るがロームブロックを多く含む。

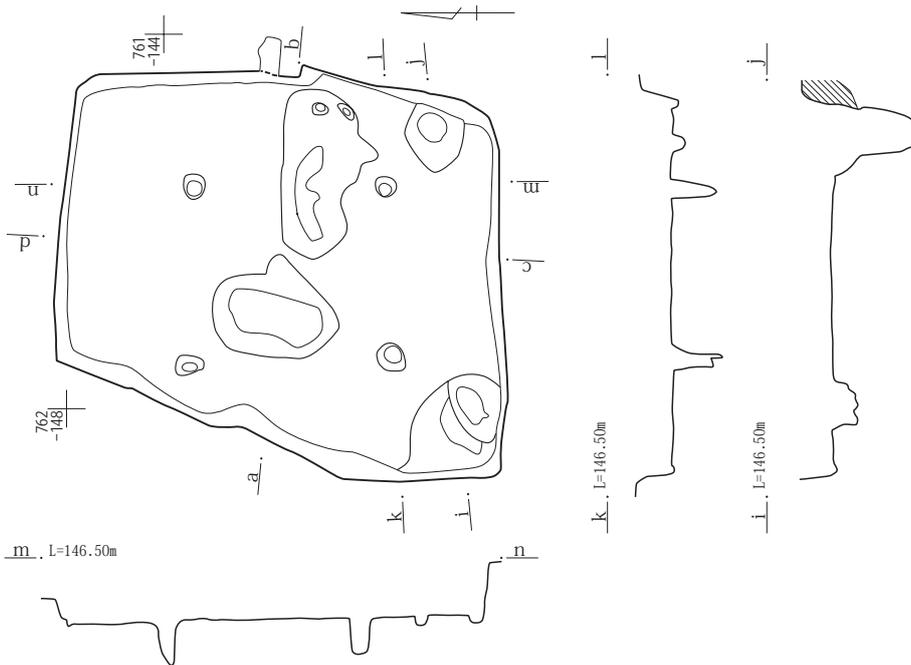
0 1:40 1m



a-b,c-d
 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。白色軽石を多く含む。締まっている。
 2 1よりも明るい。ロームブロックを多く含む。
 3 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。
 4 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
 5 3に似るが軽石を含まない。締まりなし。
 6 5に炭化物を含む。締まりなし。
 7 1に似るが軽石含まない。
 8 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。床直上の土。
 9 6に似る。
 10 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。掘り方覆土。
 11 黒褐色土 締まりなし。
 12 灰黄褐色土 強く締まる。床面を形成する土。

P1,P2 o-p,q-r
 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
 2 1にロームブロックを多く含む。締まりなし。

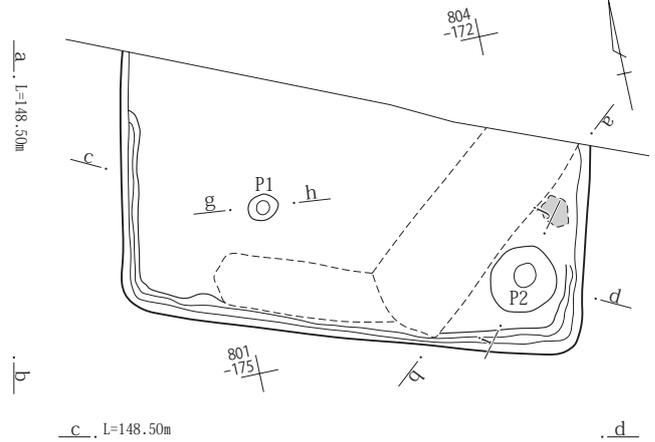
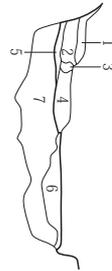
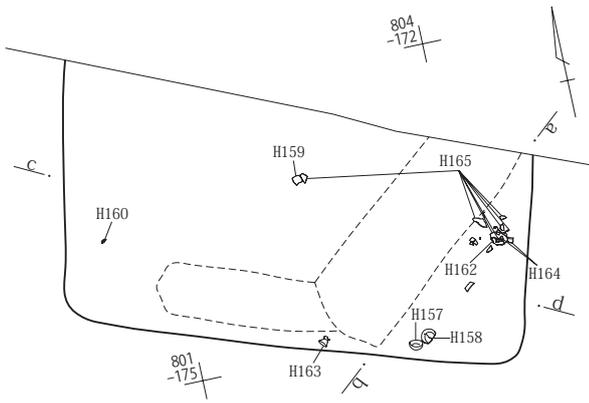
P3~P8, s-t,u-v,w-x,y-z,2a-2b,2c-2d
 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
 2 1よりもロームブロックを多く含む。



第126図 H区15住居

0 1:80 2m

第4章 検出された遺構と遺物



a-b, c-d

- 1 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 灰黄褐色土 焼土粒子を極く多量含む。破壊されたカマドの一部。
- 3 ロームブロック
- 4 黒褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを含む。カマド右脇の崩落土。
- 5 黒褐色土 ロームブロック2cm大・炭化物を含む。カマド底面。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを含む。焼土なし。掘り方覆土。
- 7 地山ローム ゴミ穴の壁。

L=147.80m

g . h



i, L=147.80m j

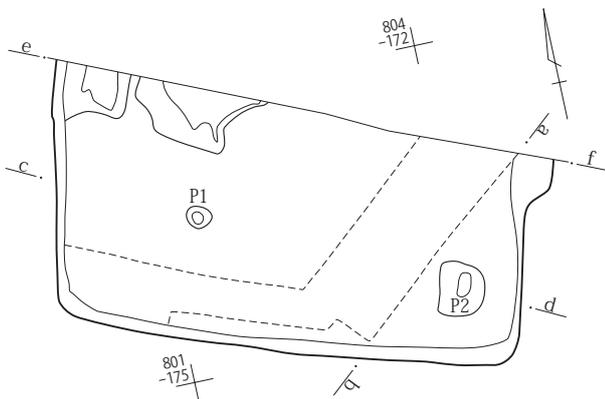


P1 g-h

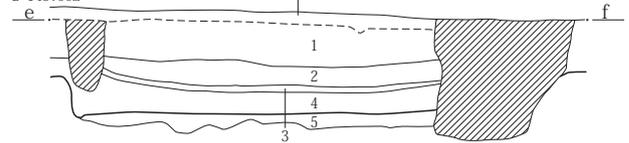
- 1 灰黄褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 2 ロームブロック

P2 貯蔵穴 i-j

- 1 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。縮まりなし。

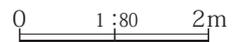


L=148.50m



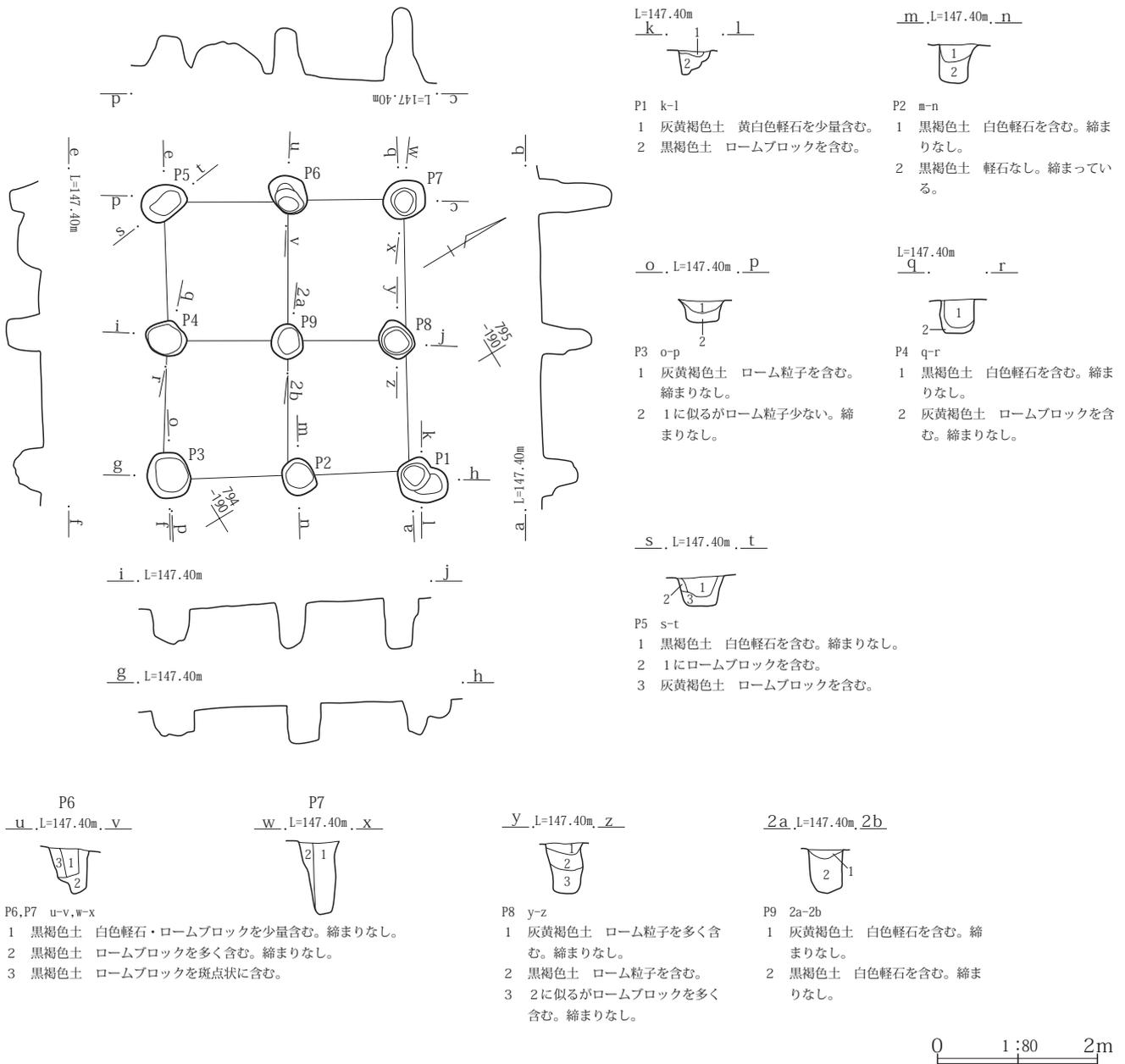
北壁 e-f

- 1 黒褐色土 灰黄褐色土を斑点状に含む。耕作土。上位に現代盛り土あり。
- 2 黒褐色土 白色軽石を含む。
- 3 2にふい黄橙色軽石を含む。Hr-FAか。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
- 5 ロームブロックと灰黄褐色土ブロックの混土。掘り方覆土。



第127図 H区16住居

遺構図 (H区)

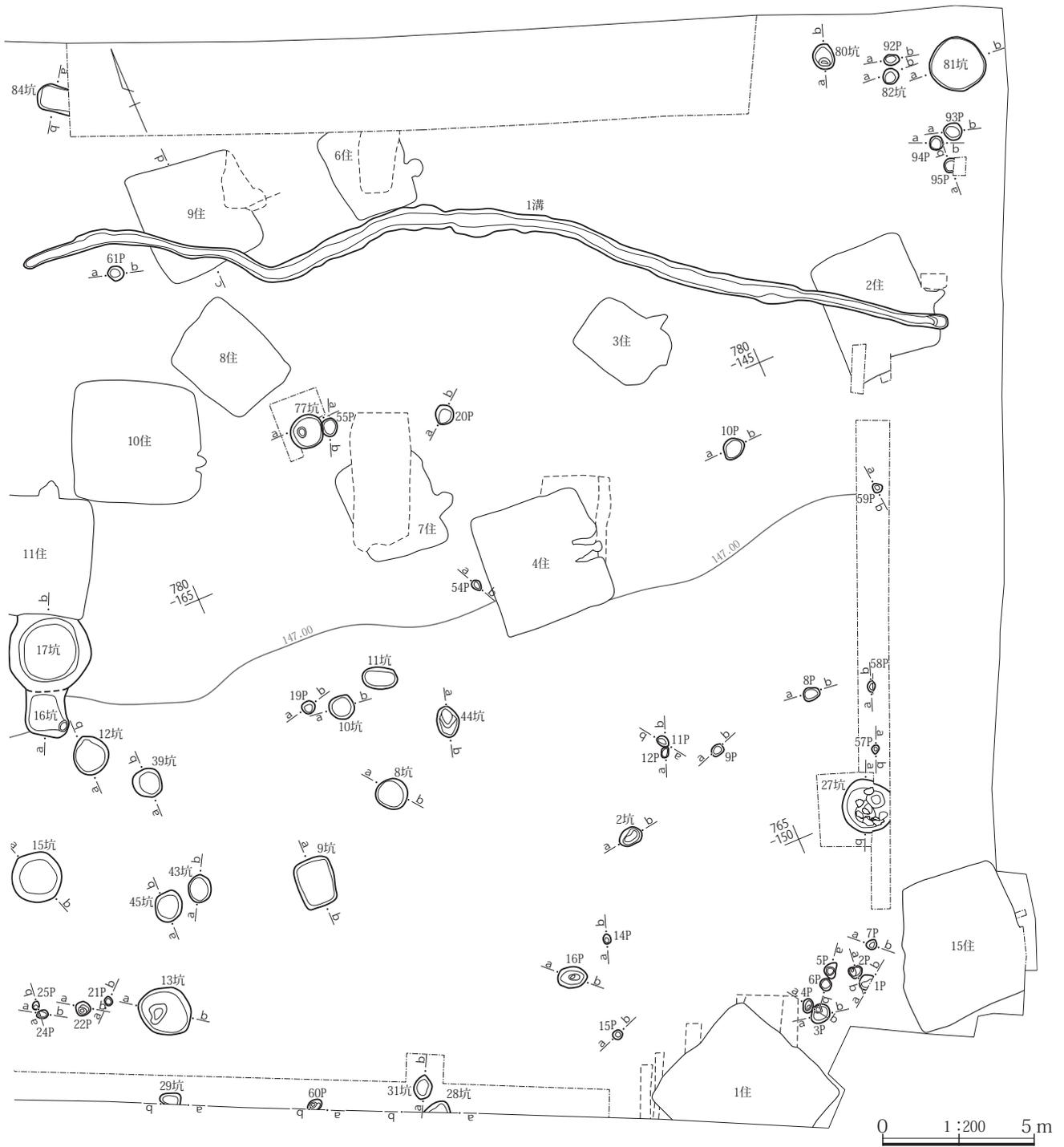
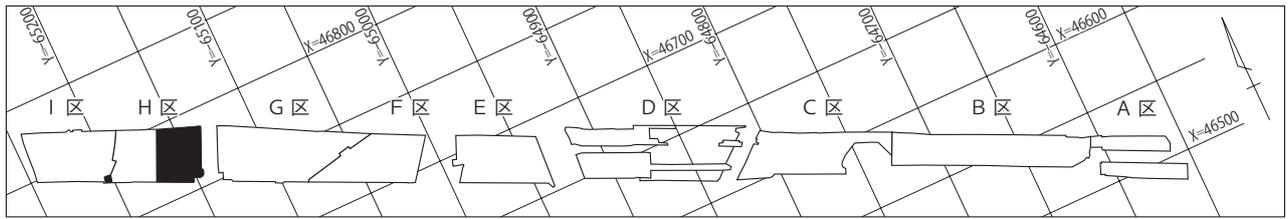


第128図 H区1 掘立柱建物

第30表 H区1 掘立柱建物計測表

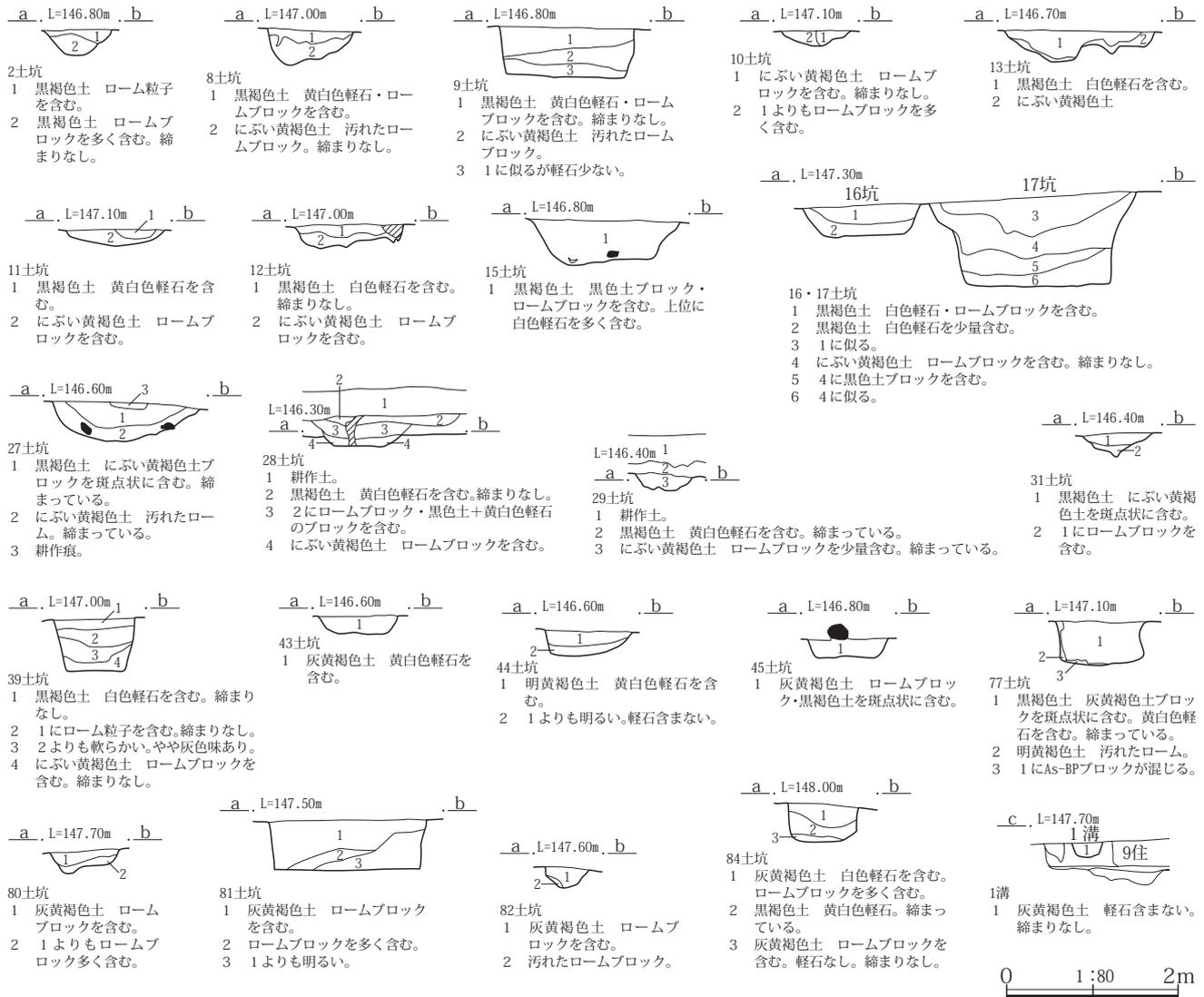
平面形 長方形		規模 2間×2間		長軸方位N-61°-W				
桁行 cm	梁行 cm	桁行柱間 cm	梁行柱間 cm	規模				
				番号	上ノミ径×短径	下ノミ径×短径	深さcm	備考
P7-P1 : 344	P7-P5 : 295	P7-P8 : 177	P7-P6 : 144	1	66×53	26×24	44	
P6-P2 : 340	P8-P4 : 287	P8-P1 : 168	P6-P5 : 152	2	47×44	34×31	51	
P5-P3 : 340	P1-P3 : 305	P6-P9 : 171	P8-P9 : 133	3	60×55	46×42	35	
		P9-P2 : 168	P9-P4 : 154	4	52×44	42×38	42	
		P5-P4 : 170	P1-P2 : 144	5	57×45	40×29	39	
		P4-P3 : 170	P2-P3 : 161	6	53×43	25×17	62	
				7	54×47	27×22	91	
				8	49×42	31×28	62	
				9	44×39	33×26	54	

※1 計測値は1/20原図から起こした数値
 ※2 柱穴間の距離は芯々で計測



第129図 H区東半部溝・土坑・ピット位置図

遺構図 (H区)



第130図 H区東半部溝・土坑断面図

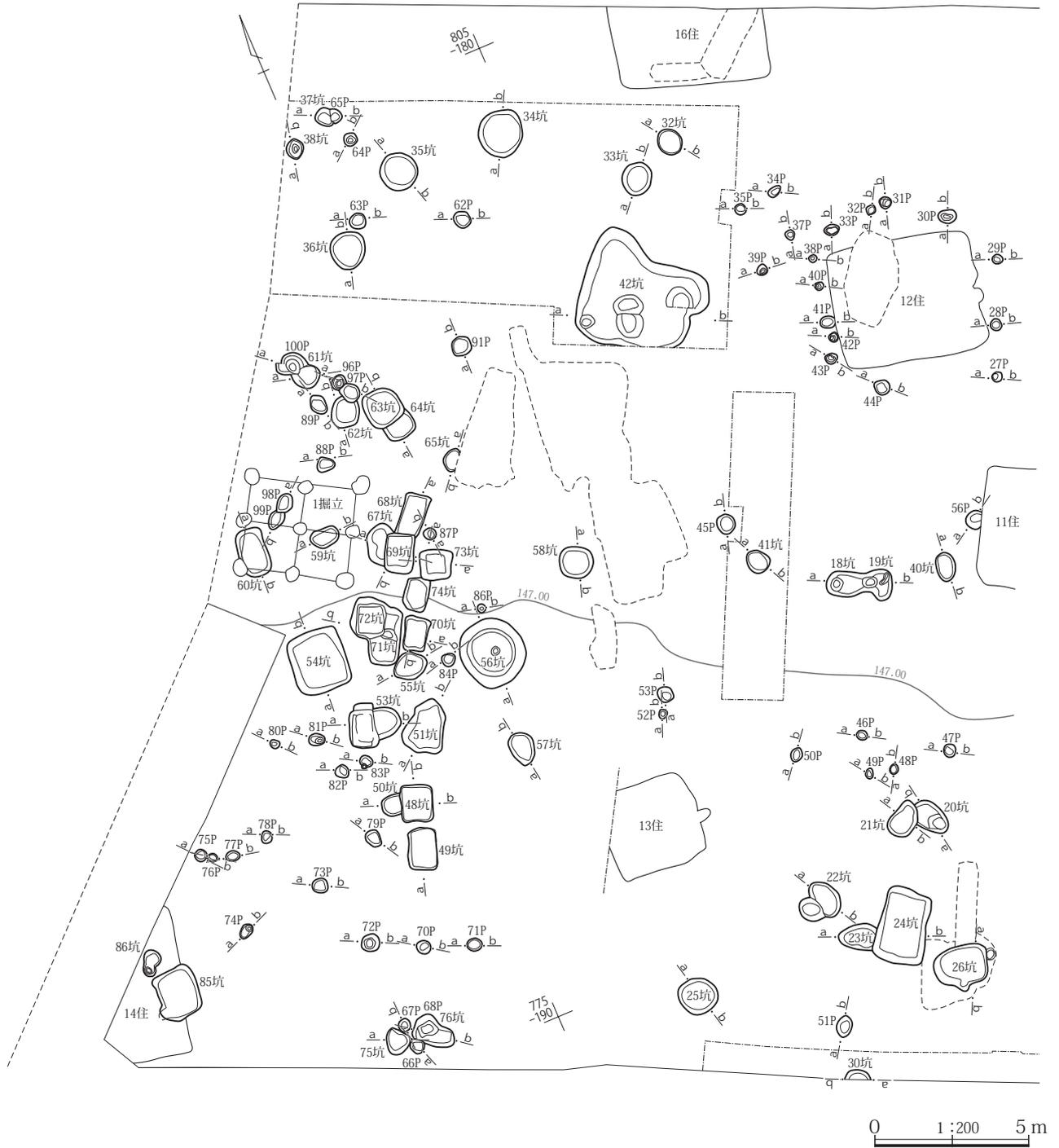
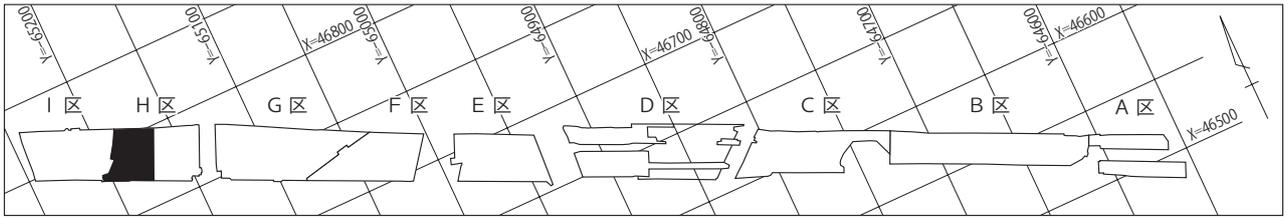
第31表 H区土坑計測表(1)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
2	土坑	H		766-154		80×56・32				
8	土坑	H		771-161		104×101・41				
9	土坑	H		769-164		161×128・64		須恵器1		羽釜片1
10	土坑	H		774-161		85×83・22				
11	土坑	H		774-160		117×74・19				
12	土坑	H		776-169		130×117・29		土師器1		土師器壺?1外面凹凸線縁有り
13	土坑	H		767-170		177×159・37				
15	土坑	H		772-172		173×165・54		土師器260g	古墳?	土師器甕底部他
16	土坑	H		777-170	16坑→17坑	157×145・40	H173	土師器1黒浜・有尾2		土師器甕1
17	土坑	H		779-168	16坑→17坑→11住	290×277・112		土師器2点+330g,黒浜・有尾1,後期前葉2,縄文不明1		土師器模倣杯2
27	土坑	H		764-146		179×173・50		土師器3,黒浜・有尾1,加曾利E1		
28	土坑	H		761-164		88×38・16				
29	土坑	H		764-171		69×37・16				
31	土坑	H		761-164		81×59・27				
39	土坑	H		774-168		96×93・64		土師器2		
43	土坑	H		770-168		92×74・23	H204	黒浜・有尾1		
44	土坑	H		772-158		103×73・31		黒浜・有尾1		
45	土坑	H		770-169		106×86・30	H205	黒浜・有尾1		
77	土坑	H		783-159		113×106・56				
80	土坑	H		788-138		83×67・36		土師器3		
81	土坑	H		785-134		185×182・65				
82	土坑	H		786-137		52×48・32				
84	土坑	H		796-162		103×89・50				

※ 1・3～7・14土坑 欠番

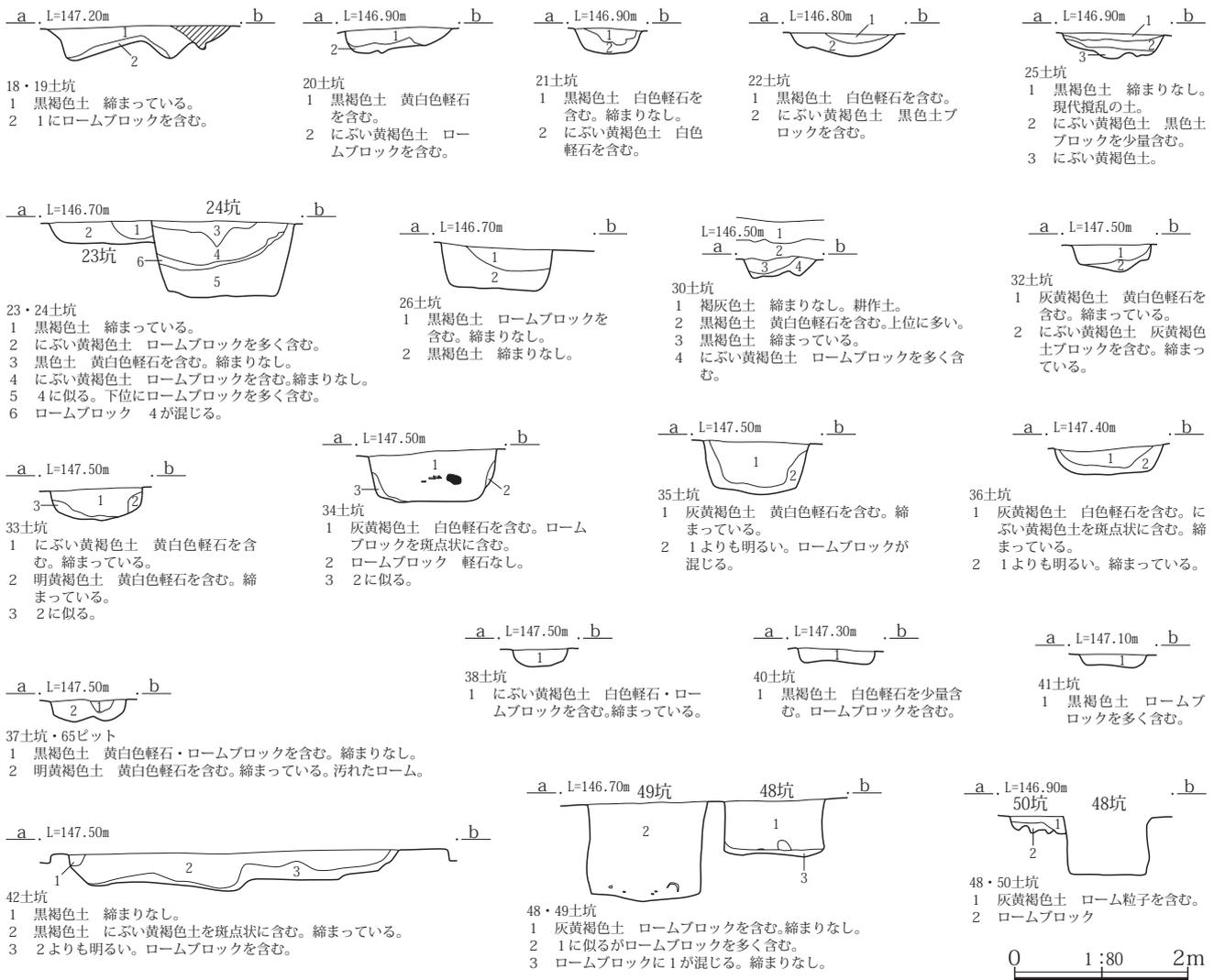
第32表 H区溝計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	重複関係 旧→新	長・幅・深(m・cm・cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	溝	H	1	776～792-138～165	2・9住と重複	31.36・31-91・6-31				



第131図 H区西半部土坑・ピット位置図

遺構図 (H区)



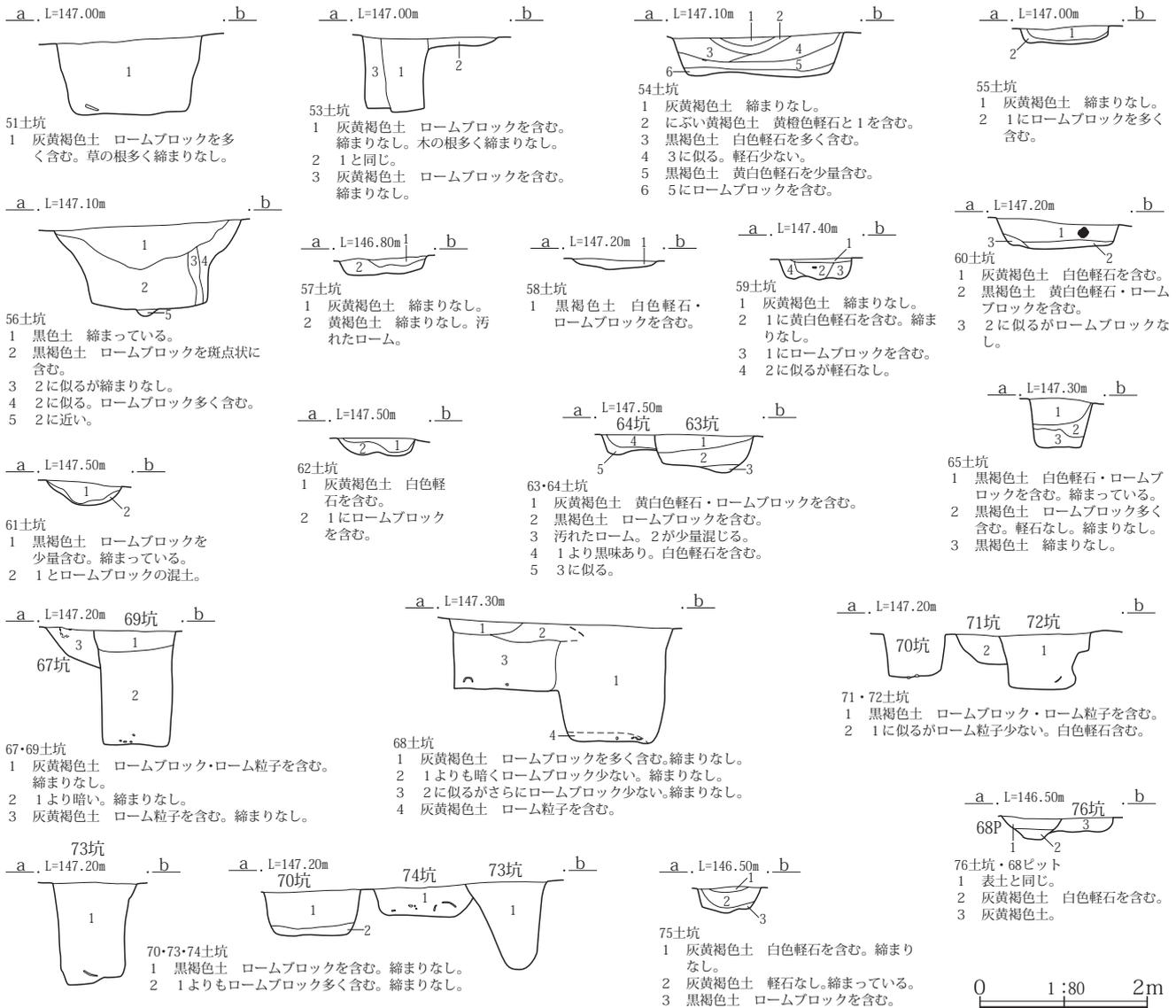
第132図 H区西半部土坑断面図(1)

第33表 H区土坑計測表(2)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
18	土坑	H		783-174	18坑→19坑	164×82・43	H175, H176	黒浜・有尾2		
19	土坑	H		783-174	18坑→19坑	102×54・43		黒浜・有尾2		
20	土坑	H		775-175	20坑→21坑	131×87・36		土師器3, 黒浜・有尾1, 堀之内21		
21	土坑	H		776-176	20坑→21坑	122×83・33	H177, H178	土師器2, 黒浜・有尾1, 堀之内24		
22	土坑	H		774-180		127×75・27	H179	黒浜・有尾3		
23	土坑	H		773-179	23坑→24坑	127×89・27	H180, H181	土師器2, 黒浜・有尾5, 諸磯a2, 加曾利E1		
24	土坑	H		772-177	23坑→24坑	246×165・96	H182 ~ H186	土師器5, 黒浜・有尾3, 諸磯a2, 加曾利E1, 後期前葉1		
25	土坑	H		773-184		131×118・29				
26	土坑	H		770-176		172×148・35		土師器2点+110g		土師器模倣杯2
30	土坑	H		769-181		85×31・23				
32	土坑	H		799-175		88×75・31	H187 ~ H193	黒浜・有尾18		
33	土坑	H		798-176		106×94・38	H194	黒浜・有尾8		
34	土坑	H		801-179		158×142・60	H195 ~ H198	黒浜・有尾29		
35	土坑	H		801-183		124×119・57				
36	土坑	H		800-185		121×113・37	H199, H200	黒浜・有尾4		
37	土坑	H		804-185	P 65と重複	63×57・28				
38	土坑	H		804-185		66×57・31				
40	土坑	H		783-172		93×62・20		黒浜・有尾1, 加曾利E1		
41	土坑	H		785-177		79×67・15	H201, H202	黒浜・有尾3		
42	土坑	H		793-176		408×372・47	H203	黒浜・有尾3		
48	土坑	H		782-190	50坑→48坑	118×107・72				人骨出土
49	土坑	H		780-191		137×94・118				人骨出土
50	土坑	H		783-191	50坑→48坑	68×62・22				

※ 46・47土坑 欠番

第4章 検出された遺構と遺物



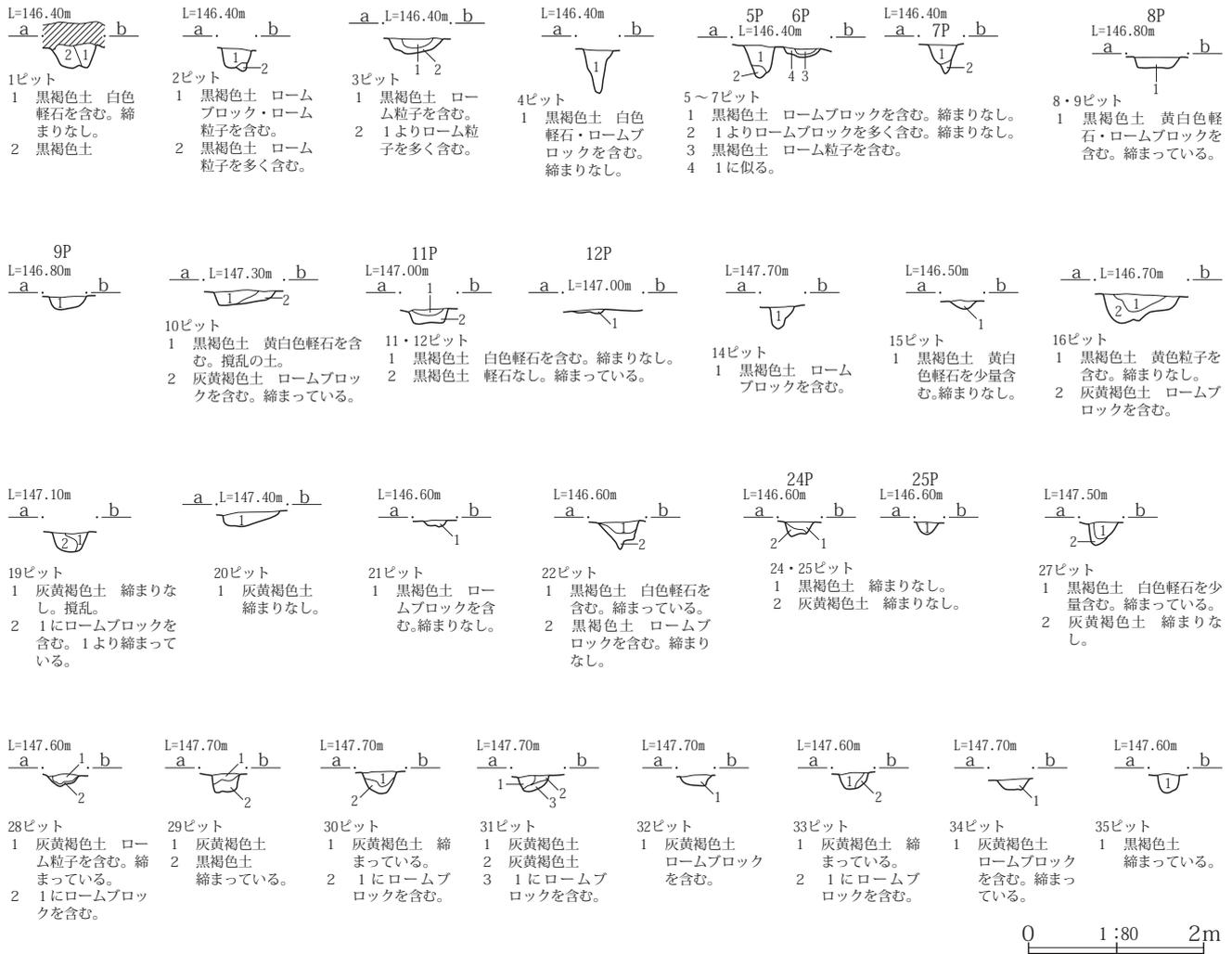
第133図 H区西半部土坑断面図(2)

第34表 H区土坑計測表(3)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
51	土坑	H		784-189		176×134・97				人骨出土
53	土坑	H		785-191		146×93・78		黒浜・有尾1		人骨出土
54	土坑	H		787-191		204×178・58		土師器2点+540g, 花積下層1, 古墳?		内外面赤彩高杯1, 内外面赤彩内陵杯1, 番号取り上げ土器有り
55	土坑	H		786-189		112×92・29		花積下層1		
56	土坑	H		785-186		229×214・123		土師器5		
57	土坑	H		782-187		107×78・25				
58	土坑	H		787-183		110×101・30		土師器1		
59	土坑	H		791-190	1掘立と重複	94×62・36				
60	土坑	H		792-192	60坑→1掘立P5	158×94・37		土師器4, 黒浜・有尾2		
61	土坑	H		796-188	61坑→P100	89×77・24		黒浜・有尾1, 後期前葉1		
62	土坑	H		795-188	62坑→P97	102×88・22		後期前葉1		
63	土坑	H		794-186	64坑→63坑	122×119・37		土師器2, 黒浜・有尾1		
64	土坑	H		794-186	64坑→63坑	102×76・24				
65	土坑	H		792-185		77×46・61				
67	土坑	H		790-188	67坑→69坑	129×91・48				人骨出土
68	土坑	H		791-187	68坑→69坑	135×78・86		土師器2, 黒浜・有尾4		人骨出土
69	土坑	H		790-188	67・68坑→69坑	128×95・137				人骨出土
70	土坑	H		787-188		108×78・60		土師器5, 黒浜・有尾3		人骨出土
71	土坑	H		787-189	71坑→72坑	196×103・56				人骨出土
72	土坑	H		788-189	71坑→72坑	136×112・73				人骨出土
73	土坑	H		789-187	74坑→73坑	104×99・133		土師器1, 黒浜・有尾5		人骨出土
74	土坑	H		788-188	74坑→73坑	112×77・47				人骨出土
75	土坑	H		775-194		89×76・33				
76	土坑	H		775-193	P66→76坑	138×92・34				
85	土坑	H		779-200	14住→85坑	164×139・78				第125図参照
86	土坑	H		781-201	14住と重複	86×54・30				セクションなし

※ 52・66・78・79土坑 欠番

遺構図 (H区)



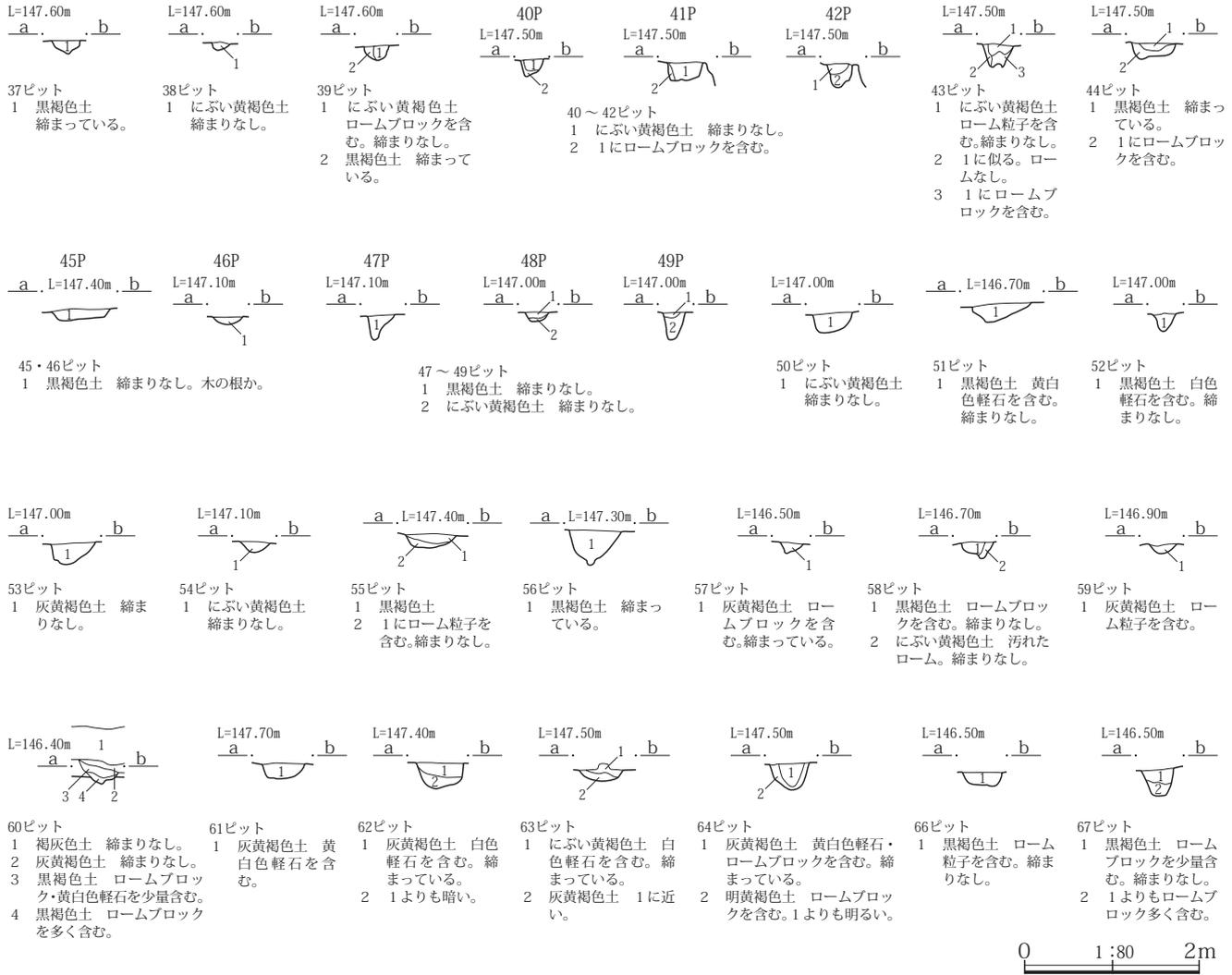
第134図 H区 1~35ピット断面図

第35表 H区 1~35ピット計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	重複関係	旧→新	長×短・深(cm)	覆土	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	ピット	H		759-149			55×43・24					
2	ピット	H		760-149			44×39・39					
3	ピット	H		759-151			68×59・29					
4	ピット	H		759-151			46×32・52			土師器1		甕片1
5	ピット	H		760-150			52×41・34					
6	ピット	H		760-150			41×36・14					
7	ピット	H		760-149			35×31・43					
8	ピット	H		769-147			54×44・18					
9	ピット	H		768-151			42×34・19					
10	ピット	H		777-146			72×65・28					
11	ピット	H		769-152			44×32・19					
12	ピット	H		769-152			33×23・8					
14	ピット	H		764-156			33×24・25					
15	ピット	H		761-157			33×32・9					
16	ピット	H		763-158			97×70・44					
19	ピット	H		775-777			43×43・25					
20	ピット	H		782-154			66×62・16					
21	ピット	H		768-172			29×24・12			土師器1		
22	ピット	H		768-173			49×46・32					
24	ピット	H		769-174			38×30・20					
25	ピット	H		769-175			28×22・24					
27	ピット	H		788-168			35×33・28					
28	ピット	H		789-167			40×35・13			土師器1		
29	ピット	H		791-167			34×31・22					
30	ピット	H		793-167			60×44・26					
31	ピット	H		795-169			41×37・21					
32	ピット	H		795-170			35×31・9					
33	ピット	H		794-171			50×37・22					
34	ピット	H		796-172			46×30・17					
35	ピット	H		796-174			38×34・19					

※ 13・17・18・23・26・36ピット 欠番

第4章 検出された遺構と遺物

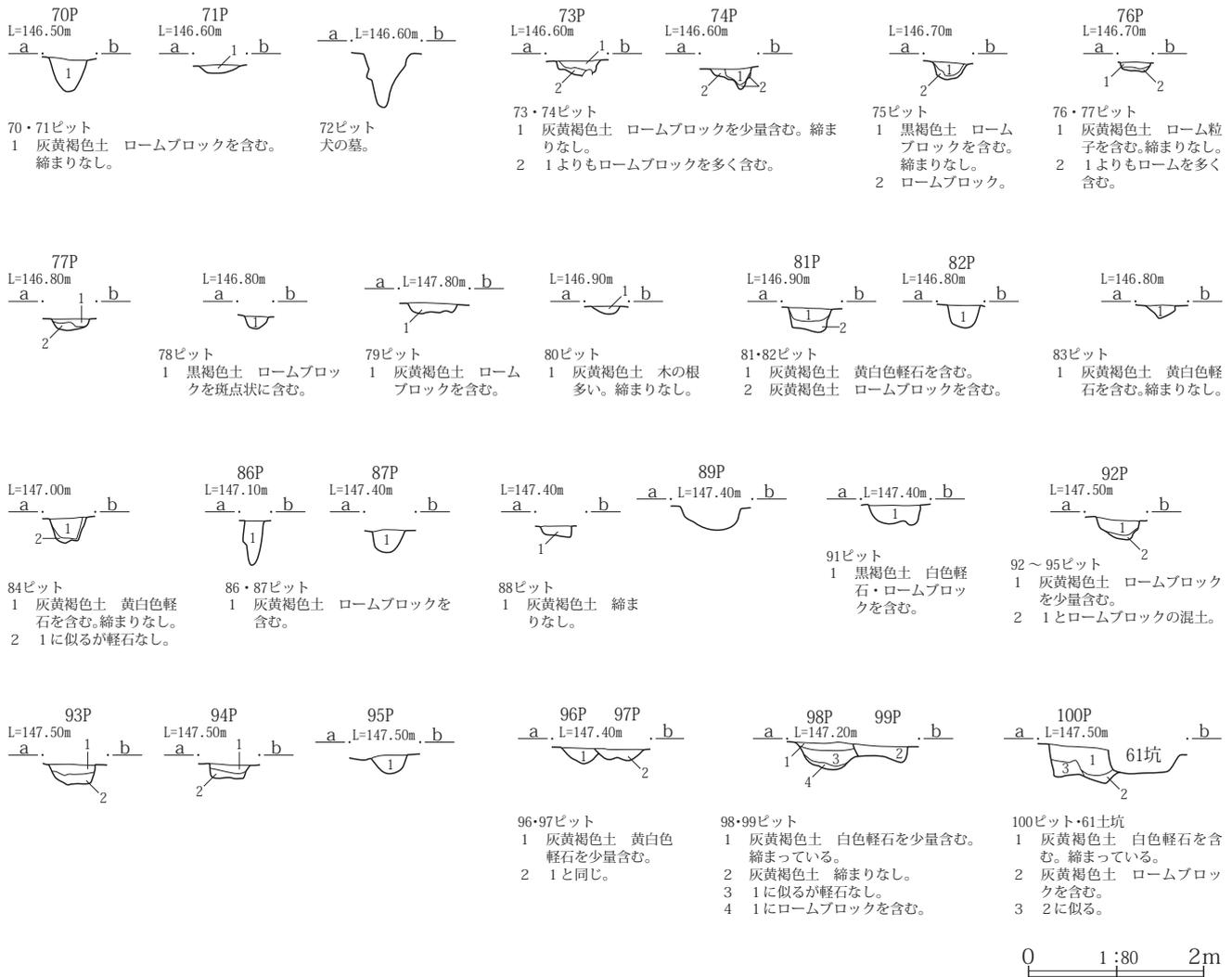


第135図 H区37～67ピット断面図

第36表 H区37～67ピット計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	覆土	遺物登録	破片	時期・時代	備考
37	ピット	H		795-172		34×30・19					
38	ピット	H		794-172		26×25・11					
39	ピット	H		794-174		35×34・17					
40	ピット	H		793-172		29×27・21					
41	ピット	H		792-172	P41→12住	50×42・22					
42	ピット	H		791-173		32×30・25					
43	ピット	H		791-173		39×36・30					
44	ピット	H		789-172		53×48・19					
45	ピット	H		787-178		64×58・17					
46	ピット	H		779-177		36×31・21					
47	ピット	H		777-174		44×37・32			土師器1		
48	ピット	H		778-176		35×28・16					
49	ピット	H		778-177		35×24・23					
50	ピット	H		779-179		48×37・27					
51	ピット	H		770-181		71×47・20			土師器1		
52	ピット	H		782-182		30×27・21					
53	ピット	H		783-182		56×50・27					
54	ピット	H		776-156		39×29・12					
55	ピット	H		783-158		59×52・20			土師器4		
56	ピット	H		784-170	P56→11住	63×56・38					
57	ピット	H		766-146		30×24・11					
58	ピット	H		768-145		39×26・19					
59	ピット	H		774-142		34×32・12			土師器1		
60	ピット	H		762-167		50×36・20					
61	ピット	H		790-163		51×48・20					
62	ピット	H		799-182		56×49・30					
63	ピット	H		801-185		54×52・17					
64	ピット	H		803-184		45×44・34					
65	ピット	H		804-184	37坑と重複	47×39・26					第132図に掲載
66	ピット	H		775-194	76坑→P66	51×44・17					
67	ピット	H		776-194		44×38・34					

遺構図 (H区)



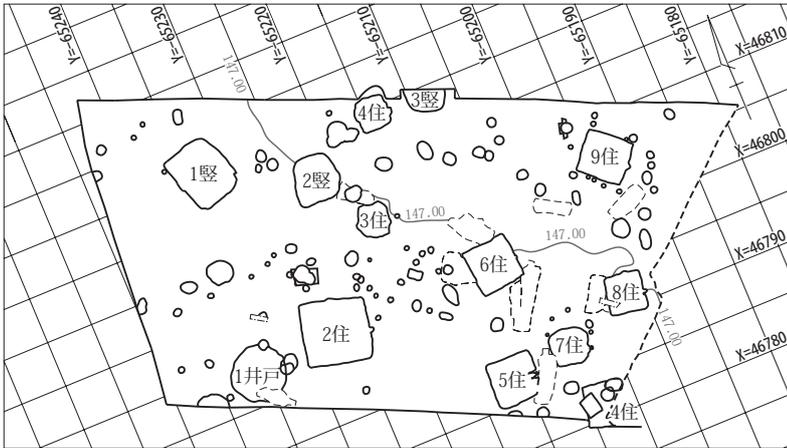
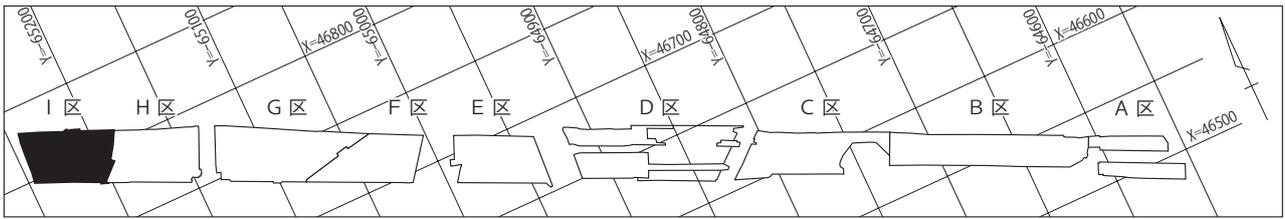
第136図 H区70～100ピット断面図

第37表 H区68～100ピット計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	覆土	遺物登録	破片	時期・時代	備考
68	ピット	H		776-193	重複と重複	68×48・24					第133図に掲載
70	ピット	H		778-777		48×43・39					
71	ピット	H		778-776		49×42・13					
72	ピット	H		779-194		60×56・54					犬骨出土
73	ピット	H		781-195		53×50・16					
74	ピット	H		781-197		52×37・25					
75	ピット	H		784-198		40×38・21					
76	ピット	H		784-198		34×26・10					
77	ピット	H		783-197		46×33・15					
78	ピット	H		783-196		40×33・18					
79	ピット	H		782-192		56×47・16					
80	ピット	H		786-194		32×27・18					
81	ピット	H		786-193		52×39・36					
82	ピット	H		784-788		45×42・32					
83	ピット	H		784-787		43×36・26					
84	ピット	H		786-188		45×43・26					
86	ピット	H		788-186		29×26・53					
87	ピット	H		790-187		43×37・25					
88	ピット	H		794-189		57×49・27					
89	ピット	H		795-189		68×51・29					
91	ピット	H		795-184		70×64・30					
92	ピット	H		787-136		50×34・29					
93	ピット	H		784-135		59×57・28					
94	ピット	H		784-136		46×43・18					
95	ピット	H		783-136		50×42・26					
96	ピット	H		796-188	P97→P96	51×48・30					
97	ピット	H		795-187	62坑・P96→P97	67×57・49					
98	ピット	H		793-191	P99→P98	72×51・32					
99	ピット	H		793-191	P99→P98	60×48・22					
100	ピット	H		797-189	61坑→P100	88×76・44					

※ 69・85・90ピット 欠番

第4章 検出された遺構と遺物

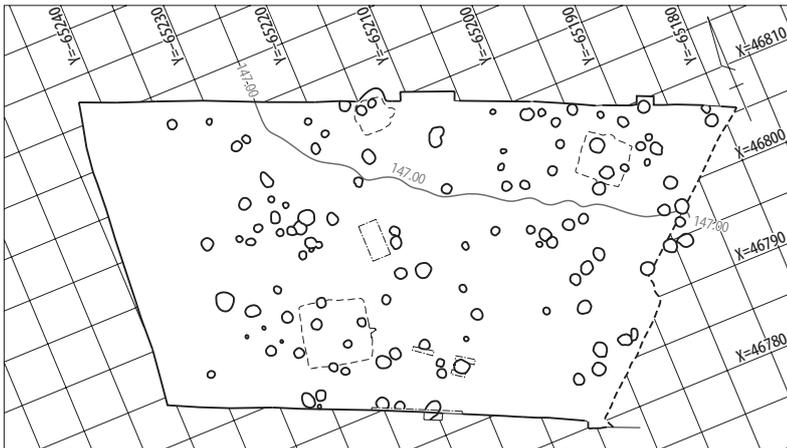


I区遺構集計

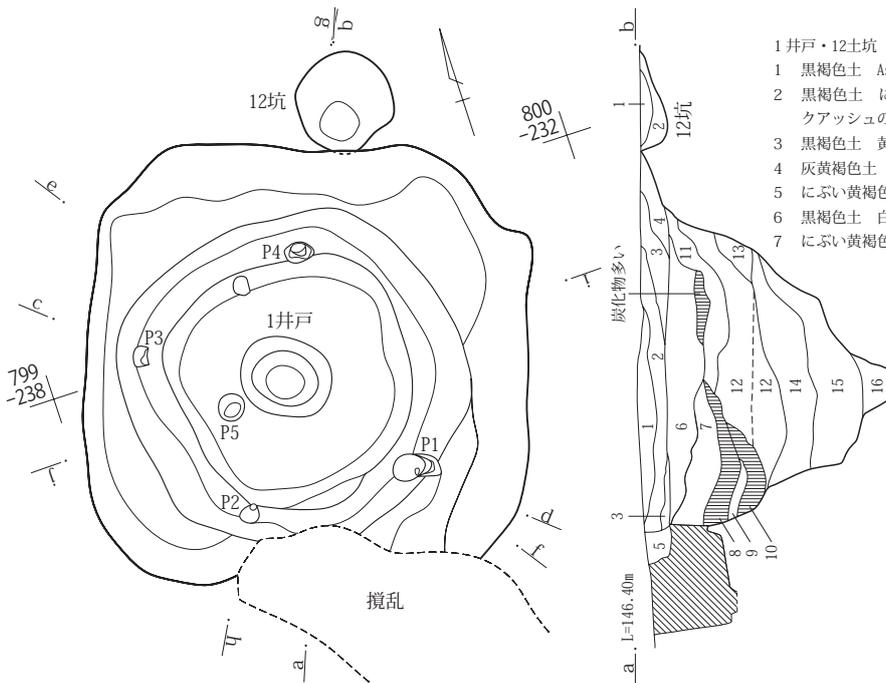
	1面	2面	小計
住居	8	3	11
掘立柱建物	0	0	0
溝	0	0	0
土坑	58 76穴番	113	171
ピット	43	6	49
道	0	0	0
井戸	1	0	1
集石	0	1	1

* 2面住居は「竪穴」

I区1面



I区2面

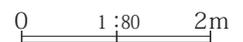


1井戸・12土坑

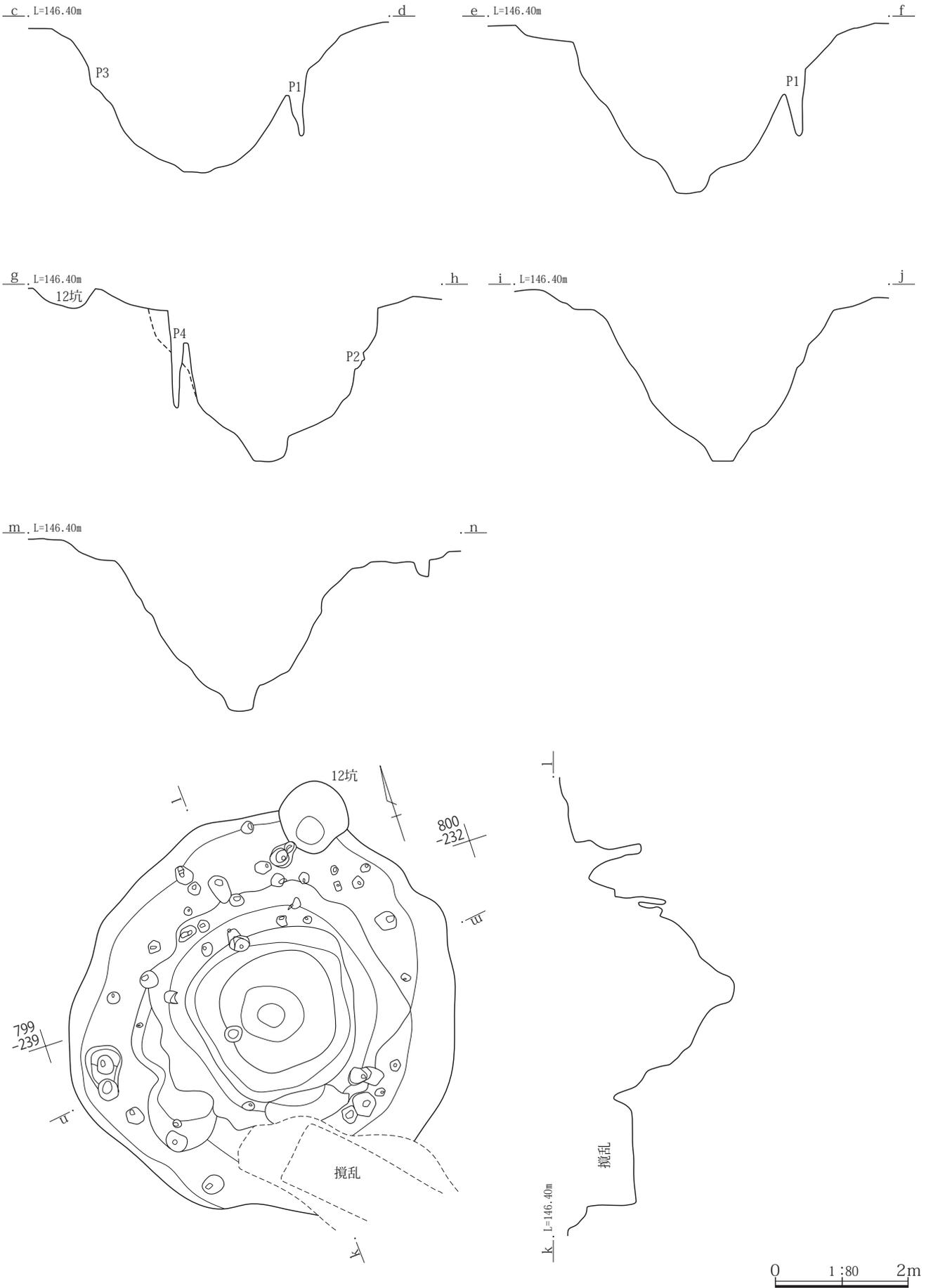
- 1 黒褐色土 As-B軽石を多く含む。
- 2 黒褐色土 にぶい黄褐色土(As-Bアッシュ)をブロック状に含む。Bのピンクアッシュの上に青灰色アッシュあり。締まりなし。
- 3 黒褐色土 黄白色軽石を含む。1・2に比べ締まっている。
- 4 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。攪乱の埋め土。
- 6 黒褐色土 白色軽石を含む。底部に炭化物を多く含む。締まっている。
- 7 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 8 灰黄褐色土 炭化物を含む。
- 9 7に近いがローム粒子を含む。締まりなし。
- 10 8と同じ。
- 11 7と同じ。
- 12 にぶい黄褐色土 締まりなし。11よりも暗い。
- 13 9と同じ。
- 14 暗褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。
- 15 12に近い。
- 16 暗褐色土 ロームブロック・黒色土ブロックを含む。締まりなし。水分多い。砂質。

12土坑

- 1 黒褐色土 締まりなし。
- 2 1にロームブロックを含む。締まりなし。



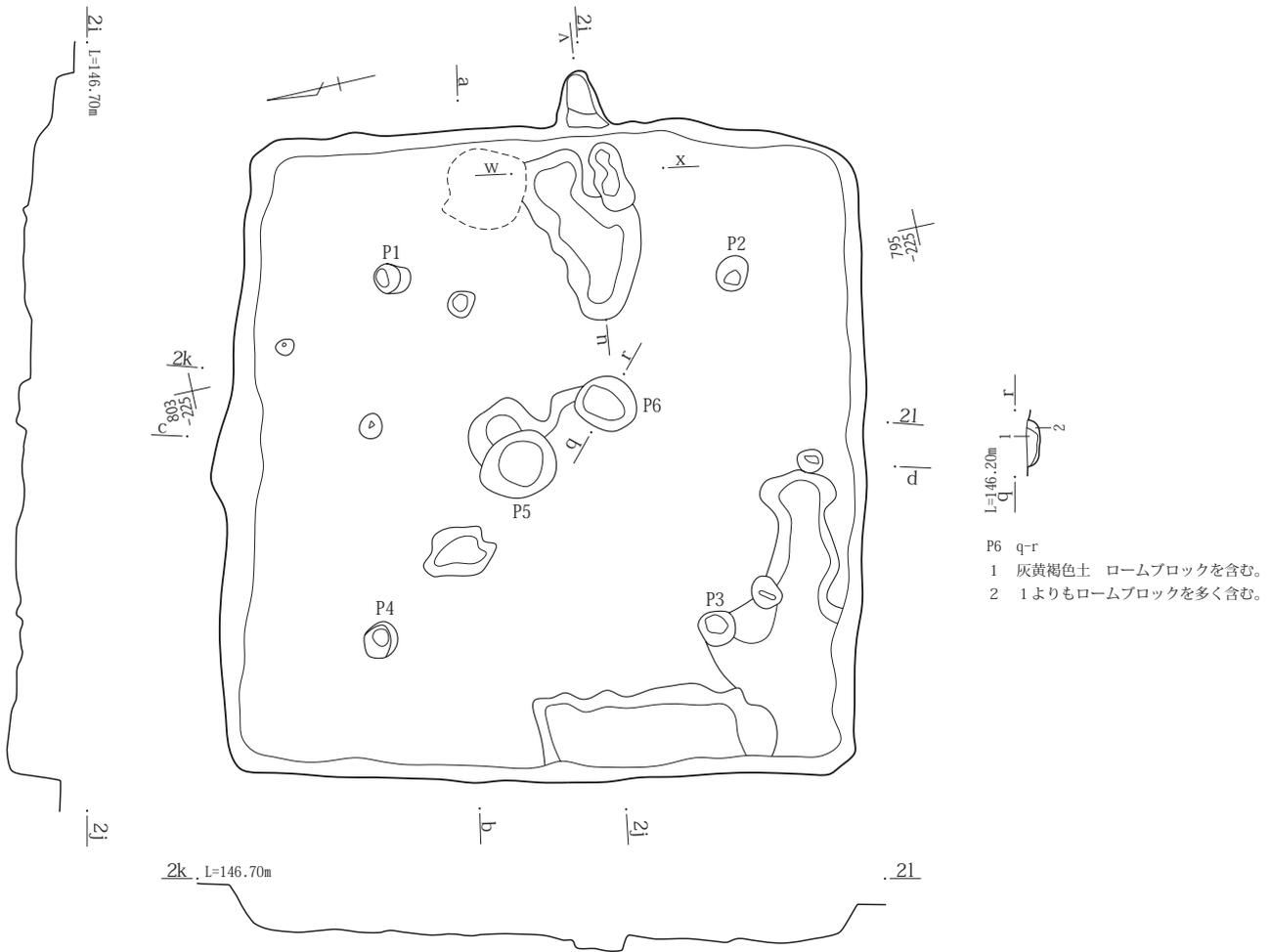
第137図 I区全体図、1井戸(1)



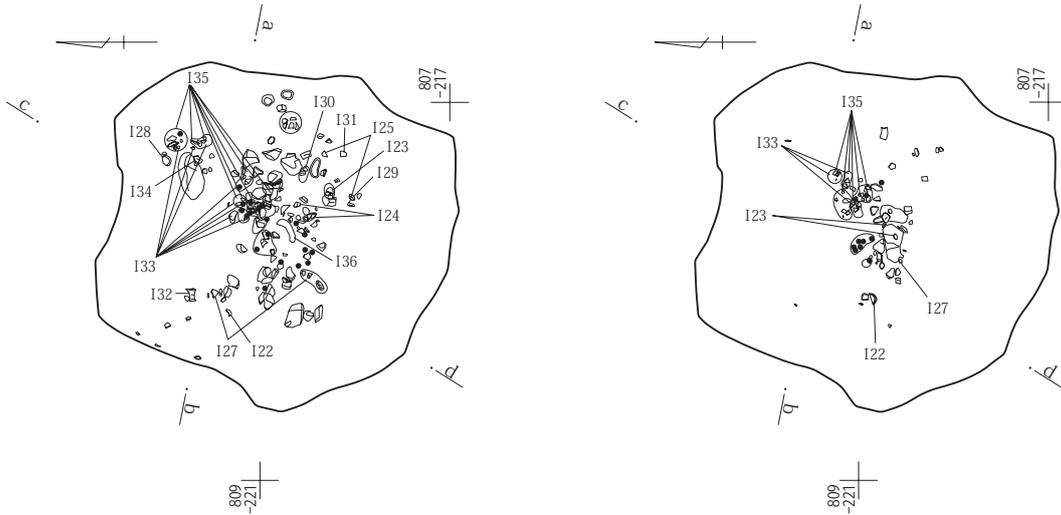
第138图 I区1井戸(2)

第4章 検出された遺構と遺物



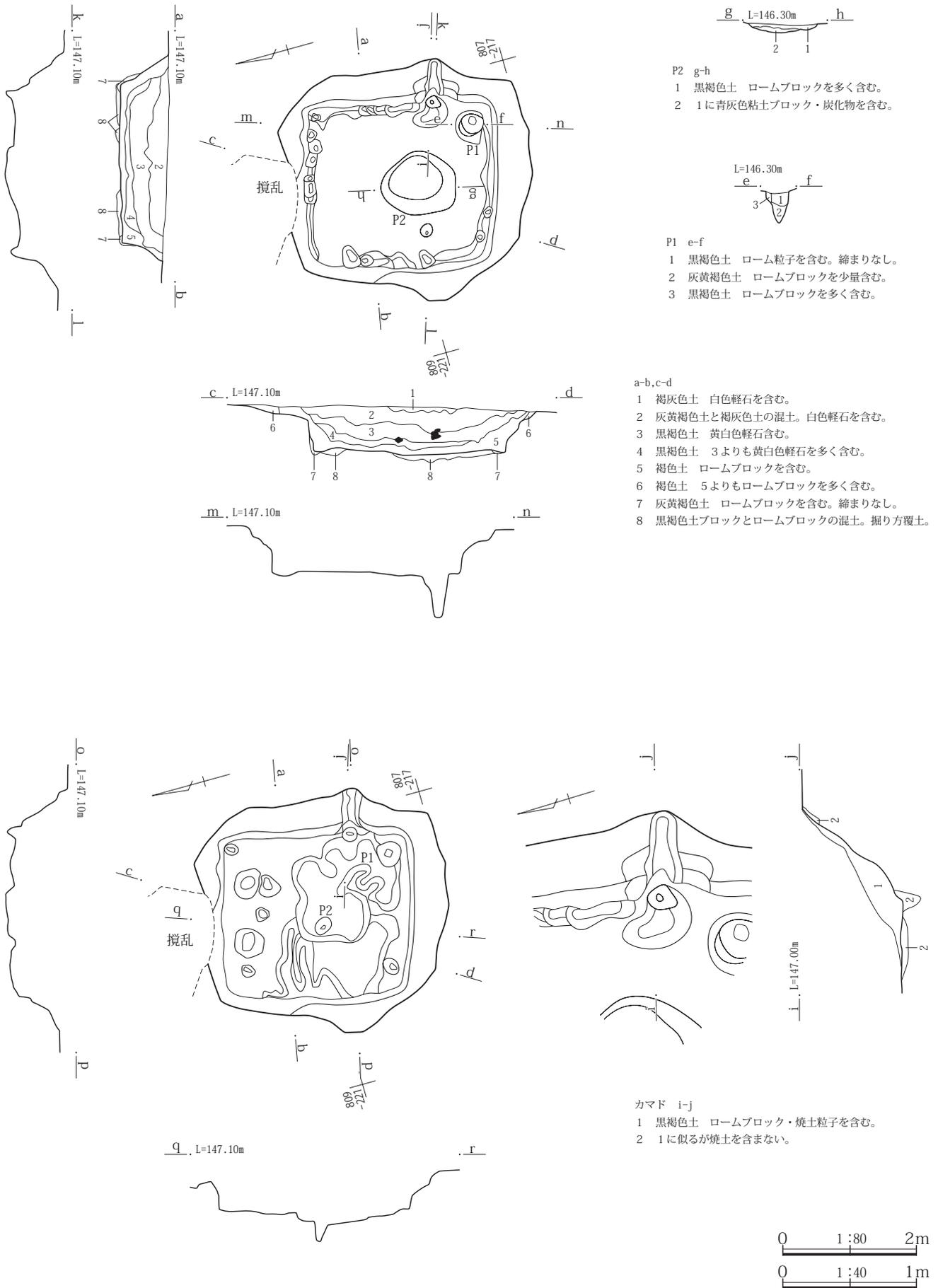


3住居



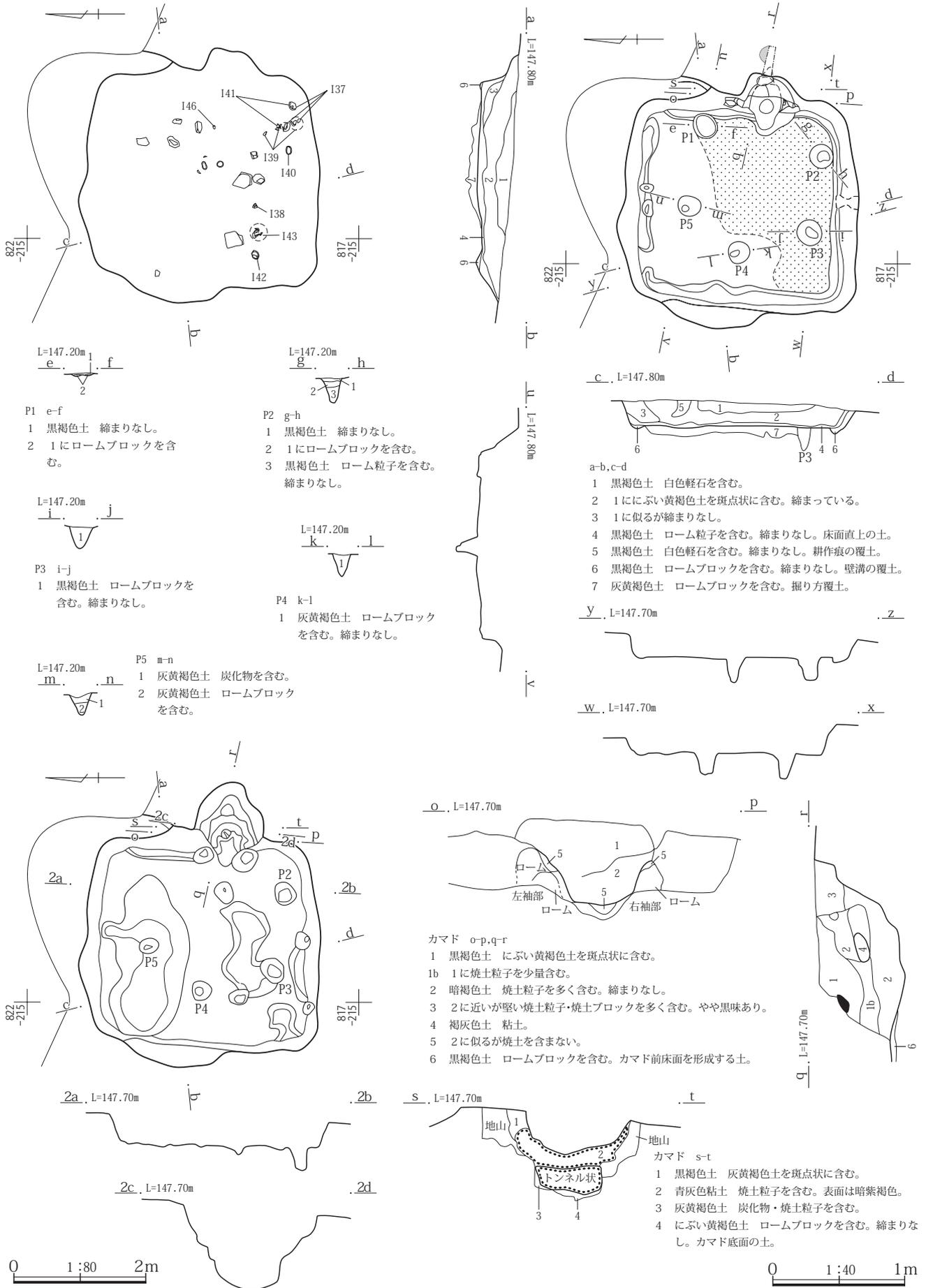
第141図 I区2住居(3)、3住居(1)

遺構図(I区)

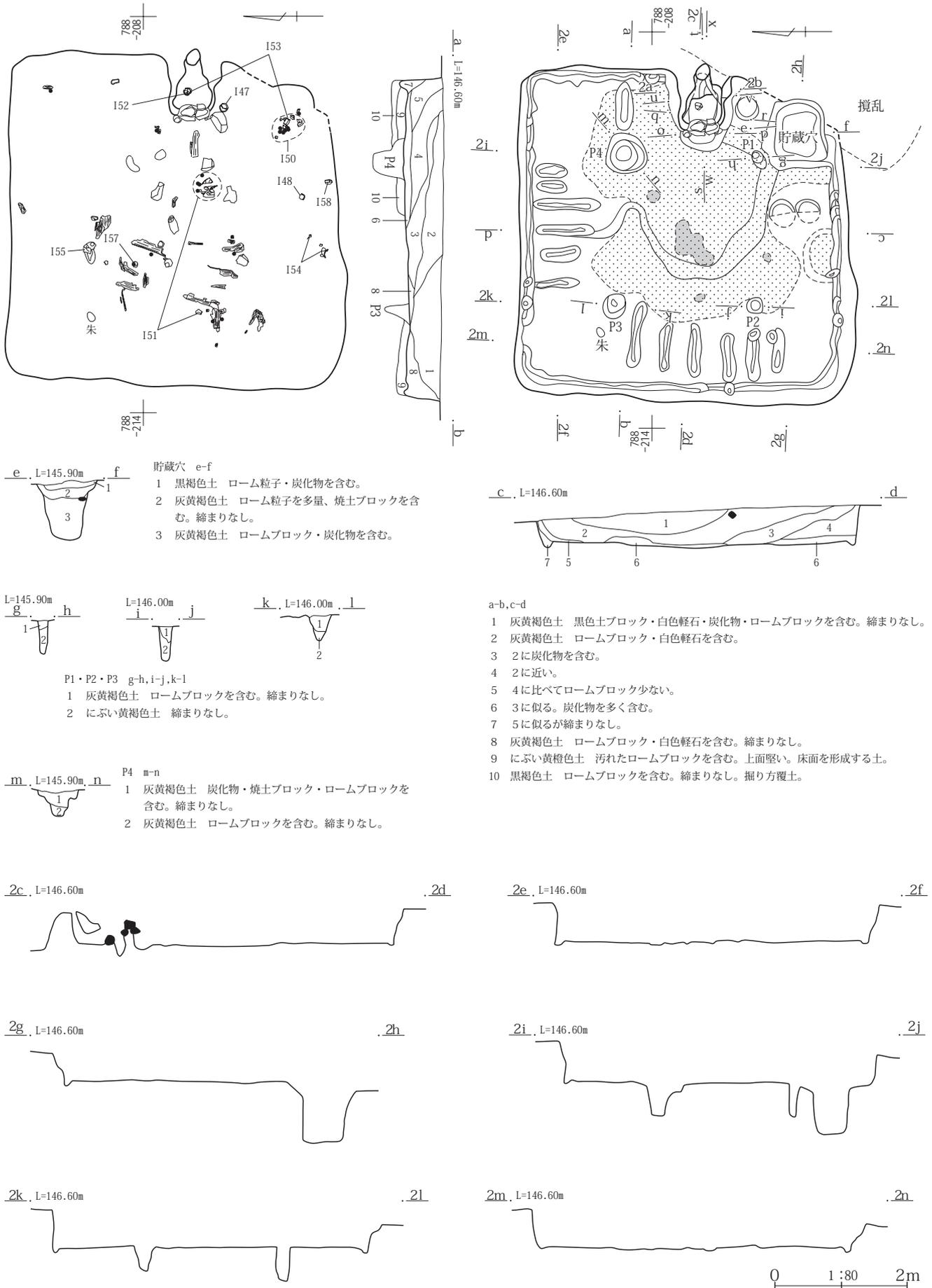


第142図 I区3住居(2)

第4章 検出された遺構と遺物



第143図 I区4住居



貯蔵穴 e-f
 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物を含む。
 2 灰黄褐色土 ローム粒子を多量、焼土ブロックを含む。縮まりなし。
 3 灰黄褐色土 ロームブロック・炭化物を含む。

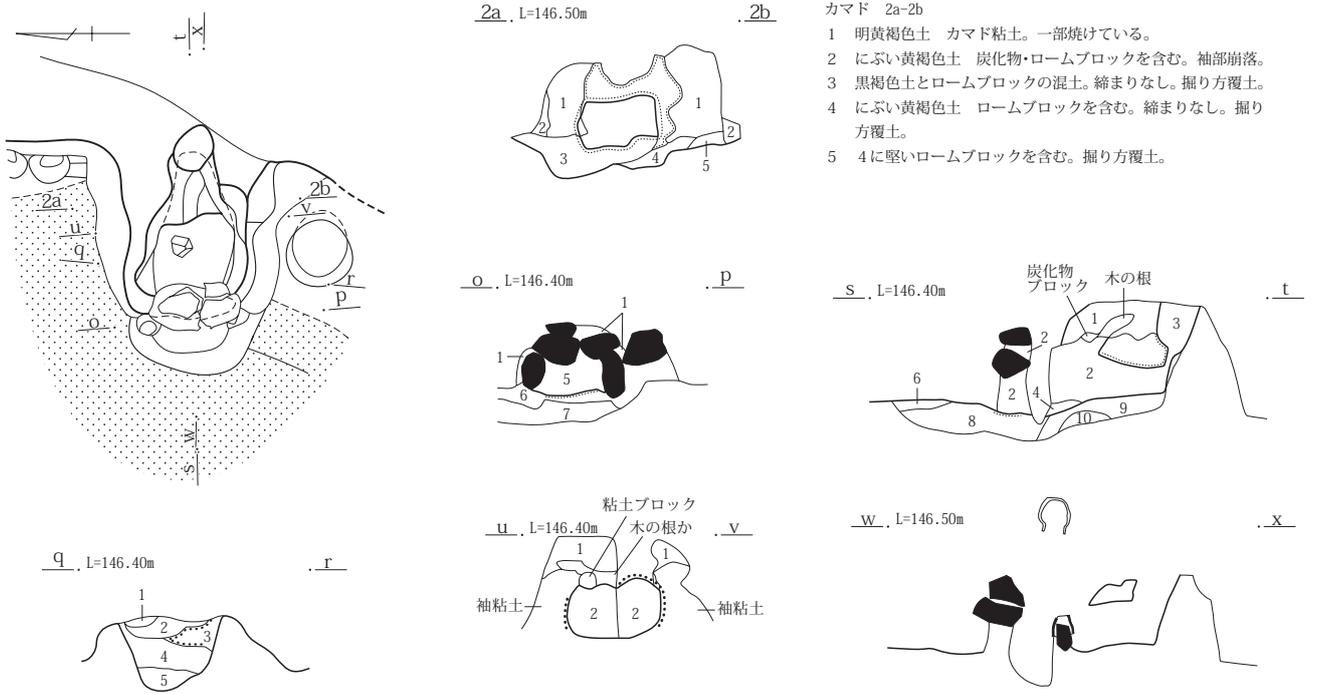
P1・P2・P3 g-h, i-j, k-l
 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。縮まりなし。
 2 にぶい黄褐色土 縮まりなし。

P4 m-n
 1 灰黄褐色土 炭化物・焼土ブロック・ロームブロックを含む。縮まりなし。
 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。縮まりなし。

a-b, c-d
 1 灰黄褐色土 黒色土ブロック・白色軽石・炭化物・ロームブロックを含む。縮まりなし。
 2 灰黄褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。
 3 2に炭化物を含む。
 4 2に近い。
 5 4に比べてロームブロック少ない。
 6 3に似る。炭化物を多く含む。
 7 5に似るが縮まりなし。
 8 灰黄褐色土 ロームブロック・白色軽石を含む。縮まりなし。
 9 にぶい黄褐色土 汚れたロームブロックを含む。上面堅い。床面を形成する土。
 10 黒褐色土 ロームブロックを含む。縮まりなし。掘り方覆土。

第144図 I区5住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



カマド 2a-2b

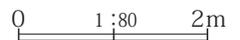
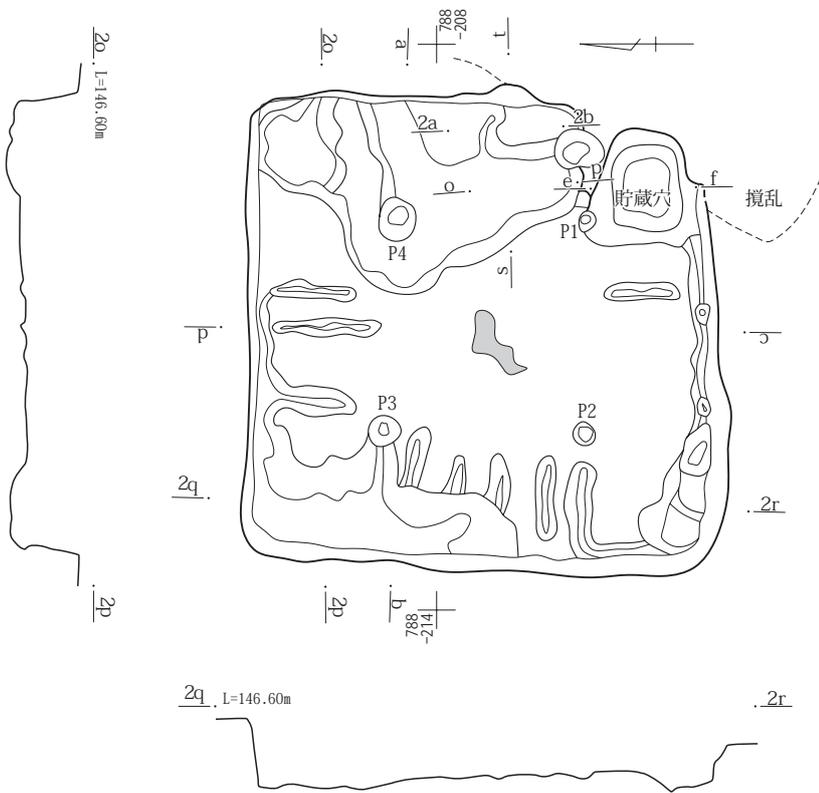
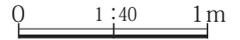
- 1 明黄褐色土 カマド粘土。一部焼けている。
- 2 にぶい黄褐色土 炭化物・ロームブロックを含む。袖部崩落。
- 3 黒褐色土とロームブロックの混土。締まりなし。掘り方覆土。
- 4 にぶい黄褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。掘り方覆土。
- 5 4に堅いロームブロックを含む。掘り方覆土。

カマド q-r

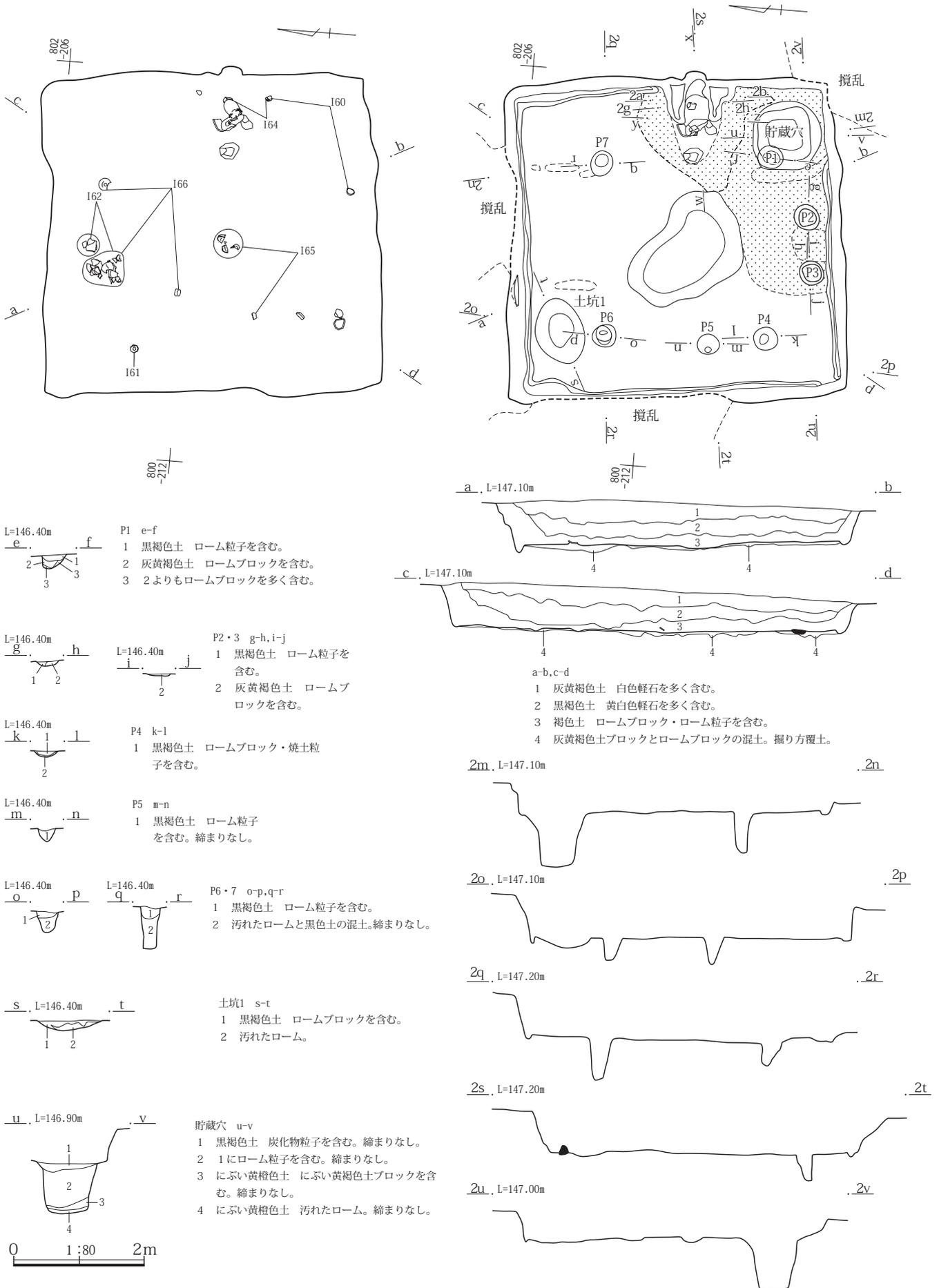
- 1 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 1より明るい。ロームブロックを含む。
- 3 焼土ブロック よく焼けて堅い。
- 4 にぶい黄褐色土 焼土ブロックを含む。締まりなし。
- 5 暗褐色土 炭化物・焼土粒子を含む。底面に灰層あり。

カマド o-p,s-t,u-v

- 1 明黄褐色土 粘土。天井部を形成し石を囲む。
- 2 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
- 3 2に近いがやや明るい。
- 4 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を含む。底面は灰が広がる。
- 5 暗褐色土 焼土粒子を多量に含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを含む。床面を形成する土。堅い。
- 7 黒褐色土 ロームブロックを含む。締まりなし。掘り方覆土。
- 8 6に似るがロームブロックが大きい。
- 9 7に近い。掘り方の土。
- 10 8に近い。

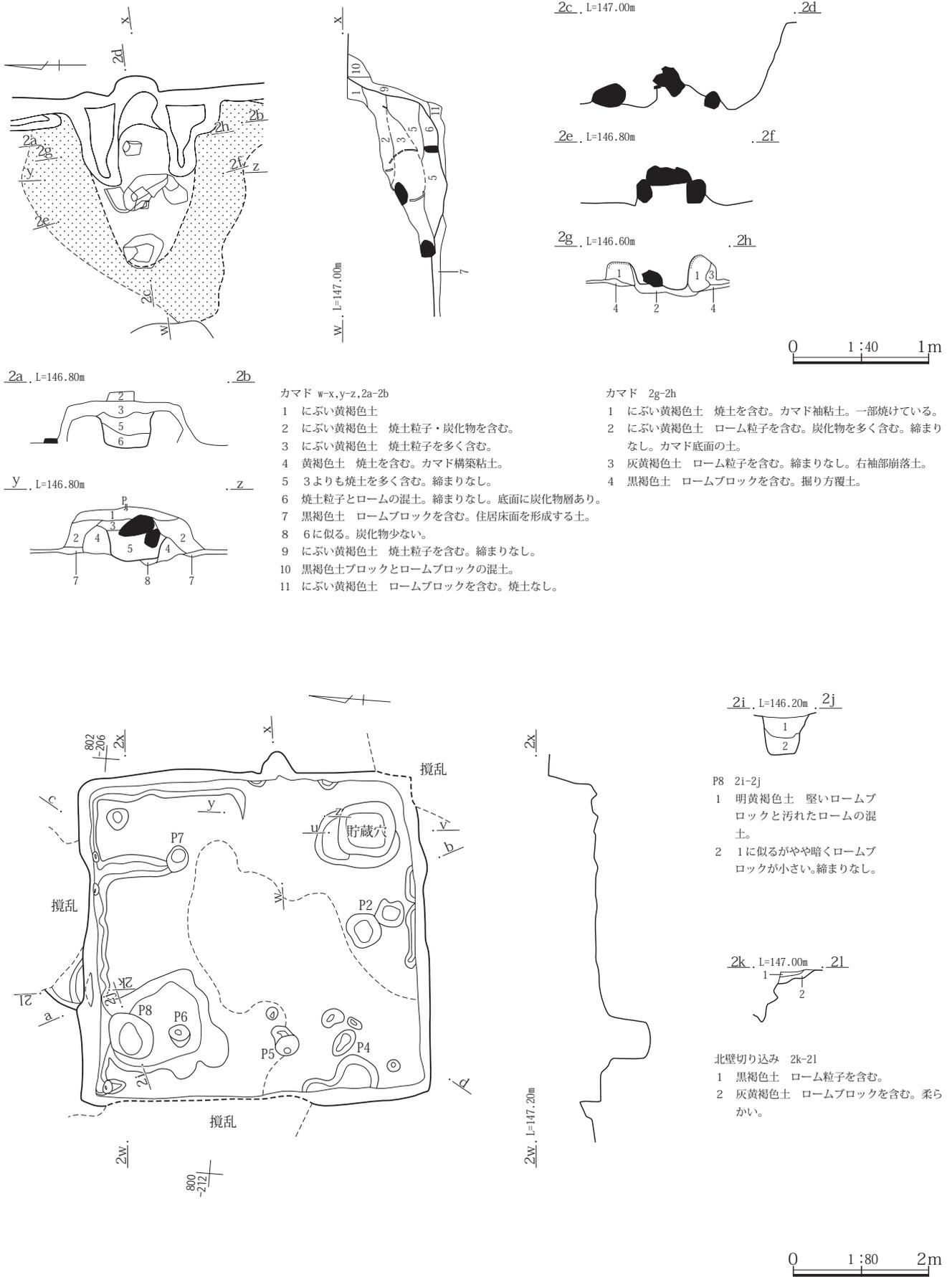


第145図 I区5住居(2)

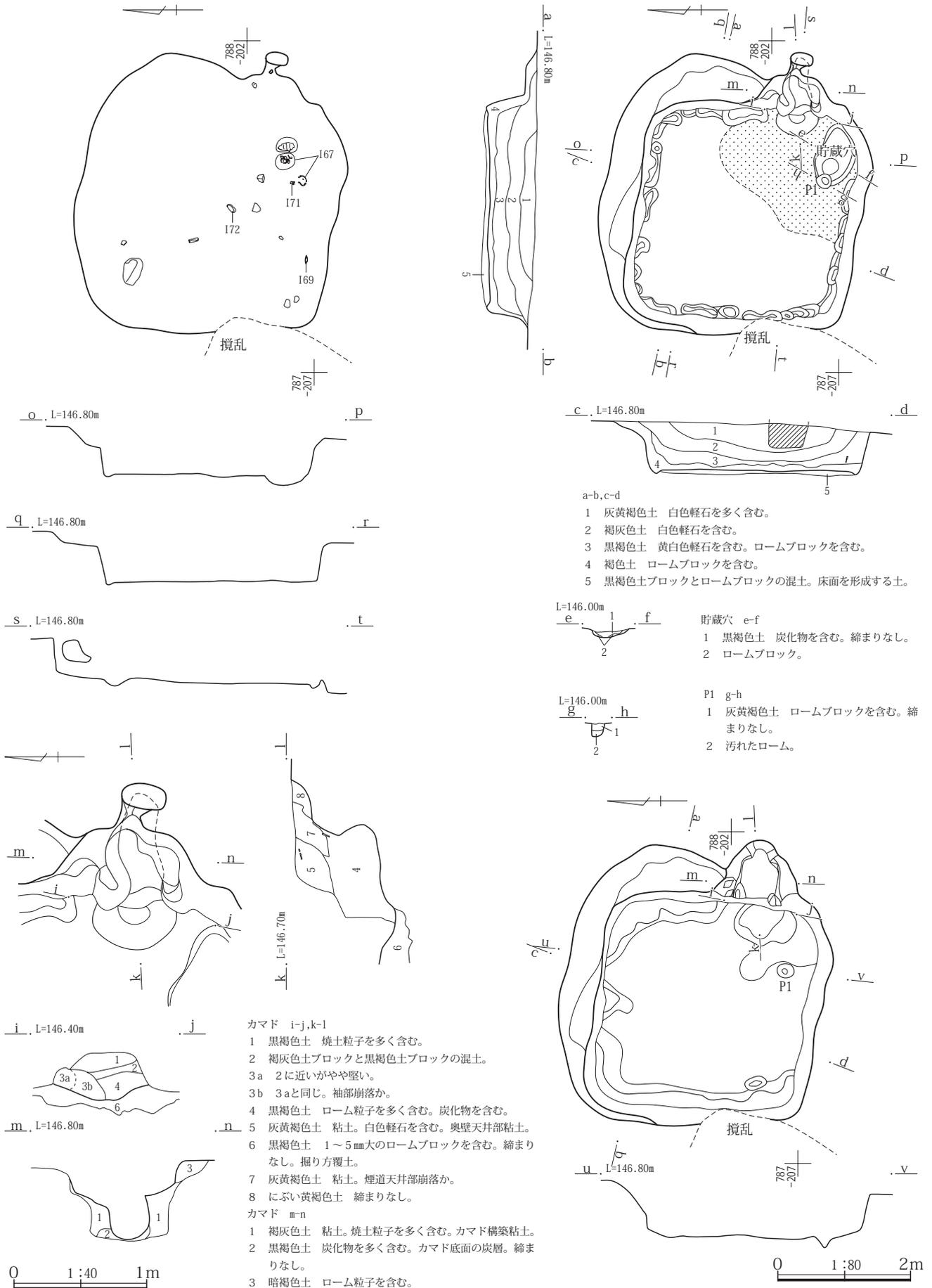


第146図 Ⅰ区6住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物

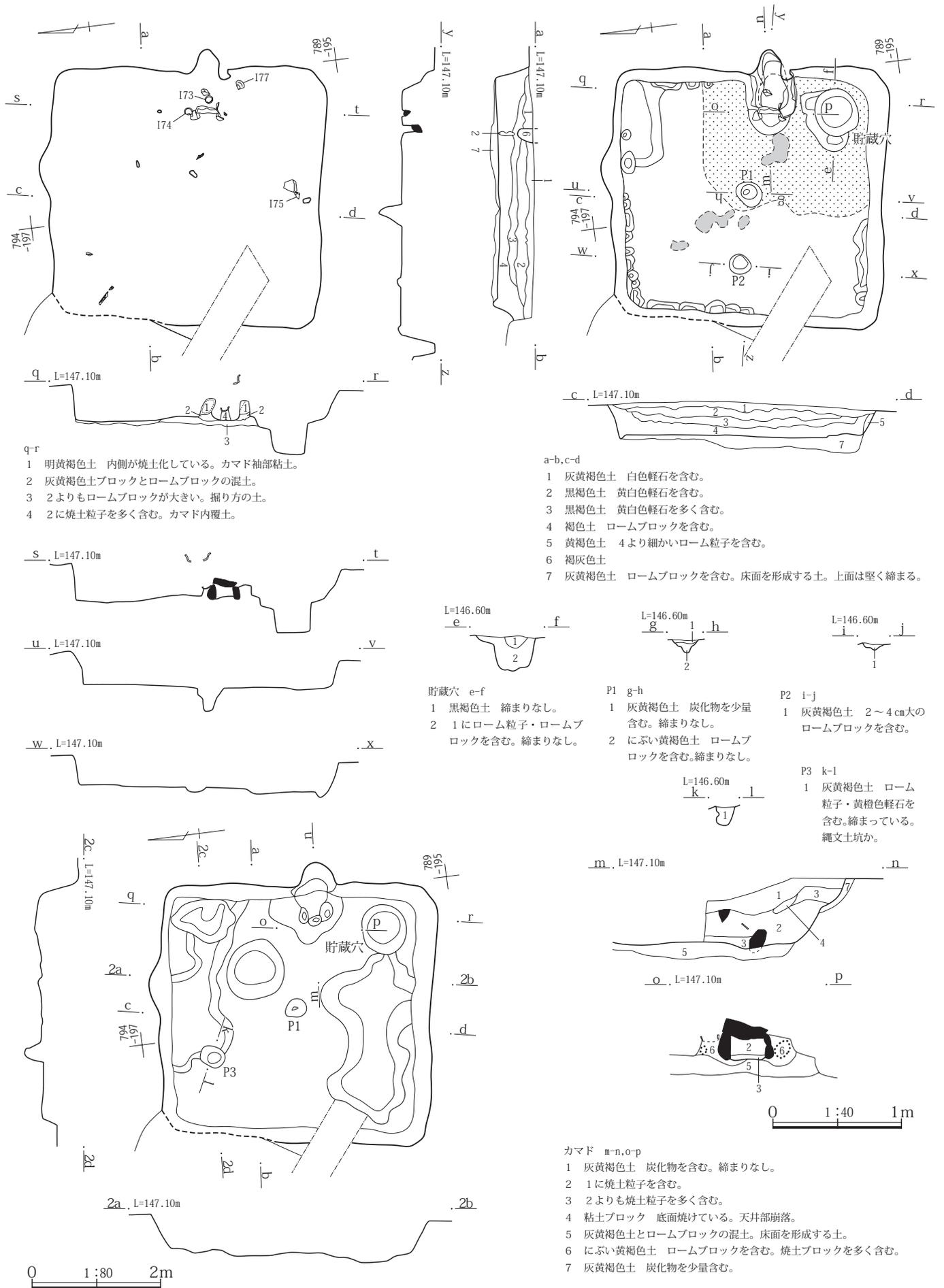


第147図 I区6住居(2)

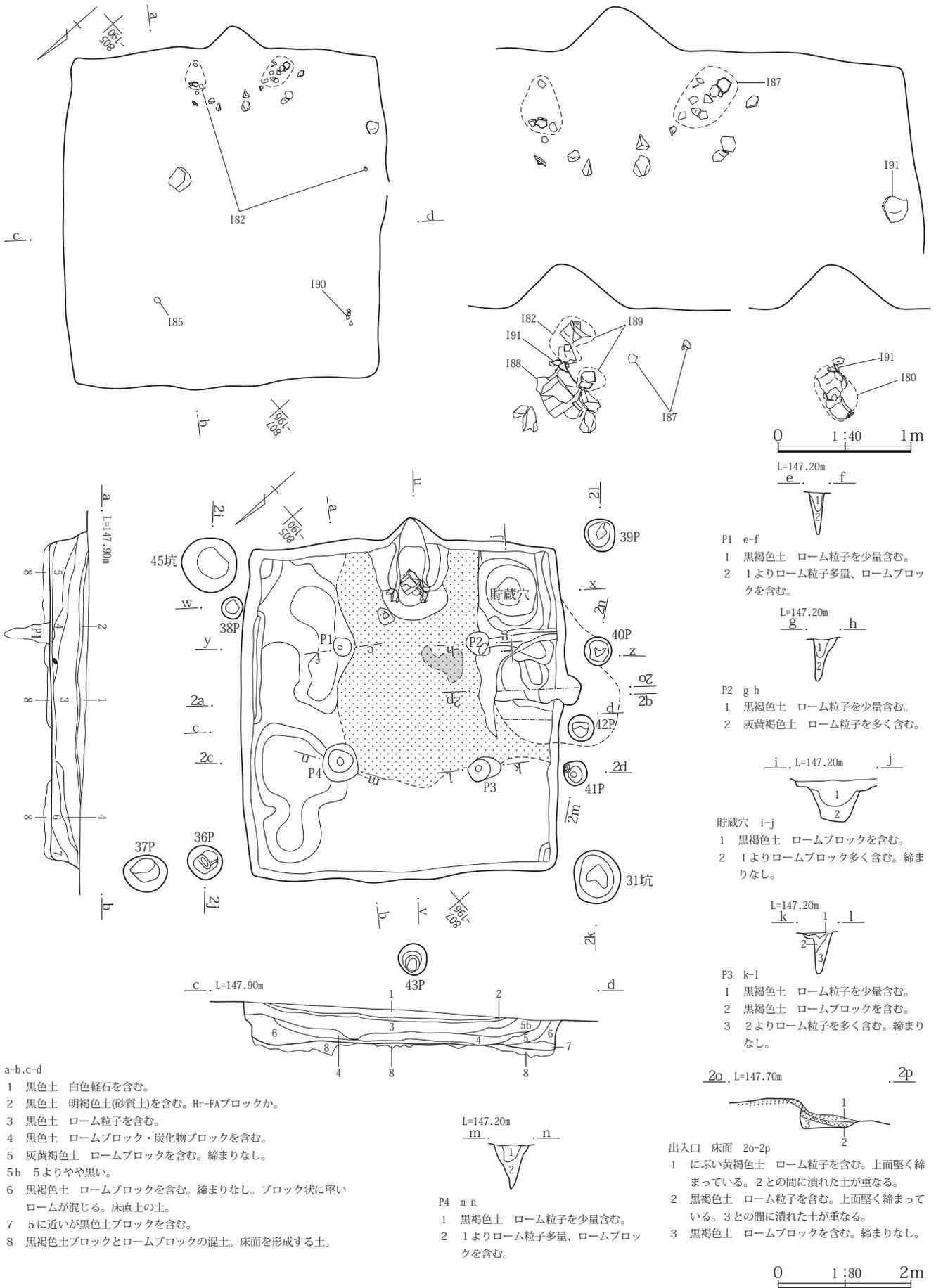


第148図 I区7住居

第4章 検出された遺構と遺物

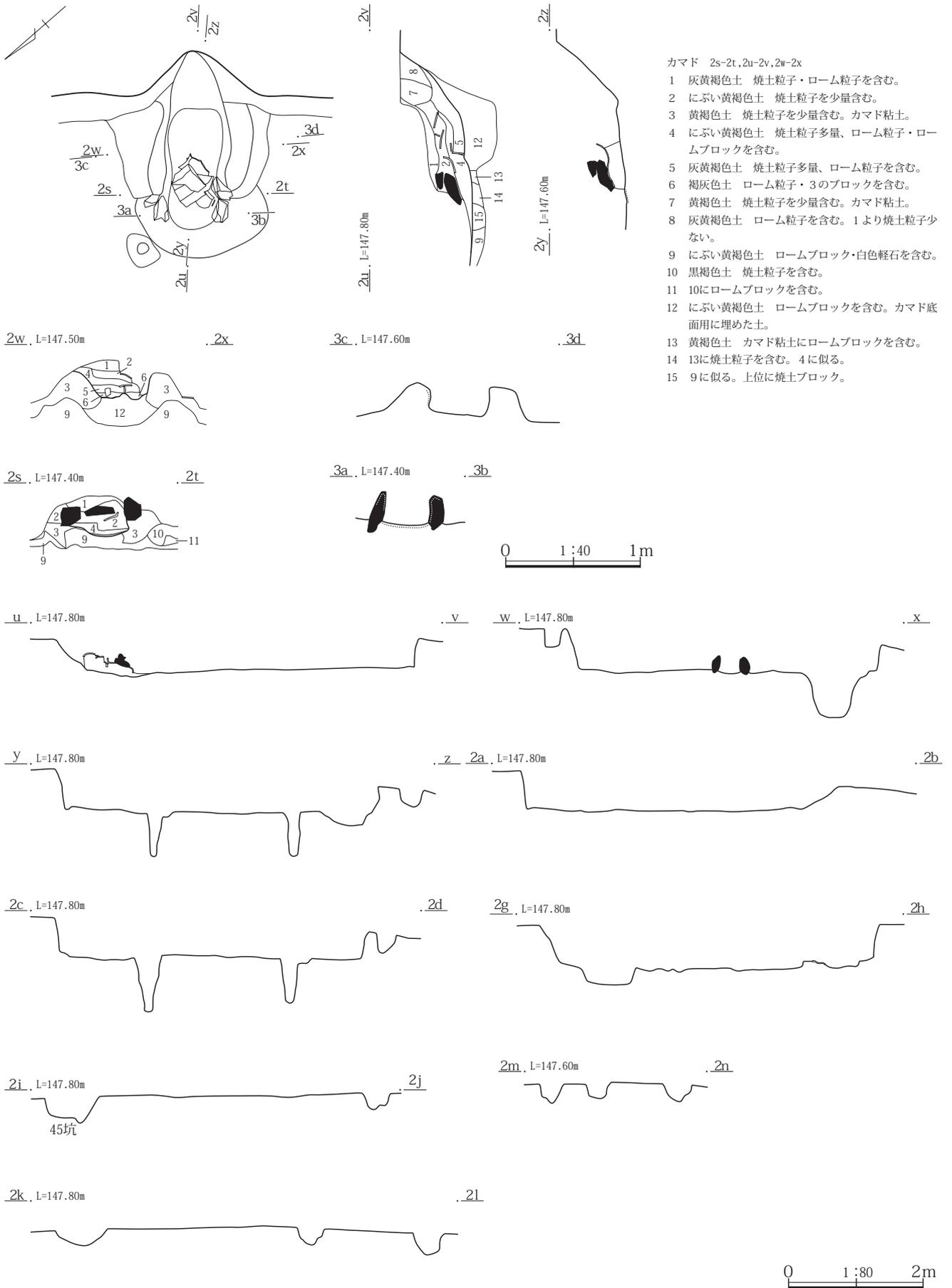


第149図 I区8住居

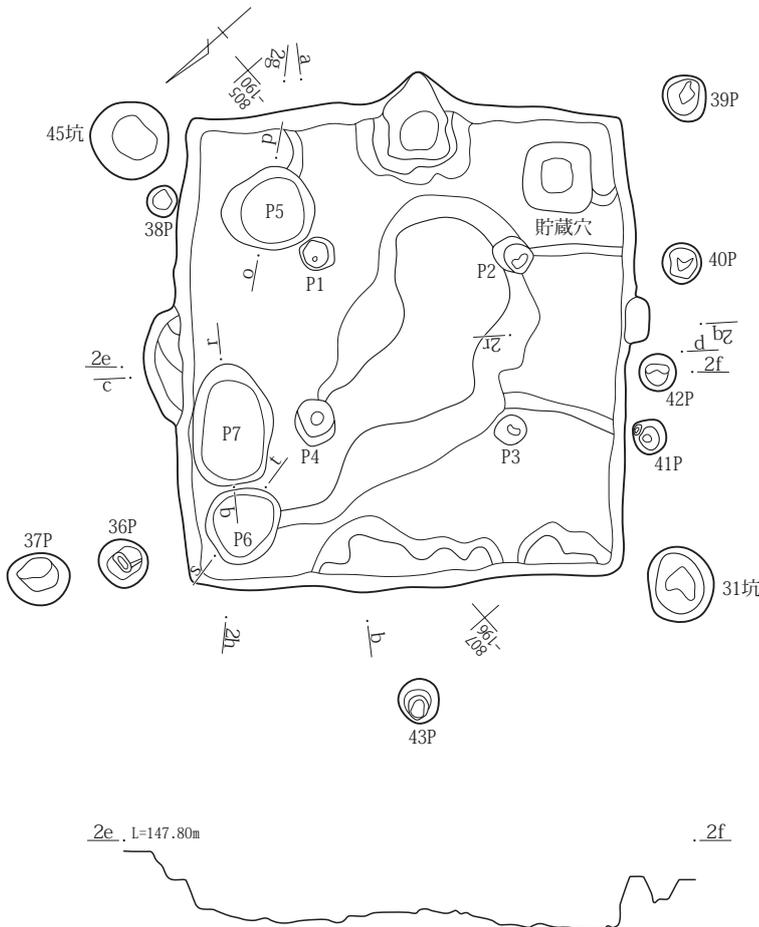
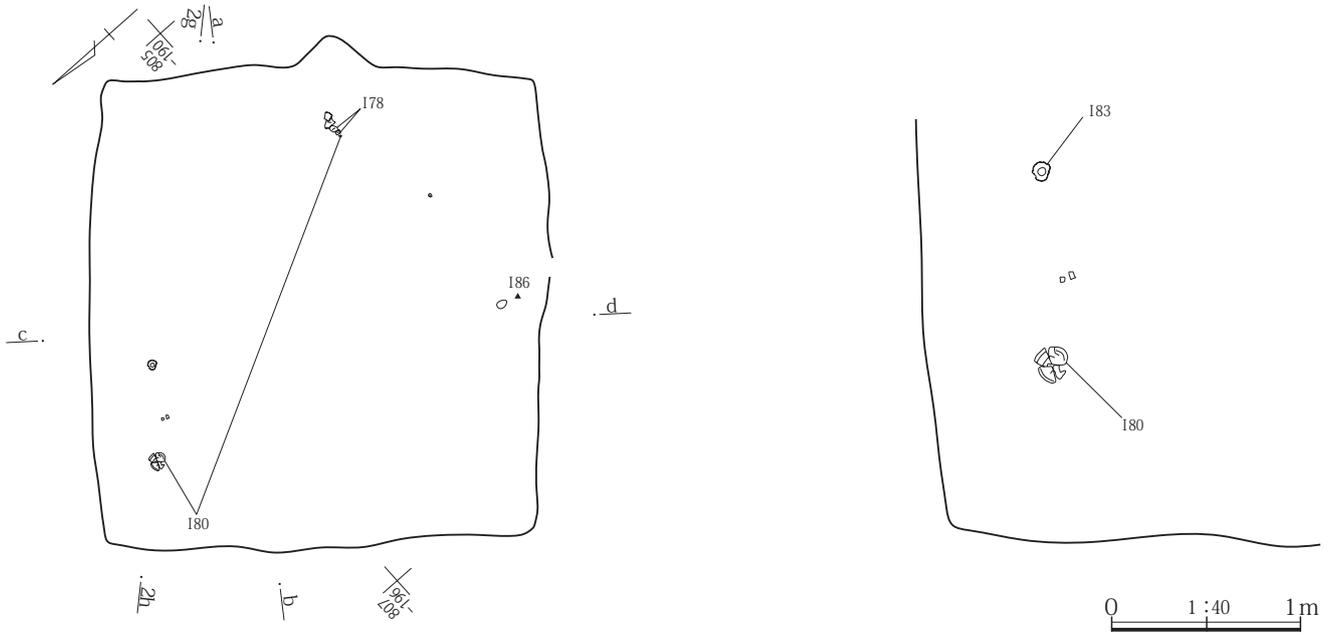


第150図 I区9住居(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第151図 I区9住居(2)



o . L=147.10m . p P5 o-p
1 灰黄褐色土 3~5cm大の
ロームブロックを含む。

q . L=147.20m . r P7
s . L=147.20m . t P6

P6・7 q-r, s-t
1 黒褐色土ブロックとロームブロックの混土。締まりなし。

2q . L=147.50m . 2r
1 2 3 4

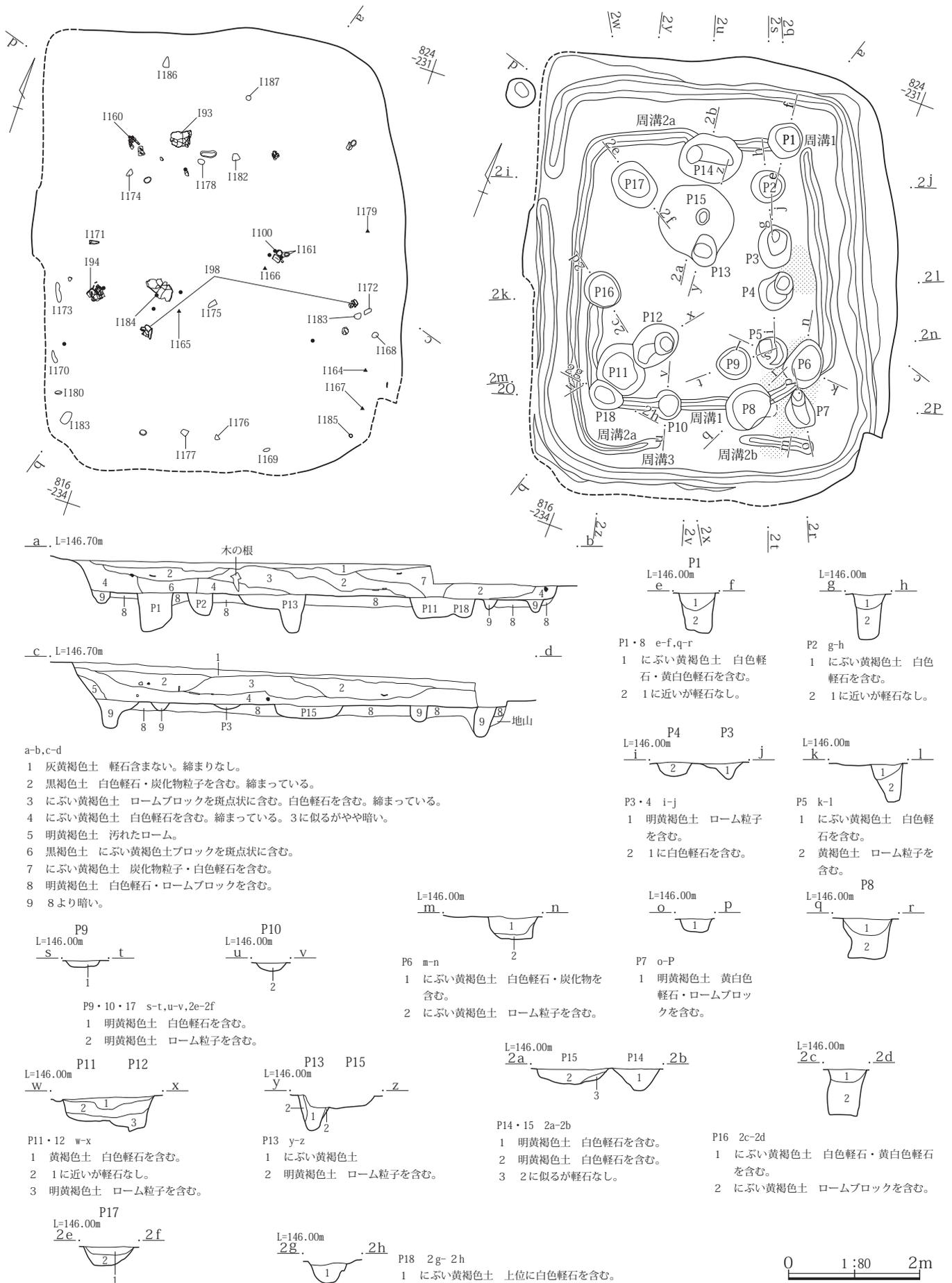
出入口 掘り方 2q-2r

- 1 黒色土 ローム粒子を少量含む。
- 2 明黄褐色土 灰黄褐色土ブロックを含む。特に堅い。住居床面に
つながる。
- 3 黒色土ブロックとロームブロックの混土。締まっている。
- 4 にぶい黄褐色土 やや軟質。

0 1:80 2m

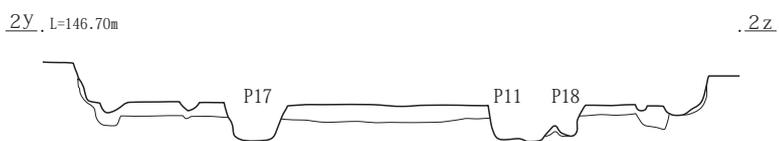
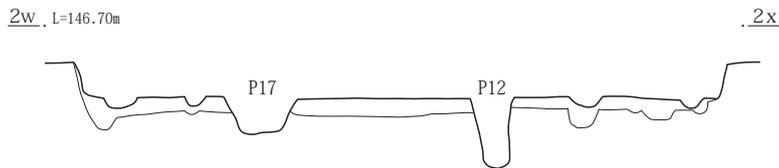
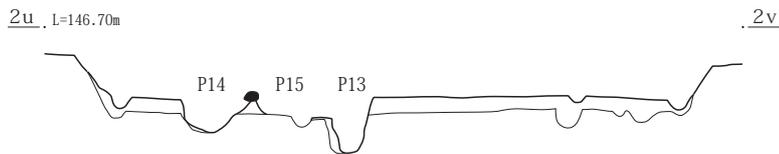
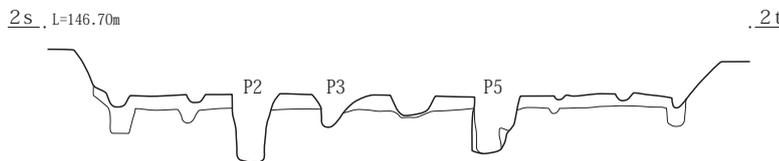
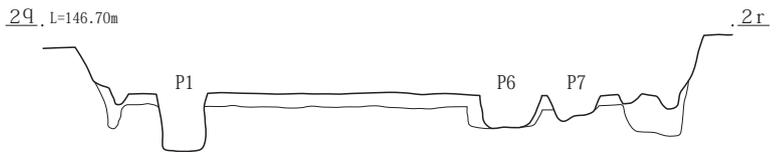
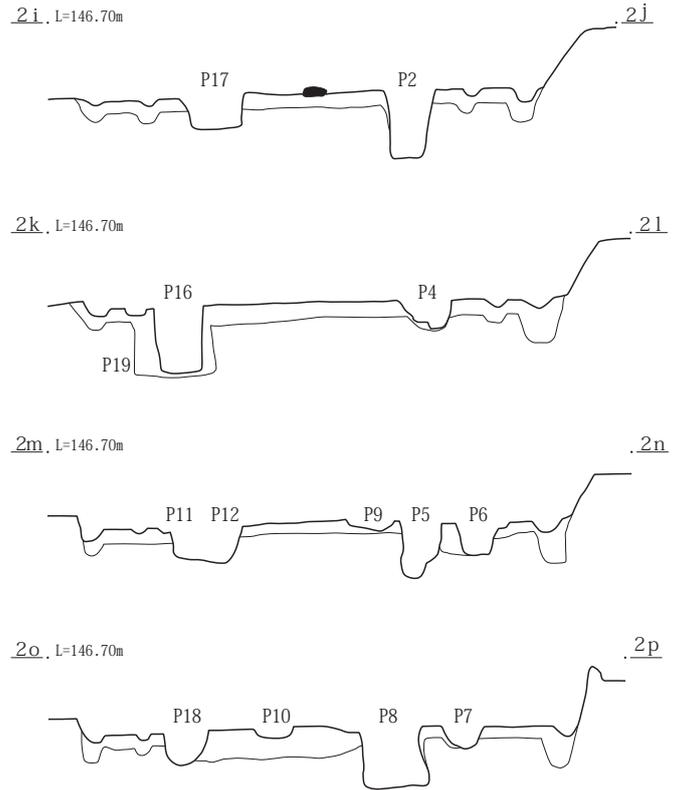
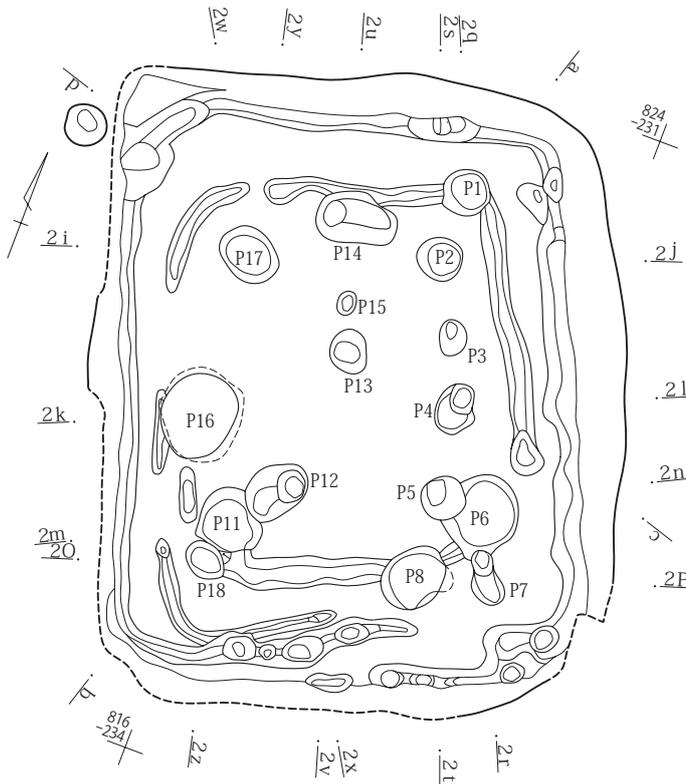
第152図 I区9住居(3)

第4章 検出された遺構と遺物

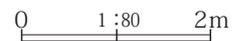


第153図 I区1堅穴(1)

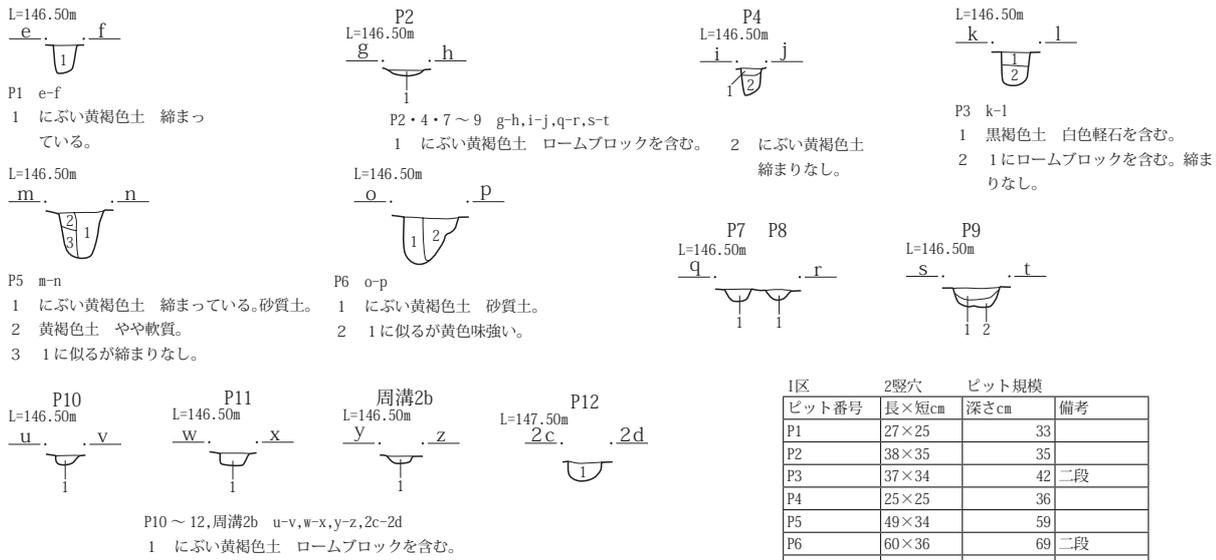
遺構図(Ⅰ区)



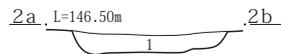
Ⅰ区			
ピット番号	1 堅穴		備考
	長×短cm	ピット規模 深さcm	
P1	56×51	58	
P2	50×49	72	
P3	65×50	28	
P4	62×51	28	二段
P5	49×48	58	
P6	71×54	33	
P7	57×41	27	二段
P8	77×62	62	
P9	51×48	13	
P10	45×42	14	
P11	79×76	36	
P12	78×55	71	二段
P13	47×36	57	焼土混じり
P14	91×71	40	二段
P15	111×109	32	二段
P16	59×52	70	
P17	75×60	39	
P18	55×40	35	



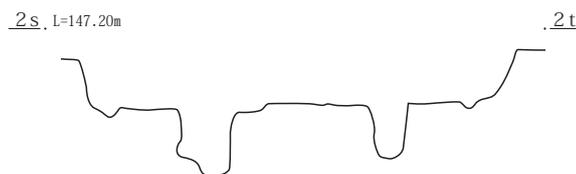
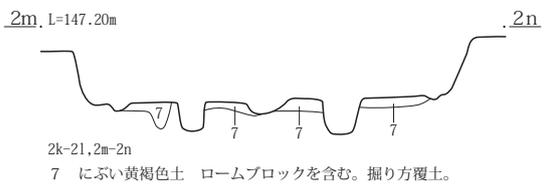
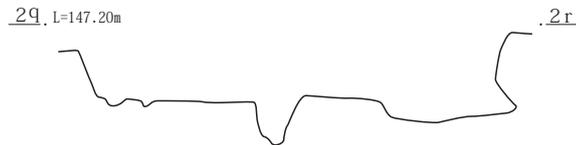
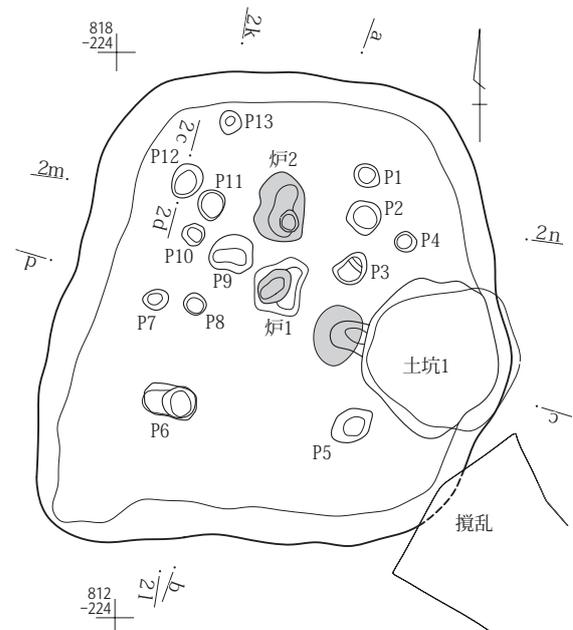
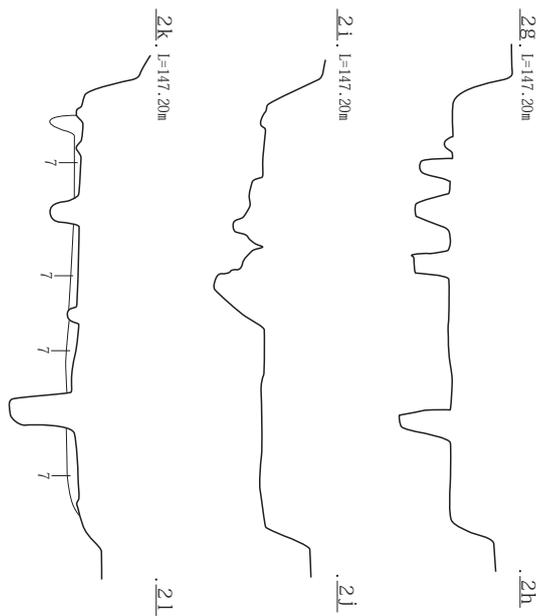
第154図 Ⅰ区1堅穴(2)



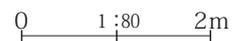
Ⅰ区	2堅穴	ピット規模	
ピット番号	長×短cm	深さcm	備考
P1	27×25	33	
P2	38×35	35	
P3	37×34	42	二段
P4	25×25	36	
P5	49×34	59	
P6	60×36	69	二段
P7	30×26	17	
P8	27×27	13	
P9	51×44	24	
P10	28×26	14	
P11	32×31	13	



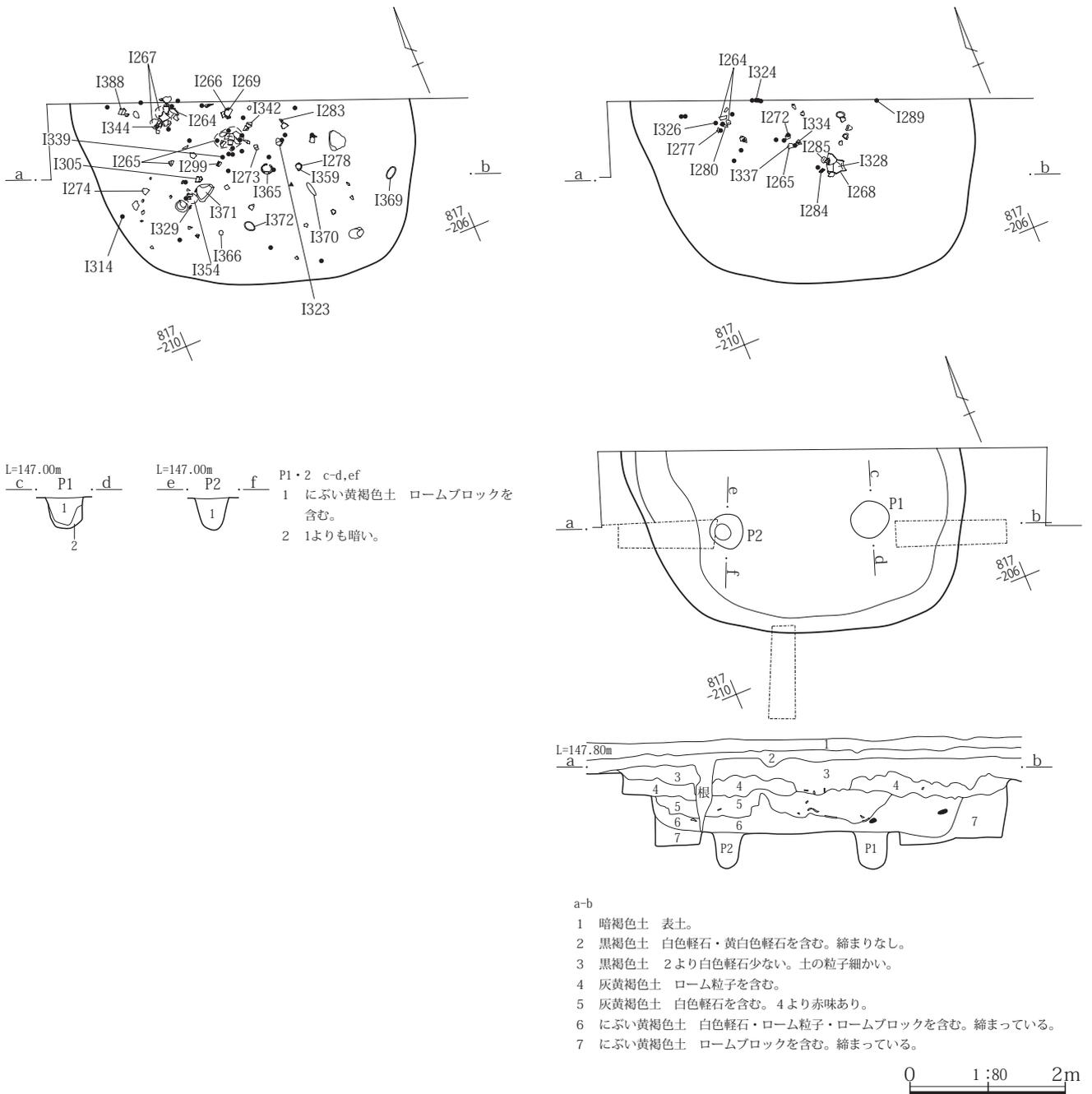
土坑1 2a-2b
1 灰黄褐色土 にぶい黄褐色土ブロックを斑点状に含む。締まっている。



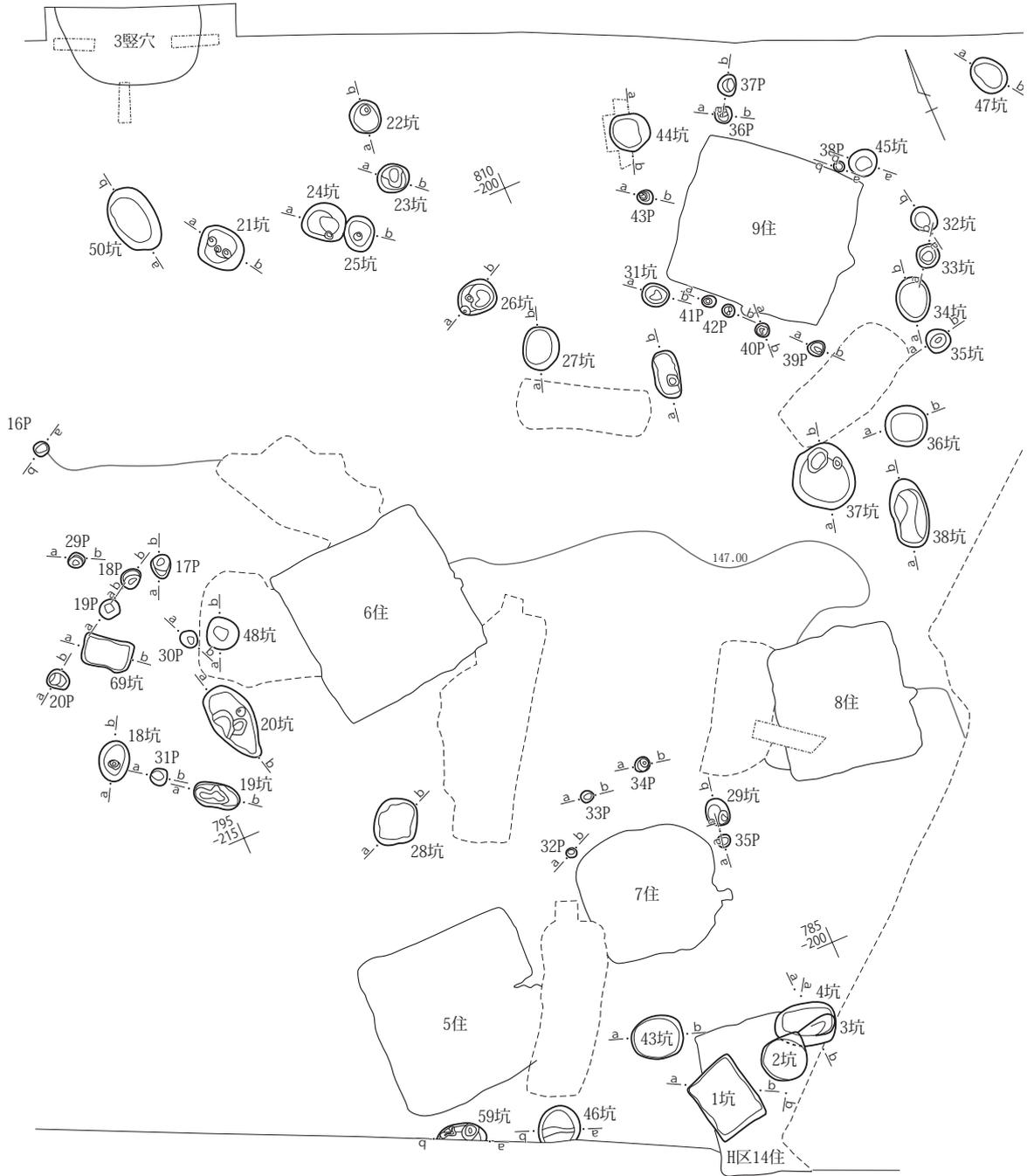
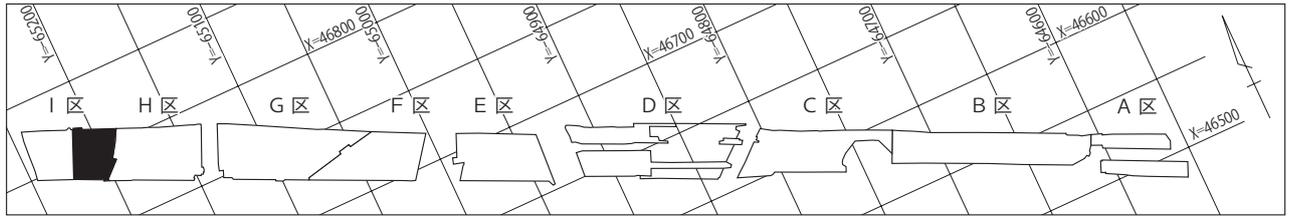
第156図 Ⅰ区2堅穴(2)



第4章 検出された遺構と遺物

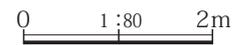
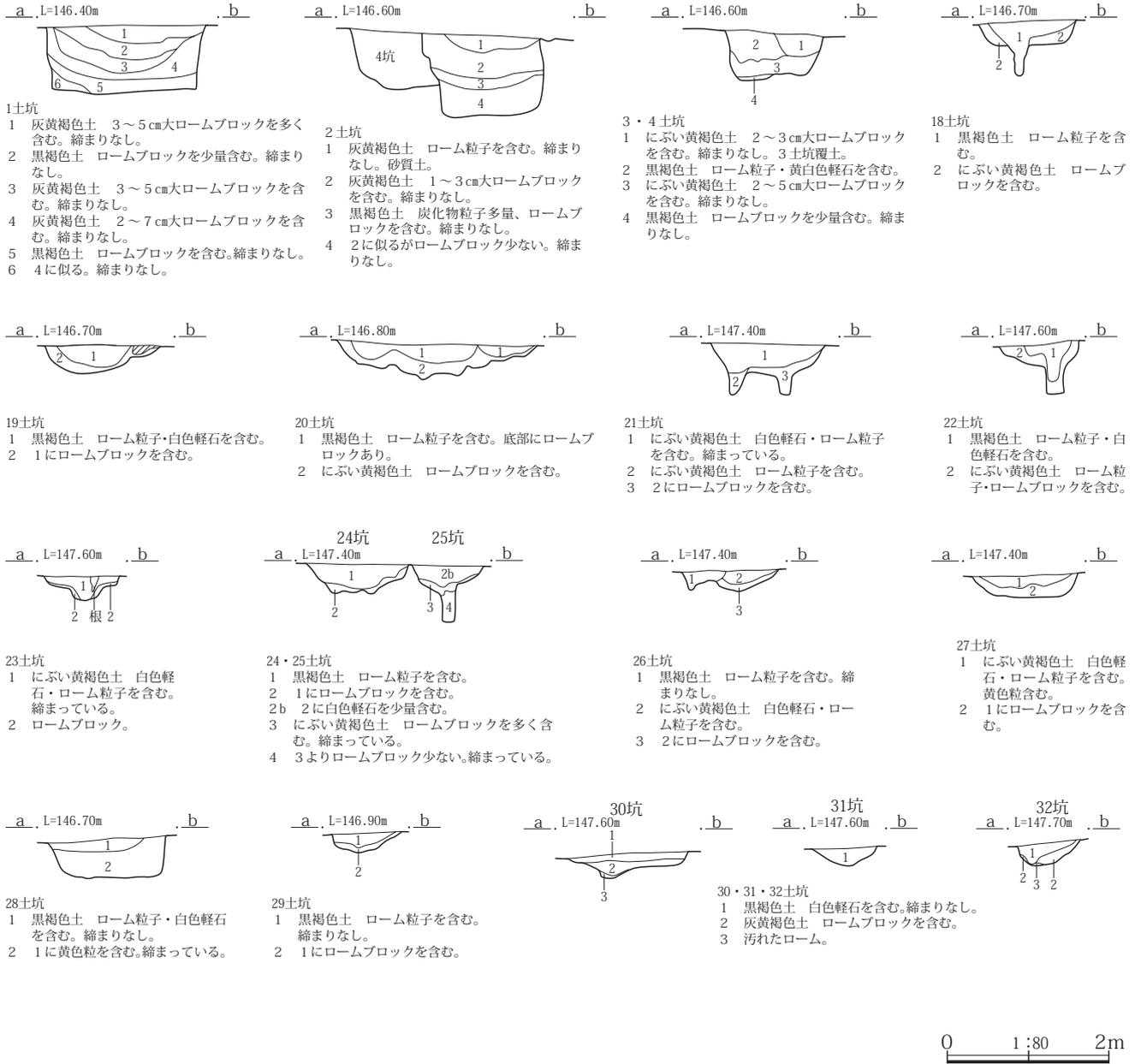


第157図 I区3堅穴



第158図 I区東半部1面土坑・ピット位置図

第4章 検出された遺構と遺物

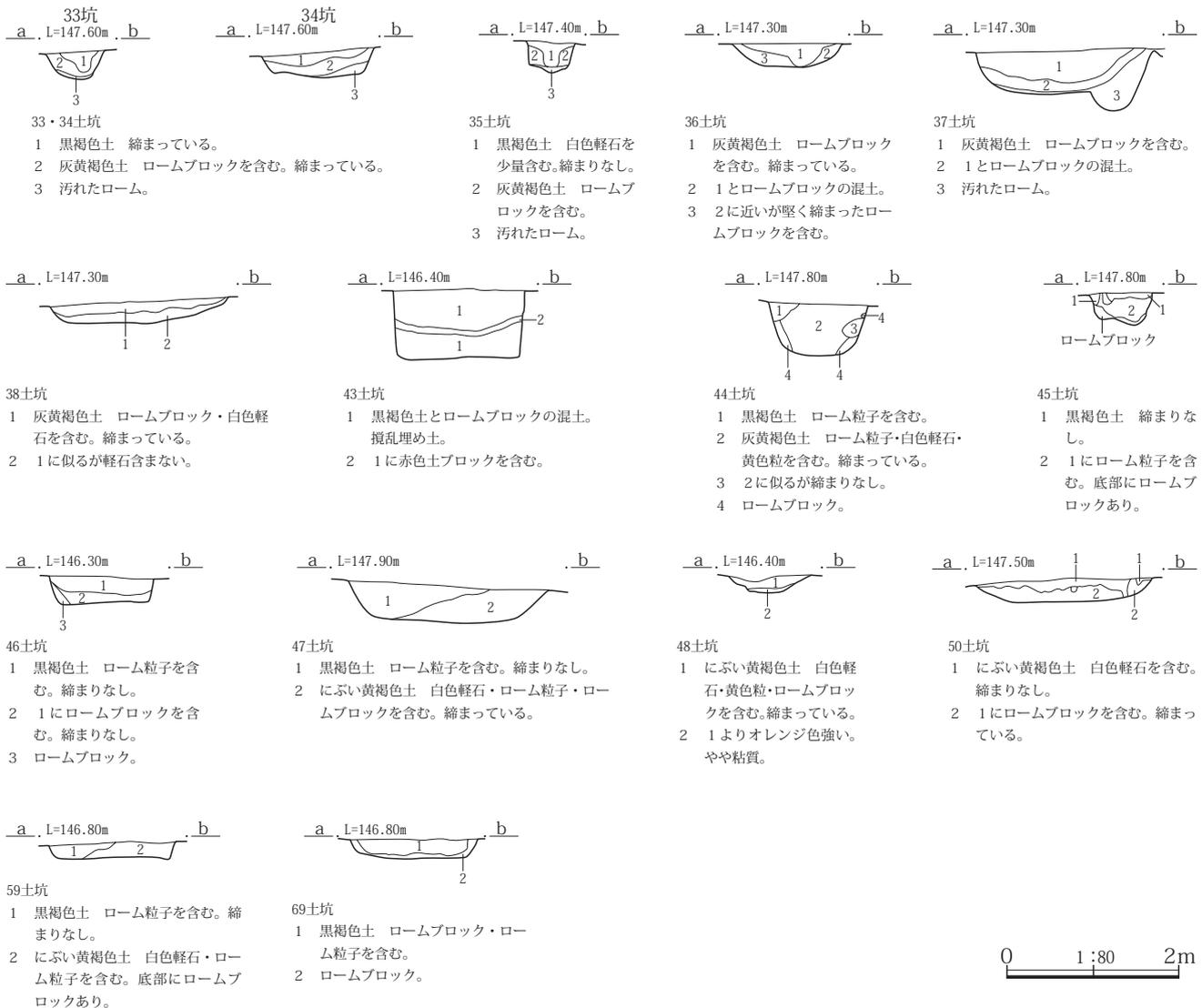


第159図 I区東半部1面土坑断面図(1)

第38表 I区1面土坑計測表(1)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	土坑	I	1層	780-203		H区14住と重複	207×163・84				
2	土坑	I	1層	781-201		3・4坑、H区14住と重複	152×137・104				
3	土坑	I	1層	782-200		2・4坑、H区14住と重複	131×62・28				
4	土坑	I	1層	782-200		2・3坑、H区14住と重複	182×127・68		土師器1		土師器裏1
18	土坑	I	1層	798-217			119×94・73				
19	土坑	I	1層	795-214			143×73・41				
20	土坑	I	1層	797-213			246×128・49				
21	土坑	I	1層	811-207			147×124・86				
22	土坑	I	1層	813-202			98×93・67				
23	土坑	I	1層	811-202			97×91・35				
24	土坑	I	1層	810-204			127×113・42				
25	土坑	I	1層	809-204			107×92・69				
26	土坑	I	1層	806-201			121×107・29	I390	諸磯a1		
27	土坑	I	1層	804-200			132×110・29				
28	土坑	I	1層	792-209			152×135・55	I391, I392, I393, I394	黒浜・有尾17		
29	土坑	I	1層	789-201			85×71・35				
30	土坑	I	1層	802-197			148×77・35				
31	土坑	I	1層	804-196			79×71・23				
32	土坑	I	1層	803-188			82×73・35				

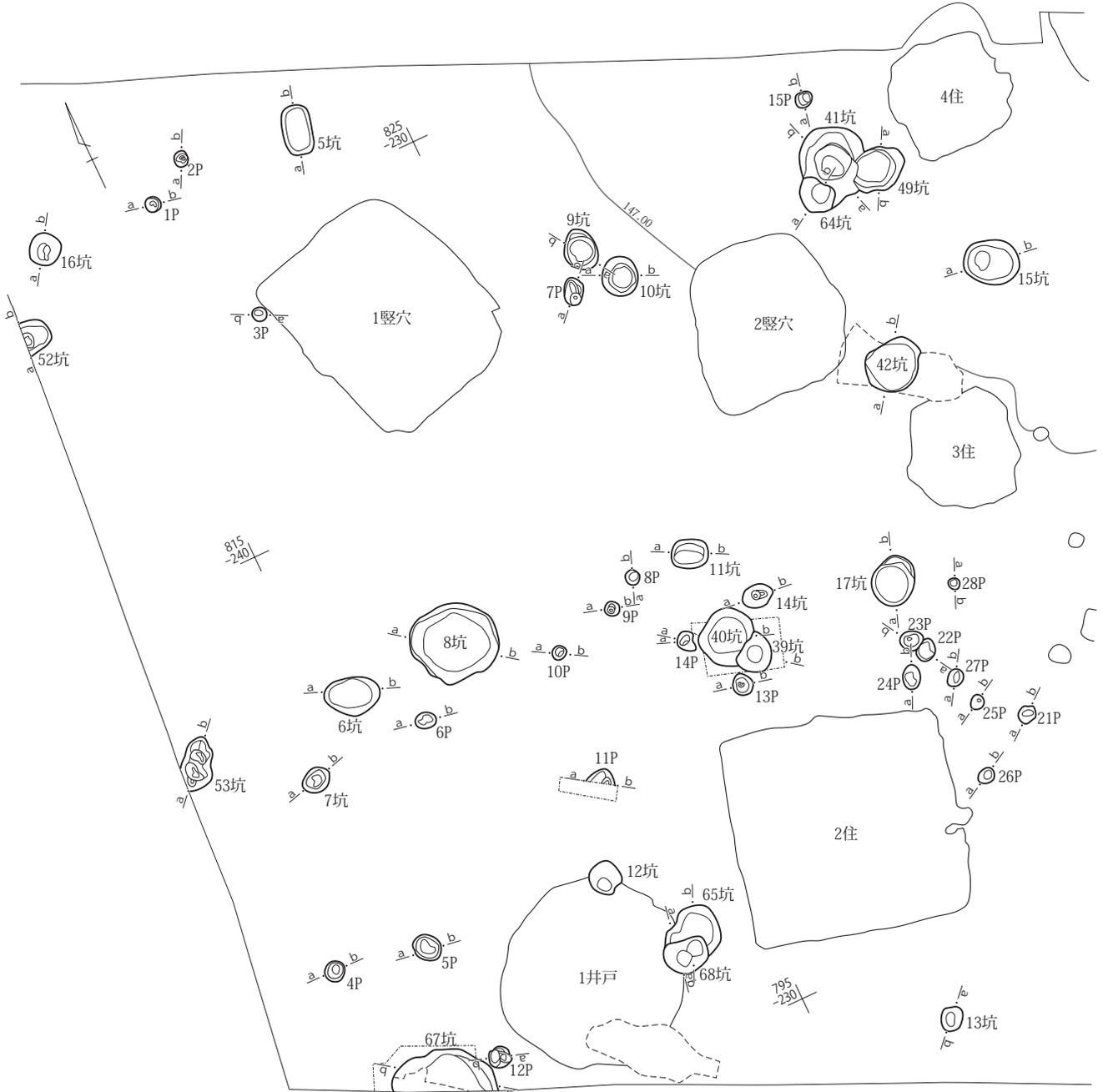
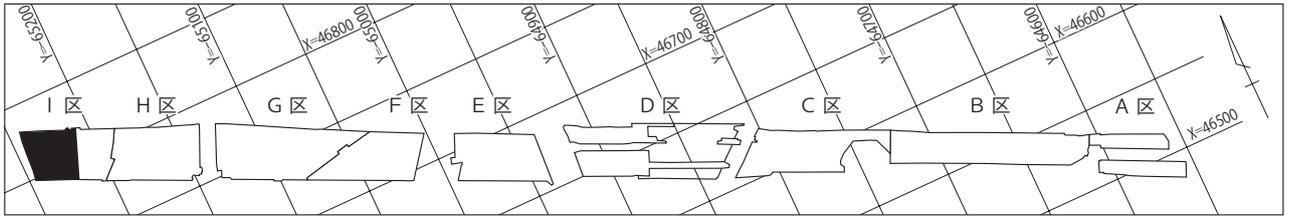
遺構図(I区)



第160図 I区東半部1面土坑断面図(2)

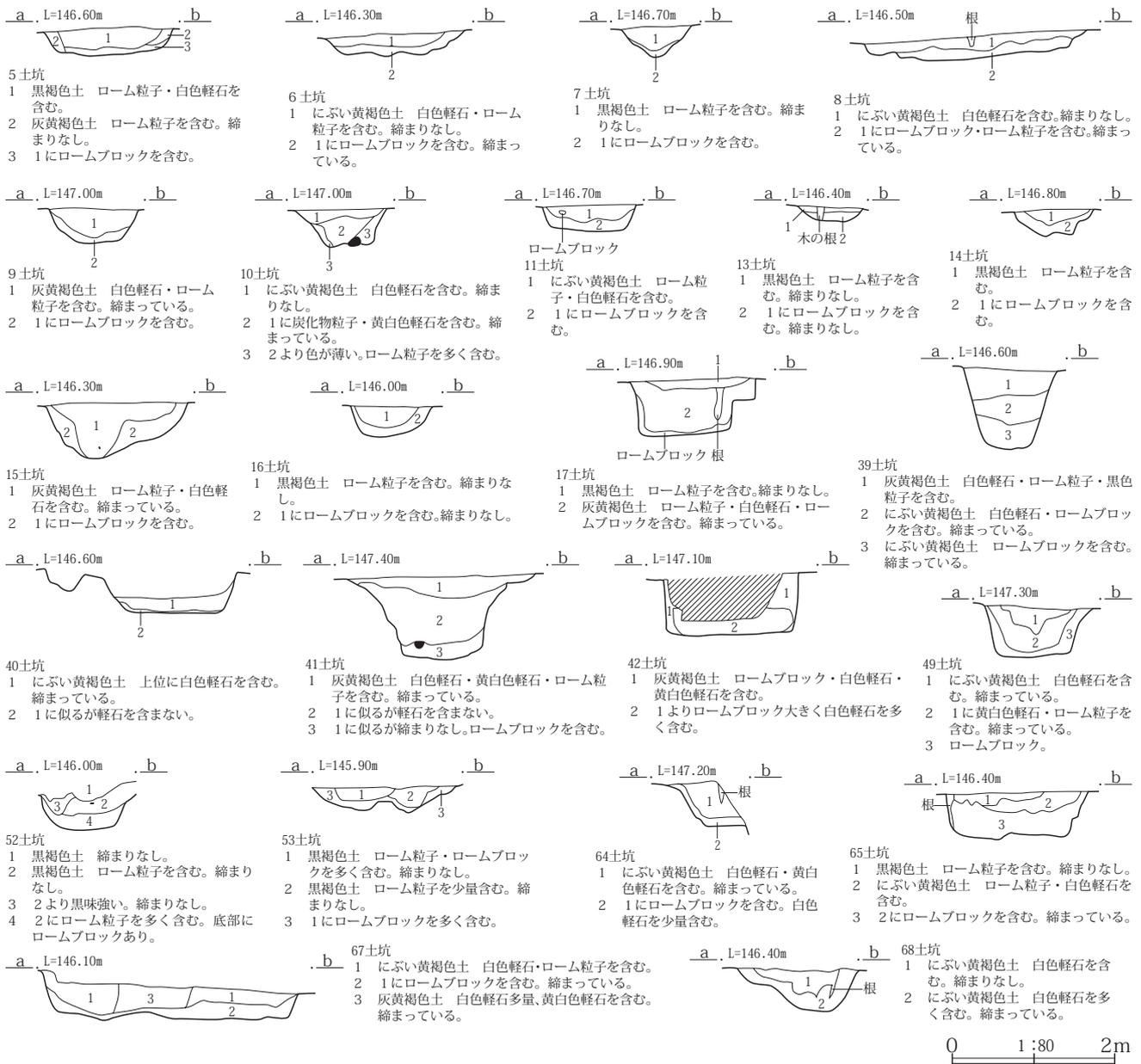
第39表 I区1面土坑計測表(2)

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
33	土坑	I	1層	802-188		72×71・35				
34	土坑	I	1層	801-189		138×98・35				
35	土坑	I	1層	800-189		70×70・37				
36	土坑	I	1層	797-191		129×127・28				
37	土坑	I	1層	797-193		204×187・55	1395,1396	黒浜・有尾3		
38	土坑	I	1層	794-192		212×110・32				
43	土坑	I	1層	783-205		156×132・82				
44	土坑	I	1層	809-195		120×117・62	1404,1405,1406,1407,1408	黒浜・有尾17 諸磯a4, 前期後葉1		
45	土坑	I	1層	806-189		84×81・35	1410	諸磯a3		
46	土坑	I	1層	782-209		124×104・34				
47	土坑	I	1層	806-184		120×96・23				
48	土坑	I	1層	800-212		100×98・20				
50	土坑	I	1層	812-209		208×137・29				
59	土坑	I	1層	783-211		148×52・63				
69	土坑	I	1層	801-215		149×96・29				



第161図 I区西半部1面土坑・ピット位置図

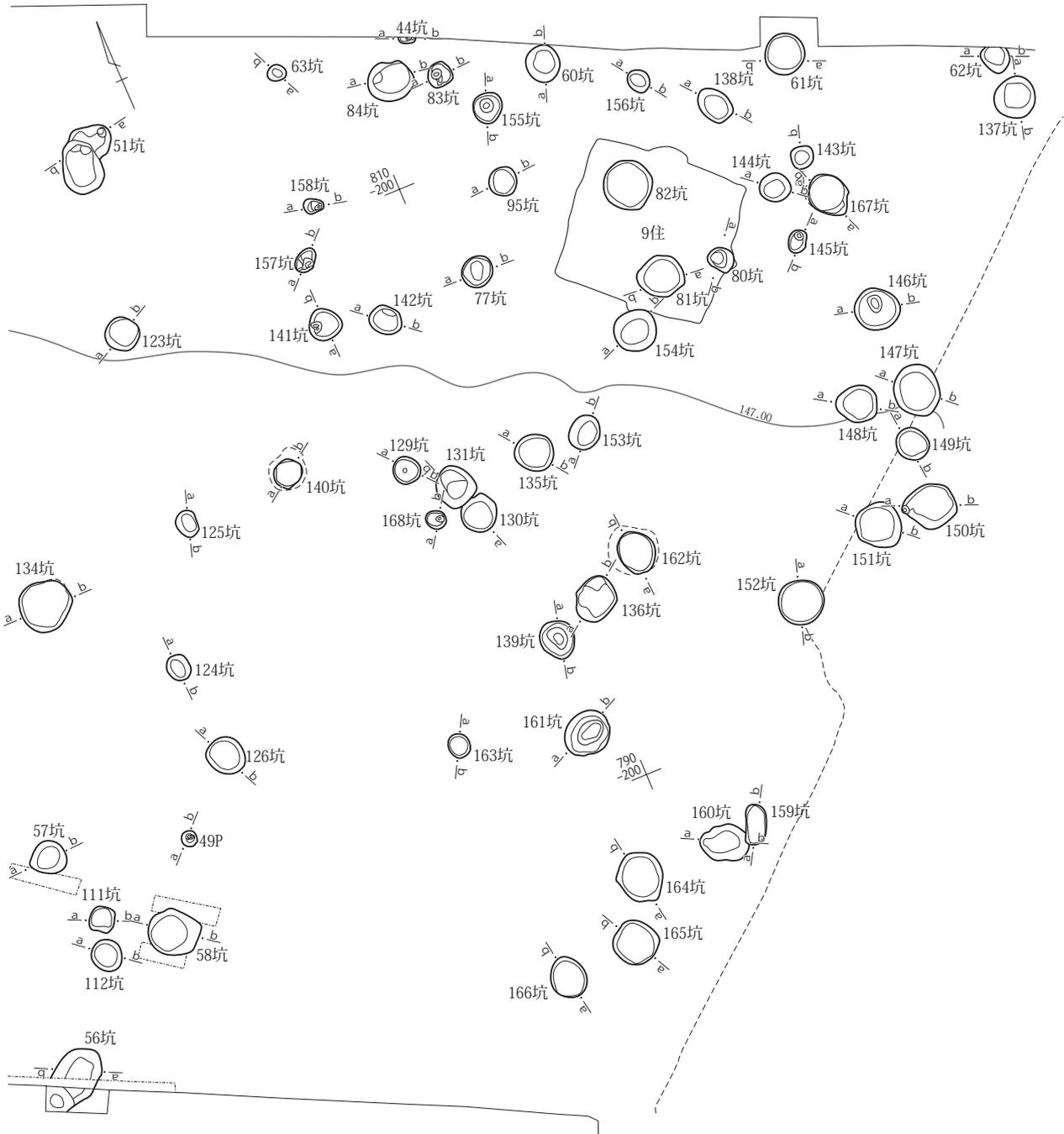
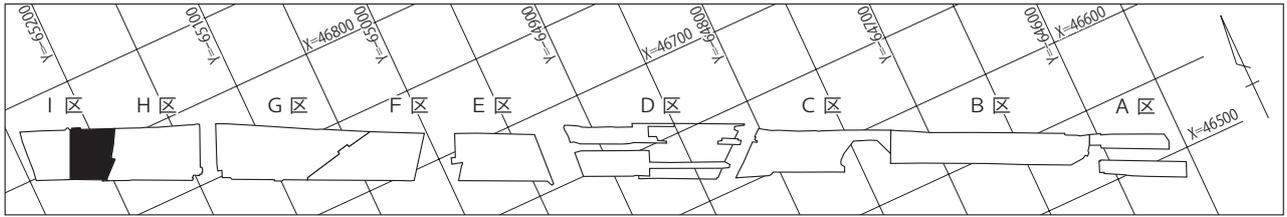
遺構図(I区)



第162図 I区西半部1面土坑断面図

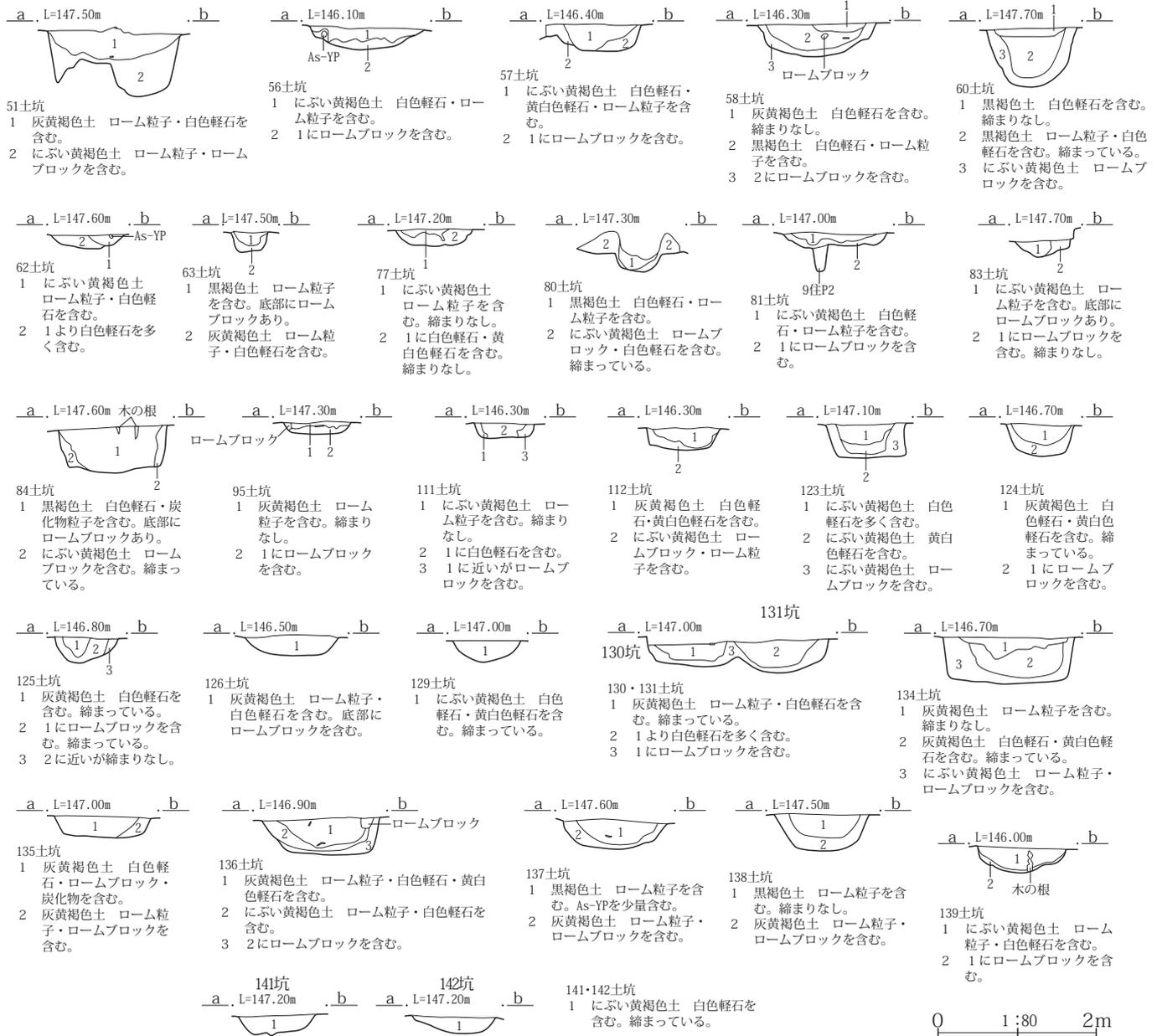
第40表 I区1面土坑計測表(3)

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短×深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
5	土坑	I	1層	826-232		158×93・37				
6	土坑	I	1層	809-238		174×123・32				
7	土坑	I	1層	807-240		92×73・39				
8	土坑	I	1層	808-234		284×261・35				
9	土坑	I	1層	819-226		131×107・43				
10	土坑	I	1層	817-225		125×114・51		黒浜・有尾2		
11	土坑	I	1層	808-226		113×96・32				
13	土坑	I	1層	792-225		78×67・28				
14	土坑	I	1層	806-225		98×71・30				
15	土坑	I	1層	813-214		177×142・69	1384,1385,1386	黒浜・有尾2 前期後葉1		
16	土坑	I	1層	826-241		106×97・49				
17	土坑	I	1層	805-221		160×133・70	1387,1388,1389	黒浜・有尾10 縄文不明1		
39	土坑	I	1層	805-226	40坑と重複	127×113・98				
40	土坑	I	1層	805-226	39坑と重複	181×151・58	1397	黒浜・有尾1		
41	土坑	I	1層	817-217	49・64坑と重複	230×208・112	1398	諸磯a1		
42	土坑	I	1層	811-218		187×158・79	1399,1400,1402	前期前葉1 黒浜・有尾10		
49	土坑	I	1層	817-216	41坑と重複	174×137・72				
52	土坑	I	1層	823-242		111×85・47				
53	土坑	I	1層	808-243		128×99・38				
64	土坑	I	1層	817-219	41坑と重複	132×103・59				
65	土坑	I	1層	797-231	65坑→68坑→1井戸	184×153・44				
67	土坑	I	1層	796-239		332×133・71				
68	土坑	I	1層	797-232	65坑→68坑→1井戸	139×120・54				



第163図 I区東半部2面土坑・ピット位置図

遺構図(I区)

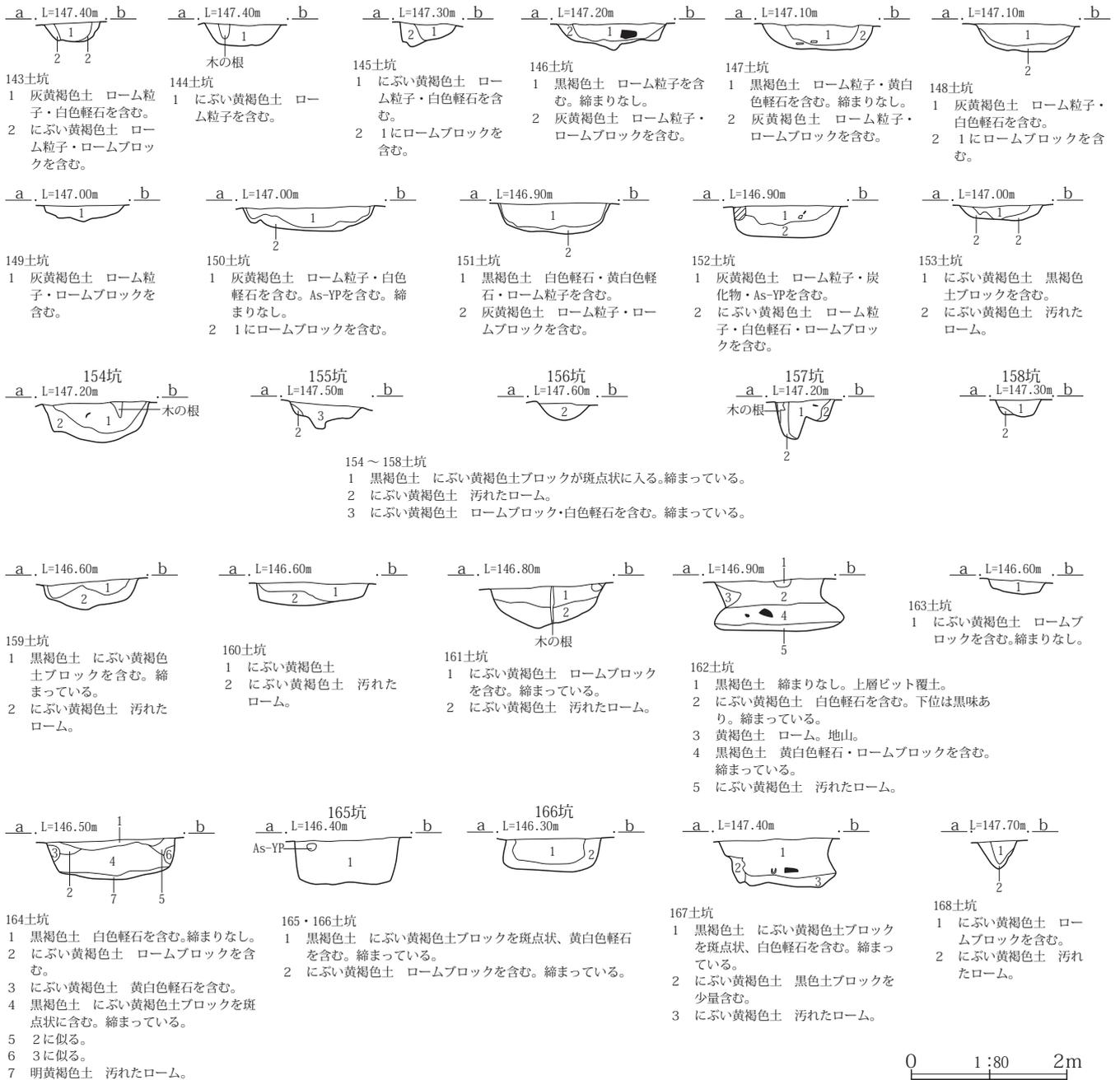


第164図 I区東半部2面土坑断面図(1)

第41表 I区2面土坑計測表(1)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係	旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
51	土坑	I	2層	813-207				214×140・96	1411,1412,1413	黒浜・有尾8, 称名寺1		
56	土坑	I	2層	787-219				243×137・39	1414,1415,1416	黒浜・有尾9		
57	土坑	I	2層	794-217				111×104・34				
58	土坑	I	2層	790-214				166×143・42	1418,1419	前期前葉1 黒浜・有尾4		
60	土坑	I	2層	811-193				116×104・65	1420,1421	黒浜・有尾1, 諸磯a1		
62	土坑	I	2層	806-180				92×81・14				
63	土坑	I	2層	814-201				56×52・23				
77	土坑	I	2層	806-198				102×96・26				
80	土坑	I	2層	803-190		9住と重複		83×68・55				
81	土坑	I	2層	803-192		9住と重複		150×128・34	1439	黒浜・有尾5		
83	土坑	I	2層	812-197				83×77・40				
84	土坑	I	2層	812-198				144×122・62	1441,1442,1443	黒浜・有尾17		
95	土坑	I	2層	808-196				91×85・21	1457,1458,1459	黒浜・有尾3, 諸磯a3		
111	土坑	I	2層	791-217				88×85・23				
112	土坑	I	2層	790-217				101×94・28	1473	黒浜・有尾5		
123	土坑	I	2層	808-209				109×108・52	1485	黒浜・有尾2		
124	土坑	I	2層	798-211				83×70・31				
125	土坑	I	2層	802-210				86×65・34				
126	土坑	I	2層	794-211				123×111・27	1486	黒浜・有尾6		
129	土坑	I	2層	801-202				88×85・31				
130	土坑	I	2層	799-201				119×110・32	1497,1498,1499	黒浜・有尾5		
131	土坑	I	2層	800-201				136×124・45	1500	黒浜・有尾1		
134	土坑	I	2層	801-214				170×158・60	1507	黒浜・有尾1		
135	土坑	I	2層	800-198				123×116・31	1509,1510,1511	黒浜・有尾6		
136	土坑	I	2層	795-198				149×126・45	1512	黒浜・有尾7		
137	土坑	I	2層	804-180				135×128・39	1513,1514	黒浜・有尾2		
138	土坑	I	2層	808-189				122×94・49	1515	黒浜・有尾2		
139	土坑	I	2層	794-200				122×109・39				
141	土坑	I	2層	806-201				102×101・56				
142	土坑	I	2層	805-203				104×87・24				

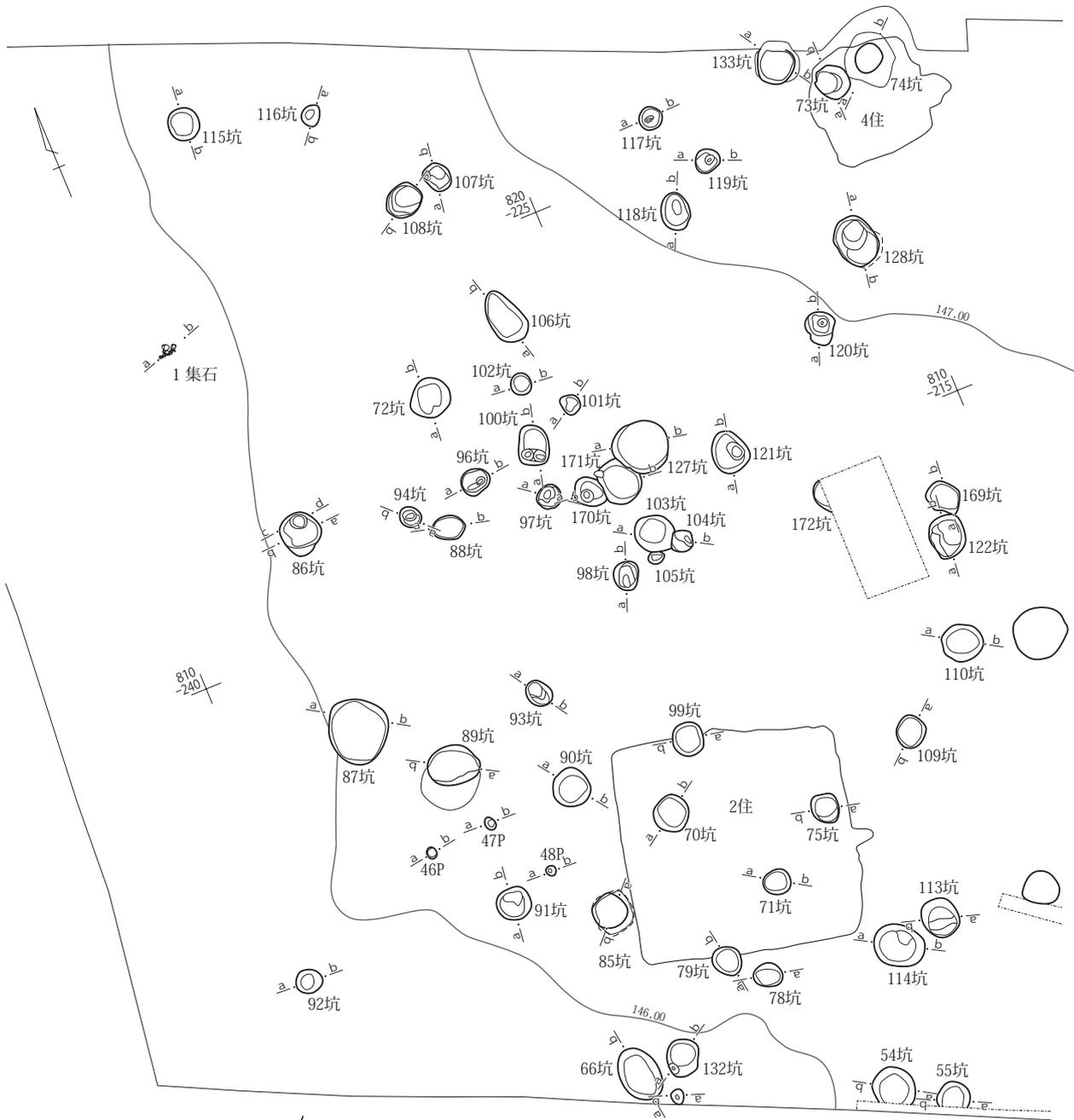
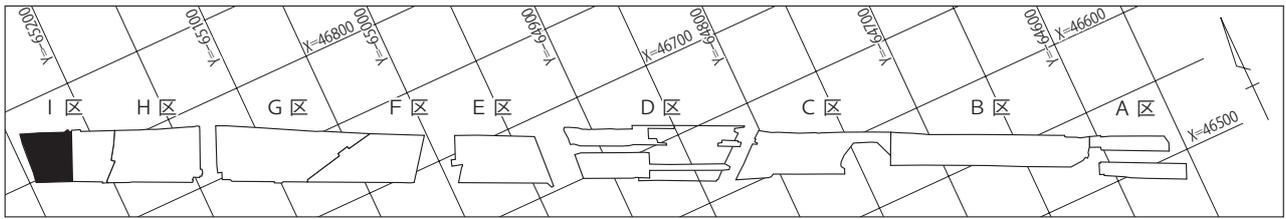
第4章 検出された遺構と遺物



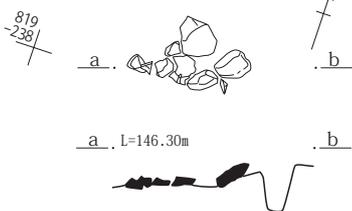
第165図 I区東半部2面土坑断面図(2)

第42表 I区2面土坑計測表(2)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係	旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
143	土坑	I	2層	805-187				75×72・29				
144	土坑	I	2層	805-188				98×91・29				
145	土坑	I	2層	803-188				73×54・32				
146	土坑	I	2層	800-187				143×133・36				
147	土坑	I	2層	797-185				156×141・39	1520,1521,1522	黒浜・有尾7		
148	土坑	I	2層	797-188				126×116・37				
149	土坑	I	2層	795-187				114×100・23	1523	黒浜・有尾1		
150	土坑	I	2層	793-187				172×141・31				
151	土坑	I	2層	793-189				151×137・36	1524,1525,1526	黒浜・有尾15		
152	土坑	I	2層	792-192				143×140・41	1527,1528,1529,1530	黒浜・有尾20		
153	土坑	I	2層	800-197				109×97・21				
154	土坑	I	2層	802-194				139×133・49	1531	黒浜・有尾3		
155	土坑	I	2層	810-195				97×92・36				
156	土坑	I	2層	809-191				73×64・29				
157	土坑	I	2層	808-203				81×57・53				
158	土坑	I	2層	810-202				63×47・29	1534	諸磯a2		
159	土坑	I	2層	786-197		160坑→159坑		124×66・37				
160	土坑	I	2層	786-197		160坑→159坑		152×113・35				
161	土坑	I	2層	791-200				155×134・63				
162	土坑	I	2層	765-197				167×163・64	1535,1536	黒浜・有尾12		
163	土坑	I	2層	792-204				76×69・18	1537	黒浜・有尾3		
164	土坑	I	2層	786-200				171×139・51				
165	土坑	I	2層	784-201				144×138・58	1538,1539,1540	黒浜・有尾11		
166	土坑	I	2層	784-204				132×108・45	1541,1542,1543,1544	黒浜・有尾17		
167	土坑	I	2層	803-187				147×122・58	1545,1546,1547	黒浜・有尾6		
168	土坑	I	2層	799-202				65×55・51	1548	黒浜・有尾2		



1 集石

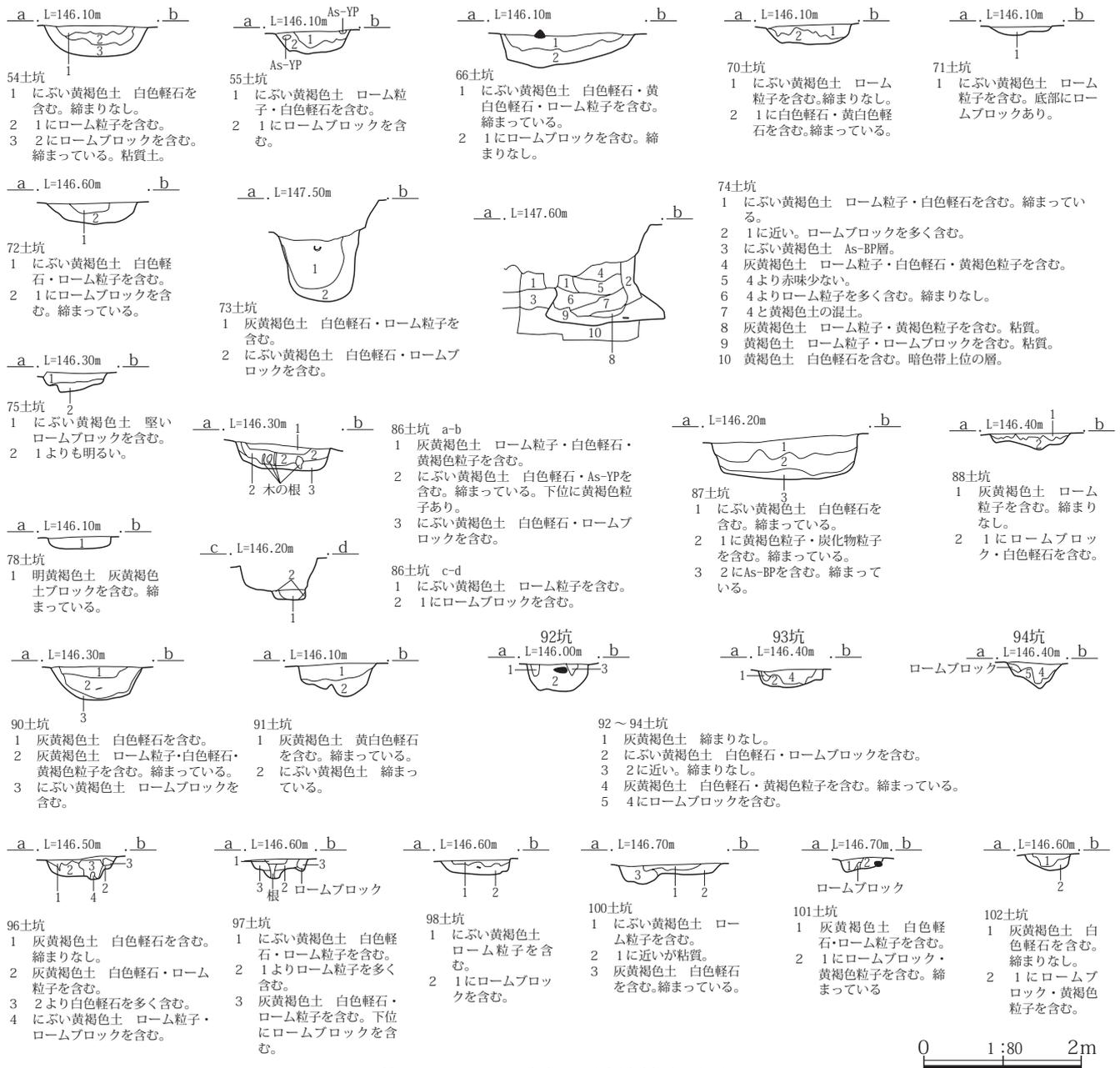


0 1:200 5m

0 1:40 1m

第166図 I区西半部2面土坑・ピット位置図、集石

第4章 検出された遺構と遺物



第167図 I区西半部2面土坑断面図(1)

第43表 I区2面土坑計測表(3)

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係	旧→新	長×短×深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
54	土坑	I	2層	789-224				136×125・40				
55	土坑	I	2層	789-222				101×98・32				
66	土坑	I	2層	793-231				172×121・41				
70	土坑	I	2層	800-227		2住と重複		114×107・22				
71	土坑	I	2層	797-225		2住と重複		86×81・12				
72	土坑	I	2層	815-229				129×115・28	1425	黒浜・有尾7		
73	土坑	I	2層	819-214		4住と重複		111×95・91	1426,1427,1428	黒浜・有尾5, 諸磯a3		
74	土坑	I	2層	819-212		4住と重複		179×155・64	1429,1430	黒浜・有尾20, 前期後葉1		
75	土坑	I	2層	798-223		2住と重複		98×86・21	1433,1434,1435	黒浜・有尾5		
76	土坑	I	欠番									
78	土坑	I	2層	794-226				90×76・16	1436	諸磯a1		
86	土坑	I	2層	812-234				134×124・55		黒浜・有尾5, 諸磯a1		
87	土坑	I	2層	805-235				203×192・56	1449,1450,1451	黒浜・有尾16		
88	土坑	I	2層	811-230				98×74・17				
90	土坑	I	2層	802-230				121×114・45				
91	土坑	I	2層	799-233				106×103・41	1455	黒浜・有尾3		
92	土坑	I	2層	800-240				82×73・35				
93	土坑	I	2層	805-230				88×70・30				
94	土坑	I	2層	812-231				71×63・32	1456	黒浜・有尾1		
96	土坑	I	2層	812-229				92×81・28				
97	土坑	I	2層	811-227				79×76・24				
98	土坑	I	2層	808-226				91×75・37				
100	土坑	I	2層	812-227				127×92・30	1465	黒浜・有尾2		
101	土坑	I	2層	813-225				64×58・17				
102	土坑	I	2層	814-227				68×65・24				

遺構図(I区)



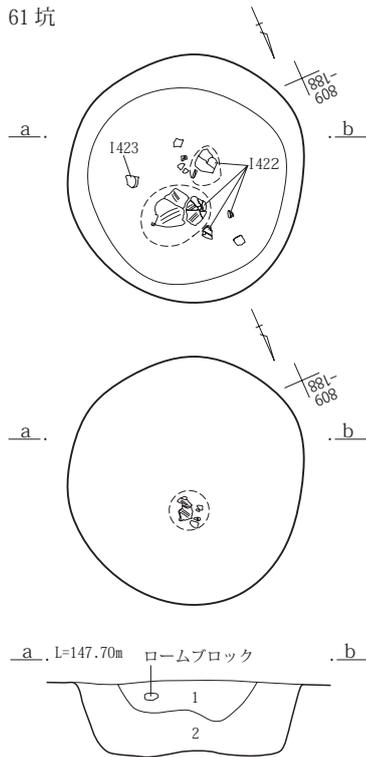
第168図 I区西半部2面土坑断面図(2)

第44表 I区2面土坑計測表(4)

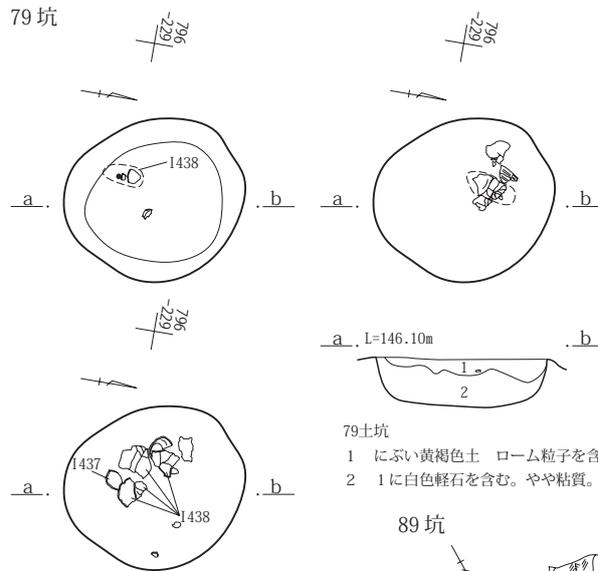
番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係 旧→新	長×短×深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
103	土坑	I	2層	808-224	808-224	104坑と重複 105坑→103坑	122×116・48	1466,1467	黒浜・有尾4		
104	土坑	I	2層	808-224	808-224	103坑と重複	71×69・20				
105	土坑	I	2層	808-225	808-225	105坑→103坑	51×40・38				
106	土坑	I	2層	816-226	816-226		177×101・35	1468	黒浜・有尾2		
107	土坑	I	2層	821-227	821-227		91×78・28				
108	土坑	I	2層	821-228	821-228		118×98・40				
110	土坑	I	2層	802-217	802-217		128×115・43	1470,1471,1472	黒浜・有尾10		
113	土坑	I	2層	794-221	794-221		121×110・31				
114	土坑	I	2層	793-222	793-222		156×131・36	1474,1475,1476	黒浜・有尾7, 諸磯a1		
115	土坑	I	2層	826-233	826-233		103×98・34	1477,1478	黒浜・有尾4		
116	土坑	I	2層	825-230	825-230		66×56・25				
117	土坑	I	2層	821-220	821-220		74×70・34				
118	土坑	I	2層	817-220	817-220		118×88・36				
119	土坑	I	2層	819-219	819-219		81×71・43	1479,1480	黒浜・有尾1, 諸磯a2		
120	土坑	I	2層	812-217	812-217		105×93・68	1481	黒浜・有尾3		
121	土坑	I	2層	810-221	810-221		134×111・36	1482,1483	黒浜・有尾2		
122	土坑	I	2層	805-216	805-216		138×111・38				
128	土坑	I	2層	814-215	814-215		163×136・83	1494,1495,1496	黒浜・有尾10, 諸磯a1		
132	土坑	I	2層	793-230	793-230		119×102・28	1501	黒浜・有尾1		
133	土坑	I	2層	820-215	820-215		140×135・74	1502,1503,1504 1503,1506	黒浜・有尾27		
169	土坑	I	2層	806-216	806-216		115×94・17		黒浜・有尾1		

第4章 検出された遺構と遺物

61 坑



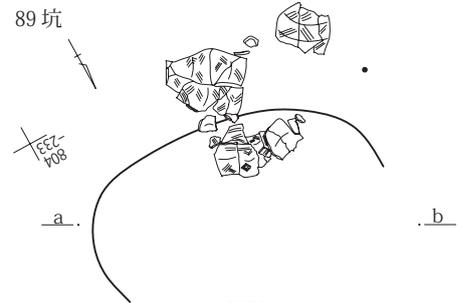
79 坑



79土坑

- 1 にぶい黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 1に白色軽石を含む。やや粘質。

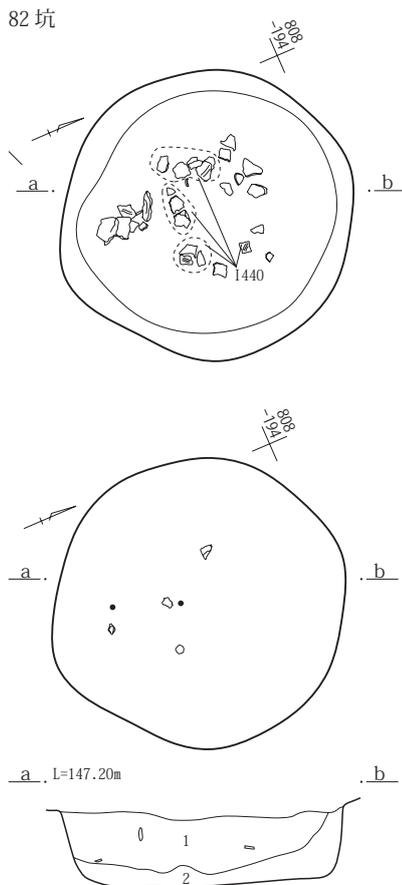
89 坑



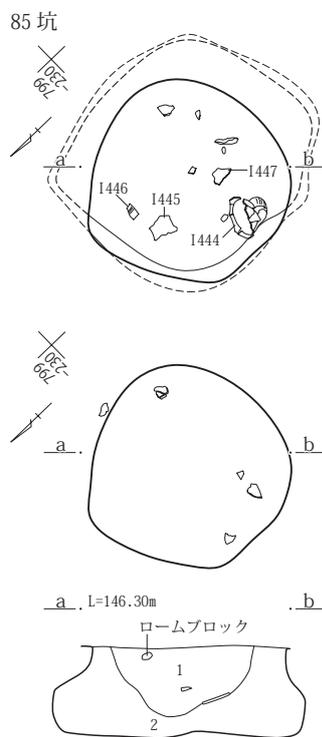
61土坑

- 1 にぶい黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 1にロームブロック・白色軽石を含む。

82 坑

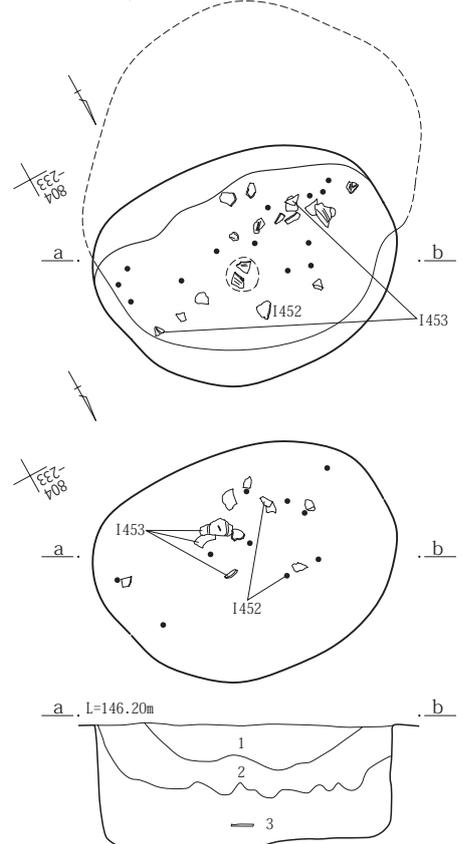


85 坑



85土坑

- 1 灰黄褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。締まっている。
- 2 1にロームブロック・炭化物粒子を含む。



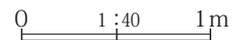
89土坑

- 1 にぶい黄褐色土 白色軽石・ローム粒子を含む。締まっている。
- 2 1に黄色粒・炭化物粒子を含む。締まっている。
- 3 黒褐色土 白色軽石・黄色粒・ロームブロック・炭化物粒子を含む。締まっている。

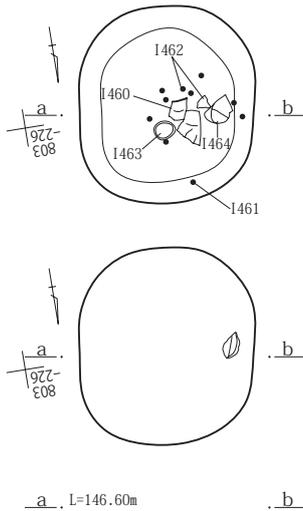
82土坑

- 1 黒褐色土 白色軽石・黄白色軽石を含む。
- 2 にぶい黄褐色土 白色軽石・黄白色軽石・ロームブロックを含む。

第169図 I区2面61・79・82・85・89土坑



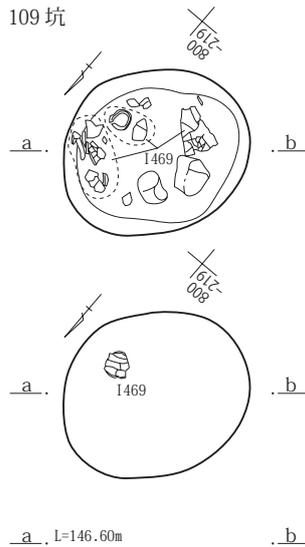
99 坑



99土坑

- 1 にぶい黄褐色土 白色軽石を含む。締まりなし。
- 2 1に黄色粒を含む。
- 3 にぶい黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子を含む。

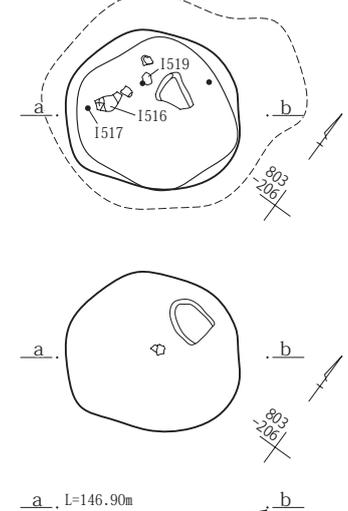
109 坑



109土坑

- 1 灰黄褐色土 ローム粒子を含む。締まりなし。
- 2 にぶい黄褐色土 ローム粒子を含む。下にロームブロックを含む。締まりなし。

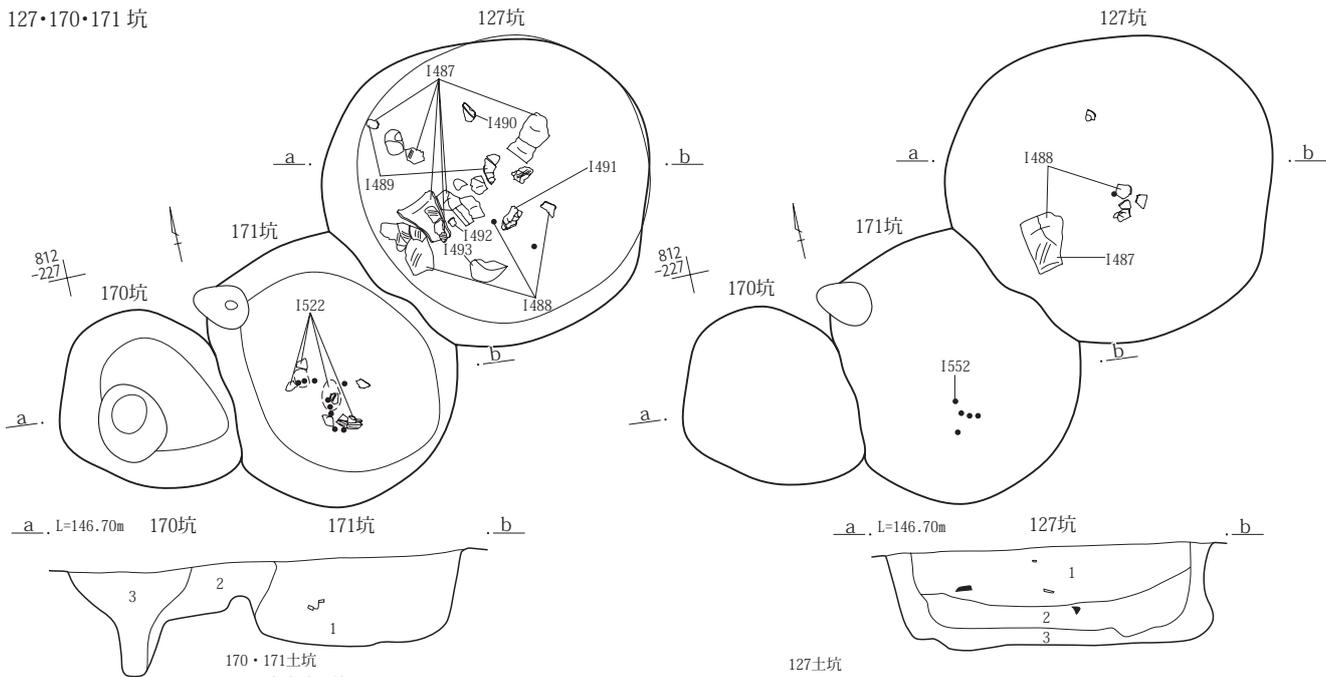
140 坑



140土坑

- 1 灰黄褐色土 白色軽石を含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・白色軽石を含む。
- 3 2にロームブロックを含む。

127・170・171 坑



170・171土坑

- 1 黒褐色土 締まっている。
- 2 にぶい黄褐色土 締まっている。汚れたローム。
- 3 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。

127土坑

- 1 灰黄褐色土 白色軽石・黄白色軽石・炭化物粒子を含む。締まっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。締まっている。
- 3 灰黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを含む。

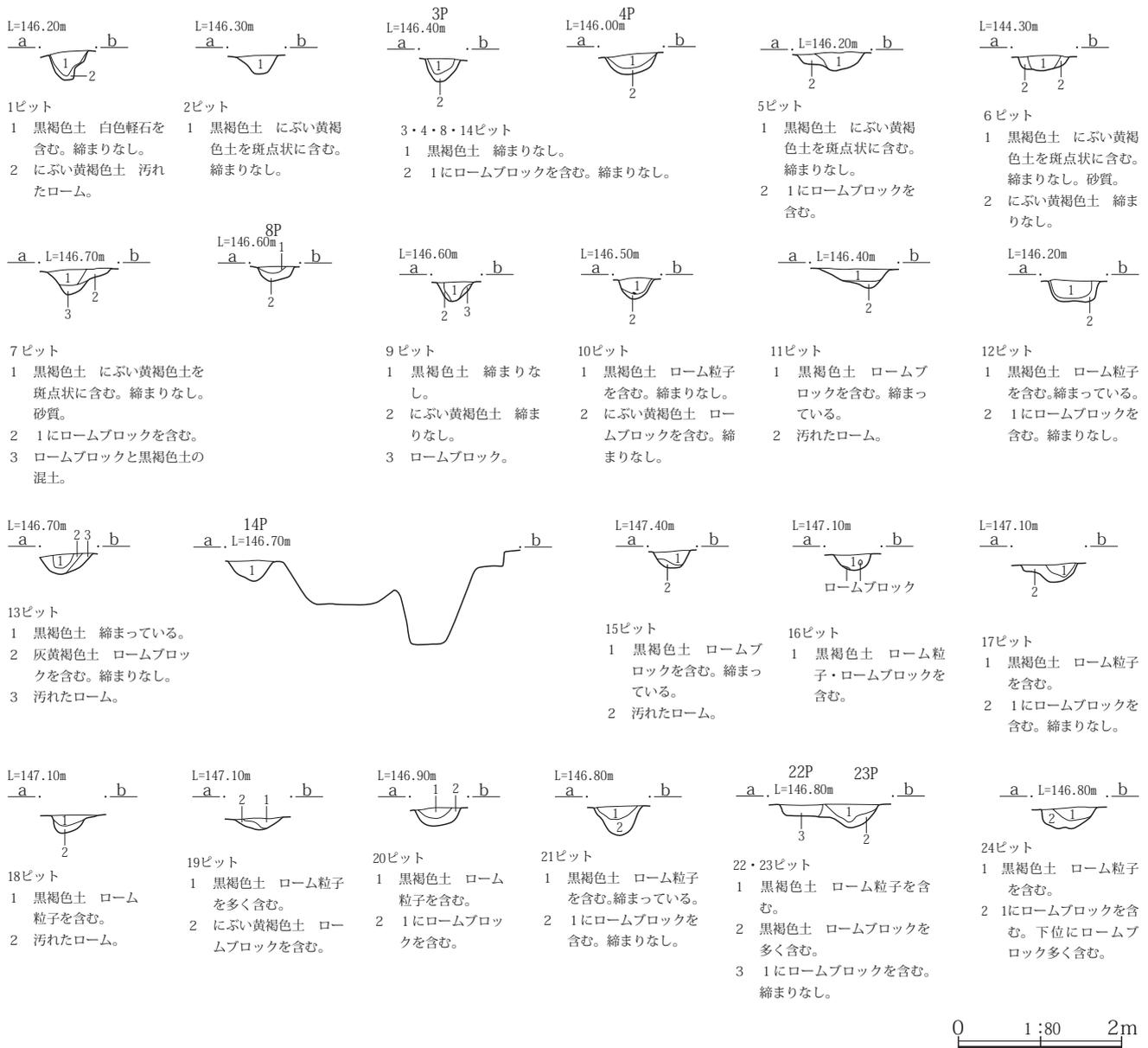
第170図 I区2面99・109・127・140・170・171土坑

0 1:40 1m

第45表 I区2面土坑計測表(5)

番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	遺物登録	破片	時期・時代	備考
61	土坑	I	2層	808-185		130×128・40	I422, I423	黒浜・有尾13		
79	土坑	I	2層	795-227	2住と重複	96×85・27	I437, I438	黒浜・有尾2		
82	土坑	I	2層	806-192	9住と重複	162×153・42	I440	黒浜・有尾10		
85	土坑	I	2層	798-230		137×132・49	I444, I445, I446 I447, I448	黒浜・有尾10		
89	土坑	I	2層	803-233		203×168・67	I452, I453, I454	黒浜・有尾50		
99	土坑	I	2層	802-226	2住と重複	108×96・35	I460, I461, I462	黒浜・有尾12		
109	土坑	I	2層	800-219		102×90・27	I469	黒浜・有尾1		
127	土坑	I	2層	811-223	171坑と重複	174×163・53	I487, I488, I489	黒浜・有尾32		
140	土坑	I	2層	802-206		139×115・52	I516, I517	黒浜・有尾11		
170	土坑	I	2層	810-226	171坑と重複	107×89・60		黒浜・有尾6		
171	土坑	I	2層	810-225	127・170坑と重複	152×123・49	I552, I553	黒浜・有尾29		

第4章 検出された遺構と遺物

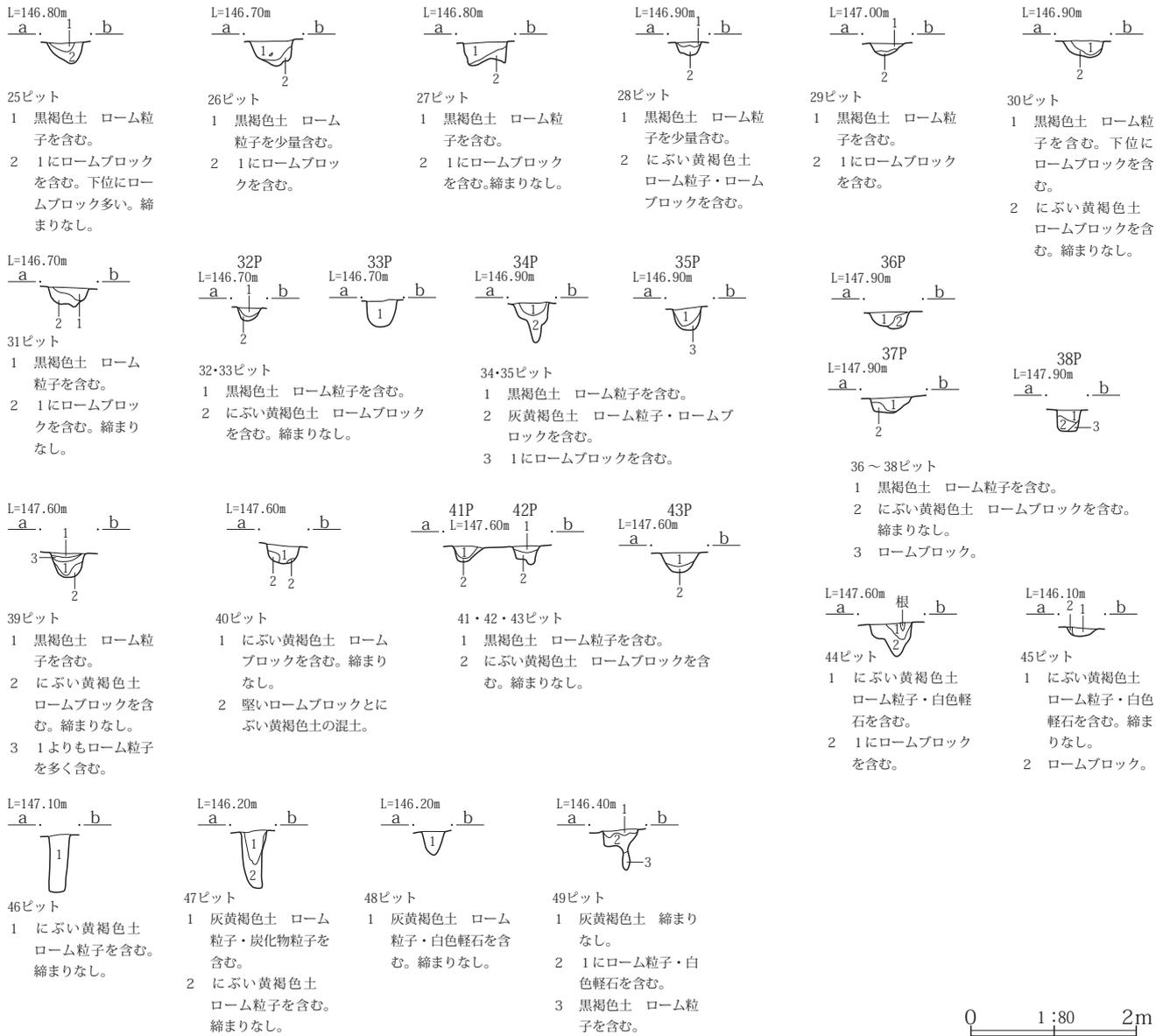


第171図 I区1面ピット断面図

第46表 I区1面ピット計測表

番号	遺構	区	確認面	検出位置	X-Y	重複関係	旧→新	長×短・深(cm)	覆土	遺物登録	破片	時期・時代	備考
1	ピット	I	1層	826-238				51×48・39					
2	ピット	I	1層	827-236				50×43・30					
3	ピット	I	1層	821-236				46×44・32					
4	ピット	I	1層	801-242				66×61・31					
5	ピット	I	1層	800-239				91×77・22					
6	ピット	I	1層	807-236				63×53・17					
7	ピット	I	1層	818-227				85×67・42					
8	ピット	I	1層	809-229				46×45・19					
9	ピット	I	1層	808-230				50×44・27					
10	ピット	I	1層	808-232				47×42・27					
11	ピット	I	1層	803-232			トレンチに切られている	89×47・17					
12	ピット	I	1層	796-239				71×68・27					
13	ピット	I	1層	804-227				71×63・34					
14	ピット	I	1層	806-228				67×59・30					
15	ピット	I	1層	820-218				57×51・25					
16	ピット	I	1層	808-215				47×42・23					
17	ピット	I	1層	803-213				71×56・27					
18	ピット	I	1層	803-214				63×55・23					
19	ピット	I	1層	802-215				62×59・19					
20	ピット	I	1層	801-217				69×58・24					
21	ピット	I	1層	800-219				60×53・37					
22	ピット	I	1層	803-221				73×58・14					
23	ピット	I	1層	803-221				75×63・34					
24	ピット	I	1層	802-222				76×55・25					

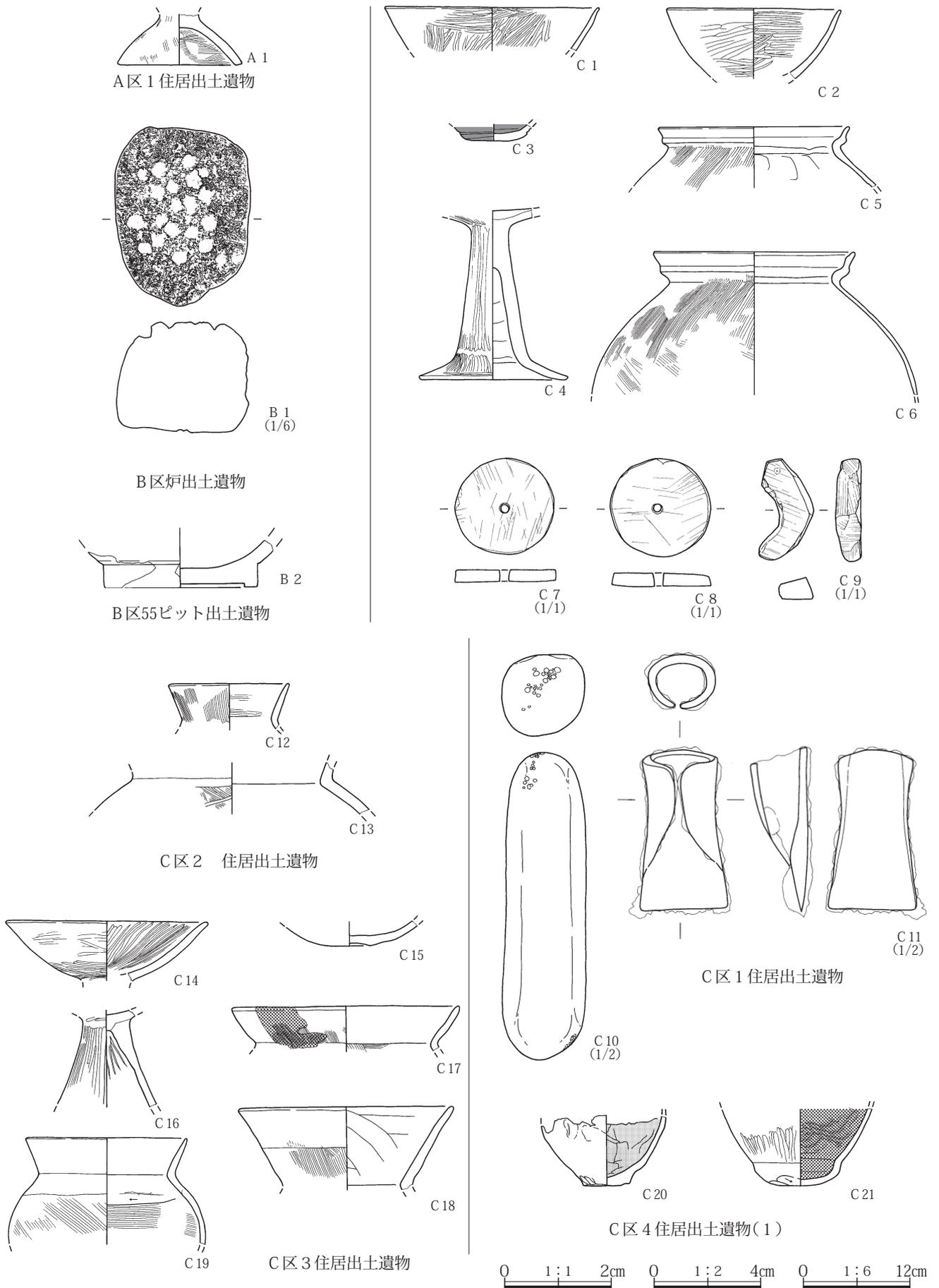
遺構図(I区)



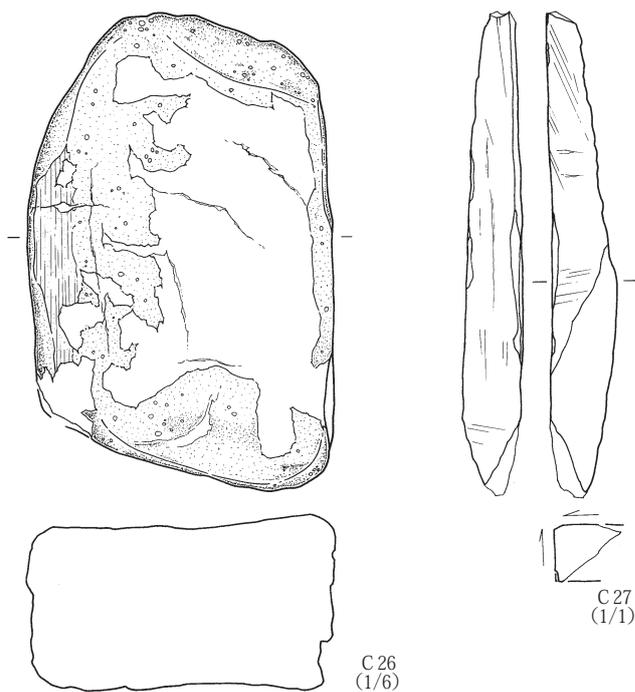
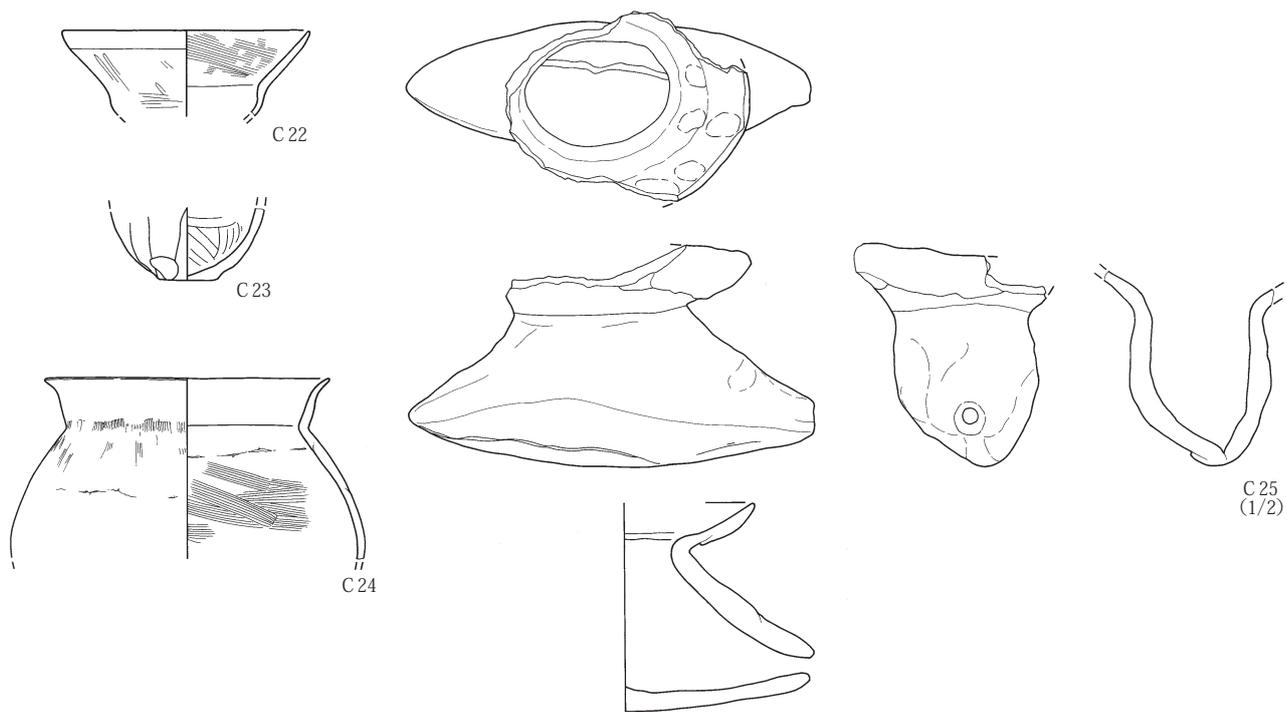
第172図 I区1・2面ピット断面図

第47表 I区1・2面ピット計測表

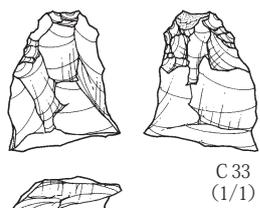
番号	遺構	区	確認面	検出位置 X-Y	重複関係 旧→新	長×短・深(cm)	覆土	遺物登録	破片	時期・時代	備考
25	ピット	I	1層	801-220		47×39・29					
26	ピット	I	1層	798-221		56×45・36					
27	ピット	I	1層	802-221		55×48・24					
28	ピット	I	1層	804-220		35×33・17					
29	ピット	I	1層	804-215		51×45・20					
30	ピット	I	1層	800-213		54×51・22					
31	ピット	I	1層	797-216		55×54・20					
32	ピット	I	1層	790-205		31×29・19					
33	ピット	I	1層	791-204		39×34・35					
34	ピット	I	1層	792-203		46×43・52					
35	ピット	I	1層	788-201		40×38・29					
36	ピット	I	1層	809-192		52×49・25					
37	ピット	I	1層	809-192		64×55・24					
38	ピット	I	1層	806-190		33×31・27					
39	ピット	I	1層	801-193		49×45・33					
40	ピット	I	1層	802-194		43×40・25					
41	ピット	I	1層	804-195		38×35・19					
42	ピット	I	1層	803-195		39×38・25					
43	ピット	I	1層	807-195		47×43・27					
44	ピット	I	2層	814-197		54×18・40					
45	ピット	I	2層	792-231		47×27・42					
46	ピット	I	2層	802-235		37×30・71					
47	ピット	I	2層	802-233		41×33・74					
48	ピット	I	2層	800-232		30×28・31					
49	ピット	I	2層	793-213		51×48・86					



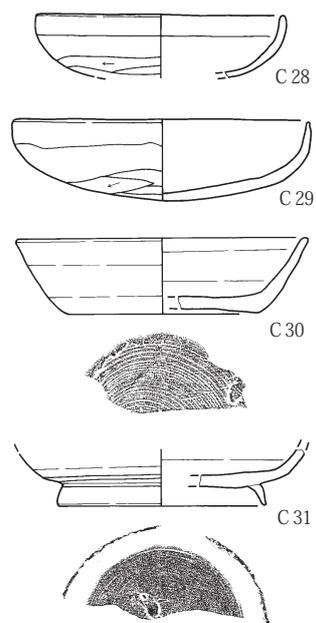
第173図 A区1住居、B区炉・55ピット、C区1～4住居(1)出土遺物



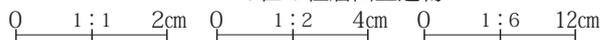
C区4住居出土遺物(2)



C区201土坑出土遺物

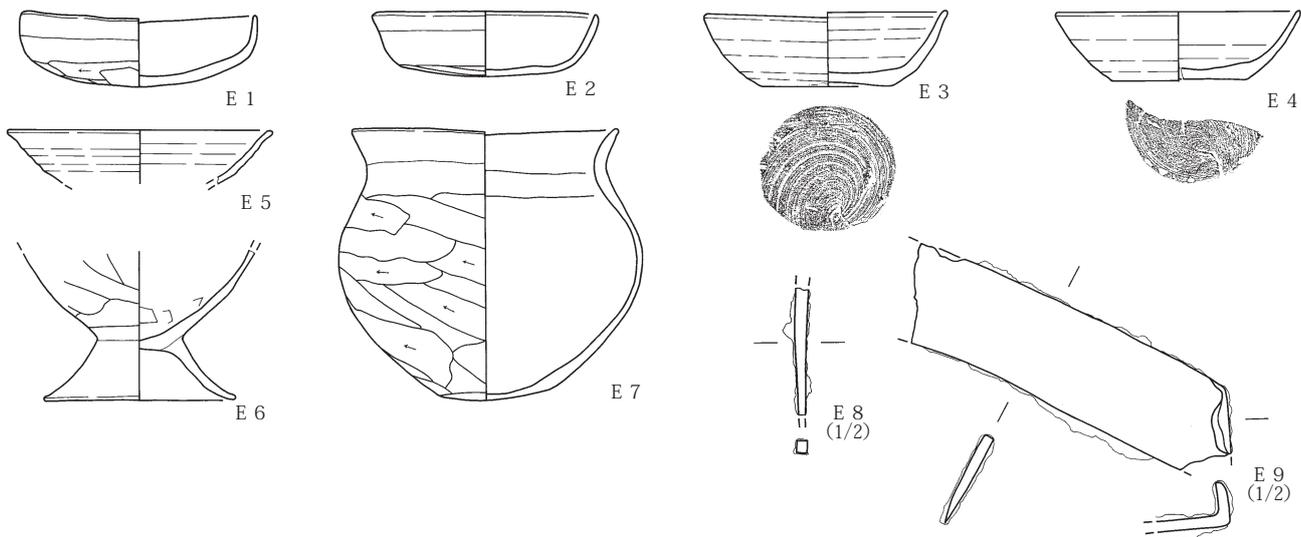


C区6住居出土遺物

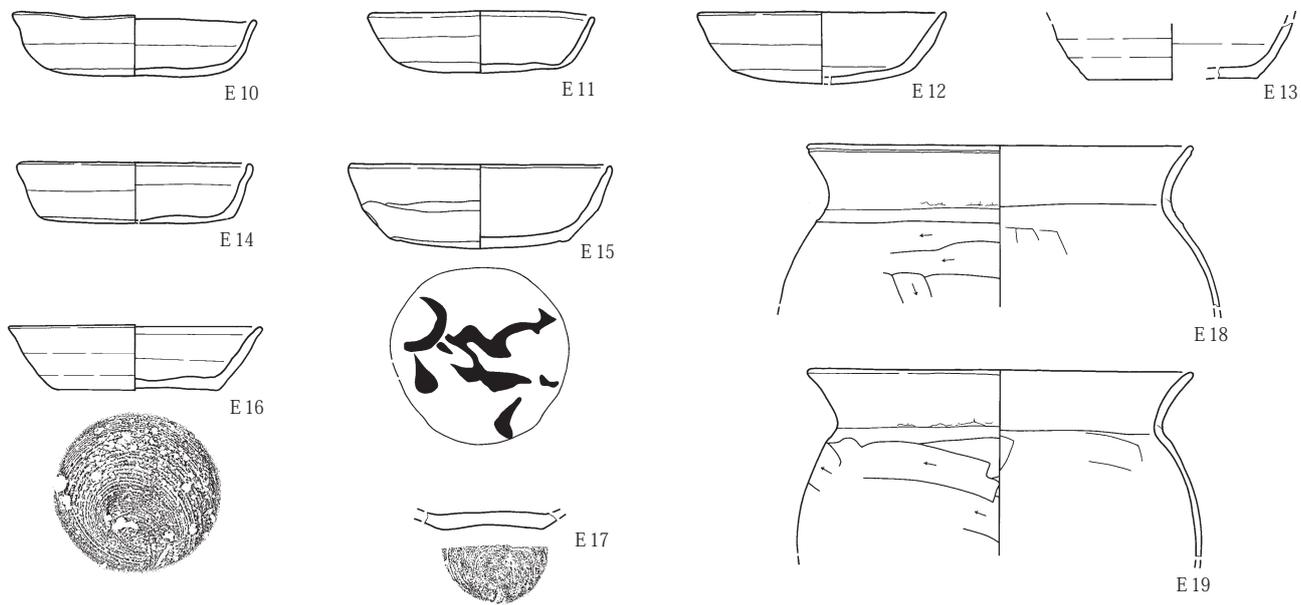


第174图 C区4住居(2)、6住居、201土坑出土遺物

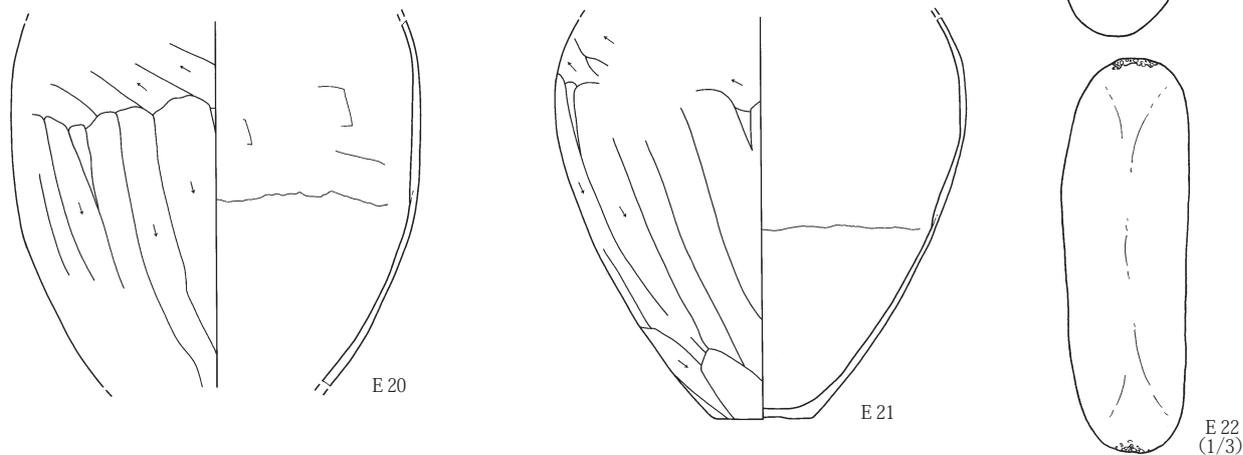
第4章 検出された遺構と遺物



E区1住居出土遺物



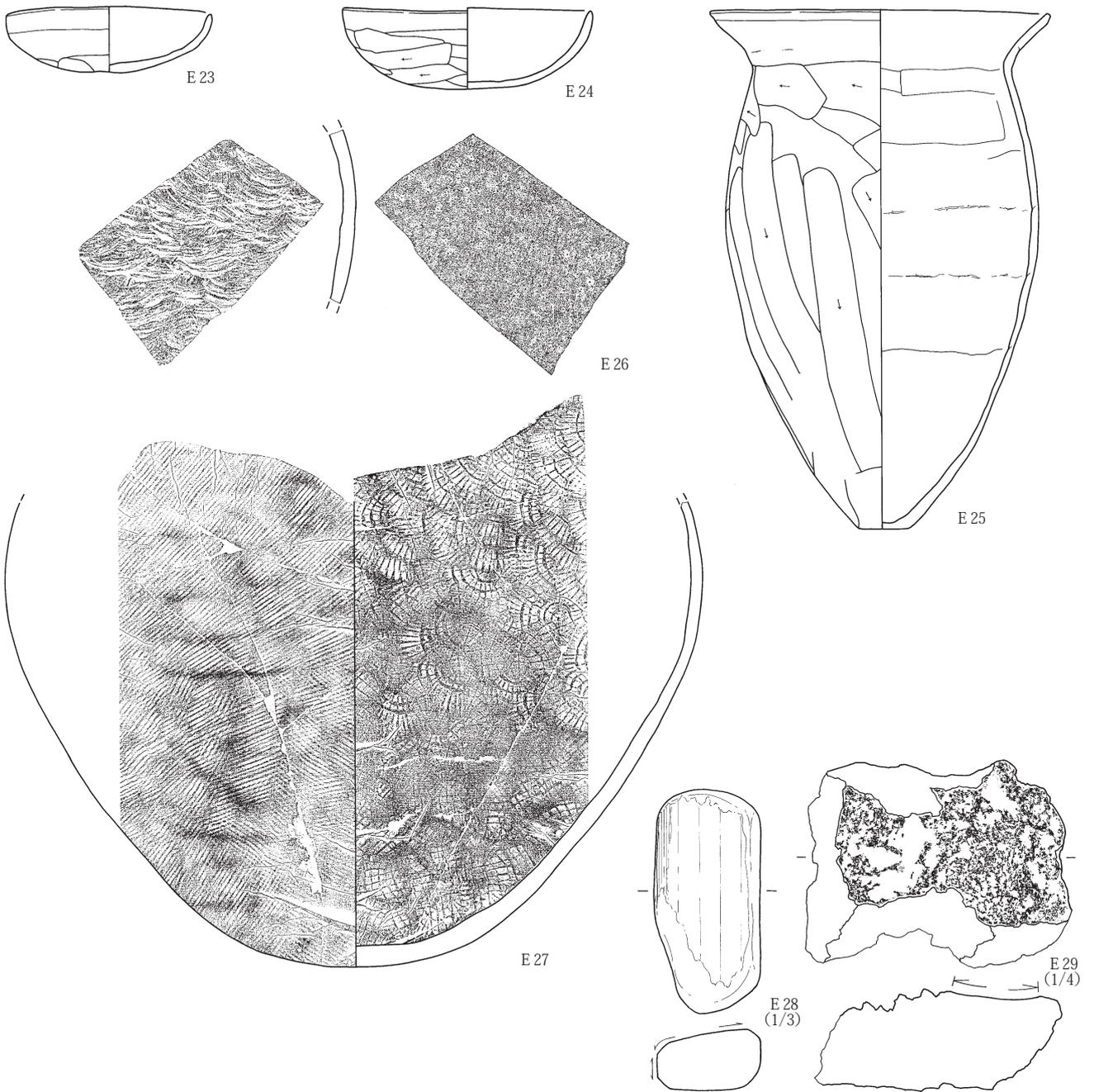
E区2住居出土遺物



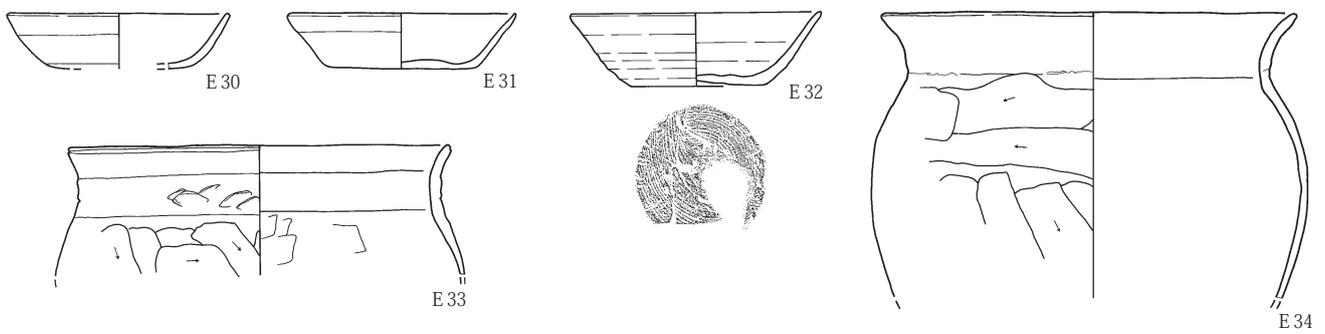
E区2住居出土遺物



第175図 E区1・2住居出土遺物



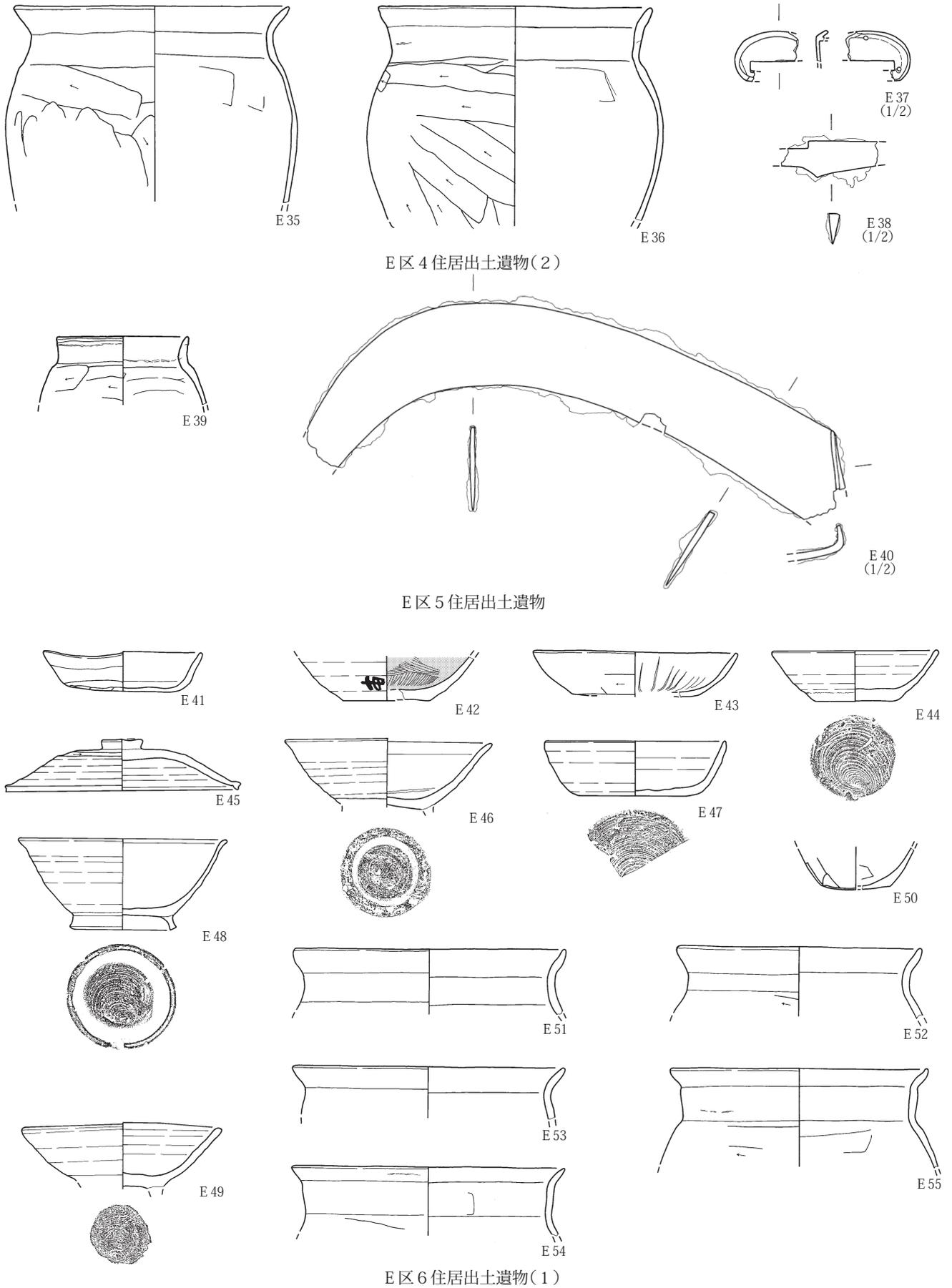
E区3住居出土遺物



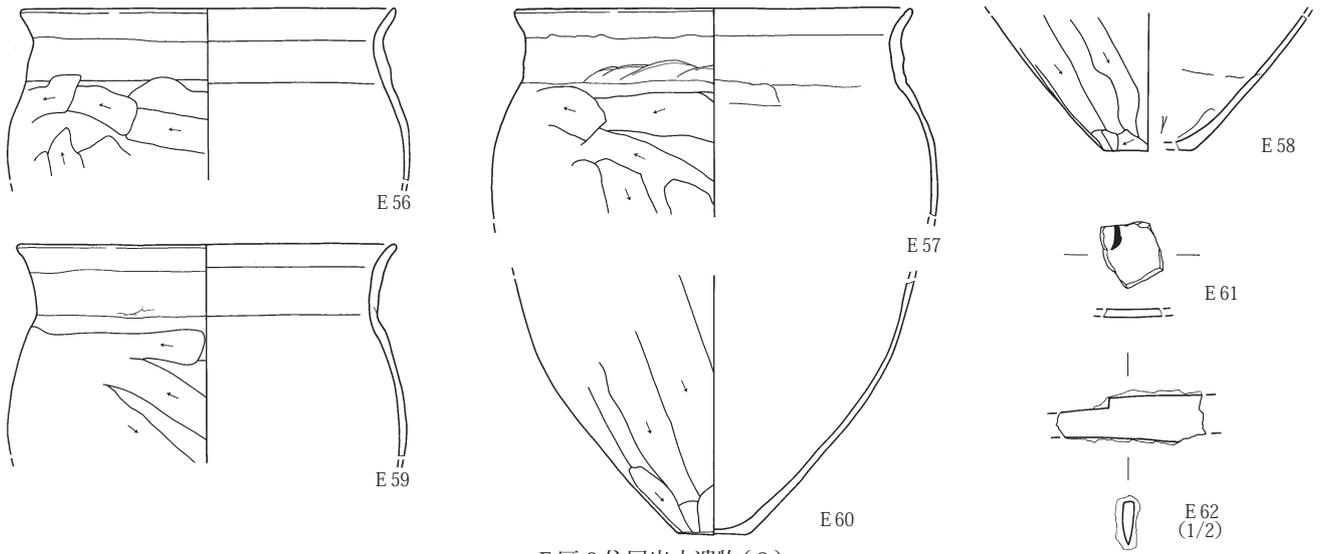
E区4住居出土遺物(1)

0 1:3 5cm 0 1:4 8cm

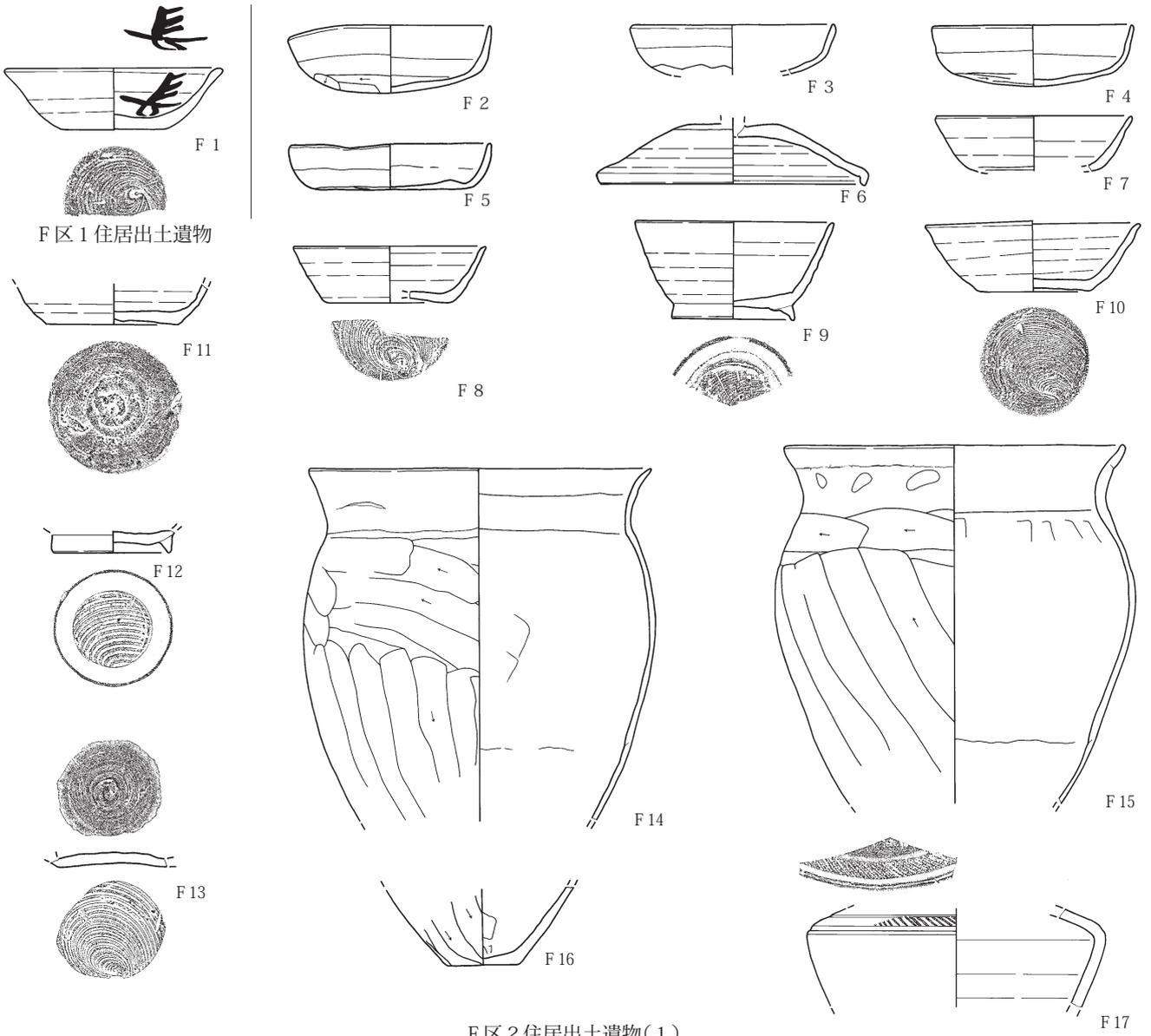
第176图 E区3住居、4住居(1)出土遺物



第177図 E区4住居(2)、5住居、6住居(1)出土遺物

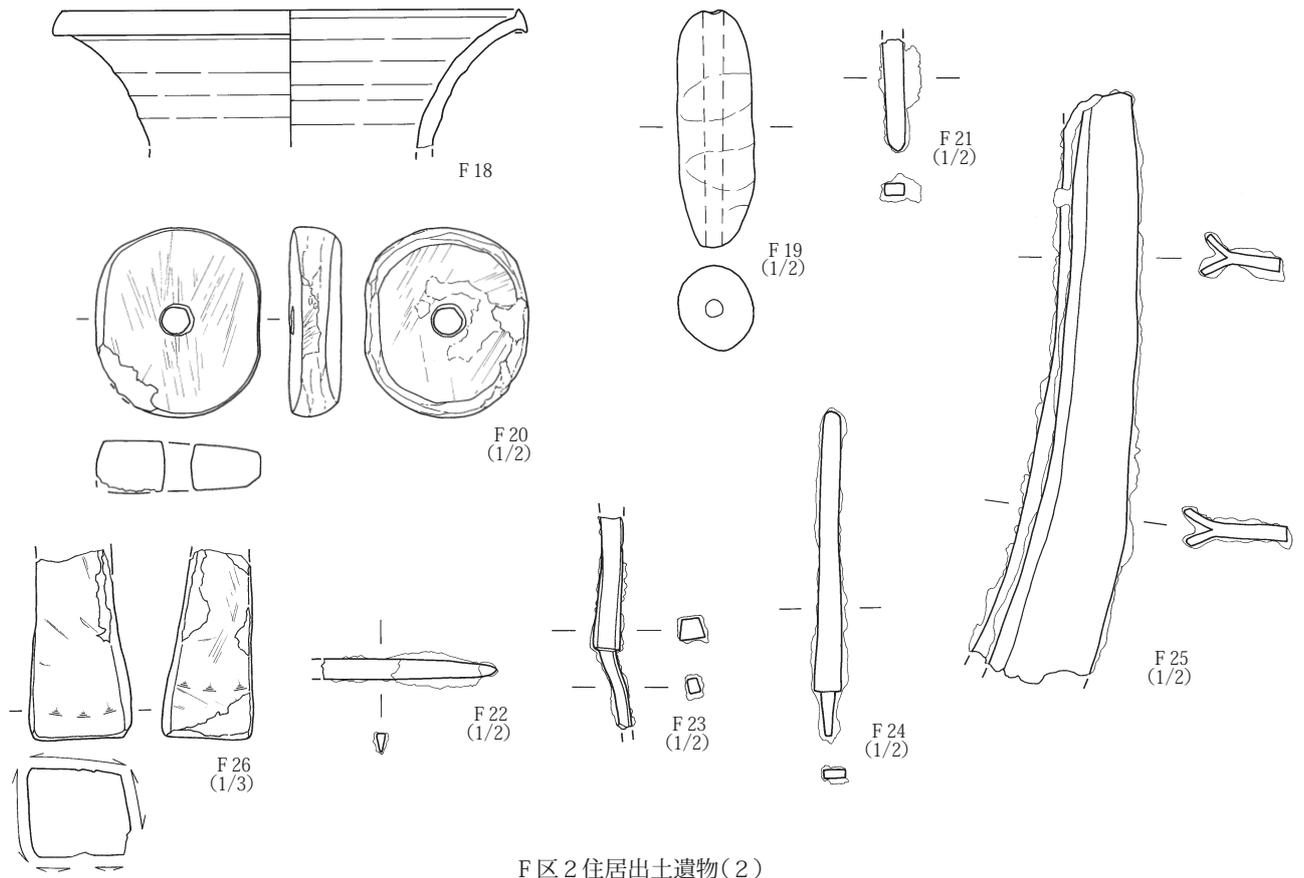


E区6住居出土遺物(2)

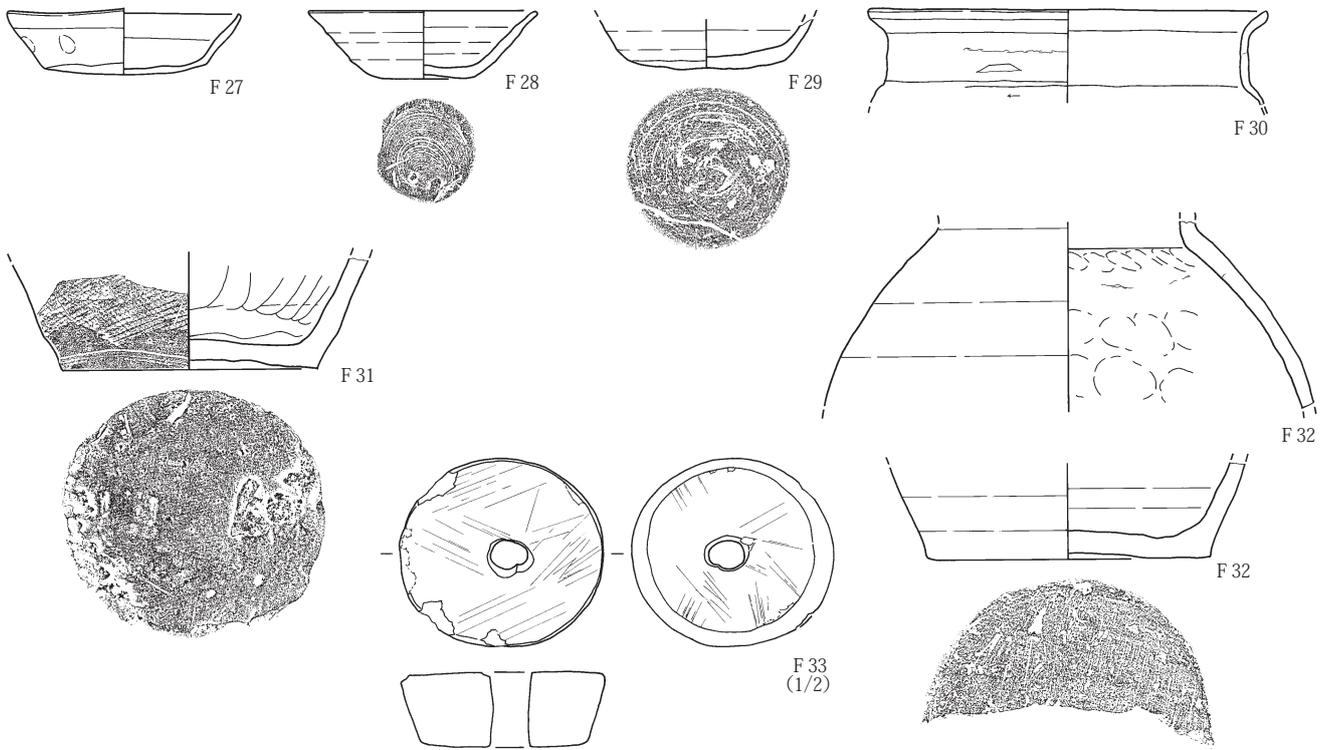


F区2住居出土遺物(1)

第178図 E区6住居(2)、F区1住居、2住居(1)出土遺物



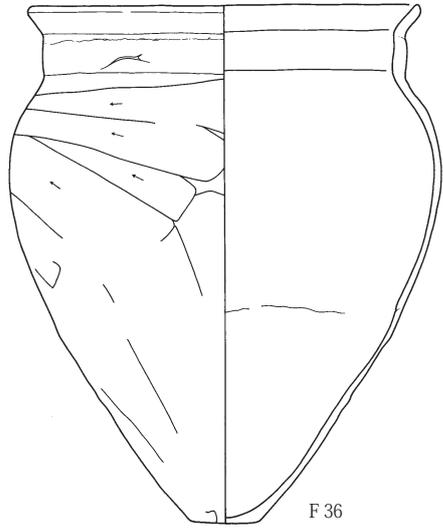
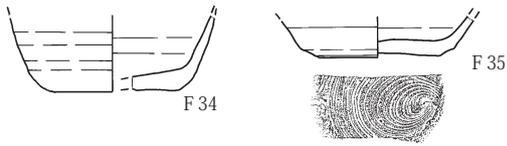
F区2住居出土遺物(2)



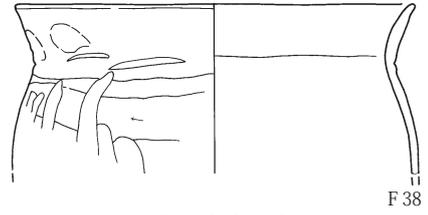
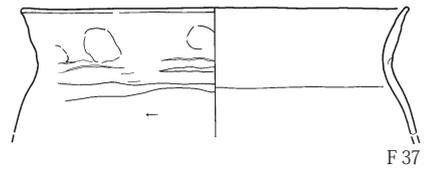
F区3住居出土遺物



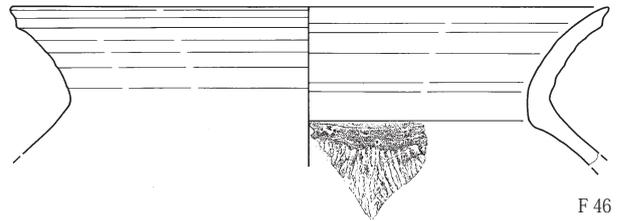
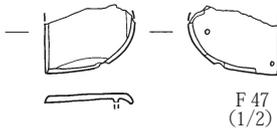
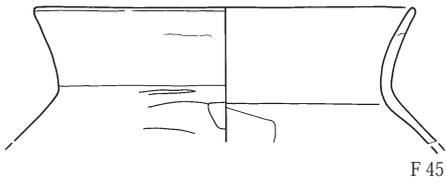
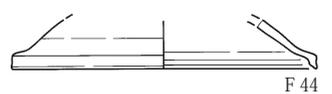
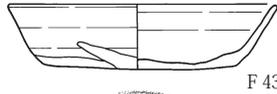
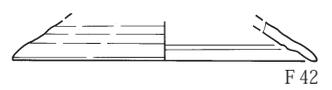
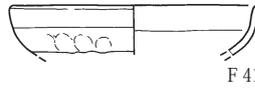
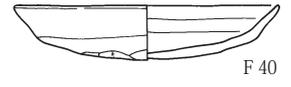
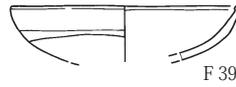
第179図 F区2住居(2)、3住居出土遺物



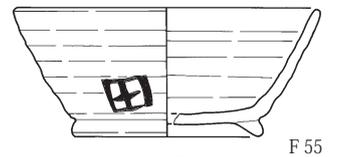
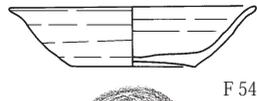
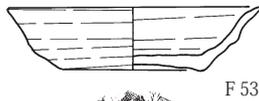
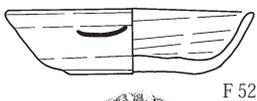
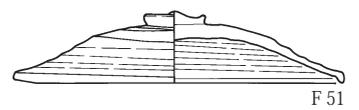
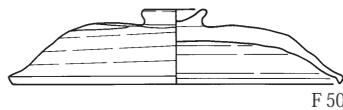
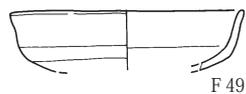
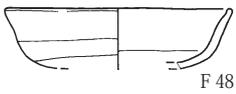
F区4住居出土遺物



F区5住居出土遺物



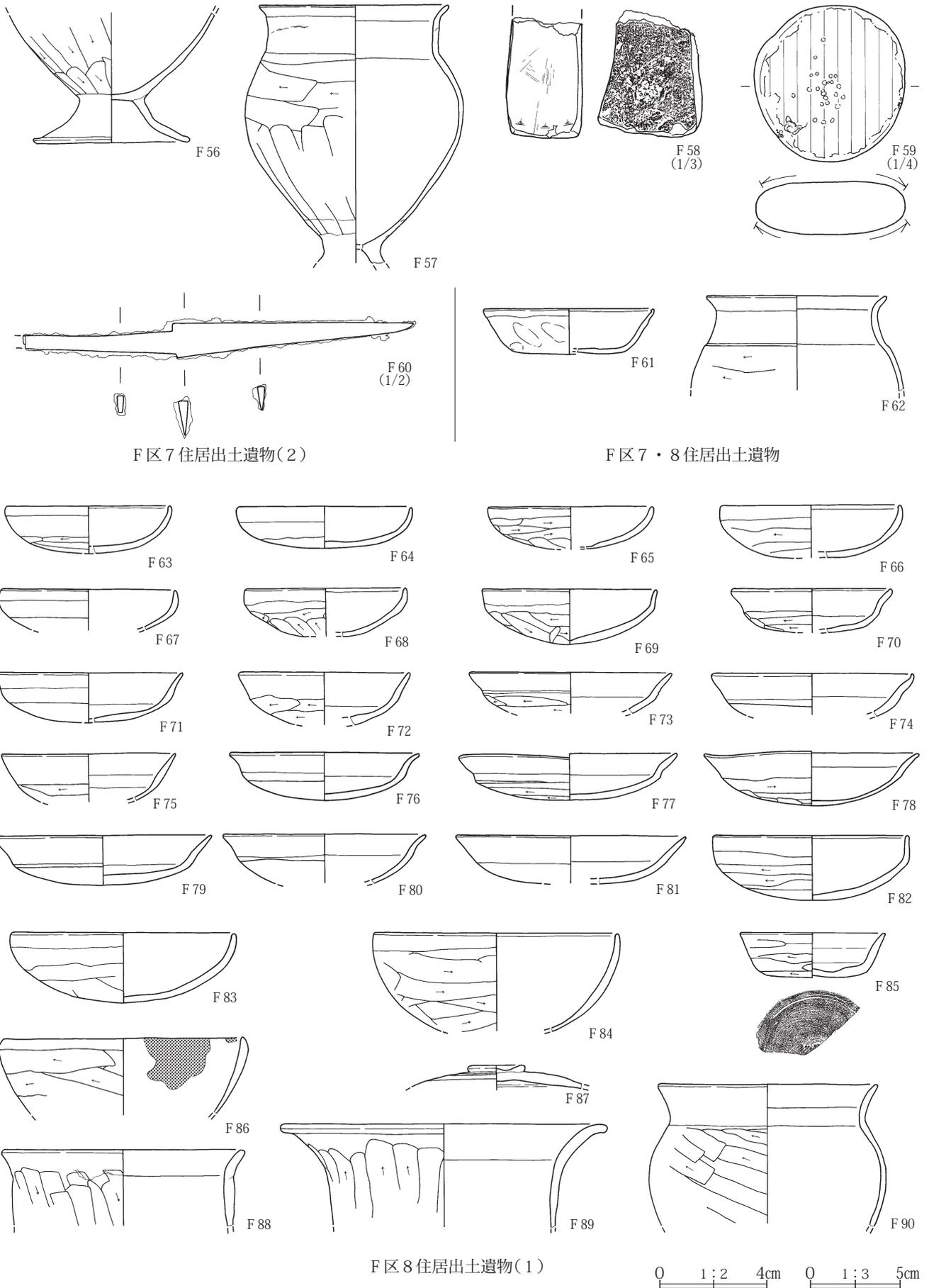
F区6住居出土遺物



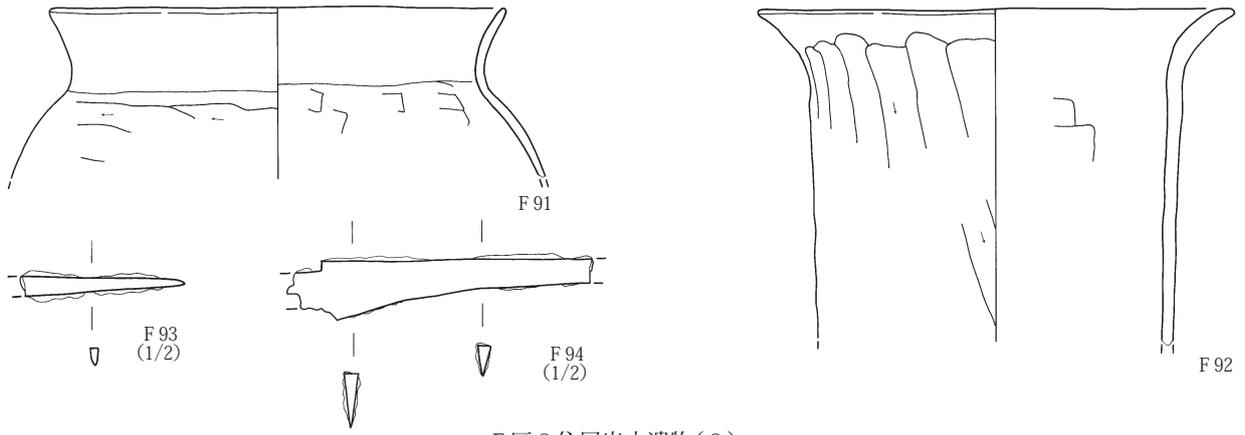
F区7住居出土遺物(1)

0 1:2 4cm

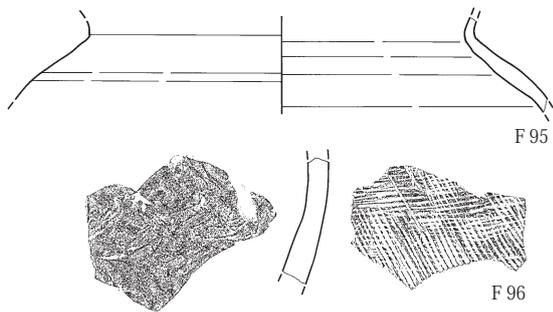
第180図 F区4~6住居、7住居(1)出土遺物



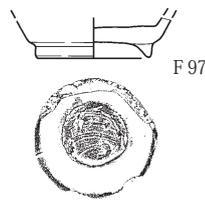
第181図 F区7住居(2)、7・8住居、8住居(1)出土遺物



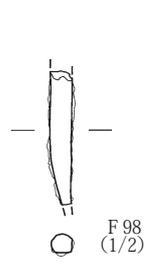
F区8住居出土遺物(2)



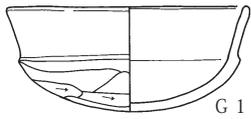
F区1溝出土遺物



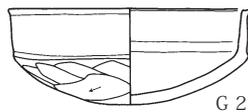
F区2溝出土遺物



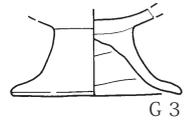
F区3溝出土遺物



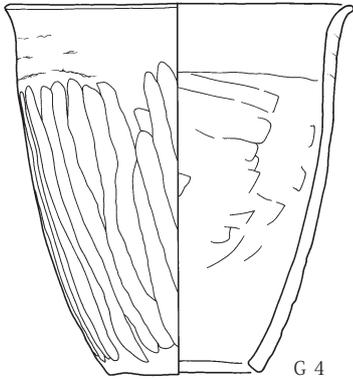
G 1



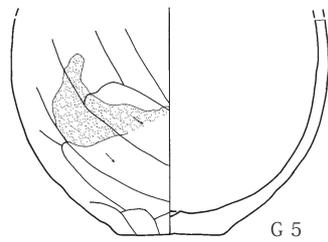
G 2



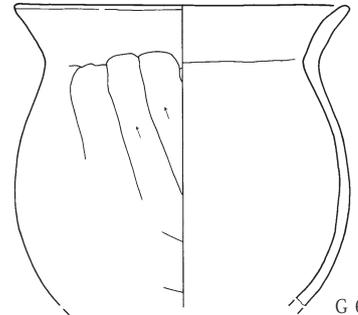
G 3



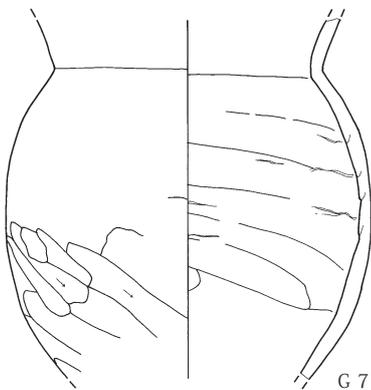
G 4



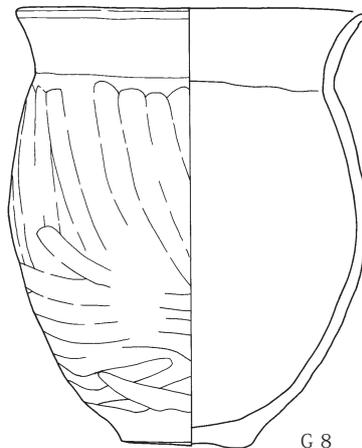
G 5



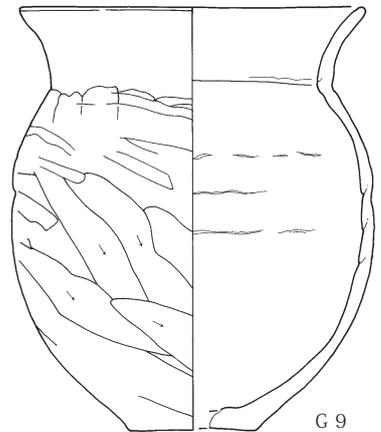
G 6



G 7



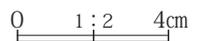
G 8

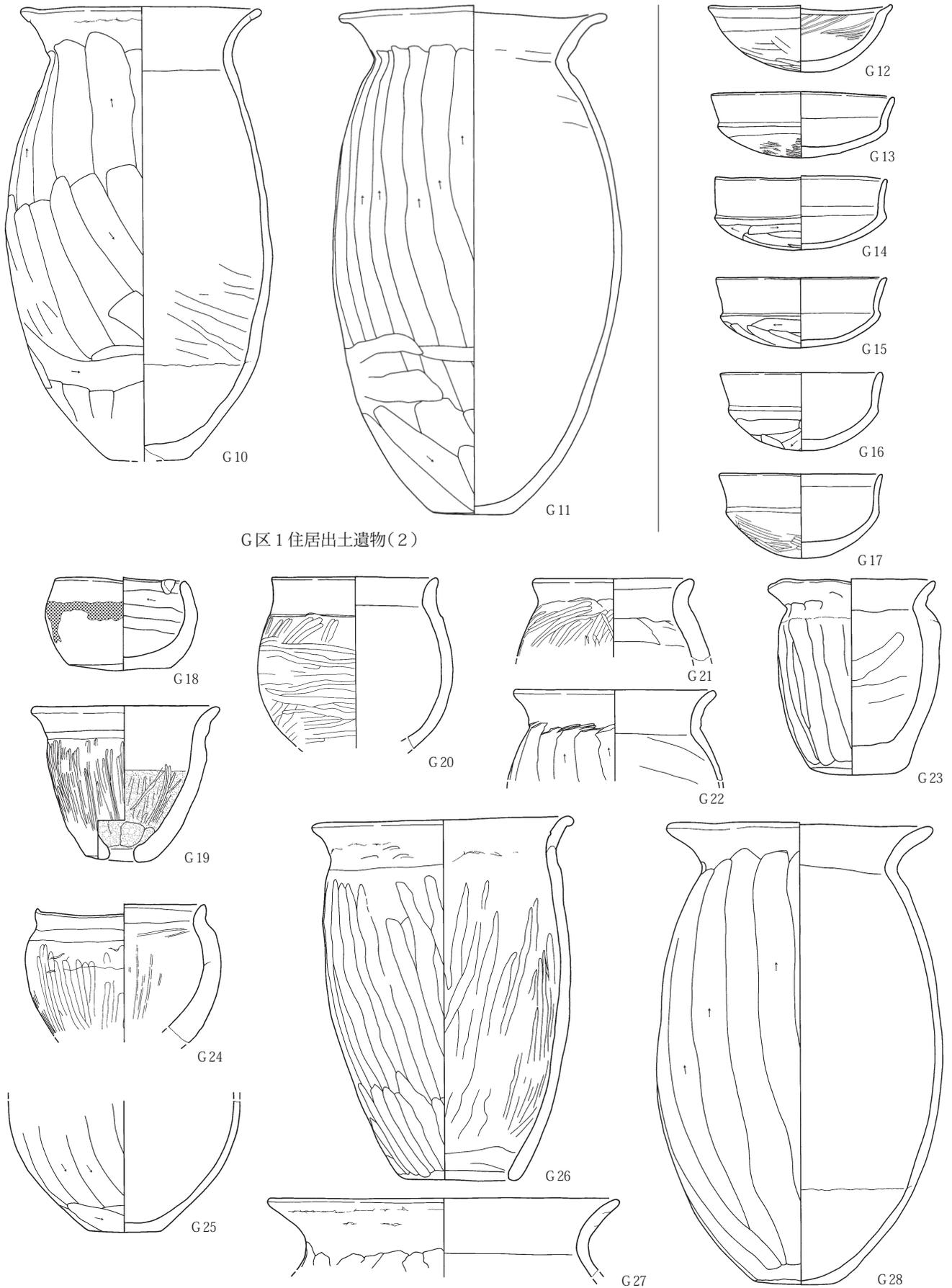


G 9

G区1住居出土遺物(1)

第182図 F区8住居(2)、1~3溝、G区1住居(1)出土遺物

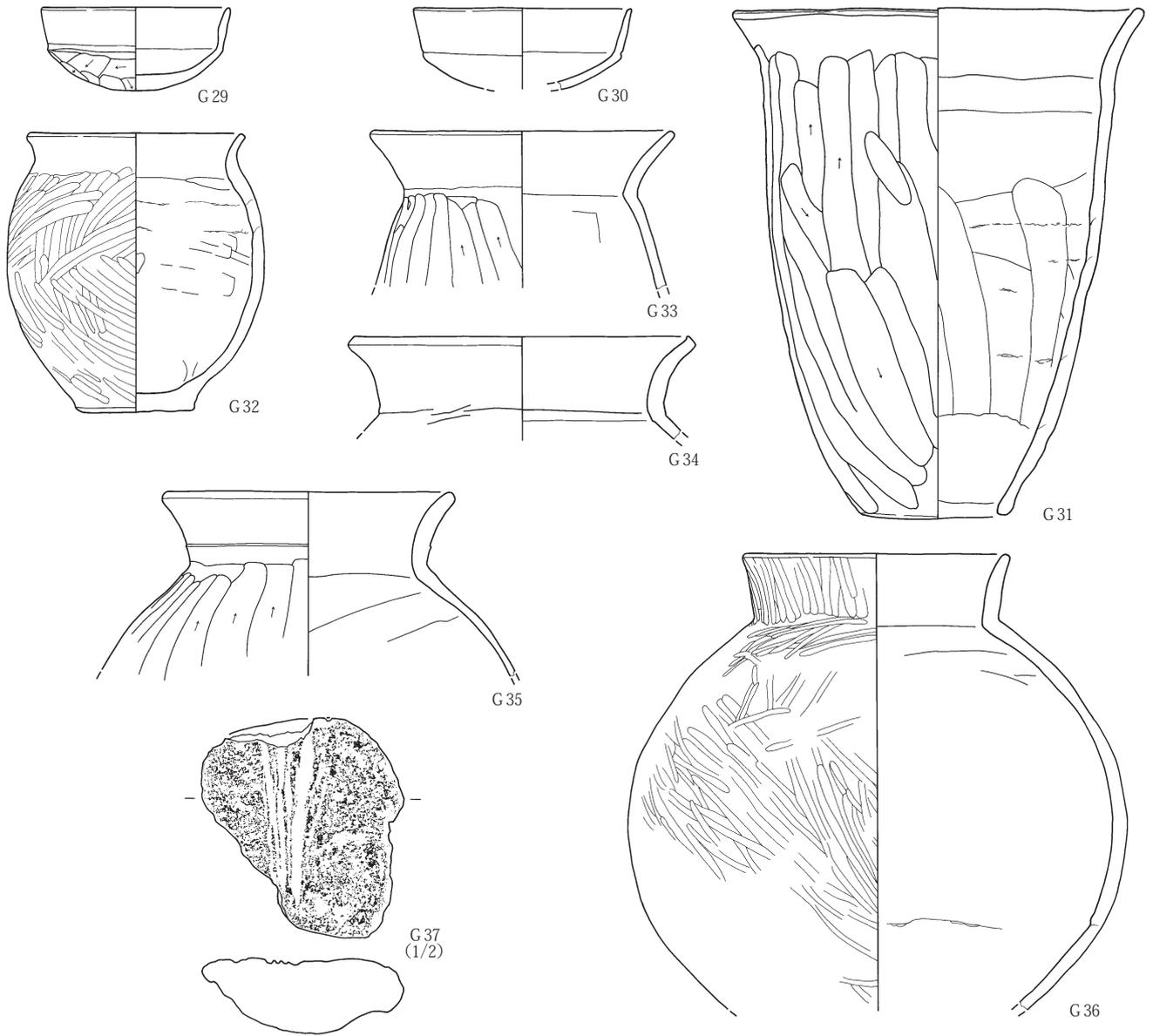




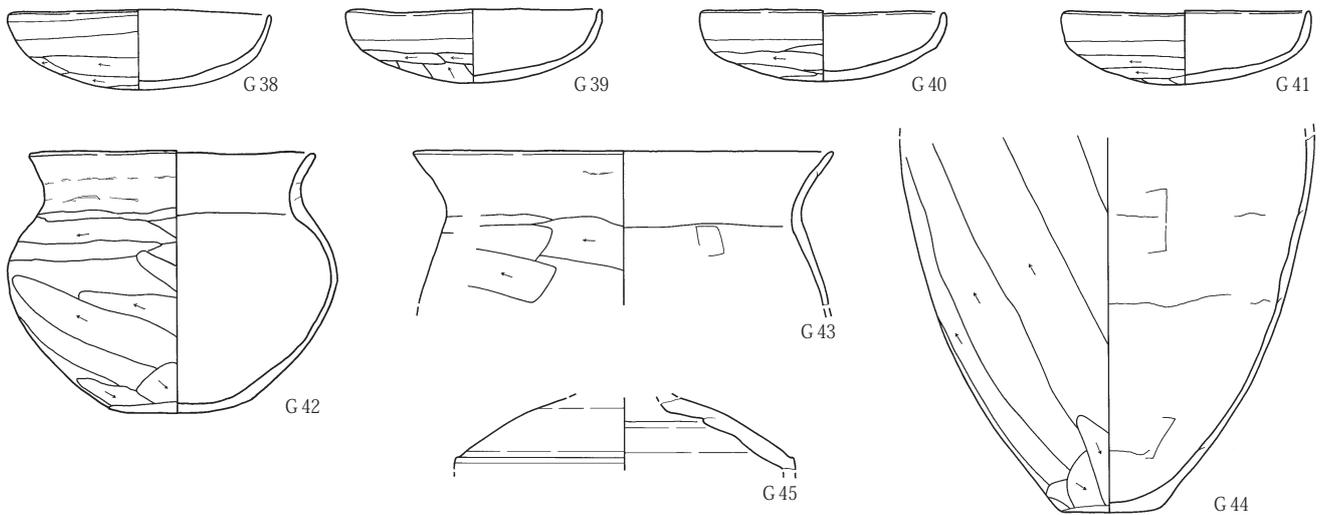
G区1住居出土遺物(2)

G区2住居出土遺物

第183図 G区1住居(2)、2住居出土遺物



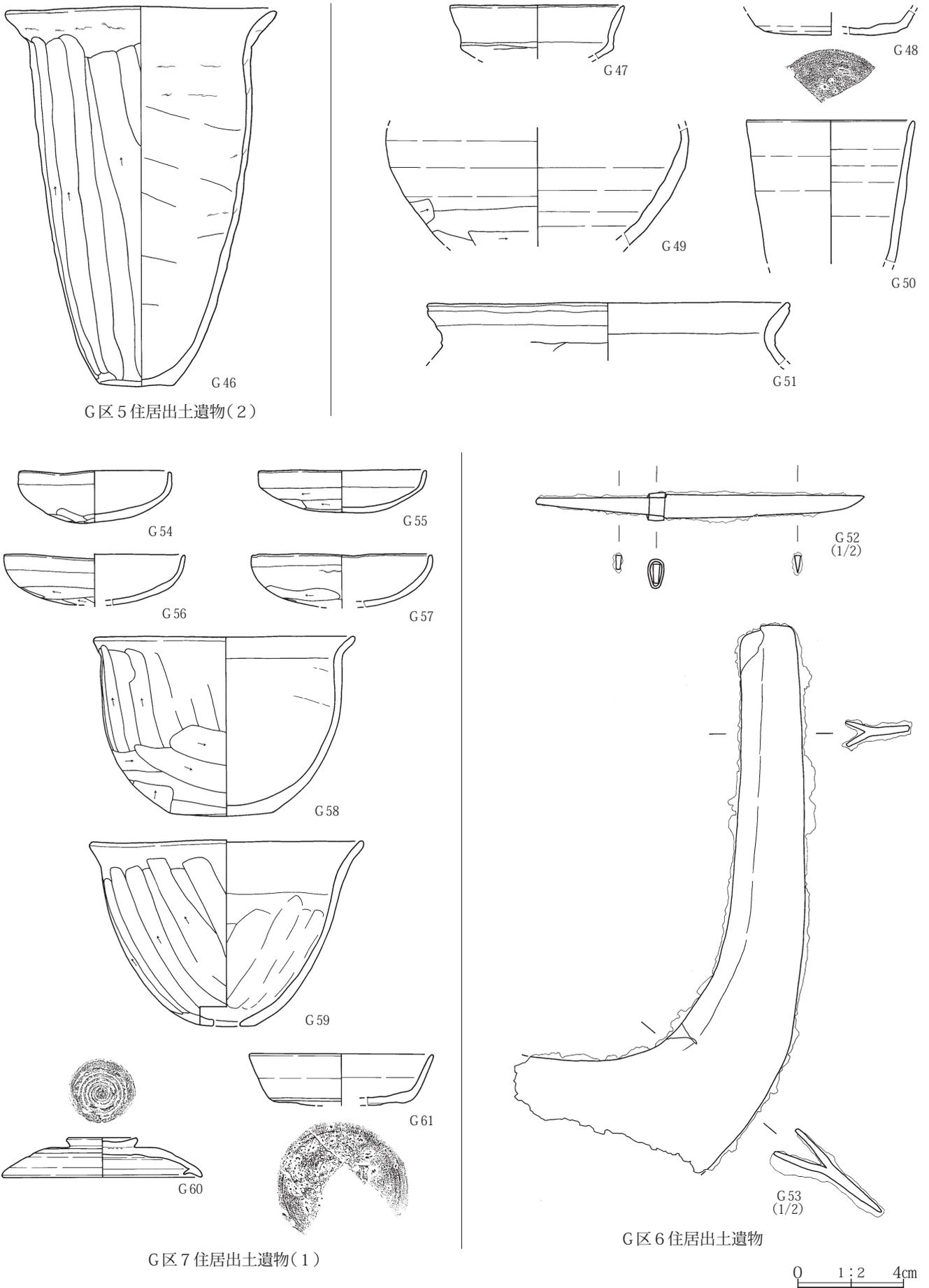
G区3住居出土遺物



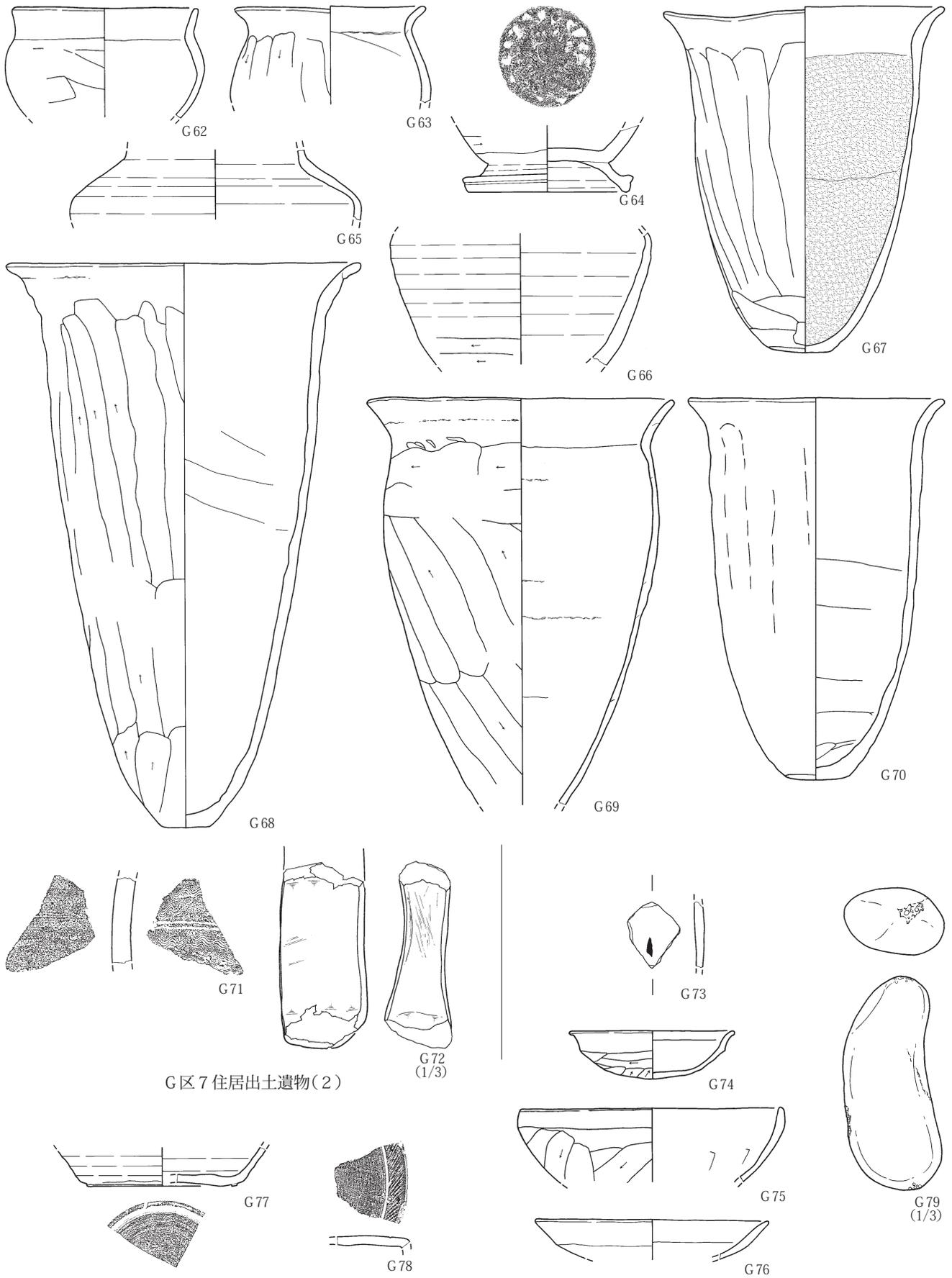
G区5住居出土遺物(1)

第184図 G区3住居、5住居(1)出土遺物

0 1:2 4cm



第185図 G区5住居(2)、6住居、7住居(1)出土遺物

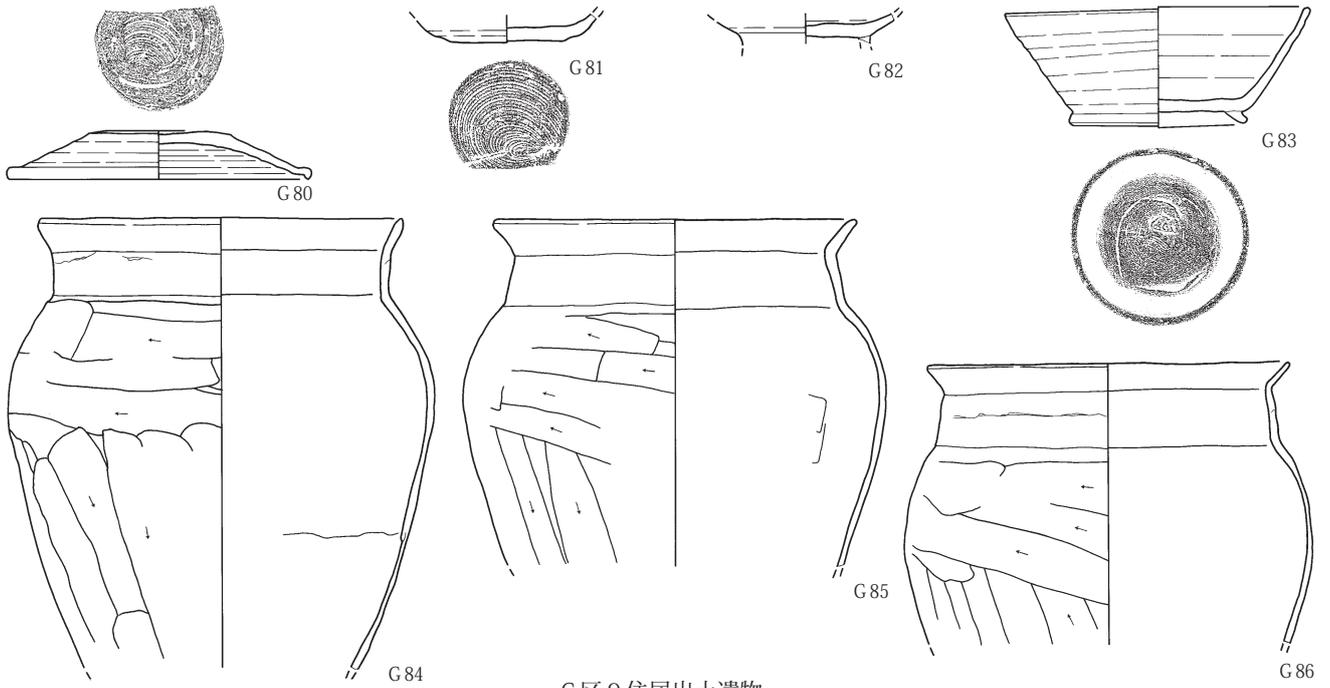


G区7住居出土遺物(2)

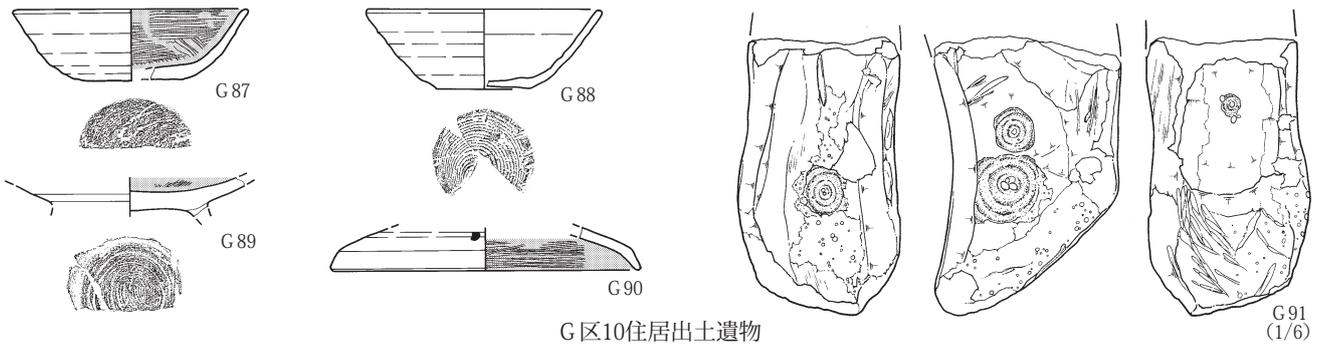
G区8住居出土遺物

第186图 G区7住居(2)、8住居出土遺物

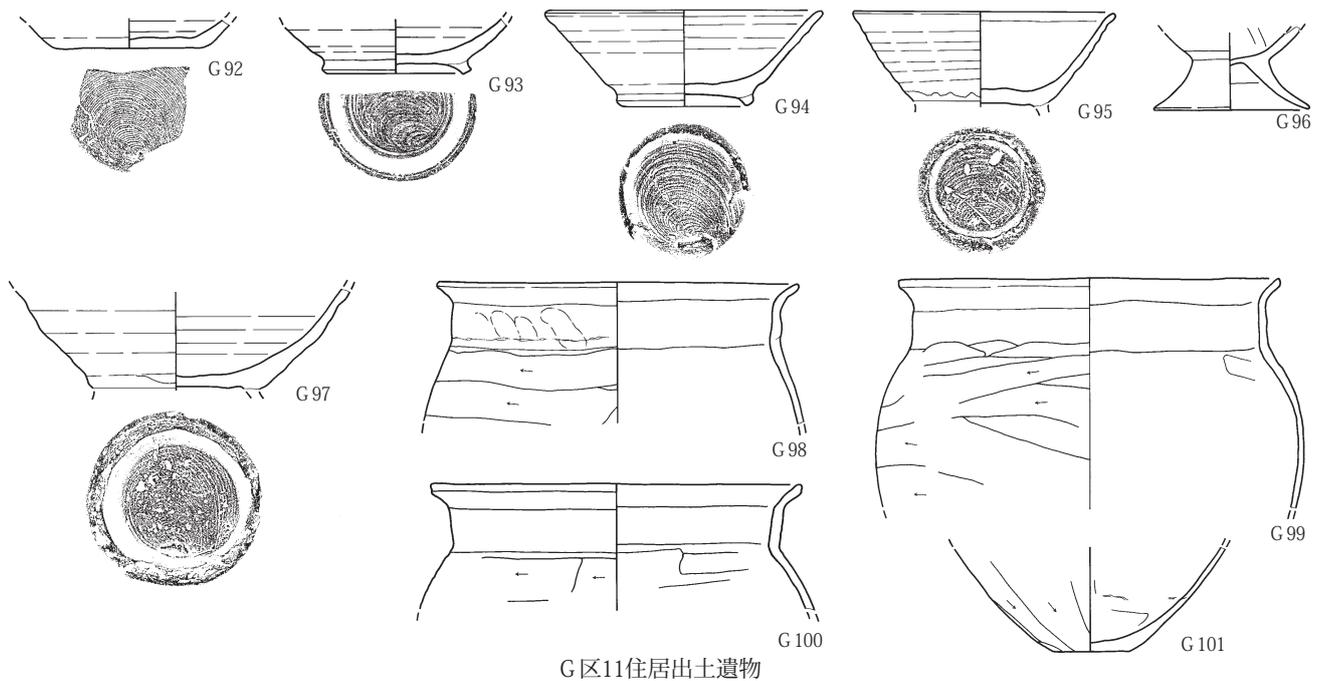
0 1:3 5cm



G区9住居出土遺物



G区10住居出土遺物

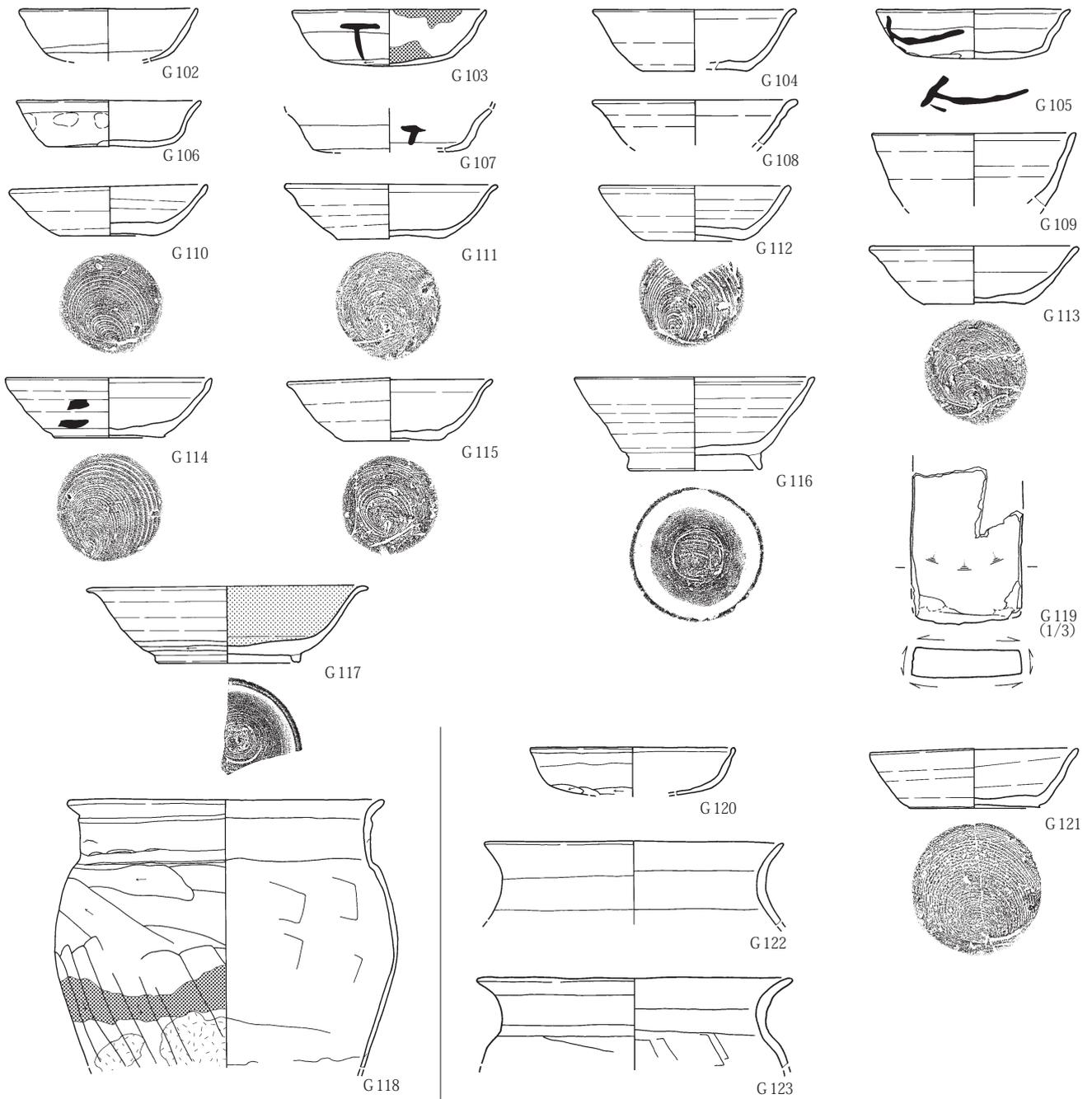


G区11住居出土遺物

0 1:6 12cm

第187図 G区9～11住居出土遺物

遺物図(G区)

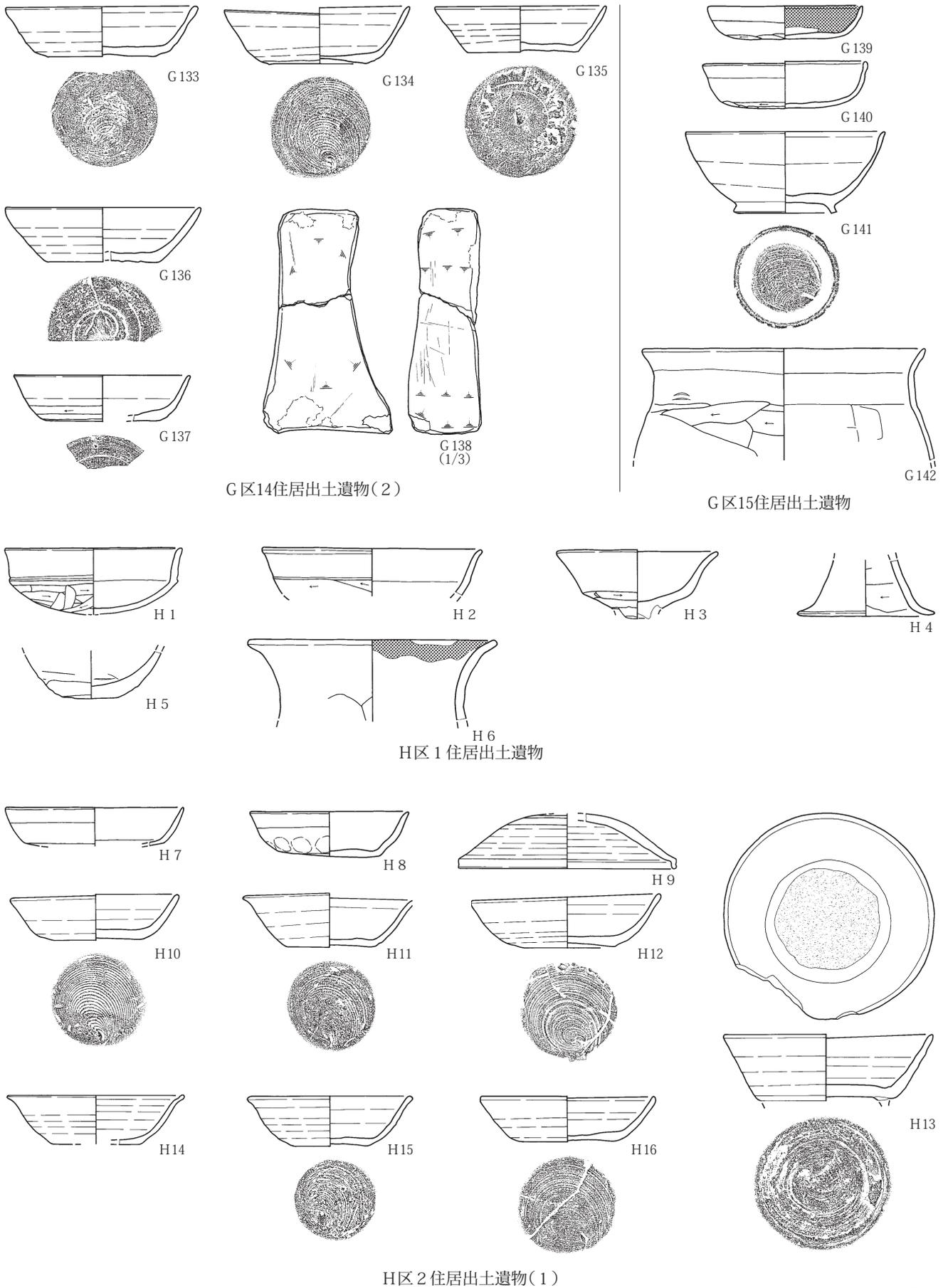


G区12住居出土遺物

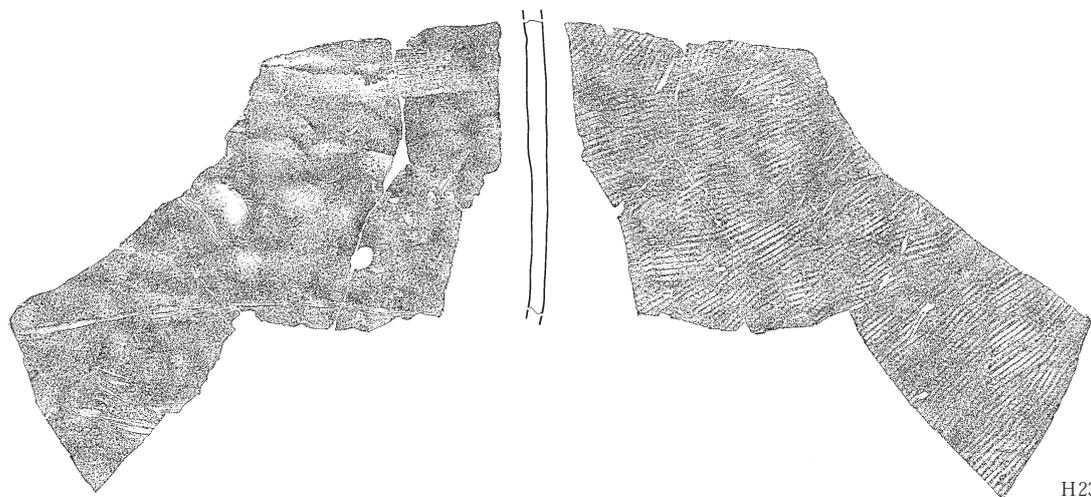
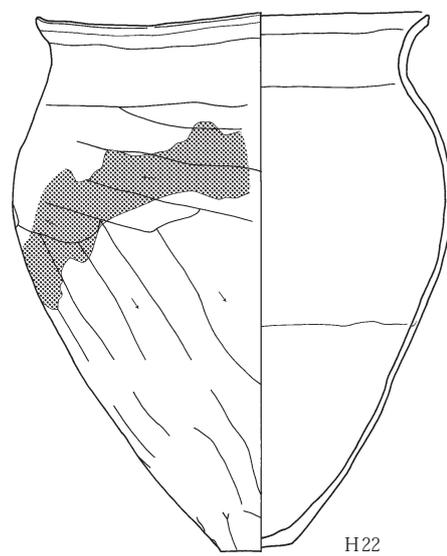
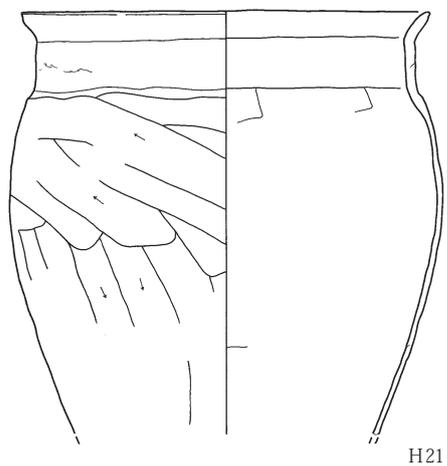
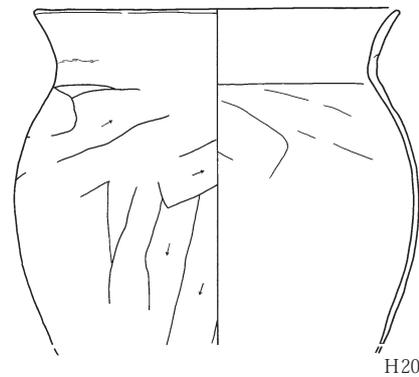
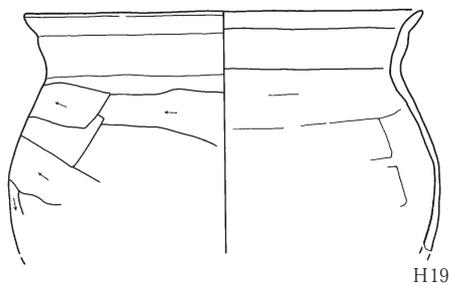
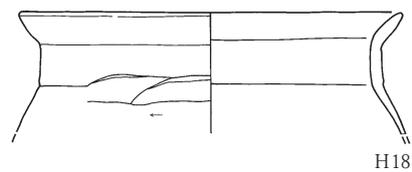
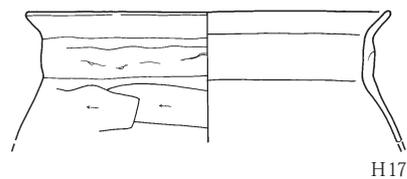
G区13住居出土遺物

G区14住居出土遺物(1)

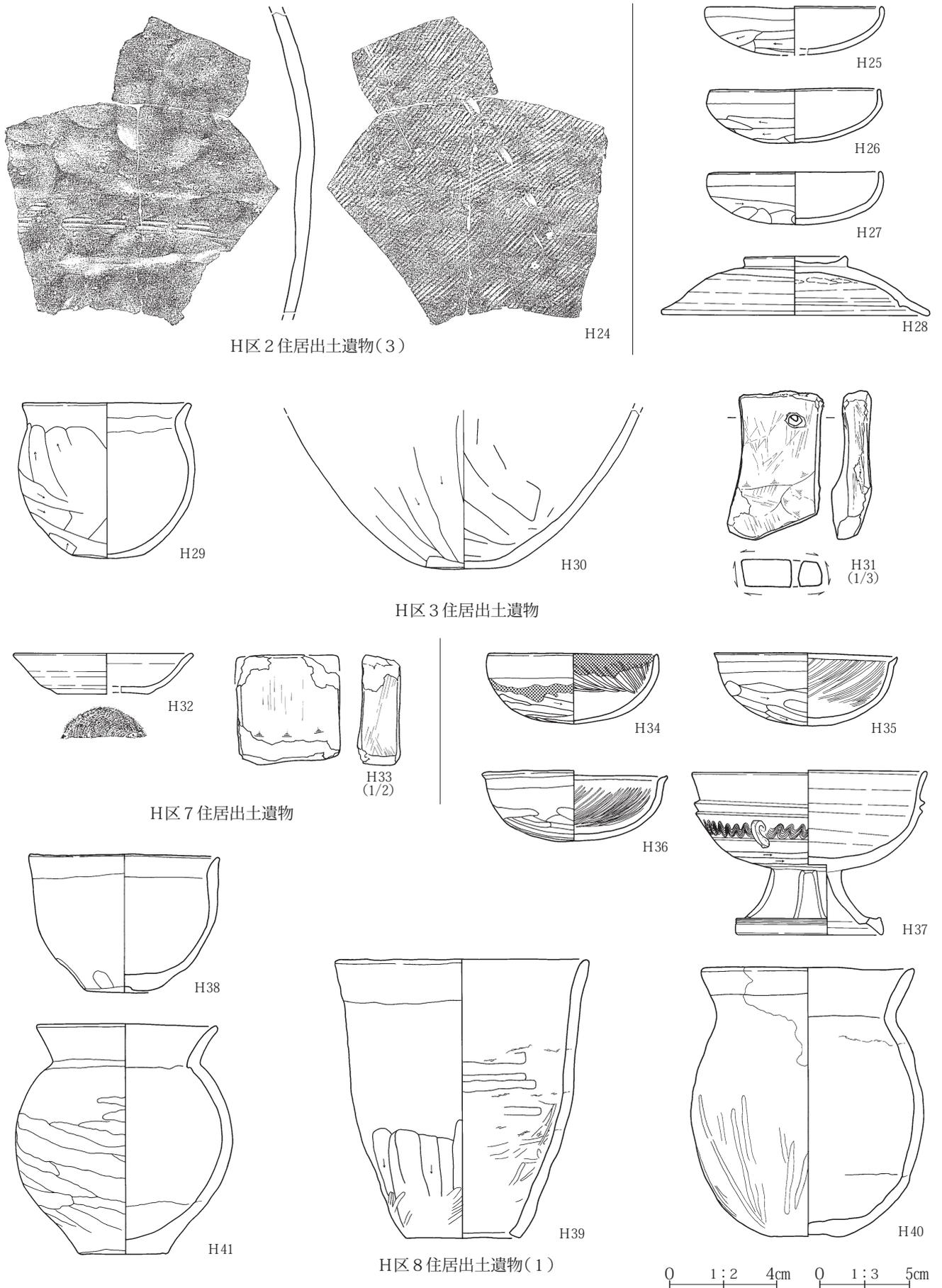
第 188 図 G区 12・13 住居、14 住居(1) 出土遺物



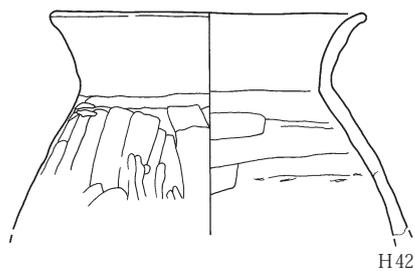
第189図 G区14住居(2)、15住居、H区1住居、2住居(1)出土遺物



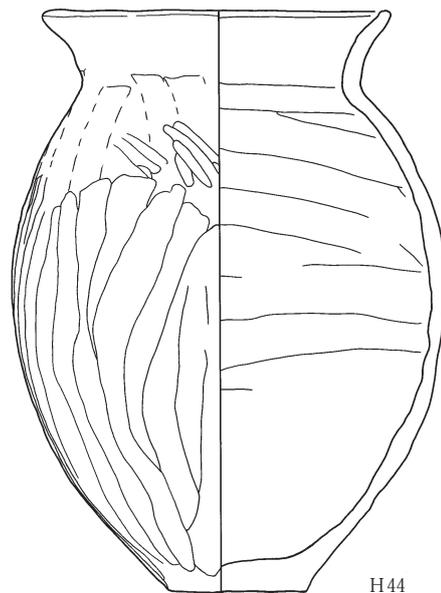
第 190 図 H区 2 住居 (2) 出土遺物



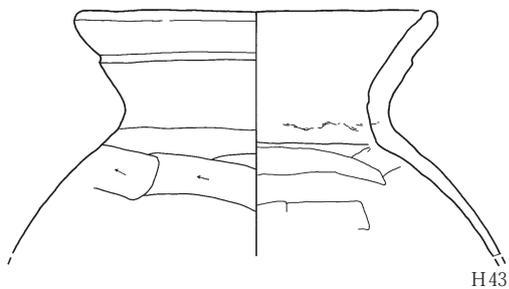
第191図 H区2住居(3)、3・7住居、8住居(1)出土遺物



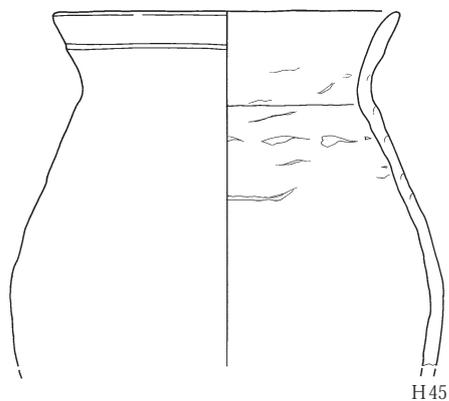
H42



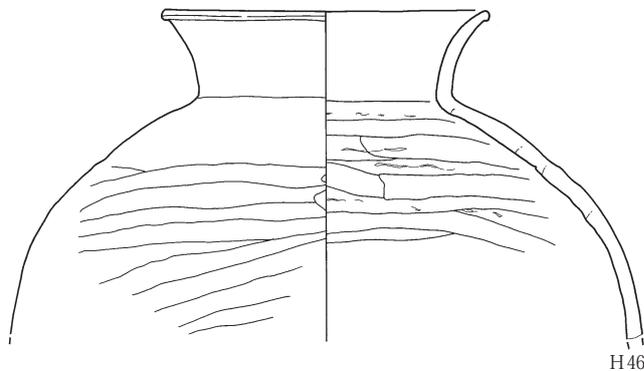
H44



H43



H45



H46

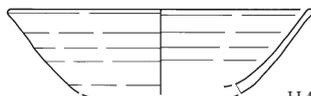
H区8住居出土遺物(2)



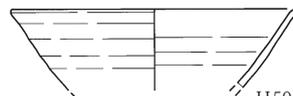
H47



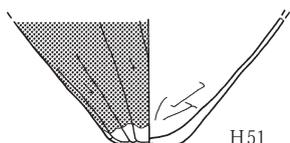
H48



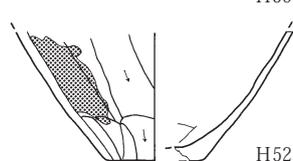
H49



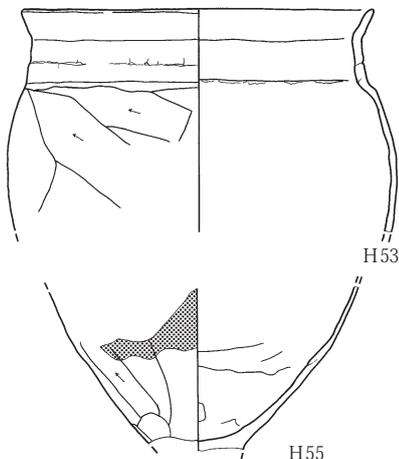
H50



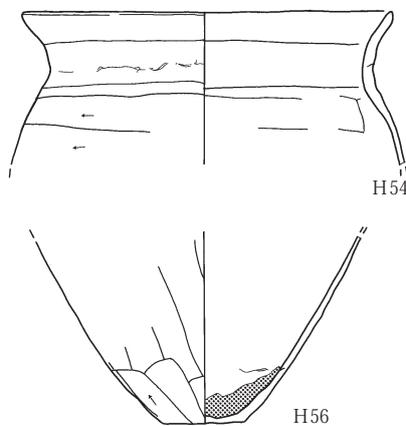
H51



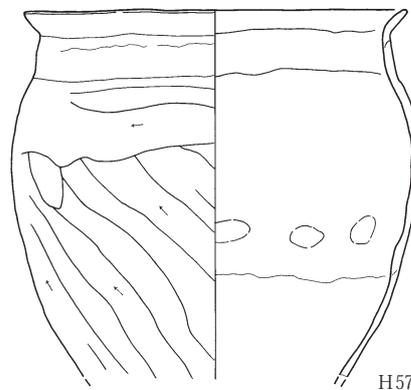
H52



H53



H54



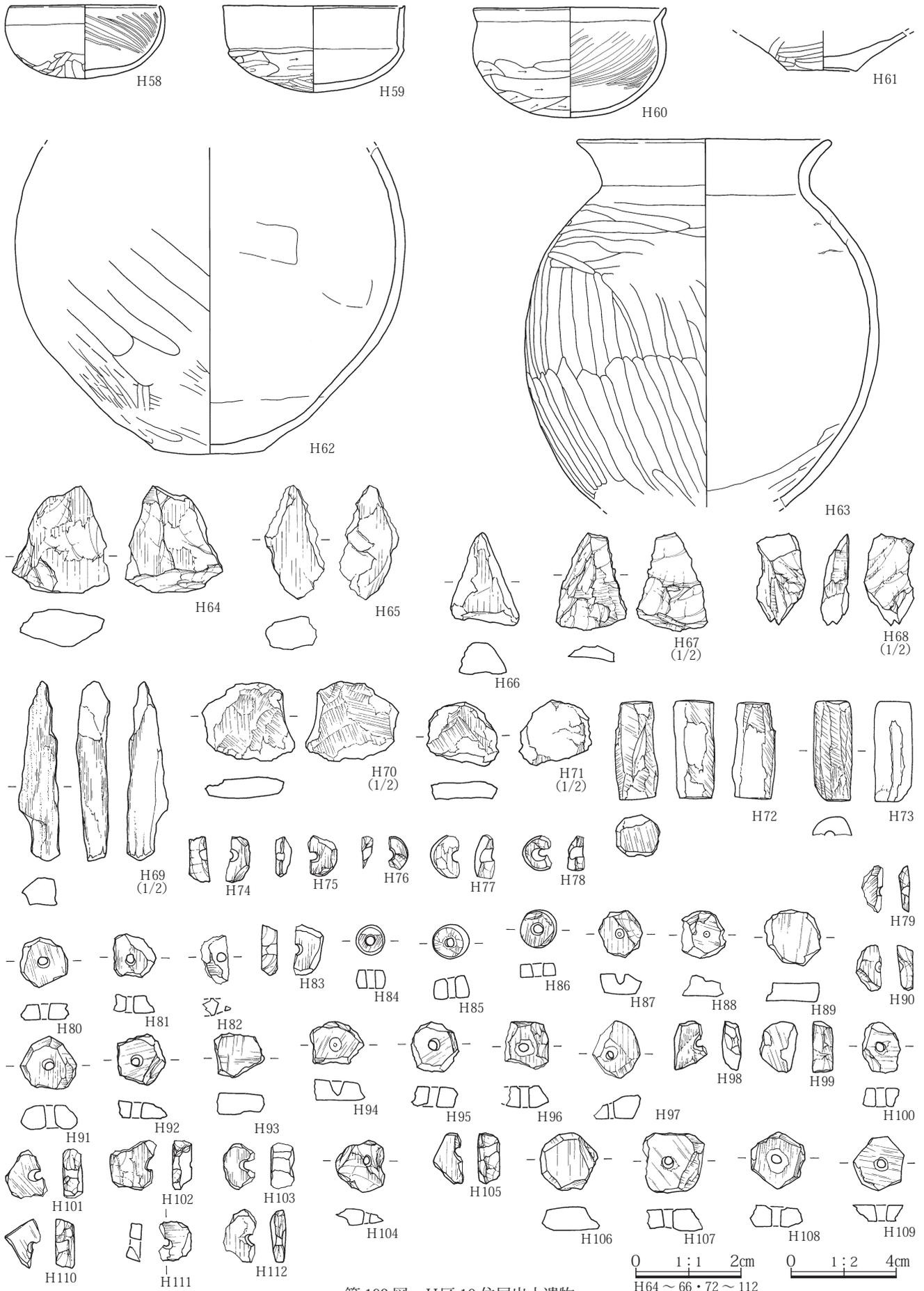
H57

H55

H56

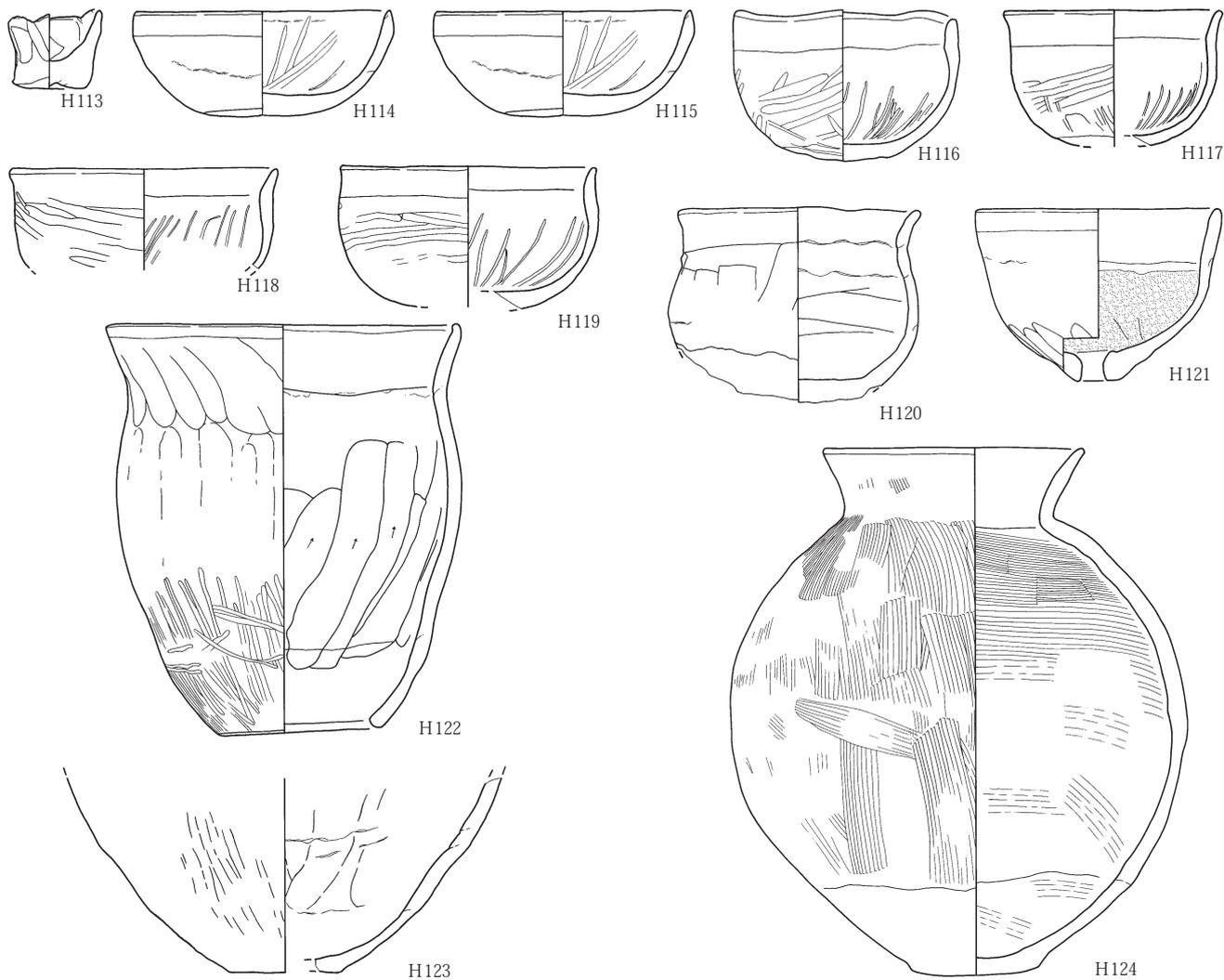
H区9住居出土遺物

第192图 H区8住居(2)、9住居出土遺物

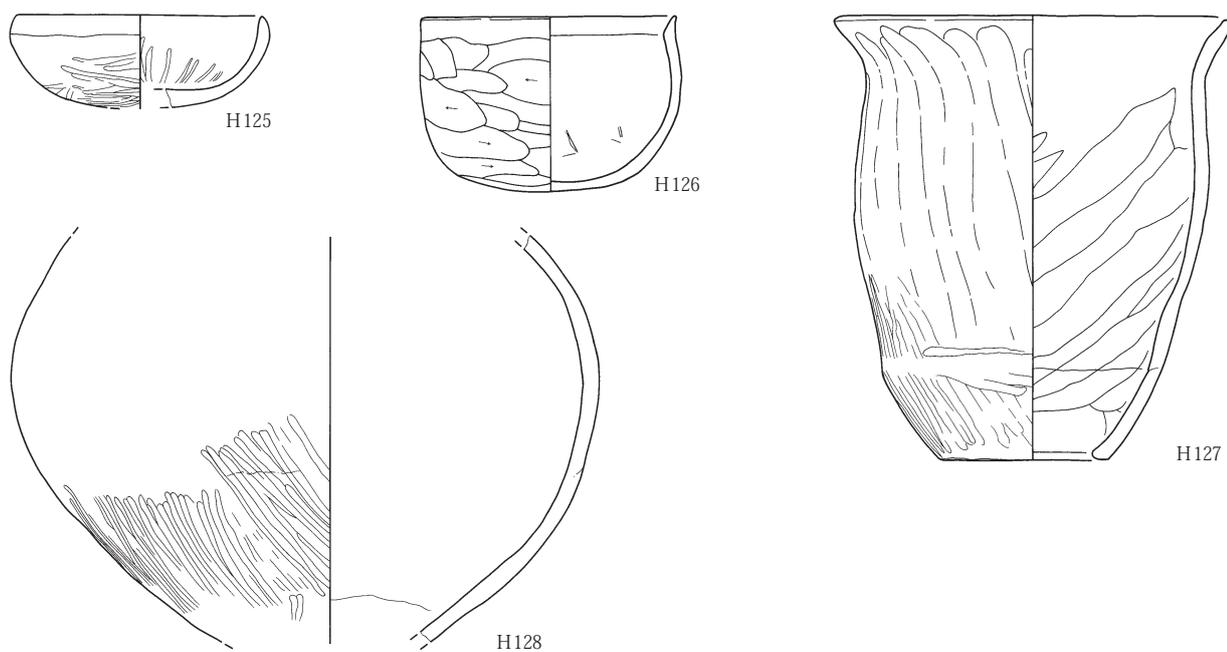


第193図 H区10住居出土遺物

遺物図(H区)

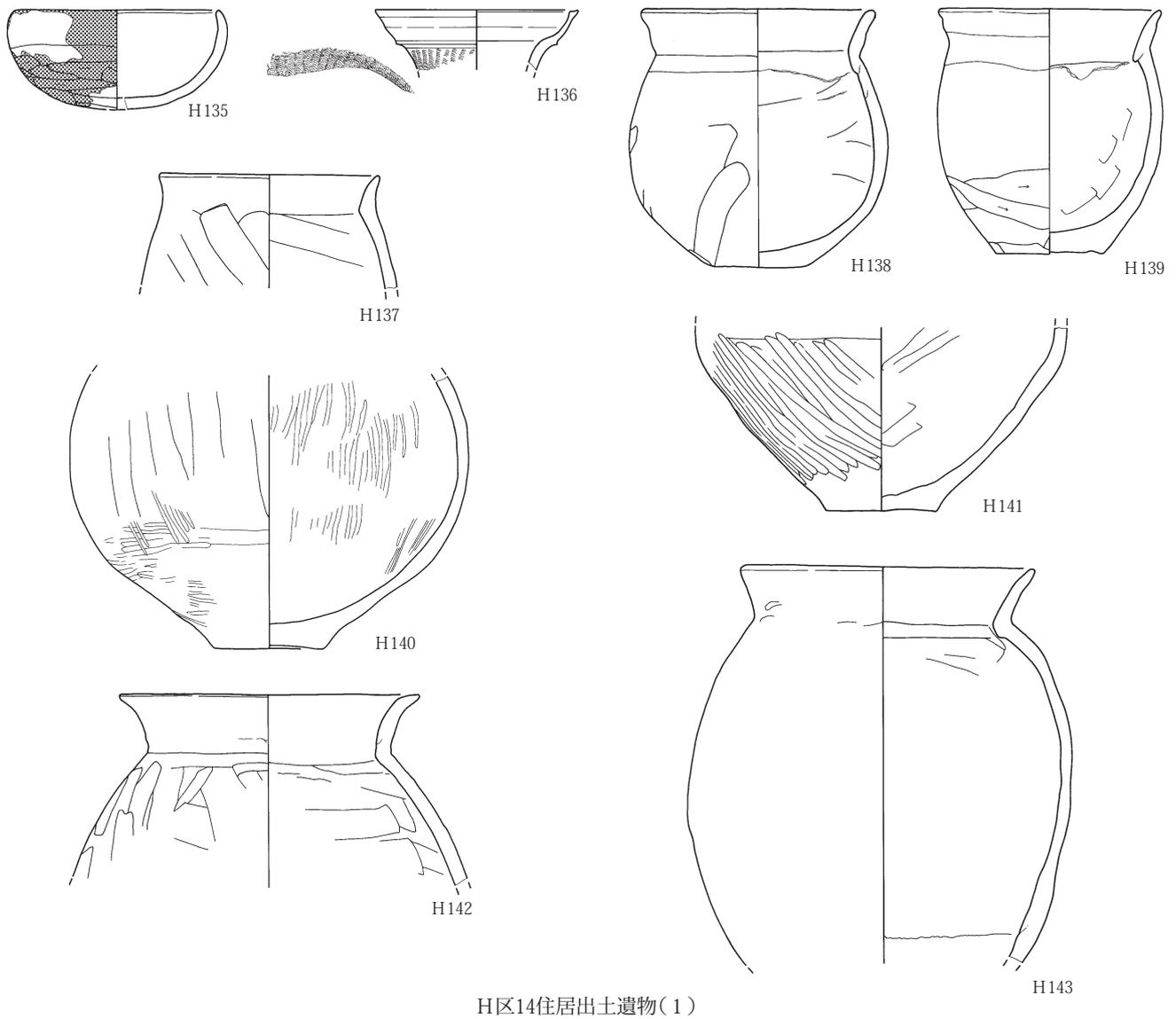
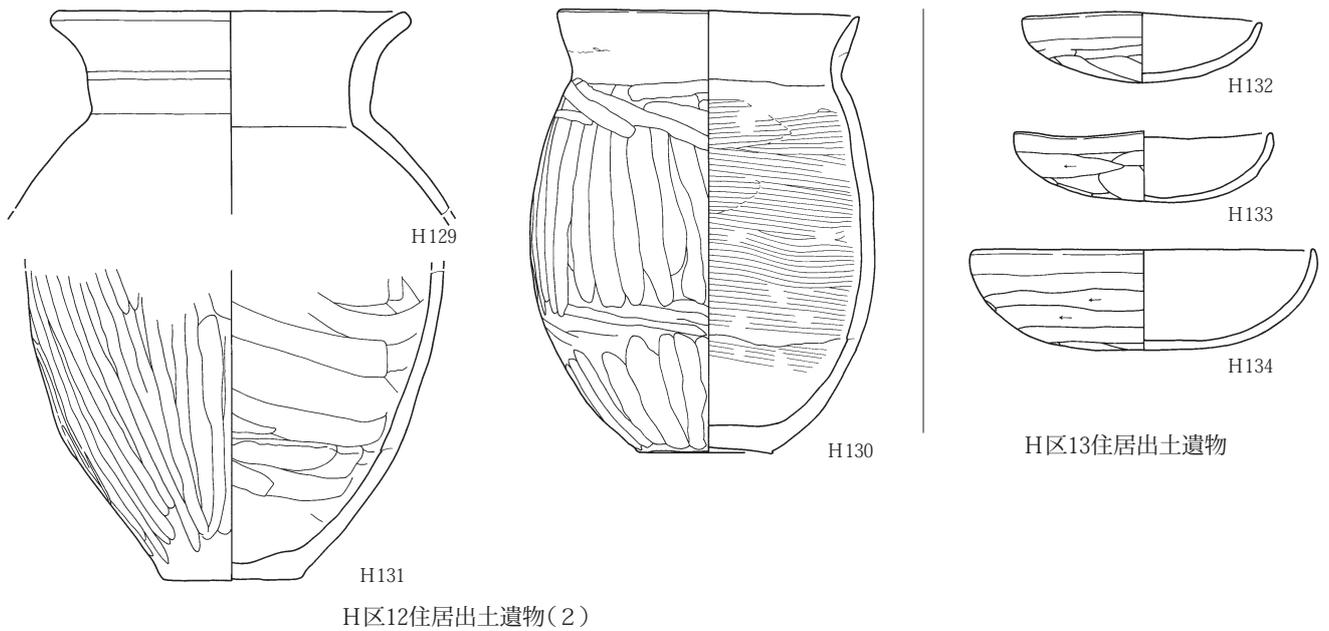


H区11住居出土遺物



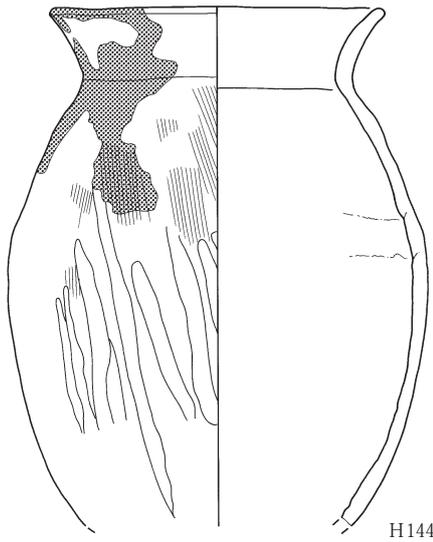
H区12住居出土遺物(1)

第194图 H区11住居、12住居(1)出土遺物

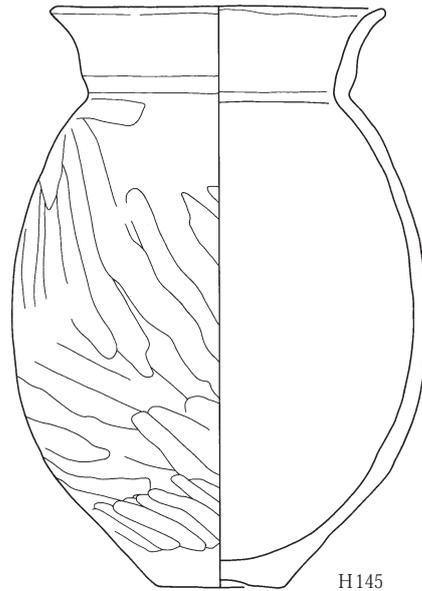


第195図 H区12住居(2)、13住居、14住居(1)出土遺物

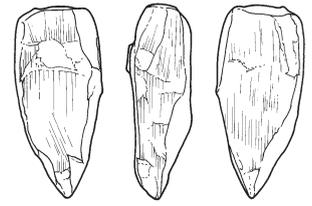
遺物図(H区)



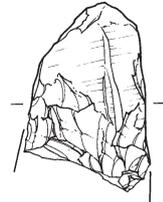
H144



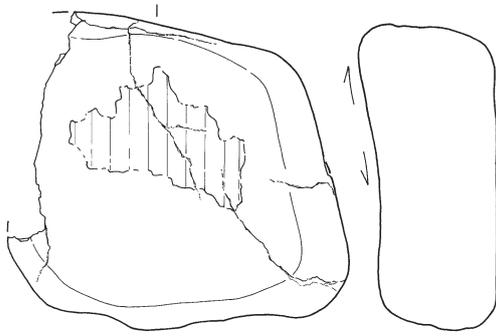
H145



H146
(1/1)

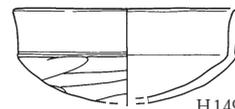


H147
(1/1)

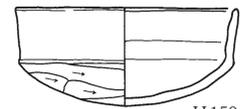


H148
(1/4)

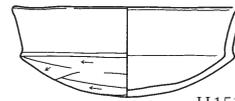
H区14住居出土遺物(2)



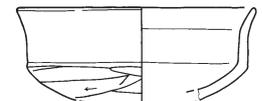
H149



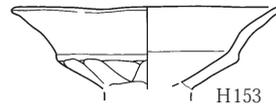
H150



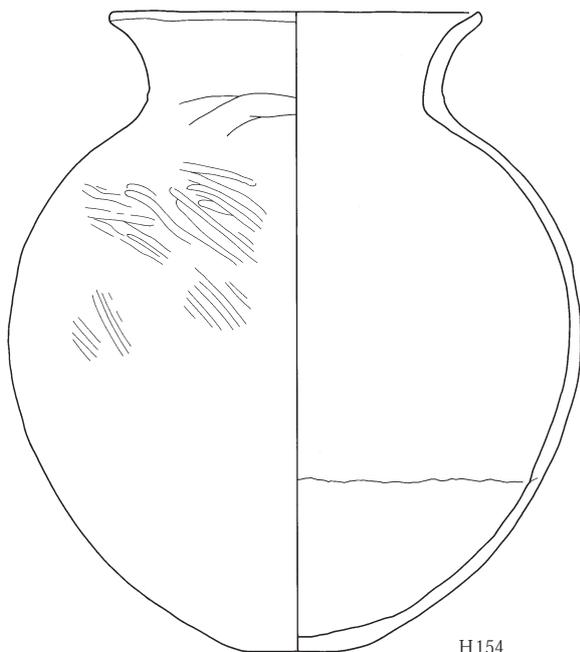
H151



H152



H153

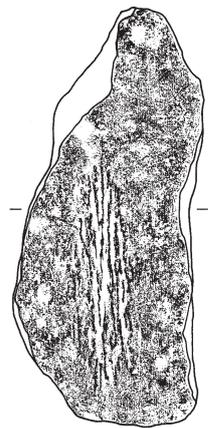


H154

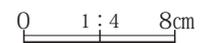
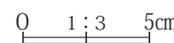
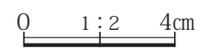
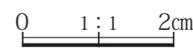
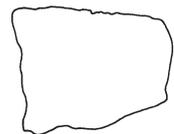
H区15住居出土遺物



H155
(1/2)

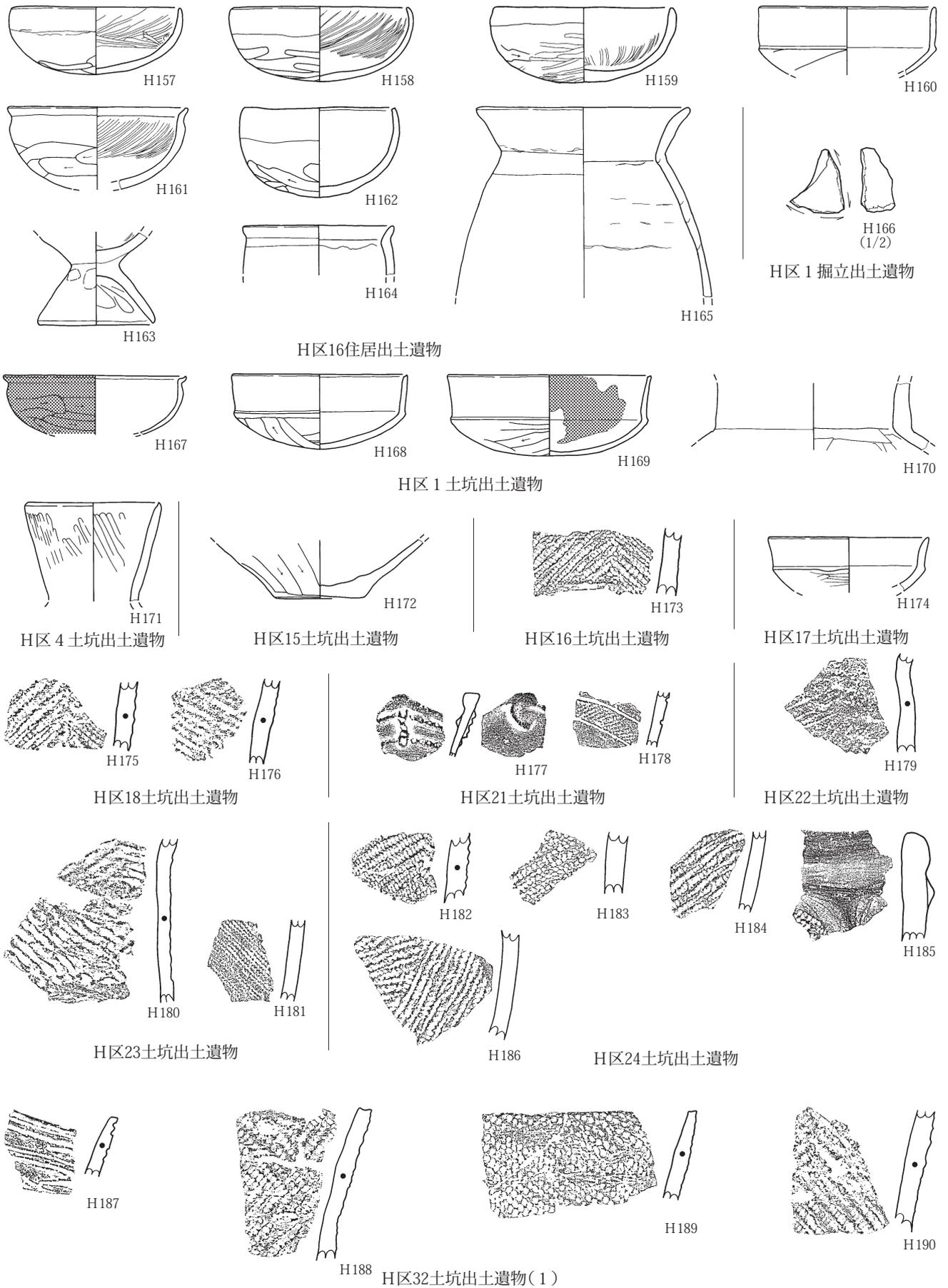


H156
(1/3)



第 196 図 H区 14 住居 (2)、15 住居出土遺物

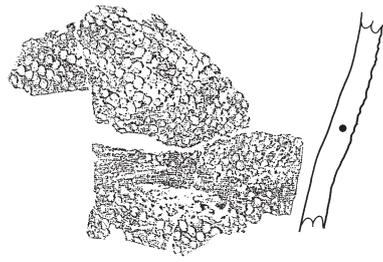
第4章 検出された遺構と遺物



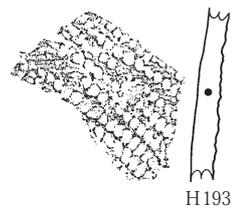
第197図 H区16住居、1掘立柱建物、1・4・15～18・21～24土坑、32土坑(1)出土遺物



H191



H192



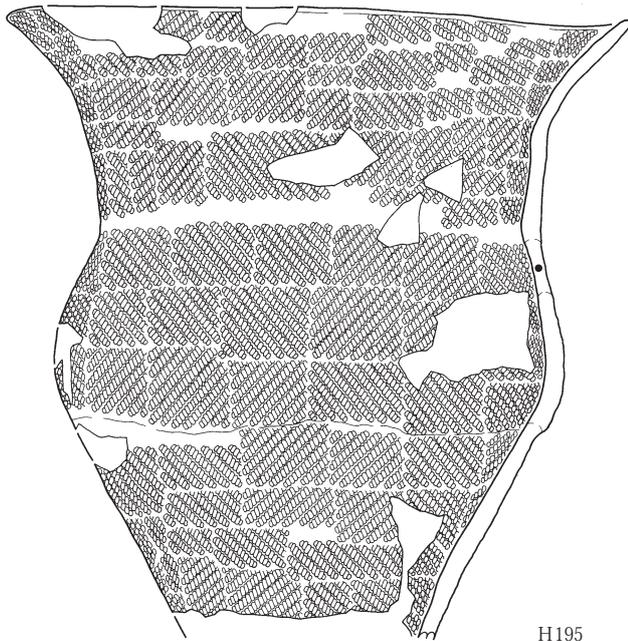
H193



H194

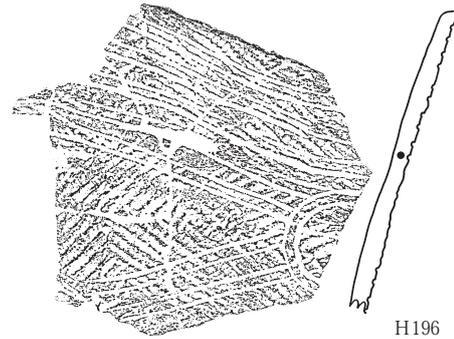
H区33土坑出土遺物

H区32土坑出土遺物(2)

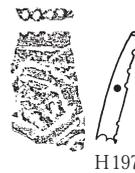


H195

H区34土坑出土遺物



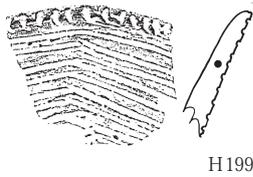
H196



H197

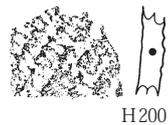


H198

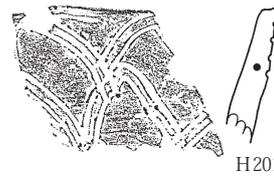


H199

H区36土坑出土遺物

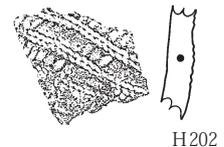


H200

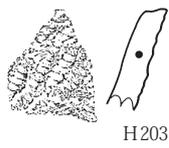


H201

H区41土坑出土遺物



H202



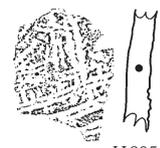
H203

H区42土坑出土遺物



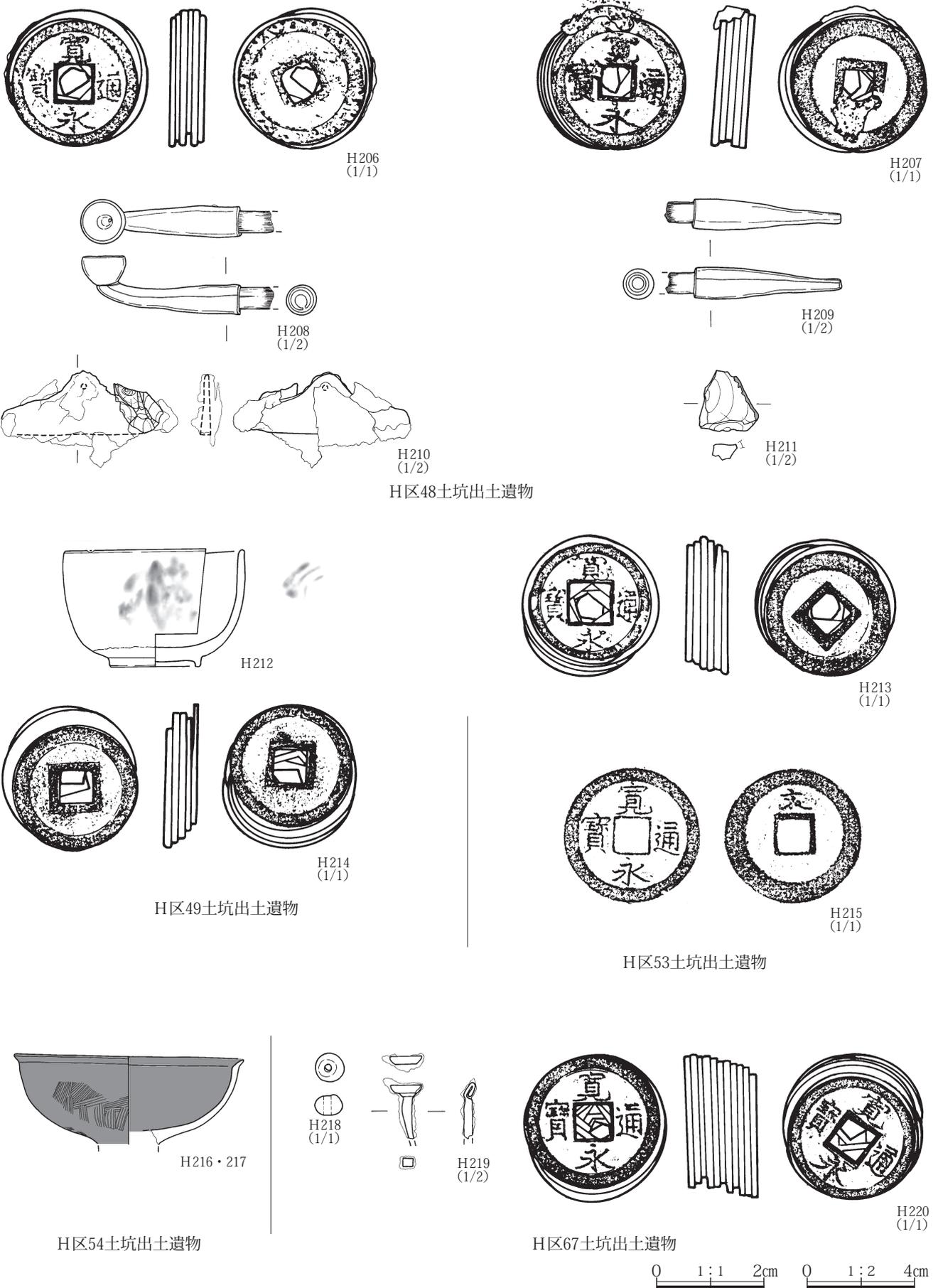
H204

H区43土坑出土遺物



H205

H区45土坑出土遺物



H区48土坑出土遺物

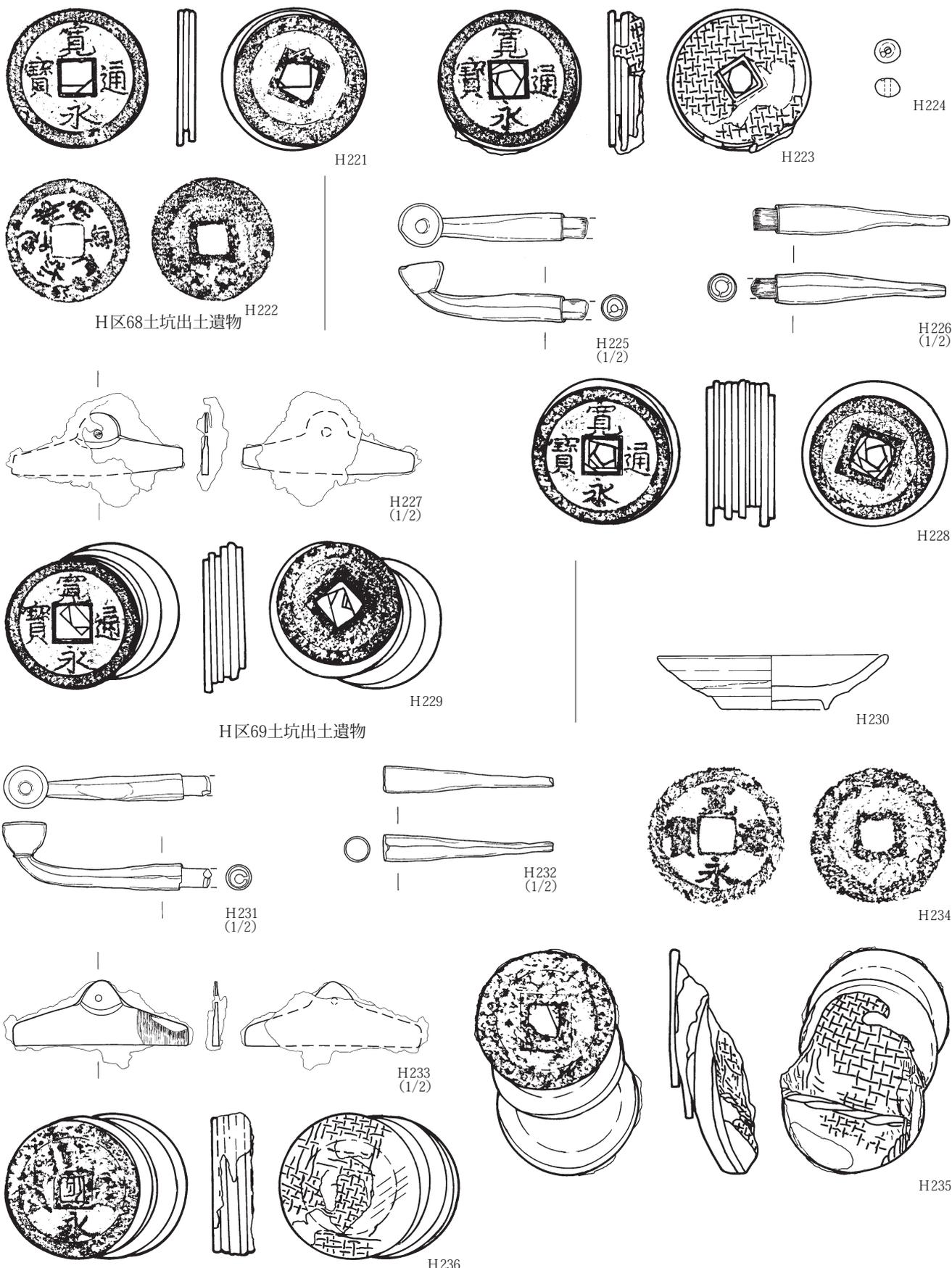
H区49土坑出土遺物

H区53土坑出土遺物

H区54土坑出土遺物

H区67土坑出土遺物

第199図 H区48・49・53・54・67土坑出土遺物

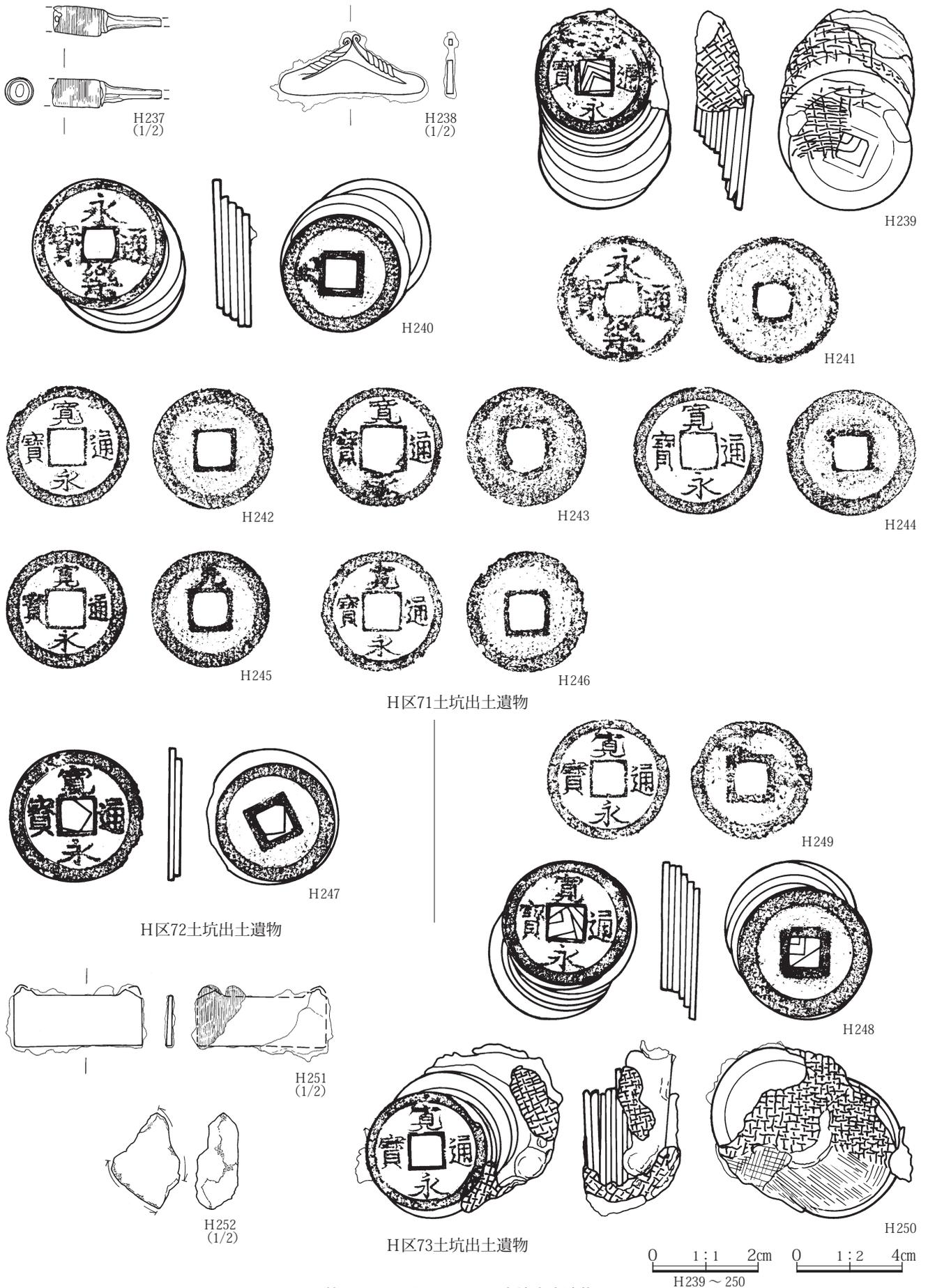


H区68土坑出土遺物

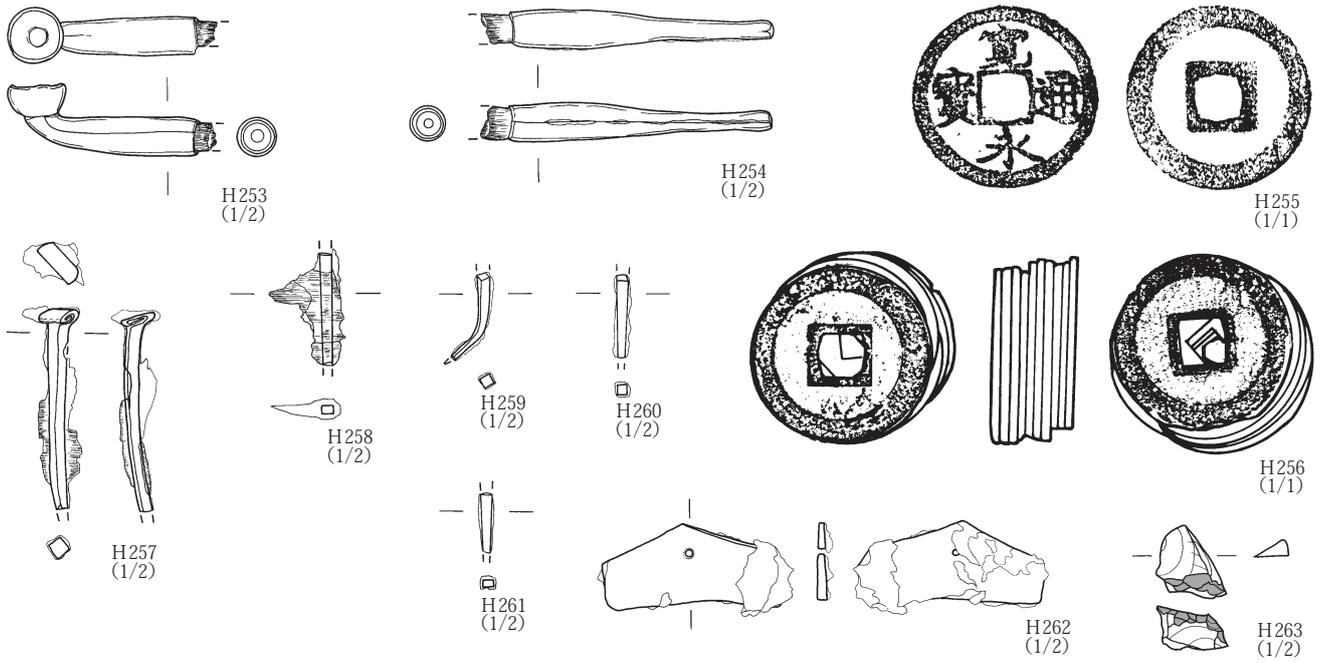
H区69土坑出土遺物

H区70土坑出土遺物

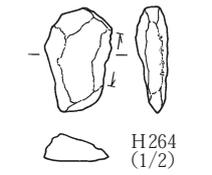
第 200 图 H区 68 ~ 70 土坑出土遺物



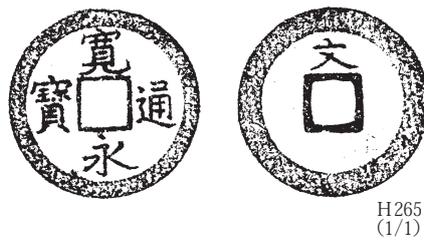
第201図 H区71～73土坑出土遺物



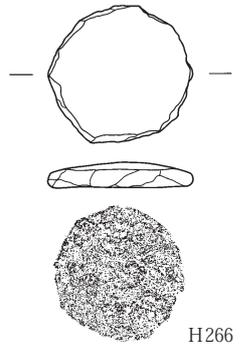
H区74土坑出土遺物



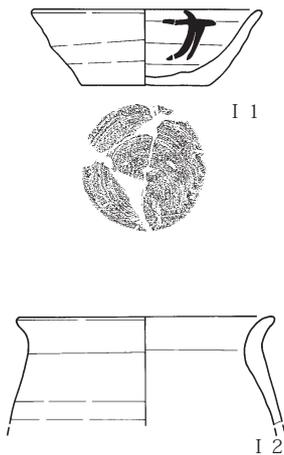
H区77土坑出土遺物



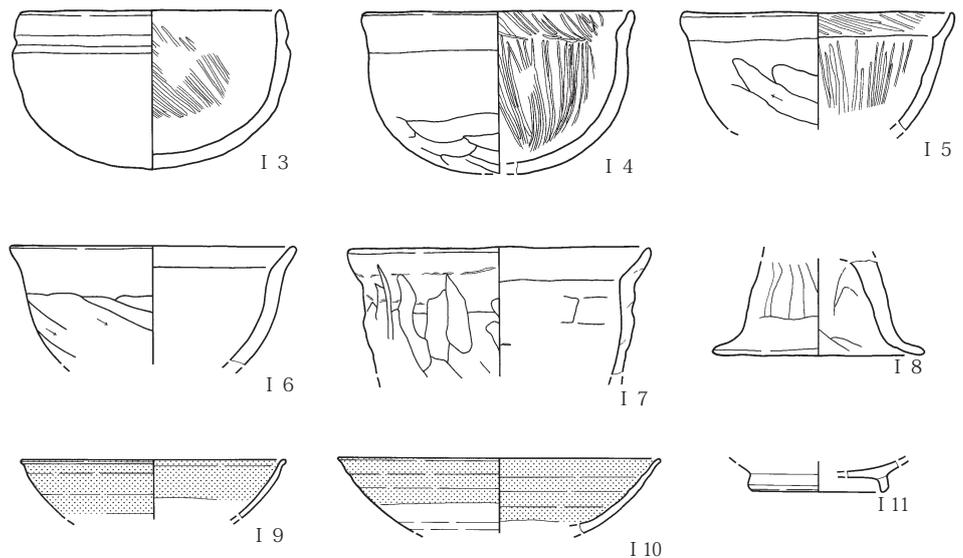
H区墓地跡出土遺物



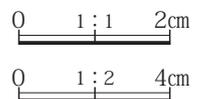
H区2トレンチ出土遺物



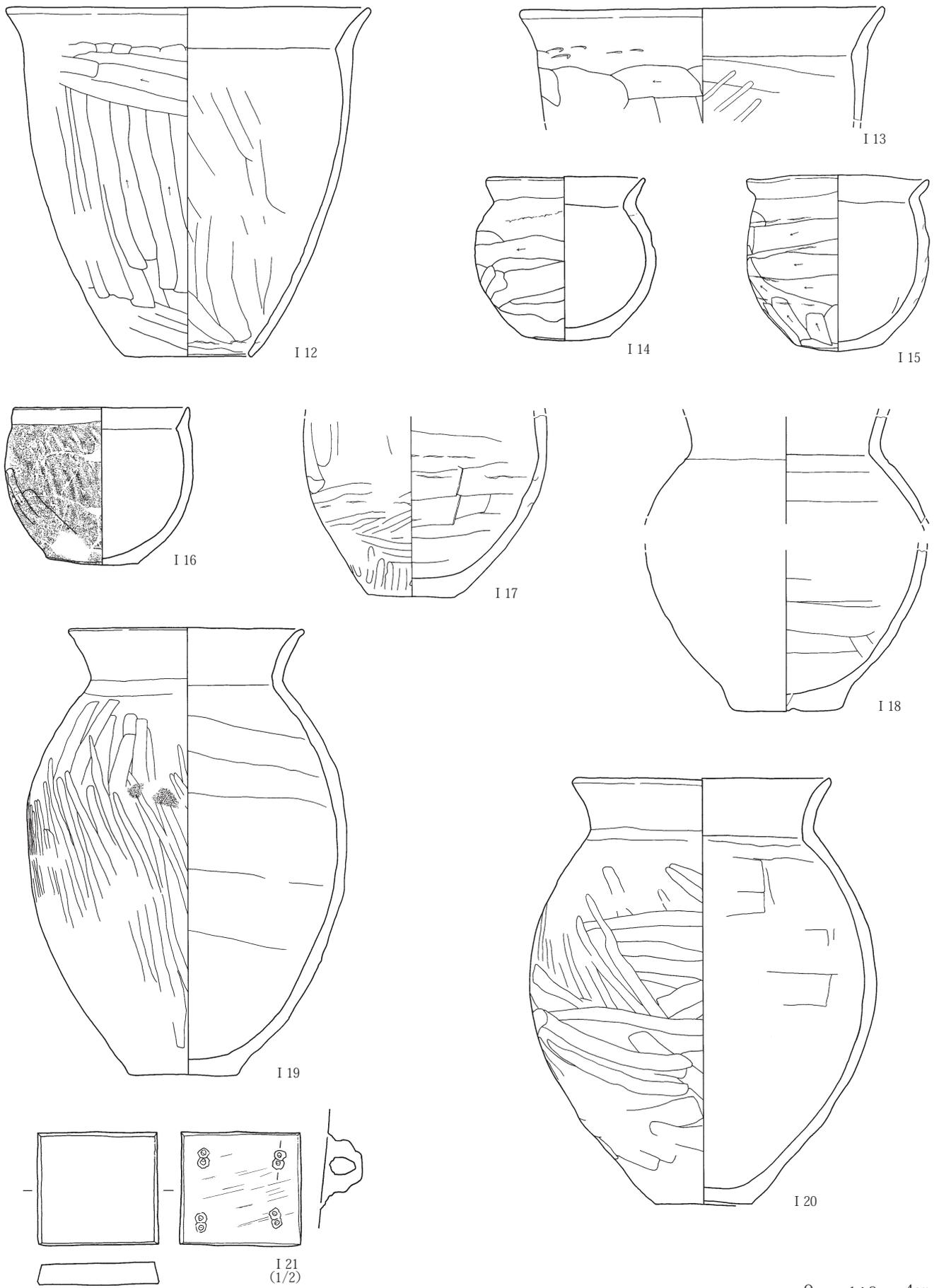
I区1井戸出土遺物



I区2住居出土遺物(1)



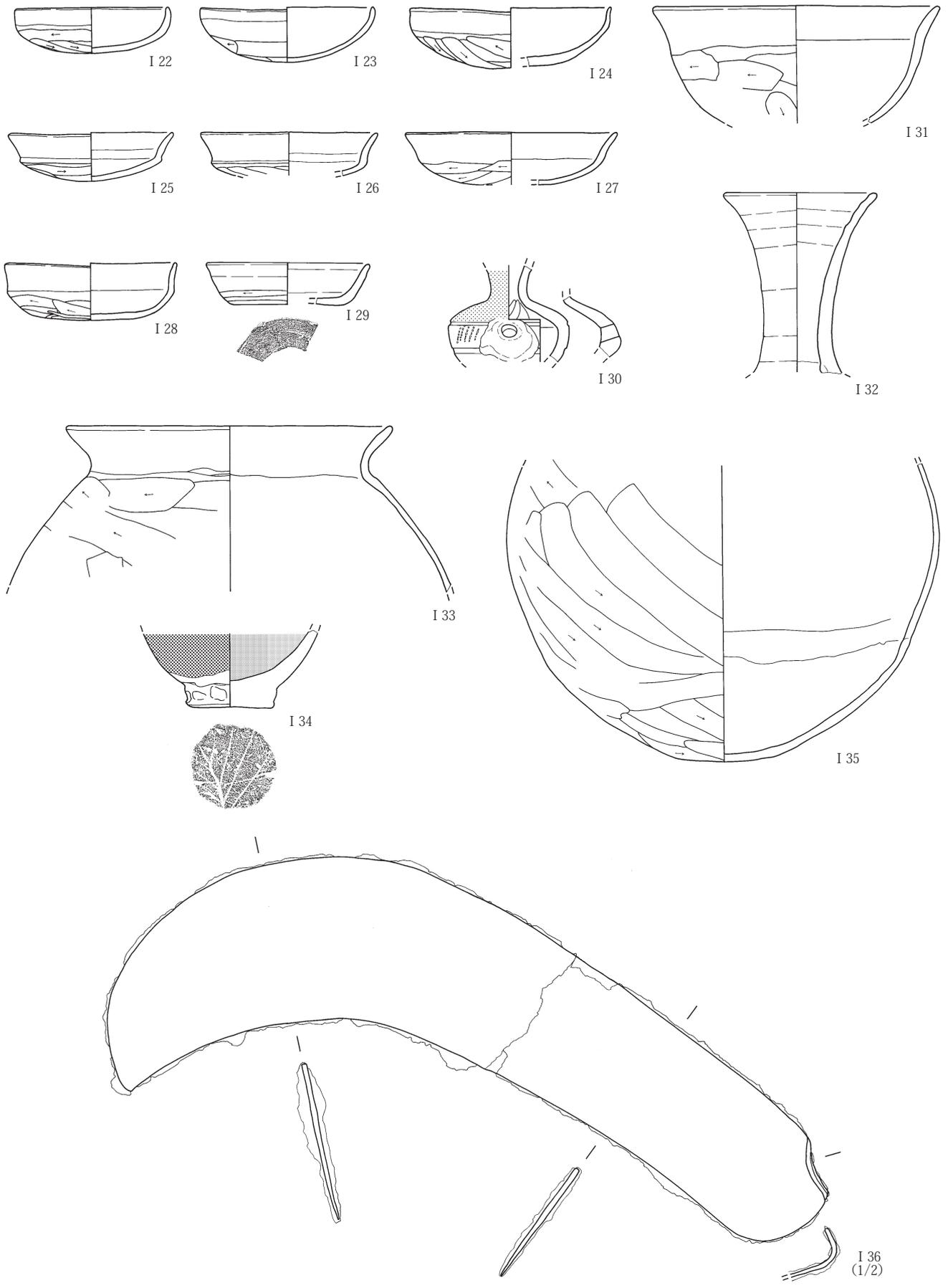
第202図 H区74・77土坑、墓地跡、2トレンチ、I区1井戸・2住居(1)出土遺物



0 1:2 4cm

第203図 I区2住居(2)出土遺物

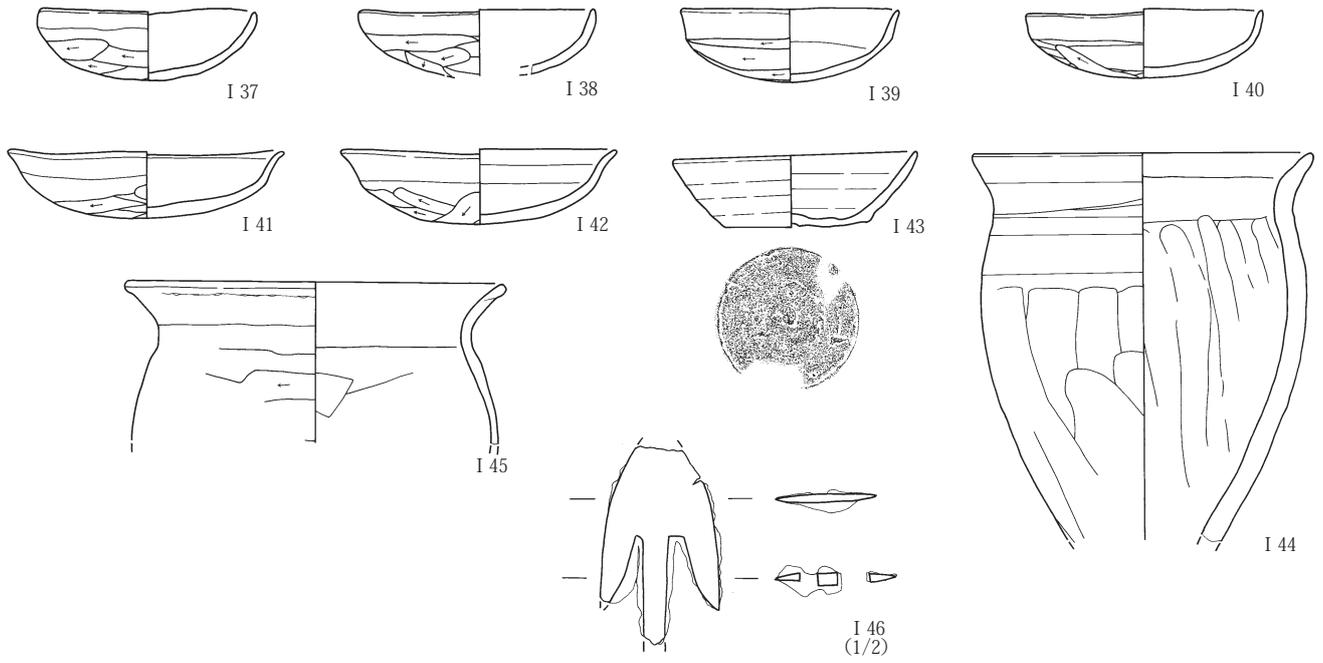
遺物図(I区)



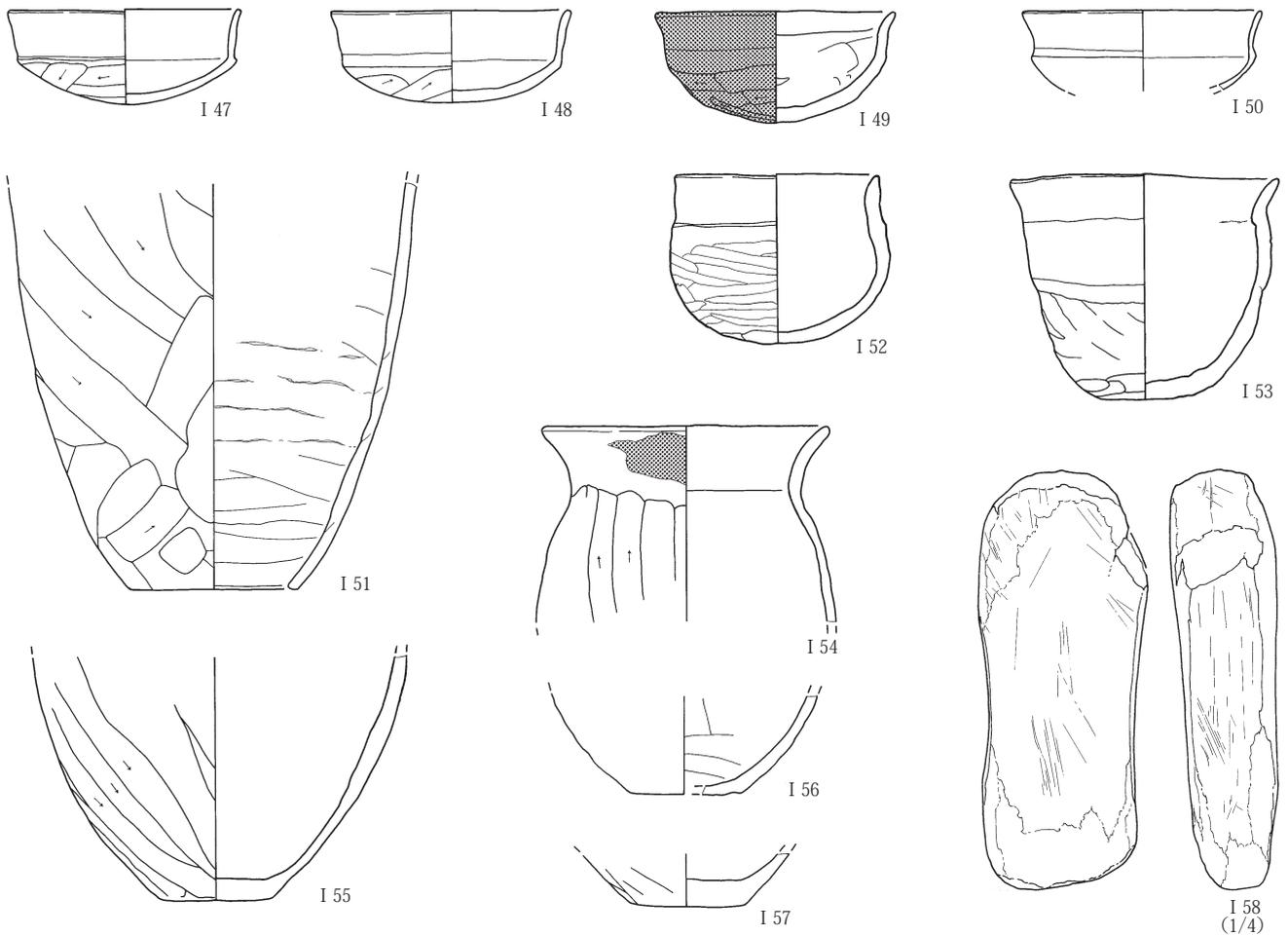
0 1:2 4cm

第 204 图 I 区 3 住居出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



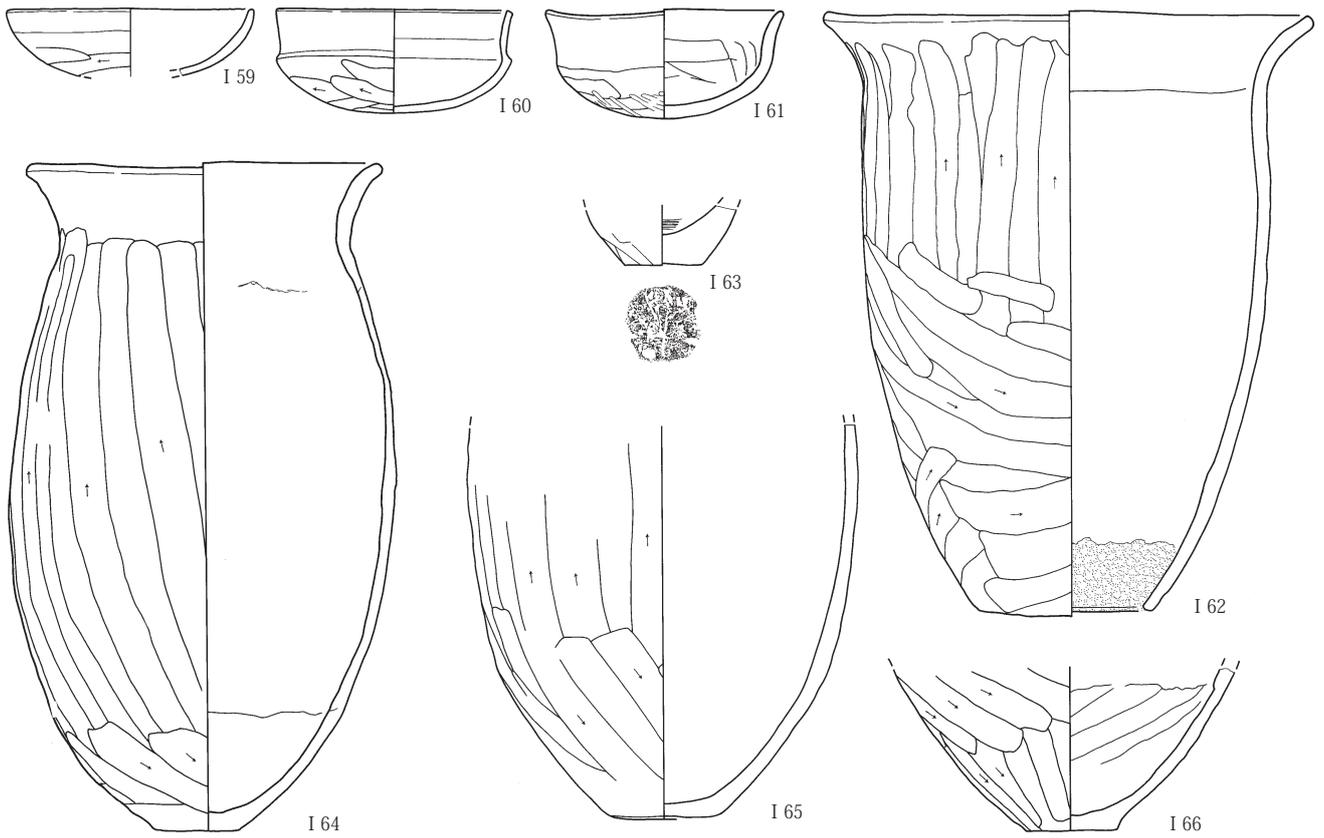
I 区 4 住居出土遺物



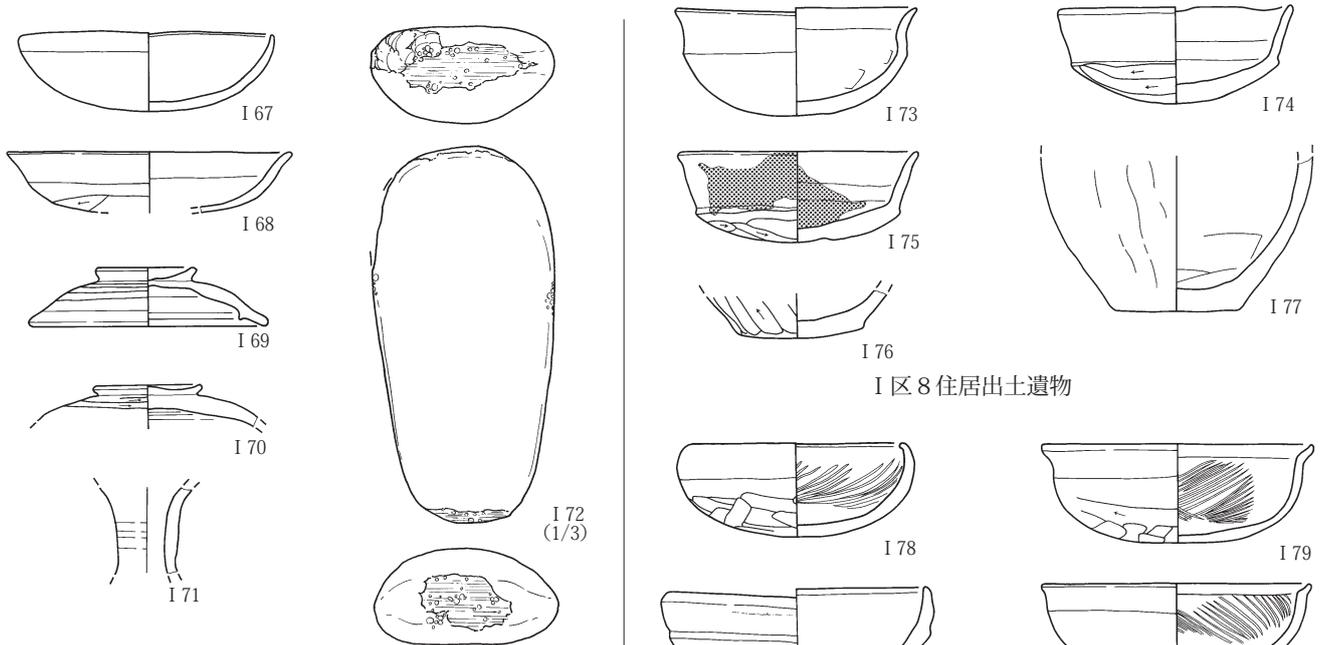
I 区 5 住居出土遺物

第 205 図 I 区 4・5 住居出土遺物





I 区 6 住居出土遺物

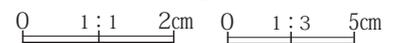


I 区 7 住居出土遺物

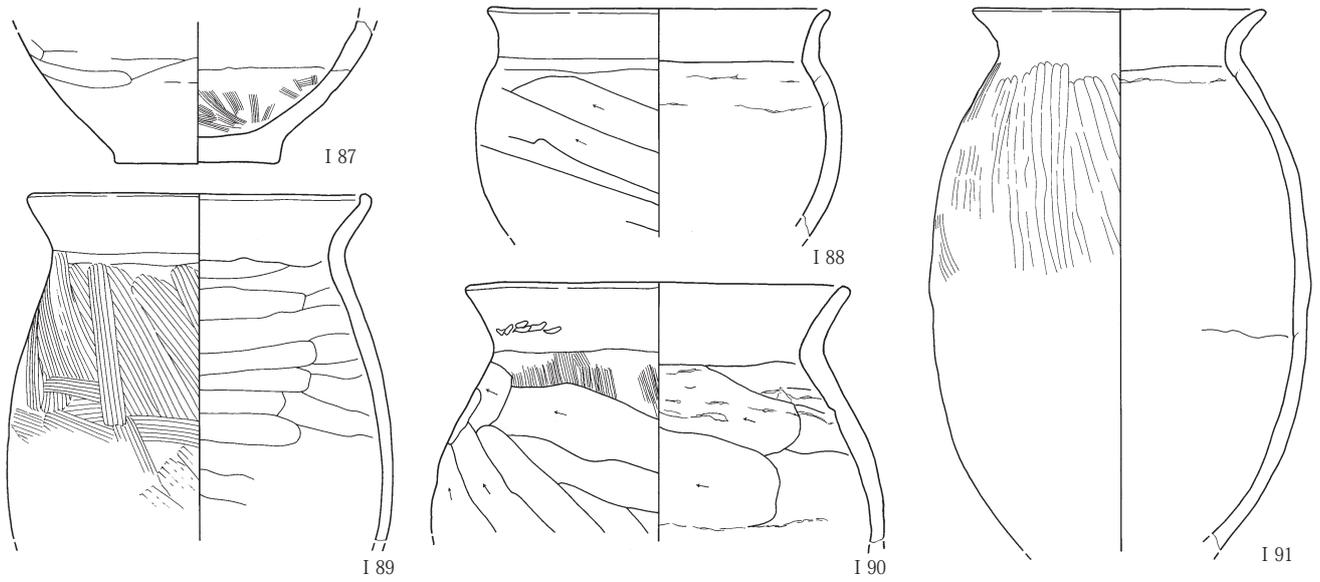
I 区 8 住居出土遺物



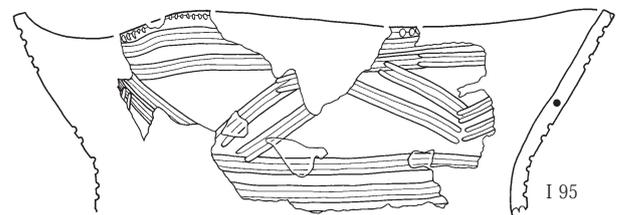
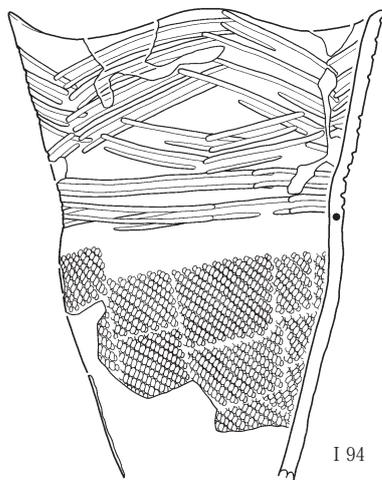
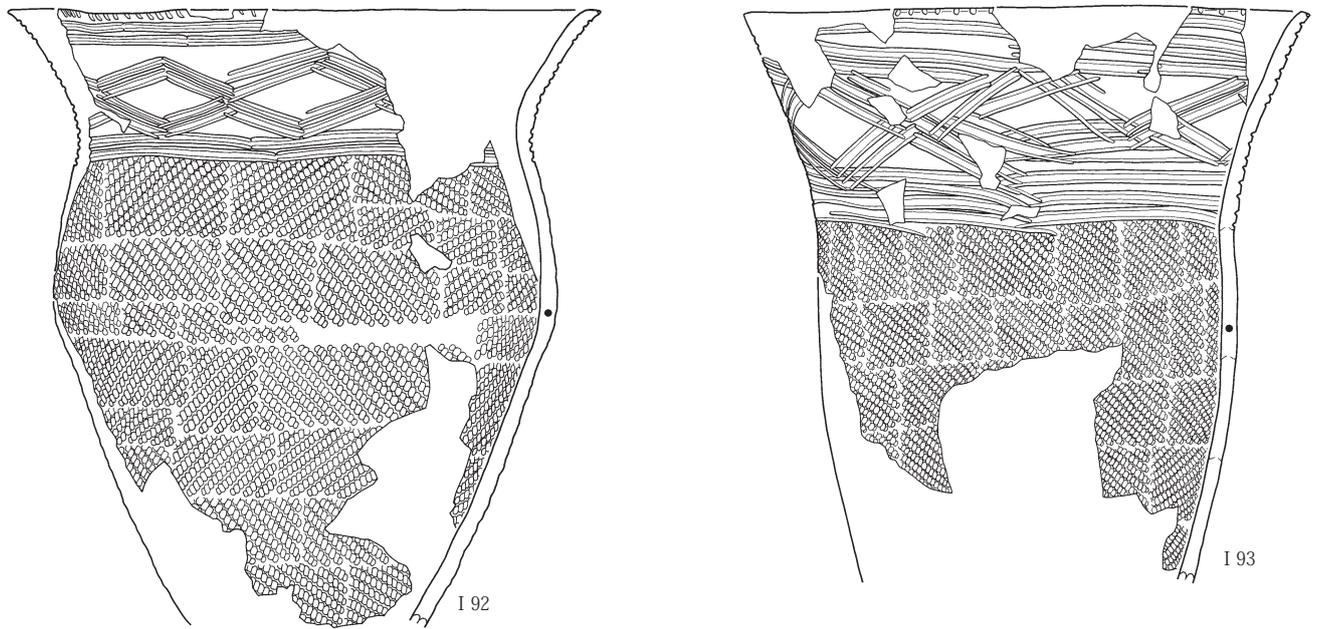
I 区 9 住居出土遺物(1)



第 206 图 I 区 6~8 住居、9 住居 (1) 出土遺物

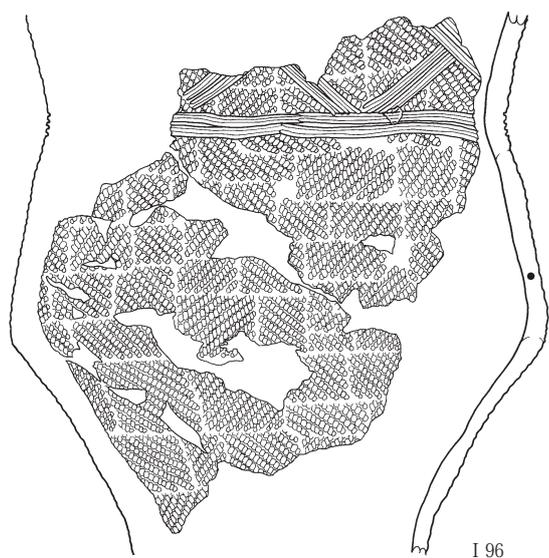


I区9住居出土遺物(2)

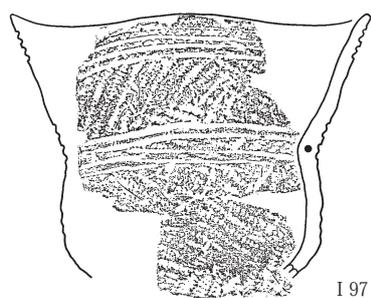


I区1竪穴出土遺物(1)

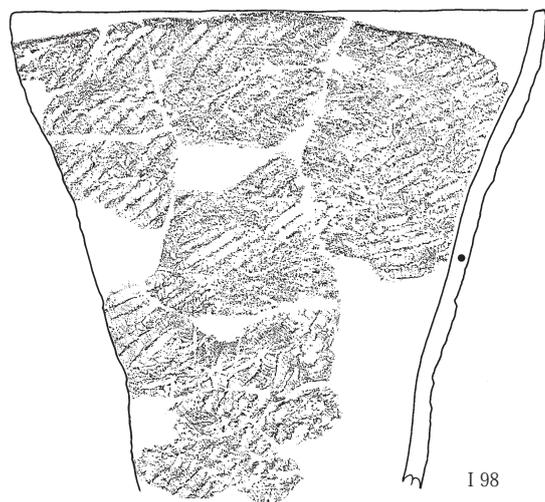
第207図 I区9住居(2)、1竪穴(1)出土遺物



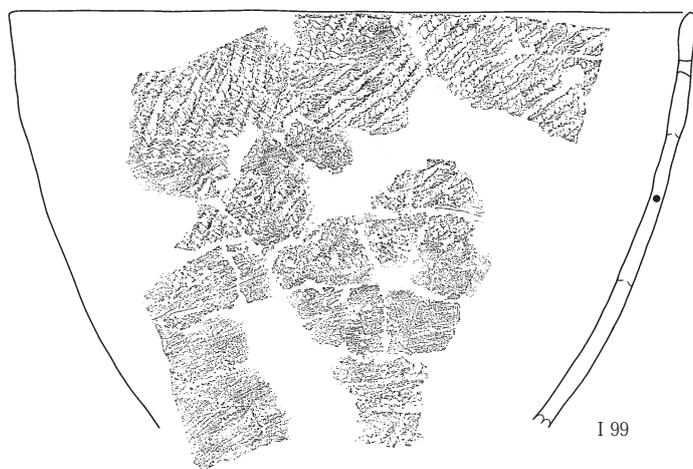
I 96



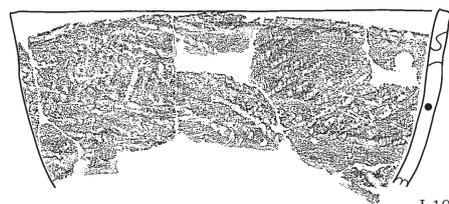
I 97



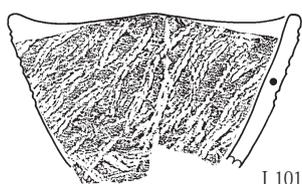
I 98



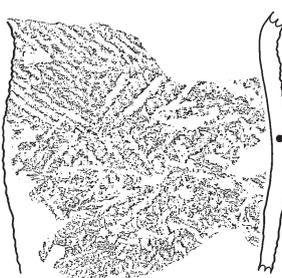
I 99



I 100



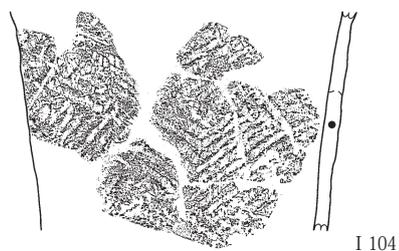
I 101



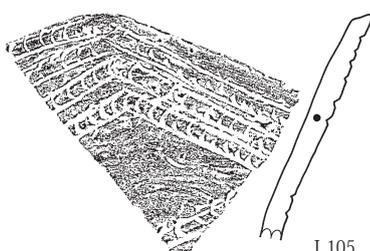
I 102



I 103



I 104



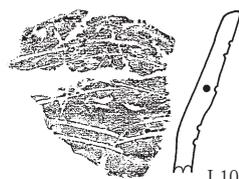
I 105



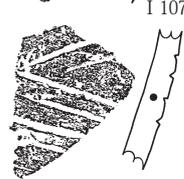
I 106



I 107

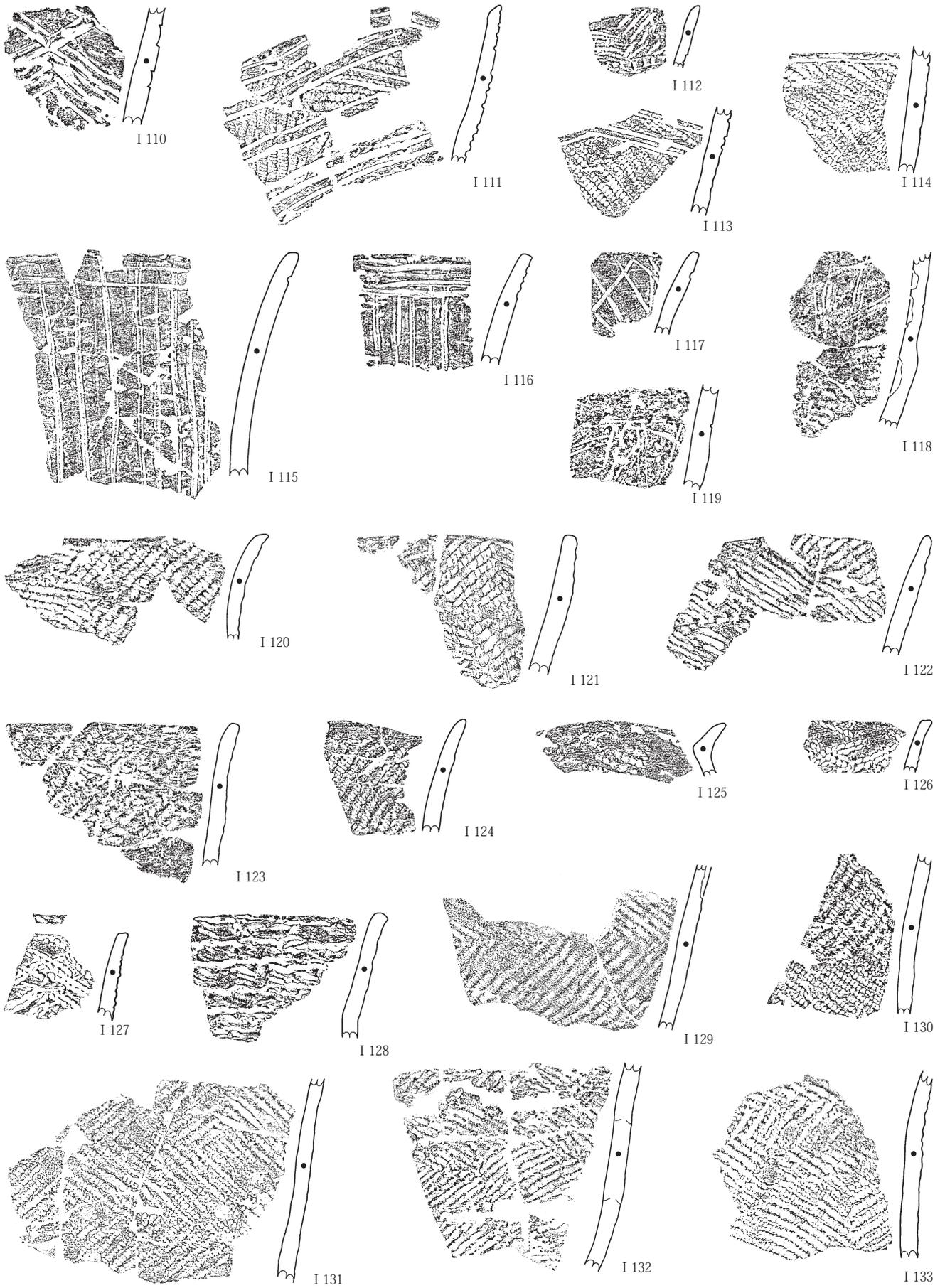


I 108

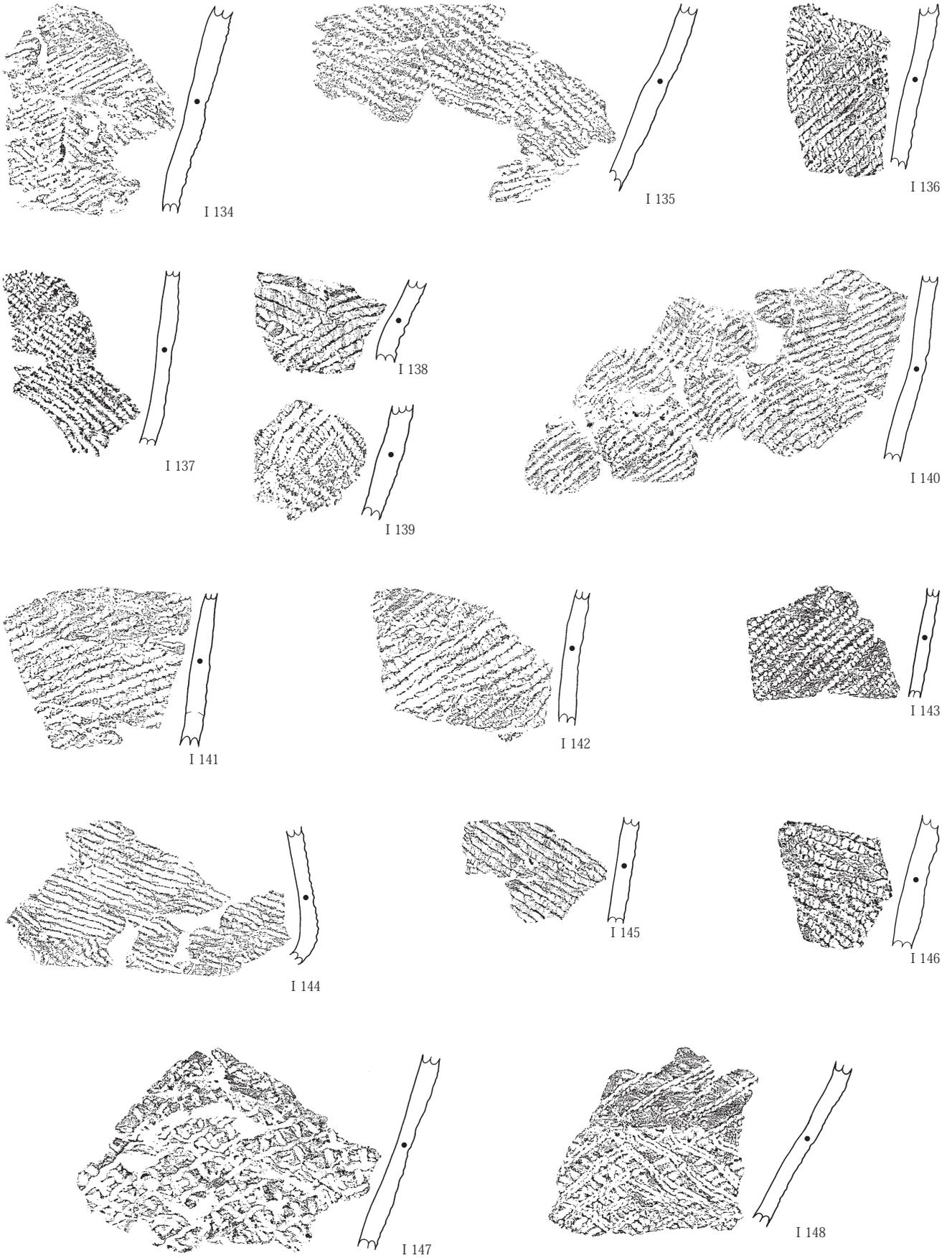


I 109

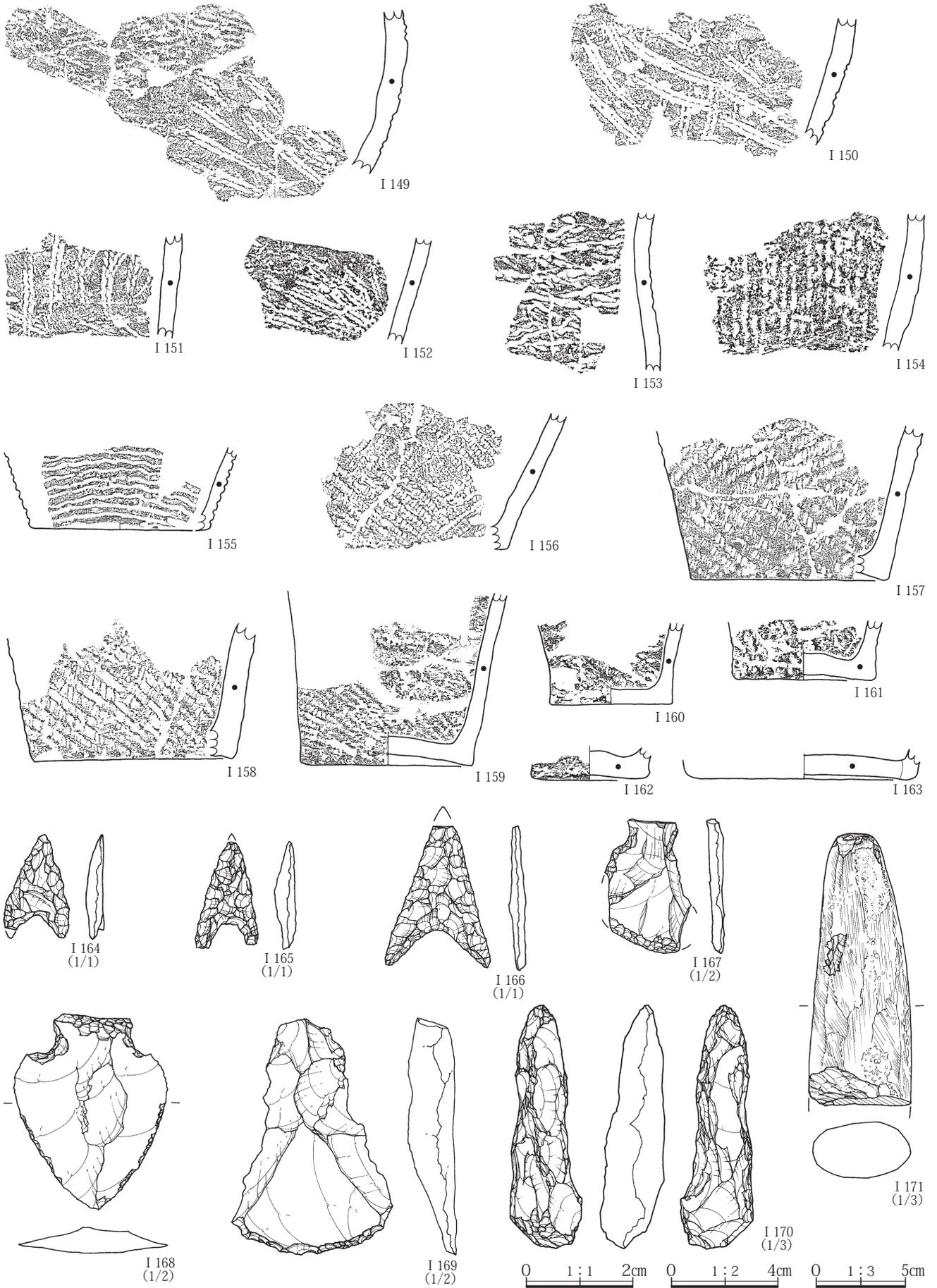
第 208 图 I 区 I 竖穴 (2) 出土遺物



第209図 I区1竖穴(3)出土遺物



第 210 图 I 区 1 竖穴 (4) 出土遺物

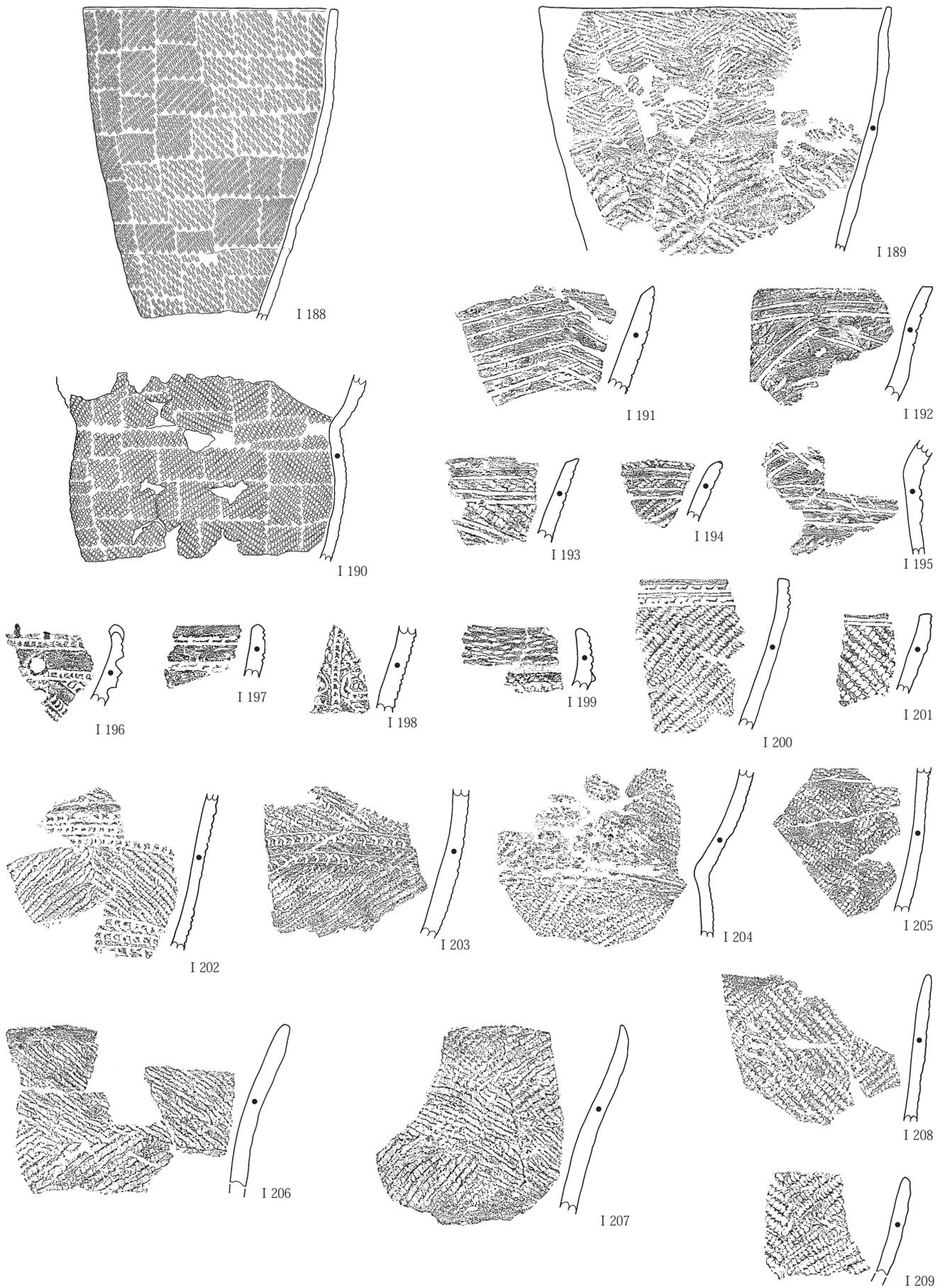


第211図 I区I竖穴(5)出土遺物

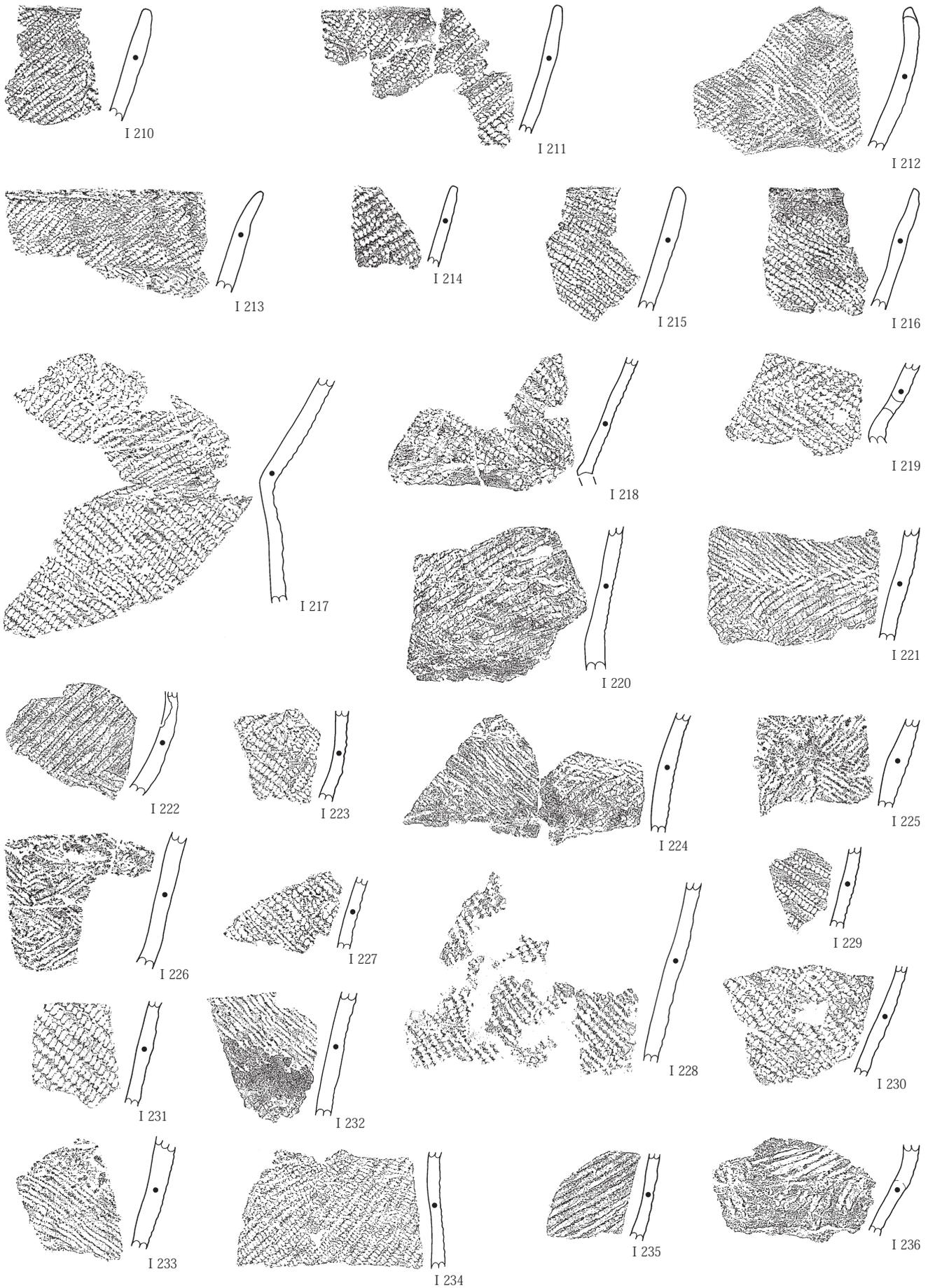
遺物図(Ⅰ区)



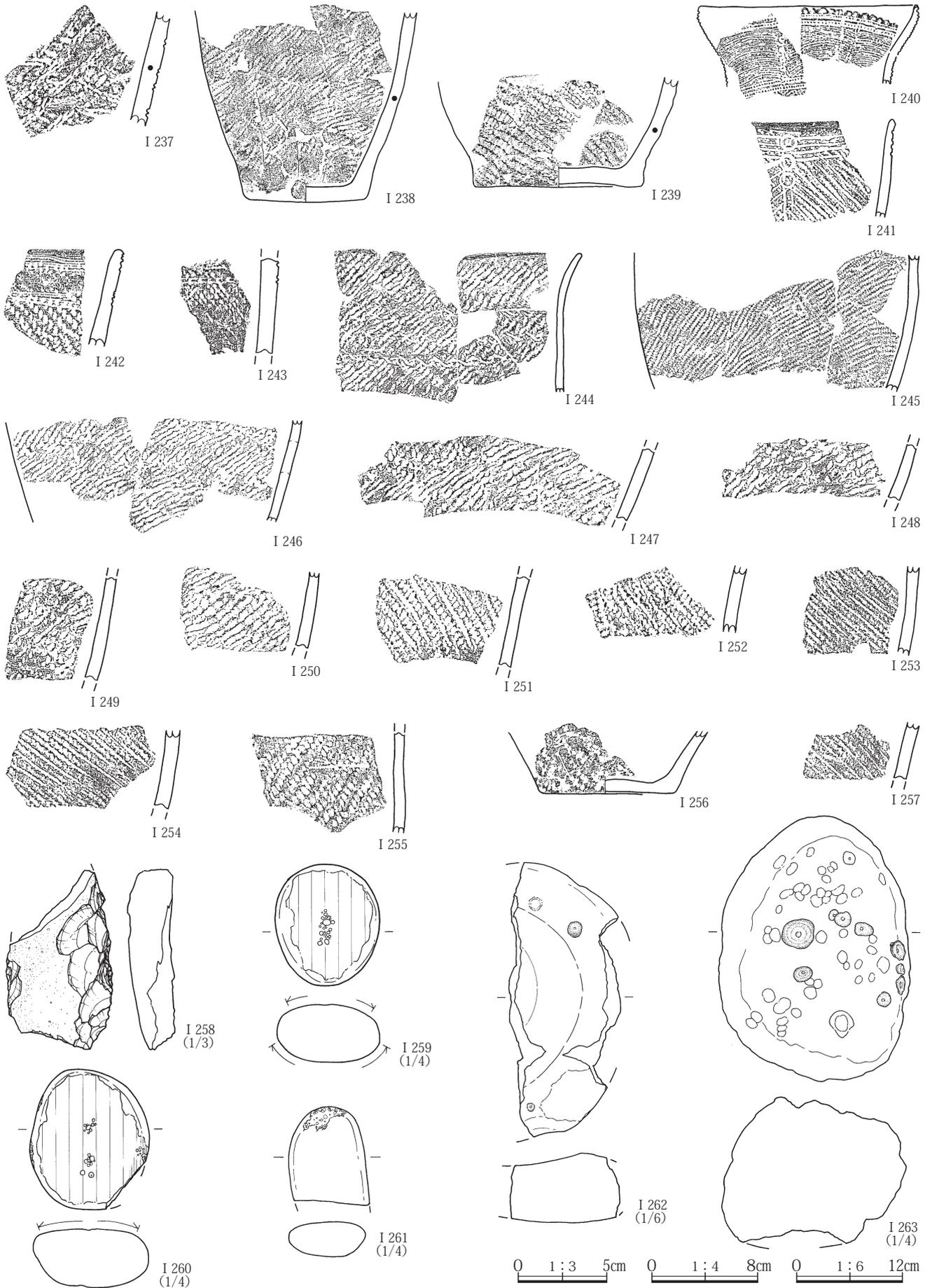
第 212 図 Ⅰ区Ⅰ竖穴(6) 出土遺物



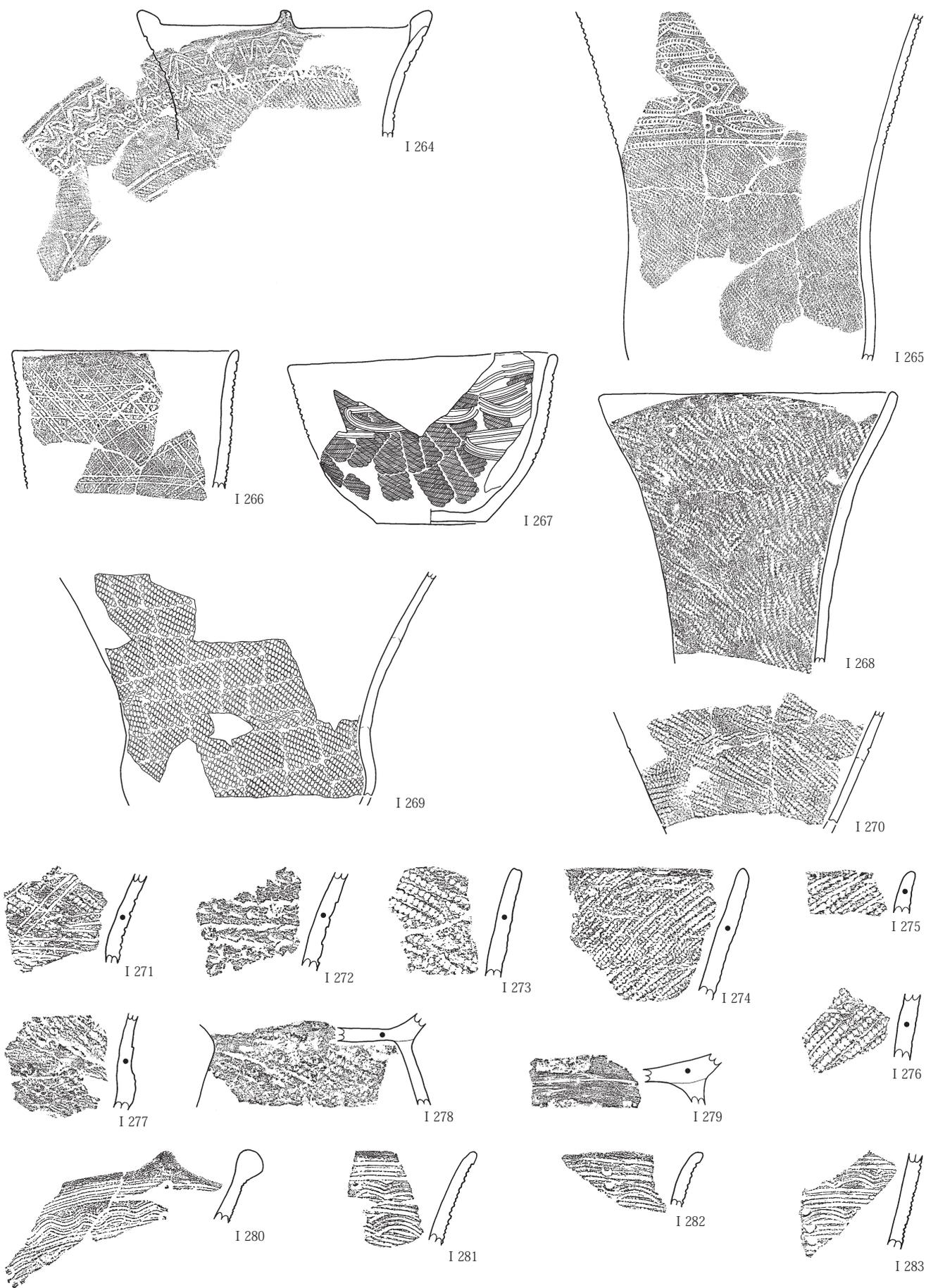
第213図 I区2竖穴(1)出土遺物



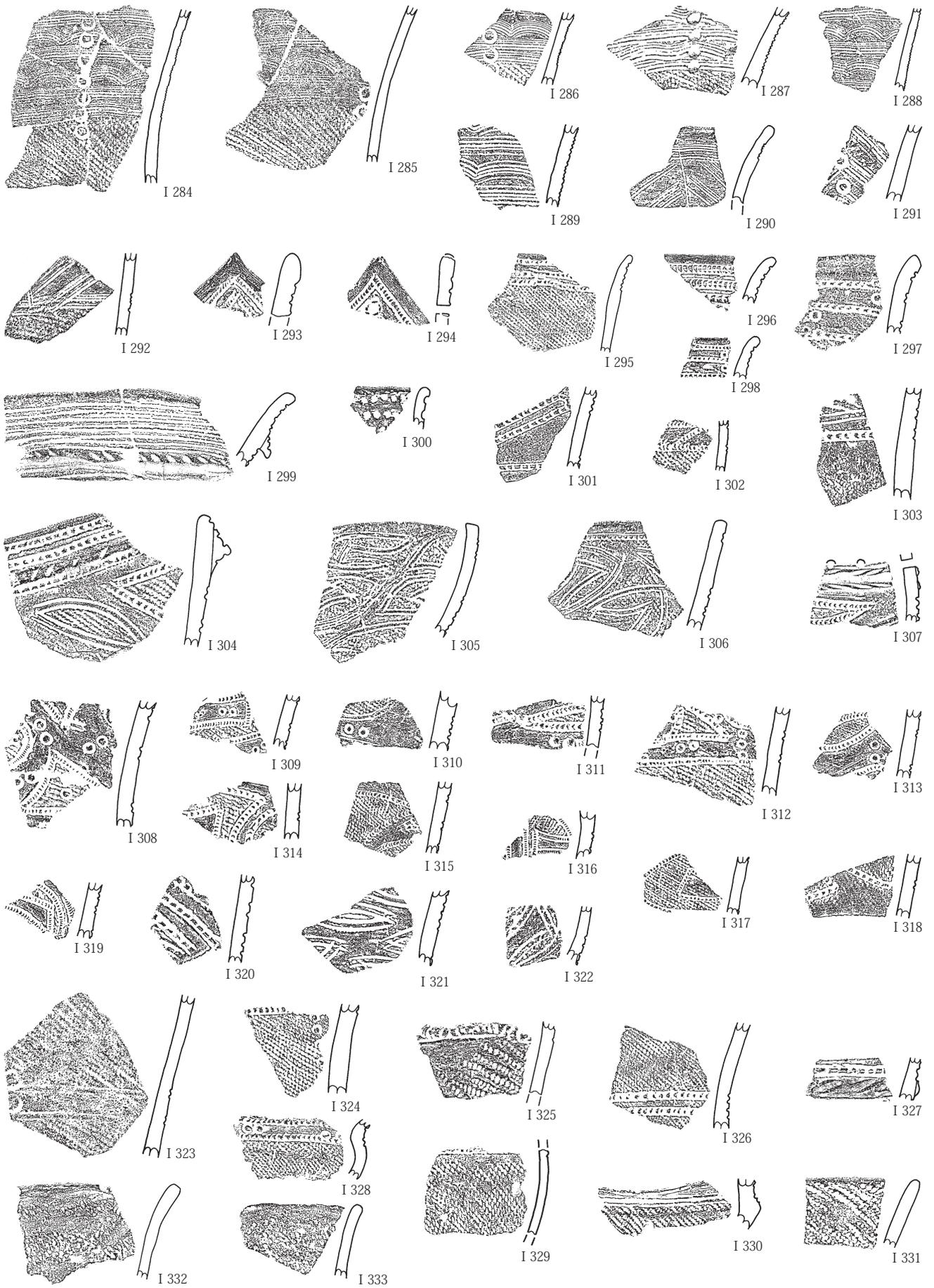
第 214 图 I 区 2 竖穴 (2) 出土遺物



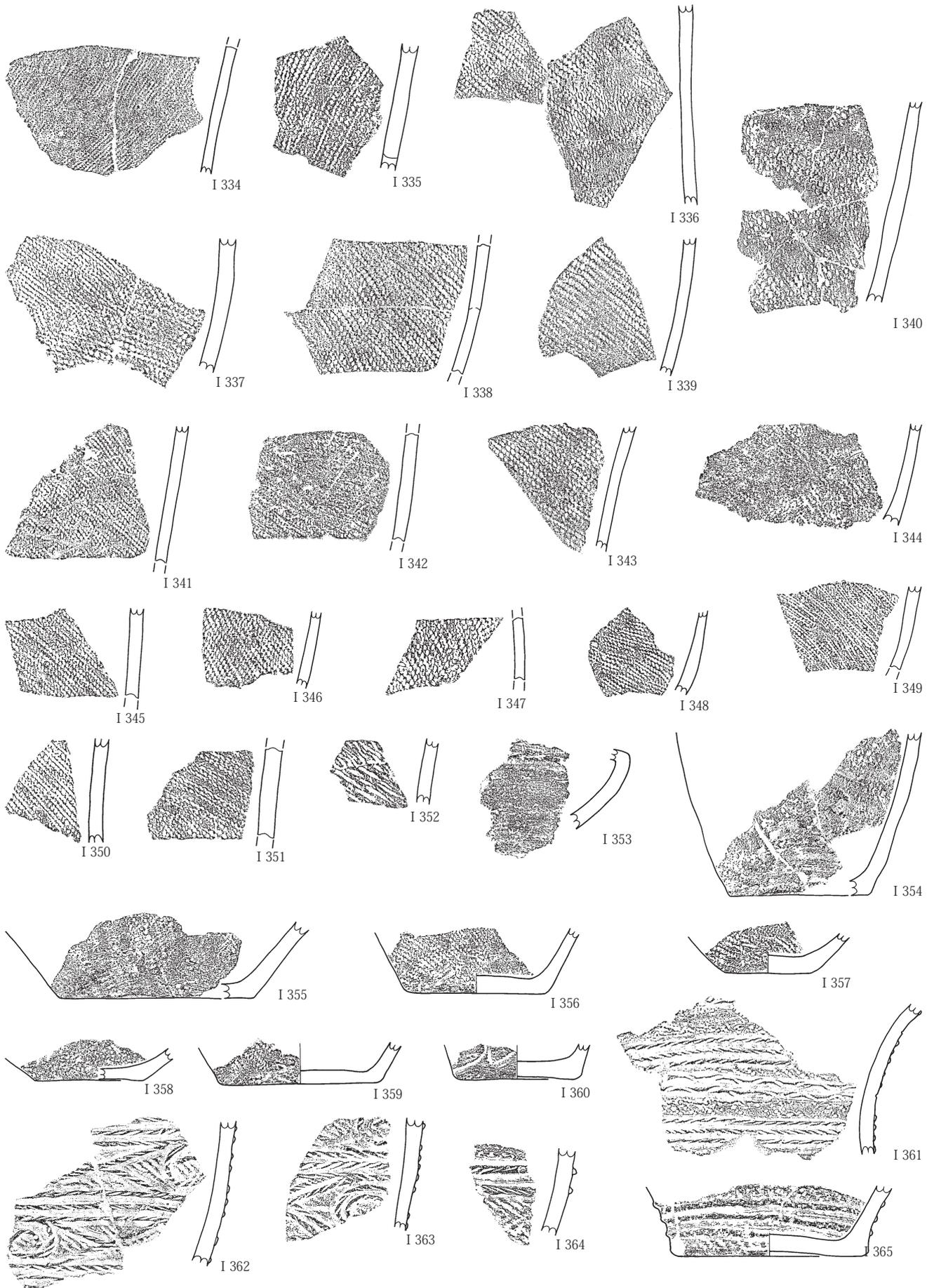
第215図 I区2竖穴(3)出土遺物



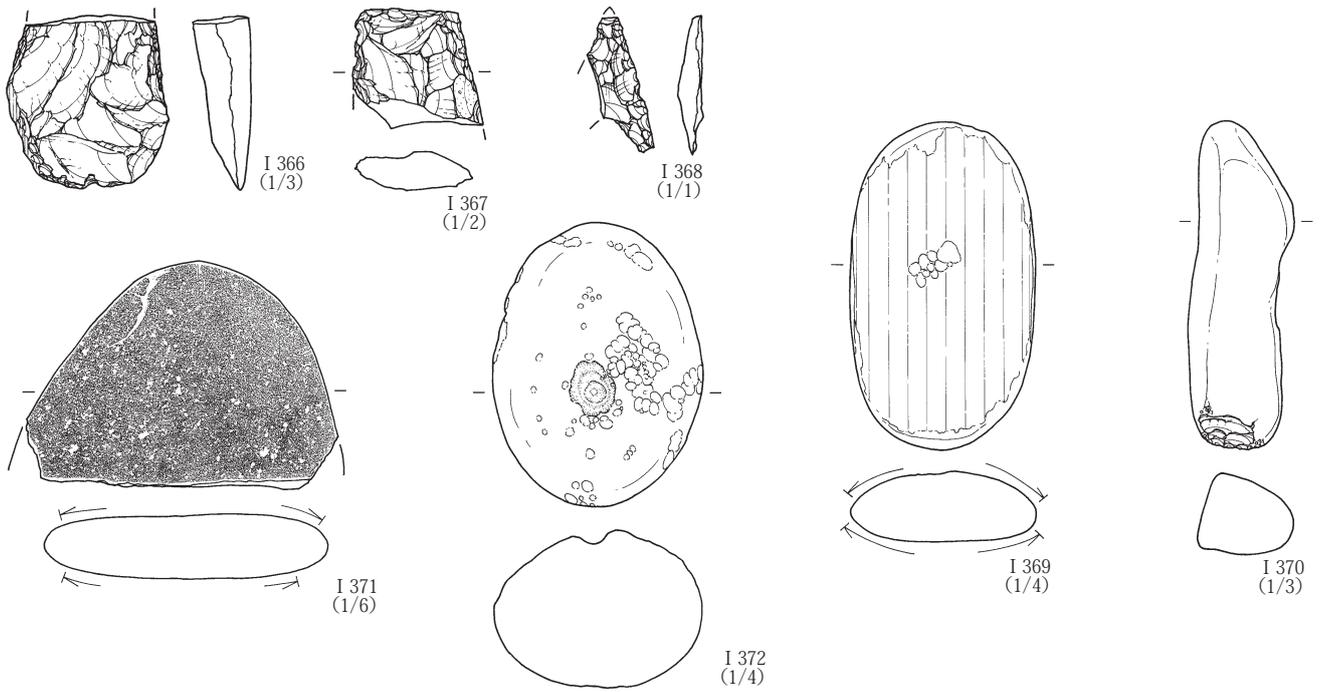
第216图 I区3竖穴(1)出土遺物



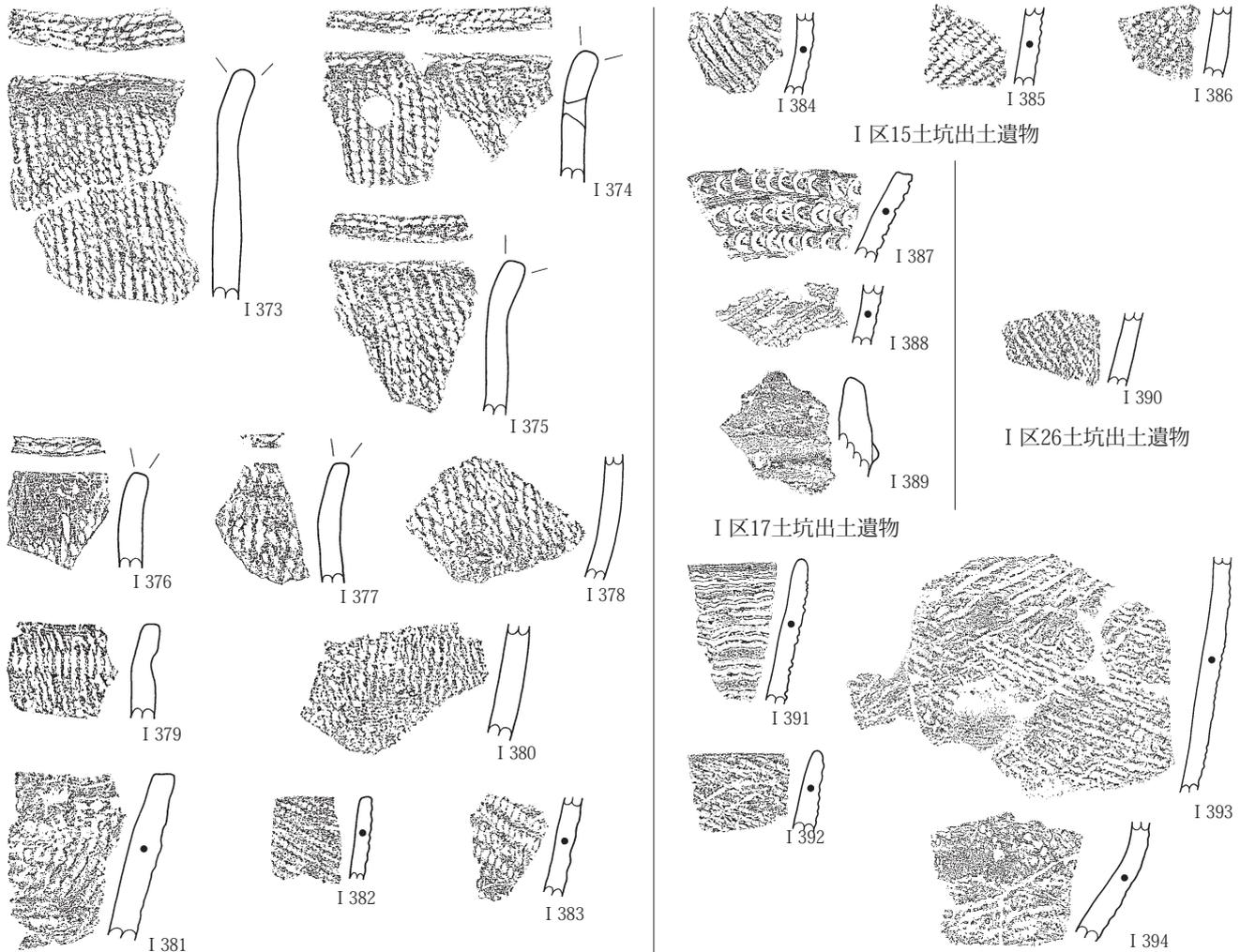
第217図 I区3竖穴(2)出土遺物



第218图 I区3竖穴(3)出土遺物

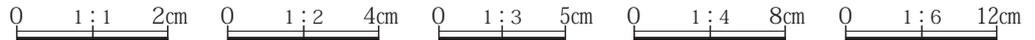


I区3 竪穴出土遺物(4)

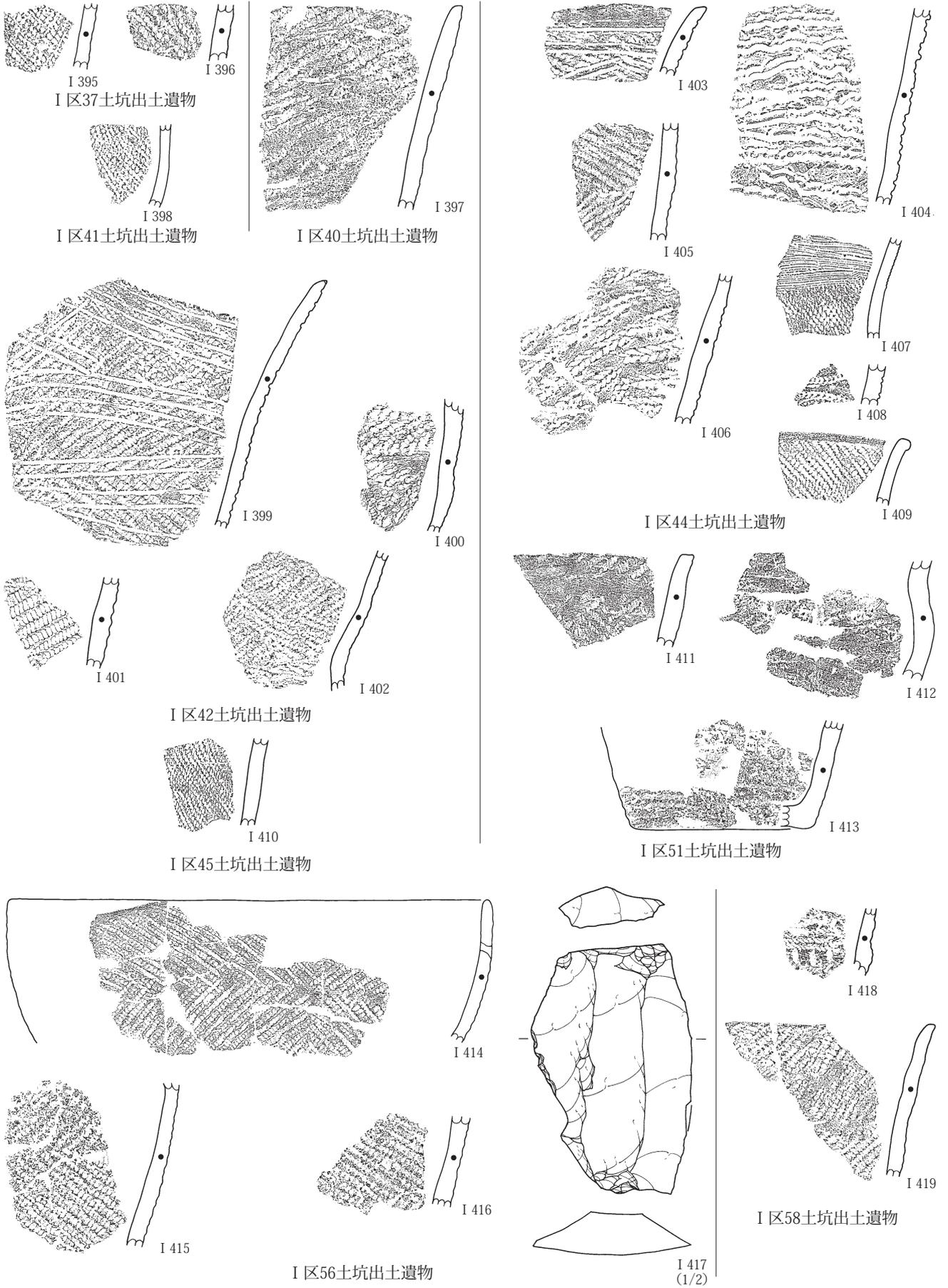


I区1 集石出土遺物

I区28土坑出土遺物

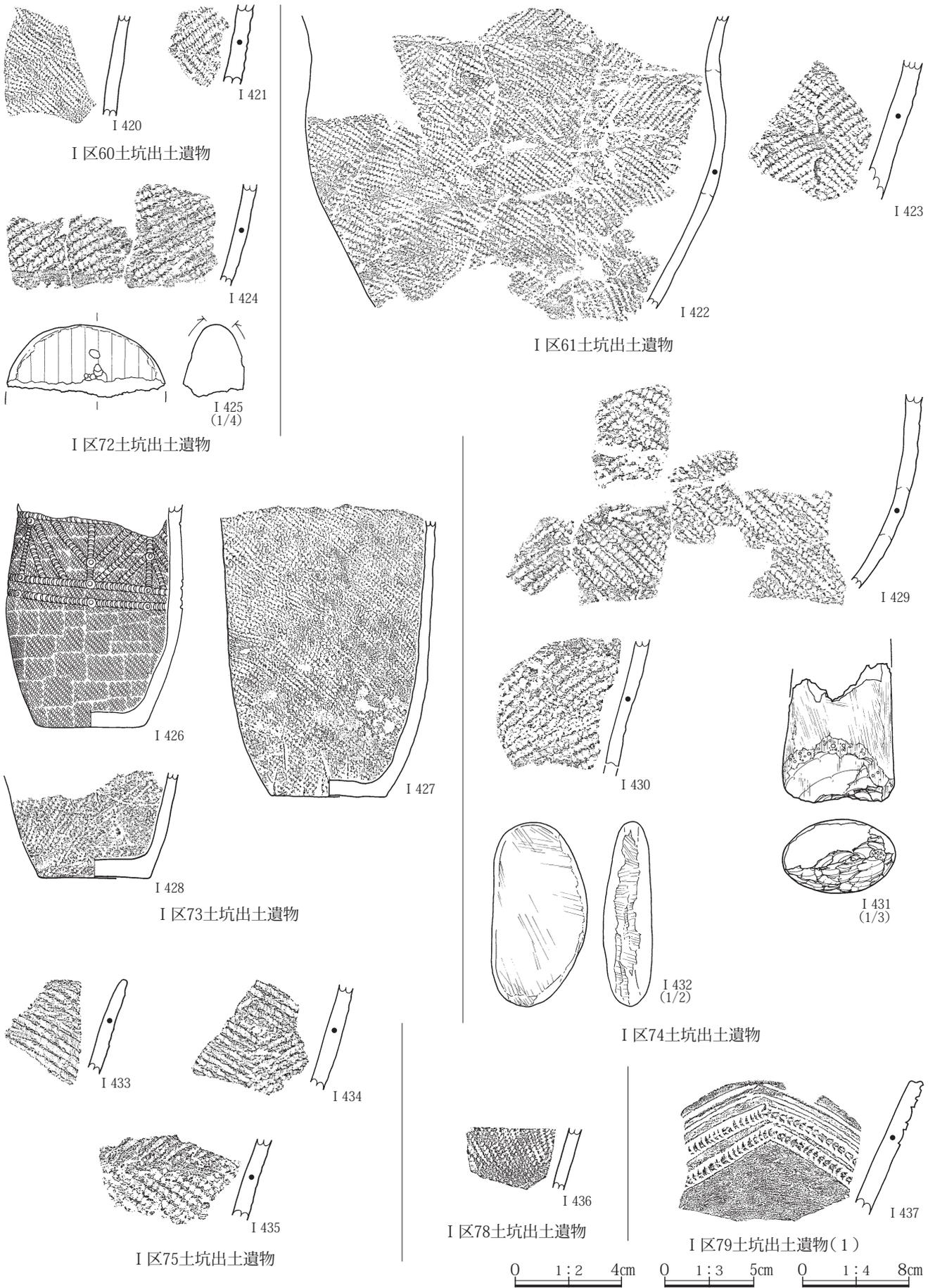


第219図 I区3 竪穴(4)、1集石、15・17・26・28土坑出土遺物

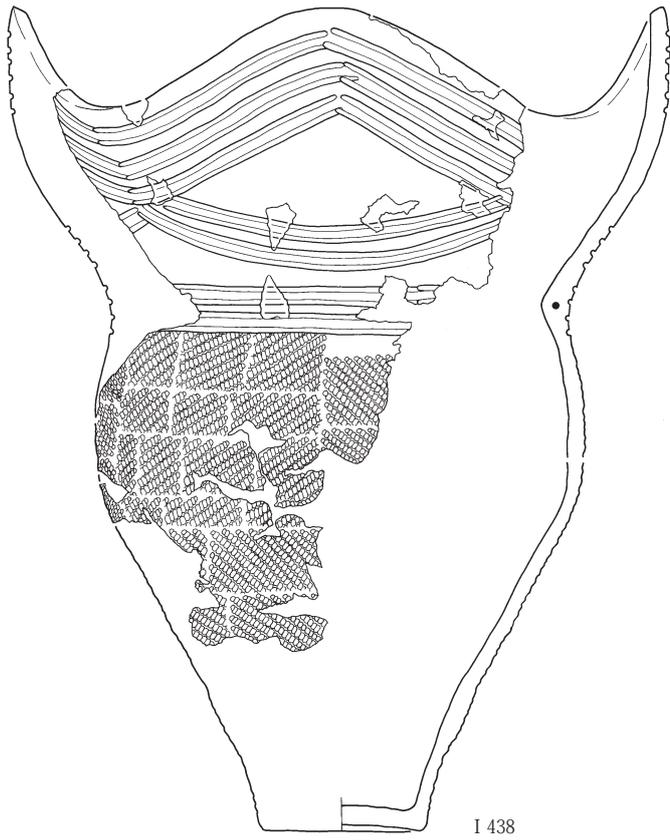


第220图 I区37・40~42・44・45・51・56・58土坑出土遺物

0 1:2 4cm

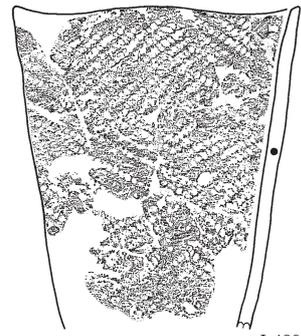


第221図 I区60・61・72～75・78土坑、79土坑(1)出土遺物



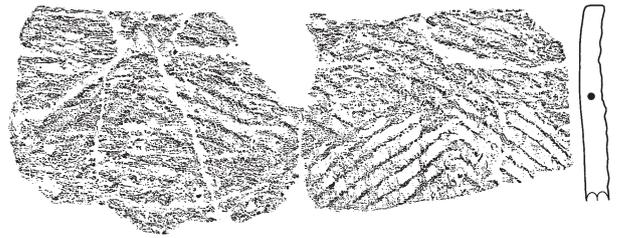
I 区79土坑出土遺物(2)

I 438



I 439

I 区81土坑出土遺物



I 441

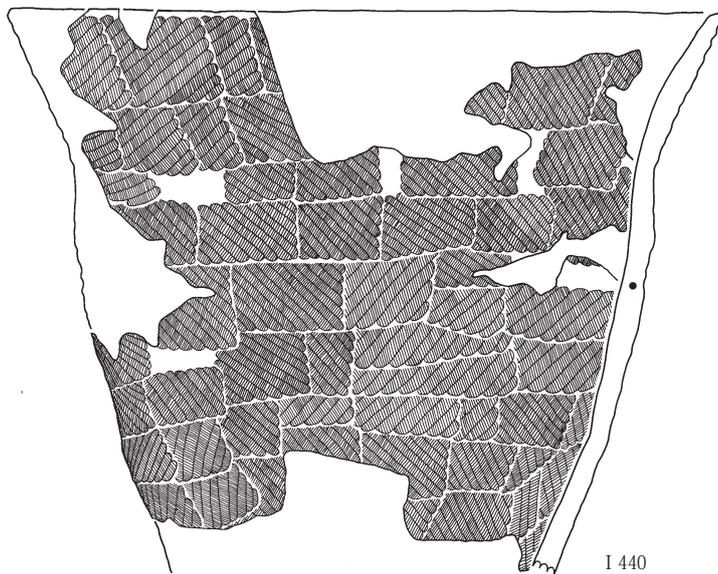


I 442



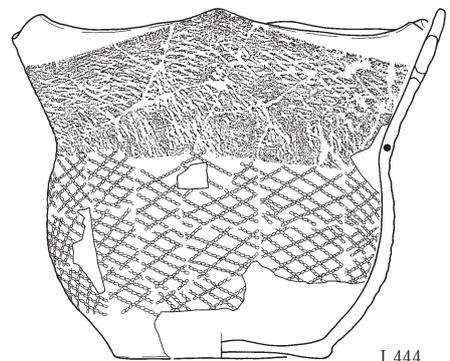
I 443

I 区84土坑出土遺物



I 区82土坑出土遺物

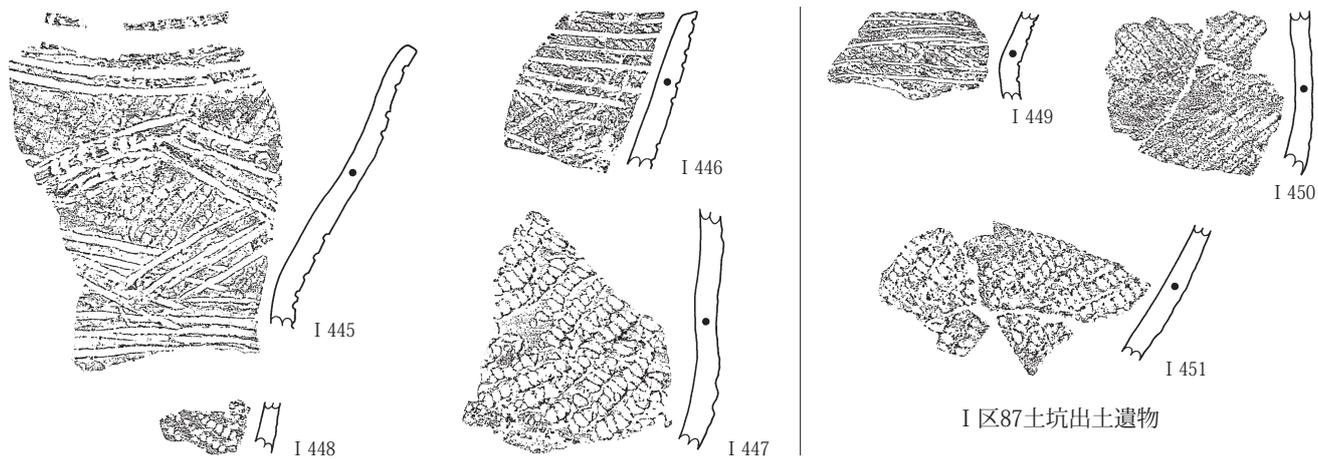
I 440



I 444

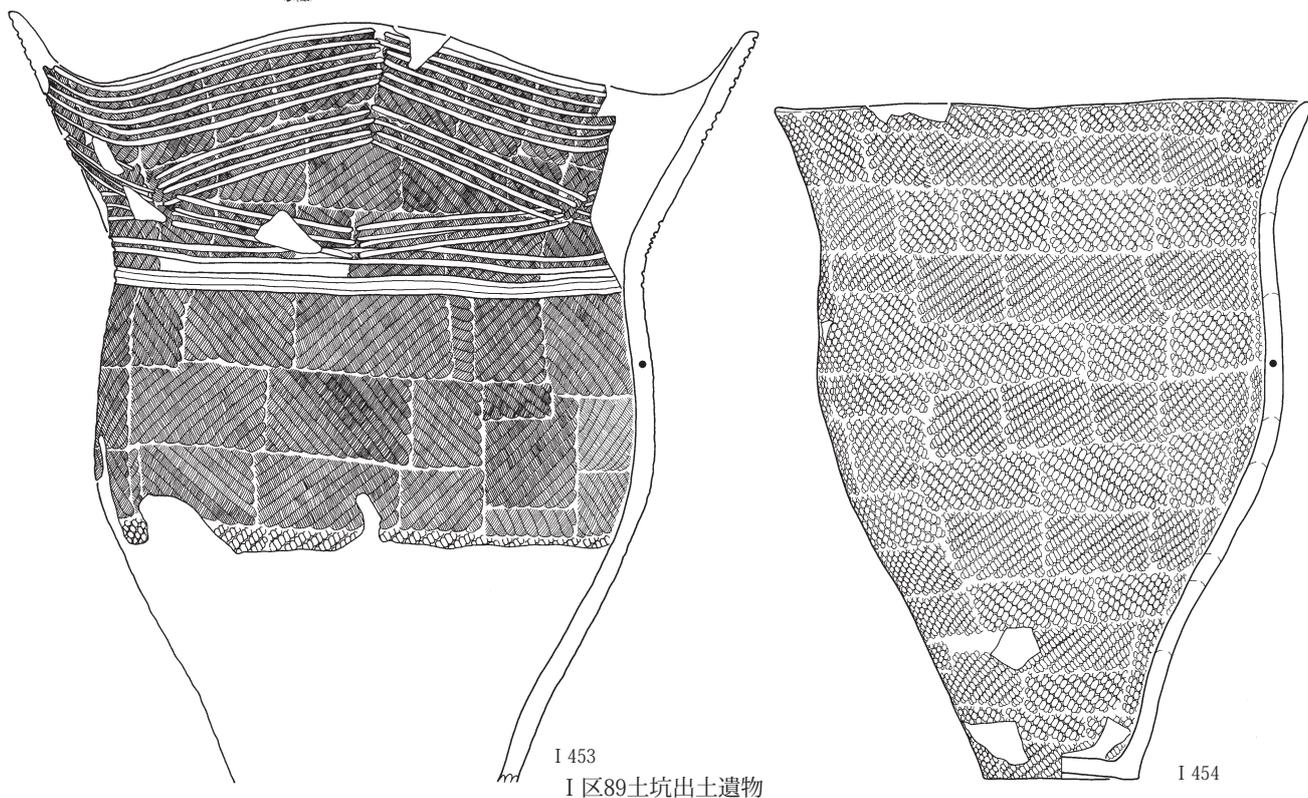
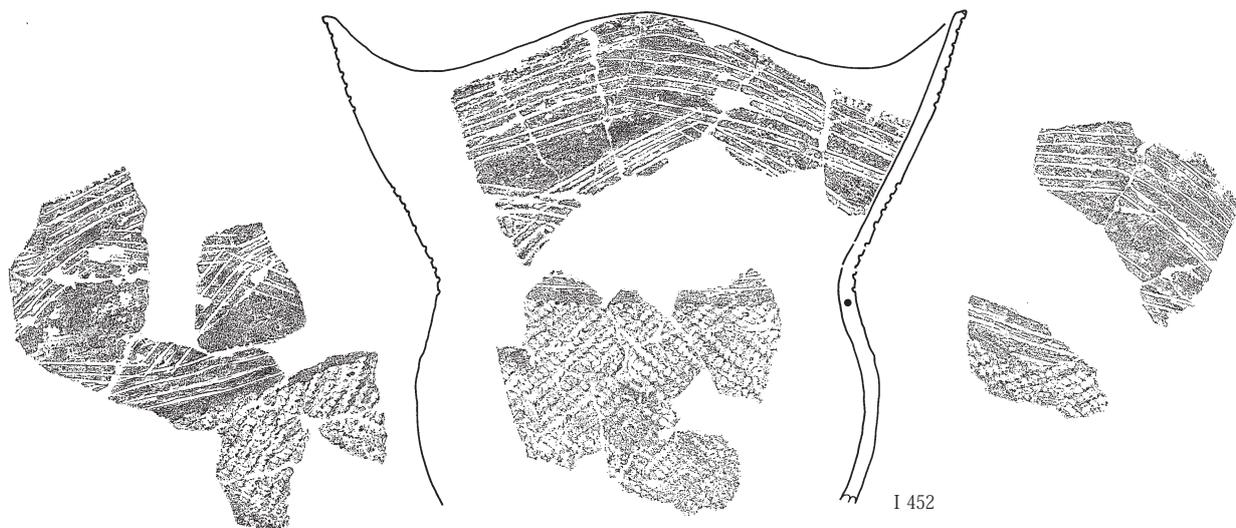
I 区85土坑出土遺物(1)

第222图 I区79土坑(2)、81·82·84土坑、85土坑(1)出土遺物



I 区85土坑出土遺物(2)

I 区87土坑出土遺物

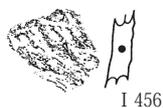


I 区89土坑出土遺物

第223図 I 区85土坑(2)、87・89土坑出土遺物



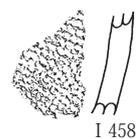
I 区91土坑出土遺物



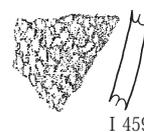
I 区94土坑出土遺物



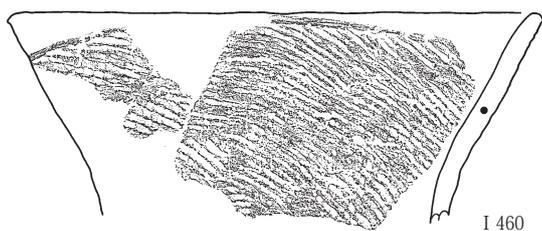
I 457



I 458



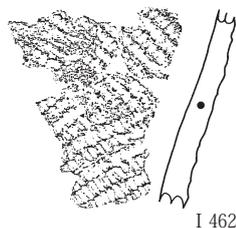
I 459



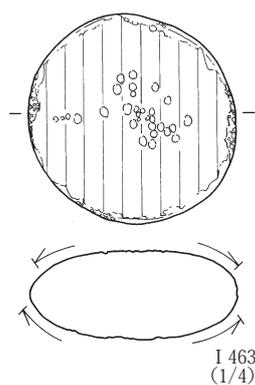
I 460



I 461



I 462



I 463 (1/4)



I 464 (1/4)

I 区99土坑出土遺物

I 区95土坑出土遺物



I 465

I 区100土坑出土遺物



I 468

I 区106土坑出土遺物

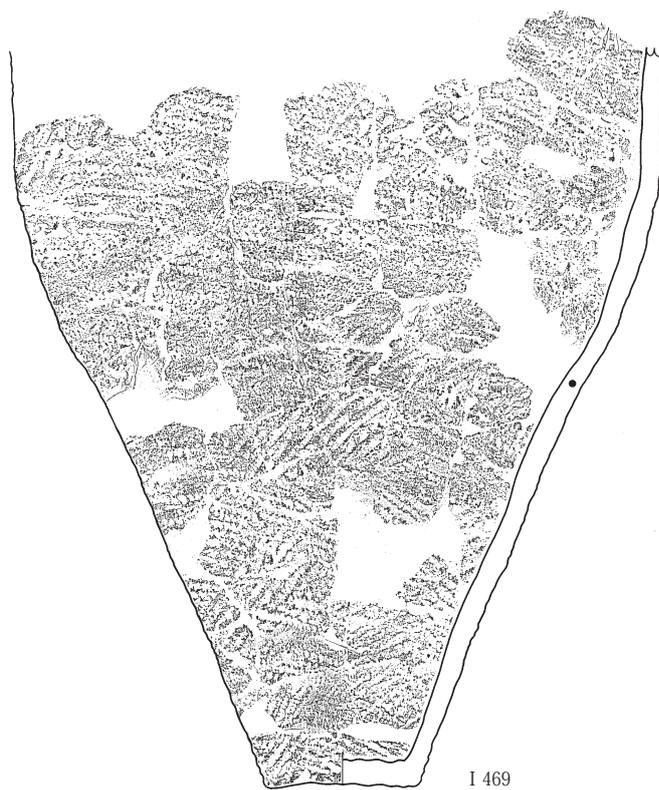


I 466



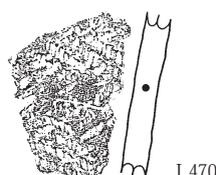
I 467

I 区103土坑出土遺物



I 469

I 区109土坑出土遺物



I 470

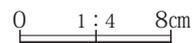
I 区110土坑出土遺物



I 471

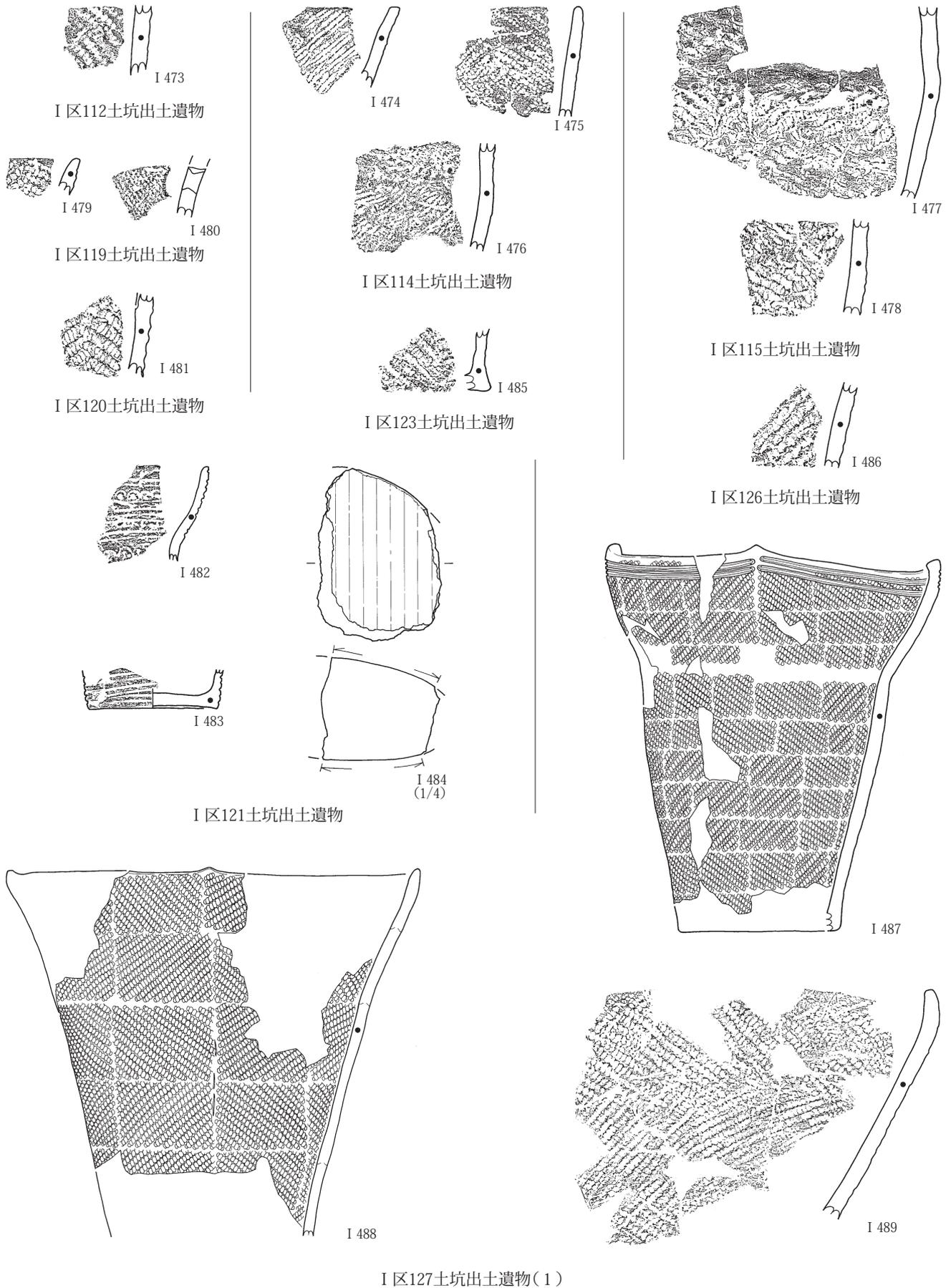


I 472

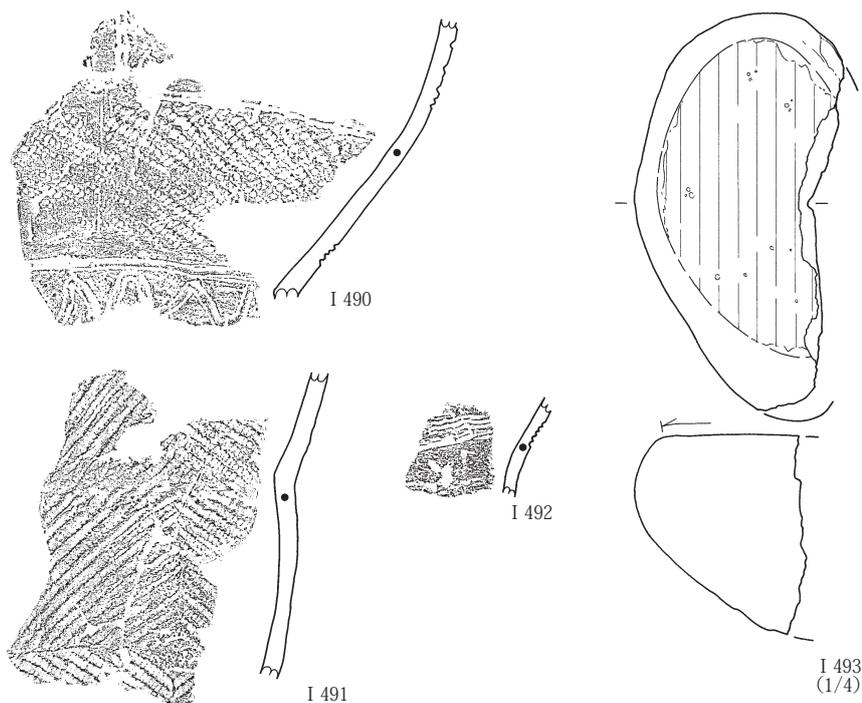


第 224 图 I 区 91 · 94 · 95 · 99 · 100 · 103 · 106 · 109 · 110 土坑出土遺物

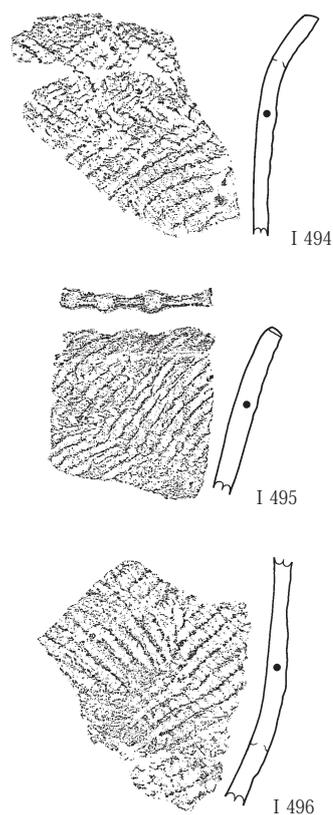
第4章 検出された遺構と遺物



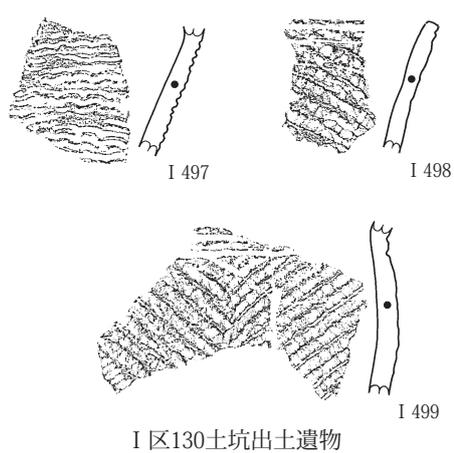
第225図 I区112・114・115・119～121・123・126土坑、127土坑(1)出土遺物



I区127土坑出土遺物(2)



I区128土坑出土遺物



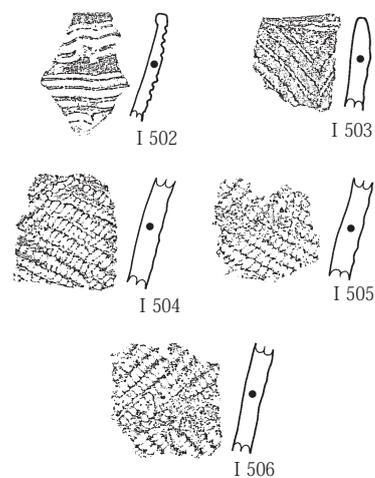
I区130土坑出土遺物



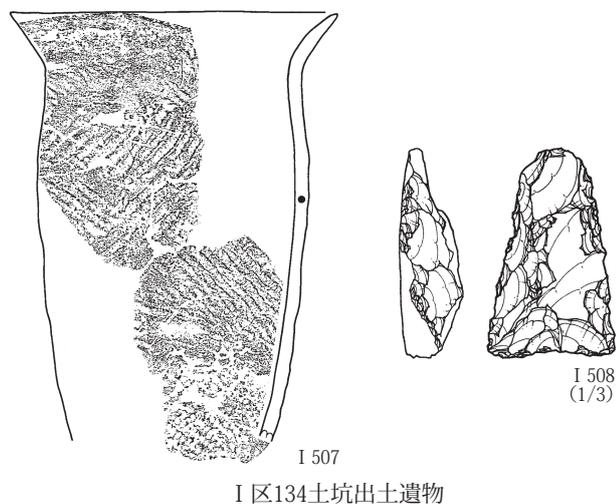
I区131土坑出土遺物



I区132土坑出土遺物



I区133土坑出土遺物



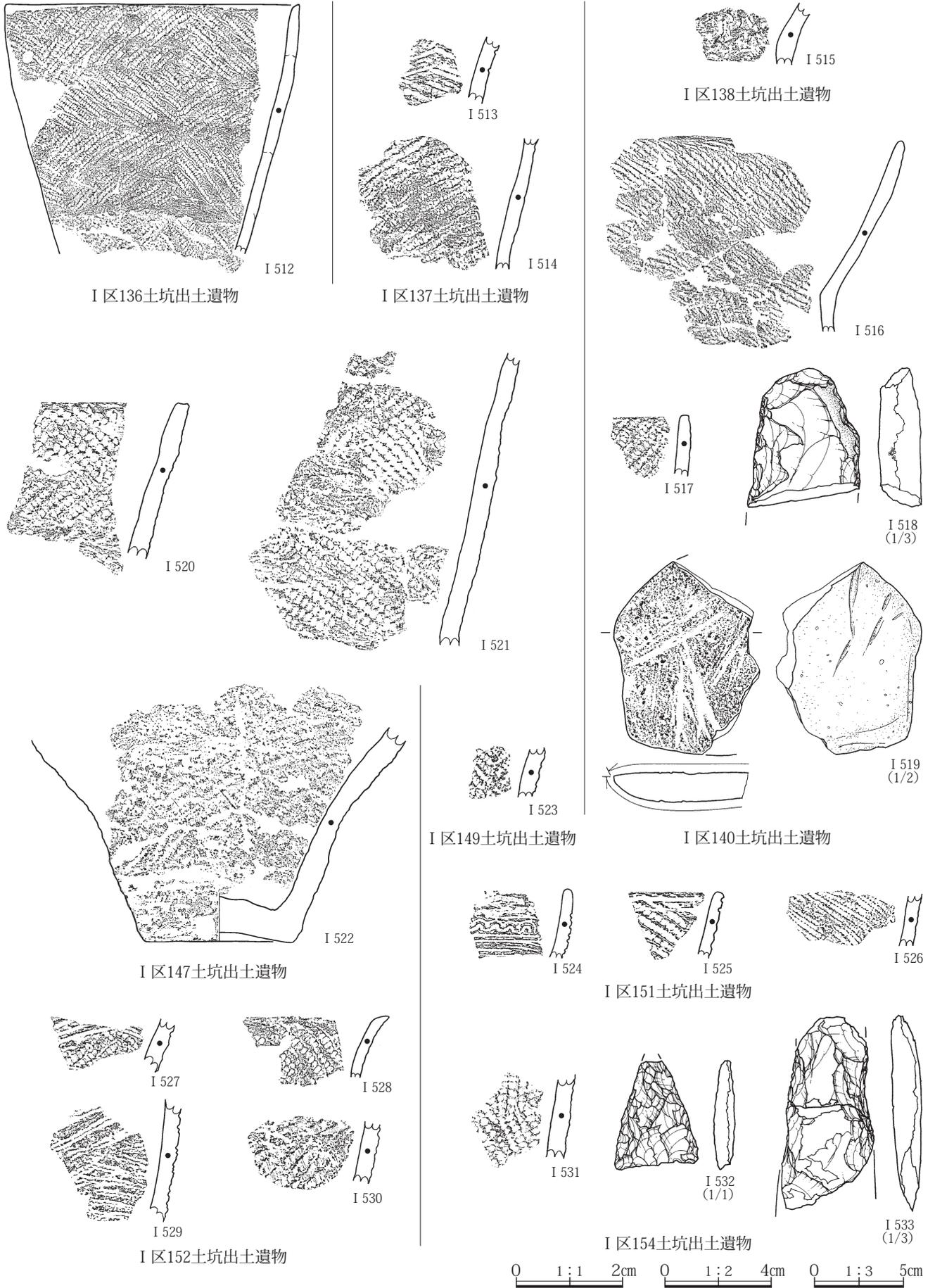
I区134土坑出土遺物



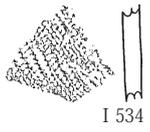
I区135土坑出土遺物



第226图 I区127土坑(2)、128·130~135土坑出土遺物

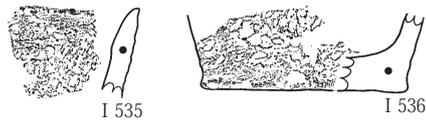


第227図 I区136～138・140・147・149・151・152・154土坑出土遺物



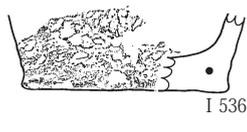
I 534

I区158土坑出土遺物



I 535

I区162土坑出土遺物

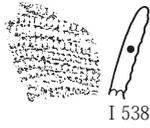


I 536



I 537

I区163土坑出土遺物

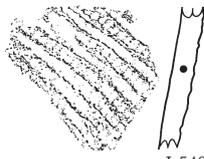


I 538

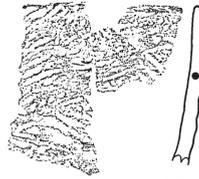


I 539

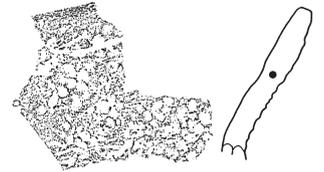
I区165土坑出土遺物



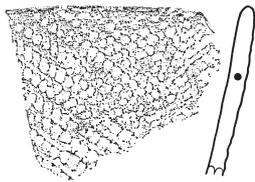
I 540



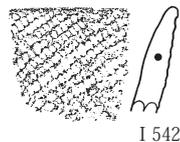
I 545



I 546



I 541



I 542



I 547

I区167土坑出土遺物

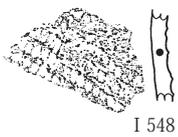


I 543



I 544

I区166土坑出土遺物

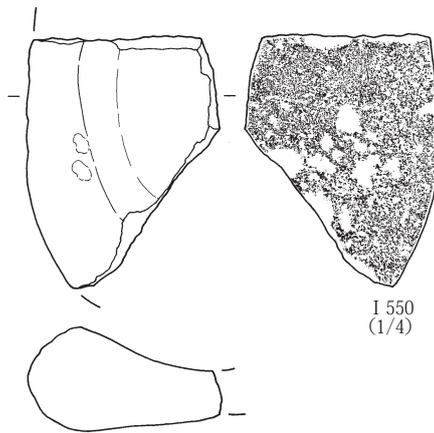


I 548

I区168土坑出土遺物



I 549



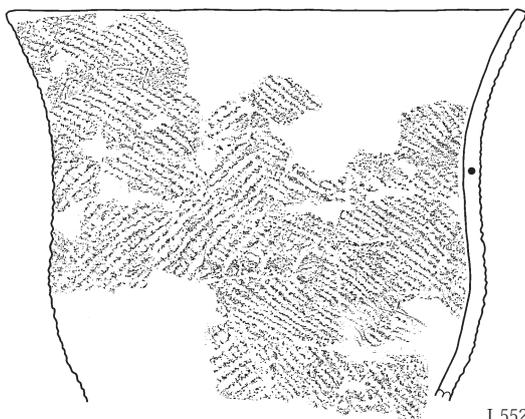
I 550
(1/4)

I区169土坑出土遺物



I 551

I区170土坑出土遺物



I 552

I区171土坑出土遺物



I 553



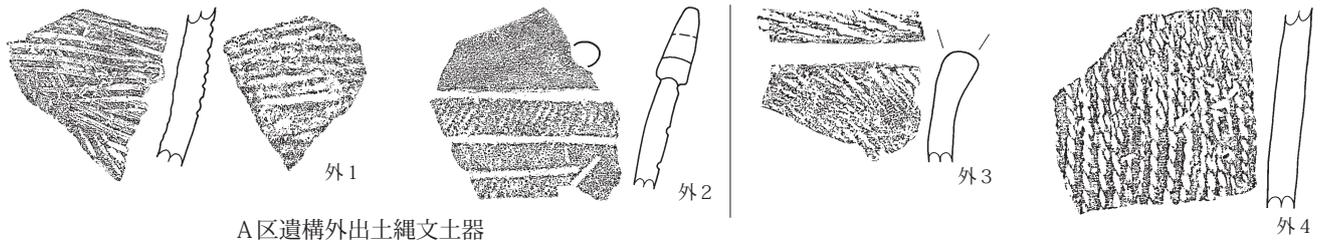
I 554

I区172土坑出土遺物

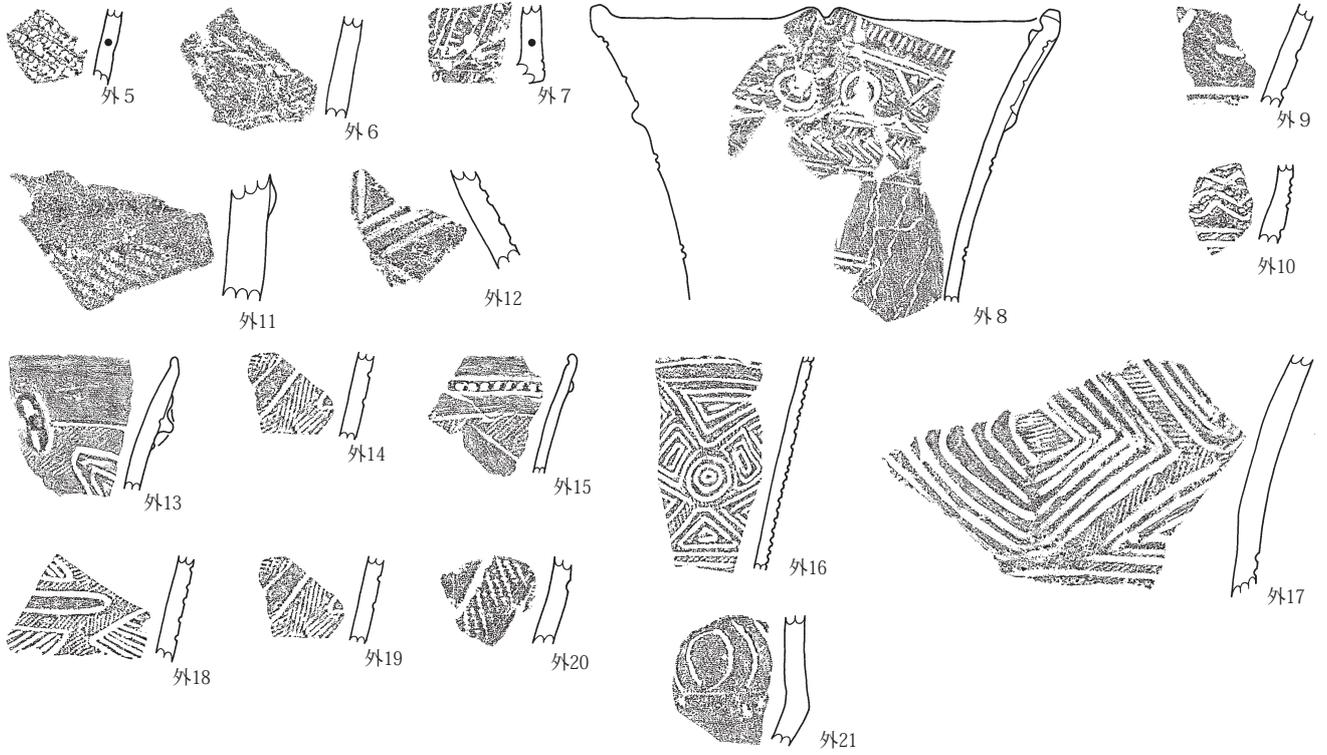


I 555

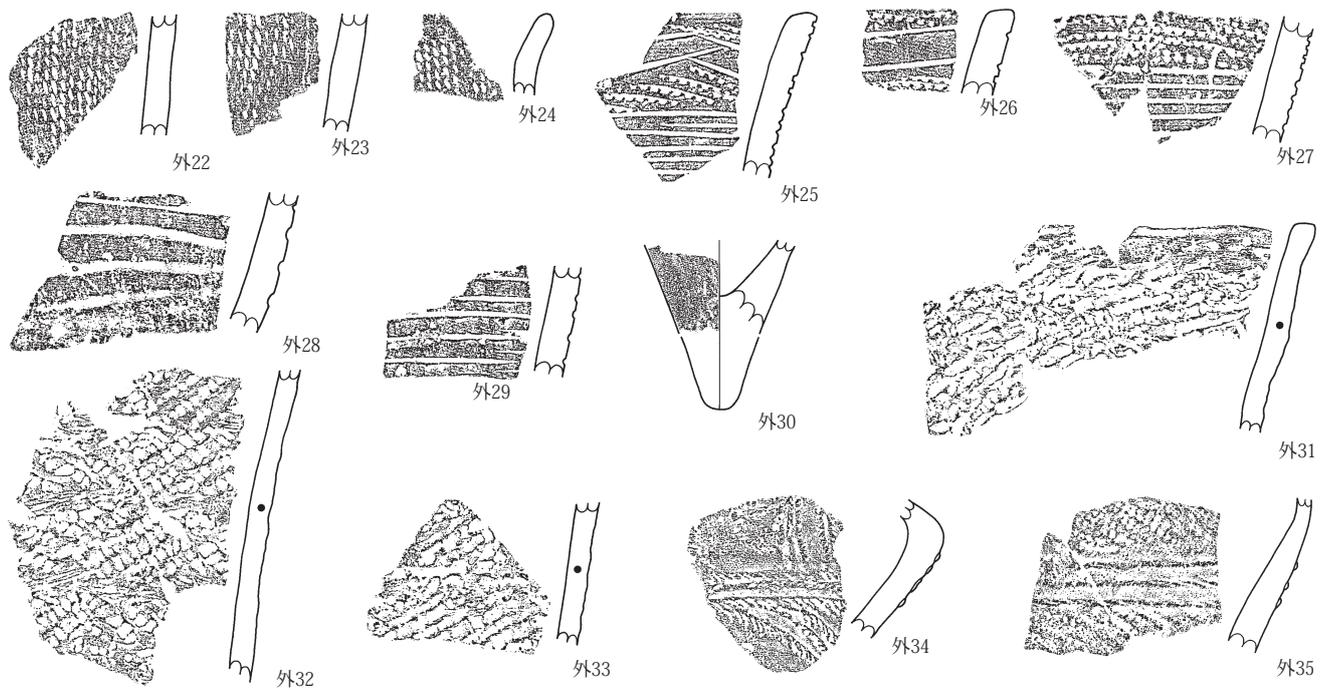
0 1:4 8cm



A区遺構外出土縄文土器

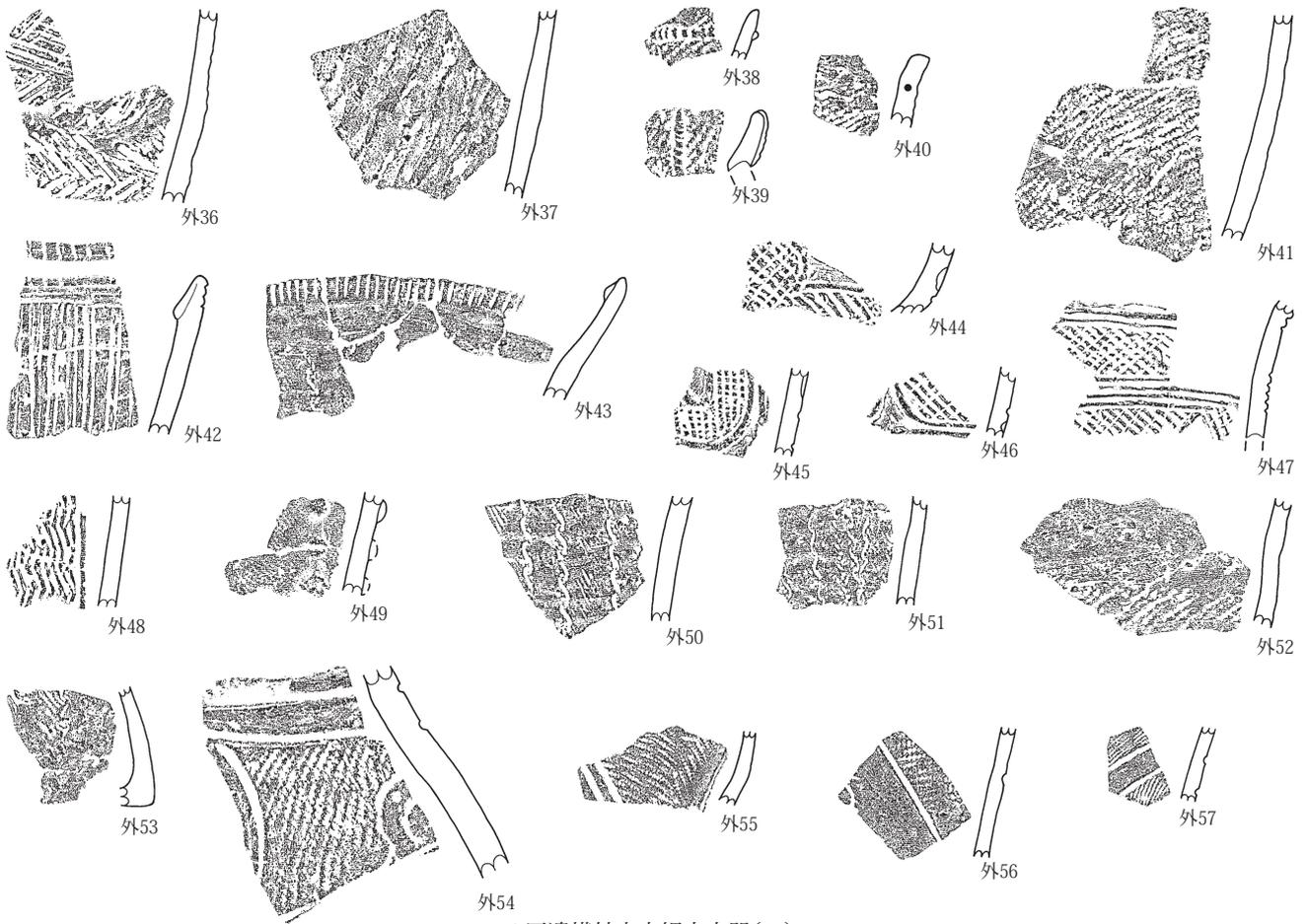


B区遺構外出土縄文土器

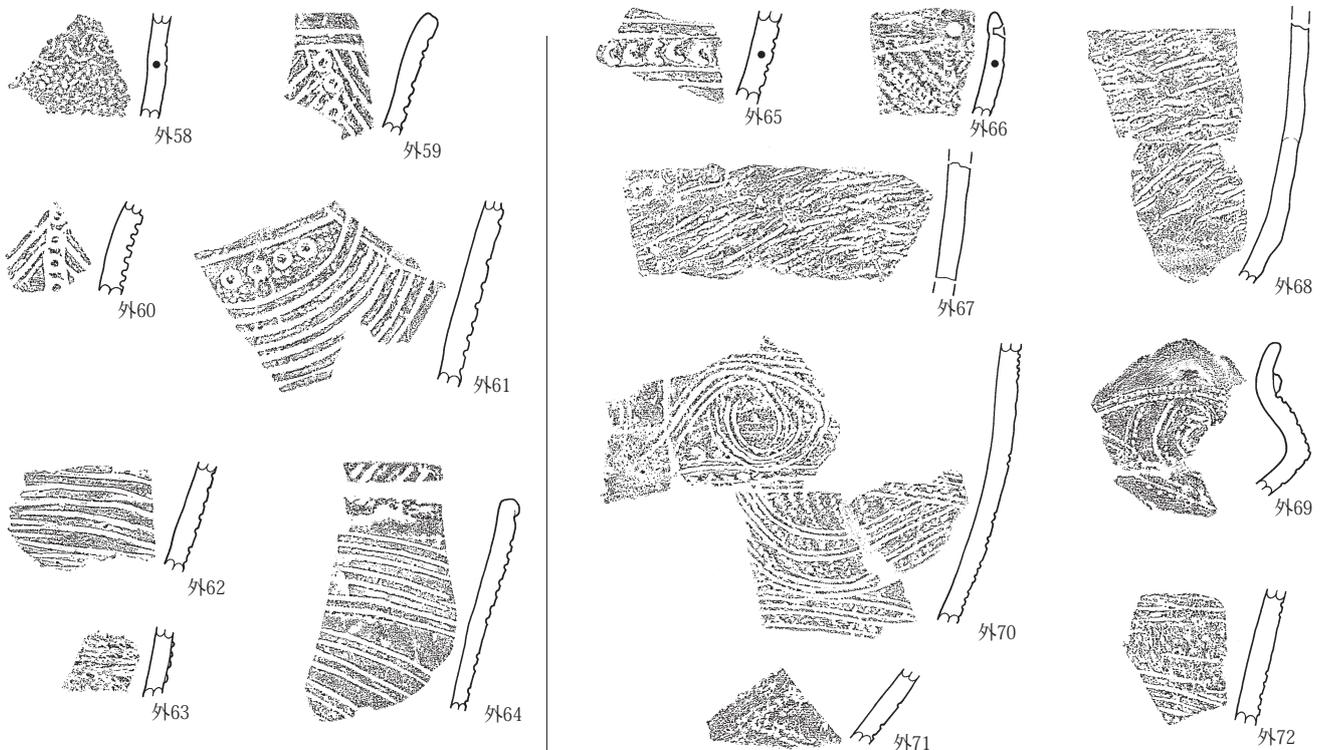


C区遺構外出土縄文土器(1)

第229図 A・B区遺構外、C区遺構外(1)出土縄文土器



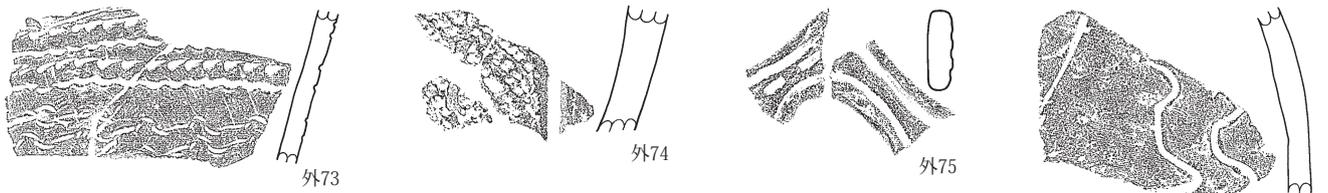
C区遺構外出土縄文土器(2)



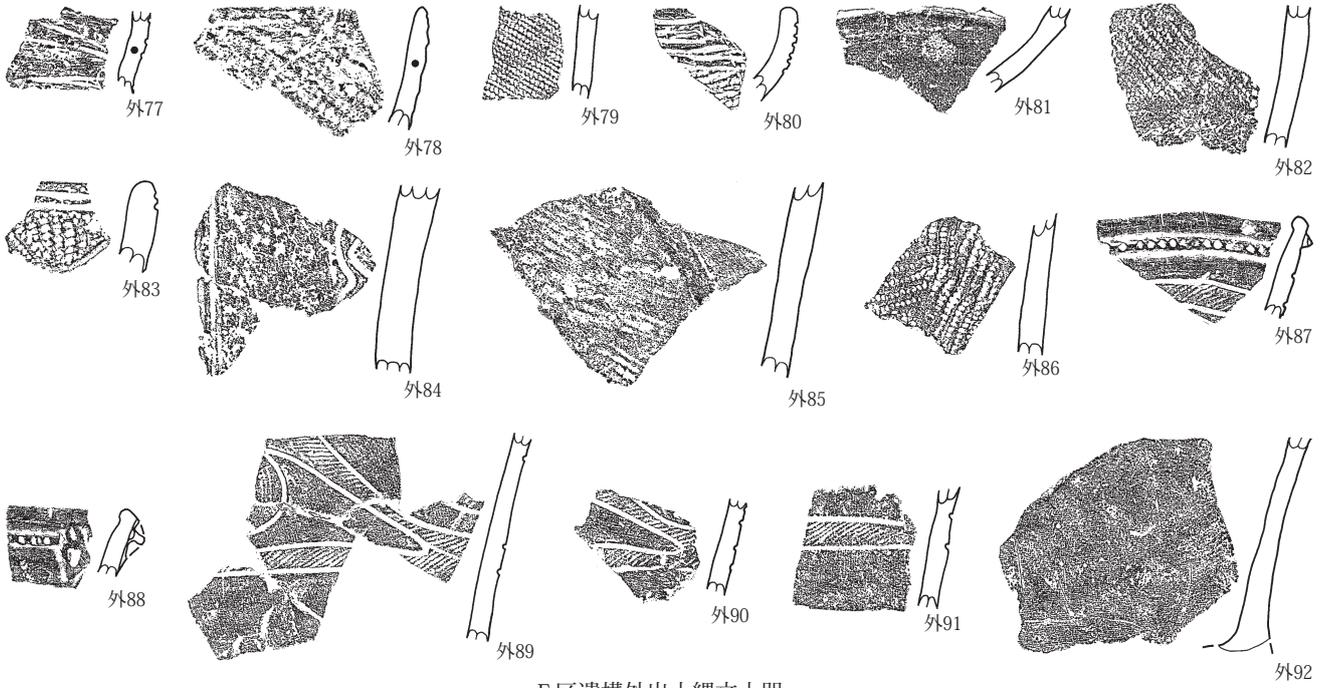
D区遺構外出土縄文土器

E区遺構外出土縄文土器(1)

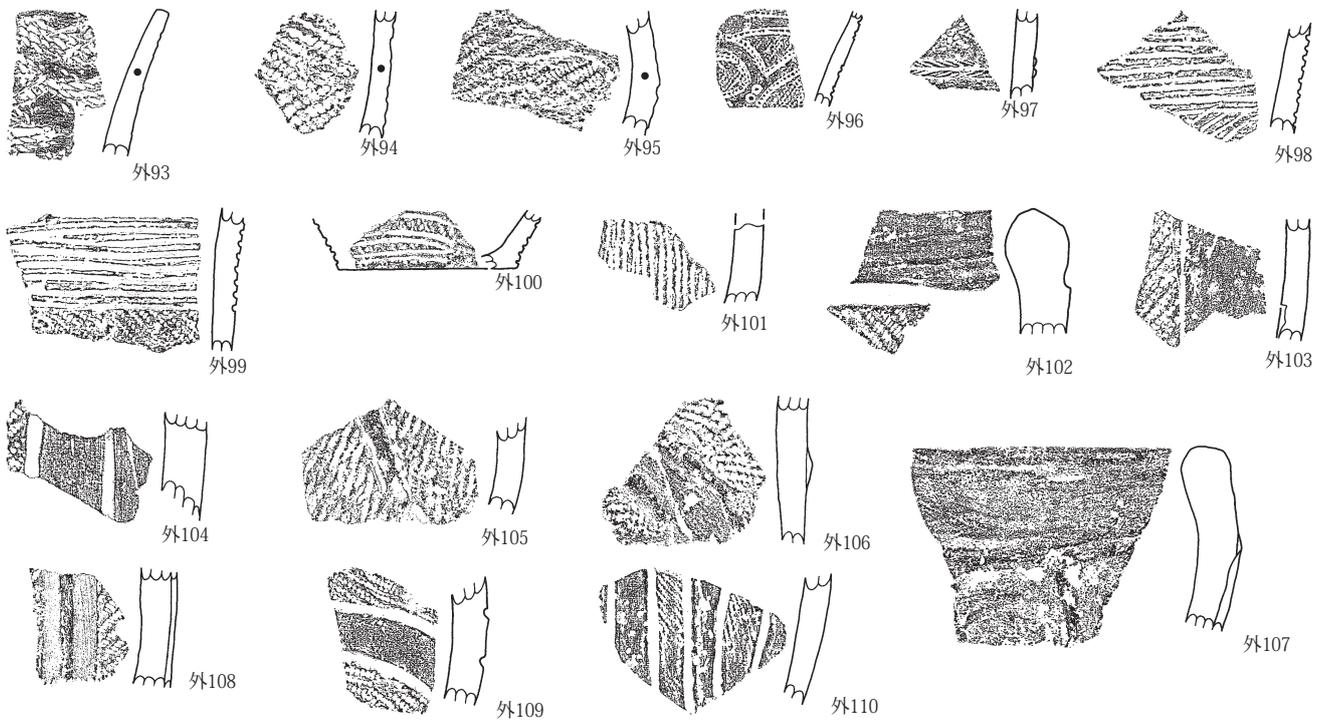
第230図 C区遺構外(2)、D遺構外、E区遺構外(1)出土縄文土器



E区遺構外出土縄文土器(2)

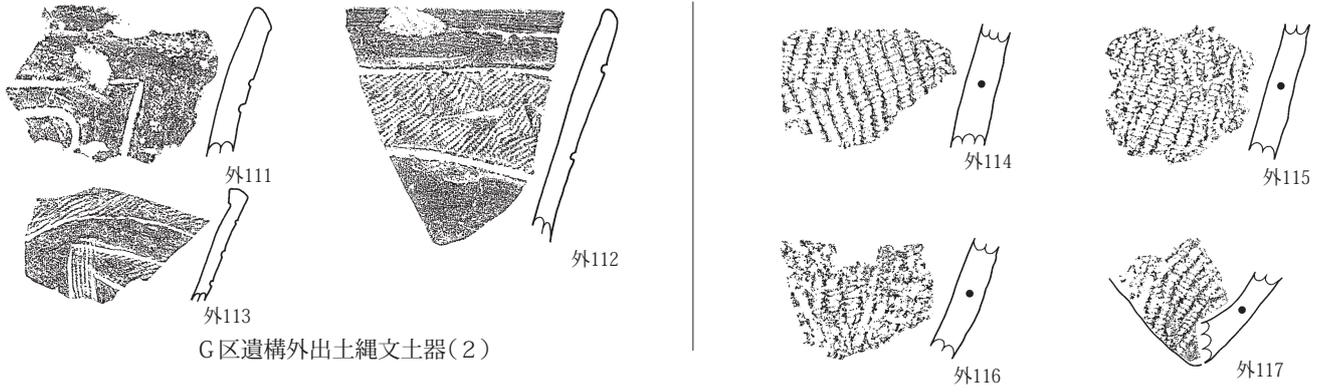


F区遺構外出土縄文土器

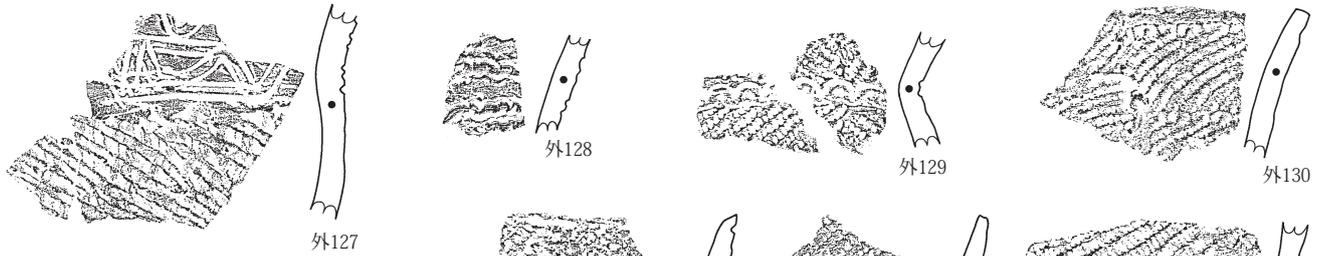
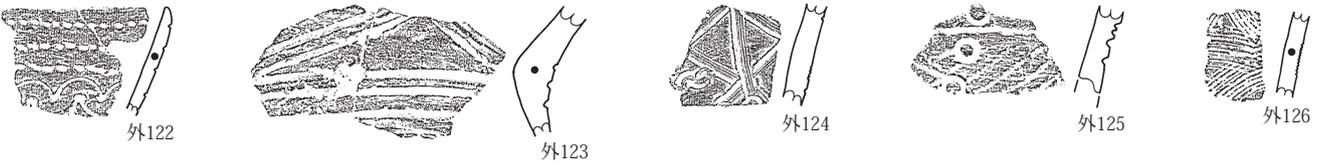
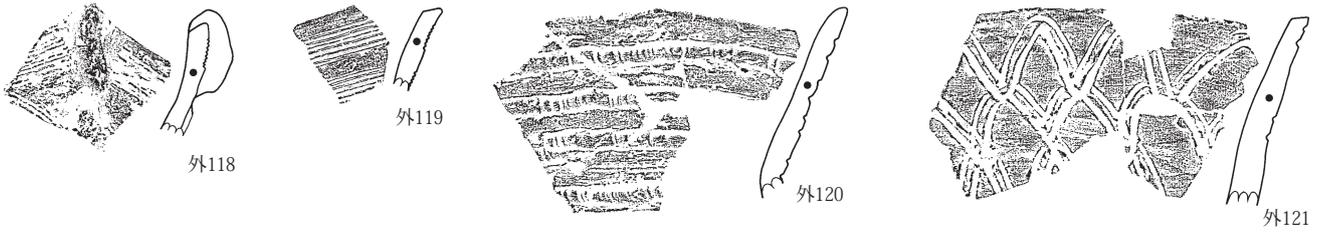


G区遺構外出土縄文土器(1)

第231図 E区遺構外(2)、F区遺構外、G区遺構外(1)出土縄文土器

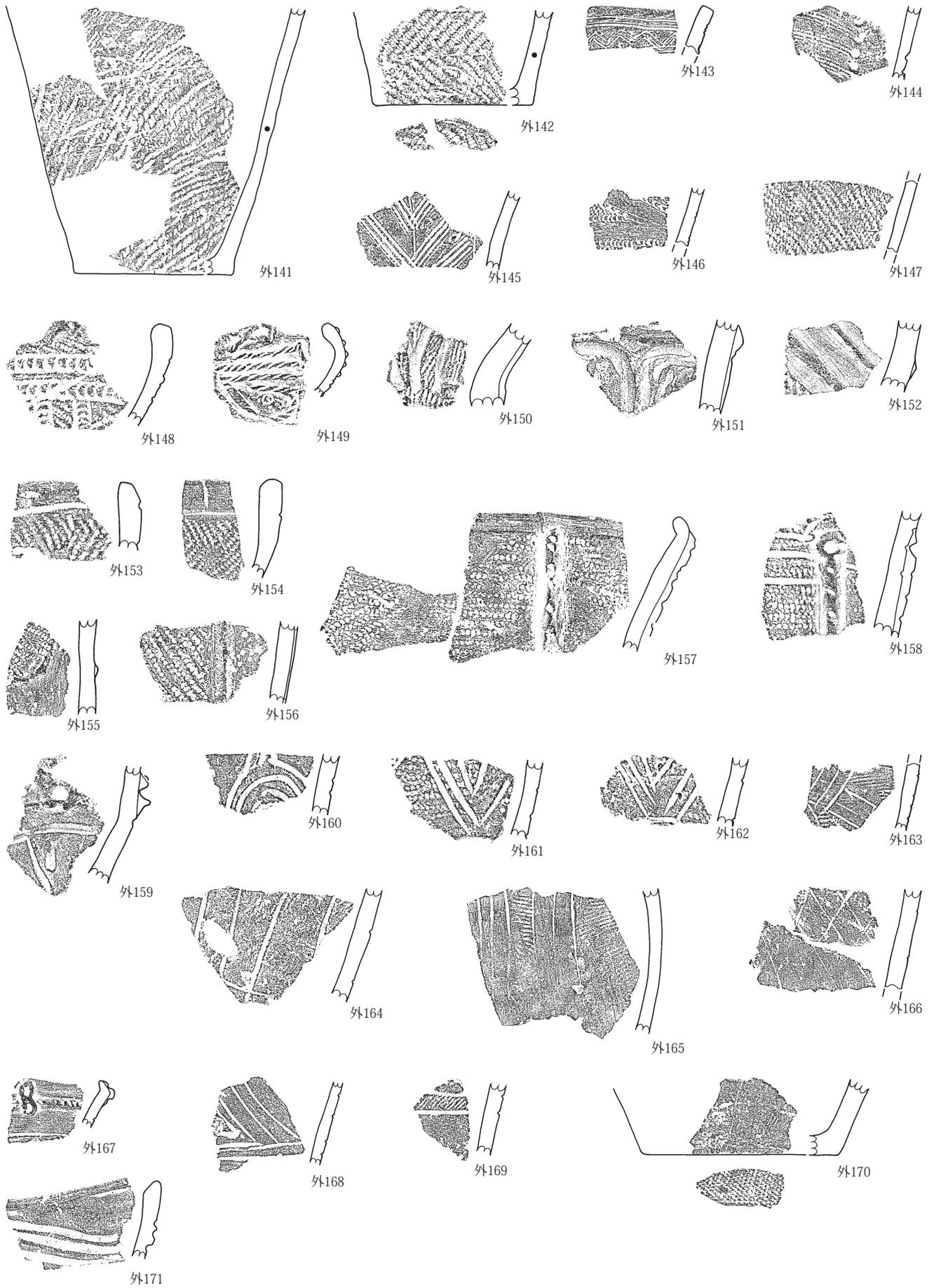


G区遺構外出土縄文土器(2)

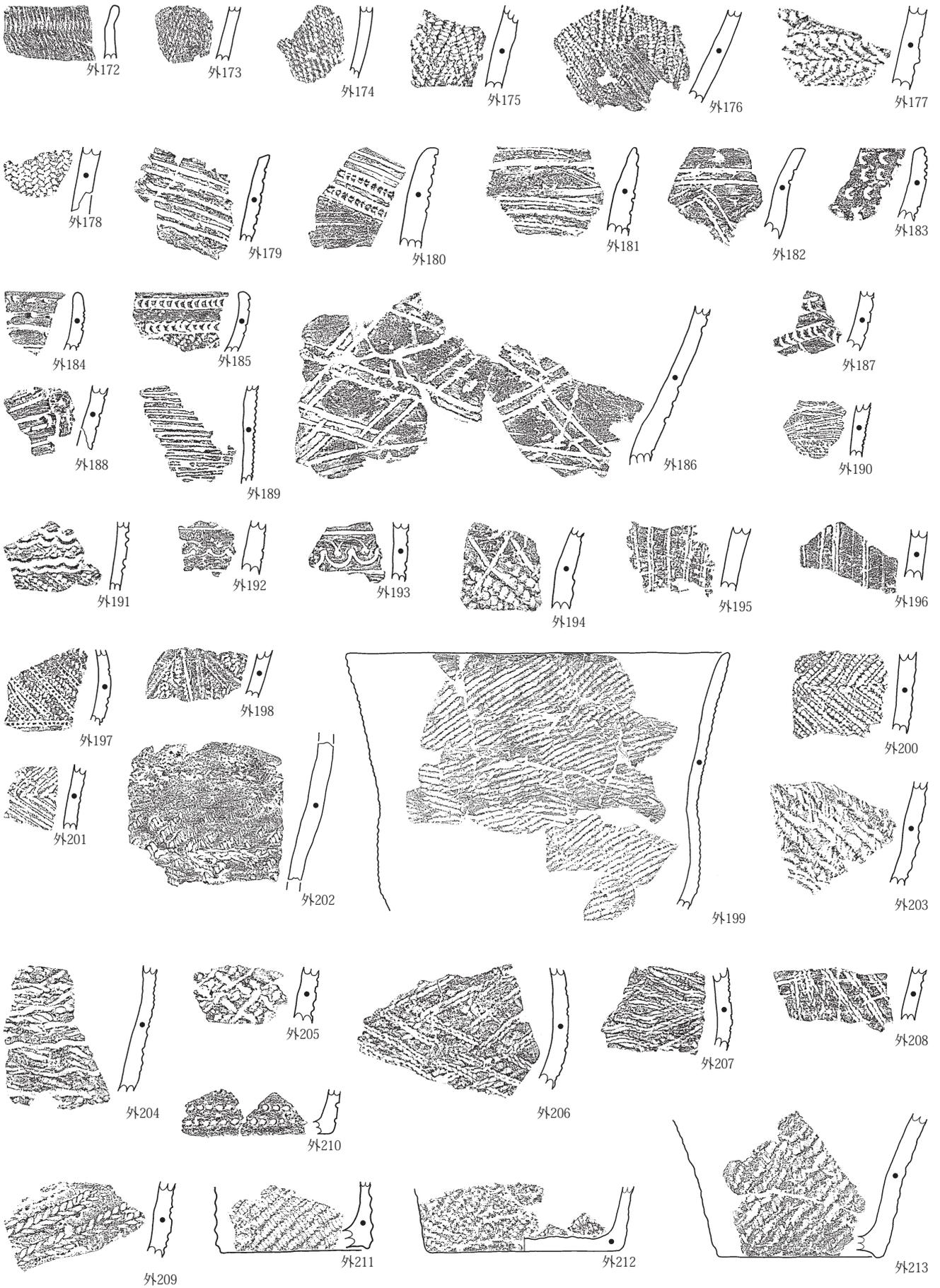


H区遺構外出土縄文土器(1)

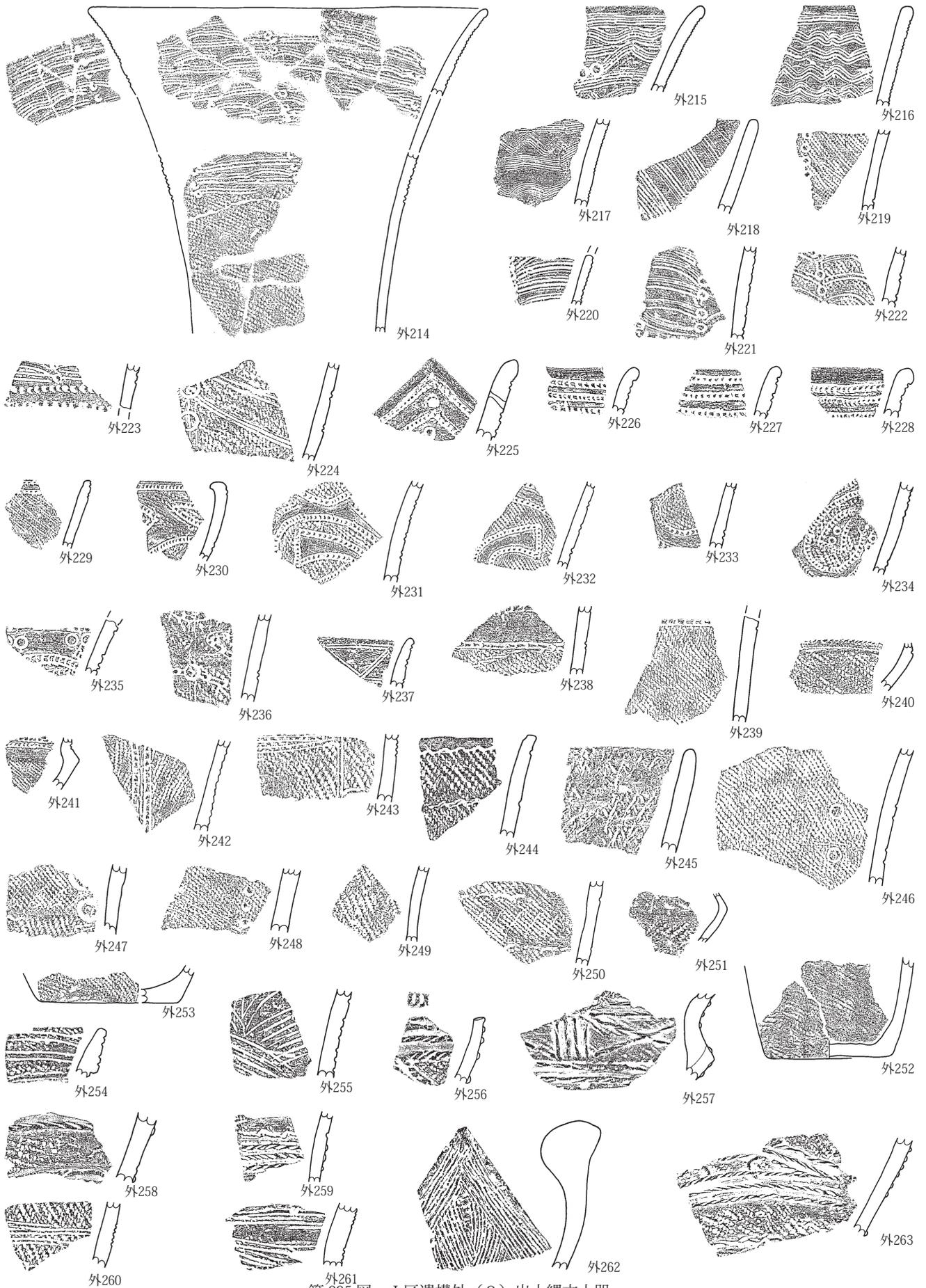
第 232 図 G区遺構外(2)、H区遺構外(1)出土縄文土器



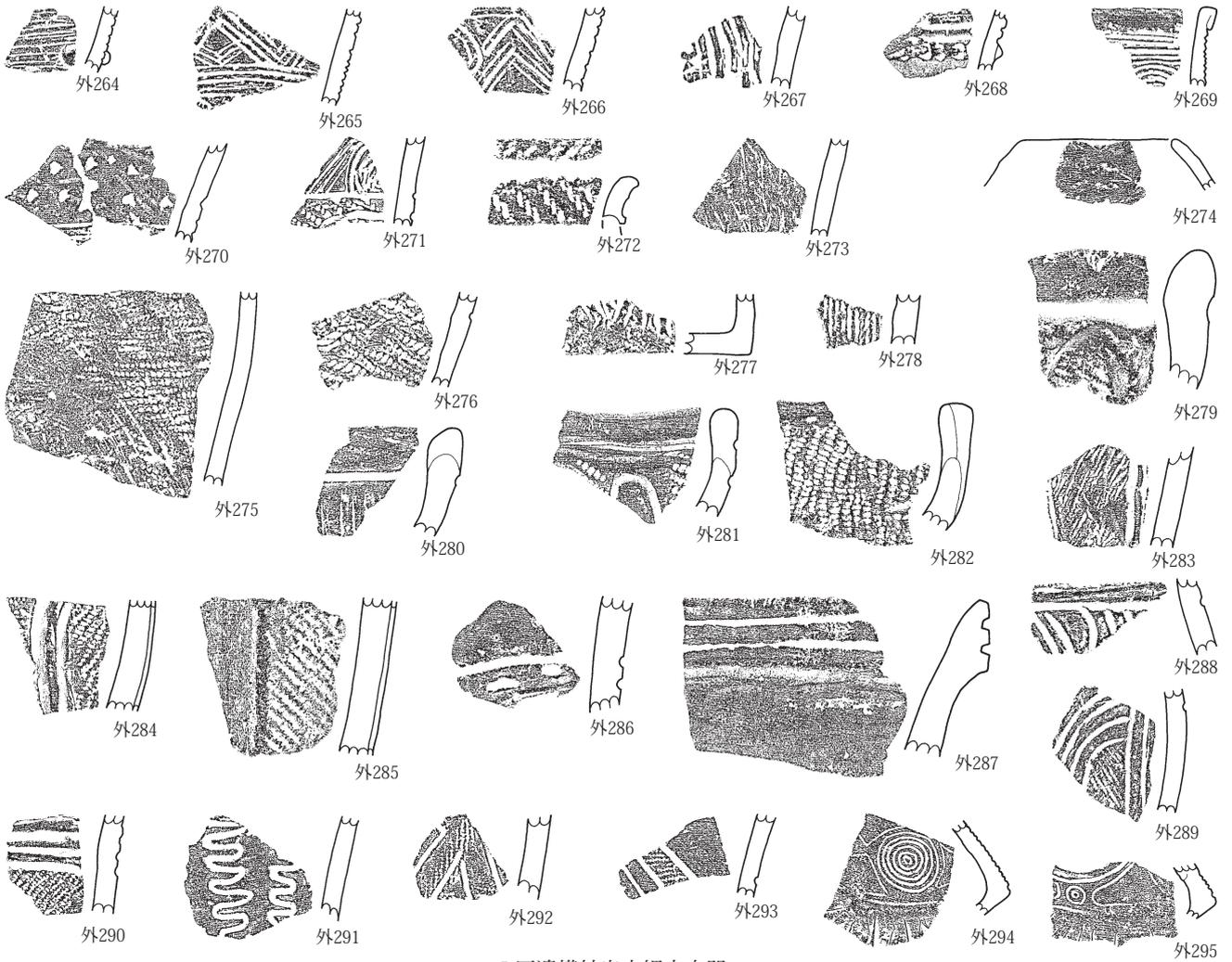
第233図 H区遺構外(2)出土縄文土器



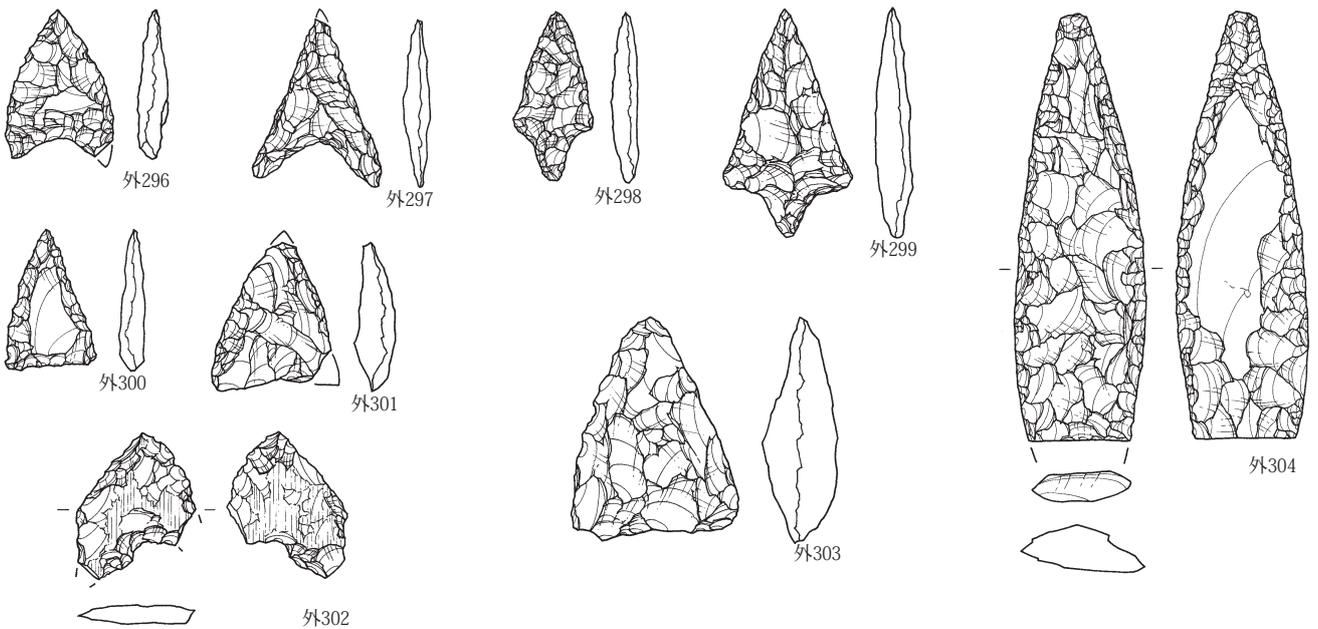
第 234 图 I 区遺構外 (1) 出土繩文土器



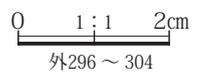
第235図 I区遺構外(2)出土縄文土器



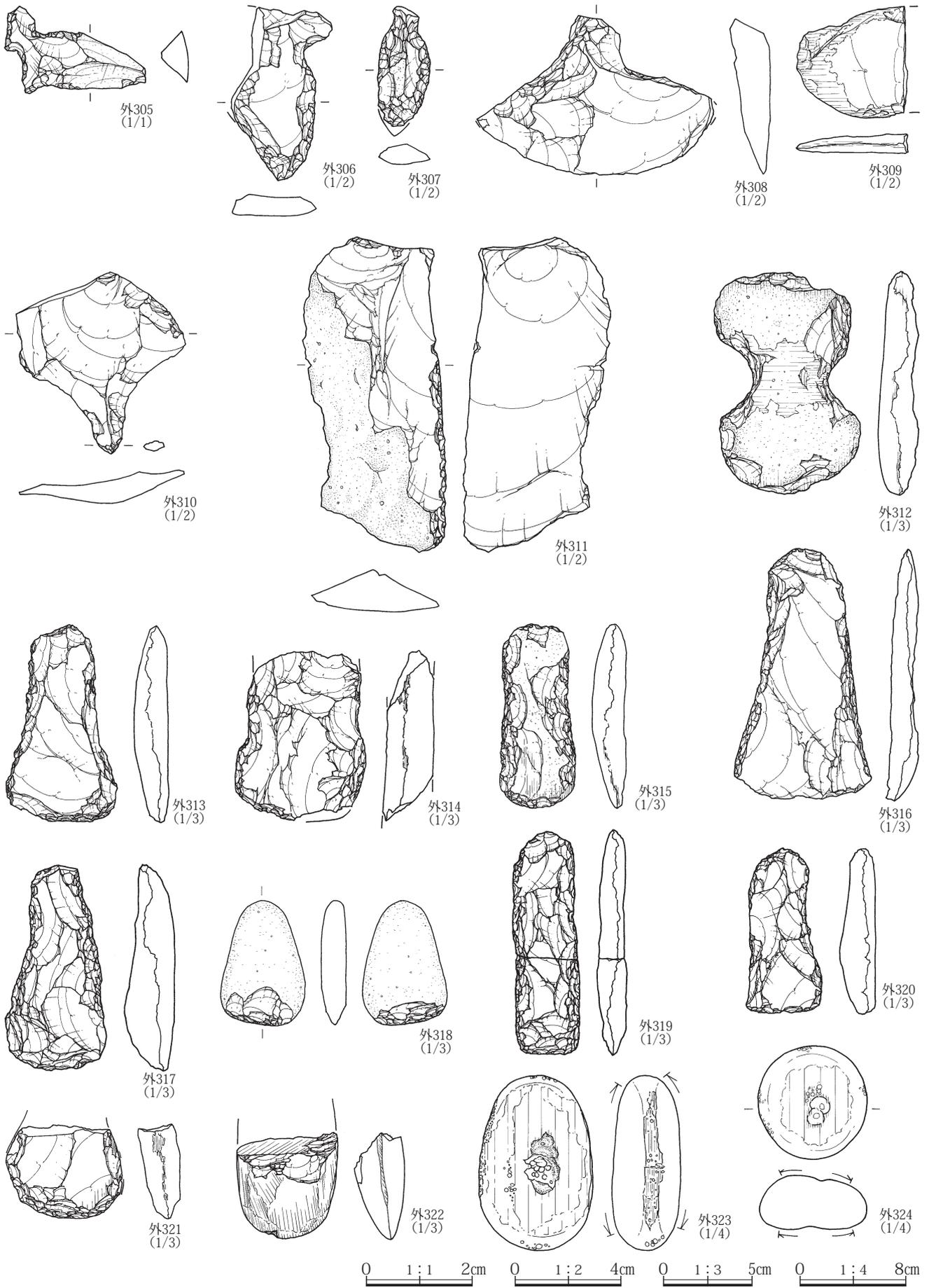
I区遺構外出土縄文土器



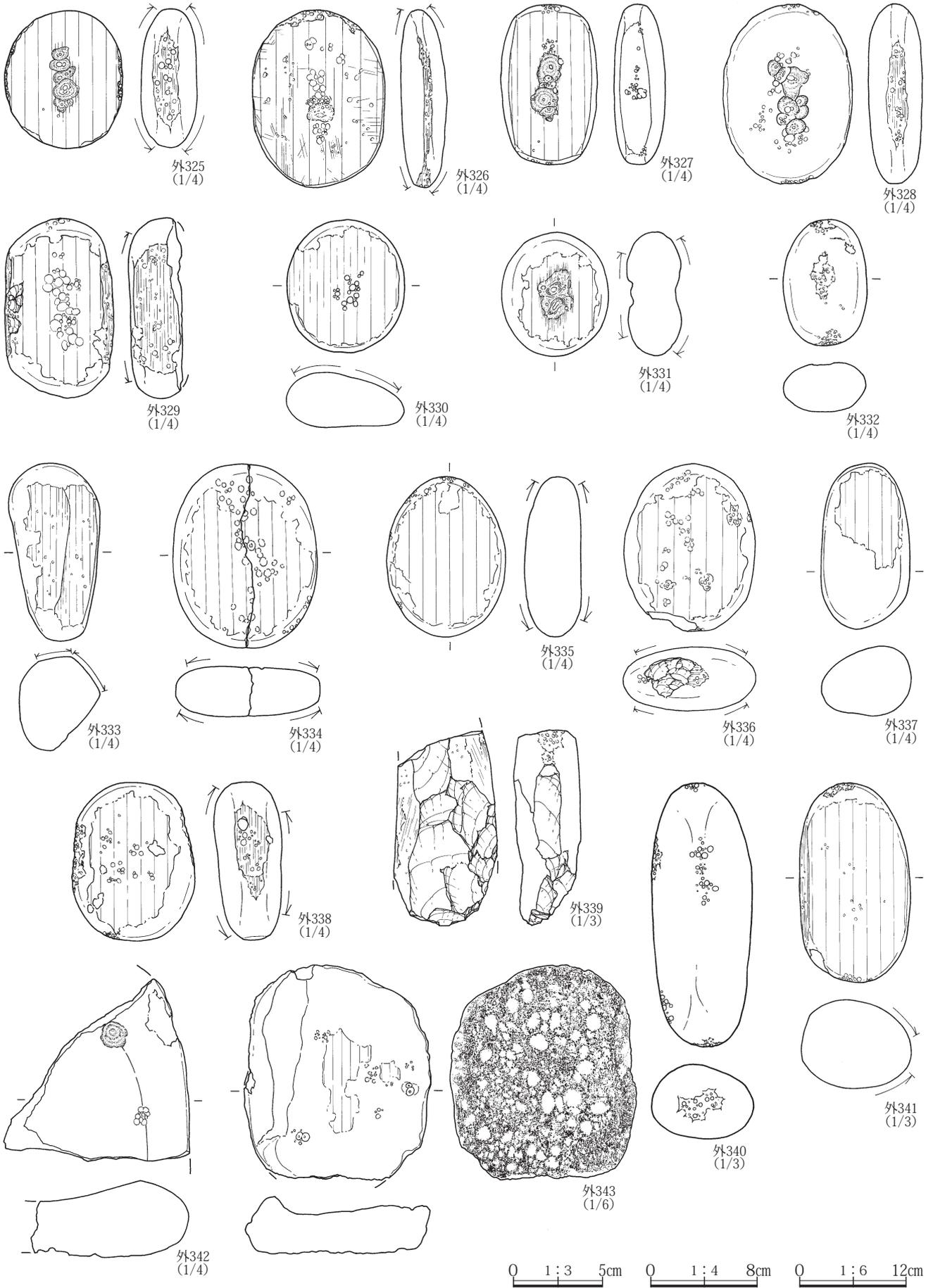
遺構外出土石器(1)



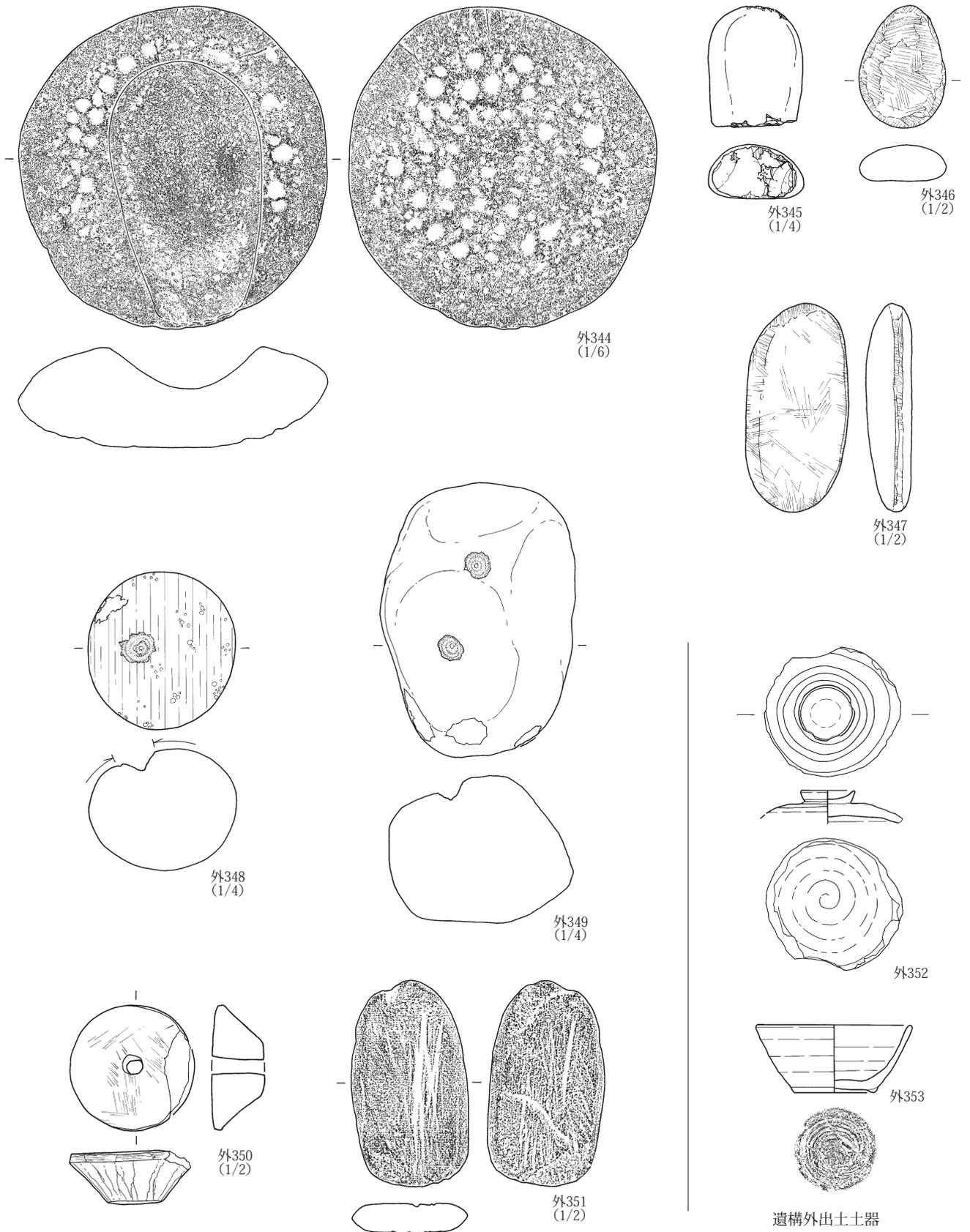
第 236 図 I区遺構外(3)出土縄文土器、遺構外出土石器(1)



第237図 遺構外出土石器(2)

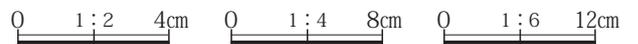


第238図 遺構外出土石器(3)



遺構外出土石器(4)

遺構外出土土器



第239図 遺構外出土石器(4)、遺構外出土土器

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的

本遺跡では、いくつかの分析・鑑定を実施し、堆積物や出土遺物の詳細を明らかにしようと試みた。ここでは、それぞれの目的と試料を採取した地点を示し、6章のまとめにつなげたい。

テフラ分析

株式会社火山灰研究所 早田 勉氏に依頼した。

堆積土層に含まれるテフラを明らかにし、土層の年代を示して、遺構・遺物の年代観に資することを目的とする。分析試料の採取位置は、第241図に示す。

人骨の鑑定

生物考古学研究所 檜崎修一郎氏に依頼した。

H区の土坑から出土した江戸時代と推定される人骨の性別・年齢・身長・病歴、その他の属性を明らかにして、骨からわかる当時の人の生活や病気、埋葬された状況を復元する資料とする。人骨の出土土坑の位置を第240図に示す。

炭化材の樹種同定

当事業団保存処理室 関 邦一補佐(総括)に依頼した。

主としてC区2・3・4住居の炭化材を観察し、竪穴住居に使われた樹木の種類の傾向を把握する資料とする。炭化物の出土状況と試料採取位置を第242図に示す。

鉄滓の分類と観察

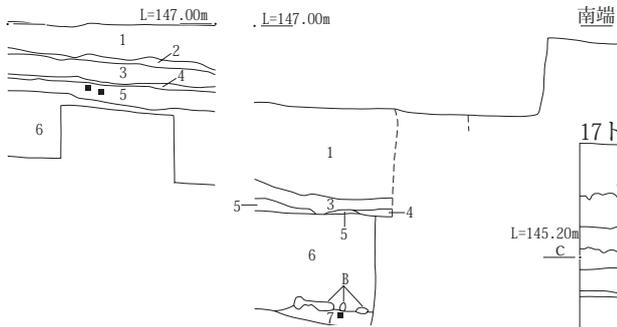
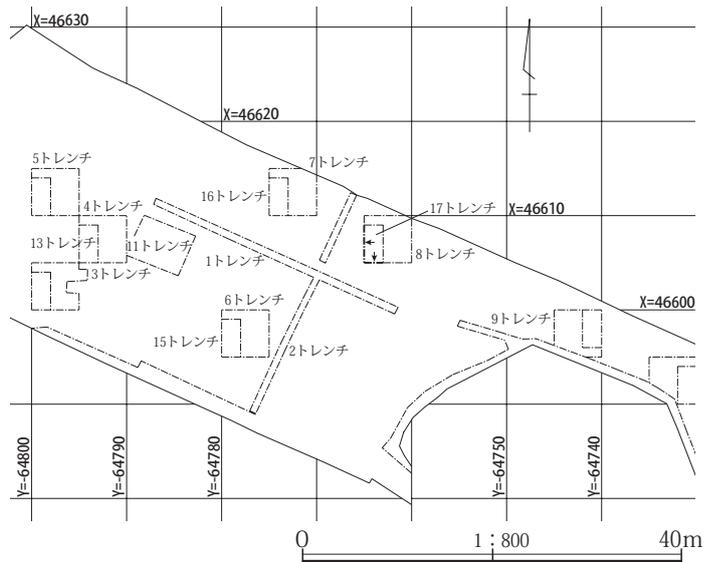
当事業団 笹澤泰史主任調査研究員に依頼した。

主としてF区から出土した鉄滓を観察し、前橋市教育委員会が芳賀住宅団地区域で調査した製鉄遺構や製鉄関連遺物と比較・検討する資料とする。鉄滓の出土遺構の位置を第243図に示す。

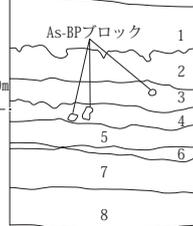


第240図 H区人骨出土土坑位置図

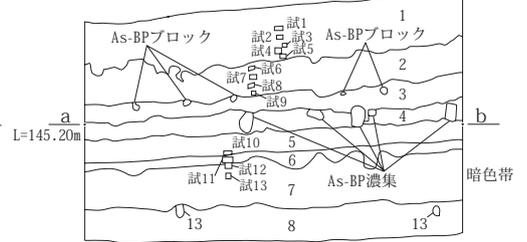
第5章 自然科学分析



17トレンチ南壁



17トレンチ西壁



C区 東西ベルト・南北ベルト

- 1 黄褐色土 崩れたロームの埋土。黒褐色土ブロック・礫が一部に混じる。粘性・締まりやや強い。工場建設後の駐車場造成土。昭和55年以降。
- 2 暗褐色土 細砂粒・黒褐色土・褐色土を層状に混入する。粘性・締まり弱い。前橋市教委調査開始から駐車場造成前までの土。発掘調査の廃土か。昭和51年以降。
- 2' 細砂層。2層の一部。
- 3 黒褐色土 白色軽石・細砂粒少。ローム粒子微量混じる。団地造成前の堆積土。ワイヤーロープ埋設溝(4溝)より新しい。
- 4 黒褐色土 白色軽石・細砂粒を少量含む。黒色土(5層)ブロック(1~3cm大)が少量混じる。粘性弱い。締まりやや弱い。4溝より古い。
- 5 黒色土 白色軽石を多く含む。粘性・締まりやや強い。近世以前(古墳~平安か)の表土。
- 6 灰黄褐色土 古墳~平安時代の遺構覆土。
- 7 明黄褐色土 地山ローム層。
- B 灰黄褐色土 黄色軽石粒(1~3mm大、As-YPか)を含む。

C区17トレンチ

- 1 灰黄褐色土 下位は2へ漸移的に変化。
- 2 明黄褐色土 1~3mm大の白色軽石を多く含む。
- 3 2に似る。白色軽石少ない。As-BPのブロックあり。
- 4 明黄褐色土 As-BPのブロックを多量、黄褐色軽石・黒色の砂粒状を含む。
- 5 4よりも色が薄い。As-BPブロックあり。黄褐色軽石を含む。
- 6 にぶい黄褐色土 5~10mm大の青灰色粒子を含む。クリーム色のブロックが斑点状に入る。
- 7 灰黄褐色土 5~15mm大の青灰色粒子を多く含む。粘質。「暗色帯」。
- 8 明黄褐色土 レンガ色粒子を多量、白色粒子を含む。締まっている。
- 13 7に似る。

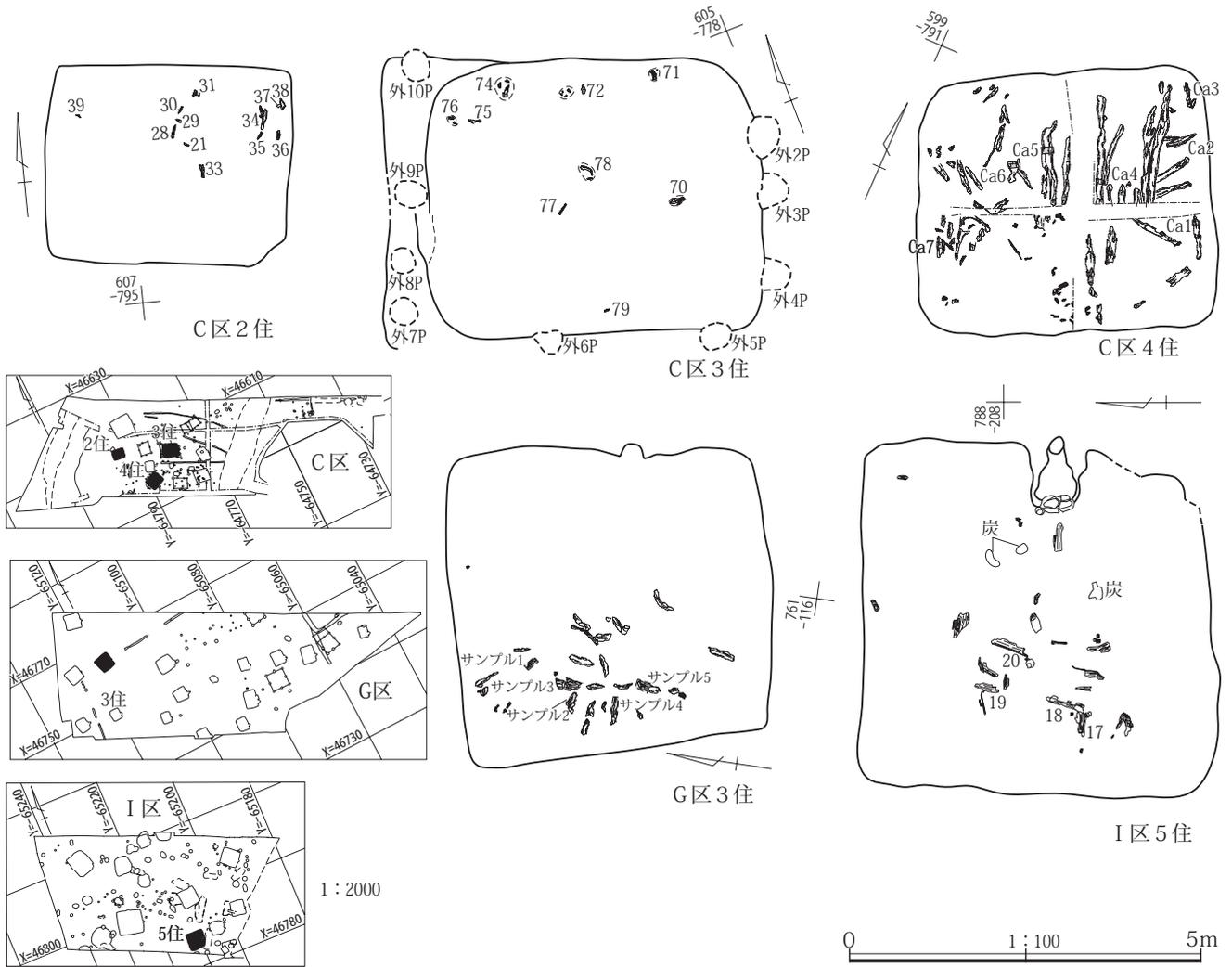


C区南北ベルト分析試料採取位置

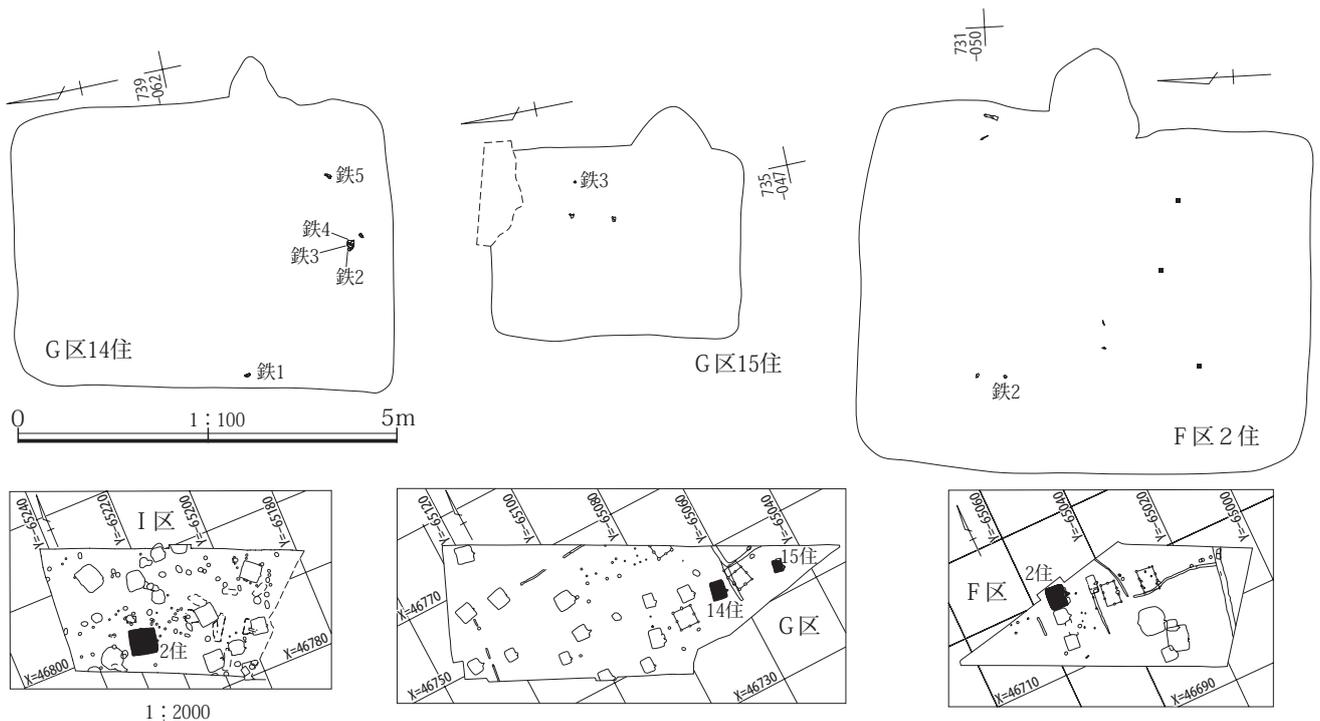


C区17トレンチ分析試料採取位置

第241図 テフラ分析試料採取位置



第242図 住居内炭化材出土状況と試料採取位置



第243図 鉄滓出土住居

第2節 テフラ分析

1. はじめに

赤城火山南麓に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ(火山^{さいせつぶつ}砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。その中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構や遺物包含層の層位や年代を知ることができる。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された芳賀東部団地遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、火山ガラス比分析やテフラ検出分析さらに屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、B区1トレンチ、B区2トレンチ、B区7トレンチ、C区南北ベルト、C区2トレンチ南端部、C区17トレンチ、D区2トレンチの7地点である。

2. 土層の層序

(1) B区1トレンチ

深掘が実施されたB区1トレンチでは、下位より若干色調が暗い褐色粘質土(層厚5cm以上)、黄色軽石層(層厚49cm、軽石の最大径58mm、石質岩片の最大径19mm、Hg-1)、若干緑灰色がかった褐色土(層厚18cm)、橙褐色軽石(最大径3mm、Hg-2)をごく少量含む褐色土(層厚19cm)、橙褐色軽石(Hg-2)を含む褐色土(層厚27cm、軽石の最大径9mm)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)を含む灰褐色土(層厚11cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径21mm)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)を含む暗灰褐色土(層厚14cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径14mm)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)混じりで若干色調が暗い灰褐色土(層厚16cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径17mm)、灰褐色土(層厚8cm)、細粒の橙色軽石(Hg-5)混じり灰褐色土(層厚15cm、軽石の最大径3mm、Hg-4)を混在：後述)、橙色軽石層(層厚4cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-6)、橙色軽石混じり褐色土(層

厚2cm、軽石の最大径3mm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-7)が認められる(第244図)。

その上位には、炭化物混じり暗灰色土(層厚7cm)が特徴的に形成されており、さらに上位には、下位より暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚7cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径3mm、Hg-8)、褐色砂質土(層厚13cm)、黄色軽石(Hg-10)を少量含む褐色土(層厚15cm、軽石の最大径4mm)、黄色軽石(Hg-10)混じり褐色土(層厚36cm、軽石の最大径21mm)、黄白色粗粒軽石(Hg-11)を多く含む灰褐色土(層厚11cm、軽石の最大径2mm)が認められる。

これらのうち、Hg-1は層相から約5万年前に榛名火山から噴出したと推定されている榛名八崎テフラ(Hr-HP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003)に同定される。Hg-6からHg-8にかけてのテフラは、層相や軽石の岩相などから、約1.9～2.4万年前^{*}に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1996, 未公表資料)の中部と考えられる。そのうち、Hg-5については、層位や岩相などから、As-BP Groupの下部、いわゆる室田軽石(MP, 森山, 1972, 早田, 1990)と推定される。さらに、Hg-12については、層位や岩相などから、約1.3～1.4万年前^{*}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

(2) B区2トレンチ

B区2トレンチでは、下位より暗灰褐色土(層厚5cm以上)、細粒の橙色軽石(Hg-5)を含む灰褐色土(層厚22cm、軽石の最大径3mm)、橙色軽石層(層厚4cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径3mm、Hg-6)、褐色砂質土(層厚2cm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-7)、橙色細粒軽石混じりで褐色がかった灰色土(層厚4cm、軽石の最大径2mm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚5cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径3mm、Hg-8)、褐色砂質土(層厚12cm)、橙色軽石層(層厚5cm、軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径2mm、Hg-9)、黄色軽石(Hg-10)を少量含

む褐色土(層厚13cm, 軽石の最大径4mm)、黄色軽石(Hg-10)を多く含む褐色土(層厚36cm, 軽石の最大径7mm)、黄色軽石を多く含む褐色土(層厚14cm, 軽石の最大径7mm, Hg-11, 桃灰色砂質細粒火山灰のブロックを含む)が認められる(第245図)。

(3) B区7トレンチ

B区7トレンチでは、As-BP Group層準の岩相をより詳しく観察できた(第246図)。ここでは、下位より細粒の橙色軽石(Hg-5)を含む灰褐色土(層厚3cm以上, 軽石の最大径3mm)、軽石を多く含む橙色軽石層(層厚3cm, 軽石の最大径9mm, 石質岩片の最大径3mm)および灰色粗粒火山灰層(層厚0.4cm, 以上Hg-6)、橙色軽石混じり灰褐色土(層厚1cm)、橙色細粒軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径3mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-7)、橙色軽石混じり暗灰色土(層厚3cm, 軽石の最大径4mm)、橙褐細粒火山灰層(層厚1.1cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径7mm, 石質岩片の最大径2mm, 以上Hg-8)、褐色砂質土(層厚5cm以上)が認められる。

(4) C区南北ベルト

C区南北ベルトでは、下位より黒色土(層厚10cm以上)、黄色軽石(Hg-12)混じり黒灰褐色土(層厚5cm, 軽石の最大径3mm)、粗粒の白色軽石(Hg-13)を少量含み黄色軽石(Hg-14)に富む黒灰褐色土(層厚8cm, 白色軽石の最大径63mm, 黄色軽石の最大径12mm)、やや色調が暗い灰褐色土(層厚3cm)、暗灰褐色土(層厚21cm)、やや色調が暗い灰褐色土(層厚5cm)、褐色盛土(層厚32cm)が認められる(第247図)。これらのうち、Hg-12については、層位や岩相などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000など)に由来すると考えられる。

(5) C区2トレンチ南端部

C区2トレンチ南端部では、下位より褐色土(層厚32cm)、黄色軽石層(層厚8cm, 軽石の最大径5mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-11)、黄色粗粒火山灰を多く含む灰褐色土(層厚12cm)、黄白色粗粒火山灰を含む暗灰褐色土(層厚39cm)、暗灰褐色土(層厚36cm)、黒灰褐色土(層厚11cm)、黄色軽石(Hg-12)混じり黒灰褐色土(層厚7cm,

軽石の最大径7mm)が認められる(第248図)。

(6) C区17トレンチ

C区17トレンチでは、下位より灰色岩片や灰白色粗粒火山灰(Hg-3)を含む暗灰褐色粘質土(層厚22cm以上, 軽石の最大径3, 石質岩片の最大径6mm)、灰褐色粘質土(層厚12cm, Hg-4を含む:後述)、黄橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-5)、褐色土(層厚15cm)、橙色軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-6)、褐色砂質土(層厚1cm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径2mm, Hg-7)、灰色砂質土(層厚6cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径3mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-8)、砂混じり褐色土(層厚8cm)、橙色軽石(Hg-9)に富む褐色土(層厚6cm, 軽石の最大径4mm)、黄色軽石(Hg-10)を少量含む褐色土(層厚18cm, 軽石の最大径7mm)、黄色軽石(Hg-10)を含む褐色土(層厚18cm, 軽石の最大径12mm)、黄色軽石(Hg-11)を含み若干灰色がかった褐色土(層厚17cm)、黄白色粗粒火山灰を含む灰褐色土(層厚23cm)、暗灰褐色土(層厚16cm)が認められる(第249図)。

(7) D区2トレンチ東壁

D区2トレンチでは、下位より橙褐色軽石(最大径4mm, Hg-2)混じり褐色土(層厚5cm以上)、灰色岩片や黄白色軽石(Hg-3)を含む暗灰褐色土(層厚31cm, 軽石の最大径2mm, 石質岩片の最大径6mm)、灰褐色土(層厚15cm)、若干色調が明るい灰色土(層厚7cm, Hg-4を含む)、橙色軽石層(層厚18cm, 軽石の最大径5mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-5)、灰褐色土(層厚11cm)、炭化物混じり灰褐色土(層厚8cm)、橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-6)、灰色がかった褐色土(層厚2cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径2mm, Hg-8)、灰褐色砂質土(層厚6cm)、炭化物混じりで若干色調が灰色がかった褐色土(層厚17cm)、橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径3mm, 石質岩片の最大径2mm, Hg-9)、褐色土(層厚6cm)、攪乱土(層厚3cm以上)が認められる(第250図)。

ここでは、Hg-7より上位で、Hg-6のすぐ下位に礫群を構成する礫が検出されている。

(8) D区2トレンチ東壁南部

D区2トレンチ東壁南部では、下位より灰褐色土(層厚2cm以上)、橙色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径4mm, 石質岩片の最大径3mm, Hg-6)、褐色砂質土(層厚1cm)、橙色細粒軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径2mm, Hg-7)、暗灰色砂質土(層厚3cm)、橙褐色細粒火山灰層(層厚0.8cm)、暗灰色石質岩片を多く含む橙色軽石層(層厚3cm, 軽石の最大径3mm, Hg-8)、灰色がかった褐色土(層厚2cm以上)が認められる(第251図)。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

C区17トレンチにおいて、ガラス質テフラの降灰層準を求めるために、可能性がある土層から基本的に5cmごとに設定採取された試料のうち8点について、火山ガラス比分析を行った。また、D区2トレンチの試料1(Hg-9)について、火山ガラス比分析と重鉍物組成分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料について10gずつを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を把握(火山ガラス比分析)。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を観察し、重鉍物の組み合わせを調べる(重鉍物組成分析)。

(2) 分析結果

C区17トレンチとD区2トレンチの試料1(Hg-10)の火山ガラス比分析の結果を第252図と第253図に、その内訳を第48表に示す。第253図には、重鉍物組成も合わせて示した。また、D区2トレンチ東壁のHg-10の重鉍物組成の内訳を第49表に示した。C区17トレンチでは、試料18に透明のバブル型ガラスの出現ピーク(8.4%)が認められる。この火山ガラスで特徴づけられ、試料18付近に降灰層準があると考えられるテフラをHg-5とする。

また、全体として、透明のバブル型ガラス以外の火山ガラスは、上方に向かってその比率が増大する傾向にある。土層断面で、細粒あるいは粗粒の黄色軽石が認められた試料14および13では、スポンジ状あるいは繊維束状

に発泡した軽石型ガラスや分厚い中間型ガラスがほぼ等量含まれている(Hg-10, 後述)。Hg-11が含まれている土層(試料7)やその上位(試料2)では、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスの比率が減少するかわりに、中間型ガラスのそれが増大する傾向が伺える。なお、重鉍物の占める比率は、試料18以下で高く、逆に試料14より上位では比較的低い傾向がある。

D区2トレンチ東壁の試料1(Hg-9)には、ほとんど火山ガラスが含まれていない。これは、含まれるテフラ粒子の風化が進んでおり、洗浄処理中に風化物が流失したことによると考えられる。わずかに認められる火山ガラスは、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスや、中間型ガラスである。一方、含まれる重鉍物は、比率が高い順に、斜方輝石(53.6%)、単斜輝石(29.2%)、磁鉄鉍(16.8%)で、いわゆる両輝石型のテフラである。

4. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

C区南北ベルトで認められた粗粒の白色軽石(試料1)の起源を明らかにするために、テフラ検出分析を実施して、その特徴の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 軽石を粉碎後、適量について超音波洗浄により洗浄。
- 2) 80°Cで恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第50表に示す。軽石には、重鉍物として斜方輝石、角閃石、磁鉄鉍が含まれている。

5. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

C区17トレンチのうち、とくに起源が不明な試料14と試料10に含まれる火山ガラス、C区南北ベルトで認められた白色軽石(試料1, Hg-13)のガラス部、そしてD区2トレンチの試料1(Hg-9)に含まれる斜方輝石について、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000)により、屈折率測定を行った。

(2)測定結果

屈折率測定の結果を第51表に示す。C区17トレンチの試料14に含まれる火山ガラス(29粒子)の屈折率(n)は、1.501-1.506である。また、試料10に含まれる火山ガラス(29粒子)の屈折率(n)は、1.497-1.503である。そのうち、鉱物に付着してより本質物質の可能性が高い火山ガラス(4粒子)については、1.501-1.503の値が得られた。C区南北ベルトの試料1に含まれる軽石(Hg-14)のガラス部(19粒子)の屈折率(n)は、1.502-1.507である。ただし、この試料に関してはさほど測定に不適で、測定精度はさほど高くない。D区2トレンチの試料1(Hg-9)に含まれる斜方輝石(49粒子)の屈折率(γ)は、1.703-1.708である。

6. 考察

C区17トレンチの試料14に含まれる火山ガラスについては、その形態や屈折率などから、浅間大窪沢第1軽石(As-Ok 1, 約1.7万年前^{*1}, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)および浅間大窪沢第2軽石(As-Ok 2, 約1.6万年前^{*1}, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996)からなる大窪沢テフラ群(As-Ok Group)に由来すると考えられる。試料10には火山ガラスの屈折率から、多くのテフラに由来する火山ガラスが混在している可能性が考えられるが、鉱物に付着したより本質的な火山ガラスについては、As-Ok Groupと考えられる。この火山ガラスで特徴づけられるテフラをHg-10とする。

なお、試料14に含まれる火山ガラスのうち、屈折率(n)が1.506に近いものについては、約1.9万年前^{*1}の浅間白糸テフラ(As-Sr, 町田ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 2003)に由来する可能性もあろう。また試料10で検出された火山ガラスのうち、屈折率が低いものの中には、ATのほか約2.0万年前^{*1}に浅間火山から噴出した可能性のある雲場火砕流堆積物(早川, 1995)に関係するらしい、浅間萩生テフラ(As-Hg, 早田, 1995, 1996)に由来する火山ガラスが検出された可能性もある。

この地点における火山ガラス比分析で、試料18付近に降灰層準があると推定されるテフラは、その層位と透明のバブル型ガラスで特徴づけられることから、約2.4~2.5万年前^{*1}に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 2003, 松本ほか,

1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995など)と考えられる。

C区南北ベルトの試料1(Hg-14)の軽石粒子は、岩相や重鉱物の組み合わせから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。現段階において、前者には粗粒の軽石の存在が周辺で確かめられているものの、Hr-FAの一次堆積層の上位にHr-FPの一次堆積層が認められた例は知られてない。したがって、現段階においては、前者の可能性がより高いように思われる。今回の軽石の屈折率の測定値については、精度が高くないことから詳しく言及できないが、Hr-FPなどには、縞状軽石があり、部位によっては、火山ガラスの屈折率が従来記載されている値と異なる可能性がある。そこで、縞状軽石について、部位ごとに屈折率を測定して、高精度の同定のための資料を収集する必要があるのかも知れない。さらに、遺跡周辺での調査分析も行う必要があろう。

D区2トレンチの試料1のテフラ層(Hg-9)については、今回測定された斜方輝石の屈折率と、テフラ・カタログのデータを比較するとAs-HgあるいはAs-Srの可能性が考えられる。しかしながら、前者については、角閃石や黒雲母が認められず、典型的な層相とかなり異なり、可能性は非常に低い。一方、後者についてもわずかに含まれるとされる角閃石は認められず、軽石の岩相などは、As-BP Groupのそれによく似ている。また、As-BP Group中部に含まれる斜方輝石の屈折率(γ : 1.700-1.709)に比較的似ており、As-BP Group中部を構成する個々のテフラによっては今回の値をもつテフラ層があることも考えられる。今後、火山ガラスの屈折率測定などを実施してさらに同定精度を向上させる必要がある。

なお、今回の斜方輝石の屈折率の値は、同定の可能性が考えられた故新井房夫群馬大学名誉教授測定によるAs-BP Group上部の斜方輝石の値(γ : 1.704-1.714, 町田・新井, 2003)とは異なる傾向にある。今後、後期旧石器のより詳細な編年のために、さらに調査分析を行って、その岩相や分布を把握する必要がある。

7. まとめ

芳賀東部団地遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より榛名八崎軽石(Hr-HP, 約5万年前, Hg-1)、年代および給源が不明の軽石(Hg-2)、榛名箱田テフラ(Hr-HA, 約3万年前^{*1})に由来すると考えられる粒子(Hg-3)、始良Tn火山灰(AT, 約2.4～2.5万年前^{*1}, Hg-4)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.9～2.4万年前^{*1})のうちの4層(Hg-5～Hg-8)、現段階では浅間白糸軽石(As-Sr, 約1.9万年前^{*1})の可能性が高いと考えられるテフラ層(Hg-9)、浅間大窪沢テフラ群(As-Ok Group, 約1.6～1.7万年前^{*1})に由来する粒子(Hg-10)、

浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3～1.4万年前^{*1}, Hg-11)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉, Hg-12)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭, Hg-13)など多くのテフラ層やテフラ粒子を検出することができた。

本遺跡で検出された礫群の層位は、このうちAs-BP Group層準(Hg-5とHg-6の間)にある。また、Hg-7とHg-8の間に特徴的に炭化物が多く含まれていることが明らかになった。

*1 放射性炭素(14C)年代。ATおよびAs-YPの較正年代については、各々約2.6～2.9万年前と約1.5～1.65万年前と考えられている(町田・新井, 2003)。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
 新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p.
 早川由紀夫(1995)浅間火山の地質見学案内. 地学雑, 104, p.561-571.
 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫(1995)南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器14C年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.
 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.
 森山昭雄(1972)榛名火山東・南麓の地形—とくに軽石流の地形について—. 愛知教育大学地理学報告, 36-37, p.107-116.
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山, 黒班～前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第48表 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	重鉱物	その他	合計
C区17トレンチ	2	0	0	0	32	6	12	50	150	250
	7	0	0	0	20	6	7	54	163	250
	10	0	0	0	11	10	7	52	170	250
	14	3	0	0	8	11	7	74	147	250
	18	21	0	0	1	4	0	126	98	250
	19	7	0	0	3	4	0	124	112	250
	20	6	0	0	0	5	1	129	109	250
	22	3	0	0	1	3	0	124	119	250
D区2トレンチ	1	0	0	0	1	6	0	79	164	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状.

第49表 重鉱物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
D区2トレンチ	1	0	134	73	0	0	42	1	250

数字は粒子数. ol:カンラン石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱, opx:斜方輝石.

第50表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の発泡形態	鉱物の量	重鉱物
C区南北ベルト	1	sp	++	opx,ho,mt

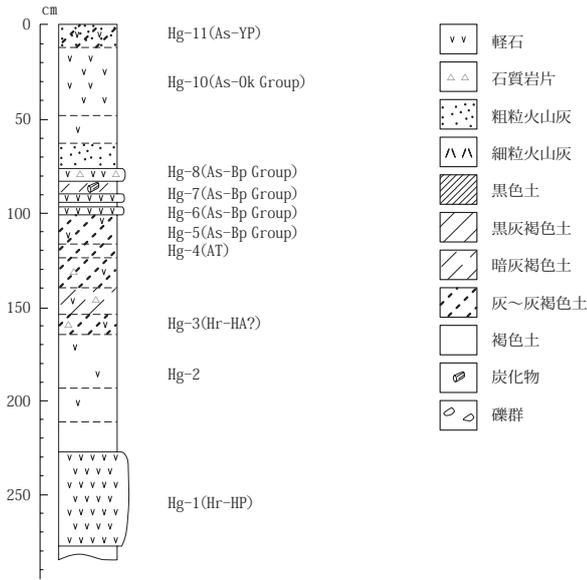
sp:スポンジ状, fb:繊維束状. ++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない.
ol:カンラン石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱, opx:斜方輝石.

第51表 屈折率測定結果

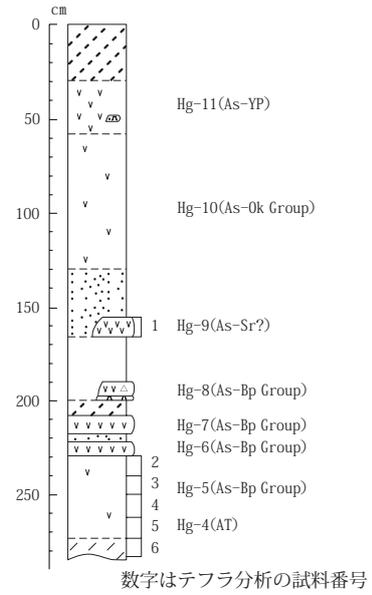
地点	試料	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)	測定粒子数
C区17トレンチ	10	1.497-1.503	-	29
C区17トレンチ	14	1.501-1.506	-	29
C区南北ベルト	1	1.502-1.507	-	19
D区2トレンチ	1	-	1.703-1.708	29

屈折率の測定は, 温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000)による.

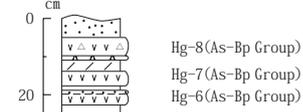
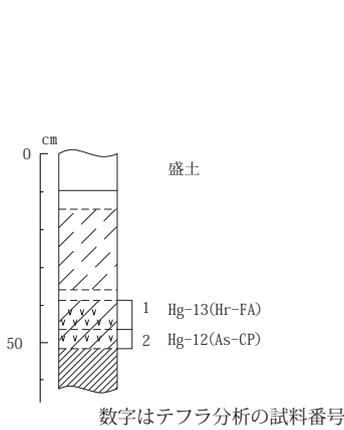
第5章 自然科学分析



第244図 B区1トレンチの土層柱状図

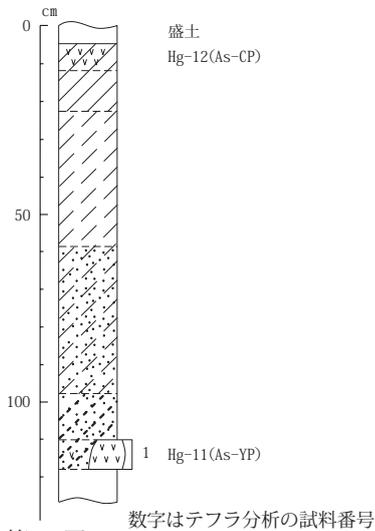


第245図 B区2トレンチの土層柱状図



数字はテフラ分析の試料番号

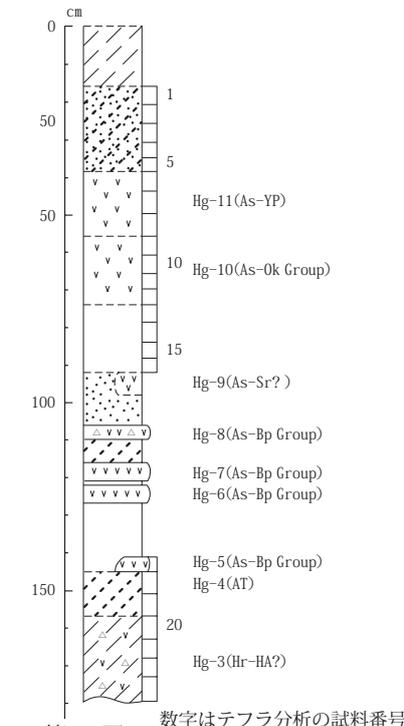
第247図 C区南北ベルトの土層柱状図



数字はテフラ分析の試料番号

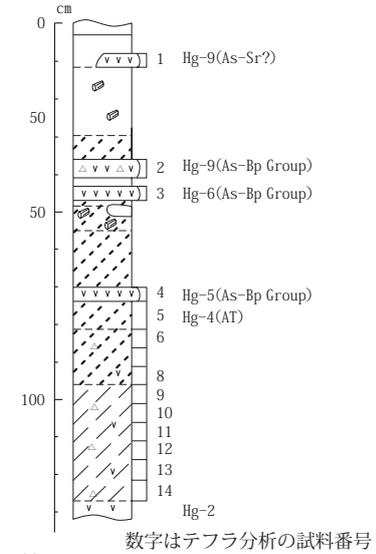
第248図 C区2トレンチ南壁の土層柱状図

第246図 B区7トレンチの土層柱状図



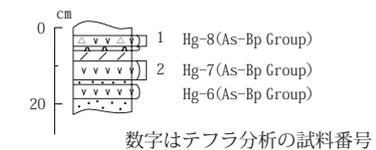
数字はテフラ分析の試料番号

第249図 C区17トレンチ南壁の土層柱状図



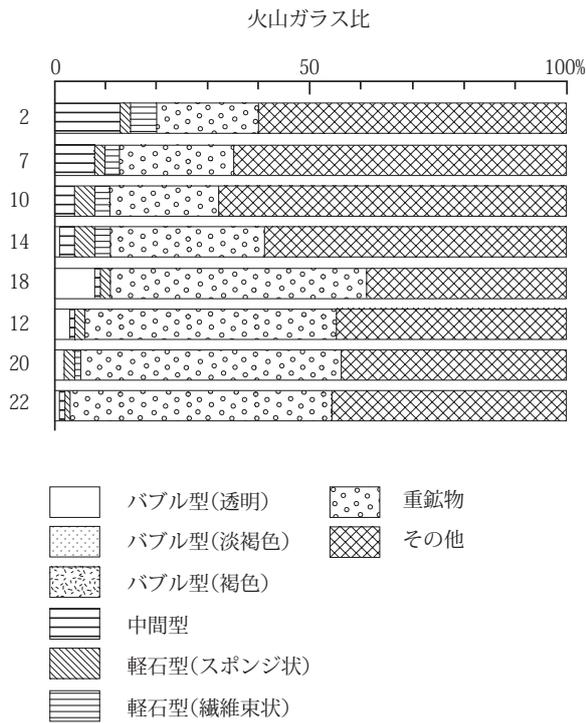
数字はテフラ分析の試料番号

第250図 D区2トレンチ東壁の土層柱状図

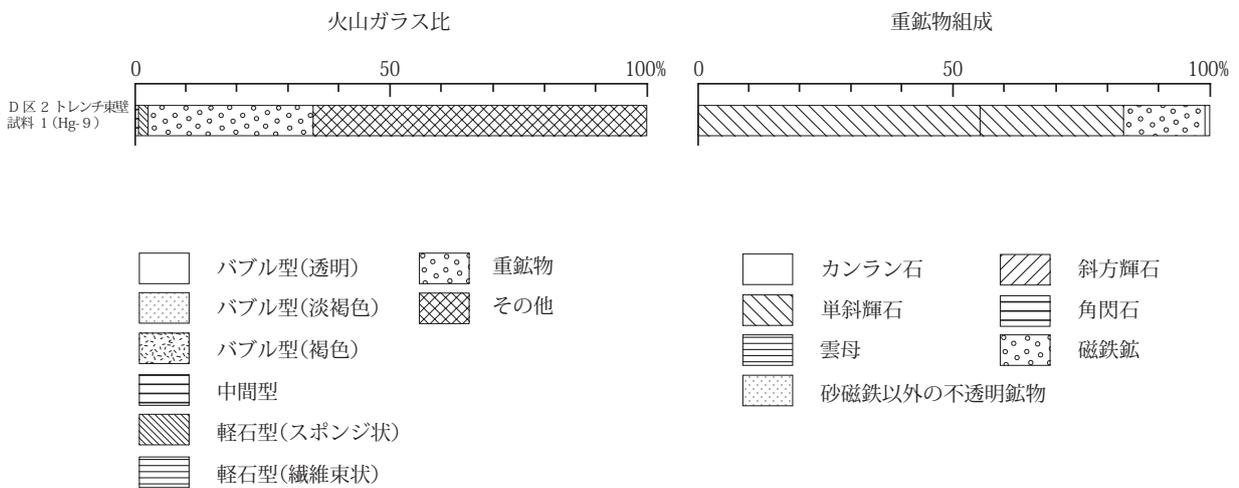


数字はテフラ分析の試料番号

第251図 D区2トレンチ東壁南部の土層柱状図



第252図 C区17トレンチの火山ガラス比ダイヤグラム



第253図 D区2トレンチ東壁試料1 (Hg-9)の火山ガラス比ダイヤグラム(重鉱物組成を含む)

第3節 芳賀東部団地遺跡出土人骨

はじめに

芳賀東部団地遺跡は、群馬県前橋市五代町及び同鳥取町に所在する。国道17号(上武道路)改築事業に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、平成19(2007)年5月から同20(2008)年9月まで実施された。本遺跡のH区より、近世墓坑12基が検出され13体の人骨が出土したので、以下に報告する。

これらの墓坑は、発掘調査着手時に引き渡されていない墓地跡であり、「元禄十二年」(1699年)・「享保四年」(1719年)・「享保十七年」(1732年)等の記年銘のある墓石が出土しているが、これらの墓石は、墓坑に直接伴っていないので詳細は不明である。

人骨は、清掃後、できる限りの接着復元を行い、観察・写真撮影・計測を行った。人骨の計測はマルティンの方法に従い(馬場 1991)、歯の計測は藤田の方法に従った(藤田 1949)。また、頭蓋骨計測値の比較は近世人は鈴木(鈴木 1967)、現代人は森田(森田 1950)を使用し、歯冠計測値の比較は近世人は松村(Matsumura 1995)、現代人は権田(権田 1959)を使用した。

なお、以下の平面図は、全体図は1/250で土坑は

1/25で示し、上が北である。

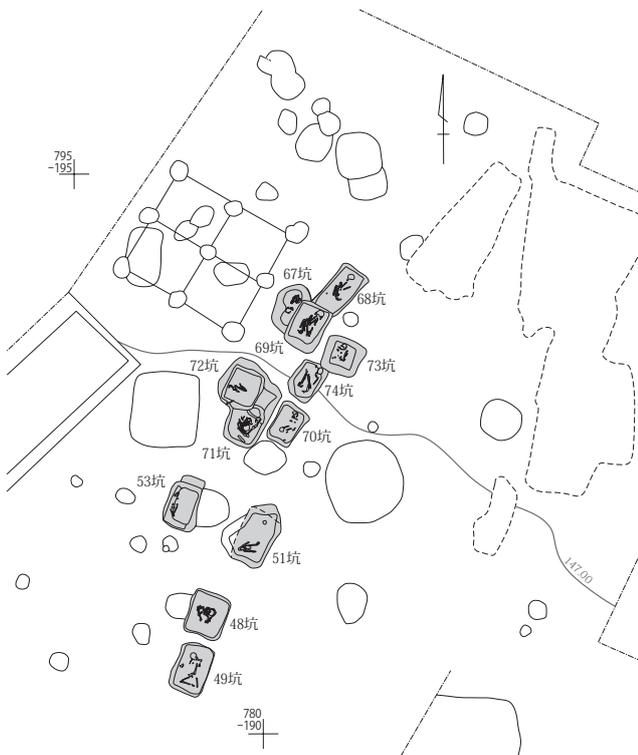
1. H区48土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)118cm・短軸107cm・深さ72cmの方形土坑から出土している。本土坑は、西側で50土坑と重複しているが、新旧関係は、本土坑の方が新しい。

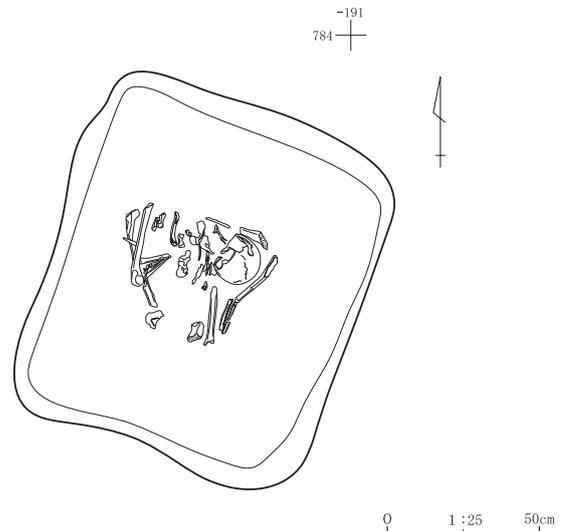
(2)人骨の出土部位：ほぼ、全身が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝11点・煙管1点・火打金1点・火打石3点が検出されている。この内、銭貨は、6点と5点に分かれそれぞれに布が付着している。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、顔



第254図 H区人骨出土土坑全体図



第255図 H区48土坑人骨出土状態



第256図 H区48土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)

面部を北側に向けた座葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：右寛骨の大坐骨切痕の角度が鋭角であるため、男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は内板は一部癒合しているが、外板はすべて開放の状態である。切歯縫合は癒合している。さらに、出土歯の咬耗度は、象牙質が点状及び線状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、約30歳代～40歳代であると推定される。

(8)被葬者の身長：左橈骨の最大長は213mmであり、被葬者の身長は、153.7cmであると推定された。北里大学の平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、近世人骨男性の平均身長は157.1cm[最大167.2cm・最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm[最大157.1cm・

最小137.6cm]である(平本 1972)。本人骨は当時の平均身長より少し低いが、変異内である。

(9)古病理：被葬者の前頭骨には前頭縫合が認められた。この前頭縫合は、生後2歳頃まで存在し、通常その後消失するが稀に成人でも残存する。前頭縫合の日本人の出現頻度は、約4.5%～7.8%である(平田 2000)。

また、上顎左右M1(第1大臼歯)は、生前脱落をしており、歯槽も閉鎖している状態である。

2. H区49土坑出土人骨

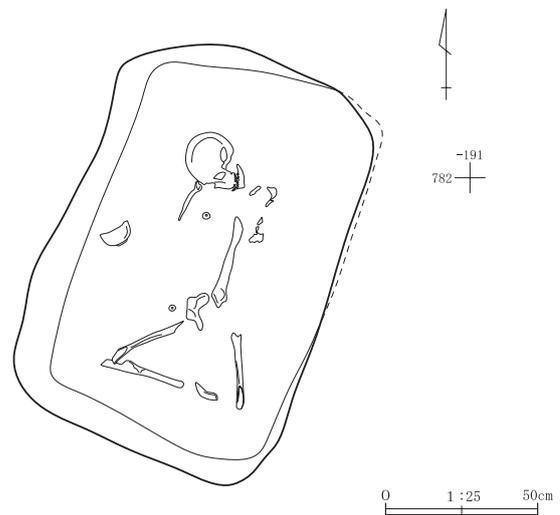
(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)137cm・短軸(東西)94cm・深さ118cmの隅丸長方形土坑から出土している。なお、本土坑には他の遺構との重複は認められない。

(2)人骨の出土部位：ほぼ、全身が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝11点が、検出されている。この銭



第257図 H区48土坑出土人骨頭蓋骨前頭縫合(上面観)



第259図 H区49土坑人骨出土状態



第258図 H区48土坑出土人骨上顎骨生前脱落(咬合面観)



第260図 H区49土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)

貨は、6点と5点に分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、被葬者は、頭位を北にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。但し、この場合、上半身はそのまま、脚部のみを「くの字」に曲げた状態である。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

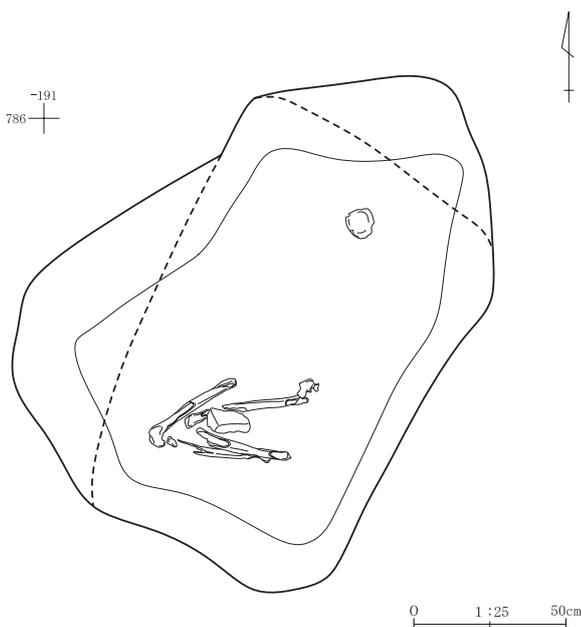
(6)被葬者の性別：頭蓋骨及び歯の計測値は、比較的小さいため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：主要縫合である、冠状縫合及び矢状縫合は、両方とも、外板は癒合していないが内板は癒合している状態である。ラムダ縫合は、外板及び内板共に癒合していない。切歯縫合は、癒合している。歯の咬耗度は、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、約30歳代から40歳代であると推定される。

(8)古病理：齲蝕(虫歯)は認められなかったが、下顎右M1(第1大臼歯)の頬側面に軽度の歯石付着が認められた。

3. H区51土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)176cm・短軸(東西)134cm・深さ97cmの隅丸長方形土坑から出土している。



第261図 H区51土坑人骨出土状態

(2)人骨の出土部位：人骨は、頭蓋骨片・四肢骨が出土している。

(3)副葬品：副葬品は、検出されていない。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、被葬者の頭位は北で、顔面部を西側に向けた横臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：四肢骨は大きく頑丈であるため、男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：死亡年齢推定となる部位が出土していないため、詳細は不明であるが、成人であると推定される。

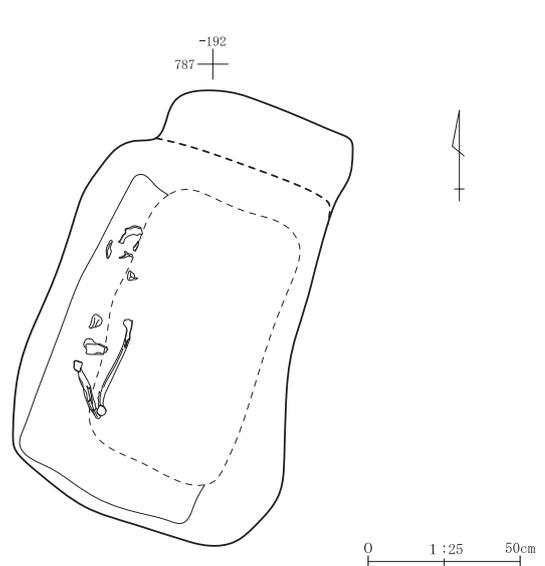
4. H区53土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：人骨は、長軸(南北)146cm・短軸(東西)93cm・深さ78cmの隅丸長方形土坑から出土している。なお、本土坑は、多くの部分で52土坑と重複している。

(2)人骨の出土部位：残存状態は、あまりよくない。人骨は、頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝1点が、検出されている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を北にした横臥屈葬で埋葬されたと推定される。



第262図 H区53土坑人骨出土状態

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：歯冠計測値が全体的に小さく、出土四肢骨も華奢で小さいため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：下顎には、少なくとも10本の歯が残存しているが、上顎はほぼ無歯顎の状態であるが臼歯部が破損している。切歯縫合は閉鎖しているため、少なくとも、30歳以上である。正中口蓋縫合も、閉鎖しかかっている状態である。下顎歯の咬耗度は、切歯部は象牙質が線状に露出するマルティンの2度の状態であるが、大白歯はエナメル質のみの1度の状態である。これは、上顎歯の生前脱落が早く起こったために、咬耗が進

まなかったと推定すると矛盾しない。総合的に、約40歳代～50歳代であると推定される。

(8)古病理：上顎は、ほぼ無歯顎の状態である。また、下顎左M1(第1大白歯)は、生前脱落した状態で歯槽も閉鎖しているが、完全ではないため、死亡した数年前に脱落したものと推定される。さらに、下顎左右M2(第2大白歯)の頬側面歯頸部に歯髄に達するC2の状態の齲蝕(虫歯)が認められた。

5. H区67土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、東側で69土坑と重複しており、新旧関係は本土坑の方が古い。人骨は、現状で、長軸(南北)129cm・短軸(東西)91cm・深さ48cmの規模の楕円形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：ほぼ全身が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝11点・釘1点が、検出されている。この内、銭貨は分かれておらず11点が一括して検出されている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を南にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。脚部の骨は、胸部にくっつくように曲げられている。

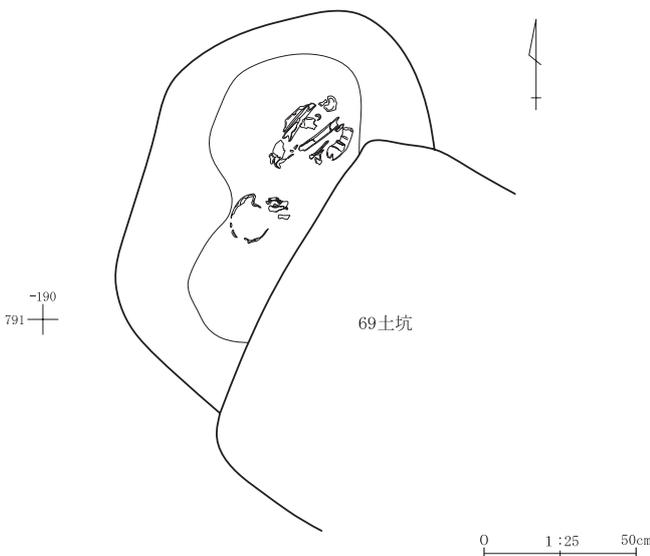
(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、個体数は1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：歯の計測値は比較的小さく、四肢骨片も華奢で小さいため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：下顎歯の咬耗度を観察すると、切歯は象牙質が線状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるが、小白歯及び大白歯はエナメル質のみの



第263図 H区53土坑出土人骨下顎骨(左M1の生前脱落)



第264図 H区67土坑人骨出土状態



第265図 H区67土坑出土人骨下顎骨(異常摩耗)

1度の状態である。約30歳代であると推定される。但し、古病理の項目で記載するように、上顎左右P1及び下顎左右P1・P2には異常磨耗が認められた。

(8)古病理：上下歯の内、上顎左右P1(第1小白歯)及び下顎左右P1・P2(第2小白歯)は、歯髄が露出するほどに異常磨耗をしている。上顎P1は舌側咬頭が、下顎P1及びP2は頬側咬頭がほぼなくなるぐらい磨耗している状態である。しかしながら、隣接する犬歯にはそのような咬耗は無いが、舌側面に咬耗が認められる。この異常磨耗の原因は不明であるが、歯ぎしりではないかと推定される。

左側頭骨には、約10mm×6mmの大きさの鼓室骨裂孔が



第266図 H区67土坑出土人骨左側頭骨(鼓室骨裂孔)

認められた。右側頭骨は破損しており確認できない。この鼓室骨裂孔は、フシュケ[Huscheke]孔とも呼ばれるものであるが、外耳道下壁に認められる孔で、成長途上に生じた化骨不全と考えられており、日本人では約35.8%の頭蓋骨の約26.0%の一側に認められる(平田 2000)。

6. H区68土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、南部で69土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が古い。現状で、長軸(南北)135cm・短軸(東西)78cm・深さ86cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。

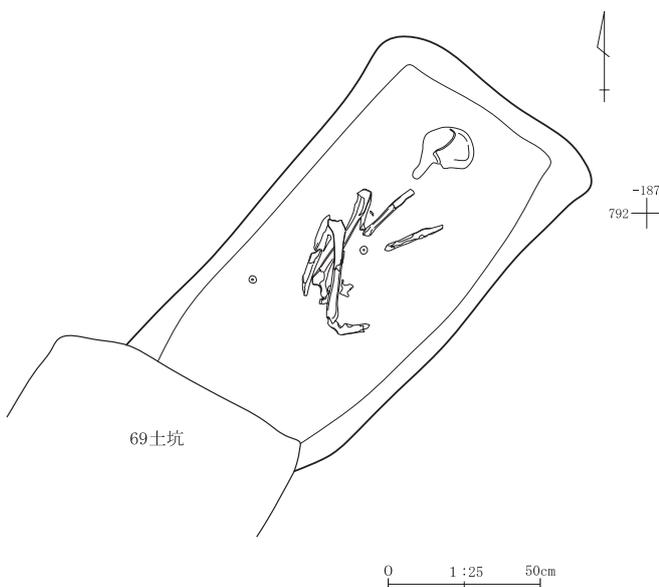
(2)人骨の出土部位：頭蓋骨片及び四肢骨が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝8点・念仏銭1点が、検出されている。この内、寛永通宝は、3点と5点に分かれている。

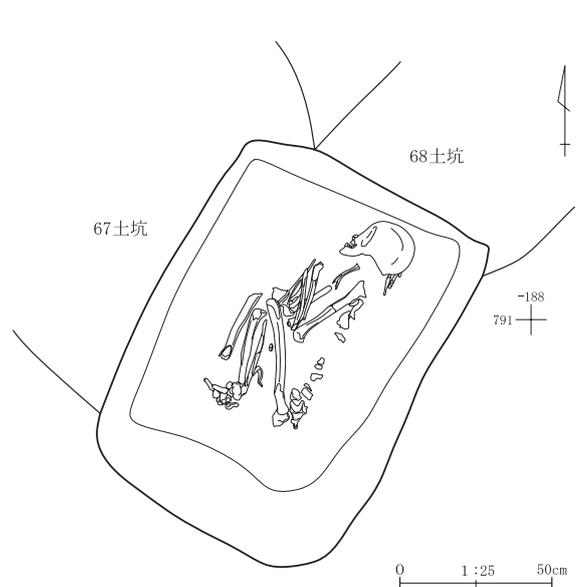
(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を北にして顔面部を西に向けた仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：出土四肢骨は、華奢で小さい。右寛骨の大坐骨切痕の角度は鈍角で約90度に近いため、女性であると推定される。



第267図 H区68土坑人骨出土状態



第268図 H区69土坑人骨出土状態

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合は、外板及び内板共にすべて癒合している状態である。遊離歯は検出されなかったが、一部残存している下顎骨を観察すると、多くの歯が生前脱落した状態である。但し、上顎骨は検出されていない。総合的に、被葬者の死亡年齢は老齢であると推定される。

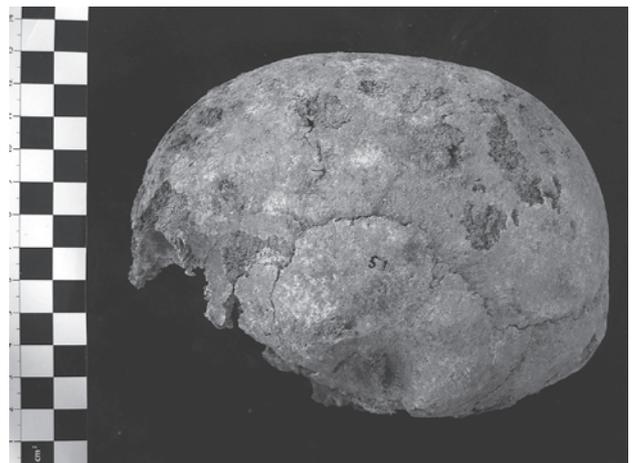
7. H区69土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、北側で68土坑とまた西側で67土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が新しい。人骨は、長軸(南北)128cm・短軸(東西)95cm・深さ137cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。

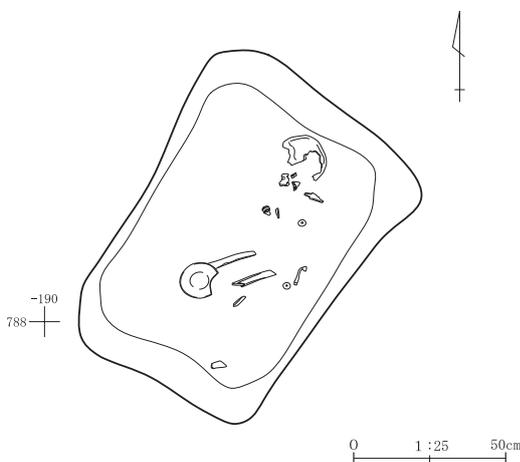
(2)人骨の出土部位：ほぼ全身が、出土している。



第269図 H区69土坑出土人骨頭蓋骨(右側面観)



第271図 H区70土坑出土人骨頭蓋骨(左側面観)



第270図 H区70土坑人骨出土状態



第272図 H区70土坑出土人骨下顎骨(左M3の遠心捻転)

(3)副葬品：寛永通宝17点・煙管1点・火打金1点が、検出されている。この内、銭貨は、11点と6点に分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位を北にして顔面部を西に向け右側を下にした横臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：右寛骨の大坐骨切痕部の角度が鋭角であるため、男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は外板及び内板共に癒合していない状態である。切歯縫合は癒合している。歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線上及び面状に露出する程度のマルティンの3度の状態である。総合的に、約30歳

代から約40歳代であると推定される。

(8)古病理：下顎左M2(第2大臼歯)には、象牙質齲蝕のC2段階の咬合面齲蝕(虫歯)が認められた。

8. H区70土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：長軸(南北)108cm・短軸(東西)78cm・深さ60cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。

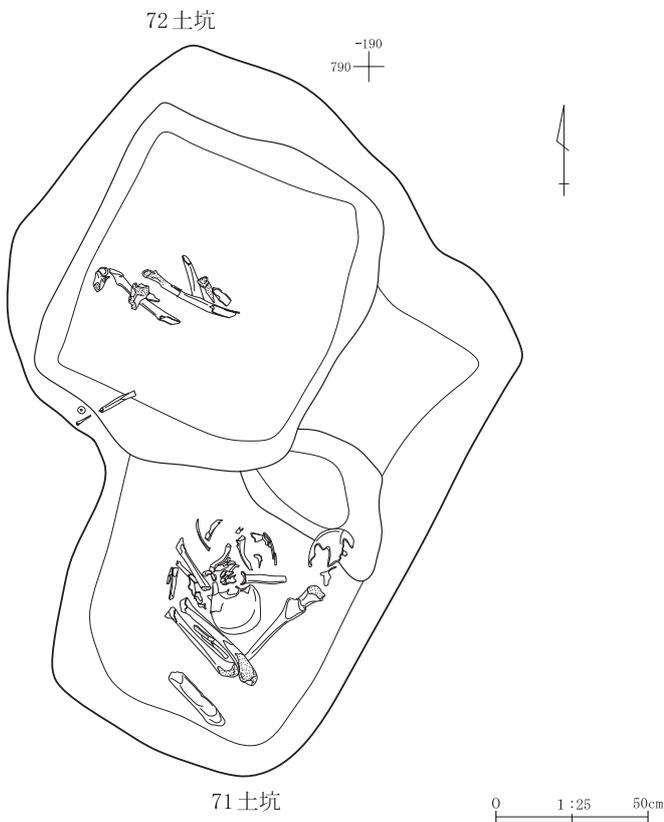
(2)人骨の出土部位：頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝1点・不読銭貨10点・煙管1点・火打金1点が、検出されている。この内、不読銭貨は、5点ずつに分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位は北で顔面部を東に向けた横臥屈葬で埋葬されたと推定される

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：頭蓋骨片の骨壁は薄く四肢骨が小さく華奢であるため、女性であると推定される。



第273図 H区71・72土坑人骨出土状態

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合は、外板及び内板共に癒合している。ラムダ縫合は、外板は癒合しておらず内板は一部癒合している状態である。歯の咬耗度は、象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、約40歳代であると推定される。

(8)古病理：上顎右及び下顎左M3(第3大臼歯)の近心面に、歯髓に達するC3の齲蝕(虫歯)が認められた。また、下顎左M3は、90度遠心捻転した状態である。

9. H区71土坑出土人骨

71土坑からは、ほぼ全身が出土している71土坑・1人骨と、頭蓋骨のみの71土坑・2人骨の2体が出土している。

H区71土坑出土人骨・1

(1)人骨の出土状況：本土坑は、北東部で72土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が古い。長軸(南北)196cm・短軸(東西)103cm・深さ60cmの長方形土坑のように見えるが、一辺約1mの方形土坑が2基並んでいたものと推定される。この内、北部のものが71土坑・2の本来の土坑であると推定される。

(2)人骨の出土部位：ほぼ全身が、出土している。

(3)副葬品：寛永通宝9点・永楽通宝1点・不読銭貨5点・煙管1点・火打金1点が、検出されている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、座葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。



第274図 H区71土坑出土人骨1頭蓋骨(左側面観)

(6)被葬者の性別：左右寛骨の大坐骨切痕の角度が鋭角であるため、男性であると推定される。頭蓋骨及び歯の計測値も大きく、四肢骨も大きく頑丈である。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は、外板及び内板共に癒合していない状態である。切歯縫合は、癒合している。歯の咬耗度は、下顎切歯及び犬歯が象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるが、他の歯はエナメル質のみの1度の状態である。総合的に、約30歳代であると推定される。

(8)古病理：歯石の付着及び齲蝕(虫歯)は、認められなかった。

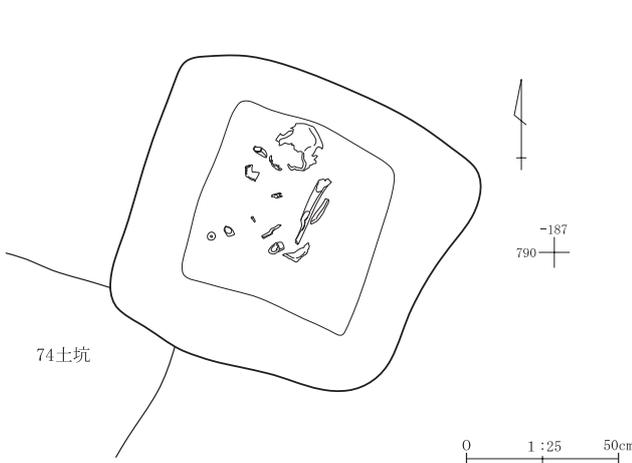
(9)特徴：上顎は、歯槽性突顎である。

H区71土坑出土人骨・2

(1)人骨の出土状況：本人骨は、71土坑の北部にある土



第275図 H区71土坑出土人骨2 頭蓋骨(右側面観)



第276図 H区73土坑人骨出土状態

坑の掘り残しであると推定される。

(2)人骨の出土部位：顔面部を欠く頭蓋冠のみである。

(3)副葬品：検出されていない。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：不明である。

(5)被葬者の個体数：頭蓋冠1点のみであるので、1個体である。

(6)被葬者の性別：頭蓋骨の骨壁は比較的薄く、乳様突起も小さいため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は、内板は癒合しているが、外板は癒合していない状態である。恐らく、約40歳代であると推定される。

10. H区72土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、南東部で71土坑と重複している。新旧関係は、本土坑の方が新しい。人骨は、長軸(南北)136cm・短軸(東西)112cm・深さ73cmの方形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：四肢骨片が出土している。

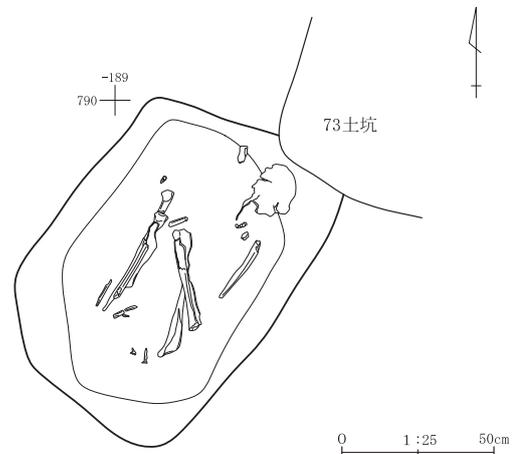
(3)副葬品：寛永通宝2点が、検出されている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：頭位は不明である。

(5)被葬者の個体数：出土四肢骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：出土四肢骨は小さく華奢であるため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：死亡年齢推定の指標となる部位



第277図 H区74土坑人骨出土状態

が出土していないが、成人であると推定される。

11. H区73土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：人骨は、一辺約100cm・深さ133cmの方形土坑から出土している。本土坑は南西部で74土坑と重複する。新旧関係は本土坑の方が新しい。

(2)人骨の出土部位：頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。

(3)副葬品：寛永通宝6点・不読銭貨12点・火打金1点が、検出されている。銭貨は、6点と12点に分かれている。

(4)被葬者の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、坐葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：出土四肢骨は小さく華奢であるため、女性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：死亡年齢推定の指標となる部位が出土していないが、成人であると推定される。

12. H区74土坑出土人骨

(1)人骨の出土状況：本土坑は、北部で一部73土坑と重複している。人骨は、長軸(南北)112cm・短軸(東西)77cm・深さ47cmの隅丸長方形土坑から出土している。

(2)人骨の出土部位：ほぼ全身が、出土している。

(3)副葬品：寛永通宝11点・煙管1点・火打金1点・火打石1点・釘5点が、検出されている。銭貨11点は、まとめて検出されている。

(4)人骨の頭位・埋葬状態：人骨の出土位置から、頭位は北で、仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(5)被葬者の個体数：出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者は1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別：左右寛骨の大坐骨切痕部の角度は鋭角であるため、男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢：頭蓋骨の縫合は、外板及び内板共に癒合している。出土下顎歯の咬耗度は、象牙質が面状に露出する程度のマルティンの3度の状態であるので、約40歳代から50歳代であると推定される。

まとめ

芳賀東部工業団地遺跡群のH区の12基の土坑から、13

体の近世人骨が出土した。この13体のいずれも成人であるが、男性5体・女性8体が出土しており、性比に偏りが見られる。

群馬県内出土近世墓で、10体以上の人骨が出土している、見立峯遺跡Ⅱ・生品西浦遺跡・上ノ平Ⅰ遺跡・羅漢町遺跡を比較検討してみる。

見立峯遺跡Ⅱでは15体出土しており、男性7体[子供3体]・女性6体[子供1体]・性別不明2体であり、性比はほぼ同じである(榎崎 2003)。生品西浦遺跡では16体出土しており、男性8体・女性6体・性別不明2体[子供1体]であり、大きな性比の偏りはない(榎崎 2005)。上ノ平Ⅰ遺跡では16体出土しており、男性10体・女性5体[子供1体]・性別不明1体であり、男性の方が女性の2倍出土している(榎崎 2008)。羅漢町遺跡では29体出土しており、男性15体[子供1体]・女性14体であり、性比はほぼ同じである(榎崎 2011)。

これらの4遺跡出土人骨の性比を見ると、性比はほぼ同じか男性の方が多くかつ未成年が含まれる。その点で、本遺跡は女性の方が多くかつ未成年が出土していない点で、他の群馬県内近世遺跡とは異なっており、興味深い。

引用文献[著者名のアルファベット順]

- 馬場悠男 1991 『人類学講座別巻1. 人体計測法、Ⅱ. 人骨計測法』、雄山閣出版
- 藤田恒太郎 1949 歯の計測基準について、「人類学雑誌」、61：1-6.
- 権田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67：151-163.
- 平本嘉助 1972 縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化、「人類学雑誌」、80：221-236.
- 平田和明 2000 「骨」、『日本人のからだ』(佐藤達夫・秋田恵一編)、東京大学出版会
- MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum
- 榎崎修一郎 2003 「見立峯遺跡Ⅱ出土人骨」、『見立峯遺跡Ⅱ・滝沢日向堀遺跡』、赤城村教育委員会、p.257-277.
- 榎崎修一郎 2005 「生品西浦遺跡出土人骨」、『生品西浦遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.178-208.

榑崎修一郎 2008 「上ノ平 I 遺跡出土人骨」、『上ノ平 I 遺跡 (1)』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.151-180.

榑崎修一郎 2011 「羅漢町遺跡出土人骨」、『羅漢町遺跡』、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.15-18.

鈴木 尚 1967 「V. 頭骨」、『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』(鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行編)、東京大学出版会、p.121-274.

第52表 芳賀東部団地遺跡出土人骨まとめ

	土坑番号	個体数	性別	死亡年齢	身長	備考
1	48土坑	1個体	男性	約30歳代～40歳代	153.7cm	前頭縫合・生前脱落
2	49土坑	1個体	女性	約30歳代～40歳代	—	歯石付着
3	51土坑	1個体	男性	成人	—	—
4	53土坑	1個体	女性	約40歳代～50歳代	—	齲蝕・生前脱落
5	67土坑	1個体	女性	約30歳代	—	異常磨耗・鼓室骨裂孔
6	68土坑	1個体	女性	老齡	—	—
7	69土坑	1個体	男性	約30歳代～約40歳代	—	齲蝕
8	70土坑	1個体	女性	約40歳代	—	齲蝕・遠心捻転
9	71土坑	1個体	男性	約30歳代	—	歯槽性突顎
10			女性	約40歳代	—	—
11	72土坑	1個体	女性	成人	—	—
12	73土坑	1個体	女性	成人	—	—
13	74土坑	1個体	男性	約40歳代～50歳代	—	—

第5章 自然科学分析

第53表 芳賀東部団地遺跡出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表

計測項目 (Martin'sNo.)	芳賀東部工業団地遺跡群				近世人骨*		現代人**	
	48土坑	49土坑	69土坑	71土坑-1	♂	♀	♂	♀
1 脳頭蓋最大長	175mm	165mm	185mm	177mm	181.9mm	175.4mm	178.9mm	170.8mm
8 脳頭蓋最大幅	—	131mm	145mm	148mm	139.8mm	136.8mm	140.3mm	135.9mm
8:1 頭蓋長幅示数	—	79.4(中頭)	78.4(中頭)	83.6(短頭)	76.9(中頭)	78.1(中頭)	78.5(中頭)	79.7(中頭)
17 バジオン・プレグマ高	—	125mm	136mm	133mm	137.5mm	133.3mm	138.1mm	132.5mm
17:1 頭蓋長高示数	—	75.8(高頭)	73.5(中頭)	75.1(高頭)	75.6(高頭)	75.8(高頭)	77.3(高頭)	77.7(高頭)
17:8 頭蓋幅高示数	—	95.4(中頭)	93.8(中頭)	89.9(平頭)	98.6(狭頭)	97.5(中頭)	98.6(狭頭)	97.7(中頭)
1+8+17/3 脳頭蓋モズルス	—	140.3	155.3	152.7	153.1	148.7	—	146.8
9 最小前頭幅	87mm	—	88mm	97mm	94.5mm	91.8mm	93.2mm	91.0mm
10 最大前頭幅	—	—	112mm	—	117.4mm	114.0mm	115.9mm	113.7mm
9:10 横前頭示数	—	—	80.0	—	80.8	80.5	80.5	81.5
9:8 横前頭頂示数	—	—	60.7(狭前頭)	65.5(狭前頭)	67.7(中前頭)	67.0(中前頭)	66.4(中前頭)	66.9(中前頭)
12 最大後頭幅	99mm	100mm	112mm	111mm	109.9mm	105.8mm	108.4mm	104.2mm
12:8 横頭頂後頭示数	—	76.3	—	—	78.6	76.6	77.3	76.8
25 正中矢状弧長	—	329mm	—	—	373.4mm	361.1mm	371.7mm	357.6mm
26 正中前頭弧長	120mm	103mm	130mm	125mm	126.7mm	123.7mm	127.4mm	122.1mm
27 正中頭頂弧長	120mm	118mm	123mm	128mm	127.7mm	123.9mm	125.1mm	121.0mm
28 正中後頭弧長	—	108mm	120mm	—	119.2mm	113.0mm	119.1mm	114.3mm
27:26 矢状前頭頂示数	100.0	114.6	94.6	102.4	101.1	100.7	98.6	98.9
28:26 矢状前頭後頭示数	—	104.9	92.3	—	94.2	91.4	93.6	93.9
28:27 矢状頭頂後頭示数	—	91.5	97.6	—	93.3	91.2	95.4	95.4
26:25 前頭矢状弧長示数	—	31.3	—	—	33.9	34.3	34.3	34.2
27:25 頭頂矢状弧長示数	—	35.9	—	—	34.2	34.3	33.7	33.8
28:25 後頭矢状弧長示数	—	32.8	—	—	31.9	31.3	32	32
29 正中前頭弦長	106mm	102mm	114mm	108mm	111.4mm	108.7mm	111.8mm	106.5mm
30 正中頭頂弦長	108mm	105mm	112mm	113mm	114.6mm	111.2mm	111.8mm	108.6mm
31 正中後頭弦長	—	86mm	102mm	—	99.1mm	96.8mm	100.4mm	97.0mm
29:26 矢状前頭彎曲示数	—	99.0	87.7	86.4	87.9	87.9	87.9	87.4
30:27 矢状頭頂彎曲示数	—	89.0	91.1	88.3	89.7	89.7	89.3	89.8
31:28 矢状後頭彎曲示数	—	79.6	85.0	—	85.7	85.7	84.5	84.9
47 顔高	120mm	—	120mm	122mm	118.0mm	—	123.8mm	115.0mm
48 上顔高	70mm	—	68mm	69mm	66.2mm	66.6mm	70.7mm	67.1mm
50 前眼窩間幅	—	—	—	21mm	18.6mm	17.1mm	17.8mm	17.4mm
54 鼻幅	23mm	—	26mm	27mm	26.2mm	25.1mm	25.0mm	24.5mm
55 鼻高	52mm	—	51mm	49mm	52.5mm	49.5mm	52.0mm	49.0mm
54:55 鼻示数	44.2(狭鼻)	—	60.0(過広鼻)	55.1(広鼻)	49.9(中鼻)	50.9(中鼻)	48.4(中鼻)	50.2(中鼻)
61 上顎槽突起幅	59mm	—	59mm	64mm	66.5mm	64.8mm	65.8mm	61.7mm
62 口蓋長	46mm	—	47mm	46mm	44.8mm	44.0mm	44.0mm	42.7mm
67 前下顎幅	45mm	—	47mm	48mm	47.8mm	32.5mm	—	—
69 頤高	35mm	30mm	34mm	37mm	34.5mm	32.5mm	36.1mm	33.2mm
70 下顎枝高(右)	52mm	52mm	—	63mm	—	—	—	—
70 下顎枝高(左)	—	—	—	—	68.2mm	58.3mm	62.6mm	57.6mm
71 下顎枝幅(右)	38.5mm	33mm	34mm	38mm	—	—	—	—
71 下顎枝幅(左)	—	—	—	—	35.4mm	31.1mm	33.1mm	31.1mm
71:70 (右) 下顎枝示数	—	—	—	60.3	—	—	—	—
71:70 (左) 下顎枝示数	—	—	—	—	52	51.3	53.1	54.1

註1:「*」は、鈴木(1967)より引用。

註2:「**」は、森田(1950)より引用。

第4節 芳賀東部団地遺跡出土炭化物について

1 試料について

発掘調査時にサンプルとして取り上げられていた炭化物49点について、その樹種等の調査を行った。炭化物サンプルは、炭破片として一括して取り上げ、または周りの土ごとブロック状に取り上げられていた。その中から試料を抽出し実体顕微鏡を使用して観察し同定を行った。同一No.のサンプルより異なる樹種が検出された場合は、試料を複数抽出して同定を行ったため同定した総点数は50点となった。各試料の同定結果が第55表である。

2 観察所見と同定結果

観察したサンプルはC区2号住居14点・3号住居10点(11試料を抽出)・4号住居7点、E区6号住居4点、G区3号住居5点、I区5号住居5点、I区8号住居2点、I区1号竪穴状遺構1点、B区20号土坑1点の計49点(50試料)である。

C区2号住居は4世紀後半の住居でサンプル14点のすべてがクヌギ節の材である。材の形状としては直径3～35cmの丸木が3点・大径木の破片が3点見られたが他は小破片であり用途の特定等は困難である。C区3号住居も4世紀後半の住居でサンプル10点より11試料を抽出した。9点がクヌギ節でこのうち7点は大径木の材であるが小破片であり用途等は特定できない。小破片1点が散孔材。またNo.73のクヌギ節の材の中からイネ科植物程で節を含むカヤ材の破片とみられる1点を抽出した。C区4号住居は4世紀中頃の住居で7点すべてがクヌギ節で、このうち6点は大径木の破片で1点は小破片で径は

不明である。いずれも破片のため用途等は特定できない。E区6号住居は9世紀中頃の住居で、4点中1点がクヌギ節の小丸木で半裁状に残るが、一方の端部に切断の痕跡が斜めに2か所カットされた痕が残る。他の3点は広葉樹の微小破片で樹種は特定できなかった。G区3号住居は6世紀前半の住居で炭化材のうち一部をサンプルとして取り上げている。このサンプル5点のすべてがクヌギ節の材で、大径木破片3点のほかは割材状の破片および径10cmの材の小破片である。I区5号住居も6世紀前半の住居で、5点すべてがクヌギ節の材で径5cmの丸木1点のほかは全体に小破片で、形状・用途は不明である。I区8号住居は6世紀後半の住居で2点ともクヌギ節の径2cmと3.5cmの丸木で、特にNo.1は年輪が細かく径2cmに7年以上の年輪を数える。I区1号竪穴状遺構はサンプル1点のみで広葉樹の散孔材の小破片。B区20号土坑はやはりサンプル1点のみで、クリ材破片の集まりで詳細は不明である。

住居ごとに出土木材の樹種を比較したのが第54表である。本遺跡で調査した住居出土炭化物では、微小破片で細分化できず広葉樹としたE区6号住居(平安時代9世紀中頃)を除き、古墳時代4世紀後半～6世紀後半の住居6軒の炭化材43点がクヌギ節であった。このうちC区3号住居の10点中クヌギ節9点(クヌギ節比率90%)・散孔材1点で、残り5軒の住居出土炭化材は全点がクヌギ節の材であった。炭化物は全点がサンプルとして抽出されていないが、そのこと考慮してもクヌギ節の木材の出土頻度の高さは特徴的といえる。

第54表 住居出土木材樹種構成表

樹種	C区			E区	F区	G区	I区	
	2住居	3住居	4住居	6住居	6住居	3住居	5住居	8住居
クヌギ節	14	9	7		1	5	5	2
散孔材		1						
広葉樹				3				
試料合計	14	10	7	3	1	5	5	2

第5章 自然科学分析

第55表 出土炭化物一覧表

遺構	試料No.	樹種	備考
C区2号住居	No.28	クヌギ節	径3.5cmの丸木長さ 10cmほど残存
C区2号住居	No.29	クヌギ節	径3.5cmの丸木破片 6×3×1.5cm程残存
C区2号住居	No.30	クヌギ節	大径木材の小破片
C区2号住居	No.31	クヌギ節	小径木の破片 8×5×1cm残存
C区2号住居	No.32	クヌギ節	微小破片
C区2号住居	No.33	クヌギ節	大径木の破片
C区2号住居	No.34	クヌギ節	径4cm半裁状長さ14cmを残す木材破片
C区2号住居	No.34②	クヌギ節	崩れた破片の集合、範囲は15×4×3cmだが形状は不明
C区2号住居	No.35	クヌギ節	範囲15×4×1.5cmの破片の集まりで形状は不明
C区2号住居	No.36	クヌギ節	範囲11×4×3cmの小破片の集まりで形状は不明
C区2号住居	No.37	クヌギ節	小径木の破片 12×5×2.5cmと11×3.5×3cm残存
C区2号住居	No.38	クヌギ節	4×1.5×1cmの小破片で形状は不明
C区2号住居	No.39	クヌギ節	径3cmの丸木破片 3.5×2×1.5cm残存
C区2号住居	No.42	クヌギ節	大径木の破片 4×2×0.5cm
C区3号住居	No.70	クヌギ節	小破片
C区3号住居	No.71	クヌギ節	小破片、断面2.5×2cmの割材状破片として残存
C区3号住居	No.72	クヌギ節	大径木破片
C区3号住居	No.73	クヌギ節	クヌギ節大径木破片 2.5×1.7×0.8cm
C区3号住居	No.73	カヤ材	カヤと見られる植物程で節部分を含む破片
C区3号住居	No.74	クヌギ節	大径木破片
C区3号住居	No.75	クヌギ節	大径木破片
C区3号住居	No.76	クヌギ節	大径木破片の集まり、最大破片で3×1.3×1cm
C区3号住居	No.77	クヌギ節	大径木破片
C区3号住居	No.78	クヌギ節	大径木破片
C区3号住居	No.79	散孔材	小破片で形状不明
C区4号住居	Ca1	クヌギ節	小破片
C区4号住居	Ca2	クヌギ節	大径木の破片、断面7×2cmの割材状に残る
C区4号住居	Ca3	クヌギ節	大径木の破片
C区4号住居	Ca4	クヌギ節	大径木の破片
C区4号住居	Ca5	クヌギ節	大径木破片 最大破片8×4.5×8cmの割材状に残る
C区4号住居	Ca6	クヌギ節	大径木の破片多数
C区4号住居	Ca7	クヌギ節	大径木の破片
E区6号住居	No.1	広葉樹	小破片
E区6号住居	No.2	広葉樹	小破片
E区6号住居	No.3	広葉樹	小破片
F区6号住居	一括	クヌギ節	年輪8本を数える丸木で半裁状に残るが本来の形状は不明 一端に2面のカット痕が残る
G区3号住居	No.1	クヌギ節	大径木破片 10×3×4cm
G区3号住居	No.2	クヌギ節	大径木5×1.5×18cmの割材状に残存
G区3号住居	No.3	クヌギ節	推定径10cmの破片の集合 最大破片9×4×4cm
G区3号住居	No.4	クヌギ節	大径木破片 3×2×18cmの割材状に残存
G区3号住居	No.5	クヌギ節	割材状に残存 最大22×5×4cm他接合不明の破片有り
I区5号住居	No.17	クヌギ節	4×3.5×3cmのブロック状に残存
I区5号住居	No.18	クヌギ節	小破片
I区5号住居	No.19	クヌギ節	小破片
I区5号住居	No.20	クヌギ節	小破片
I区5号住居	No.21	クヌギ節	径5cmの丸木
I区8号住居	No.1	クヌギ節	径2cm年輪7年丸木の1/3残存 長さ8cm残存 一端はカットか
I区8号住居	No.10	クヌギ節	径3.5cm丸木半裁状に残存
I区1号竪穴状		散孔材	小破片
B区20号土坑	No.11	クリ	破片の集まりで全体形は不明

※大径木は、破片が小さく具体的に直径推定ができないが、年輪の曲率が大きく推定直径30cm以上のものについてこの表記を用いた

※大きさ表記は、軸方向×接線方向×放射方向の順に記した

第5節 鉄滓について

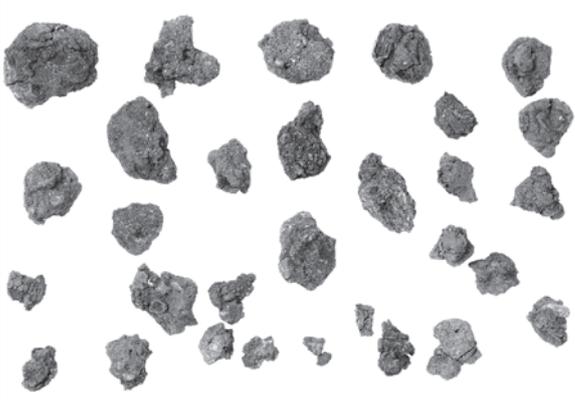
所見

- 1 芳賀東部団地遺跡の鉄滓には鍛冶滓と製錬滓の二つが存在する。
- 2 西半部のE区・F区からの鉄滓出土が多い。
- 3 炉壁と流動滓が見当たらない。
- 4 以上のことから、
 - a 北側(斜面上位)の鍛冶滓が、上武道路区域に流れ込んだ可能性が高い。
 - b 炉壁・流動滓が見当たらず、鉄塊系遺物が存在す

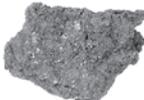
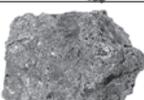
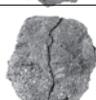
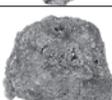
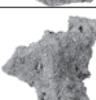
るので、製鉄炉は本遺跡内にはないが、集落に製鉄した鉄分の多い塊を持ち込み、そのうち比較的鉄分の少ない3級品が残った可能性がある。1級品・2級品は製品化され、持ち出されたと考えられる。

- 5 個別の鉄滓の観察結果は、第278図に示す。

第278図 芳賀東部団地遺跡製鉄関連遺物一覧

番号	区	遺構番号	遺構名	出土状態	遺物名	特徴	重さg	写真・備考
	C	4	住居	南西一括			6.57	
	F	2	住居	鉄1			27.2	
	F	2	住居	鉄6			9.6	
	F	2	住居	鉄9	鉄滓		3.77	
	F	4	住居		見当たらず			
	F	7	住居	掘り方	鉄滓		3.55	
	F		表土		鉄滓		65.62	
	G	15	住居	鉄1			43.06	
	G	15	住居	鉄2	鉄滓		65.91	
	F	2	住居	鉄4	鍛冶滓		8.38	F21と同じ袋に封入
	I	3	土坑	No4一括			31.83	
	I	2	住居	No101			30.77	
	E	4	住居	覆土			14.08	鉄、銅?
	E	4	住居	No83	不明の滓		17.61	
	G	7	住居	カマド一括			18.18	
	G	14	住居	一括			67.83	
	G	15	住居		鉄塊系遺物主体		37.95	
	F	3	グリット	カク面一括			14.52	
	F			カク面			89.26	
	F		表土				62.52	
	F	7トレ		一括			12.65	
	F				鉄製品		29	故鉄の可能性
	F	2	住居		鉄塊系遺物		270.45	
	F	2	住居		鍛冶滓	楕形鍛冶滓含む	245.38	
	F	2	住居		鉄滓		144.9	
	F	3	住居	一括	鉄塊系遺物と不明の滓		61.4	
	F	1	住居		鉄塊系遺物主体		35.41	
	F	7	住居	一括			60.03	
	F	8	住居	一括			31.62	
	D	1	溝	一括			28.06	
	F	5	住居	一括	鉄分の多い滓	錆化した鉄塊系遺物含む	125.35	
	F	6	住居	覆土		鉄塊系遺物・小型の薄手の楕形鍛冶滓含む	72.3	
	F	6	住居	4Pit一括			30.54	
1	G	15	住居		鉄塊系遺物		149	

第5章 自然科学分析

番号	区	遺構番号	遺構名	出土状態	遺物名	特徴	重さg	写真・備考
2	F	2	住居	鉄2	椀形鍛冶滓	薄手, 小型	25.62	
3	F	2	住居		不明の鉄滓	気泡が内在し、比重が低い	27.2	
4	G	14	住居	鉄1	炉内滓(含滓)か		239.81	
5	G	14	住居	鉄2	鉄塊系遺物か		28.1	
6	G	14	住居	鉄3	不明の滓		137.58	
7	G	14	住居	鉄4	炉内滓	大型の木炭痕半径2cm	76.65	
8	G	14	住居	鉄5	不明の滓		125.21	
9	G	15	住居	鉄3	再結合滓		39.39	
10	I	2	住居	南西	椀形鍛冶滓か	下面に直軸1cm以下の小型の木炭痕あり。	109.6	
11	I	2	住居		椀形鍛冶滓		25.22	
12	I	2	住居		椀形鍛冶滓	上面黒色ガラス化	43.1	
13	I	2	住居		椀形鍛冶滓	粘土質主体。上面の粘土質溶解物は羽口の頸部の溶損か。下面は炉床土が付着している。	65.16	
14	F	2	住居		鉄塊系遺物		12.25	
15	F	2	住居		鉄塊系遺物		7.27	
16	F	2	住居		椀形鍛冶滓		23.02	
17	F	2	住居		椀形鍛冶滓型		42.44	

第6章 成果とまとめ

第1節 科学分析の成果

ここでは5章に掲載した科学分析の成果について、発掘調査の観点から、いくつか記述しておきたい。

1 テフラ分析

試料を採取した地点のうち、B区1トレンチ・2トレンチ・7トレンチ、C区2トレンチ・17トレンチはローム層の試料であり、これらの同定結果は当事業団発掘調査報告書第535集『上武道路・旧石器時代遺跡群(3)』2012に反映されている。本書は縄文時代以降を内容とするため、直接関連するのは、C区南北ベルト採取の試料である。試料Hg-12は浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、試料Hg-13は榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)と同定された。

2 人骨の鑑定

H区のもと墓区域で12基の墓を検出し、13体の人骨が出土した。同じ区域から江戸時代前半の紀年銘のある石造品が出土しているが、墓坑に伴っていないため、人骨の年代とは決定できない。後述のように、人骨は古銭や喫煙具などの副葬品を伴っていたことから、江戸時代の墓とすることが可能である。

13体のうち女性が8体、男性が5体で、やや女性が多い。71土坑は男・女が認められた。年齢は68土坑の老齢を除き、30歳代から50歳代の間に含まれる。身長が復元できるのは48土坑の30～40代の男性で、153.7cmとされた。未成年の人骨の出土がないことが、特徴のひとつという鑑定結果であった。

3 炭化材の樹種同定

B・C・E～G・I区から出土した炭化材が鑑定された。B区20土坑のものはクリとされ、本遺跡唯一のクリと鑑定された試料である。C区の2・3・4住居出土のものは、クヌギ節とされた。大半のものがクヌギ節と鑑定されたなかで、E区6住居の破片は広葉樹と認められた。クヌ

ギはブナ科コナラ属に分類され、いわゆる「ドングリ」の仲間であり、岩手・山形以南の里山の山林に自生する照葉樹林の一部である。遺跡を取り巻く山林の樹木としては矛盾しない植生とみられる。なお、ここで「大径木」と表記されたものは、推定直径30cm以上のものを指す。

4 鉄滓の分類と観察

今回の観察では、残念ながら時間不足のため、注目点をとらえた実測図を掲げることができず、写真を示すに留まった。しかし、観察者による現物を実見しての所見が得られ、それらを一覧にまとめて示したのが、第278図である。

出土品を熟覧した結果、

- a フイゴ羽口がない
- b 炉壁・流動滓が見当たらない
- c 鍛冶滓と製錬滓の二種が出土している

以上のことから「製鉄」の場ではなく、鉄分の多い塊を加工した場(いわゆる小鍛冶の類)を想定できる、という所見であった。

この所見から考えられることは、第一に「製錬滓」が出土したことから、近隣に製鉄遺構の存在が予想されることである。第二に、近隣遺跡に同時代の製鉄遺構が検出されていれば、一つの限定された区域のなかで(たとえば、芳賀地域で)、原料(砂鉄)採掘→製鉄(鉄素材の製造)→小鍛冶(鉄製道具の製作)という分業体制が整備されていた可能性があることである。このことを含め、3節では近傍の遺跡で調査された製鉄関連遺構を取上げて検討したい。

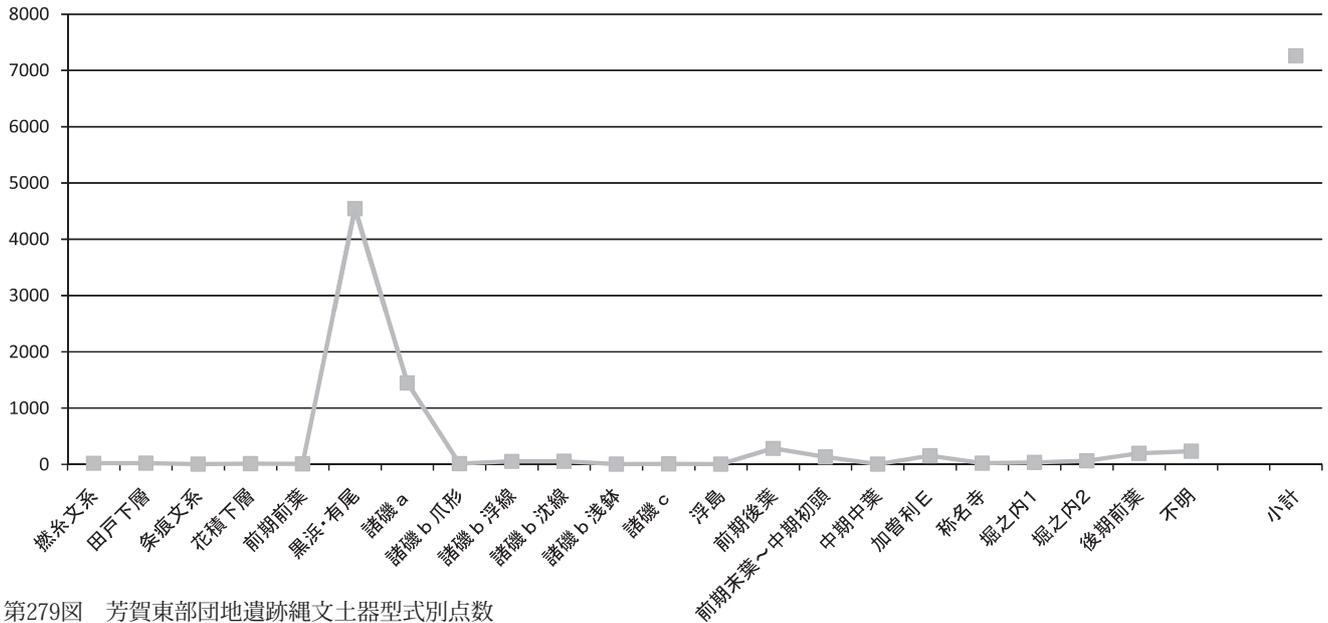
第2節 遺物の特徴

1 縄文土器

芳賀東部団地遺跡(上武道路)からは7,259点の縄文土器が出土した。これらをA区～I区の調査区ごとにまとめたのが第56表である。この表では、1破片=1点、複数の破片が接合した破片も1点、全体の形状が判明する個体も1点として数えているので、個体数を示していない。

い。

それらの形式別点数をグラフで表したのが、次の図である。黒浜・有尾式の点数が圧倒的に多く、諸磯a式が次に多いという傾向が判る。限られた範囲の単純な土器破片数の集計であるが、上武道路区域では、縄文時代のこれらの時期に、人間の活動のピークがあると想定したい。



第279図 芳賀東部団地遺跡縄文土器型式別点数

第56表 芳賀東部団地遺跡縄文土器型式別数量表

		擦糸文系	田戸下層	条痕文系	花穂下層	前期前葉	黒浜・有尾	諸磯a	諸磯b爪形	諸磯b浮線	諸磯b沈線	諸磯b浅鉢	諸磯c	浮島	前期後葉	前期末葉～中期初頭	中期中葉	加曾利E	称名寺	堀之内1	堀之内2	後期前葉	不明	小計
A区	1住居																					1	3	4
	遺構外			1		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	1	3	3	10
	小計	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	2	6	14
A区小計																								
B区	1 炬																						2	2
	1 土坑																						1	1
	4 土坑																						1	1
	13土坑																						1	1
	20土坑																			3			7	10
	21土坑																						1	1
	59土坑																					3	9	12
	60土坑																				1		4	5
	65土坑																						1	1
	1ピット																					1	2	3
	27ピット																						1	1
	40ピット																						1	1
	100ピット														1									1
	129ピット																						1	1
	168ピット																						1	1
	183ピット																						1	1
	186ピット																				1	5		6
	遺構外	2					1	1							5	6		1	1	6	22	58	53	156
	小計	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	5	7	0	1	1	9	24	67	87	205
B区小計																								
C区	1住居		4											1	3								7	15
	4住居														1								1	2
	5土坑																						1	1
	13土坑																						1	1

第2節 遺物の特徴

		擦糸文系	田戸下層	糸痕文系	花積下層	前期前葉	黒浜・有尾	諸磯 a	諸磯 b 爪形	諸磯 b 浮線	諸磯 b 沈線	諸磯 b 浅鉢	諸磯 c	浮島	前期後葉	前期未葉、中期初頭	中期中葉	加曾利 E	称名寺	堀之内 1	堀之内 2	後期前葉	不明	小計	
	32土坑																						2	2	
	46土坑																						1	1	
	70土坑															1								1	
	98土坑						1																	1	
	106土坑															1							1	2	
	115土坑														1									1	
	149土坑						1																	1	
	152土坑																						1	1	
	206土坑								1														1	1	
	214土坑																						1	1	
	223土坑																						1	1	
	235土坑																						4	4	
	239土坑															1								1	
	325土坑															1								1	
	115ピット						1																	1	
	263ピット															1								1	
	遺構外	3	14				15		1	8	1		4		13	108			3	2	2	11	68	253	
	小計	3	18	0	0	0	18	0	2	8	1	0	5	0	18	113	0	0	3	2	2	11	89	293	
C区小計																									
D区	1溝							2		2			1					1						6	
	遺構外						1	1	2	2	4				1								1	12	
	小計	0	0	0	0	0	1	3	2	4	4	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	18	
D区小計																									
E区	遺構外						3	1			11			1	1			2	3				10	32	
E区小計																									
F区	6住居							1																1	
	8住居																			3	2			5	
	1溝							1																1	
	3溝																			2				2	
	遺構外			1			9	3			2	1			3			16		1	17		3	56	
	小計	0	0	1	0	0	9	5	0	0	2	1	0	0	3	0	0	16	0	6	19	0	3	65	
F区小計																									
G区	遺構外						10	3		1	7				2			36	7			7	12	85	
G区小計																									
H区	1住居																						1	1	
	11住居						2																	2	
	12住居						19																	19	
	16土坑						2																	2	
	17土坑						1															2	1	4	
	18土坑						2																	2	
	19土坑						2																	2	
	20土坑						1														1			2	
	21土坑						1														4			5	
	22土坑						3																	3	
	23土坑						5	2										1						8	
	24土坑						3	2										1				1		7	
	27土坑						1											1						2	
	32土坑						18																	18	
	33土坑						8																	8	
	34土坑						29																	29	
	36土坑						4																	4	
	40土坑						1											1						2	
	41土坑						3																	3	
	42土坑						3																	3	
	43土坑						1																	1	
	44土坑						1																	1	
	45土坑						1																	1	
	53土坑						1																	1	
	54土坑				1		1															1		3	
	55土坑				1																			1	
	60土坑						2																	2	
	61土坑						1															1		2	
	62土坑																					1		1	
	63土坑						1																	1	
	68土坑						4																	4	
	70土坑						3																	3	
	73土坑						5																	5	
	53ピット																					1		1	
	遺構外				7	1	754	48	2	1					20		1	58	1	9	5	45	3	955	
	小計	0	0	0	9	1	883	52	2	1	0	0	0	0	20	0	1	62	1	9	12	51	4	1108	
H区小計																									
I区	2住居						13											1						14	
	1竪穴						1006																	1006	
	2竪穴					1	641	60																702	
	3竪穴						55	633	1	15					6								12	722	
	1集石	4					8																1	13	
	10土坑						2																	2	
	15土坑						2								1									3	
I区小計																									

第6章 成果とまとめ

	撫糸文系	田戸下層	条痕文系	花積下層	前期前葉	黒浜・有尾	諸磯 a	諸磯 b 瓜形	諸磯 b 浮線	諸磯 b 沈線	諸磯 b 浅鉢	諸磯 c	浮島	前期後葉	前期末葉、中期初頭	中期中葉	加曾利 E	称名寺	堀之内 1	堀之内 2	後期前葉	不明	小計	
17土坑						10																1	11	
26土坑							1																	1
28土坑						17																		17
37土坑						3																		3
40土坑						1																		1
41土坑							1																	1
42土坑					1	10																		11
44土坑						17	4							1										22
45土坑							3																	3
51土坑						8												1						9
56土坑						9																		9
58土坑					1	4																		5
60土坑						1	1																	2
61土坑						13																		13
72土坑						7																		7
73土坑						5	3																	8
74土坑						20								1										21
75土坑						5																		5
78土坑							1																	1
79土坑						2																		2
81土坑						5																		5
82土坑						10																		10
84土坑						17																		17
85土坑						10																		10
86土坑						5	1																	6
87土坑						16																		16
89土坑						50																		50
91土坑						3																		3
94土坑						1																		1
95土坑						3	3																	6
99土坑						12																		12
100土坑						2																		2
103土坑						4																		4
106土坑						2																		2
109土坑						1																		1
110土坑						10																		10
112土坑						5																		5
114土坑						7	1																	8
115土坑						4																		4
119土坑						1	2																	3
120土坑						3																		3
121土坑						2																		2
123土坑						2																		2
126土坑						6																		6
127土坑						32																		32
128土坑						10	1																	11
130土坑						5																		5
131土坑						1																		1
132土坑						1																		1
133土坑						27																		27
134土坑						1																		1
135土坑						6																		6
136土坑						7																		7
137土坑						2																		2
138土坑						2																		2
140土坑						11																		11
147土坑						7																		7
149土坑						1																		1
151土坑						15																		15
152土坑						20																		20
154土坑						3																		3
158土坑							2																	2
162土坑						12																		12
163土坑						3																		3
165土坑						11																		11
166土坑						17																		17
167土坑						6																		6
168土坑						2																		2
169土坑						1																		1
170土坑						6																		6
171土坑						29																		29
172土坑						4																		4
遺構外	7			2	2	1335	664	4	22	27	1	1		221	9		33		4		54	6	2392	
小計	11	0	0	2	5	3617	1381	5	37	27	1	1	0	230	9	0	34	1	4	0	54	20	5439	
総合計	16	18	2	11	6	4542	1446	11	51	52	2	7	1	280	129	1	152	18	30	60	192	232	7259	

I区小計

合計

2 袋形土器

C区1面の4住居貯蔵穴から、特殊な形の土器が出土した。両端が尖り、中央部が膨らんでいて、膨らみの上方に円形に復元される口縁部がある。尖った一端には注ぎ口とみられる小孔が存在する。大きさは長さ10.6cm、高さ6.1cmである。実測図を第174図に、写真をPL.142に示した。出土状態の写真を第280図に示す。資料調査が不十分だが、県内では初例のようである。

「皮(革)袋形土器」は江戸時代から知られていたようで、明治時代以降も類例調査が重ねられ、昭和時代には主として西日本の出土品で資料集成がされた。牛嶋英俊「革袋形土器研究小史」(註1,以下、「小史」という)によれば、皮袋形土器は大別して須恵器と非須恵器系とがあり、後者はさらに

A 裾がひろがる袋状胴部の上端に頸部をもつもの
 B 逆三角形または逆台形の胴部の上辺中央に頸部または孔があり、一端に注口状の小孔をもつもの
 の二種類に分けられるという。非須恵器系は「いずれも製作年代は弥生時代末から古墳時代初頭にかけてであり、須恵器とは年代的につながらない。」とされる。

この分類に従うと、本遺跡出土の土器は、非須恵器系のもので、Bタイプに属すると考えられる。住居内の他の土器を勘察すれば、この土器の時期は古墳時代前期4世紀前半が推定され、小史の類別に合致する。ここでは、小史の提言を尊重し、「袋形土器」と表記した。

機能としては、一端に小孔が開いた状態、中央上部に口縁部らしい形状をもつことから、液体を上位の開口部



第280図 C区4住居袋形土器出土状態

(口縁部)から入れ、小孔から注いだと考えられる。

本遺跡例と時代は異なるが、西畑屋遺跡の「皮袋形土製品」は非須恵器系とみられ、外観が良く似ている。

静岡県浜松市 西畑屋遺跡 土製品 皮袋形 古墳後期 7世紀後半(註2)

西畑屋遺跡は小河川の両岸に数ヶ所の焼き火跡が発見され、岸辺から礫集積や土器集積が検出されている。出土遺物には人形土製品、馬形土製品、装飾付土師器と皮袋形土製品、土師器甕形品、須恵器・土師器のほか、カマド、土錘、鉄鏃類・刀子・U字形鋤先・銅椀・古銭、砥石などを含み、祭祀に関連する遺構・遺物と考えられる。調査報告書に掲載された皮袋形土製品だけでも18個あり、これらは土師器小椀とともに集中して出土し、「両者が祭祀にあたって同時に使用されたことは確実であろう」とされた(須恵器の皮袋形土器は掲載されていない)。わずかな類例だが、日常生活に使う土器ではなく、祭祀や儀式に使われた土器と推定したい(註3)。

註1 牛嶋英俊「革袋形土器研究小史」『同志社大学考古学研究会 50周年記念論集』同志社考古刊行会,2010

註2 『西畑屋遺跡1999』財団法人浜松市文化協会,1999

註3 西畑屋遺跡のほか、次の出土例がある。いずれも実見できていない。

2 宮城県仙台市太白区秋保町 上ノ原遺跡 皮袋形土器 縄文時代中期 県指定資料

3 長野県飯山市 岡峯遺跡 皮袋形土器 弥生時代中期後半～末期

写真でみる範囲では、本遺跡出土土器の形状は岡峯遺跡例によく似ている。岡峯遺跡例は略円形の底部があるように見える。

3 滑石のチップ

H区1面の10住居内から、多量の滑石破片が出土した。200カ所以上の出土地点があり、そのうち7カ所は数mmほどのチップの集中する範囲であった。出土地点はカマド前から南辺中央部にかけて分布している(第118図)。住居内施設は、ほかの住居と大きな差がないが、滑石破片が多量に出土していることのみが異質である。滑石破片を観察・分類した結果、本住居は滑石の白玉を製作した工房の可能性が高い。製品とみられる遺物が少ないのは、出荷してしまったためか。住居の時期は古墳時代後期5世紀末～6世紀初頭と推定される。

住居内または集落内で、

- I 自営的に原石採取から作業を始め、製品と食料等の生活必需品を交換したか、
 - II 原石や材料を供給され、製品を納入することによって食料等を入手したのか、
- にわかに判断できないが、より原石に近い材料が出土していないことを勘案すると、IIのケースに思える。ただし、大きめの材料を消費してしまった故に、出土しなかった可能性は否定できない。

出土した滑石破片を分類すると、外観・形状からいくつかの種類に分けられた(第281図)。掲載できないほど小さな破片(チップ)が合わせて2,673点出土した。小片溜りに注目すると、チップには4種類の色合い(濃いグレー、薄いグレー、肌色、白)が識別でき、チップと同じ色合いの素材Bを伴うことが判った。素材A B Cは195点、未成品は68点、完成品は小片溜7から2点・掘り方から1点の3点である。重量別では、完成品0.64g、未成品17.93g、素材A B C 165.57g、チップ268.46gで、取上げ総重量は452.60g(計2,939点)であった。

素材と考えられる形状のものは、次のように分けられた。

白玉素材AとB 外形は不定形で、数cmほどの大きさをもつ板状の破片。両面に擦痕があるものをA、片面に擦痕があるものをBとした。

白玉素材C 略円筒形または直方体の形状で細長い棒状を呈し、数cmほどの長さをもつ。

白玉に近い形状をもつ加工品は、

- a 扁平で孔のないもの
- b 半円状を呈し、孔痕跡があるもの
- c 孔を有し、外形が不定形で円形ではないもの
- d 孔を有し、通常の白玉とされるもの

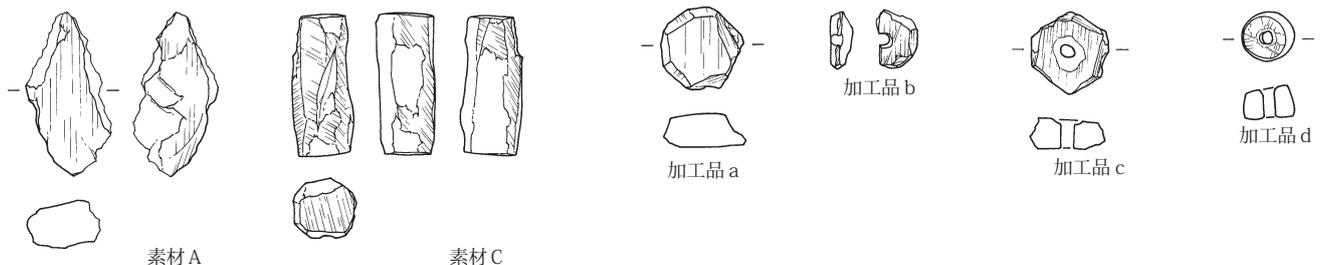
の四種に分けられた。dの外形はほぼ円形を呈するものがあり、完成形と考えられる。孔は開いているが、外形が不定形のものcがいくつか存在していることから、穿孔ののちに外形を整えて円形にする工程が考えられる。aはその前段階のものと考えられ、穿孔する前の工程を表していると推定した。bは穿孔途中で割れてしまった失敗作であろう(第281図)。

原石に相当する大型の滑石塊(10cm大以上を想定)や、小割り塊の滑石(3～5cm前後を想定)が見られないことは、

- ア いずれも消費されてなくなった
- イ もともと原石がなかった
- ウ 小割りで住居に持ち込まれ、素材A・Cになったなどのケースが考えられる。

以上の代表的な出土例から、白玉製作の工程を推定すると、次のようになる。

何らかの方法で入手した小割り塊(3～5cm大)をさらに割って、素材AまたはCを得る。このとき得られる再小



第281図 滑石製白玉破片の分類

割り破片の形状によって、二つの加工工程に分かれる。

A 板材料→素材Aをさらに分割するか、周辺を打ち欠き、薄い板 a にする→中央部に穿孔して c にする→c の外周を擦って円形にし、d に仕上げる。

C 棒材料→細長い塊状の破片を得た場合は、外周を擦って素材Cのような棒状素材にする→素材Cを輪切り状態の薄い板 a にする→中央部に穿孔して c にする→c の外周を擦って円形にし、d に仕上げる。

板状の滑石製品に穿孔があれば、外形が不定形でも祭祀の道具としては機能すると考えられる。しかし、本遺跡例のように、この地域の古墳時代後期の白玉製作が、外周を擦って円形にすることで完成形になるとすれば、後世の奈良平安時代には円形に仕上げる工程を省略または粗雑な仕上げで出荷し、より多くなった需要に応えようとしたのではないだろうか。後日の検証を待ちたい。

4 丸鞆と鉈尾

E 区 4 住居から丸鞆、F 区 6 住居から鉈尾とみられる金属製品が出土した(第282図)。いずれも銅製品と考え

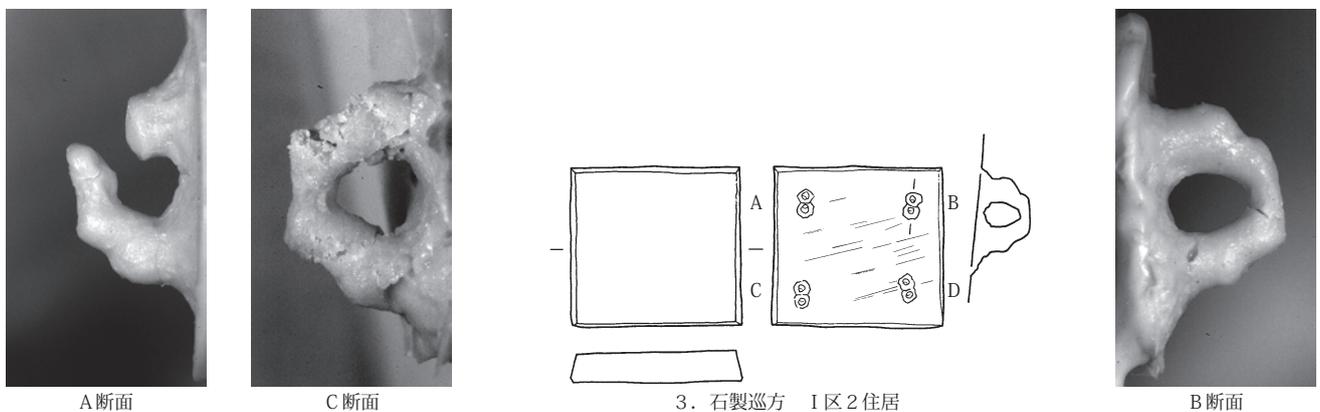
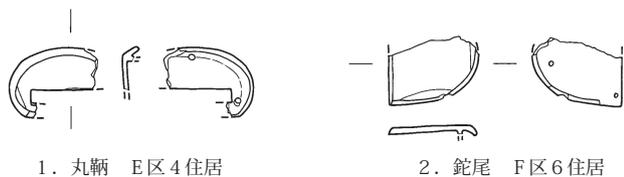
られるが、成分分析は実施していない。

E 区 4 住居は9世紀前半、F 区 6 住居は8世紀中頃と推定される住居である。このほか、I 区 2 住居中央部床面水準から石製巡方が出土している(第282図)が、住居自体は5世紀中頃の所産とみられ、石製巡方から想定される年代と一致しない。写真は石製巡方に開けられた小穴のシリコン型を示したもので、穿孔の方向と回転による穿孔の状態が推定できる。

丸鞆や巡方は役人が着けるベルトの飾りであり、材質や色調が官位ごとに規定されていた。逆に、飾りの形状を見ることによって、官位が判定できる仕組みとなっていた。鉈尾はベルト末端の装着品である。これらの出土品は、近隣の集落のなかに官位をもつ人物が存在していたか、その人物から入手した丸鞆・巡方等が住居に埋没したことを示しており、今回の発掘区域を含む芳賀地域の遺跡のなかで評価されるべきであろう(註1)。

芳賀東部団地遺跡(市教委)の報告書では、H-364住居で丸鞆(第1巻115頁)、H-23住居で巡方(第2巻20頁)、H-206住居で鉄製巡方(第2巻137頁)の3点の出土がある。

註1 県内の遺跡で、ベルトの1セット分がすべて出土したという例を知らないが、単独の丸鞆や巡方の出土例は少なくない。住居からの単独出土がどのような意味をもつか、確定的ではないように思う。



第282図 丸鞆・鉈尾・石製巡方

5 墓の副葬品

(1) 墓副葬品の種類

H区のもと墓地区域から12基の墓坑が発見され、中から人骨13体分が出土した。人骨を出土して明らかに墓とできるものは、第57表の12基である。人骨と副葬品との関連性の有無を見るため、鑑定結果も表に含めた。一覧表から読み取れる傾向を列举してみると、次のようになる。

- a 人骨が出土する墓の大半は、副葬品がある。何も副葬品が出土しなかったのは、全12基のうち51土坑の1基である。
- b その他の墓坑に共通する副葬品は、寛永通宝などの古銭である。複数枚が副葬されることが多い。古銭は複数枚が錆びついて塊状を呈するものがあり、繊維状の付着物が観察できるものも存在することから、布に包むか布袋に入れて死者に添えたと推定される。
- c 次に多いのが喫煙具のキセルである。男性に副葬する場合がやや多いが、女性への副葬が皆無ではない。喫煙の習慣が、男女を問わず広がっていたためか。

d そのほか、着火具として火打金+火打石の両者、または単品で副葬されることがある。単品の場合は、調査時に土と混じり、見逃した可能性が残る。火打金または火打石の一部に、皮革状付着物が遺存している。携帯用着火セットが想定できる。

そのほか、副葬品ではなく、遺体を納めた棺の一部として、

e 一部では、板状木片が出土する

f 釘とみられる鉄製品が出土する

ケースが認められる。板状木片は小さいので、いわゆる「早桶」の部品であるか、判定できない。鉄釘は蓋を閉じる場合のほか、箱形の棺の一部であった可能性がある。

(2) 念仏銭

H区68土坑から3枚錆着、5枚錆着の古銭のほか、「南無阿弥陀佛」と鋳出された銭形銅製品が出土した。南無阿弥陀仏は浄土宗で繰返し唱えられる念仏なので、この種の銅製品は「念仏銭」と呼ばれている。この念仏銭の形状は、直径22.6mm、厚さ0.7mm、重さ2.3gで、文字の右側を外周に向けて、片面に漢字で「南無阿弥陀佛」と陽鋳



第283図 H区墓坑群 北から

第57表 H区墓坑出土遺物一覧表

遺構名	人骨			出土品			備考	掲載遺物
	個体数	性別	死亡年齢	取上げ 番号	遺物	数量		
H区48号土坑	1	男性	30歳代～40歳代	1	寛永通宝+ 5	6	6枚錆着。布付着。	第199図H206
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ付。	第199図H209
					鉄製品火打ち金	1	皮革質の付着物有り。	第199図H210
					石製品火打ち石、b2.5cm大1点。c2.0cm大で火打ち金に付いている1点。d1.0cm大1点。	3		第199図H211
				2	寛永通宝+ 4	5	5枚錆着。布付着。	第199図H207
					銅製品キセル雁首	1	ラウ付。	第199図H208
H区49号土坑	1	女性	30歳代～40歳代	1	寛永通宝+ 5	6	6枚錆着。	第199図H213
				2	寛永通宝+ 4	5	5枚錆着。古寛永か？	第199図H214
H区51号土坑	1	男性	成人		なし			
H区53号土坑	1	女性	40歳代～50歳代	一括	寛永通宝	1		第199図H215
H区67号土坑	1	女性	30歳代	1	寛永通宝+10	11	11枚錆着。	第199図H220
					釘か？	1		第199図H219
H区68号土坑	1	女性	老齢	1	寛永通宝+ 2	3	3枚錆着。	第200図H221
					寛永通宝+ 4	5	5枚錆着。布付着。	第200図H223
					念仏銭	1	小型。南無阿弥陀仏。不明付着物有り。	第200図H222
H区69号土坑	1	男性	30歳代～40歳代	1	寛永通宝+10	11	11枚錆着。	第200図H228
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ中間欠損。	第200図H226
					銅製品キセル雁首	1	ラウ中間欠損。	第200図H225
					鉄製品火打ち金	1	木質状付着物。皮革状付着物。	第200図H227
				2	寛永通宝	6	2+4枚錆着。	第200図H229
H区70号土坑	1	女性	40歳代	1	寛永通宝	1	裏面に付着物有り。	第200図H234
					銅製品キセル雁首	1	ラウ残。繊維質付着。火皿下部に細い突帯又は段。	第200図H231
					鉄製品火打ち金	1	木質状付着物。皮革状付着物。	第200図H233
				2	銭銘不明	5	5枚錆着。布片付着。皮片？出土。	第200図H235
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ一部残。	第200図H232
				3	銭銘不明	5	5枚錆着。布片付着。皮片？出土。	第200図H236
H区71号土坑	1	男性 女性	30歳代 40歳代	1	永楽通宝+寛永通宝	6	1+5枚錆着。	第201図H240
					寛永通宝+ 8	9	9枚錆着。布付着。	第201図H239
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ単品。糸巻状装飾。	第201図H237
					鉄製品火打ち金	1	繊維質付着物。皮革状付着物。	第201図H238
					木製品板状木片	1		
H区72号土坑	1	女性	成人	1	寛永通宝+ 1	2	2枚錆着。	第201図H247
H区73号土坑	1	女性	成人	1	寛永通宝+ 5	6	6枚錆着。	第201図H248
					鉄製品火打ち金	1	皮革状付着物。	第201図H251
				一括	木製品板状木片	1	銭のNo.2に貼り付いていた木片。桶底か？	
				2	銭銘不明	12	12枚錆着。布片付着、鉄付着。繊維状圧痕。	第201図H250
H区74号土坑	1	男性	40歳代～50歳代	1	寛永通宝	11	1+10枚錆着。穴に繊維質、縹？付着。	第202図H256
					銅製品キセル吸い口	1	ラウ付。	第202図H254
					鉄製品釘	1	断面方形。木質付着。	第202図H257
					鉄製品火打ち金	1	皮革状付着物。	第202図H262
					石製品火打ち石	1	鉄錆付着。	第202図H263
				2	銅製品キセル雁首	1	ラウ付。錆に青色味が有る。	第202図H253
					鉄製品釘	1	木質付着。	第202図H258
					鉄製品釘	1		第202図H261
				3	鉄製品釘	1		第202図H259
				4	鉄製品釘	1	木質付着。	第202図H260

されている。文字の配置は時計廻りで、端正ではない(註1)。第284図1に拓影と写真を示した。

このような銭形銅製品の出土例は県内では類例が少ないようで、資料調査が不十分だが、完形品の出土は県内初例とみられる。

これに類似した手元の資料に、次のものがある。

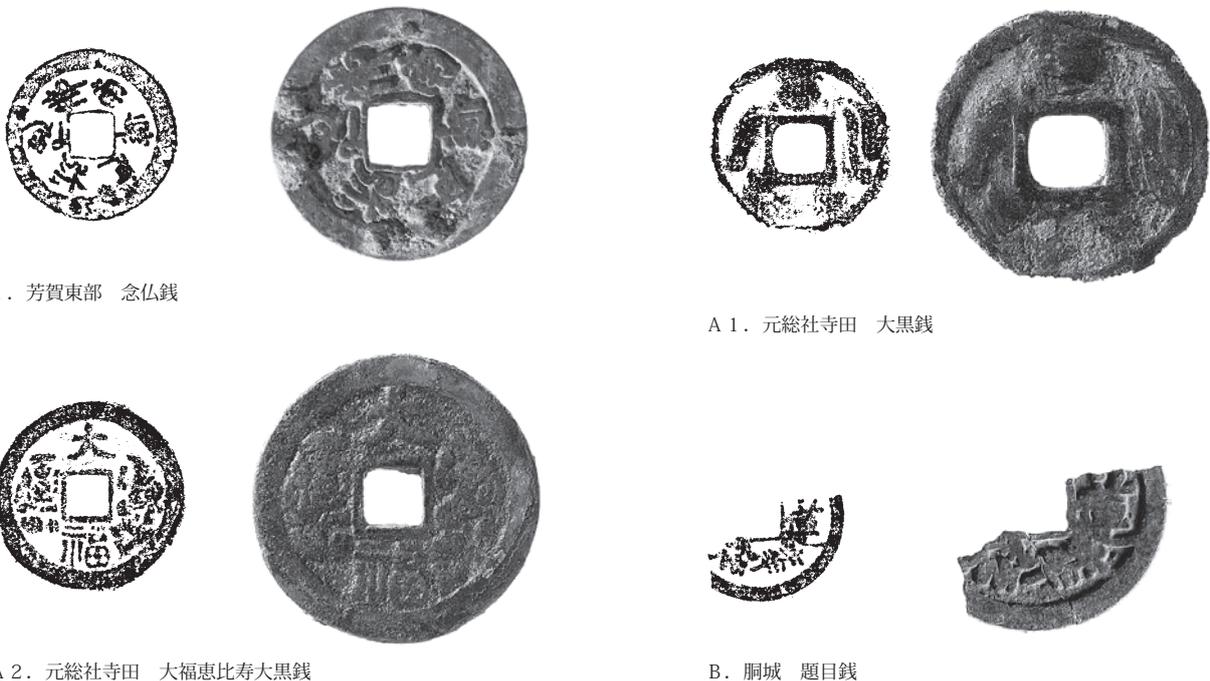
A 元総社寺田遺跡 絵銭=大黒銭・大福銭(第284図A1・A2)

B 胴城遺跡 江戸時代 墓 題目銭(第284図B)

A1は元総社寺田遺跡の中世の遺構の項に掲載されているもので、七福神の「大黒」を模した人物の絵を鑄出していることから、「絵銭」や「大黒銭」と呼ばれている。出土品の観察では、大黒の形状とは必ずしも読み取れないが、ほかの例を参考にすると、人物像の腹部に四角い孔のある大黒になると考えられる(註2)。特徴的なのは、左右に広げる腕のような形と、下側にある膝または俵の

表現である。A2も絵銭の一つと考えられ、鑄造された文字から「大福銭」とも呼ばれる。上に「大」、下に「福」と文字が陽鑄されており、左と右に人物像が各一人鑄造されている。時計で表現すれば、12時に大、6時に福、9時と3時に人物像が配置されている。詳細に観察したところ、9時の人物は「大黒」、3時の人物は右手を挙げ烏帽子を被っている様子から「恵比寿」と推定された。すなわち、文字「大福」+恵比寿像+大黒像が表現され、極めてめでたい銭形銅製品である。A1・A2とも、裏面には何も鑄造されていない。幸福を願って携帯したもの、または祝い事などで配布したものなどの用途が推定される。

Bは胴城遺跡の江戸時代の2号墓から出土した古銭で、「・・・蓮華経」の文字が読み取れることから、日蓮宗で唱えられた七字題目の「南無妙法蓮華経」の一部が遺存していると考えられ、この種の銭形銅製品は「題目銭」



1. 芳賀東部 念仏銭

A1. 元総社寺田 大黒銭

A2. 元総社寺田 大福恵比寿大黒銭

B. 胴城 題目銭

第284図 念仏銭・大黒銭・大福銭・題目銭(拓影1/1)

と呼ばれている。文字は時計廻りに配置され、墓は17世紀後半と推定されている(註3)。

鈴木公雄氏の研究によると(註4)、念仏銭・題目銭の出土例は東京近郊に多く、栃木県・埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県に出土例があり、そのほか愛知県・石川県・大阪府・兵庫県・岡山県・福岡県でも出土している。1999年までの集成では念仏銭44例92枚、題目銭7例7枚が墓から出土している。これらの銭形銅製品は、1)渡来銭のみと伴出しない、2)古寛永通宝の鑄造(1636年)以前に遡らない、3)寛永鉄銭と銅製の念仏銭・題目銭は伴出しない、などの伴出する銭貨との関係から「17世紀の中頃から18世紀の前半にかけて」「六道銭の一部に用いられた。」という。

本遺跡と胴城遺跡とは、約200m程の距離の近接した位置関係にあり、比較的近い地点での出土は、この地域にも銭を副葬する埋葬風習があり、かつ出土例の少ない

念仏銭・題目銭を入手可能な状況が存在したことを示している。鑄造製品であることから考えて、高温を管理できる冶金技術が必要と思われ、寛永通宝のような銭の製造と同等の技術が必要と推定される。近隣で製造元を想定できないとすれば、江戸かその近郊で製造されたのち、特定の販売・流通経路を通じて入手したことが考えられ、あるいは製造元から直接持ち込む手段が存在したはずである。近隣の寺院などが頒布していたかもしれない。鑄造品であるから「型」が必要であり、量産を目的とした製品とみられる。

墓へ副葬される銭や、生前愛用の喫煙具を死者に添えるという行為とは別に、題目銭や念仏銭が副葬される場面を想像すると、亡くなった本人が「南無阿弥陀仏」と唱える宗派に属する人か、埋葬した人がそうした宗派に属していた可能性がある。

註1 本遺跡例は文字の配置が時計廻りであるが、反時計廻りに配置するものが存在するらしい。

註2 『元総社寺田遺跡III』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,第208集,1996, VII区中世の遺構で報告されている遺物で、出土地点が判然としない。

註3 『鳥取松合下遺跡・胴城遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,第534集,2012, 胴城遺跡2号墓から出土している。文字は時計廻りに配置されている。胴城遺跡は、芳賀東部団地遺跡の西側の高台に位置し、両遺跡の間の低地に鳥取松合下遺跡が所在する。

註4 鈴木公雄「念仏銭・題目銭と六道銭」『史学』63-3,慶応大学,1994-03
同『出土銭貨の研究』財団法人東京大学出版会,1999
同『銭の考古学』吉川弘文館,2002

第3節 地形・遺構の特徴

1 A区の旧地形復元

A区のトレンチ(第14図,PL.1～3)

A区は調査着手前まで、周辺の工業団地内各社の駐車場として利用されていて、中央部にアスファルト舗装がされていた。東側の五代川を越えた五代砂留遺跡で低地に水田が検出されたことから、対岸であるA区の盛り土の下にも古代の水田が存在した可能性が推定された。水田の有無を確認するため、舗装路の北側に1トレンチ、南側に2トレンチを設定して掘り下げたところ、1トレンチの底面約4.7m付近から湧水し、谷地形底面に至る前に掘り下げを断念した。2トレンチも同様である。

1トレンチと2トレンチの西側斜面は、やや様相が異なる。1トレンチの西側斜面は、用地に対してほぼ直交する方向で、直線的である。しかし、2トレンチの西側斜面は南東側に曲がるような様子で、傾斜が緩いことが観察できた。

第15図下は前橋市の昭和43年地形図に、鉄塔を基準としてC区-B区-A区の調査概念図を並べたものである。地形図をみると、五代川の西約500mの位置に、北側上流の水田につながる無名の水路があり、A区のなかで南東に曲がり五代川に合流する様子が見て取れる。

また、A区東側の盛り土が4m以上あることは、二つのトレンチ断面図を見ても解るが、これを補強する資料として、国土交通省が実施したボーリング調査資料がある(国土交通省,平成20年1月調査)。第15図上で「G-3ボーリング」と標記した○が掘削された地点であり、そ

の結果を第15図上右に示す。

以上のことから、A区は西側のB区から急傾斜-緩傾斜-急傾斜となり、無名の水路が南東方向へ曲がる低地地形であったと復元できる。しかし、水田の有無は残念ながら確認できなかった。

2 出入口施設

I区9住居の南辺で、「出入口」と考えられる施設が認められた。住居の土層観察用ベルトにかかっており、南東側を失ったが北西側は調査可能であった。住居土層を記録したのち、慎重に上位の土を除去したところ、住居外から内部へ降りる斜路(凹状)が現れた。その上面は何度も踏み固められた層が観察でき、斜路を降りた地点も硬化して床面中央部につながる。南西辺中央部を中心として、2m×1mの範囲が幅20cmほどの硬い帯状の土で囲まれていた。斜路の傾斜は住居壁の立上りに直交して横切り、住居外の硬く踏み固められた平坦面につながり、平坦面の両側に、40ピット・42ピットが掘り込まれている。掘り方調査では、斜路を含む1.8×1mほどの略長方形の掘り込みとなり、著しい凹凸のある範囲となった。このような遺構の検出状況から、斜路と住居外のピットは出入口施設と考えられる(第285図)。

芳賀東部団地遺跡(上武道路)の調査区域内で、このような遺構はI区9住居のみであるため、近傍の遺跡で類例を探したところ、次の例があった(第58表)。

九料遺跡(註1)4号住居・6号住居・8号住居・9号

第58表 出入口施設を伴う住居

遺跡	住居	施設	時代・時期	備考
九料遺跡	4号住居南壁	馬蹄形状遺構	鬼高I期	最上層にFA
	6号住居南壁	馬蹄形状遺構		
	8号住居南壁	馬蹄形状遺構	鬼高I期	最上層にFA
	9号住居南壁	馬蹄形状遺構	鬼高I期	最上層にFA
	14号住居南壁	馬蹄形状遺構	鬼高I期	最上層にFA
鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡	D区H-61住居址	馬蹄形状遺構	6世紀末～7世紀初頭	
五代伊勢宮Ⅱ遺跡	H-1住居跡南壁	壁上部欠失	6世紀第3四半期	
	H-2住居跡南壁寄り	P8, P9	6世紀第3四半期	
芳賀北原遺跡	H-4住居跡南壁	壁際床面に硬い面	鬼高Ⅱ～Ⅲ, 6世紀後半	FA降下後
芳賀東部団地遺跡	H-2号住居址	蹄鉄状	9世紀前葉	

住居・14号住居はいずれも南壁中央部付近に「馬蹄形状遺構」が検出されている。4号住居では細い溝状の遺構が住居中央部を凸にして東側末端が南壁に接する。6・8号住居は不整形の高まりが住居中央部に向かって凸になり、次第に低くなって床面と同じ水準となる。9号住居は不整形の高まりのなかに、住居壁から直線的な細い溝が中央部に向かって伸びる。14号住居は細長い高まりが住居中央に向かって凸状に回る。住居の時期は6世紀

前半とみられる。検出される遺構の形状が異なるのは、遺存状態の違いによるものかもしれない。

鳥取福蔵寺II遺跡(註2)D区H-61住居址では、南辺中央部に馬蹄形状遺構があり、凸形の頂点と両脇にピットが検出されている。住居の時期は6世紀末～7世紀初頭とされている。

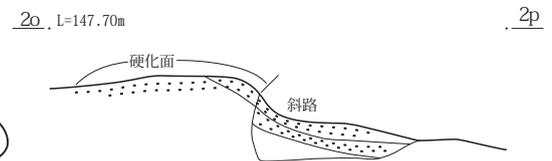
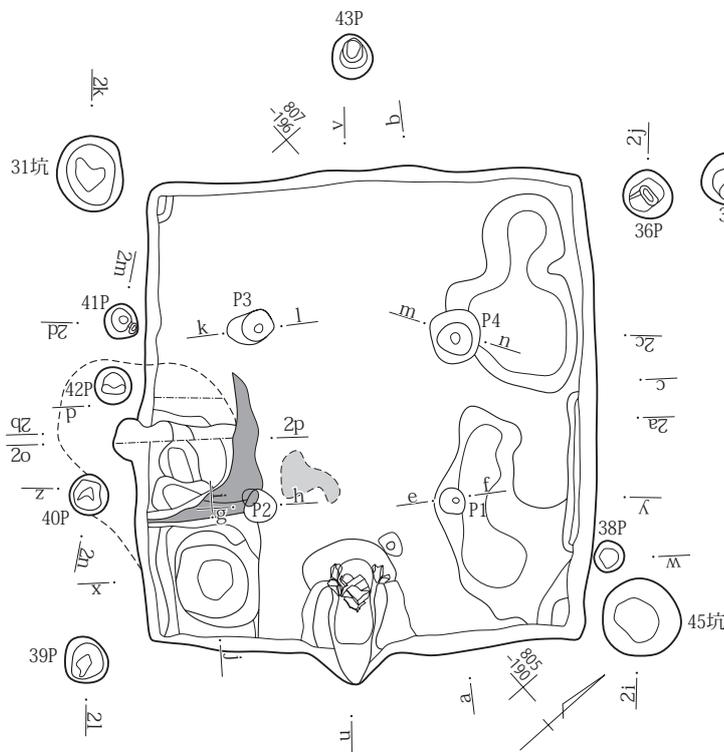
五代伊勢宮II遺跡(註3)H-1住居跡では、南壁の西寄りで壁際の炭化物が途切れ、壁の上部が削られている



斜路土層断面

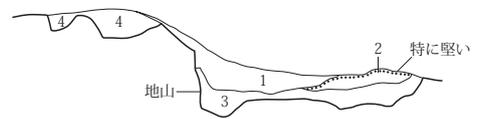


硬化面と住居外ピット



斜路掘り方断面

2o, L=147.70m



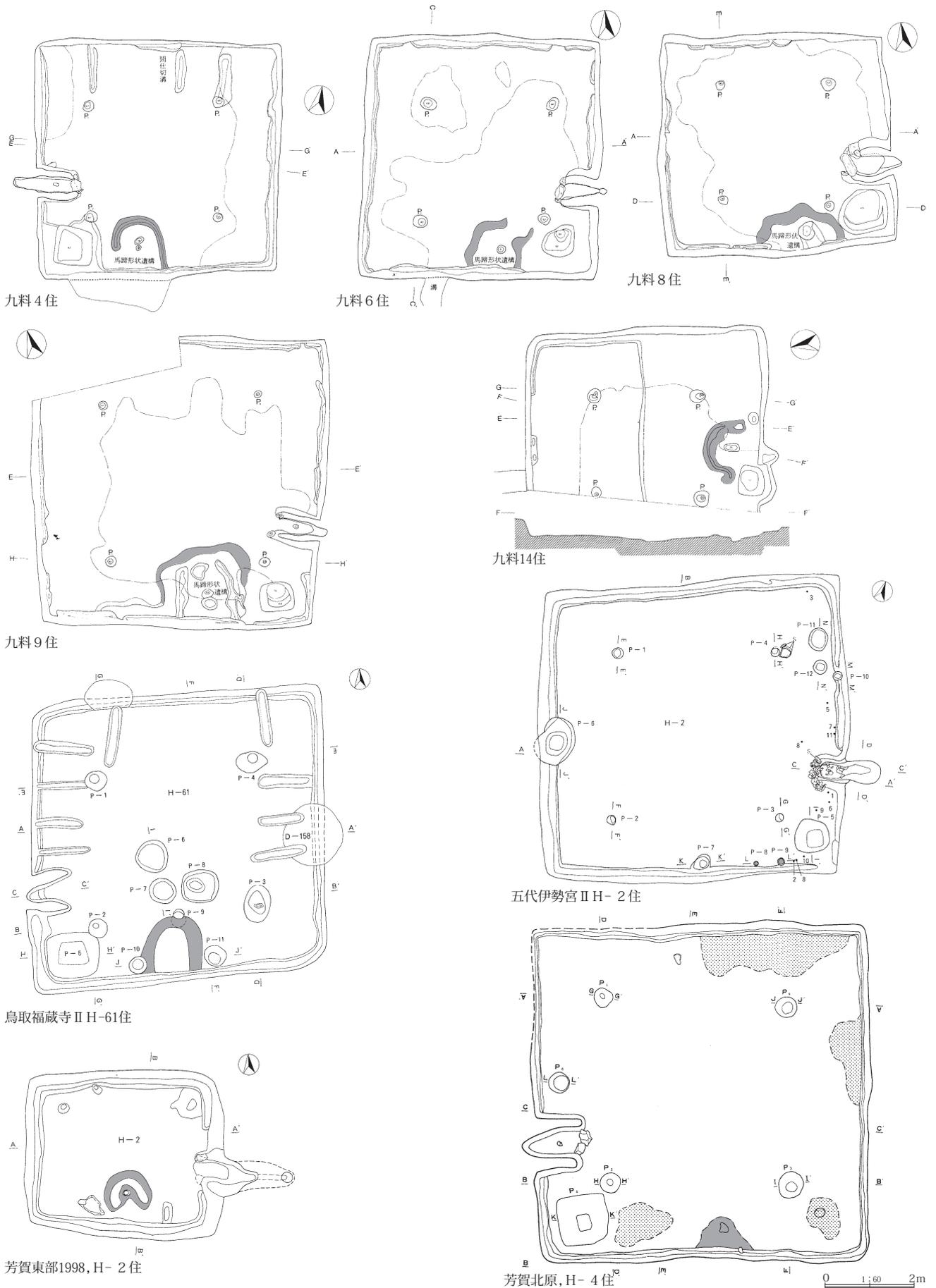
斜路掘り方 2o-2p

- 1 黒色土 ローム粒子を少量含む。
- 2 明黄褐色土 灰黄褐色土ブロックを含む。とくに堅い。住居床面と同じ。
- 3 黒色土ブロックとロームブロックの混土。縮まっている。
- 4 にぶい黄褐色土 やや軟質。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第285図 I区9住居斜路土層図



第286図 近傍遺跡住居の出入口施設

ことから、「入口施設に付随する」可能性が指摘されている。H-2住居跡の南壁東寄りの床面にP8、P9の小穴が認められ、「入口施設に付随するピットではないか」と指摘されている。H-1・H-2住居とも、6世紀第3四半期の時期とされている。

芳賀北原遺跡(註4)H-4住居跡では、南壁中央部に略三角形の硬い面が検出され、「入口施設に関係するものであろう」と指摘されている。住居の時期は6世紀後半とされ、埋没土にHr-FAを含まない。

芳賀東部団地遺跡(註5)H-2号住居址では、住居南辺寄りに「蹄鉄状」の遺構が発見され、「住居の入り口施設に関係する」高まりが認められた。この住居のみ、9世紀前半の所産とされ、他の例に比較して新しい。

壁際に2～3個の小穴が並んで検出されたり、住居壁の一部が斜めに削られていたりするような痕跡は、比較的多くの住居で見られる。しかし、本遺跡I区9住居や近傍の遺跡の「馬蹄形状遺構」の検出例は、少ないのではないだろうか。

今回の調査での反省点の一つは、運悪く住居の土層断面観察ベルトに斜路がかかり、斜路の半分ほどを失ってしまったことである。住居の埋没状態を観察するためのベルト設定ならば、各辺に平行または直交するベルト設定ではなく、出入口を意識した調査方法として、たすき掛けの(対角線状に)ベルトを設定しても構わないと考えられる(隅にカマドを設置している場合を除く)。

馬蹄形状遺構もI区9住居の斜路も古墳時代後期に属し、カマドを伴う住居例である。唯一、芳賀東部団地遺跡(1998)H-2号住居址が平安時代の所産で、より新しい。斜路を伴う出入口施設は時代・地域限定の出入口遺構と考えたが、地域限定に留まる可能性もあり、今後は対象区域と時代を広げて類例を探したい。

註1 『小神明遺跡群II』前橋市教委,1984

註2 『鳥取福蔵寺II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998

註3 『五代伊勢宮II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2002

註4 『芳賀北原遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1992

註5 『芳賀東部団地遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998

3 鉄滓と製鉄関連遺構

6章1節科学分析の成果の項で、鉄滓の観察所見が得られ、製錬滓が存在することから、近隣に製鉄関連遺構

の存在が予想された。これを考えるために、近傍の製鉄関連遺構・遺物を発見した遺跡をまとめたのが、第287図と第59表である。第287図中の遺跡番号は、第2章1節の第8図の番号に一致する。

(1) 近傍の製鉄関連遺構

芳賀東部団地遺跡(市教委)では、5カ所の製鉄関連遺構が発見されており、そのうち4号製鉄址は「製錬炉」と考えられている(註1)。製錬炉は鉄素材を製造する工程で作られる炉で、原料となる砂鉄と炭から高熱の化学的還元過程によって鉄素材を作り出す。近傍の遺跡では、これまでに発見された唯一の製鉄炉である(鉄滓の分析では、分析試料中に製錬滓は見当たらないとされている)。その他の1・2・3・5号製鉄址は「小鍛冶」とされた。小鍛冶は鉄器を作るための鍛冶の工程である。このほかH58・H87・H198・H216の各住居から鉄滓を出土し、H216を除く住居からは石組や焼石等が出土し、H58は鍛冶関連遺構、H87は小鍛冶遺構とされている。これらの遺構は概ね8世紀後半から9世紀前半の年代を与えられている。

五代砂留遺跡群の284・285・286・299・300土坑では、鉄滓とともに鍛造剥片・粒状炭化物が多数検出され、9世紀後半の鍛冶遺構とされている。これらは小鍛冶遺構の一部と考えられる。

鳥取福蔵寺遺跡では、H-37号住居址からファイゴ羽口・鉗・鉄滓・鍛造剥片が多数検出され、鉄滓総重量は38kgに及ぶ。破碎された椀状滓が出土し、9世紀中頃の鍛冶及び精錬鍛冶炉とされた。「精錬」は鉄素材の炭素含有量を調整したり、不純物を除去して鉄素材の品質を調整する工程である(工程的には、製錬→精錬→小鍛冶が想定され、精錬は製品までの中間工程である)。

鳥取福蔵寺II遺跡では、焼土入りの小土坑14基が発見され、9世紀後半の工房址とされた。

芳賀北部団地遺跡では、F1・F2・F3号製鉄址が発見されており、いずれも精錬址とされている(第287図には未掲載)。F1号は10世紀とみられる。

五代木福III遺跡では、H-32号住居から鉄滓・鍛造剥片・鉄床石・砥石が出土し、9世紀代の鍛冶工房とされた。

五代伊勢宮VI遺跡では、H-16号鍛冶工房から地床炉のほかに石床炉が発見され、ファイゴ羽口・椀状滓・鉄床



第287図 近傍の製鉄関連遺構

第59表 近傍の製鉄関連遺構・遺物 ★製鉄, ■精錬・工房跡, ▲小鍛冶, ●遺物のみ

番号	遺跡名	製鉄関連遺構	参考遺物	時代・時期	備考	
1	芳賀東部団地遺跡 市教委	4号製鉄址	製鉄炉=方形, 1.1×1.2m・ 深さ0.54m, 鍛冶炉あり	焼石・椀形鉄滓・チップ ス・羽口・炉壁	IX期, 9世紀中葉	★製鉄跡
		5号製鉄址	鍛冶炉=ピット状, 0.32×0.34m・深さ0.12m	焼石・羽口・鉄滓	IX期, 9世紀中葉	▲小鍛冶
		T1号鍛冶址	鍛冶炉=隅丸長方形, 1.23×0.83m・深さ0.2m	鉄滓・羽口	VII~VIII期, 8世紀後葉~9 世紀前葉	▲小鍛冶
		T2号鍛冶址	鍛冶炉=舟形, 3.25×6.50m・深さ0.4m	焼石・鉄滓・チップス・ 羽口・鉄鉗	VII~VIII期, 8世紀後葉~9 世紀前葉	▲小鍛冶
		T3鍛冶址	鍛冶炉=推定隅丸長方形, 5×3m・深さ0.23~0.36m	花崗岩・鉄滓・チップス・ 羽口	VII期1, 8世紀後葉	▲小鍛冶
		H58号住居跡	石多数出土	鉄滓・羽口	9世紀初頭	▲鍛冶関連
		H87号住居跡	床面中央に石組み	チップス・鉍滓・羽口	9世紀後半	▲小鍛冶
		H198号住居跡 H216号住居跡	床面から凝灰岩・焼石 -	鉄滓・鉄製品 鉄製馬具・鉄製紡錘車・ 鉄鎌・鉄滓	9世紀中頃 9世紀前半	● ●
2	芳賀東部団地遺跡 群埋文	F2住, G14住15住, I2住	-	鉄滓F区G区I区住居	F2=9世紀前半, G14=8世紀 中頃, G15=9世紀前半, I2=5世紀中頃	●I2は流込みか。
3	胴城遺跡	胴城8号住居	-	束ねた状態の鉄器→故鉄	10世紀前半	●
		胴城33号住居	-	鉄滓(木炭痕あり)	10世紀後半	●
3	鳥取松合下遺跡	鳥取松合下11号住居	-	割れた椀形滓→8C後半~ 9Cの豎型炉に伴う鍛冶滓	8世紀後半~9世紀	●
		鳥取松合下13号住居	-	椀形鍛冶滓	8世紀前半~中頃	●
4	五代砂留遺跡群	284・285・286・299・300土 坑	鍛冶遺構	鉄滓・鍛造剥片・粒状炭 化物	9世紀後半	▲
8	鳥取福蔵寺遺跡	H-37号住居址	精錬鍛冶炉=不整形円形 3.4×3.2m・深さ0.25m, 地 床炉=0.51×0.34・深さ 0.2m, フイゴ座あり	羽口・鉗・破碎椀状滓・ 鍛造剥片・鉄滓総重量 38kg	9世紀中頃	■小鍛冶・精錬鍛冶 工房, 「勝沢郷」比定 区域
8	鳥取福蔵寺II遺跡	工房址	小土坑14, 焼土入り円形 土坑	鉄滓	9世紀後半	■2基, 地床炉か。
10	芳賀北部団地遺跡	F1号製鉄址	精錬址1.54×0.5m, 植物 繊維入り炉壁	焼土・鉄滓・炭化物・鉄 片	10世紀か。	■
		F2号製鉄址	精錬址1.02×0.92m, 断面円筒形・深さ0.65m	鉄滓・石材・羽口	10世紀か。	■
		F3号製鉄址	精錬址3.4×2.5m	鉄滓・羽口・石材	10世紀か。	■
14	五代木福III遺跡	H-32号住居跡	鍛冶工房=楕円形炉跡 0.47×0.55m・深さ0.1m	鉄滓・鍛造剥片・鉄床石・ 砥石・釘	9世紀代	■鍛冶工房跡
16	五代伊勢宮VI遺跡	H-16号鍛冶工房	鍛冶工房跡=4.64×4.22m ・深さ0.21~0.5m, 地床 炉=35×38cm円形焼土、 46×43cm円形焼土, 石床 炉=52×45.5cm・厚さ6.7 ~18cm、重さ58kg安山 岩	羽口・鉄滓総重量30kg、 椀状滓9・鉄床石3、鍛造 剥片・鎌・辻金具	8世紀末~9世紀前半	■鍛冶工房跡8c後~ 9c前葉

[文献] 番号は第8図番号、近傍遺跡表番号と一致

- 1 『芳賀東部団地遺跡I』前橋市教育委員会, 芳賀団地遺跡群第1巻, 1984
- 1 『芳賀東部団地遺跡II』前橋市教育委員会, 芳賀団地遺跡群第2巻, 1988
- 1 『芳賀東部団地遺跡III』前橋市教育委員会, 芳賀団地遺跡群第3巻, 1990
- 1 『芳賀東部団地遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 1998
- 1 『芳賀東部団地遺跡III』, 前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2005
- 2 本遺跡
- 3 『鳥取松合下遺跡・胴城遺跡』群埋文, 534集, 2012
- 4 『五代砂留遺跡群』群埋文, 530集, 2012
- 8 『鳥取福蔵寺遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 1997
- 8 『鳥取福蔵寺II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 1998
- 10 『芳賀北部団地遺跡I』前橋市教育委員会, 芳賀団地遺跡群第5巻, 1994
- 14 『五代竹花遺跡・五代木福I遺跡・五代伊勢宮I遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2001
- 14 『五代竹花II遺跡・五代木福III遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2004
- 16 『五代竹花遺跡・五代木福I遺跡・五代伊勢宮I遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2001
- 16 『五代伊勢宮II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2002
- 16 『五代伊勢宮III遺跡・五代深堀II遺跡・五代中原I遺跡・五代伊勢宮IV遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2002
- 16 『五代伊勢宮VI遺跡・五代中原II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2003
- 16 『五代伊勢宮遺跡(1)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2007
- 16 『五代伊勢宮遺跡(2)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 2009

石・鍛造剥片等が出土し、鉄滓総重量は30kgに及ぶ。8世紀末～9世紀前半に操業された。

以上のような製鉄関連遺構の発見状況から、井上唯雄氏は鍛冶工房を「…郷長クラスの有力者層による律令支配の一つの根幹をなすもの」と位置づけ、「おそらく行政的な単位を中心として鉄素材を取り出し、それを関係する郷の支群に分け与える形で、それぞれの拠点集落を中心に鍛冶工房の運営が成されるような形がとられて、自給自足的に機能を果たしていくものとする」（文献16, 五代伊勢宮VI遺跡, 45頁）と8世紀後半以降の製鉄→鉄器生産構造を素描した。

(2) 鉄滓の流通と鉄器のリサイクル

遺構を伴わない製鉄関連遺物として、住居からの鉄滓出土及び故鉄とみられる鉄器の出土がある。

胴城遺跡では、8号住居から束ねた状態の鉄器が出土し、一部は折り曲げた状態で出土した。貴重な鉄素材の一つとして、利器利用が困難になった鉄器を保存し、新たな鉄器製造の材料に供する「再生用の原料」と想定されている。破損や摩耗した鉄器を捨てるのではなく、鉄素材として保存し、新しい鉄器に再生する方法のほか、再生鉄器と交換する場合など、リサイクルの想定が可能である。「故鉄」概念の導入は、出土鉄器の評価を変更する可能性がある。また、鳥取松合下遺跡11号住居から出土した鉄滓は割れた状態で出土し、精錬炉の産物の可能性があるという。こうした出土状況から、女屋和志雄氏は「この状態で流通していたのではないだろうか」と指摘した(文献3, 202頁)。

(3) 芳賀東部団地遺跡(上武道路)の鉄滓

明確な鍛冶遺構を伴うことなく出土した本遺跡の鉄滓

は、どのように位置づけられるだろうか。出土した鉄滓には鍛冶滓と製錬滓(または精錬滓)が含まれていた。製錬滓だとすれば、近傍の遺跡では芳賀東部団地遺跡(市教委)の4号製鉄址が、持ち出し元の候補になる。上武道路区域では炉壁や羽口の出土が見られないことから、鍛冶滓もまた芳賀東部団地遺跡(市教委)区域からの持ち出しが想定できる。しかし、E区～I区南側の未掘区域に精錬鍛冶工房が存在する可能性も残る。このような出土鉄滓は何らかの方法で入手し、近隣の鍛冶工房や単独の小鍛冶に持ち込まれ、鉄製品となって個別の集落や住居に供給されたと考えられる。

前橋市教育委員会調査遺跡の製鉄関連遺構に注目した井上唯雄氏は、筆者の想定した製鉄→小鍛冶という単純な工程ではなく、製錬→精錬→小鍛冶という鉄器生産工程を指摘し、鉄素材の製造=製鉄は、高度な専門的技術を要求される工程であるとも指摘している。金属鉄を創り出すということが、おそらく最も重要な過程と考えられる。このような工程は、前述の素描から図式化すれば、郡または郷クラスによる鉄素材生産→郷支群クラスによる精錬(拠点集落での鍛冶工房)と鉄器生産→個別集落での鉄器生産という広域動員力と技術力に応じた生産工程と理解される。リサイクル工程は精錬工程以下で可能であろう。

推定される鉄器の生産体制は、この地域の農業生産(開墾、耕作、収穫・採集)や林業生産(森林の育成・管理、木材生産・加工、燃料や炭の生産など)、日々の生活(食料加工など)に使われる鉄製品の配布・流通を規定し、鉄原料の採掘や製鉄にかかわる人の動員力や高技術集団の確保を背景として、地域支配機構の一つの柱であったと考えられる。

註1 「5基の製鉄遺構のうち、1基は製鉄炉跡(T-4)であるが、他は鍛冶址である。」『芳賀東部団地遺跡II』芳賀団地遺跡群第2巻, 前橋市教育委員会, 344頁